

雛森 「シロちゃんに『雛森 イイイイ！』と叫ばせたいだけの人生
だった…」

ろぼと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最高峰の美少女に憑依転生したクソ主が歪んだ愛情でイケメンシヨタ幼馴染を愛でて色々引っ掻き回して満足するお話だゾ。

目次

破面	162
目標	154
海燕	145
鮫后	137
誕生	128
任務	121
解説	115
大帝	106
新隊	100
隊士	
愉悦	89
東仙	78
休暇	72
技名	64
赤恥	58
藍染	51
飛梅	43
虚圈	33
実習	22
靈術	15
出会	7
靈術	
序章	1

準備イイイイ！

白虚イイイイ！

夫妻イイイイ！

虚無イイイイ！

種蒔イイイイ！

SSイイイイ！篇

再誕イイイイ！

代行イイイイ！

旅禍イイイイ！

不穏イイイイ！

暗殺イイイイ！

裏切イイイイ！

絶望イイイイ！

雛森イイイイ！

再起イイイイ！

幕間：いちごくんの不思議な体験

破面イイイイ！篇

衣装イイイイ！

十刃イイイイ！

調査イイイイ！

現世イイイイ！

少女イイイイ！

報告イイイイ！

食事イイイイ！

襲撃イイイイ！

373

366

357

348

337

330

314

305

296

284

274

262

252

243

235

225

220

214

207

199

186

180

172

先遣タイイイ！

狂蛭タイイイ！

滅火タイイイ！

桃玉タイイイ！

悦魂タイイイ！

編成タイイイ！

変更タイイイ！

再会タイイイ！

無双タイイイ！

狂悦タイイイ！

織姫タイイイ！

三日タイイイ！

幕間：いちごくんの不思議な試練

救出タイイイ！篇

奪還タイイイ！

会議タイイイ！

男爵タイイイ！

対峙タイイイ！

喰虚タイイイ！

通知タイイイ！

惨敗タイイイ！

正義タイイイ！

豹王タイイイ！

四人タイイイ！

援軍タイイイ！

383

392

402

409

417

423

430

436

446

454

465

472

482

494

503

511

523

532

544

553

562

568

579

588

羚羊イイイイ！

599

黒翼イイイイ！

612

心かイイイイ！

621

憤獸イイイイ！

643

決戦イイイイ！篇

登場イイイイ！

652

軍勢イイイイ！

665

決意イイイイ！

680

変貌イイイイ！

690

悲想イイイイ！

701

雛森イイイイ？

718

ガバイイイイ！

736

雛森イイイイ…

757

おまけ・なん…だと…篇

復活…だと…

772

親父…だと…

779

月牙…だと…

792

崩玉…だと…

801

なん…だと…

814

おまけ・俺自身が月牙になる事だ…篇

俺自身が刃禅になる事だ…

832

俺自身が試練になる事だ…

845

俺自身が河原になる事だ…

855

俺自身が漂白になる事だ…

866

俺自身が市丸になる事だ…

882

俺自身が神殺になる事だ…

890

俺自身が乱菊になる事だ…

903

俺自身が藍染になる事だ…

915

俺自身が月牙になる事だ…

932

俺自身が決着になる事だ…

947

おまけ・十刃再結成篇

始まる…!

964

始まりそう…!

977

始まって…!

989

始ま…らないッ

1006

始まつ…たあ…

1014

100話到達記念ネタ

1039

エピローグ

1085

幕間：どくしよかちゃんの女王生活

1071

幕間：あらんかる達のイチヤイチャ

1119

幕間：五番隊の百合の間に無理やり挟まれた男

1130

おまけ・全部：月島さんが居たからじゃないか…!篇

全部：陰謀さんが居たからじゃないか…!

1151

全部：遭遇さんが居たからじゃないか…!

1161

全部：手紙さんが居たからじゃないか…!

1172

全部：修行さんが居たからじゃないか…!

1185

全部：復帰さんが居たからじゃないか…!

1198

全部：暗雲さんが居たからじゃないか…!

1209

全部：豹変さんが居たからじゃないか…!

1221

全部：急転さんが居たからじゃないか…!

1235

全部：月島さんが居たからじゃないか…！

1250

全部：真相さんが居たからじゃないか…！

1268

全部：少女さんが居たからじゃないか…！

1279

全部：仲間さんが居たからじゃないか…！

1291

全部：激闘さんが居たからじゃないか…！

1305

全部：再会さんが居たからじゃないか…！

1329

全部：死神さんが居たからじゃないか…！

1344

全部：戦友さんが居たからじゃないか…！

1358

全部：過去さんが居たからじゃないか…！

1370

全部：記憶さんが居たからじゃないか…！

1381

全部：真実さんが居たからじゃないか…！

1393

全部：決意さんが居たからじゃないか…！

1403

全部：決戦さんが居たからじゃないか…！

1416

全部：銀城さんが居たからじゃないか…！

1432

全部：雛森さんが居たからじゃないか…！

1443

幕間：ヴあるありやの蠢動

1455

おまけ・石田ってSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時
た時ブルート・アルテリエ無しのHarry篇

異変ってSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのHarry

虚圏ってSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのHarry

爆撃ってSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのHarry

無力ってSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

1494

ルート・アルテリエ無しのハry

1517

援軍つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1539

惨敗つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1562

叫谷つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1597

悪戯つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1613

離殿つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1642

過去つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1657

登場つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1676

動転つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1708

貴孔つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1727

石田つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1750

聖別つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1777

天秤つてSS編時点でクインシー・レットシユテイル使った時ブ

ルート・アルテリエ無しのハry

1803

序章 イイイイ！

「……あん？」

死んで気付いたら暗闇の中、佇む古風な関所らしき門の前にいた件について。

前後には数列に並ぶ着物、小袖と言うのだろうか？ そんな時代錯誤な服を着た人々の集団がぞろぞろ門へ向かい進んでいく。どうやら俺もその一人らしい。

どつかで見たなどデジャブが頭を掠め門を注視すると、そこには黒い袴姿の武士が——ってちよつと待って死神やんけBLEACH転生かよ最高じゃんヒヤツホイ！

一瞬で状況を把握した俺は、俯き進む死者たちの列の中一人ニッコニコで自分の番が来るのを待つ。あー早く入れてくれないかなー死神になりたいなー【黒棺】使いたいなー「何…だと…!？」とか言ってみたいなー。

とそんな感じで大した目的意識も持たずに尸魂界へ入れてもらったわけだが、どうやら俺には重大な使命があるらしいと遅れて気付く。

「俺、美少女…」

そう、西流魂街1地区【潤林安】という神地区に送られしばらくお上りさんをしていたら、行く先々で男にナンパされるのだ。初めて経験するケツ穴の危機に全力逃亡し、井戸水で自分の容姿を確認したところで、前の一言。

いや可愛いなんてものじゃない。BLEACH 鱈 界の女の子は皆美人だが、この顔はその中でも最上級に入るのではないだろうか。そう豪語出来るほど華奢で可憐、思わず庇護欲を掻き立てられる超絶美少女になっっていた。

なるほどTS転生か、出たわね。

「でもこの顔に声どつかで…」

これほどの外見、まさかモブではあるまいと記憶にあるア二獅のキャラボイスを漁ると、いました。

「あのリヨナの子だ、雛森 桃」

BLEACH読者に説明は不要だろうが、原作における護廷十三隊五番隊副隊長・雛森桃ちゃんの役割を一言で纏めると大体そんな感じになる。

原作では何とか最後まで生き残れたみたいだが、作中何度もズバツブスツ！ されるなどKBT○T師匠のエログロフェチを体現する大活躍をしていたキャラでもある。残念ながら俺は刀剣フェチ(物理)ではないしDMでもないのが痛いのは普通に嫌なのだが、原作改変しようにも「リヨナらない雛森ちゃん」という時点で既にBLEACHに対する冒瀆である。ただモテるだけの超絶美少女なんて鱈界ではつけ汁の無いつけ麺に等しい。

ようは大人しくヨン様に斬られて来いってことですね、ガツテム。

だが待つてほしい。二度目の生で憑依転生とはいえ折角のBLEACH世界なのだ。斬られて死ぬほど痛い思いをするのが原作リスペクト的に避けられないなら、その対価くらいは欲しい。例えば、そう。

「…いつその身の不幸を逆利用して、全力でシロちゃんを曇らせて反応を楽しむのはどうだろう？」

うむ、我ながら酷いが面白いかもしれない。

一読者として、雛森ちゃんはあくまで女性キャラの中では好きな方という感じだったけれど、彼女と大きく関わるシロちゃんは話が異なる。

そう、俺は無類のシロちゃんファンなのだ。

シロちゃんこと護廷十三隊十番隊隊長・日番谷冬獅郎、作中屈指の

イケメン少年にして神童キャラ。氷雪系最強と謳われる斬魄刀【氷輪丸】ひょうりんまるを有し、幼馴染みのために何度もラスボスに挑むその小さくも大きな背中は鯽界のもう一人の主人公と言っても過言ではない。実に魅力溢れるキャラだ。

…だがね、ただ好きなキャラに憧れる？

ノンノン、憧れは理解から最も遠い感情だ。某水の駄女神しかり、マミる人しかり、結婚したい人しかり、キボウノハナーる人しかり、世の中には稀に幸福より不幸な目にあつてるときのほうが輝く人がいて、極めたファンはその輝きを何よりも大切にしたがるものなんだ。

それによく「好きな子はいぢめたい」とも言うではないか。

…うむ、すまないシロちゃん。誠に恥ずかしながら俺はこのパターンでね。原作で君が何度も幼馴染みの名を叫んだり、ヨン様に遊ばれてぐぬぬしちゃったり、何度もブスブス刺される彼女の不幸に非力を痛感する姿を読んだ時にですね、フフ…愉悦…しちゃいましたね。

歳上幼馴染みに一途で頑張り屋さんで、たまに活躍するけど基本強キャラのカマセで、いつも「何…だと…!？」言つてて泥試合してる神童な生意気イケメンシヨタつて…曇らせたくなるよね？ なれ（圧）
本当に、申し訳ない。

そんなクソな俺が何の因果かその可愛い幼馴染みの雛森桃ちゃんに憑依転生。これはもう誰が見ても雛森ムーヴをしてシロちゃんです遊…じゃなくて彼の魅力を引き立てると言われたようなものではないだろうか。

そもそもこの雛森桃というキャラには——リヨナ好き読者を満足させることを除けば——作中の重要人物である日番谷冬獅郎を物語的に動かすための生け贄になるという大事な役割がある。これは別にギャグでも冗談でもなく、KBTOT師匠が語った日番谷冬獅郎というキャラの誕生経緯から導き出されたそれなりに有名な考察だ。

なので「俺自身が雛森になることだ…」をした俺が、シロちゃんを動かす成長させる様々な試練の生け贄となつてあげるのは原作リス

ペクト的に正しい行為だと言える。

…よし。

使命感に駆られた俺はシロちゃんの勇姿を引き出すために、あることを思い付いた。雛森桃というキャラの個性や思いを残しつつ、それでいて俺の望みも叶えられるレベルの原作ブレイク。

ヨン様——あいぜんそうすけ 藍染惣右介に最後まで従うこと。

リヨナを除いた雛森ちゃんの魅力と言えば、やはり美貌とヤンデレだ。ヨン様のカリスマを強調する彼女の狂信性は、“愛”の描写がとことん重い漫画BLEACHの象徴の一つ。むしろ転生憑依者としては原作以上に突き抜けるムーヴをしたほうが良いまでである。

雛森ちゃんも最初こそ確かにヨン様好みの勇敢な少女だったが、原作開始時点ではその輝きも藍染隊長への憧憬で曇り——結局実力精神ともに価値無しと判断された彼女は敬愛する上司に捨てられてしまった。…まあ性根がひん曲がっているヨン様に“そうなる”ように調教されたせいでもあるけど。

もし雛森桃が藍染惣右介の調教を跳ね退ける精神・霊的強者であればどんな展開になっていたか。あるいは藍染が彼女に“斬り捨てる”という慈悲(?)を与えず、悪の道へ引き摺り込んだとしたらどうなっていたか。中々興味深い議論だと思う。

俺はこれを拡大解釈し、愛しのシロちゃんをいぢめるために利用してみようと思ったワケだ。

…最低？

では同志諸君は想像してみてください。守ると誓った最愛の幼馴染みが悪い男に騙され瀕霊廷を裏切り、しかも守るべき存在だと思っていたその子が実は自分よりメチャクチャ強かったら。そして最期にはぼろ雑巾のように使い捨てられ、自分の腕の中で「ごめんね…：大好きだよ…っ」と言い残し息絶える彼女を抱き抱えるシロちゃんの顔を。

ニチャア：

というわけで、俺はそんなシロちゃんの姿と絶叫を目に耳に焼き付けるため、少しでも長く生きねばと力を磨くことにした。

最低でもヨン様に一太刀で瞬殺されなくらいに強くならないと虚^{ウエコムンド}圏^ドまで連れてって貰えない。そもそも即死したら折角のシロちゃん渾身「雛森イイイイ！」を聞き逃してしまう。それは困る。何より恥を偲んで叫んでくれる彼に失礼だろう（失礼

だが崩玉^{ほうぎよく}融合前のヨン様。パワーの指標として有名な「護廷隊隊長に倍する霊圧」と言われても体感的にどれくらいかなんて分からない。

取り敢えず霊圧至上主義な獅界で生き残るために霊力鍛練全力ブツパ。飽きたら斬拳走鬼^{ざんけんそうき}の内、原作で才能があった鬼道^{きどう}と、ヨンの凶刃から急所を逸らすための瞬歩^{しゅんぽ}、そして斬られたあと死ぬ或いは気絶するまで1秒でも長くシロちゃんを観察するための回道^{かいどう}を重点的に鍛える感じにしよう。

さて、原作開始まであと百五十年ほど。慣れない雛森ムーヴもその頃には苦もなく出来るようになってるだろう。老若男女なんであろうと、やるなら徹底的にRP^{えんじて}して見せる。元TRPG部部員の腕の魅せ所だ。

「よし。俺：じゃなかった。あたし雛森桃^{ひなもりもも}！ シロちゃんに『雛森イイイイ！』と叫ばせたいだけの人生、始まりますっ！」

チャン一の無月^{むげつ}シーンまで生きてるとは思えませんが、ぜひ最高の「雛森イイイイ！」が聞けるよう頑張りますので、斬るタイミングよろしくお願ひしますね、藍染隊長っ！

それにしてもヨン様の攻撃で即死しないくらい強くなる、か。
…ハードル高くない？

霊術イイイン！篇

出会イイイイ！

古今東西、ファンタジー世界には何かしらの超自然的能力が存在し、その源となる不思議エネルギーがある。魔力しかり、妖力しかり、ときに神力や法力なんてものもある。

BLEACHの場合は霊力だ。霊力は高ければ高いほど強者となり、魂魄あるいは高密度な霊力が発する霊的圧力は霊圧れいあつと呼称される。よくネット界限で見かけるフレーズ「○○の霊圧が消えた…？」のアレだ。

鰯界ではこの霊圧で勝負の駆け引きのほぼ全てが決まる。なので何をするにもまずは霊圧を直接高める霊力を増やすことにしよう。

そう考えた俺…じゃない、あたしは手始めに自分の霊力を感知しようと、連載初期に出てきた岩鷲がんじゆ兄貴の教えを参考に瞑想していたのだが…

「——お腹すいた」

迂闊。そう言えばそんな設定あったな、と今更ながら気付いて頭を抱えた。

このデメリットは根なし草くさな流魂街るこんがいの新人には死活問題。門で貰ったなけなしのお小遣いでおにぎりを食べたが、このまま収入が無ければすぐに餓え死にだ。死後の世界のクセして世知辛すぎる。

「…まずは生きることからかな」

背に腹は代えられない。同世代の恋次れんじやルキアみたいな浮浪児は雛森ムーヴ的にちよつと遠慮したいので、ここは公式美少女な雛森フェイスで店の売り子でもやるとしよう。

なに、焦らずとも結構。原作通りにシロちゃんとおばあちゃんを助けるにも先立つものは必要だからね。

——というわけで心機一転から早一年、地区一番の看板娘にジョブチェンジしたあたしの日常は賑やかだ。

「桃ちゃん、これはどうだい？」

「わあ、スケさんお似合いです！」

「桃ちゃん今日も可愛いねえ！ そろそろ嫁に来てくれねえかい？」

「ふえっ…!? あっ、えと…ここ、困りますっ」

「雛森桃、貴方は私の母になってくれるかもしれない女性だ…」

「あ、はい、赤染めの羽織ですね。承りました！」

こんな具合に原作通りの明るく無垢で恥ずかしがりやな女の子を演じていたら、住み込みバイトの仕立屋が初日から大盛況。自分でこの体の可愛い姿が見れないのは残念だけど、あの雛森ちゃんが売り子をしながら採寸で色々ボディタッチしてくれるなんてファンには天国だろう。羨ましい。

「ふう、ようやく捌けたな。桃ちゃん今日はもう休んでいいよ」

「あ、はい！ お疲れ様です、お先に失礼します」

おじちゃんに挨拶してから店の奥に引っ込むあたし。

ここはお給料もいいし、夜はゆっくり時間が取れる素晴らしい環境だ。とても世紀末な流魂街とは思えない。流石は神地区潤林安。

…さて、あたしは靈力の求道者という裏の顔を持つ女。

今日は少しあたしの秘密の鍛錬法について話をしたいと思う。

まず、死神が強くなるには斬魄刀せんぱくとうの解放を含む”斬拳走鬼”の鍛錬を積まなくてはならない。でも人目の多いあたしの行動範囲でそんな事したら即刻バレる。

裏ワザとして虚化ホロウ、そして靈王宮の飯トレがあるが、どちらも自分の魂魄に他の魂魄を融合させて靈格を昇華させるという超技術だ。残念ながらあたしには手が届かない。

お手上げ状態になった時。あたしはふと靈力に関するもう一つの原作知識を思い出した。

(…鎖結さけつと魄睡はくすい…)

そう。魂魄の靈力を司る、架空の内臓だ。血液器系でいう心臓に相当する【鎖結】と、血を作る骨髓に当たる【魄睡】。

もちろん司るのは血液ではなく、靈力器系。すなわち靈力だ。

（原作の修行法がどれもダメなら、この内蔵を”直接”鍛える方法を編み出せばいいのでは…？）

そんなぶっ飛んだ思考で色々チャレンジしてみた一年間。あたしが辿り着いた鍛錬法は——体の安全を全く考えない大変デンジャラスなものだった。

「すうー……くっ！」

気合いをいれて集中。筋肉を鍛える要領とは違い、心臓ならぬ鎖結そのものに負荷をかける。

具体的には体内の靈圧の密度が通常の何倍も濃くなるように靈力を操るのだ。サラサラよりドロドロのものを動かすほうが大変だからね。

「くっ——うぐ……っ！」

しかし単純ながら極めて危険で難しく、何よりくっそキツイ。靈圧の密度を上げる加減を控えめにしたりと工夫はしているけど、ミスると激痛で意識が飛ぶ。気が付けば翌日昼まで目を覚まさずお店が大騒ぎ、なんて事もあった。

とはいえ苦しむだけのことはあり、漫画界名物の超回復なのかその後はぐーんと靈圧を動かしやすくなる。効果自体はとても高い修行法なのだ。

「ハア…ハア…よし、次っ」

そしてもう一つの【魄睡】。靈力そのものを生み出す臓器であり、強者を目指すならこちらも外せない。

ここの鍛え方の参考にしたのは、昨今のラノベテンプレ「魔力を使い切る」方法。ようは体内の靈力枯渇状態を意図的に作り、生存本能を刺激して靈力の生成能力を高めようという発想だ。

しかし問題が一つ、前程の靈力を使い切るための”修行場所”がないのだ。

(そりや霊圧を隠してるんだし、人目がある所で霊力を使ったら本末転倒よ)

赤ちゃん転生モノでは何だかんで親の慈愛と理解があつてクリアできる問題だけど、結局主人公の特異性がバレるのは変わらない。こちらと相手しているのは技術開発局ぎじゆつかいはつぎよくぞ？ 天下のマユリ様にとつて”慈愛”とは人体実験時に投与する薬物の量が数mg減る事である。

見つければマツドのオモチャ一直線だ。

…そんな悲観的な状況を打開するヒントは、意外な所に隠れていた。

話は少し変わって、あたしが霊圧を隠す方法について模索していた最中の事。

この”霊圧隠蔽法”も霊力鍛錬と同様あたしの最重要案件だったが、原作で詳しい描写がないため自分で編み出さないといけなかった。白伏はくふく等の鬼道を除けば、石田の初期セリフにあった「蛇口を閉じるイメージ」がほぼ唯一のヒントと言っている。

しかし試してみても完璧に遮断する事は不可能だったので、あたしは「霊圧を四六時中操って体表に張り付かせてれば良くね？」と雛森桃の鬼道の才能に頼った力技で問題を解決しようとした。

…実際この方法は「放出された霊圧は周囲の霊子を取り込み自身へ還元される」という霊力の循環システムにおいて自殺行為に等しい狂気だったのだが――

(これが副次的にさっきの魄睡はくすいの鍛錬とうまく繋がった…)

そう。ここで【魄睡】の話に戻る訳だけど、この霊圧隠蔽法の「霊圧を常に操り体表に張り付かせる」という手段がミソだった。

まず体外に放たれた霊圧は、周囲の霊子を吸収する事で還元される。霊圧を体表に張り付かせるとこの循環が阻害され、体内の霊力が少なくなる。すると目的だった「霊力枯渇状態」が疑似的に生まれ、あたしの魄睡が霊力を補充しようとする機能を強化する。

という流れだ。

(霊圧を隠せて、魄睡も鍛えられて、おまけに霊圧操作の技術も上がる。危険だけど一石三鳥の鍛錬法。鯽らしくオサレで良き)

まあ内心ドヤってるけど下手したら命を落とす超荒業だし、霊圧を外に洩らせない故の苦肉の策なのだ。瀨霊廷せいれいていに近すぎる潤林安じゅりんあんでルキアちゃんみたいで霊力球ふわふわなんてしたら目立ち過ぎる。

死なない程度に頑張ろう…

(ただ順調なのは幸運なんだけど、成長チートなのかこの強化ペースはちよつと予想外…)

最近出会ったご近所さんの白道門門番しだんぼう丹坊の霊圧がなんと今のあたしより低く、知らない間に自分の力がかかなり上がっていることに気が付いた。

霊圧隠蔽をもっと万全にせねば死神たちに感知されて拙いことになるし、何よりおじちゃんの店や市場に迷惑がかかる。霊術院に勧誘されるにしてもヨン様フラグが立つ第2066期まで待つてほしい。まだ肝心のシロちゃんにも出会えてないから切実な問題だ。

丹坊しだんぼうニキ。あたしが出会った初の原作キャラだけど…)

お人好しでオツムがよろしくない、けど人脈豊富な門番死神。もしかしたら彼を通してその友人知人にこっそり斬拳走鬼の教えを乞えるかもしれない。お近付きになって損はないだろう。

(死神と言え、空鶴くわかくさんはもう流魂街にいるのかな…?)

真央霊術院入学まで後百年ほど。推しの子に逢えるまで後五十年ほど。試行錯誤しつつ原作の過去篇が始まるまでの長い時間をしっかり活用できたらいいな。

こうして光陰矢のごとし。

昼間は地元のアイドル、夜は霊力の求道者と二重生活に勤しむ傍ら。あたしはようやく、待ちに待った銀髪碧眼の少年の噂を耳にする

ひつがやとうしろう
日番谷冬獅郎は忌み子である。

何故かはわからない。だが少なくとも潤林安に住む近隣の心無い人々は皆、そう口にした。故に幼い少年にとっての全てとは、己と己を悪漢や悪ガキどもから守ってくれる優しい祖母だけだった。

二人だけの日常。隙間風の吹き抜ける何も無い民家が冬獅郎にとつての完結した世界で、何よりの平和の象徴であり続けた。

だがその日、彼の楽園に一人の侵入者が現れる。

「——大丈夫、おばあちゃん？ もう…こんなに大荷物持ちちゃダメだよ」

「ごめんねえ桃ちゃん。お陰で大助かりさね、ありがたやありがたや」
玄関先で祖母と話す聞き覚えのない親しげな声に、冬獅郎は思わず顔をしかめる。声質から察するに相手は若い女。たまに近所の井戸端で氷の童子のことを噂する連中がついに家にまで来たのかと苛立ち、少年は女を追い払わんと棒切れ片手に土間へと向かう。

そこで冬獅郎は彼女、雛森桃ひなもりももと出会った。

「——かつ、かわいい…っ！」

初対面でそんな失礼なことを抜かした侵入者は、一人の女の子だった。

祖母とは違う艶やかな黒髪を肩長で揃えた少女。幼い冬獅郎に異性の美醜などわからないが、初めて見るそのキラキラした瞳とシミ一つない白い肌、そして何より目立つ満面の喜色は、狭い世界を生きる彼にとつて心を震わす極めて衝撃的なものだった。

「初めまして、雛森桃ですっ！ あなたのお名前は何て言うのかな？」

今思えば、この時不覚にも彼女に見惚れてしまったせいで、互いの力関係は決まってしまったのだろう。

「…知り合いなのか、ばあちゃん」

どうやら大荷物に困っていた老婆を助けただけだったらしい少女が「またね!」と笑顔で去っていった後。冬獅郎は思わず祖母へ彼女のことを尋ねていた。

「おや、知らなかったのかい? 雛森桃ちゃん、市場の仕立屋の看板娘さ。お前の小袖もあの子の店のものだよ」

「マジかよ…」

聞けば相当な有名人らしく、道端で一息ついていたときに手を差しのべてくれた心優しい人気者だとか。珍しく外のことを楽しそうに話す祖母の笑顔は、あの雛森とかいう女が善人である証なのだろう。

「桃ちゃんも霊力持ちだって話さ。冬獅郎も仲良くしてもらえればいいねえ」

「…そうなのか?」

「売り子さんの仕事も死神になるためだって仕立屋の旦那が言ってたよ。力を持って生まれた自分がみんなを守るんだって」

女の子なのに立派なことさね、と感心する祖母を横目に、冬獅郎は少女へ思いを馳せる。

自分と同じ霊力持ち。腹が減るだけの煩わしいそれを彼女は力だと形容し、他人を守るために使いたいと願っているらしい。周囲に忌み子と蔑まれる冬獅郎にとっては理解に乏しい価値観だ。

「またね、か…」

だが、何故だろう。

脳裏に焼き付いたあの笑顔は、自分とそう年の変わらないはずの彼女が持つ大志は、ひねくれた彼の目にとても眩しく、そして美しく見えた。

再会の言葉を胸中で反芻し、思わず頬を緩める冬獅郎。

突然少年の楽園を侵した無粋者は、その日から世界の三人目の住人となった。

「——ほらシロちゃん! 好き嫌いしないのっ」

「ツだあああつ、うっせーよバカ! テメエが来る度に干し柿ばっか

食わせるせいで嫌いになっちゃったじゃねえか！」

「ふふっ、ごめんごめん。あ、仕立屋のお得意様から卵貰ったから作ってあげよっか、玉子焼き！」

「ッ、ちっ…大根おろし忘れんなよ」

以前とは違う騒がしい日々。一人の少女を中心とした新しい日常は、いつしか冬獅郎の最も尊い宝物となっていた。

靈術イイイン！

月日が流れるのは早いもので、BLEACHの世界に転生してから百年が経った。

この間に起きた主な原作イベントはライザ○プ女子・曳舟桐生ひきふねきりおさんの王属特務入りと、有名な『魂魄消失事件』。ヨン様が隊長格たちで虚化実験したり、浦原うらはらさんたちが現世へ逃亡したりと過去篇のヤバい案件が目白押しだった。ここ流魂街るこんがいまで噂がビンビン聞こえてきたよ。

介入出来たのは強さと行動範囲的にゼロだったけどね。勿体ない

「——知ってるシロちゃん？ スイカの種ってチョコの味するんだよ」

「チョコってなんだ？」

「口キ付けスの味」

「ぶっ…!?!」

シロちゃんで遊びながらあたしはこの自己研鑽の日々を振り返る。

自己強化に関しては順調そのもの。ファンタジー臓器をいぢめ鍛え靈力を増やしまくり、この百年でみんなのじだんぼう丹坊兄貴がミジンコのように見えるレベルまで成長することが出来た。これはどれほど低く見積もっても尸魂界篇初期の一護以上——つまりその辺の三席は確実に超えてる隊長格級の靈圧である。

ちなみにヨン様陣営で言うところのいちまる市丸ギンが靈術院を一年で卒業した直後に五番隊の三席を瞬殺してたりする。あたしもそれくらいの実力がある…とは大声で言い辛いのが、尸魂界ソウルソサエティ史上最高の天才と言われた当時の彼と同等以上なら非常に嬉しい。

なお護廷隊にバレたら、あたしのオサレなひなもり雛森副隊長があんなに強かったなんて…裏切りCO大作戦が、ギャップもなにもないただの事後確認な「普通に最初から強かった人」になってクソダサ破綻するため靈圧隠蔽には命をかけている。

あれから色々他の方法を試したり、一応これで周りの一般人と同じくらいの霊圧にまで力を隠せてるはずだ。平時は万に一つも悟られることはないだろう。

死神になるための準備も万全だ。ここ西流魂街1地区【潤林安】は瀨霊廷に最も近い地区の一つであり、瀨霊門の一つ白道門はくどうもんを守る門番兄貴のおかげで色々斬拳走鬼について教わることが出来た。主にそのツテの方に。

「——ほんとに強くなつたなあ、桃。そんなでそこまで鬼道が出来る院生は見だごとねえべ。お前めえは絶対に霊術院に受がるッ！」

「つたく、やっと受験する気になったか。まあ教えたおれも悪いが、斬拳走はともかく統学院で学べる鬼道なんてもう何もねエぞ……」

「今までありがとうございましてっ、☒丹坊さん！ 空鶴さん！」

そう。あの隻腕の花火師、志波空鶴しばくわかく姉貴である。彼女は少し前に腕を失う大怪我を負い護廷隊を引退したので、折角の死神スキルを腐らせるくらいならと、なんと☒丹坊兄貴があたしの鬼道の師匠になってくれないかと彼女にお願いしてくれたのだ！

そこからはもう天国。いや扱きは地獄だしあたしの本当の霊圧がバレないように常に気を張ってて疲れたけど、それらを吹き飛ばすレベルの楽しい楽しい鬼道授業の日々だった。なんせせつかくBLEACHの世界に転生して、あの天才雛森ちゃんのソウルを得たのに何十年も鬼道をお預け状態だったのだ。霊術院受験までの短い期間だったが、中級鬼道の詠唱破棄まで出来るようになってホクホクです。夜中に志波家の鬼道書とかを盗み見して大好きな【天挺空羅てんていくわら】など不相応な番号の術も少しだけ覚えちゃった。てへぺろ。

しかし志波家の本邸に寝泊まりさせてもらえたのは、色々ヨン様対策に活用出来るかもしれない。なんせ志波家と言えば五大貴族。五大貴族と言えば、霊王れいおうの……

と、そんな感じにあたしの下積みは順調に進み……

「——じゃあ受験行ってくるね、シロちゃん！」

「ほら、手拭い。落ちたとき涙拭くんだろ？」

「不吉なもの渡さないでよお！」

そしてついに、原作雛森ちゃんが、そしてBLEACH主要キャラのルキアと恋次れんじが真央霊術院しんおうれいじゆつゐんへ入学する年になった。

原作である二人は確か第2066期と呼ばれていたが、確証を得たのは白道門を通る院生たちに69ひさぎこと檜佐木修兵しゅうへいの名前を聞いたとき。彼が最高学年の六回生になった年代で恋次たちが一回生になるので、後はそこから逆算して入学年を調整すれば恋次たちと同期になれるはず。

ルキアたちがどうやって瀨霊廷に入ったのかはわからないが、恐らく原作雛森ちゃんは☒丹坊を頼り霊術院の門を叩いたのだと思われる。なのでまた彼（の人脈）にお世話になるとしよう。

「——ごめんくださいーいつ！」

ようやく最初の一步だ、待ってるよシロちゃん。最高の「雛森イイイイ！」のために、あたし頑張る！

「……ッ、なんか寒気が…？」

真央霊術院しんおうれいじゆつゐん。

二千年以上前に山爺が考案して設立され、元は死神統学院と呼ばれてたとか昔はもっと死者とか出まくってたエグい死神養成所だったとか、色々闇の深い歴史がある学校だ。

六年制のカリキュラムだが、一〇やシロちゃんのようなたまに現れ

る化け物たちをさっさと護廷隊に入れてコキ使うための飛び級制度がある。ウキウキ学生生活で気が緩んでこの制度に目を付けられないよう慎重にならないとね。

おそらく恋次たちと自由に接することが出来るのは霊術院生の今だけ。ここで六年間あたしの偽の実力を彼らの認識に刷り込ませておきたいので、入学即卒業とかはマジで勘弁してほしい。

：誤解なきよう明記しておく、あくまで霊術院・護廷隊・シロちゃん
の三者にあたしの霊圧がバレることが問題なのであつて、原作の敵勢力であるヨン様陣営に気付かれるのは全く構わない。むしろさつさと興味を持ってもらって仲間に入れて欲しい。

その最初のチャンスが今年にあるのだが：出来れば取り零さないようにしたいところだ。

「——ではこれより【浅打】^{あさうち}の仮授与式、ならびに第2066期一組生の発表に移る。名を呼ばれた者は壇上へ移動せよ」

お、始まった。練習場に集まった新入生たちが一人ずつ教師から簡素な刀を受け取っていく。なるほど、霊力を馴染ませるため一日でも早く帯刀させるのか。霊圧で巨大化したらどうしよ…

ん？ あつ、あのシャンパンゴールドなヘアーは侘介^{わびすけ}じゃないか！
面を上げよ！ よかった、ちゃんと同期だったんだね侘介くん！

これならあの二人も：つておおつ、あの赤パインは恋次ではないか！
！ 言つた傍からリアル恋次だヒヤッホイ！ よろしくね、阿散^{あばらい}井くん！

ルキアは：くっ、お互い背が小さくて見えない。でも恋次と話してる女子がいるのはわかる。顔見たいのにもどかしい…！

うふふ、ルキアちゃんも曇り顔が似合う子なんだよなあ…（暗黒微笑）

「——受験番号【う二七】、入試席次主席。雛森 桃」

「あ、はいっ！」

そんな感じに原作キャラを芸能人感覚で見つめてミーハーしてたら名前を呼ばれた。空鶴姉貴から入試の過去問を貰えただけのことあり、高めに晒した霊圧と人間性とを総合的に判断され見事主席獲得！ 原作では何となく侘介が持ってたっぽいイメージがあったけど、こっちのパラレルではあたしがゲットだ。

早速壇上上がり先生のありがたい御説教に耳を傾ける。禅問答を十分ほど聞かされた後、ようやく「浅打」とご対面。この刀がああ毒舌天女様に具象化するんだから、KBTIT師匠も罪深いよね…

「——見ろよあの子」

「ああ、めっちゃ可愛い…」

「首席で美人とか高嶺の花だなあ」

「お近づきになりてえ…」

巨大化させないよう慎重に浅打を受け取る姿は、傍目には壇上で緊張に吞まれる可憐な乙女に見えることだろう。雛森ちゃんの公式美少女フェイスで思春期男子の目の保養になってやったあと、特に問題も起こらず胸を撫で下ろしたあたしはパタパタと急いで教室に移動する。

特進クラスの一组はやはり我ら副官トリオが揃った。これでひとまず原作通りだ。ぼつちなルキアちゃん、今度どっか一緒に遊び行こうね…

「えっと、阿散井くんに吉良くんだよ…？ 雛森桃です、よろしくね」

「あん？ あんたは…あの主席サマか。よろしくな」

「！ よ、よろしく雛森君ツ。その…き、君とお近づきになれて嬉しく思うよ…！」

うむうむ。順調に未来の副隊長たちとの仲を深めて、明るいコミュニケーションお化けな雛森ムーヴを極めよう。まあ原作雛森ちゃんはこの侘介のあからさまな反応にさえ気付かない鈍感女子だから、うっかり言葉拾っちゃわないよう注意しないとね。

…ヨン様と一緒に裏切ったときの爽快感が楽しみだぜ、ぐへへ。

それからは特に何事もなく時が進み、あたしはいつものトリオを中心に陽キャ街道を爆進しながら、死神の基礎たる斬拳走鬼の鬼——鬼道の授業で舐めプしつつも大いに楽しんでいた。

「——君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ……真理と節制、罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ!!」

——破道の三十三——
蒼火墜

燃え盛る青メラが掌から放たれ、的の中心に当たり炸裂する。くーっ、やっぱ鬼道はかっこいいな。漫画やアニメに出てきた術を自分で実際に使える快感は、もうこれだけで二度目の人生に満足してしまいそうになるくらいの幸せだ。

とはいえ、空鶴姉貴に弟子入りしてたあたしは既にこの程度の鬼道は詠唱破棄も習熟済み。こうして周りのレベル相応に威力調整することのほうが大変だ。

「あの志波家の姫に師事したと言うだけのことはある。素晴らしい完成度だ」

「きよ、恐縮です…先生」

「相変わらず鬼道だけは完璧だな、あいつ」
「凄い、さすが雛森君…!」

一回生が習う鬼道は三十番台までなので成績は抜群。しかし目立ち過ぎては必死に霊圧を隠してる意味がなくなるため、斬術と白打は平均付近をふらふら、瞬歩は侘介に次ぐ二番目と言った具合にあえて成績を偏らせている。走鬼以外に不安があると言いつれば飛び級を薦められても遠慮出来るからね。

何だかんだ言っても、やっぱり鱈界は強さⅡ霊圧である。いくら鬼道が優れていても霊圧が常識的なら一〇みたいな強制飛び級の話は出てこないようだ。

原作通りの鬼道の達人という称号はそのままに、他はちよつと人よ

り優秀程度の評価に収まりたいです。

…さて。そんなこんなで、明日はようやくあのヨン様との初対面のイベントが起きる日だ。

色々と考えて準備して来たが、何とか興味を持ってもらえるようオサレムーヴの予習を万全にしておこう。

だが、このオサレムーヴで調子に乗ってしまったせいで、この先あたしは色々大変な目にあってしまうのだった…（フラグ

実習イイイイ！

「——くっ、狡いぞ恋次！ 貴様らだけ現世実習など…っ」

「ハッ、こちとら一組サマだぜ？ これからてめエとの差をガツンと開けてくっから指でも噛んでろバーカ」

「ご、ごめんねルキアさん。あとでまた授業後に鬼道教えるから…」

準主人公さんの妬みをBGMに、集合場所へ足取り軽く向かう我ら一年一組死神見習い生。

そう、ついにあたしの最重要案件の一つ、あの現世での最初の魂葬（こんそう）実習が行われる日がやって来たのだ。原作イベントである。

一応説明しておく——毎度のヨン様の自演だが——現世で死神活動の実習を行っていた特進一組の一回生たちが虚（ホロウ）の集団に襲われ、そこをヨン様と一〇に救われるという展開だ。

作中で雛森ちゃんがヨン様ファンなのはこの出来事の影響が大きく、哀れ騙された彼女にとってこの実習は鬼門と言えよう。

だがあたしにとっては別。普通にヨン様陣営に加わる方針で行く身にとって、これはいわば企業面接なのだ。

このイベントにおけるあたしの目的は周りにバレることなく力を示し、ヨン様に自己PRする事である。

アピールの主力は霊圧と鬼道。霊術院一回生で護廷隊副隊長以上の霊圧を持ち、尚且つそれを隠す必要性を理解している賢い子供なんて絶対に興味を持つだろう。

問題はどうかやって周りにバレずにあたしの霊圧を晒すかだが…先に他の院生を穿（せん）界（かい）門（もん）の中まで避難させるプランAは確定として、言うことを聞かなさそうな恋次や六回生は【衝】などの弱破道で無理矢理門まで弾き飛ばそう。

どさくさに紛れて囿になると言い残し一人だけ場所を移して戦う

のもありだ。

そして観察しているであろうヨン様に空気を読んでもらってなんやかんやしてもらおうガバガバ他力本願プランもある。高度な柔軟性を以下略。

戦闘力アピールに関しては、鬼道で変幻自在な戦いを演出したい。破道は密かに志波家で盗み見た「双蓮蒼火墜」（そうれんそうかつい）が飛び抜けて最高の切り札。あたしはどうも炎熱系が得意らしく、他は三十番台程度なら詠唱破棄や二重詠唱すら可能だ。

縛道も隠れて「天挺空羅」（てんていくうら）を詠唱出来るよう死ぬ気で頑張った。これは色々と応用が出来るのでぜひとも使ってみたい。残念ながら「六杖光牢」（りくじょうこうろう）の詠唱破棄は間に合わなかったが、巨大虚程度なら中級縛道と霊力ごり押しで十分なので万が一の場合も死にはしないだろうと楽観視している。

ちなみに斬拳走鬼の斬、つまり斬魄刀に関してはうんともすんとも言いません。霊圧がデカいのですぐに解放して「あたししゅごい」をするという細やかな夢はもうボドボドである。

まあまだ半年程度だし、成長チートはありそうだけど主人公補正はないからチャン一みたいに数日で始解！ とかは流石に無茶でしたね…

「――まずは簡単に自己紹介しとくぞ」

霊術院の屋上に集まったあたしたち一年一組は三人の六回生の前に整列する。この辺りからかなりアニ鯽のシーンそっくりな展開になり、個人的にニヤニヤが止まらない。69な檜佐木修兵の名に盛り上がる一同や、その横の蟹沢さんや青鹿さんも優秀なんだとか、色々ヒソヒソ飛び交いみんな楽しそうだ。もちろんあたしも空気を読んで適当に相槌を打っている。

幾つか説明と注意事項を確認したあと、蟹沢さんが籤通りに三人一組を作れとの指示を下した。蟹沢ほたる六回生、なんかあなたあたし

とキャラ被ってますよね？ その夢い命と引き換えにお前の活躍（？）の場を奪ってやるぜ、ぐへへ。

「ドクロ組は——って、なんだ根暗の吉良に鬼道狂いの雛森か。よく縁があるな俺ら」

「なっ、まさか雛森君と…!？」

「阿散井くんに吉良くん？ わ、凄いい偶然っ」

「おい吉良、俺もいるぞ…」

「…え？ あ、ああよろしく阿散井君」

あたしが絡みまくったせいかこの半年の付き合いで原作より親しげな副官トリオ。恋次とか前世の男友達感覚で普通につるんでて楽しいし、程よい息抜きによくワイワイしている。流石主人公の親友。

：侘介はなんかもう気付かないフリするのが困難なレベルでいつもキョドってるのでいっそ一思いにフられて新しい恋を見つけてほしい。あたしがふるのかよ。

「地獄蝶は持ったな、一回生」

『は、はいっ！』

男(二元)の友情と雛森ムーヴの板挟みな悩みに頭を抱えていたら、69が少し霊圧を飛ばしてこちらの気を引き締めようとしてきた。周りがビクツとしたのであたしも一拍遅れてそれに倣う。

そう、これからヨン様陣営による超圧迫面接が始まるのだ。ヨン様が質問（改造虚）を投げ掛け、あたしが返答（鬼道&霊圧）する。なお面接官はマジックミラーの後ろにいるものとする。大丈夫かこの企業。

ともあれ、この試験を乗り越えないと愛しのシロちゃんの輝きが見れないと思えば気合いも入る。頑張れ。

シロちゃんを曇らせるのはあたしの役目だから…（レイプ目

かくして我ら一年一組は現世に降り立った。いざ面接っ！

「——これが魂葬…あたしたちでも何とか出来そうだね」

「なんつーか、思ってたのより全然楽だったな」

「二度も整^{プラス}を苦しめてたじゃないか、阿散井君…」

魂葬実習も終盤。ぽつぽつとノルマを終えて現世側の穿界門へと戻ってきた一回生に紛れ、あたしたちは和気藹々と感想を述べ合う。

「…」

「ん、どうかしたか雛森？」

もつとも呑気なのは周りのみんなだけだ。嵐の前の静けさに溶け込むように、遠くで奇妙な霊圧の動きを感じる。思わず気のせいと判断してしまいそうな小さな違和感。

だがこの感じは、先程穿界門が開いたときと似ている——おそらく黒腔^{ガルガンタ}による霊圧変異だ。

「あ、ううん、何でもないよ阿散井くん。ちよつと寒気がしただけ」

「！ さ、寒いなら僕が鬼道で君をあ、温た——いや、何でもない…」

「ど、どうしたの吉良くん…？」

「ほつとけ雛森、いつもの発作だ。ほら、寒イならこれ着とけ」

「!？」

「えっ？ あ、ありがと…でも阿散井くんは上襦袴だけで寒くないの？」

「てめーほどヤワじゃねえよ。あ、ソレそろそろ洗濯すつから代わりやっというて」

「あ、うん。もちろん、におい付いちやヤダもんね」

「阿散井…コロス…」

副官トリオの一見三角関係みたいに見えるてよく見たら全然違うツツコミなし漫才で何も気付いてないアピールをしつつ、あたしは霊圧感知をフル稼働させる。視界の端で先程の黒腔らしき方角を気にしていたら、まるでそこだけ切り取られたかのように周囲の霊子が消えている奇妙な空間が近づいてきた。数は大体九つ。

…そろそろかな。

「——あのっ。蟹沢六回生」

「…ん、どうしたの?」

会話で注意を引きつつ密かに【曲光】と【円閨扇】の鬼道コンビネーションを蟹さんに付与する。難しい二重詠唱、しかも詠唱破棄でコツソリかけてやったんだ、リヨナ女王の座は渡さん。

「えっと、その。少し気になったのですが——」

だが言い終わるより先に事が動いた。

強烈な突風と共にバキインと破碎音が響き、直後蟹沢さんが視界の外へ豪速ですっ飛んでいった。

「——ッかはっ…!」

『なっ!?!』

ゆ、遊星—!

敵の攻撃で吹き飛ばされた蟹さんが遠くに墜落した。明らかに意識がない彼女の異常に遅れて周囲がパニックになる。大丈夫、デュエリスト生きてるよ。

「蟹沢!?!」

「なっ、なんだあれは…!?!」

狼狽える監督生の視線の先にはやはりあの原作の般若面巨大虚ヒュージ・ホロウが。姿を現したのは一体だけで、他はまだ大人しくスタンバってるみたい。

あ、一応可憐な女の子らしく叫んどこ。

「きっ——きゃああああっ!!」

…うん。デカいし見た目も恐ろしいんだけど、霊圧の差かなんかあまり危険を感じない。遊園地とかでたまに見かける巨大なエア遊具でも見ている感覚だ。なんか白々しい悲鳴になっちゃった。

「おのれ、よくも蟹沢をオオ!」

「止せ青鹿—!」

69が必死に制止の声を上げるも空しく、哀れ鹿さんも虚に殴られ

フライハイ。こっちは原作だと特別篇で生きてて四番隊隊士になつてたけど、見た感じ何とか命は大丈夫そうだ。ついでに69の顔が切り裂かれ戦闘不能になつたところで、ようやくあたしたちの活躍の場がやって来た。

「ぐっ…全員逃げるッ！ 穿界門へ…！」

「ひっ…！」

「う、うわああアアッ!!」

瞬殺されてしまった六回生を見て絶望した平和ボケ一回生たちが、69の倒れ際の指示で一目散に後ろの穿界門へ逃げていく。よしよし、プランAは順調だ。

「——ッ、なにボーッと突っ立ってんだ雛森ッ！ 逃げるぞ！」

「監督生の指示は絶対だ、雛森君！ 早くッ！」

恋次と侘介が呆けるあたしにキレてるが、原作で雛森ちゃんはここで死神らしく奮い立ち、可愛いだけじゃないところを見せる。

雛森ちゃんの数少ない健全な名シーンだから頑張らねば。避難も大方終わったし…

面接開始だ。

「——あたしが時間を稼ぐ…！ 二人は動けない先輩方を抱えて穿界門まで逃げて！」

まずは人間性。いい感じに責任感のある仲間思いな性格を見せ、人質がいればあたしが裏切らないという安全性をヨン様にアピールだ。実際恋次たちには死んでほしくないしヨン様を裏切るつもりもないので何の問題もない。

「なっ、雛森!？」

「あたしは主席だもんっ、みんなを守らなきゃ…！」

さて、次は戦闘力。この抑えた霊圧のまままで出来る限りの鬼道を使って見せる。まずはアイサツ、実際大事。

ヒュンヒュンと黄色い縄が手前の虚へ飛翔し、直後相手をぐるぐる巻きにする。今のあたしの霊力は三回生程度に抑えてあるため流石にすぐに破られたが、その一瞬で十分だ。

「…君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ——」
「雛森!? お前それまさか…二重詠唱!?!」

現れた敵は一体、ここは手早く仕留めるとしよう。今の霊圧だとダメージは微々たるものなので、今回は発動時に一瞬だけあたしの本来の霊力を込める。

「——真理と節制！ 罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ!!」

実はこれほど大量の霊力を使うのは生まれて初めてだ。練習場の時とは違う、全力ではないけど本気の一撃。

喰らいなさいっ！

蒼火 | 破道の三十三 |
蒼火墜

ミノムシ状態を脱した虚が吠えながら襲い掛かってくるが、もう遅い。隊長格級の霊力で放たれた完全詠唱の破道が敵の巨体を穿ち、さらに後続の隠れていた別の個体の上半身を消し飛ばす。

『——オオオオオオオオ…』

敵が不気味な悲鳴を上げながら消えていく。後ろのヤツも姿を見せないまま消滅した。恐ろしい威力だ。これがあたしの体の中から出てきたとか正直ドン引きである。

ふ、ふふん！ どうですヨン様。あなたならこれであたしの本当の霊圧を見抜けるんじゃないですか？ やはり少年誌のラスボスとしてはあたしみたいな可愛くて強い女幹部を傍に置きたくなりますよね？ ユーハバツハはバンビちゃんとか連れてますよ！

おっと、演技演技。

「ハ、ハア…ハア…た、倒した？」

まだぎつと十体近く隠れてるけど、見えている巨大虚は倒したから、一度フラグを立てる。

「す、すげえ…あの檜佐木修兵でさえ敵わなかった巨大虚を一撃かよ…！」

「信じられない…！ 君の鬼道はすでに隊士レベルだ、雛森君！」

おお、流石本職BLEACHキャラだ。フラグの立て方が芸術的すぎて思わず笑っちゃう。

この流れなら行けそうだな。言えるかなー？ 言いたいなー、ウズウズ。

「ハア、ハア、あはは…そんな、まぐれだよ…みんなを守りたいって思ったら、なんか凄い威力が——」

——そのとき。

不意に少女が口をつぐみ、続く言葉が遮られる。恋次たちは「どうしたのか」とその視線の先を追った。

そこで、彼らはソレらを空に見る。

『——オオオオオオ…』

『——アアアア…』

『——…』

『——…』

一体、二体、三体…一つ一つその数を脳裏に足していく作業が、一歩一歩彼らを現実から逃避させる。

総数にして、七体。

生まれて初めてソレらを見る、未だ無垢な少年少女。勇敢にも恐怖に立ち向かった小さな勇者たちの前に、本物の絶望——巨大虚の群れが現れた。

はい皆さんも、さん、はいっ！

『何……だと……!?』

「…へえ、オモロイ子がいてはりますなあ。あれが今回のお目当てですか?」

無数の映像装置が青白く照らす暗い室内。その中央に二人の男がいた。

見つめる先は画面の一つ、霊術院の制服を纏う一人の少女の監視映像。席で寛ぐ上位者の男が、侍る副官の楽しそうな問いに答えを返した。

「——彼女を知ったのは百年ほど前でね。潤林安に突然急成長する霊圧が現れ霧のように消えた事件を調べていた時に見つけた子だ」

「ふうん…百年ほど言わはったら、ボクが霊術院に入るもつと前ですかね」

興味深そうに上司の言葉に耳を傾けながら、副官の青年は手元の資料に目を通す。

僅か一年で席官級の霊圧に成長し、直後独自にそれを隠す術を身に付けた興味深い霊体。その後何十年に亘り霊圧反応が希薄で、されど映像には確と姿が映っている。その可憐な容姿も合わさりまるで幻のような少女だった。

「最近志波空鶴に弟子入りさせた…と書いてはりますけど、師匠にも霊圧を隠すんは何か目的でもあるんですかね?」

「ああ、恐らく彼女は君以上の逸材だよ。ギン」

「…そないに?」

名を呼ばれた副官の青年が糸のような細目を驚きに見開く。かつて霊術院史上最高の神童と謳われた彼以上。その評価は並大抵のも

のではない。

そして、観察対象である少女は画面の中で、それに相応しい活躍を見せて見せた。

「ほう」

「…あの特別製、えろう硬かったんとかやいます?」

使われたのは噂に聞く彼女の得意技、炎熱系中級破道【蒼火墜】。霊術院一回生がああ鉄火場で咄嗟に三十番台を初級縛道【崩輪】との二重詠唱で操ったことも驚きだが、何より威力が尋常ではない。瀟霊廷屈指の強者である青年の同僚たちでさえ、あれほどの鬼道を放つ者は片手で数えるほど。

間違いなく隊長格級の霊圧だ。

「ふむ、どうやら周りの院生たちの目が気になるようだね」

だが的はまだ半数以上が健在。数の暴力に苦しむ少女は背後の足手まといな同期生たちへ繰り返し逃げろと叫んでいる。その顔は悲愴に歪んでいたが、拡大映像に映る彼女の大きな瞳に震えはない。

あれは余力がある者にしか出来ない目だ。

「消しましょか?」

すらりと出てくる冷徹な計算。観察対象の力の底を見るのが此度の目的であり、その障害となっている有象無象にご退場願うのは観察者として当然だ。

「それも面白いが、彼らはあの娘を捕らえる枷になる。ここで捨てるのは惜しい」

「…ほな、どないしはります?」

わかっているクセに。操作端末を操り席を立った上司の心中を、青年はニヤニヤと尋ねる。あの操作番号は、こういった観察対象の優先レベルを引き上げたときのために用意された計画起動シグナルだった。

久方ぶりに退屈せずに済みそうやなあ、と青年は口角を吊り上げる。

「そうだね、一人の死者も出さずにここまで戦ったんだ。彼女に敬意を評し——」

そして。背筋が凍えるような冷たい微笑を浮かべる上司も、下す自身の決断に、少しだけ高揚しているように見えた。

「——ここに招待するでしょう」

虚圏 イイイイ！

『あ…あ…あ…』

吉良イヅルはその時の光景を、恐怖を、そして無力感をよく覚えて
いる。己の魂の奥底に焼き付いた絶望は何年が過ぎようと未だ彼の
自由を縛り続け、同時に自分の忌むべき弱い姿を想起させる反面の戒
めであった。

「ダメ…勝てない…逃げッ」

「あ…」

「逃げてえ ツ!!」

つんぎくような悲鳴が微かに耳に届く。意中、と形容すべき感情を
覚える少女の華奢な後ろ姿を見つめながら、イヅルは己の手足を動か
す方法すら忘れてただただ阿呆のように立ち竦んでいた。

「みんな…くっ…!」

——縛道の四——
這 縄

呆ける頭の片隅で、固まる体に何か巻き付く感触を臍気に覚え
る。直後強い浮遊感と共に視界から彼女の姿が消え、気付けばイヅル
は幾重の障子の奥、穿界門せんかいもんの中にいた。

「あえ…?」

そしてワケがわからぬまま、イヅルの体は更なる力に弾き飛ばされ
る。

「そのまま門の奥に逃げて!」

——破道の一——
衝

「——ッ!」

硬いものに頭がぶつかり、鈍痛が意識を覚醒させる。はたと状態を

確認すれば、自分は見慣れた霊術院の屋上で無様に転がっていた。そして次々に処理待ちの情報が頭を巡り、イツルはようやく正しい現実を直視した。

「ひっ——雛森君ッ!!」

「雛森！ 何してやがる、お前も逃げろッ!!」

同時に我に返った恋次も、一人あの大軍の前に残った彼女を救わんと立ち上がる。だが努力も空しく、がくりと膝から崩れ落ちた二人の心に戦う強さは残されていなかった。

彼らの眼前には【這縄】を鞭のように操り、取り残された六回生三人を穿界門のこちら側へと投げ飛ばす少女の必死な姿。直前、誰かを守りたいと死に物狂いに放った鬼道で敵の一体を倒した彼女は、常の可憐な美貌を悲愴に歪めながらも迫る絶望に抗わんとしている。

足手まといな自分達をその小さな背中で守りながら。
だが。

「あ…」

ふと溢れた吐息は少女の悲劇を悟るに十分な言霊だった。
イツルの目の前で。

——あの手折れそうな細い腕が触手に捕らわれる。

——あの珠のような白肌が鮮血の雨に色付く。

——あの瑞々しい桜唇から絹を裂く悲鳴が上がる。

「そん…な……」

この世の深淵のような暗闇を垣間見る、魔界の洞。連れ込まれれば二度と生きては戻れない悪霊共の罠に吸い込まれる少女の姿を最後に、神代に別たれた世界の門が掻き消えた。

まるで全てが夢幻であったかのように何一つ残らぬ現実の中、吉良イツルは茫然自失と穿界門の前で座り込んでいた。

「——あー、喉痛い」

謎の触手（鱗付きでエロくないやつ）に引つ張られながら、あたしは今日三回も慣れない悲鳴を上げてくれた自分の喉を唾で潤し回道で労る。女の子の悲鳴ってそれだけで凄い悲愴感あるよね。うまくみんなを騙せたのではなからうか。

「…見えない」

しかし目を塞がれているので自分の身に何が起きているのかよくわからない。とはいえ殺意ゼロな巨大ヒュージ・ホロウ虚たちのぎこちないエスコートにヨン様の紳士的な意図を感じたあたしは、こうしてお誘いに素直に甘えることにしていた。

「あうっ…！」

するとしばらくの後、ペいっつとどこかに投げ捨てられた。あたしはしりもちをついたまま周囲へ目を向ける。

「——え…？」

そこにあつたのは見渡す限りの黒い空と白い砂漠。のし掛かるような濃い霊子。そして、数える気も起きないくらいの一——巨体の群れ。

地響きを立てながら近付く無数のそれらは、まるで巨木の森そのものが動き迫っているかのように非現実的な光景だった。

「は、はは…！」

思わず笑い声が溢れる。気が狂ったのでも、自棄になった訳でもな

い。

だってそうでしょう？

「大虚メノスに、虚ウエコムノド圈……」

これ、一次面接大成功では？

『……オオオオオオ……』

唐突に連れ込まれた楽園に、大虚メノスの唄が響き渡る。感じる感情は強い敵意。この軍勢は間違いなくヨン様による二次試験の生け贄だ。それも気まぐれに呼び寄せたのではない。相応の準備を必要とした、明らかに優先度の高い計画だ。

大人気漫画BLEACH。その史上最高のオサレボスが、あたしのために用意した実験場。無数の読者に絶望と感動を与え、数々の名言、迷言をネット界に残したあの男が、藍染惣右介が。本誌ではボロ雑巾のように捨てたこの雛森ちゃんに、ただの一読者に過ぎなかったあたしに言っている、いや命じているのだ。

——君の全てを見せろ

「……………ッ!!」

ああ〜。

勝手に即堕ちニコマしたあたしは今まで抑えていた霊圧を全て解き放つ。皮膚付近に凝縮され眠っていたエネルギーが活性化し、体から濁流の如く溢れ出る。周囲の景色がまるでノイズ映像のように歪み、大虚たちがその巨体を軋ませ悲鳴をあげていた。

『……オオオオオオ……』

目の前で畏縮する大虚たち。大樹のような大きさなのに、存在感がどこか弱々しい。

凄い、これがあたしが今まで血とゲロを吐きながら鎖結くんと魄睡くんを百年間いぢめ続けて手にした霊圧なのか。我ながら感動ものだ、努力が大体報われる漫画の世界ってステキ。

「……いけるっ！」

思わず笑みが溢れた。

調子に乗っているのを自覚するが、最下級ギリアンとはいえあの大虚メノスの軍勢を怯ませてるこの全能感は抗えない。新しい力を手にした時すぐにマウントとって「終わりだ」とか勝利宣言しちゃう高校一年生の一護くんの気持ちがわかってしまう。

今はもう女の子として生きてる時間の方が四倍近く長いが、やはり元とはいえ男の子はこんなときにイキってはしゃいじやう生き物なんだ。

「…始めます！」

——縛道ばくどうの二十一——

赤煙せきえん遁とん

あたしは雛森桃。ならば切り札はやはり鬼道である。

霊力を多量に込め、軍勢の一角が入る扇形半径百メートル弱の空間に煙幕を展開する。この鬼道は珍しい創造系に分類され、一度生み出した煙幕は維持に意識を割く必要がない。そのため二重詠唱をせず悠々と【白伏】で自らの霊圧を消す余裕がある。破面ブレンカの従属官たちでさえ見逃すコンビネーション。これでただの大虚程度メノスの敵があたしを捉えることは不可能だ。

「——黒白の羅あみ、二十二の橋梁、六十六の冠帯——」

軍勢があたしの霊圧と鬼道に動揺している隙に更なる準備を進める。浅打で指から血を滴らせ、両腕と宙に触媒の紋様を描いていく。あの虎徹さんのシーンほど手慣れてかつこよくはないけれど。

「——足跡そくせき・遠雷・尖峰・回地・夜伏・雲海・蒼い隊列、太円に満ちて天を挺れ!!」

原作でこの鬼道とその実例を見たとき不思議に思ったことがある。ただ一方に声を届けるだけの鬼道が何故これほど高い番号に位置しているのか。

その答えは論理的に当然なものだった。

——縛道の七十七——

天 挺空羅

ザアツ…と膨大な情報が頭に流れ込んでくる。周囲の霊体の数、霊圧、そして位置。それらを手にし準備を終えたあたしは、ようやく攻撃を開始する。

「どれほど距離が離れていようと、分厚い壁で遮られていようと、そこに霊子がある限り、あなたたちは逃げられない…！」

番号は低い。されど侮ることなかれ。何故ならこの鬼道には、この作戦の決定打たる唯一無二の特性があるのだから。

——破道の十一——

綴雷電

霊力にモノを言わせた凄まじい電流が、赤煙の中に無数の大虚メソスの影を照らし出す。視認する必要などない。ただ行使するだけで、まるで電線を伝うかのように雷電が一直線に敵の軍勢全員へと殺到している。

そう。【天挺空羅】が高位鬼道として扱われるのは、大気中の霊子を限定的に支配下に置く、全鬼道中最大の効果範囲を持つからだ。

今回使った【綴雷電】は名の通り雷電系の破道で、射出ではなく霊体を伝導し発動する性質がある。ならば【天挺空羅】が支配した周囲の霊子を導体として利用し、さながら電波通信のように相手へ破道を送信することも可能。回避不可の害悪鬼道コンボだ。

世界一危険な迷惑メールを受け取った大虚たちは感電し、中には耐えきれず膝を突く者もいる。

——あとはもう、蹂躪するだけだ。

「やあああっ！」

斬術は得意ではないが、コイツらは名前こそ仰々しいものの虚圏ウエコムンド侵攻時のルキアが一撃で殺せる程度の敵。あたしの浅打ちでも急所の仮面を霊圧マシマシで攻撃すれば確実に倒せる。

赤煙遁が敵の視界を混乱させている内に大虚を狩りまくる。狩る、狩る、狩る！

『——オオオオオオオ……』

「ッ、何か来る……っ」

遠くの何体かが痺れから復活し、かなりの霊圧を集束させ始めた。復帰がかなり早い、上位種だろうか。恐らく来るのは大虚の切り札、虚閃セロ。同胞に構わず赤煙をなぎ払おうとしている。同士討ちは大歓迎だ。

——縛道ばくどうの三十九——

円えん 開こう 扇せん

虚閃の乱舞に備えて大地に伏せ、傾斜装甲を参考に鬼道の盾を構える。直後大気が震え鈍い爆音が辺りに響き渡った。

外が凄いいことになっている間も安全圏で鬼道を完全二重詠唱。しんどいがあたしなら出来る！

「立ち直らせなんて……しないっ！」

——縛道ばくどうの七十七——

天てん 挺てい 空くう 羅ら

——破道はどうの十一——

綴つづり 雷らい 電でん

その様はまさしく一騎当千。動けない相手を一方的に屠る無双感。縦横無尽に駆け回り、鬼道で位置を悟らせない無敵感。敵の攻撃すら利用し戦闘の流れを自在に操る全能感。堪らない。何もかもが自分の思い通りだ。

爆発的な霊圧。圧倒的優位な状況。そして、あたししか知らない原

作知識。

今なら何でも出来る気がする。ずっとやりたかったアレさえも出てしまう気がする！

「…にじ滲み出すこんたく混濁の紋章…」

習ったことなんてない。だけどその実例なら何度も画面で視て勉強した！

「…不遜なる狂気の器…」

たとえ学校の女子たちに爆笑されようと。めげずに友達と披露し合った青春の日々を思い出せ！

「湧きあがり！」 「否定し！」

「痺れ！」 「瞬き！」

「…眠りを妨げる…」

もう何も怖くない！ 残りの全霊力を注ぎ込み、男の子なら一度は口ずさんだあの鬼道をいぎ！

「…はしろう爬行する鉄の王女…」

ここはBLEACHの世界だ！

「…絶えず自壊する泥の人形…」

OSRメーターも最大だ！

「結合せよ！」

「反発せよ！」

逝くぞ！

「地に満ち……」

——己の無力を知れ」

全世界十億人のBLEACH読者のみんなア、おらに力を分けてくれえ!!

——破道の九十——
黒棺

…

…はい。

「ぐえ」

使えもしない黒棺ごとつことかいうアホみたいなことに全靈力をぶつ込み、己の無力を知ったあたしは、悠々と近付いてきた大虚メソの一体に蹴り飛ばされ気絶した。

飛梅「イイイイ！」

「——知らない天井だ」

射し込んだ光に導かれぱちくりと目を開けると、一度は言ってみた
いセリフ上位に来る、あの状況だった。

視線を横に移せば、そこはまるで平安時代の公家屋敷みたいな建物
と廻廊が延々と続いていて、それらに囲まれる仙郷みたいなバカでか
い日本庭園が正面に広がっていた。

「四番隊隊舎じゃ……ないよね？」

何故なら完璧の無人。第一こんな果てしない規模の敷地は志波家
でも見たことがない。

……薄々状況は察している。これが有名なアレなんだろう。あたし
が半年間待ち望んだ瞬間だ。

だが——

「……出来ればもうちよつと後がよかつたなあ」

そう、今のあたしは人生最大の黒歴史を刻んでしまったクソ中のク
ソ。むしろあの流れのまままで来てしまつて、本当に今じやなきやダメ
だったのかと穴があつたら入りたい気分だ。

なので変に騒ぐのは控え、謙虚に誠実に、その場の板敷の間に正座
する。そして眼前の日本庭園を改めて拝見した。

白砂の庭に植えられた、枯れた桜と、古い松の木。
そしてその間に佇む、天女っぽい姿をした女の子。

——アニ鰯やブレソルでめっちゃ見覚えのある少女だった。

嬉しくてダッシュで近付き話しかけたいが、今のあたしは以下略。すつと下座をして、まずはこんな愚物にお逢い下さつたことを感謝しご挨拶をさせていただく。

「——御初に御目文字致しまする。わたくし、雛森桃と申す死神見習いに候。御聖体のお目通りが叶いましたこと、心より御礼申し上げまする」

『ふえっ!?!? あ、え、ウソっ、ええっ!?!?』

声かわいい。エセ武家言葉で自己紹介をしたが、なんか御聖体さまが驚いてしまわれたのでちらりと上目で様子を窺う。でもこの流れだと本日二つ目の黒歴史が育まれようとしている予感しかない。

しかし何故か少女は老松の幹の後ろに隠れており、信じられないものを見る目でじつとこちらを窺うだけ。

…この子って某恋愛頭脳戦の人みたいなプライド高い清楚クール系毒舌ぼんこつむっつりお嬢様キャラじゃなかったっけ? めっちゃ腰引けてるんですけど。

「あの…御聖体さま?」

『ッ、い、いえ…』

原作知識で名前はもう知ってるが、こういうのは信頼が大事だから、相手から名乗ってくれるまで待つつもりだ。声は届いているので既に同調も対話も成功しており、向こうもかなり最初から歩み寄っている。ちよつと霊術院の記録にも原作知識にもないパターンだ。いや、つかちよろすぎない?

『その…』

「あ、はいっ。何なりと」

言い淀む。彼女はこうしてあたしの相槌のたびに凄く困惑した顔をする。

『…やはり私の声が届いているのね』

「え? あ、はい。お声を拝聴いただけましたこと誠に感謝申し上げまする」

何かを確認するかのような仕草を繰り返す彼女にあたしは少し戸惑う。原作だと本体との対話は解放の条件の一つだったので、てつき

り順調だとばかり。

『…いえ、ご免なさい。現実には戸惑っていただけです。これまでの非礼をお許しください』

すると天女さまがしばしの逡巡のあと、しずしずとこちらへ歩み寄り一礼した。

あたしは驚き彼女の頭を上げさせようと声をあげる。習ってもいない鬼道をその場のライブ感と全霊力のゴリ押しで発動しようとするあの斜め上過ぎる自殺行為を見て「コレが私の主かよ…」と現実には戸惑うのは当然だと思います、はい。

だが直後の御聖体さまの言葉にあたしははっと息を呑んだ。

『——初対面で私の仮の名を、対話もせずに聞き出した才ある主を敬うのは当然のことです』

じつとこちらを見つめる女の子。その瞳はどこかキラキラしている。

なんだろう、名前を知ってるのはその通りなんだけど、その過程に凄い誤解がある気がしてならない。

「…えっと、何故そうお思いに？」

『ええ。ここにいらつしやった直後に私の姿どころか声まで知覚されたということは、斬魄刀との同調より先の——私の仮の名をご存知だということ以外にありえませんか…！』

「はあ…」

ハイテンションで「流石は私の主様」とかなんとかはしゃいでいる。アニ鯽では普通にタメ口で主人をゴミカスにdisってたあの毒舌ちゃんがあたしを様付けとかどう反応すればいいかわからない。あの、ただの原作知識だからそんなに讚えないで…

ていうかこの子もしかしてさっきのあたしの恥態を見ていない…？

あの渾身の「【破道の九十・黒棺】ツツ！（ドヤアアアア）とかやらかしたクソアホイキリ芋虫を見ていない…？

…え、マジで？ セーフ？

『それにしても貴方様は本当に素晴らしい霊圧をお持ちです。これほどの力があれば近い内に私の真の名をお伝え出来るでしょう！ ああ、主様に屈伏させていただけの日が待ち遠しいですわ…！』

「！」
あ、これ絶対に見てないですね。あたしなら死んでもこんなバカを主と認めたくないツスもん。

いやそれより初対面で早くも卍解の予約ですか。あたしの霊圧もうそんなに上がってたの？ この後更に始解で伸びたら文句無しの隊長レベルになりますけど、そしたらヨン様さっきの黒棺は笑って許してくれませんかね。

え、なら卍解見せる？ 無茶言うなよ…

——って、そうだヨン様！ いやまず大虚に蹴っ飛ばされたあたしの体ア！

「えっと、あのっ！ じ、実はあたし、お外でちよつとピンチになってまして、出来ればそろそろお暇させていただきたく…！」

両手で自らの現状を精一杯訴えると、くねくね不思議な踊りをしていた御聖体さまがはたと我に返ってくれた。

『！ ええ、存じております。私が目覚めたのも貴方様の身に危険を感じたから。こちらにいる内は外世の時は進みませんが、お気持ちもごもつとも。直ちにあの大虚の軍勢の前までお見送りします』

なるほど、つまり彼女はあたしが大虚に蹴られた直後に誕生したので黒歴史は見られてないと。ほっ。

いやそうじゃなくて、これってやっぱりチャン一と斬月(ユーハ)たちがオサレ会話してた精神と時の部屋状態か。現実に戻れば端からは一瞬でパワーアップしたみたいに見えるアレ。

ふむ、実にオサレな展開になるのではないか？ 多少は面接評価稼

げるかも：

『さあ、お行きなさい：！ 私は貴方様の敵を打ち砕き、愛するものを護り抜く、一振りの力！ 交わした勇名の誓いは、その言霊と共に死神を次なる舞殿へと誘いましょう！』

こちらのやる気を見たのかあたしの魂の半身たる御聖体さまもノリノリになっておられる。おい恥ずかしいからやめろ。

視界が白み、右手に握った斬魄刀がかつてないほど膨大な霊力を帯びていく中、あたしは「後で羞恥に身悶えしてそう」とか謎の親近感を彼女に覚えるのだった。

『——我が主よ！ 惜しまれよ我が花香を、綴られよ我が紅彩を！

東風吹かば、我は幾度と応え給う！

詠いなさいッ！ 我が名は——』

「飛梅」

その名を紡いだ瞬間、ブワツと全身からとんでもない規模の霊圧が溢れだした。

白んだ視界が覚醒し、開かれた眼前には辺り一面の焼け焦げた大地。真っ黒な世界の空にヒラヒラと飛び交う紅色の火の粉が、まるで梅の花弁のようだなんて詩的な感想が浮かぶ。

始解・飛梅。

土壇場の解放、という字面から連想されるイメージほどオサレでもかっこよくもない。けれど、今までの百年間で何度も臓器が壊れそうになるほど力を鍛えた努力の結実として、これ以上なく相応しい姿の斬魄刀が、あたしの両手に握られていた。

『——オオオオオオ……』

萎縮し後退る、壊滅的な損害を負った大虚の軍勢。彼らの目には霊力が枯渇し失神するほどの一撃を受けたはずの死神見習いが、砂煙の中で謎の爆発と共に復活したように見えているのだろう。それも更なる上の霊格へと進化を遂げて。

五尺未満の小さな身からすれば、敵は天を貫くような巨体の群れ。だけど今は、その巨人たちに本当に何の感情も抱けない。ただそこで怯えている、無力で空虚なハリボテのよう。

「…見せて、飛梅。あなたが出来ることを」

強く握った柄から彼女の音無き声が聞こえてくる。

知ってる力と、知らない力。魂の半身と言うだけあつてか、やはり原作の雛森ちゃんのものと全てが同じではない。嬉しいような、戸惑うような。でも調子に乗るのはダメ。

BLEACHにおける勝者とは霊圧が高い者でも斬魄刀の能力が優れた者でもない。

OSR値をより多く稼いだ者だ。

「——弾^{はじ}け、【飛梅^{とびうめ}】ツ！」

まずは原作で描写された技。轟々と刀身に濃い紅色の炎が燃え広がりが、振るう遠心力で飛んでいく。接敵した大きな火炎球は盛大に破裂し軍勢左翼側の^{大虚}たちを灰のように消し飛ばした。【赤火砲】相当の威力とは一体。

霊圧の違いでなんか殆ど違うものになってるけど、飛梅ちゃんはこの榴弾火炎兵器が基本の技だとふんすふんすしているのでそういうことにしておこう。かわいい。

怖じ気付く巨人たちの間を縫うように、幾体か小柄な虚が叫びながらこちらに向かってくる。霊圧が他より大きい。ヨン様の特別製か^{アジュールカス}中級大虚か。

いずれにせよ、こちらも全く恐く感じない。斬魄刀を解放した死神ってこんなに変わるのか。始解でこれならそりや卍解したら神扱いもされるよね…

早く次の技を試せと急かす相棒に従い、今度は振るった一閃に添って刀身の炎をそのままパァン！と扇形に炸裂させた。

「Oh…」

飛び掛かってきた数体の小柄な虚たち全てが、隊列組んだ機関砲の一斉射を喰らったみたいいな肉片となって燃えている。飛梅ちゃん曰くこうして放射状の火花を放ち弾幕で制圧するためのものらしい。これがあるですね、ミンチよりひでえやってやつですね。

五十年後くらいの現世の軍事条約で禁止されそうな能力が続々と出てくるが、もつとこう、周りに無駄な被害を撒き散らさない技はないかと聞けば「…」と無言の答えをくれた。

ねえ、君もつとお淑やかな子じゃなかったっけ？ 護廷隊でこんな戦い方して外見詐欺とか言われたくないんですけど。

そして最後の大技。霊子の足場を駆け上がり、死なば諸ともと虚閃を放とうとする残りの大虚たちへ、一際大きな霊力炎をお見舞いする。

その様、まさに炎のクラスタ―爆弾による絨毯爆撃。空を駆ける自身を天高く吹き飛ばすほどの暴熱風が晴れた後、眼下に広がっていたのは溶け焦げ硝子化した黒い死の砂漠だった。

…霊圧の差って、残酷なのね。

「…」

感知に引っ掛かる霊体はもういない。これで一安心して黒棺失敗のマイナスから稼ぎ直したOSR値をリセットしたいが、ぐつと堪えよう。

まだ本命が来てくれると期待するのだ。

さて。色々ありすぎて当初の感動を忘れそうだが、未だあたしはヨン様の面接中である。

全てを見せろとあのオサレマスター藍染惣右介に命じられていそうな現状で、今出来る全てを見せたはずだ。例のアレで一時はもうダメかと思っただけ、飛梅ちゃん覚醒のおかげで霊圧がついに隊長レベルの大台に乗り、何とかプラマイ0くらいまで持ち直したと思う。

しかしこれではスタート地点に戻っただけだ。残るアピールポイントはまだ原作知識しかない…

「的大虚たちも全滅し風化を始めてるし、そろそろ向こうから動きがあるだろう。不味い、時間がない。とりあえず鏡花水月のために目をガン開きにして無警戒を主張しポイント稼ぎする。さあ、好きなタイミングで一思いにお願いします！

すると。

「——素晴らしい」

ふわりとあたしの耳に届く、カリスマがある方のアゾット声。

「こうして会うのは初めてだね、雛森桃霊術院一回生」

大虚の骸の塵が晴れる。巨壁のような霊圧を発しながら堂々ところらへ向かってくる未来の上司は、糸目の副官を伴い、秘すべき本性の姿であたしの前に現れた。

「——私は藍染惣右介という」

キヤーヨン様キター!!

藍染 イイイイ！

ふと気を抜けば膝を突いてしまうほどの霊圧に慣れたのはいつだったか。コツコツ、と。溶け焦げて固まった黒曜の砂漠を歩く足音に従い、市丸ギンは上司の後ろに控えながら、目の前の人物を観察する。

刀剣より琴花。

このような殺伐たる煉獄に似つかわしくない風貌の少女が、正面から護廷隊史上最強最悪の男と向き合っている。見る者全てを絆す華奢で可憐な小さき乙女。そんな印象を覚えて然るべきであるはずの青年は、このときただ、雛森桃という小娘にひたすら感心していた。

——笑っているのだ、彼女は。あの藍染惣右介を前にして。

「…いつから、見てらしたんですか？」

その異常な余裕に興味を引かれたのか、このような場面では常に会話の主導権を握るはずの藍染が彼女に発言を許した。

そしてそれは最良の選択だったと市丸は確信する。

「最初からだよ、雛森一回生。実に見事な戦いだった」

「あ、いえ、今日のごことはもう知ってます」

「…ふむ」

同じ隊長格でさえ意識を飛ばしかねないほどの霊圧を受けながら、雛森の顔にはおおよそ恐怖に類する本能的な危機感が存在しない。

まるで最初からこうなることを予想していたかのように飄々と、少女が人懐っこい笑みで問い掛けてくる。

「あたしが気になっているのは、こんな場所を準備してくれるくらいもつと前から…それこそあたしが霊力を鍛えようと考えた百年くらい前から見てたのかなって」

へえ…。市丸は上司に隠れて口内で思わず感嘆の声を転がす。

「何故そう思う？」

「それくらいは出来ちゃいそうな人に見えますし」

どこか楽しそうに、少女は「だって」と続ける。

「五十年くらい前の魂魄消失事件：でしたっけ、護廷隊の隊長たちが虚になっちゃったとかで情報規制があった凄い事件——あれ、あなたがやったんですよね？」

：

なるほど、これは藍染隊長が気に入りそうだ。市丸は彼女に釣られるように笑みを深める。しかし隣の上司は変わらぬ微笑のままだ。

「とても興味深い推理だ。根拠を聞かせてくれないか？」

「あたしの師匠は志波空鶴さんです」

「なるほど、四楓院夜一か」

そこから語られる彼女の推理は極めて単純なものだった。志波空鶴の日記を偶然見つけ、魔が差して覗いた頁に例の事件や裁判に関する疑問、冤罪を受け姿を眩ました友人の身を案じる内容などがつらつらと綴られていたこと。そして此度は雛森自身が虚圏へ連れ込まれ、その後奮闘を称える言葉と共に虚と繋がりのある死神の隊長格が登場。共通性を見い出すには十分な状況証拠だった。

推理を聞く藍染も当然のように頷いている。この対話も彼女の最低限の知性を試すためのものなのだろう。

だが。直後少女が口にした問いが、上司の絶えぬ微笑に歪みを引き起こした。

「死神を虚にする、^{プラス}整を虚にする、相反するものの壁を取り払う——どこかで読んだ『神話』を逆行するようなお話ですね、凄く嚴重に保管されてる巻物とかに書かれてそうなの」

藍染が、目を見開いた。

それは副官の市丸が辛うじて確認出来るほどの小さな変化。しか

しそれ故青年は目の前の少女に感心を超えた驚愕を覚える。

「…ほう」

「あたし、流魂街の空鶴さんの実家で鬼道を教わったとき、お家のあまりの大きさにびっくりしました。空鶴さんの一族はかつて四大貴族に連なる五大貴族なんて呼ばれてたほどの家だったんだって」

楽しげに師匠との思い出を語る彼女の笑顔は、どこか白々しく見える。本題はこんな子供の絵日記のような内容ではないはずだ。

「…そして、瀨霊廷を追い出された理由を知ったとき、もつと驚きました」

「そうか、やはり君は志波家でこの世の成り立ちを知ったのか」

「はい」

すつ、と少女…そして藍染の笑顔の質が変わる。

僅かな静寂。無言で視線を絡ませる二人。見えない糸で何かを互いから引き出さんとしているかのような、とてもおぞましい駆け引き。

あるいはただの錯覚だったのかもしれないその伝心の応酬に、市丸は何故か、心臓を鷲掴みにされるような悪寒を覚えた。

果たしてその軍配がどちらに上がったのかはわからない。だがいかなる結果か、焦れるような一拍のあと、少女が——遂に、その小さな唇を開いた。

「あなたは同じ強者として、王の名と位を冠する者が弱者の都合で人柱にされてる無様な現状を変えたいと思ってるんですか？　そしてそんな霊王を排除し、ご自身が真の王になろうと思ってるんですか？」

——死神と人間の壁クインシーがない霊王ですら至れなかった、死神と虚の壁がない超越者になって。

「…」

沈黙。一秒にも一年にも感じるその不思議な時間は、あるいは形而

上の精神がこれより起きる災害から少しでも長く逃避していたかったがために時を引き伸ばした結果だったのかもしれない。

しかし、直後。天地が反転したと錯覚するほどの霊圧が世界に襲い掛かった。

「…正直に言おう」

―君は、私の予測を上回った。

『…!!』

大地が軋み、天が震え、一人の男の力に怯えている。これほどの霊圧を感じたのは副官の市丸とて初めてのことだった。

否、初めてなのはその感情の揺れをあの藍染が他者に強いられたこと。彼の悪魔的な想像力を凌駕する奇跡を成し遂げた一人の少女に、市丸は目を奪われた。

雛森桃はその端正な麗容に汗を滴らせ、豹変した藍染の様子に焦っているようだった。

だがその焦りの根底にはあるべき感情が依然として欠如したまま。彼女が嘆いているのは自身の迂闊さだけで、目の前の絶対者と対峙した自らの末路に非ず。

この少女は、あの藍染惣右介に、根本的な強者への怖れを抱いていないのだ。

「魂魄消失事件の真犯人を導き出すのは、私がこの虚圏で君の前に姿を見せた時点で誰でも可能だろう。五大貴族の成り立ちから私の野望を見抜くのも、霊王の種族的分類を分析するのも、君の得られた情報があれば多少聡い者なら不可能ではないだろう」

苦笑いで固まったまま視線を激しく彷徨わせる雛森に、藍染が唄うような称賛を贈る。

「だがそれら全てを繋げ――私の望む霊格としての到達点を突き止め

られる者がいるとは思わなかった」

その言葉で市丸は上司の高揚の理由に気が付く。

霊王が、世界が霊界・虚圏・現世の三つに別たれる以前に生まれた存在であることは霊術院でも習う。霊王が、生と死の概念が存在しない太古の世の遺物であることも志波家なら記している。

だが少女の話には、一つだけ全く関係性のない単語がある。青年自身も知らない、思わず子供の戯れ言かと聞き逃してしまいそうなもの。されど藍染は、それに大きな意味が含まれていることを知っており、その答えに到達した彼女にかつてない期待を抱いたのだ。

「先程の君の三つの問いには全て是と答えよう。私は君が白道門の門番に頻りに鬼道のことを尋ねていると手駒たちから聞き、彼と繋がりのある五大貴族——即ち志波空鶴を負傷させ引退に追い込み、君の師となるべく操った。責任感が強く、尚且つ任務で大怪我を負った彼女が、死と隣り併せである死神になるための技術を年若い少女の君に簡単に教えたことから違和感を感じられただろう」

——そして君は見事私の期待に最大限応え、志波家でこの世の原罪を知った。

藍染がまるでお手を覚えた犬を褒めるように目を細める。しかしその直後、その柔和な笑みが一瞬でどす黒い歓喜に染まった。

「君の、霊王の霊格についての考察は確かに驚いた。君の口からあの種族の名が出たこともね。そして私が死神と虚の壁を取り払う研究をしている目的が単純な力ではなく、種族的な意味で霊王を超越することであると察した者は君が初めてかもしれない」

藍染の冷笑が凶悪な狂笑へと変貌していく。のし掛かる霊圧は、最早深海の水圧の如き物理的な破壊力を以て虚圏を押し崩していた。

「…だが、なぜ私の望む霊格としての到達点からその力を…」

——滅却師の力を除外した？

「えっ？ あ…」

「君の推理の延長で考えるならば、私は霊王と同じ滅却師の力をも手にしていなければならぬ。三種の力を統合してこそ、霊格としての究極の到達点となるはずだ。だが——」

そう、彼女は先程、故意に滅却師の力をそこから除外した。偶然ではない、そこには明確な意図がある。

——君は最初から知っていたのだ、あの種族の力の成り立ちに。

「何故だ？ 滅却師と霊王の繋がりを記す情報は千年前に全て零番隊が回収したはずだ。志波家にとて残ってはいまい。君はそれをどこで知った？」

「あわわ…」

「当初は生まれながらに叡知を与えられた霊王の魂を持つ者かと思っただが、尸魂界へ招かれ百年もの間君は虚とは無縁だった。多少霊圧を抑制したところで、霊王の欠片を持つ者が虚の感知を欺き続けることなど不可能だ。故に、現状この世にあるとされる如何なる手段をもつてしても、君がその結論に至れる道理はないはずなのだ」

——わからない、故に面白い。

藍染が一步、思わずといった心境で彼女に近付く。まるで極上の寶石を目の前に転がされたかのように。

「実に興味深い人物だ、雛森桃。私は今、然るべき過程無くして正解に至った君に——かつてないほど深く広い未知に、強い感動を覚えている」

主の感情の起伏に呼応し、さながら津波に呑み込まれたかのような重圧が雛森を襲う。天井知らずに高まる藍染の霊圧に、流石の麒麟児も苦痛に顔を歪めていた。

「どうした、顔色が悪いぞ？ この私が初めて敗北を認めた相手がこの程度の霊圧に気圧されるなどあってはならない。先程のように笑いたまえ」

「はあっ!? いやあのっ、敗北って——」

「敗北だよ。予測を上回るとは即ち未知に無防備となること。そして

未知とは恐怖の源だ。称賛しよう。喝采を贈ろう。今宵世界に、新たな強者が誕生した」

「違うんですウウウツツ！」

頭を抱え「当てずっぽうなんです」と弁論する少女の言葉など誰も信じてはいない。

藍染も見抜いているのだろう。己の力が未だ弱者の域を出ないと自覚しながらも、目の前の霊圧の怪物にさえ異色な親しみを感じさせる——まるで神カミが被造物キヤラクタを愛でているかのような、最上の傲慢さを滲み出させる彼女の魂魄としての「格」を。

「——さて。大変…大変有意義な語らいであったが、そろそろ本題に移ろう」

「！ シロちゃんと潤林安のみんなにご慈悲を頂けるなら好きなかだけ使い潰してくださいっ！」

自身のペースのまま一瞬で要望を突き付け平伏す雛森桃。その姿を見て、市丸は漠然と彼女の本質を理解出来た気がした。

自分達の生きる世界から位相のズレた、神の愛を体現する者。

あの藍染惣右介以上の精神的超越者とこれからどう接し、どう自身の目的に利とするか。彼女に抱く底知れぬ畏怖を追いやり、市丸はただその事について考えることにした。

「使い潰しなどしないさ。今日から君は——」

かくして藍染の下に、一人の強者の雛が参列する…

——私の同胞だよ、桃。

赤恥イイイイ！

沈黙が屋内を支配する。

沈痛な面持ちの者、蒼白な顔色の者、屈辱に震える者、能面の如く無表情な者。一同の視線が集まる先には、寝台に眠る一人の女子霊術院生。意識のない彼女を囲む老若男女は、そこに新たに現れた三人の男の足音で我に返る。

「――山田副隊長、雛森一回生の容態は…」

「藍染隊長の優れた回道のお陰でしょう。未だ霊圧に多少の揺れがありますが、峠は越えたものと私共四番隊は判断します」

『…っ』

副官章を腕に巻いた青年の言葉に一同が口々に安堵の声を溢す。

昨夜、真央霊術院一年一組の院生二十二名と引率の六回生三名が現世実習中に巨大虚の群に襲われる事件が起きた。誰もが全滅を覚悟する状況で全員生還の奇跡を成し遂げたのは、この眠る少女の類い稀なる尽力あつてのこと。

しかし若き英雄は仲間を守る犠牲となり、虚たちの手で悪霊の世界・虚圏へと連れ去られる。生還は絶望的だった。

「ありがとうございます、藍染隊長。貴公の機転がなければ恐らく雛森一回生は、今頃…」

「いや、彼女の必死の奮闘のお陰だよ。それに研究用の虚に解^{デスコレール}空を命じ虚圏へ行くのはギンの案だね。雛森一回生が無事なのは二人の知恵と勇気が引き寄せた幸運さ」

「左様でしたか。流星は市丸副隊長」

「ええですよ先生、そない畏まらんでも」

そんな彼女、雛森桃を救った二人の隊長格へ、一同は揃って礼を言う。人格者として広く知られている五番隊長・藍染惣右介の迅速な対応に誰もが尊敬の念を抱かざるを得なかった。

特に、救われていながら彼女の危機に一步も動けなかった己の無力

を呪う、雛森の友人たちと引率の六回生の五名は。

「しかし一回生が巨大虚の群相手に大立ち回りですか。俗に言う天才ってヤツですかね、市丸副隊長？」

「いやあ、そない簡単にボクの記録抜かれてもうたらないまへんわ。山田副隊長」

「ふーむ、じゃが鬼道は既に隊士レベルだと分析が出ておる。斬拳走は飛び抜けておるわけではないが、鬼道衆ならば即座に活躍出来るじやろう」

「特例で上級生の実技授業に数年参加させれば護廷隊でも即戦力として歓迎されるでしょうね」

「確かに…」

緩んだ空気に明るい話題が持ち上がる。雛森一回生の献身的な行動は全ての死神の模範となる素晴らしいもので、また未だ荒削りな部分も多いがその実績を以て護廷隊隊士への就任を検討すべきものであった。

「ふむ、隊士たちの命を預かる者として少しいかな」

「は、如何されましたか？」

そう口々に賛成の声が上がる中、彼女の明るい未来を守った当の藍染がふと異議を唱えた。

「彼女はまだ年若く、あのような目に遭えば心に深い傷を負ってもおかしくない。優秀な死神見習いが巣立つのは楽しみだけど、飛び級は本人の意思と四番隊精神科の判断を尊重してみてはどうだろう」

「…なるほど、仰る通りですな」

「危険な目に遭ったからこそ守るべき日常のことをよく教えてあげるんだ。雛森一回生は物事を逸るあまり自己犠牲に走りがちに見える。じっくり育てて欲しい」

真摯に若き死神の雛のことを考える護廷の隊長へ、霊術院の老教諭は感動した面持ちで仰々しく頭を下げる。彼も一年一組の担任として明るく礼儀正しく優秀な雛森に特に目をかけており、同時に同期の阿散井と吉良の心中を案じていた。互いを高め合う彼らの良好な友

人関係を引き裂くのは教育者として如何なものか、と。

「——どうして」

「…ん？」

そのとき、ポツリと小さな呟きが病室に溶け込んだ。和気藹々とした大人の集団の横で未だ暗い顔をしている死神見習いたちの一人、眠る少女の友人である青年だった。

「どうして…彼女を助けられたんですか」

「吉良一回生…」

「どうしたら、あの時の雛森君を助けられるように…虚に臆さずに戦えるようになるんですか…ッ」

感情に負け、青年は嘔吐くように独白する。

あの時自分は一人戦う彼女を救わんと確かに浅打を握ったのだと。しかし体がすくんで動けなかった。同期の友人——あるいはそれ以上の想いを寄せる少女の危機を自ら招き、連れ去られる様を震えながら見ていることしか出来なかったのだと。

「僕は…臆病で、無力な人間です…」

そして程度は違えど、それはこの場で俯く霊術院生五人全員の思いだった。

「——勘違いをしてはいけないよ、吉良一回生。僕は虚への恐怖を忌避することが正しいとは一度も言っていない」

「え…」

そんな子供たちへ、大人の一人が優しい声をかけた。この場の最上位者たる藍染惣右介だ。

「恐怖は枷かもしれない。だけど同時に糧でもあるんだ」

「糧…」

「失敗を、敗北を知っている者は前に進むとうとするとき、そうでない者より多くの勇気が必要とする。だけど、その枷に苛まれながらも前に進めた者は、誰よりも揺るぎない強さを得る」

『…』

穏やかで、されど強い説得力のある言葉が五人の心に染み渡る。

「雛森一回生はがむしゃらに君たちを守ろうとしたと聞いている。おそらく恐怖を知る余裕もないくらい必死だったんだ。恐怖を知らずに前に進んでしまった彼女を支えてあげられるのは——同じ場所で彼女の代わりに恐怖を知った君たちだけだよ」

『…ツッ！』

藍染の温かい説教に一同は弾けるように顔を上げた。

雛森一回生を支える存在になる。恐怖を知る自分達が、知らない彼女を諭す存在になる。それは己の無力を恥じ、先に進んだ彼女に嫉妬してしまった情けない自分を変える発想の大転換。藍染の自信に満ちた笑顔と佇まいが彼ら彼女らに力を与え、迷う青年たちの顔に血の気が戻った。

『ありがとうございます、藍染隊長ッ！』

自分達に進むべき道を、勇気を与えてくれた恩人に返すべき言葉は一つだけ。万感の思いを込めた礼をする青年たちは、この日の憧れを大切に胸に抱き抱えて前に歩み始めた。

「よし…」

——起きたまえ、桃」

一同が去った静かな空間。

三人きりとなった病室で、男の重厚な声が響く。別人かと思えるそれを紡いだ彼の名は藍染惣右介。万人を跪かせる自然な威圧感の籠った声に、この場の三人目の人物がぴくりと身動きした。部屋の主、雛森桃霊術院一回生だ。

「……はあーん」

のそのそと布団をかき分け寝台から降りる、無傷の少女。男の先刻の名演技への反応か、小さく「うわあ…」と軽蔑するような目を彼に

向けている。だが、同時にその顔はどこか楽しそうだった。

「そう言うことになった。君には卒業までの五年間、時間的余裕のある立場を活かして二つのことをしてもらいたい」

「……院生の立場で出来ることだと、霊術院内に信奉者を作るとかですか？」

「話が早くて助かるよ」

藍染の指示に雛森が苦笑いを返す。霊術院中に知れ亘っている彼女の美貌と人柄を以てすれば造作もないこと。あるいは既に似たようなことを行っているのか、先程の五人の院生など候補に心当たりがあるのかもしれない。

「……もう一つは何でしょう」

「卍解だ」

告げられた指示に雛森はその愛らしい目を丸くする。

「君の霊圧は既に護廷の隊長たちに比類するものだ。しかしそれは未だその程度でしかないと言いうことでもある」

「……それで卍解、ですか」

「その通り。君の飛梅は尸魂界史上でも上位の火力を誇る鬼道系攻撃特化型の斬魄刀だ。純粋な破壊力の上昇が見込める君の卍解は我々の大きな正面戦力となるだろう。とても大事な存在だ」

「……………ソーデスカ」

手放しの称賛に胡散臭そうな視線を返す雛森。その素直な姿を見る副官の市丸が肩を揺らして笑いを堪えていた。

あの藍染にこんな無礼な態度が取れる人物は彼女くらいだろう。

「……頑張ります」

「フフ、期待しているよ」

暫しの見詰め合いのあと、むっすりと承諾した少女に笑みを深めた藍染は部下を伴い病室を後にした。

「行こうか、ギン」

「ほなバイバイ、桃ちゃん」

「……ば、バイバイ……です。藍染隊長、市丸副隊長……」

背を向けた二人に少女が小さく手を振る。だがほっと息を吐き布

団に潜り込もうとする彼女へ、また声が投げ掛けられた。

「——ああ、そうだ」

「…今度は何ですか」

「働きの報酬に卒業後は五番隊に加え、鬼道衆・一之組に席を用意しておくよ」

——精々揉まれておいで。

リンゴのように真っ赤な顔で震える少女を尻目に、巨悪の主従は笑いながら四番隊隊舎を去っていった。

技名イイイイ！

「——はああああああ」

病室のベッドに寝転びながら、思わず溜め息を溢す。

虚圏から帰ってきたほぼ無傷なあたしは、なんか四番隊で入院（す
ることになった。

どうやら世間的には、院生たちの通報で事情を知った五番隊長格
コンビが十二番隊の実験虚の協力であたしを救出したことになって
るらしい。そんな雑な誤魔化し方が許されるのはヨン様の日頃の演
技のお蔭です。

しかし、ヨン様か…

「——あああ怖かったよおおお」

あのとときの恐怖が頭を離れず、あたしは体を抱き締めながら足をバ
タつかせる。色々と濃すぎたヨン様陣営の面接が大成功に終わった
喜びなど微塵もない。

…なにあの霊圧！ あれが有名な「護廷隊隊長に倍する」とかいう
やつか？

うっそだろオイ、あれで言う「倍の霊圧」ってどう見てもヒツガヤ
Lv・50からのヨンサマLv・100とか、そういう感じの倍だ
よ。あんなので斬られたらガチで一振りでヒナ／モリになる自信あ
るぞあたし。

二撃も耐えて反撃までしたハリベルってやっぱ流石No・3十刃
だわ。斬って貰えて羨ましい…

「って違う！ いや違わないけど！ 問題はそっちじゃないっ！」

——あたしヨン様にペラペラ喋り過ぎだろもおおお！

頭を抱えてゴロゴロ布団を転がる。本当はあそこまで原作知識を話すつもりはなかった。だけどヨン様にジイイイと見られてビビっちゃって、つい楽になろうとゲロつちやっただ。明らかにこの段階で知っていいことでも披露していいことでもないのに…

いや、自己弁護するなら明言はしてない。だけどあのヨン様なんだから、彼があたしの情報のソースがおかしいことに気付ける可能性をもっと真剣に考えておくべきだった。そのせいで黒棺失敗の赤点を払拭するつもりが自重を忘れてラスボスのプライドに土を付けてしまった。

「ああああ違うんですううう！」

あの崩玉融合前のオサレ全盛期ヨン様だぞ!? ブリーチ名言の八割はあの人のものなんだぞ!?

原作漫画や小説の知識でイキって転生者SUGEEやるならせめて相手選べよ! せめてシロちゃんとかソイポンあたりの低OSR値キャラにしとけよ。バカじゃないの!?

当然だが、あたしが虚圏でヨン様に語った志波家での情報収集は殆どでつち上げだ。そりゃ鬼道書を盗み見たりと悪さはしたけど、あたしごときが暴けるような所に五大貴族の秘密なんか隠されてないし、空鶴さんの日記も存在すら見たことない。

確かに志波家に居たという事実は霊王関連の原作知識を使う際の辻褄併せに利用出来そうだなーとは前から思っていた。何でそんなこと知っていると聞かれたら「志波家で知りました」と逃げ切れる。

でもその”世界の秘密”をあたしが志波家で見つけること自体がヨン様の策略だったとは驚いた。そのために空鶴姉貴を負傷させて引退させ、丹坊経由であたしに接触させるとか流石すぎる。

しかし原作でも腕はなかったけどまさかその原因があたしに飛んで来るとは、今度からどう姉貴に接すればいいって言ってますか…

そんな外道藍染は、あたしが誤魔化しきれなかった原作知識に何やら興味深々なご様子。プライドの塊なヨン様がユーハバツハから与えられる滅却師の力に関心を示すとは思えないので、普通に「死神と虚の力のみで霊王凌駕出来るでしょ」と言っただけなのに。あのたった一言であたしが滅却師の力の正体を知っていると見抜かれたのは完全に予想外。ホントバグってるわあの人の知力。

とはいえヨン様の行動パターンは意外と簡単だ。天上天下唯我独尊な彼なら何があるかと自分で立てた計画を破棄することはしないので、あたしが望む原作通りの離反計画はちゃんと発動されるはず。

：問題なのはヨン様がどうもあたしの戦闘力以上に知力を評価しているっぽいことだ。

ラスボスに頭脳面で称賛されたことはアホなあたしにとつては非常に不味い。上司の意図を察せず仕事を失敗とか一番失望されるパターンだ。

(いや、でもむしろそっちの方がいいのか…?)

自惚れでなければ、今のあたしはかなりヨン様に気に入られてる。

理想としてはハリベルみたいな捨てられ方からのシロちゃん「雛森イイイイ！」だったのが、このままだと好感度が高過ぎて処分フラグが立たないかもしれない。

ダメな子アピールで多少失望してくれないと完全に再走案件である。

目下の霊術院在学中に完遂すべきヨン様任務は信奉者を増やすことと、卍解を会得すること。この内の信奉者の任務の方を特に意識せず半ば無視することでひとまずヨン様の反応を見たいと思う。

(もし失望され過ぎても原作知識で十分挽回出来るはず…)

そう、言うなれば封神○義の太公望やワン○ースのルフィロールだ。

いつもぼわぼわアホっぽいけどたまにズバツと本質を突き、普段とのギャップでOSR値を稼ぐ戦法だ。まだまだ原作知識のストックはあるのでそれを利用して乗り切れるだろう。

(…まあでも卍解修得は流石にやらないとあたしも困るし、それくら

いの期待には応えないとね！)

と言うワケで…

『——卍解やりましょうっ！』

はい、ただいまあたしは飛梅ちゃんの平安時代風な公家屋敷にまたお邪魔しています。

「あ、はい。さつきぶり」

『はいっ。さつきぶりですね！』

相変わらずキラキラした目であたしを見つめる天女さま。刃禪していないのにホントに精神世界に行けるとは、どうやら始解してから更に仲が深まっているようだ。

…この子チヨロすぎない？ ヨン様に騙された原作雛森ちゃんを罵倒してた気高い君は一体どこへ…

『それにしてもやはり主様は素晴らしいお方ですっ。先程のあの藍染惣右介なる死神、余程の手練れと見ましたがそれを苦もなく絆す貴方様の話術、まことに感服致しました！』

「…あれ見てたんだ」

また勘違いによる高評価化が加速してるよお。

だがなるほど、いつもではないけど外の世界の出来事も覗くことができるのか。何かのときに便利そうだし協力してもらおう。

『ですが、その…一つ問題が』

「え、何？」

『貴方様が例の藍染某にご助力なさって護廷隊と斬り結ばれるのは大変結構ですが、五年で卍解をお望みなのですたら、その…早急に決めなければならぬことがございます』

「…えっ、何、何？」

思い詰めた表情をするものだからあたしはキョドってしまう。ど

うやら斬魄刀なだけあってあまり世界の秩序やら権力争いやらに興味はないようだが、そんな彼女が何を大事と判断しているのか極めて不安だ。

『——技名ですっ！』

「…はい？」

思わず聞き返すと飛梅ちゃんは頭を押さえながら語り始める。

『だからっ、私達の力を示すに相応しい技の名です！　これから貴方が立ち向かうのは護廷の猛者共。彼奴等を下すためにも私達の力に型を、型に名を、名に言霊を与えねば十全の威力を担えません』

「ああ、なるほど」

ようはチャン一の【月牙天衝】みたいなものですね。ふむ、やはり雛森ちゃんとしては花の名前とか入ってるかわいい系だろうか？
あたしは期待を寄せる。

「それで、あなたから教えて貰うには何か試練とか必要なの？」

『……せん』

「？」

なんか俯いてぶるぶる震える飛梅ちゃん。どうした。

『…ありません』

「えっ、試練とか無しで教えてくれるの？」

『…ッだからっ！　ないんですっ、技名がっ！』

「えっ？」

あたしは真顔で疑問の声をあげる。

『あ、貴方様があまりに早く私の仮の名を知ってしまったせいでもまだ技が出来てないんですっ！　だ、大体私の自我が芽生えるのもまだまだ先のはずでしたし、本来斬魄刀はもっとゆっくり主の霊力を浴びて育まれるものなのに、貴方様が毎日毎日あんなにたくさん私の中に注ぎ込むから、私…っ』

両腕で体を抱きながら震える飛梅ちゃん。おい、なんか乱暴された女性みたいな仕草するのやめろ。毎日の刃禅の話ならあれは教科書通りに霊力を馴染ませようとしただけです。

「えっと、じゃあ技名が無いから切羽詰まってるの？」

『…ッ、はい。卍解に至るにも幾つか力の形を表す名があれば大きく具象化に近付くのですが…』

しかしそんなことを言われても一体どうすればいいのだろう。斬魄刀の技というのは何かスピリチュアルな要素から編み出されるものだと思っていたので、あたしがそれにどう協力出来るのかわからない。

「それで、あたしはどうすればいいの？ 霊力ならもう回復してるから欲しければ食べさせて上げるけど」

『知恵をお貸しください』

「えっ?」

予想外なところに要請が来た。あたしの知恵とは如何なことからそんなもの大してありませんけど。

『そんなことはないわっ。貴方様と藍染某との舌戦は恥ずかしながら私には到底理解の及ばないものでしたが、あれが主様の卓越した頭脳の為せる業であることだけはわかっておりますっ』

「えっ、あの——」

『さあ主様！ どうぞこの私に相応しい技名を名付けてくださいませ！』

「ええええええ!?!」

何故か唐突に斬魄刀から自作の技名を考えろと命じられた死神見習い。おいマジでやめろ。前世では何とか中二病を脱却できたあたしがオサレの国BLEACH世界に生まれ変わったんだぞ。色々と再燃しつつある中そんなことを頼まれたらもう引き返せなくなるから!

「な、なんで斬魄刀のあなたが考えるのはダメなの?」

『…先程主様を大虚の群れへ送り出したとき、その、後で少し自分の発言を振り返りまして…』

「自分が恥ずかしいだけじゃん!」

この子、やはりあたしの同類だった。

その後何度も頼まれ、いずれの理由の悉くがあたしに降りかかってくる罰ゲームと化した「斬魄刀必殺技命名計画」が始動した。

『——で、ではこちらの技の名をお願いします』

飛梅ちゃんが燃える飛梅ちゃん（刀）を構え「やああっ！」と可愛い掛け声で振るう。すると大きな火の玉が放たれ、美しかった日本庭園が応仁の乱の後みたいになった。

『私の始解の全ての基本となる技です。炎に因んだ名を頂ければ燃焼力が、炸裂に因んだ名なら爆発力が高まるでしょう』

「そんな調整が出来るの？」

『同じ技に異なる名を与えることで引き出す力の質を変えることは降霊術の基本です』

「へー」

オサレな理由に素直に感心する。ほーん。

「破裂ならやつぱり爆弾や兵器とかが強そうだけど、安直すぎてオサレじゃないし…」

『よくわかりませんが、飛梅の名と繋がりの薄いものは逆に威力が落ちることもあるのでお控えくださいませ』

「注文多いなあ」

何やら色々デリケートな問題らしい。しかしそう言うことなら、そうだな…

「——燃える梅で【梅焰】とかどうか。焼き尽くしたあとの煤煙と読みを被らせることで技の結果を強引に確定させる！ みたいな」

『そ、それは言霊として素晴らしい効果が期待できます！ …で、では私からは火の玉の形状から【火点し】や【燐火】はどう、かしら…』

「わあっ！ 【火点し】はなんか響きがかっこ可愛くて好き！ それとどうせならオサレに漢字を変読みにして【飛燐】にしない？ 意味同じだし飛が入っているとなんか凄く弾け飛びそうな感じがするから。あと飛梅の飛でもあるし」

『ッ飛っ！ ”飛” いいわっ、凄く欲しい！ やったあ、飛と梅の両方入ってるわ！』

「わーい、ごんごんばふばふ」

という感じに原作にもあった基本技の火の玉爆弾みたいなやつは、

かつ可愛い【梅焰・飛燐】ちゃんに決まりました。

その後も深夜テンションの男子的なノリで、あの虚圏でのヨン様面接で使った他二つの大技を【梅焰・翳火】と【煌熬琳原・東詠】に決めたものの、結局我に返ったあと自分で考えた技名を叫ぶ恥ずかしさからあまり始解をすることはなくなつた。

卍解は遠い。

休暇イイイイ！

「また来年！ ルキアさん、吉良くん、阿散井くんっ」

「うむ、私も来年こそは一組に上がってみせるぞ！」

「雛森君も気を付けて！」

「土産の団子頼んだぜ」

この百年で最も濃かった一年が終わった。いままでの積み重ねが報われた瞬間とも言え、ヨン様陣営への参加や霊術院での原作キャラとの交流、飛梅ちゃんの解放など成果は多岐に亘る。成果が出過ぎてしまったものもあるけどまあ誤差だと信じよう。

しかし、成果とはあくまで最終目標へ近づく一歩二歩に過ぎない。慎重に歩かないといけない危険な道筋ではあるが、故に前借りで少しのご褒美を欲してしまうのは人として当然だ。

ひなもりごほうびの時間である。

「——シロちゃんひさしぶりーっ！」

「！：遅エぞ雛も——うおっ!？」

尸魂界にも四季はある。春期休暇で霊術院がお休みになり、あたしは目当ての年下幼馴染みとの一年ぶりの愉悦に勤しんでいた。

優しくて美少女な姉に会えて彼も嬉しいだろう。嬉め。

「ごめんねシロちゃん、お姉ちゃん忙しくて構ってあげられなくて…」

「なっ、誰も構えなんて言っただけよ！　つか誰が姉だ」

「ええーっ、あたしシロちゃんのお姉ちゃんじゃないの？　ここで一緒に住んでたのに…」

「いやお前の実家は市場の仕立屋んトコだろ。いいからはーなーせー！」

「あたっ」

あたしのハグに全力で抵抗するツンデレシヨタ。ああん？ 暴力まで振るってくるのか生意気だゾ。これは少しお仕置が必要みたいですねえ？

「えー、でもおばあちゃん言ってたよ。シロちゃんがよく寝言であたしの名前、寂しそうに呼んでたって」

「はっ——はあああ!?! ぼっ、シなワケあるかよッ！ なんでおれが寝言でテメエの名前なんか呼ばなきゃならねエんだ!」

「なんだあ、違うのか。…あ、あたしはたまにシロちゃんが夢に出てきてくれたから、その、あなたもそうなのかなー…って」

「えっ…？ な、なっ、なっ…!?!」

「あ、おばあちゃんもよく出て来たよ」

「——ツッ!」

悦つ、悦つ、悦つ。なんか顔が赤いけどどうしたのかなシロちゃん？ 「シなこと知るかッ」とか叫びながら洗濯物を投げつけてきたので、地面に落ちる前に瞬歩で取りに行く。

あたしの超人的な動きにはたと興味津々になる男の子。そんな目移り激しいシロちゃんにも思わずちよっかい出してしまいたくなるが、残念ながら彼を死神の道に導くのは乱菊さんの役目だ。

まあ全部こちらでフラグ回収やって彼をあたしに依存させることも素敵なカタストロフになりそうだが、流石にあたしが「雛森イイイイ!」された後に立ち直ってくれないとジェラルド戦のシロちゃん名シーンな大人シロさんイベが起きなくなってしまうようなので、交遊関係は広く持つて欲しい。幼馴染みの未来を考えてあげるお姉ちゃん超優しいよなあ？

あたしは客観的に見れば自分がヤンデレの類いにされる自覚はあるが、あたしが君にとつての一番か二番目くらいに大事な存在である限り、それ以外は肺活量くらいしか求めない穏健派なのだよ。束縛なんてホント最低だよなーシロちゃん。

おっと、再会が嬉しくて本題を忘れていた。

「そう言えばシロちゃん、最近なんか変わったことなかった？」

「あア？ 別になんもねエよ。…テメエが霊術院の寮に行つてから家

が広くなつたくらいで」

「広く？ 別に敷地はいつも通りだけど…どうして？」

「う、うるせエ気のせいだ！」

うむうむ、順調に意識してくれてるようで何よりだ。原作ではただの幼馴染み的な感情だけでわりと素っ気なかったシロちゃんも、あたしの思わせ振りの態度と天然ボケ（養殖）に振り回されて遂に思春期突入か？

いつも側にいた女の子が急にいなくなりその存在の大きさに気付くくなんてのは恋の始まりの定番だからね。それは確かに最近大きく変わったことだよ、うんうん。

…で、これがひっくり返るときがシロちゃんが一番輝く瞬間——
おつといけないヨダレが、ジュルリ。

しかし聞いた感じだと、どうやらまだシロちゃんが冷凍業者を始めのタイミングではないらしい。彼の「氷輪丸」の目覚めがそろそろなのは確かなので、あたしがいないときのためにおばあちゃんにはそれとなく霊力持ちの幼子が起こす不思議現象について幾つか実例と対策を教えておこう。霊術院で習ったことにする。

「——と、まあ昔そんなことがあったただけの話だけど、おばあちゃんもシロちゃんのこと少し気にかけておいて。あの子が無意識に人を傷付けるなんて、あたしいやだもん」

「わかっとするよ桃ちゃん。いいお姉ちゃんになったねえ、ふふっ」

止めろお婆、その親愛はあたしに効く。あなたは即身仏になるまで長生きしろ。

「——おおっ、桃ちゃんじゃないか！」

シロニウムを補充したあたしは続けて市場の仕立て屋夫妻の所へご挨拶に行った。空鶴さんのお屋敷に弟子入りしたりと、この十年は

あまり行く機会がなかったので感動も一入だ。

「桃ちゃん！　しばらく見ないうちに来た美人になっちゃって！」

「ひ、雛森さん！　お…おれ、ずっと雛森さんに会いたくてっ」

「桃ア…私を導いてくれ…」

「桃ちゃんの霊術院合格祝い、まだやってなかったよな？　今日は宴だ！」

『応ツツ！』

「もっ、もう！　恥ずかしいからみんなやめてくださいっ」

最早伝説となつている看板娘の帰還に市場中が沸いている。いやー我ながら人気者だね、雛森ちゃん。

しかしこれで自分の魅力を自覚出来ない原作雛森ちゃんって鈍感どころか頭おかしいレベルでは…あ、原作だと看板娘とかやってなかったのか。勿体ない。

「桃ちゃん、霊術院はどうだい？」

「戦う世界ですのぢよっど怖いこともありますけど、楽しく学べますよ」

「そうか…無茶はしないでくれよ？」

「はい、よく一緒に鍛練してる阿散井くんも吉良くんも優秀な人たちなので、お互い支え合——」

『!?!』

「阿散井…吉良…くん…だと?!」

「——つて、えっ?」

「桃ちゃんに男の影が!」

『ええええっ!?!』

愉快な人たちにもみくちやにされて、へとへとになるまで盛り上がった帰省中のお祭りはとても楽しかった。出来ることならシロちゃんもここの仲間に入りたいが、みんな不気味がつて避けちゃうしあの子も引き込もってばっかだから難しいんだよね…

まあシロちゃんが真人間になるのは死神になつてからだ。今は彼の孤独を癒せる数少ない人物というポジションを最大限活用して影

響力を高めよう。

うふふ、シロちゃんが悪いんだからね…？ あたしはただ、お外にも行かずに一人寂しそうにしてるあなたを癒そうとしてあげてるだけなんだから…（レイプ目

翌日、地元最後の用事を済ませるべくあたしは白道門の□丹坊兄貴の下までやって来た。

「この小包を渡せばええんだべな？」

「うん、空鶴さんに弟子入りのお礼とか、あと色々のご迷惑をお掛けしてしまったので…」

「なに辛気臭エ顔すぞんだ、桃。お前^めえらの仲だべ」

グハハと笑う□丹坊兄貴。渡したい相手は空鶴姉貴だ。彼女の不幸が実はあたしを操るための布石だったとあの鬼畜眼鏡が暴露しやがったので、形だけでもお詫びを入れないと精神衛生上よろしくない。

もつとも姉貴はプライド高いからあたしが全部話しても「おれの不覚の責任をおれから奪うな」とか男前なこと言いそうだし、あくまでこちらのケジメだ。

他にも鬼道書盗み見たり、ヨン様へ原作知識を披露するときの情報源の隠れ蓑に使ってたり、色々やんちゃしてるのもついでに許してちよ。

そうして明るく楽しい表の世界を存分に堪能した三日間が過ぎた後。

あたしは、暗く愉しい——裏の世界に足を踏み入れる…

「——お前が雛森桃一回生か」

流魂街の西の外れに広がる深い森。霊圧を隠し尾行に気を付け、あ

たしは回道授業の薬草探しと周りに言い訳し、一人の男と会うために小さな廃屋へと赴いた。

…ヨン様命令より半年。いい加減あの恥ずかしい飛梅のアレを叫ぶのに慣れなければ前に進めない。

「…初めまして、雛森桃と申します。本日はご協力頂き、真にありがとうございます——東仙隊長」

ユクゾツ、いざ出解修行だ。

東仙イイイイ！

「——御初にお目にかかる。九番隊隊長、東仙要だ」

「初めまして。真央霊術院一回生、雛森桃と申します。藍染隊長古参の重臣と伺っております」

「世辞は結構。こちらだ、ついてこい」

悪の陣営らしい、深夜の無人の廃屋に開いた黒腔ガルフンタ。あたしは事前
に連絡があつた一人の男と合流し共に虚圏ウエコムンドへと移動していた。

盲目の復讐DJ・東仙要。

小説で藍染惣右介と共に印象が真逆に変わった忠臣キャラである。
瀨靈廷離反の動機も共感出来るものだったし、彼とヨン様の主従関係
がかなりマトモだったのも意外だった。あ、四大貴族はくたばって、
どうぞ。

とはいえ、たとえば好印象になろうと目が見えてはしゃいじやって霊
圧感知を怠ったうっかりさんの烙印はそのままだけどね。あれは忠
臣としてどうなんすかね東仙隊長。

「…この辺りでよいか」

と、そうしている間にいつもの何も無い砂漠のど真ん中で東仙が足
を止め振り向いた。

彼があたしをここへ呼んだ理由はヨン様の善意(!?)によるものな
のかもしれないが、生憎こちらにとつてはかなり二の足を踏んでしま
う話である。

「私は藍染様よりお前の卍解会得修行の補佐を命じられている。護廷
隊隊長に比類する霊圧を持ちながら具象化に手間取っていると伺つ
たが、以後進展はあるか？」

「う…え、えと。問題はわかってるんですけど…」

「聞こう」

そう、卍解だ。現役隊長の協力なんて普通の隊士なら喉から手が出るほど欲しがる幸運。ましてこの男の斬魄刀は元は他人の所有物。卍解会得には血の滲む努力があったであろう、大変なエキスパートだ。

だが、そんな専門家にあたしはこれからあの黒棺に続く新品ホヤホヤの黒歴史を披露しないといけないのだ。既に耳が熱い。

「そ、その……技、が問題でして……」

「同調を強める技の解号か、卍解への足掛かりだな。斬魄刀は時に持ち主へ試練を与え、その報酬として瞬間的に力を更に引き出す特別な技を授ける。話に聞くお前の霊圧なら生半可な試練など問題ないはずだが、何が障害になっている？」

「しよ、障害というか……」

どうしよう、どう取り繕えばいいのかわからない。だけどどうもマジレスしてくる人間にこの感情を察して貰うのは不可能だ。

よって彼に正直に胸の内を語るのであれば、その言葉は一つになる。

「………恥ずかしいんです」

「何？」

長い沈黙のあと、遂に白状してしまったあたしの言葉に東仙が疑問を返してきた。あまりに予想外と言った彼の表情に段々理不尽な怒りが湧いてくる。

お、お前なあ！ あたしだってちゃんと飛梅ちゃんからオサレでカツコいい技名貰いたかったんだよ！

なんだよお前の卍解【清虫終式・閻魔蟋蟀】って、どうやったらそんなシンプルでくっそオサレな名前思い付くんだよ！ 【清虫二式・

紅飛蝗】も漢字の音読み訓読みのバランスと語呂めっちゃいいし、大体どんな人生おくってたらエンマコオロギなんてマイナーな虫を刀の名前にしようなんて発想が頭から出てくるんだ。虚化の帰刃も

グリジャル・グリージョ

【狂枷蟋蟀】とかスペイン語で色々オサレな言葉遊びやってるっぽいし。ズルいぞちくしょう！ 師匠はサクラ○戦なんかやってないでさっさと鬼道全番号一覧表と雛森ちゃんの卍解発表しろ！

が、もちろんそんな持たざる者の妬み嫉みをこのオサレ世界の住人が理解出来るはずもなく…

「…女の気質に明るくはないが、衣類が乱れるなどの羞恥的風容へと変化するなら諦めて我慢しろ。それを克服しなければ卍解には至れないのだ、盲目の私で慣らしてゆけ」

「ち、違います！ あの、ホント大丈夫なんで！ ただあたしと戦って追い詰めてくれたら多分羞恥心とか言ってる場合じゃなくなりますので！」

そんな風に顔面真っ赤に否定するあたしの感情の揺れを察して何を勘違いしたのか、凄く微妙な顔をした東仙が憐れむような溜め息と共に引き下がった。おいだからそれ誤解だって言ってるだろ！

「…わかった、詳しく聞くのは無粋か。ならばこのまま参るぞ——剣を抜け、雛森一回生！」

「！」
その言葉と共に、東仙が斬魄刀を構えあたしにももの凄い霊圧を飛ばしてきた。ヨン様一〇以来となる自分以上の圧力に慌ててこちらも隠蔽していた皮膚付近の霊力を活性化させる。衝突する互いの力の奔流が周囲の全てを歪ませ、世界が悲鳴を上げていた。

…東仙、お前こんなヤバい霊圧してて舐めプ剣八に負けたん？ 異常に復帰早かったしシロちゃんvs一〇同じく演技してた説再浮上。

「…鳴け」

清虫

「…弾け」

飛梅

死神同士の阿吽の呼吸。どちらともなく解号を唱えた次の瞬間。

双方の手には己の魂の半身、始解された斬魄刀が握られていた。

「…なるほど、確かに我々護廷隊隊長と同等と形容するに相応しい霊圧だ。院生の小娘と侮っては私が地にひれ伏すことになるだろう——少々手荒く行くぞ…！」

「!!」

東仙が凄い速度の瞬歩で目の前に迫る。あたしは咄嗟に飛梅で応戦しようとし——そして指一本動かさないまま峰打ちで吹き飛ばされた。

「あぐっ!？」

腹部の鈍い痛みと高速回転する視界の中あたしはまるで何が起きたのかわからなかった。そしてべちゃつと砂の中に墜落し、ようやく状況を理解する。

う、嘘だろなに今の!？」

確かに視認は出来た。恐らく、負けてはいるが絶対に勝てないほど霊圧差が離れているワケではないからだろう。

だがまるでこちらの意識の外から来るような歩法で接近され、気付けば手痛い一撃を受けていた。

「…やはりか。高いのは霊圧だけで斬拳走鬼は院生の域を出ない素人。いや、鬼道は七十番台を使える神童だったな、未恐ろしい」

「かひゅっ——げほっ、げほっ…ツ！」

「先に足らぬ技術を叩き込むべきか…? いや、まずは具象化か。斬魄刀も鬼道系なら斬術や瞬歩は後回しでいい」

東仙が何やら遠くでブツブツいつているが、あたしは今ので腹が破裂して口がめっちゃ鉄の味がする。凄く痛い。全くの無警戒だったので霊圧による防御も間に合わず思いっきり入ったせいだ。何とか未熟な回道で治したときにはもう精神力が尽きかけていた。

た、隊長T U E E E E E!!

「どうだ、雛森一回生。今のはかなり深く入ったはずだ。そろそろ羞恥などくだらんことを考える余裕はなからう」

「そ、それはもう…ごほっ、げほっ」

「…まだ軽口は叩けるようだな。ならば私から見せるとしよう」

今ので若干キレた東仙が霊圧を更に高め始めた。ごめんで師匠、軽口でも叩かないとやってらんないですよ。くっ、しかしリヨナ女王としてはこの程度で音を上げるなんて許されない……!

あたしは何とか立ち上がり、さつきから脳内でぎゃーぎゃー喧しい飛梅ちゃんを正面に構える。

それを見た東仙が頷き、一気に高く飛び上がった。

「見ろ、これが私の技だ……!」

——清虫すずむしにしき二式・紅飛蝗べにひこう——

おおっ、これこれ! 初のリアル原作斬魄刀技!

清虫を振るった軌跡に沿って無数のダガーっぽい刃が現れ、一気にあたしの方へ——つてヤバっ!

「あぐっ——アアアアアッツ?!」

「どうした、何故お前の技を使わない。誰のための修行だと思ってる?」

死に物狂いで逃げる逃げる逃げる! だけど刺さる刺さる刺さる

! ちよつとまって痛い痛いめっちゃぶっ刺さってる! 孔! 孔

開く! あたしのお腹せつかく治したのに今度は孔あ!

そして痛みで飛びそうな意識を飛梅ちゃんが掴んで逃がさない。

わかった、わかった、技使うから! 使うからア!

「くっ……! ば……!」

——梅焰ばいえん・飛燐ひともし——

「!!」

瞬間。ゾワツとあたしの霊力が高まり右手の飛梅が尋常じゃない爆炎を纏った。凄い霊圧だったのでびっくりしてゴキブリを払うように刀身を振ったら、そのまま東仙の右手側遠くに火の玉がすっ飛んで行き、ドガアアアアンと大爆発。とんでもない余波で二人仲良く吹き飛ばされた。

綺麗な着地を決めた東仙と異なり、本日二度目のフンコロガシみたいになったあたしは慌てて顔をあげ——まるで隕石跡みたいになった砂漠の一角を見た。

ワツザ!? oh…

「…凄まじい威力だ」

「ま、前より凄くなってる…」

チラチラ脳裏に映る飛梅ちゃんの渾身のドヤ顔を無視し、呆然と目の前の大惨事を見つめるあたし。しかし先に我に返った東仙が、心底感心したような顔と声で純粋な称賛を投げ掛けてきた。

…おい待て。

「流石は藍染様がかつてなく目をかける院生、これで未だ始解とは畏れ入る。なるほど…」【梅焰・飛燐】か…!」

「あ、や、ちよ——」

「どうした。【梅焰・飛燐】はまだ完成していないのだろうか？ ならば撃てるだけ撃ってこい。お前の【梅焰・飛燐】を…!」

「ちよ、あの、連呼しないで——」

「どうした、雛森！ お前の魂の技ではないか！ 誇りを持って解き放て——奥義【梅焰・飛燐】をッ!」

「アバババアアアツツ!!」

正義の死神・東仙要による悪意なきイジメがあたしを襲うツツ!

やめやめろ！ 何なんだよこの組織は、ヨン様といいDJといい！ あたしの羞恥心を煽るためだけの団体か何かか!? お前らの原作セリフだって大概なやつ幾つもあるんだぞ！ 全部暴露してやろうかオオン!?

身悶えしながらも何とか体の傷を拙い回道で手当てし、あたしは東仙と向き直る。彼も憤りに満ちた顔でこちらへ清虫の切っ先を向けていた。

「どうやら先程の梅焰を更に引き出すには、その染み付いた余裕を奪う——絶望を見せねばならんか」

「えっ…」

勝手にあたしの梅焰を一護の月牙みたいに名詞化した東仙が、突如これまでにない規模の爆発的霊圧を放ち始めた。

「加減はしてやる。その大火力で抜け出してしろ」

力の次元が明らかに変わった。あまりの霊圧に震える膝を何とか抑えようとしたその直後、男の纏う武人然とした雰囲気が一変する。あ、ヤバイ。アレが来る…！

「…卍解」

——すずむしついでしき清虫終式・えんまこおろぎ閻魔蟋蟀——

その瞬間、あたしは目の前が真っ暗になった。辺り一面の闇、否耳も鼻も利かない虚無。何より頼りの霊圧感知が全く出来ない。先程の東仙のヤバすぎる霊圧が一瞬で幻のように消え失せている。乾燥した空気とジャリジャリした砂の感触だけがあたしにこの世は現実なのだと心を支えてくれる。

転生人生の初リアル卍解への感動とか、この中で普通に戦ってた剣八SUGEEとか、色々あるけど——正直に言おう。

これ普通に怖いです。

「——ッがはっ…!?!」

突然腹部に何かめり込み、衝撃のあまり吹き飛ばされた。ざらざらとした何かが服を皮膚を凄く速さで削り、しばらくして止まる。恐らくまた砂漠を転がりまくったのだろう。ゲホゲホと咳き込めば口が砂で気持ち悪い。手足を動かしてもさらさらとした感触があるだけだ。

あたしは今立っているのか、座っているのか、寝転がっているのか、埋まっているのか。本当になにもわからない。ヨンは物理的に怖かったけどこっちは未知というか本能的に怖い。

いや、ホント冗談抜きでこれヨンの圧力より怖いんですけど…！

「飛梅…？」

何とか握ったままだった柄へ意識を向けるが、返事がない。まさか霊圧感知が閉ざさされてるから向こうの声も届かなくなっただのか？

不味い、こういうときのために飛梅に周囲を知覚して欲しかったのに…！

「あくっ…!?!」

な、何だ…？ 今度は胸元を起点に体を浮遊感が襲う。これは、服の胸ぐらを掴まれ持ち上げられているのか？

そう頭の冷静な部分が分析する間もなく、再度凄い勢いで体が飛翔した。投げられたのか？ ヤバイ、受身を取らないとまた前後不覚になっってしまう…！ でも地面ってどっちだ？ 東仙はどこだ？ あたしは今、どうなってるんだ？

怖い。

こわい。

コワイ。

…待て、恐怖は自覚してるが焦るな。

痛いのか死ぬのは普通に嫌だが、二度目の命だし恐怖というより夢半ばで倒れるのが残念なだけだ。怖いのは何をされるかわからない未知に対してのみ。

何かこの状況を打破する方法はないか考えろ。東仙要の卍解すずむしつしき えんまごおろぎ【清虫終式・閻魔蟋蟀】の能力は他者の五感のほとんどを封じるドームを作ること、それだけだ。いや十分その怖さはわかったけど、鯽界の不思議パワーたる霊力そのものを封じられるワケじゃない。斬魄刀も対話は出来ないが力が消えたワケじゃない。

東仙の卍解の弱点は圧倒的な力によるゴリ押しだ。

あたしの飛梅の能力は霊炎の爆裂玉を霊力の限りでぶっばなすことだ。

そして互いの霊圧差は離れているが、届かないほどではない。

…あれ、相性わりと有利では？

「——弾け、【飛梅】とびうめ ツッ！」

解号を唱えれば静まっていた梅焰の熱が再び刀身に戻って来た。見えはしない、ただ魂の半身からどくどく凄い力が流れ込んでくるのを感じる。お互い、かつてないほどヤル気満々。もう恥ずかしさはどこかへ行き、今は名前が付いて完成したこの最強大技を使ってみたくて堪らない。

感謝します、東仙隊長。あなたのお陰であたしは黒歴史から自由になれそうです。

「——お願い、飛梅ッ！」

こうこうりんげん あずまうた
——煌熬琳原・東詠——

直後、まるで洪水のような膨大な何かが柄を握る右手から溢れだした。吹き出すとんでもない力を五感を超えた本能で感じ取る。思わずまた振り払ってしまいそうになるのをぐっと堪え、あたしは刀身上と思われる方向へ突き出した。

どんどん、どんどん、どんどん力が柄から流れ出ていく。そして同じくらい速く補充されていく。東仙にはさっきの梅焰がどかどかグミ撃ちされている様が見えているはずだ。火力のゴリ押しであたしを覆っているはずの黒いドームを吹き飛ばせば終わる！

何も見えないし聞こえない！ けどとにかく行けえッ！ 行けえええッッ！！ 頑張れええええッッ！！

「飛梅えええエエッッ！！」

そして、絶叫で喉が枯れ、体の霊力がすっからかんになった後…

「——っ眩し…！」

不意に目が眩み左手を翳すと、光と炎の渦の中にボロボロの死覇装

を纏った東仙が立っていた。

「…まさか本当に卍解が始解に押し切られるとは。流石の慧眼です、藍染様」

よく見ればすでに彼の斬魄刀は腰に納められている。かなりの圧力は与えられたようだが、恐らく分が悪いと卍解を自主的に解除したのだろう。卍解は傷付いたら直らないとかいうクソオブクソ後付け設定があるからね…

「どうやら成功のようだな。後ろをしろ」

呆けていると、東仙が少し嬉しそうな声色でそう呟いた。

はたと我に返ったあたしは素直に従い、彼の示す先へ振り向く。

そこには。

「——主様っ！」

大きな二つの鈴が繋がる羽衣を纏った、可愛い天女さんが満面の笑みで佇んでいた。

「…飛梅？」

「はいっ、主様！」

信じられない。あたしは茫然と目の前の奇跡を彼女に感謝する。

——本当に技を恥ずかしがらなくなるだけで具象化しやがったぞこのチヨロイン…！

「飛梅えーっ！」

「主様あーっ！」

盛大なエンダアアアが脳裏に流れる。

現実世界で再会を果たしたあたしと飛梅ちゃん。二人は幸せなキスマではしなかつたが近いことをして具象化修行を終了した。

「——何を勘違いしている」

「ひよ?」

「まだお前の卍解修行は終了してないぞ」

「ひよひよ?」

「抱き合っていないでさっさとそこの本体を屈服させろ。そこまで親しいのなら時間の問題だろう。藍染様をお待たせするな」
『……』

このあと無茶苦茶卍解した。

愉悦イイイイ！

真央霊術院。

かつて死神統学院と呼ばれた瀨霊廷最大の教育機関。大安の吉日、この夜霊術院では第2071期新入生一年一組の教育課程初となる、第一回現世実習が行われる予定であった。

「——嬉しそうだな、冬獅郎」

「…別に」

校舎屋上に集まった二十名の若者たち。その中で、親しげな青年の言葉へぶつきらぼうに返す一人の少年がいた。

否、少年より童子に近い幼い風容ながら、霊術院の長い歴史の中でも有数の天才として知られる有望な死神見習いである。

集団の最後尾にツンと澄まし顔で佇む彼の名は日番谷冬獅郎。史上最年少入学の誉れを持つ彼はこの日、いつも以上に眉間にシワを寄せた不機嫌そうな面持ちをしていた。

もつともそれが内心の複雑な羞恥と歓喜を隠すための拙い防衛術であることなど、隣の友人には一目瞭然だったが。

そんな彼の迷走の原因はやはり、先程満を持して屋上に現れた三人の引率の上級生の一人だろう。

「…本物だ」

「あれが噂の最上級生…」

「めっちゃかわいい…」

「あんな子が巨大虚の群れを…」

壇上に立った一人の小柄な人物の姿を認めた一回生が大きくざわめく。今の霊術院生で知らぬ者なき伝説と、主役たる超有名入。その雲の上の存在が、万人の胸を高鳴らせる可憐な笑みを惜しみ無く振り撒いていた。

「——まずは簡単な自己紹介を。あた、私は六回生の雛森桃ですっ」

鈴音のような可愛らしい声の名乗りに『おお…』と隠せぬ歓声の上

がる。院生ながら卒業後に護廷隊のみならず、あの超エリート鬼道衆・一之組への兼同入隊が決まっている前例なき世代一の出世株だ。五年前の現世実習で巨大虚の群から同期や引率の六回生をたつた一人で守り抜いた武勇伝は遠く流魂街にまで広まっている。もちろん、その可愛らしい容姿と共に。

「…ふん、投げゴマ千三四四五連敗桃が調子乗りやがって」

「やっぱ大人気だな、冬獅郎の幼馴染みさん」

「ただの腐れ縁だッ」

同期皆の称賛を浴びる知人の少女に恥ずかしいやら、気に食わないやら、誇らしいやら。特に、男の熱っぽい視線に晒されながら無防備に笑う彼女の姿に、不快な苛立ちが胸に沈殿する冬獅郎。

そんな幼馴染みと目が合う度フイと顔を逸らす少年は、到底彼女へただの腐れ縁程度の感情しか抱かぬ者には見えなかった。

「——同じく六回生の阿散井恋次だ。お前ら、演習中無茶すんじゃねエぞ」

「吉良イヅルだ、よろしく。各々は事前に振り分けられた通りに三人一組を作ってくれ」

「と、言うワケであたしたち三人があなた方の演習を監督します！」

壇上で述べられたもう二人の青年の名も若き死神見習いたちの心を震わせる。片や入学以来斬術において六年間トップを独占し続ける赤髪の偉丈夫、片や幾度と学年首席をあつた雛森桃から奪った超優等生な黄髪の美青年。

たった二十人の新入生の監督には過ぎた豪華メンバーに率いられ、第2071期の初回現世演習は開始した。

「——君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！ 焦熱と争乱、海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！——【破道の三十一・

赤火砲」ッ！」

生者の住まう現世の建築群の間を冬獅郎の鬼道が飛翔する。

設置された的を薄い靈子の中で破壊する高難易度の実習も、彼の卓越した才覚の前では大した労ではない。ノルマの数を撃ち抜いた少年は軽く息を整え、隣の建物の屋上へチラと目を向けた。

「——阿散井くん、三組に転落による負傷者！」

「！ 了解、任せろッ」

「おねがいつ」

視線の先には忙しなく同期の監督生に指示を飛ばす少女。真剣な面持ちで、冬獅郎以外の一回生たちの様子を見守る彼女の顔に、常のぼわぼわした呑気さは欠片もない。

監督生なのだから当然である。だがそんな真摯に他人の身に気を配る幼馴染みの姿を初めて見た冬獅郎は、どういうわけか、少しだけムカムカした。

かぶりを振り嫌なものを溜め息で吐き出した少年はノルマ達成の報告をするべく彼女へ近付く。

「…おい、雛森」

「！ あ、シロちゃん終わった？」

意を決し声をかけた途端、少女の引き締まった表情がぼわつと崩れいつもの外見相応の笑顔が現れた。見慣れているはずのそれに何故かドキツと胸が跳ねる。慌てて取り繕うように少年は節度ある態度に切り替えた。

「…ッ、はい。大的五、中的三、小的一。全て破壊済みです、雛森…六回生」

「わ、流石シロちゃ——ッじゃなくて…ひ、日番谷一回生、ご苦労さまですつ。では他の班員の達成まで休んでてください」

「…はい」

ぎこちない。何も考えなくてよかった流魂街時代を思わず惜しんでしまうほど、互いの間に聳える立場の壁が彼女へ気軽に触れることを阻む。

「——シロちゃん」

だが曇る冬獅郎が屋上の休憩所で休もうと踵を返した時、家族同然に育った幼馴染みの優しい声が耳に届いた。

「ちよつとしか見れなかつたけど、あの小的を一発で当てるシロちゃん——かつこよかつたよ」

「…ッ！」

嬉しそうにはにかむ幼馴染み。そんな彼女にカツと頬に熱が上るのを自覚した冬獅郎は「調子に乗んなバカ」と突っぱね逃げるように休憩所へ急いだ。

ズルい、なんだあれは。少年の胸で歓喜と屈辱がとぐるを巻く。

雛森桃という女はアホである。勿論監督生に選ばれるだけの成績は維持しているのだろうが、天然でどこか間抜けで情けなくて、そのクセよく冬獅郎を弟分扱いしようと思ひする単純な子供。おまけに年頃の女としての自覚に乏しいのか、異性関係など自分の事に関して驚くほど無警戒で、そして何より無鉄砲。祖母もよく心配し注意するほどだ。

その最たる出来事が、霊術院で語り継がれる彼女の英雄譚である。入学して初めて話を聞いた冬獅郎は何かの間違いだろうと笑い飛ばしていたが、当人へ話題を振ったときの異常なキョドりっぷりにまさかと問い詰めると呆気なく白状。あんな命に関わる大事件を黙っていたことに当然腹が立ったが、それよりもまず本気で隠し通せる氣でいた彼女のアホさに呆れの方が先行し、思わず怒りが消え失せてしまったほど。

それからと言うもの冬獅郎の中で雛森桃という少女は、危なっかしくて目が離せない庇護するべき存在となっていた。

だというのに。

「くそっ、雛森のクセにいつも俺のこと未熟者扱いしやがって…」

いつもそうだった。こういった大事な時、彼女はいつも自分を子供扱いし、そして——毎度どこに隠しているのか——それに足る頼もしきを見せるのだ。彼女が霊術院に通い始めたのも、霊力持ちとして地元の人を守りたいと思ったから。冬獅郎が死神になろうと決意し

たのも、祖母を凍てつく霊圧で傷付けてしまったときにあのバカが松本乱菊という女死神を家に呼んで知恵を乞うたから。

雛森桃という女は誰よりも自分に近い所にいるはずなのに、最も大事な時だけ遙か先を進み勝手に全てを解決してくるムカつくヤツだった。

「——キヤアアアアッ!!」

突然、悩める冬獅郎の耳を女の悲鳴が貫いた。

演習も終盤の今に何事かと顔を上げた少年は、そこに見たモノに視線を絡め取られた。

——宙に浮く巨大な孔。

そこからドロリと溢れる濃密な霊子が冬獅郎の背筋を冷す。そして垣間見える深く、果ての見えない闇から、一体の化け物が現れた。

生まれて初めて見る、感じる、自分達死神の宿敵にして恐怖の象徴。

「あ……あ……」

あまりの存在感に冬獅郎は思わず後ずさる。

心のどこかでおとぎ話だと思っていた。化け物など挿絵の中にかかない空想の存在。あるいはいたとしても、他人を傷付けてしまうほど強い霊力を持って生まれた自分なら、天才と称賛される自分なら簡単に退治出来ると。

しかし。

『——オオオオオオオオ……』

冬獅郎は目の前に聳え立つ巨大な怪物の姿を見たとき思わず「無理だ」と呟いてしまった。

なんだこれは。こんなものがこの世にいていいのか。

天をつんざく藍色の塊。凶悪な白い仮面。まるで外套を纏ったかのような風体の異形が空虚な赤い目で眼下の若者たちを見下ろしていた。

「なあ、あれ…って」

「うそ…だろ…」

「や…あ…」

「まさか…巨大虚——」

力ある冬獅郎ですらそうなのだ。他の未熟な一回生など腰が抜けて崩れ落ちる者もいる。

これが虚。これが一人前の死神が戦わなくてはならない敵。半人前の自分達では天地が逆巻こうと勝てない相手。

【縛道の二十一・赤煙遁】

だが己の命を諦めてしまっそうになった直後、立ち尽くす冬獅郎の前に赤い煙幕が立ち上った。

その大規模な現象にはたと我に返った少年は、眼前に翻る一つの女子院生装を見る。

真央霊術院第2066期六年一組

——首席・雛森桃。

当代最高と称えられる最強の死神見習いが、小さくも大きな背中で冬獅郎ら二十名の前に仁王の如く立っていた。

「——監督生命令です！一回生は直ちに背後の穿界門へ避難してください！あたしが必ず全員無事に帰します！」

——総員行動開始ッ！
『…ッッ！』

その大声と霊圧に吹き飛ばされるように、呆ける一回生たちが弾けるが如く走り出す。その頭内には何も無い。まるで何かに操られているかのような自分達の行動が一拍遅れで意識と合致したあと、皆は一様に、先程の喝で恐怖をかき消されていた。

立ち上がった。ただの院生が、護廷の死神すら塵のように命を落とす巨大虚と戦うために。

その姿を見た彼ら彼女らの胸に沸き上がる感情は一つ。純粹で美しく、そして最も人間の心を震わせるその感情の名は、憧憬。

——なんて、なんてかつこいいんだろう……!

そしてそんな彼女に動かされたのは一回生たちだけではない。

「ちくしょう! どうだ吉良アツ!」

「ああ、怖いさ! 手足が震えて堪らないツ!」

「へっ、そうだよなア! だけだよ——」

「ツ、ああ——」

煙幕を切り裂いて現れた巨大虚へ目掛け、二人の男子院生が飛びかかった。

『——あの時と同じと思うなよ化け物オオオツツ!!』

斬り掛かったのは阿散井、吉良の両六回生。その斬撃は鋭く力強く、雛森六回生を狙う巨大虚の両腕をなんと、双方一刀の下に斬り落とした。

耳をつんぎくような巨大虚の悲鳴が響き渡る。そして彼らの稼いだ時間を、この少女が無駄にするはずがなかった。

「——君臨者よ! 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ——」

——蒼火の壁に双蓮を刻む! 大火の淵を遠天にて待つ!」

その瞬間、逃げていた院生たちは思わず振り向き、放たれようとしている鬼道へ全ての神経が吸い寄せられた。

一同の知る炎熱系中級破道【赤火砲】や【蒼火墜】とは異なる、聞き慣れない詠唱後半。記憶違いでなくば、それは彼女、雛森桃が真央霊術院で刻んだ伝説の一つ——

【破道の七十三・双蓮蒼火墜】

爆発的な霊圧の高まりと共に、少女の両掌から巨大な眩い蒼炎が放たれた。寸分の狂いなく敵の胸へ飛翔した雛森六回生の誇る霊術院史上最高号の上級鬼道が、凄まじい爆音と共に巨大虚を呑み尽くした。

席官でさえ苦戦すると伝わる虚の上位種相手に大奮闘する六回生たち。その姿に、新米の死神見習いたちは感動に目頭を熱くする。まさか、本当にあの伝説のように。ただの院生が、巨大虚に勝ってしまうのか…と。

だが。

「ガッ!？」

「なにっ!？」

突然、燃える霊炎の中から二本の触手が現れ、近くに着地していた阿散井と吉良の胴を絡め捕った。あまりに咄嗟の出来事に誰もが固まってしまったその直後。

炎を貫き、鋸のように鋭利な鱗で覆われた三本目の触手が現れる。そして目にも留まらぬ速さで襲いかかったのは、思わず足を止めてしまった一回生たちの一人。最も霊圧が高く、小さいその人物の名は――

「――シロちやああああん!!」

…ポタリ。

「え…?」

何か、温かいものが頬に落ちる。反射的に拭ったその液体の色は、赤。どこから来たのだろうか。そんな暢気なことを考えながら顔を上げた少年、日番谷冬獅郎は、そこで――

「ぐっ…ううッ! に、にげ…て…!」

「…ひな…もり…?」

右肩に片刃の触手が斬り下ろされた、大切な幼馴染みの女の姿があった。

「だい…じょうぶ…! あたしが、守る…から――ッああっ!？」

「ひっ、雛森ッ!？」

止まっていた触手の刃が、更なる血を求め少女の肩を斬り進む。構えた浅打で必死に防ごうとする彼女の抵抗も空しく、ブチブチと不快な音と共に幼馴染みの体が二つに裂けていく。阿呆のように座り込む冬獅郎の目の前で。

——なんだ、これは。

「ッあぐ…ッ! 逃げてエッ! シロちや…アんッ!」

「や、やめろ…止めてくれッ!」

地響きを立てながら、鬼道で体表が焼け焦げた巨大虚がその巨体を近付けてくる。

——なんでこんなことになってやがる。

「お願いっ、だか…らアッ!!」

「…ッ!」

雛森の悲鳴が頭にこだまする。そして冬獅郎はようやく遅れて自分の状況を理解した。

同じだった。

昔、近所の悪ガキに苛められたときに庇ってくれたときと同じ、俺のために体を張って傷付いたあいつに、また守られてる。いつもへらへらドジばかりしてるクセに、こんなときにだけ自分では追い付けない遙か先へ行ってしまう。

悔しい。なんでお前はいつもそうなんだ。俺は、俺はただ、たくさんのことを見せて、教えてくれた、お前のことを——

そこでふと、冬獅郎は場違いに思った。

悔しい、なのだろうか。この感情の根底にある思いは。己の無力が屈辱で恥ずかしくて情けなくて、だけどそれよりももっと、もっと強い思いが今、心の奥底から溢れている。

——そう、嫌なのだ。自分のプライドがどうこうより、こいつがこうして傷付き、苦しみ、必死に痛みに堪えている顔を見るのが。

誰よりも近く、大切な女が傷付くのが。

なら、俺は今何をしなければいけないんだ？

——んなの決まってるんだろ。

「……カッコ付けてんじやねエぞテムエ……!」

立ち上がる。体を熱い何かが迸る。御しきれないほどの高揚感に恐怖も理性も吞まれながら、冬獅郎は迫る虚へと飛び掛かる。まるで自分以外の全てが止まったかのような世界の中で。

「——オオオオオオツツ!!」

「!!?」

その時、冬獅郎は毎晩夢に見る果てしない雪原の中に一体の龍を幻視し——

「うおおおおアアアアツツ!!」

——気づけば今まで感じたことのない靈圧を帯びた己の浅打を、思いつきり巨大虚の仮面に突き立てていた。

『ギイイイイイ——アアツツ!!』

化け物の仮面が割れる。

血飛沫を撒き散らし、耳が潰れるほどの絶叫を上げながら悶え苦しむ巨大虚。咄嗟に身構える冬獅郎は、そこで相手の背後の空に開いた漆黒の孔を見る。

気付けば脅威は闇の奥へと消え去り、残された一同の間には無音の静寂が広がっていた。

「——雛森」

「……あ」

その沈黙は、一つの幼げな声を響き渡らせるに相応しい舞台装置。佇む銀髪の少年は荒い息を整える間も惜しみ、背後で尻餅をつく幼馴染みの間抜け面へ、残る気力の全てで宣言していた。

「——お前を守るのは、この俺だ！」

隊士イイイ！篇 新隊イイイン！

「愉悦」

それは不運に直面した者が魅せる苦悩の輝き。悩める葦である人間が耐え難き精神的痛痒に足搔き、嘆き、泣き叫ぶ悲劇の美しさ。

「——よし」

そんな倒錯的な美に魅入られてしまった哀れなあたしこと雛森桃は、自室の姿見の前に立っていた。いつもの院生装ではなく、あの有名な黒い袴——死覇装しはくしょうに袖を通して。

…よし。副官章が足りないけど、これで原作雛森ちゃんが大体完成した。

真央霊術院に無事六年間フルで在籍したあたしは、侘助と僅差の首席で六回生の教育課程を修了。幾つか偉業を残しつつも数値的に見れば常識的な範囲に収まる優等生として普通に卒業した。この完璧な実力詐称で、あたしの華麗な「雛森がこんな強かったなんて…」なオサレ離反ムーヴへの布石が一つ撒かれたことになる。

そして、ヨン様に与えられた信奉者集めと卍解会得の二つの任務も、まあ紆余曲折の末なんか普通に完遂したと判断されたい。ご褒美に鬼道衆エリート部隊に席を用意して貰えた。これで念願の黒棺及び黒歴史払拭への一步を踏み出せたと言ってもいいだろう。てか六年も経ったし時効にしてよ…

そんなあたしが護廷隊の隊士としてヨン様に半ば強引に配属され

たのは、もちろんこの隊。

「——ひ、雛森桃と申しますっ！ 藍染隊長に憧れて五番隊に入隊しました！ 特命を頂き鬼道衆との兼属となりますが、精一杯頑張りますのでどうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いしますっ」

快活な拍手に迎えられ、心にもないことを口に挨拶を終えたあたりは、晴れて邪悪なペ・ヨンジ○ン率いる五番隊へ入隊した。

同期にはまた恋次と侘介の副官トリオ。恋次は幼馴染みのルキアをかつ拐っていった”すまぬ”の人・朽木白哉を超えろという目標が出来たが、どうやら侘介は昔ヨン様に洗脳された「恐怖を知らない者を支える」とかいう美談にまだ囚われてしまっているらしい。二人はそれぞれの目的のため、ヨン様の計らいでしばらくここで過ごしたあとに戦闘力の十一番隊と治療の四番隊へそれぞれ技を磨きに異動する予定とのこと。職歴だけ見たら原作通りだ。

まあ恋次は後にルキアに崩玉が仕込まれたあと朽木家が牛耳る六番隊へ無自覚スパイとして送られたり、侘介は一〇の補佐として三番隊へ飛ばされたりするのだろう。まだ影も形もない話だけど。

「ようこそ、雛森君。我々五番隊は君を歓迎するよ」
「あつ、ありがとうございますっ！」

ニコニコ微笑む人格者（笑）と、ペコペコ憧れのハンサム恩人（笑）隊長へお辞儀をする無垢（笑）な乙女。それを微笑まじげに見守る隊士たち。

五番隊は福利厚生の一環に毎日社長と副社長候補による完成度の高い演劇を観賞出来るホワイト企業です。

さて、新人として体育会系な部活に武士道的なオサレさを加えたそれなりにハードな雑務と扱きを終えたあたりはその日の深夜、密かに【天挺空羅】による呼び出しを受け、ヨン様謹製ダミー義骸と霊圧遮断外套を使いながらコソコソと隊舎内にある秘密の東屋へ向かった。

外道の外道による外道のための密会である。

「——よく来たね、桃」

背筋が冷えるような第一声。相変わらず、言葉遣いは変わらないのに全く雰囲気の違いオーラを放つ本性ヨン様が、二人の男を侍らせそこに居た。

「…お待たせしました、藍染隊長、東仙隊長。市丸隊長もお久しぶりです」

「久しぶりやねー、桃ちゃん。隊士就任おめでとうさん」

「お目出度う、雛森隊士。規律を守り藍染様のためによく働くがいい」
忍び込んだ東屋にはなんとあの魑魅魍魎三人衆が勢揃いしていた。初めての状況だが何とかビビらず礼を返す。

おい今すぐ誰かこの建物爆破しろ。

「…珍しいですね、お三方がお揃いな」

「ああ、要が虚の研究で大きな成果を上げてくれてね。君の歓迎も兼ねて発表の場を設けたんだ」

化物共が集ってサバトでも始めるのかと身構えていたらわりと社会的な理由だった。わざわざ皆さんありがとうございます。

しかしヨン様陣営に加わって六年だが、卍解修行したり霊術院で適当に過ごしたりくらいしかしていないあたしに取っては初めての組織的集会である。行くところまで行ってしまった感が凄いが、同時にちよつと嬉しく感じてしまうのだから雛森ちゃんも悪女になっちゃったものだ。

そして肝心のDJの研究成果発表だが、原作を知る身には少々意外な内容だった。

「——虚の死神化に成功しました」

シン、と場が静まり返る。事前に知ってたであろうヨン様、初耳で少し驚いている一〇、そして普通に驚いてるあたし。

…え、この時期が初成功だったの？ 死神の虚化に比べて遅くない？ 崩玉ルキアが来るまであと四十四年しかないけど原作大丈夫？

思わず焦ってしまったのを見抜かれたのか、ヨン様がいつもの冷笑

を少し深めてあたしの無言の疑問に答えてくれた。

「死神の虚化はここ尸魂界で幾らでも実験体や研究資料を調達出来、進展は早かったがその逆は先達の研究も少なく手探りでね。だが、これでしょうやく…」

——我々の兵隊を用意出来る。

ゾクツとするほど不気味な笑みについて背筋が伸びるあたし。そうか、遂に本格的に陣営構築が始まるのか。あの破面たちの面々を想起し思わずニヤけてしまいそう。

「ああ、なるほど。大虚集めやりはるんですか」

「その通りだ、ギン」

二人の話を聞くにどうやらこれから十刃たちを揃え始める予定らしい。ということは前身組織エスパーダ刃の全盛期ザエルアポロとか大帝時代バラガンとかダイバースーツハリベルとか見れるのか、原作展開も問題無さそうだし鱒ファンワイ歓喜。

「そこでだが、桃」

「はい」

「この仕事は君に任せたい」

「はい？」

唐突に虚ウエコムンダ圏でドラ○エやれとか言われあたしは困惑する。いや別に戦闘経験積めるしいんだけど、こういうのは親玉のヨン様が霊圧で「仲間になれ（ドンツ！）」とかやった方が後々拗れないのでは？「君の始解と卍解は純粋な暴力を体现する。獸的本能に生きる虚に取っては最もわかりやすい上下関係だ」

「…ウチの飛梅は可愛くていい子です」

「この六年間で卍解へと至り並の護廷隊隊長の霊圧を大きく上回った今、虚圏に君の敵はない。好きにやりたまえ」

平然とあたしの相棒をdisりつつ大虚集めはお前のほうが適任だとか、貶してるのか褒めてるのかよくわからないことを言ってくるヨン様。

何て言うか、指示の適当さからどうでもよさそうな感情をひしひしと感じる。これあれですね、最初から使い捨ての駒アランカルとしか破面たちのこと見てませんね。あたしの「雛森イイイイ！」ポジの理想像ハリベルさんは隊長格三人同時にほぼ無傷で相手しながらあなたの斬撃に二回も耐えて反撃までする中上位隊長クラスになるんですけど…

「ふむ、折角だ。こうして初めて我ら四人が揃ったことを記念して――先達の皆で新たな同胞の働きを視察するとしよう」

「えっ?」

あの褐色おっぱいについて思考を飛ばしていたら、突然横からとんでもない無茶振りが飛んできた。

咄嗟に振り向くも前後から一〇とDJの賛同する相槌が聞こえ退路が塞がれる。おいお前ら横暴だぞ、明らかかな新人いじめじゃないか。そういうのは黒棺ネタで間に合ってますって!」

「任務の初視察やし、あの大虚のお偉いさんがええんとちやいます?」

「ああ、アイツか。確かに能力と霊圧差で相性もいい。如何でしょう、藍染様」

「そうだね、彼なら桃が失敗することもないだろう」

当事者抜きでどんどん決まっていくあたしの殺伐たる”はじめてのおつかい”。おい待て一〇さつきなんか凄いな単語が聞こえたぞ。アイツか? あのチートをあたしが屈服させろってか? いくら破面化前の弱い最上級大虚時代ウェアストローデとはいえ能力の本質は同じなんですけど!?

反対しようにも大人陣は既にその気満々。古参の東仙なんかヨンの様の愉悦を目敏く見抜きダツシュで子飼いの虚ガルガンタに黒腔を開けるよう指示しに出て行きやがった。コイツらまさか最初からあたしで遊ぶために集まったんじゃないだろうな…

仕方がない。新人弄りは組織の通過儀礼だ。ならこちらは別の利益を確保するでしょう。

思えばこの三人以外の強者との初めての、それも明確な敵との対決だ。ヨン様たちには決して使えない、獅ファン転生者最大の強みである――【オサレポイントバトル】の知識をフル活用して戦ってみよう。

ふふふ、ただの新人と舐めないでくださいね。あたしはあなたの知らないこの世界の真理について実験をさせてもらいます。そう意を決したあたしの前に、いつもの黒い異界の門が現れた。

「では行こうか、要、ギン、桃。神を名乗る虚の玉座……」

——ラスノーチエス虚夜宮へ。

大帝イイイイ！

怠惰とは、神すら墮落させる魔性の猛毒である。

朽ちた鐘の音が響く虚圏の玉座、ラスノーチエス虚夜宮。その頂に腰掛け遅効の猛毒を甘受していた虚の王は、その日奇妙な客人の謁見を受けた。

「——お初にお目にかかる。僕は藍染惣右介という。君が虚圏のバラガン王か？」

人間か、それとも死神か。いずれも時の彼方に忘却した脆弱な蟻共が四匹、不遜な態度で王の前に立っている。

虚圏の王にして神——大帝バラガン・ルイゼンバーンは眼前の身の程知らずに興味を覚えた。この退屈の地獄からの解放を彼らに期待しながら。

『…ようこそ我が城、ラスノーチエス虚夜宮へ』

王の歓迎を蟻の一匹が鼻で笑う。虫ケラらしい、礼節に欠けた客だった。

「面白い、屋根も壁もないこの場所が城か」

『屋根など要らぬ。この虚圏の全てが我が天蓋よ』

かつて覇権を争い、今では己己己巴いこみきどもえなどという斬魄刀へと落ちぶれた好敵手が虚圏を去り、あのティア・ハリベルも姿を晦ませた。かくしてこの太古の王たる我にこの世の全ては跪いたのだ。

「そんなことより話をしよう」

『むっ…』

興に乗るバラガンへ、ふと蟻の一匹が不敬にも許可無く発言する。群の中で唯一名乗った藍染なる虫ケラだ。

「退屈をしていたと聞いて、君のために余興を用意した——僕と賭事

をしないか？」

澄ました微笑を張り付けた藍染とやらがそう尋ねる。その不遜の極みたる驕り高ぶる目が気に入らない。が、確かに興味を引かれる話だった。

『ほう？』

「来たまえ、桃」

蟻が徐に別の蟻を王の御前へと導く。現れたのは四匹の中で最も矮小な虫。

「はい」

進み出たその蟻は、女だった。

否、女と呼べるほどの背丈も肢体も持たぬ子供。虚の雌は総じて脆弱で、唯一ハリベルが武力に優れていたものの、その性根は腑抜けそのもの。弱さの権化たる存在が王を静かに見上げていた。

『…何だ、その小娘は』

「彼女は同胞の雛森桃という。若いがとても優秀な子でね、彼女に相応しい部下を探していたんだ」

——桃が君に勝ったら、我が軍門に下ってもらおう。

沈黙が流れる。

バラガンは脳裏で幾度と藍染の話を反芻し、それでも尚己の耳を：否、目の前の虫ケラ共の正気を疑った。

「バラガン・ルイゼンバーン。私、雛森桃が、あなたに決闘を申し込めます」

困惑を助長するように、雌蟻が一礼する。堂に入ったその様があまりに噴飯もので、大帝は幾百もの年月以来となる心の底からの笑い声を上げた。

『グクッ——グハハハハ！ 決闘？ 決闘だど？ この儂とこの小娘が決闘だど？ 勝ったらお前の部下になれだど？ 成る程如何して大した余興、まっこと大義也！ ガハハハハハ！』

振れる腹を両手で抱え「滑稽、滑稽」と思わず何度も口ずさむ。跳

ねる体が装飾具をガチャガチャと鳴らすも構わず、バラガンは久々の喜劇を大いに堪能した。

しかし。

『——自惚れるなよ、蟻が』

傲れる者には裁きを下さねばなるまい。

神の怒りに世界が震え、大地が軋む。下僕たちが主の御心に従い戦意を高め、見下ろす王はその重い腰を上げた。

『不敬である、殺せ』

振腕の合図と共に臣下団が眼前の雌蟻へ殺到する。四面楚歌の袋叩き。彼らの仕事に微塵の疑いも無く、バラガンは自慢の大斧を片手に残りの三匹へと目を向けた。

だが突如、眼下で暴れる霊圧が消失する。

「——武器を手にされましたし、始めてもいいですか？」

バラガンはその声に瞠目する。見下ろした先には、一滴の血も流さずに倒れ伏す自らの臣下団。如何なる術によるものか、あれほど高ぶっていた彼らの霊圧が瀕死のように弱まり皆一様意識を飛ばしていた。

そして、死んだ筈の虫ケラは、全くの無傷。

「神聖な決闘の場に当事者以外の血が流れてはいけませんから」

霊圧の突風に広間の外まで吹き飛ばされる臣下団。その様はまるで紙切れや綿毛のように儂く不様だった。

命を奪うこと無く、敗者の恥を背負わせ生きること強いる蟻。戦士の誇りを知らぬ雌。虚の王は、上目で微笑む小娘に虫酸が走るほどの嫌悪を抱く。

『……不愉快。我が老いに朽ちて、己の愚かさを悔いるが良い……ッ！』

バラガンはどす黒い後光の如き霊圧を迸らせ、雌蟻の前に舞い降りる。奥の藍染によく似たその傲慢な目が気に食わぬ。苛立ちに身を

任せ、怒れる王は大斧を振り下ろした。かくしてかつて殺した幾億もの有象無象に等しく、この虫ケラも老いて朽ち消える。そうなるはずであった。

「…時間の超促進、頼もしい能力ですね」

雌蟻が立っている。朽ちるところか傷一つなく、床を風化させる己の大斧の半歩外に。

見切ったというのか、この大帝の一撃を。防いだと言うのか、この神の力を。

「ではこちらの番です」

『！』

動揺を自覚する間もなく、バラガンは自身が幾重の霊圧の壁…否、半球体の中に閉じ込められていることに気付く。その眼前には小娘の掌の射線に空いた孔。

「小手先ですが、まずはアイサツ…」

——【破道の七十三・双蓮蒼火墜】

雌蟻の術、死神の鬼道らしき蒼炎が孔を通り霊力壁の中で炸裂する。久しく覚えのない火力に晒され王の混乱は益々加速する。

何だこれは。一体何が起こっている。

燃え盛る蒼い炎が晴れたあと。煤焦げた円状の床の中央に佇むバラガンは、ようやく、自らが決闘を申し込まれた死神の女と対峙している現実を直視した。

「…やっぱりアニ——情報とは違いますね。斧だけでなく身体にもその力を纏えるんですか」

古の時を生きる虚の本能は技の域に至る。無意識のうちに行使していた【老い】の能力が女の鬼道から我が身を守ったのだろうか。

されど、それは己の霊圧ではこの死神の力を撥ね退けられなかったという証に他ならない。

『……ッッ！』

屈辱。

バラガンは骸の顎を憤怒に打ち鳴らす。女はこの大帝を畏れていない。いや、恐れていないのだ。

それは、老いに脅える塵芥に決して許されない傲慢。神に背く不屈きそのものだ。断じて看過して良いものではない。

『蟻が……その不敬、万死に価するツツ!』

大気に闇が滲む。水盆に垂らした墨のように揺らめき辺りを飲み込む死の息吹きが玉座の間を塵へと変えていく。

『お前、雛森桃と言ったか。成る程退屈の彩りには善き相手じゃ。お前の古いへの恐怖を以て……その贖罪としてやろうツツ!』

——死^{レスピラ}の息吹。

漆黒の風が吹き荒れ、触れるもの凡てに終焉を与える。これぞ大帝バラガン・ルイゼンバーンを神足らしめる太古の力。生と死が別たれてより最初に生まれた”永遠”の破戒者の象徴だ。

「——【縛道の八十一・断空】」

だが大帝が神なら、仇なす雌蟻もまた死神という神の端くれ。【老い】から逃れようとする不屈き者が、自慢の鬼道で以て王に背く。

闇の津波と、無色の高壁。互いの力がぶつかり拮抗する。しかし僅かな時を置き、均衡が崩れ出した。

「……」

『鬼道に、老いが無いとでも思ったか?』

ボロボロと朽ちていく霊力の壁を満足げに見つめ、バラガンは盾を無くした蟻の終わりを待つ。

だが。

「盛者必衰。なるほど確かにこの世に永遠などありません。ですが……」

——終わりが来れば、また始めればいい。

『なん…だと…?!』

バラガンは目の前の光景を信じられない思いで凝視する。朽ち行く霊力壁の侵食が止まり、まるで時間の逆行の如く復活し始めたのだ。

「鬼道に、再生が無いとでも思いましたか？」

『…ツツ！』

ニツコリ、と蟻が笑う。人好きのする可憐な笑顔ながら、籠る感情は真逆の嘲り。

「あなたの力はその性質が特別なだけです。ものの時間を早めるなら、その源となる霊力と同量以上の力で圧倒すればいい。つまり…」

そして呆けるバラガンの周囲に再度、自身を閉じ込める小さな半球状の霊力壁が現れる。そこに突き立てられたのは、背筋がゾツとするほど巨大な灼熱の霊圧を纏った、美しい四支の斬魄刀だった。

「あたしとあなた、どちらが霊体として格上か勝負です」

『なっ！』

直後、凄まじい爆発がバラガンの全身を襲った。幾重にも破ぜる紅色の焰が一瞬で視界を焼き付くし、聴覚を錯乱させ、佇む王から冠を奪う。自身がどうなっているのかもわからない破壊の炎の中、神はふと、覚えのない奇妙な感覚を覚える。

——痛い。

咄嗟にその感覚に襲われた頭部を手で触れようとするも、止まない爆裂が四肢の自由を奪い離さない。そしてその感覚は頭部から手、腕、足、胴と身体の全身へと広がっていく。

——痛い。

——痛い？

——痛みだと!?

『何じゃ…これはアアツ!!』

最早記憶の最果てへと消えていた本能が甦り、主に生命の責務を想起させる。それは自身が司る力と相反するもの。原始的で悲劇的で、己が滑稽と嘲笑ってきた蟻共と寸分違わぬ生への執着。

『有り得ん！ 有り得んツ、有り得んツツ！ 儂は王ツ！ 儂は神ツツ！ 儂は有象無象の蟻共の恐怖の権化であるぞオオツ！』

「そうですか、でも…」

烈火の如く感情を噴出させるバラガンの脳に、女の言葉が刃のように深々と突き刺さった。

「——」 恐怖^{あなた}も傷は負うんですね？」

驚愕と共にバラガンは自らの体へ目を向ける。焼け焦げ灰となった布状の外皮。覗く骨の腕に走る幾つもの亀裂、欠乏、溶解跡。

傷だ。損傷だ。神たる我が身に起きてはならない滅びの予兆だ。

「——あたしの斬魄刀、飛梅はとても素直で忠実な子です。能力は与えた霊圧を増幅させ、爆炎へと変える。ただそれだけです」

戦慄くバラガンの聴覚に、女の澄んだ声が届く。爆炎の能力、ただ純粹な火力を叩き付けるだけの幼稚で野蛮な力。それなのに。

「ですが…単純な力というのは、言い換えればこの世で最もわかりやすい——」 死の恐怖” ということ

『…ツ!!』

王は息を呑む。澄ました顔で機械的に言葉を綴る女死神。その内容が、あまりの衝撃であったが故に。

「…そろそろ降参してくれませんか？ これから部下になる人を負傷させて戦力価値を下げたくありませんので」

『な…』

「あなたもわかってるはずですよ。あなたは、霊圧はもちろん…」

——司つてきた” 死の恐怖” でさえ、あたしに劣ったんですから。

女の凍える微笑が、茫然とする神の身を震わせる。

認めない、認められない。この大帝が、あろうことか己自身の司る概念に対し、目の前の蟻に——死の恐れを抱くなど。

『……赦さん』

ボソリ、と。風に掻き消えるほどの小さな呟き。しかし体に感情が追いつくと、その呟きは憤怒の火山となって骸の喉から解き放たれ

た。

『赦さん！ 赦さん！ 赦さんぞオオオオオ!!』
「……」

天地に響き渡る王の咆哮。我を忘れるほどの激情に突き動かされ、己の制御の手を離れるほどに膨れ上がった「老い」の力は、神の怒りに相応しい逃れられぬ死の暴風として具現化した。

『貴様如き蟻がアツ！ 取るに足らぬ虫ケラがアアツ！ 朽ちて滅びこの大帝を虚仮にした大罪を絶望と共に悔いるが良いイイツツ！』
噴出する崩壊の津波が一直線に女死神へと殺到する。何も遺さず、何も赦さず、遮るこの世の凡てを朽ち崩しながら。
しかし。

「——弾け、【飛梅】」

静かな解号を最後に、闇が覆い尽くしたはずの世界が一瞬で紅に塗り潰された。理性が働く直前、咄嗟に腕で頭部を守った行為もまるで意味を成さず、凄まじい爆風を受けたバラガンは無様にも背後の玉座へと吹き飛ばされる。

「…強者って大変ですね、一瞬でも優位を失えば途端に小物になる」
『バカ…な…』

「その末路は決まって無様なものです。狼狽え、怯え、それを隠すために怒り狂う。まるで未知に恐怖し喚き散らす赤子のように」

楚々と、雛森が座壇の下へと歩き出す。その命を奪わんと襲わせた死の息吹は、かつて自身が成してきたものと同じ塵へと消え、近付く決闘相手を煩わせる力すらない。たったの一撃で全てが逆転した戦況に、バラガンはまるで自分の何もかもが崩れていく錯覚に陥った。
そしてその錯覚は、現実となる。

「…ではあなたの降参を終幕に、決闘を終わりましたよか」

雛森が斬魄刀に触れ、力の名を紡ぐ。その瞬間、バラガンは三千年

より来たりて初めて感じる規模の霊圧に囲まれた。

「――【梅焰・飛燐】」

そして、おぞましいまでの暴力が体を襲う。

『ツ――ガアアアアアアツツ!!』

常軌を逸した大火力。手足が散々に千切れ飛びそうになるほどの圧倒的な爆発が、バラガンの不滅の肉体を焼き尽くしていく。

『グウウアアツ小娘エエツツ!』

耐え難い激痛。生命力が抉り落とされていく感覚。されど掠れる意識のなかで大帝が叫んだのは、己を玉座から引きずり下ろした死神への怨嗟の咆哮だった。

『このままでは終わらんぞオ…ツ！ いつの日か必ず…！ お前のその傲れる目を切り抜き…肢体ごと塵にしてくれるツ!!』

――雛森桃オオオオツ!!』

魔界の最奥に、太古の死神あり。

司るは「古い」。死へ至る過程、人はそれを「古い」と呼ぶ。

定命の者は皆老いを畏れ、抗い、されど為す術なく平伏す。残酷な定めの前に如何なる力も無へと落ちぶれる。

されどあまりに強大なそれは、司る神さえも逃れることは出来ないのだ。

「――ようこそ、藍染隊長の下へ。あなたを歓迎します、バラガン・ルイゼンバーン」

自らが司る死の恐怖に屈した一個の命。古のときより君臨してきた虚圏の大帝はこの日、藍染惣右介の陣営へと下った。

解説イイイイ！

「――よし、今日はここまで！ 全員解散！」
『ハッ！』

酉ノ刻の暮れ六ツ。夕暮れ時の隊舎練習場の修復という雑用を終えたあたしたち新入隊士三名は、班長の命令でドサツと地面に座り込んだ。

「き、キツイ…」

「あはは…阿散井くんも吉良くんも顔真つ青だね…」

「ひ、雛森こそ…」

青息吐息な二人の新人死神の姿はこの時期、どの隊舎でも見られる風物詩。そんな彼らに交ざって疲れたフリをしている霊圧オバケなあたしに、班長が優しく声をかけてきた。

「――ふつつ、泥んこ。お風呂入りに行きましようか」

「か、蟹沢班長」

そう。あの茶髪さくらんぼサイドテールの正統派美人、蟹沢ほたる元六回生だ。

原作では例の魂葬演習で見事なりヨナシーンを披露したのだが、あたしの個人的矜持のためにその活躍(?)の場を剥奪された残念な人物である。ここ五番隊にいるのはどうやらあの事件で落ち込んでいたときヨン様の甘言に引っかかり、以後優しい藍染隊長のファンになってしまったらしい。雛森桃としては思うところがありすぎる…

それにしてもこの蟹さん、あたしやルキア程ではないが華奢で中々リヨナ映えしそうなスタイルをしている。これは一気に巻き返して来そうなポテンシャル、油断大敵…(女王目線)

「あの、雛森さん…」

「あ、はいっ。何でしょう」

男性陣と別れ隊舎の浴場で二人汗を流していたら、ふと彼女に殊勝

な顔で話しかけられた。

「その、今まで中々機会が無くてちやんと言えなかったけど——あのときは助けてくれてありがとう」

「えっ……？」

神妙に礼を言われ困惑する。前にも事件直後に六回生トリオで感謝された記憶があるけど、確かに対面というのは初めてだ。あたしはいつもの原作雛森ムーヴで応える。

「——そ、そんな……！ あ、あのときはあたしも何が何だかわからなくて、えっと……そ、そんなに言われちゃったら何だか恐縮で……」

「……ふふっ、噂通り謙虚なのね。でも救われた身からしたらやっぱり受け取って貰いたいわ。檜佐木君も青鹿君も貴方にお礼を言いたがってたし、今度また改めて三人でお礼に伺います」

「あうう……」

どこかすつきりしたような顔で「困ったことがあったら何でも言つてね」と残し、蟹さんは浴室を去って行った。ん？ 今何でも（ry

しかし別に謙虚ではないが恐縮してるのは本当だ。あれはヨン様面接で全力を出すのに邪魔だったから穿界門へポイしただけで、死なれると困る恋次佐助69以外はただのついでだったんだよなあ。

まあ恩に着てくれているのならそれを利用するだけなのでありがたい。たく信奉者の一人として歓迎しよう。何でもしてくれるんですよね？（聞き違い

「……ふっ」

一人になつたので疲労困憊な新人の演技を止めたあたしは、湯船に浸かりながら昨夜の出来事の余韻に浸っていた。

【速報】雛森桃、オサレ【朗報】

「——ふふっ、破アランカル面化前とはいえ作中屈指のチート能力持ち相手に初めてオサレムーヴ出来ちゃったっ」

大虚メノスバラガンを屈服させ、残りの雑務を東仙子飼いの虚たちに任せ

て虚^{ウエコムンド}圈を後にしたあたしは、その後無事五番隊の秘密地下室へ凱旋した。

このバラガン戦の勝利であたしは一つ確信したことがある。

それは、BLEACH世界の真理とは能力より霊圧、そして霊圧よりOSR値だと言うことだ。

確かに正解に至ったお陰で爆発的に増えたあたしの霊圧は大虚バラガンより勝っており、加え霊力の扱いもプロの上位隊長たちによる扱きといちめでかなり上達していた。あたしが霊圧及び技量的にバラガンを上回っていたからこそその勝利、というの間違いではない。

だがコアなBLEACH読者なら、固定化された設定上の能力勝負や霊圧比較ではなく、常に流動的な勝負展開の中バラガンがあたしのカウンター挑発で狼狽えたシーンの一点のみで「あつ、勝ったな」と察せたと思う。

そう、あの戦いにおいてあたしが完全勝利を成し遂げられた理由は、バラガンより霊圧が高かったことが全てじゃない。このBLEACH世界の真理である【オサレポイントバトル】を十全に把握していたからだ。

【オサレポイントバトル】

正式名称：A&COPB (Active&Count Osare Point Battle)。

それはギャップ効果とフラグ効果、そして強者／弱者ルールを総合的に数値化したターン制の高度な勝敗計算式である。

有り体に言えば「戦闘全体を通して、よりかつこよくお洒落な展開に持ち込んだほうが勝つ」というものだ。

この”かつこよくお洒落な展開”とは、専門的に記述すると——外見・発言・表情・行動・状況などの各要素で別途に加算した毎ターンの【OSR値】の最終フェイズまでの合計【総合OSR値】が高い状況のことを指す。

そしてBLEACH世界の戦闘の勝敗は彼我の霊圧差と、この【総合OSR値】の比較で決まる。チート特殊能力などの能力優劣はあく

までOSR値の一部（能力解放：○○）として換算されるため、その後のオサレ行動や展開で幾らでも覆すことが可能となる。

バラガン戦におけるあたしの場合は——初回と言うこともあり——能力解放や解説を終盤まで控えたり、積極的に挑発を繰り返したり、相手の能力を正面から撃退すると言ったオサレ行動や発言などの基本を押さえた感じだ。

切り札の【過去回想】や【仲間への謝罪】【初披露・卍解】などの人生一度きりのボーナスを除けば、実にシンプルなオサレムーヴといっているだろう。

これに加え、あたしは自分のポイントを稼ぐだけではなく、相手のOSR値を直接削る基礎戦術もしっかりと行っていた。そう、言わずと知れた【カウンターOSR】である。

聞き馴染みのないライト層の読者諸君にはこの代名詞的セリフのほうが親しみがあるだろう。

——【特別台詞「なん…だと…」】

それはOPBにおいて最も多用される必殺技【カウンターOSR】を喰らった者が確実に取ってしまうリアクション台詞である。

【カウンターOSR】とは、各ターンのOSR値の比較で相手を上回ったときに行使出来る特殊オサレ行動であり、「次ターンにおける敵の行動制限」と「自身の一時OSR値分のダメージを敵OSR値に与える」の二つの効果がある。

この特殊攻撃を受けた敵は多くの場合に大幅OSR値ダウンとなり、尚且つ次のターンに高OSR値行動が取れない極めて不利な状況に追い込まれる。

例えば有名なエドラド戦で斑目一角が行った卍解は【初披露・卍解】【不利からの解放Lv.5】【異例の席官卍解】【流儀による秘匿】【オサレ名称Lv.2】【オサレ意匠Lv.3】【スロースターター】という七つのOSRボーナスが付与され、それまでエドラドにボコられ一桁台の底辺を彷徨っていた一角のOSR値が一瞬で四桁近くにまで

膨れ上がった。この数値は絶対的な霊圧差をも無視し十刃すら倒せてしまうほど。弱者の究極のギャップ奥義と言えよう。

こういった状況でよく聞くあの名台詞「なん：だと…」は、土壇場で高ポイントの【カウンターOSR】を許し一気に大量のOSR値を削られてしまったサインリアクションである。

卵か雛かの違いだが、この「なん：だと…」はついうっかり言ってしまう失言でもあり、同時に大OSRダメージを喰らったことをわかりやすく相手にアピールする、いわばOPBにおける対戦マナーでもあるのだ。

あたしも敵の【カウンターOSR】を喰らってしまったときは「なん：ですって…」とか「そんな…」とか「うそ…でしょ…」とか言わないといけないだろう。死ぬのは嫌だがやはり鯨界の名物なので、一度はマジシーンで言ってみよう。

【カウンターOSR】はもちろん百発百中ではなく、各自の持つ基本ステ【カウンターOSR耐性】によって抵抗を試みることが出来る。そしてバラガンがああも簡単に「なん：だと…」を口にしてしまったのは、彼の耐性値が低かったのが原因だ。

この耐性値は情報収集能力の高い浦原喜助、そして自らの不利を楽しめるヨン様などのキャラが高く、逆にバラガンのような傲慢チート能力頼りきり系キャラは最低値に近い。

彼は今までのチート能力【能力解放：老い／+500】の規格外な基礎OSR値に頼りきった無双状態が長かったため、ちよつと予想外の結果になるとすぐ「なん：だと…」してしまう。

あたしはこれを逆手に取り、向こうの自慢の攻撃を何度も打ち砕き【カウンターOSR】を多用することで相手のOSR値を削り、自身は卍解などの奥の手を隠して【カウンターOSR耐性】を常に高く維持しつつ、順調に自分のOSR値を積み重ねていったのだ。

相手の手の内がほぼ完全にわかっている原作知識持ち転生者は、この【カウンターOSR耐性】が全作中キャラの中でもずば抜けて高い。十分な霊圧さえ持っていれば、バラガンなどのチート能力持ちはあくまで基本の能力解放OSRボーナスが多いだけだと割り切れる。こ

こちらに圧倒的に有利なこのシステムは、あたしの最大の強味と言えよう。

（――あとは引き出しの多さか。ネタじゃなくてホントに黒棺が欲しくなってきた…）

確信を持てたので、これで多少相手の能力や霊圧が優れていても怯えることはない。他のメンバーも必ず十刃に入れてみせる。原作名シーンは可能な限り実現させるのが獅ファンの嗜みだ。

：そんな感じに勧誘したバラガンがなんかあたしの部下になるとかいう意味不明なことをヨン様が言ってたけど、あれはなんだったんですかね？ バラガンの配下には何故か主より強い全盛期ザエルアポロがおり、この二人は後の十刃^{エスパー}だ。そして十刃は藍染惣右介直属の組織。あたしはただのスカウトだよ？ 勧誘は任せる！

そう意気込むあたしだが、こう言うときいっつもフラグになるので万全を期すためにオサレバトルのイメトレや日頃の鍛錬と鬼道の種類を増やすとしよう。

（まずは八十番台の上級鬼道をもっと習わないとね）

明日は鬼道衆への入団だ。鬼道はただ使うだけなら霊圧があまり関係ない世界なので、演技の必要のないオールフリーで修行が出来る。虚圏では霊圧も晒した鍛錬をしているがそれはそれ。鬼道の天才、雛森ソウルが火を噴くぜ！

「鬼道衆かあ、どんなトコなんだろ」

楽しみが続く日常とは、よきものだ。あたしはお風呂でぶくぶくしながら胸を高鳴らせ、その日の夜に最高にオサレな完全詠唱の黒棺を使って+300くらいのOSR値を獲得するオサレマスターな自分の姿を夢で見た。

そして朝に夢だと気付いてちよつと泣いた。

任務イイイイ！

鬼道衆。

瀨靈廷隠密機動と双璧を成す特殊組織であり、その秘匿性もまた似通っている謎多き集団。名の通り鬼道に優れた死神が所属し、鬼道衆総帥を頂点に最高戦力たる大鬼道長が率いる戦闘部隊【一之組】、穿界門や双匣など瀨靈廷各種霊具の使用・封印を担当する内務部隊【二之組】の委細二つの部隊に分かれている。

あたしがヨン様に席を用意して貰ったのは強力な鬼道使いが集う【一之組】。隠密機動以上に秘密裏に護廷の敵と戦う集団鬼道戦のスペシャリストたちだ。

「――雛森桃、貴様には【緋燕】の名を与える。以後その装束を纏う間、真名の使用は控えよ」

「…畏まりました」

当代副鬼道長よりオサレなコードネームを頂いたあたしは内心大はしゃぎ。フツ、これから皆も私のことは緋燕と呼んでもらおう。

原作やアニメでたまに見かけるあのクソ長い白の覆面みたいな装束に袖を通し、早速教官に紹介され流魂街の端の練習場にて実力試験だ。

「――【縛道の二十一・赤煙遁】【破道の十一・綴雷電】」

虚の的を十体ほど煙幕で覆い、煙幕自体に電撃を伝わせる雷雲攻撃。いつぞやの大虚軍の殲滅戦で保険として準備しながら結局使わなかったコンボで敵集団の一斉ダウンを狙うと、教官の感心する声が聞こえた。

「――【破道の十二・伏火】【縛道の二十六・曲光】」

調子に乗るあたしは原作雛森ちゃんが使ってたコンボで試験を幕引きとする。ただし、使うのは当然飛梅ではなく霊術院でのあたしの代名詞的破道。おそらく教官もこれを見たがってるはずだ。

「――【破道の七十三・双蓮蒼火墜】」

「ほう…」

【曲光】で隠した【伏火】を伝い蒼炎が十体的へ同時に命中。霊圧を隠しているので威力はお察しだが院卒一年目のペーパーに求められているのは将来性だ。この六年でマスターした三重詠唱と詠唱破棄の上級破道はかなり教官の興味を引けただろう。

「技術、工夫共に申し分ない。かつて【蒼火墜】で巨大虚を倒したと言うのも頷ける」

「あ、ありがとうございます…！」

「三重詠唱が可能な者なら八十番台の鬼道にも手が届くだろう。大書庫の閲覧を許可する。詠唱文の言霊構成を暗記したら修行に移るぞ」「はいっ！」

既に組内では先ほどの【双蓮蒼火墜】が知れ渡っているらしく、七十番台くらいなら普通に使える超大型新人として一目置かれつつも、みんな特にあたしを化物扱いはしてこない。院生時代で新しく学んだのは東仙師匠の【断空】だけだったので、それさえ隠せば大っぴらに有用鬼道を練習しても大丈夫なのだ。

超エリートとされる戦闘部隊【一之組】への今年度の新規配属はあつただけ。夜間は鬼道衆教官にみっちり扱かれ、日中は五番隊で雑用、休日は東仙と共に虚圏での仕事をする忙しい日々が過ぎ――

「――君臨者よ。血肉の仮面・万象・羽搏はばたき・ヒトの名を冠す者よ。炮濫ほうらん洪燃こうえんゆる揺光。赤赤しゃくしゃく琰閃穿えんせんつ剣先。天座の矛にて贄を別て

――【破道の八十・金剛爆】

巨大な炎球体が掌より放たれ一之組専用の練習場に大爆発を起こす。扱いの難しい八十番台の破道をようやく手に入れたあたしは早速習熟のため反復練習に勤しんでいた。

「――半年でよくぞここまで練り上げたものだな、緋燕」

「！ふ、副鬼道長っ」

久しぶりに練習場に現れた偉いおじさんにあたしは礼をする。

そう。入団してから半年が経ち、やっと新たな上級破道が一つ満足

に使えるようになった。

鬼道の発動には精密な霊力操作で言霊を構築する技術が重要であり、霊力量はあくまで威力をブーストするためのエネルギーだ。だが込める霊力を増やすと当然入れ物の言霊も強固に構築しなくてはならない。なので習熟する際に霊圧はあまり重要ではなく、あたしのアドバンテージはこの原作雛森ちゃんソウルの才能一つである。そして達人と謳われた彼女の潜在力を以てしても、八十番台は一つマスターするのに年単位の時間が必要だった。

東仙に教わったのが【断空】のみなのも六年間で詠唱破棄が出来るほどに習熟させるにはそれ一つに絞るしかなかったから。わりと雑に霊力構築を行っても形になる中級鬼道とは全く違う、それが上級・最上級鬼道なのだ。

：ただ暗記した詠唱文を叫ぶだけで【黒棺】が使えるとか思っちゃったアホなんて知りません。

「やっぱり九十番台って凄いですね…」

「無論、練達した者には班長以上の席が与えられるほどだ」

あたしが学びたい九十番台は多くの禁術が属する位階であり、何より詠唱が長く扱いが極めて難しい。最も低位な【黒棺】でさえ十五秒前後もベラベラ唱える必要がある。複雑な霊力操作で構築した言霊をその全てに宿らせるなんて到底戦場で出来ることじゃない。そりゃ詠唱破棄なんて出来た日には天にも立ちたくなくなるだろう。

あの現世の胡散臭い商店の髭グラサンはエプロンなんか着てないでもうちよつと大物感出してください…

「緋燕よ、貴様に初任務を与える。第三班に加わり南流魂街78地区の虚捕縛作戦に従事せよ」

「…はいっ、かしこまりました！」

未だ遠き黒棺へ想いを馳せていたら、なんと入団以来初仕事を命じられてしまった。特にヨン様が流魂街でお遊びするなどの予定は聞いていないので、普通の虚関係の任務だろう。捕縛なんて研究でもするのかな。

早速拠点で三班のメンバー二人と合流し、正式な指令を受けて出

発。仲間と顔合わせと言っても頭巾に覆面なので声と体形で性別くらいしかわからない。第三班の班長は嗚れ声の女性でした。

「――新人は鴻蓮と共に拘束準備。私は霊絡で標的を誘引。敵は特殊個体、油断禁物……」

『承知』

流魂街は戌吊の森の中、鬼道の専門家とは思えないスピーディーな瞬歩で散開する一同。遅れずあたしも鴻蓮とかいうおっさんと反対側の配置に移動し、じつと様子を窺う。

「……標的確認」

班長の機械的な台詞が聞こえ、直後宙に黒腔が開き一体の不気味な虚が現れた。ヨン様が関わってない虚にしてはソコソコ霊圧がある。確かに接近戦主体の護廷隊でコイツを捕まえるのは大変だろう。

姿を確認したあたしたちは戦闘行動に移る。手始めにと平班員のおっさんが片手から鬼道を放った。

「――【縛道の七十九・九曜縛】」

うおっ！ このおっさん、護廷隊副隊長でさえ出来ない七十番台後半の詠唱破棄をしれつと使いやがったぞ！

仲間の上級技術に周りのレベルの高さを自覚しつつ、あたしは自身が詠唱破棄で使える最高の単独縛系の鬼道で敵を更に拘束する。

ちよつとランクが下がるが鰯ファンにはたまらない、あたしの大好きな術だ。

「――【縛道の六十一・六杖光牢】」

白哉を参考に指先からオサレに六つの黄色い霊力帯を作り、六方より虚の両腕と胴体を固定。くーっ、やっぱ縛道と言えばこれっすよ。

「――【縛道の三十七・吊星】」

この虚は地面と一体化し土石系の能力を使う特殊個体らしいので、念のため【吊星】で宙に固定する。番号は共に低いが二重詠唱でオサレきを出そう。

が、そのとき。

自分の仕事に満足げなあたしの横で、さつきから聞き取れない超高速小声でブツブツ詠唱を唱えていた班長の手により、とんでもない鬼

道が使われた。

「――【縛道の九十九第二番・卍禁】」
「えっ!?!」

思わず任務中に素っ頓狂な声をあげてしまったがこれは流石に許されよう。は、え、聞き違いじゃないよね？ この人今何番の縛道を唱えた？

「――【初曲・止繻】」

顎を開けたままのあたしの目の前で、その常識外れな光景は続いていく。おぞましい量の霊力布が班長の周囲から生成され一瞬で巨大虚へ巻き付いた。叫び声を上げる間もなく敵は喉も口も閉ざされる。あたしの顎も閉じて欲しい。

「――【式曲・百連門】」

続けて同じように何十本ものエグイ大きさの串が射出され、ドガガガと布の上から巨大虚へ突き刺さる。振動で周囲に土埃が舞い上がり、晴れた後にはまるで滅多刺しにされたミイラのようなオブジェが転がっていた。

沈黙。あたしは安全確認もせず吸い寄せられるように完成した鬼道へ近付き術を注視する。

ヤバイ、霊力量自体は大したことないのに構成がアホみたいに高度で複雑だ。こんなの抜け出すのに内包霊力の一体何百倍の霊圧が必要になるのか見当も付かない。霊圧オバケなあたしの始解の全力大技でも破壊出来るかどうか…

これが九十番台、鬼道の頂点。
「…双方^ご苦勞。集え、帰還する」

最早溜息も出ないあたしの横に抑揚のない嗚れ声の女班長が近付き、懐から長い白帯を取り出す。

え、それってまさか…!

「――千反白蛇」

うわっ、鬼道衆もそれ使うのか！ 初めて見るあのヨン様陣営や小

説のボスキャラたちが使ったテレポート鬼道を前に、あたしの心は感動しすぎでもうパンク寸前。

空間転移のクセにどうやら特に禁術扱いされてはいないらしく、立て続けの有名な術に呆けていると、気付けばあたしは班の他の二人と虚と一緒に一之組の拠点へ飛ばされていた。

「――任務ご苦労、班長。緋燕は使えたらう？」

「…是。反応も術の練りも素早く機転も利く。今後也十分我が班の戦力となるかと…」

「それは何より。五番隊長殿のお気に入りだ、目をかけてやれ」

「御意…」

変わらず無感情な声であたしを称賛してくれる班長だが、あの超技を見せられた後だと何だか恥ずかしくなってしまう。霊圧差は万に一つもないくらいあたしの圧勝。だが肝心のオサレさは覆面のマイナスを考慮しても彼女の圧勝。

くつ、やはり最上級鬼道のOSR値は規格外だ。これはあたしのOPBの知識を総動員しても負けるかもしれない…！

去っていく班長の後ろ姿をぐぬぬと眺めていると、微かに目を細めた副鬼道長が励ましてくれた。

「アレは一之組第三班班長、護廷隊で言う三席に相当する人物だ。総帥を除く我ら鬼道衆第三位の使い手。多くを学んで来い」

「…は、はいっ…」

そうだ。あたしは何をしにここに来た？ 落ち込むためじゃない。黒棺を学びにここに来たんだ。

滅私奉公で仲間への情は護廷隊ほど強くはなさそうだが、優秀な部下は大切にしてくれる組織。おまけに名前は「鬼道衆」。かつこよくて素敵じゃないか。

――ここなら、あたしはもっとオサレになれる。

「…あたし頑張るよ、シロちゃん」

最近飛び級卒業が決まったとイキりまくった顔が見え見えの手紙を寄越した可愛い幼馴染。

そんな彼へ向けて決意を新たにし、あたしは己の夢にまた一歩、前に進むのだった。

誕生ビィイイ!

師走も半ばの雪積る冬日和。護廷隊・鬼道衆・ヨン様陣営とトリプルフェイスな雛森ちゃんはこの日、珍しく休日だ。

正式に死神となってそろそろ一年。あたしは入隊後初となるお休みに軽く感動していた。何とிட்டって、この日に休みが取れたのは実に七年ぶりである。七年分のお祝いをしないといけない。

「…といっても予定はみっちりなんだけどね」

早く流魂街のおばあちゃん家へ行きたいのだが、朝は四番隊で回道の公開授業、昼は女性死神協会の新しい平隊士たちとお茶会がある。どちらも外せないのであまり時間がないのが残念だ。

さて、護廷十三隊に所属し一年も経てば、それなりに他の隊の色々な人々と面識を持てる。特に巨大虚撃退の実績を持ち、上級鬼道を操り鬼道衆【一之組】の末席を兼任し、あの高名な五番隊長・藍染惣右介が特に目をかける新入隊士となればかなりの箔付きだ。ヨン様の口添えや持ち前の美少女オーラもあって、わりとどこへ行つても歓迎してくれる。

「——ひ、雛森先ば、さんってホントに凄いですね。覚えも早いし、僕はいつも怒られてばかりで…」

「あはは…あたしなんて全然だよ、山田くん。鬼道衆の皆さんと比べたらあたしなんて…」

「あの伝説の先輩がそんな風におっしゃるほどの世界…想像も付かないです…」

回道の専門家集団、四番隊。順調にオサレスキルを鬼道衆で磨きつつあるあたしは今一度初心へ返り、シロちゃん観察に必須な自己治療能力を磨くためここ四番隊隊舎へと足を運んでいた。

一般公開されているこの回道授業の講師はニヒルな山田清之介副隊長。そしてたまたま隣に座ったのが未だ院生のあの花太郎だった

ので、これは関わらねばと話しかけたら普通に仲良くなれたのだ。正体を明かすとキラキラお目々であたしを見てくる少年、流石作中最チヨロ善人山田七席（予定）。

「山田くんは卒業したらやっぱり四番隊へ行くの？」

「は、はい。兄が貴族医院に転職したがって、抜ける穴を埋めろとうるさくって…」

花太郎は作中有数の回道使いで、最終的には三席にまで上り詰めている。まああれは深刻な人材不足のおかげもあるが、少なくとも未だ院生ながらあたしより実力は上だ。チャン一やルキアと関わる重要人物でもあるので技術交流も兼ねて親睦を深めておきたい。

「ええっ!? ぼ、僕みたいなドジが先輩に教えることなんて…!」

「ず、凶々しいのはわかっているけど、あたしも鬼道とか代わりに教えられるかもだし…! 縛道とかなら四番隊の人にも役に立つと思うから…」

不安そうに「ダメ、かな…?」とおねがいたら真っ赤な顔でガクガク頭を上下に振ってくれた。満面の笑みで礼を言うと言まで赤くなる山田花太郎氏。美少女って凄い。

棚ぼたでいい出会いがあったあたしはルンルン気分で次の目的地へと向かう。行先は朽木家別邸——女性死神協会だ。

「——はあい、雛森。元気そうね」

四番隊を後にしたあたしは途中で知り合った救護班の隊士たちと一緒に女性死神協会へ足を運び、そこで彼女——松本乱菊と鉢合わせした。

「乱菊さん！ お久しぶりですっ」

「あんたの見かけによらず体力あるわね。鬼道衆との掛け持ちなんてあたしだったら忙しすぎて死んじゃうわ…」

「はいっ、大変ですけど何とかやっつけていけてます！」

相変わらず顔を埋めたい谷間を晒しながら呑気そうな顔をしているBLEACH世界のお色気担当。席官なのにこんな平隊士のお茶会にまで軽食を貪りにくる彼女の自由さは方々で色々問題になっているみたいだけど、ちゃんと原作通り副隊長まで出世してくれますよね…？

「あ、そうそう！ 来年飛び級卒業のあんたのチビっ子幼馴染、ウチの隊長代理が壮絶な争奪戦を制して確保したって」

「！ わあっ、やっぱりそうだったんですね！ シロちゃんの手紙に書いてあったので、もしかしたら乱菊さんもご存じかもと気になってたんです」

他愛もない雑談に紛れ重要情報が彼女の口より語られる。既に知ってはいたものの、乱菊さんが未だシロちゃんとあたしの関係に關心を持ってくれているという事実を確認したかったのだ。

この松本乱菊という女性は本来シロちゃんを死神の道へ導く人物だったのだが、この世界ではあたしの介入で少々経緯が変わってしまっている。

というのもあたしがおばあちゃんの身を案じて例の話を教えたせいで、彼女が意地を張らずに手紙でシロちゃんの変化をこちらに伝えてくれたのだ。慌てて教師に事情を話し家まで飛んで行き、その途中の市場の曲がり角でぶつかったのが乱菊さん——のおっぱい。後は流れで彼女を引き摺りシロちゃんと対面させ、一死神の意見として「霊術院へ行け」とのお言葉を頂き、原作通り彼を死神の道へと誘導することが出来たのだ。

まあ実際はもつと涙とか懇願とかドラマチックに演出したけどネ。

「うふふ、来年の卒業が待ち遠しいわねえ。みっちり扱いてやるわ——あの子があんたを守るようにね♡」

「ふえっ!? あ、あああれはそのっ！ と、とにかく違いますっ！ あたしじゃなくてシロちゃんが守られる側なんでしゅっ！」

「さあ、どうかしら？ まあでも雛森も優秀だから天才同士お互い苦労しそー」

ニヤニヤ「ご馳走様です」とからかってくる彼女に、あたしは羞恥でムキになった雛森ムーヴで対応する。

うむうむ、これで乱菊さんの脳中であたしとシロちゃんは双方でマウント取り合ってるお笑いカップルになってることだろう。願わくば十番隊でちよくちよく彼にあたしとの関係を茶化してもつと意識させて欲しいものだ。

しかしこうして女性死神協会には何度か訪れているが、まだ平隊士だからかあまり原作キャラに会えない。超古参隊長の卯ノ花さんはもちろん無理だし、碎蜂も上級席官。読書仲間の七緒ちゃんや虎徹姉妹は恐らく中下級席官で、他はまだ護廷隊に所属してなかったり生まれてもいなかったりと散々だ。

「乱菊さんってルキ——朽木さんってご存知ですか？ 十三番隊の」

「ああ、あの暗い顔してるお嬢様？ 先月一度ココ来たけど…あんた知り合いだったの？」

「あ、はい。同期の人の幼馴染であたしも友達だったんですけど、ちよつと悲しい別れ方しちゃいました…」

ふむ、まあ白哉の厚意で朽木家で主催されてるし一応顔を出してはいるのかルキアちゃん。実は最近東仙が死神と融合する特殊な虚を作りたいとかでヨン様とキヤツキヤ盛り上がったから、そろそろ例のイベントが起きる前に様子を見ておきたかったんだけど…

まあまだメタスタシアも実験段階みたいだし、原作イベはもうちよつと先だ。海燕殿を助けるワケにはいかないが曇るルキアちゃんには友達として優しくしてあげないとね！（暗黒微笑）

そうして和やかなお茶会は過ぎていき、あたしは乱菊さんと別れ——ついにこの休日最大の楽しみを堪能するため瀨霊門へと向かった。さあて、今日はいっぱい遊ぶぞ！

トコトコと足取り軽く流魂街は潤林安を歩くあたし。霊圧感知を
行い位置を探ると：いたいた。

卒業以来だが、どうやら一年でかなり力が上がっているようだ。既
に恋次たちに匹敵する霊圧かもしれない。

「——ただいまーっ！ シロちゃんお誕生日おめでとーっ!!」

「えっ、ひ、雛森っ!？」

元気いっぱいにお家にIN！ そして予期せぬ幼馴染の帰省に驚
くシロちゃんの頭をなでなで。無論すぐに逃げられてしまうのだが。

「お、お前なんでここに：っ！ 五番隊も鬼道衆もどうしたんだよ：
？」

「えっへん。シロちゃんが飛び級決まって卒業まで暇だっって聞いたか
ら頑張っって両方お休みとっつたんだ！ お祝いするの七年ぶりだねっ」

「：っ、ふん」

去年の現世実習以来の全力全開の雛森スマイルをお見舞いすると
「べ、別に祝ってくれなんて：」とかモゴモゴ照れ隠しに悪態吐くシロ
ちゃん。いやあ何度見てもいいですねえ、育成が順調な姿というもの
は。

ふふふ、あのときの「俺が守る」発言も思わず顔面崩壊ニチャア：
しちやいそうになるほどの快感だったなあ。うっかりその場で収穫
しなかった自分を褒めて欲しいくらい。

：でもお、今のチミのそれは頑張っって休みをとっつてくれた幼馴染に
していい態度じゃないよなあ？（豹変

「ふん、いいもんっ。あたしが勝手にお祝いするから。——おぼー
ちゃん、ご馳走作るの手伝うけど何か残ってるー？」

「ふふっ、あるよー。おいで桃ちゃん」

「あ、おい：っ」

あざとい”拗ねてますよ”アピールも幼いシロちゃんの目には本
気に見える。慌てる彼を一人放置し台所までドストス向かえば、ポツ
リと残されるベースデーボーイ。けけけ、しばらくそこで可愛い年上
幼馴染の久々の割烹着姿でも目に焼き付けてるがいい。

突然だが、シロちゃんの好物は原作通り大根おろしをかけた玉子焼きだ。ただし”雛森桃あたしの”が前に付く。別に愛情云々ではなく、これにはちよつとしたワケがある。

シロちゃんはお子様舌で辛い物があまり好きではない。そして大根おろしは——大根を少し茹でる・皮を厚めに切る・大根の葉っぱ付近を使うなど——おろし方を工夫しないと基本辛いのだ。ふと前世のテレビ番組で覚えていたことを試して出してみたらシロちゃん大喜び。以後あたしが台所に立つと目を輝かせてくれる。

「——じゃーん！ お姉ちゃん特製おろしかけ出汁巻き玉子ーっ」
「…ッ！」

勝手知ったる厨房で腕によりをかけて作ったいつもより数段豪華なお料理の数々。毎度のお姉ちゃん発言も気にならないくらい必死にがつついてくれる姿は、なんていうか、うん。料理した者として普通に嬉しいよ。

自然と緩むあたしの表情を見られたのか、シロちゃんがぷいとそっぽを向いてしまう。でもお箸は止まらない。おうふ、これは完全に胃袋握られていますねえ。あたしがいなくなったら彼は一体どうなってしまうんでしょうねえ…?! (ハアハア)

なんか別ベクトルの笑顔が浮かんでしまいそうになったので、おばあちゃんに死神生活の近況報告をして心を落ち着かせる。すると途中でシロちゃんも霊術院の話などで加わったので、あたしはここぞとばかりに一つ——愉悦の種を撒くことにした。

「…その藍染つて、前に雛森を助けてくれた隊長だよな？ お前が所属してる五番隊の…」

「そうっ、藍染隊長！ ハンサムでかつこよくて優しくて！ 鬼道衆のことも死神としての心得も全部全部あの人に教わったのっ！

ああ、藍染隊長…憧れだよねえ…」

つい失笑が零れる歯の浮くようなセリフだが、事前に五回ほど練習したおかげで何とか鼻で嗤わず最後まで言い終えた。

もちろん目的は日番谷冬獅郎と藍染惣右介との間に因縁を作ること。ちらりと様子を窺うと、そこにはやはり気に食わない顔をしてい

るシロちゃんが。

「それでね——って、どうしたの?」

「…別に」

「? あ、そうそう! 鬼道衆にも凄い人がいてねっ、あたしの班長な
んだけど——」

流石に原作雛森ちゃんほどの狂信性を演じるのは早いので、ケロリ
と話題を変えて元の和気藹々とした空気に戻す。

何と言ってもあの謎めいたエリート部隊、鬼道衆・一之組。シロ
ちゃんも一旦ヨン様のことは忘れて興味深々だ。

その後は例の任務での超上級縛道【卍禁】が凄かったなどの話で夜
が更けるまで盛り上がり、久々に揃った潤林安一家は幸せいっぱい
床に就いた。

——と、思っていたのか?

寝静まる民家の中。ぱちくりと目を開けたあたしは、鬼道衆で習っ
た隠密技術で密かに居間を抜け出し、庭の縁側でスタンバる。作り出
す光景は”冬の夜に月見をする美少女”だ。

シロちゃんは夜中に必ず一度起きてトイレへ行く習慣があるので、こう
していると…

「——ひな、もり?」

ほら。特別な日に久々に再会した、気になる幼馴染と二人きりの幻
想的な冬月夜。

最高にエモい状況の完成だ。

「…シロちゃん? 起こしちゃったかな」

「いや…」

さも偶然のようにすつとぼけるあたしの百年の演技が気付かれる
はずもなく、無垢な少年はとてととと近付き隣に座ってくれる。

さて、どう料理してやろうかなあ？

「…寒くねエのか？」

「ちよつとね。でもシロちゃんが隣にいるからあったかいよ」

「——ッ」

まずは軽いジャブに見せかけたデンプシーロール。祖母を凍死させそうになった闇を背負う少年に「あったかいよ」はクリティカルだ。無論一歩間違えると捻くれた彼の地雷となりうるが、今のシロちゃんには霊術院主席飛び級卒業に家族揃っての誕生日を楽しめた、精神的にとても満たされた状態。そして口にした人物はこの雛森桃。あたしの”藍染隊長への憧れ”アピも彼なら逆に奮起してるはずだし、万に一つも機嫌を損ねることはあり得ない。

「……アホ桃のクセに」

「む、なによいきなり」

真つ赤なお顔のとーしろーくん。どうやら素直に受け止められづらいらしい。

うふふ、あたしは君のことなら誰よりも詳しいんだゾ。

「……来年」

ポツリとシロちゃんが呟く。

「来年、俺は死神になる」

「……うん」

あたしは寂しそうな声で不満を主張。いつまでも守ろうとしてくる年上幼馴染と、そんな彼女を守りたい健気な男の子。最高の愉悦のためにこの関係は壊せない。

「ッ、だから俺がお前より強くなったら……っ」

少年の、男の真剣な言葉が二人きりの夜空に刻まれていく。

再宣言か、或いは新宣言か。

そう期待するあたしだったが…

「——ッ、何でもねエ！ 強くなってから言うつ」

「えっ、ちよ…シロちゃんっ!?!」

かなりいいムードだったのにヘタレて逃げ出す未来の十番隊長さん。おいマジかよここまでお膳立てしてやったのに生殺しとか酷すぎい！

「…ま、まあでもそれだけ大事なことだったの…かな？」

去り行く背中を眺めつつ、仕方がないのでそう自分を納得させる。不完全燃焼な終わりだったが、別に無駄になったワケではなさそうだ。あたしが張った愉悦の蜘蛛の巣は全く揺るぎない。

これからお互いどんどん忙しくなり、二人きりになれる時間は殆どなくなっていくだろう。

——だが、それはそれで結構だ。

後に「あのときに言っておけば…」と後悔する彼の顔もまた、あたしを魅了する甘美な蜜。全てが手遅れになったと気付いたとき、シロちゃんが見せてくれる曇り顔はまさに天にも昇る素晴らしい光景になるだろう。

あたしが用意しているのは、日番谷冬獅郎という人物の輝きを、魅力を引き立てる最高の悦ツセンス。

そう、まだ舞台は整っていない。

じっくり、ねっとり、我慢を愉しもうではないか。

うふふ、全てはその時がくるまで…

鮫后イイイイ！

ラズノーチエス
虚夜宮。

かつて虚^{ウエコムン}圈^下の大帝バラガン・ルイゼンバーンが治めた彼の地は今、藍染惣右介の一党の手により巨大な王城へと造り替えられようとしていた。

「——大きいですね…」

「藍染様に相応しい城にせねばなるまい。護廷隊隊長たちとの戦闘に耐えうるものにな」

無数の虚^{ホロウ}の奴隷たちが鞭打たれ、苛酷な土木作業を強制されている時代錯誤な光景が眼下に広がっている。あたしと東仙は現場視察のため、彼らを見下ろす尖塔のバルコニーにいた。

バラガンを仲間にしてから一年。未来の十刃^{エスパーダ}を揃える任務を受けたあたしは、ひとまず彼の従者たちに強い大虚たちの情報収集を命じた。

嫌そうな態度をとった虚をちよつとわからせてあげるなど幾つかトラブルはあったが、元が力に従う獣みたいな連中。わりとすんなりイエスマムになったので「見つけたら教えて」とお願いしたら、次々発見報告が送られてくるようになった。

バラガンの手下はかなりの数で、ヨン様が拠点に占拠したここ虚夜宮の増改築も彼らの手で行われている。あたしの大虚搜索の雑務まで一気に行うことが出来、我らヨン様陣営はこの数の力に満足していた。

まあでも原作通りならこの虚たちも、後に進化させる破面たちも全部捨て駒で、聳える虚夜宮も剣八や卯ノ花さんらヤバイ隊長たちを一時的に幽閉するためだけのものだ。そう考えると何とも空虚で物悲しい光景である。

ソウルソサエティ
尸魂界と違いヨン様は虚圈に大した愛着は無さそうなので、基本

はこれから東仙の監督の下に虚や破面たちの手で組織化されていくのだろう。

余計な仕事が飛んできたら大変なので、あたしは熱心にスカウトを頑張つて今の任務への意欲をアピールします。

「精度の高い情報は何かありますか？　あたし最近こつちの仕事ほとんどしてない気が…」

「先日入った。ついて来い」

尖塔から瞬歩で下へ降り、相変わらず几帳面に片付いている東仙の研究室へ戻るあたしたち。壁一面に広がる巨大な扁桃型の映像画面を起動した彼がその一点を指差した。

「バラガンの報告にあった最上級大虚^{ヴァーストローデ}とその配下を発見した。雌の虚のみの一党、計四体だ。確保に行け」

「雌？」

あたしは思わず振り向く。雌の最上級大虚なんて一人しか原作に登場しない。

「情報では流水系^{スイスイ}の能力持ち。性格は理性的。余計な争いは控え交渉で迎え入れろ」

「あ、はい」

ふむ、てつきりヤミーやアーロニーロあたりかと思つたが、ここでハリベルとは少々意外だ。まあ大事なのは破面化した順番なので、ただここに連れてくるだけなら問題ないかな。

今のところ男と雄しかいない我が陣営に新たな女性キャラの参加。

これは頑張らなくてはならない。

ティア・ハリベル。

原作ヨン様陣営唯一の現役女幹部と言える立場にある人物だ。大きなおっぱいの付いた金髪褐色無口武人イケメン…と羅列すると凄いキャラが濃いのが、性格は東仙の情報通り冷静沈着でTPOを守る数少ない十刃の常識人枠。おまけに序列第三位、強い！

強い…はずだ…

というのもこのハリベルさん、多くの十刃の例に漏れず序列上位のクセに戦績が若干残念。鯺ファンの間ではシロちゃん一人に負けか

けた第3十刃（笑）とか言われている。

ちなみに【オサレポイントバトル（OPB）制度】が初めて提唱されたのもこの頃で、設定上は護廷隊長より強いとされる最上級大虚^{ヴァーストローデ}を破面化させて更に強くなった彼ら十刃^{エスパーダ}上位陣が、普通に進化前の自分たちより弱いハズの護廷隊長たちに惨敗するというあり得ない出来事を論理的に説明する必要に迫られ、かの新制度が発見された経緯がある。

そんなOPB制度の被害者とも言えるハリベルだが、よく見ると実際はシロちゃんの必殺技を無傷で抜け出しており、その後の^{ヴァイスロード}仮面の軍勢たちの加勢で一对三となっても目立った傷を負わなかったりと決して弱くはないのだ。

何より、処分時になんとあのヨン様の攻撃を耐え、しかも彼に鏡花水月を使わせるレベルの反撃までして見せた点は大いに評価すべきである。不利なOPB制度下においても間違はなく並の護廷隊長たちよりは上の実力だ。

ハリベルは第1十刃^{スタク}同様、設定上は極めて強いはずなのに新制度に適応出来ず活躍出来なかった可哀想な人なのだ。

だがしかし、彼女はあのヨン様に斬り捨てて貰える数少ない幸運なキャラでもあるのだ。二撃も貰えて、しかもシロちゃんの目の前で！

おいそこ代われ妬ましい。
ん？ あれ、でも確かア二鯽でハリベルが仲間になった経緯って：

「…あの、東仙隊長。藍染隊長から今回の大虚について何か伺ってませんか？」

「主力大虚の勧誘はお前に一任されているだろう。何故そんなことを聞く？」

「あ、いえ。バラガンさんのときを思い出しまして」
咄嗟に誤魔化したが、これは少々困ったことになった。

ハリベルの過去はアニメで詳しく描写されており、彼女はかつて難癖を付けられたバラガンの手下の一体に殺されかけ、そこをヨン様に救われた恩義で彼に仕えていた。

もっともこのバラガンの手下はヨン様を送り込んだ破面なのでいつものマッチポンプなのだが、問題はあたしがこの手段を取れないということ。

そして更に問題なのは、おそらくヨン様がこの任務を高確率でどこからか監視していることだ。

あの鬼畜眼鏡なら本来の十刃勧誘の仕事から自由になった時間で絶対良からぬ趣味に走る。そして今のヤツの趣味は雛森桃あたしをからかって遊ぶことだ。黒棺ネタとバラガン戦の無茶振りを見ればわかる。

なので余計なネタを提供しないよう、ここはオサレに決めておきたい。

ふむ、やはりバラガン戦の繰り返しはオサレじゃないな。今回は交渉で行くか。

この頃のハリベルは腑抜けてて凄く弱いし、そこを突いて仲間のアパッチたちを守るための力を与える対価に部下になってと頼みましょう。ダメなら仕方ないので霊圧で凄んで虚らしく獣の上下関係を築くか。バラガンの現在の話をすれば首を横には振らないはず。

「では行って来ます、東仙隊長」

「成果を期待する、雛森」

展望が見えたあたしは東仙に挨拶して虚夜宮を後にした。

それにしてもハリベルってあのキャラの濃さに加えて千年血戦篇でリョナ属性まで獲得してるんだよね。なんか所々微妙にあたしとキャラ被ってる気がしてならない…

「——こんにちは、大虚さん。雛森桃と言います」

虚圏の砂漠の一角に広がる丘陵地帯。最上級大虚の勧誘の任務に従事するあたしは情報にあつた地へと赴き、早速将来の第3十刃と対面していた。

装甲付きのダイビングスーツみたいな容姿がすごくえっちな。脱がしておっぱいにダイビングしたい。

「…ティア・ハリベルだ。死神が虚圏に何の用だ」

「まだ新米の平隊士ですけど。あたしの上司があなたの力を欲しておられます。少しお話ししませんか、ハリベルさん？」

「お前が新米…だと…？」

霊圧を隠さず垂れ流しているあたしに、全身で身構えるハリベル。こうして対面したただけでかなり憔悴しているようだ。

…なるほど、これはあのアニ鰯の不完全な破面でもイキれるだろう。同じ最上級大虚でもバラガンとはかなり差がある。やっぱりこの頃のハリベルはぬるま湯に浸かつちやつてるみたいですね…

なお後ろの三人娘らしき鹿と獅子と蛇の大虚たちは霊圧にあてられてガクガクしている。おうおう、原作ではよくもいたぶってくれたなあ？ 三人集まっても勝てない彼女たちはホモビでも見習って、どうぞ。

…さて、あの鬼畜眼鏡の覗き見の件だ。

どうもヨン様の中であたしはなんか凄い興味深い人になっているらしいので、まずはそのイメージを何とか「勘が良い」程度のどこにもいるギャップOSRキャラに路線変更したい。既に戦闘力は東仙一〇とも張り合えるくらいに上がっているのだ。空座町決戦まで捨てられる危険が消えた以上、致命的な失望をされる前にちよつとおバカなところを見せておこう。

まずはぼわぼわ桃ちゃんだ。

「そうですね。新米が実は強い！ ってなんか格好いいでしょ？ 能ある鷹は爪を隠すんです」

「…死神の組織図は知らん。だがお前がただ者ではないことはわかる」

「ホントですか？　ありがとうございます、ハリベルさん。流石あの人が認めた大虚ですねっ」

「…その”あの人”とやらが私の力を望んでいるようだが——悪いが断らせて貰おう」

と、まあ当然このままでは膠もなく断られる。ヨン様もこのままではキレるだろうし、ぽわぽわ桃ちゃんは止めて交渉モードの出番だ。まずは無知を装いつつ少し揺さぶってみよう。

「でもあなたたちも困ってますよね？」

「…何？」

「だってあなたは強いのに、何かから逃げ回ってるようですし」

ビクリと後ろの三人娘が硬化する。ハリベルはこらえたのか動じていないが、これでは答えを口にしたようなものだ。

「…何のことだ」

「少し観察させて貰いましたが、あなたたちは常に遠くの周囲に気を配っていました。追うより追われることを常に意識しているように見えたので」

「——つアア!?　黙って聞いてりやテメエツツ!!」

「ッ、よせアパッチ…!」

血の気の多い鹿さんが彼我の霊圧差も考えず飛びかかってきたので、バラガンの従者たちにやったようにスツと「白伏」で意識を奪う。自然体で視線も寄越さず、片手を持ち上げるだけで沈めればかなりオサレな強者ムーヴだ。

ドヤア…

ドサツとあたしの手前で気絶した仲間に向け、ハリベルが小さく問い掛けてくる。

「…殺さないのか？」

「流血は戦場の印。ここは交渉の場です」

暗に部下は眼中にないと宣言。原作で雛森ちゃんと大泥試合したあの三人娘を塵芥扱い出来る現状に「ここまで来れたか」と軽い高揚

を覚えてしまうのは許してほしい。まあ今の彼女たちはただの中級大虚だけだね。

うむ、もう種明かししてもいいかな。

「あたしの上司は強い虚をお探しです。ハリベルさんを追ってる敵——バラガン・ルイゼンバーンなら既にあたしが力づくで部下にしました」

「なっ…!?!」

「あなたはバラガンさんとは違って会話が成立します。こちらはあなたに種族の壁を超えた想像を絶する力と、バラガン一派からの安全、そして組織における高い地位を提供します。その対価に、あなたはあたしの上司へご自身の武力を提供していただきたいのです」

少し霊圧を上げて話の信憑性を高める。霊力操作の応用でぶつける相手をハリベル一人へ。

「……一つ聞きたい」

「なんででしょう」

「疑っている訳ではない。だが私にはヤツの無敵の力を超克する手段が想像も付かない。お前は一体どうやってあの化物を下した?」

おっと、ここはオサレチャンスですね。あたしは心底大したことなさそうな声色でハリベルに伝える。

「? ああ、簡単ですよ」

無言で始解、無言で大技、そして久しぶりの解放に大歓喜する飛梅ちゃんのテンションにお任せした特大梅焰を何気ない手首のヒョイで後ろに放——って、飛梅ちゃん霊力ごっさり持つてきすぎい!

『!!?!』

さ、流石一年分のストレス。ドツガアアアアン!と凄まじい大爆発があたしの背後で起き、ハリベルら四体の大虚が西部劇の回転草のようにつっ飛んでいく。あたしも必死に木の根的な霊力糸で踏ん張る。ウギギギ…!

爆風が去ったあと、グツグツと溶けて煮える真っ赤な煉獄の砂漠を背に、あたしはなんとか素敵な笑顔を張り付け、優雅に彼女たちの側へと歩み寄る。

そして、眼球が零れそうになるほど瞠目するハリベルの問いに、優しく答えた。

「小手先が通じない暴力で、だよ？」

…ふっ、決まった。

見開いていたハリベルの瞼がゆっくりと閉じていく。恐怖が消え、虚ろな達観が取って代わる。そして、虚無から沸々と湧き上がって来たそのもう一つの感情を見たとき、あたしはこの交渉と言う名のオサレポイントバトルの勝利を確信した。

「…ハリベルさん。仲間を守る力が欲しくありませんか？」

自信満々に追い打ちするあたしをじっと見詰めるハリベル。長い葛藤。続く無言に焦れることなく、あたしはわかりきってる答えを待ち続ける。

そして後ろの三人娘が沈黙に耐えられなくなったとき。

「——わか…りました。雛森様」

その瞳に浮かんだ最後の感情の名は、畏怖。

かくして未来の第3十刃トレス・エスパーダティア・ハリベルは、持たざる圧倒的な暴力への本能に惹かれ、我等が軍門に下った。

ヨン様！ やつと、やつとあのむさ苦しい虚夜宮に新たな彩りが来ましたよ…！

海燕イイイイ!

「――調子はどうかかな?」

虚夜宮に設けられた東仙要の研究施設。無数の培養器が轟めく調整室で研究を手伝っていたあたしの耳に、二つの足音が届いた。

「藍染隊長、市丸隊長。お久しぶりです」

「こちらです、藍染様」

DJと共に振り返り、あたしは現れたヨン様と一〇へ挨拶。この二人と虚圏で出会うのは珍しい。もつとも例の実験体がもうすぐ成長し終わるところなので、耳聡いヨン様がやってくるのも予想の範疇ではあったけれど。

「基礎理論は概ね整^{プラス}の被検体で実証が終わりました。現在は次の段階へ移行するための最終実験を準備中です」

「自立行動の取れない不安定な細菌型よりいつそ霊体として完成している虚をそのまま寄生させたらどうか、って案をやっと実際の改造虚で実験出来そうなんですよ」

「なんや。桃ちゃんが考えたん、ソレ? 相変わらずかわいい顔しておっかないわア」

「う、うるさいですね。別に顔は普通ですし関係ありません…っ」

ニヤニヤ笑う一〇も最近ヨン様に影響されたのかあたしで遊ぶ趣味を覚えてしまった。遺憾の意を示し赤い顔でそっぽを向く。ちなみに例の発案は細菌型の虚の研究が行き詰る東仙にチラツと原作知識さんで助言しただけで、ついでに雛森ちゃんの顔面偏差値はBLEACH世界最高峰である。

「――面白い」

ゾクツとする重厚なイケボが調整室に木霊する。実験体が育まれ

ている培養器を見つめていたヨン様だ。

「魂魄自殺を防ぐには霊子質量の小さな細菌型で浸透融合させるのが最良だと思っていたが、よもや自立する成体虚を直接魂魄と合体させようと考えるとは」

——流石だね、桃。

凄く楽しそうな笑顔であたしへ振り向く鬼畜眼鏡。もうなんか全部バレてそうなんですけど、あたしはただ隊長業と虚研究業で忙殺されるDJに「霊体が義骸に入る感じで〜」と超婉曲的に寄生型虚のことを仄めかしただけです。あたしがここに居るせいで原作重要イベントが潰れる、なんてこともありえるのだ。直接言わずちゃんと取り繕ったし後ろめたいことなど何もない。

なのでしれっとすつとぼける。

「…えっ、あ、あたしですか!?! あたしここで雑用しかしてませんけど…?」

「いや、お前の独り言で光明が見えることも多々ある。ただの雑用としてここの出入りを認めているワケではない。自信を持って、雛森」

しかしまたしても悪意無き東仙要の称賛があたしを逃がさない!

正面には純粹な感心微笑、背後には邪悪な三日月笑顔が二つ。お前らまさかグルじゃないよね?

だがそう容易く認めるほどあたしは往生際が良くない。天然で純粹な雛森ムーヴを喰らえ。

「そ、そうですか…? その、ありがとうございます…」

「フツ、期待しているよ」

縮こまるように肩を竦めるとDJに代わってヨン様に鼻で嗤われた。おいコラ何が可笑しい。恐縮しているのは事実なので、まるで猫を被っている女性を嘲るような失礼な態度は人として取るべきではないと思います。

「では要、引き続き実験準備は君に任せるよ」

「畏まりました」

虚化の研究進捗に満足したのか、あるいは満足したのはいつもの雛森弄りにか。一〇を伴い調整室を後にするヨン様。だが危機は去つ

たと胸を撫で下ろすあたしに、またしてもちよつかいかけて来るのがこの男。

「——そうだ、桃」

「…ッ！」

二度目なのに油断した我が身、不甲斐なし。肩を震わせている一〇を一睨みしてから努めて冷静に返事する。

「…何ですか」

「君にこの計画の名を付けて欲しい」

不気味に微笑み「好きなものを述べたまえ」とヨン様が催促してくる。

ふん、どうせこれもまた何かのトラップなんだろう？ 最近ほぼわ桃ちゃんの演技、というかあたしの出来の悪い脳みそを隠さないようにしているのです、当初の得体の知れない麒麟児的な期待は薄まっていますはずなんです…やはり原作知識が問題なのか。ヨンは味方だし別に死ぬ気で隠したいワケじゃないが、バレるとあたしの付加価値がとんでもないことになる。

…うん、ごめん普通に隠したいです。

しかし、なるほど。原作のホワイトの件を見る限りだと無いとは思いますが、もしかしたらヨン様の頭の中では既にこの改造虚の名は決まっているのかもしれない。ならば本誌の『メタスタシア』は危険だな、正解を引いてしまえばもう言い逃れは不可能だ。

だが脈略の無い名前にするのは嫌なので、ここは知る人ぞ知るこの虚の別名でお茶を濁す。

どのみちこの寄生型虚の研究は一護のホワイトに行き着くヨンの破滅の道だ。あたしが名付け親になることでささやかな皮肉としてしよう。

「わかりました。じゃあ…」

この名ならKBTOT師匠もニツコリだよな？

——『テンタクルス』で。

実験当日。

紆余曲折の末やつとここまで計画を漕ぎ着けたあたしは、隣のDJ東仙共々魂が抜けたような顔をしながら画面を眺めていた。中ではメタスタシア改めテンタクルスくんが女性死神——志波都三席を操り流魂街の森を駆ける映像が映っている。原作展開は順調だ。

もつともあたしもDJもグロッキーの方向性は異なる。前者はただの疲労、後者は虚研究者としての落胆だ。

「——まさかあの程度の見戯しか出来んとは…」

「まアまア、東仙隊長。おもしろい能力のほうは成功したんやから、そない落ち込まんといて」

一〇のフォローにクソでか溜息で返すDJ。

彼の言う成功とはすなわち死神と虚の境界の破壊である。色々改造したが、結局テンタクルスくんに出来たのは寄生と母体操作、おまけで斬魄刀の始解の消滅能力のみ。”霊体と融合する”と言えば聞こえはいいが、まあ普通に大失敗だ。これでは仮面ヴァイザードの軍勢のような虚化すら出来やしない。

もつともあたしとしては失敗作のテンタクんのほうが原作イベント的に成功なので逆に安心している。

問題はテンタくんではなく、肝心な彼を活躍させるための”場”を整える方だった。何せ我らがリーダーのお得意「好きにするといいいのせいでほぼ全てをあたしとDJで計画するハメになり、その都度何故これを行うのかとヤツに説明しなくてはならなかったのだ。

あたしが。

「申し訳御座いません、あんな失敗作を藍染様にお見せすることに…」
「いいんだ、要」

不甲斐なさに謝罪する彼を労うのは、五番隊の仕事をダッシュで片付けてきたウツキウキのヨソ様。忙しそうにしていた新人隊長の一

○まで拉致してまるで遠足前の小学生のように目を輝かせている。ただの眼鏡の反射だけだ。

そんなラスボスさんが見つめる先は画面のテンタクンではない。この原作シーンを再現した——あたしの顔だ。

「…何ですか、さつきから」

「いや？ 楽しみだと思ってね」

…隠していたつもりなのだが、やはりヨン様は強い。あたしの無意識の意気込みを見抜いたのだろう、あれは確実にこの実験で何か大きなことが起きると悟っている。そしてそれに対するこちらの反応を観察したいのだ。

何故他ではない十三番隊の隊士たちで実験するのか、とか。どうして志波家当主の副隊長を被験体を選んだのか、とか。途中「確か彼は君の知人の朽木家養女と親しかったね」とか、平然と正解を言い当ててくるのマジで勘弁してほしい。

何とか平静を装い理屈立てて説明したものの、今思えばあれは内心必死なあたしの澄まし顔を見て愉しんでいたのだろう。ちくしょう、これで「雛森イイイイ！」させて貰えなかったらチャン一にボコられてバラガン化する貴様を盛大に笑ってやる…！

「——始めました」

「！」

DJの一言であたしは怨嗟の海から浮上する。画面を見ればそこには亡き妻の無念を晴らさんと意気込む海燕殿と、そんな彼と戦うテンタクルス。そして少し離れたところにはルキアたちが…

思わず画面を食い入るように見てしまう。これから原作有数の名シーンが始まるのだ。ほぼ全て、あたしによるお膳立てで。

その事実を前に胸に沸き上がるのは大きな高揚と、まるで世界を意のままに操る神の如き全能感。

そして、少しだけの…

「始解の消滅成功。隊長格にも効果が確認出来ただけ幸いか」

「はい…」

DJの言葉にあたしは生返事。斬魄刀を失った海燕殿が詠唱破棄の【てんらん嵐】や【らいこうほう雷吼炮】で応戦するもテンタクルスの狡猾な戦法でジリ貧だ。勝負は既に見えている。全ては原作通り。

二人の戦いは一瞬の隙に帰し、志波海燕の口の中へテンタクルスが進入。しばしの沈黙の後、残虐で下劣な虚が男の意識を乗っ取り周囲の隊士たちを蹂躪。隊長の浮竹十四郎は病の発作で行動不能。万事休す。

そして志波海燕が、絶望に茫然自失と立ち尽くすルキアへ襲い掛かり――

「――後悔しているのかい？」

はた、と隣から聞こえた重厚な男の声で我に返る。

振り向いた先には、どこか試すような無機質な瞳と笑みでこちらを見つめるラスボス、藍染惣右介。初対面時の写し絵のその姿を見つめ返し、あたしはそんなヨン様の言葉の意味を反芻した。

後悔とは、今の一連の出来事のことだろうか。

ならば――笑顔で以て「違う」と言おう。

あたしが感じているのは後悔ではなく、人を殺した罪悪感だ。初めての経験で、しかも特別殺意も持たず、ただそれが”正しい”ことだから行つた。殺人に罪の意識を覚えど、後悔などするワケがない。

原作通りに原作キャラが死に、それをあたしがお膳立てした。それは一鱗ファンとして大変名誉なことではなからうか。原作キャラに「死んで欲しくない」と原作に抗うのも道のひとつだが、あたしがそれをしてもただの偽善で終わるだろう。

今更善人ぶって原作の名シーンを阻止するくらいなら、あたしはもっと自由に周囲を引つ掻き回して愉悦ムーヴをしたい。

改めてヨン様を見る。彼は一体何故こんな質問をしたのか。その試すような視線はどういう心理から来ているのか。

——私は常に私を支配しようとする者を打ち砕く為にのみ動く。

そう公言するほどの超自信家にして向上心の権化。誰よりも聡明で、優秀で、強大な男。千年血戦篇で味方になったときの途轍もない安心感は未だ記憶に新しい。BLEACH世界最高のカリスマは間違いなくこの藍染惣右介だ。異論などあるはずがない。

だが何故だろう、今のヨン様の目を見ていると…

——すごくゾクゾクします。

思わず口角が吊り上がる。

小説で明らかになった東仙との誓いを振り返るに、意外と人並みの情がある藍染惣右介。あたしの原作知識と言う名の”予測外”を知ってニッコニコで仲間に誘った男が、あたしが彼と同じ外道に堕ちたことを後悔しているのではと問いかける。

まさか、そうなのか？ 本当に一護が言っていた通り、彼の中には——孤独しかないのだろうか？

「——そうですね」

「…ほう」

すまぬ、ヨン様。違ってたら謝る。

だがもし本当なら。

あたしを散々からかってくれた、このオサレマスターにそんな可愛い一面があるのなら——

「後悔…してるのかもしれないね」

——こんなシヨンボリヨン様をスルー出来る愉悦部部員なんかい

ませんよねえ!?

今にして思えば、あれはヨン様への意趣返しのもりだったのだから。

原作通りに物事を進めたいのに、その原作キャラが非協力的。作中の重要な人物だからこそ穿った先入観と期待感が先んじ、彼の役目を押し付けられた不満。今まで積み重ねてきたことを「後悔」などという誤解で以て侮辱された不快。そして、いつも彼におもちゃにされている羞恥と屈辱。

あんな軽率な演技でその場の愉悦を求めてしまうくらい、どうやらあたしは人並み以上のプライドがあったらしい。

沈黙。

凄いデジャブが脳裏を過る。徐々に冷静になったあたしは、自分の演技力の未熟さを、文字通り——後悔した。

「桃」

引き攣った笑みで冷や汗をかくひねくれ者の一〇と、言葉の裏が読めず眉を寄せる純粋なDJ。そして相手の顔を見て、またしても己の

失態に真つ青にカタカタ震える涙目なあたし。

それらの視線全てを一身に受けたその男は、映像室の設備がへしやげるほどの霊圧を放出しながら——過去最悪の満面の笑みであたしにこう囁くのであった。

——やはり神きみは面白いね。

目標イイイイ！

早朝、日の出前の五番隊隊舎の自室。

「んむうう……」

白む空が視界の隅に映り、あたしは浅い眠りから目を覚ます。

原作イベント再現、テンタクルス事件を起こしてから三日。あたしはテンタクんの回収や痕跡偽装、隠滅などの後始末のため方々を東仙と共に駆けずり回り、昨夜やっと隊舎の布団に入ることが出来た。

かなり心身共に無理をしたので直ぐ寝れると思ったが、忙しくて考える余裕のなかった悩みに苛まれてあまり寝付けなかった。今もまだモヤモヤは晴れず、憂鬱な気分が続いている。本当にどうしよう……
「——ツちゅん！」

寒い、寝冷えしたか。寝ぼけまなこで辺りを見渡し、ふと壁の一点で視線が止まる。

「Oh……」

思わず硬化するあたし。凄い寝相だ、どんだけ悶々と寝返りうつたんだよ。

そこには肩も足も剥き出しな、はだけた襦袢姿の華奢な美少女が姿見に映っていた。全裸よりえっちな、清楚可憐な雛森ちゃんとは思えない恐ろしく倒錯的な風体にしぼし唾然とするも、はたと目が冴えその場であたふた衣類を整え一息。よし、あたしは何も見なかった。

火照る胸元をばたばた扇子、井戸で汲んだ水で顔を洗う。そろそろ着慣れた死覇装に袖を通し、蟹さんに教わった軽いお化粧を終え、髪をお団子シニヨンに整えたらいつものあたしが完成だ。

総員起こしまで余裕が出来てしまったのでぼんやりと布団の上に座り込む。斬魄刀に呼びかけてみても飛梅ちゃんはまだお寝んね中らしい。最近つれないのは倦怠期の主婦ですか。

全く、こうも手持無沙汰だと色々嫌なことが頭に浮かんで困る。

酷い目覚めだ。

最近、少し思う所がある。切実な問題だ。

「——あたしヨン様に斬って貰えるの？」

布団の上で呆けた声を宙に散らす。

そう、今まで目を背けて来た現実と向き合うときが来てしまったのだ。

改めて整理しよう。あたしの目的はシロちゃんの「雛森イイイイ！」で愉悦に浸ることである。

現在あたしは霊圧や鬼道、斬魄刀を始めとしたオサレ戦闘力を磨き、雛森ムーヴを頑張り、悪の道を絶賛邁進中だ。確かにどれも楽しいが、その全てはあくまで目的のための手段でしかない。

そして無数の曇らせR ロールプレイ Pの中であたしが選んだのは、宿敵・藍染惣右介の一派に加入しシロちゃんの目の前で「無用」と処分されること。これは高い曇り値を期待出来る以上に、この雛森桃および日番谷冬獅郎と言う原作キャラの思いや願い、そして作中の役割をある程度尊重したムーヴでもある。所詮はこじ付け未満な原作厨の自己満足だが、リスペクトを完全に忘れたくはないので必要なことだ。

さて、一見完璧に見えそう（見えるとは言っていない）なこの作戦には一つ大きな穴がある。それは「ヨン様にシロちゃんの前で斬って貰えるかわからない」というものだ。

肝心のシーンが最大の穴とかガバガバすぎてお話にならないが、現在あたしもある程を身を以て痛感している。

（だってそもそもヨン様があたしを斬る理由がないよね…）

思い返せば最初からそうだった。黒棺に失敗し焦って原作知識でOSR値を稼いだはいいが、ヨン様の直感と頭脳を見誤り、たった一度の会話でこの世界におけるあたしの超常性を見抜かれてしまった。雛森桃観察の趣味で遊んでこちらの反応を愉しんでいるのが何より

の証拠。

おそらくあれの真の目的はあたしの原作知識がどの程度の情報を反映しているのか、そしてあたしがどれほど真剣にソレを隠そうとするのかを調べることなのだろう。

言い換えればあたしがどれだけこの世界から外れた超次元的存在か量っている、ということだ。

はたしてあのラスボス藍染惣右介が、霊王の更の上に位置するオサレ師匠や我々読者の存在に気付いたとき、それに最も近い人物を安易に斬り捨てるだろうか。とてもそうは思えない。

：完全に再走案件である。人生のリセットボタンはどこだ。

(いや、まだ手段はある……！)

希望にクワツと目を見開くあたし。

ヨン様に愉悦ムーヴをかますという最大の自殺行為を行ったとき、ふと閃いたことがある。彼との主従関係について思い出したときのことだ。

原作で東仙要が処分されたのはあらかじめ彼自身がそうヨン様に頼んだからだと小説で明らかになった。尸魂界の罪深き成り立ちやそれが親友を死に至らしめたことで彼らを悪と見做した東仙は、情に絆され祖国を許し好きになつてしまう自分を許せなかった。

なので狛村たちと和解してしまいそうになったとき、彼はヨン様に断罪してもらったのだ。ホンマヨン様陣営の奴ら動機が重すぎィ！

：しかし東仙には無礼だが、その手段は大変参考になる。そう。

——別に斬られるだけなら直接頼めばよくね？

なんとというコペルニクスの転回か。今まで必死にどう好感度を下げて処分リストに入ろうか悩んでいたのがバカらしい。あたしの読者目線な価値観を見抜かれた以上、失望されることより有能アピを頑張ってお願いを聞いてもらうほうがいいに決まっている。

そうと決まればあとはどう頼むかだ。

いつそノーガードで本性を全部ゲロって楽になるのはどうか。

あたしの本音は「原作以上に曇るシロちゃん顔が見たい」である。おぞましく歪んでいるのは自覚済みだが、これがあたしの日番谷冬獅郎へのキャラ愛なのだ。彼の曇り顔に一番惹かれてしまったのだから、その顔をもっと見たい、もっとさせたい。そのためならこの身を犠牲にしてもいい。寧ろこの身を犠牲に彼の絶望顔の全てを引き出したい！（ハアハア）

そんな最低な自己犠牲に酔うのもまた、自由な愉悅の在り方のひとつではなからうか。

（ただヨン様の好みは一護やユーハバツハみたいな”行動する強者”か、シロちゃんみたいな”将来性がある者”、ドン観音寺みたいな”弱いけど勇気ある者”だからなあ…）

あたし以上に捻くれていて性格が悪い彼は、色々と相反する美学を一度に抱える矛盾の塊だ。見込みのある奴は育てたいけど同時に虐めて潰したい。他には原作雛森ちゃんみたいに勇気ある者をワザと依存するよう育てて、自立出来なくなった彼女に失望する…とかもあつた。

逆に浦原さんや総隊長みたいな”優秀なのに現状を良しとする日和見体制派”は反吐が出るほど嫌っている。

そして強者に関しては敬意は示すが自分の上に立つのは気に食わない。

藍染惣右介とは、そんな面倒で人間臭い人物なのだ。

話を戻そう。問題の「斬って」の頼み方だ。

あたしみたいな自己犠牲型愉悅部タイプは、原作では該当するキャラがないのでヨン様の好みかどうかはわからない。

ただあたしの場合”神”とかなんとか、そもそも別枠的な扱いをされているので…うん、余計にわからない。

困ったな。これではヨン様の好感度調整が難しい。

（なら戦術的な理由で「斬って」と頼むのはどうかな…？）

少し視点を変えてみよう。

考えたらリヨナ女王としてシロちゃんの目の前でド派手に斬られて「雛森イイイ！」を聞ければいいのだから、別に無理して死ぬ必要は無い。何かの作戦で一時離脱するために敢えて大げさに負傷するという手もある。

例えば空座町決戦でヨン様に斬り捨てられ死んだフリをし、あとでこっそり暗躍して勝利に貢献！という作戦をしたいと提案すればワンチャンないだろうか。

暗躍の内容を「必要なことです」と秘密にすれば、これまでのあたしの原作知識活用法に興味津々なヨン様なら面白がつて自由にさせてくれるかもしれない。原作ヨン様の尸魂界離反時のムーヴとも共通性があるし、思想的にも十分許容範囲なはずだ。あたしもシロちゃんの曇り顔を長く観察出来て大満足。

「…うん、行けるかもしれない」

思わず笑みが浮かぶが、油断や失敗はもうしたくないので引き締める。

そう。ヨン様の好感度を考慮するなら、やはりシロちゃんへの歪んだ愉悦は——主に「自己犠牲に酔う」部分はある程度隠した方がいいだろう。濃すぎる個性は不快感に繋がるからね。

もともと無理に隠しても見抜かれるので「たまに自己犠牲に酔いたくなる」程度に抑える感じがいいだろう。カモフラージュにヨン様のような普通の愉悦部として振舞い、なんなら彼に互いの愉悦観を相談したりしてあたしの愉悦的健全性をより印象付けるのもありだ。

あたしが勝手に自殺するならともかく、彼に斬ってもらうのだから当人の機嫌は大変重要だ。みね打ちとかで片付けられたら百五十年越しの計画がペアである。

ヨン様は多分まだあたしの本性を掴めていない。自分で言うのもなんだが、まず幼馴染を曇らせて悦に浸るためだけに尸魂界を裏切り敵として上司に斬り捨てられて死にたい女とか頭ヤバすぎて想像の範囲外である。流石の超天才も簡単には到達出来ない心理なはずだ。

逆に到達されたらあたしが恥ずかしい。

：まあもしヨン様が自身の美学的または合理的観点からどうしてもあたしを斬ってくれないなら、仕方ない。リヨナキャラとしての役割を断念し、チャン一のいない間に鏡花水月で斬られるあたしの幻を作って貰おう。

最終手段でもそれっぽいことが出来るというのは安心感があったいいね。

——カンカンカン！

お、総員起こしだ。

あたしは今一度姿見で身だしなみを整え、晴々とした笑顔で練習場へと向かう。

「——ふあああ：久しぶりだな雛森、随分ご機嫌じゃねえか。鬼道衆でなんかいいことあったか」

「あつ、久しぶり阿散井くん！ えへへ、そう見える？」

途中で同期の恋次たちと三日ぶりのおはようを交わし、揃って到着。

さて、道筋も見えたしこれから頑張るぞ！

五番隊では毎朝の挨拶に隊長自ら号令をかける。隊士たちのことを一番に考えている人格者・藍染惣右介ならではのだと評判の隊風だ。

へー（棒）

「——おはよう諸君。昨日はよく眠れたかい？」

『はっ！』

ニツコリ笑顔にメロメロな女性隊士たちの声が男たちの勇ましい

「はっ！」を完全に掻き消している。あたしも出せるほぼ限界の甘さで叫ぶとようやく女衆の中に混ざれる。もつとも大声の目的はヨソ様への挨拶ではなく隣で眠そうにしている恋次と佐助を起こしてあげることだ。

そんないつもの原作雛森ムーヴに勤しむあたしへ、珍しく隊長モードのヨソ様が目を向けた。なんででしょう？

「さて、今日は目出度い日だね——雛森君、僕の前へ来て欲しい」「ふえっ!? あ、は、はいっ！」

緊張の仮面を作り、列からブリキ人形のようにカチコチ進み出る。赤らむ顔が欲しい時は黒棺の黒歴史を思い出すのがベストだ。発動に失敗しても役に立つとは流石です。

訝しむ一同を背にヨソ様と対面し、背筋を伸ばす。隊長と副隊長候補、互いに演技は完璧だ。

「知つての通り雛森君は鬼道衆との兼任なのだけどね、彼女が先日見事あちらで大きな任務を完遂したんだ」

『おお…』

欲しい反応を周囲から自在に引き出すヨソ様の話術と言うかオラと言うか、とにかくこういったカリスマは本気で尊敬する。ちなみに例の「大きな任務」とはあたしがメタスタシア実験の後始末を終えるまでに五番隊を離れていたアリバイだ。鬼道衆では鏡花水月桃ちゃんが頑張ってくれたことでしょう、39。

「我々五番隊の名を上げてくれて推薦した僕も鼻が高い。皆にも雛森君の活躍を称えて欲しい」

「えっ、あ、あ、ありがとうございませゆっ！」

拍手に包まれ、リングゴほっぺで恐縮する雛森ちゃん。尚あたしは内心話の流れが若干読めてきた。

「そこでこれまでの実績と実力を考慮し——雛森桃隊士」

「は、はいー」

「本日を以て貴君、雛森桃を五番隊第二十席に任命する。これからも護廷の隊士としての誇りを胸に働き、僕を支えて欲しい」

「——はいっ！ ちゆ、謹んで拝命いたしますっ！」

一層の拍手と歓声上がり、あたしは緊張アピに益々黒棺のことを考え顔に血を上らせる。他の隊士たちへ振り向き「よろしくお願います」と一礼。恋次たちも器用に悔しさと嬉しさが共存する誇らしい笑顔をしていた。大丈夫、君たちもすぐ偉くなるから。

さて、末席だが遂に席官である。ようやくこの世界でも雛森ちゃんの出世街道が敷かれました。これからどんどん忙しくなるぞ。

原作開始まであと四十年。残る大きなイベントは二十年後の最重要案件である。

「雛森イイイイ！」への展望が見えたとはいえ、気の抜けない毎日が続きそうだ。

破面イイイイ!

「——ギヤツ!?!」

「うわっ! 大丈夫ですか、行木君!」

霊術院卒業式より早一月。隊士試験を控えた新卒死神見習いの行木理吉は、同期の山田花太郎やまだはなたろうと共に流魂街の空き地で斬拳走鬼の鍛錬を行っていた。

「ほ、ほら。これで火傷は大丈夫」

「ゲホッ、ゴホッ…! わ、悪いありがとう、花太郎」

「いえいえ、どういたしましてー」

暴発した鬼道の怪我を手当てしてくれた友人へ礼を言う理吉。どんくさくてドジばかりする同期の彼だが、こと回道においては霊術院卒業時点で既に四番隊の下級席官に匹敵する技術を有する超天才である。斬術の鍛錬に熱が入りすぎ、彼に「見てられない」と助けられて以来、花太郎とは六年の付き合いだ。

「なあ、花太郎って回道以外なら鬼道もダメダメだよな」

「いきなりなんですか、酷い…」

「ごめんごめん。いやオレもダメダメなんだけどさ、阿散井先輩のいる五番隊に入るならやっぱ鬼道出来なきゃ不味いよなあって…」

「ああ、なるほど」

少年の言葉に花太郎が頷く。理吉は同世代随一の斬術使いと名高い五番隊隊士・阿散井恋次に強い憧れを持っている。霊術院時代に見た彼の剣技に惚れて以来ずっと己の浅打ばかり振って来たが、ここで大きな障害と直面するハメになっていた。

「なあ花太郎、お前の兄さんってやっぱ元副隊長だけあって鬼道上手だよな?」

「え、ええ、それはもう僕なんかとは——って、え? もしかしてあの人に教えを乞いたいとか?」

「何か一言助言とか貰えないかなーって…やっぱダメかあ」

「うーん、年も離れてますしあまり親しくないんですよ…」

萎れた顔で「あの何考えてるかさっぱりで…」と愚痴る花太郎。同じ兄弟がいる理吉は密かに弟に優しくしてあげようと決意しつつ、自身の鬼道練習の打っ手の無い状況に落胆していた。顔見知りで鬼道が上手な者は女子ばかりであり、皆あまり親しいワケではない。八方塞がりだ。

「――あ」

そう俯く理吉の視界の隅で、ふと頭に提灯を灯す友人の姿が。

「誰！ 誰かいた？ オレの知ってる人？」

「え、誰って…みんな知ってる人ですよ。阿散井先輩の同期の…」

「あつ、吉良先輩？ オレあまりあの知らないんだけど…」

「いえ…」

早速飛び付くも花太郎は何やら言い辛そうに視線を彷徨わせている。自分に後ろめたい相手なのだろうか、どこか申し訳なさにその名を呟く彼。

そこで理吉はピシイツと固まった。

「ま、まさか…！」

知っている、知らぬはずがない。

彼らの世代で鬼道が空前絶後の大流行と化している最大の理由にして、全ての院生の永遠の憧れ。女子はその英雄的偉業と可憐で親しみやすい為人の虜に、そして男子はもちろん…

「――お前あの桃花小町さまとお知り合いだったのかよ!？」

「ひいっ！ ごめんなさい、ごめんなさいっ！ 偶然だったんですーっ」

真央霊術院裏会主催『彼女にしたい女子』六年連続第一位、院内通称・桃花小町。

思春期男子の夢の生き写しである霊術院一の美少女。あの雲の上の女神と秘密裏に逢瀬を交わしていた裏切り者を前に、理吉はこれから巡り合う己の幸運も忘れ、反射的にその胸倉に掴みかかっていた。

護廷十三隊・五番隊。

柔和で才に溢れる藍染惣右介隊長の人柄を映す、各世代の俊英や人格に優れた向上心の高い者が集う瀟々屈指のエリート集団である。この隊の席官は他隊の同席の者より一段は優秀と謳われ、末席の二十席においてもその大言に偽りは無い。

「——そうそう、唱える言霊に霊力を丁寧に乗せて…」

「はっ、はひっ！」

「わわっ…！」

優しく添えられるすべすべした柔らかい手のひら。ふわりと仄かに漂う上品で甘い香り。死覇装の隙間から覗く手折れそうに華奢な腕やうなじ。

夢見心地な気分に含まれる思春期小僧、行木理吉は只今人生の絶頂にあった。

「はいっ、そのまま放って！」

「…ふえっ？ え、あ、えっ、えとっ——はっ【破道の三十一・赤火砲】ツ！！」

「——【破道の三十一・赤火砲】！」

気もそぞろなまま放たれた少年の鬼道はそのまま五番隊第四練習場の的へ飛翔し、ドカアアンと爆発した。

「…え、成功…した？」

「成功だね。おめでどう行木くん！」

「あえ…？ …あ、は、はいっ！」

思わず隣を見ると、破道がてんでダメで知られる花太郎も同様見事に命中している。奇跡だ、この人の丁寧な手ほどきを一日受けただけで苦手な【赤火砲】が明らかに上達した。こんな短時間で。

——凄い、これがあの伝説の…

ゾクゾクゾクツと理吉の体が震える。嫌いな鬼道を専門とする相手だというのに、このとき少年は彼女に、魅力的な異性としてだけではなく、一人の死神としても強い強い憧憬の念を覚えた。こんな可愛くて優秀な人に手取り足取り教えて貰った自分は同期一幸運な男に相違ない。

歓喜の絶頂に顔を赤くし、かくして理吉は己の新たな憧れの人物に見事な最敬礼を披露した。一人の死神見習いとして、そして一人の男として、少しでも強く彼女の印象に残れるように。

「あ、ありがとうございますっ、先ば——雛森二十席！」

五番隊第二十席雛森桃^{ひなもりもも}。かつて霊術院一の鬼道使いの名を欲しいままにしていた小柄な美少女は、教え子の全身全霊の感謝に「気に入らないで」と気恥ずかしそうにはにかんでいた。

「いやあ、凄いです…流石雛森さん。僕もまさかこんなに上達するとは思ってもみなかったです」

「ふふ、一回生の頃から同期の友達とかによく教えてたからコツを覚えてたのかも。でもこれで少しは山田くんへ恩返しが出来たかな」

「お、恩返しだなんてそんな…！」

花太郎が雛森二十席と親しげに話している。院生のころも何故か女子にモテていた友人だが、まさかあの桃花小町にさえお近づきになれるほどだったとは。嫉妬を覚えるより彼への尊敬が先立つ純粋な理吉。

「——そう言えば行木くんはどうして五番隊へ？」

ぼーっと二人を見つめていると、ふと雛森二十席が尋ねてきた。理吉は驚きに胸が高鳴る。あの雲の上の人が、オレのことを尋ねている。

オレに興味を持ってくれている…

そのとき理吉ははたと閃く。

花太郎は決して見栄を張らず、いつだって自分の素直な気持ちを言葉にして、女子たちと親しくなっていた。ならば自分も、雛森二十席

への思いを全力で伝えればもつと彼女とお近づきになれるかもしれない!と。

「は、はいっ! 才、僕は斬術が得意で、六年連続で主席を取った阿散井先輩に憧れて五番隊を受けようと思ってたんです。で、でもい、今はその、ひ、雛森二十席に憧れて…も、もつと五番隊への思いが強まりましたっ!!」

「へえ…ん? 阿散井くんに憧れ?」

「あ、はい。五年前の武技の公開練習で”凄いなあ”と…」

「行木…理吉……………あ」

恥じらいながらも何とか思いを伝えた理吉。だが肝心の雛森二十席の反応が鈍い。

何か失敗しただろうか。気が気ではない少年は恐る恐る彼女の顔を覗き込もうとし…

「——わあっ、そうなんだ!!」

「はひっ!」

太陽のような満面の笑みで詰め寄って来た少女に一瞬で大混乱に陥った。

「うんうん! わかるよ、阿散井くん凄くかつこいいよね! 憧れちゃうよねっ!」

「えっ? あ、は、はい。それはもちろん…」

「そうだ! もし時間あるならこれから第三練習場の方に行く? 多分阿散井くんまだ鍛錬してると思うよ!」

「え、あ、あの雛森二十席…?」

「ほらこっちだよ! 見に行くついでにあたしが阿散井くんの良いところいっぱい教えてあげるねっ!」

その華奢な身体のどこに隠れていたのか、ぐいぐいと背中を押され理吉は花太郎と共に練習場を移動する。途中で「ただ憧れてるだけじゃダメだから」と聞かされた阿散井恋次という青年の話は、雛森二十席がどれほど彼のことを見てきて、大切に思っているのががひしひ

しと伝わってくる実に好意的なものだった。

(そうか、雛森二十席…阿散井先輩のことが…)

はっ…と。理吉はこのとき珍しく、今まで一度たりともわからなかった女子の、雛森二十席の気持ちをつかっていた気がした。

そして人知れず胸の奥で、初めての失恋に涙する。

だが直後。

同時に彼の胸に湧き上がった思いが、ぽっかり空いた心の穴を一瞬で埋め尽くした。

(あの雛森二十席をここまでメロメロにさせちゃうなんて…)

奇しくもそれは少年の心境の変化の基となった感情であり、以後、未来の六番隊第三席・行木理吉の根幹を形成するものとなった。

——なんて凄い男なんだ、阿散井恋次…!

「——阿散井先輩っ！ オレ、先輩のことホントに憧れてますっ!!」

「お、おう？ そうか…! へっ、なら特別に俺のことは”恋次”でいいぜー!」

「ツツ！ あ、ありがとうございませすっ——恋次さんツッ!」

練習場で初めて言葉を交わした二人は、その後多くの隊士が羨む極めて良好な先輩後輩の関係を築いていくのであった。

その胸に大きな誤解を残したまま…

『——オオオオオオオオ……』

ウエコムンド 虚圏、メノス 大虚の森・上層。

上位種へ進化した大虚たちが行き着く純白の砂漠。その景色を真つ赤な血で染め上げる一つの人影があった。

「——【セロ・ドール重奏虚閃】！」

『ツガアアアアアアアアツツ!?』

巨大な霊力の光線に抉られ大地に墜落する一体の大虚。人の四倍ほどの全長を持つ巨鳥のアジュールカス中級大虚だ。

周囲には無数の虚の死骸が散乱し、先程倒れた一体を最後にその人物が軽く息を吐く。

「全く、だからよしなきいって言ったのに」

『ア……グ……』

姿と声は若い女のもの。珍しい質の霊圧を漂わせる奇妙な存在であり、その顔に被さる虚の仮面は口元が大きく割れていた。

彼女はアランカル破面。虚と死神、相容れぬ種族を別つ壁を取り払った高次元の上位霊体だ。

「おかしいわね、情報通りならこのあたりなんだけど……流石に貴方じゃないものね」

『……ツ、フザケ……ヤガツテ……!』

「はあ、これで七件目か……」

白い装束を纏う女が辺りを見渡し肩を落とす。此度も目当ての存在は見当たらない。いい加減、上司より直接下ったこの大事な任務をいつまでも果たせずにいることは彼女の沽券に関わることだった。

「……貴方、私と一緒に来る?」

『ツ、何ノ……話ヨ……』

「その大きな姿、既に退化が始まっちゃってるんでしょ？
最下級大虚ギリアンに堕ちるのが怖ければ私に付いて来なさい。雌の大虚な
ら他にもハリベルたちがいるし、こんな空の下よりは文明的な所よ」
本命の最上級大虚ヴァストローデではなかったが、この巨鳥の大虚も悪くない成果
だ。手ぶらで帰るよりはずつといい。

しばらくの逡巡の後恐る恐る頷いた同じ雌の同胞へ、女は割れた仮
面の口元で笑みを送る。そして新たな仲間を連れ、彼女は拠点へと踵
を返した。

『…何処へ連レテクノヨ?』

「聞いたことない？ 昔虚ウエコムン圈の神を名乗る大虚が住んでいた城：
ラスノーチエス 虚夜宮よ」

大虚の森を後にすること二日。水平線の先に現れた神殿の如き建
造物を眺め、破面の女はその威容にほうつと息を零す。

ラスノーチエス
虚夜宮。

彼女の所属する組織の本部、巨大な半球型の天蓋が空を覆う王城
だ。十年ほど前までかの地を治めた虚の神もその力に屈し、新たな主
の権勢は微塵も揺るぎない。

「——チルツチ、貴方はそこで待ってて。私は上に報告してくるから」
城の規模に呆けて言葉も出ない雌鳥大虚を門前に控えさせ、しばし
廊下を進んだ女破面は覚悟を胸に城内の一室の前に立つ。中にいる
のは彼女ら破面軍の更の上、主力軍団エスパード“刃”を指揮する軍団長ヘネラーリヤ。この
地の新たな王に仕える三人の重臣の一角だ。到底右も左もわからな
い獣を会わせていい相手ではない。

深呼吸を終え、品よく扉をノックする。獣から人になった彼女の大
事な矜持だった。

「——あ、はい。どうぞ」

入室を許可され、音を立てぬよう静かに扉を閉める。そして伏目でその部屋の主の姿を窺った。

——可愛らしい死神の少女。

ゾクリ…と女破面の背筋に震えが走る。目の前の人物から感じる霊圧は下級の虚と同程度、容姿も華奢で可憐、態度も目下の者にすら丁寧な口調を心がける明るく礼儀正しい女の子。

だが王ら頂点を除き、ここ虚夜宮において、そんな弱々しい風体の彼女に齒向かう愚か者は一人もない。

「おかえりなさい、ネリエルさん。その顔ですとまた情報に瑕疵があつたようですね」

「…はい、ご期待に沿えず申し訳ございません」

「いえそんなつ、こちらこそ何度も無駄足を取らせてごめんなさい…」
肩を竦めしよんぼりする上司へ、女破面——ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクは新たに勧誘した中級大虚について報告する。

「情報の地に偶然いた別の大虚、チルツチ・サンダーウィツチの勧誘に成功しました。階級は中級大虚です」

「…！ わあっ、お手柄ですよネリエルさん！ 流石ですね」

「あ、ありがとうございます」

何やら手放しに褒めてくれる上司だが、その子供のような笑顔に甘えてはならない。本来の目的は既に十年も搜索を続けているヴァーストローデ最上級大虚で、定住をしない性分なのかそちらはこれまでずっと空振りばかり。ネリエルの上位者の”刃”アローロニーロやヤミー、果てにはあの腰の重いバラガンまでもが従属官フランオンを遣わし探させているほどだ。

忘れることなど誰も出来ない。あの紅色に煮え滾る地獄の劫火を。

そして皆が恐れているのだ。この少女の堪忍袋の緒が切れたときに、あるいはあの光景が今一度、悪夢から現実へと蘇ることを…

「——あ、そうそう」

「…ッ」

唐突に話題を変えられ思わず肩が跳ねる。

「藍染隊長がおっしやつてましたが近々崩玉の大規模強化計画を始めるそうです。経過観察で様子を見ますが安定まで十年はかかるか。ですが無事成功したらあなたたち一般破面軍の人たちも再破面化させて貰えないか頼んでみます」

「ッ！ それは……」

「はい。中級大虚のネリエルさんならもつと進化出来るはずですよ。いざれ組織を整理するので、そのときは新たな”刃”の一員になれるかもしれませんねっ」

身構えていたが、出てきたのは願ってもない話だった。嬉しそうな上司の声につられネリエルは仮面の奥で頬を緩める。未だ不完全な彼女ら破面は力が不安定で、中には制御出来ず自傷してしまった者もいる。体も衣類で隠しているが下半身を覆う山羊毛など虚の名残が色濃く、己の獣性を忌避する彼女にとって是非でも望むことだ。

「ではまた新しい情報が来るまで休んでてください。最上級大虚ウルキオラ・シファアの搜索、引き続きお願いしますね」

困った笑顔で指示を下す上司の少女。ネリエルは彼女の心労を鑑み、改めてこの任務への意気込みを強くする。

この死神は決して仕え難い人物ではない。部下の働きを労い、望む報酬を用意し、親しみやすい態度で接してくれる。ならばそれに応えるのが、その途轍もない力を完璧に制御する理性的な彼女に惹かれた自分の、ヒトとしての忠義であろう。

「お任せください——雛森様」

控えめに手を振り見送ってくれる”刃”軍団長雛森桃へ深く一礼し、ネリエルは彼女の執務室を後にした。

準備イイイイ！

真央霊術院卒業から二十年。

五番隊に配属されてから同じ年月が経過し、振り返ればそれなりに大きな変化が目につくようになる。

身边では恋次が五番隊の”斬拳走鬼統合”の理念を断念し斬術一本の十一番隊へ。そして侘助も何を思ったのか四番隊を経由して三番隊へそれぞれ転属していった。なお五番隊内では鬼道がoh…な恋次は厄介払いされたとの醜聞が広まっているが、裏ではヨン様の暗黒微笑が見え隠れする意味深な異動である。ついでに理吉も恋次に付いていったので、今の五番隊にいる原作キャラはあたしとヨン様だけに落ち着いた。

あたし自身のことだと、まずつい先日五番隊で五席から三席に昇進した。

ウエコムンド
虚圏で卍解習熟を頑張っていたらつられて始解の威力調節も上達したので、ようやく地面を硝子化させないプチ飛梅ちゃんをここソウルソサエティ尸魂界の五番隊で披露。上位席官になったし解放ぐらいしてるとアピールしないとね。

十年で二十席からここまで昇進はかなり凄いが、実は侘助も吉良を解放し既に三番隊で三席になっている。ちなみに恋次はまだ六席でちよつと落ち込んでいるらしい。贅沢言うなよお前の幼馴染なんてシスコン兄貴の過保護でまだ平隊士やってるんだぞ！

なおあたしと侘助の早めの昇進にはヨン様の粋な計らいがあったりする。それはもちろん…

「——おいふざけんなツ。なんで俺が昇進すると決まってお前の席次も上がるんだよ…！　ウチの髭め、お前んトコの藍染隊長と示し合わせてるんじゃないだろうな…」

「なつ、藍染隊長がそんな不公平な理由で部下を出世させるワケないでしょ！　あたしの実力だもん、残念でしたー」

「ふふっ、二人とも目出度いことさね。今日はお夕飯食べてくかい？」
『食べるっ！』

久しぶりに休日が被りお婆あちゃん家でおでこを突き付け合うあたしと幼馴染。そう、ヨン様の粋な計らいとはこのシロちゃんとあたしのマウント合戦への協力だ。

——俺がお前より強くなったら…

あの宣言へタレ事件から早十七年。当代一の神童シロちゃんは十番隊であたしと同じ三席になっていた。飛び級で四年分の基礎鍛錬時間を面倒な隊士の雑用や任務で失いながらも辿り着いた上位席官の地位。その成果は十分誇るべきではあるのだが…どうやら彼はあたしのことしか見えていないようだ（ニヤア

もつとも原作で日番谷冬獅郎はこれから四年後に乱菊さんとの二人三脚で副隊長相当の地位となる。その原因がヨン様陣営であり、つまりこれからも変わらずシロちゃんはあたしの愉悦を満たしてくれると言うことだ。感謝の気持ちに牡丹肉を多めにお椀に装ってあげよう。

「ほらシロちゃん、育ち盛りはいっぱい食べてっ」

「チツ、また子供扱いしやがって…オメーだってチビじゃねーか」

「な、酷い！ チビじゃないもん、小柄だもんっ」

悪態吐きながらもちゃんと受け取ってくれるところに好意が見えてあたし満足。ちなみに女性のスタイルの話なら前世では織姫ちゃんがタイプだったが、TS転生した今は雛森ちゃんの庇護欲をそそる華奢ボディのほうが好みだ。とくに首と腕と足が細くてめっちゃ綺麗。この身体であざといミニスカニーソの絶対領域とか作ったらシロちゃんの性癖がぶっ壊れそうなので私服は普通の小袖で露出ガードしています。

ぶつぶつ「なんでこんなのが男共の人気なんだよ…」と他人の美意識に文句を言っている君はそろそろあたしが尸魂界最高峰の美少女だという事実を認めたまえ。

と、話を戻すと護廷隊での変化はそんな感じだが、実は鬼道衆の方

でも大きな進歩があった。むしろこつちを先に言うべきだろう。

そう。あたしことCN^{コードネーム}：緋燕^{ひえん}は最近、鬼道衆・一之組第七班班長に抜擢された。そして班長と言うことは、つまり！ あれから二十年。遂に、遂に…

——黒棺を使えるようになった！

ツドヤアアアアアツツ！ まさに幾星霜と言うに相応しい、黒歴史との長く苦しい戦いだった。これは鬼道衆において九十番台最速到達の偉業らしい。流石天才雛森ソウルだ、ひゃっほい！

でもまあ完全詠唱でギリギリそれっぽいのが出来るようになっただけなので威力も全然だし、詠唱破棄なんてまだ絵に描いた餅だ。とはいえ絵にすら描けなかった新人時代よりは遥かに進歩している。これから原作開始までの二十四年間、虚圏で練習練習ウツ！ 威力を上げて目指せ詠唱破棄で隊長格瞬殺！ さあて、離反時には誰に生贄になつてもらおうかなあ？（皮算用）

そんな感じであたしの表の立場での変化は以上だが、裏の変化についても述べたい。

まずは虚夜宮^{ラスノーチエス}の破面軍^{アランカル}。あたしは何故か、原作には影も形も無かった「十刃」^{ヘネラーリヤ・デ・エスパレーダ}軍団長^{ヘネラーリヤ・デ・エスパレーダ}とかいう何のためにあるのかよくわからない地位を押し付けられた。ようはヨン様DJ一〇あたしの中で一番暇しているあたしが虚や破面たちをまとめるということなのだと思いい、とりあえず言うこと聞かない人は飛梅ちゃんのストレス発散に付き合ってもらったりしていたら、表面上はみんな従ってくれた。例えばウルキオラ一人探すのに二十年もかけているのに未だみんな熱心に搜索してくれるくらいには従順だ。おかげでDJから「秩序維持ご苦労」とより一層の信頼を寄せられている。【虚圏統括官】の仕事が半分くらいあたしに回って来てるのでは…

それはさておき。実はこの「十刃」軍団長^{ヘネラーリヤ・デ・エスパレーダ}、仰々しい名前に反し権限があまりはつきりしていない。多分ヨン様はそんなことよりソ

レをあたしが何のために使うのかに興味があるのだろう。何のため
について原作再現ですがなにか？

ということでは現在絶賛”十刃”や従属官フラシオンなどの原作キャラを集め
て然るべき立場にぶっこむ作業を行っております。全員揃ったら誰
か褒めて。

…さて。久々の家族団らんも楽しめたし、そろそろ席を立とう。

「——鬼道衆の仕事か？」

玄関まで見送りに来てくれたシロちゃんがちよつと寂しそうに尋
ねてくる。んもー、そんなにあたしに愉悦してほしいなら言ってくれ
ればいいのに。しょうがないにやあ…

「ううん、藍染隊長のお手伝い。今日は副隊長が任務でいないから代
わりにあたしが消灯までお側にお控えるのっ！」

「……この時間に、二人でか？」

今度は不審そうに眉を顰めるシロちゃん。年頃の女の子と憧れイ
ケメン上司、夜間に二人きり。一つ屋根の下。何も起きないはずがな
く…（邪悪な企み）

なお雛森ちゃんは自分のことにすつごく鈍感な美少女なので無防
備にこれをスルー。

「うん、藍染隊長お忙しいからこの時間もお仕事なさってるよ？ ふ

ふっ、あの人の私服姿って雰囲気は凄く柔らかくてステキなんだあ」

「！ な…ッ」

「じゃあ行つてくるね！」

「まつ、おい雛森ッ！」

今のあたしは憧れの男性のプライベートに特別感を見出す純情乙
女ムーヴ中。焦燥するシロちゃんに別れを告げて瞬歩で夜の流魂街
を駆け抜ける。感知には遠ざかる彼の霊圧が。全く、こういうときに
全力で追い駆ける気概がないから君はいつまでも”シロちゃん”な
んだゾ。

そして日番谷冬獅郎は、このときの雛森桃を止められなかったこと
を生涯、後悔するのであった…（フラグ）

突然だが、前述の通り現在の時間軸は原作開始の二十四年前である。

これまであたしが関わって来た大きな原作イベントは三つ。霊術院の現世実習巨^{ヒュージ・ホロウ}大虚襲撃事件、虚圏のバラガン屈服及び虚夜宮占^{ラスノーチエス}拠、そして志波海燕殉職のメタスタシア改めテンタクルス実験だ。特に最後の件はちゃんと再現するためあたしがイベントの場をほぼ全て準備するなど、最早完全に悪の元凶になってしまっている。

ルキアちゃんからすれば正気を疑う巨悪であり、あたしからすれば「あのイベ無くしてお前一護に原作ほど情湧かないだろ」という具合に当事者と原作知識者には大きな視点的隔たりがあるのが何とも言えないが——実はこれから行おうとしていることは、まさに神目線としか言いようのない常軌を逸した大計画だ。

…お気付きの方も多いだろう。原作開始より二十年前。この時期に起きた最大のイベントと言えば例のアレをおいて他にない。

——一護の原点【ホワイト実験】。

ヨン様の暗躍魔人っぷりがこれでもかと描写された、原作BLEACH CHにおける最重要イベントと言っても過言ではない一大実験。主人公の誕生と彼が操る数々の能力は全てここから始まるのである。

一応原作での展開を述べておくと、一護のパツパ（死神）とマツマ（滅却師^{クインシー}）が出会い、マツマにヨン様の実験虚【ホワイト】が偶然寄生し、結果一護は親の死神・滅却師・虚の全ての力を持って生まれたハイパーサラブレッド主人公となるワケである。あとついでになんか^{フルブリンゲ}完現術も。血筋・才能・勝利！を完璧に押さえる近年ジャンプヒーローの鑑。

その一護が主役の原作BLEACHを開始させるには、この「ホワイト実験」は何が何でも黒崎真咲寄生&志波一心結婚エピソードにさせなくてはならない。これらが過不足なく再現されないと主人公が強くなる土台が消えるどころか、そもそも生まれすらしらないのだ。

：仕方ない、主人公の原点という原作最重要イベだ。

もしものときは手遅れになる前にヨン様にある程度原作知識を伝えて強引に正史展開に持っていくとしよう。

「――幾人もの死神の魂魄を素体とした最上級大虚と同格の寄生型虚か…」

そういうことで、只今あたしは毎度の虚研究者・東仙要氏の研究所へお邪魔しております。

「先日崩玉の大規模強化が終わり破面たちをより死神へと近付けることに成功しました。ですがあれではただの死神と虚の両方の特徴を持った霊体に過ぎません。絵具を混ぜて霊力量が増えただけで高次元へ至っていない」

「言わんとしていることは理解出来る。私もアレらが到底藍染様が望んでおられる” 霊格の到達点” だとは思えん。あまりに脆弱だ」

「はい。なのでもっとデータが必要です。確か藍染隊長が以前崩玉に死神の魂を与える研究をなさってましたよね？ あれを参考に、虚化させた死神の魂を蠱毒で強化する研究成果を【テンタクルス計画】に応用して再実験してはいかがでしょう。最上級の研究素材同士を掛け合わせて魂魄限界の変化を観測するんです」

いけしやあしやあと「何か光明が見えるかもしれませんが」とか言ってDJを誘導。特に死神の魂魄をベースにした強力な寄生型最上級大虚を作るという点は絶対に外せない。仮に弱い寄生型虚を使ってしまうば、後にソレを継承する一護の力が大幅に弱体化しかねないのである。

ただでさえ一護は最終章で敵が伝統のOPBではなく別漫画の能力TUEEバトルを始めたせいで環境に適応出来ず、惨敗して絨毯化したり新卍解が即折れしたりと散々だったのだ。力の源たる「ホワ

イト」が弱すぎてあれより凡才になってしまったら絨毯どころか養生シートになってしまふ。そしてあたしは一護が活躍できないBLEACHなんて見たくありません。一護は曇り顔ではなく仲間を救えて晴々してる笑顔が似合うオサレな男なんです。

ジツとDJの反応を待つ。今、彼の研究者としての優れた頭脳で様々な計算が行われているのだろう。

そして少し考えた東仙が顔を上げ、あたしを見た。

「…お前の特異性は以前、藍染様より一度だけお聞きしている」

彼の霊圧が漏れ出している。話の内容といい、思わず背筋を伸ばすあたし。

「私には到底理解出来ないことであつたが…お教え頂く代わりに、お前が何か強く望むことがあれば必ず叶えろとのご命令も頂いた。今がそのときなのだろうか?」

「!」

驚いた。まさかヨン様がそんなことを…

「…わかつた、全面的に協力してやろう」

「東仙隊長…!」

「幾人もの死神の魂魄を素体とした最上級大虚ヴァストローデと同格の寄生型虚、とこのことだが——具体的にどの程度の力を望む? お前がこれほど熱を上げる計画だ、ハリベル程度ではあるまい」

あたしは東仙の言葉にこくりと喉を鳴らす。

熱意と言えばあなたもそうでしょうに、と彼の吊り上がった口角を見てつい笑ってしまう。メタスタシア改めテンタクルスくんから始まった寄生型虚実験の最終到達点。かつて何度と共に手を取り合つた頼れる虚研究者・東仙要の助力を手にしたあたしは、同床異夢にチクリと痛む胸を隠し、満面の笑みでこう答えた。

「決まっていますよ。我らのかつての最高戦力…」

——元第0刃セロ・エスパルダザエルアポロ・グランツと同格の大虚です。

…一護くんよお。

お前、あたしにこんだけお膳立てしてもらって千年血戦篇で「終わりだ…」とか心折れやがったらもう許さねえからなあ？（ツンデレ

白虚 イイイイ！

毎度の虚ウエコムンド 圈ラスノーチエスは虚夜宮。

尸魂界ソウルソサエテイの瀨靈廷せいれいてい並みに巨大なこのお城の一角に、緑の豆大福みたいなキモい建物が建っている。あたしは東仙との相談を終え、一人その施設の主人に会いに来ていた。

「——これはこれは、麗しき軍団長閣下。ようこそお越しくださいませました」

先触れを送っておいたおかげか律儀に出迎えてくれる紳士的なインテリ破面アランカル。その甘いマスクの裏に隠れた本性を知る者としてはまるで演技中のヨン様を見ているような気分になるのだが：流石にあれほどじゃないか、失敬失敬。

「あ、はい。わざわざありがとうございます——ザエルアポロさん」「いえいえ、またこうして閣下の可憐なお顔を拝見出来て光栄です」

ニコと微笑む桜髪の胡散臭い眼鏡系男子。うーん、この教本のように完璧な営業対応。以前とは別人のように霊圧が落ちているが、どうやら本人の顔を見る限り例イールフォルトの兄の呪縛とやらから解放されて清々しているようだ。いい空気吸ってそう。

ザエルアポロ・グランツ。

原作BLEACHにおける第8オクターバ・エスパルダ十刃の地位を持ち、恋次と石田眼鏡をボコリネムちゃんに出産プレイを強制し遊んでいたところをみんなのマユリ様に成敗されたKBTIT師匠の大のお気に入りキラである。女に転生した今は正直ネムのシーンが印象的過ぎて思わず身構えてしまいそうになる変態だ。

とはいえ彼の毒牙があたしたちヨン様陣営首脳部に及ぶことはない。このザエルアポロは人間時代の名残か虚時代から闘争より霊的科学に興味があり、バラガンやヨン様などその庇護者パトロンには恭

しく遜るなど妙に謙虚なところがある。あたしが勧誘した時も今のように丁寧な挨拶でさらりと仲間に加わってくれた。

「ところで本日はどのようなご用件でしょうか？」

「えっと、単刀直入に言いますと…強力な最上級大虚ヴァーストロージェの霊体構成と戦闘データが欲しいんです。具体的には、その——破面化前のあなたの、とか」

「ほう…」

目的を伝えるとザエルアポロが眉間に微かに皺を寄せる。彼の黒歴史なのはわかるが、こちらも一護を強化するために絶対に必要なことである以上引き下がれない。

なにせこの虚圏の史上最強の虚はかつての己いこみきどもえ己いこみきどもえ己いこみきどもえでも大帝バラガンでもヤミーでもスタークでもなく——最上級大虚時代の彼だったのだ。

第0刃ゼロ・エスパーダザエルアポロ・グランツ。実はこの男、全盛期はとんでもない化物だったと小説で明らかになっている。

人間時代はマッド錬金術師で、死後軍人の兄を始めに靈魂を喰い漁り強者へと至り、その力はあるのバラガンさえも自陣に引き入れたあとはノータッチだったほど。破面化した彼の實力は更に凄く、なんとあの完全虚化一護と同等以上の戦績を上げるほどで、そのヤバさは更木剣八とマユリ様を合体させたモンスターと例えられる。

あのウルキオラ戦での完全虚化一護の強さを見る限り、多分原作の東仙はこの最上級大虚ヴァーストロージェザエルアポロを「ホワイト」の霊性参考にしたのだとあたしは見た。なので是が非でもそのデータをゲットするため、こちらは対価に桃ちゃんラボの研究資料を差し出そう。

「その、ご不快はもつともですけど非常に重要な研究なんです」「なるほど…」

「あたしが管理している浦原喜助の義骸技術に関する研究資料と交換してくれませんか？」

ザエルアポロが目を見開く。確か以前からヨン様に要求していたはずだ。

揺れてるところをテレビ通販のノリで畳み掛ける。

「あつ、お望みでしたら新しい」十刃”の座もまたご用意しますよ」
”十刃”…それはそれは」

「以前の第0十刃はもうヤミーさんで埋めちゃいましたけど、やっぱりあなたのいない」十刃”は寂しいですから…」

そうだぞ、お前がいないと”十刃”の登場シーンは半分くらい消えるからな、連載話数的に。それにネムちゃんあの名シーンはBLEACHに必要不可欠だ。流石のリョナ女王雛森ちゃんも出産プレイは守備範囲外です。

そう、かつては小説キャラ特有のぶつ壊れチートだったザエルアポロも、今や”十刃落ち”フリバロン・エスパルダ。その弱体化の理由が本人の目指す「完璧な生命」に不必要な「感情」を物理的に捨て去った故と言うのが中々にBLEACH的でオサレだが、”十刃”という破面軍最上位の立場は平穏な研究生生活を望む彼にとっても魅力的なはずだ。

ちなみにその捨てた感情は現在、実兄イールフォルトの破面アランカルとして元気にグリムジョーの金魚のフンをしています。

「…閣下よりこれほどの御慈悲を頂いて断るのは野暮というもの。僕の醜い過去をお見せするのは恥ずかしいですが、どうぞご自由にお使ってください」

よし！ 浦原さんが尸魂界追放時に残した遺産を渡して無事ヴァーストローデ最上級大虚ザエルアポロの霊性データゲットだ。彼は小説でロカ・バラミア人造大虚を作ったりと浦原さんと通じる研究を色々していたので、あたしの資料は役立つだろう。

頑張ってくれ。

その後、無駄な世間話はせずさっさとサラバしてDJラボで即刻研究開始。

極上のデータなのだ、これで少なくとも原作より弱くなることはないだろう。

後はいつもヨン様がやってるように、部下の虚でおびき出したその辺の上位席官を何人か拉致して素体にし、ヨン様謹製の崩玉で虚化すれば完成するらしい。微塵の慈悲もない、東仙の死神に対する憎悪で

溢れかえっている。ヒエツ…

というワケで、早速護廷隊の原作無関係な上位席官たちに犠牲の犠牲になってもらいます。

おう、八番隊副隊長。女性死神協会で七緒ちゃんが愚痴ってたが何やら隠れてセクハラしまくってるそうだな？ 三番隊元三席、侘介に席次取られて色々彼にシヤレにならない嫌がらせしてるの聞いている？ ウチの五番隊副隊長は…特に嫌いでも親しくもないけどヨン様に聞いたら「あげる」とのことなのでありがたいと頂戴する。

なおこの大量拉致の結果、護廷隊全体で上位席官のポジションがいっぱい空いたので続々と原作キャラたちが昇進したのは我々だけの秘密だ。

『オオオオオオオオオオ…』

『アアアアアア…』

『オオオ…』

『…』

上は副隊長、下は七席。ここ虚夜宮を支配してから二十四年の間に拉致監禁してきた実験用死神の中で最も霊圧が高く斬魄刀の能力に偏りが無い十三名を全員強化済みの崩玉で虚化し、実験施設で互いに喰らい合わせる。響く絶叫と咀嚼音、飛び散る血潮、瘴気のようにおぞましい霊圧の膨張。とんでもない光景だ。これにあたしがどっぷり関わるとか眩暈がしそう。

隣を見上げれば鬼畜スマイルの東仙さん。人間色々麻痺してくると笑ってしまうらしいが、多分あたしも笑っている。これも愉悦の一つなのだろうか、奥が深いなあ…（遠い目）
そして色々とあたしが吹っ切れた頃…

「――なるほど、確かにコイツはこれまでの雑魚とは格が違う」

その辺の最上級大虚ヴァーストロデーとは一味も二味も違う、死神の力と親和性の高い凄まじい潜在能力を秘めた怪物の誕生だ。

百年以上の研究より更に四年をかけた計画。崩玉というチートア

アイテムで相当数の中上位席官を素体にし、完成した蠱毒大虚がこちらになります。

『……………』

容姿は原作に限りなく近い、黒い鎧に包まれた純白の肉塊。細菌型と生体型の両方の特性を併せ持つ、寄生型虚研究の到達点にして最高傑作だ。

この規格外な最上級大虚ヴァーストローデホワイトくんを制御出来るのはユーハおじさんの協力を得た原作主人公の一護だけだろう。

「…素晴らしい、細心の注意を払い素体らを吟味した甲斐はあった。これほどのものはもう二度と作れないだろう…」

「この状態で既に現”十刃”級の霊圧ですからね。寄生標的の——純血滅却師クインシーと融合したら凄いことになりますよ」

感無量といった面持ちで培養器を見上げる東仙。だがあたしの言葉には未だ懐疑的だ。

「本当にコイツを黒崎家の遺児に寄生させるのか？ 相反する滅却師との魂魄融合など実例がない。力が反発し合い魂魄自殺で終わるとしか思えん」

「はい、確実にそうなるでしょうね」

「…何を考えている、雛森三席」

訝しむ彼へ、あたしは持ち前の原作知識を披露する。もちろん理論上は辻褃の合う推理という形で。

「昔、東仙隊長が細菌型寄生虚で虚化させた元五番隊長・平子真子ひらこしんじ以下護廷隊隊長格および鬼道長格の八名は未だ存命ですよ。浦原喜助に匿われて」

「市丸の報告にあったな。ヤツは研究施設の霊力を賄うため現世の重霊地を点々としているらしい。藍染様は既に想定されておられたようだが…」

「はい。その人たちは八十年も魂魄自殺を免れています。あるいは既に死神として高次元の霊格に至っているのか。ほぼ確実に、藍染隊長が

警戒されている浦原喜助の技術力のおかげでしょう」

今の時代の重霊地はヨン様による分析が進んでおり、大体の場所も把握している。そしてあたしはその予測範囲にある一つの町を実験場を選んだ。

あたしの話を聞くにつれ、東仙の顔が強張っていく。

「まさか、お前がやろうとしていることは……!」

戦慄する彼へ雛森桃の可愛らしい笑みで微笑む。あたしにとって特別な事ではない。ただ原作で起きた偶然、奇跡の出来事を——我ら藍染惣右介一派が必然に変えるだけだ。

「使えるものは全て使う。浦原喜助をおびき出すと共に——彼にもあたしたちの研究にご協力いただきましょう」

…で、肝心の我らが主人公一護くん。よく色んな人にメンタルの弱さを心配される少年だけど、君はこの怨念凄まじいホワイトくんをちゃんと制御出来るのだろうか？

夫妻イイイイ!

「——おかしい」

前任者の甘ったるい香水の匂いが残る、十番隊三席の執務室。新任四年目を迎える日番谷冬獅郎は手元の報告書を何度も見返しながら眉を顰めた。

——それが、全ての発端だった。

「え!? ちよつ…今から一人で!」

「オウー! 明後日くらいには戻るから明日の仕事ヨロシクな!」

上げた報告を見るなりそう言い残し、隊長の志波一心しほ いっしんは調査のため十番隊隊舎を去って行った。書類の内容は、隊の管轄である現世の鳴木市にて次々と隊士たちが虚被害に命を落としているというもの。現地では二人体制で任務に従事し独自に警戒を強めていたが、中には霊絡反応が二人同時に消滅した件など明らかに席官未満の隊士の手余る敵と推測出来る情報も上がっていた。

門を背にする隊長の後ろ姿を見つめながら、冬獅郎は理解する。この事件の下手人は、自分や隣で騒いでいる副隊長・松本乱菊でさえ対応不可能な存在であると。

そんな隊長が現世より帰還したのは、意外にも不穏な空気が漂い出してから二日と経たない頃だった。戻った一心の顔に浮かんでいた感情は安堵、喜色と晴れやかだ。何やら只事ならぬ体験をしたようだが、彼がそれを冬獅郎らに話すことはなかった。

そしてその翌日。

十番隊隊長志波一心は、尸魂界から失踪した。

鳴木市。

藍染惣右介一派が分析する当代の重霊地候補の一つで、ある大きな計画のために四年前より準備が進められてきた実験場だ。因縁深い平子真子ら元護廷隊隊長格八名の姿も周辺地域に数名確認されており、その支援者と思しき元十二番隊隊長・浦原喜助の所在を明らかにする目的も組まれている。

「――最終確認終わりました。いつでも開始できます」

鳴木市の一角に設けられた極秘の観測施設に集う三人の黒ずくめの男たち。映像を見つめるその彼らの下に、遅れて新たな人影が加わった。

「お疲れさん。今回は随分な熱の入れようやね、ボクも楽しみやわア」
「ホワイトの作成には私の持つ全ての知恵と経験を用いた。あとはお前の計画とやらを残すのみだ」

「…お二人ともご期待の所悪いですけど派手な見世物じゃないですよ？ 特大の布石を二つ、あと細かいのを三つか四つ打ちたいだけなので」

男の二人、市丸ギンと東仙要の言葉にその小柄な人物が面目なさげに霊圧遮断外套の頭巾を下ろす。現れたのはふわりと艶やかな黒髪を舞わせる端正な童顔の少女。だがあまりにも場違いなこの娘こそが、此度のおぞましい人体実験の立案者にして計画の責任者――雛森桃であった。

そして映像画面を見つめる一同に加わった彼女へ向け、この場の最高権力者が鷹揚に微笑んだ。

「――では見せてくれ、桃。君が導くこの世の道筋を」

万人を押し跪かせる超越者――藍染惣右介の号令に、少女は可憐な笑みで返答した。

時刻は夜。冷たい雨が降る鳴木市に、一体の虚が舞い降りる。
個体名【ホワイト】。

崩玉により虚化した死神上位席官十三名の蠱毒に無数の死神の魂を喰らわせ生み出された、藍染一派の究極の実験体だ。単体で護廷隊の隊長とも渡り合える卓越した戦闘力を持ちながら、その真価は【標的虚化】の一つに尽きる。不安定な細菌型寄生虚を成体へと成長させ、寄生時に対象の魂そのものを侵食し霊体を高次元へ昇華させる、この世の理を超えた能力だ。

「——でも劣化個体での実験は護廷隊三席ですら魂魄自殺で消えてもうたやん。より力の強いあの完成体で、おまけに滅却師なんて虚の天敵やのに耐えられるとは思えへんねやけどなア」

そう首を傾げるのは市丸ギン。隣の東仙と異なり専門家ではない彼は八十年前の失敗を思い出していた。

しかし責任者の少女に動揺は見えず。

「…雛森は浦原喜助に標的を押し付けることでその不備を取り除こうとしている」

「浦原喜助に押し付ける？」

東仙が口にした奇想天外な方法に市丸は目を見開く。彼が搜索を担当していた警戒対象、浦原喜助。移り変わる各時代の重霊地を拠点に各地を点々していると推測され、当代の重要候補であるここ鳴木市を実験場に選んだのも本人の所在を確認するためだった。

それを浦原がこの地にいる前提で、あるうことかその善意を利用し彼の持つ超技術で標的の滅却師の魂魄自殺を防ぐ計画。正気を疑う他力本願の大博打だ。

「…へえ、そりゃホンマに成功したら凄いなア」

思わず隣の上司へ流し目を送る市丸。何らかの反応を期待した行動だったが、当の男はその氷の瞳を観測施設の周辺霊圧反応画面へ向けていた。

「——やはり来たか」

男、藍染惣右介が笑みを深める。その冷笑の先、映像室の副画面へ視線を送った市丸は、そこに「志波一心」と記された赤い点が浮かぶ鳴木市の地図を見た。

「…何で十番隊隊長さんが現世におるん？ そないな話今日の隊首会で聞いてへんよ」

「そうか、今まで執拗にここの隊士たちを襲っていたのはこのためか」「限定霊印もせず部下のためにすっ飛んで来はったん？ アレ隊長がやったらあかんやろ…」

計測される高霊圧数値に驚きながらも、市丸はその実素直に感心していた。あの志波一心という男は志波家の者らしい豪胆で情に篤い人物で、そしてここ鳴木市の管轄は彼の十番隊。

全てが仕組まれた予定調和。チラと横目で見た雛森は楽しそうにしていた。

映像内で豪快にぶつかる志波とホワイト。一合で戦力差を理解した死神が始解で挑むも、虚の虚閃セロの乱舞と両腕の鎌爪に苦戦を強いられている。霊圧が近い場合、手数多きは勝敗を左右する大きな要素だ。

「雛森、あの男を何に使うつもりだ？ よもやここに来て戦闘データのためなどではあるまい」

「いえ、データも取ります。現にかなり押してますし志波隊長の炎熱系の卍解が見れば総隊長の「流刃若火」への対策研究に使えるはずです。布石の一つと言ったところででしょうか」

「…なるほど、考えたな」

ほうと頷く東仙の言葉の後、少女の望み通り志波がついに卍解を行った。

体中に凄まじい炎熱を纏うその姿はさながら炎精の如し。まるで彗星のような赤い光の尾を残しながら縦横無尽に四方八方から斬りかかる死神に片腕を寸断され、今度はホワイトが危機に瀕している。あれでは倒されるのも時間の問題だ。

「…ちよつと強すぎたかな」

「流石に隊長の正解は荷が重かったか」

「いえ、ホワイトが…」

殺される前に実験体を回収しようと椅子から腰を立たせた東仙が、雛森の真逆の言葉に思わず振り返る。意図を問おうとするも彼女は「…後で封…い…」と何やら呟き、懐から取り出した補助機器で【天挺空羅】を発動した。

<——兵装二番、起動>

直後、斬り落とされたホワイトの片腕から光閃が放たれる。一直線に飛翔する先には志波一心。下半身に突き刺さったその光に囚われ、死神は胴を固定されたまま身動きを封じられていた。

「ザエルアポロさんの反膜兵器です。死神の霊圧を感知し追尾する拘束用武装で、あたしの【六杖光牢】の霊性情報を参考にしてもらいました」

「へえ、おもしろいオモチャやなア。あのロカとか言う蜘蛛の雌破面に作らせたん？」

「だと思いません。ロカさん優秀なんでこちらの研究所に異動させたいんですよね。ザエルアポロさんはもうあの人の能力に飽きちゃったみたいだから上手く交渉出来ないかな…」

元第0刃従属官ロカ・パラミア。

二百年以上前に八代剣八・痣城双也の正解【雨露柘榴】を参考に大虚時代のザエルアポロが生み出した人造大虚である。彼女は【反膜の糸】を用いた霊性情報の共有が可能で、これを反膜で再現した鬼道兵装がいくつかわホワイトの身体に対志波一心用として埋め込まれていた。

「…雛森。解説も結構だがホワイトが志波隊長を殺すぞ」

「あ、ホンマや」

世界を別つとも言われる大虚の恐るべき能力、反膜。囚われ無防備な志波一心を喜々としてホワイトが黽っている。東仙の忠告通り逆転した戦局の中、役者が一人消えようとしていた。

だが、その時。

「——そうか、そういうことか」

周辺霊圧反応画面を眺めていた藍染惣右介が、嗤った。

映る識別名は——【黒崎真咲】。本実験のメインターゲットである。吊り上がる口角、見開かれる双眸。凶悪な狂笑を浮かべた男が、あの全てを見透かす目で、横に佇む満面の笑みの少女と見つめ合っていた。

藍染はただ一人、理解したのだ。彼女が操るこの一連の出来事が意味する結果を、手繰り寄せた未来の道筋を。

『——ヴオオオアアア!!』

突如、画面内のホワイトが咆哮を上げ飛び上がった。神速の響転ソニートで襲い掛かった先には、両者の戦いに乱入した新たな役者・黒崎真咲。おぞましい化物に怯みながらも、若き純血滅却師の女学生が気丈に靈力弓で応戦する。だが大虚はそれしきに捉われることなど許さず一気に距離を詰めていく。

そしてホワイトが標的の首筋に噛み付いた瞬間。

『——つーかまーえたっ』

片手に構えた靈力矢が、無防備な実験体の頭部へ放たれた。

すかさず東仙が映像を拡大し、一同は重なり合う両者を注視する。実験の目的はここからが本番、純血滅却師への寄生による標的虚化。失敗時はホワイトがそのまま戦闘を続行する。だが成功なら——

「！ 自爆態勢へ移行、成功だ！」

「いえ、まだですっ」

上がる歓声を無視し、雛森が再度【天挺空羅】を使い実験体に埋め込まれた各種装置へ指示を出す。

↑——全兵装、自爆↓

膨張したホワイトが破裂すると同時、バキインと遠くで何かが砕け散る音が響く。そして一瞬何が画面の端に映った直後、映像室を

爆発の光が埋め尽くし：

——正常に復帰した映像の中で、女学生を庇う隊首羽織の男の背中が映っていた。

「…ふう」

市丸の耳に隣の少女の安堵の溜息が届く。同時に東仙が緊張を一度解き、一同の注目は責任者の雛森へと移った。

「何や桃ちゃん。あの二人えらいええ空気やけど、君のやりたかったことって死神と滅却師のキューピッドやったん？」

「…それより浦原喜助だ。あの男が現れなければ全てが水泡に帰すぞ」

「せやなア、敵同士の仲人なんてやつとる暇ないで？」

次の段階に移った雛森桃の計画。再度気を引き締めた少女は、何やら仲間の懸念とは別の心配をしているように見えた。

「…ちよつと野暮用が出来ました。浦原喜助はあの人が虚化を発症したときに現れると思います。引き続き監視してくださいっ」

「ちよ、桃ちゃん？ …あア、行ってもうた」

箱から取り出した妙な装置や物体を懐へしまい、白い死覇装を着た義骸に入った雛森が観測施設を後にする。その背を困った顔で見つめる市丸は内心今日の彼女が起こした数々の偶然に、小さく唾を呑むのであった。

空座町。

奇怪な事件が多いと最近評判な、オカルトマニアに人気の町だ。その正体は数十年から百年ごとに移り変わる龍脈の間欠泉、重霊地。先天的あるいは後天的に高い霊力を有する人間が数多く誕生するこの

地に、一人の男が居を構えていた。

名を浦原喜助。

かつて尸魂界で事実無根の罪を擦り付けられ祖国を追放された元護廷十三隊十二番隊隊長にして技術開発局局長である。卓越した頭脳で数々の発明を生み出した彼は、百年に亘る一大難問に挑んでいる。

虚化。

それは対象の魂魄に虚の魂魄を流しこみ、二つの魂魄間の境界線を破壊することで高次元の魂魄へと昇華させる野心的な試み。だがあまりに危険なそれは通常、自身と虚の魂魄が混在した状態となり理性を失った怪物となる。最終的には魂魄と外界との境界をも破壊し、魂魄自殺を引き起こす。この世の理に反した目論見は人の身に制御出来る技術ではなかった。

そしてその日、天才はある患者を救おうとしていた。

「——その子を助ける選択肢を教えます」

意識の無い一人の女学生を抱え、言い争う二人の青年たち。片や死神、片や滅却師。異色な組み合わせながら互いがその少女——黒崎真咲を思いやり、なんとか助けることは出来ないかと苦悩していた。

浦原がそんな彼らを案内したのは自宅の秘密研究所。そこで彼は、二人の青年の片割れに唯一の希望を指し示す。大きな犠牲を伴う、最終手段を。

——わかった、やる。

だが返って来たのは、即答。

浦原は微塵の迷いもなく己の栄光、力、軌跡の全てを捨て去る決意をした男、護廷十三隊十番隊隊長・志波一心に驚いた。彼は未練を認めながらもこの女学生の命を選んだ。未練に囚われ恩人を見殺しにした己を、明日の自分は笑うだろう、と…

「必ず助けます」

そうして始まったのは、少女——滅却師の真咲と相反する存在である死神の一心の魂魄を、自作の義骸同士で繋ぎ合わせる作業。魂魄自殺が注ぎ込まれた虚の魂魄によって飽和破裂する原理ならば、それを抑える真逆の力があれば崩壊は食い止められる。

そのはずだった。

「——何なんスか、この虚は……！」

真咲の魂魄を辛うじて無事な霊性設備で分析しながら、浦原は焦燥に脂汗を滲ませる。周囲には室内を滅茶苦茶にする猛烈な霊圧風が吹き荒れ、患者の口から嘔き出る白い虚髄は既に彼女の顔の殆どを覆っていた。

ありえない。真咲の義骸と霊的に連結した死神、志波一心は護廷隊の隊長なのだ。最高峰の霊圧を持つ魂魄が抑えきれないほどの存在。かつて治療した八人の患者たちとは次元の違う毒性に蒼白になる浦原。

一心から聞いていた怖ろしい虚の姿が脳裏に過る。まるで大虚、それも最上級大虚ヴァストローデと戦っているかのようにだったと振り返る彼に、天才はまさかと息を呑んだ。

もしこの状況が偶発的なものでないのだとしたら、例の虚の真価は「噛み付いた相手に寄生し強制虚化させる」能力になる。

隊長に卍解の使用を強いるほどの上位最上級大虚ヴァストローデに寄生された滅却師。その末路を想像し、浦原は無力感に臍を噛む。

その時、動揺する彼の背後から突如巨大な霊圧が飛んできた。

『——起動』

あまりに大きな術。咄嗟に瞬歩で距離を取ろうとするも間に合わず、浦原は侵入者の先制で囚われてしまう。

使われた術は黄光の結界。一瞬でそれが大虚の使う反膜に類する

ものだと見抜いた彼は、杖の斬魄刀を構え相手と結界越しに対峙する。

『こんにちは、浦原喜助さん』

その人物は小柄な女だった。

白い死覇装を着た、虚の仮面という風体。外にはもう一人の滅却師の青年がいたはずだがどうやって彼の目を欺いたのか。浦原は敵に自分の拠点へ忍び込まれた驚愕すべき事実を認め、何とか脱出する方法はないか知恵を回しつつ努めて冷静に対話を試みた。

「…何者ツスか、お嬢サン」

『そうですね、では“読書家”とお呼びください』

霊圧を全く感知出来ない人間…否、おそらく特殊な義骸に入った霊体か。強力な認識阻害術のかかった彼女の声紋は複雑で、かなり若い声と言うこと以外全くわからない。

「読書がお好きそうな方には見えませんツスけどねえ」

『好きですよ？ 普通の本もよく暇なときに読みますけど、文字の羅列じゃない本はもつと好きです』

「…お若そうなのに禅問答もお好きなようだ」

女が「そうですね」とクスクス笑う。

不気味な人物だった。

風容といい明らかに此度の患者——黒崎真咲や彼女に寄生した例の最上級大虚ヴァーストローデと関わりのある者なのだが、何故か一切の敵意を感じない。自分を捕らえる結界への慢心とも違うようだ。

「…で、読書家サンはアタシに何の用ツスか？」

『黒崎真咲さんに住み着いている虚・ホワイトの扱いについて、少し浦原さんと取引しに来たんですよ』

「…」

やはりか。浦原は巧妙に隠しつつ警戒心を高め、真意を探るべく相手の言葉を待つ。

だが女は何も語らず、おもむろに懐から奇妙な物体を取り出した。

『これを志波一心さんの義骸の中に入れてください。死神の力を黒崎真咲さんの魂魄へより効率的に注ぐことが出来ます』

「！それは…ッ」

浦原は遂に平静の仮面を捨て去る。虚化の制御技術は彼が長らく専門としていたもの。しかしこの女はその内容を全て正しく理解しており、尚且つその解決に必要なものを既に用意していると言う。

「…信じるとお思いで？」

『そうですか、なら仕方ありませんね』

カマをかけると女は予想外の反応を見せた。早々に交渉を諦め自ら真咲の下へと近付いていく。あの荒れ狂う霊圧を物ともしない。

何をするつもりかと問い詰めれば『心得はあるので自分でやります』と勝手に一心の義骸の鎖結に位置する部位へ例の物体を浸透させ始めた。相当な経験があるのか手慣れている。

「…！」

『成功です』

そしてすぐに、暴走状態の真咲の霊圧が落ち着き始めた。

技術者同士の対話に必要なのは言葉ではなく結果だ。物理的な距離を繋げる霊的な接続は容易な技術ではなく、それを手渡すとなるとこの一連の話の信憑性が大きく変わる。

事実安定しつつある様子を見るに、あれで真咲が救えるというのは本当なのだろう。

「…対価は？」

そう問うたのは技術者としての意地か。時間さえあれば自分でも然るべき装置は必ず用意出来た。だがこの場で真咲を救ったのはあの女。たとえ自作自演なのだとしても、持ちかけられた取引を断ったのは己なのだから。

『守秘義務。十年くらい経ったら流石にホワイトも大人しくなるでしょうけど、それまでは誰にも内緒でお願いします』

「えらくおおざっぱな期限ツスね。…まあ、わかりました」

対価とさえ呼べないような要求に浦原は相手の真意を量りかねる。罪滅ぼしか、あるいはただ機械的に自分の仕事を行っているだけなのか。いずれにせよ、当初の極悪人の印象は薄れていた。

『…あまりヘンに調べたりしたら壊れますからね？ 気持ちはお察し

しますがその機器は一個しかないので大切にしてくださいよ?」

「いやア、読書家さんは何でもお見通しツスねえ。”読心術師”にでも改名したらどうツスカ?」

『ヤですよ、そんな胡散臭いの。死ぬまでネタにされますって』
肩を抱きながら呆れて失笑する少女。その姿に浦原は形容し難い違和感を覚える。

間違いなく初対面だと言うのに、まるで知人友人と話しているかのような奇妙な親しきで接してくる相手。それでいてどこかこの状況を愉しんでいるような無垢な悪意を滲ませる、何かが根本的に人とはズレているような狂人にも見えた。

「…この事件はアナタの作業ツスね、何故こんなことを?」

『必要なことだからです。この世界にとつて』

意を決し核心を問えど、返って来たのは抽象的な答え。だが問いを煙に巻こうとしているような雰囲気ではない。本当に事実、本人がそう信じているような落ち着いた声だった。

己の勘に従うなら、この少女は一切の嘘をついていない。機器も真に真咲を救うためのもので、またこの悪質な事件を起こしたのも何かしらやむを得ない事情があったのも事実。少なくとも明確に敵対するつもりではなさそうだ。

無論、味方とも思えなかったが。

——ではまたいずれ。

そう言い残し、少女が一瞬の発光と共に結界を解除する。視界が晴れた後に彼女の姿はどこにもなく、浦原は胸の憤りを溜息で吐き捨てた。

ふと彼は思う。

もし、あの少女の虚化技術が、因縁の巨悪——藍染惣右介に由来するものであれば…

「…戦力予測の見直しが必要ツスね」

治療の成功に喜び合う一心と真咲へ微笑みながら、浦原は内心、果ての見えない敵の巨大さに戦慄するのだった。

「…ホンマにあの滅却師、生き残りはった」

「まさかここまで上手くいくとは…」

画面を見つめる三人の男たちと、一人の少女。野暮用とやらから戻った彼女——雛森桃はほくほくの笑顔で現世の菓子袋を開けていた。

その満開の花のような笑みは計画の全工程が無事終了した合図であった。

「——さて、そろそろ我々も決行に向けて動くでしょう」

『！』

緩んだ空気が男、藍染の一言で凍り付く。一人一人、三人の同胞たちへ視線を送る彼の目には、悦に揺れる暗い瞳。

「浦原喜助の居場所も割れた。平子真子たちも直に見つかるところだろう。全ては我等の掌の上となった」

王の嗤いに、市丸は思わず息を呑む。あらゆる想定を終えた叡智の権化が、遂に決断したのだ。

「我々の計画の決行は——」

画面の中で仲睦まじく見つめ合う元死神と滅却師の男女を睥睨し、藍染惣右介はそう宣言した。

——二十年後だ。

虚無イイイイ！

ホワイト事件が無事に終わった。

あたしは長らく頭を悩ませていた問題が一段落したことに胸を撫で下ろし、協力してくれた破面アランカルの部下にお礼をしに虚夜宮ラスノーチエスのキモい緑豆大福型の研究所に足を運ぶ。

「——ありがとうございます、ザエルアポロさん。経過観察は必要ですが多分成功したと思います」

「それはそれは、おめでとうございます軍団長閣下。私も新たな力の研究が順調ですので直にまた閣下の指揮を賜る名誉を頂戴しに参りましょう」

「わあっ、”エスパーダ十刃”復帰ですか！ 楽しみにしてますねっ」

インテリな美青年スマイルとキュートな美少女スマイルが交差する。大変絵になる光景だが言葉の裏に籠る意味は実に邪悪だ。あとその「新しい力ガブリエール」とやらの詳細は女として聞きたくないので一生黙っててください。

「それとロカさんの件ですが今後も東仙隊長の研究室へ派遣して貰ってもいいですか？ あの人の能力はとても助けになったので」

「お望みとあらばいつでも。元より廃棄しようと思っていたところで」

「そ、そうでしたか…」

有能な部下への扱いが雑なのは自分の新能力への自信の表れなのだろうか、ロカかわいそず。

このロカ・パラミアの話は彼女の【反膜の糸】の力を我々DJ側の研究施設で借りられないかという打診だ。色々面白いことが出来るのでDJラボの派遣研究員に採用です。

ホワイト計画で一護パツパの義骸にぶち込んだ霊力転送装置もこの【反膜の糸】の応用で、一護マツマの義骸とパスを繋いでより効率的にパツパの力を注ぎ込めるようにしたもの。元々パツパはホワイ

トより強い死神なのだから霊力量は最初から問題なく、あたしはただ浦原さんがもつといい霊力転送装置を作るまでのつなぎになっただけだ。ザエルアポロは「一日で作った玩具」と言っていたが、そのうちの殆どはブラックボックス化に費やした程度のもので、らしいので原理自体はシンプルなのだろう。詳しいことは知らない。

「ところでノイトラさんが何やら不穏な動きをしてるようですが、ザエルアポロさんは何かご存じですか」

ふと、思い付いたことを脈略なく尋ねる。すると少しの間を置いてザエルアポロが答えてくれた。

「…ええ。ネリエルと仲が悪いようでして、彼女を排除しようとしている様子。ですがあの獣は閣下の御威光に平伏しておりますので気になさる必要はないでしょう」

あ、その話もう上がっていたのか。ということは今コイツあたしとノイトラ、ひいては自分の”十刃”の座を天秤にかけてあたしの信用を選んだな。いや「気にするな」とも言ったしどっちに転んでもいいようにしたか。

くっ。ネリエルいい子だが、これも葦名…じゃなかった原作のため

…

「別にネリエルを排除しても構いませんよ?」

「…おや。彼女は閣下随一の臣と伺っておりましたが?」

”十刃”は強さが全て。決闘だろうと闇討ちだろうと不覚を取る弱者に第3十刃トレス・エスパーダの地位は重すぎます」

ネルちゃんを一護と出会わせる布石を撒いておく。というかみんなそんなにあたしに遠慮してんのかよ。するくらいなら原作通り動いてくれ、頼むから。

致し方無し、ちよつと軌道修正するか。

「それに”十刃”は藍染隊長の戦力として組織された軍団です。藍染隊長じゃなくあたしに忠誠を誓ってしまってるネリエルさんは、その…そうですね、不適切な人材…ということだ」

「…なるほど。真の臣とはまさに閣下のこと。御見逸れいたしました」

うるせえ皮肉かメガネ割るぞ。” 真の臣”とか全く巧くねえよ。すまぬネリエル、これも全部あのリヨナ好き最高神が悪いんや…

最低限の詫びだ、代わりにこちらを気を付けてください。

「殺すのは絶対に止めてくださいね」

「閣下の御慈悲、確と承りました」

仰々しくパトロンへ礼をするザエルアポロへ何とか笑みを作り、あたしは彼の研究所を後にした。

完成した虚^{ラスノーチエス}夜宮の青空の下を歩きながら今後の展開について考える。

今回のホワイト計画で起きる表面的な変化は、実はそう多くない。あの虚の魂魄には幾つか細工が施されており、そのうちの一つが【牙錠封印】。仰々しい名前だが、ようはカギと鍵穴のように後で外部から力を封印しやすいよう事前に準備がされているのだ。

霊能の継承遺伝というのはそれなりによくある事象で、例えば七緒ちゃんの家などは女系男難の呪いとそれを引き起こす斬魄刀という先天的・後天的な二つの因果がある。

あたしはこれを参考にして白陣営の頭脳派たちと一緒にカギのような封印を作り、その鍵穴をホワイトの魂魄に埋め込んだ。あとは一護が生まれてから先天的に有しているその鍵穴へ、あたしが後天的にカギを差し込めば封印は完璧となる。

ここに完現術^{フルブリンク}の力を活用した。

この鍵穴とカギは一つの魂魄——霊王の欠片を二つに割って作られている。両片は一度合わせば元の霊王の欠片として再生し、その欠片を一護の魂魄から抜き取れば封印は解除される仕組みだ。なので一護がホワイトの真の力を使えるようになるのは銀城空吾^{ぎんじょうくうご}により完現術の力を抜き取られた後——つまり千年血戦篇以降になる。

よって、あたしが関わるヨン様篇では一護の状態は原作とそう変わらないはずだ。内なる虚に悩まされる頻度が多少増え、その対価に多

めに力を引き出せ、彼の総合OSR値が上がるくらい。ストーリー上の大きな変化とはならないし、何よりオサレ漫画の主人公がよりオサレになるというのは読者として歓迎すべきではなからうか。

：まあ隠す程のことでもないので本音をぶっちゃけると、あたしはオサレポイントバトル信者である。

そして千年血戦篇で我が物顔で大暴れする【ヴァンデンライヒ見えざる帝国】の皆さんの能力TUEETUEEバトルにはちよつと異議を申し立てたい系読者でもある。成る程、チョコラテ・イングレスか。

そう拗ねていた最中、主人公誕生の切っ掛けの全てを起こすはずのヨン様がそれをサボりやがった。代わりにあたしがやる羽目になったら：やるべきことは一つだよなあ？

というワケであたしは彼らがイキりまくる千年血戦篇へ【ホワイト強化】という一石を投じることにしたのだ。

ふん、新参の滅却師共め。あたしたちのオサレ主人公舐めんじやねえぞ。ホワイトくんだつて陛下に奪わせねえからなあ？（フラグ）もしあたしがヨン様敗北後も何かの拍子で生き残ってしまったら、虚圏か現世に潜伏して原作再現を一切考えないフリーダム転生ライフにチャレンジしてみたい。見えざる帝国進撃時には破面のみんなを連れてどっかに避難しようぜ（戦略的撤退）

余生にも楽しみを残す完璧な人生設計、転生者の鑑かな？

さて、一護の封印の続きは彼が生まれてからだ。

それまでにあたしは原作展開と「雛森イイイイ！」に必要な残りの準備を終えよう――

——何も無い。

常闇の中、命が生まれた。

七人の闇の墮仔たち。互いを貪り、喰らい、鬪争に明け暮れる黒獣の一党。

その中に、一人——”白”がいた。

牙も、舌も、口さえも持たないその”白”は、六人の墮仔たちが死に絶え、朽ちる、深い闇の中で、ただ一人、白く浮かんでいた。

——何も無い。

ふと。”白”の唯一にして、たった二つの目に、一筋の光が差し込んだ。

闇の果て。未知の導。そこに何かを求め、”白”は闇を這い上がる。

辿り着いた先には白があった。

変わらぬ闇の底に浮かぶ、白い砂漠の果てなき大地。

だが触れる指先は殻に覆われ、熱も、冷たさも、さらさらと零れ落ちる微粒の白砂も、何一つとして”白”の生に意味を成さない。

この身にある、たった二つの目に映るものがこの世の全て。

されどそこに如何なる美も情も理も見出せず、”白”はただ、果ての無い白の大地を歩き続ける。

時折目にする獣たち。口を持ち、鼻を持ち、砂に・大気に・血に・肉に・骨に・己に——何かに触れることが出来る者たちがやってくる。それらを都度々々薙ぎ払い、”白”は彼らに問いかけるのだ。

己にないソレらで何が見える、と。

答えなどない。獣に言葉などなく、言葉を解す獣も獣に相應しい無意味な単語の羅列を叫ぶのみ。無意義で無価値な、空虚な存在。それがこの世全てであった。

——何も無い。

白の大地の果てに”白”は見る。空の闇すら覆い尽くす——深く白い森を。

辺り一面、己と同じ、白の世界。

天と地を別つ黒はなく、獣も、砂も、大気を揺らす風もない、虚ろな地。

この世で最も無に近いその森で、”白”はその身を横たえる。

景色が溶け、音すら聞こえず、時の流れも、自分の名も、自我さえも消えて行くような常白にうずまり眠る、白き闇の墮仔。

何もかもが白に染まつていく中で、何もかもを手放していく”白”は、そこに初めて——生の幸福を覚えていた。

——パキリ。

音だ。

無に溶けゆく”白”が、その世を聞く。

パキリ、パキリと近づく音。石英の森に響く、無の終わり。

そして果てしない白の世界に、かつての常闇に反を転じる——”黒”を見た。

「——やっと見つけました」

人だ。

木でも、砂でも、獣でもない。言葉に意味を持たせ、触れるものに意味を見出し、”白”には見えない世界を見る、一人の”黒”。

——誰だ。

”白”が問う。

「あなたは何？」

”黒”が問う。

——虚無だ。

”白”が答える。

「愉悦です」

”黒”が答える。

「世界にはたくさん景色があります。目に見えるものに意味を見出だせないなら、見えないものに見出だせばいい」

——見えんものなど信じん。

「信じられますよ。何故なら希望も絶望も幸福も不幸も、それら全てが目には見えない世界の一部。人だけが持ち得る、人を人たらしめる人の証——

心なんですから」

——心…

”白”は脳裏でその言葉を想起する。目に見えないものなど存在はしない。それはこの世に、己の生きる視界せかいにあるものではない。信ずるに足りぬ、空虚な幻想だ。

「でしたら他のものを教えましょう」

——何。

”白”は、目の前に腰を下ろした”黒”を見る。口を持ち、舌を持ち、鼻を持ち、皮膚を持ち、何もないこの世に意味を見出す、人。目しか持たない己に欠けた全てを持つ、人。

「あなたに口を与えましょう。あなたに歯を、舌を、鼻を、皮膚を与え

ましよう。あなたが知らない世界をたくさん見せてあげましよう。この世は白と黒の箱庭ではなく、数えきれないほどの幸福と不幸に溢れているのだと。世界とは、その目に映るものよりもっともっと広いのだと。それら全てを見て、触れて、食べて、嗅いで、感じてみましよう。あなたが心の在りかに気付く、そのときまでに」

”白”は目を見開く。己の世界の全てを開く。

”黒”は笑っていた。満面を使った影なき顔。それが”白”の生まれて初めて見る、人の笑顔だった。

「あたしは雛森桃。あなたの世界を広げる水先案内人です。あなたのお名前を聞いてもいいですか？」

目の前に、白い手が差し出される。その白はあの白い砂漠とはまるで違う、生きた人の肌の白。爪に、殻に覆われた己の手で触れたそれは、臆さず、傷一つ付くことなく、優しく”白”のそれを握り返してきた。

この世には何があるのか。獣ではないこの”人”が、死神が、見せてくれるというのか。

虚無ではない、この世界を…

——ウルキオラ・シフアーだ。

かくして”ヘネラーリヤ・デー・エスパーダ十刃”クアトロ・エスパーダ軍団長・雛森桃が四十年もの年月をかけ探し出した最後の一人、未来の第4十刃は、藍染惣右介の軍門に降った。

種蒔イイイイ！

志波一心失踪事件より月日は流れ、十番隊に彼の名を知らぬ者も増えた。

長寿の死神たちの世においても十余年の年月は変化をもたらし、先に未来を約束された少年——日番谷冬獅郎は彼の後を継いで隊の隊長となっていた。

「…ふう」

隊首室の執務机に散らばる書類を几帳面に整え、冬獅郎は椅子の背に凭れかかる。武人らしい質素儉約な室内。彼の想起する”剛健質朴な強い男”に相応しい自室だ。

「フツ」

思わず零れる笑みは長年の夢が叶った喜び故か。就任に伴い激務の日々が続いていたが、ようやく余裕が出来た冬獅郎は予てより抑え込んできた達成感を改めて噛み締める。

やつと、やつと胸を張れる強さを手に入れた。

男という生き物は単純だ。鬪いに身を置く死神なら尚の事”強さ”に神聖な何かを見出すもの。だが冬獅郎はそれとは異なる、もう一つの男らしい単純さからその二文字を我武者羅に求めていた。

大切な女を守るといふ、とても純粋な目的によって。

「…ふん」

だが懐の手紙を読み返す彼の顔はしかめっ面。手にしたソレは、大事な約束を交わし…たワケではないが、とにかく張り合っているあのアホ女からの便り。梅の押し花が添えられた可愛らしい便箋には冬獅郎の昇進を称え喜ぶ言葉はあれど、彼が本当に望む言葉は影も形も無かった。

「——さつきから何ふんふん一人で百面相してるんですか？ たいちよー」

「ッうおおっ!？」

突然横から聞こえた人声に冬獅郎は飛び上がる。

「まっ、松本……! てめえいつから……」

「最初からいましたよ? 隊長がついにカノジヨを守れる立場になった満足感に笑ってたり、カノジヨからのお手紙に不満を零してたり——」

「し・て・ね・えッ!」

「あたっ」

凶星を怒りで誤魔化し、サボリの常習犯——松本乱菊へ終わった書類を叩き付ける。いつ見ても重そうな甜瓜を二つ胸にぶら下げる軟派な金髪の女。恩あり恨みありと、長い付き合いなこの腐れ縁の死神が上司から部下に変わってしばらく経つが、思えば一度たりとも違和感を覚えたことはない。

あるべき姿に納まったと頷くことも、隊長になって最初に覚えた充足感の一つであった。

「……それ持つてついて来い」

「あ、一番隊へ提出するやつ。隊長あたしの代わりにやってくれたんですね!」

「次から自分でやれ」

放っておくといつまでも仕事をしない副官を引き連れ、冬獅郎は十番隊隊舎を後にする。向かう先は、以前の三席の頃は縁がなかった護廷隊本部・一番隊隊舎だ。

雑談を交わしながら目的地へと歩く二人。だが総隊長執務室へ赴く途中、冬獅郎は回廊の先に現れた二人の人影に思わず足を止める。

「——あ、シロちゃんっ! 乱菊さん!」

ぱあっと花が咲くような笑みを浮かべる小柄な少女。懐の手紙の贈り主である年上の幼馴染——五番隊副隊長・雛森桃だ。

隊長就任以来初めて顔を合わせる喜びと誇らしさが冬獅郎の胸を駆け巡る。だが彼の澄ました顔が緩んだのも一瞬。理由はその大切

な幼馴染を侍らせて歩く一人の男の存在にあった。

「やあ、こんにちは。日番谷隊長に松本副隊長。君たちも定例報告かい?」

柔和な笑みを浮かべ挨拶をしてくる、自信に満ちた佇まいの人物。腹が立つほど整った顔と、高い身長。低く、されどどこか色気を含む甘い声。聡明な印象を与える黒縁の眼鏡をかけ、品の良い香水の香りを漂わせる、瀟々たる一的美男と呼び声高い五番隊隊長——藍染惣右介。

幼馴染の、雛森桃の憧れの男だ。

小さなムカムカを腹の奥底へ嚙下し、冬獅郎は軽く会釈し挨拶を返す。そしてすぐに本命の少女と向き合った。

「わあつ、隊首羽織似合ってるねシロちゃ——あ、えつと…ひ、日番谷……隊…長…」

「どんだけ呼びたくねえんだよ、てめえ…」

長い葛藤の末、拗ねた声で雛森が口にした呼称は何とも他人行儀なもの。少年は彼女の往生際の悪さに怒りを通り越して呆れ返る。

「むう、だってなんか負けた気がするし…」

「”負けた気”じゃなくて”負けた”んだよ、雛森副隊長?」
「!？」

意趣返しにからかってやると、雛森がまるでハトが豆鉄砲を喰らったような顔をした。いい気味だ。

「むううーっ! 乱菊さんっ、ウチのシロちゃんが調子に乗って今まで以上に生意気な子になっちゃってますっ! お姉ちゃん悲しい…っ」

「好きにさせときなさい雛森。素直に階級を偉ぶれるなんて純粹なガキの内には出来ないことなんだから、ねーシロちゃん?」

「てめえら霊術院でもう一度上官への礼儀ってモンを学び直してこい」

同じ憤りを覚える親友同士の女共が結託していつもの”シロちゃん遊び”を始める。こんなとき、冬獅郎はいつも一人で抵抗するハメになるのだ。

「——その通りだよ、雛森君」

だが、此度は彼の味方をする者がいた。この場の最年長で、他隊の隊長に無礼を働いた部下を叱れる、礼節を良く知る死神の鑑たる男が。

「藍染隊長……！」

「親しきことは何よりの宝。だけど上官への失礼な態度は感心しないな。公私は弁えなさい」

「す、すみません……」

途端に恥じらい萎縮する雛森。初めて見るそんな幼馴染の姿に冬獅郎は思わず目を見開く。素直に「失礼しました日番谷隊長」と、藍染と共に謝罪してくる彼女へ、少年は生返事を返すことしか出来ない。

だが直後、冬獅郎は硬化する。藍染が萎れる雛森の肩に、あろうことか馴れ馴れしく手を置いて彼女へ微笑んだのだ。

「フフ。わかればいいんだ、雛森君」

「あ、藍染隊長……っ」

紅潮した顔で上司を見上げる、大切な幼馴染。

休みが被った日、いつも実家で憧れの藍染隊長のことを語っていたとき以上の、まるで恋する乙女のような顔。

「では僕はお先に失礼させてもらおうかな。若い君たちの邪魔をしたら悪いからね」

「な……あ、藍染隊長だってお若いですよっ」

「フフ、ありがとう雛森君。なら家族との時間と言うべきかな？」

「ゆっくり戻っておいで」

「あう……藍染隊長……」

気を利かせたつもりなのだろう、一人で帰ろうとする藍染を雛森がぽーっと見つめている。一度も冬獅郎には向けてくれない、その顔で。

穿ち過ぎた見方なのは承知のこと。だが藍染の後ろ姿が、まるで「お前は土俵にすら立っていない」とでも言っているように見えてしまい、屈辱に吞まれる冬獅郎は散々引つ掻き回してくれたあの男に何

か言い返さなければ気が済まなかった。

「——家族じゃねえ」

思わず口にしてしまったのは、そんな幼稚な反論。ぐつぐつ煮え滾る苛立ち、焦燥、敗北感に足掻く無様な男の意地は、されど当然笑いのネタとなる。

「…ぶっ！」

「ツな、松本オツ！」

「あははははは！ たいちよーソレはないですよおー！ はー、はー、あーお腹よじれるー！」

「てめええええッ！」

耐え切れず嘔き出した副官の松本を羽交い絞めにし、八つ当たりする冬獅郎。そんな笑いながら書類を片手に総隊長執務室へ逃げ出す松本に苦笑する藍染は、その端正な眉で山形を作っていた。

「何か気に障ることを言ってしまったみたいだね、すまない日番谷隊長。また今度お詫びさせて欲しい」

困った顔で最後にそう謝罪した藍染は、悠然と一番隊隊舎を去って行った。

冬獅郎は、男の堂々とした背中に己の矮小さを思い知らされた気分になり、想い人と共に残された彼は敗北感に唇を噛むことしか出来なかった。

「…ちっ、これでも一人前の男じゃねえって…あいつを超えろってのかよ…っ」

思わずそう小声で悪態吐く冬獅郎。

やつとコイツの席次を超え、隊長にまで上り詰めたというのに、まだ力を認めさせるには至らない。守ることを許してもらえない。

彼が望むその立場に既に別の男が立っている事実を突き付けられた少年は、超えなくてならない壁の大ききさについ弱音を零してしま

「——じゃあや」

そのとき、ふと隣から幼馴染の声が聞こえた。

「ッ、なんだよ……」

「じゃあ、今度あたしがシロちゃんが一人前の男になれたか試してあげる」

まるで駄々を捏ねる子供をあやすような、大人びた声。

一瞬何を言われたのかわからず、脳裏で二度三度と復声した冬獅郎は——

「ああ？ ……、……はああアアツ!？」

——思わず耳まで赤くし驚愕の悲鳴を上げた。

「ひやつ！ え？ な、何でそんなに驚いて——」

「ぼっ、てめッ！ 自分でナニ言ってるのかわかってんのか!？」

「え……あれ？ ……あっ」

女として迂闊に過ぎると叱咤すれば、数秒の思考の末ようやく自分の失言を悟る無防備アホ桃。自分の身体を抱き締めリングのような紅顔で彼女が捲し立てる。

「ち、ちちち違う違う違うよっ！ そっちの意味じゃ——ってなんでそっちの発想になるの!?! シロちゃんのえっち!!！」

「てっ、てめえがヘンなこと言うからだろうッ!?! 女が大の男の前でなんてことぬかしてんだっ、このアホ!！」

「アホじゃないもん！ 大体あなたのどが大の男よこのマセガキッ!！」

「誰がマセガキだクソアマ表出やがれ！ 今日こそどっちが上か白黒つけてやる!！」

「なっ、ヒドい！ 最低！ 男のクセに！ 隊長が副隊長に暴力振るおうだなんて！ ちよくつとあたしより出世したからって調子乗っちゃって!！」

「人聞きの悪いこと言ってるじゃねえよ！ つか都合のいいときだけ男扱いすんな卑怯者!！」

ぎやーぎやーケンカする冬獅郎と雛森。どこか昔を思い出す幼馴染との変わらない触れ合いに、少年は胸に溜まった嫉妬の汚泥が消えて行くのを幸せに感じていた。

「…あたし、もう少ししたらしばらくおばあちゃん家に帰れなくなるんだ」

息を整え、暫しの沈黙の後。ふいに雛森がそんなことを呟く。

「…現世の長期任務か？」

「ふふ、秘密っ」

茶目つ気を見せながらはぐらかす幼馴染。しかし冬獅郎はその顔に、何か触れてはならない彼女の悲哀を見た気がした。

「だからその前にチャンスをあげる。あたしが見直しちゃうくらい、かっこいいトコ見せてくれたら…」

「雛森…？」

穏やかで。静かで。

いつもの彼女らしくない、形容し難い悲しい影が滲む笑みを浮かべた幼馴染は、一方的にそんな約束をしたのだった。

「——あなたに守ってもらおうかな」

SS イイイイ！ 篇
再誕 イイイイ！

——おねえちゃん、だあれ…？

忘却の彼方へと消えていた、顔も声も覚えていない誰かと交わしたはずの、大切な約束。

激痛が体中を走る。意識が混濁し消失していく恐怖感に吞まれる中、ふと、少年の脳裏に朧気な遠い昔の記憶が過った。

とある胡散臭い商店の地下に広がる巨大な空間、通称・勉強部屋。
シャッタード・シャット
絶望の縦穴を名する大穴の底で、一つの魂魄が虚と化そうとしていた。因果の鎖が断ち切られ七十時間。ついに六度目の鎖の侵食が始まり、おぞましい白の虚髄が形作る仮面の奥で少年は恐怖に絶叫する。

嫌だ、死にたくない、消えたくない。

己の望みも、救うべき大切な恩人の、友人の、家族のことも。何もかも悉く絶望に塗りつぶされていく。

堕ち行く意識は耐え切れず、遂に事切れた——かに思えた直後。

少年は一面が青と白の二色で出来た、不思議な世界で目覚めていた。

「——聞こえるか、一護」

遠くの誰かの声が鼓膜を震わせる。見渡す限りの青い段差と、空と雲が直角に反転した異様な空間に連れ込まれた少年は、そこで一人の黒ずくめの男と出会った。

「…誰だ、あんた？」

名乗る男は声に哀愁を漂わせる。いくら叫べど名前だけが届かない。お前は誰よりも私を知っているはずだと言うのに。

そう落胆する男に少年はまず、話の内容より彼の佇まいに驚愕した。

何故、あのおっさんは地面と直角に立っているのか。その事実に関心した直後、少年の身体が強烈な浮遊感に包まれた。

「なっ、うわあああああ!？」

彼が座っていたのは地面の段差に非ず。無数の巨大な摩天楼の壁面の一つだったのだ。

復活した重力に幻想が敗北し、無人の大都市の地面へと落下を始める少年。その隣を黒ずくめの男が並んで飛翔する。

「安心しろ。死神とは死を司るもの。多くの霊なる者を支配する」

「ッ、俺はもう死神じゃねえ！ 落ちたら死ぬんだ！ 俺の力はもう、ルキアを連れ去ったヤツに全部…ッ！」

我が身を鑑みながらも、渦巻く屈辱は抑えられない。

少年は先日、虚^{ホロウ}という悪霊の化物に襲われ、そこで死神を名乗る少女——朽木ルキアの身体を張った戦いに救われた。傷付いたルキアよりその力を受け継いだ少年は、されどやむを得ず法に背いた彼女を処罰すべく連れ戻しに来た貴族の兄——朽木白哉の手により死神の力を消し去られてしまった。

「それは違うぞ、一護」

「何…?」

無力感に苛まれる彼に男が語る。

朽木白哉は妹が少年へ与えた力のみを処分した。だが彼は油断し見落としたのだ。一護自身が最初から死神の力を有していたという可能性を。

朽木ルキアに与えられた力によって目覚め始めたそれは、朽木白哉

の刃が届く前に少年の魂の奥底へと姿を晦ませた。

「——さあ、探せ…… 隠れ去った死神の力を探し出せるときがあるとすれば、それはこの世界が崩壊を始めた今をおいて他にない！」

そして少年の視界の中に、無数の小さな箱が降り始めた。

己の生まれ持つ死神の力が眠るのは、その那由多の中のたった一つ。世界が崩れ水底へと沈む中で突き付けられた無理難題に、一護は諦めにも似た達観の心境で漠然と希望を探していた。

そして彼は、あの嫌味な眼鏡の同級生の言葉を思い出す。

「——ッ、それだ！」

思い付いた手段は【霊絡】の感知。鮮やかな赤い霊力を有する死神の霊絡は、平凡な白の帯に囲まれる彼の目に一目瞭然だった。

「見つけ——」

だが掴んだその赤色の霊絡を手繰り寄せる途中。

ふと少年は、まるで白色の帯の塊に隠れるように潜む——遠くの黒ずんだ別の赤い霊絡を目にする。

特別な意味などなかった。

ただ、無意識に引き寄せられるように、そのワインにも血にも見える不気味な色の霊絡に触れた瞬間……

——おねえちゃん、だあれ？

遠い遠い記憶の最果て。

どこかで聞いたような……否、訊いたような幼い自分の問いが頭を巡った。

『——おねえちゃんは、ご本が好きな人ですよ』

懐かしい、穏やかな若い女の声が耳に木霊する。

大好きな母を亡くした幼い男の子が、最後の思い出となった川辺で帰りを待ち続けていた暗い思い出。変わらない空虚な日々の中で起きた、小さな非日常。

…ああ、思い出した。

あのときと同じ冷たい雨がしとしとと降る梅雨の午後。少年は、不思議な年上の女の子と出会っていた。白い着物のような服を着た、本が好きだと微笑む中学生くらいのおねえちゃんに。

『大丈夫。怖くないよ』

ぼんやりとした頭で少女を眺める幼い彼。ゆっくりと近づく彼女は、テレビでも見たことがないようなキラキラ輝く綺麗なカギを握っていて…

——あえ？

見つめるその手が、スツと自分の胸元の、中へと食い込んだ。

カチリ。

身体の奥に響く、奇妙な音。

痛みも、怖さも、ヘンな感じは何もない。ただ、その音が体中に木霊した後、母が居なくなつてからずっと胸の中でざわついていたナニカが、不思議と静かになっていた。

——あれ…？ ぼく、なにを…

気付けば、体の中に埋まっていたはずの女の子の左手はそこには無く、代わりに優しく彼の頭を撫でていた。

『それはお守り。あなたが一人前になるまで、自分で自分を傷つけないよう大切に守つてくれる、おねえちゃんのお守り』

——おま…もり…？

少年は呆ける頭で聞き返す。すると女の子はニッコリと微笑み、口元に指をあて秘密の印を作った。

『うん。だからそれまで、みんなにはナイショよっ。』

小指を差し出し、指切りげんまんの合図をするおねえちゃん。誰も知らない謎めいた年上の女の子と交わす、秘密の約束。そんな不思議な体験に小さな喜びと勇気をもたらした気がした少年は…

——ない…しよに…する…

思えば幼い自分が母の死の喪失感から抜け出せたのは、あの日の出会いがきっかけの一つだったのかもしれない。

まるで幻のように消え失せた彼女へ向けて、少しのワクワクを胸

に、少年はそう呟いていた。

「——それに触れるな、一護」

はたと我に返った少年は辺りを見渡す。景色は元の水底に沈み行く大都市へと戻り、あの思い出の雨の川辺は既がない。

手元を見ると触れた赤黒い霊絡は途中で千切れており、続く先はもう数多の白い帯の奥へと消え去っていた。

「思い出せ、一護。お前は何のために戦う」

振り向いた背には、悲しげな目でこちらを見つめている黒ずくめの男。何故そんな当たり前のことを聞くのか。少年は言葉に力を籠め、今一度宣言する。

「…そんなの決まってるだろ。ルキアを助けるためだ！」

恩人を、仲間を助けたい。自分はその一心でここに居るのだ。

「そうだ。お前は仲間を助け、守るために戦うのだ。お前が手にする力はそのためにのみ存在する」

その言葉に少年は困惑する。まるで禁忌に触れるかのような扱いで彼からあの赤黒い気配を遠ざける黒ずくめの男。

そして彼が指差す最初の赤い霊絡の箱には、一本の斬魄刀の柄が埋まっていた。

「これって…」

「それならばお前にも操れるだろう。身を滅ぼすことなく、取り零すことなく、朽木ルキアを救い出せるだろう。思う存分、振るうがいい」
「身を、滅ぼすことなく…」

——あなたが一人前になったらね。

ふと、あの声が蘇る。まだ何か大事なことを忘れているような、そんな記憶を探ろうとした瞬間。

世界が一際巨大な地響きを上げ始めた。

「——何をしている、崩れるぞ……！」

「！」

「さっさと私を引き抜け、一護！」

押し流される水流に抗い必死に赤い気配の斬魄刀へ手を伸ばす。強い波動を感じるその柄を掴み、少年は黒ずくめの男に感謝しつつ己の新たな死神の力を手繰り寄せた。

左手で握ったもう一つの霊絡の残滓を手放さないまま…

代行イイイイ！

百五十年前。

この数字を見て西暦2020年を生きる日本人なら明治維新、欧米ならフランス第三共和政宣言を思い浮かべるだろう。そしてそれはあたし、雛森桃が日番谷冬獅郎を曇らせ「雛森イイイイ！」を聞くために生きることを誓った時でもある。

前世の母国ジャパンが貧困に喘ぎながらも涙ぐましい努力で封建主義から帝国主義の道に進み、戊辰・西南・日清・日露・第一次・第二次世界大戦を経て民主主義の道へと改め、戦後復興・高度成長・バブル崩壊・郵政民営化・リーマンショック・TPP・アベノミクス・コロナショックなどの経済的前進逆走迷走を体験し、幾度の震災害に苦しみながら歴史を築き上げている中、あたしはその同じ時間で一人せこせこシロちゃんに愉悦の種を仕込んでいた。

我ながら一体何をやっているんだと何度か正気に戻る度に首を捻り続けてきたが、正気などいざその時になれば百五十年越しの感動で簡単に押し流されてしまうものだ。

BLEACHだ。原作が始まったのだ。

「――十三番隊隊士・朽木ルキアを現世空座町駐在隊士に任命する」

浦原さんが崩玉の破壊に失敗し、代案に死神用の完全人間化義骸に埋めて現世に隠滅したがっている事実には早くから気付いていたヨン様は、海燕殿の死から未だ救われないルキアの心理を利用し原作通り彼女を一護の下へ送り付けた。

そしてあたしは暇な一〇と一緒に、あの原作最初のシーンを見届けるため空座町を訪れていた。

「…へえ、桃ちゃんこのために志波前副隊長さんをルキアちゃんに殺

させたん？ 相変わらずぜーんぶ掌の上なんやね、怖いわア」

「ちよつと、人聞きの悪いこと言わないでください。藍染隊長がサボるから色々あたしがやる羽目になっただけなんですって…」

あたしたちの視線の先には、高校生になった一護くんと、彼に死神の力の全てを奪われ啞然とするルキアちゃん。ああ、やつとここまで来れたのか…

ちなみに隣の一〇は感動に震えるあたしをニヤニヤしながら見つめている。なんすか。

「でも藍染隊長はどちらかと言うと偶然の出来事を必然に結びつけたがるお人やで？ 桃ちゃんは何もかも必然にせんと気が済まへんみたいやけど」

「あたしは藍染隊長ほど頭もよくないし自信家でもないんです。臨機応変になんて出来ませんし、あの人みたいに”偶然すら計画に利用してやる”だなんて強気にもなれません」

「凡人のボクからしたらどっちもどっちやけどなア」

全く。あたしはただ唯一神オサレ師匠の原作を再現しようとしただけなのに、諸悪の根源呼ばわりされるとは度し難し。むしろお前の本懐を遂げてくれるヒーローを用意しているのだから感謝されるべきではないだろうか。理不尽である。

「…藍染隊長のほう詳しいと思いますけど、崩玉って本当は持ち主の望みを叶える願い星みたいな物なんですよ」

「ありや、そうなん？ 死神と虚の境界を操る能力やって藍染隊長から聞いてたんやけど」

「それは浦原喜助がそういう用途で使おうとしたからそうなっただけみたいです。朽木さんをただの人間に退化させて現世で崩玉と一緒に隠れて欲しい、というのが今回のあの人の望みなので、おそらくそつちを叶えたんでしよう」

「…なんや思ってたんと違うなア」

一〇があたしを虐めるので嘘の解説で話題を変える。

ファンタジー作品定番の”願いを叶えるアイテム”というのは色々な要因で持ち主の望んだ結果を歪んで叶えることが多いが、この

崩玉は比較的素直な存在である。しかし崩玉の能力の正しい解釈は「持ち主の願いを叶える」のではなく「周囲の者へ望みが叶う道を示す」というもの。この”周囲の者”と、”道を示す”というのがミソである。

今回の原作イベは所有者の浦原さん、近くにいたルキアと一護。当事者全員の望みを最高の形で叶えている一例だ。

本誌のヨン様曰くルキアの心は海燕殿を殺した罪からの解放を望み、一護の心は単純に家族や友人仲間を守るための力を欲していたらしい。ルキアがああして力の全てを奪われたのは、浦原さんの企てを含む複数の願いがあったからだとか。それが崩玉の意志によつて勝手に具現化した”周囲の強い心”なのだろう。

現段階ではまだわかり難いが、原作だと崩玉にはなんか意思みたいなものがある。と言っても別に中の人がいるワケではなく、単純に誰の願いを優先的に叶える、あるいは叶えないかを選ぶ程度のものだ。これはまだヨン様も知らないことなはずだ。

尚、あたしはこうして原作再現のために方々を駆けずり回っていることを「お前の行動そのものが崩玉の意志だ」とか後で誰かにドヤ顔されたら癪なので、逆に開き直りこの場で「原作展開お願いします」と願掛けしておく。

「何しとるん?」

「いえ、あの願い星にお祈りしたらご利益ありそうじゃないですか」

「…桃ちゃん、たまにえらいアホになるんは素なん?」

これで原作通りに進まなかったらあの強化石、空座町凧揚げ大会参加賞【崩玉×1】として町内会に寄付してやる。

さて。原作最初の名場面が終わったが、死神代行篇でヨン様陣営が関わったイベントはまだまだある。

順序の次はアニ鯽でOVAにもなったあのグランドフィッシャー戦。ルキアがとてもヒロインしているあたしのお気に入りエピソード

ドで、こちらにも多少の違いはあれど大筋は再現できた。

グランドフィツシャーに限らず現世の虚をヨン様陣営に引き入れるのは情報漏洩が怖かったので、当面は破面軍アランカルの数字持ちヌメロスにフィツシャーを監視させるに留め、一護とルキアが出会った時点で彼らにも行動を指示。

「——アイスリンガーさん、デイ・ロイさん。例の虚と接触して、出来るだけ自然に黒崎一護の周囲で捕食行動を行うよう誘導してください」

『ははっ！』

「新たに指示を出すまでお二人の素性は…そうですね、虚の秘密教団とでも誤魔化して我々破面軍の存在は伏せるように。舞台が整ったから教えてください。あたしも見に行きます」

「ぐ、軍団長閣下御自ら…！」

愛嬌のある蚊みたいな外見のアイスリンガー・ウエルナルと、厳しい目を被った芋虫みtainなデイ・ロイ・リンカーがあたしの指示に興奮している。

この二人、実は初登場が原作漫画三巻とBLEACH本編で一番最初に出てきた破面なのだ。傷付いたグランドフィツシャーを癒し破面化させるなど描写的に彼とそれなりに面識がある感じだったので、シーン再現ついでに空座町の情報収集の指揮を任せていたら割と頑張ってくれた。一護マツマがフィツシャーに喰われたと一早く報告してきたのもアイスリンガーで、おかげで完璧なタイミングで一人ふらふらしている一護に接触でき、誰にもバレずに封印を完成させられた。とても重要な働きだったのでご褒美に二度目の破面化を約束している。

まあアイスリンガーはともかくデイ・ロイは原作通りの人の姿にしないとダメだからね。一時的にグリムジョーのところからお借りしたぞ。

と言うワケで日付が飛んで六月十七日。待ちに待ったBLEACH H最高峰のイチルキ名シーンを三人仲良く胸キュン（死語）しながら霊圧遮断外套で隠れて見えています。

「軍団長閣下。映像記録装置をお持ちしました」

「わあ、ありがとうございます。お二人も座って一緒に見ませんか？」

「そ、そんな恐れ多い…！」

いや君らデカいし真横で跪かれたらあたしの気が散るから言ってるんですけど。とりあえず二人を視界に入らないところに移動させ、ニマニマしながらいい雰囲気な一護とルキアを出刃亀する。

やっぱこの頃のルキアって準主人公じゃなくて普通にヒロインだよ。アニ鯽からBLEACH世界に入ったあたしは普通にこの二人がくつつくと思っていたので織姫ちゃんの追い上げはかなり意外だった。天真爛漫で天然な織姫ちゃんはクールでオサレなウルキオラとの関係が凄いエモくて好きだったのに、なんでウルキオラ殺した師匠オ：

と、無事にルキアの膝枕シーンを映像に納めたところでアイスリంగాーたちにグランドフィッツシャーの確保と破面化を任せて本日は終了。残るヨン様陣営が関与した死神代行篇の原作イベントは^{メノスグラウンデ}大虚のヤツと六番隊のルキア連行なのでそれらが無事起きるよう根回し

さあ、ようやくだ。長い長い、時代が二つくらい終わるほどの時を経て、あたしの人生の文字通り全てを懸けた一大計画がついに始動する。

尸魂界篇が始まるぞ…！

もうすぐ収穫しに行くからねえ。シロちゃん…

旅禍イイイイ！

「——お、おのれ…逆賊…藍染…」

中央四十六室本部、中央地下議事堂。

噓せ返るような死臭漂うこの地中の八角堂に、あたしたちヨン様陣営の四人は秘密裏に集結した。先ほどまで元気に踊る会議をしていたお偉いさんたちを一人残らず殺し、瀨靈廷の最高意思決定機関を完全に掌握。これであとは一護たち旅禍が暴れるのを待ち、それを理由にこの施設を封鎖隔離すれば尸魂界の政治は全てあたしたちの意のままとなる。

「——さて、宣戦布告だ」

八月一日、あたしたちはヨン様より簡単な行動方針を伝えられた。ついに長年の祖国と決別するとあって、流石のDJも一〇も顔を固くしている。

「我々は朽木ルキア処刑当日の正午、崩玉を手に反膜ネガンオンによって虚圏ウエコムンドへ凱旋する」

変わらない威風堂々とした佇まいで穏やかに宣言するヨン様。それは彼にとって全てが予定調和となった証なのだろう。

「だが、凱旋の前に幾つかやっておくことがある。そこでだ——ギン、桃」

『…！』

来た。折角の宣戦布告という一大イベントをこの男が何の舞台装置も用意せず無駄にするワケがない。あたしは期待感にニヤつきそうになるのを必死に堪える。

「君たちには処刑の前日、瀨靈廷で大きな騒動を起こしてもらおう。私

が陰で動きやすいように」

そうしてヨン様が片手に召喚したのは、自分の容姿を模した血塗れの精巧な義骸だった。なるほど、それを起点に鏡花水月を発動するのか。原作より用意周到だな、ワクワクする。

「…ああ、そう言うことですか。せやったらボクがソレを殺^やった犯人役演じます」

「市丸が適任だな。私と雛森では日頃の行動との矛盾が多すぎる」

「あ、ならあたしはソレの第一発見者になりますので発狂して大騒ぎしますね。犯人役の市丸隊長が近くにいたら」お前かー!」とか言つて斬りかかったり更に引つ掻き回しますけど、やります?」

「あはは、相変わらずオモロイこと考えるん上手やね桃ちゃん。それやったらウチのイツルも仲間に入れてやってな」

幸運にも一〇からあの「藍染隊長暗殺(笑) 作戦」を提案してきたので便乗する。雛森ちゃんと言えばやっぱりあの狂乱シーンだもんね。

まあこうして色々決めても、この場にいる皆は自分が何をやってもボスの掌の上だと理解しているので実働は各自でアドリブだ。あたしが多少はつちやけても大丈夫だろう。

「――要」

演出の流れが決まったタイミングで、ヨン様がDJを名指しで呼んだ。おそらくは原作通りの特命。

「君はしばらく更木剣八の遊び相手をしてくれ。黒崎一護も彼を楽しませてくれるが、それだけでは不十分だ」

「はい。私の正解で一時は稼いでご覧にいきましょう」

やはりその流れか。流石のヨン様も公式チートな剣八が宣戦布告時に現れては困——って、ん?」

…何か含みのある言い方だな、ヨン様。

「それと、更木剣八との戦いでは余力を残して敗北したまえ。試作の霊圧遮断腕輪のテストも兼ねて、最終段階で臨機応変に動けるよう立場を身軽にしておくんだ」

「お任せを」

あ、この世界のDJの剣八戦は手を抜いてやる感じになるのか。身を以てあの正解のヤバさを知るあたしとしては現段階の舐めプ剣八にこの男がああも簡単に負けるとは思えないので、本誌でもこういう経緯だったのなら桃ちゃん納得。

…うん、さっきの違和感は気のせいか。

「桃」

「あ、はい」

ふいにヨン様に呼ばれたので振り向くあたし。何の用かと目で問えば、視線の先にいた我らの王は、実に愉しそうな顔をしていた。

「——この作戦で、君の頼みを一つ叶えてあげよう」

…おっとお？

予想外の展開にあたしはつい口元が緩む。この場で叶えて貰えるお願いと言えば、おそらくアレだろう。

「…いいんですか？」

「構わないよ。彼がどこまで成長出来るのか私も興味があつてね」

そう言うヨン様の笑顔は実に邪悪だ。これはあのとときの即興劇で味を占めたなコヤツめ…！

「…ありがとうございます」

一応礼を言っておく。

よし、これであたしの今後の愉快方針が大体決まった。当初の案より少し難しいムーヴになるが、このお方が味方になってくれるなら迷わずこつちを選べる。やっぱヨンの…安心感を…最高やな！

二人でニツコリ微笑み合っているのを見てか、隣の一〇が顔に苦笑いを浮かべている。おい何「ボクはまともです」アピールしてんだ、お前もルキアちゃんいぢめて愉しんでただろ。この中の非愉快部部員はこの微妙な空気に首を捻っている純粹無垢なDJだけです。あ、でもDJもホワイトくん造るとき死神殺せて満足気だったな。ヨンの陣営のマトモ組全滅やんけ。

そうして和気藹々としていると…

——カンカンカンカン!

「あ、来はったみたいやね」

突然瀨靈廷の警戒鐘が鳴り始めた。原作のタイミング的に間違いない、ようやく一護たちが来たんだ!

BLEACH屈指の名ストーリー【尸魂界篇】の開幕である。

「行ってくるかい、桃?」

「……」

何とか平静を装えているはずなのに、目敏いヨン様があたしの興奮を見抜いたのか原作での一〇の役をやらないかと薦めてくる。

くっ、魅力的だ。魅力的過ぎる提案だが——残念ながら辞退しよう

：

この場面はかなり重要だとあたしは思う。後に市丸ギンが黒崎一護に望みを託して逝く感動シーンが起きるのは、ここで二人が何の邪魔も無く一太刀交えていることが大前提だ。だが幼いときに一護と出会っているあたしがそこに居ては——仮にただ市丸についていくだけであっても——最悪あたしの存在ばかりが一護の記憶に残ってしまい市丸の印象を喰いかねない。半分くらいあたしの自業自得とは言えそれは困る。

「……いえ、黒崎一護とお話するのは別の機会で結構です。あたしより市丸隊長が悪役演技のために行かれるのがいいと思います」

「ボク? ……あア、あの子を生かして逃がすんをボクの陰謀に見せる言うことやね。——ほな行つて来ます」

苦渋の決断で適任者へバトンを渡すと、即座に理解した一〇がさつさと議事堂の出口へ向かっていった。その後ろ姿を恨めし気に見つめるあたしを更に見つめてニヤニヤしているヨン様が大変ウザい。

「…それより早く瀨靈壁を霊王宮から降ろしましょう。黒崎一護はたまに驚くほど短慮になるときがあるので一目散に瀨靈廷へ突入してくる可能性があります」

「そうだね、急ごうか」

想像出来たのだろう。ヨン様が鷹揚に席を立ち、瀨霊壁の操作制御室へと向かう。

「中央四十六室の命令偽装は君たち三人に任せる。交代で当たるといい」

「はいっ、頑張ります」

「藍染様はその間どちらに行かれるのですか？」

「大霊書回廊で調べものがしたくてね。だからそれが終わるまで——」

かくしてヨン様が起動した瀨霊壁の地響きを合図に、あたしたちの尸魂界離反作戦は第一段階へ移行した。

——親愛なる旅禍諸君には精一杯働いて貰おう。

「——ああ、こらあかん」

西流魂街1地区【潤林安】から臨む白道門。

夜一を名乗る黒猫の先導で、三人の仲間たちと共にこの地へ降り立った人間の少年——黒崎一護は、怒りに身を任せその男に斬りかかっていった。

怒りの理由は数分前、一騎打ちの末に快く門の通過を認めてくれた門番・一貫坂いっかんざか丹坊じたんぼうが片腕を斬り落とされたこと。

下手人は小さな脇差を握る白い羽織の死神。後に相手が尸魂界最強の十三人の一角——三番隊隊長・市丸ギンだと知らされる一護は、このときはまだ右も左もわからない無知な子供だった。

「へえ…少し見いひん内にえらい強うなったんやね、黒崎一護くん」
「ッ！俺のこと知ってんのか？」

僅かな鏢迫り合いの後、男がふと、そんなことを呟いた。面識のま

るでない他人に一方的に自分のことを把握されている事実は普段の勝気な一護の背筋に嫌な汗を滲ませる。

「さア？ 先日六番隊長さんから初めて聞いたんかもしれへんし——君が生まれる、ずうーつと前から知ってたんかもしれへんなア？」

糸目の死神の意味深な発言に息を呑む少年。その不吉な笑みが異様な恐怖を駆り立て、一護は動揺を悟られまいと斬魄刀を強く握り直す。

浦原さんとも阿散井恋次とも匣丹坊とも違う、剣に何の思いも感情も映さない不気味な男。相手のペースに吞まれつつあることに気付いた少年は、胸に溜まる憤りをそのまま袈裟切りで叩き付けた。

「ハッ…だったらためえの知らねえ俺を見せてやろうじゃねえか！」

「いやア、怖い怖い。こら末怖ろしい子やわ」

「調子ぶっこいてんじゃねえぞ狐野郎——おらアツ！」

渾身の一撃だった。しかし振り下ろした斬魄刀は虚しく石敷の地面を破碎するのみ。消えた敵を探し慌てて辺りを見渡すと、糸目の死神は二十メートル近く開いた間合いを取って立っていた。

「ッ、何のつもりだ…！」

「…君、オモロイから特別に見せたる。僕の斬魄刀」

「なっ?!」

そして男が得物の脇差を引き絞り、構えた瞬間。

——射殺せ、【神鎗】。

「ぐっ——アアアアアアアツツ?!」

「一護?!」

突如瞬いた閃光に射抜かれる寸前、辛うじて斬魄刀で身を守った一護は背後の匣丹坊と共に、凄まじい力で門の遙か外へ弾き飛ばされた。

その閃光の正体は怖ろしく長く伸長する刀身。まるで抵抗できず流魂街の門前広場を無様に転がる一護は、仲間たちに介抱されながら

やっこのことで立ち上がる。

だが☒丹坊という支えを失った門は、あっという間に閉じていき：

「ああ、そうそう」

そして殺気石の門が閉まる直前、糸目の死神が妙なことを口にした。

——あの娘、君に会いたい言うとしたで。

にこやかに「ばいばーい」と笑う男の姿が門の奥へと消える。一護は意味のわからない彼の言葉の数々に翻弄されながらも、何故かその一言が——ルキアとは違う別の誰かを指しているのではないかと、そんな形容しがたい奇妙な予感を覚えるのだった。

傷付いた☒丹坊を癒す少女——井上織姫の不思議な力に方々から歓声上がる。やって来た当初とは大きく様変わりした賑やかな市場の喧噪に、一護たち四人は目を丸くしていた。

——☒丹坊の恩人として貴方を歓迎したい。

長老を名乗る老人の言葉につられ、次々と一護の勇気を称賛する流魂街の住人たち。聞けばあの豪快な門番はこの地区出身の死神で、他のいけ好かない連中と違い同郷の彼らをよく助けてくれる地元の星らしい。

「そんな☒丹坊さんの恩人のあんたらが何だって旅禍なんかやってんだ？」

「…そのいけ好かねえ死神連中に処刑されそうになってる仲間を連れ返しに来たんだよ。」ルキア”ってんだ、知らねえか？」

すると首を捻る大半の住民たちの中で、幾人かが「ルキア？」や「どっかで聞いたような…」と心当たりを臭わせる。

そして不意に、一人の恰幅のいい女性がポンと手を叩いた。

「——ああ！ 桃ちゃんの同期のお友達の！」

『!!』

その瞬間、門前広場に集まっていた住人たちの目つきが一変した。

「何だって!? 桃ちゃんの友達が処刑される!？」

「そんなことしたら雛森さんが悲しむじゃないか！」

「こうしちゃおれん！ ㊦丹坊さんが目を覚ましたらみんなで瀨霊廷に直訴しに行くぞー！」

「そうだ、死神なんか屁でもねえ！ 潤林安雛森親衛隊、立ち上がれ！」

「魂魄の霊力の違いが、戦力の決定的差でないということを教えてやるー！」

『うおおおおお——ツツ!!』

突然群衆が一つの意志で団結する。口々に上がる威勢のいい声は現世のライブ会場さながらの咆哮となった。

「な、なんだコイツらいきなり……！」

「……どうやらかなりの有名人の知り合いみたいだね、朽木さん」

「”桃ちゃん”なんてかわいい名前：地元のアイドルみたいな人なのかな？」

あまりの変わりようにドン引きしながら距離を取る一護たち。その片隅で冷静に市場の熱気を観察していた黒猫の夜一が、ある情報を開示した。

「——雛森桃。同姓同名の別人でなければ……おそらく五番隊副隊長の女死神じゃろう」

「!? 副隊長って……！」

予想外の大物に驚嘆する一同。先ほどの市丸ギンのすぐ下の序列に位置する強者、そして一護にとっては現世で一戦を交えたあの強敵、阿散井恋次と同格の存在だ。

「事前に隊長格二十六名の下調べはして来たがその中に名前があつて

の。護廷十三隊とは異なる特殊部隊【鬼道衆・一之組】の席を兼任している前例無き鬼道の天才だそうじゃ」

「ツ！ じゃ、じゃあそんな凄い人と協力出来れば朽木さんを…！」

『!!』

織姫の希望的観測に思わず前のめりになる若い人間の高校生たち。市場の熱気の通りの人気者なら、やはり丹坊のような心優しい善人なのだろう。義理を説けば協力してくれる可能性は非常に高いと思われた。

「じゃが、五番隊…あの藍染が側に置く天才か…」

「夜一さん?」

しかし織姫の案に夜一は難色を示す。どうしたのかと問うても唸るばかりの黒猫は、暫しの葛藤の末、その策を却下した。

「…いや、止めておけ。仮に可能性があるのなら、恐らく別のヤツが彼女にルキア奪還への協力を求めるじやろう。儂らがその雛森桃と関わるとしたら最後の最後、ルキアを救う直前じゃ」

『別のヤツ?』

一様にはてなを浮かべる一護たちへ、夜一が微笑んだ。

「ルキアを助けようとしておる者は、決して儂らだけではないと言うことじゃ」

『!!』

それは市丸ギンの、隊長格の恐ろしさを知った四人にとって大きな希望となる一言。

元よりルキアの罪は客観的に見ても十分情状酌量の余地があった。そして人間の自分たちより縁も絆も深いであろう同僚の死神たちが、誰一人として彼女の処刑に反対しないなどありえない。

何故なら四人と一匹は知っているのだ。朽木ルキアは男勝りだが慈悲深く繊細な、とても人間的魅力に溢れた素晴らしい人物であることを。

「…ぜってえ救い出してみせる」

——待ってる、ルキア…！

処刑まであと八日。大きな勇気と希望を胸に、四人の少年少女は閉じられた瀧霊廷を睨み付ける。

次に彼らが目指すのは、空からの侵入経路——志波空鶴の花鶴大砲だ。

不穩イイイイ！

一番隊隊舎、二番側臣室。

旅禍襲撃並びに三番隊隊長市丸ギンの旅禍撃滅失敗の尋問を行う隊首会の別室に、副隊長十二名の集結が命じられた。異例の招集であり、三番隊副隊長である吉良イツルは副官章の重みを感じながらも気丈に前を向いて歩く。

「——雛森君？」

控室の扉を開けた先に、一人の可憐な少女が膝を抱えて座っていた。常らしからぬ暗い顔で俯きながら。

「…吉良くん」

「大丈夫かい？ 顔色が悪いよ」

「う…ううん、何でもないよ…！」

イツルの心配に彼女が弱々しく微笑む。

雛森桃。

五番隊副隊長を務める同期一番の出世株にして青年の半世紀に亘る、大切な想い人である。イツルの五年前に副隊長の席に就いており、鬼道衆の特殊部隊の班長を兼任するなど澁霊廷を代表する鬼道使いとしても名高い。それでいて性格は誠実で謙虚、明るく素直で優しい女の子。これで容姿まで可愛いものだから本当に罪な人だ。いつか必ずこの想いを伝えたい。

そんな雛森桃をここまで曇らせる要因は一体何だと言うのか。塞ぎ込む彼女の姿に胸が痛んだイツルは、直接聞き出すべきか、そっとしておくべきか、男としての正解がわからず右往左往してしまう。

「——ああ、やっと会えたわ雛森」

オロオロしていると不意に気だるげな女性の声が聞こえ、また一人新たな同僚が疲れた顔で入室した。

松本乱菊。

男性死神たちの人気を雛森桃とほぼ二分する美女で有名な副隊長だ。イツル自身はあまり縁のない人物だが、隣の雛森と仲が良く、尊敬する先輩が三人くらい彼女に片思いしているので人伝に聞いた為人は詳しい。そのだらしない悩殺ファクションの通り、かなりのしたたか者だそうだ。

「乱菊さん、お久しぶりです…」

「雛森、あんたウチの隊長とケンカでもしてるの？ 最近あんたに避けられてるとかで隊長がイライラしててあまり仕事サボ…じゃなくてこつちの量増やされて大変なのよ」

「…いえ…別に避けてるわけじゃ——っていうかそれは乱菊さんがいつも仕事しないからですよね」

「十分してるわよ失敬ね。現にあたしまだ解雇されてないじゃない」

それは不祥事レベルの問題基準ではなかろうか。イツルは乱菊の反論に思わず突っ込んでしまう。当然ギロリと睨まれ慌てた青年は咄嗟に二人の会話の別の要点を拾ってしまった。

「そ、そう言えば雛森君は日番谷隊長とは幼馴染…家族の仲だったよね？ 僕らが監督生をやったあの現世実習はまだ霊術院で語り草らしい…けど…」

口にしてイツルは再度「しまった」と後悔する。想い人を取り巻く色恋の噂に日々悶々とするあまりつい零してしまったが、最早後の祭り。

「ああ、ウチの隊長の天才伝説で有名なアレね。…っていうか吉良もいたの、例の演習」

「…まあ、お察しの通り何にも出来なかったんですけどね」

己の無様な過去を思い出し、イツルはチクリと痛む胸を誤魔化すように頭を掻く。

副隊長へと就任しようやく彼女の隣に立てたが、以前は自らの恐怖と向き合うことに精一杯だった若き霊術院時代。あの屈辱は彼を大きく成長させ、今の吉良イツルに前を向かせる大事な基礎となっていた。

もつとも、目標としているあの藍染惣右介はおろか、自分が守りた

かった彼女を目の前で守った年下の日番谷冬獅郎すら未だ超えるには至っていないのだが。

「はあ…何でもいいけどさっさと仲直りしなさいよ雛森。隊長もそうだけど、そんな暗いあんた見てると調子狂うわ〜」

デリケートな話題にバツが悪そうにしていた乱菊が空気を変えるように雛森へ助言する。余計なお節介をそう感じさせないのはサボり魔な彼女らしい世渡りのコツなのだろう。

しかし。

「…………ごめんなさい、乱菊さん」

ポツリ…と呟く少女の声は、沈痛で、悲愴で、耐え難い苦しみに押し潰される悲鳴のような懺悔だった。

只ならぬ様子にイツルは驚き彼女を凝視する。

「…雛森？ あんたホント何が——」

そして同じく瞳目した乱菊が問い質そうと口を開けたその瞬間。

——緊急警報、緊急警報！

——瀨霊廷内に侵入者あり！

——各隊、廷内守護配置に就け！

突如火急を知らせる瀨霊廷の警戒鐘が鳴り響いた。

「ッ!? これって…!」

「まさか…例の旅禍かッ!? 先に失礼します!」

「なっ!… ちよつと吉良!?!」

にわか騒がしくなつた外へ飛び出し、脇目も振らず三番隊隊舎へ瞬歩で向かうイツル。

状況的におそらく先日、上司の市丸ギンの刃から逃れた連中だろう。自隊の隊長の実力を誰よりも知ると自負する彼は、此度の敵が決して侮つていい相手ではないと判断し、即座に副官としての責務を果たすべく滅私奉公に意識を切り替えた。

それは吉良イヅルの副隊長としての最大の長所であり——同時に恋する青年としての最大の不幸であった：

雛森の様子がおかしい。

副官の松本乱菊より報告を受けた十番隊長・日番谷冬獅郎は、全てが裏目に出ている己の不甲斐なさに臍を噛んだ。

ことの発端は数年前。少年が新たに隊長位に就いてしばらくし、ようやく念願の幼馴染と逢えた一番隊隊舎での出来事だ。

——あなたに守ってもらおうかな。

あの雛森らしくない弱音を聞いて以後、冬獅郎はずっと悶々としていた。あいつの真意はどこにあるのか。いくら過去を振り返っても彼女が悩みそうなことの心当たりは見つからず、かと言って直接聞き出すのは憚られ、結局何もわからないまま五年近い年月が過ぎている。

そして今月に入り起きた数々の前例無き事件も少年の気を滅入らせる。朽木ルキアの処刑決定、旅禍騒ぎ、市丸ギンと藍染惣右介の不穏な対立、十一番隊の壊滅、阿散井恋次の敗北：

乱菊が伝えて来た雛森の異変は、そんな最中の一言だった。

「…松本、少し隊を頼む」

考えていても仕方がない。副官に部下たちを任せ、冬獅郎は一度あいつの様子を見に行くことにした。

「——おーおー、こりゃ派手にやられたな阿散井のヤロー」

「ツピいっ!?!」

鳥の雛みたいな情けない悲鳴を上げて跳び上がる幼馴染の雛森桃。

この辺りは全然変わらないアホな彼女に思わずクスリと笑ってしま
う。

霊圧を辿った先の四番隊隊舎。旅禍に敗北し運び込まれた阿散井
の寝台の側で一人物憂げに佇む少女へ、冬獅郎は努めて気軽な声色で
話しかけた。

「し、ししシロちゃん!? …もう、居るならそう言ってよっ。びっくり
したあ…」

「おいおい、まだ俺のことそのあだ名で呼んでんのかよ。藍染のヤツ
にまた叱られるぜ」

少々不満だが、あの男の名前を出せば驚くほど素直になるのが雛森
だ。最近どうも疎遠になっている気がしてならない冬獅郎は当たり
障りない軽口で彼女の緊張を解そうとする。

しかし、幼馴染の顔の陰は晴れるどころか、その逆。

「……そう…だね…」

何かに耐えるように身体を強張らせる雛森。以前一番隊隊舎で見
た彼女の憂いと弱音が脳裏に呼び起こされ、冬獅郎は無力感に胸が締
め付けられた。

「藍染と何かあったのか…?」

「…ッ」

少年に考え付く雛森が悩みそうなことと言えばそれくらいだった。
そしてビクリと硬化した彼女を見て、目の前が真っ赤になる冬獅郎。
怒りの矛先は、大切な幼馴染にこんな顔をさせた忌々しい眼鏡野郎
だ。

「う、ううんっ。違う、違うの…! …ちよつとその、あ…あり得ない話
を聞いちゃって、それで…」

顔を顰める冬獅郎に「誤解だよ」と、まるで悪夢の記憶を追い出す
ように雛森が頭を振る。だがその嘔吐くような細かい声が核心に触
れる直前。

「——おやア、あの潤林安の姫と竜が密室で二人きり。あんまりお熱
いと阿散井クンの怪我に障るんとちゃいます?」

突如背後から飛んできた剽軽な京言葉。咄嗟に振り向いた先にはあの不穏な三番隊隊長・市丸ギンが楽しそうに扉の隙間からこちらを覗き込んでいた。

「市丸……！」

「イヤやなア、十番隊長さん……そない睨まんでもええやん。藍染隊長の可愛い副官さんがこの危ない時に独り隊を離れてはる言うんで、元五番隊副隊長のボクが先輩のよしみで迎えにきてあげただけやで？」

「ッ、何だと……？」

狐男の巫山戯た台詞に冬獅郎は眉を顰める。チラと横を見れば蒼白に俯く雛森。まさかこの二人、自分の知る前から因縁が……

「あ……あたしが従えば、藍染隊長には何も……」

「心配せんでええよ雛森ちゃん。そういう約束やし……ね？」

「お、おい雛森。お前ら一体何を……」

一言、市丸と意味深な言葉を交わした幼馴染がふらふらと不用心にヤツの下へ近付いていく。普段の底抜けにお人よしな無防備さからくる行動ではない。明らかに脅迫染みた悪意を感じた冬獅郎は、そこで初めて、ここ数年の雛森の異常の原因を垣間見た気がした。

思い返すだけでも腹が立つほど親しげに接していた雛森と藍染の間に溝があるとは思えない。ならば問題は別の要因。

目の前で、市丸に慈悲を乞うかのように首を垂れる幼馴染の姿と、それを当然のものと受け取る狐男。そしてヤツの動きを牽制する藍染惣右介……

そうか。少年の中で全てが繋がった。

「——雛森から離れろ」

掴んだその手の震えを止めるように、冬獅郎は少女を自分の下へ強引に引き寄せる。

「ッ、し……シロちゃん……？」

「黙ってろ雛森」

戸惑う少女を無視し、荒ぶる感情をそのまま霊圧に投影する。叩き付ける相手はもちろん、大切な女を苦しめる全ての元凶、市丸ギン。「怖い怖い、何でそない怒ってはるん?」

「てめえの胸に手エ当ててよく考えろ、市丸。次に雛森に近付いたら——俺はてめえを殺す…!!」

純然たる殺意の籠った隊長格の霊圧は容易く世界を軋ませる。冷静な頭の片隅で何とか腕の中に抱える雛森にだけは当てずに守り、冬獅郎は敵へ「失せろ」と無言で威嚇した。

「…なるほど、雛森ちゃんにはもう頼れるナイトがおるんやね。ならばボクは大人しゆう引き下がります」

「…!」

「ちゃんと五番隊までエスコートするんやで——シロちゃん?」

おぞましい捨て台詞を最後に市丸がヘラヘラ笑いながら救護室を去っていく。その後ろ姿が廊下の奥へ見えなくなるまで、冬獅郎は震える幼馴染を左腕で強く抱きしめ続けた。

「…し、シロちゃん…あの…」

危機が過ぎ、霊圧を落ち着かせた少年の腕の中で雛森が身じろぎする。身長差のせいで無理やり彼女を屈ませて抱きしめている自分。これが藍染ならもつと絵になつただろうと場違いにも想像して腹が立った冬獅郎は、大切な女を守れた高揚感かららしくなく大胆になっていた。

「掴まつてる雛森」

「えっ、何を——ツキやあつ!」

あの霊術院の現世演習以来初めて彼女を守ることができ、勢いに乗る少年が取った行動とは——少女を横抱きに抱えて空を駆けることだった。

暫しの空中散歩。視界の端で顔を赤くしあわあわ恥じらう幼馴染の姿に益々気を良くする冬獅郎は、辿り着いた五番隊隊舎で隊の連中全員に見せ付けるように中庭へ降り立つ。この場に藍染が居ないのだけが残念だ。

「十番隊の日番谷だ。藍染が戻ったら伝えてくれ。」市丸が雛森にちよつかい出してた”つてな」

「はっ、い、市丸隊長が…ですか？」

「いいから伝えろ。俺は絡まれてたコイツを守…か、回収しただけだ」若さからくる無鉄砲な無敵モードが終わり、途端にこれまでの自分の行動が恥ずかしく思えてきた冬獅郎。ずっと握ったままだった雛森の手を慌てて振り払い、ぶっきらぼうに背を向け少年は瞬歩で隊舎を後にした。

「ッ、じゃあな雛森！」

「あ…」

——もし。

もし、あのととき。手を振り払った直後にあいつが浮かべた表情を見る、些細な勇気が己にあれば。

もし、あのととき。愚かにも勝手に「市丸が諸悪の根源だ」と自己完結せず、確とあいつの悩みと向き合えていれば。

もし、あのととき。何かに怯えるあいつが言葉の節々に滲ませた、絶望の片鱗に気付けていれば。

あるいはそんな幾つもの”もしも”の一つでも掴むことが出来ていれば、自分はいつを失うことはなかったのだろうか…

——キヤアアアアツツ!!

そして翌日の八月五日、早朝。

懺罪宮中に響き渡った彼女の悲鳴が、全ての終わりが始まる合図となったのだ。

暗殺イイイイ！

「――あ、お疲れ様です。市丸隊長」

中央四十六室居住区、清浄塔居林。

瀨靈廷最高の警護区域であり、護廷の隊長であろうと非常時以外に踏み入れることは許されない高貴な園だ。

しかし本来の住人たちの姿はどこにもない。代わりにいるのは、場違いな三人の隊長格の死神だった。

「いやア、流石の名演技。桃ちゃんヒロイン顔やし一瞬ボクまで騙されそうになったわ」

「市丸隊長はニヤアって笑っていれば大体相手から疑ってくれますし楽でいいですよね」

「あれボク今バカにされたん？」

新たに現れた糸目の男とにこやかに火花を散らす年若い少女。まるで楽屋裏の雑談のような二人の会話を愉しげに聞いていた最後の一人が、掌大の黒い球体を片手に席を立った。

「――さて、時間だ」

『！』

緩んだ空気を引き締める上位者の号令。手にした球体を少女の方に渡し、男が出口へと足を向ける。

「私はこれから何者かに殺されてくるとしよう。現場は君たちで好きに作るといい」

「わかりました」

薄ら寒い笑みで「楽しみにしているよ」と言い残し、男は悠然と塔居林を去っていった。その後ろ姿を見送る少女と糸目の男は互いに顔を見合わせ口角を吊り上げる。

「桃ちゃん、ちゃんとその義骸掃けさせるまで十番隊長さん止められ

るん？ ボクあの子に君に近付いたら殺す宣言されとるんやけど」

「大丈夫です。少し考えがあるので市丸隊長はあたしが妙なアドリブしたら意味深に注意してください」

「…ああ、なるほど。なら『雛森ちゃん』と一言だけ」

「わあ…悪そうな感じ。流石ですね」

「いやいや、流石は君やろ？」

「藍染隊長が考えそうなことを考えてるだけなので流石なのはあの人ですよ」

「それもそうやな」

軽口を叩き合いながら、男女はそれぞれ漆黒の外套を羽織る。そして「曲光」と双方が詠唱を唱えた後、清浄塔居林は無人の静謐に包まれた。

——キヤアアアアツツ!!

その悲鳴が聞こえたのは戦時特令下の定例集会が始まる直前だった。懺罪宮の中層、東大聖壁に木霊したそれは大勢の知ることとなり、駆け付けた吉良イヅルら副隊長三名は壁前舞台に立ち尽くす一人の少女の後ろ姿を発見した。

「どうした！ 何があつたんだ雛森く——」

だが青年が悲鳴の彼女、同期の同僚である雛森桃に駆け寄ろうと進めた歩は、三つを超えずに床へ縛り付けられた。

彼は、そして後ろの松本乱菊と射場鉄左衛門は、見てしまった。雛森が見上げる先にある——信じ難い光景を。

『な…!?!』

まさか、ありえない。されど幾度瞬きを繰り返そうと眼前の悪夢は晴れてくれず、三人は少女がその男の名を呼ぶ叫喚を耳にしようやく

現実を直視する。

——五番隊隊長・藍染惣右介が、東大聖壁で無惨に磔にされていた。

「バカ、な…：藍染隊長が、し——死んどる…！」

「なんで、一体誰がこんなことを…！」

「よ、四番隊だ…！ あの人がこんな簡単に殺されるはずがない！

おい誰かッ、早く四番隊を呼んでくるんだ！」

『はっ、はい！』

真つ先に我に返ったイズルは同じく只ならぬ事態に飛んで来た見廻りの死神へ指示を下し、同時にこの殺害事件の犯人を機械的に推理する。

戦時特令下とはいえ護廷隊の隊長が瀟靈廷で暗殺されるなど前代未聞。それは権威ではなく、彼らの他とは隔絶した実力が有象無象の姑息な手を許さないからだ。隊長格は同じ隊長格級の霊圧の持ち主にしか倒されない。

では先日阿散井副隊長を倒した旅禍の仕業か？ 最有力候補だが昨夜に目立った霊圧の衝突がなかったのがあまりに不自然。

奇襲による暗殺はどうか。だがこの非常事態に闇討ちを警戒しない無能は隊長になどなれない。ありうるとしたら直前まで殺意を悟らせない達人か、あるいは…

「まさか…！」

その可能性にイズルが気付いたまさに同時。よく親しんだ男の声が耳に届いた。

「——おやまあ、大惨事やね」

立ち尽くしていた一同ははたと振り返る。場違いに飄々と、どこか小馬鹿にしたような台詞と共に現れたのは…

「市丸…隊長…？」

「せや。後輩の雛森ちゃんの悲鳴が聞こえたんで様子見に来たんやけ

ど、こら大変なことになったなあ」

「何、を…」

呑気なことを。そう言おうと声を上げたイツルは、上官の変わらぬ笑みを直視し、思わず息を呑んだ。

先ほどの推理が否が応にも頭を過る。何故味方の死を前にそのように笑っていられるのか。何故藍染隊長は抵抗する間もなく殺されたのか。

そして、誰もが思い至る単純な結論は当然、この場で誰よりも被害者のことを敬愛する彼女の中でも導き出されていた。

「……ごめんなさい」

「ッ!? よせ雛森く——」

小さな眩きを最後に隣の少女の霊圧が暴れ出す。

「——ッ、アアアアアアアッ!!」

青年の制止も空しく、嵐のような霊力風を撒き散らしながら雛森桃が彼の上司へ突撃する。

不味い、それは決して許してはならない行為だ。自身に定めた明確な優先順位に従い、副官吉良イツルは死に物狂いの歩法で少女を追い越し、振るわれる斬魄刀を己のそれで辛うじて受け止めた。

『!!』

鋭利な鋼がぶつかり削り合う嫌な金属音がグワングワンと東大聖壁に木霊する。

「剣を下ろしたまえ、雛森君……!」

「……どいて……どいてよ吉良くん……」

努めて冷静な声で少女を諭そうとするイツル。だが雛森の声は言葉にならない嗚咽となるだけ。鏢で迫り合う相手の斬魄刀から伝わるのは荒海のように不安定な霊圧。頬を流れる幾筋もの涙と同じく、それがまるで彼女の泣き叫ぶ心そのものように見え、青年はあまりの痛ましさに思わず目を閉じてしまう。

「……どいてって言うてるのが——わからないのッッ!!?」

「なっ!? 止めろ雛森君!」

だがその一瞬の慈悲…否、逃避行動が仇となったのか。雛森が普段の美しい歩法が見る影もない拙い足取りで距離を取り、乱れる霊力をそのまま斬魄刀へ束ね始めた。

そして彼女は、かの朽木ルキアのそれを遥かに凌駕する大罪を犯す。

——弾け、【飛梅】!!

震える悲鳴のような声で唱えた解号が、雛森桃の封じられた死神の力を呼び起こす。

「…ッ、アアアアアアッ!!」

『!!?』

少女の咆哮と同時。握る刀が淡い桃色の炎を纏い、一塊となってイズルの眼前で爆ぜた。

「くっ…なんてことを! 自分が何をしているのかわかっているのか?! 公事と私事を混同するな、雛森副隊長ッ!」

斬魄刀の解放。

虚の浄罪、魂魄の調停、三界の秩序を守るために振るわれるべき正義の奥義を、少女はあろうことか悲憤に吞まれ味方を斬るために行使した。咎人が罪を償う、ここ懺罪宮で。

そしてその行為は、上官に剣を向けられた副官として断じて看過できない悪であった。

「…そうか、本当に残念だ」

「!」

「仕方ない、僕は君を敵と見做す」

胸中で「嫌だ」と絶叫する心を封じ込め、イズルは半世紀に亘る初恋の少女を斬る覚悟を決めた。

——面を上げろ、【侘助】!!

だが一瞬——己の無意識の弱さが見せた錯覚か——雛森の痛ましい泣き顔が満面の笑みに見えたイヅルは、故に僅かに決意が揺れる。もつとも、副官として有るまじきその心の揺らぎが起こした須臾の硬直が、結果として彼女へこの不本意極まる殺意をぶつけずに済んだのだから、恋心とは不思議で、そして頼もしいものだ。もちろん…

「——動くなよ、どつちも」

それはこういうときに颯爽と幼馴染のために駆け付けられる彼——日番谷冬獅郎にこそ、相応しい称賛であるが。

「——シロ…ちゃん…?」

かくして日番谷冬獅郎が渦中の東大聖壁へ辿り着いたとき、事態はほぼ最悪に収束しつつあった。

幼馴染の雛森桃の悲鳴を耳にし必死で駆け付けたものの、藍染惣右介は既に事切れており、憧れの男を失った彼女も我を忘れ犯人の市丸ギンへ攻撃を仕掛け副官の吉良イヅルと交戦状態へ突入。霊圧の残滓で凡その展開を悟った冬獅郎は内心の激情を何とか抑え、ひとまず隊長としてこの場を治めることを優先する。

「日番谷隊長…!」

「…拘置だ、それぞれの隊舎牢へ連れてけ」

『ハッ』

我に返った副隊長たちが争う二人を手柔らかに拘束する。雛森の沈痛な泣き顔を横目に、冬獅郎の視線が射抜くのはこの場に居るもう一人の隊長、市丸ギンだ。

怒りの理由は上官として目の前の戦闘を見過ごした職務怠慢でも、予想通り藍染に危害を加え殺したことでもない。

先日突き付けた忠告を意にも介さず、ここまで堂々と自分の大切な女に近付き、見たこともないような悲愴な顔をさせたこと。そのたった一つの理由で、日番谷冬獅郎はソイツを殺せる刃を振るうことが出来るのだ。

「ま、待ってシロちゃん……！」

だが少年が背中の斬魄刀に手をかけた瞬間、隣で少女が声を上げた。

「…安心しろ、本気で脅すだけだ」

「ッ、違うっ！…違うの……！」

宥めても必死にかぶりを振り続ける雛森。そして叫ばれたその懇願に、冬獅郎は周りの隊長格たちと同時に彼女を凝視した。

「お願い……ダメなのッ——」

市丸隊長と敵対しちや……ッ！」

大壁に共鳴する雛森の金切声。

何かの聞き違いか。一瞬己の耳を疑った少年も、震える幼馴染の姿を見て息を呑む。あまりに不可解な言葉は、されど少女の血の気の失せた蒼白な顔を見て戯言だと断じることなど誰も出来なかった。

「て、敵対しちやったら……みんな……」

「雛森……？ なに言ってる——」

「雛森ちゃん」

その平坦な声は、驚くほど鮮明に一同の耳へ侵入した。

思わず背筋が凍る、冷たく、静かな男の一言が一瞬で場を支配する。

「ええの、君？ 藍染隊長をあそこから降ろさんで」

「あ……あ……」

霊圧でも威圧でもない。あらゆる意志を削ぎ落す、何か言外に別の意味を孕んだ声。ソレを突き付けられた雛森は腰を抜かし床に座り

込んでしまう。

そんな彼女の姿を眺め満足したのか、声の主がゆらりと冬獅郎へ向き直った。

「すみませんア、十番隊長さん。ウチの副官が世話になってもうて」「ッ、市丸……！」

「ほな、藍染隊長は一番隊の隊士の皆に任せて、ボクはこれでお暇させてもらいます」

男が「おいで、イツル」と拘束中の副官を呼び、不気味な笑みのまま東大聖壁の舞台を去って行く。その背を見つめる一同に、彼を呼び止められる者は一人もいなかった。

「——松本。雛森を俺の十番隊隊舎牢まで連れていけ」

磔より下され担架で運ばれて行く藍染の亡骸を見つめながら、冬獅郎は幼馴染を抱き上げる。

憔悴し震える彼女は先日と違い一切彼の為すが儘。

「総隊長への報告は俺がやっておく。雛森を頼んだぞ」

「ちよ……隊長っ!？」

返事を聞かず冬獅郎は瞬歩で場を後にした。

今の雛森は隊士法に背いた罪人だ。隊長として軽率に身を案じる言葉をかけてはならない。そう己に言い聞かせながらも、少年は彼女が見せた不可解な態度に強い焦燥を覚えていた。

「……何だっつてんだ、くそっ……！」

何かがおかしい。致命的なまでに巨大なピースが欠けているのに、それが一体何なのか全くわからない。正体不明のおぞましいナニカがずっと大切な幼馴染を苦しめているのだ。

雛森が藍染の遺体を目撃し、犯人と思しき市丸へ攻撃した。これは

彼女の隊長への熱っぷりを振り返るに十分あり得ること。

だが、冬獅郎が殺気を飛ばしたときのあいつの懇願「市丸と敵対するな」とは一体どういうことだ。まるで狂人のように直前の行動と行動が完全に矛盾している。

「それにあいつ…」

最たる違和感は藍染を担架に下した時の雛森の反応。

敬愛する上司との今生の別れとなるかもしれない場面で相手を惜しむ言葉一つなく、ただ俯き震えるばかり。あれは狂ってしまった彼女の現実逃避だったのか。それとも…

——慕う男の死よりも心を捕らえる、尋常ならざる市丸の陰謀が未だあいつを取り巻いているのか。

「市丸ウウウ…ッ！」

ギリ…と憎悪に歯が軋む。先刻は少女に袖に縫られやむを得ず見逃したが、冬獅郎自身、己の我慢があの時点で既に限界を超えたことなど自覚済みだ。

三度目はない。たとえヤツが雛森をどんな闇で絡め取ろうと、ヤツを倒せばそれで終わる。もしそれで終わらないなら、続くその闇そのものも倒せばいい。

あいつを泣かせるもの全てを倒してしまえばそれでいいのだ。

「——そのために磨いた力だ…ッ！」

襷に背負う魂の半身【氷輪丸】の柄を掴み、敵を殺す覚悟を終えた冬獅郎は荒ぶる霊圧を撒き散らしながら瀟々たる空を駆けていった。

裏切イイイイ！

「——何だ…これは…!?」

五番隊隊首室。

同隊隊長・藍染惣右介の遺品の検分中に見つけた、副隊長の雛森桃へ宛てた彼の置手紙。紐解いた文に目を通した日番谷冬獅郎はそのあまりの内容に絶句していた。

人様宛の遺書を暴くなど普段であれば決して取らない無礼な行動。だがこれまでの不穏な出来事の数々で疑念渦巻く冬獅郎は、長い逡巡の後、藍染と雛森両名に内心謝罪し中身を検めることを決断した。

その非礼がこの結果となったのは、少年の波乱万丈な運命を司る稀有な星の先触れか。

「どうしたんですか隊長！ 一体何が書かれて——ッこれは…！」
「これを…藍染が書いたって言うのか…？」

横から覗き込む副官の松本乱菊と二人で幾度も文を読み返す。

——僕を殺したのは日番谷隊長だ。

見事な筆遣いで書かれ、宛先の雛森の心身を案じる彼らしい前書きから始まったそれは、書き手が知ってしまった真実だと銘打たれた全くのでっち上げだった。

「隊長…これ誰かに差し替えられた偽物ですよ…！」

「…だがこの筆跡や細やかな配慮…偽造なら余程あいつに近いヤツにしか出来ねえ芸当だぞ」

「ッ！」

余程近くにいたヤツ。それが出来うる男に一人だけ心当たりがあった乱菊はハツと目を見開き硬直した。

藍染の遺書に書かれていたことは冬獅郎の冤罪だけではない。

昨今瀰靈廷を騒がせている十三番隊隊士・朽木ルキアの処刑を取り巻く巨大な陰謀の詳細。それは処刑に用いられる斬魄刀百万本の靈力に相当する靈具を奪い、尸魂界を破壊するという恐るべき計画についてだった。

無論そんな馬鹿げたことをする予定などない冬獅郎は、この文が伝える犯人の名前をある人物に置き換えていた。ここ数日の事件全ての渦中にいた最有力の容疑者——三番隊隊長・市丸ギンだ。

「…松本、お前の気持ちは重々承知してる。だがヤツが雛森を何らかの陰謀に巻き込みあいつを苦しめているのは事実だ。何を考えてんのか知らねえがその一点だけは絶対に許す気はねえ…！」

「…ええ、あたしも許す気なんてないですよ…ッ」

沈痛な声で「あのバカ…」と複雑な内心を零す乱菊。彼女と市丸は同期の仲で、縁など切れていると吐き捨てながらも未だ彼との思い出を大切にしているのは上司の冬獅郎も知るところ。

そんな気まずい空気に、ふと一つの小さな黒い影が入り込んだ。

「地獄蝶…？」

ひらひらと飛んで来た伝令を指に止まらせた少年は、受け取った報告に思わず声を上げた。

「——なっ！ 雛森が隊舎牢から消えた、だど!?」

冬獅郎が対市丸用に最も嚴重に守りを固めた十番隊隊舎牢。中で拘置と言う名の保護をされていた幼馴染の少女が居なくなるなど一大事だ。

「急いで戻るぞ松本！」

「はい——って、隊長お待ちを！」

「ッ何だ！」

乱菊の唐突な制止に振り返る少年。

「別の地獄蝶です！ 今度は何よ…！」

苛立たしげに新たな報告を受ける乱菊。そしてその顔が徐々に驚愕に染まっっていく。

「おいどうした松本、何があった！」

「…朽木の処刑が再度早まったとのこと。日時は…八月六日、正午…」

「六日…!? 今日じゃねえかッ!」

想定外の通達を受け咄嗟に時刻を確認する。時計が示すのは辰の刻朝五つ、正午までもう二刻ほどしかない。

「隊長、如何なさいます…?」

焦る乱菊の問いに唇を噛む冬獅郎。出来ることなら雛森を探して守ることを優先したい。だが藍染の偽遺書が仮に事実であれば双匣の使用は何としても止めなくてはならない。

冬獅郎は瞼を閉じ葛藤する。迷い、苦悩し——そして決意に満ちた目を開けた。

「松本、十番隊隊舎牢へ行け。雛森の痕跡を辿り必ず保護しろ」

「…隊長!」

「おそらく市丸はまたあいつに何かさせようと接触してくる。てめえはそのときにヤツを止めろ」

合理的観点、そして部下への配慮を考慮した指示。暗に「一度市丸と二人で話し合え」と目で伝えようと、乱菊が恐縮しつつも頷いた。

「ッ、では隊長は…!」

「決まってるんだろ、処刑を中止するよう直談判だ。こんなふざけた命令を寄越しやがった…」

護廷隊で御目通りが叶うのは隊長格のみ。

その瀟靈廷最高権力者たちの名は…

「——中央四十六室だ」

中央四十六室。

尸魂界全土から集められた四十人の賢者と六人の裁判官で構成される司法機関。司法とは名ばかりの事実上の最高意思決定機関であり、その実態は現体制の維持を目的とした保守的な貴族層の牙城だ。冬獅郎が此度の異例づくめの朽木ルキア処刑の流れに異変を察知したのも、この機関の負の側面を良く知るからこそ。

何か良からぬことがここで起きている。その予想を確信に引き上げた若き隊長は、中央地下議事堂を訪れ…そこで信じ難い光景を目にした。

「なツ…なんだこいつは…!？」

最高警備体制がしかれているはずの尸魂界首脳部へ難なく辿り着いてしまった冬獅郎が目にしたのは、無惨に殺害されている四十六人の男女の遺体だった。

——中央四十六室が全滅している。

「どういうことだ…これを全て市丸がやったというのか…?」

乾いた血から事が起きたのは少なくとも一週間以上前と推測される。つまり旅禍襲撃以後に護廷隊へ通達された中央四十六室の命令は徹頭徹尾が誰かに偽装されていたということ。しかしこれほどの陰謀を一人の死神が実行出来るとは思えない。

だがそこで、唾然とする冬獅郎はふと、あり得ない気配を感じる。

「…雛森?」

霊圧だ。錯覚ではない、慣れ親しんだあいつの霊圧だ。

「雛森…ッ!」

何故こんなところにいるのか。全力で気配を辿り、完全立ち入り禁止区域の清浄塔居林へ突入した冬獅郎は…

「——やあ、日番谷君」

そこで、死んでいるはずの男、藍染惣右介と出会った。

「藍…染…!?!」

柔らかな笑み、聡明な印象を覚える眼鏡、低く優しげな声色。己の目を耳を疑う冬獅郎は本物なのかと何度も問うも、彼の返答は自らの無事を肯定するものだけだった。

「それにしても随分早いご到着だ。詰めが甘かったかな、ギン」

「なっ、市丸…!?!」

藍染が見つめる塔居林入り口へ振り向くと、そこには少年が全ての元凶と推理したはずの男が立っていた。

「——いやア、すみません藍染隊長。あの手紙、片方しか引っ掛かってくんまへんでした」

いつの間に現れたのか、面目なさそうに藍染へ謝罪する市丸ギン。被害者と加害者がまるで上司と部下のように接する光景に困惑する冬獅郎は二人の間で視線を彷徨わせる。

「想定？ 引っ掛かる？ てめえら一体…一体何の話をしてんだ…!?!」

「ただの戦術の話だよ、日番谷隊長」

——敵勢の分散は戦の初歩だろうか？

そう口にする藍染は、常の柔らかな笑みを薄ら寒いものに歪めていた。どす黒い悪意を滲ませる怖ろしい笑顔に背筋が凍り、されど冬獅郎はそこでハツとあることに気付く。

「ひな…もり…?」

無い。ここに来るまで確かにあったあいつの霊圧が。

「雛森君かい？ さて、どこかな」

悪戯をしかけた子供のような陽気さが覗く琥珀の目。緊張感のまゝでない藍染の声に異様な胸騒ぎを覚えた少年は、辺り隅々へ視線を飛ばし…

「――！」

瞬歩で通り抜けた藍染の背後で、血だらけで倒れ伏す大切な幼馴染の姿を目にした。

「残念。見つかってしまったか」

瞳孔の開いた大きな双眸に涙を浮かべた雛森桃が、真つ赤な水たまりの中に沈んでいる。弱々しい魄動はまだ彼女の息がある証。だが、だが……

「なん……で……」

眼前の状況が全く理解出来ず、冬獅郎はただ立ち尽くし震えるばかり。そんな彼へ「すまない」と藍染が頓珍漢な謝罪を送る。

「君を驚かせるつもりはなかった。本当は見つからないよう隠しておくつもりでね。かの天才少年の頭脳と行動力を見誤った僕のミスだ」
「変わらない優しげな声色でそう告げる藍染惣右介。見つからないようにとはどういうことだ。隠しておくつもりとはどういうことだ。そして長い混乱の末、冬獅郎はようやくこの認め難い現実を直視した。」

雛森の憧れ、藍染惣右介は――尸魂界の敵だったのだ、と……

「……グルだったのか……てめえら……！　いつからだッ！」

今までの市丸の怪しい動きの数々は全部この下種野郎の指示の下。掌で踊らされていた屈辱が怒りとなって際限なく胸中に湧き上がる。「もちろん最初からだよ。私が隊長になってから、ただの一度も彼以外を副隊長だと思っただけじゃない」

言葉の衝撃に胸が締め付けられる。それは、つまりこいつは今まですつと、雛森を――

「騙したつもりはないさ。ただ、君たち役者の誰一人として理解していなかったただけだよ……僕の本当の姿をね」

「ッ、理解……してない……？」

何を言っているのだこの男は。雛森以上にこいつを理解しようと励んでいた者など一体どこにいる。その一途な姿を苦々しい思いで見してきた冬獅郎は、それでもそれがあいつの望みならと、自分がヤツを超えるまでの辛抱だと、自らの想いに蓋をし彼女を見守り続けてきたのだ。

あいつはこの男に憧れて少しでも近くにいるために五番隊に入り、この男の役に立つために馬車馬の如く働き、夜は寝る間も惜しみ鬼道衆で期待に応え続け、十年前から新副隊長としてずっとこの男を支え続けていたではないか。

それを…

「知っているさ。自分に憧れを抱く者ほど御しやすいものはない」

「な…」

しかし、男は少女の五十年の思いをまるでゴミのように振り払う。そして混乱に右往左往する冬獅郎の激情へ、逆賊藍染惣右介は愉しうに正道を示した。

「いい機会だ。一つ覚えておくといい、日番谷君」

——憧れは…

理解から最も遠い感情だよ——

その言葉が少年の最後の理性の緒を引き千切った。正当な行き場を見つけた爆発的な憤怒は一瞬で暴力へと昇華し、正気が飛びそうなほどの極寒の霊圧が周囲に四散する。

「卍…解…」

——大紅蓮氷輪丸——

氷雪系最強と謳われる日番谷冬獅郎の斬魄刀。巨大な清浄塔居林

の全てを凍り付かせ、荘厳な竜を背負った少年は刀の切っ先を幼馴染の仇敵へ突き付ける。

「藍染…俺はてめえを殺すツツ!!」

だが冬獅郎の殺意をまるでそよ風のように流す藍染は、ムカつく美貌を嘲笑に歪めていた。

「あまり強い言葉を遣うなよ、弱く見えるぞ」

頭の血管がぶち切れるほどの挑発に正々堂々と乗ってやる冬獅郎。冷静さも戦術も何もない。狂声を上げ、ただ最短距離で、最短時間でこの男が死ぬ未来へ手を伸ばした少年は、見事それを掴んだ…かに思われた。

「縛道の六十一・六杖光牢」

「なっ!?!」

突然あらぬ所から放たれた鬼道が冬獅郎の体を拘束する。

バカな、どういうことだ。ヤツは確かにこの剣で貫き氷漬けにしたはず。そう混乱する彼の目の前で、突き刺したはずの藍染が笑顔を浮かべながら煙のように消え失せた。

「君のことは傷つけないで欲しいと頼まれているんだ。少しの間、そこで大人しくしていなさい」

「バ…バカな! 幻…だと…!?!」

動揺しながらも何とか拘束を解こうと霊圧を吹き荒らす。だが幾ら足掻けど藍染の術はビクともしない。詠唱破棄されたただの鬼道如きに、自慢の正解が完全に封じられてしまったのだ。

そんな最中、舞台の清浄塔居林へ新たな役者が現れる。

「——大逆の罪人、藍染惣右介」

辛うじて動く首で冬獅郎が見たのは四番隊の二人の隊長格、卯ノ花烈と虎徹勇音。だがこちらの援軍を見ても藍染は眉一つ動かさない。

「どうも、卯ノ花隊長。想定通りのお越しで誠に結構」

「…やはりこれまでの全てが貴方の陰謀だったのですね」

そこから始まった卯ノ花との答え合わせは、藍染の斬魄刀【鏡花水月】の真の能力を明かす恐るべきものだった。今まで死を偽装して来たのも、ここ中央四十六室に異変無しと皆が判断したのも、全てその力——完全催眠によるものだと言は自慢する。

鏡花水月の発動条件は、始解の瞬間を目にすること。一度でもそれを目にした者はその虜となり、以後彼が始解を使用するたびに完全催眠の支配下に入る。

だが恐るべき事実はそれだけではなかった。

「気付いたようだね。鏡花水月は目の見えない者にはかからない。つまり最初から盲目の身の…」

——東仙要は僕の部下だ。

とんでもない暴露に冬獅郎は息を呑む。藍染、市丸、そして東仙。誇りある護廷十三隊。その頂点にして模範たるべき十三名の隊長から当代同時に三人もの裏切り者が出たのだ。

戦慄する三人の姿に満足したのか、藍染が鷹揚に頷く。

…その直後。市丸が懐から取り出した白い帯が、雛森を囲む逆賊二人を中心に渦巻き出した。

「さて、時間も押している。我々はここで失礼させて貰おう」

「な、何だそれは…！ 雛森を返せッ！」

身動きできない冬獅郎は、瀕死の少女を抱え上げる市丸へ叫喚する。

自分たちで刺したクセに何故彼女を連れ去る必要があるかというのか。隣の卯ノ花に大至急治療してもらわなくてはならないのに、口惜しくも冬獅郎には負け犬の如く吠える以外に巨悪を止める術がない。

だが無力な少年の必死の抗議も空しく。

「日番谷隊長」

そして白帯の渦に包まれる藍染が挑発的な笑みを浮かべ、意味有りげな一言を最後に三人の姿は掻き消えた。

——彼女にお別れを言いたければ、急ぐといい。

絶望イイイイ！

「――【反鬼相殺】」

逆賊・藍染惣右介が去った中央四十六室専用施設、清浄塔居林。鬼道で囚われていた日番谷冬獅郎は、同僚の卯ノ花烈の助力で何とか抜け出すことが叶った。

「…ッ、助かりました卯ノ花隊長」

「怖ろしい強度の【六杖光牢】でした。藍染惣右介、まさかこれほどの使い手だったとは…」

解除鬼道の感触に眉を顰める卯ノ花。色々と怖い噂が囁かれるこの古株隊長でさえ苦戦するほどの力量とは尋常ではない。冬獅郎は敵の巨大さを噛み締めながらも、その心を埋め尽くすのは焦燥の激情だけだ。

「くそっ、雛森がヤツらに…！ 藍染の野郎…どこ行きやがったッ！」
「勇音に探させています」

チラリと副官へ卯ノ花が目を向ける。【摺趾追雀】の詠唱を唱えてしばらく、敵の霊圧を捕捉した虎徹勇音が声を震わせた。

「双☒の…丘です…」
「！」

双☒。あの偽の遺書の内容が嫌でも脳裏に浮かぶ。その渦中にあいつが巻き込まれている事実が、少年に残っていた最後の冷静さを奪い去った。

「雛森…ッ！」
「！ お待ちなさい、日番谷隊――」

後ろの卯ノ花の制止も聞こえず、冬獅郎は【大紅蓮氷輪丸】の翼で清浄塔居林の高い天井をぶち抜き、死ぬ気で瀾霊廷の空を翔ける。

無我夢中の彼を突き動かすのは、大切な幼馴染に誓った、たった一つの約束。

「守るんだ…俺が、あいつを…ッ！」

霊術院での思い出が頭を過る。

最初の現世演習で巨大虚に襲われ、いつも守られるばかりだった自分が初めてあいつを守れたときのこと。大勢の観衆の前、その場の高揚感で随分恥ずかしい台詞を言っつてしまいい長い間ネタにされたものだ。

だが後悔など微塵もない。あの日の気持ちを一度たりとも忘れたことはなく、自分はずっとずっとあいつを守るために研鑽を積んできた。そのための氷輪丸だ。

そのための大紅蓮氷輪丸なのだ。

「…ッ、雛森！」

見つけた。

双匣の丘の頂上。多くの人影が佇む間を冬獅郎は脇目も振らず爆進する。

場の状況などどうでもいい。視界が流星のように尾を引く中、ただ一点のみを鮮明に捉えた彼の目は、迷わず己の両手を希望へ導き。

そして…

「返せ——藍染惣右介エエッッ!!」

奪い返した愛しい少女の温もりを、冬獅郎はその腕で力の限りに抱きしめた。

「——おや、奪い返されてしまった」

穏やかな男の声が双匣の丘の静寂に溶けていく。

「…今ので手は尽きたようじゃの」

「動けば即刻その首刎ねる…!」

男の左右には二人の女。

片方は男の喉元に斬魄刀を当てる、隠密機動総司令官を務める二番隊長・碎蜂。もう片方は男の斬魄刀を白打で封じる、見覚えのない褐色肌の刑戦装束の者。

だがどちらも隊長級の強大な霊圧を研ぎ澄ませ、微塵の油断も無くその男——藍染惣右介の身動きを封じていた。

「すみません。十番隊長さんがあまりに死に物狂いやったんでつい情けをかけてしまいました」

「気にしないでいいさ、ギン。所詮は余興だ」

自らの状況も構わず呑気に言葉を交わす藍染と、同じく脅され大人しくしている市丸ギンと東仙要。市丸の首筋に斬魄刀を構えているのは松本乱菊だ。

「ッ、隊長! 雛森は…」

「大丈夫だ松本、まだ息はある…!」

連れ去られた雛森桃を奪い返した日番谷冬獅郎は、彼女を強く抱き抱えながらその傷の様子を確かめる。

わき腹を一刺し、かなり深い。だが寸前で避けたのか内臓は辛うじて無事なようだ。

「…人質も取り返した。逃げ場も最早ない。終わりじゃ、藍染」

褐色の女が藍染へ投降を促す。

辺りには碎蜂たち以外にも同僚の隊長、浮竹十四郎や京楽春水、更には山本総隊長までもが重い腰を上げて藍染一派を取り囲んでいた。一同の中には少年と親しい志波空鶴と匣丹坊の姿も見える。

状況は我が方の王手。冬獅郎は心強い味方の霊圧を感じながら、無事雛森を守れたことにほっと息を吐いた。

だが。

「――逃げる?。」

それは刹那の出来事。

瞬き一つする間もなく、冬獅郎の目の前で四人の、最も藍染に近い位置に立つ死神たちが突然血を吹いて崩れ落ちた。

『なっ?!』

少年は背後の浮竹らと同時に驚嘆する。

碎蜂、空鶴、☒丹坊、そして褐色の女。皆一様に倒れ伏し、あれほど滾らせていた戦意を塵一つとして残していない。一切の過程を抜きに、ただ常軌を逸する結果のみが視界の中に現れた。

「おかしなことを言う、四楓院夜一。一体何故、この僕が君たち如きから逃げなくてはならないんだ?。」

静かな男の声が耳に届く。その主へ目を向けた冬獅郎は、そこで抜身の斬魄刀に血を滴らせるヤツの姿を見た。途轍もなく鋭利で巨大な霊圧を発する、藍染惣右介の佇まいを。

状況、発言、霊圧、一瞬でひっくり返った戦局。

「何…だと…」

「これが…藍染の実力…!?!」

莫迦な、何だこれは。何なのだこの力の差は。あまりの出来事に味方一同は無様に放心する。

薙ぐ刀の紫電すら見えずに隊長クラスの死神が二人も瞬殺された。はたと周囲を見渡せば同じく虫の息の阿散井に橙髪の旅禍、同じ隊長の粕村左陣まで倒れている。まさか彼らも一撃で…

そう戦慄する冬獅郎へ、この地獄絵図を作り出した化物が語りかけた。

「ようやく静かになったようだ。少し昔話をしないかい、日番谷君」

「…!」

「君が尸魂界へ来る前の出来事だ」

唐突に何だと訝しむも、藍染は勝手に当時を懐かしむように自らの記憶をなぞっていく。

「…今から百五十年ほど昔になる。僕は流魂街で虚化の研究用の素体を探していた時、とある特異な魂魄を発見した——僅か一年で、無から上位席官相当にまで霊圧が急成長した稀有な才能の持ち主にね」

聞く気などなかった冬獅郎も、浮竹ら他の者たちも、男の堂々とした姿に思わず惹き込まれていく。それが良からぬ話だと心のどこかで感じていながら。

「その魂魄は尸魂界に招かれたばかりの、右も左もわからない幼い子供。だがその子は自力で鬼道の片鱗を掴み、それをういた独自の霊力鍛錬法を編み出した神童だった」

「…何？」

藍染の話術に支配された場に騒めきが起きる。その一人、山本元柳斎重國が不承を主張した。

「…何を世迷い事を申しておる、藍染惣右介。霊圧とは霊体の格そのもの。斬拳走鬼を磨き上げること以外に、死神が霊力を鍛える方法などこの世にあらず」

「ああ、僕もそう思っていたよ。山本総隊長」

「…何じゃと？」

男は自慢気な笑みを浮かべながら老隊長の反論を否定する。

「その方法はまさに奇想天外の発想でね。それは、我々死神が斬拳走鬼の鍛錬で霊力や臂力、体力などを外部から鍛えるのではなく、自らの魄内に鬼道を行使し内部から霊力を強化することだった」

「魄内…？」

首を捻る一同へ男が微笑む。

「わからないかい？ その子は日頃の刃禪や鬼道稽古などという間接的で非効率な方法ではなく、魂魄の霊力を司る臓器——鎖結さけつと魄睡はくすいそのものに負荷をかけて直接魄内の霊力器系を鍛えようとしたんだ」

『!?!』

得心がいった死神たちが一斉に驚愕する。理解出来ない発想では

ない。だがそれを実際に実行する狂人など、長い尸魂界の歴史の中に一体何人いたというのか。

「莫迦な、それは…それはまるで超過輸血で血圧を強引に上げて心臓を圧するに等しい行為だ…！　すぐに臓器が破裂か機能停止に陥る。一歩間違えれば死神として完全に死ぬことになるぞ」

「ああ、現にこの僕も何度か霊力が一時的に使えなくなったときがあった」

『!!?』

絶句。

今、この男は何と言った。どこの馬の骨とも知らぬ小童の考えた机上の空論ですらない妄言を真に受け、自らの体で成果を試したというのか。

こんな大規模な権謀術数を尸魂界に仕掛けた鬼才が、ただの子供の戯れ言を…

「鬼道の才能と、度胸。それだけを以て成果を上げた特別な者がいる。ならば不可能と断念するのはその子に対する敗北だ」

「…狂っている。恐ろしくはないのか…」

浮竹の問いを大罪人が鼻で嗤う。

「僕はその感情を望んでいた。そしてその個としての生存本能を刺激する恐怖こそが、停滞する魂魄に進化を齎す。己が築き上げた全てが一瞬で無へと帰す、死神としての死と隣り合わせの日々は実により糧となってくれたよ」

そう述べ、藍染は足下に転がる二人の女を睥睨し、つまらなさそうに目を細めた。

「本来なら君たちのような蠅ではなく更木剣八でこの五十年の成果を確かめるはずだった」

小さく頭を振り「つくづくあの男は思い通りにならないね」と零す藍染。

そして男が、ゆっくりと冬獅郎の方へ体を向けた。

「——さて、本題はここからだ。日番谷隊長」

「…ッ！」

その声の抑揚の微かな変化が異様に恐ろしくて、冬獅郎は思わず後退る。

何故名指しで呼ぶのか。同じ神童と持て囃される自分への当てつけなどではないだろう。もつと邪悪で、怖ろしい何か…

「僕がその神童と直接顔を合わせたのは五十年前でね。虚の群れを使った実力測定で素晴らしい結果を出してくれたから、以後特に目をかけることにしたんだ」

「虚の…群れ？」

謡うような藍染の声に悪寒が走る。

ここから先を聞いてはダメだ。冬獅郎は本能が鳴らす警鐘に従おうとするも、相手との間に広がる圧倒的な力量差がそれを許さない。

藍染は語る。

早くから己の才能に気付いていたその子供は独自に霊圧を抑える技術を身に付け、何とか周囲に溶け込もうと涙ぐましい努力をしていた。それは社会における自らの異常性を認識している強者のジレンマであり、藍染はそんな孤独な天才に活躍の場を与えてやったのだと言う。

「彼女は有能で、そして無垢な子供だった。僕の言うことが全て正しい行為だと錯覚し、悪事を悪事と知らないままに手を汚す。皆と仲良くしようと純粋な善意を振り撒き信奉者を作り、友人の成長のためなのだと尊敬する相手を本人に殺させ、大切な家族のためなのだと上司を席から引き摺り下ろす。心を痛めながらも、ただひたすらそれが正しいことだと言う僕の言葉を盲目的に信じて」

目を閉じ、場面を想起するように「実に扱いやすかったよ」と口ずさむ藍染。

…止める。ふぎけるな。一体何の妄想の話をしている。

「もつとも尸魂界と裾を分かつことは流石の彼女にとっても一大事だったようだね。少々手荒に躡ける破目になったのは僕の不徳の致すところだ」

「…待て」

「やはり人の心と言うものは難しい。せつかくこの日のために仕込んだ演技も動揺でとても見れたものじゃなかった。彼女のフオローを頑張ってくれたギンには——」

「待てって言ってるんだろッ!!」

絶叫。

自分でも驚くほど大きく、そして悲痛な声だった。

「ッ、さつきから聞いてりやべらべらべら意味わかんねえことを…! フザけんのも大概にしろてめえッ!」

心の最奥を侵す男の戯言を追い出そうと、冬獅郎は必死に怒声を張り上げる。

何を言ってるんだこいつは。そんなことがあるはずないだろう。

それではまるで、まるで…

「おや、まだわからないかい？ それとも不都合な真実から目を逸らし、一秒でも長く、今までと変わらない幻想に浸っていたいのかな」
「——ッ!」

藍染の静かな言葉が少年の胸を抉り貫く。諭すような、宥めるような。だが優しげな声色に反し、男の顔に浮かんでいるのは鋭利な弧を描く薄い唇。

言うな。その先を言うな。

だが冬獅郎の祈りも空しく…

「…さあ、もう大切な幼馴染とのお別れも済んだだろう。僕の下へ戻っておいで」

そして、その残酷な現実を、男は心の底から愉しむように突き付けた。

沈黙が双匣の丘を支配する。

騒めく風も、雑多な瀨靈廷の騒音も、集った大勢の隊長格たちの身動きも。まるで世界そのものが凍り付いたかのように衣擦れ一つ音はなく、誰もがその名を耳に立ち尽くしていた。

「ひな…もり…？」

それはこの場の誰の声だったか。同僚の阿散井、同期のルキア、友人の乱菊、先輩の檜佐木、読書仲間の七緒、死神協会の碎蜂、鬼道師匠の空鶴…

あるいはそれは呆ける自分が呟いた、縋った虚しい希望だったのか
もしれない。

——違う。

そんなはずはない。そんなことなどあつていいはずがない。少年は必死に否定する。

こいつはアホで天然で間抜けで情けなくて負けず嫌いで、だけど誰よりも無邪気で明るくて純粹で優しく、そして幼くして力ある者の使命を胸に靈術院の門を叩いた、誰よりも気高い死神なのだ。

冬獅郎に人の温かさを教え、靈力で祖母を傷付けずに済む道を、守られることの悔しさを、守ることの誇らしさを、そして——隙間風の吹く小さな家屋だけだった彼の世界に、外の広さを教えてくれた、誰

よりも素晴らしい幼馴染なのだ。

その名の人物は、この腕に抱き抱える少女は、日番谷冬獅郎の世界で最も大切な想い人なのだ。

それなのに…

「――滲み出す混濁の紋章…」

ぼつり…と。少年の耳に声が届く。

誰よりも愛しく、好ましく、心を揺さぶる可憐な声が。

「――不遜なる狂気の器…」

風が吹く。それに誘われるように、冬獅郎は胸元から聞こえるその声の主へ首を向ける。

いつもは見上げている彼女の顔は、垂れる艶やかな前髪に隠れ、覗くことは叶わない。

「――湧き上がり…否定し…痺れ…瞬き…眠りを妨げる…」

体が重い。風が強い。抱える彼女が似合わない闇色の光を帯びていく。

やめろ、離れろ、そんな色でこいつを穢すな。

彼女から滲み出すおぞましい黒い光を掃わんと、冬獅郎は自由な左腕を必死に振るう。

「――爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人形…」

何度も触れ、何度も感じ、何度も親しんだ、あいつの霊力。

だと言うのに、あの可愛らしい紅い桃色はどす黒く染まり、心地よい毛布のように包み込んでくれる霊圧は、まるで深海の如き巨圧で冬獅郎を押し潰す。

最年少で護廷の隊長にまで上り詰めた、当代最高の神童すらも。

「――結合せよ、反発せよ…」

続く言霊が黒い霊力を立ち上がらせ、吹き荒れる暴風は竜巻となる。

「ツ不味い！ 離れろ日番谷隊長！」

「…!？」

遠くの浮竹の叫声が耳を貫き、はたと我に返る少年。

そして手のひらに暗黒の渦を浮かべた幼馴染が、顔を上げ…

「――地に満ち…」

一粒の涙が、彼女の頬を伝った。

「――己の無力を知れ…」

かくして日番谷冬獅郎は、抱えたはずの尊い温もりが己の両腕から零れ落ちていく感覚を最後に、底無しの暗闇に呑み込まれた。

——ごめんね…シロちゃん…

そんな消え入りそうな擦れ声が響く、絶望と言う名の棺の中へ。

雛森イイイイ！

「——うそ……だろ……」

暗転した視界が晴れる。

空、地平線、地べた。ゆつくりと移ろうその景色が、自分が倒れ伏す様を己の主観が映したものだど気付くのに、冬獅郎は長い時間を必要とした。

全身の全ての骨が、筋が、肉がぐしゃぐしゃになっている。四方八方から体を霊子レベルで散り散りに引き千切られるような凄まじい力に襲われた後、気付けば自分是指一本動かせない体で無様に土を舐めている。

一体何が起きたのか。呆けた頭で混乱する冬獅郎。

だがぼやける視界の端に、少年は一人立ち尽くす小柄な人影を見つけた。

「…雛…森？」

無言で佇む、血だらけの少女。最後の記憶には自分の腕に抱えた彼女の温もりが残っている。

まさかあの黒い空間にあいつも巻き込まれてしまったのか。不味い、隊長の自分すら一撃で指一本動かせないほどズタボロにされる威力なのだ。藍染に斬られた瀕死の副隊長がそんな状態で喰らって無事でいられるワケがない。急いで四番隊を呼ばなくては。

…そんな現実逃避を続ける冬獅郎に悲劇の真実を突き付けるのは、やはりいつだってあの男だった。

「——自分ごと黒棺で押し潰したか。幼馴染を裏切った自罰のつもりかな、桃」

嘲りを含んだ静かな声で、男が「殊勝なことだ」とあいつの名を呼

ぶ。

黒棺、幼馴染、裏切り、自罰。それらの言葉が毒刃のように少年の心に深く突き刺さる。

嘘だ、そんな、そんなこと…

「ボロボロになって、いけない子だ。…さあ、戻っておいで。僕の下へ」

「……は……い……」

優しげな、それでいて背筋を凍らせる恐ろしさを孕んだ呼びかけ。まるで首輪を引かれるかのように、傷だらけの雛森がフラフラと男の方へと歩き出す。

尸魂界を、皆を、少女自身を裏切ったはずの——藍染惣右介の側へ。

「あ……あ……」

思わず零れた吐息は嗚咽に等しかった。一步、また一步と彼女が足を引き摺る度、冬獅郎の脳裏を様々な記憶の断片が走馬灯のように駆け巡る。

『一人前の男らしいトコ見せて…』

茶化しながらも、どこか達観したような顔で挑発してきたあいつ。

『…あなたに守って貰おうかな』

いつもの姉貴面とは違う、らしくない弱音を呟いたあいつ。

『ありえない話を聞いちゃって…』

藍染と何かあったのかと聞かれ、悪夢を掃うように頭を振ったあいつ。

『自分が従えば藍染隊長には何も…』

市丸に脅されたとき、絶る様にヤツへ嘆願した青い顔のあいつ。

『待って…行かないで…』

良かれと思いき藍染の下へ送り届けた自分の袖をずっと握っていたあいつ。

『市丸隊長と敵対したら、皆が…』

直前の言動が真逆な、市丸の背後の巨悪を暗示するかのようなあい

つ。
そして。

——ごめんね…シロちゃん…

彼女が幾度と覗かせた暗い顔が。沈痛そうに呟いた言葉の数々が。冬獅郎の頭を過つては消えていく。

「…ち…違う…俺は…俺は…ッ！」

潰れた喉で必死に彼女の背へと言葉を投げかける。だが、何が「違う」と言うのか。無意味な懺悔は当然、雛森には届かない。全てが手遅れとなって、やっと気付けた。

あいつはずっと、ずっとこの事に苦悩していたんだ。

何も知らぬままに騙され、少しずつ何かがおかしいと思ひ始め…そして恩人の仮面を被った外道の悪事に加担させられていたと知って、ずっと一人で嘆き苦しんでいたのだ。

助けを求める？

誰も知らない藍染の本性を誰かに話して信じて貰えるのか。協力してもらえるのか。

あのお人好しのアホ桃が、死ぬかもしれない危険な博打のために誰かを巻き込もうとするのか。

仮に味方を作れたとして、肝心のこの化物に勝てるのか。不可能だ。

…否、そもそも敵対することすら許されない。

——君は傷つけるなと頼まれた。

清浄塔居林で藍染が口にした言葉が冬獅郎の心に種を芽吹かせる。頼まれた？ 誰に？ そんな答えは一つに決まっている。

「…知らな…かつたんだ…」

彼女が想像を絶する覚悟で伝えようとしてくれた真実を。憔悴の果てに、最後の希望だと一度だけ求めてくれた助けを。

そんな悲愴な思いを、この世でただ一人受け取っておきながら。何も知らずにあいつにずっと守られていながら。

俺は、何も、何も…

「——おかえり、桃」

そして満身創痍の身の、最後の一步で糸が切れるように崩れ落ち、少女は巨悪の腕に抱き抱えられる。その姿を目にしたとき、日番谷冬獅郎は無様にも悟ってしまった。

俺は、なんて無力なのだろう、と…

「さて、これで余興は全て終わった」

茫然自失と地べたに項垂れる冬獅郎を一瞥し、藍染は鷹揚に「要、ギン」と部下たちの名を呼んだ。

目的の崩玉を手に入れ、霊王宮の情報や浦原喜助の研究資料を束ね、目をかけている勇者たちの成長を確認した。尸魂界へ別れを告げ、宣戦を布告した今、思い残すことは何もない。

頷く部下の姿に満足そうな笑みを浮かべた大罪人は、かくして勝利を宣言する。

「——凱旋だ」

その言葉を合図とし、突然天から眩い光が降り注いだ。
『なっ!?!』

高く虚空より一直線に差し込んだのは、三本の巨大な光の柱。それぞれが藍染を、市丸を、東仙を、そして抱えられた雛森を包み込む。まるで世界の主役を照らすかのように。

さらに。

「ば、莫迦な…… あれは……ッ！」

見上げた光の先で、空が割れる。

比喩ではない。布を破くが如く空間が引き裂かれ、中からおぞましい化物が頭首を覗かせた。

——死神の敵、メノス・グランデ大虚の大軍勢。

聳える怪物たちが無数の赤い目で双 \boxtimes の丘を睥睨する。一斉に咆哮を上げる彼らの姿は宛ら魔界の聖歌隊。その呼び声にいざなわれるように、降り注ぐ光の柱の中で、三人の逆賊が足下の大地と共に宙へ浮かび上がった。

現象の名は反膜ネガシオンという。大虚が同胞を守るときに行使する、最後の切り札。その力は浮世を超えた理の領域にあるとされ、光に包まれた者は何人たりとも侵すことは叶わない。

集う護廷の死神達は啞然とし、臍を噛んだ。最早我らに出来ることは水面の月に吠えるだけ。

完膚無きまで打ちのめされた、屈辱だった。

『……もう少し捕まっとしてもよかったのに』

——ごめんな、乱菊。

市丸ギンが、光の壁を隔てた女に別れを告げる。

『……言ったらう、私の目に映るのは最も血に染まらぬ道のみ』

——私が歩む道こそが、正義だ……！

東仙要が、眼下より憤慨する尊き友に正義を説く。

「……大虚とまで手を組んだのか……ッ」

——何のためにだ……！

そして、天へと上る藍染へ、問いを投げる者がいる。

副官の志波海燕を殺し、部下の朽木ルキアの人生をめちやくちやにした憎き敵を怒りの形相で見上げる十三番隊長、浮竹十四郎だ。

『高みを求めて』

抑揚のない声で答えを返す藍染。それは彼の飽くなき向上心が欲する当然のものだった。

だが男の果てしない渴望は多くの悲劇を齎す傍若無人な野心。大儀なき力を求める外道へ浮竹は言い放つ。

「地に堕ちたか、藍染……！」

その罵倒に、大罪人が眉を寄せた。

『…驕りが過ぎるぞ、浮竹』

目を閉じ、諭すように、男が己の知ったこの世の真実を言葉に刻む
…

『最初から我らに立てる天などありはしない。君も、僕も、神すらも』

その意味を理解出来る者は眼下にいないだろう。四楓院夜一や黒崎一護から話を聞くであろう浦原喜助さえ。

『だが天女の詩吟しぎんが終わるとき、我ら道化の叙事詩は幕を引く』

されど男は確信する。位相の狭間の語り部が、その神曲の写本を閉じた日こそ…

『これからは…』

——私が天に立つ——

道化に生まれた己が身は、ようやく一個の命の産声を上げるのだと。

遠ざかる。

光の柱の上へ、一人の少女が消えて行く。

少しづつ届かなくなっていく彼女の姿を見つめながら、日番谷冬獅郎のへし折れた心の奥底で、焦燥に煽られた最後の火種が燃え上がる。

「待て……藍染……ッ」

吐くのは惨めな負け犬の遠吠え。否、遠くに届きすらしない無意味な独り言だ。

だが少年は軋む体に鞭を打ち、必死に天へ手を伸ばす。

「動け……体……ッ、応えろ……氷輪丸ッ」

震える指先が触れる己の魂の半身が、無言でかぶりを左右に振る。体はとうに限界で、少年の身を動かすのは折れた心でも、砕けた骨肉でもない。

彼に残された無様な執念だった。

「動けよ……何のための正解だ……何のための斬拳走鬼だ……ッ！」

ブチブチと何かが千切れる音が全身を走る。それでも冬獅郎は、彼の魂は諦めない。

俺は一体何のために死神になった。

初めて会ったあの日に見惚れたあいつの笑顔。投げゴマで負ける度に悔しそうに頬を膨らませるあいつの拗ね顔を。横抱きに抱えたときに恥じらうあいつの紅顔を……

「……守る……ためだ……！」

あいつを守って、笑わせて、拗ねさせて、照れさせて、一人前の男として認めさせて。

そして、あいつを、あいつの全部を…

「——手に入れるためだろうがアアアッ！」

瞬間、爆発的な霊圧が冬獅郎の体から噴出した。

刀を振るう腕は動かない。立ち上がるための自由な足も、飛ぶための氷の翼も、戦意を昂らせる強い心も、冬獅郎には最早どれも残されていない。

だが自分にはまだ一つだけ残っている。決して消えない、折れない、弱らない。誰よりも強い感情が。

惚れた女を想う、不滅の慕情が。

「雛森を——返せえええエツツ!!」

若き少年の、最後の男の意地が死力を放つ。命を削るような代償で絞り出した霊力の猛吹雪は降り注ぐ反膜の柱を呑み込み、巨大な竜巻となって天へ聳え上がった。

己の全てを投げ作り出した必殺の【氷天百華葬】の大旋風。たった一人の少女を欲する、何よりも純粋な想いを以て、日番谷冬獅郎は理の領域のその先へ、必死に、必死に手を伸ばした。

そして…

「——あ…あ…あ…」

吹雪の渦が消えていく。

光の塔に阻まれ、少年の最後の意地が、風に吹かれる花のように散っていく。

惚れた女へ伸ばしたその手を阻むのは、この世の理の壁。残酷なま

での理不尽が二人を別つ、決して交わることの叶わない絶対の定め。

「嫌だ…」

零れる嗚咽は意地の残滓。惨めな出涸らしが吹き荒む風に飛んでいく。

「嫌だ…！ 俺は…まだ…ッ」

届くはずもないのに、聞こえるはずもないのに。少年は涙で滲む視界の奥に、微かに浮かぶ少女へ向けて、尽きぬ悔悟の念を吐露していく。

立場なんて、席次なんて、強さなんてどうでもいい。くだらない男の矜持も、死神の誇りも、全部余さず捨てればよかった。片時も離れず、ずっとあいつの側にいればよかった。

あの霊術院最後の誕生日に、恥ずかしがらずにちやんと…

——あいつに言えばよかったんだ。

「…今なら…言えるんだ…！」

意地も恥も、外聞も、何もかも。くだらないこと全てを無視して、その大事な大事な本音を言えるんだ。だから。

「…頼む…雛森…！」

言わせてくれ。

「…行くな…雛森…イ！」

俺はずっと、お前のことが。

「…雛森——ッッ」

好きだったんだ、と…

「雛森イイイイイイ!!」

八月六日、正午。

尸魂界の中心、双匣の丘に虚しく響く喚呼の悲鳴。一人の少年が想い人の名を呼ぶ悲愴な声を最後に、護廷十三隊は大逆者三名と一人の陰謀の前に…

——敗北した。

再起イイイイ！

藍染惣右介率いる勢力が尸魂界を去った。

護廷十三隊は大逆者の拘束、打倒共に失敗。多くの傷跡を残した、瀨靈廷史上類を見ない大敗北だった。

「藍染隊長……雛森さん……」

五番隊隊舎。

無人の隊首室の中で、同隊三席・蟹沢ほたるは茫然と立ち尽くす。つい先日までその席に座っていた二人の上官は、今や尸魂界史上最悪の罪人として特別総動員令が発令されるほどの敵になっている。それは彼女にとって未だに信じられない事実だった。

ほたるにとって、雛森桃という少女は目標だった。

初めて彼女のことを知ったのは霊術院時代、あの志波家の姫に師事した鬼道の天才が新入生にいと情報通の友人に聞いたとき。最初は同じ鬼道を得意とする女子院生として興味を持ち、噂を耳にする度「負けられない」と一方的にライバル視するようになった。

直接会ったのは現世演習の監督生として。一年一組の院生名簿の中に彼女の名を見つけ、真っ先に立候補した。そして目にした彼女は噂通りの可愛く気立ての良い女の子で、そして噂以上の天才だった。

演習中に現れた巨大虚の群れに臆さず、自らを犠牲に皆を助ける一回生の少女。本来その役目を負うべき自分は敵の一撃に失神し、目が覚めた時は全てが終わった後。絶対に敵わない相手に大立ち回りを見せた、命の恩人である彼女との差が悔しくて、そして情けなかった。そんな傷心のほたるの闇を照らしてくれたのは、彼女の憧れとなった男、藍染惣右介だ。

——恐怖は枷であると同時に、糧でもある。

——恐怖を知らない者を支えられるのは、恐怖を知った者だけだ。

何もかもが劣る自分に対し、自分たちだけが持つ”恐怖”が得難いものであると教えてもらったほたるは、あの美男の深く優しい言葉に感銘を受けた。雛森に席次を抜かされたときも、鬼道衆での活躍を耳にしたときも、藍染のあの言葉があつたからこそ不貞腐れずに前を向くことが出来たのだ。

「お二人のおかげなんです、今の私は…」

恩人である師匠とライバル。

大切な存在を一度に失った蟹沢ほたるに残されたのは、雛森の執務机の上に丁寧に並べられていた『隊指揮並^{ならび}二統率次第』のみ。隊長格不在の有事に隊が取るべき行動の指標が事細やかに記された挿絵付きのマニユアルは、まるで彼女の精一杯の謝罪のようにも、飛び立つ鳥が跡を濁さない最低限のケジメのようにも思えた。

「こんなものより、残ってくださいることは出来なかつたんですか…」

一筋の涙が頬を伝う。

泣いている場合じゃないのに。三席として託されたこの冊子の通りに、指揮系統が麻痺した隊を纏めないといけないのに。

隊舎内に木霊する混乱の喧騒が遠のくほどに、蟹沢ほたるはただただ耐え難い現実^{じつ}に打ちひしがれることしか出来なかつた。

「げえ…おえええ……」

三番隊隊舎への帰り道。

十番隊の同僚の酒飲みにつき合わされぐでんぐでんに酔っぱらつた副隊長・吉良イツルは、道端の壁に黄色いシミを作る迷惑行為に勤しんでいた。

「ああ…夢じゃ…ないんだよな…」

真っ赤な顔と蕩けた瞳で天を仰ぐ青年。その脳裏に焼き付いて離れないのは二人の男女の顔だ。

絶対である上司、市丸ギンが尸魂界の敵となり、イツル自身も彼の指示の下いくつもの悪事に加担させられていた。中央四十六室の護衛命令に変更を加え、真実を暴こうと駆け回る十番隊副隊長の松本乱菊を誘引するなど、陰謀の時間稼ぎが主だ。

だがその結果が、今の孤独な青年だった。

「……これも……上官に盲目的に従うだけだった自分のせいなんだろうか……」

副官としての責務に固執するあまり尸魂界を危険に晒すハメになったことを、イツルは心底後悔する。

そして何より。

「——雛森君……」

抉れたように痛む胸を抑え、地面に蹲る青年。それは彼の最大の後悔の名だった。

初対面から五十年。霊術院入学式の壇上で自分を差し置き主席を取った可憐な少女の姿に、イツルが覚えたのは悔しさではなく、甘い胸のときめきだった。以後授業で隣の席に座ろうと有象無象の男たちとの争いを制し、彼女の間隙だらけな異性との接し方にドギマギしながらも仲良くなることに成功し、こうして五十年誰よりも身近で彼女のことを見続けて来たと自信を持つまでに至った。

もつとも流石は霊術院歴代彼女にしたい女子一位の地位に——本人の知らぬ所で——君臨し続けていた少女。拳がるライバルたちの名は藍染惣右介に日番谷冬獅郎といずれも強敵ばかり。聳え立つ壁にも臆さず自分を磨き続けた半世紀の恋心は、間違うことなき本物だった。

それなのに……

「……僕が気付けてたら……雛森君は僕を頼ってくれたのかな……」

同僚の乱菊から聞いた双匣の丘での出来事は、あの藍染惣右介の裏切り同様俄かに信じ難く、イツルは未だそれを事実として消化出来ずにいる。

——雛森が周囲に合わせて実力を隠していた。

——雛森が藍染の悪事の片棒を担いでいた。

——雛森が冬獅郎を倒し藍染の手を取った。

事実のみを述べれば、その多くは魂魄法に問われる重罪だ。しかし護廷隊からは彼女の奪還と助命減刑を乞う者の声が無数に上がっており、イヅルも叶うことならそうしたい。あの可憐で心優しい少女が悪人であると、彼にはどうしても思えなかった。だが。

「…副隊長の使命と、雛森君への想い…」

選んでも、選ばなくても、自分はきつと後悔する。隊舎に戻れば山のような書類が机に載せられているはずだ。まずはそちらを片付けよう。

こういうとき優柔不断に決めきれず、仕事に逃げることしか出来ない己が、吉良イヅルは心底不甲斐なかった。

「——どうすればよかったのよ…」

物憂げに四番隊医務室の簡素な椅子で黄昏る女、松本乱菊。

先日の離反騒動で一度に幼馴染と親友を失った彼女の視線の先には、あの二人が消えていった空が哀愁の茜色に染まっている。

大事な人だった。

霊術院卒業以来ずっと疎遠続きでも、彼との思い出を片時たりとも忘れたことはない。五番隊から三番隊の隊長になったとき、祝福を送りながらも遠ざかる彼の背中を、副官に自分を引き抜いてくれなかったことを寂しく思った。

大事な人だった。

靈術院時代からずっと見てきて、世話を焼いて焼かれての、妹みたいな子だった。色々と面倒を見ていた彼女が同僚の副隊長になったとき、まだ早いと口でバカにしながらも、心の底から喜んだ。

旅禍騒ぎから藍染惣右介の暗殺偽装。そんな大事な二人が不穏な関係になったときは胸が潰れる思いだった。

そして。

「あのバカども…」

溜息につられ、つい悪態が零れてしまう。

——ご免な、乱菊…

あのバカが嫌いだった。行先も告げず、いつも勝手に一人でどこかへ行ってしまうことに。

——ごめんなさい：乱菊さん…

あのバカが嫌いになった。誰にも告げず、ずっと一人で背負い込んで涙を隠していたことに。

いや、違う。バカなのは。

「あたしか…」

乱菊は項垂れる額を両手で支える。

大事に思っていたいながら、彼の真意を尋ねることを恐れ続けていた自分が。彼女の悩みに全く気付けなかった鈍い自分が。

そんな二人を失い、こうして後悔に打ちひしがれるだけの自分が、乱菊は嫌で嫌で堪らなかった。

「……はあくあ！ やめやめ、副隊長がこんなんじや隊が回らないじゃない」

ペチリと頬を叩き腰を浮かす乱菊。そして深呼吸で気合を入れ、流れるように目の前の寝台のふくらみに重い拳を振り下ろした。

「そう思いませんか？ た・い・ちよ・うツ？」

「——ぐべえっ!？」

情けない悲鳴が布団の中から零れる。あの一件以来ミノムシのよ

うにうじうじしたままの、自分以上に深刻に凹んでいる上司——日番谷冬獅郎だ。

「てツ…てめえ松本オ！　それが怪我人に対する仕打ちか!？」

「そんな大声上げてる元気あったらさっさと書類片付けてくださいよおー。つていうかこの部屋辛気臭すぎイ〜。隊長頭にキノコ生えてますよ、ほら！　卯ノ花隊長に”シロちゃん栽培”キノコ鍋作って貰いますね?..」

「生えてねえよ！　あと布団を取るな窓も開けるなカーテンも閉めろてめえも出てけ！」

「あたっ！　暴力とか隊長ひどーい」

目の下に巨大な隈を作った血色の悪いクソガキが枕を投げて来る。そんな冬獅郎を茶化しながらも、乱菊は目の前の上司の憔悴しきった様子に思わず胸が締め付けられた。

大人の自分でさえ辛いのに、まだ子供な彼にこんな悲劇を背負う心の強さなど…

「…俺はもう、隊長を辞める」

そして、そうポツリと零した冬獅郎を責めることなど、乱菊には出来なかった。

「…何言ってますか、隊長。隊長がいなくて誰が隊を引っ張るんですか」

「お前がなればいいだろ」

少年の、心底そう思っている声色。

「元々席次でも所属年数でもお前が上だった。俺が隊長になれたのは志波隊長の依怙鼻肩のおかげだったからな。ガキの俺よりお前がなったほうが収まりがいい」

「…あたしじゃ隊が崩壊するってあのスケベに言われたんですけど」

ギンが藍染についていった以上、もう乱菊に彼と同じ隊長の座を指す理由はない。

そして、それは雛森を連れ去られた冬獅郎も同じなのだろう。この健気な少年は彼女に認められたい一心で、あの子の上の席次に就きたかっただけなのだから。

だからこそ、冬獅郎はそんな無責任なことを言えてしまうのだ。

「——知るか。勝手に崩壊させろ」

二人きりの医務室に沈黙が訪れる。

濁った眼で俯く少年は、見るに堪えないほど哀れで痛ましくて。乱菊は込み上げてくる胸の痛痒を咄嗟に怒りと共に叩き付けた。

「…いい加減にしなさい——冬獅郎ッ！」

昔の呼び方にすれば、今の彼に伝わるだろうか。

「そりゃさ、生きてりゃ誰だって嫌なことあるわよ！ 死にたくなるくらい後悔することだってあるわよ！ それでもみんな惨めに生きてんの！ 上手に自分の中で折り合い付けてヘラヘラ笑って仕事してんの！」

「……」

「あんただけ逃げてちゃダメでしょ！ 隊長ってのはね、強い死神ってのはね、ただそれだけで誰よりも嫌で屈辱で辛いことを背負わなくちゃならない義務があんのよ！」

説教なんて柄でもないのに、乱菊は自分自身への慰めに今も己に言い聞かせている強い言葉を捲し立てる。

だが。

「そのくだらねえ義務のせいで俺はあいつを失ったんだツツ!!」

「…ツッ！」

絶叫に乗る荒々しい霊圧のせいとか、あるいはその言葉そのものにか。乱菊は少年の悲鳴に思わず怯む。

「その義務のせいで…俺はあいつから目を離した」

「…違うわよ」

「違わねえよ！ 雛森を守る男になりたくて…守れる男なんだって認めて貰いたくて隊長になったのに…蓋開けてみればこのザマだ…」
懺悔するように冬獅郎が独白する。

清浄塔居林で藍染に挑んだとき、少年はヤツの小手先の縛道一つで卍解まで封じられてしまったらしい。彼の言う通り、あの化物ならそれくらいは可能かもしれない、と乱菊は臍を噛む。恋敵として意識していた男にそんなことをされたら、あるいは無垢な子供のプライドなど簡単に崩れてしまうだろう。

「おまけに…お前も見ただろ？ 俺は、自分が守ってたつもりの女の破道一つで瞬殺されちまう程度の男なんだよ…」

「ッ、それは…」

「あいつ、腹に穴空いてやがったんだぜ。心も体も瀕死で、血も流れてフラフラだったのに…それでもあんなに強かったんだ…」

九十番台の破道。

あのととき雛森が使ったそれは、天才が生涯をかけてようやく至れる究極の鬼道である。禁術が数多く列し、事実護廷の隊長ですら使える者は片手で数えるほど。卍解に至るより難しいとまで言われるその領域は、死神になって高々五十年程度の小娘に使える力ではない。そのはずだった。

「あいつはいつもそうだった。普段はぼわぼわしてるクセにいざつて時はいつも俺のことを守ってくれて…ずっと俺の先を歩いてて…」
過去を想起するように遠くどこかを見つめる冬獅郎。

雛森との思い出を振り返っているのだろう。彼女が時折見せたと言う”普段と違う頼もしさ”は、もしかしたらあの子にとつては自分の隠したい秘密を悟られてでも幼馴染を守りたいという想いの表れだったのかもしれない。

そして、結局全てが手遅れになるまで彼女の秘密に気付くことは出来なかった。

「こんな俺が…藍染からあいつを取り返せるワケねえよ…」

助けを求めてくれたあいつより弱いのに。

そう吐き捨てる冬獅郎は、とても小さく見えた。普段の自信も、底知れない神童の才気も、今の彼の中には見る影もない。心折れた、哀れな抜け殻がそこにあった。

「——あつそ。じゃあ諦めるのね」

だが乱菊の一言に、ぴくりと抜け殻が震える。

「惚れた女の子に惨めに守られて。あの子に迷惑かけないように隊長辞めて前線から退いて。自分のために苦しんでる幼馴染を放っておくんだ」

「っ……！」

乱菊の容赦ない言葉に少年は唇を噛んでいた。

情けないことを吐きながら、やはり百年の慕情は根強いらしい。

なんだか見えていてイライラしてきた乱菊。互いを想い合って生まれた悲劇など情熱的な恋の舞台装置だろうに。ギンのことを何もわからない自分より遥かに相手の事情を知っておきながら、随分と贅沢に腑抜けているものだ。

「あたしは戦うわよ」

少年の肩が跳ねた。

「藍染が強い？ そんなのあの場にいた全員わかってる」

「……」

「それでも戦うの。負けようと、無駄死にしようと、命より大切なモンをあの手で奪われたヤツはみんな戦う」

仲間、恋人、家族、そして名誉。皆それらを守るために力を磨き、今の自分を手に入れたのだ。特別なのは冬獅郎だけじゃない。乱菊は言外にそう伝える。

そして、大きな深呼吸をした女は、己の決意を宣言した。

「——あたしはギンに伝えるわ。」あんたが好きだ”って「！」

少年が顔を上げた。目を見張り、息を呑んだまま。

その様が可笑しくて、乱菊ははにかみながら胸を張る。

「全部終わったら絶対伝える。もう指を啜えて遠くから見つめるばかりの人生はこりこり」

全く以て偉そうなことを口にしたものだ。自分の生涯を振り返りながら、女は内心羞恥に頭をかく。

『乱菊が泣かんでも済むようにしたる』

死神になったのも、そんな意味のわからないことを言って霊術院に入ったあのバカを追うため。だがあいつは一年で勝手に護廷隊に入り、以来自分はずっと放置されたまま。追い駆けても追い掛けても差は広がるばかりで、いつしか「もうあたしのことなど忘れてしまったのだろうか」と独り悲しむだけになった。

さりとてその答えを当人の口から聞く勇氣もなく、松本乱菊という女死神はそんな悶々としたものを胸中に抱えて日々を過すごしてきただがもう、それも止めだ。

乱菊は心に決める。

——後悔するなら、後悔しないために頑張った結果だけを後悔したい。

「…あなたは雛森に伝ええないの、冬獅郎？」

震える瞳の少年へ、そう訊ねる。

「その年で隊長にまで上り詰めるくらい必死に努力したのに、一度挫折したくらいで全部諦めて捨てちゃうの？ 助けを求めている女の子を敵から救い出すなんて告白大チャンスなのに、男として奮い立つ気になれないの？」

それは彼女なりのエールのつもり。同じ、伝えられずに後悔している後輩のクソガキへの、大人のお姉さんのお節介だ。

彼と自分はよく似ている。

強がり、臆病で、そして誰よりも負けず嫌いなのだ。

だからきつと、同族嫌悪の気持ちを煽ってやれば…

「——日番谷隊長だ」

ほら、この子はちゃんと、立ち上がることが出来るのだ。

「黙って聞いてりやべらべら好き勝手言いやがって…サボり魔が仕事を語るな、偉そうに」

「うわ、ここでそれ言います?」

相変わらず気心の知れた相手には心が狭いが、それもまた彼なりの親しみか。瞳の震えが消え、いつもの…否、いつも以上の覇気の光を宿した神童が、その小さくも大きな背中で医務室の扉へ先導した。

「…ついて来い、松本副隊長」

「!」

「さつさと仕事を終わらせて斬拳走鬼の鍛錬だ…! 藍染の野郎をぶっ飛ばすぞッ!」

頼もしい霊圧を吹き散らし、拳を握る冬獅郎。

それを雛森の前でもやればイチコロだったのに。まるで息子の成長を見ているような誇らしさで少年を優しく愛で、乱菊は自分出来る一番力強い返答を返し…

「!——はい「いけませんよ?」

『ツうひゃあッ!?!』

そこに突然、穏やかな圧力の籠る別の女声が乱入した。

『うっ、卯ノ花隊長!?!』

跳び上がって振り向く乱菊と冬獅郎。そこには素敵な笑顔の大和撫子が。

「私の制止を無視し一人藍染の下へ突撃して、今度は私の隊舎の掟まで無視するおつもりですか?」

「えっ、いやっ、あの——」

「怪我人は安静に、ね？」

『ヒュツ…』

かくして立ち上がった乱菊と冬獅郎。

だが女王の威光に項垂れる二人の再起動は、なんとも締まらない彼らしいものだった。

「…礼は言わねえぞ」

「はいはい、うじうじシロちゃんな隊長は雛森にはナイシヨにしますよ〜」

「…言ったらマジで殺すからな!?!」

幕間：いちごくんの不思議な体験

「——行ったか、やれやれ」

無数の摩天楼が高く聳える四半に転じた世界。その中心に、折れた斬魄刀を握る青年がいた。

白。一言で表す彼の印象はその色一つ。どこかつまらなそうにも、嬉しそうにも見える顔で息を吐き、青年は後ろへ振り向き口を開く。「これでいいんだろう」

『…ああ、わざわざすまなかつたな』

低い男の声に「気にすんな」と青年は返す。

それは真逆の漆黒。まるで闇を纏うかのようなコート姿の男が摩天楼の壁に佇んでいた。

「あんなやつでもこの世界の王だからな、勝ってもらわなきゃ困る」
青年は手元の折れた刀を見つめ、それをやったヤツの顔を思い浮かべる。まだまだ頼りないが、先ほどの試練で僅かに光るものを見せてくれた己の相棒——黒崎一護。

先刻去った彼の決意に満ちた目は、確かに何かを期待させる大きな力を秘めていた。

さて。久々に個として目覚めた白い青年だったが、今の彼はこの場に長居は出来ない。様子見をしていた“封印”が少しずつ拘束を強めていくのを感じながら、青年は黒づくめの男の中へと戻っていく。「…あいつ強いぜ、”斬月”さん。大事に育ててやんな」

——いずれ俺のモンになるんだからよ。

風化し吸い込まれるように、白い青年は黒い男の纏う闇の中へと消える。

そんな彼の言葉を受け止め、一人残された男は天を仰ぎ見た。

『…一護、お前は気付いているのだろうか』

己が受け継いだ力のことを。背負わされた使命を。そして——己が生まれた理由を。

自ら斬月を名乗り、彼を破滅から守る力となる道を選んだ男。その憂いを帯びた目を閉じ、彼は外の世界で強敵と戦う若い青年のことを思う。

『お前は私の宝だ、一護』

愛しい子よ、お前が戦う世界は暗く冷たい雨が降る。それを晴らす術はなく、故に私はお前の溢れる力を閉じ込め戦いから遠ざけて来た。

だが、彼は力を求めてしまった。

守るべき仲間のために。救うべき恩人のために。彼は男に「勝ちたい」と願ったのだ。

『…これからお前は否が応にも時代のうねりに吞まれていくだろう。そして一度動き出した歯車を止めることは、最早誰にも叶わない』
だから、せめてその時まで…

——争い無き世界にお前を留めるのは、私の我儘なのだろうか。

応えの返らぬ男の問いは、孤独な世界に虚しく木霊するのであった。

瀨霊廷の中心に位置する丘陵、通称“双☒の丘”。走る無数の大裂け目の一つに、岩肌をくり貫いて作られた秘密の洞窟がある。かつて浦原喜助が作ったその練習場に、黒崎一護は潜んでいた。

目的はただ一つ。彼の恩人を処刑せんとする護廷十三隊の隊長・朽木白哉を倒すための、卍解の解放修行である。

「…くそっ」

特殊霊具【転神体】を用いた試練の猶予は僅か三日。ただでさえ短い時間だというのに、苦戦する一護の耳に、恩人の朽木ルキアの処刑が明日の正午に前倒しになったという凶報が届く。

——今日中に終わらせりゃいいだけの話だ。

そう豪語した青年も、時間が近付くにつれ息は荒くなる一方。威勢のいい決意だけではどうにもならない大きな壁が立ち塞がる。

残された最後の休息の夜を眠れず悶々と過ごしていた一護は、焼け付くような焦りを掃わんと一人練習部屋で斬魄刀を振るっていた。

「急がねえと…いけねえのに…ッ」

元より才ある者が会得に十年の時を必要とする斬魄刀の最終奥義だ。容易く手に出来る力でないことはわかっている。それでも、一護は…

「クソ…動けよ…オッ！」

ガシャン、と腕から刀が零れ落ちる。震える指先は肉刺が潰れ、引き裂かれ、巻いた包帯は先から先まで真っ赤に染まっている。視界はぼやけ、遂には足まで崩れ膝を突く有様。

「救うんだ…あいつを…！ 俺が、助けるんだよ…ッ！」

苛立ち。不安。己への不甲斐なさ。負の連鎖に振るう剣先は鈍り、連日の無茶で満身創痍な身体は鉛のように重くなっていく。

休むことも出来ず、前へ進むことも出来ず。無駄に体を酷使し消耗するばかりの時間が過ぎ、一護は地べたに這いつくばりながら、狂うほどの疲労と焦燥で頭が真っ白になっていった。

『——力が欲しいの？』

その女が現れたのは突然だった。

現実か幻かもわからない極限の状態。不意に頭の中に木霊した幼さの残る女の声に、青年の呆ける意識が僅かに覚醒する。

「…あん…たは——」

ぼんやりとした小柄で真っ白な輪郭。その頭部と思しき部位へ目を向けた一護は、そこで思わず硬化した。

「な…」

仮面だ。それも最近何度と見た、白い仮面。

唐突に一護の前に現れたその少女は、恋次の、そして剣八の一撃から身を守ってくれたあの奇妙な仮面を被っていた。寸分違わぬ形意匠をした、模様だけが無い真っ白な仮面を。

『彼女を助ける、力が欲しいの?』

静かな、再度の問い掛け。

どこかで聞いたような声が、逢ったような少女が青年に選択を差し出す。

その微かな既視感を頼りに、一護は警戒も戸惑いも忘れ、ただ無意識に彼女へ手を伸ばした。

「…力が…欲しい…」

それは己の執念が唱えたうわ言か。あるいは心のどこかで気付いていたからか。名も正体も定かではない謎の少女の言葉に、一護は本能的に縋っていた。

「…頼む…俺は…」

誰も死なせたくねえんだ。俺を信じてついてきてくれた仲間も、出会った人たちも、そして、俺のせいで死ぬことを強いられてるルキアも。

俺はあいつらを…

「——守る力が欲しいんだッツ!!」

それは青年の根源。彼の生き様。

大切な母親を死なせてしまった無力な自分を憎み、同じ悲劇を繰り返すことを極度に恐れる、哀しみを知った者の切実な思い。勇気でも

狂気でもなく、幼少期に魂に染み付いたトラウマが呼び起こす力への渴望。

失望か。同情か。はたしてそんな青年の臆病な心に、少女は何を見たのか。

その答えは、彼女の警告が物語っていた。

『…半人前を承知の選択なのね?』

白づくめの仮面の少女に一護は強い目で返答する。

自分は強くなっている。班目一角を倒し、阿散井恋次を倒し、更木剣八を倒してここまで来た。卍解の修行が始まってからもどんどん自分の霊圧が上がっているのがわかる。斬術も、歩法も、白打も、それらを効果的に使う戦闘の駆け引きも。全てが以前とは雲泥の差だ。だが至らない。足りないのだ。

敵は強大で揺るぎなく、彼らに追い付く時間も刻一刻と消えていく。自分の身を削りながらも食らい付けない巨大な差を埋めるには——遠い昔の思い出に頼る他に、道はない。

『…いいでしょう?』

決意が伝わったのだろうか。少女がゆっくりと青年の体に右手を添える。

するとその細い指が、何の抵抗も無く彼の胸を貫いた。

「あえ…?」

カチ…

いつぞやと同じ小さな音が全身に響き、続けて体内のどこかから込み上げてきたおぞましいナニカが心を、魂を蝕み始めた。

「あ…あ…アッ!!」

一護はこの感覚を覚えている。尸魂界へ挑む前、現世の胡散臭い店主に無理やり死神の力に目覚めさせられたときのこと。自分の自我が消えて行くような、あの恐怖と絶望の白い歪だった。

だがその速度は前回とは比べ物にならない。青年は声にならない悲鳴を虚しく喉から吐き出しながら、自身の破滅を認識する間もなく、十五年連れ添った己の意識の全てを手放し…

『——めっ』

ピタリ。

そんな擬音が聞こえるほど一瞬で、唐突に一護の視界が復活した。まるで夢から覚めたかのような奇妙な覚醒。目まぐるしく変わる状況に感情が付いていけず、青年はただ混乱に目を回すばかり。

『その子が大人しいのは少しの間だけ。あなたは直に、最初の試練に直面するでしょう』

ふと、一護の耳に少女の声が届く。見上げた顔は仮面に隠され、されど微かに見えた彼女の目は優しい笑みの弧を描いていた。

少女の右手が青年の頭を撫でる。あの時と同じ、重い瞼の幼子を寝付かせるように。

——大丈夫、あなたなら出来るわ。

そしてその言葉を最後に、一護は穏やかな心が呼んだ眠気に身を包まれた。

「——ちびっ！——一護ッ！」

はたと目が覚めた時、青年黒崎一護は秘密の練習部屋の小さな個室で横になっていた。辺りを見渡し、慌てて体を起こして調子確かめる。

軽い。疲労も消耗も、己を苛むもの全てが幻のように消えていた。

「あれ？ 俺、何を…」

「…お主、昨夜に何があったのか覚えておらぬのか？」

隣を見れば夜一が難しそうな顔で「まさか…いや…」と奇妙な白い破片を指先で弄んでいる。

何の話かと問えば、どうやら彼はその白い石膏のような物体に体中を包まれていたらしい。慌てて夜一が駆け寄ったときには既に殻は風化を始めており、手の中の物はその残りだと無造作に放り投げられた。

白い石膏のような物体。それ自体には覚えはないが、昨夜のこの身に大きな変化が起きたことだけは、一護にも臍気な心当たりがあった。

「…まあ今はよい。もう処刑まで時間がないのじゃ、さっさと飯を掻き込んで卍解修行を再開するぞ！」

急かす夜一を余所に、一護は目覚めてから体に沸々と湧き上がるナニカを感じ取る。昨日とは比べ物にならない、持て余しそうなほどの力を。

——力が欲しいの？

そうだ、思い出した。一護は得心に目を見開く。

それは先日より彼の脳裏の片隅に引っ掛かっていたこと。

更木剣八に一度敗北したとき、一護は斬月のおっさんに以前の精神世界へと連れて行かれた。そこで彼は一人の青年と出会った。

色彩を反転させたような真っ白い姿をした、黒崎一護自分自身。

その姿を見たときから。否、死神のルキアと初めて出会ったときからずっと心の奥底に詰まっていたものが、ようやく氷解する。

「白い…着物の…」

そう。

あの六年前の朧げな記憶の中の不思議な少女が着ていたのは、死覇装だったのだ。それも色が反転した、あのもう一人の自分と同じ白を基調とした異質なものを。

「何で…」

だが謎は謎を呼ぶ。

狂暴で攻撃的な白い自分と、頭を撫でてくれる真逆の優しい少女。

何故あの女の子はあいつと同じ服装だったのか。二人の関係は一体何なのか。どうして彼女は、例の仮面を付けてまた自分の前に現れたのか。

そして、あの子は俺の体に何をし——俺自身の知らない黒崎一護の何を知っていると言うのか…

茫然と布団の中で呆ける一護は、少女に貫かれた己の胸元に恐る恐る手を触れる。六年前と同じく、そこに異常は何もない。

だが意識を向けると確かに感じる心のざわめきが、今までとは違う何かが自分に起きたのだと青年に知らせていた。

「——おい一護！ 何をしておる、時間がないんじゃぞ?!」

「ッ、お、おうっ！」

ざわめく不安を振り払い、一護は立ち上がる。体の調子はすこぶる良く、力もかつてないほど漲っているのだ。迷いさえ捨てれば期日の正午までに必ず卍解に至れるだろう。

決意の拳を握り締め、黒崎一護は夜一の待つ練習場へと走り出した。

彼の気付かぬその手の中には、散り散りに霧散したあの赤黒い霊絡

の残滓が握られていた。

破面イイイイ！篇 衣装イイイイ！

「——うふ…うふ…うへへへへ〜」

メノス・グランデ 大 虚のエスコートで潜る黒腔。ガルガンタ 辺り一面の真つ黒闇に似つかわしくない、少女の可憐な笑い声が木霊する。

BLEACH世界最高峰の美少女である、あたしこと雛森桃ちゃんの愉し…楽しそうな声だ。

「も、桃ちゃん？ 女の子がしたらダメな顔してるでー？」

「うふふ、えへへ…はあ…はあ…」

「あかん話聞いとらんわこの娘」

息が切れたので少し休憩。

しかし、これほどの幸福感はいつ以来だろう。文字通り天にも昇るような最高の愉悅味を体験したあたしは、どんな些細なことでも忘れまいと脳裏で先ほどの出来事の全てを何百何千回とリフレインする。

——雛森イイイイ！！

「うひひひひひハハハハハハ！！」

「あ、ついに壊れはった」

「…出血多量で頭がイカレたのだろう。虚夜宮に着いたら至急治療せねば不味いやもしれん」

「出血関係なく最初からコレが本性なん tochやうん…？」

横で何か聞こえるが、あたしは今最低限の女の矜持を守るため垂れる涎をこの大きな白いシートで拭うのに忙しい。自分の死覇装で拭わないだけまだ良識を維持していることを褒めてくれ。

しかし…

——雛森イイイイイ!!

んはああああああ最高ウウウウ！　ほんツツツと最高の「雛森イイイイ！」だった！　オール満点！　文句なし！　ありがとシロちゃんマイダーリン好き好き大好き愛してるうううひやひやひやひやひやひやひや！

…ふう。

色々とぶつ壊れてると頭の片隅で自覚しているが、あたしは先ほど雛森桃としての転生人生の悲願をようやく達成出来たのだから少しはしゃぐくらいは許して欲しい。

シロちゃんも肺活量をちゃんと鍛えてくれたお陰で、ネガシオン反膜を隔ててもあたしの耳に素晴らしい悲壮感たつぷりのシャウトを届けてくれた。もう思い残すことは何もない。

このまま、このいい匂いのする白い布に包まれたまま第二の人生を終えてもいいと本気で思えるほど、あたしは幸福の絶頂にあった。

「——さて。そろそろ歩けるかい、桃？」

そんな具合にラリっていると、突然あたしの涎拭きがカリスマ溢れるアゾット声で話し出した。

…涎拭きが喋った…だと…？

「でゆふへへへ…へへ…へ——ッあ、ああ藍染隊長!？」

「ああ、おかえり」

顔を上にあげるとそこには尸魂界一のイケメン藍染惣右介のドアップがニツコリニヤニヤ微笑んでいた。

ぱちくり視線を交差させることしばらく。あたしは自分の手元の涎ベタベタな白いシートとヨン様の顔を交互に見て、それまでの幸福感がサーツ…と消えていくのを臍げに感じ取る。

「えっ、あ、ああ藍染隊長の隊首羽織がああああ！」

「いいんだ、桃。それは最早私には不要なものだからね」

「そ、そういう問題じゃ——つて、あ…す、すいません藍染隊長！ 直ぐ降りますッ！」

慌てて最下級大虚ギリアンの掌の上に「わつとと…」とふらふら立つあたし。足腰が生まれたての小鹿のようにふるふるしているが死覇装の袴で隠れてくれているだろうか。

しばらく三人男たちを背にもぞもぞと、はしたなくはだけていた衿を何とか整えビシツと姿勢を正す。

すると鷹揚に頷いたヨン様があたしたちに指示をくれた。

「では要、桃。翌日に玉座の間へ最上位大虚ヴァストローデの皆を集めてくれ」

お、早速浦原印の崩玉で破面化ですな。なら先に試験用に何体か虚たちをヨン様ラボまでデリバリーしておこう。気が利く有能アピで涎ニチャ森ちゃんのイメージを払拭しなければ…！（手遅れ）

その後新たに【虚圏統括官】に任命されたDJと細かな調整をすることを確認し、虚夜宮で我等四人は一旦解散となった。

「——藍染隊長！」

「だけどその前に。」

「何かな、桃」

あたしの呼びかけに途中で振り向いてくれたヨン様。戦慄を覚えるほどの恐ろしい霊圧も冷笑も、今や何よりも頼もしく感じてしま

う。
あたしは二回深呼吸を重ね、自分に出来る最高の笑顔とお辞儀で——正真正銘の恩人となった彼に精一杯の感謝の意を表した。

「本当に——ありがとうございましたっ！」

九十度の礼を決めるあたしの耳にクスリと微笑みが聞こえ、ヨン様

は「構わないよ」の一言を残して宮殿の奥へと去って行った。

ああ全く、とんだ借りが出来てしまった。これに空座町決戦でのお願いも叶えて貰ったら、あたしは一体何をして彼に恩を返せばいいのやら…

さて、一晩明けての翌日朝。

と言っても虚夜宮のドームに映写された鬼道の太陽だが、人生最高と言える目覚めを体験した爽やか桃ちゃんは「んーっ」と自室で伸びをし体の調子確かめる。

「…うん、傷も残ってない。流石【反膜の糸】ね」

昨夜は痛みと愉悦でアヒヤってたので正直よく覚えていないけれど、確かハリベルがあたしの怪我を見て大慌てで口力呼んでくれたのは記憶に残っている。さすハリさす口力。

「——雛森様。ハリベルです」

お、噂をすればご本人の登場。入室を許可すると装甲ダイバースーツな金髪巨乳女性が静々とベッドの脇に跪いた。

ハリベル、ウルキオラ、スタークの最上位大虚^{ヴァーストローデ}たちは浦原崩玉をヨン様崩玉と融合させるまで破面化待ちしていたため、現時点では地位も実力も低い。なので雄二人は東仙、雌のハリベルはあたしがそれぞれの自室で庇護しており、虚圏ではこうして従者のように控えている。

まあDJもあたしも日中は尸魂界で隊長格業務やってたし、こっちにいるときは研究所か執務室にしかいないので今まであまり絡みはなかったのだが。

「おはようございます。お怪我の具合はいかがですか？」

「おはようございますハリベルさん、おかげさまでバッチリです。あとでロカさんにもお礼を言っておかないと」

「伝えておきましょう」

スツと頭を下げる彼女はどこか憔悴している。何かあったのだろうか、後で聞くとしよう。

とにかくいつまでも人様に寝間着姿を晒す趣味はないのでベッドを降り着替えを探す。

…ん、あれ？ あたしの死覇装がない。

「雛森様、こちらへ。お召し物をご用意しております」

「？」

よくわからないので後ろをついていくと、そこには二人の女破面がいた。

『お…おはようございます、軍団長…ッ』

「あつ、ロリさんにメモリさん！ おはようございます」

ビクビク震えながら跪いているのはN.O. 33破面ロリ・アイヴァーンとN.O. 34破面メモリ・マリア。昨日の今日であたしがヨン様に送った侍女大虚たちが早速原作の完全人型に破面化していた。

訊けば、やはり昨夜にヨン様がウツキウキで彼女らで浦原印の崩玉を試したらしい。ロリたちはしばらくこつちであたしの世話をし、人の姿に慣れたらあちらへ再派遣される予定だとか。

見る限りだと二人ともちゃんと本誌通りの外見になってるので是非そうしてくれ。ロリもヨンの傍のほうが好きだろう。

「あと、その…」

「あ、はい。何でしょう？」

「…よろしければ以前のよう靈圧を抑えていただきたく…」

遠慮がちなハリベルの頼みで気付くあたし。そういえば双匣の丘から靈圧垂れ流しにしたまんまだったな、と慌てて抑える。さっきから顔色悪いのはそのせいか、めんごハリベル。

「ところであたしの着替えはどこですか？」

「…ふ、服飾務の者が用意しました。こちらです…ッ」

そう言つてロリたちが開けた隣の着衣室には、凄い数の衣類がマネキンに着せられていた。チャン一や浦原さんに見せたホワイトくん版死覇装から、ただの白い紐みたいな奇抜ビキニまで様々だ。なんだこの無駄に幅広いラインアップ。

「と、東仙統括官殿より死神の死覇装は今後控えるようにとの通達がございました。どうぞこの中からお好きなものをお選びください…」

「…」
ほう、ほうほうほう！

なるほど、つまりこれがあの有名な破面軍ver. 死覇装の衣装チェンジですね。護廷隊時代はあまり縁がなかったお洒落チャンスにあたしの百五十年連れ添った女の子ソウルが飛梅ちゃんと一緒に大はしやぎしている。

…だが待つてほしい。これは男女問わず極めて重要な問題なのだ。滅却師勢最オサレキャラ、アスキン兄貴の名言「女の価値はオシャレかどうか」…これは鯽界の真理だと思う。

オサレポイントバトル（以後OPB）が、自身の外見も勝敗式に加えられるのは以前述べた通りだ。

実際崩玉ヨン様が無月一護に負けたのも、マユリ様が何度も衣装を変えながら強敵を倒しているのも、ルキアが実力以上の戦績を上げているのも、原作雛森ちゃんが何度ぶつ刺されても生き残ったのも、このビジュアル評価点によるところが大きいのだ。

そして今回のコレは我々ヨン様陣営組の新衣装を決める一大イベント。固定化された死神の死覇装より多くのOSR値を稼ぐことが出来るが、逆にここで手を抜いてしまうと一気に初期ポイントが一桁台にまで下落してしまう可能性があるのだ。特に外見要素が極端に評価される女性キャラとしてここは慎重に選びたい。

と言うワケで。

「——ンンンンベリベリプリティキュートマーベらしくス！ 非の打ちどころのない完璧なコーデイナーですわよオ~~~~軍団長閣下ア~~~~♡」

あたしは破面軍一の乙女にしてファッションリーダー、No. 20 破面シャルロッテ・クールホーン姉貴兄貴に相談することになりました。

「あつ、あのシャルロッテさん…？ その、とってもステキなんですけど、これ…せ、背中が開きすぎでは…」

「いいえっ軍団長閣下、それ…が、いいのです！ 女性の素肌以上の宝石はこの世にございませんものッ！ 毎日の回道でしっかりお手入れなされてる閣下でしたら下品にならない範囲で露出面積を最大限お取りになれるのがオウツともよろしいですわアッ！」

「そ、そうですか…？」

彼女(?)が選んでくれたのは、肩から背中が剥き出しベアトップのフィツシユテールドレスと袴スカートのコーデという、あのブレソルのバレンタイン槍森ちゃんと破面織姫ちゃんを合わせたような死覇装だった。

腕には上品なオペラグローブと、天女らしい直領(肩の帯っぽいやつ)で神秘性アップ。草鞋の緒のデザインの黒ブーツも女性的で実におサレ。

姿見の中に、清楚でちよつぴりセクシーな破面軍ver. 雛森ちゃんが降臨していた。

こ、これで人前に出るのか…

「死神の斬魄刀解放はあたしたちの帰刃と違い衣装と一体化出来るワケではございませんので、軍団長閣下の卍解もコーデに組み込むことが出来るように致しましたわ！ ぜ・ひ・尸魂界との決戦時にもお召しになってくださいねエ〜〜〜♡」

「あ、ありがとうございます…」

ノリについていけないが、卍解用コーデに関してはかなりありがたいのも事実。

と言うのも、全身真っ白の中に黒のアクセントが入る破面死覇装はそれ単体でデザインとして完成されており、あたしの服飾系の卍解とは合わせ辛いのだ。一護が天鎖斬月の黒コートを白袴の上に着た姿をイメージすると、そのコーデの難しさが分かるだろう。

シャル姉貴兄貴はいい仕事をしてくれた。

(…うん。ちよつと恥ずかしいけど、この扇情的な上半身がそれとなくNTRっぽさを出しててシロちゃん曇りポイントになりそう)

そう思うと絶妙なデザインにも見えてくる。流石ブレソルの限定キャラコスチューム。確か「幼馴染の反対を押し切って入団した力才城騎士の装束」だとか、そんな感じの設定があった公式えっちな衣装だ。

そしてお洒落が終わったら、女の子として一つやらなくてはいけないことがある。

「——ど、どうですか？ 藍染隊長…」

かなり二の足を踏んだが、あたしは羞恥を我慢して作中一のオサレマスター藍染惣右介に感想を求めることにした。雛森ムーヴ以上に、この男にOKを貰えればそれだけでOSR値+100は固いのだ。外すことは出来ない。

果たして結果は。

「ああ、よく似合っているよ」

「雑う…」

いつもの冷たい微笑を微動だにせずテンプレ台詞で済ませるこのエセペ・ヨンジュ○。せめてもうちよつと詩的な意見を付け加えてくださいよ、オサレボーナス期待したあたしがバカみたいじゃないか…「うう、五番隊じゃ虫唾が走るほどの色男だったのに…何で肝心のきに無反応なんですか…」

「ええやん、ボクは好きやで。桃ちゃんスタイル華奢やし良う似合ってるよ」

「…ありがとうございます。市丸隊長のも白蛇っぽくて素敵です」

「え、それ褒めてるん？」

「え、褒めてますよ？ イメージぴったりじゃないですか」

崩玉弄りに忙しいヨン様に代わって一〇がいいね！してくれただも君は他の女性の服装褒める前にまず乱菊さんのあの格好を何とかさせろ、シロちゃんの教育に悪いんだよ。

ちなみにシャルロット姉貴兄貴のセンスはウチの破面軍女性陣の間でも評価が高く、チルツチやハリベル従属官三人娘にも好評だった。

ただ彼の帰刃は誰も評価しないらしい。まあ、うん…

そんなこんなで、我らヨン様陣営はおニューな衣装で新生活を始めます。

尸魂界離反から二日。

これから玉座の間で行う凱旋式を終えたら、ヨン様の破面化実験に提供したグランドフィツシャーと合体破面を空座町に送るとしよう。

さあ、破面篇の開始だ…！

十刃イイイイ!

『——おのれエ、軍団長ヘネラーリヤ…ッ！　こんな死神がいるなど聞いておらんぞオオオ…』

深夜の空座町に巨大な怪物の断末魔が響き渡る。絶叫を背に、その異形の虚——破面グランドフィッシャーを屠った一人の死神が、鎮魂の思いを亡き妻へ捧げていた。

「…仇は取れましたか?」

「ンなんじゃねえよ。あいつが死んだのは俺のせいだ」

そんな男へ声をかけるのは、友人にして恩人の浦原喜助。同じ護廷隊の隊長を務めた先輩だが、どうしても胡散臭さが漂い敬意を払うのを忘れてしまう。もっとも本人も気安い関係を望んでいるため二人の関係は良好そのものだった。

男の名は黒崎一心。

かつて志波一心の名でここ現世へ虚退治に向かい、只ならぬ因果で二十年間人間として妻の黒崎真咲と子供たちを見守ってきた、数奇な運命を辿る死神だ。

GENERALA
「將軍」…女性名詞か。藍染一派で女と言やア…」
「…ええ、おそらくは彼女でしょう」

そんな一心は、先ほどの破面が口にしていた黒幕らしき存在に心当たりがあった。

直接面識はないが、彼にこの数奇な運命を引き寄せた真の仇にして、ある意味恩人でもある複雑な関係の相手。

「その——」読書家”って女と、藍染が連れ去った桃ちゃんの関係は何かわかったか?」

「いやア、いい線行ってたと思ったんすけどね。夜一サンもあれが演

技だとは思えなかったって言っていましたし、全部振出しです」

「…まあ確かにあの子があんな凶悪事件を起こして平然とお前に挨拶に行けるとは思えねえしな」

二十年前の十番隊での日々を振り返る元隊長。

志波一心は、当時“読書家”を名乗り浦原の前に現れた正体不明の小柄な女性のこととは知らない。だが先日尸魂界ソウルソサエティで起きた大事件の渦中にいた少女——雛森桃のことは知っていた。

彼女は当時三席だった部下の日番谷冬獅郎の幼馴染兼想い人で、時々十番隊隊舎へ挨拶に来ていたことからよく顔を見る機会があった。清楚で可愛い、花も恥じらう美しい乙女。思春期の少年が思い描く理想の異性をそっくりそのまま形にしたかのような彼女は、冬獅郎といじらしい友人以上恋人未満の関係を築いており、一心もそんな二人をよくからかって遊んでいた。

あんな可憐な少女が裏で大罪人の悪事に加担していたと知らされたときは思わず耳を疑ったが、あの場で藍染が語った話には何かしら大きな嘘が含まれていると一心は臆げに感じていた。

無論、楽観的にも、悲観的にもなりうる危険な嘘だろうが。

「夜一サンの直感を疑うワケじゃないツスけど、藍染も自ら本性を明かすまで誰もが信じられない思いでしたし、雛森桃もそのタイプ…って思ってたんスけどね」

「あるいはお前が読んだ通り本当に裏で藍染と敵対してて、それをヤツに見抜かれたのがあの双匣の丘での出来事に繋がったか…」

各々独自に持論を開示する二人の死神。だが情報が足りず、信憑性も低いものばかりではどうしても想像の域を出ない。

「アタシらに出来るのは最悪を考慮して、あの暴露自体が演技である可能性を捨てないでおくくらいツスカね」

「…まあ”読書家”が桃ちゃんだろうと違かろうと、俺にとつちや真咲を苦しめた因縁の相手だ。たとえあのかわい子ちゃん相手でも一発拳骨落とす覚悟は出来てるぜ」

「…拳骨で済む相手なんスか？ 最大限楽観視しても信を置けない第三勢力止まりの人物ツスよ、斬りましようよ」

本人と面識のない浦原のシビアな意見も素直に受け止める一心だった。彼は情以外の理由でもやはり雛森が「読書家」では無い」と推理していた。

仮にあの純粹無垢な雛森桃の全てが擬態であったとしても、そんな優秀な部下をこれまで通り護廷隊の獅子身中の虫とせずには連れ帰る利点がわからないのだ。

已解時の冬獅郎を鬼道一つで瞬殺するほどの実力者を手元に置きたかったのかもしれないが、それでもいざと言う時のカードとしての効率は段違い。浦原の時のように、顔や霊圧に加え声紋まで隠させるほどの徹底した秘匿性から方針が真逆になっている。

「藍染が古参の市丸と東仙を連れ帰ったのは、お前の息のかかった一護や夜一からヤツらの暗躍が露呈することを恐れたからだろう。だが桃ちゃんは違う。連れ帰るメリットがねえんだ」

「藍染の強者のプライドとかじゃないツスカ？ 宣戦布告後に小細工をするのは矜持に反するとか」

「散々鏡花水月で暗躍しておいて今更それはねえだろ浦原…」

「…ならあとは撒き餌に使うくらいですね」

連れ帰った雛森桃の客観的評価を最大限利用するなら、彼女の奪還を目指す仲の良かった隊長格らを決戦の地から遠ざけるための誘蛾灯としてか。もつともそれなら藍染は彼女を部下と明かさず人質として連れ去ればよいので、この予想も納得のいくものではない。

「——そう言えば息子サンは何か言ってますでしたか？」

堂々巡りになった考えを変えるべく、二人は別の側面からヒントを得ようと話題を変えた。

「…や、あいつそういう話とかしてくれねえし…」

「いやあんた親ツスよね？ せめて知らない女性に何かへんなことされた覚えはないかくらい確認してくださいよ」

「お、俺だってパパとして十六年頑張ってたぞ!? 子育ての大変さも知らねえヤツが簡単に言うなボケ！」

もつともこちらも大した情報はないようだ。あの用意周到な”読

書家”なら才能を継いだ一護に接触してくると踏んでいたが、どうやら黒崎家の独特過ぎる親子関係のせいでこの父親から情報を得るのは難しいらしい。一心と浦原は共に項垂れ溜息を吐く。

謎の虚研究者、”読書家”。

その正体も目的も悟らせない不気味な女性は、果たして敵か味方か。二十年に亘る因縁に終止符を打つ機会が近いと本能的に察している一心ら二人は、覚悟を新たに万全を期すつもりであらゆる可能性を模索する。

「…それより、例の封印は完成したのか？」

「ええ、まあ。それなりに自信作とでも言っておきましょうか」

「ほう？。そいつアいい」

だが彼らの最たる関心はそちらではない。

長く、百年の雌伏のとき。巨悪がついに動き出したことを知り、かつて護廷のために隊首羽織を纏った二人の死神は、それぞれの思いを胸に、本命の話題へと意識を切り替える。

「チャンスは一度。その隙を作るのに、黒崎サンにもご協力をお願いすることになるでしょう」

「まかせろ。仮に”読書家”がヤツの手先なら俺も当事者だからな。こっちは拳一発じゃ水に流せねえぜッ！」

「ええ、それではじつくり整えるのでしょうか…」

——藍染惣右介を倒す手筈を。

「――報告は以上になります、軍団長閣下」

…と、そんなシリアスな親父陣営の会話を隠密用虚で盗聴していたあたしこと”読書家”雛森桃は、執務室へグランドフィッツシャー敗北の報を届けてくれた空座町監視責任者アイスリンガーとデイ・ロイを笑顔で労っていた。

「お二人とも長い間の現世任務、本当にご苦労様でした。新しいお体には慣れそうですか？」

「はっ。これも閣下の御口添えがあつてこそ。この新たなアイスリンガー・ウエルナール、益々の忠誠を藍染様へ捧げることを誓います」
「デイ・ロイ・リンカー、右に同じ」

「頼もしい限りです、よろしくお願いしますねっ！」

本誌通りの姿になった二人が、あたしに礼をしながら決意表明をしている。デイ・ロイは部下ロール中もチンピラ感を隠しきれてないが、アイスリンガーはちゃんとヨン様に心酔しているので安心だ。この忠誠心の方向があたしに向いていると時々原作の彼らではあり得ないガバムーヴをしたりするので対処が大変なのです。

「では本日を以てお二人の空座町監視責任者の任を解きます。元の持ち場へ戻ってください」

『はっ…』

なんだかあまり嬉しそうじゃないのはアレか、閑職の門番と同僚のいじめが嫌なのかな。少しフォローしておくか。

「…これはまだ藍染隊長と相談中の話ですけど、黒崎一護とそのお仲間さんたちをここ虚夜宮^{ラスノーチエス}へ誘い込んで叩く計画が挙がっています。アイスリンガーさんはそのときに我々破面軍の一番槍となるでしょう」

「…ッ！」

「彼らの迎撃に備えて、新たな破面化の力を存分に振るえるよう鍛錬を怠らないでくださいね」

「は——はっ！ 畏まりましたッ！」

うむうむ、これでやる気を出してくれるだろう。原作における彼の

存在理由は石田眼鏡とチャドのレベルアップ経験値である。他の破面みんなに言えることだけど、本誌通りの活躍をしてくれたなら、あとは生きてさえいてくれたら救う手間は惜しまないぞ！

さて、次はデイ・ロイだ。

「あたしはこれから新たな^{エスパーダ}十刃”を決める式典に出席しますが…あなたもご一緒にいかがですか？」

「ッお、俺っすか…？」

「はい。グリムジョーさんを新たに十刃に任命するので、そのときに再破面化で強くなったデイ・ロイさんを^{フラシオン}従属官としてお返ししたいんです。きつと心強く思ってくれるはずですよっ」

「グリムジョーが…俺を…！」

目がキラキラしている不良ってなんかかわいいよね。思わず生暖かい視線を送ってしまうが、まあ残念ながらあたしの言葉はただの気休め以上の意味はないのだ。すまぬ、個としての実力はやはり如何ともし難い…

「ではそろそろ時間ですし、闘技場へ行きましょうか」

『はっ』

二人を連れて執務室を後にし、応接室を通り抜ける。

…その途中、あたしは自分の髪の毛がふわりとベアトップの素肌を撫でた感触を覚え、同時に背中に嫌な視線を感じた気がした。

「軍団長、如何されましたか？」

「い、いえ…」

直立不動のままゆっくりと後ろを振り返る。

後ろにるのはアイスリンガーとデイ・ロイ。二人ともきよとんとしているだけで、目線もあたしの顔から動かない。尸魂界でよく死神たちが向けてきた、あの性的ないやらしさは欠片もなかった。

考えれば虚も破面も子孫を残す必要がないのだから、異性の体に興味を覚えることもないはずだ。やはり気のせいだろう。

しかし。

(…どうしよう、慣れない露出のせいかわい自意識過剰になっちゃっ

てる…)

不味い、これはNTRリョナヒロインを目指す者として看過できない問題だ。

あたしはシロちゃん限定の愉悦部ヤンデレサイコパスであって、この衣装もシロちゃんを曇らせるために着ている部分が多いのだ。断じて「やだー、恥ずかしいー(チラツ)」がしたいメンヘラではない。一緒にされるのは心外である。

と言うワケで。

「…ちよ、ちよつとその白いの取って貰っていいですか?」

「は? あ、はい。わかりました」

ガン開きな肩と背中を何かで隠そうと辺りを探し、近くのソファに放られていたローブっぽい衣類をすぐ横のデイ・ロイに要求する。

手渡して貰ったそれは、先日の例のアレだった。

「おお、それは藍染様の隊首羽織! 流星は軍団長閣下、あの方に下賜して頂いたのですね…!」

「…なんでこれがココにあるのよ」

下賜というかポイ捨てというか。アイスリンガーの感想に思わず敬語が崩れるあたし。一応洗濯はされているみたいだけど、これ着たらまたからかわれそうでヤだな…

やはり引き返して更衣室でちゃんと上着を選ぼう。そう踵を返そうとした瞬間、最速のフラグ回収で犯人があたしの応接室へやって来た。

「——なんや桃ちゃん。ボクが取ってきてあげた藍染隊長のヨダレ拭き、早速気に入ってくれたみたいやね?」

「市丸隊長、言い方ア!」

入室早々ともない誤解を生む爆弾を放り込んできたヨン様の副官は、あたしのぶかぶか隊首羽織姿を指差しニヤニヤ笑いながら勝手に凱旋式典への出席道中に便乗した。

いやあの、あたし先に上に着るボレ口的な何かを取りに行きたいん

だけど：

”エスパーダ刃”。

かつては大帝バラガンの近衛兵の名を指したそれは、四十四年前に藍染惣右介の下で七つの大罪を冠した七名の最強の破面アランカルが属する軍団へとその形を改めた。

その二十年後。崩玉の大規模強化を経て列した新たな十名が、人が死に至る理由を司る破面——”エスパーダ十刃”である。

そしてあたしたちヨン様陣営が浦原喜助の崩玉を手にした今。

ウエコムンド虚圏は虚夜宮にて、我ら四人衆の凱旋式典の目玉である”ラスノーチエス十刃”の最終メンバーを決める決闘が行われようとしていた。

”——”クイント・エスパーダ第5十刃” チルツチ・サンダーウイツチ対、”オクターバ・エスパーダ第8十刃” ノイトラ・ジルガ。昇降格戦、開始ッ！”

あたしは審判の東仙の合図で始まった入れ替え戦を、一〇と共にヨンの隣で観戦する。

チルツチちゃん原作通り第二破面化で霊圧があまり増えず、序列詐欺になっていたため開始から既に勝負が成立していない。にも拘わらずこの決闘を認めたのは彼女の強い意思と、浦原崩玉で覚醒したノイトラの戦いをヨン様が見たいだろうと思っただけだ。あたしの善意だ。

「勝者、ノイトラ・ジルガ！ 軍令に従いこの者を新たな”クイント・エスパーダ第5十刃”とする！」

まあ面目躍如なDJはともかく、大した見せ場もないまま終了したので玉座の貴賓席は冷えっ冷えになっちゃったけど。

一〇の「使えねえなコイツ」的な視線から逃げていると、ふと眼下

の闘技場でノイトラがチルツチを殺そうとしていたので縛道でおしおきする。相変わらず元気なことで。

「——グツ!? く、そ…ッ!」

「ダメですよノイトラさん、軍令に逆らったら」

最近ようやく完全無詠唱が出来るようになったお気に入り【六杖光牢】で拘束し、テスラに回収を命じる。ノイトラはネリエル闇討ち以前に一度骨まで燃やしてから基本あたしたち三重臣にも従順になってくれたが、目を放すと時々こういうことをするのでザエルアポロに監視させているのだ。

あの眼鏡は忠誠心はなさそうだけど損得勘定には長けているので、無駄にパトロンの不快を買うようなことはしないから監視者として重宝している。

そしてその眼鏡をノイトラが空けた”オクターバ・エスバーダ第8十刃”の座に迎えば、ホワイトくん関連で彼と交わした約束は全て果たしたことになる。肩の荷が一つ降りて桃ちゃんうれc。

「今後も変わらぬ忠誠を我らが王、藍染様に誓います」

「期待しているよ、ザエルアポロ」

おお、ヨン様が珍しく”十刃”に言葉をおかけになったぞ!

やっぱり彼らと絡んでこそそのヨン様だよ。もう大虚の勧誘や組織化は今日で終わるのでそろそろこの”十刃”軍団長」とかいいう原作ブレイク役職は返上していいですか? ダメですか? そうですか…

それにしてもザエルアポロ、あたしの忠告のせいかちゃんとヨン様第一を遵守しているのは高評価。ここでこちらに流し目でも向けて来たら睨み返していたところだ。

そうして次の”セブティマ・エスバーダ第7十刃”を決める決闘ではゾマリがガンテンバインに勝利し、これで決闘による入れ替えはおしまい。ようやくあのBLEACH最オサレ集団”エスバーダ十刃”が集うことになる。

さて、ここは彼らに相応しくオサレに決めようではないか。

「——これにて諸君ら、種の超越者破面アランカルの序列は決した」

あたしは隊首羽織を脱ぎ、眼下の観衆百余名を睥睨する。雛森ボイスはどうしても可愛さが抜けないため無理に勇ましく声を上げず、強者の微笑を張り付け、淡々と無感情に宣言する。

「我らが王、藍染惣右介の剣たる諸君らは、王の下せし絶死の命を冠す、十の死の形を司る」

残念ながらあたしにヨン様ほどのカリスマはないので、代わりに霊圧垂れ流しのズルをして「ここ大事だぞ」の空気を作る。隣でニヤニヤしている元五番隊の先輩共は無視だ。満足げに頷いているDJだけが心の支えです、ありがとう。

…行くぞ！

「序列第十位。司る死の形は”憤怒”」

——”デイ・エス・エス・バーダ第10十刃”——
YAMMY LARGO

「…はっ」

バラガンとザエルアポロ、ピカロに次ぐ長い付き合いの巨漢がのしのとヨン様の貴賓席の前まで歩き、跪いた。うむうむ、教育の成果が出ている。

この男に関しては原作通り序列に仕組みがあるが、それは本人に前々から説明してあるため10の数字に不満はなさそうだ。

「序列第九位。司る死の形は”強欲”」

——”ヌベール・エス・バーダ第9十刃”——
ARONIERO ARRURUERIE

「はっ」『ハイ』

縦長の仮面を被ったヒラヒラコートの副音声長身男がヤミーに続

き、彼の隣に並んで膝を突く。

アール・ニーロ・アルルエリ。その衣装に相応しい鱈界最オサレネームの持ち主の一人だ。彼とルキアの戦いはOPBが提唱されるようになったきっかけなので、是非それに相応しい強者ムーヴを頑張つて彼女のオサレ的勝利を強調する逆転敗北劇を演じて欲しい。

「序列第八位。司る死の形は”狂気”」

オクターバ・エスパード

”第8十刃”

SZAYELAPORRO GRANZ

「王の御前に」

優雅に跪く元マツド錬金術師はこういうことに慣れてそうだ。

戦闘面ではぜひ同じ眼鏡仲間の石田ちゃんと恋次くんで遊んで、ネムちゃんで出産プレイを見せて、そして最後にみんなのマユリ様の引き立て役になってくれ。あと千年血戦篇で彼の幻覚に登場して助言するのも忘れないでね！

ついでに地獄篇も。

「序列第七位。司る死の形は”陶醉”」

セプティマ・エスパード

”第7十刃”

ZOMMARI RURREAUX

「御身の前に」

ザエルアポロに続いて最敬礼をするシャーマンっぽい雰囲気のアフリカ系男性。

彼はオサレ集団一の空気だけど、他と違って命令に忠実でヘンなことをしないので心配はしていない。存分に白哉のシスコンツプりを引き出して、その司る死の通りあたしを原作シーン再現に陶醉させて欲しい。させてください何でもしまむら。

「序列第六位。司る死の形は”破壊”」

——”セスタ・エスパーダ第六十刃”——
GRIMM グJOW リム JAEGER ジョー・JAUQUES ジャー

「…はい」

我が家の不良少年その一。どうした、念願の”十刃”だよ？ もつと嬉しそうにしないさい、お姉ちゃん君の望みを叶えてあげたのに笑顔が見れないの悲しいわ…

グリムジョー・ジャガージャック。うん、アールローニーロに匹敵する作中三大語呂良しネームは健在だ。君には色々一護くんを鍛える大事な仕事があるのでくれぐれも勝手な事はしないでくれ。いや”しろ”と言うべきかな？ とにかく頼む。

「序列第五位。司る死の形は”絶望”」

——”クイント・エスパーダ第五十刃”——
NNOITRA ノイ GILGA ト

「チツ…はい」

不良少年その二。あたしの頭二つ分くらいデカイ脅威の身長215 cm！

ネリエルへの反応を見るに男尊女卑であるはずなのだが、何故かあたしとハリベルには特に反発しないのは何故だろう。まあイキってる反面意外と小心者で、破滅願望というか人生を超悲観しているある意味可哀想な男だが、この辺りの本音は彼の地雷なのでスルーする。本誌で剣八のヤバさが最初に判明したシーンを担当しているから、頑張ってくれ。

「序列第四位。司る死の形は”虚無”」

クアトロ・エスパーダ
”第4十刃”
ULQUIORRA CIPHER

「はい」

ようやく口と鼻と耳と肌が出来た忠臣ウル坊ホントすこ。すこすこのすこ。織姫ちゃんに「ウルキオラくん」って呼ばれるくらい良い雰囲気になつて？ そしてその特典シーンをあたしに見せて？（血涙願望）

この男に関して多くは語るまい。一護くん関連でグリムジョー以上の大事な大事な役割があるので抜かりなく頼む。

「序列第三位。司る死の形は”犠牲”」

トレス・エスパーダ
”第3十刃”
TIER HARRIBEL

「はい」

あたしの暇な従者的立場から大出世なハリベルさん。オサレ集団の紅一点としてクールに佇んでいてください。

そして彼女にはあたしのシロちゃんを輝かせる大事な大事な大事な役目があるのだ。シロちゃんがあたしをヨン様から取り戻す（）ためにどれだけ頑張つて修行したかがわかる指標でもあるので、ぜひ頑張つて欲しい。あ、でもあまり頑張りすぎないでね。シロちゃん傷付けたら怒るよ？（無茶ぶり）

「序列第2位。司る死の形は”老い”」

セグンダ・エスパーダ
”第2十刃”
BARAGGAN LOUISEBAIRN

「……」

ジロリとあたしを睨み付けて小さく頭を垂れる元虚夜宮ラスノーチエスの支配者さん。おや、No. 2の地位に関してあまり反応しない。最初からあたしと藍染を倒すことを目標にしているから序列なんて興味がないのかな？

彼はご存じあたしが最初に屈服させた最上位大虚ヴァストローデで、以後色々と言様陣営に（元部下たちが）こき使われている盛者必衰の体現者だ。もつとも向上心はちゃんとするので日々鍛えているのは知っている。あと意外と今の刺激的な生活を楽しんでいることもね。

鬼道好きとしてハッチの戦いは是が非でも見ておきたいので原作通りの活躍を期待してます、お爺ちゃん。

「序列第一位。司る死の形は”孤独”」

ブリメーラ・エスパード

——”第1十刃”——

COYOTE スター
STARCK

「…はい」

少し気まずそうにバラガンより上座に跪くカリイおじさん。あたしの正解が彼の帰刃レスレクシオンの戦闘方法と似ているので、崩玉でちゃんと破面化したこれからは色々相談したい。

よくバラガンより弱いんじゃないかと言われるスタークさんだけど、彼は原作でも隊長四人同時に相手にしながら戦ってた化物だ。ただちよつと半身のロリっ子を殺されたりヨン様の本音を知ってしまったたり、色々と悲観的な出来事が重なって人生を諦めちゃっただけなんだ。あたし的に言うなら先日双匣の丘にてシロちゃんに「雛森イイイイ！」ではなく「藍染エエエエン！」って叫ばれてしまったくらいの絶望だ。

わかるよ、スターク。そんな悲劇に見舞われたらどれほど強くても死を選ぶよね…

さて、と。あたしは眼下に勢ぞろいした強者共を見下ろす。

スターク、バラガン、ハリベル、ウルキオラ、ノイトラ、グリム
ジョー、ゾマリ、ザエルアポロ、アールニール、ヤミー…

ご覧くださいヨン様！そして鯰読者のみんな！

ああ…やつと…

——やつと揃ったよ…

「以上を以て、”^{エスパーダ}十刃”の任命を終わる」

思わず安堵の溜息が零れそうになる。

ヨン様が仕事を放棄してから幾星霜。具体的には四十四年と四ヶ月の年月をかけて集めて束ねて賤けて組織して、ようやく完成した完全編成の原作”^{エスパーダ}十刃”。シロちゃんの「雛森イイイ！」には遠く及ばないが、これも感無量と言って差し支えない感動だ…

「死を司る十の刃よ、斯くて諸君らは我らが王に勝利を捧げん」

発表とプチ演説を締めくくり、あたしは飛梅ちゃんの卍解が発動できるほどの霊圧を噴出させる。客席の破面たちがあてられて床に倒れ伏しているが、”十刃”たちは震えつつも全員が頑張つてこちらを見上げていた。うふふ、ならその意気込みと負けん気に応えて、本音を伝えて差し上げましょう。

「——あなたたちの成すべきことを成しなさい」

そこに希望を見たのか、慈悲か、期待か、はたまた嘲りを見たのか。大きく息を吸った”十刃”たちが、一斉に承知の意を表してくれた。

『——はっ！』

さあ、こちらの準備は整ったぞ。

そちらはどうか、仮面のあたり？

調査イイイイ！

——食事が不味い。

それは四十年前、我らヨン様陣営がここ虚圏ウエコムンドに拠点を設けて真つ先ソウルンサエテが上がった生活問題であった。

尸魂界ソウルンサエテ有数の料理人・東仙要の辛辣な一言に当時の虚夜宮ラスノーチエスの雑務係たちはさぞ参ったことだろう。

彼らの種族は破面アランカル。死神に近付き同胞の虚ホロウや善霊プラスの整をほとんど喰らわなくなつた破面たちは、大気中の霊子を呼吸で摂取し生命活動を維持している。

つまり需要がないため、食事が不味いと言うより美食という文化そのものが存在しなかつたのだ。

「…霊蟲を食用に品種改良するべきか」

「アレ食べるんですか…？」

食用霊蟲。原作で破面たちが食べていたという設定がある、虚圏に生息するよくわからない靈性生物だ。現物は昆虫食ではなくミドリムシ的な流動食だったけれど、あれで満足できるほどあたしたちの舌は貧相ではなかつた。

「軍隊に美味しいご飯は必要不可欠ともいいますし、破面たちも人になつたんですから食事の楽しみを知って損はないと思うんですよ。どうせなら彼らのためにも大規模な農園とか作ってみませんか？」

「…興味深いな。だが場所は？」

年甲斐もなくワクワクしている料理マニアなDJと共に、こうしてあたしたちの『食事改善計画』は始動した。

だがここ虚圏ウエコムンドは——二重の意味で——草すら生えないほど土壌も大気も完全に死んでいる悪霊たちの世界。身近で農園を作るには外界から土や植生を持ち込み屋内農園をTOKIOする必要があつた。

ということでも早速現世や尸魂界から必要なものを持ち込み試行錯誤の数十年。遂に満足に足る水田・麦畑・野菜果樹園を運営するに至ったのである。

「…良いものが出来たな、雛森」

「はいっ、東仙隊長」

完成した『藍染農園（公式名）』は野菜やフルーツ等現世のスーパーで買えるメジャーな青果を完備。残念ながら肉や魚などの生鮮食品、一部調味料などの第二次産業は加工がほぼ不可能なので、少し味気ないが一度現世で入手したものを小説チートキャラなロカえもんの【反膜の糸】で再現する。

農園とロカ姉貴のおかげで虚夜宮ラスノーチエスは死の宮殿から、一流シェフ（D J&あたしの弟子破面）たちと新鮮な食材が揃う美食の王城へと様変わりしたのである。

ふふふ、護廷隊のみんなもまさか裏切り者のあたしたちが尸魂界以上に豊かな食生活を送っているとは夢にも思っまい。

…そんなあたしたちの努力に、先程「最初から全部ロカに作らせた方が早い」とかほざいたのが空気を読まない一〇。バカ野郎お前ロカが普段どんだけ仕事請け負ってると思ってるんだ、お前と違ってあの子は引っ張りだこで忙しいんだよ！

「ウルキオラに行かせるつもりだったがお前でも構わん。これがロカに再現させたい現世の買い物リストだ。暇なら行ってこい、市丸」

「ボク藍染隊長の副官なんやけど…ウルキオラでええやないですか」

「ちよっとお二人とも！ あの人はこれから黒崎一護ホロウカの虚化進捗調査に行くんですから勝手に雑用押し付けないでくださいっ」

全くコイツら、栄えある”十刃”をなんだと思ってるんだ。いくら破面軍最オサレなウルキオラでも、流石に段ボール満載の台車を押しながら一護たちの前で黒腔ガルガンタを潜る。パシリ姿をオサレに魅せることは不可能だ。原作の「藍染様には報告しておく…」の名シーンをシュールギャグにするんじゃない。

結局一〇がゴネたのでジャンケンになり、負けたあたしが買い出しに行くことになりました。ちなみに東仙は勝負不参加、ガツテムDJ。

まあ久しぶりの現代の現世だし別にいいけどね！ 後で浦原さんのいない鳴木市のアジトへ行くか…

「——と言うワケでウルキオラさん…ウルキオラにはこの人間の男子、黒崎一護の実力を調べてきて欲しいんです」

場所は飛んで桃ちゃん， s 執務室。

あたしは人間らしい敬称を嫌がるウルキオラを呼び捨てに、珍しくヨン様がくれた命令に従いあの原作での戦力分析任務を指示していた。

一応説明すると——今度の原作イベントは藍染惣右介が一護さんの成長速度を調べるためにこのウルキオラとヤミーを現世空座町に送り込み、主人公陣営と戦闘になる…という展開だ。敵主力である成体破面の恐るべき実力が判明するオサレ場面で、同時に一護の内なる虚の厄介さが強調されたシーンでもある。

前世のア二鰯で観たときにかなりハラハラドキドキした記憶は未だ鮮明だ。

この世界ではあたしの特大ガバでヨン様陣営がかなり強化されてしまっているため、千年血戦篇を見越した帳尻合わせの強化を主人公陣営にも行っている。それが主人公の才能の源である、二十年前の寄生型虚【ホワイト】の強化だ。

ホワイトくんには前にも述べたが色々細工がしてあり、その一つがメンタル低反発枕な一護くんに比較的安全に虚の力を引き出して

貰うためのお助けキャラ——通称”仮面のあたし”である。

このお助けキャラは一護の中にいるユーハおじさんから着想を得たもので、崩玉の力と浦原さんの義魂技術で人造人格を作り出し、霊王の欠片に宿らせている。これは霊王の欠片を使った封印の力を自在に操るために自然とこの形になった。ちなみに人格のモデルはもちろん原作雛森ちゃんだ。

一応ガバには気を使っているつもりだ。人造人格が勝手に封印を完全解放しないよう、この”仮面のあたし”には都合のいい情報のみをインプットしており、物知りで一護LOVEなユーハおじさんと自然と協力するよう仕向けた。封印の完全解除なんておじさんが絶対に許さないし、何よりあたしの考えた原作雛森ちゃんモデルの人格なのだから当然一護を虚になどさせないはずだ。ホワイトの管理者として六年前の”本好きのおねえちゃん”ムーヴを完璧にこなしてくれるだろう。

今回のウルキオラの任務はこれが正常に作動しているかのチェックも含まれる。

「この映像が黒崎一護に関する資料です。参考にしてください」「拝見します」

執務室の映像モニターにあたしの秘蔵ファイル『一護くん成長記録』を再生する。もちろん全てではなく、ルキアちゃんとの出会いから尸魂界での白哉戦までだ。

「特にこの虚の仮面を被っている状態の情報が欲しいです。戦闘力はもちろんですが、人格や表情感情などの精神的な変化にも注目してください」

「…畏まりました」

む、今少し返事に詰まったな。やはり相手の精神、心を分析する任務に不安があるのだろうか。

「大丈夫。あなたはただ見たままのことを報告してくればいいのです。黒崎一護と…この井上織姫はとても強い心を持った人間ですか

ら、二人の様子をよく見ていれば必ずあなたの”目に映る世界”は広がるでしょう」

「……」

微かに目を見開くウルキオラ。彼の境遇的にその言葉はクリティカルだからね。しれつと織姫ちゃんにも興味を持つよう印象操作したけど原作的には些細なことだ。

最後に、ヤミーを連れていくと色々引つ掻き回してくれて一護の観察がしやすいとアドバイスし、ウルキオラを激励する。

すると彼は少し目を伏せた後、顔を上げジツとあたしを見つめてきた。

「…軍団長」

「何ですか？」

「ヤツが藍染様の脅威足りうる場合、殺しますか？」

うーん、この忠犬。折角の心を知る機会を僅かな逡巡で放棄するのは流石だ。

もつとも、ウルキオラに一護は絶対に殺せない。

まず、ヤバくなったらあつちのあたしがホワイトくんの力を少し解放して彼を助ける。もしそれでも足りなかった場合も、ユーハおじさんや浦原さんや夜一さんがいるから、ウルキオラが一護をオサレにいたぶってる途中で助けが入るはずだ。それに最悪死んでも織姫ちゃんがいるから復活するし、保険は山ほどある。流石主人公。

なので答えは一つだ。

「軍団長としてあなたに全てを一任します。その時点で斬る必要があるほどの相手でしたら、そうしてください。伸びしろを警戒して芽を摘むのも、伸びきってから戻し伏せるのも、どちらも正しい忠義のあり方です」

「…わかりました、軍団長」

「ただし、井上織姫は絶対に殺さないように。藍染隊長があの人有能力に興味をお持ちです。よろしく願います」

「ほい」

一礼し、今度こそ桃ちゃん執務室を去っていくウルキオラ。うーん、タキシードみたいなコートの燕尾がこの上なくオサレだ。かつこいいい。

何を隠そう、あたしにとつてウルキオラは破面勢で一番好きなキャラなのだ。前世であたしを中二病に目覚めさせた罪は重いぞムルシエラゴ！

おまけにこの世界では四十年以上も探した大虚だからね、思い入れも強いんだ。

ああ、本誌で織姫ちゃんと一護から心を知ったウルキオラがどんな人生を送るのか見てみたかったな。でもあのクソデカ「心か」の最期のシーンは彼の最大にして最高の見せ場でもあるんだよなあ…

うう、救いはないんですか師匠お！

オサレ最高神の破面勢に対する無慈悲さにはしばらく涙することしばし。あたしは深呼吸を重ね、ぺちぺちと意識を切り替える。

そう、原作イベントだ。

このイベントは、見るだけならウルキオラの共眼ソリタ・ヴァイスタ界や、監視用隠密虚の映像記録装置で事足りる。だが、やはり鯽ファンとして現地で観たいと思ってしまうのは仕方のないことなのだ…！

特にあたしが作成と継承に関わったホワイトくんが、主人公の一護とどんな絆を作っていくのかは非常に気になる。可能な限り原作通りが理想だが、これほど手間をかけて準備したのだから少し変化を見たいと贅沢にも願ってしまうあたしは悪い子桃ちゃんだ。

——ツツヒヤツハー我慢できねえ！ シロちゃんに動きがない今、やっぱりチャン一見に行くしかねえ！

ワクワクを胸に、あたしは霊圧遮断義骸に入り久々の現世へと赴い

た。

おつと台車と段ボール。お買い物も忘れずにね。

現世イイイイ！

——制服が好きだ。

私が何者であるかを

誰にも証明しないで済むからだ。

「…まあただのコスプレなんだけどね」

のえるちゃんの名台詞を口ずさみ、あたしはくるりと回って人生初のミニスカートを翻す。

久々の現世へ行くにあたり、あたしが選んだ服装はあの空座第一高等学校の女子制服だった。

(季節的に仕方ないけど、やっぱり夏服は地味ね…)

半袖のブラウスに赤いリボン。校章の入った留具以外特にこれといった特徴のないシンプルなものである。

冬服はスカートと同じグレーの赤いアクセントの入ったジャケットが初期BLEACHっぼさ一杯で素敵なのだが、一人だけ厚着は目立つので今回は見送った。無念。

さて、今あたしがいるのは空座町の隣町。二十年前に懐かしの【ホワイト実験】を行った鳴木市だ。

ここにはヨン様陣営のアジトが当時から維持されており、直近だとアイスリンガーとデイ・ロイが空座町監視任務に就いていた時に拠点として使っていた。ネガシオン反膜兵器の応用で屋外に漏れる霊圧を遮断し、ガルガンタ黒腔を自在に開け閉めすることが出来るようにしてある。まさにウエコムンド虚圏と現世の玄関口と言えよう。

そんなアジトがある鳴木市に來た理由は、お買い物と原作イベント観戦の二つだ。

「急がないと始まつちやうな…」

気が利くと言うか謎の凝り性と言うか、アイスリンガーたちがいつの間にか作ってくれた周辺地図から大きいスーパーを探し、アジトから徒歩十五分ほどのところまで空の段ボール箱を積んだ台車を抱えていく。

「——むむっ！ 美少女センサーに感アリッ！」

「文化祭の準備かな。凄いかわいい子だけど何年の人だろ」

「年上好きのお前でも知らねえのかよ水色オ！ ま、まさか待望の転入生!？」

「昨日男が一人来たじゃん。ていうか君僕をなんだと思ってるの？」

…うん、めっちゃどこかで聞いたような声が聞こえたけど無視だ無視。原作では空座町の隣町に住んでいるらしいけどまさか鳴木市だったとはね。偶然って怖い。

しかし台車のせいとか相当目立っている桃ちゃん。脇に抱えた大荷物で注目を引き、続いて雛森フェイスで更に釘付けにしてしまう悪循環。

うう、この視線の中でスカート姿はふとももが心許ない。生足を晒す度胸はなかったのでストッキングを履いて来たけど、これを毎日着てるJKって凄いなあ…

初期の現世任務で何の抵抗も無くミニスカートを穿けたルキアを尊敬しつつ、あたしは人目を避けるようにスーパーへと急いだ。

雛森ちゃん企画の、あのウルキオラ&ヤミー襲撃イベントまで、あと少し。

「——ありがとうございます…」

周囲のジロジロ不躰な視線に耐えることしばらく。

赤い顔のバイト兄ちゃんの残念そうな声を背に、食材などを詰め込

んだ段ボール箱三つを台車でガタゴト押しながらスーパーを出たあたりは、百五十年ぶりの現代ノスタルジーを少しだけ楽しみながらアジトへ戻った。

「ではこれを厨房に運んでください」

「畏まりました、雛森様」

雑務の破面に荷物を預け、あたしはわくわく気分で空座町へと向かう。

右手にコーラ、左手にケバブ、心には熱いトキメキを。微塵の隙も無い完璧な布陣のスタグル装備だ。

さあ、いよいよ開戦です！

「わわ、やってるやってる…！」

王鍵創造を見据えて、町の被害が最小限になる公園の森を座標に選んだ襲撃ポイント。

地鳴りと共に空座町東部公園の方角から巨大な土煙が立ち上るのが見え、あたしは慌てて急ぐ。隣を並走する野次馬たちのおかげで、一人ケバブもぐもぐストローちゅーちゅーしているJKが紛れていても目立たない。

背が低いので群衆の前の方へ行くと、ぽっかり開いた大穴の縁に二人の男が佇んでいた。巨漢に胸丈の白ジャケットが致命的にダサイヤミー・リヤルゴ選手、そして長方形の燕尾が致命的にオサレなウルキオラ・シフアー選手だ。

いいねいいね、やっぱりBLEACHの…生原作イベを…最高やな！

ほっぺにピリ辛マヨネーズがつくのも気にせず、あたしは辺りを見渡し他のメンバーを探す。霊圧探知には記憶したチャドと織姫、そして一護の気配が近付いているのがわかるが、浦原商店の方はまだ動き

がない。

ちやんと来てくれるよね？

「…なんだア、こいつら？ 霊力もねえのに寄って来んじゃねえよ！」
あたしが一人木の陰できよろきよろしている、野次馬に集られキレたヤミーが突然大きく息を吸い込む素振りをした。え、ちよ、ちよと待つてまだ食べ終わってないのに！

慌てて口の中に残りのケバブを放り込むのと同時。強制的に周囲の靈魂をDYSONするヤミーの「魂吸」に魂を抜かれバタバタと群衆が倒れていく。初めて見るけど凄い光景だ。

本誌ではチャド曰くこれだけでホントにみんな死んだらしいのだが、翌日何事もなく学生たちを授業に出席させる空座町って危機管理ガバガバすぎませんかね。

もちろんお忍び中のあたしも「な、何よこれ：ガクリ」と桃ちゃん名演技でパンピーのフリをする。さりげなく木の幹を背に座り込みベストな視界を確保。臨場感たっぷりの観客席に思わずニッコリ。

くくく、この試作霊圧遮断義骸ver. 2とあたしのコスプレ変装演技力が合わされば誰も正体を見抜くことは出来まい。詰め込んだケバブで頬が膨らんでいるのは変装の一環です。

「——おいウルキオラア！ こいつか？」

「!？」

気付かれた…だと…!? 突然の大声に驚き、前髪の奥から恐る恐るヤミーの様子を窺うあたし。

「よく見るバカ。お前が近付いただけで魂が潰れかかっているだろう。塵の方だ」

「チツ、生き残ったのはたまたまかよ。くだらねえ」

…なんだ、あたしじゃなくて竜貴ちゃんのほうか。びっくりさせやがって全く。

しかし、おかげで緩みまくっていた気持ち少し引き締まった。思えば最高の「雛森イイイ！」で人生に満足してから何となく消化試合的と言うか、定年退職後の余生を過ごしているかのような心理になつていたのも事実。まだあと一幕だけ原作雛森ちゃんがシロちや

んを曇らせたシーンは残っているのだ。回収し損ねてはデユエツイストの名折れである。

そうしている内に事態は動く。竜貴ちゃんのピンチに颯爽と駆け付けたのは織姫ちゃんとチャド!

友人のために立ち上がる二人の勇気は実に感動的だ。

「何だア、お前ら?」

『…ッ!』

だがあたしが集めてヨン様が破面化させた”十刃”を侮つてもらつては困る。順当にヤミーが消える霊圧をチャドし、残された織姫ちゃんが気丈に【双天帰盾】で彼の回復を試みる。

…いや凄いなコレ。鬼道には自信ネキなあたしだけど、織姫ちゃんをやつてる事が異次元すぎて原理が全くわからない。

確かにこれなら彼女を攫つてもその能力目当てだとしか考えられないだろう。

しかし、そんなぶつ壊れチートな織姫ちゃんもこの時点では戦う力を持たない。椿鬼の【孤天斬盾】も瞬殺されて絶体絶命だ。

だが大丈夫、織姫ちゃん。なんてったってここには君のナイトのウルキオラくんがいるからね!

「…その女に手を出すな、ヤミー。あの方のご命令だ」

「え…?」

ファッ!? 録音! 今の録音出来てる!?! ウルくん今「俺の女に手を出すな」宣言したよね!?! (空耳)

素敵なウル織の波動にフアンのあたしは狂喜乱舞。よいぞ、やはり盛り上げるための事前準備は完璧だ。流石あたしである。

…だが、事はあたしがそう調子に乗りまくっていた直後に起きた。

あたしがこつそりポケットの記録装置を確認している真横で、耳を疑う爆弾発言がヤミーの口から飛び出したのだ。

「チッ、雛森さんの指示じゃしよーがねえなア。あの卍解的にされるのは二度とご免だぜ」

「雛森…？」

——は？

ちよ：おいコラ待て、ヤミーお前今誰の名前出しやがった!? そこはヨン様陣営アピのために原作通り”藍染さん”だろ！”雛森さん”だと味方台詞OSR値ボーナスがヨン様じゃなくてあたしに飛んで来ちやうじゃん！

しかもちやつかり卍解言及してるしこの野郎！あたしのオサレCO計画を台無しにするな！

素敵な原作イベント見物が突然雲行き怪しくなる。死体の演技も忘れ、頭を左右にブンブン振るあたしの祈りを嘲笑うかのように、事態は更に悪化していく。

「ひ、”雛森さん”ってあの藍染って人が無理やり連れ去った副隊長の女の子…ですよね？ 朽木さんの同級生で流魂街の人たちに人気だった…」

”無理やり連れ去った”だア？ 何言ってるんだお前、あの人は半世紀も前から俺たちのボスの一人だろ」

「は、半世紀…!？」

フア~~~~~!?!?

ちよちよちよヤミーあなた何当然のようにゲロってんの!? コイツこんな口軽かったつけ？ てかうルキオラも突っ立ってないで止めよ！

一体何が起きているんだ。ヤミーはともかく忠臣ウルキオラまで自陣情報暴露をスルーするのは流石におかしい。あたしは確かにちゃんと二人に口止めたはずなのに——あれ？

…あたし、口止めた…よね？

「雛森桃。我々破^{アランカル}面全軍を率いる軍団長の地位に就くお方だ」

「あらんかる…？ 軍団長…？」

必死に記憶を漁るあたしを余所に、なんとウルキオラまでヤミーに便乗して鯰界特有の組織オサレ解説をし始めた。これは本当にあたしが口止めし忘れていた感じの流れである。

：確かにあたしの悲劇のヒロインムーヴは尸魂界離反の直前に選んだ新しい方針だったし、そもそもほぼ無関係なヤミーたちにとっては機密でも何でもない。

秩序維持と意識教育を担当する【虚圏統括官】のDJも同じ理由で破面軍にこのことを通達する理由がない。ヨン様も一〇も意地悪だし、たとえ気付いても普通に黙秘してあたしがどうするかを観察に回るだろう。

そして肝心の当事者たるあたしは、急遽決まった新方針をヤミーたちに伝えるほぼ唯一の機会だったこの数日間、ずっと「雛森イイイイ！」の余韻に浸ったままか、今回の原作イベント再現ばかり考えて、何もしなかった。

…はい、ギルティ。

「こいつを殺すなつてことは後で何かに使うんだろ？ なら雛森さんの印象が良くなるように任務ついでで攫っちまおうぜ。あの人の作る“ハンバーグ”だっけか、あれ旨エنداよなア」

「好きにしろ。俺は関知しない」

「嫌っ…！」

放心するあたしの視界の端で、織姫ちゃんがヤミーに拉致られようとしている。

別にその子連れ帰ってもあたしは印象ダウンしかしません。これ以上原作ブレイクしないでください。

…そして、そんなヒロインの危機的状況に、かつこよく登場するのがオサレの申し子・黒崎一護。

「——悪い、遅くなった井上」

ホントだよ、ヤミーがあたしの名前出す前に来いよ！（責任転嫁）
楽しみだったチャン一のオサレシーンも自業自得で灰色に見えて
しまい、一人涙を流すアホアホ桃ちゃん。

…仕方ない、切り替えていく。

「——正解！

てんざんげつ
天鎖斬月」

おお、かつこいい！ 真つ黒なコートがオサレ！ あたしと同じ特
等席で見れる織姫ちゃんも惚れ直すだろう！

主人公の切り札を生で見ても気分が良くなった単純なあたしは、先程
のガバも忘れて彼がヤミーをボコる様を見物する。

うん、やはりホワイトの霊圧を感じるな。顔色も悪いし、これは多
分相当内なる虚に悩まされていますね。

しかしそっちのあたしはまだ目覚めていないのだろうか。ここで
動きが見えないなら”仮面の軍勢”ヴァイサードたちとの虚化修行の前に一度封
印を確認しに行かなくてはならないけど…

「——がっ!?!」

…おや、ホワイトくんの霊圧が跳ね上がった。同時に一護が顔を押し
さえ始める。戦局逆転、今度はヤミーにボコられるチャン一。

展開自体は何か原作通りに進行しているが、予想通り一護の最大
霊圧がデカい。少なくとも解放グリムジョーに匹敵する規模で、しか
もまだ増えている。

そして、ウルキオラが思わず自身の斬魄刀に手を添えるほどの力が
噴出した瞬間。それは起きた。

『なっ…!?!』

突然一護の胸元から無数の桃色の光帯が飛び出し、そして同時にあれほど大きかったホワイトの霊圧が一瞬で消え去ったのだ。

「…何だ、それは」

あまりの出来事に眉を寄せて訝しむウルキオラ。一護も満身創痕だが体の自由を取り戻し、先程の現象が何なのかわからず驚愕しながら胸元の光の帯を見つめている。

そして動揺する周囲の疑問をそのままに、光の帯はスウ…つと彼の体の中に戻っていった。

(よかった、作動してくれたみたい…)

どうやらそちらのあたしは予定通りちゃんと自動制御の役割を果たしているらしい。我ながら会心の出来の封印だ。どつと疲れが押し寄せ、あたしは安堵に溜息を吐いた。

…さて、これで一応確認すべきことは終わった。

あとは夜一さんと浦原さんの無双シーンだが…正直さっきのヤミーの暴露で精神的に疲れたのと、早く今後の身の振り方を考えたい。何だかこの流れだと目敏い二人に見つかる気がしてきたので、もう大人しく帰ろうかな…

そう思い静かにフェードアウトを狙うあたしだったが、残念ながらそうは問屋がおろさない。

「——どうやら間に合ったみたいツスね」

なんで主人公勢力ってどいつもこいつもあたしのガバを引き出すうとするんですかねえ!?

言った傍からタイミングドンピシャで登場した浦原さんと夜一さん。チャン一の牙錠封印の発動シーンで妙になった空気を元の殺伐としたものに戻し、再度ヤミーとの戦闘が始まった。

夜一さんの教本のような素晴らしい白打でボコボコにされるヤミー。しかしタフな彼は少し意識を飛ばしただけで復活し、油断していた夜一さんへ虚閃セキを発射。その間一髪で浦原さんの【血霞の盾】が

間に合い…

「——鳴け、【紅姫】！」

そして彼の始解の能力である血のオーロラ的な斬撃がヤミーを捉え、それを乱入したウルキオラが——あたしの方角へ弾き払った。

…ん？ あたしの方角？

「ツな!? この霊圧はまさか…ツ！」

「知ってるんスか、夜一サン!？」

ちよっ!? てめえウルキオラなんでこっちに飛ばすんだよおい！
なんて偶然だふざけんな！ この義骸隠密用で防御力ないのホオオオア壊れる壊れる義骸壊れちゃはあああああああ——

…それはもう、完璧な” BULL, S EYE!”でした。

慌てて逃げようとするも同調率の低い義骸で出来る死神の斬拳走鬼なんて殆どなく、当然指一本動かせずあっけなく直撃。

あたしは塵一つ残ることなく消え去った試作霊圧遮断義骸 v e r .
2に別れを告げた。

そして…

「――しよつ、そこまでです。ウルキオラ、ヤミー」

必死にさも「今来ました」な体を取り繕い、あたしはオサレに宙に
浮きながら一護たちの前に姿を現した。

少女イイイイ！

それは突然、虚空に現れた。

白いドレスのような死覇装を纏った女死神が、風にスカート裾を遊ばせ宙に浮いている。その少女は膨大な霊圧を静かに漲らせながら、黒崎一護ら一同を、苦々しい顔で睥睨していた。

「お主は……雛森桃！」

夜一の声で一護ははたと気付く。

それは以前流魂街るこんがいで耳にした、ルキア救出の味方になりうると期待された人気者の副隊長。そして尸魂界ソウルソサエティで起こった巨大な陰謀劇の終幕に、敵の脅迫まがいな誘いで連れ去られた訳アリの女死神、その人だった。

「ひ、雛森さん……？ 何であんたがここに……」

敵の虚モドキの巨漢が宙の少女——雛森桃へ恐る恐る訊ねる。それまでの傍若無人さが嘘のように萎れた男の背中が互いの力関係を表していた。

そして問われた雛森桃が渋面のまま、男の名を呼んだ。

「ヤミーさん」

ゆつくりと辺りの惨状を見渡し、沈痛そうに唇を噛む女死神。

「…何をしたんですか。あたしは” 不必要な暴力は慎んで下さい” とお願いしたはずです」

「だ、だけどよオ！ どいつもこいつもムカつく連中で——」

「言い訳は聞きませんッ」

男の訴えを両断し、少女がふわりと地面へ降りる。

「前も言いましたが、あなたは破面アランカルに進化して虚から人になったので

す。もう戦うだけの獣じゃないのよっ。」

「す、すまねえ…」

神妙に謝罪する虚モドキを悲しい声色で叱咤する雛森桃。その姿は、一護にはまるで手のかかる子を諭す母親のように見えた。

「ウルキオラは大丈夫ですか？」

「ご心配なく。この程度の雑魚相手に傷付けられることはありません」

もう一体の敵の無事を確認した少女がほっと胸を撫で下ろす。そして二体を背に、一步前に進み出た彼女はキツと一護たちを睨み付けた。

周囲の空気が張り詰める。だが一触即発の緊張感を破ったのは、傷ついた一護を庇う男女の片割れ：浦原喜助の確信めいた問いだった。

「——アナタ、”読書家” ツスね」

それは何かの暗喩、あるいは称号か。一護には聞き慣れない単語だったが、隣の夜一にとっては俄かに信じられないことだったらしい。

「まさか、じゃがこやつは…」

「…ええ、アタシも少々意外です。あのときの彼女と雰囲気の違いが違います」

「コソコソと情報交換をする二人に、蚊帳の外の一護は思わず「知り合いなのか」と尋ねる。だが彼の返答は曖昧で、そして不穏なものだった。

「…謎の虚研究家ツス。昔一度だけお会いしましたが、当時は死覇装と仮面に声まで偽装した、まさに正体不明の女性でした」

「死覇装と、仮面…?」

「ええ、ただ彼女の死覇装は真っ白。そして被っていた仮面は…」

——虚のものでした。

その言葉に一護は驚愕する。先日ヴァイザードの“仮面の軍勢”。あの卍解修行の途中で見た奇妙な夢。謎の虚研究家といい正体不明の女性といい、思いつきり身に覚えのある人物だった。

「藍染惣右介と繋がりがあるのは予想済みでしたが…まさかこういう形で明かしてくれるとは思いませんでした」

「藍染…!?! ってことはあの雛森って人は敵なのか？」

「普通に考えたらそうなんすけどね」

煮え切らない言葉が一護を更に困惑させる。何かと縁のある謎の少女の正体が敵の一人だったと知らされただけでも衝撃だと言うのに、事はより複雑なのだと言ふ浦原は言う。

死神の彼女が他者の隔たり無く虚ホロウの部下に心を砕くのは、確かに“読書家”らしい性質だ。だが初対面時の不気味な神秘性は大きく薄れ、代わりに虚ろな退廃感と人間味を彼女の中から感じる。

別人のように変貌した“読書家”。果たしてその変わり様は演技と本性の二面性か、それとも…

「この二十年で…いえ——この一週間...で何があったんすか？ 雛森サ
ン」

だが浦原が問い掛けた直後。一瞬の瞠目の後、少女が顔を歪め爆発的な霊圧を解き放った。

『!?!』

「こやつ…ッー！」

「話には聞いてましたがこれほどとは…!」

ズドンと心の臓に響く途轍もない圧力に世界が悲鳴を上げる。地べたで憔悴している井上はもちろん、満身創痍の一護も霊圧にあてられ身動きが取れない。

(完全にバケモンじゃねえか…冬獅郎あのチビを瞬殺したときはまだ手加減してたのかよ…!)

かの藍染が手塩にかけて育てた神童。その名に恥じない圧倒的な霊力に戦慄する一護たち。

そこへ、怒れる少女が低い声を投げかけた。

「…何か勘違いされているようですね、浦原喜助さん」

「！」

「あたしは、藍染様の忠実なる僕しもべ。破面軍軍団長の雛森桃です」

仰々しい言葉と表情で胸を張る女死神。

だが、一護はそこに微かな違和感を覚えた。

一度気が付けば次から次に見つかる少女の不自然さ。勇ましい表情に見え隠れする焦燥、痛痒、達観が、彼女の変化の原因足りうる一つの可能性を浮かばせる。

そしてそれは当然、聡い夜一と浦原も思い至った推測。

「ちっ…洗脳されおったか」

「——ッ！」

一閃。

突然、夜一の足元の地面が裂ける。いつの間にか腰の斬魄刀を右手で振るった少女が、瞳孔の開ききった淀んだ瞳で一護たちを射殺さんばかりに睨み付けていた。

「…洗脳なんてされてません。あたしは自分の意思で尸魂界を捨てたんです。そちらの都合のいいように考えないでください」

肩を震わせ「不愉快です」と吐き捨てる雛森桃。

その怒りの奥に封じている憤りの正体は何であろうか。精一杯の虚勢にも見えるそれになだぬ闇を感じながらも、一度抜かれた刃は血を舐めるまで鞘に戻すことは叶わない。

「…どうやら戦うしかないみたいツスね」

「くそっ…」

浦原は後ろのチャド達を、夜一は負傷した己の足を。それぞれ危惧しつつ不本意な思いで戦意を高めていく。そんな二人に守られながら、一護は少女の霊圧に耐えるばかりの無力な自分が情けなくて堪らなかつた。

「！ 来る——」

斬魄刀を構える浦原の声が一護の耳に届いた直後、戦場が動いた。夜一の体の周囲に虚空からいきなり六枚の光の板が現れたのだ。

『なっ!?!』

間一髪で逃れた彼女。だが敵の術の理屈を知る死神二人は驚愕を隠せない。

「ぐっ!… 完全無詠唱の六十番台じゃと!?!」

「この霊力残滓… 【曲光】による隠蔽ツスか…!」

無学な一護にはただ少女の技が途轍もなく高度なのだと察せる程度。しかし敵の力を知って尚、頼もしい大人達の戦意に揺れはない。

「アタシが行きますッ!」

—— 荊刀紅姫・紅極波 ——
かみそりべにひめ こうきよくは

浦原の斬魄刀が真紅の霊圧の刃で相手を斬り伏せんと襲い掛かる。その破壊力を知る一護は思わず息を呑み…

「…二人共。下がって下さい」

—— 縛道の八十一・断空 ——
だんくう

「な…!?!」

彼の心配は、突然両者の間に聳え立った霊圧の壁に受け止められた。彼の心配は、突然両者の間に聳え立った霊圧の壁に受け止められた。

【紅極波】の衝撃で爆風が吹き荒れる。しかし砂塵が晴れた後、渦中に居たのは無傷の虚モドキ二体のみ。

「消えた…!?! どうこへ——」

先程の霊力壁の術の硬度に驚く暇もあらず。慌てて一護も辺りを探るが、少女の気配はどこにもない。あれほど巨大な霊圧がまるで霧のように霧散しているのだ。

「上じや喜助ッ! あやつ【白伏】で霊圧を消しておる!」

「なっ!」

警戒に徹していた夜一の喚呼でハッと頭上を見上げる一同。

そして、澄んだ青空にひらひらと舞う白いドレス状の死覇装が、まるで天女のようななどと場違いな感想を皆が抱き…

天を埋め尽くすほどの翠の流星群が降り注いだ。

『!!?』

恐ろしい数の光矢がドガガガガ!と地面を抉る。舞い上がる土煙に視界の全てが潰される中、一護は必死に井上とチャドを守ろうと奮い立つ。

だが。

(…おかしい。俺たちに全く攻撃が当たらない)

威力も余波も凄まじい。しかし直撃は一つも無く、一護は肩透かしを喰らった困惑に戸惑う。

その時。

「——」
「護くん」

不意に誰かの声が聞こえた。切なげな吐息が微かに耳を撫でる。

そんな目と鼻の先の距離に、霊圧を一切感じない彼女——雛森桃がいた。

「え……?」

「ごめんね、今はこれしか……」

思い詰めるような暗い顔の小柄な少女。その小さな左手が、いつぞやのように優しく一護の胸に触れ……そこに彼女の淡い桃色の霊力が溶け込んだ。

「待っ……あ、あんたは一体——」

だが咄嗟に問うも少女の姿はそこに無く、気付けばその気配は頭上の空にあった。

「——二人とも! 現世の威力偵察任務は終了ですッ」
『はっ!』

例の虚モドキ二体を左右に従え、雛森桃が上空からこちらを冷たい目で見下ろしている。

襲撃者一同が目的を終え、立ち去ろうとしていた。

「藍染様には報告しておきます…！ 浦原商店および死神代行一派、共に恐るるに足らぬ勢力であると！」

小さな体で精一杯声を張り上げる少女。威勢のいい勝気な宣言だというのに、そこに適した感情はどこにもなく。

「全ては、藍染様のために…ッ！」

盲目的な、それでいて微かな悲壮感を帯びた自答を残した雛森桃は、ぷいと踵を返し現世を背にする。歩む先には大虚メノスが使う空間の裂け目、黒腔ガルガンタ。

そして空間が閉まる寸前。

——がんばって

微かに感じた彼女の悔悟の視線に、一護はそんな言葉が込められているような気がした。

「あれは一体…」

襲撃者たちが去った公園跡。残された一護は恐る恐る、自分の胸元に手を当てる。

普段となんの変わりもない己の胸板。あの遠い昔の記憶のように、

あの卍解修行のときのように、そして——あの桃色の霊圧の帯が体から現れたときのように。

一護の中で、それらが一つに繋がった。

「味方、なのか…?」

だが繋がった紐は、複雑に絡まった綾取りのように果てが見えず、新たな疑問を彼の前に曝け出す。

あれほど恐ろしかった内なる虚を一瞬で宥めた彼女は何者なのか。浦原さんが言っていた”読書家”とは。斬月のおっさんや白い自分と同じ世界を見守る、仮面の少女との関係は何なのか。

あの雨の日に不思議なお守りをくれて、胸の騒めきを止めてくれた彼女は。一体何故、自分の前に現れたのか。

謎が謎を呼ぶ、雛森桃との初邂逅。

自分よりも自分のことを知っている彼女に近づくにはどうすればいいのか。

——あなたがいつか

一人前になったらね

そうだ。一護は思い出す。

自分には一つだけ、彼女のことを知る手がかりがあった。

——”仮面ヴァイザードの軍勢”。

同じ内なる虚を持つあの胡散臭い連中なら何か知っているはずだ。雛森桃のことを、謎の虚研究家”読書家”のことを、そして…

「一人前に、こいつを制御する方法を…!」

かくして黒崎一護のモラトリアムは終わりを迎え、新たな決意と勇気が胸に刻まれる。

だがその歩みを待ってくれるほど、立ち塞がる巨悪は有情ではなかった：

報告イイイイ！

(…ポジティブ…そう、ポジティブに考えるんだ…)

悪夢の原作イベ見物が終わった。

あたしはウルキオラとヤミーを引き連れながら黒腔を潜り、ガルガンタヨン様への報告会に臨んでいた。

(幾つか切り札を切っちゃったけど、最悪は免れた…と思いたい…)
気を抜けばしよんぼり丸まりそうな背中を後ろ二人に見せまいと凜と保つ。全く、口止めを忘れた自分のせいとはいえ、コイツらももう少し組織の情報は大事にしてほしい。思わず情報統制担当のDJに八つ当たりしたくなる。

あの街はずれの林間公園であたしが取ったガバ挽回行動は二つ。

一に「頑張つて悪になろうとしている闇堕ち寸前善人」ロール。

二に「主人公の好感度」を上げることによるこのBLEACH世界における雛森桃の印象操作だ。

もっとも前者はあたしの悪性が表層的なものだと相手に錯覚させる、いわば遅効毒程度のリカバリ。後者もお守りやゲン担ぎのような気休め。根本的な解決にはならない。

今更何をしようと、あたしが護廷隊の想定以上に昔からどっぷり悪に漬かっていたことが露呈するのは回避不可だ。

(…でもよく考えれば、別にバレても二度目の「雛森イイイイ！」回収を果たすときに致命的なダメージになるワケじゃないのよね)

ポジティブシンキングである。

そもそもあたしの今のメイン目標であるおかわり「雛森イイイイ！」に限って言えば、今回のガバは然程影響の出るものではない。何

故ならシロちゃんさえあたしを愛してくれたらそれで十分だからだ。

あたしはあの子の人生があたしを中心に回るよう、彼が尸魂界へ来る前から仕込んでいたし——この愉悦趣味さえ隠し通せば——たとえあたしが過去現在未来にどれほど悪行を重ねようと日番谷冬獅郎は雛森桃を見捨てたり恨んだりすることは絶対に出来ない。

重ねて先ほどあたしが行った「頑張って悪になろうとしている闇堕ち寸前善人」ロールは、雛森ちゃんが善人だと信じたい人間にとっては堪らなく甘い猛毒となる。たとえ浦原さんが真意に気付いて注意しても、完全に護廷隊の迷いを晴らすことは無理だろう。

そして空座町決戦でヨン様に斬り捨てられる雛森ちゃんの姿を見てしまえば、もう誰もあたしの毒から逃れることは出来ない。護廷隊も破面軍も大なり小なり動揺し、全てがシロちゃんの「雛森イイイ！」を彩るための悦ツセンスとなるのだ。

ふっふっふっ。あまりのガバで一瞬ヤバいかと思ったけど、百五十年に亘り張り巡らせ続けた愉悦の蜘蛛の巣はGよりしぶといのさ。

BLEACHの物語的視点でも主人公一護くん「自分にだけ本性っぽい善人の姿を見せてくれたワケあり美少女」ロールをして見せたい、きつとしばらくは、雛森良い人説 が蔓延る世界になってくれると信じよう！（読者目線）

：問題なのはあたしの過去バレではなく、卍解バレの方だ。

せっかく空座町決戦で一角リスペクトの唐突卍解で「何……だと……」カウンターOSSRを決めるつもりだったのに、貴重な爆発的オサレチャンスが薄れてしまった。

まあでも、元々ヨン様の熱い神童アピと【破道の九十・黒棺】でかなり実力は知られてしまったから、どのみち一角のエドワード戦卍解ほどのOSSR値は稼げなかっただろう。双匣の丘での一件と、今回のプチ無双で既にかなりオサレになっているはずだし、あたしの「雛森副隊長があんなに強かったなんて……」COチャンスは瞬間的ではなく段階的にOSSR値が溜まっていったのだと割り切るしかない。

オサレバブルが起きなかったと残念がるべきか、危なげなくポイン

ト回収出来たのだと安堵するべきか…

不本意極まりない出来事だったが、こうして何とか楽観的になれたあたし。そして気付かれないよう静かに深呼吸一つで心を入れ替え、残された問題である後ろの”^{エスパーダ}十刃”たちに話しかける。

こちらがまだ未解決だ。

「…ヤミー、藍染隊長への報告会には出席できますか？」

「お、おう。問題ないっすよ」

少し歩くペースを落として、並んだ彼に尋ねる。原作展開とはいえ斬り落とされた腕が痛ましい。ちゃんと回収してくれたウルキオラを褒めると「ありがとうございます」とシンプルに礼が返ってきた。

そのまま任務中に突然あたしが乱入した理由についても言い訳しておく。

「あとヤミー、あなたが空座町の人たちの魂魄を吸い取りすぎたせいで龍脈の霊子濃度に微細ですが変化が起きてしまいました。あたしが浦原喜助と四楓院夜一と戦い多少霊力をばら撒いたのでとりあえずは大丈夫だと思えますが、今後現世の靈魂を無暗に食べるのは控えてください」

「はあ…あつ、す、すんません…」

「…いえ、事前に伝えそびれていたあたしのせいです。詳しくはまだ話せませんが、あの町に住む魂魄は藍染隊長の計画に必要なので、食べるのは人としても控えるようお願いします」

王鍵創造計画は情報統制担当のDJが破面たちに伝えていないためあたしも黙っているが、こう言っておくと何か大事な理由があるのだとウルキオラたちも勝手に解釈してくれるだろう。

二人とも素直に頷いているので納得してくれたようだ。

実際本誌でヨン様が現世の空座町を決戦の地を選んだのも、そこで大規模な戦闘を起こし王鍵創造に必要な霊子濃度を高めるためだったとかどこかの考察にあった。護廷隊に町の偽物を用意されても一切動じなかったのは、本物が移された尸魂界ならいくらでも霊子を回収できると踏んだからかもしれない。

あたしがあの場で取った行動は、計画を知る軍団長として決して間違った行動ではないのだ。

あ、忘れないうちに…

「藍染隊長への黒崎一護に関する報告は予定通りウルキオラにお願いしてもいいですか？ 急ぎだったのでこちらで取れた記録は少ないんです」

「畏まりました」

うむ、これであたしの意味深な悲劇のヒロインムーヴが破面たちにバレることはないだろう。

実はウルキオラの「共眼界」ソリタ・ヴィスタは彼の大虚時代の境遇を反映したもので、”自分の目に見えたもの”しか表現できない。つまり音声や霊圧情報は伝えられず、よってあたしの浦原さんや一護との会話や戦闘時の手抜きを悟られることはないのだ。

ちなみにあたしがウルキオラたちの前に出て一護ら現世組と対峙したのも、部下の身を案じる上司ロールというより、あたしの意味深な表情や仕草を破面二人の視界から隠す意図が大きかったりする。

「ではあたしは藍染隊長のお側に控えます。報告はよろしくおねがいしますね。ウルキオラ、ヤミー」

『はっ』

ラスノーチエス

虚夜宮に帰還し、あたしは追加で幾つか注意事項とアドバイスを教えてから一度ウルキオラたちと別れる。

報告会では恐らくあたしにも一護を殺さなかった批判が飛んできると思うけど、「共眼界」で得られる視界情報だけではあたしの口八丁に異を唱えるのは難しいはず。公式バカなヤミーと心の機微に疎いウルキオラもあたしを疑っている素振りはない。破面軍におけるあたしのガバの余波は最小限に留められるだろう。

…でもどうせヨン様は全部見抜いて、またあたしをからかってくるんだ。自業自得だし、嘲笑の一つや二つは泣きっ面に蜂でも甘んじて受けますよ…

「——おかえり。ウルキオラ、ヤミー」

ラスノーチエス

虚夜宮に置かれた三つの玉座。その内の一つで一護の戦力偵察報告会が行われていた。原作通りの岩場をくり貫いたような悪の組織味が凄いアゴラ風の大広間だ。

あたしは偉そうなヨン様シートの左側に侍り、右側の一〇と対になるよう立っている。

D Jは例の虚化会得の準備に忙しいようで不在だ。個人的にちよつと気になるので後で見学に行こう。

さて、立て続けの原作シーン。何かとガバに縁があるあたしはいつもの舐め腐った態度を改め、慎重に様子を見守る。

あ、もちろん映像記録に残してますよ。

「さあ、成果を見せておくれ——我ら二十の同胞の前で」

いえすいえす！ いいですよヨン様、その台詞を言ってくれるとは流石オサレマスターだ。本誌でも凄い衝撃だったからね（なお）

「はい。どうぞご覧ください」

そしてクールに目ん玉抉って握り潰すグロキオラさん。パキンと発動した【共眼界】ソリタ・ウイスタのキラキラパウダーが広間一帯に漂い出す。

さて、桃ちゃん演技の出来はどうか？

…

…うん、よかった。流石に気を付けただけあって、問題の場面でもウルキオラが見ているのは浦原さんたちと戦うあたしの背中だけだ。途中かなりキョロキョロしているのは彼の探査神経ベスキスでもあたしの【白伏】の霊圧隠蔽を見抜けなかったということか。天才雛森ソウルは流石いい仕事をす——

(つて、ちょ…!?)

鬼道【牙気裂光】行使のため空に飛んだ雛森ちゃんのスカートがふわりと翻り、素晴らしい純白の三角形の一部がウルキオラの目に映っていた。

待って待ってあたしのパンツめっちゃちらちら見えてる！ やめて晒さないでお願いだから！ シロちゃんにもまだ見せたことないのに！ あと一〇はあたしの顔見て笑うな！

ちくしょう大恥だ。今後スカートは封印してキュロットにしな
きや…

「なるほど、それで彼をこの程度では殺す価値無しと判断したと言う
訳か」

そして優しくスルーしてくれるヨン様は隣の蛇野郎と違ってとて
も紳士。あたしの衣装替えの時もスルーしやがったけどオサレ空気
を作るスキルはやはりピカ一だ。

…もつとも性欲も服飾文化も無い破面たちにとつてもあたしの痴
態は些細なことのように、原作イベントは順調に進行しつつあった。
ついでに記憶も抹消していただけたらありがたい。

「——温いなア！ こんなヤツら、俺なら最初の一撃で殺してるぜ：
！」

この男の不遜さをこれほどありがたく感じた日は初めてだ。

みんなの視線が発言者、”セスタ・エスパイダー第6十刃”グリムジョー・ジャガー
ジャックの方へ向く。

「理屈がどうだろうが”殺せ”つて言葉が命令に入ってるなら殺した
方がいいに決まってるだろうが！」

「…同感だな。何れにしる敵だ。殺す価値はなくとも、生かす価値な
ど更にない」

「つーかヤミー！ てめえはボコボコにやられてんじゃねえか！ そ
れで”殺す価値なし”とか言っても”殺せませんでした”にしか聞

こえねえよ！」

グリムジョーの従属官たちも口々にウルキオラとヤミーを批難する。あとデイ・ロイくん、あなたそれなりにあたしと一緒にいたのにまたチンピラ臭漂う雑魚キャラに逆戻りしてるのはもう逃れられぬカマセの呪いなんですかね。

まあそんな低OSR値キャラにdisられたらそりやヤミーも怒るワケで。

「てめえ、デイ・ロイ：【共眼界】を見てなかったのかよ。俺がやられたのは下駄の男と黒い女だ」

「わかんねえヤツだな。俺ならその二人も一撃で殺すつつつてんだよ！」

「ああん？ てめえ如きが雛森さんの鬼道喰らって生きてる連中相手に勝てるワケねえだろ！ 雑魚はすつこんでろカスが！」

「何だと！ やんのかゴラア!?!」

デイ・ロイくんがよわよわ霊圧で威嚇しようとして頑張っている。それを鼻で嗤ってはじき返そうとヤミーが立ち上り、そこでウルキオラが二人を止めた。

「グリムジョー。藍染様が警戒されているのは今のコイツではなく、コイツの成長率だ」

「…ああ？」

よわよわデイ・ロイくんを越えてボスのグリムジョーしか眼中にないウルキオラ。デイ・ロイくん凄く傷付いてそう。

「確かにコイツの潜在能力は相当なものだった。だがそれは、その大きさに不釣り合いなほど不安定で…」

そこでチラリとあたしへ目を向けるウルキオラ。え、そこでこっちに振るの？

「…このまま放っておけば現世の連中の足を引つ張らせて共倒れを狙える可能性も、こちらの手駒に出来る可能性もあると俺は踏んだ」

彼の視線をなぞり、広間の破面たちが揃ってあたしに注目する。

あ、これはあれですか。一護の【牙錠封印】の桃色の霊圧であたしが彼に何かしていると気付いちやったパターンですか。

別に白哉の霊圧も似た桜色だしそんなみんなしてあたしを疑うのはどうかと思います。

まあ犯人はあたしとDJで合ってるけど。

「――黒崎一護は”死神の虚化”の実例です」

原作シーンの途中だが、ここで何も言わないワケにはいかないので、澄ました顔で情報を開示する。ちゃんと「実験体」ではなく「実例」と言う所が卑しさMAX。

「あの人は大虚メノスをあなたたち成体破面に進化させるのに参考にした研究対象の一人です。”死神の虚化”は失敗すれば非常に強力な虚となるので、ウルキオラの言う通り、自滅して現世の戦力を勝手に減らしてくれる可能性があります」

『…！』

おお、と感心する声上がる。だがすまん、そうはならない。

「…ですが仮に虚化の制御に成功すれば、強い力を手にして我々に挑んでくるでしょう。藍染様がウルキオラに”脅威たりうるなら殺せ”とおっしゃられたのは、黒崎一護がどちらに転ぶかをウルキオラなら必ず判断出来ると信頼しておられるからです」

「ありがとうございます、藍染様」

素直に礼を言うウル君いい子。戸惑いが無いのは、たとえ一護がどれほど強くなっても自分なら殺せる。そう己の力に自信があるからだろう。

そして苛立ち混じりのグリムジョーの懸念を、ウルキオラがオサレに両断する。

「――その時は、俺が始末するさ」

ああ、これこれ。これぞBLEACHですよ皆さん。もう織姫ちゃんにペラペラあたしの情報漏らしたこと許せるゾ、ウル坊。

またこのオサレさにはヨン様もご満足いただけただけで、いつもの

薄ら笑みでお言葉をくださった。

「…そうだな。それで構わないよ」

——君の好きにするといい、ウルキオラ。

丁寧な一礼を返し感謝の意を示す^{クアトロ・エスパーダ}第4十刃”。やはりウルキオラはヨン様の従者ムーヴをしてこそだ。これからも変わらずオサレな君でいてね！

「…チツ」

そしてしつかり「ぐぬぬ」なグリムジョーもいい感じた。ウルキオラをライバル視している彼は、とにかくウルキオラの為すこと全てが気に入らない男。同時にあたしもヨン様も嫌っているの
で、我ら三人が賛成した流れなら確実に反発し、原作通りシロちゃん先遣隊が空座町に来た夜に襲撃事件を起こしてくれるだろう。

もちろんガバは起こさせない。

ちゃんと決まった日に襲撃出来るように、当日はグリムジョーたちの周囲を自然な感じに人払いしておくつもりだ。ついでに彼らの回収を忙しいDJではなくウルキオラにさせ、あたしが奪ってしまった一護との因縁チャンスを用意すれば多少流れを原作ルートに引き戻せるかもしれない。

リカバリーも狙える素晴らしい作戦だ。

…ホントはあたしが行きたいけど、今シロちゃんに会うとなんかまたガバしそうなので、涙を吞んで我慢しましょう。ぐすん…

こうしてヨン様のニヤニヤ笑顔に見守られながら、着々と破面篇は進んでいく——

食事イイイイ！

「——と言うワケで買ってきました」

一護くん調査報告会も終わり、あたしは厨房で現世買い出しの成果を自慢していた。

虚化の準備に色々トラボで忙しそうにしていたDJもダツシユで駆け付けてくる。それほど虚^{ウエコムド}圏は食材や調味料が年中不足状態なのだ。

早速ロカを呼んで「反膜の糸」でコピーさせる。犯罪みたいだが、死神を現世の司法行政が捕らえて裁く法律も、食材を完全複製する行為を咎める法律もないのでこれは犯罪じゃない（断言）

「…雛森、ちゃんとオーガニック製品を選んだか？ 最近の現世の調味料は添加物ばかりで味が雑になるからな」

「ばつちりです。鳴木市のスーパーに専門コーナーがあつたので全種類まとめ買いました」

「ありゃ？ そやけどこっちの箱は駄菓子ばつかやね。桃ちゃんいーけないんだー」

「べ、別にいいじゃないですか。ロカさんの再現が終わったら市丸隊長も食べていいですよ」

元護廷十三隊長格三人が頭を突き付け合いながら段ボール箱三つをガサゴソ漁る姿は実にシユールだ。一〇なんか旨そうにパピコしゃぶってるし。だからコピーした後にしろって言ってんだろ！

「早速なんか作ってみませんか？ 量が多いのでオリジナルの傷みやすいものは早めに使い切っちゃいましょう」

「以前お前が作った豆腐ハンバーグは藍染様もお気に召した力作だった。私の鰯大根とレシピを交換してほしい」

「なんや、ハンバーグ言うたら合挽き肉やろ。桃ちゃん、ボクのはいつもので頼みますー」

ハンバーグと聞いて食材コピペ中のロカがピクリと反応する。以前から仕事のご褒美によくご馳走していたが、無感情キャラもやはりメシには勝てないようですね。

そう言えば現世で知ったけどヤミーも期待してくれているらしい。ウルキオラも破面になって口を手に入れたので食事に関心を持つてはるはず。

…あ、そうそう。その前にまずはヤミーの腕を治さないと。

「——【天挺空羅】」

「しれっと使いはるなあ」

この鬼道も慣れたものだ。丁度ロカがいるので腕を持って厨房まで来いとあの巨漢を呼び出す。ついでにウルキオラにもハンバーグを食べさせてあげよう。

しばらくして、食事の用意が出来たナイスタイミングで二人が現れた。霊子天国な虚^{ウエコムンド}圏ではあたしたち魂魄は飲食の必要はないが、旨いものは旨いのだ。テーブルに広げてビュッフエ式にいただく。

「どうですかウルキオラ、美味しいでしょう?」

「…これが、味覚…」

目を見開いて少しずつフォークを口に運ぶオサレ破面。実はこの食を提供することもウルキオラを勧誘した時に交わした約束の一つだったりする。本当は織姫ちゃんの手作りを初めてのご飯にしてウル織ばんざいしたかったが、あの子はメシマズ疑惑があるので断念。そしてメシウマ桃ちゃんの料理はどうやら良い思い出になってくれたようだ。よかったよかった。

…しかしすごい平和な光景である。ヨン様陣営の死神と破面たちがお皿片手に立食。まるであの破面篇完結記念のパーティー絵そのままでつい笑ってしまう。

そうだ、せっかくだしヨン様にもこの舐めちらかした空気を楽しんでもらおう。どうせ覗いてるんだろうし、あたしは厨房の監視装置に

豆腐バーグのタネを見せ「お届けします」のジェスチャーをする。和気藹々と美食を堪能するあたしたち裏切り者四人の姿を見たら護廷隊発狂間違いなしですよ、これぞ愉悦。

その後あたしは料理を載せたカートをコロコロ押しながらヨン様ラボへと向かい、ドアをノックし入れてもらう。

藍染隊長、桃ちゃんズ洋風豆腐ハンバーグの差し入れです。

「——懐かしい味だ。五番隊時代はよく君に作って貰ったね」

ご満悦なヨン様に桃ちゃんニツコリ。原作雛森ちゃんも料理上手だし、シロちゃんの胃袋を掴むために今世のあたしもかなりスキルを磨いたので時折隊のみんなに振舞っていたのだ。特にヨン様には色々協力してもらっているので一層真剣に作ったよ。

食後は現世で買ってきた農園直送SFTGFOP1等級の紅茶を淹れる。50グラム四千円近くする市販最高級の夏摘み新茶ダーズリンなので味わって飲んでくれ。

紅茶独特の豊かな香りに包まれ場が和んだので、少しきよろきよろラボを見渡して気になっていたことを尋ねてみる。二人きりだし多少核心的な話をして大丈夫だろう。

「そう言えば藍染隊長」

「何かな」

「研究室でなんかヘンな研究をなさっていると市丸隊長に聞いたんですけど、何してらっしゃるんですか？」

そう、またヨン様が暇にかまけて原作ブレイクムーヴをしそうなのだ。あたし提唱の臓器鍛錬で五十年かけて霊圧を上げていたのも驚いたけど、出来れば本誌のようなラスボスムーヴにももうちよつと情熱を注いでいただけたら…

「君のためだよ、桃」

「あたし？」

ヨン様がこちらのオウム返しに鷹揚と頷く。紅茶が好みだったのか少し機嫌が良さそうだ。

「君は未だ個として脆弱でありながら、既に魂魄の限界に到達しつつ

ある」

「…むう」

「恥じる必要はない。高みを求める者は皆何れはぶつかる壁だ」

【共眼界】ソリタ・ヴァイスタであたしの戦いを見て確信したのか、最近停滞気味なこちらの現状を突き付けてくるヨン様。

確かに日課の鎖結・魄睡いぢめや斬拳走鬼の鍛練で霊圧の伸びが少なくなってきたのは事実だ。死神としての限界が近いのはわかっている。

だが、精神の次元が異なる超越者としてあたしを見ている上司のヨン様はそれではご不満らしい。無茶言うな。

「藍染隊長は崩玉との融合で壁を越えようとなさってますけど…」

「ああ、だが恐らくあの少年の成長速度には追いつけないだろうね？」

「…ソリタコトナイデスヨ？」

紅茶の香りを楽しみながら、ラスボスがあたしの反応を見て薄い笑みを深める。なんかもう一護がこの鯽界の主人公だとか全部バレてそうで怖くて、せつかくの高級ティーを楽しむ気分が台無しだ。

…とにかくこの流れは精神衛生上よくないので軌道修正を試みる。

「え、えと。あたしが死神の限界を超えたら東仙隊長が計画中の虚化とかですか？」

「わかりきったことを聞く。こちらの役割は既に黒崎一護が担っているとも」

呆れるような溜息で否定するヨン様。

虚化が一護の役割…？ 原作ヨン様にとっての一護の役割と言えど、進化速度メーター”ではなかったか。

BLEACH本編で藍染が最後まで一護に鏡花水月をかけなかったのはちゃんと理由がある。

かねてより一護の凄まじい潜在能力を把握していたヨン様は、死神・虚・滅却師・完現術者の、この世に存在する全ての霊的な力の才能を持つ一護の成長速度と戦闘力を超えることが、崩玉を従えた真の超越者の証だと考えた。

つまりヨン様にとっての一護とは、よく言えばライバル、悪く言え

ば物差しや定規という扱いになる。だから鏡花水月をかけず、強さの指標として狂いが出ないよう洗脳しなかったのだ。

…はて。

となると先ほどヨン様が言った「そちらの役割」の正しい含意は虚化したライバルという意味になるのだが…

(それって彼が鏡花水月をかけてないあたしも一護と同じヨンのライバル兼物差しと言う意味に聞こえなくもないんだけど…)

チラリと彼の様子を窺うと、ニチャア…とか酷い擬音が聞こえそうな笑みはその美貌を台無しにしていた。

…おいコラちよつと待て！

「あ、あの藍染隊長？ あたしは少し人とは違う記憶があるだけの、ちよつと趣味が変なだけの凡人だって前も言いましたよね…？」

「面白いことを言う。それはこの私さえも遊戯の玩具とする君を示す言葉としては不適當だ」

「いや人^{あたし}をいつも玩具にしてるのはあなたですからね!」

あまりの言い様に思わず立ち上がってビシッと指を突き付ける。

全く、最近は何レ期なのか優しいことが多いヨン様だけど、やはりこちらをからかって遊ぶ雛森弄りの趣味は変わらないらしい。

あたしは確かに頭がおかしな部分もあるが、感性は一応マトモだと自負している。原作再現と愉悦趣味に命を懸けることを除けばごくごく普通の人間なのです。

ヨン様はそれを全て知った上で、やれ神だの軍団長だのライバルだのとプレッシャーをかけて慌てふためく女の子をいちめて愉しんでいるのだ。

ほら、玩具はどっちだ。

「…で、結局藍染隊長はあたしで何をしたいんですか？」

と、そんな風に脳内でぶちまけた自論を全部言い切つてやりたい

が、あたしは大人な雛森さんなので我慢する。代わりに尋ねるのは彼の真意だ。

元々原作雛森ちゃんは、死に物狂いの努力で正解未解放の副隊長になるのがやつとのリヨナキャラ美少女だった。この世界では臓器鍛錬という狂気と、ヨン様陣営の全面サポートがあつたが、やはりあたしの戦闘力はここが限界だと思われる。ブレソルで言う☆5Lv.100みたいなものだ。

東仙のような虚化破面化がダメなら限界突破の望みは薄い。一護みたいな血統サラブレッドじゃない純死神に残された他の手段なんて、それこそヨン様みたいに崩玉と――

…おいコラちよつと待て！（二度目）

「まさか、藍染隊長が研究してることって…」

顔が引き攣るあたしに口角を吊り上げるヨン様。

悦に浸るような邪悪な笑顔でそう宣言した彼は、楽しそうにあたしの空のカップに紅茶を注いだ。

「神に最も近い君で、何をしたい」か…そんなこと決まっているだろう」

――君が彼らに行っているのと同じことだよ、桃。

ふわりと立ち上るマスカテルの芳香に包まれながら、あたしはその白磁の底を彩る琥珀色が、まるで空虚な世界を自分好みの色で満たそうとしている藍染惣右介の意思に思えてならなかった。

その「彼ら」は誰を指しているのか、そして「君がしている事」とはどれを指しているのか。ヨン様の考えはわからない。

ただどあたしは一つだけ、自分が近い未来に関わることになる新たな原作ブレイク展開を把握できた。

――【速報】雛森桃（悦）、劣化崩玉×1で☆6覚醒の実装が決定す

る！

この日、錯乱したあたしは某ゲームの曜日クエスト報酬を求めてザエルアポロの研究室に浦原商店のような地下修行場を作らせる奇命を命じたが、当然強化石も崩玉もドロップすることはなかった。

ちなみに今年の空座町凧揚げ大会の景品も町内会の搦きたてお餅5kgだった。

運営ア！（無関係）

襲撃イイイイ！

「——今一度こうして麗しき軍団長閣下の指揮を仰げますこと、心より光栄に思います」

チャン一報告会と雛森桃（悦） ☆6実装から一夜明けた九月五日。グリムジョーの暴走を見据えて、あたしは先日の凱旋式よりオクターバ・エスパード”第8十刃”となったマッド科学者ザエルアポロに協力を要請した。半世紀近く重用しまくってる彼の報告はあたしの執務机ではなく、VIP席の窓際のソファアで受け取る事が多い。

「またあなたを”十刃”に迎えることが出来て嬉しいです。審査の際に見せて頂いた帰刃レスレクシオンの新たな奥義も、その、えと…し、神秘的でした…」

「ああ、これは失礼。女性には些か刺激が強過ぎるもので、僕としたことが配慮が足らず申し訳ございません」

「い、いえっ…悲願の成就おめでとうございますー」

言うんじやなかった、というか思い出すんじやなかった。

思わず太ももを固く閉じたあたしを見て、優越感といやらしさを滲ませた顔で謝罪をしてくる胎内回帰趣味ヘンタウイ。

いつもの甘いマスクの口角を吊り上げる鬼畜をこほんつと咳で注意し、本題に移る。

受胎告知ガブリエールはさておき。本人自身は極めて有能な科学者であるザエルアポロには、昨夜から自前の監視網でグリムジョーたちの動向に注意してもらっていた。

全ては大事な原作イベントをガバなく乗り越えるための準備である。

「…やはり”第6十刃”セスタ・エスパード一派に不穏な動きが見られます」

「予想通りね。監視報告ありがとうございます」

感謝の気持ちにあの高級紅茶を彼に振舞いながら、今後について詳

しく決めていく。

「いかがいたしました。随分と黒崎一護が…いえ、ウルキオラの選択が気に入らない様子でしたが、あれでは暴発も時間の問題かと」

「はい。黒崎一護の虚化問題を深化させたいので少ししたら現世へ行つてもらおうつもりです」

「…ほう、それはそれは」

ドロリと営業スマイルを崩して邪悪な本性を覗かせるザエルアポロ。まあ長い付き合いだからね、ワザとグリムジョーを暴発させたいこちらの意図は察してくれたでしょう。

「あの獣をこうも容易く使い熟すとは、流石は藍染様の随一の臣。感服いたしました」

「もう、人間きが悪いですよ。グリムジョーさんは自分の好きに行動出来る。あたしはそれを応援しつつ藍染隊長のお望みを叶える。みんなが幸せになれる唯一の方法だと思いませんか？」

「これは失敬。全く以ておっしゃる通りです」

含み笑いで同僚を嘲るこの男も大概な愉悦部だ。グリムジョーのような感情的な戦闘狂を心底見下してる彼ならば、きつと楽しんで任務に当たってくれるだろう。

そんなグリムジョーの誘導計画立案も一段落。続いてザエルアポロの直近の研究に関する報告を聞いていると、とある原作アイテムについての話題が出た。

「…ではそこらへはもう試験の最終段階に？」

「はい、上位^{エスパーダ}十刃^{エスパーダ}”クラス”の霊圧を持つ魂魄でも半日ほどなら拘束することが可能です。それ以下は無論、半永久的に」

「わあ、流石ですねっ」

ザエルアポロが語る新たな道具とは例の閉次元幽閉アイテム【反膜^{カハ・ネガシオン}の匪】のことである。これは本来もつと早く完成していたのだが、飛梅ちゃんのハッスルのせいですっかりお行儀がよくなった破面たちを処罰する理由がなくなり後回しにしていたのだ。

もつともただ凍結していたワケじゃなく、幾つか原作にはない機能

を付けさせている。

「遠隔発動装置と次元門の研究はどうです？ 軍団長権限で幽閉と解放を管理できたら治安維持の東仙統括官との連携が取りやすくて便利かなと」

「どちらにも既に完成しております。ただ残念ながら未だ実戦での使用機会に恵まれず…」

表情声色は残念そうだけど彼の目に不安はない。まあ作中最高峰の天才だし、相応のプライドを持つ彼がパトロン組のあたしに見せるほどのモノなら当然完成度は高いだろう。

「他でもないあなたの発明です。近々どこかで最終試験を行った後、採用させていただきます」

「よろこんで」

うん、こんなところか。あとは目ぼしい原作イベントの中からいい具合にコレを使ってもよさそうなものをピックアップすれば本採用だ。

(…何かなかったかな、近々起こる戦闘イベ)

少し思案したあたしはすぐに一つ思い出す。それは奇しくもザエルアポロが最初から介入を目論んでいたことのようなだった。

「ところで閣下、最終試験について僕から一つご提案があるのですが」「あら奇遇ですね。あたしもです——」

”第6十刃”^{セスタ・エスパーダ}グリムジョー・ジャガー・ジャックとその従属官は、かつて共に六体で最上級大虚^{ヴァエストロデー}を目指した中級大虚^{アジュールカス}の一党だった。

されど長い旅の果てにその道は途絶え、成長限界にぶつかった彼らは唯一進化の可能性が残っていた”王”たる青豹大虚・グリムジョー

に思いを託し、糧としてその魂魄を差し出した。

従属官の一人、デイ・ロイ・リンカーは一党の中で最初に進化の道が閉ざされた大虚である。

理由は蛮勇、短慮、自業自得。

その昔、一党がグリムジョーを“王”とする群れを結成する前。愚かにも彼に挑み体の一部を喰われてから、デイ・ロイは敗者の烙印を刻まれ大虚としての未来を失った。

以後進歩を続ける同胞たちとの差が開く度、彼の居丈高な振舞いは度を増していく。

風の噂を頼りに辿り着いた虚夜宮^{ラスノーチエス}で、藍染惣右介から進化の道を与えられてからも。気に食わない女上司に挑み、一党六人揃って治療室の培養液の中で目覚めたときも。

己の弱さを隠すような不遜な態度は、まるで剥き出しの本能を隠す虚の仮面^{ホロウ}そのもので、そんな皮肉な自分がデイ・ロイは心底憎たらしかった。

だがある日突然、燻っていた彼に転機が訪れる。

——あなたに特命があります。

ニコリとそう口にした者の名は雛森桃。以前グリムジョーと共に挑んで地獄を見た、彼らの直属の上司、軍団長^{ヘネラーリヤ}だった。

『あの弱そうな小娘が藍染様に代わる俺たちの指揮官だと?』

『情婦が主人様の力を笠に着てんだろ、ふざけやがって』

強いクセに相手の力に関係なく敬語でヘラヘラ接する女。舐められたら終わりの弱肉強食の世界で一切の爪を隠すその在り方は、されどその正体が明らかになるにつれ、眠れる獅子の如き畏怖となっていく。その変化の過程はデイ・ロイにとって未知に等しい驚天動地だった。

そんな彼女から与えられた任務は、現世のとある町——空座町の監視。

それも同じように謎抜擢された門番のアイスリンガーと共に、数匹の人間や虚の行動を逐一報告すると言う面倒なもの。

——何故そう生き急ぐのだ、デイ・ロイ……!

近い実力の同胞とぶつかり合う、初めての経験。

——わあつ、遂に見つけたんですかデイ・ロイさん!

圧倒的強者に己の努力を認めて貰える、初めての体験。

その初めてばかりの面倒な仕事、常に虚勢を張り続けていた彼の劣等感を解きほぐす一助となる。そんなこと当時の彼は想像もしなかつただろう。

報酬の再破面化でようやく人型となりグリムジョーの従属官に戻ったあとも、デイ・ロイはあのぬるま湯のような日々のが忘れられなかつた。

だからだろうか。

心機一転した己の新たな価値をグリムジョーたちに認めさせたくて、あの軍団長でさえ殺し損ねた敵のいる死地へ赴く彼らに「連れてけ」とせがんでしまったのは……

「——こんばんは、デイ・ロイさん」

ビクリと肩が跳ねる。

グリムジョーの極秘作戦に参加すべく人目を忍んで虚夜宮^{ラスノーチエス}を単独移動していたデイ・ロイは、恐る恐る後ろを振り向いた。

不味い。選りにも選って最も見つかつてはならない相手に見つかった。ザエルアポロがくれた解^{デスクレール}空の反応を消す道具を使う直前に遭遇するなど不運が過ぎる。

「め、珍しいっすね。軍団長サマがワザワザ見廻りなんてするもんじゃねえぞ?」

「ふふ、そうでもないですよ。こうしてこっそり忘れ物を届けるには丁度いい言い訳なもの」

軍団長・雛森桃がいつもの小娘らしい呑気な笑顔で縦長の箱を差し出してくる。訝しげに受け取り中を検めたデイ・ロイは、そこで思わず固まった。

「試作の【反膜の匪】です。本当はダメなんですけど、大筋の流れに影響が出ない範囲という括りなら、と自分を納得させられたので、あなたたちに渡しておきます」

女死神の言葉は耳に入らない。彼はただ箱の中に入っていた黒い物体の、その数に目を奪われていた。

六つ。

それは彼と、グリムジョー、ナキーム、イールフォルト、エドラド、シャウロンの——これから現世に襲撃にいく破面の総数と同じだった。

「出来れば手遅れになる前に配ってください。受け取って貰えなければ、あたしも潔く諦めます」

「あ、あなた…全部知って…」

「止めてもあなたたちの不満が溜まるだけですもの。今回はデイ・ロイさんのこれまでの働きに免じて目をつぶります」

ニッコリと微笑む雛森桃。相手の心が読めると噂されるほど聡い彼女のの前では、”第6十刃”のグリムジョーすらも踊らされるだけの弱者なのかもしれない。

自らの上司の底知れなさに畏怖しながら、男は観念の溜息を吐く。

「…わアったよ。あなたの肝煎りだっつって渡しとく…っす」

「はいっ、よろしくお願いしますね」

——帰ったら東仙隊長の怖ーいおしおきが待ってますから。

その忠告であの過激な秩序厨野郎の忌々しい顔を想起したデイ・ロイは、思わず現世襲撃をバックレようかと一瞬真剣に悩んでしまった。

デイ・ロイに「反膜の匪・改」を仲間の人数分渡した後。あたしは早速実戦試験の様子を観察…もといシロちゃん観察のために、ザエルアポロの研究室へお邪魔していた。

「…様子はどうです？」

「理想的な状況ですね。デイ・ロイが軍団長閣下と東仙統括官殿のお名前を出して説得したからでしょう。新たにエドラド、ナキーム、シャウロンの計四体の破面で実験出来ます」

無数の監視画面に六人の破面が映っている。どうやらグリムジョーとイールフォルトは「反膜の匪・改」を受け取ってくれなかったようだが、まあ問題ないだろう。グリムジョーは別に持たなくても大丈夫だし、イールフォルトは弟のザエルアポロが生殺与奪を好きなように出来るからね。

さて。試験は問題なさそうなので、あたしは逸る気持ちを隠しながら、お目当ての護廷十三隊の援軍・日番谷先遣隊の面々が映る画面へ目を向ける。

(…あ、シロちゃんだ！)

一瞬で澄まし顔が崩れてしまったが、あれから二週間も経っているのだから許して欲しい。貴重なシロニウム回収チャンスなので彼の雄姿をガン見する。

もちろん配った【反膜の匪】には特別に盗聴機能を付属しているのでもちろん配ったシロちゃんと戦うシャウロンのものを聞き取る。

『隊長とは素晴らしい。ならば私はアタリと言う訳だ』

『いいや。多分てめえが…一番ハズレだぜ！』

はああああああんカッコいい！ カッコいいよシロちゃん！

でもこんなオサレ台詞使っただけで限定霊印時はただの従属官に

ポコポコにされちゃうんだから可愛さまで完備してる！　もう無敵じゃん！　可愛いは正義！

ああ、あたしも行きたかったよおおおお——

だが葛藤している間も肝心のシャウロン戦は進んでいく。数値化された霊圧量が過去のデータと比較出来てとてもわかりやすい。

「これは……！」

そこであたしは驚きに頬が緩む。なんとシロちゃんの霊圧が上がっているのだ。

『ッ、流星は隊長格……子供とはいえその名を背負うだけのことはある……！』

『まだだぜ……！　行け【竜霰架】！』

おおっ！　限定霊印下でもシャウロン相手に戦いになってるよ！　原作だと完全に遊ばれてたのに！

これは「雛森イイイ！」のおかげですね、間違いない。一度巨大な挫折を経験したり、失ったものを取り返す希望を手にした者が凄く強くなるのはファンタジーの定番なのだ！

やはりあたしの見立て通り、シロちゃんは曇らせてこそ真の輝きを発揮する男の子だったんだね……（感無量）

「——軍団長閣下」

「待つて今いいとこ……！」

「デイ・ロイが死にますが」

「え、もう?..」

後ろ髪引かれる思いでそちらの画面を見ると、ルキアが一護といちやいちやしながら【袖白雪】でデイ・ロイを凍らせようとしていた。今気づいたけどちゃんと来てたんだルキアちゃん。恋次と更木隊の二人に乱菊さんもいる……って、いやそれより急がないとデイ・ロイが死ぬウ！

「あっあっ——て、【天挺空羅】！」

急いで伝達鬼道を詠唱しブウォン…と【反膜の匪】の遠隔操作装置を無事捕捉する。

あとはタイミングだ。早すぎたらルキアの名場面が中断され、遅すぎたら死んだデイ・ロイの魂魄が完全に霊子に戻ってしまう。

慎重に…

『——残念だったなア！ 地面を凍らせるその剣は俺の空中戦には対応出来ねえ！ ヒヤハハハ！』

うわダサ。あまりのチンピラ臭に二人で溜息を吐いてしまう。

「チツ、破面の恥さらしが…」

「げ、現世の監視任務は頑張ってくれましたよ…?」

一応デイ・ロイをフォローするあたし。しかし色々と彼らを支援していたザエルアポロ的には怒りさえ覚える迂闊さと醜さなのだろう。まあ気持ちはわかる。

そして…来ました、ルキアちゃんの名台詞！

『残念だったな。【袖白雪】は地面を凍らせる剣ではない』

『な、何だと…ぐああアアアツ！』

『この円にかかる天地の全てが——』

【袖白雪】^{そでのしらゆき}の氷結領域だ！』

うおおっ！ 準主人公さんの貴重な無双シーンが実現！ そして去らばだ我が部下デイ・ロイイイツ！

あたしは原作通りチンピラがルキアに瞬殺される瞬間をこの目に刻み込み…

さあ、今だ！

↑—起動↓

その瞬間。画面の中で砕け散ったデイ・ロイの死体の周囲に、あの黒い帯のような霊圧が展開した。

『何だ…あれは…？』

ルキアと一護の困惑の声をBGMに、ザエルアポロが別の画面を確認している。気になるあたしも一緒に覗き込むと、そこには無数の数字が目まぐるしく変化していた。規則性皆無でさっぱりわからない。「ど、どうですか…？」

「イレギュラーはありませんね。この僕の発明なので当然ですが」

澄ました顔で結果を教えてくださいくれるザエルアポロ。その言葉を反芻して息を呑んだあたしへ、念押しのような事実を勝気な微笑の天才破面が口にした。

——デイ・ロイ・リンカーの霊体因子を回収しました。

先遣タイイイ！

「――俺が行く」

その噂を耳にしたとき、日番谷冬獅郎は反射的にそう答えていた。

死神代行黒崎一護と成体破面アランカルの戦闘。逆賊藍染惣右介一派の襲撃を受けた現世の空座町へ阿散井恋次が援軍に派遣されると聞いた少年は、真っ先に同行を申し出た。

理由は無論、十二番隊からの追加報告だ。

――破面と現世戦力の戦闘中に雛森桃の霊圧を観測。

彼女の名を聞いてじっとしていられるほど冬獅郎は大人ではない。副官の松本乱菊と共に根回しを済ませた彼は見事正規部隊【日番谷先遣隊】を組織することに成功し、乱菊と恋次に加え十一番隊の班目一角と綾瀬川弓親、そして十三番隊の朽木ルキアの五名と共に現世へ赴いた。

任務内容は来たる藍染との決戦に備えた現地勢力との連携の構築と、敵の情報収集である。かくして敵と戦った当事者、黒崎一護の下へと六人が向かったのは当然の成り行きだった。

だが訪ねた黒崎邸で冬獅郎を待っていたのは、信じ難い悲劇的な事実。

「――雛森が、破面共を率いる軍団長……だと？」

「は、はい。敵の大柄な男の人が確かそんなことを言っていました……」

最も長く襲撃者と接触した一護の仲間、井上織姫の証言に先遣隊の面々は息を呑んだ。

雛森桃が破面共と関わっていた期間は、半世紀にも亘る。仮に例のヤミーなる破面の言葉が真実であれば、それはつまり……

「う……嘘だ、ありえねえッ！　だって五十年前っつたら――」

「私たちが霊術院生の頃ではないか……ッ！」

彼女の同期の恋次とルキアが驚愕に体を震わせている。

当然だろう。共に同じ校舎教室で斬拳走鬼の授業に出席していた学友が、まさかその同じ日に陰で宿敵たる大虚メノスの軍勢を率いていたなど。そんなこと一体誰が信じられると言うのか。

無論、それは雛森の最も近い人間だと自負する冬獅郎も変わらな
い。

「……ただの院生がそんなこと出来るワケないだろう。藍染の【鏡花水月】の能力さ」

「そ、そうツスよね！ あいつがそんなふざけたこと出来るワケがねえ！」

「大虚を従えるなどそれ自体が前例のないこと。如何に雛森が優秀とは言え不可能なものは不可能だ……！」

弓親の推理に口々に同意する恋次ら同期組。二人には友人を信じたい思いはもちろん、共に切磋琢磨するライバルだと思っていた少女に一人圧倒的な高みからずつと見下ろされていたなどと認めたくない矜持もあつた。

だが藍染の恐るべき演技力を知ってしまった彼らには「もしかしたら本当は雛森も……」という疑心を完全に掃うことは出来なかつた。

「——その【鏡花水月】ってのがどれほどヤバいのかは知らねえけど、井上は嘘なんか吐いてねえ。だけど俺も……あの人が悪人だとは思えねえ」

「二護……？」

その時、先日雛森と遭遇したもう一人の青年、黒崎一護が口を開いた。そして所々口籠りながらも述べられた彼の話は、己の常識と友情を疑いそうになっていた日番谷先遣隊の面々の胸にストーンと落ちるものだった。

——あの人は無理をして悪人を演じている。

たかが十六歳の人間の少年が感じた印象。それでも彼が可能な限り客観的な視点で語った彼女の姿は、放った強力な破道をワザと外す

など、節々で只ならぬ葛藤を感じさせる場面が多く見られた。

他にも破面たちの暴挙を叱りつつその怪我を労わるなど人の良さが垣間見え、実際に現場にいた一護と織姫の現世組は雛森桃に悪印象を抱いていない。

「…フン、悪人だろうが善人だろうが敵は敵だ。裏切り者は殺す。余裕があれば捕らえて四十六室が裁く。戦場じゃ剣に迷いが出たヤツから死んでいくんだ、腹ア括ったほうが身のためだぜ」

「そうだね。どんな理由があろうと尸魂界の敵となった者に我々護廷十三隊が慈悲をかけることは許されないよ」

無論、しかし彼らは素人の子供とは異なる護廷の猛者。十一番隊コンビの一角と弓親の冷静な意見こそが死神のあるべき姿で、隊長格や上位席位を持つ冬獅郎たちも当然理解している。

：それでも握った拳が震えているのは、雛森桃の行動の数々が——藍染と違い——彼女の変わらない善性を密かに伝えてくるからか。未だ雛森が尸魂界を裏切った事実を認められない者たちは、その無数に散りばめられた希望の断片をどうしても手放せずにした。

それが”迷い”なのだと理性では理解していながら…

「——これ以上はいくら考えても埒が明かねえ。今は次の襲撃に備えるぞで」

「隊長…」

重苦しい空気を掃わんと、冬獅郎は一時場を解散させる。彼自身も立て続けに雛森の暗い裏の姿を知らされて、既に理性の限界だった。「雛森をどうしたくとも、てめえが弱けりや全部絵に描いた餅だ。迷う暇があんなら敵の一体でも捕まえてみせろ。情報が増えれば取るべき手段も自ずとわかってくるだろうぜ」

『…はっ』

冬獅郎の言葉を聞いた部下たちの目に決意が宿る。そうだ、ここで悩んでいても何も解決しない。雛森の真意を知るには、遠く離れた彼女に触れられる距離まで近付かなくてはならないのだから。

「…忠言助かった、斑目三席。これで少しはあいつらの覚悟も定まるだろう」

黒崎邸を去ること少し。成り行きで乱菊と共に織姫の家に厄介になることになった冬獅郎は、十一番隊の二人へ別れ際にそう口にしていた。

彼の礼に少し意外そうな顔をする一角と弓親。

無理もない、冬獅郎が誰よりも雛森を連れ戻そうと必死なのは護廷十三隊で周知の事実だ。それでも二人の一步引いた視点を大事にしてくれるのは流石は隊長格と言ったところか。

「い、いえ。むしろ偉そうなこと言ってすみません、日番谷隊長」

「ああ、そうだな」

「…あ、え？」

だがそんな更木隊二人の困惑は見当違いである。

何故なら冬獅郎は最初から…

「斑目、次に俺の前で雛森について話すときは——」

たとえ味方であろうと「雛森を殺す」などと抜かした者へ明確な殺意を覚えるほどには、彼女を己の世界の中心に置いているのだから。

——もう少し言葉を選ぶことだな。

同日夜、アランカル破面軍襲来。

現世は空座町へ到着して息を吐く間もない敵との戦闘は、されど大切な幼馴染の情報を渴望していた日番谷冬獅郎の望むところだった。

アランカル・ウンデシーモ
「——破面N.O. 11シャウロン・クーファンと申します」

レスレクシオン
そう名乗った細身の長身破面を一騎打ちに持ち込み、共に卍解と帰刃の切り札を切った接戦。少年は辛うじて相手の実力に喰らいつきながらも己の弱さに臍を嚙んでいた。

十二番隊霊子観測所から送られた識別信号は橙。つまりコイツらは先日雛森に従っていたあの二体の成体破面より遥かに劣る霊圧の敵と言うこと。限定霊印があるとはいえこの程度の相手に苦戦してはいはいつまでたつてもあいつを救えない。

「…チツ、てめえ何者だ」

「はて、既に名乗りは交わしたはずですが」

「名前じゃねえ、格だ。ウンデシーモN.O. 11とか言つてたが、それはてめえが上から十一番目の強さつてことか。シャウロン・クーファン」

焦燥を抑えて情報収集を目論む冬獅郎。この手の不遜な輩は自らや自らの組織の強大な力をひけらかし、相手の動揺を誘い戦局を優位に立ち回る。あるいはその姿を眺め悦に浸ることを好む傾向にある。

「まさか。我々破面の番号は生まれた順番です」

「どうやらヤツもその一人だったようだ。発言を促そうと冬獅郎は構えを緩める。」

「わかりやすく言いましょうか。我々はまず、藍染様の崩玉により虚から破面へと生まれ変わり、その順番に応じてN.O. 11以降の番号を冠する数字持ちの1席を与えられます」

「…ッ、つまりてめえも、他の破面の数字も強さの序列は関係ねえつてことか」

「はい。もつとも——数字持ちヌメロに関しては、ですが」

含みを持たせる言葉に少年は眉を顰める。それを見たのかシャウロンが得意げに自らの組織図を開示した。

「我々”数字持ちヌメロ”の番号はN.O. 11以降。そしてその中から特に殺戮能力に優れていると選ばされた上位十名の者に与えられるのが、特別なN.O. 1からN.O. 10の番号です」

「…何？」

「彼らの名は エスパーダ 十刃”。我々”数字持ち”を支配する権限を与えられた最強の破面たる彼らの強さは——我々のそれとは別次元です」
冬獅郎は息を呑む。

これほどの力を持つ破面が別次元と形容する強敵など確実に隊長格以上、すなわち最上級大虚種 ヴァーストロード の破面に他ならない。

「そして更に言うならば…今、我々と共に一体、その”十刃”が来ているのです」

シャウロンが腕を開き、ある男——”第6十刃”グリムジョー・ジャガージャックの名を厳かに口にする。

…だが冬獅郎の意識が捉えたのは別の単語。井上織姫の言っていたその仰々しい地位の名を耳にした瞬間、少年は咄嗟に目の前の破面へ【大紅蓮氷輪丸】を振り下ろしていた。

その地位の名とは、グリムジョーにNo. 6の数字を与えた張本人たる——

ヘネラーリヤ
軍団長。

「なっ！」

「…やっと聞けたぜ、その単語をよオツ！」

感情に扇動され一気に巨大化する霊圧の猛吹雪。動揺するシャウロンの両腕を凍て付かせながら、冬獅郎は逸る感情を抑える努力すらせず一気に畳みかける。

”第6十刃”、その称号は軍団長 ヘネラーリヤ から与えられたと言ったなッ!?」
「ぐっ、この…！」

「吐いて貰うぜシャウロン・クーファン！ てめえの知るその軍団長の、雛森桃の全てをツツ!!」

直情的な攻撃も霊圧の暴力にかかれば達人の一撃すら凌駕する。後先考えずにがむしゃらな突撃を繰り返す冬獅郎の内心はたった一つ。

「逃がすかよ——松本オオツ！」

「ナイスタイミングです、隊長！」

そしてようやく、待ち望んだ中央四十六室の許可が下る。

——限定解除——

その瞬間、まさに爆発的と表して然るべき膨大な霊圧が空座町の上空に立ち上った。

冬獅郎の霊印に封じられていた八割もの力が暴風となつて周囲に吹き荒れる。桁違いの霊圧に茫然自失とするシャウロンの大きな隙を逃さず、少年は間髪を容れず一息に決定打を叩き込んだ。

「縛道の六十一・六杖光牢！」

「何ッ!? その鬼道は……！」

記憶の中に浮かんだあいつの小さくも大きな背中を胸に抱き、少年はこの術で全てを終わらせる決意で言霊を練っていく。

「知らんとは言わせねえぞ破面^{ブランク}！ てめえら虚上がりの連中が暴力以外の手段で死神の下に付くワケがねえ。この俺でさえ見抜けなかったあいつの霊圧に騙されて、てめえらの何体もコイツの世話になつたんだろ？」

「くっ……！」

「俺の前にこのこ現れた自分の不運を恨みな、シャウロン・クローファン。てめえが一番の……ハズレだったってな！」

——雷鳴の馬車……糸車の間隙

……光もて此を六に別つ！——

あいつが自慢気に「マスターした」と宣言してきた時の笑顔を幾度となく思い浮かべ、後述詠唱による完全出力の縛道を完成させる。

込めた霊圧の実に百倍の拘束力を発揮する、鬼道衆・一之組第三班班長を務めた雛森直伝の【六杖光牢】。身動き一つ出来ない状況を理解したシャウロンが、遂に観念したように肩の力を抜いた。

限定霊印下で苦戦しながらも、最終的にほぼ完璧な結果で勝利した冬獅郎。卍解を解いて捕虜の尋問を開始する。

だが…

「さあ、洗いざらい吐いて貰う——」

冬獅郎がその気配に気付いたとき、全ては遅すぎた。

発動時の霊圧を感じさせない独特の歩法で現れたのは、新たな破面。

黒髪に頭部左半分に鎧兜のような仮面の名残を残すその男は、シャウロンとは桁外れの存在感を放ちながら、無機質な翠の瞳で冬獅郎たちを見下ろしていた。

「ウ、ウルキオラ…？ 何故貴様がここに」

「軍団長のご命令だ。グリムジョーも撤退させた。引け、第6セスタ・フラシオン従属官」
ウルキオラ。

その名は確か黒崎一護らを襲った先日の襲撃犯の片割れ。発言といい、確実に虚ウエコムント圏で雛森と接点があるはずの上位破面だ。

石像のようなその男が腕を一振り。たったそれだけで冬獅郎の「六杖光牢」が崩壊する。

「なっ!?! ま、待て…ッ!」

「…くだらん」

即座に我に返り無言の始解で挑むが同じく一瞬で氷竜を吹き飛ばされてしまう。何とか隙を窺うも、シャウロン戦で大きく消耗している今の冬獅郎に黒髪の男の凄まじい霊圧を跳ね返せる力は残されていない。空しい制止の叫びが夜の空に木霊するだけだ。

「——貴様が日番谷冬獅郎か」

だが大虚特有の空間を引き裂く解デフスコレル空を開いた黒髪の破面が、そこでおもむろに口を開いた。

「…そうだ」

「軍団長、雛森様から貴様宛てに伝言を一つ預かっている」

「——!?!」

青天の霹靂。

伝言、それは世界さえ別たれた二人を繋ぐ確かな絆を頼った言葉。彼女自身では言えないほどの、それでいて少しでも早く伝えたい凄惨な思い。

そして破面の唇が紡いだ無感情なそれは、それでも最愛の少女の涙を伝えるのに十分な一言だった。

——あなたは、生きて。

「確かに伝えただぞ、日番谷冬獅郎」

「あ……」

声にも悲鳴にもならない、震える微かな吐息。それが黒髪の破面へ冬獅郎が返せた全て。

真つ白になった頭で、何度も何度もその言葉を反芻し、そして同じ数だけ彼の胸奥に絶望の刃が突き刺さる。

…なんだ、それは。なんで今、そんなことを言うんだ。

周り全てが藍染の毒に染まった世界で、あいつがそれを口にするのに、一体どれほどの覚悟と苦悩があったと言うのか。まるで今生の別れのような伝言に籠る彼女の悲愴な思いに圧倒され、冬獅郎は身動き一つ取れずにいた。

一瞥を最後に黒腔ガルガンタの奥へと消えるウルキオラとシャウロンの後ろ姿を唾然と見送りながら、恋する少年は去り行く二体を止めることから忘れ、ただひたすらその場で立ち尽くすことしか出来なかった。

狂蛭イイイイ！

「——ありがとうございます、ザエルアポロさんっ」

シロちゃん観賞会、もとい新アイテムテストが無事に終わり、あたしは色々と手を貸してくれた部下にニッコニコでお礼を言う。もちろんちゃんと観返すために録画はばっちり。すぐに自室に戻って誰にも邪魔されずに堪能したい。

が、まずは【カハ・ネガシオン反膜の匪】とテイ・ロイたちの話を終わらせよう。

「ナキームとテイ・ロイの復活はお任せください。魂魄の損傷が激しいエドラドとシャウロンは再生培養室で回復を行っております。ところで今後戦死傷する他の破面たちに関してはいかがいたしましたでしょうか？」

「今回の第6セスタ・フラシオン従属官の方々と同じようにお願いします。仮死状態を維持できるものはそうしてください」

「畏まりました」

頭を下げるザエルアポロにあたしも礼をする。これで原作イベントの再現と破面軍の再編が同時に可能となった。全員を復活させることは不可能だけど、近い将来にヨン様からニュー崩玉を頂けたら今より強大な軍団を結成することも夢じゃなくなるだろう。

：もう完全に自分の好き嫌いで千年血戦篇以降の原作ぶっ壊す流れだな、これ。

”ヴァンデンライヒ見えざる帝国”の皆さんには申し訳ないがOSR値が足りなかったということでご納得いただき、あたしは計画の肝であるザエルアポロに仕事の報酬を渡す。

「あなた専用の第二研究所を現世のアジトに開設いたします。既にあたしが色々を持ち込んでいるので、基本的な施設は半月ほど稼働出来るでしょう」

「それはそれは、格別の御慈悲を頂き感謝申し上げます」

キラリと目を輝かせるマツド科学者。もつともこれは報酬というより原作のマユリ様戦を見越したバックアップ的側面が大きい。声を落としヒソヒソ耳打ちする。

「虚^{ウエコムンド}圏である程度魂魄を再生させた破面たちの治療施設や、研究材料の保管庫として使用することをお勧めします。藍染隊長のお心次第ですが、あの人はおそらくここ^{ラスノーチエス}虚夜宮で防衛戦を行うおつもりでしょう」

「ふむ、最悪このラボが危険に晒される可能性があると?」

「【技術開発局】が虚夜宮に調査隊を派遣してきた場合少々面倒なことになります。備えはいくらあっても足りません」

少し顔色を窺ってみるが、意外とそこまで不機嫌そうではない。もしかしたら原作のように何かヨン様に嫌なものを感じて、万が一に備えていたのだろうか。まるで「遂に来たか」とでも言いそうな達観した表情だ。

「:閣下直々の御忠告です。最悪が起きる前提で用意致しましょう」

「すいません、パトロンなのに:」

「いえいえ、自分の研究所の安全まで閣下におんぶに抱っこでは破面の名折れ。それに貴女との取引はとても有意義なものですので、今後もどうぞ御鼻肩に」

ニコ、と屈託のない笑顔を浮かべるザエルアポロ。誰だこの爽やかなイケメン眼鏡。

しかしなるほど。あたしが彼にあげたものと言えば浦原さんの研究遺産や【ホワイト計画】のデータくらいだが、確かにそれほど大きな研究を行っている人は虚圏には今までいなかったはず。

初めての友好的な同業者との取引が嬉しかったのか。あるいは彼の研究に必要なものを色々支援して、尚且つその価値を評価してくれる雛森桃の存在は意外と大きかったのかもしれない。まあバカなあたしならヨン様と違って彼の得意分野を脅かさず継続的に頼つてくれるという優越感もありそうだけど。

いずれにせよ、少しザエルアポロの見方が変わった本日の桃ちゃん

であった。

「ではあなたの【反膜の匪】と【反膜再生】を正式採用いたしますね。おめでとうございますっ」

「光栄の極み、雛森軍団長閣下」

二年後にイキリまくる天敵の滅却師勢クインシーに虚圏軍の恐ろしさをわからせ隊のあたしはザエルアポロと固い握手を交わし、るんるんスキップしながら研究所を後にした。

…さあて、シロちゃん。

君の雄姿をリピート再生するからお姉ちゃんをもっともつと笑顔にさせてね！（三日月スマイル）

原作グリムジョー襲撃イベからヨン様に頂いた三連休が過ぎた九月十日。

あたしは三日間の【シロちゃん名シーン集】観賞でニチャリすぎて筋肉痛になった頬を回道で癒しながら、久しぶりに執務室の椅子で口リ&メモリがくれる報告書に目を通していた。

「――軍団長代理を務められた東仙統括官がグリムジョーを”十刃”から解任。新”第6十刃”に元破面N.O. 52ルピ・アンテノールを抜擢されました」

「グ、グリムジョーは東仙統括官に無断行動を咎められ罰として左腕を切断されました…」

蒼白な顔で先日の激おこぶんぶんDJの一件を覚えてくれる二人。藍染農園や料理環境整備などで本誌より牙が取れてるかとおもったけどそんなことなかったDJ。妙なところで原作再現が起きるもの

だ。見そびれたので後で録画を見させてもらおう。

片腕グリムジョーだけど、次の現世襲撃イベントで万が一強化チャ
ン一に殺されそうになったらあたしが早めに反膜ネガシオンで回収しよう。平
子戦まで持つてくれたら万々歳。

おっと、侍女破面たちのことを忘れないように。

「ロリさん、メノリさん、報告ありがとうございます。そろそろお二人
とも人型の生活にも慣れましたか?」

「あ、は、はい…」

「それは何よりです。近々藍染隊長の下へ再派遣したいと思いま
すが、いかがでしょうか?」

彼女たちのリハビリのため一時的にあたしの秘書にしたけど、もう
ヨン様の侍女にしても大丈夫だろう。二人も納得しているので手筈
を終えてヨロシク! ロリちゃんよかったね!

そしてあたしは溜まっていた執務を虚夜宮の鬼道の太陽が傾くま
で続けた後、日課の斬拳走鬼の鍛錬のために席を立つ。しかし専用練
習場へ向かうその途中、あたしの霊圧感知が妙な気配を捉えた。

(藍染隊長と市丸隊長…それに東仙隊長の霊圧?)

原作ヨン様陣営の魑魅魍魎三人衆が練習場に集結している。まさ
かのあたし一人だけハブとはこれ如何に。

凄く気になったので【白伏】と【曲光】で気配と姿を消し、そおつ
と様子を窺う。戦闘モードの浦原さんすら感知出来ない鬼道コンボ
だ。

入り口からのぞき込んだ練習場には、ヨン様とその前に斬魄刀を掲
げて跪くDJ。そして少し距離をおいて二人を眺めている一〇とい
う奇妙な図式が作られていた。

何だろう、騎士授爵?

だがあたしの疑問はすぐに氷解する。ヨン様が懐から小さな玉を
取り出し、直後巨大な光を放出させたのだ。

(ああ、あれが東仙要の虚化か…)

ここまでくればもうわかる。斬魄刀とDJを包んだ光はしばらく

して徐々に収まっていき、現れたのはいつもの彼の姿だった。

見た目に変化はない。だが感じる霊圧が大きく増えている…気がする。

ふむ、確かに壁を突破した感があるな！（当てずっぽう）

「——こんにちは皆さん。お邪魔してもいいですか？」

ハブられ桃ちゃんはいなかったみたいなので、あたしは普通にみんなの中に入っていく。振り返るヨン様一〇の顔も平常そのものだ。DJは自身の変化に夢中らしく気付いていない。

「やあ、桃。休暇で羽は伸ばせたかな？」

「はい、ありがとうございます」

まあ伸びたのは羽じゃなくて口角なんですけどね。ついこの三日のクセで頬をむにむにしたらヨン様にニヤと笑われた。シロちゃんフェスティバル、満喫しましたとも。

「なんや、桃ちゃんも気になって見に来たん？ ボクも途中参加なんやけどギリギリで間に合ってたん」

「そうだったんですか。さつき大きな光が見えましたけど…それって以前から東仙隊長が準備してらした虚化ですか？」

チラリとDJを見ると、早速刃禪で【清虫】と対話している。どうやら原作通り破面の帰刃アランカル レスレクシオンと同じ斬魄刀の解放で完全虚化するタイプらしい。

アニ鯽ではワンコ隊長とかなり死闘を繰り広げてたけど、原作漫画だと普通に一方的に倒してたから仮面の軍勢たちよりは完成度の高い”死神の虚化”であるはずだ。

「さあ要、見せてくれ。君の新たな力を」

「ッ、畏まりました…！」

自分の帰刃の本質が理解出来たのか、震える声で東仙が解号を唱える。斬魄刀の構えは【清虫終式・閻魔蟋蟀】と真逆の、切っ先が下だ。

…さあ、来るぞ！

「清虫百式——」

グリジャル・グリージョ
—— 狂 枷 蟋 蟀 ——

瞬間。

砂嵐のようにざらざらした膨大な霊圧が噴出し、東仙の体が闇に包まれた。昔のザエルアポロのような凄まじい迫力に思わず息を呑む。

そして漆黒の霊圧が六つの肢、二対の翅に凝固し、遂にその怪物は完成した。

—— リイイイイン……

それは宛ら、巨大な蠅か似我蜂か^{ジガバチ}。真つ黒の体毛に覆われた肢体に、頭全体に被さる不気味な白い複眼。新たな力を解放した東仙要は、まさに邪悪と形容する他ない姿と霊圧を放つ異形の蟲へと生まれ変わった。

うん、本誌やア二鯽でも見たけど……めっちゃキモい。

『——オオ』

そんな正直な感想を抱いていると、帰刃DJが複眼を見開こうとしていた。あたしは慌てて一〇にアイコンタクトを送り共に彼の視界から離れる。やはり東仙が人生で最初に見るべき人物は、長年仕えた最高の主、藍染惣右介であるべきだ。

『お、おオおオ……！ 見える……見えます——藍染様！』

目の前のヨン様を凝視し震えるDJ。感動的なシーンなのだけど、人間の三倍はある巨体の黒い毛むくじやらかな虫がぶるぶる痙攣している姿が全てを台無しにしている。

そしてそれをいつもより嬉しそうな顔で見つめ返すヨン様はもうなんか流石です。

「ああ、私が君の主……藍染惣右介だ」

『おおお…貴方様が、私の…!』

およそ二百年越しの悲願。地面に平伏し顔を拝む従者と、優しげに微笑む主人が作るエモくて素敵な空気を醸し出す二人。

よかったねDJ。でも今の自分の姿は精神衛生上永遠に見ない方がいいかも。

あたしが何とも言えない微妙な気分になっていると、ふとヨン様が視線を奥の一〇へと向けた。それを追ったDJが、同じく初めて長年の同僚、市丸ギンの顔を見た。

『…君が市丸か。銀髪に狐目の胡散臭い男、あまりに想像通りで少し驚いたぞ』

「いやア、流石は似非盲目疑惑で有名な東仙さんですね。瀟靈廷で編集長なんてやってましたし視界なんていらんとちゃいます?」

『ああ、その減らず口はやはり市丸だな』

なんか知らないけどバチバチ火花を散らしてるヨン様唯一の副官と腹心。この二人は原作でも殆ど絡みがないから鯉フアンの間で不仲説が出回ってたけど、まあ合わないよね。

でも実は一〇くん、DJの作る和食はかなり好みなのあたし知ってるもん。ツンデレかな?

そしてしばらく睨み合っていた従者コンビが、どちらともなく首を横へ向ける。その先にいるのはあたし、雛森桃だ。

『……』

「ど、どうも…」

数歩先にいるくっそデカくてキモい黒い虫にジイイ…と見つめられ思わず後退りそうになるが、何とか我慢する。DJも好きでそのビジュアルになったワケじゃないのだ。他人の身体的特徴をdisるのは失礼、あたしは礼儀を知っているいい子な桃ちゃんである。

何とか笑顔を維持するあたしだが、しかし何故かDJの様子がおかしい。しばらくこちらを凝視していたが、不意に辺りをキョロキョロしはじめ、最後にヨン様の方へ視線を戻してしまった。

『…藍染様、雛森はどこです?』

意味が分からないことを言うDJ。この場にあたし以外の女なんていないでしょ、本当に見えてるの？

「…え、今思いつきり目が合いましたよね？ あたしですよ、あたし」
『嘘を吐くな、雛森がお前のような純朴可憐な少女であるはずがなからう。女は化粧で化けると言うが普段からそうしているのか？』
「チーク以外すっぴんですけど!？」

「——ぶふおツツこらあかん！ こんな耐えられへんわ…！」

なんて失敬な！ DJのヤツ普段あたしにどんなイメージを抱いてんだよ。この雛森フェイスは作中最高峰パーフェクト美少女に決まってるダルルオ!？」

憤慨するあたしの横で腹抱えて草生やしまくりの10は後でめる。それよりDJが未だにあたしを見て顎を垂らしたままなのはホント何なんですか。変わらぬ暗黒微笑のヨン様を見習え！

飛梅ちゃん、二人とも燃やしていいよ。

「びつくりやろ東仙さん、ボクも初見のとき三度見せなあかんかってん」

『莫迦な…こんな娘がああ狂った愉悦趣味の変質者だと…？ いや、成程確かにこの容姿では誰も本性に気付けない…』

「東仙隊長いつもあたしのことそんな風に見てたんですか!？」

虚化の影響か、何だか普段以上に純粹というか赤裸々に内心を曝け出してくる東仙要。何てことだ、DJは何も気づいてない正義厨の天然さんじゃなかったのか…！

『逆に聞くが日番谷冬獅郎を掌の上で転がし悦に浸る者を表現するに”悪女”以上の相応しい単語があるのか?』

「ホンマあの子以外には至極まともなんよね。余計にタチ悪いわア」
「ううっ…」

どうしよう、同僚の男共が正論すぎて全く反論できない。しかしそれでもDJの桃ちゃんdisは理不尽だ。

「で、でも藍染隊長も愉悦の美学に堪能じゃないですか。あたしだけ責めるなんて酷い…」

『何を勘違いしている、雛森。私はお前を責めているのではなくお前の容姿と本性の差異に驚愕しているだけだ。我らの中で最も藍染様のお役に立っているお前を責めたことなど一度もないよ』

「そこで優しくしたってさっきの暴言は誤魔化せませんか!?」

前言撤回、やっぱり天然じゃないかDJ-KANAME！ 悪意が無ければ人が傷付かないとでも思っているなら大間違いだぞ。後ろで笑い転げている一〇と違って憎めないから余計に始末に悪いのだ。全く、あたしはただシロちゃんの曇り顔に魅入られてしまった哀れな女の子なのに。理解してとは言わないけどせめてマイノリティとしての人権くらいは尊重してほしい。

好き勝手言われて悲しくなってきたので愉悦部同士のヨン様に慰めて貰おう。藍染隊長、二人があたしを虐めるんです…

「気にしないでいい、桃。高きに座す者の定見を狂気と判断するのは、凡人の無意識の自己防衛だ」

「藍染隊長っ…!」

ああ、理解者つて素晴らしい。ロリや原作雛森ちゃんなら幻想受胎するレベルの素敵なイケメン王子様オーラで微笑んでくれるヨン様。同士スマイルは嬉しいけど、その笑顔は確実に情緒知らずな女破面たちに毒なので使いどころだけは気を付けてくれ。

ところで”高きに座す者”つて何ですか？（小声）

「…あの双匣の丘の大嘘、一部だけ真実になってんとちゃう…?」

笑顔で見つめ合うあたしとヨン様を眺めて、そうぼそりと呟く一〇。

しかしだね、市丸くん。”雛森桃が強者のジレンマからヨン様にながっている”と言う嘘が真実になることの一体何が悪いのか知らないけれど、その懸念はそもその前提が間違いなのだ。

あたしはシロちゃんが曇って輝いてくれたら何でもいので嘘も真も好きに利用するだけよ、うふふ…

その後DJの【グリジャル・グリージョ狂枷蟋蟀】の試運転もかねた練習相手に立候補したあたしは、無理やり一〇も巻き込んだ三つ巴の死闘激闘の末に二人とも飛梅ちゃんの歓喜の正解で爆破した。

女心を傷付けた罪は重いのだ。

滅火イイイイ！

時は二十年前に遡る。

かつて純血滅却師エヒト・クインシーの黒崎真咲こと一護マツマに虚を寄生させる【ホワイト計画】において、あたしは幾つか原作進行の布石を打った。その一つが、尸魂界離反後の最大の敵となる山本総隊長の【流刃若火りゅうじんじやつか】対策に用いるデータ収集だ。

布石より実験と言った方がいいかもしれないが、この時に集めたデータは志波一心こと一護パツパが持つ炎熱系斬魄刀【剗月えんげつ】の卍解に関するものだけではなく、彼と戦った改造最上級大虚ヴァーストローデホワイト自身の戦闘情報も含まれている。

あたしがあのととき危険を冒してまで浦原さんに姿を見せたのはパツパの義骸に霊子接続装置を埋め込む以外にも、寄生したホワイトからこの戦闘情報を記録した霊子媒体を回収するためでもあった。

そして一護パツパの卍解情報とホワイトの戦闘および研究データを集めた理由は、当然、あの原作キャラを作るためだ。

「——」改造破面”…ですか?」

そして時は戻り原作時間軸。ヨン様とDJ、そしてザエルアポロという虚ウエコムンド圏全頭脳がラボに集結していた。

ちなみにあたしも強制参加である。

「そうだ。浦原喜助の崩玉と大虚メノスの破面化アラシカルに関するデータが揃った今、ようやく流刃若火を封じる改造破面の作成に取り掛かれる」

——君たちはその素体となる最上級大虚ヴァーストローデを用意してくれたまえ。

そんなヨン様の命令が下り、早速準備に取り掛かる天才たち…とおまけのあたし。

ヴァストローデ
最上級大虚作成はホワイトくんの成功例があり、斬魄刀の能力封じは【ホワイト実験】の前段階【テンタクルス実験】で成功している。この二つの応用で炎熱系斬魄刀の能力を封じる強大な潜在能力を秘めた個体を作り出し、その潜在能力に崩玉の力で”炎の封蓄”という指向性を持たせて破面化すれば、あの対流刃若火破面——ワンダーウィス・マルジェラが完成するはずだ。

「ベースはホワイト同様に死神の魂魄だ。ただし今回は例の数名を除き、総隊長と同じ炎熱系斬魄刀の所有者のみを素体にする」

「極めて都合の良いことに”炎の封蓄”に必須の空間系の斬魄刀保有者が牢に幾人かいますからね？」

「ああ。全くとんだ偶然もあったものだな、雛森？」

「：イヤーホントデスネー」

DJとザエルアポロの意味深な視線から逃げながら、あたしはアローロニーロの【喰^{グロトネリア}虚】の霊性データをロカえもんの【反膜の糸】で再現する。これは融合した魂魄の能力全てを十全に発揮させることを期待したもので、炎熱系や空間系の斬魄刀保有者の護廷隊席官たちに加え、テンタクルスくんのクローンも加えている。

こうして完成した改造最上級大虚^{ヴァストローデ}を連れて、崩玉の調整を終えたヨン様の元へ行く。周囲の霊子からヘンな影響を受けないよう殺気石膏でぐるぐる巻きにし、ついでにオサレな逆三角錐のガラスカプセルに入れたら準備は終わり。

「実に良い出来だ。流石だね」

『はっ』

ヨン様にお褒めの言葉を頂き、見学者が揃ったら破面化の開始だ。

ちなみに原作再現のため”^{エスパーダ}十刃”たちに集結を命じたら普通に十名全員来てしまった。あれだね、本誌でゾマリとかは映ってなかったけどみんなコマ外にいただけなんだね！（目逸らし）

集まった破面たちの前でヨン様がお得意のオサレ解説をしてくれる。

みんなもありがたく拝聴しなさいよ。OPBに必須な能力解説や挑発に使える言葉選びの貴重なお手本なんだから。

「…崩玉の覚醒状態は五割。予定通りだよ——尸魂界にとつてはね」この自然な大物感を感じさせる言い回しとバリトンイケボはいつ聞いても耳が幸せになれる。あたしの可愛い雛森ボイスでは難しいけど、台詞以外でも声の抑揚とかいつも参考にしています。

「崩玉を直接手にした者でなければわかるはずもない。そしておそらく、崩玉を開発してすぐに封印し、そのまま一度として封を解かなかった浦原喜助すらも知るまい。封印から解かれて睡眠状態にある崩玉は、隊長格に倍する霊圧を持つ者と一時的に融合することで…ほんの一瞬、完全覚醒と同等の能力を発揮するということだね」

多くの鰐フアンのヨン様パワーの指標となっているあの有名な「隊長格に倍する霊圧」台詞だ。なおこの世界ではあたしのガバのせいで倍から更に上がっているのはご愛敬。

崩玉が霊圧を高め始めたので、あたしはしっかりとヨン様の隣にくつつき改造破面の様子を見守る。おう崩玉、あたしの望みも叶えるんだよあくしろよ。

崩玉がうねうね触手を伸ばしてヨン様と融合し、DJの虚化と同じような強い光が瞬いた直後。改造大虚から霊圧の爆発が起き、一人の金髪の男破面が姿を現した。

「…名を聞かせてくれるかい？ 新たなる同胞よ」

おお、凄い。周囲の心を反映する崩玉の意志にお願いしたからか、ちゃんとあたしが望んだ原作通りの姿になっている。

そして静かに顔を上げたアホっぽい出っ歯の青年が、たどたどしく、彼の持つべきその名を口にした。

——ワンダーワイス・マルジェラ。

さて。ワンダーワイスが破面化したら早速次の原作イベント、もとい第三次現世侵攻の準備に取り掛かろう。

メンバーは新”第6十刃”のルピと、最古参の一人のヤミー、片腕で”十刃落ち”になったグリムジョー、最後にワンダーワイスの計四人。

この侵攻作戦は毎度のことながら複数の意図があり、その一つがワンダーワイスのスペック確認だ。

桃ちゃんプロデュースの【ホワイト計画】で培った技術を中心に作った改造破面だが、実際にあれが原作と同じ方法だったのかは最早誰にもわからない。その差異を知るためにも今回の侵攻作戦はかなり大事だ。

「最も大事な」炎を体内に溜め込む”能力は崩玉が叶えたので、残るは個体としての最低限の戦闘力。流石に山爺を直接倒せる力はないし、霊圧も破面化前はホワイトくんほどじゃなかったから、まあ誤差の範疇だろう。

…前座の真白ちゃんと元祖69が死んだら困るので山爺以外には本気を出さないようヨン様に【鏡花水月】をかけて貰おうかな。

「——ウルキオラ、入ります」

「どうぞ」

そしてもう一つの作戦目的が、これからウル君が携わるヒロイン井上織姫の勧誘だ。

勿論原作通り、彼女は更木剣八や卯ノ花烈などの化物隊長をここ^{ウェコムド}虚圏に誘い込んで幽閉するための囿である。

もつともこの世界のヨン様は剣八も卯ノ花さんも本誌の彼ほど脅

威に思っていないようなので、作戦の主導権はある程度あたしが握っている。ザエルアポロのラボを移転させたりと、原作展開を進行させつつ千年血戦篇を見据えた戦力保持計画に絶賛利用中です。

そういうワケで、これから我々はBLEACH名シーン再現の要石となる織姫ちゃんを拉致らなければならぬのだが、これはウル織ファンなら絶対に外せない。ただでさえウル織は供給不足気味なのだから頑張らないと。

「ウルキオラ、あなたに井上織姫の勧誘任務を命じます。黒崎一護ら現世勢力に”攻撃に対する防衛”を除き、一切の手を出さないことを条件に味方に引き入れるのです」

「畏まりました、軍団長」

全くウルキオラめ。せっかくあたしが前回のグリムジョー回収の際に織姫ちゃんの近くへ行けるよう取り計らったのに、声も交わさずに帰ってくるなんて。

まあ、それでも彼の【共眼界】ソリター・サイズタにはシロちゃんの近くにいた彼女と一瞬チラツと目が合うシーンが映っていたので、原作よりは二人に縁がある感じに仕上がっている。ウル坊の本心はわからないけど、少なくともあたしが「織姫ちゃん面白いよー」と何度か伝えたおかげで興味は持ってくれてるようだ。

「彼女の勧誘の際、この腕輪を渡して一晩の猶予を与えてください」
「これは…」

「ザエルアポロさんが開発した最新の隠密装備です。これで井上織姫に”知人の一人へ秘密裏に別れを告げる”ことを許し、その後彼女を回収して藍染隊長への謁見を行います」

ウルキオラが暫しの思考の末、あたしの意図を理解したのか静かに頭を下げる。何だか愉悦趣味的だけど原作ヨン様も彼に教えてたからセーフ：だと思う。まだ織姫ちゃんの純粋な心を受け入れることは出来るはずだ。

あたしは一ルキ派だけど、別に最後はオサレ師匠が決めた一織ENDで構わない。ただあの一ルキやウル織の尊みを本誌より多めに摂取したいだけなのです。

だから頑張って織姫ちゃんといチャイチャイしてくれ。

「いいですねウルキオラ。井上さんはあたしたち魂魄と違ってか弱い人間の女の子なんですっ」

「…はい」

「彼女の力は我々にとつてとても重要です。ですが人間と言うだけで破面たちに様々なやつかみを受けるかもしれません。なので”十刃”で最も理性的な一人であるあなたに井上さんの身辺警護と身の回りのお世話をお願いしたいのです」

「畏まりました」

「特に心身のケアは大事ですからね？ 辛く当たったり…は少しだけにして、時々体調や気持ちを気遣う言葉を送って優しくするのがいいでしょう」

「お任せください」

わお、この見事な”俺やらされてます”感。

即答だけど、普段の君を見てあたしは一体何をどう安心すればいいのかさっぱりだ。

…と言うかよく考えたらウル織はそんな和気藹々とした空気じゃなくて、もっと殺伐とした看守と捕虜的な関係から織姫ちゃんの健気さと気丈さにウルキオラが興味と苛立ちを覚えて始まった複雑なカップリングだったはずだ。互いの信念の違いで衝突しながらも、そこに仄かに惹かれ会う男女の姿を幻視した読者がトウungk…するのであり、普通の恋人未満な距離感の二人を見て楽しむのはなんか違う気がする。

うーむ、やっぱり何も言わずに二人の時間を増やすのがベストかな。ひとまずウルキオラにさっきのアドバイスはあたしの勘違いだから忘れろと命じ、代わりに重要ワードを口にする。

「ウルキオラ。以前あたしが井上さんについてお話したときのことを覚えていますか？」

「…はい。軍団長が、ヤツは俺の”心の水先案内人”…だと」

ああ、それは覚えてたのか。無表情なりに意外と織姫ちゃんと接することを楽しみにしてるのかな？

ならば余計な言葉は不要だろう。最後に一言だけウル坊の背中を押して、後は部下の自主性にお任せします。

「余計な知恵は必要ありません。あなたの好きになさい、ウルキオラ」

——彼女ならきつと、あなたの目に新たな世界を映してくれるでしょう。

ニツコリと微笑むあたしに、ウルキオラは少し悩むような無表情で一礼した。

そうだウルくん、女の子は男の子が真剣に苦悩する姿に「力になりたい」ってキュンとくる生き物なのだ。だからあなたの葛藤もウル織世界には必要不可欠なのよ。頑張ってね。

「——ああ、そうそう」

「…?」

「井上さんに与える一晩の猶予の時には、彼女の能力の起点、六花のヘアピンは取り上げてください」

…許せ一護。本誌通りに織姫誘拐から彼女の【双天帰盾】で僅か一日で復活して虚夜宮へ突入されてはウル織ラスノーチエスの熟成期間が少なすぎるのだ。

二人の時間を作るために、あなたには原作より長めに寝てもらおう！（ぐう畜）

桃玉イイイイ！

グリムジョーの独断現世侵攻から早一月が経った十月。あたしは尸魂界に残してある隠密虚ホロウの情報網からルキアと織姫があちらで特訓を開始したとの報告を受けた。

ヒロインの織姫ちゃんが心置きなく現世を離れたということとは、チャンーも無事仮面ヴァイザードの軍勢で虚化訓練を始めたのだろう。あちらの”仮面のあたし”はしっかりと主人公をサポートしてくれているように何よりだ。

これでこちらも第二次「雛森イイイ！」計画の準備に集中できる。あたしが目指す最高のものは、原作雛森ちゃんのように鏡花水月下のシロちゃんに後ろからぶっ刺されて、これまでの裏切りを謝罪しながら「大好きだよ…っ」と言い残して彼の腕の中で死ぬ（or 仮死状態）パターンだ。もちろん肝心のシロちゃんの曇り顔を見逃さないように、魄脈停止状態で十五分くらい意識を維持する回道技術は習得済み。

だが折角のクライマックスを最大限堪能するにはそれだけでは足りない。回道に注意を割かれては本末転倒である。

そこであたしは自室の寝室に閉じ籠り、協力者と密会することにした。相手は最近倦怠期のマイヒロインにして魂の相棒——飛梅ちゃんだ。

「というワケで、有事の際にはあたしの代わりにあなたに鬼道を使ってもらいたい。斬魄刀は死神の半身だし、ダメかな…？」

『…鬼道系斬魄刀とは別に斬魄刀が鬼道に堪能だと言う意味ではないのですが』

久しぶりの具象化だからか、聖体さまが不機嫌でおられる。先日のDJ一〇あたしの乱戦では卍解大盤振る舞いで大喜びしてたので、多分拗ねてるフリだけだろう。カワイイやつめ。

と言っても別に卍解会得以後ずっと具象化していなかったのではない。生涯のパートナーなのでしつかりとあたしの趣味嗜好を理解してもらおうと色々洗脳：げふんげふん、布教を行うときにごうして呼び出しているのだ。未だ道半ばだが、あたしの半身だけあって筋はいいと思う。既にその兆候は見えてるしね…

「あたしの斬魄刀なんだから飛梅も鬼道の才能があるはずだわ。目指せ二人で二重黒棺！　もしくはあたしが戦いながらあなたが回道で癒すツーマンセル！」

『そんなことが可能なら既に鬼道衆が研究されているはずでは？　斬魄刀の本体を用いた並列思考なんて、如何にもあの者たちが考え付きそうなことではありませんか』

「鬼道衆は始解が使える人少なかったわよ？　多分鬼道ばかり使うから斬魄刀が拗ねちゃってるのね」

『…その気持ちをご理解してくださいのならもう少し私を使ってくれませんか？　双匣の丘である生意気な氷蜥蜴を下すときもお気に入り【黒棺】で済ませるなんて、全く…！』

飛梅ちゃんがぷいと拗ねながら「ヤツに目にモノ見せてやりたかったわ」とボヤいている。その話は来たるべき護廷十三隊とのOPB決戦のために温存するとご納得いただけただけはずなのだが：多分シロちゃんの慟哭姿を見てウズツと来ちゃったんだろう。気持ちはわかる。

あたしは飛梅ちゃんに愉悦部に加入してもらうため、暇なときに彼女に秘蔵の「シロちゃん成長記」をよく見せていた。もちろん最初はあたしがシロちゃんをからかったり茶化したりしているライトないじりシーンからスタート。そこから少しずつ、人が誰でも持つ”いたずら心”を洗練させ、最終的にはあたしと同じ”愉悦心”へと墮としていく計画だった。

ところが飛梅ちゃんが目覚めたのは確かに愉悦心ではあったものの、その矛先がシロちゃんではなく彼の斬魄刀【氷輪丸】に向いてしまった。冰雪系最強と豪語する彼(?)の話はシロちゃんから聞いており、そんなイキリ斬魄刀を鼻で嗤いながら「いつか”わからせて”

あげます」とステキなドS笑顔を浮かべるような子になっちゃったのだ。

やったぜ。

『うふふ、前回の隊長格公式模擬戦での勝利があの子の顔を立てる私たちの慈悲だったと知った時：ヤツは一体どんな顔を見せてくれるのかしら』

「わー悪い顔」

衣類の袖で口元を隠すニチャ梅ちゃんは順調に育っているようだ。アニ鰯でも毒舌で中々エグい性格してたし、何よりこのあたしの魂の半身なのだからいずれ主人すら超える愉悦部員になってくれるでしょう。

「でもあたしはあなたと一緒にシロちゃんの曇り顔を観賞して盛り上がりたかったなあ。竜の表情とかよくわからないし…」

『確かに宣戦布告の時に貴方の幼馴染が己の非力、即ち己の斬魄刀の非力を恨む姿はとて滑稽で愉しめました。今度はこの私が直々にそれを引き出してあげます、いいですね?』

「わ、わかってるってば」

何度もあたしに念押ししてくる飛梅ちゃん。あの離反時に卍解どころか本気の始解披露も出来なかったことを余程根に持っている様子。安心したまえ、全ては空座町決戦で初卍解ボーナスを獲得するためのオサレ伏線なのだよ。

「とにかく決戦までまだ少しだけ時間があるし、簡単な鬼道にチャレンジしてみましよう。もしかしたらあなたの更なる力になるかもしれないし…多分【氷輪丸】は出来ないと思うからあの斬魄刀の度肝を抜けるわよ」

『…そ、そう言うことなら早く言ってくださいっ。早速始解して精神世界へお越しください、直ちに修行を始めましょう!』

「…相変わらずチョロくて心配だわ」

本体を現実呼び出すのと同じ意味を持つらしい卍解とは異なり、始解時の精神世界は斬魄刀の世界であるため時間は無限だ。あたしの魂はそのままだけど、飛梅ちゃんを鍛えるにはこれ以上の環境はな

い。
やる気も出してくれたようだし、見込みがあればすぐにでも本腰を入れて特訓しよう。

まあ飛梅ちゃんの愉悦対象である【大紅蓮氷輪丸】は完成したらちゃんと全斬魄刀中最強クラスになるから、彼女の愉悦の火種を守るためにもあたしはもっと強くなる必要がある。

二人で末永くシロちゃん氷輪丸コンビ相手に愉しめるように、飛梅ちゃんの修行の後は、死神としての限界に達してしまつたあたしの魂魄を☆6に覚醒させましょう。

そろそろヨン様に進捗を聞きに行こうかな…

「——あ、そっか。寝室で飛梅と今後の愉悦イベントについて相談してたんだっけ」

気が遠くなるような精神世界での飛梅ちゃんの鬼道修行を終えたあたしは、最早懐かしさすら感じる自室のベッドから体を起こし「うーん」と伸びをする。やはりあたし自身の魂魄に変化はない。残念ながらこの方法で精神と時の部屋修行をするのは不可能なのだろう。

「でも飛梅ちゃんが成長したからいいもん」

『成長というか裏技というか…理想とは異なりますが、一応実戦使用に耐えるものではありませんね』

互いに声が嬉しそうなのは、つまりそういうことである。

結局単独では鬼道を使えなかった飛梅ちゃんは、色々と実験を重ねた結果、何と強引にあたしの分の魂と合体することであたしの鬼道を

好きに使えるようになった。ただ厳密にはあたしの魂を使っているだけなので、以前飛梅ちゃんが言っていた”並列思考”と似たようなものだと考えたほうが良さそうだ。

魂の合体と聞くとちよっぴり「あたし自身が梅焰になることだ…」が出来たのではと期待したが、普通に違つたらしい。あれは志波家の斬魄刀のみの技である可能性が有力だし、そもそも飛梅ちゃんを失うのは嫌なので覚えても使わないけど。

さて、無事あたしがシロちゃんの号泣顔を眺めながら飛梅ちゃんに魂魄の生命維持をお任せする…という完璧な愉悦堪能環境を作るための手段を確保したので、残る最後のピースを手に入れに行こう。

行先はもちろん、ヨン様の下だ。

「——待っていたよ、桃」

副官の一〇が側を離れる深夜。あたしは事前につつそりヨン様に【天挺空羅】で用件を伝え、彼のラボへお邪魔していた。夜に紅茶はあれかなと一応ハーブティーも持って来たけど、不要な心配だったらしい。どんだけこのダーズリン気に入ったんだよ…

「ギンが崩玉研究について嗅ぎまわっていてね。この先に入るには少し工夫が必要なんだ」

ラボの最奥の隠し扉を開き、二人で中へと進む途中。ヨン様の雑談に気になる話題が出た。

「あの人って卯ノ花隊長みたいに鏡花水月の違和感を感じ取れるんですか?」

「それくらい出来ずにこの私を倒せると考えるほど、彼は愚かではないよ」

「…そう考えると無策で挑むつもりは護廷十三隊である意味凄いですね」

原作で一〇が一人でヨン様暗殺を目論んだのも護廷隊の無能が原因説、あると思います。

しかし、やはりヨン様はもう完全にあたしが一〇の裏切りも全部知っている前提で話してくる。ならばこちらでもDJのこととか聞いてみたいけど…彼があレスレクシオンの帰刃で目が見えたときのヨン様の笑顔を思うと聞くのは無粋かな。

悶々としている間に、あたしはヨン様に連れられラボの秘密区画へ辿り着いた。怪しい赤紫の照明が”如何にも”な悪の組織の研究所感をアピールしている。

そして。お目当てのソレは、部屋の最奥の無機質な台座に鎮座していた。

「これが…」

「ああ、そうだ」

——君の崩玉だよ。

どこか楽しそうにそう口にするヨン様。自信作なのだろうか、彼の冷たい瞳には珍しく嫌味のない素直な優越心が滲んでいるような気がした。

じつと見つめた崩玉は、ヨン様の瑠璃色のそれとは異なり、桜貝のような白桃色をしていた。あまりの美しさと謎の親近感にいつまでも魅入ってしまいそう。

「桃。君は崩玉とはどのような物質だと思う？」

啞然と玉の瞬く輝きを見つめっていると、横からヨン様がそんな問いを投げかけてきた。このまま胸中に渦巻く複雑な感情を吐き出したけれど、何だか動揺を悟られるのも悔しいので深呼吸して心を落ち着かせる。

「…藍染隊長は以前は”魂魄間の境界を操る”ものだとおっしゃってましたよね？」

「その通りだ。以前の私は、ね」

あたしの答えに満足そうな笑みを浮かべるヨン様。どうやら既に崩玉の本質に気付いていたらしい。

そして語られたヨン様の推理は概ね、というかほぼ原作の彼が一護
パツパに語ったものそのままだった。ヨン様崩玉も浦原崩玉も共に
不完全で、二つを一つに合体させることで初めて完成したというこ
と。崩玉の力が本当は”自らの周囲に在るものの心を取り込み具現
化する能力”であること。崩玉の中にはその取り込んだ心の持ち主
を導く意思らしき思念が存在すること…

「浦原喜助が崩玉の破壊に失敗したのも、平子真子らが仮面ヴァイザードの軍勢と
なったのも、全ては浦原自身がそれらの事象の消滅を惜しんだから
だ。もし彼が貴重な研究サンプルを人道的な理由から放棄するよう
な者であれば、”天才”浦原喜助はこの世に誕生しなかっただろう」
「…まあ見方を変えれば、浦原喜助は朽木さんを無理やり人間にして
崩玉を隠そうとしたり、何も伝えずに十五歳の人間の子供たちを尸魂
界へ送り込んで自分の尻拭いをさせようとしたりする人ですからね。
あたしたちとの違いなんて、自分の悪事を綺麗に見せようとする意思
があるかないかくらいじゃないですか…？」

完全に開き直っている我らクス共の熱い同族嫌悪はともかく、こう
いう「よく考えたらコイツヤバくね？」的な底知れなさこそが浦原喜
助の最大の魅力である。彼は霊圧は普通だが、その頭脳と発明品でO
PBはもちろん千年血戦篇のNTBまでも制している作中屈指の才
サレ強者なのだ。

もつとも、ヨン様は彼のような優等生ぶつてて周囲の弱者に配慮し
自分に制限をかけてるタイプの強者が大嫌いだ。

「ああ、そしてだからこそ彼の崩玉は完成しなかった。周囲の不評を
買い、個として孤立することを恐れた浦原喜助は、崩玉の完成に必要
だった”大量の死神の魂”を採取出来なかったのだ」

「…そう言えば何で死神の魂が必要なんですか？」

ふと気になって聞いたあたしの疑問に、ヨン様がニヤリと笑う。

「崩玉は周囲の心を取り込み、それを具現化する。その有様は、我々死
神ととてもよく似ていると思わないかい？」

「…え、まさか」

思わず台座の崩玉を凝視する。

「気付いたようだね。崩玉の完成に必要なのはただの霊力や整^{プラス}、虚な
どの魂魄ではなく、無数の死神の魂魄でなければならなかった。なぜ
なら数多の種族の中で、死神だけが——斬魄刀という己の魂を現実に
具現化させて戦う種族だからだ」

ヨン様の説明が脳に浸透するにつれ、あたしの顎は限界なく垂れ下
がっていく。

そんな。だって、もし、もしそうなら。

この異常な親近感も、崩玉の中に渦巻く淡い桃色の光の正体も、全
て…

「この崩玉は私の崩玉とロカの『反膜の糸』で器を作り、そして浦原喜
助とザエルアポロの義魂技術で生み出した無数の君の義魂で育まれ
ている。君の心でしか覚醒しない最悪の失敗作にして…」

——君のためにのみ存在する、最高傑作だよ。

まるで藍染農園の収穫を終えたDJのように爽やかな笑顔で、とん
でもないあたしの尊厳破壊行為をしれつと暴露するヨン様。

【速報】雛森桃の魂魄、勝手にコピーられ増やされ崩玉のエサにされてい
た模様…

悦魂イイイイ！

クローン人間。

宗教や倫理的善悪の一大議論として有名で、神への反逆、命に対する冒瀆と叫ばれる生物学上のタブーの代名詞だ。しかし同時に臓器移植やクローン兵士など、犠牲損失を避けられない事柄における合理的な解決手段として理解されており、極めてわかりやすい二元論的ジレンマを抱える問題でもある。

その単純明快さからよく創作物語の題材になり、現実的なSFホラーとして広く認知されている永遠のテーマだ。

そして今。

あたしの目の前に、その数多あるクローン創作物の中でも最も残酷な部類の研究によって生み出された、生命冒瀆の血晶がおぞましく輝いていた。

「——靈性技術の限界と言うべきか、義魂に一定以上の靈力を発現させることが出来なくてね。どの魂魄クローンも最大で君の二割程度の力しか持ち得なかった」

いつもの薄ら笑顔のヨン様が明かす、ハガ○ンの賢者の石より邪悪な崩玉製造方法。シスターズ妹達もかくやな雛森クローン計画。

だが完璧主義なヨン様はそれでも満足しなかったらしい。不完全な雛森クローンを完成させるために、彼は更なる禁忌に手を出していた。

「靈性技術で発現出来る君の靈圧は二割。その壁を超えるには発想の転換が必要だった。例えば——最初から不完全な五つの魂魄を別々に構築し、改めて一つに結合させる、などの工夫がね」

「…え、それって」

「君ならばわかるだろう。万人がその支配に甘んじる虚空の主、靈王の魂魄性質を崩玉の力で強引に再現させたのだよ」

最早絶句以外の表現はない。つまりこの男はあたしのクローンどころかエクゾデ○アを造っていたのだ。

靈王すら超える究極の尊厳破壊に晒されたあたしは、放心したまま視線を彷徨わせ：

「——どうした？ 顔色が悪いぞ」

過去最高に愉しそうな笑みを浮かべる藍染惣右介の姿を見た。

「え……」

「らしくないな、桃。君の魂魄はあのと看ときは違い塵芥ではなくなつたはずだ。何故そうも怯えた目をしている？」

細まる瞼の隙間に輝く虎眼石の瞳が、嗤っていた。これはヨン様があたしをいじめようとしているときの悪い目だ。

：やはり彼があたしに崩玉を造ってくれた理由には、善意と悪意の両方が含まれている。

開いたままだった口を閉じ、素早く思考。ヨン様があたしをいじめるのはいつものことだが、今回のはからかいの範疇を超えた規模だ。つまりこれは遊びではなく——

(…挑戦)

そう、ヨン様はいつだって自分を支配しようとする者の打倒を目論む無限の向上心を持った人物だ。そんな彼が自らを”物語の道化”と喩え、同時にこの世界で好き勝手しているあたしを”神”と呼んでいる。

「…あ」

そこであたしは思い至る。

もしかして、この崩玉を造ったヨン様の真意こそが、彼の言う”あたし神”への挑戦なのではないだろうか。

クローンを生み出してあたしの自我認識を揺るがしつつ、さらにそのクローンをヨン様が心底愚弄する霊王と似た状態に落とし込み、最後にそれらを巨大な利益をもたらす崩玉の創造手段とする。

”道化”の身で神を辱め、そしてそんな無礼を受けた神が、代償に最高のメリットを差し出されてどんな反応を見せるか観察しているのではないだろうか。

「…むう」

思わず頬を膨らませる。あたしが抱いた感情は無数にあれど、行き着いた思いはたった一つ。

なんて下劣で、そして…

——なんてオサレな挑発なんだ…！

あたしは今、自分では発想すら浮かばなかった方法で、逃げ場まで用意された完璧なマウントを取られているのだ。これほど手を尽くされた精神攻撃をオサレと言わずになんと言う。

ていうか、クローンの存在があたしの自我崩壊に繋がる恐怖とか、クローンたちを犠牲にあたしの崩玉が完成した罪悪感とか、そういう感情が全部ヨン様に仕組まれたと知ったせいか、なんか一気にどうでもよくなってしまった。それが逆にヨン様に救われたような気分になって余計に敗北感を感じる。

くっ、凄い悔しい！

「…、これでいい気にならないくださいね…っ」

ふん、流石はヨン様と言っておこうか。今回は素直に負けを認めてやる（震え声）

でも悔しいのでキツと彼の顔を睨み付けると、怯むどころか代わりにキラリと輝く白い歯を見せ付けられた。うぎぎぎ…！

かくしてオサレマスター藍染惣右介に精神的敗北を喫した哀れな桃ちゃん。

…だがヨン様の真の快進撃はここからだった。

「…約束？」

理解が出来ずオウム返しで問う。

「私は君の義魂が全員揃ったとき、彼女たちを一堂に会させ、そこで一つの真実を教えた。それまで自分こそが雛森桃だと錯覚していた彼女たちの、己の正体と誕生理由をね」

そんなえげつない余興をさぞかし愉しんだのだろう。自分のクローンたちの悲劇を想像してまたグロッキーになるあたし。

だがヨン様の話には、例の「約束」とやらの繋がる続きがあった。「人と言う存在は社会的生命体でありながら、己の個に執着する。事実、君の義魂たちも己が模造品であることを知ってかなりの動揺を見せた——自らの誕生理由を知るまではね」

「…え？」

あたしの口から困惑の音が零れる。

「桃、君はオリジナルだ。ならばこそ、彼女たちの望みに誰よりも早く気付き、そして理解出来るだろう」

何だそれは。クローンの望みなんて絶望し死を望むか、創造主を恨むか、あるいはオリジナルになり替わるか。どのみち悲劇的な結末だ。

自分が紛い物だと知って、しかも生まれた理由がオリジナルを強化する崩玉のエサになるためだと知ったら、あたしだって…

…

…まっつて。ちよつとまっつて。

「全く、君は本当に私を飽きさせない子だ。あの時ほど人と神の違いを明確に観測出来たことはない。実に面白いひと時だったよ」

「いや、いやいやいや」

思い出しているのか、どこか呆れを滲ませるヨン様の含み笑い。

おい、嘘を吐くな。流石のあたしも自分がクローンだと知ってそつちを優先することなんてできないぞ。できないはずだ。でき…

「…で、できないよね？」

そして対するヨン様の答えは、そのいやらしい笑顔が全て物語っていた。

「彼女たちが私に望んだ対価は一つ」

「まってやめてききたくなああい！」

そんなあたしの無駄な足掻きに掻き消されることなく、ヨン様が明かした犠牲クローンたちの最期の願いは、あまりにあんな内容だった。

——君と共に日番谷冬獅郎の慟哭を観測するための、意識の保持だよ。

…シロちゃん。

どうやらあたし、あなたの曇り顔を見るためなら、本当に命どころか自我すら喜々として捨て去るマジもんの狂人だったようです。

つていうかクローンたちが望んで崩玉になったんだつたら動揺してたあたし完全にピエロじゃん！

ちくしょう、ヨン様めえ…！

編成イイイイ！

” 桃ちゃん、s崩玉”で桃玉とふぎけて呼んでいたものが本当に桃玉だったと明かされた後、あたしはまたもや自室で相棒の飛梅ちゃんと二人会議を行っていた。

『…これが問題の崩玉ですか』

「100%あたしの霊圧、というか魂魄で出来てるみたい。義魂クローンだけど」

『確かに感じます。本当にこんなことが…』

話だけはしておいたが、いざ実物を見ると驚くだろう。魂魄などの霊圧の強弱で格が定まるような次元の物質ではない。反膜ネガシオンや拘突こうとつのような理の領域にある存在。それが全て、あたしたちの霊圧で構成されているのだ。

『正直…以前貴方が話してくださいました虚化ホロウや劣化崩玉のような得体の知れないモノを魄内に入れるのは嫌だったので、これならば私も不満はありません。流石は藍染惣右介と言ったところでしょうか』

「…飛梅ちゃん、二重の意味でチョロいなあ」
『?』

ウキウキ可愛い飛梅ちゃんもご納得頂けたようなので、早速本題に移ります。

そう。新たに手に入れたこの”無数の雛森クローンの命で作られた崩玉”という最高のシロちゃん曇りアイテムを、如何にしてより良い「雛森イイイイ！」のために生かすか。それが今回の会議の論点である。

「本来の計画では入ってなかった新しい切り札だからね。使い道は慎重に決めないと」

『…あの、そもそもこの崩玉つて死神の限界を超えて強くなるためのものですよね?』

「うん、強くなったりキモくなったりしてシロちゃんを曇らせるためのものだよ?」

『……そうでしたっけ? そうでしたね』

「飛梅ちゃんが首を捻っているが、実際今のあたしは霊圧なら既に目標の一〇レベルに到達しているので個人的にはもう満足している。」

もともとヨン様はあたしにもっと強くなって欲しいみたいだし、飛梅ちゃんが二年後も氷輪丸相手にドヤ顔マウントを取り続けるにはこのままだと不十分。そういう意味ではやはり桃玉と融合し更なる力を望まなくてはならないだろう。

話がズレたので軌道修正。

とにかく。崩玉との融合は決定事項として、本番の空座町決戦でどんなムーヴをするかが問題なのだ。

ここで当初の愉快案を紹介しよう。

あたしはまず、最早ヨン様に従う道しかない悲劇のヒロインムーヴで護廷隊に挑む。そのまま湿度高めのオサレムーヴで無双し、鬼道で無力化したシロちゃんに止めを刺そうとして「出来ません…」と戦意が挫ける演技をする。その流れでヨン様の「失望したよ」で一度斬られてリタイア。

そして護廷陣営がブチ切れてヨン様(偽)を袋叩き、からの鏡花水月下のシロちゃんにお腹を貫かれる原作展開を再現し、最後にシロちゃんの腕の中で「ごめんね…大好きだよ…」と言い残して死ぬ。

最高の「雛森イイイイ!」が期待できる完璧な愉快計画だ。

『だからどうして死ぬ必要があるのですか! 傷付く程度なら目を瞑りますがそれ以上は絶対に許しませんッ! 私の気持ちも考えて…っ!』

「わ、わかってるってば…ごめんなさい」

顔を真っ赤に怒る飛梅ちゃんへ頭を下げる。後先考えず普通に死ぬつもりだった転生当初とは異なり、飛梅ちゃんとの絆が出来、一護に強化ホワイトを仕込み、ヨン様に巨大な借りが出来た今、あたしは簡単に命を捨てる事が出来なくなった。

ということとで計画の見直しが必要となり、どうせならここへ新たに手に入れた桃玉を加えて、人の姿からどんどん醜い怪物へと変貌していく更なる絶望イベントをプラスしてしまおう。

「どうかな、飛梅？」

『…ダメとは言いませんけどあまり美しくない変化は止めてくださいね。あの東仙のように気持ち悪くなるのは絶対に嫌…ッ！』

DJ、こんな可愛い女の子に気持ち悪いとか言われて可哀想。

しかし気持ち悪い要素が嫌いなんだったら、あたしのグロ堕ちヒロイン(?) 参考リストは全滅だ。まあダクソのエルドリッチは部下のアーロニーロと被るし、DODの女神フリーアエは上級者向けすぎてシロちゃん廃人になりかねないからね。

腹案のブラボの再誕者や、森の食人族ミュータントも嫌がられそう。無数の雛森桃の集合体的な感じがしてエログロオサレなのに。うーん、困ったな。

退廃的神秘性がある美しい異形…

「月光蝶…じゃなくてオオミズアオみたいなのもダメ？ 蝶とか蛾って蜘蛛の巣にかかる囚われのメタファーだし、ボロボロの翅を崩玉にお願いしたらそれっぽくなると思う」

『…蝶々なら、まあ』

渋々了承する飛梅ちゃん。むふふ、ホントはちよつと興味があるのあたし知ってるもん。

だが崩玉ヨン様も蝶蛾の翅があるので、共通性を残しつつ独自路線を探す感じになるだろう。女のあたしのほうが似合いそうなのはちよつと内緒だ。

さて、桃玉を生かす肝心の悲劇のヒロインムーヴである。何かいい案はないだろうかとしばらく二人で悩み、悩んで…

そしてあることを思い付いた。

「明日の現世侵攻で破^{アランカル}面たちをあたしが回収しに行つて、そのときシロちゃんの前で突然苦しそうに胸を押さえたりするのはどうかな。

体の異常を仄めかして、雛森桃の身に起きている最悪の展開を想像させるの」

『段階を踏んで少しずつ崩玉融合のことを明かしていく…ということ？』

「そうそう。やつぱりいきなり化物化するとシロちゃんが混乱して、せつかくの絶望の純度が下がっちゃう気がするのよね」

俗に言う「伏線を張る」だ。これがあるのとないのとは心構えが違ってくる。

もつともこの方法は諸刃の剣で、飛梅ちゃんも同様の懸念がある様子。

『難しくないかしら…？ やりすぎると危機感を煽ってあの子が虚夜宮まで貴方を追って来てしまいますよ？』

「藍染隊長に頼んで鏡花水月で山本総隊長を操れば問題ないわ。もしくは浦原喜助と十二番隊を抑えて物理的に虚^{ウエコムド}圏に來れなくするよ」

それでもこつちに来てしまったなら致し方ない。ハリベルに対応を任せて原作マッチアップを再現し、頃合いであたしが彼女を回収して一緒に空座町へ行けばいいかな。

シロちゃん、ちゃんと現世まで追い駆けて来てね…！

そしてあたしの体の異常（笑）の伏線を回収する、空座町決戦。

あとは完全に全てを諦めた絶望ヒロインムーヴで八つ当たりのように飛梅ちゃんと二人で大暴れして、満足したら当初の愉快案に沿って死んだふり。「雛森イイイイ！」を堪能し、ヨン様が無双してる途中でこつそり鳴木市のアジトへフェードアウト出来たら大満足だ。

『…あなたが生きてさえいたら私もそれで構いません。変化のタイミングは戦闘中に少しずつ進行させる形に？』

「そうね。後はあたしが苦戦するようなら、その時に一気に深化が進む感じがオサレかな。桃玉と融合して強くなりすぎたら演技で力を隠しましょう」

『…氷輪丸は私が正々堂々いたぶって潰しますからね。鬼道はお控えください』

「ご心配なく。でもシロちゃん本人には手加減してよね」

こうして漠然とだが、無事今後の方針が決まったあたしたち。

この戦いで生き残ることを決めた以上、他にも色々やるべきことが増えてくるだろう。これからは更に気の抜けない日々が続くそう
だ。

さあ、愉悦計画第一陣に、明日の原作イベントで愉悦の種をばら撒くぞ！

もつとも、まずは”再誕者”と聞いて『変化それにしろ！』とはしゃいでいる桃玉の雛森クローンたちを宥めるのが先だけど…

十月二十九日、早朝。

原作時空における第三次空座町襲撃作戦が行われる日がやって来た。

作戦の主目的はウルキオラが井上織姫と接触するための囮だ。既に彼には断界だんがいへ向かう準備をさせており、あたしは尸魂界の注意を引くための主力メンバーを執務室へ呼び出した。

「——任務内容は三つ。一に現世戦力の再確認、二にワンダーワイスの戦闘試験、三に別動のウルキオラの支援。特に浦原喜助と、彼の支援を受けた仮面ヴァイザードの軍勢の情報は最優先で集めてください」

『はっ！』

集まった四人の破面たちに作戦を説明する。今回は前のグリムジョーの独断専行とはワケが違う。ワンダーワイスを含め、全員が”

エスパーダ
十刃”級の霊圧の持ち主だ。

「ワンダーワイスさん、あなたは浦原喜助を担当してください。ただし、斬魄刀の解放は厳禁です。ルピさんとヤミーさんは他の敵を倒しつつ、ワンダーワイスさんの支援に回れるように可能な限り気を配ってください」

「あーお」

「りよーかーい！ 軍団長さん♡」

「任せてくれ、雛森さん」

ワンダーワイスの反応がアレだけど、彼は命令はちゃんと聞くので不安はない。初顔合わせなルピは中々ウザそうでいいキャラしてる。そしてヤミーの舍弟感はなんかも可愛くてズルいわ。

セスタ・エスパーダ
——”第6十刃”——

ルピ・アンテナ

——”第10十刃”——
デイエス・エスパーダ

ヤミー・ラルゴ

——”破面No.77”——
アラソカル・セテンタイシエテ

ワンダーワイス・マרגェラ

そして…

「おそらく、現世の仮面の軍勢勢力と遭遇する可能性が最も高いのはあなたです。黒崎一護と戦う時は背後に気を付けてください——グリムジョーさん」

「…はっ」

プリバロン・エスパーダ
——”十刃落ち”——

グリムジョー・ジャグ

以上四人が、第三次空座町襲撃作戦に従事する。あたしが原作シーン再現にお膳立てできるのはここまでだ。

「これは藍染様直々のご命令です。何かイレギュラーがあった場合はあたしが直接対応に向かいます」

『…!』

驚く一同。彼らにとっては普段何をしてるかわからないボスの肝煎りだ。発破をかけたけど多少はやる気を見せてくれるとありがたい。

…まああたしの本音はシロちゃんに会うことだ。”イレギュラー”はただの言い訳、はつきりわかんかね。

「作戦終了時には皆さんを反膜^{ネガシオン}で回収します。まだまだ戦いは続くので、決して油断せず、無理をなさらないで」

「お、おう…」

「言われてるねエ、ヤミー」

「うるせえ! てめえこそ現世の連中侮ってボコられる未来が見え見えだぜ」

ルピもヤミーも仲良さそうだけど、これ大事なブリーフィングね。ヨン様命令だからね。ちゃんと任務内容覚えてね。

不安になったので一応真剣味アピールに霊圧で四人を威圧しつつ、細かい決まり事を伝えてガバの可能性を減らす。全員まじめな顔になったので最後に激励して、あたしは彼らを送り出した。

「我々破面軍最初の、正式な大規模攻勢です」

——各員、成果を期待します。

さて、ではあたしはあたしで動くとしましよう。まだ尸魂界でお別れしてから二ヶ月も経ってないけど、一日千秋の思いだったよ。待ってて、シロちゃん…

今逢いに行くね？

変更イイイイ！

現世は空座町。

謎の爆発や十人単位の住民が突然集団死する原因不明の事件が日常茶飯事な、通称・日本のサイレントヒル。そんな魔都の横にある鳴木市の地下アジトに、あたしは毎度の如くスタンバっていた。

新たにザエルアポロの研究所が併設されたこの現世アジトは、五十年の増改築で本拠地の虚夜宮並みに各種設備が充実した我らの一大拠点である。あたしとヨン様のダブル崩玉に、ロカの「反膜の糸」、そしてザエルアポロの頭脳の粋が詰まった理の領域クラスの秘密要塞。月島さんや陛下でもここを見つけるのは難しいだろう。

ヨン様敗北後はほとぼりが冷めるまで破面軍全員でここに潜伏する予定だ。

しばらくすると霊圧観測装置に反応があり、あたしは目の前の四十もの映像モニターに映し出されたヤミーたち破面軍空座町襲撃部隊 vs. 日番谷先遣隊の戦闘を注視する。

展開は順調。敵味方のマッチアップも原作通りで問題なし。ただシロちゃんの動きが妙に慎重な気がする。何か作戦があるのか、お陰でルピが順調にイキって一対四の状況を楽しむ期待通りの展開へ。

あたしはそんな監視網の画面を見つめ、現場に介入する機会をワクワクしながら窺っていた。

…だが、ここで問題が一つ。

あたし自身がワクワクしていると言うことは、即ち同一人物にとってもこの状況は同じく高揚感のツボだということ。意味不明に聞こえるかもしれないが、言葉通りの意味である。

そしてそれは…

『——シロちゃんだ！——シロちゃんがいる！——シロちゃん！——
——待望の原作再現シロちゃんシーン！——うふふ、シロちゃん…も
う少して逢いに行くよお——』
「みんなうるさい…」

…こういう意味なのだ。

無数の雛森クローンの魂魄で出来た崩玉、通称・桃玉。

昨夜の飛梅会議の後、短慮にもすぐさま自分の魂魄との融合を開始
させてしまったあたし。真っ先に感じたのはえげつないほどの霊圧
の成長と——桃玉の住人たちの姦しい声だった。

魂魄の霊体的束縛から解き放たれたヤツらは、崩玉の意志というあ
る種の高次元的存在へと昇華し、現在はその思念体生活を存分に謳歌
している様子。まるでどこぞの妖刀みたいにあたしの中で好き勝手
騒いで凄くやかましい。

「…ねえ、もう少し興奮抑えられない？ そっちのテンションがあが
るとあたしの霊圧が増えすぎて大変なんだけど」

『——はあい…——お姉様に怒られちゃったね——ガバになるから
しようがないよ——』

「その”お姉様”ってあたしのこと？」

洩々、キヤーキヤーからヒソヒソに思念の音量を落としてくれる桃
玉。個としての自我すら放棄したはずの元魂魄同士でなんで会話が
成立しているのか極めて謎だが、出来ればそのまま作戦終了まで大人
しくしてほしい。

と言うのも、実はこの気紛れポンコツ。心を読み取る性質を持つ崩
玉だからか、その意思となった雛森クローンたちの感情の荒ぶり度で
あたしの力の成長速度がブレまくるのだ。つまりシロちゃんのこと
を強く意識した瞬間にあたしの霊圧最大値が爆発的に増えてしまう。

これは今後の展開的にとっても不味い。

「…シロちゃんに会えた興奮で大暴走しないといいけど」

一応剣八の眼帯みたいに霊力を食べてくれるザエルアポロ製アイ

テムを装備しているが、やはり崩玉融合が不十分な今はシロちゃんの前で長居しないほうがいいだろう。あたしの魂魄強度が上がるまでの辛抱だけど…全く、ヨン様もとんだ地雷を超越したものだ。

作戦失敗を心配をするあたしに対し、当のガバ温床たちは呑気に映像モニターを注視している。

『——見て見てお姉様——黒崎くんがグリムジョーさんとぶつかると——虚化ちゃんと出来てるかな？——さあ、始まりましたリベンジマッチ！——』

「あたしの中で実況しないで…」

思わず苦言を述べるが、内容自体は少し気になるものだったので一緒に観察する。

一護は無事虚化を手に入れたようで、グリムジョーをただの袈裟切り一つで満身創痍にした…のだが、最大出力が高い代わりに持続時間が5秒04とめっちゃ短い。そして解除後は力を使い果たしてしまおうのか、結局グリムジョーと二人へトへトボロボロ同士で不毛すぎる泥試合を繰り返している。これGJJJさん、平子戦の前にルキアにやられたりしないよね…？

画面が替わってヤミーたち本隊サイド。こっちはルピが頑張っているのか一角や乱菊さんの傷がかなり深い。シロちゃんは現在原作と同じく潜伏中なので消耗の度合いがわからないが、日番谷先遣隊が半壊しているのは予想外だ。

…あれ、これ原作通り明後日に空座町決戦仕掛けたら乱菊さんたちの回復が間に合わない？

『——ガバ？——お姉様がルピに油断するなって注意したからじゃ——しつ、気付かないフリしなさい——でもウル織の熟成時間稼ぐなら消耗関係ないよね？——』

「あ、そっか」

またやらかしたかと思わず身構えたけど、考えてみれば雛森クローんたちの言う通り、どのみち決戦を先伸ばしにしたんだから大した問題じゃなかった。

と言うのも、ウル織はともかく、実はあだし個人も少し時間的猶予が必要なのだ。

理由はこの桃玉にある。今朝がた考えなしに魂魄に埋め込んだあだしだが、今の馴染んでない不安定な融合状態だとシロちゃん戦で桃玉が荒ぶって暴走する可能性が高いのだ。当日にガバってこれまでの愉悦計画を台無しにしないよう、少しでも体に馴染ませる時間が欲しい。

つまり、この場面での最善チャートは…

「——いつそあたしがここで現世組をボコって、しばらく治療のため後方に下げさせる…とか？」

決戦をズラすのはヨン様の鏡花水月で山爺や浦原さん・マユリ様を操れば可能だけど、出来れば隊長格側にも戦えない事情があった方がいい。特にシロちゃんは無理やりにも来てしまいそうなので、数日間あたしの全力の「白伏」で動けない状態になってもらおう。流石の護廷隊も主力の隊長格が——恋次も来てくれたら——三人も戦闘不能になったら虚^{ウエコムド}圏^{クワン}侵攻を延期するはずだ。

何より、ここでシロちゃんの意識を奪っておかないと、最悪あだしが空座町を去るときにおもらし「雛森イイイ！」が出てしまう危険性がある。まだ収穫には早いのでそれだけは阻止せねば。

(…こうしてみると意外と妙手?)

そうと決まれば早速原作とOPBの知識を総動員して勝算を分析しよう。

卍解抜きでも桃玉と融合した今のあたしの霊圧なら、現在の空座町を一人で沈黙させることはおそらく可能だ。浦原さんは決戦に備えて情報収集に徹するだろうし、平子やローズの感覚操作系能力は飛梅ちゃんの大技で脳筋ゴリ押しすればいい。今の一護やシロちゃんは鬼道一つで倒せる。梅焰グミ撃ちはOSR値マイナスが少し不安だ

けど、これは効果的なオサレムーヴで補えるはずだ。

例えば一度手加減した大技を使い、それを凌いだ相手がドヤって低OSR値状態になった時に、本気の【煌熬琳原】こうこうりんげんのカウンターOSRでねじ伏せる。あるいはバラガン戦の時みたいに結界で敵を閉じ込めて梅焰をぶつ放すなど、鬼道と飛梅の相乗効果で高OSR値を稼ぐことも可能。

OPBシステムはこの鯺界の真理。それを唯一知ることの許されなかったがOPBで敗北するなど鯺ファンとしての恥以外の何物でもない。

「卍解などの手札を残し、同時にシロちゃんの前で悲劇○の伏線を張りつつ、現世の護廷隊戦力みんなに決戦までの数日間は大人数にさせる程度のダメージ、あるいは【白伏】を叩き込む。

難しいがやり遂げて見せよう。

あたしは大きく深呼吸し、覚悟を決める。そろそろ雛森クローンたちの我慢も限界のようだ。

『——ねえ、お姉様——そろそろ空座町に行ってもいいんじゃない？』

——映像だけじゃ物足りないよ——生シロちゃん楽しみだなあ——』

桃玉の期待感のせいかまたもやあたしの霊圧が成長し始めた。嬉しいけど、今の魂魄強度でこれ以上力が上昇したら最悪剣八みたいに自滅しかねないので止してくれ。

「あの、この急な作戦変更は空座町決戦での「雛森イイイ！」のためなんだけど、お願いだから目先のシロニウムに目が眩んで暴走するのだけは止めてね…?」

『——う、うん…頑張るよ——でも多分シロちゃんと接する時間は短めのほうがいいかも——自分ですらどうなるかわからないとかあつしたちガバガバすぎない?——オリジナルだけが持つ崩玉制御力を信じるのよ!——そのオリジナル先月特大ガバやらかしたんだけど——』

「やかましいわ」

ホント、こんなことなら融合を後回しにすればよかつた。ただでさえいつもの桃ちゃんお得意「開始五分前だが作戦を変更する！」が発動してしまつて不安なのに、始めからコレとか先が思いやられる。まさかこれも崩玉をくれたヨン様の高度な罠なのでは…？（違）

さて、愚痴は終わりだ。

あたしは反膜ネガシオンの起動装置を懐に忍ばせ、慎重にアジトを出る。目的はメインイベントのシロちゃんの所…と行きたいところだが、まずはグリムジョーの刀剣解放を阻止しなくては。

桃玉の住民たちに嚴重注意をして、やるべきことを整理する。そして気持ちを落ち着かせ、みんなの心構えが出来たら、再度深呼吸。

——さあ、いざ出陣だ！

ああもう、楽しみと不安で気持ちがぐちゃぐちゃだよ。どうか無事にオリチャー成功しますように…

再会イイイイ！

「——随分早いな」

唐突に虚空を裂いて現れた四体の破面^{アラソカル}。十二番隊の霊圧識別信号に赤と表示された^{エスパーダ}“十刃”級の敵の襲撃に、護廷の先遣隊を指揮する日番谷冬獅郎は思わず拳を握り締めた。

それは先月の屈辱。貴重な情報源シャウロン、そしてウルキオラを逃がしてしまった己の不甲斐なさを戒めるための行為。

そして、あの幼馴染の沈痛な伝言に焦燥ばかりが募る日々の終わりを期待した、天井知らずの戦意の表れだった。

「…色黒、巨漢。てめえが雛森と一緒にいたヤミーって破面だな…！」
「へっ、銀髪チビの氷使い。俺も知ってるぜ、雛森さんがウルキオラに何かの伝言頼んでた日番谷とか言うガキの隊長だな？」

「ガキかどうか、そのデケえ体で試してみな——【正解】ツツ！」

前回で足を引っ張られた限定霊印もない。故に出し惜しみもしない。最初から全力の「大紅蓮氷輪丸」で畳みかけ、余計な邪魔が入る前に少しでも多く情報を吐かせる。冬獅郎の望みはそれだけだった。

「…ツ、ちっ。やるじゃねえか」

「その霊圧、てめえ”十刃”だな」

「よく知ってんじゃねえか…俺は^{デイエス・エスパーダ}第10十刃”ヤミー・リヤルゴだ
！」

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ！」

幾度の攻撃の応酬。着実に相手を追い詰めつつ、されど冬獅郎は己の非力さに臍を噛むばかり。

敵はかなりの強さ。だがこれで十番、つまり”十刃”の序列最下位。こいつらを従える雛森はもつと強く、そんな彼女を支配し苦しめ

る藍染惣右介はその遙か上にいるのだ。

そして、焦る冬獅郎に更なる試練が訪れる。

「——ヤミー、そっちの子も僕に譲ってよ」

唐突に少年の戦いに割り込んできたのは、部下の斑目一角と綾瀬川弓親が抑えていたはずの別の破面。ルピ・アンテノールと名乗ったヤツの腰には”6”の刺青。ヤミーより上位の”十刃”を意味する数字だった。

そこから事態は更に混沌としていく。

刀剣解放状態のルピ対日番谷先遣隊の四名。援軍に駆け付けた浦原喜助対ヤミーと三人目の華奢な金髪破面。遠方では黒崎一護が最後の敵の一体と交戦。更には見知らぬ隊長級の霊圧の死神の登場。こんな状況ではヤミーを捕らえて尋問など不可能だ。

だが直情的な冬獅郎は意外にも、この大混乱の中において本能的に正解を選択した。

(随分相手を舐めてかかるヤツだな、ルピ・アンテノール)

敵の傲慢さを逆手に取り、少年は大技一つで破面を仕留めることを決断。以心伝心の副官、松本乱菊に無言の合図を送ったのち、敵の隙を作るべくワザと倒されたふりをして準備に徹する。

そして。

「な、お前…まだ生きてたのか!」

「一度攻撃を加えた相手に対して気を抜きすぎなんだよ、お前は」
煽られる部下たちが稼いだ時間を無駄にはしない。技の発動と同時に、幾本もの巨大な氷の柱が大地より聳え立つ。

「お…お前えええエエエツ!」

「わりいな、八本じゃ足んなかったろう」

動揺する破面は隙だらけ。大気を含む全ての水を支配する冬獅郎の命で、それら氷塔が一斉にルピへ襲い掛かる。

必殺の【千年氷牢】が、見事序列六位の”十刃”を撃破した。

「な…!? おい何やられてんだよルピ！ クソツ…このままじや雛森さんに合わせる顔がねえ…！」

「破面つてのも世知辛い組織なんスね〜——ま、そのあたりの詳細も後でたつぷりとお伺いしましょうか」

その強面に焦りを滲ませたヤミーが急いで救援に向かおうとするも、浦原喜助がそれを許さない。「紅姫」に斬り刻まれ巨漢の”十刃”は防戦を余儀なくされている。あの金髪の破面も浦原が鬼道で拘束したようだ。

「——すまんな破面。あんた強そうやから…手加減、無しや」

「ク…ソがあああアアアツツ!!」

遠くへ目を向ければ、黒崎一護とあの片腕の破面の戦いも大詰めに迎えている。一時は苦戦を強いられていたようだが、謎の援軍の力で敵を圧倒。尸魂界から駆け付けた朽木ルキアはともかく、現れた現世風の装いの男に冬獅郎は覚えがないが、こちらの戦闘も我が方優勢だ。

戦局は味方に傾いている。敵がこれを覆すには最早奥の手の^{レスレクシオン}帰刃を使う他ない。

だが警戒するや否や、冬獅郎たちの感知の遠く、黒崎一護の戦場を渦巻く破面の霊圧が高まった。

「軋れ…！」

そして同じ結論に至ったであろうあの片腕の個体が切り札の刀剣解放の予兆を見せた、その瞬間。

——任務完了。

四つの光の柱と共に、まるで空から海が降って来たかのような凄まじい力が冬獅郎たちに襲い掛かった。

『かつ——』

その異次元の現象が、霊圧による圧迫感だとその場で気付けた者は殆どいなかっただろう。

体中が四方八方から押し潰され、放心したまま魂魄がはじけ飛びそうになっている乱菊たち。立っているのは謎の仮面男と浦原喜助、そして自分の三人だけ。その無事な者たちも戦慄に体が震えて立ち尽くすことしか出来ずにいた。

「面目ねえっす…」

「チツ…」

「あーあ、帰ったらお説教かあ」

「あう…」

降り注ぐ光の柱、反膜ネガシオンに守られた”十刃”たちが撤退していく。申し訳なきような者、不満そうな者、不貞腐れる者、怯える者。それぞれが不完全燃焼に顔を顰めながらも、その目に一様に浮かんでいるのは、こちらへの同情と憐憫の感情。

まるで屠殺場へ送られる家畜を見送るような、そんな哀れみすら滲ませて。

「…じやーねー死神諸君。軍団長サマの梅焰で、指一本でも遺体が残るといいね！」

そんな捨て台詞を最後に、四体の破面は虚空へと消えた。

——宙に立つ、一人の人影へ礼をして。

『……』

沈黙が辺りを支配する。去り行く敵を気にする者は一人もいない。何故なら誰もが、突然現れた小柄な少女に意識の全てを囚われていたのだから。

肩を晒した白いドレスの死覇装。下ろした黒髪を風に舞わせる姿は皆の記憶に殆どなく、そんな些細な容姿の変化がまるで別人のように彼女の雰囲気を一変させていた。

「…あんだ、一体何が…」

「これが…本当に元副隊長…?」

霊圧にあてられた乱菊たちが酷く動揺している。長年親しんだはずの霊力なのに、そのあまりに絶大な規模が皆の認識を狂わせ、目の前の少女が記憶の彼女と同一人物であると認めることが出来ないのだ。

そして、それは日番谷冬獅郎も同じ思いだった。

二ヶ月ぶりとなる、少女との再会。しかしあまりに突然なそれは、連れ去られた彼女をただひたすら取り戻すことしか頭になかった冬獅郎にとっては、もしかしたら早すぎた出会いだったのかもしれない。

覚悟も決まらぬままいざ相まみえた哀れな少女は、藍染の悪意に運命を捻じ曲げられ…破面たちの撤退を指揮する、明確な護廷の敵として彼らの前に現れたのだ。

それでも。

感じる桁外れの霊圧が、たとえどれほど自分の知るあいつとかけ離れようと。

見下ろす冷たい双眸が、硬く結ばれた小さな唇が、たとえどれほど精巧な”悪役”らしく作られていようと。日番谷冬獅郎は、彼女が自分にくれる確かな温もりだけは、絶対に見違えることはない。

ああ、あいつだ…

「——雛…森…」

無意識の不安か、あるいはそれは残された希望の儚さを表していたのか。再会した幼馴染——雛森桃を求めて思わず零れた声は、自分でも驚くほどか細く弱々しかった。

「……」

彼女が返した言葉は無言の一つ。

だが冬獅郎を拒絶するような沈黙に反し、その唇は白くなるほど噛み締められ、ドレスの胸元を固く握る拳は、少女の胸中に渦巻く想いの強さを映し出す。

錯覚でもバイアスでもない。彼女が未だ自分に向けてくれる確かな情を垣間見た冬獅郎は、居ても立ってもいられなくなった。

「ッ、雛も——」

「護廷十三隊、そして現世の皆さん！」

だが笑顔で駆け寄ろうとする冬獅郎を制止するかのように、雛森が町中に轟く大声を張り上げた。久しぶりに聞いた彼女の鈴音の声は震えていて、あの双 \square の丘のときより一層枯れ果てて痛ましい。

「三日後の正午！ 我々破面軍は藍染様に勝利を捧げるため、この地で雌雄を決める決戦を申し込みます…ッ！」

『…!!』

それは過去に尸魂界が受けたものの中で最も敵意に乏しく、最も悲愴な宣戦布告だった。

まるで致命的な何かに急かされているかのように憔悴した顔が、彼女の絶望を物語る。

「な…雛森お前——」

「止めなければ！」

咄嗟に伸ばした少年の手を押し留める雛森の叫声が、この場全員の耳に木霊する。

「止めたければ…あたしをこの場で倒しなさい…ッ！」

揺れる瞳の雛森が、腰の斬魄刀を鞘から解き放つ。取返しが付かない境界線を踏み越える恐怖と苦悩に満ちた挑発。そんな彼女の凄惨な覚悟に圧倒され、冬獅郎は息一つ吐くことすら出来なかった。だが。

「…そういう、事だったんすね」

雛森の決意に何かを悟った者がいた。鬼才と恐れられる研究発明家、浦原喜助。

そこにもう一人、冬獅郎の知らない例の謎の男が合流する。

「あの霊圧の高さ、普通の死神のモンとちやうな」

「…ええ。ですが平子サン、アナタ方”仮面の軍勢”とも違う」

「となるとアレしかないなア…藍染もホンマ趣味悪いやつちゃ」

平子なる謎のおかつぱ男との不穏な会話にたまらず「どういう意味だ」と割り込む冬獅郎。

「…日番谷サンは彼女の幼馴染ツスよね」

「だったら何だ。お前たちはあいつの何に気付いた、答えろ…！」

されどその問いに二人は冬獅郎を憐れむように目を細め、斬魄刀を握り直す。

「…最善を尽くします」

「なっ——」

冬獅郎の望む答えは煙に巻かれ、同時に浦原と平子が雛森を囲むように間合いを取る。その意図は明確。二人は、雛森と戦うつもりなのだ。

「なっ、待てお前ら！ 雛森は敵じゃねえツ！」

誰であろうとあいつを傷付けることは許さない。だが慌てて浦原たちを追い駆けようと少年が足を踏み出したとき、新たな四人の乱入者が雛森の周囲に現れた。

「——雛森副隊長っ!!」

荒い息と共に登場したのは日番谷先遣隊の朽木ルキアと、黒崎一護。南の方角からは同部隊の阿散井恋次と…あれは浦原の仲間の四楓院夜一か。

そしてそれは方々に散らばっていた現世の最高戦力が皆、空座公園の上空に集結してしまったことを意味していた。

「な、なんだよその霊圧…それがてめえの本当の力なのかよ、雛森ツ！」

「雛森副隊…雛森殿！　どうか剣をお納めください…！」

「一護、ルキア！　馬鹿者が、お主らは下がっておれ！」

「何でだよ！　俺はこの人に聞かなきゃなんねえことが山ほどあるんだ！」

「ツ、全員剣を下ろせ！　雛森に手エ出すなツ！」

必死に一同の前に立ち塞がり、制止の声を張り上げる冬獅郎。押し潰されそうな霊圧の中でも何とか雛森から事情を問ひ質そうとする友人の朽木に阿散井。何か因縁のあるらしい四楓院やボロボロの黒崎。更には辛うじて立ち上がった乱菊や斑目、綾瀬川の三人も加わり、事態は雛森を中心に荒れていく。

そんな彼らを余所に、浦原と平子が静かに少女の隙を探し戦意を高めていた。幼馴染を守りたい冬獅郎はその脅威を当然見逃さない。

しかし。混乱の中で少年が二人へ掴みかかろうと腕を伸ばした、その瞬間。

——平子が、血飛沫に染まった。

「がふ…ツ」

「え…？」

突然、目の前で赤い螺旋を描きながら地面へ落下していく金髪おかつぱの男。皆一様に呆けた顔でそれを見つめ、真っ先に我に返った浦原と四楓院が一瞬で側の朽木たちを掴み距離を取った。

そして一同が顔を上げた先に、斬魄刀から血を滴らせる——雛森桃が佇んでいた。

『…ツ!?!』

何も見えなかった。誰一人として指一本動かせなかった。

腕の動きどころか紫電すら消える須臾の出来事を目の当たりにし、

皆が緊張に凍り付く。

張り詰めた空気の中、ただ一人、ゆつくりと剣を横に構える雛森。

「…言ったはずです。あたしは、もう」

——止まらない。

そして振り下ろされた彼女の斬魄刀は、眩い桃色の焰を纏った四支の宝剣へと姿を変えた。

『…!!』

無号の始解。それは特別な高みに至った死神のみに許された斬魄刀の解号方法である。その唯一の条件を知る冬獅郎は、同じ領域に立つ浦原や四楓院らと共に目を見開いた。

「雛森、お前…」

話には聞かされていた。あの黒棺の威力や常軌を逸した霊圧から察することも出来た。だがこうして目の当たりにしたときの衝撃は想像より遥かに大きかった。

やはりこいつは、今までずっと…

「隠してやがったのかよ…!」

そう不満に悪態吐きながらも、藍染から事情を聞かされた彼らは少女を強く責めきれない。それでも、今までの長い付き合いを経ても尚、教えてくれるほどの信頼がなかったという事実は重くのしかかる。

「…そうだよ、阿散井くん。尸魂界に来てすぐの頃に、近所の友達に”化物”って言われてから、雛森桃はずっとみんなを騙して弱いフリをしてきたの」

「ッ、雛森…!」

「だけどそれも…もう、おしまい」

周りに拒絶されないために己の才を隠した少女が、隠すことを止め

た。まるで冬獅郎たちが、その力を秘めるに足る大切な存在ではなくなつたと伝えるかのように。

「あたしは今日、みんなに……昔のように”化物”って言われに来たの」
雛森の、達観したような擦れ声が皆の胸を締め付ける。

違う、そんなこと言わない。そう叫ぼうと口を開くも喉を登るのは声にならない吐息ばかり。

斬魄刀の解放で高まった少女の天井知らずの霊圧が、ついに隊長の卍解を以てしても跳ね除けられなくなっていた。

「だから、その化物に殺されなくなかったら……」

そして少女の暗い声が耳に届いたその直後。

——死ぬ気であたしを殺しなさい。

冬獅郎たちの視界の全てが、淡い桃色の津波に飲み込まれた。

無双イイイイ!

「がはアツ…!?!」

霞む視界の中、日番谷先遣隊ならびに現世の霊力者たちは必死に意識を保つ。

相手が巨悪の悪意に絡めとられたかつての戦友、雛森桃だからか。町中の大気が焼き尽くされそうな霊圧を目の当たりにして尚も心折られない彼ら先遣隊の面々は、正しく護廷の強者也。

しかし、実力心情共に腰が引けてしまっているのもまた事実。覚悟の定まらないまま始まってしまった友との戦いは勝機の見えない地獄そのものだった。

そんな動揺する周囲の中で真っ先に動いたのは、二十年前から幾度と苦渋を舐めさせられた天才科学者・浦原喜助。放心する周囲を余所に、元隊長の男が斬魄刀で敵を捕らえんと布石を仕掛ける。

「――【縛り紅姫】ッ!」

黒い帯状の霊圧が瞬時に雛森の体に纏わり付く。だが彼女の変わらぬ表情を見た浦原は即座に援護を要請。

「夜一サン! 阿散井サン!」

「な、ま、待て…!」

「任せろ喜助ッ!

――【双禁踊鎖】ッ!」

「ぐ…クソッ、卍解ッ!」

――【狒狒王蛇尾丸】――

冬獅郎の叫びも最早無意味。夜一の繰り出す鬼道の鎖に続き、恋次

の骨の大蛇が雛森の小柄な体を締め付ける。斬魄刀と靈性武器、そして卍解による三重の拘束。逃れることは難しいと誰もが考えた。

「——そこに誰もいませんよ」

だが突然、辛うじて靈圧の圧力に耐えていた斑目一角の後ろから、女の声が聞こえた。

「なっ……がはあッー！」

「一角!？」

振り向くことも許されず、尸魂界屈指の腕利きが血花を咲かせて地へと落ちる。

「ッ、バカな……！ 確かに捕らえたはず……!？」

慌てて蛇骨のとぐろを解いた恋次。だがその目に映ったのは、無数の花卉が散るようになくなっていく少女の姿だった。

「分身……だと……?？」

ありえない。あれは確かに雛森の靈圧を発していた。そう驚愕する周囲の前で、元副隊長の少女が静かに手品の種を明かす。

「靈圧を凝縮して人形ひとがたを作る鬼道衆の術です。元は捕獲任務で虚に喰い付かせる囷に使うものですが、少し工夫すれば身代わりとしても使えます」

そして雛森が不意に不自然な一拍を空け……

「——このように、簡単に相手の背後を取れます」

『!!?』

直後、またしても突然味方の血潮が宙に舞った。

斬られたのは一角との連携を意識し最も距離を取っていた、綾瀬川弓親。声一つ発せず崩れ落ちる彼の様子は誰もが復帰不可能と悟るほど。

啞然とする一同。それを見下ろす雛森が、拳を握り、虚栄に胸を張る。

「……これくらいの欺瞞は出来ないと、藍染様の僕しもぐ失格です」

勝気な言葉は少女の自己暗示か。しかし仲間をやられ怒り心頭な

者の目にそうは映らない。

「ちくしょう、雛森てめえエツ！」

「な、止めろ恋次！」

次々に同胞を斬り捨てる雛森に憤怒を覚えた青年が、遂に彼女と戦うことを決意した。未だ戸惑うルキアの制止も振り切り、操る巨大な蛇骨が元同期を成敗せんと鎌首を擡げる。

「…いいよ、阿散井くん。あたしにぶつけて」

「ッ、舐めてんじゃねえぞ！」

——【狒骨大砲】!!——
ひこつたいほう

避けるでも迎え撃つでもなく、ただ憂鬱そうに目を伏せたまま佇む雛森に恋次の【狒狒王蛇尾丸】が誇る最高火力が放たれた。

『……………』

霊圧の砲弾は相手に直撃。真紅の爆発に視界が暗み、周囲に燃えた大気が白煙をなす。

そして晴れた煙の奥に——

「嘘…だろ…」

——彼女は変わらぬ姿で立っていた。

力量差はわかっていたが故の全力だった。先月イールフォルトを倒した時と同等…否、消耗が少ない分より高い威力を叩き込めたはずが、現れた相手は全くの無傷。

だが動揺する恋次が迫る危機に気付いた時、事は既に終わっていた。

「…ッな!？」

「数字持ちを倒すのがやつとの技でやられるほど、軍団長の地位は軽くないわ」

一閃。

カッと胴に激痛が走った直後。己の無力に悔しさを覚える間すら許されず、恋次は体中の熱が消える感覚を最後に視界の光を失った。眼下の地面に次々と墜落していく仲間たち。全てが、瞬く間もない

出来事だった。

「——唸れ、灰猫はいねこ…ッ！」

それはせめてもの意地か、はたまた少女がこれ以上罪を重ねることに耐えられなかったか。霊圧にあてられ立つのもやつとな松本乱菊が、想いを託した斬魄刀の灰塵を雛森の周囲に旋回させる。

無論、それが腕の一振りですら散らされることなど端から承知。相手の注意を引いた乱菊は親友に必死に懇願する。

「雛森…もう、やめて…」

一瞬、少女の能面が歪んだのは虚しい錯覚だろうか。

「…ごめんなさい、乱菊さん」

その答えを知ることなく、乱菊は彼女の見知らぬ鬼道の前に意識を手放した。

——あたしはもう、こうするしかないんです…

一人、また一人と仲間が消え、残る戦力は半数の五人となっていた。だがその五人の半数以上も既にボロボロ。グリムジョーとの戦いで満身創痍な黒崎一護。敵の霊圧で青息吐息な朽木ルキア。尸魂界の援軍も今や戦闘可能なのは隊長の冬獅郎のみで、その彼も家族同然だった少女の明確な裏切り行為に絶望するばかり。あんな痛ましい顔では最早足手まといにしかないだろう。

そんな壊滅状態の味方を惜しむことなく切り捨て、浦原喜助と四楓院夜一は機を窺い続ける。

「…喜助、ヤツの融合状態は」

「わかりません…先程から時々彼女の霊圧を感じなくなることがあります。【白伏】で隠してるだけならいいんですけどね…」

「魂魄の高次昇華、か……この短時間でここまで同調が進むとは、恐ろしいほどの適性じやのう」

小声で分析を進める二人。

実は今回の戦闘、浦原にとつては全くの想定外であり、同時にこの上ないチャンスでもあった。

彼らの目的はこの霊圧の怪物、雛森桃の魄内に埋め込まれた”力の源”を奪い返すこと。だが彼女の魂魄を消滅させるだけの火力が手元になく、また心情的にも憚られる以上、他に取れる手段は搦手に限られる。

故に好機を待つ二人。そしてその長い我慢は、唐突に報われた。

「——お嬢ちゃん、ちよいと暴れすぎや」

突然上空から投げ掛けられた声と共に凄まじい霊圧の塊が降り注いだ。赤黒い光閃、大虚の切り札【虚閃】だ。

意識の外から放たれた一撃は宙に佇む雛森に直撃し、大爆発を巻き起こす。

「遅いッスよ平子サン！」

「喧しいわボケエ！ あと一ミリ傷深かったら俺死んでたんやで!？」

血だらけの腹部を押しえ現れたのは平子真子。彼ならばあるいは、と待ち望んでいた戦力の復活に後押しされ、浦原は一気に自身の斬魄刀へ霊圧を送り込む。

だが虚閃の爆炎の中に、肝心の雛森の霊圧がない。

「…ッ、まさか！」

「身代わりじゃ喜助！」

僅かな動揺。しかし平子の奇襲より瞬き一つも敵から目を離さなかつた夜一は、即座に動いた。

ヤツの【白伏】と【曲光】の凶悪な複合鬼道を無力化する策はまだ成っていない。だが夜一の鍛え抜かれた観察眼は相手の微細な筋肉や重心の動きで最後の行動を予知し捕捉する。

「ッ、逃がさん！」

「……！」

かくして一瞬の違和感を頼りに突撃した女傑は、その“瞬神”の異名を敵に見せ付けた。

「――捕らえたり、雛森桃ッ！」

ハツと浦原らが声の方角を追った先には、無機質な表情の雛森を羽交い絞めにする夜一の姿。霊圧で作った分身ではない、確実に少女の本体だ。

尸魂界史上有数の女強者が呼び寄せた千載一遇の好機に、古強者共がすかさず畳みかける。

「儂ごとやれ、お主らッ！」

「今度は貫うでお嬢ちゃん……！」

――齒ア食いしばれやアッ!!」

「お任せを！」

――【切り裂き紅姫】ッ！」

二度とないチャンスを逃さず、浦原が真紅の膜盾から射出した無数の霊力の刃が一斉に雛森へ殺到する。頭上からは平子の再度の虚閃。双方共に今までの攻撃とは格の違う破壊力だ。

そして動けない少女に弾幕が命中するまでの、僅かな間合い。

「――その仕込みも見えてますよ」

突如、彼女の周囲に真っ赤な花卉が舞った。雛森桃が以前の襲撃で見せた凶悪な幻覚鬼道だ。

「なッ、あ……」

「夜一サン！」

如何に警戒しようとする本人を拘束中の零距离で回避が間に合うはずもなく、夜一は己の五感が万華鏡に吸い込まれたかのような恐ろしい感覚に襲われ、意識が掻き消えた。

そして彼女の腕から自由になった雛森が、その剣に空間を歪ませる

ほどの霊圧を纏わせ…天地を薙ぐ。

「――【梅焰・翳火】」

瞬間。その刀身から想像を絶する火力の散弾が爆射された。

『!!?』

扇状に弾け飛んだ無数の即死の火花が正面の浦原の【切り裂き紅姫】を、頭上の平子の虚閃共々蒸発させ、勢いそのまま二人に襲い掛かる。

「ッ、不味い!」

――起きろ【紅姫】ッ!!」

「くッ…嘘やろ…!?!」

辛うじて雛森の攻撃から逃れた平子は、その場で思わず息を呑む。あんな霊圧強度の散弾を喰らえば一瞬で肉片ミンチとなっていただろう。

だがそれを真正面から受けた浦原の無事を探る彼の一瞬の警戒放棄は、雛森桃にとっては垂涎ものの隙だった。

「――残った一ミリの命、大切にしてくださいね」

「?!? しまっ」

とん…と雛森の右手が胸元に触れた直後、平子の視界が虹色に染まる。恐らくは夜一を倒したのと同じ、【白伏】に類する強力な霊力攪乱術。濁流のような膨大な霊圧の暴力の前に流石の”仮面の軍勢”も抗えず、平子真子は失意を胸に崩れ落ちる。

「くっ…流石は藍染のお気に入りってことッスか…!」

片や浦原喜介、敵の散弾火花に【血霞の盾】を碎かれる直前。間一髪で携帯用義骸を身代わりに危機を逃れた彼は、僅かな隙に平子までもがやられ、そして同時に姿と霊圧が消えた雛森を必死に探す。

またしてもあの凶悪な複合鬼道。これの対策に先ほど【切り裂き紅姫】に大量の追跡用鬼道を乗せて射出したのだが、結果は相手に気付

かれ失敗。焦る浦原は対・藍染用の切り札をここで切るべきか真剣に逡巡する。

しかし、距離を稼ぐべく瞬歩で義骸と入れ替わった、その先で。

「——ヤミーさんにお礼を言わなくてははいけませんね」

浦原は球状の結界に囚われた。

「なっ!?!」

気付かれていた。先ほど”十刃”に使ったのを見られていたのか。新作義骸のテストに興が乗り、あのヤミーとやらにペラペラ説明してしまつた過去の自分を呪いたい。

ダメ元で昔の”読書家”にやられた反膜^{ネガンオン}兵装の対策を試すも効果なし。結界の解析もこの短時間で間に合うはずもない。

万事が休し苦々しげに見上げた先には、ここに来て初の戦意らしきものを双眸に浮かべた、雛森桃。

「…ごめんなさい、あなたにだけは容赦は出来ません」

そして結界内に透過した彼女の斬魄刀は、人生で初めて見る馬鹿げた密度の霊圧を帯びていた。

「——【煌熬琳原・詠萃】」

桃色に瞬く流星群。その破壊の絶景が、浦原喜助が最後に目にした世界の全てだった。

狂悦イイイイ！

——任務完了。

その巨大な霊圧が少年、黒崎一護の周囲にのしかかった直後。戦意を高めるボロボロのグリムジョーが、突如光の柱に包まれた。

諸刃の剣の虚化で追い込むも倒しきれず、相棒の朽木ルキアと師の平子真子の助力でようやく勝利を掴む、と確信した矢先のことだった。

ネガシオン
「反膜……！」

「この霊圧……まさか」

ソウルソサエティ

尸魂界で藍染惣右介が逃亡時に用いたものと同じ術。だが一護ら

三人の驚愕は、光柱の合間に突然現れた一人の少女の登場にあった。

「何や……この馬鹿デカイ霊圧は……！ あのお嬢ちゃんのモンか……？」

「雛森……副隊長……っ！」

急変した事態に皆が動揺する。特に霊圧にあてられたルキアの憔悴が激しく、そしてそれは、虚化の使い過ぎで酷く消耗した一護自身も同様。

一か月前に内なる虚を抑えてくれたとき以来の再会となる彼女——雛森桃は、まるで別人のような途轍もない存在感を放っていた。

「……チツ、あつちで誰かしくじりやがったな」

不意にグリムジョーの悪態が耳に届く。不満を吐き捨てながらもどこか諦めが見える彼の表情は、少女の登場が意図されたものだと語っていた。

「——次で決着だ、黒崎一護」

「…！」

そして戦場を去りゆく”十刃”の強い瞳が、一護のそれと交差する。

「直に尸魂界に決戦を仕掛ける。あの女相手に生き残れたら、真つ先に俺の所に来い。それまででめえとの戦いは棚上げだ！」

顎で上司の女死神を指し示すグリムジョー。それはまるでこれから彼女が巻き起こす嵐を暗示するようで…

「もつとも…！」

——てめえが殺されることはねえだろうがな。

同時に一護の知らないところで、またしても何か大きな思惑が彼を巻き込んでいることを示していた。

そして不穏は現実となる。

「——浦原さんッ!!」

一護の視線の先で、頼りの師が枯れ枝のように無様に地へと落ちていく。総勢九名で取り囲み、あの雛森桃に挑んで五分も経たぬ間の出来事だった。

「二角…！ 恋次…！」

見下ろす先には、瞬殺されゴミのように転がる、かつて死闘を繰り広げた護廷十三隊の強者共。綾瀬川弓親、松本乱菊も地面に落下したまま動かない。

「嘘だろ…平子…！ 夜一さん…！」

そして阿吽の呼吸で三人がかりの奇襲を仕掛けた浦原ら一護の師匠たちも、一人また一人と戦場から脱落していく。分身と姿・気配を消し去る術に翻弄され、その巧みな捌手すら見戯とする桁外れな霊圧が理不尽なまでに聳え立つ。

雛森桃の狡猾さに支えられた規格外な暴力の前に、かくして誰もが為すすべなく膝を突かされた。

「クソ…はああああアアア！」

「止せッ、早まるな一護！」

残されたのは彼とルキアと、絶望に震える日番谷冬獅郎。心身等しく戦意を折られた二人を守るため、そして、六年前から続く謎を解き明かすため、一護は最後の力を振り絞る。

『…!!』

だが振り下ろした【天鎖斬月】は、まるで羽を抓むように雛森桃の細い指に捕らわれた。

あの藍染惣右介を想起させる、圧倒的な力の差がそこにはあった。

「ッ、あんた…一体何者なんだ…！」

それでも一護は臆しない。

「卍解も、虚化の…あの白い俺のことも…！ 他にもあいつや斬月のおっさんみたいに俺の精神世界に現れて…」

「……」

「答えてくれ、雛森さん！ あんた一体俺の力の…俺の何を知ってるだ！」

頼みの平子ら仮面ヴァイザードの軍勢も当てが外れ、自分の知らない己の秘密を求める少年の切実な叫びが響き渡る。

だが、かつて『本が好きなお姉ちゃん』を名乗った謎多き少女は今、ただ無言で彼を見つめるばかり。

「チッ、だんまりかよ…ッ！ だったら——」

憤懣に心を支配された一護は、意を決す。

「なっ!?」一護、それは…！」

「下がってるルキア！」

一度割れたら日に二度と使えないはずの虚の仮面が顔を覆い、一護の体に膨大な力が満ちていく。

一か八かの賭けは叶った。ならばやるべきことはただ一つ。

「俺の全力で…無理やり吐かせるッ！」

——【月牙天衝】!!——

あの時彼女と交わした約束を、ここで果たして見せる。

内なる虚を従えた黒崎一護は、己の成長を、あの雨の日の不思議な恩人に見せ付けた。

「——そう」

だがその月牙は、消えた。

「何……だと……!?!」

比喩でも錯覚でもない。少女がその細い両腕を開き、一護の霊圧の斬撃を無防備に懐へ受け入れた瞬間、まるで彼女の体の中に吸い込まれるように忽然と消失したのだ。

妙な術や霊力の動きの予兆は何もなかった。何が起きたのか理解出来ず、一護は茫然と立ち尽くす。

「やっぱりあなたはまだ…」

——半人前なのね。

気付いた時、少年はかつてのように自分の胸の中へ、彼女の左手を受け入れていた。

「く……そ……」

「いつ——」護おおおおお!!」

体中の霊力が凍っていく。

相棒の悲鳴が霞んでいく。

薄れ遠のく意識の中、最後に一護に出来たのは、失望に陰る白い死

覇装の少女へ虚しく腕を伸ばすことだけだった。

「あ……あ……」

そして朽木ルキアは、四十年ぶりに、雛森桃と相対する。

日番谷冬獅郎や松本乱菊、阿散井恋次、吉良イヅル、更には現世に住まう一護すら。多くの者と心を交わし、また秘密を隠す雛森桃は、ルキアにとっても大事な存在だった。

『——初めまして！ 阿散井くんと同じクラスの雛森桃ですっ』

『——げ、元気出してください、朽木さん……』

『——“この”黒犬”の言霊は出来るだけ狂暴な猛犬を描いて……そうそう、その調子です！』

不貞腐れていた霊術院時代で幾度と世話になった頼れる鬼道の師にして友。そんな彼女に別れも言えず護廷隊へ飛び級配属され、以後ぷつりと切れてしまった縁の糸屑を心の隅で惜しむ日々。その後女性死神協会で十年ぶりに姿を見かけたとき、既に互いの間には会話も憚られるほどの地位の差があった。

そして今、互いの差は最早……目を合わせることもすら許されないほどに広がっていた。

「雛森……殿——」

赤く、妖しい花卉が周囲に舞うのをぼんやりと見つめながら、ルキアは涙ながらに胸の内ですら少女へ尋ねる。

ああ、貴女はまだ覚えてくれているだろうか。その鬼道が初めて成功した日、二人で姦しく茶屋でお祝いした、あの青臭い院生時代の思い出を……

「……さようなら、ルキアさん」

優しく触れる少女の手。敵となり、二度と交わすことの叶わぬ彼女の心は、されど最後に、その微かな断片を晒してくれたような気がした。

「雛…森…」

何だこれは、どうしてこんなことになった。

五人の選りすぐりの護廷隊隊士が、そして元隊長の浦原に四楓院含む黒崎ら現世の最高戦力もが何も出来ずに瞬殺された。

それは弁論の余地なく、たとえ如何なる理由があろうと絶対に許されない、尸魂界に対する明確な反逆行為だった。

「なん…で…」

無様に戦慄く日番谷冬獅郎は、まるで悪夢でも見ているかのような苦痛に吐き気がこみ上げる。

いずれこうなることはわかっていた。俺が、止めなくてはならなかった。

だが覚悟の定まらないまま再会した大切な幼馴染のあまりの変わり様に、転がるように悪化する現実の前に、冬獅郎はまたしても情けなく立ち尽くすことしか出来なかった。

「嫌だ…」

そして機を逸してしまった少年は、全てが手遅れとなってようやくやり付く。

それが自分に残された、唯一にして最後の——雛森桃を尸魂界に連れ戻す最後のチャンスだったのだと…

「嫌だ…！ 嫌だ！ お前を藍染なんかに渡してたまるか…ッ！」

冷静さなど、ぐちゃぐちゃに乱れた思考では望むべくもない。立場、霊圧、感情。果てしなく遠く離れてしまった彼女に少しでも近付こうと、冬獅郎は卍解の氷翼で必死に空を翔る。

だが。

「——来ないでッ!!」

少年が救えなかった最愛の幼馴染は、二人を阻む些細な彼我の距離すらも、縮めさせてはくれなかった。

「来たら、あなたも倒します…日番谷隊長…!」

「ッ!」

牽制するように剣を構え、あれほど嫌がっていた他人行儀の呼称で、少女が彼の名を叫ぶ。

だがその切先は、声は、体はカタカタと震え、片手で握り締める衣類の胸元は皺だらけ。

二人きりになった戦場で彼女が見せてくれたのは、保ち続けた悪人の仮面が剥がれ落ちるほどの、少年への大きな大きな想いだった。

「——ッッ!」

それは咄嗟の、無我夢中の行動。

「やっ…!…だ、ダメ…っ」

悲痛に呻く雛森が千鳥足で後退る。

「嫌っ…来ないで…!」

少女の涙が冬獅郎の翼の力となる。

「い…ない…で…」

歓喜と悔恨、そして強い慕情に突き動かされ、少年は脇目も振らずに彼女の下へ飛翔する。

そして。

「——雛森」

冬獅郎は遂に、遂に惚れた女をその腕に掻き抱いた。

「シロ…ちや…」

「…ああ、俺だ。俺だよ、雛森…」

解いた卍解の氷鱗が崩れ落ち、キラキラと輝く粒氷晶ダイヤモンドダストが抱き合う二人を祝福する。

明るい笑顔の陰ですつと耐え続け、最後に藁にも縋る気持ちで自分に助けを求めてくれた、孤独な想い人。

その縋った儂い期待を裏切られ、それでも尚、愛しい幼馴染は日番谷冬獅郎という無力な男を大切に想ってくれていた。

そんな女を。誰も頼れずたった一人で苦しみ続けていた彼女を。今、やつと、やつと…

「——がふ…ッ」

突然。

冬獅郎の頬に、両手に生温かい水滴が跳ねた。

一滴二滴ではない。べつとりと粘着く、慣れ親しんだ鉄臭い、嫌な色の液体だった。

「ひな…もり…?…」

もう二度と失わないよう腕の中に閉じ込めた少女が、突如苦しげに喘ぎ、痙攣し始める。

「…か、あ、がッ」

「雛森!? おいどうした雛森!？」

そして、冬獅郎の目の前で。

「あ”ア”ア”アア”ア”アアア!!」

守り抜いたはずの想い人の体から、おぞましい真紅の大爆発が巻き起こった。

「ぎっ——あ”ああアッ!?!」

弾け飛ぶ赤黒い血潮。竜巻のように暴れる少女の途轍もない霊圧。懐で核兵器が爆ぜたかのような爆風に四肢ごと吹き飛ばされ、手足を腕がれた冬獅郎は檻褸布のように錐揉みしながら地へと墜落する。

「あ、あ、が、うあ…」

一体何が起きた。

激痛と混乱にグワングワンと掻き乱される頭を必死に制御し、冬獅郎は片腕片足に片目を失った満身創痍の我が身を顧みず、真つ先に雛森の姿を辺りに探す。

「…ツひな…も…ツ!」
いた。

体中から血と霊圧の花を咲かせ、ゆらゆらと宙に浮いている少女。滝のような出血が冬獅郎の倒れ伏す地面に降り注ぎ、止まらない。

それを見た冬獅郎は、ワケがわからない大混乱の中で、最も切実な現実だけは理解出来た。

——このままでは、雛森が死ぬ。

「う、あ、あ、うわア”ア”ア”ああアツツ!!」

何故だ、どうしてこうなるんだ。痛みと悲嘆の絶叫が町中に反響する。

雛森が一体何をした。皆に好かれ、皆に惜しまれたあいつが、何でこんな惨い目に遭わなくてはならないんだ。だが嘆く冬獅郎には彼女の悲運を打ち砕く力が無い。

「だれ、か…!」

惨めで、悔しくて、情けなくて。

「だれか、あいつ…:…を…ッ」

されど何も出来ない無力な少年には、もう…己の何もかもを捨てても、見知らぬ強者に慈悲を乞うことしか彼女を救う道は見つからなかった。

「――助け…」

そして、その悲愴な懇願は…

「――いけないな、日番谷君」

この世で最も届いてはならない男の耳に入ってしまった。

「――あ…い…ぜん…!?!」

「やあ、久しぶりだね。少しは腕を上げたかな?」

四肢を欠き、無様に地べたに這い蹲る少年が見上げる天に、大逆人――藍染惣右介が佇んでいた。

その両腕に、冬獅郎が死に物狂いで辿り着いたはずの、雛森桃を抱えながら。

「で、めえ…なにしに…! 雛森に、なにを…何をしやがった…ッ」

「何をした? おかしなことを訊く」

問い詰める血だらけの少年へ、藍染がああ憎たらしい薄ら笑みを顔に張り付け口を開く。

「全ての非は、桃を興奮させた君にこそある。私が与えた力を馴染ま

せる大事な時に、彼女の心が乱された」

「な……に……」

それはまるで物分かりの悪い阿呆に言い聞かせるような、無駄に優しげな声だった。

「わからないか？　これは日番谷隊長、”君が起こした問題だ”、と言っているんだ」

徹頭徹尾が挑発の塊。憎悪すら生温い激情に駆られた冬獅郎は残された片足で奮い立とうとし……

「ふッ……ふざけ——」

だが突如男が放った桁外れの霊圧に押し潰され、ガクリと土に崩れ落ちた。

「あ……が……」

「すまないね、日番谷隊長。これの安定に」

——君は邪魔なんだ。

二度目の無念を胸に闇へと消えていく、冬獅郎の意識の片隅。

最愛の幼馴染を抱きかかえ、連れ去った巨悪が残したその言葉は、まるでただの物を扱うようにも、愛しい妻娘を慈しむようにも聞こえ……

三日後。

護廷四番隊隊舎で四肢再生手術を終え、先遣隊の面々の最後に目覚めた日番谷冬獅郎は、ヴェコムント虚圏へ阿散井恋次らの救援に向かった隊長格部隊に間に合わず。

狂乱し暴れる彼は総隊長・山本元柳斎重國率いる決戦部隊に無理やり組み込まれることと相成った。

織姫 イイイイ！

美しい紅梅の木が花を咲かせる見事な平安貴族屋敷。その大きな寝殿の母屋に、三つの座布団が敷かれていた。

上座の一敷にはドレス風の白死覇装を纏う、挙動不審な女死神。その横には振袖袴に羽衣を羽織った、不機嫌そうな長髪の少女が座っている。

そして正面の座布団には、ぽつんと置かれた小さい桃色の珠が弱々しく光っていた。

『——ではこれより第一回・雛森軍法会議を行います』

そう、ここはあたしの精神世界。桃ちゃんホームの新しい住人がやらかしたガバを裁いている最中の一場面だ。

『判士並びに法務官は私、飛梅が兼任致します。双方異存ありませんね?』

「雛森桃に異存なし」

『——ッあ、ありま——』

『あ・り・ま・ま・せ・ん・ね?』

『——ひっ!——な、無いですくないです!——』

ご聖体さまが笑顔に青筋を浮かべてらっしゃる。あたしも被害者として怒り心頭なんだけど、隣にキレ散らかす寸前の人があると逆に萎縮しちゃうよね。怖いので飛び火しないよう小さく縮こまってましよう。

『…結構。では第三次空座町襲撃作戦時の霊圧の大暴走による作戦妨害、並びに主様・雛森桃殺害未遂について、桃玉被告せむたまの審理を行います』

『——い、異議ありっ！——我々の弁護人依頼権が阻害されている！——完全黙秘権を行使します！——被告人防御権への配慮が皆無だわ！——これは明らかな治罪法違反である！——判士チエンジで！——』

『被告人の陳述を排斥します。貴方に弁護人ですって？ 厚顔無恥にもほどがあるわ、この石ころ風情が……』

『!?!?』

マジギレ飛梅ちゃんが飛梅ちゃん（刀）の鯉口をチャキチャキ鳴らしながら被告人に近付く。逃げたいのか桃玉が座布団の上で見苦しくふるふる震えて、つてあの珠動けたんだ……

『笑止。無機物なら無機物らしく大人しくしてなさい』

『——や、やめろお——くっ、殺せ！——』

もつともスマホのようにその場で振動するだけなので普通に摘まみ上げられ即終了。

そして桃玉を掌で弄びながら、軍法会議ごっこに飽きた飛梅ちゃんが毒舌モードで説教を始めた。

『……ねえ、崩玉さん。あなたは主様の力となるべく造られた存在なの。そして融合した今は、私と同じ、主様の魂の一部なのよ……』

『——はい……おっしやる通りです——』

え、そうなの？

……二人曰く、そうらしい。

『なのに新人のクセにその場の気分で仕事をサボり、あまつさえ興奮し過ぎて主様の魂魄を霊圧超成長で爆発させるなんて、無能どころの騒ぎじゃないわ。あなた、生きていて恥ずかしくないの？』

『——はい……ごめんなさい——』

『気紛れに主人を破滅させる道具とかゴミ以下ね。藍染惣右介が寄こした刺客や罠と言われたほうがまだ信じられるわ。そう思わない？』

『——はい……面目次第もございませぬ——』

『頭を下げる相手が違います。私に謝罪している時点であなたがただこの尋問から逃れたいだけなのが丸見えよ。恥を知りなさい石屑が』

『——ふええお姉さまあ——飛梅が虐めるよお——』

桃玉の中に土下座する無数の雛森桃あたしの姿が見えるのは幻覚だと思いたい。オリジナル故に気持ちかわかるからか、何だか少しコイツらが可哀想に思えてしまう。

：いや、やっぱ曇りシロちゃん堪能チャンスの妨害はギルテイ。閉廷。

『——全く、主様からも何か言ってやってくださいッ!』

「ふえっ!? あ、あたし!?!」

そうしていると突然飛梅ちゃんに話を振られた。もう、鍰をチャキチャキさせないでよ。怖すぎてキョドってしまったじゃないか。

：しかし、さてどうしよう。

個人的には霊圧成長に気を取られてせつかくのシロちゃんタイムを楽しめなかったことは無念で腹立たしい。自爆も過去のリヨナムーヴの中で一番痛かったし、ワリとマジで死ぬかと思った。

しかし、それらに目を瞑れば今回の桃玉被告の爆発ガバは寧ろ結果オーライの大成功なのである。

一つは——あの盛大な自爆で生存本能が荒ぶったのか、あたしの魂魄強度が大きく上がったこと。なんとなく霊体としての格が変わった感じもするし、これでもう余程のことがない限りさつきみたいな自滅は起きないはずだ。

二つは——雛森桃の崩玉融合の伏線を張る作戦が想定以上に上手く行ったこと。やはり切羽詰まって本気で苦しんだほうが当然リアルだ。如何に演技に自信ネキなあたしとはいえ、あれ以上のシーンを演出するのは難しかっただろう。

開始前に「感情抑えろ」と忠告したのにガバった桃玉は今飛梅ちゃんに叱られてるが、あたしとしては何となくこうなる予感があったので、これ以上あの珠を責める気はない。

今後あたしたちは長い付き合いになるのだ。ここは一つ、彼女たちの主人として器の広いトコを見せておこう。

「ありがとう飛梅。お説教はもう十分よ」

『な、主様っ!?!』

『——お、お姉さまあ!——流石あたしたちのオリジナル!——聖女
!——天使!——』

あたしは優しく飛梅ちゃんの手から桃玉を受け取り、彼女の頭を撫でる。

初めてのアニブリ版飛梅ちゃんらしいお局様キャラが見れてよかったけど、やっぱりあたしの飛梅ちゃんは笑顔のほうが似合うし可愛いよ。

そう微笑むと彼女は口をパクパクさせて赤い顔で俯いた。

「少し…かなり肝を冷やしたけど、おかげで霊体として進化出来たんだからその成果も考慮しないと。あたしたちは一心同体の仲間なんだし、その辺で許してあげて、ね?」

『あ、貴方様がそうおっしゃるのでしたら…』

『——ちよろ——古典的ちよろイン——お姉さまが美少女を誑かしてる——これは悪女ですわ——さっきの聖女・天使は錯覚だった?——』

…桃玉被告、ちよつと自分に都合のいい流れになるとすぐ調子に乗り始める。全く、誰に似たんだ。もう少しあたしのクローンとしての自覚を持ってほしい。

反省の色が見えないので顔を近づけ桃玉を睨み付ける。

「…次は最後の本番シロちゃんだけど、大丈夫? 興奮して霊圧増えすぎない?」

『——だ、大丈夫大丈夫!——お姉さまの魂魄もさつき☆6になったし——霊圧増えても器は壊れないよ!——た、多分——』

「ホントかなあ…?」

ガバ温床の桃玉被告に言われると思わずゴ□リが出てしまう。

…でも確かにヤツらの言う通り、あたしの魂魄があんな風に爆ぜることはもうないだろう。現世で無双した時点で既に霊圧が感じられないレベルにまで増えていたらしいので、それに馴染んだ今なら…と

言うのが正直な思いだ。

大体これ以上成長すると原作の崩玉ヨン様を超えてしまう。それは何て言うか、一鰯ファンとして凄く嫌だ。

BLEACHの最強は無月一護or陛下でいいけど、やっぱり最オサレはヨン様で最可哀想はシロちゃんであるべきなのです。

「と言うワケでみんな自重してよね。あなたたち、一応腐っても崩玉の分類なんだから、望んでもない力をあたしが得ることはないんですよ?」

だが桃玉の住人たちの反応は煮えきらない。

『……ごめん……正直わかんない——爆発した時も別に強くなりたいとか誰も願ってなかったし——あ、でもシロちゃんを曇らせたい願いが崩玉融合の演出と合わさってああなったのかも——あ、それありそう——』

『……ちよつと、”ありそう”って何よ。貴方たち崩玉の意志なんですよ?』

飛梅ちゃんナイスツツコミ。ホントこいつらが不安になっててどうすんだよ。

『……ほ、ほらあたしたち普通の崩玉じゃないし——そ、そうそう!——その、聞かれても困るっていうか——ね——?——』

『……じゃあ誰に聞けばいいのよ!』

『……ひいつ——だ、誰かなあ?——』

ふええ、もうガバガバすぎて何が起きてもおかしくないよお……

結局あれから何度しばいても情けなく『——わかりましええん——』と泣くだけだったので、桃玉被告の判決&処罰は普通の嚴重注意で終わった。というかそれしか出来なかった。

ま、まあまだ空座町決戦まであと三日あるし、あたしの魄内に溜まりすぎた霊力を閉次元へ転送できないかザエルアポロに相談しよう。現世アジトへのお引越し中で忙しいかもしれないが、天才の彼なら三日もあれば何とかしてくれるはずだ。

ふう、時間的猶予を取って置いてよかったよかった。

そうして新たに三人(?)体制で今後も最高の「雛森イイイイ!」のために尽力する旨を皆に確認し、あたしはようやく飛梅ちゃんの精神世界を後にした。

…さあ、待ちに待った転生人生二度目の”生きがい”だ。
少ない時間だが、やるべきことはたくさん残っている。

ガバ対策の用意と、シロちゃんの隠れお見舞と、計画のブラッシュアップと、一護ホワイトの様子確認と、原作イベント再現のお膳立てと、破面たちの指揮と、ウル織の熟成と、ヨン様篇終了後の潜伏準備と、猫の手も借りたいくらいだ。

何とか残りの三日で最終調整を終わらせられるように、桃ちゃん今日・明日・明後日も頑張るぞい!

そしてあたしの意識は現実へと覚醒する――

「――わっ! お、起きたっ!」

……え? (困惑)

「よ、よかったあ。あやめたちにずっと頑張って貰ったのに、もう三日も眠ったままだったから心配で…」

……は？（威圧）

「あつ！ あ、あの、えつと、初めまして…？ じゃなくてお久しぶり

…？ です——

——井上織姫…です…」

……

あのクソ玉アアアアアア今度こそ空座町内会に寄付してやるウウ
ウウウウあああんもおおおおおおッ!!!（高速旗回収）

三日イイイイ！

「——ようこそ…：我らの城、ラスノーチエス 虚夜宮へ」

列柱に囲まれた幾何学的な巨大空間。あるいは玉座の間と形容するに相応しいその広間に連れて来られた人間の少女——井上織姫は、そこで己の新たな”王”に謁見を許された。

藍染惣右介。

元護廷十三隊の隊長にして、友人の朽木ルキアや黒崎一護ら仲間たちを巨大な陰謀に巻き込んだ、ソウルソサエティ 尸魂界の裏切り者だ。

初めて彼と正面から相對した織姫は、その恐ろしさを肌で感じた。一目見た瞬間に本能で個を超え種としての格の違いを悟るほどの、霊圧の巨人。体中の力が、抱いた覚悟が、ありとあらゆる抵抗心が抜け落ち、少女は”跪く”という服従の意を示すことすら忘れ、ただ茫然と立ち尽くす。

「どうやら君の価値に疑問を抱く者がいるようだね。…折角だ、織姫。君の力を我々に見せてくれ」

そして少女は、ラスノーチエス ここ虚夜宮の掟を目の当たりにする。逆らう気力すら湧かず、言われるがままに青髪の青年グリムジョーの傷だらけな身体で己の能力を披露する自分。癒した彼が狂ったような笑い声を上げながら、仲間の一人を蹴る残虐な姿。そしてそんな二人の戦いを面白そうに、無関心に、呆れるように眺めるだけの周囲一同。情も理性もどこにもない、弱肉強食の獣のみがそこにいた。

怖い、恐い、コワイ。味方を裏切り独りとなった自分を護ってくれるヒーローはもういない。敵地の最奥、荒れ狂う凄まじい霊圧、同じ種族の同胞同士ですら殺し合う狂気の世界。そんな地獄に自ら足を踏み入れた織姫は、ただただその場で恐怖に震えることしか出来な

かった。

そんな脆弱な人間の命は、強大な十刃^{エスパーダ}たちの争いの前では羽のように軽く…

「…ッ!?」

気付けば辺りに散らばる即死の霊圧が、織姫の眼前に迫っていた。

「——控えろ、グリムジョー」

だが虚閃^{セロ}の流れ弾に瀕した彼女が激痛と衝撃を覚悟し目を閉じたその瞬間。織姫の耳に平坦な男の声が聞こえた。

痛みが来ない。巨大な霊圧が風のように収まっている。何が起きたのかわからないまま目を開けた織姫は、そこで一人の破面の背中を見た。

彼女が最初に出会った破面の一人にして、自分をこの場に連れてきた張本人。確か、名前は…

「…何のつもりだア、ウルキオラ！」

そう、ウルキオラだ。

「こっちの台詞だ、莫迦。お前が散らかす虚閃^{セロ}の残滓で女が死ぬ」
「…な」

青年の一言で場に静けさが戻る。緊張が解けた織姫は未だ無事な我が身を掻き抱きながら、そっと隣の青年を見上げた。

無表情で、尊大で、「屑^{クズ}」とか「塵^{コヒ}」とかちよつと口が悪くて怖い人。だけど…

(守って、くれた…?)

無論それが上司の命令、人質としての価値を考慮した当然の行動であつたことなど一目瞭然。現世の仲間たちのような温かさは欠片も無い、忠実な組織人としての振る舞いに過ぎないのはわかつてい。それでも、無言で自室への道を先導してくれる彼の後ろ姿を見ると、ふと、淡い期待を抱いてしまうのだ。

この人は、違いかもしれない。と…

「…ん、う」

寝ぼけ眼を擦り、辺りを見渡す織姫。覚醒していく頭が現状を認識し一気に気持ち落ち込むが、持ち前のポジティブ思考で振り払う。肌触りのいい上品なネグリジェを弄りながら、織姫は思わずにへらーと表情を崩す。

そう、奴隷みたいな生活を強いられる覚悟をした身にとって、ここ虚圏ウエコムンドでの生活は天国そのものなのだ。

「ホントのお姫様になったみたい…」

ベッドの天蓋から垂れ下がる純白のレースカーテンを掻き分け、早朝の室内を見渡す織姫。サイドテーブルには水の入った美しい石英のグラスにピッチャー。女性破面たちの間で流行っているのか、現世のファッション雑誌まで置いてある。

織姫が虚夜宮ラスノーチエスへ招かれて一日が過ぎた。

虚の王城ホロウと聞いていた巨大な伏魔殿での生活は、されど当初の想像とは大きく異なり、小市民な彼女には一生縁がないほどの極めて豪華なものだった。

「——随分呑気に寝られるようだな、女」

三度のノックに飛び跳ね部屋の扉へ振り向くと、世話係をしてくれている破面の青年がサービスカーートを押しながら現れた。天然な織姫は寝間着のままベッドを降り彼を迎える。

「お、おはようございませす…！ えっと…ウルキオラ、くん？」

「敬称は要らん。朝食を持って来た、食え」

「朝ごはん！」

ふわりと漂う強烈なバターの香りに思わずカートまで駆け寄ってしまう。バスケットの中にはつやつやに輝く焼きたてのクロワッサン。お皿に被さったお洒落なクロッシユが期待を煽って堪らない。

「座れ。配膳が来らん」

「あ、は、はい！ すみません！」

慣れた動きでウルキオラが食器やクロスを広げテーブルを彩っていく。そして現れた料理を目にした瞬間、耐えかねた織姫の腹の虫が一斉に大合唱を始めた。

黄金に輝くスクランブルエッグ。焼き色の見事な分厚いベーコンステーキとソーセージ。色鮮やかなパプリカやズッキーニのグリル。グラスとコップにはそれぞれ甘酸っぱい香りのオレンジジュースと濃厚なホットココアが注がれ、その横にはデザートデザートの粉砂糖が降られたチュロスまで置かれている。

まるでテレビの旅行番組に出てくる超高級ホテルのブレックファーストだ。

「あのっ、こ、これホントにあたしの…？」

「俺たち」エスパルダ「十刃」と同じメニューだ。献立は毎日変わる。さつさと食え」

「ふわあ…」

質素な尸魂界や現世の自宅とは別次元の至れり尽くせりっぷりに安心してしまふ。半ば人質のような己の立場をすっかり忘れ、織姫は破面たちの豊かな生活に羨望を通り越し感動すら覚えていた。

来てよかった、ラスノチエス虚夜宮！

「――」馳走様でしたあ…」

二十分後。

美食の誘惑に完敗した織姫は、妊婦のように膨れた腹をネグリジエの上からポンポン叩いて余韻に浸っていた。

残しておいたホットココアをちびちび飲みながら、隣へこつそりと目を向ける。静かに食器を片付けてくれるウルキオラのが、少女はふと気になった。

（あたしが自分で片付けようとしたら怒るし、何か拘りでもあるのかな…？）

男性としては小柄で中性的な顔立ちだからか。何となく年の近いクラスの男子を思い起こさせるこの破面の青年は、どうやら以前から自分の世話係をすることが決まっていたらしい。先月のヤミーや謁見の時のグリムジョーなど、狂暴で恐ろしい人たちばかりだと身構えていた織姫にとつて、ウルキオラの存在は破面という種族に対するイメージを大きく改める切っ掛けになった。

（悪い人じゃなさそうだし、せめてもうちよつと仲良くなれたらなあ…）

ニヒルで無表情な破面の青年。その様がどこか、尸魂界で敵と戦っているときの冷徹な石田雨竜、無口な茶渡泰虎を彷彿とさせ、織姫は彼に微かな親近感を覚えていた。

断界で尸魂界の護衛二人を殺さず意識を奪うだけに留めた慈悲も、恐らくこの人以外の破面には珍しいだろう。あるいは彼となら種族を越えてわかり合い、少しでも争いを減らすことが出来るかもしれない。

そんな夢物語を抱いてしまうくらいには、織姫はこの半日間で観察したウルキオラの為人を好意的に捉えていた。

…その壁が果てしなく高い御伽噺だと知つても尚、彼を信じたくなくなる程に。

「――織姫。君に一つ、仕事を頼みたい」

朝食を終えた織姫を待っていたのは、せつかくのクロワツサンが逆流しそうになるほどの恐怖と驚愕だった。

藍染惣右介からの呼び出しに戦々恐々としながら従い入室した玉座の間の更に奥で、彼女は透明な棺のようなカプセルに寝かされた一人の少女を目にする。

「ッ、こ……この人……！」

息を呑む織姫に、藍染が頷く。

「ああ、君も会ったことがあるだろう。かつて尸魂界で五番隊副隊長および鬼道衆・一之組第三班班長を務めた、破面軍^{ブランク}“十刃”^{エスパーダ}軍団長」

――雛森桃だ。

彼が撫でるカプセルの中に横たわる少女は、およそ人とは思えない痛ましい姿をしていた。体のあちこちに開いた穴からは桃色の霊圧が吹き出し、胴部は宛ら弾けたザクロの如き形容するも怖ろしい有様。不安定な魄脈と微かに上下する胸元が、最早肉片も同然な彼女の命を奇跡的に繋ぎ止めていた。

「無論、護廷十三隊にやられるほど弱い娘ではない。彼女を苦しめているのは、私が与えた新たな力だ」

「新たな……力……」

カプセルの中に途轍もない規模の霊圧が渦巻いている。強固な結界を隔てても感じるそれは、まるで核融合炉を人体に埋め込むかの如き所業。あまりの惨さに織姫は思わず隣の下手人を睨み付ける。

この場に己が呼ばれた理由など一つしかない。

「さて、織姫。君には彼女の魂魄を、元の状態に戻してほしい」

どの口が言うのか。そう吐き捨てられたらどれほど楽になれるだろう。

以前聞かされた少女の身の上。孤独に苦しみ、差し伸べられた巨悪の手に縋った結果の不運。退路を断たれ不本意に仲間や友人を裏切

ることとなり、今ではこんな悪逆非道な実験に利用されている。その気持ち想像するだけで織姫は胸が潰れる思いだった。

諸悪の根源、藍染惣右介なんかに言われるまでもない。織姫は目の前で苦しむ少女を救わんと「盾舜六花」の妖精たちに想いを託す。

” 事象の拒絶”。

神の定めた事象の地平を乗り越える、神の領域を侵す力。それが、凶らずとも教わった自らの力の壮大すぎる本質だった。

…だがこれほど大きな霊圧の持ち主に力を使うのは初めてで、そして満足な効果を望むには、雛森軍団長の魂魄はあまりにも異質すぎた。

『ダメだ織姫。この人、魂が別の位相に行こうとしてて能力がほとんど届かないよ…！』

「そんな…」

それまでどんな怪我也癒してくれた【双天帰盾】の妖精、舜桜とあやめが悔しそうに首を横に振る。織姫には二人の言葉の意味は分からなかったが、その表情からは根本的解決が極めて困難なのだと容易く察せた。

(黒崎君…)

救えなければどうなるのだろう。恐怖と罪悪感に心臓が早鐘を打つ。

恋する乙女な織姫は、この死神少女が己の想い人——黒崎一護と何やら複雑な縁で結ばれていることをボンヤリながら察していた。一月前の殺伐とした出会いで、立ち込める砂ぼこりの中彼女が密かに一護へ接触した光景を見てしまった記憶は未だ新しい。あの日以後、彼の刺々しい焦燥感が消えたことも、恐らくは無関係ではないはずだ。

一護を、仲間たちを裏切り藍染惣右介に従った自分に、彼と共に歩む未来はもうないだろう。一方的だったが想いも別れも伝えることが叶い、織姫はあの夜の切ない甘露を胸に一生を終える覚悟でここに来た。

だが、ある意味自分と近い立場かもしれない雛森軍団長をいざ前に

すると、どうしても複雑な感情が沸き上がってしまふ。

(…つて、そんなこと考えてる場合じゃないよあたし！)

憐憫。嫉妬。不安。達観。こんな捻くれた気持ちでは能力を十全に発揮できない。雑念を振り払い、織姫は長期戦を覚悟し無我夢中で少女の破裂した魂魄の修復を試みる。

それは彼女だからこそ抱ける純粹な想い。魂に満ちる慈愛の心が力となり【双天帰盾】の光が少しずつ雛森軍団長の傷を回復させ始めた。

その光景を眺める巨悪、藍染惣右介は鷹揚に頷き、背後の部下へと首を向ける。

「ウルキオラ」

「はい、藍染様」

呼ばれた破面の青年が進み出た。

「治療中はこの部屋を織姫の自室とする。君は桃が目を覚ますまで、私以外の誰もこの扉を潜らぬよう見張りたまえ」

「畏まりました」

そう言い残し、彼らの”王”は去って行った。

「——治せるか？」

治療を始めてから少し。二人となった部屋で、不意にウルキオラの声が沈黙を破った。

「えっ、あ、う、うん…」

「そうか」

淡泊な相槌の後、破面の青年が膨大な力の奔流に苦しむ女上司へ目

を向ける。

ジツと彼女を見つめるその綺麗な翡翠の瞳は変わらず無感情。

だが。

(錯覚…?)

一瞬の目の悪戯か。織姫にはそこに、微かな人間味が見えたような気がした。

思い出すのは先月に彼と出会った最初の襲撃。傷付いたヤミーなる巨漢の破面の暴虐な振る舞いを叱咤しつつも彼の身を案じていた雛森軍団長。尸魂界の流魂街や護廷十三隊の人たちの誰もが彼女の心の優しさを称えるほどの人格者は、もしかしたらこの鉄面皮の青年にとっても決して軽い存在ではないのかもしれない。

(だったら尚更、絶対に助けないと…!)

宿敵の虚を祖に持つ破面を相手に、人間のような上司と部下の良い関係を築く死神の女の子。そして彼女を慕う素振りを見せるヤミーやウルキオラのような破面たち。

あるいはこの人たちなら、藍染惣右介が起こした尸魂界と虚圏の戦争を終わらせる大きな一助となってくれるだろうか。

そんな織姫の、懸命に大勢の人の不幸を無くそうと願う健気な姿を、ウルキオラ・シファアは変わらぬ無機質な瞳で見つめていた。

三日後、雛森軍団長は無事目を覚ました。

カプセルから出た彼女は、まるでそこに居ないかのように一切の霊圧を感じられず、その顔は幽鬼のように青褪めていた。

「…君の協力に感謝しよう、織姫」

そんな部下の憔悴した姿を睥睨する藍染は、嗤っていた。

——— 実に理想的な実験結果だった。

男が残したその言葉の意味は、織姫には最後まで理解出来なかつ

た。

幕間：いちごくんの不思議な試練

空座町の端にある寂れた倉庫街。

馴染みの霊圧を頼りに訪れたその廃墟にて、少年——黒崎一護は自身
の運命を決す重大な難問に挑んでいた。

『…喰われたら、そこで終いや』

虚ホロウの力を手にした禁忌の死神、仮面ヴァイザードの軍勢。不気味な一団の協力を
引き出し、内なる虚の制御を目指す一護は、連中のリーダー・平子真
子によって強引に虚化の試練と対峙する。

青い空。 藍い摩天楼。 それら全てが四反垂直に転じた心象世界。
幾度と己の斬魄刀に歓迎された、【斬月】の世界だ。

「——久しぶりじゃねえか…」 王”よ」

その中心に聳える巨大なビル壁に、ソイツはいた。 散々一護を苦し
める内なる宿敵、虚の自分だ。

「どうした、随分と浮かねえ顔してるぜ？」

「…ッ」

黒い笑みを浮かべた白い青年がゆつくりと立ち上がる。 挑発のつ
もりだろうか、忌々しい。

警戒を怠らず、一護は視線のみで周囲を見渡す。 この場にいるのは
あいつと俺の二人だけ。

あつてはならない異常だった。

「…斬月のおっさんはどこだ」

その問いを虚が鼻で嗤う。

「ッ、まさかてめえ——」

”斬月はどこだ”、か。相変わらず鈍い野郎だな、おい」

「…何？」

そして、男が背中に担ぐ得物を目にした一護は驚愕する。恐るべき速さで振り下ろされたヤツの大刀は…

「おれが——【斬月】だッ！」

色明の反転した、己の斬魄刀そのものだった。

「はははアッ！」

「ぐ…ッ！」

辛うじて迎撃が間に合い、衝突する二つの斬月が狂暴な金属音を奏で合う。だが均衡は一瞬で崩れ一護は大きく弾かれた。

強い。そして何より、何故こいつがソレを持っているんだ。そう戸惑う受け身の青年に、呆れる虚が語りかける。

「一護。てめえがわかつてるかどうか知らねえが…俺と斬月は元々一つの、てめえの力なんだぜ」

「な、に…？」

相手の言葉に一護は固まった。

虚は語る。

かつて斬月の一部に甘んじていたヤツは、”王”たる一護の生への執着と勝利への渴望、即ち生存と闘争本能が増大したことで力が目覚めた。そして斬月を従とした虚は一護の力の主導権を握り、遂にその支配は”王”自身にすら届くようになったのだ、と。

「生者は肉、死者は骨。主従が変われば姿も変わる」

「…ッ」

「わかるか？ 斬月に成り代わった俺は、てめえが斬月の力を引き出そうとすればするほど、てめえの魂を支配しやすくなっていくんだよ」

それが、これまで一護が苦しんだ呪いの真実だった。死神として戦

う自分が命を預けた剣は、いつの間にか虚の魔の手になっていたのだ。

「——そうかよ」

…ならば話は早い。一護は弾かれた斬月を手繰り寄せ、その切先を敵の正眼へ向ける。

「だったららてめえを倒し、斬月のおっさんを俺の力の中心に連れ戻せばいいだけの話だ…！」

構えは一つ。こいつと最後に会った時、更木剣八との戦いより更に鍛え手にした力。斬月との最高の絆を意味するこの力なら、確実にヤツを打ち払えるはずだ。

だが。

「わかんねえ野郎だな。無理だって——言ってるんだろ!!」

「…ッ!?!」

白い自分は一護の自慢の勝機を嘲笑い、鏡写しの構えを取る。

そして双方の霊圧が爆発した後…

『卍…解ッッ!』

——【天鎖斬月】——

晴れた白煙の中に、卍字の鏢の真っ白な太刀を握るヤツが佇んでいた。

激しい衝撃が辺りの摩天楼を崩していく。打ち合う刀同士が削り

合い、一護は分の悪い鏢迫り合いの途中で敵を睨み付けた。

「ッ、てめえ…いつの間に卍解を…！」

「…いつの間に？」　んなモン決まってるだろ。てめえが手にした…その瞬間にだ！」

「ぐッ!？」

だが青年は容易く押し負け叩き飛ばされる。こちらの切り札【天鎖斬月】をまるで自らの力のように巧みに操る内なる自分。体勢を整える間も無く一護は敵の追撃に晒された。

「ヒヤハハハ！　やっぱりてめえはヘタクソだ、一護オ！」

「クソッ…！」

「卍解時の月牙天衝も！　鎖を握った刀身投げも！　てめえは檻に入った俺の戦いを見様見真似で模倣してるだけの不出来なガキなんだよ！　なっさけねえなア、おい！」

なんと迷いのない恐ろしい攻撃か。震える剣で敵の猛攻に必死に喰らい付くも、相手の鋭利な殺意に吞まれる一護は防戦一方。

そして、そんな無力な彼に手心を加えるような慈悲は虚にない。

「チッ、散々お膳立てされてこのザマかよ」

「がッ!？」

顔面を殴り飛ばされ、一護は無様に背後の蒼い摩天楼に激突する。

(…強え)

無手で激痛にふらつくその姿は立つことすらやっと。あまりの情けなさに溜息を吐く虚が、そこで彼に一つ問いを投げ掛けた。

「一護。王とその騎馬の違いはなんだ」

抽象的な問い掛けだった。意味がわからず少年は飛びそうな意識で問い返す。

「ガキの謎かけをしてんじゃねえぞ。同じ力を持つ者同士が主たる王と従たる騎馬に分かれる時、その優劣を決める違いは何だと聞いてんだ」

「違い、だと…？」

唐突な問いに戸惑う一護へ、虚が凶悪な霊圧を叩きつけた。

「答えは一つ——本能だ！」

その言葉を噛み締める暇もない。見開く一護の視界には回避出来ない無数の【月牙天衝】。

「力ある者がより多くの力を発するために必要なのは、ただひたすらに戦いを、力を求め、敵を容赦なく叩き潰す勝利への絶対的な渴望！俺たちの深い深い魂の奥底、原初の階層に刻まれた、研ぎ澄まされた殺戮本能だッ！」

襲い掛かる霊力の刃に体を引き裂かれながら、一護は為すすべなく白い自分に蹂躪される。

「てめえにはそれがねえ！ 闘争を生き抜く剥き出しの本能ってヤツがな！」

「がは…ッ！」

「理性と理屈で剣をゴテゴテに着飾らせ、くだらねえ儀式みてえに刃を鈍らせる！ そんな玩具で一体どうやって俺を斬るってんだ、一護オ!!」

「ぐあアアッ!!」

永遠に続くかと思われた鬨り殺しの最後、巨大な月牙天衝が無防備な懐で放たれる。霊圧で吹き飛ばされた一護は背後の摩天楼を幾つも貫きようやく停止する。

(…勝てねえ)

一護は薄れゆく意識を辛うじて手繰り寄せる。だがそんな満身創痍な彼の正面に、白い自分が無慈悲に舞い降りた。

そしてヤツが青年の卍解の刀身を掴んだ直後。

「一護、半人前のでめえに

——俺たちの王たる資格はねえ」

少年が手にした魂の相棒は、敵と同じ白い剣へとその身を染めた。

「な……あ……」

斬月が、消えていく。唐突に身に降りかかった信じ難い現象を前に、一護は唾然とその様を見つめることしか出来ない。

少しずつ。自分の力の誇りであった漆黒の刀剣が、掌から崩れ落ちていく。それはまるで己の築いてきた全てを否定されるような喪失感。あのグリムジョーとの戦い以上に手も足も出ず、一護の心は絶望の闇に突き落とされた。

その時。

『——気付いて、あなた』

突然脳裏に声が響き、一護の視界が晴れる。そして目にした世界には、あの尸魂界を見下ろす光景が広がっていた。

「な……」

呆ける頭で周囲を見渡す一護。眼前に広がる広大な瀨霊廷の街並み。佇む固い岩肌の地面は崖のように途中で途切れ、正面には天へ聳える磔刑台。

双☒の丘。

先月ルキアを救うため、白哉と戦い、藍染に瞬殺されたあの因縁の地だ。

そしてその頂上に——白ずくめの女の子が立っていた。

「あ、んた……」

あの人だ。不思議なカギで力を与え、卍解会得の手助けをしてくれた仮面の少女。

彼の内なる虚の手綱を握る存在だ。

先日の破面ブレンカルの襲撃時に乱入し、暴走する一護の内なる虚を抑えてくれた、訳アリな藍染の部下。敵か味方か、一筋縄ではいかない謎多き人物。

そして、恐らくは幼い一護の思い出の、”本が好きなお姉ちゃん”と同じ人。

『…見て』

「！」

佇む彼女が徐に一護の後ろを指差す。細い指先を辿って振り向いた青年は、そこで思わず瞠目した。

”月牙：天衝ッ！”

真っ黒な天蓋、桜色の剣の列景、荒れ狂う闇色の霊圧。
その中央に、戦う二人の男がいた。

”その仮面：何者だ、貴様：！”

”何者だア？ 名前が知りたきや…白ホワイトとでも呼びやがれッ！！”

二人の名は朽木白哉と黒崎一護。ルキアを奪い返すときに立ち塞がった最大の敵との一戦だ。

だが、一護には眼前の展開の記憶がない。まさかと思いい目を奪われていると、後ろの少女が静かな問いを投げてきた。

『わかる？ あそこで戦うもう一人のあなたが誰なのか』

「あれが…俺…」

『朽木白哉を一方的に追い詰める、もう一人のあなた。あの子がどうしてあんなに強いのか、あなたにわかる？』

諭すような優しく、されど緊張を孕んだ彼女の声に、一護は思わず歯噛みする。

…あれは獣だ。

剣八のように戦いを愛し、殺しを愉しみ、理性も矜持も欠片も無い、

ただの暴力のぶつけ合い。母を失ったあの冷たい雨の日を二度と繰り返さないよう、誰かを護る力を欲し続ける一護にとっては、唾棄すべき邪道の戦い方だ。

だけど…

『あなたより、強い』

「ッ！」

少女の言葉は凶星だった。先ほど斬月の世界で散々思い知った白い自分の圧倒的な戦闘力。交わした刃に映ったヤツの心情は、一点の曇りもない、純然たる「戦」の一字だけだった。

あれが、本来あるべき強者の姿なのだろうか。

この漆黒の太刀を与えてくれた魂の半身が言う、仲間を助け、護るための戦い。その限界にぶつかった俺には、あの内なる虚を倒すことは出来ないのだろうか。

今まで歩んできた道の果てに突き当たり、一護の顔が悲焦に陰る。

『——あなたの道は、一つしかないの？』

だが俯く青年の耳に届いたのは、仮面の少女の何気ない疑問だった。

『あなたには幾つもの力があり、それらにはそれぞれ適した道がある。斬月さんが与えた力は理性の道で、あの子…虚のあなたが司る力には、また別の道があるの』

「それぞれ…適した道…？」

『あなたは本当に一人で戦ってるの？ あなたの力は理性で戦う斬月さん一つだけなの？ あそこで朽木白哉と戦うもう一人のあなたは、本当に…』

そして続く少女の言葉が、少年の凝り固まった常識を破壊する。

——あなたの味方になり得ないの？

その間を最後に、一護の視界はまたしても闇に吸い込まれた。

「——なっ!?!」

ハッと目を見開いた一護の前に、白い自分が驚愕の表情で身構えていた。周囲へ視線を飛ばせば元の精神世界の摩天楼が水平に聳えている。

そして握るその手には、元の漆黒に戻った己の卍解【天鎖斬月】が力強く握り締められていた。

「…行くぜ」

一瞬で現状を把握した一護。一直線に白い自分へ突撃し、青年は再三の彼との戦いに飛び込んだ。

「…チツ、封印が強まりやがったか。だがその剣じゃ俺は倒せねえつて——言つたはずだぜ一護オツ！」
「ぐっ…!」

「てめえはまだ理性で俺と戦おうとしてやがる！ そんなモンじゃ誰も斬れねえ！ 誰も殺せねえ！ 当然、てめえの新たな王となるこの俺もなアツ!!」

凄まじい剣技の応酬。新たな覚悟を胸に挑む一護は、されどまたしても徐々にもう一人の自分に後退を余儀なくされていく。

『——あの子は正しく、そして間違っている』

その時、不意にあの少女の声が脳裏に木霊した。

姿は見えない。だけど確かに、彼女は一護の背中を支える力となっていた。

『理性と本能。それは相反するものに見えるけど、本当は違う』

「あんた…」

どういう意味だ。一護は白い自分と戦いながら、無言で少女へ問い返す。

『理性は鎧。平時においてはあなたの仲間を傷付けない鞘となり、戦時においてはあなたの心を護る盾となる』

「心を…護る…」

すくと胸に落ちる言葉だった。多分、この場に斬月がいたら似たようなことを言ってくれただろう。

『斬月さんはあなたに理性で戦う方法を教えた。でもそれに不満と危機感を持ったのが、あの子』

「危機感…?」

『あなたはこれから、理性だけでは敵わない敵と戦うことになる。あの子はそれに気付いているの』

それは長らく内なる虚に悩まされていた一護の敵意を反転させる、新たな視点。

(そうだ、思えばこいつはいつも…)

凶悪な笑顔で絶え間なく斬撃を打ち込んでくる白い自分。一護はそれらを何とか凌ぎながら、彼の言動の裏の意図を可能な限り好意的に読み解いていく。

名前を知っただけで斬月をものにしたと勘違いする自分をバカにしてきた時も。白哉との戦いがあのままだと敗北に終わっていたと叫んでいた時も。そして今、内なる虚たる自分が何故強いのかを自慢している時も。

あいつはいつだって俺に正しいことしか言っただけだった。

「…そこだアツ！」

「なっ!?!」

蒙が啓かれた思いの一護は、攻撃を絶やさないう白い自分の一瞬の隙を鋭く斬り裂く。今までとは比べ物にならない迷い無き覚悟の一撃に、ヤツが初めて傷を負った。

それを見た仮面の少女が、脳裏でふわりと纏う空気を緩めた。そして次第に彼女の声は遠ざかっていく。

『あの子の声に耳を傾けてあげて。そうすれば必ず、活路は見える』
「なっ、ま、待ってくれ！ あんたにはまだ聞きたいことが…！」

だが伸ばした意識の手は彼女に届かず…

——頑張つて。

微かな激励を一護に残し、少女の気配は掻き消えた。

「——行ったか」

二人きりとなった斬月の精神世界。どこか遠くを見つめながら不貞腐れている虚の自分に、一護はもしやと声をかける。

「…気付いてたのか」

「当然だろ。わざわざ呼ばれねえと気付かねえてめえと一緒にすんな」

一々癪に障るヤツだ。苛立つ少年は、されど目の前の男の態度から薄々察するものがあつた。

そして口籠る一護の内心は当然のように見透かされる。

「知りてえか？ あの人のこと」

「…ッ、お前やっぱり…！」

白い自分の勝気な笑みに一護は思わず食い付いてしまう。

以前から予想はしていた。幼い頃にかけて貰った不思議な“お守り”、卍解修行の時に一度だけ解かれた封印、その後二度も暴れるヤ

ツを一瞬で大人しくさせた桃色の霊圧。

二人に何らかの関係があるのは十分考えられることだった。

「ククク、なら力づくで聞き出してみやがれ。俺を倒せたら、半人前のためえでも理解できる真実を一つだけ教えてやる」

「…チツ、そうかよ」

無論、こいつならそう言うだろう。どの道ここでヤツを倒さなければ永遠に虚の侵食に苦しむことになる。戦う目的が一つ増えたただだ。

「次で終いだ、行くぜ…！」

「ああ、急がねえと外のとめえがやべえからなア」

もつとも、これから行うのは獣同士の本能の戦い。一護は自身の魂の奥底に眠る本能を探し、目を瞑る。

かくして青年は内なる虚との最後の対峙へとその身を投じ…

「月牙——」

天衝オオオツ!!」

戦いを求める闘争本能の赴くままの、心無き虚たちの力の道を、遂にその手で掴み取ったのだった。

「…こいつは忠告だ」

——”運命” ってのはな、抗うより背負ったほうがためえのためだぜ…一護。

救出イイイイ！篇 奪還イイイイ！

こんにちは、雛森桃です。

職業は破面^{ブランク}の軍勢を指揮する軍団長。趣味はシロちゃんを曇らせて悦に浸ること。

そして特技は、寝坊とガバです。

「うふ、うふふ、ふひひひ——はあ…生で愉しみたかったなあ」

書類や機器が散らかる暗い一室で、画面の映像を食い入るように見つめる者がいる。そう、あたしだ。

先ほど、いや三日前。桃ちゃんホームの新入居者が羽目を外し過ぎて建て替えレベルの破損事故を起こしたせいで、あたしの完璧（）な愉快計画の予定表は木端微塵になってしまった。流石に当日の今から何かしたところで間に合うはずもなく、もうどうにでもなれの問題なあたしは只今、魂の半身飛梅ちゃんと共に最新の「シロちゃん成長記」を絶賛堪能中だ。

「あつ、ここ！ このシーン！ はあん、シロちゃあん…またこの時みたいな辛そうな顔でハグしてくれないかなあ…」

『お劳しや…主様』

止める飛梅、あたしを憐れむくらいならそこで君ん家の梅の木の養分になつてる桃玉をもっと深くに埋めてくれ。

悲愴な覚悟の決まったイケメン曇り顔のシロちゃんに抱きしめられるという素敵な展開。本来ならばあの「雛森イイイイ！」に準ずる屈指の愉快イベントだったのだが…

「いいなあ飛梅は、命の危機で何も覚えてないよお」

『…私もあの氷蜥蜴を潰すつもりだったのにあの石屑ももたまのせいで最初からそれどころじゃなかったわ』

「ホントよ！ 映像でも凄いことになってるしシロちゃん大丈夫かな…」

尸魂界ソウルソサエティの隠密虚ホロウたちの報告では、肉体は十二番隊の四肢結合技術で無事完治したようだ。

だがあのシーン最大のダメージは精神の方に入っている。

あれほど残酷な展開を見せてしまえば、あたしのシロちゃん分析でギリギリの精神バランスを見極めて練られた愉悦計画は修正を余儀なくされる。このまま本番でやりたい曇りムーヴをすると絶望させすぎて最悪あの子が廃人になりかねないのだ。

原作の彼が雛森ちゃんの不幸に曇る最後の空座町決戦は存分に愉しむつもりだったが、死に逃げが出来なくなった以上何らかのフォローは必要だ。だけど今の絶望状態だと総合的なシロちゃんの蓄積精神ダメージ量の問題で、あたしの最終奥義「二人は幸せなキスをして終了」でも立ち直れないかもしれない。

「どうしよう、決戦後に投降してシロちゃんのお嫁さんになってあげてもメンタル回復量足りるかな…」

『良き妻を演じて正常な愛情をたっぷり注いでやればいつかは復活出来るのでは？ 男子の心の機微なんて知りませんが』

「！」
ハツと目を見開くあたし。どうしても良さそうな声色に反して飛梅ちゃんの意見自体は大いに参考になる。ようは惚れた可愛い女の子が献身的に支えてくれる長期的なメンタルリハビリだ。これで回復しない男はいないだろう。

うん、これなら今を存分に愉しんでも大丈夫そう！ 千年血戦篇対策の破面軍再編制は夜シロちゃんが寝静まった後だって出来るしね！ 二足草鞋は護廷隊時代に嫌と言うほどやったもの。大丈夫だ、問題ない。

「ヨシ！ 計画はこのまま続行す——」

『その間ずっと桃玉の愉悦願望を抑えきれない自信があるのなら、です』

が』

「……」

……

「——うわあああん！ やだやだ『ごめんね…愛してるよ…』って言っ
てシロちゃんの腕の中で死んだふりしたいいいいい！」

『どうせ手加減したくとも途中で我慢できなくなつて全力出すんです
から、悩むだけ無駄です』

百五十年越しの悲願の残り半分を目前にして取り上げられそうに
なり、あたしは大いに咽び泣く。おいそんな末期麻薬中毒者みたいに
言うな。

『愉悦も人を精神的快樂の虜にする麻薬ですよ。…そんなことより
さつきから庭に埋めた桃玉がうるさいので厩肥を撒いてきますね。
失礼します』

「え、ちよ」

止める間もなく、おでこに青筋を立てた飛梅ちゃんがスツと消えて
精神世界へ帰ってしまう。主人が悲嘆に暮れてるのに桃玉虐めを優
先するとはなんて冷たい斬魄刀だ。一応は炎熱系の部類なのに。

あと桃玉は愉悦計画に使うからあまり汚物で汚さないで。

「はあ…いい加減現実見ないと…」

相談愚痴感想を聞いてくれる相手がいなくなったので、あたしは憂
鬱気分で『シロちゃん成長記』の映像を閉じる。そろそろ現世は夜。
下校して諸々の準備を終えた高校生死神の一護くんが虚^{ウエコムンド}圏まで織姫
ちゃんを救いにやってくる時間だ。

仕方ない。

やり損ねたことはいっぱいあるが、あたしの基本的な計画は未だ健
在だ。無論、相次ぐガバで全ての妄想を叶えることは難しくなったも
のの、一世紀半にも亘る準備はちゃんと揺るぎなくあたしが欲するメ
イン愉悦への道を示している。

後のことは、また後で考えればいい。大変なことになったら桃玉さんに責任を持って何とかしてもらおう。なんてったって『心に願いの道を示す』のが崩玉の真の力だからね。

壊れたシロちゃんのを心を正すりハビリの途中で暴走なんてするはずがないよなあ!?(威圧)

なおその確認に対する桃玉の反応は『——いやああああ飛梅を止めてえ!——』だったので、次回からあの玉を直接触ることは控えようと誓った桃ちゃんであった。

「——あ、あの。大丈夫ですか…?」

自室を後にし、執務室へ向かうブルーなあたしの背に女の声が届く。

霊圧で気付いていたが振り向いた廊下の先にはウルキオラと、彼を引き連れた栗毛の美少女。気付いたらここラスノーチエス虚夜宮に居た、本誌BLEACHヒロインの井上織姫ちゃんである。

うむ、低露出で禁欲的ながら見事なボディラインを強調する破面装束がデイモールトベネ。ウルキオラもちゃんとあたしの言いつけ通り立派な執事兼騎士風の振る舞いで彼女に接してようで何よりだ。全く。本来なら今頃は色々と準備を終えてゆつくりこの二人のいちやいちやを堪能できたはずなのに…

思わず顔が陰る桃ちゃん。

「…ごめんなさい、織姫さん。眠ってる間に色々とお世話になってしまったようで…」

「い、いえいえ！ 怪我が治ってよかったです。怪我は…」

何とか笑顔を作って見せると、織姫ちゃんが沈痛そうな表情で俯いた。彼女がここに居るのも「雛森さんが心配で…」という心優しきヒーラー気質による導きのようだ。うーん、これはまごう事なきメインヒロイン。

この大天使は、どうやら桃玉に振り回されるあたしのことを”非道な研究の実験台にされた女の子”だと勘違いしているらしい。

まあ実際桃玉の誕生秘話を思えば当たらずとも遠からずなんだけど、あいつらはあのシロちゃんハグで歓喜絶頂して主人を爆発させるくらい今の思念体人生を楽しんでるから、織姫ちゃんの心配はもつとチャン一とかウルキオラとかにあげて欲しい。

あたしの自爆の大怪我也桃玉の興奮が収まれば普通に超速再生しただけに、何て言うかこう、有難迷惑お節介というか、その時間でもつと別のことをして欲しかったというか。やはりこの世界でもウル織は読者の妄想で終わってしまうのか…（涙）

「軍団長」

「あ、はい。何でしょう」

内心嘆いているとウルキオラが「藍染様がお呼びです」と教えてくれた。どうやら彼は普通にあたしに用事があつて織姫ちゃんと同行していたらしい。ちえつ、ウル織妄想もさせてくれないのか。つまらん。

「藍染…様の呼び出し、ですか…」

「異を唱えるな、女。全ては藍染様の御心のままに」

「で、でも何で今…！ 雛森さん、怪我治ったばかりなのに…」

あたしがヨン様のトコに行くのと知って織姫ちゃんが過剰なまでに心配してくれる。なんかあの人、あたしのガバのフォローが踏み台のヘイト集めのついでになつてないか？ いやWIN-WINなら別にいいんだけど…

ふむ、しかし「何で今」か。

原作を知るあたし的には寧ろドンピシャのタイミングのお声掛けだ。丁度ぼっけの監視室連絡端末が振動してるし、モチベ上げにここ

は少しオサレポイントでも稼ぐとしましょう。

「……心配なく、織姫さん。あたしは大丈夫です」

「ッ、でも！」

「ウルキオラ、急いで彼女を宮のお部屋に。直にあなたにも召集がかかります」

猶予の三日が過ぎ、ザエルアポロの監視網からも予定通りだと報告が上がっている。こちらの思惑通りの状況は概ね整ったのだ。

「えっ、それってどういう……」

そして、困惑する織姫ちゃんへあたしが振り向いた、まさにその瞬間。

——開戦の鬨を、上げるんですよ。

我ら三人がよく知る霊圧がラスノーチエス虚夜宮の廊下を震わせる中、あたしは渾身の曇りドヤ顔で原作知識を披露した。

かの巨匠ル・コルビュジエであれば何と評しただろう。宮殿建築の代名詞とも言える華美な装飾の悉くが排除された、平面的で無機質なその大広間を、あるいは数理的な秩序哲学で構成された天上の調、などど詩的に称賛したかもしれない。

「——侵入者ラしいよ」

高い背凭れが天を突く、十一の椅子。大広間の中央に鎮座する長卓子を囲むそれらに、十人の破面が座っていた。

——”第9十刃”

ARONIERO ARURURIE

「侵入者ア？」

くぐもつた声を木霊させる細長い面の男へ訝しげに問い返すのは、筋骨隆々とした巨漢。

——”第10十刃”

YAMMY LLARGO

「二十二号地底路が崩壊したそうだ」

豪快に肘を突いて座る彼の疑問に、姿勢のいい浅黒い肌の男が無感情に答える。

——”第7十刃”

ZOMMARI RUREAUX

「二十二号？ また随分遠くに侵入したもんじやな」

三人の会話に失笑を零したのは別の男。腰をふてぶてしく椅子に埋める、嗶れ声の老骨だ。

——”第2十刃”

BARAGGAN LOUISENBAIN

「全くだね。一気に玉座の間に侵入してくれたら…面白くなったんだけど」

呆れる老人に同意するのは長袖の若い男。含みを持たせる笑みが、

そのどす黒い腹の内を語っていた。

オクターバ・エスバーダ
”第8十刃”

SZAYELAPORRO GRANZ

「ヒヤハハハ、そりゃいい」

青年の不穏な言葉が漂う卓子に、調子外れな笑い声が響いた。巨大な円形の衿を後頭部に聳えさせる、ツリ眼の巨人だ。

クイント・エスバーダ
”第5十刃”

NNOITRA GILGA

「うるせえな……こっちは眠イんだ。高え声出すなよ」

劈くような狂声に隣席の男が顔を顰めあくびを零す。肩長で揃えられた黒髪に無精髭の二枚目。

プリメーラ・エスバーダ
”第1十刃”

COYOTE STARRK

「…前回の任務以後から雛森様の霊圧を感じない。何か知らないか」
面の男の横に、若い色黒の女が座る。低く無感情な声ながら、そこには微かな困惑が滲んでいた。

トレス・エスバーダ
”第3十刃”

TIER HARRIBEL

「ハッ、あのご高名な軍団長サマが死神如きにやられるタマかよ」
女の疑問を一笑するのは青髪の青年。乱暴に開かれた胸元の大痣が、宛ら戒めにも勲章のようにも見える。

セスタ・エスバーダ
”第6十刃”

GRIMM JOW JAEGER JAQUES

「騒ぐな。すぐにわかる」

最後の一人が口を開く。病的に白い肌、黒い唇、一切の生気を感じないその男はまるで石像のように自らの椅子に鎮座していた。

——^{クアトロ・エスパーダ}第4十刃——
ULQUIORRA CIPHER

各々自由気ままに座る会議卓子。桁外れな霊圧が一带に満ちる。彼らの名は”^{エスパーダ}十刃”。種の壁を超越し、死神の力を得た幾百の破面の中でも最も力ある者と認められた、十人の怪物たち。

そんな破面の頂点らが一堂に会する大広間に、四つの足音が響いた。集う破面たちは揃い大扉へ振り向く。

最強の名を冠す彼らでさえ思わず力むほどの、途轍もない霊圧。誰もが口を閉じ、首を垂れるその四人の中央に：王がいた。

皆をこの場に集めたその王は、まるで散歩に行くかの如き気楽な甘いバリトンで、自らの権勢の始まり以来の大事を宣言した。

「お早う、^{エスパーダ}十刃諸君。敵襲だ」

——先ずは紅茶でも淹れようか。

会議イイイイ！

大広間に十刃^{エスパーダ}および尸^{ソウルソサエティ}魂界離反組隊長格が揃った。鯉ファンなら堪らない本編屈指のオサレシーンである。

ガバのダウナー気分から大きくテンションを持ち直せたので、あたしはあの有名な会議扉絵そっくりの光景を穢さないように目立たず隅っこに引っ込む。今更な転生者ジレンマだけどここに加わると異物感が半端ないのだ。あたしは紅茶に一工夫するくらいで十分自己満足に浸っている。

だがしれっと市丸の横に控える従者モードのあたしを放置してくれないヤツがいた。原作会議の十一人が座り、一呼吸ついた時だった。

「——おや、席が一つ足りないな」

ヨン様がワザとらしくテーブルの周囲を見渡し不満を口にする。そしてオサレな指スナップの直後、テーブル奥のヤミーとアールニール口間にスツと床から十二席目の椅子がせり上がった。

：ちよつと待て何だその特別感。

「さあ、桃。君の席だ——」

我々の会議に加わりなさい」

まさかと思つたら案の定、ヨン様がお得意の何かを含むような感じにあたしをテーブルに呼び寄せる。くつ、自分で用意させた会議卓のクセに、こんな演出まで仕込んで場の一同にあたしの会議参加を印象付けさせるなんて。これも日々の彩りの抜き打ちOPBなのだろうか。

：フン、だがそう言うことならあたしにも考えがある。図らずとも彼のオサレマウントへの反撃のようになってしまったが、あなたの台

詞通り：先ずはあたしが淹れた紅茶を飲んでほしい。

ここで桃ちゃん雑学タイム。

ウエコムンド 虚圏やホロウ虚たちがスペイン語モチーフなのは周知の事実だが、本誌で描かれた紅茶のカップはスペイン語と無関係なトルコ風のチャイグラスだった。あたしも最初「なんで？」と首を捻ったが、これは恐らくスペインとトルコで同じイスラム文化圏繋がりという師匠のオサレな捻りだと思われる。ラスノイチエス 虚夜宮もモスクっぽいし。

中東はヨーロッパほど紅茶文化がセレブチックに洗練されているわけではないが、宗教的に嗜好飲料の多くを禁じていたり、地理的に中国インドからヨーロッパへの紅茶輸送航路の中継地点だったり、実は歴史的にも世界一紅茶が愛されてきた地域である。

原作ヨン様が十刃会議で破面たちに紅茶を振舞ったのは、“欧州セレブ的な余裕の演出”などという安直でダサイ理由ではない。あれはキリスト教勢力スペイン王国とイスラム教勢力アル・アンダルスという複雑な勢力争いの歴史を今の虚圏の状況に当てはめた、つまり死神が虚を支配している現状への皮肉、十刃たちへの挑発だったのだ。

ヨン様がウエコムンド虚圏モチーフ・スペイン語圏で特に好まれるコーヒーやワインを敢えて避けたのも、それらが全盛期スペイン帝国の植民地政策イキリ時代の象徴だからかもね。

あの「先ずは紅茶でも淹れようか」の一言にこれほどの奥深さを感じさせる男、まさに作中で他の追随を許さない究極のオサレマスターなり。

…さて。ここでヨン様の台詞をただ安易に「はいはい紅茶だからセレブなイギリス銘柄ね」と脳死解釈して、F&Mあたりの現世の有名英国ブランドをドヤ顔で淹れてしまえばどうなるか。言うまでもなくあたしのOSR値は大幅に低下するだろう。

なので、ここは原作で出たティーカップと同じトルコ風にリゼ産の紅茶を選んだ。淹れ方はもちろん二段重ねポットチャイダールックで煮出し、下段ポットのお湯で濃さを好みに調整。最後に甘い角砂糖を二個ソーサーに

添えたら、パーフェクトなイスラム風チャイである。

リゼ紅茶の落ち着いた香りに重厚な渋み、そして何より美しい真紅のマホガニーの水色^{すいしよく}。それを一口含んだヨン様はミリ単位に眉を上げ、チラリとあたしに感心したような流し目を送ってきた。桃ちゃんはクールに微笑み返す。

フツ、勝ったな（何に）

「――では要、映像を」

さあ、あたしの一勝一敗となつたところで会議開始。DJの操作でテーブルの中央にホログラムが映り、その三人の侵入者の姿を見たグリムジョーが息を呑んだ。

「黒崎…一護ッ！」

「へえ、まだ生きてたのかコイツ」

グリムジョー含む何人かがあたしの方へ目を向ける。これはあれかな、あたしが二度も見逃したお気に入りだとも考えてるのかな。

「軍団長。このガキはお主が消したんじゃないやなかったかの？」

やはりバラガン爺に厭味つたらしく突っ込まれた。これに慌てて答えると言いついたいでダサイが、一回だけ意味深にヨン様へ視線を向けてワンクツション入れた後なら途端に訳アリ感が出て、オサレポイントが跳ね上がる。有効なOPBスキルだ。

「…黒崎一護の始末はウルキオラに任せると前の報告会で藍染様がお決めになりました。あたしがあの人を倒すのは越権行為です」

「フン、ならば致し方あるまい」

あたしの高OSR値がバラガンを引き下がらせレスバ勝利。またこの言い訳はウルキオラ嫌いのグリムジョーを原作通り反発させて一護へ向かわせる布石でもある。ぐぬぬジョーには悪いが頑張つてウル君の前座となつてくれ。

「…ケツ、所詮藍染サマに生かされてるだけの雑魚じゃねえか。ウルキオラ一人で十分だろ」

「そそられないねえ、全然」

「ビヤハハ、面白エ！ 人間のガキ三匹で一体何が出来るってんだア？」

見事なフラグ建設に勤しむ一部の十刃たち。これも敵キャラの定めなのだろう。

なおそのフラグ職人たちの一人ザエルアポロはあたしに妙なアイコンタクトを送ってちやつかり反転OSRフラグを立てている。大丈夫、鬼門はマユリ様だからまだあと半日ほどラボ移転の痕跡を消す時間がある。

「侮りは禁物だよ」

そんな部下のOSR値マイナスを自分のOSR値プラスに利用していくヨン様。一護たち四人の戦いの軌跡を称賛することで慢心はないとアピール。何というオサレの無限機関か、ズルい。

「四人？ 一人足りませんね。残る一人は？」

ゾマリさんの数少ない原作台詞。その問いにヨン様が笑みを深め、ウルキオラが…あれ、何も言ってくれない。

仕方ないのであたしが「井上織姫です」と答える。

「へえ、仲間を助けに来たってワケかよ。いいんじゃねえの、弱そうだけどなア」

「…聞こえなかったのか、藍染様は侮るなどおっしゃったはずだ」

相変わらずの一級死亡フラグ建築士なノイトラを窘めるハリベル。これだけなら油断無き忠臣感があってオサレなんだけど…

「ああ？ 別にそういう意味で言ったんじゃねえよ。ビビッてんのか？」

「…何だど？」

ああもう…そこでそうダサイ返しをしちゃうから原作で戦績悪いんだぞハリベル！ せっかくヨン様が近くににいるのに君は一体何を見て来たんだ。彼ならクスツと笑って「すまないね、私の答えでは君の本音を隠す森にはなれない」みたいなカウンター挑発で高ポイントを稼いだだろう。

あたしがこの世界でもハリベル戦のシロちゃん善戦を確信していると、バン！とテーブルを叩いたグリムジョーが会議終了を待たず

に席を立った。熱血せつかちライバルかな？

「どこへ行く、グリムジョー。藍染様のご命令がまだだ」

「その藍染サマのためにヤツを殺しに行くんだろうがッ！」

DJと言いつ争うGJ。原作通りのいい流れなのであたしはこっそり大広間の監視装置をヨン様の顔のアップにさせる。むふふ、そろそろあの名威圧シーンかな。あれはそのあとの台詞もくっそオサレなんだよなあ。

さあ、いつでもOKです藍染隊長！

「桃」

…ん？ なんすか隊長、もう録画始まつてるんですけど。突然名を呼ばれあたしは顔を上げる。

だがヨン様は呑気に紅茶を飲むだけで、奥のグリムジョーはすたこらさつさと出口へ向かつて行く。え、ちよ、よ、ヨン様？ 「桃」ってあたしが引き留めろつてこと!?

あつ、あつ、まつ、待つて、グ——

「グリムジョー」

日頃の演技力のおかげか何とか平時と変わらない雛森ボイスが出てくれた。よ、よかつた噛まなくて…じゃなくて！

「…はい」

GJJJJが舌打ちしながらあたしへ振り向く。え、ど、どうしよう…ホントにあたしがやらなきゃダメなの？ 軍団長だから？ 部下の手綱くらい握れつてこと!?

不味い。グリムジョーが黙るあたしにイライラしてる。

え、えと、この後の台詞は確か…

「…藍染様を思うあなたの忠義は見事です。ですが今はまだ会議の途中。座ってください」

足りない！ OSR値が！ ヨン様の台詞をかつこよく言えるだ

けのOSR値が足りない！

だがグリムジョーはここが正念場だと言わんばかりにあたしを睨み付けてくる。ダメだ、完全に場が整ってしまった。

ああ、もう！

「……………どうしたの？」

こうなったら【口調変化】と【霊圧威服：全体】のOSRボーナスで底上げするしかない。ごめんみんな、今肥溜めに埋まってる桃玉から霊圧引き出すから、ちよつとだけ耐えてて！

おら！　すごいれいりよく　だせ！（ゲシゲシ

『——やめたげてよお！——』

よし、さあ往くぞ！

「返事が聞こえないわ——」

グリムジョー・ジャガージャック

『ガッ——!!?』

ゴゴゴゴとえぐいくらいの地響きが大広間に木霊する。思えば桃玉安定後に霊圧を放つのは初めて。それでも崩玉の本能的な感覚で超越者の領域を見極め、皆に感じられるよう一步留めた状態で辺りに撒き散らした。

一瞬でグリムジョーが膝を突く……どころか床に這い蹲り、席の十刃たちもテーブルにつつぶしガクガク痙攣している。ティーカップが粉々に砕け散り赤い紅茶が大惨事になったところであたしは慌てて霊圧を引っ込めた。

も、もう勘弁してくださいヨン様！　最後の台詞、最後の台詞だけはあなたのOSR値でしか言えません！　ボタンタッチぷりーず！

そんな縋るような目を、一人だけ無傷なカップでチャイを楽しんでるヨン様に向けると…

「——そうだ。わかってくれたようだね」

やれやれとでも言いそうな眼つきで、ヨン様が背後に座り込むグリムジョーへ肩越しに声をかけてくれた。

「はあああんヨン様かつこいいい！ オサレ！ やつぱ格が違うわ流石。ホントありがとうございます、助かりました…」

わかるよね、この台詞のオサレポイント。座って話を聞けと命じたら誰だつて”席に”座ることをイメージするのに、ヨン様は”座る”という行為そのものでOKを出して話を再開させたのだ。それも相手に土下座というくつそ情けない姿を晒させたままで。

この手の言葉遊びは大いに参考になるからみんなもちやんと学ばんだゾ。ヨン様ありがとうございます！

…あれ、でもそもそも彼が自分でグリムジョーを叱咤していればあたしが抜き打ちOPBに苦しむこともなかったんじゃない？

……おのれデイケイドオオオ!!

「——十刃諸君」

そう内心頬を膨らませるあたしを放置し、ヨン様が会議のメに入る。

「見ての通り敵は三名だ」

『……』

「侮りは不要だが、騒ぎ立てる必要もない。各刃自宮に戻り、平時と同じく行動してくれ」

脂汗が滲むも構わず、破面たち皆が彼の顔を見上げていた。何が起ころうと言葉一つで周囲の注目を集め魅了する。

「驕らず、焦らず、ただ座して敵を待てばいい」

それは読者チートの養殖オサレキャラなあたしには決して持ち得ない、まさしく覇者のみが有する王のカリスマ。

彼の席に置かれた白磁が、割れたカップと紅茶で散らかるテーブル

中でただ一つ、神秘的に輝いている。その光景はまるで崩玉を埋め込んだ雛森桃の狂氣的危険性と、それを唯一御する主という、意味深なメタファーにも見えた。

：もしかしてヨン様はこのシーンを作りたくてあたしにグリムジョーを叱らせたのだろうか。

OPB脳なあたしは思わずそんなバカなことを考えながら、先ほどの憤慨も忘れ、一人藍染惣右介のカリスマに感動していた。

「恐れるな。たとえ何が起ころうとも、私と共に歩む限り」

——我らの前に、敵は無い。

男爵イイイイ！

「――経過は順調ですか？」

清々しい現世の朝日に照らされる鳴木市。その地下に設けられた毎度おなじみアジトはこの日、死傷した破面たちの再生治療にフル稼働していた。

あたしは最終確認のため有能姉貴ロカえもんが管理する施設を訪れ、チャン一たちにボコられた破面たちの様子を確認する。

「…はい。新たにアイスリンガー・ウエルナール様、デモウラ・ゾツド様が治療室で戦線復帰準備中です」

ロカの報告ではあの閑職門番コンビは運よく地底路崩落から生き残れたようだ。特に有能アイスリンガーくんはあたしの密かなお気に入りなので無事で桃ちゃん安堵。

二人とも、オサレ師匠神の定めし宿命の全う、本当にご苦労様です。
「現在ドルドーニさんとガンテンバインさん、チルツチさんの
フリバロン・エスパーダ
”十刃落ち”三名が侵入者の迎撃準備を行っております。敵はかなりの強敵ですので新たに三人分の治療室を直ちに用意してください」
「…畏まりました」

まあ既に破面軍の半数は収容できる治療室がこのアジトに作られてるんだけどね。大体五十室くらい。

問題は魂魄再生室。こっちは死亡した破面を魂魄の靈性因子から再生し、云わば半クローンみたいな形で復活させる方法だ。これを行うには崩玉の力が必要不可欠なんだけど…

（あたしの崩玉、桃玉なのよね…）

あのガバの温床が本当にヨン様崩玉のような素敵な願望器なのか、ひっじょおおおに疑わしい。とにかく何としても十刃^{エスパーダ}は絶対再結成させたいので、先に何度か桃玉で実験をしないと不安なのだ。

そして今。ようやく準備が終わったと報告を受けたあたしは、一人実験のため極秘施設に入室する。そこには一月前の戦闘で回収した破面魂魄の霊性因子と、一体の改造最下級大虚^{ギリアン}が結界の中に横たわっていた。

「…行くわよ、桃玉」

『——いざ名誉挽回の時！——無能の烙印を捨て去るのよ！——うお おお厩肥地獄からの脱出ううう！——もう臭い汚い生活は嫌あ…——』

中々のモチベに期待し、あたしは自分の魄内に意識を向ける。この方法がダメだとザエルアポロが主導する小説のシエン・グランツのよくな完全クローンとして復活させるしかなくなるのだ。絶対に成功しろ（威圧）

膨大な霊圧を注ぎ込みながら、欲しい現象を心に想起し…今っ！

『!!』

ぺかーと結界内に光が満ち、ワンダーワイスの時と似た感じに爆発が起きる。そして漂う煙の中に一つの霊圧を確認したあたしは思わず微笑んだ。

何せ桃玉を手にして四日目（その内三日は寝坊）でようやく原作初期の崩玉らしい使い方が出来たのだ。流石腐っても崩玉、ウチのガバ玉もたまには役に立つらしい。後で火ばさみで肥溜めから出して洗ってあげよう。

「…軍…団長？」

そして、しばらく呆けたように辺りをキョロキョロしていた実験体の破面がこちらを認めた瞬間、あたしは実験の成功を確信した。

「お帰りなさい。二度目の生はいかがですか？」

——デイ・ロイさん。

さて、懸念事項が一つ片付いたとは言え、まだまだ午前中にやるべきことは山ほどある。具体的には本誌連載期間一年五ヶ月分のイベントだ。

現世のアジトを離れウエコムンド虚圏へと舞い戻る。そろそろネルを一護と出会わせなくてはならない。久しぶりに彼女を表舞台に出せて桃ちゃんうれし。

「天挺空羅」

あたしは虚夜宮ラスノーチエスへ戻る途中に砂漠の守人ルヌガンガに指示を飛ばし、虚圏の砂漠で遊んでいるネルたちを一護の到達予定地点へ追いつける。彼女はノイトラの不意打ちで”第3十刃”トレス・エスパーダの地位を失ってかみならずとこちらの監視下にあるため誘導は容易い。

「———ですか、ネリエルさんは」

ラスノーチエス虚夜宮に着いたら早速ザエルアポロの監視室で様子を確認する。訪れた彼の研究所は見かけは普段と変わらないが、内部のデータや各種研究資料は全て現世アジトへ移動済みらしい。

「ええ、先ほど黒崎一護と接触しました。今はルヌガンガと戦闘中です」

「あ、もうその段階なんですね！ よかったあ……」

よしよし、これで原作通りにイベントが進みそうだ。そう安堵していると隣でザエルアポロがオサレなベルを鳴らした。

「ルヌガンガが倒されたか。僕の従属官フラシオンに回収させましょう」

「お願いします。あの人の能力は便利ですから」

砂巨虚に彼女らを一護たちの所へ追い込むよう囁いたけど、何とか原作に似た展開で主人公組&途中参加の恋次ルキアと合流出来たようだ。あとはネルのヒロインムーヴに期待ですね。

おっと、そうこうしてるうちに早くも一護たちが虚夜宮ラスノーチエスに着いてしまった。

「侵入は壁を突っ切って進むようですね。サル、いやイノシシ以下の知性とはなんとも…」

「誰が修復すると思ってるのよ…」

この頃の一護ってまだ初期のイキリ高校生みたいなふてぶてしさが残ってた最後の時代代と思う。ちつ、貴重なシーンに免じて許してやるか。

まあどの道また二年したら滅却師クインシーの襲撃があるから、原作終了まであの穴は多分放置だ。すまん、壁。

その後一護たちは順調に進み、五つに分かれる通路の広間へと入る。ちゃんと原作通りにあたしが設計に口出しして再現しておいた部屋だ。

「どうやら五手に分かれる様子。こちらの先鋒は”プリパロン・エスパーダ十刃落ち”ですか…ドルドーニとはまた懐かしい」

「ネリエルさんとの昇降戦からもう十年ですからね。ザエルアポロさんは親しかったんですか？」

「ははは」

何わろてんねん。確かに性格合わないだろうけど。

「…さて、僕はまだラボの後始末が残っておりますのでここで失礼させて頂きます」

「あ、そうですね。あたしも現場に向かいます。…ラボ侵入者用の報復はほどほどにしてくださいね？」

「ええ、ご心配なく。浦原喜助の研究を持ち帰らせて満足させる程度

に止めますよ、ククク」

「どうやらヨン様が百年前に奪った浦原さんの研究資料をあたかもここで研究されていたダミーとして、ラボを漁りにくるマユリ様に下げ渡す作戦らしい。こちらの懐は全く痛まず、マユリ様は憎きライバルの大昔の研究をそうとは知らずホクホク顔で持ち帰り、あとで浦原さんに指摘され大恥をかく。見事に悪質な嫌がらせ、流石っすね。」

「ゲス笑いを浮かべるザエルアポロと別れ、あたしは虚夜宮外宮にある”三桁の巣”^{トレス・シフラス}へ忙しなく移動。そろそろ軍団長として仕事をし
てるフリをしないとDJあたりに怒られちゃう。」

「そして遠くに一護 v.s. ドルドーニ、石田 v.s. チルツチ、チャド v.s. ガンテンバインのカードが揃ったことを霊圧感知で確認したあたしは、安堵に一息つく。」

「さあ、まずは初戦のドルドーニ戦の負傷者を回収するついでにこっそり観戦だ。もうガバはしないからな！ 絶対だゾ！」

「BLEACH有数の迷シーン【俺は正解しねえ！】^{あたし}を読者に見せてくれ、一護！」

「…やれやれ、ママンに教わらなかつたのかね？」

——人を見かけで判断するな、とな。^{ニーニョ}坊や？

大廊下の天井。列柱から足を踏み外し落下してきたその口髭の三枚目は、そんな台詞と共に青年・黒崎一護の前に立ち塞がった。

かつて十刃の地位にあった者——”十刃落ち”。

プリバロン・エスパーダ

そう自らの階級を名乗った破面ドルドーニ・アレックスサンドロ・デル・ソカッチオは、当初のおちやらかした態度を改め別人のように洗練された足技を繰り出し一護を追い詰める。

「反応は鈍い、防御は脆い、足元の変化にすら対応できない」

「——ぐあアッ！」

「まるで赤子の戦いじゃないかね、えエ？」

通路から巨大な広間の壁へ蹴り込まれた青年。苦痛に呻く彼へ溜息を零し、ドルドーニが静かな挑発を投げた。

「卍解、したまえよ」

「ッ」

ピクリと一護の肩が跳ねる。だが青年には矜持があった。

「…嫌だね。」プリバロン・エスパーダ “十刃落ち” ってこたア、つまりてめえは十刃じゃねえんだろ？」

「…そうだが？」

「だったら尚更だ！ 十刃でもねえ連中に、一々卍解なんか使つたらねえんだよ！」

矜持だけではない。これから一護が相手取るのは、最悪十刃の全十名。強敵との連戦を前に余計な霊力の消耗は避けねばならなかった。

「…なるほど、ならば私からも一言言わせて貰おう。

舐めるな、小僧」

だが、不遜なプライドに引き摺られたその戦略は、悪手だった。

「旋れ！」

——ヒラルダ 暴風男爵 ——

破面の斬魄刀解放、レスレクシオン 帰刃。巨大な霊圧の噴出の後、一護の目の前

に二つの青白い竜巻が姿を現した。

「構えろ、坊や！」

「なっ——がはアアツ!？」

突如現れた虚髓の嘴。霊圧の暴風を推進力としたその変幻自在な攻撃に襲われ青年は為すすべなく蹂躪される。

それでも意地で卍解を封じる彼に、落胆の溜息を吐くドルドーニが止めの虚閃セロを放った。

その時。

「一護お！」

「な、ネル!？」

突如乱入してきたのは、不本意ながら連れてきてしまった破面の童女。しかし身を挺した蛮勇かと思われた彼女は、なんと敵の攻撃を呑み込み、吐き返したのだ。

「一護に…ひどいこと…するなっす！」

『!!?』

誰もが全くの無警戒で、当然の油断を突かれたドルドーニが大きく負傷する。だが故に、彼の胸中より慈悲の二文字は消え去った。

「——」人を見かけで判断するな。か…忌々しくもその通りだったよ、嬢ちゃん」

直後、真紅の光弾と共に童女の体が弾き飛ばされた。

「あぐっ…!？」

「ネル!!」

「少々おいたが過ぎるようだな…失せたまえツツ!!」

迫る破面の男の追撃がネルを襲う。

白い嘴。動けない童女。間に合わない始解時の瞬歩。

仲間の絶体絶命の危機を前に、一護は咄嗟に体が動いていた。

「…そんなに見たけりや、見せてやるよ」

——卍解・天鎖斬月——

思えば何とくだらない意地を張っていたものか。その小さい体を投げ打ってまで守ろうとしてくれた子供が側にいるのに、手を抜き護るべき者を危険に晒すなど。

敵のお望み通り力を解放し、一護は憤怒と共にドルドーニと対峙する。

「――まだ、上があるだろうか?」

しかし、それでも男は未だ満足しなかった。

事前にこれまでの戦闘記録の閲覧を許されていた”十刃落ち”たる彼は、一護の最強形態【虚化】を望んだ。それは先ほど青年が抱いた矜持と同じ。もつとも大切な誇りに従い、破面の男は無慈悲に一護の誇りを傷つけようとする。

「恥は…ねえのかよッ!!」

「有るとも!! 吾輩の恥は、本気の坊ニニヨやと戦えぬことだアッ!!」

繰り出される無数の竜巻。それらが狙うは、青年の護るべき仲間、ネル。

一護とドルドーニ、互いの恥は同じく一つ。それ以外の恥など無きに等しいと叫ぶ破面の想いを、青年はじっと見つめていた。そして。

「…そうかよ」

黒崎一護は、その剥き出しの本能を仮面で隠し、ドルドーニと同じく己のたった一つの誇りで以て敵の想いを打ち砕いた。

一閃。

身体には力が満ち、心には勝利の意志が満ちていた。されど男たちの意地と誇りの戦いは、その一撃であっけなく幕を下ろした。

完敗だ。侮れない強者とは言え些か邪道に命を狙った童女に傷を癒され、敵の青年に見守られ、ドルドーニは清々しいほどに彼らに屈服させられたのだ。

「強いな、坊やは」

「…そんなことねえよ」

青年の謙遜が胸を打つ。ああ、やはり、これが”彼ら”の戦場なのか。

「…吾輩は、十刃に返り咲きたかった」

敗者の泣き言、精神まで屈したか。長年の悲願が口から零れ出る。藍染殿の野望を叶える破面軍の主力、十刃。されど彼らは、否我らは、果たしてあの霸王にとって一体どれほどの価値があると言うのだろうか。

天より見下ろす神は絶対だ。藍染惣右介への忠誠は揺るぎない。だが。

「坊や。君は初めて我ら虚を見たとき、どう思った」

ドルドーニは問う。優しく、そしてチョコラテのように甘い人間の青年に。

「不気味であつたろう。その姿は怖ろしく、霊圧は禍々しく、そして心は空虚に凍えている」

「……」

「失った何かを永遠に求める堕ちた悪霊。人間の、死神の宿敵。負の思いを抱くも当然の存在だ」

青年は眉を顰め黙秘する。それが彼の答えなのだろう、是非もない。

だからこそ…

「——あの方は、違ったのだ」

理性を手にし、慈愛の甘さを知ったドルドーニは、やはり心のどこかで真の忠誠を捧ぐ主を別としてしまっていたのだろう。

「今でも思い出す。虚だった吾輩が謁見を許された時の……あの輝くような琥珀色の双眸を」

「……」

「死神でありながら、虚の吾輩に『初めまして』と……『よろしくお願ひしますね』と……まるで同じヒトを前にするかのような親しきで快く部下に迎えてくれた、あの感動を」

ドルドーニの語りに青年が目を見開く。慈悲深い彼にとっても、その有様はやはり信じ難い”特別な”ことらしい。

「見ただろう、この虚^{ウエコムンド}圏の死した大地を。鉱石の枯木が疎らに生える虚無の地獄を。あの方はそこに……梅の花を咲かせたのだよ」

「……」

「毎年、暮れになると一杯の琥珀色の美酒が皆に振舞われる。あの方の瞳と同じ色の……甘い、甘い、極上の果実酒だ^{リコール}」

それだけではない。死神の祖国より持ち込んだ豊かな土壌に種を植え、草木を芽吹かせ農園を開墾し、外界の美食を美酒を、見事な衣服を霊子で再現させ、我ら破面たちに与えたのだ。獣^{ホロウ}から人^{アランカル}になつたあなたたちの知るべき幸福です、と可愛らしい笑顔で微笑みながら。

そんな”特別な”お方の最も側にいられる場所が、十刃。

「あの場所は堪らなく心地よかつた……」

溜息と共に零れる本音。それは自分でも驚くほどに切なげで。

「吾輩は全力の坊^{ニニコ}やを倒せば、またあの方のお顔が見れると……あの方のような笑顔を向けて頂けると……そう考え君に虚化を促した」

——そしてその虚しい思いは、未だ変わらないのだ。

「ッ、てめえ……」

「ハハハハアツ！ 敵の傷を癒すならば反撃を受ける覚悟もしたまえよ！」

死力を尽くし、男が立つ。

「止める！ まだ動けるほどには回復してねえだろツ！」

「傷とは気構えに負うものだよ、坊や！ 戦う意思さえ回復すれば、体の傷など取るに足らんツ!!」

優しき青年が、必死に止める。

「それがチョコラテのようだと言うのだ

——坊やオオツ！」

かくして男の足掻きは、その忠義の刃の切先を、慈悲深い侵入者の胸に突き当てた。

「——見事な戦い、ご苦労様でした。ドルドーニさん」

ああ、我らの愛しき…

ヘネラーリヤ
軍団長…

対峙イイイイ！

ドルドーニを回収したあたしはすかさず桃ちゃんラボの黒腔ガルガンタへ向かい、現世のアジトへ彼をおんぶで丁重に送り届ける。ドレス死覇装の素肌の肩におじさんの顎ヒゲが触れてくすぐったいけど、今日くらいは許してあげましょう。

迎えの従者破面にドルドーニを預けたらとんぼ返りでチルツチの所へ行く。あそこでは今作中有数のオサレバトルが繰り広げられているのだ。絶対に見に行かなくてはならない。ガンテンバインの方はノイトラが介入の隙を窺っているので、邪魔にならないよう回収は葬討部隊にお任せだ。

舞い戻って”三桁の巢”トレス・シフラスのチルツチちゃんルーム。ドルドーニと違って彼女とガンテンバインはついこの間まで十刃だったプリバロンド。ちなみに後任は浦原崩玉で再覚醒したノイトラとゾマリです。

「——わからないなら教えようか。君の羽と僕の【魂を切り裂くもの】の霊子振動数には、倍以上の差があるってことさ」

こっそり入った列柱の間では、ちょうど石田くんとチルツチちゃんが切り札を披露し合っていた。

おお、このシーンは……！

「…そう。要するにあたしの羽は、もうあんたに通用しないってことね？」

「ああ、そうだ」

無情な青年の明言にチルツチが小さく深呼吸をする。

「……オツケー」

彼女がそう頷いた直後、その巨体がゴトリと分離した。折れた羽と巨大な両手が無造作に床に転がり、女破面は連獅子のような荒々しい

長い毛髪と尻尾を残した人型へと変化する。

「…その解放状態がそんな風に着脱自在なものとは思わなかったよ。君たち破面は全員そうなのか？」

石田の問いにチルツチが苦い笑みで答える。額を流れる脂汗が痛々しい。

「…自在じゃないわ、捨てたの。」

——二度と元には戻れないわ」

彼女の言葉に滅却師クイーンシーが目を見開く。

「あたしたち破面の斬魄刀は、虚本来の攻撃能力を刀剣の形に封じ込めたもの。帰刃レスレクシオン状態からそれらを元の斬魄刀に再封印せずに捨てることは、自ら腕を焼き切ると同じこと」

「な…！」

「あたしの【車輪鉄燕ゴロンドリーナ】、燃費悪くってさア。だからこの腕も羽も、あなたに通用しないってんなら全部捨てて…」

そしてチルツチが自らの尻尾を天へ掲げた。

「——その分の霊圧を一個に纏めたほうが、マシ」

二又に分かれた尻尾の切先で霊圧が扇状に凝固する。これまでにない力の密度、ギラつく眼光は彼女の覚悟の固さの表れ。我が身の犠牲を厭わぬその決死の想いに気圧され、石田は思わず悲憤に声を荒らげてしまう。

「ツ…君たちにとってこの戦いは、そうまでして勝たなければならぬものなのか…!？」

青年の問いに笑止と呆れる女破面。

「あつたま悪いんじゃないの、あんだ。勝たなくていいなら最初から戦争なんて起きやしないのよー！」

当然だ。道理に疎い子供の石田でも理解出来ること。顔を歪める甘ったれたガキへ、チルツチが己の矜持を言葉にする。

「破面は兵士よ。十刃はその頭領。たとえ”二”だろうとその責任アランカル
エスパーダ

と誇りは変わらない」

「…ッ」

「敵を殺し、勝つために生まれた存在。許された敗北なんて…」

そして束ねた超高密度の霊圧の刃を振り翳し、女破面は自らの役割を全うせんとその命を投げ打った。

「——どこにもないのよッ！」

…はあああ、かつこいい。かつこいいよチルツチちゃん。

それまでのギャルっぽい勝気な態度と、ギャグ空間での転倒顔面ダイブからのブチ切れ刀剣解放というマイナス要素を、全てプラスに反転させるオサレな自己犠牲型パワーアップ。

これにはOSR警察のあたしも思わずニツコリ。

ドルドーニもそうだったけど、やっぱ古参の破面は長らくヨン様を見てるからかオサレな人が多い気がする。中でもこの世界のチルツチちゃんアジュウカスは中級大虚から最下級大虚ギリアンに退化しそうなところをヨン様の破面化で救われた経緯があるからね。ここまで体を張れるのも恩と忠義のなせる業だろう。まさにオサレ。

だが。残念ながらその自己犠牲戦法は既に目の前の敵が過去に使った、ある種のマンネリ手段であり…

「少し勘違いをしているな。【ゼーレシュナイダー魂を切り裂くもの】の本質は武器ではなく補助具。斬った霊体の霊子を奪いやすくするためのものだ」

「なっ、あたしの霊圧が…！」

まあ流石に前座キャラのチルツチでは、あの有名コピペを世に放った石田雨竜に勝つのは無理ですね。

彼は”OPBで戦う滅却師”という最高の戦闘方法を取る作中最強格の一人で、個人的には才能スペック頼りな一護よりも圧倒的に手強い人物だと思う。

クインシー・レットシユテイル 滅却師最終形態、シユブレンガー 破芒陣、ゼーレシュナイダー 魂を切り裂くもの、e t c. …もうド

イツ語と言うだけでオサレなのに、それらの技や道具の使い方が神懸かり的にオサレ。弁舌や挑発の語彙力も非常に優れており、何より毎回ちゃんと苦戦して敵にも見せ場を作ってくれるリスペクト精神篤い聖人キャラだ。彼に勝つにはザエルアポロやハツシユヴアルトのようにNTBを仕掛けるか、後はもうウルキオラのように霊圧でゴリ押すしかない。

正直あたしも当初はこの石田眼鏡の【敵リスペクト型OPB】を戦闘時の参考にして原作キャラたちを輝かせたかつただけど…やはりシロちゃん最優先の桃玉融合は少し早まったかな…

「すまない、僕の勝ちだ。勝利は確かに、リーチの差だったよ」

「クソ…ッ」

その後は本誌と同じく霊矢形態の魂^{ゼーレシユナイダー}を切り裂くもので鎖結を撃ち抜かれ、チルツチちゃん無念の敗北。

原作通り、石田雨竜のオサレ勝利だった。

「――ご苦労様でした、チルツチさん」

戦闘終了からしばらく。

敵でも殺人はしない主義な石田眼鏡とペツシエが列柱の広間を去った後、あたしは見事宿命を果たした自慢の部下の前に姿を晒した。

「…雛森…様…!?!」

「お久しぶりです。途中から見てましたが、十刃らしいとても立派な戦いでしたよ」

驚愕するチルツチちゃんへ本心の称賛の言葉を送る。流石はあのオサレ集団の元メンバー。さっきの戦いはガチで相手が悪かっただけだからね、ドンマイ。

だがあたしが慰めようとする、チルツチちゃんが突然泣き出した。

「…申し訳…ごさい…ません…！ 雛森様に不甲斐ない戦いを…お見せして…ツウウ…」

「チルツチさん…」

そ、そんなに悔しかったのか。

いやごめん、そうだよ。あたしの立場で言うなら、一護の無月のな技で飛梅ちゃんを犠牲にしたのに勝てなかったのと同じだもん。これはちゃんとフォロワーしなければ。

「大丈夫ですよ、チルツチさん。傷も、霊力も、犠牲にした帰レスレクシオン刃も、あたしが全部必ず回復させます」

「あ、あ…」

「あなたほど気高い女性を戦士として死なせはしません。ふふつ、待機命令に背いてフラフラしているノイトラさんに爪の垢を煎じてあげたいくらい」

全くだぞ、弱者相手に霊圧でイキることしか出来ないカマキリめ。あなたも少しは前任クライアント・エスパーダ”第5十刃”の彼女を見習ってオサレにならないさい。

しかしあたしが慰めても「お許しください」だの「情けない」だのえぐえぐ自己嫌悪に陥ってしまつて話を聞いてくれないチルツチちゃん。仕方ないのでドルドーニの時と同じくそのまま背負ってあげよう。

「ひ、雛森…様…!？」

「安静に。今医務室へ運びますね」

「あたしのような…者に、こんな…」

背中の巨乳の感触に感動しつつ、あたしは急いで桃ちゃんラボの黒腔ガルガンダへ向かう。鎖結を失つてもロカに修復させたらまだ十分間に合うだろう。ダメならまた桃玉の尻を叩けばいい。

「傷に障りますよ。しばらくお休みなさい」

「ひな…も……」

優しく「白伏」で眠らせ、現世アジトへの黒腔ガルガンタに控えていた雑用破面に彼女を預けて、ホッと一息。

あたしは先ほどのv.s. 石田雨竜OPBについて思いを馳せる。

うーん、負けちゃったチルツチちゃん。原作と同じく一時はいい線行ってたと思うんだけど…OPB強者になるにはあともう数歩足りないんだよなあ。

効果無しと知って即座に羽や腕を潔く犠牲にするのは確かにオサレだが、もう少し引つ張って不利な状況下で【過去回想】を挟んでからの方がもっとOSR値を稼げたはず。彼女の戦士や組織人として覚悟を決めすぎてるところが、なんとなく副隊長モードの侘助に似てて残念感が拭えない。

何よりあのケバい紫メイクとキモい解放状態が容姿ポイント大マイナス！ せっかくの【女強者】と【容貌：グラマー美女】のプラスを台無しにしている。

あのヨン様でさえ例のハンペン化&羽○結弦ポーズとキモメルヘン蝶の翹な崩玉変化のOSR値マイナスを覆すことは出来なかった。容姿ポイントを大事にしない者はOPBにおいて絶対に勝利を取り零してしまうのだ。

幾つかイメージはあるけど、あたしも午後空座町決戦で行う桃玉変化デザインは慎重に選ばないとね…

さて。戻って来たマイルーム。

決戦前に汚れてたらOPB的にマイナスなので、まずは背負った部下たちの血でベトベトの服を着替えねばならない。

この衣装はフィッシュテールドレスの上半身が面倒だけど、頑張れば一人でも着替えられるタイプだ。一応死覇装だしね。

チョーカーとコルセットを緩めて、ベアトップの胸元部分と袴を脱ぐ。

鏡に映るのは下着姿の雛森ボディ。シャルロット兄貴姉貴の強い

勧めのブライダルランジェリーみたいな純白チューブラが凄く恥ずかしいが、我慢だ。女子の容貌服装OSR値はシビア。そう、これも最高の「雛森イイイイ！」のため…っ。

(そ、それより大丈夫だよな？ 監視とか…)

洗脳NTRムーヴ用とはいえ、流石にこんな気合い入りまくりな下着姿を味方の男性陣に見られたくない。心配になったので部屋の天井あたりをキョロキョロ見渡す。あのヨン様も女の着替えまでは覗かないだろうが……さつきから視線を感じる気がするのは一体…？

何とか疑念を振り払い、同じシロちゃん曇り用背肩ガン開き死覇装の替えに着替え終わったあたしは、コソコソと更衣室を出る。

諸々の準備を終わらせ、再度虚夜宮本宮へと瞬歩でGO。つい先ほど主人公勢と十刃たちの最初の激突がこちらの霊圧感知に引っかけたのだ。

原作の戦いがようやく始まる…！

(より取り見取り。どれを現地観戦するか凄く迷うな…)

ああ、鰯ファンとしてなんて贅沢な悩みだろう。流石は一年五ヶ月も連載していた濃密な作中内五時間だ。これは名シーンや台詞回収のために慎重に見廻る順番とタイミングを整理しなくては。

「——おや、桃ちゃん。君も気になって見に来たん？」

あたしは具体的な状況を把握するため、全てを一望できる中央監視室へ入ると、監視シフト当番の一〇が迎えてくれた。ちょうど原作イベント中だったのかウルキオラもいる。

…うん。一〇もこのオサレ破面がいる所であたしの着替えを覗いたりはしないだろう。気のせい気のせい。

気のせいだよな？ (威圧)

「アーロニーロさんの宮への回廊が動かされた形跡があったので。市丸隊長の仕業ですね？」

「嫌やな、” 仕業” なんて。あの子たちが十刃と戦いたい言うんで、ちよつとお節介焼いてやっただけやで」

「わあ…流石ですね。今度なにか機会があったらあたしもその言い訳参考にしていいですか？」

軽口を叩き合いながら、あたしはパパッと監視室の画面を確認する。確かザエルアポロの宮が081番、アローロニーロの宮が091番、ガンテンバインの部屋の外周辺が147番、一護がウルキオラと戦う大階段付近が235番、ってこっちはルキアがアローロニーロと相打ちした後か。

やっぱり順番的にはまずアローロニーロvsルキア、ノイトラvsチャドを見て、それからウルキオラvs一護の初戦、ザエルアポロvs恋次の順番だな。その四つが終わり、石田が加わってザエルアポロが着替えに行くタイミングでまたこの監視室へ状況確認に戻ってこよう。

段取りを決めたあたしは早速アローロニーロ宮へと踵を返す。

「なんや桃ちゃん、もう負傷兵治療のお仕事にお戻り？」

「ええ、アローロニーロさんが心配なので」

「…へえ、意外やね。君が日番谷隊長以外の死神を評価すんの」

ニヤリと「ルキアちゃんのこと信じてるん？」と聞いてくる一〇。

何だそれは、それであたしにマウント取ってるつもりかね？ 先程

あのヨン様相手に一勝二敗の接戦を繰り広げた、このNEW桃ちゃん相手にOPBで遊ぼうなどは笑止千万（調子乗り中）

「…いいえ」

あたしは一〇の問いを否定し、オサレに監視画面へ顔を向ける。彼の注意を映像に促すように。

『—よオ、オメエが一番乗りか？』

『—ッ！』

———
クイント・エスパーダ
”第5十刃”

NONOITRA GILGA
ノイトラ・ギルガ

VER SUS
茶^さ 渡^ど 泰^{やす} 虎^{とら}

『—仮面ヲ取ツテ、挨拶スルよ』
『—なっ!? あ、貴方は…ッ!』

—”^{ヌベールノ・エスパーダ}第9十刃”
A A R O N I E R O A R R U R U E R I E
V E R S U S

—^{じゅうさんぼんたい}十三番隊隊士—
朽^く 木^ち ル キ ア

かつて尸^{ソウルソサエティ}魂界の護廷十三隊を相手に戦い、仲間を奪い返した死神
代行・黒崎一護一派。幾千幾万もの同胞を喰らい至り、種族の限界を
超越した破面の最上位、^{エスパーダ}十刃。かくして両者の初戦を担う、役者が
揃った。

「…あたしはルキアさんを信じてるんじゃないやありません、市丸隊長」

そして笑う市丸ギンへ、あたしは満面の笑みで笑い返した。

—^{BLEACH}この世界を、信じてるんです。

喰虚イイイイ！

ラスノイチエス
虚夜宮、アールロニーロ宮。

日の光の届かない闇の宮殿の中に二つの霊圧があつた。宮の主アールロニーロと侵入者の朽木ルキア、両方知っているものだ。

原作における二人の戦いはアールロニーロが元十三番隊副隊長の故・志波海燕に化けて、彼の死に深く関わったルキアとの再会を喜び合う一幕から始まる。OPBにおける語りフェイズだ。

その後はアールロニーロが全て嘘の演技だと明かしたことで戦闘フェイズへ移行し、終始ルキアを圧倒していたものの、死に体の彼女が最後の力で相手の油断を突いて相打ちとなる。

この戦いは、それまでの技術・超自然エネルギー（霊力）・精神力・知力・能力・装備などの差で勝敗が決まる通常のバトル漫画の基準では絶対に起こり得ない結果だった。そのため鯉フアンによる大規模な検証が行われ、今では常識となつているOPBの理論がこの時初めて提唱されたのである。

無論、そんな歴史的イベントを見逃すBLEACH転生者など「何しに来たの？」と問われるレベルのガバだ。あたしは以前からアールロニーロ宮に無数の監視装置を設置していたし、当然当日の今も、観戦しているのを悟られないよう慎重に忍び込みベストプレイスを確保する。

「——なんだその暗い顔は？ 相変わらず辛気臭え女だなアお前、はっはっはー！」

「ごっ、これはいつも通りの顔ですっ！ 揶揄わないでください海燕殿！」

よし、語りフェイズ開始だ。あたしは早速脳内でOPB実況を開始する。

(解説席にはハエが友だち桃玉さん。今日はどうぞよろしくお願いします)

『——ハエが友だち”じゃないわよ!——もう綺麗になったもん!——デイ・ロイ蘇生でガバの称号は返上したのに!——崩玉の扱いがブレソル並に雑過ぎませんか、お姉さま……!——』

心で呼び出すと憤慨の声が脳裏に響いた。そもそも実際にあの飛梅ちゃんの世界にハエはいるのだろうか。肥溜めは牛車の牛さんが頑張ってくれたらしいけど。

『——ともかく。こうして体を取り戻した俺は十刃の一人とすり替わり、ずっと藍染を討つ機を狙っていたんだ』

「そんなことが…」

さて。早速実況していきましょう、アールローロvs.ルキア。まずはアールローロ選手の変化状態です。

(解説の桃玉さん、彼の志波海燕の姿はルキア選手に強力なメンタル特攻がありますが…この虚言も高OSSR値を期待出来そうですか?)

『——そうですね——一度希望を見せてから突き落とすのは精神攻撃の定石ですから——素直に攻めた感じでしょうか——…あ、もうみんな実況始める感じなのね——』

(なるほど、相手の心を揺さぶればカウンターOSSRも仕掛けやすいですからね)

『——はい——ですがアールローロはルキアのメンタルを侮ってますね——心の地雷を突く戦法は慎重に行わないと逆に敵の【トラウマ克服】でこちらが大カウンターOSSRを喰らう可能性があるんですよ——』

(ああそれは致命的ですね。ルキア選手のカウンターOSSR、果たして発動できるのでしょうか。楽しみです)

そうしているとアールローロが徐に「作戦は奥で説明する」とルキアを宮の深部へ連れて行った。素直にトテトテついていく少女が危なっかしい。

『——アールローロは露骨すぎですねえ、【裏切りの予兆】OSR値ボーナスを稼ぎたい意図はわかるんですが——対するルキアは一見隙だらけですけど、逆にその信頼が裏切られた時にOSR反転スキルの発動チャンスを得られます——効果的に使えたら素晴らしい数値が出せるでしょう——』

(なるほど、全幅の信頼からの裏切りという巨大なギャップをそのまま悲憤のオサレブーストに使えるワケですか。これを直感で行ってるのがまた凄いですね)

その後アールローロが突然ルキアを斬りつける。だがルキアは顔に一筋傷がつくも何とか回避。それを見て「腕を上げた朽木」と称賛する彼と、唐突の攻撃にポカンと呆けた顔で相手を凝視するルキア。

(ああ、やっぱり避けられましたか。桃玉さん、これをどう見ます?)
『——迂闊極まりないですね——奇襲とは原作藍染隊長が雛森ちゃんにしたように回避し辛い胴を狙うものです——ですが避けられても即座に【師の称賛】で精神的優位を保持したのは見事です——』
(やっと十刃らしいOSR機転が見えましたね。一方のルキアはどうでしょう)

『——彼女は先ほどからずっとカウンターOSRの布石を準備しています——これはルキアに特殊ボーナス【敵対・亡き師】シリーズが発動し、逆にアールローロが追い詰められる展開もあり得そうですね——』

実況中もアールローロとルキア二人のOPB語りフェイズは加速していく。唐突に斬られ啞然とするルキアに、アールローロが「俺はお前に殺された」だの「ここで罪を償え」だのと彼女に自殺するよう

要求する。それにルキアは泣きそうになりながらも気丈に頭を下げた。

「私は仲間を助けねばなりません！ この命、井上織姫を救い出した後までお待ち頂けないでしょうか…？」

（うーん、実に彼女らしい誠実な覚悟ですね。償うことを当然だと一切命を惜しまないのがトラウマの深さを感じさせますが、桃玉さんどうでしょう？）

『——実に巧みな【トラウマ克服】ボーナスのフラグ立てですね——おまけに【亡き師への信頼】&【負い目】と【仲間への想い】を天秤にかけて後者を選ぶという最良のオサレ選択——これはルキアのほうが圧倒的に上手ですね、とても見事です——』
（なるほど、実況席としてはここからのアーロニーロの挽回に期待したいところですが…）

二人で推移を見守っていると、やはりアーロニーロは原作通り「冗談だよ」とギャグ時空誘導に失敗したり、その後に「井上織姫を殺して来い」とか「そうしたらお前を許す」とか敵意の籠った挑発を続けた。

あたしと桃玉は呆れ返る。

『——これはダサイですねえ——ここまで言うくらいなら、例えば「虚になったことで負の感情が強まった」とか嘘ついたり、そのことに苦しんだり葛藤したりする演技をして同情を誘うなどの手段を取ったほうがいいですね——』

（そして最後に嘘泣きでルキアに介錯をお願いし、その時の二度目の隙を突いて「今度は外さねえぞ？」とか言って逆転勝ちですね！）

『——それくらい狡猾なら今の“第9十刃”という低い序列にも試合巧者らしきが出てオサレなんですけど…——』

無論、それが出来ないからこそその原作での不覚。ようやく始まった戦闘フェイズでもアーロニーロはルキアを悲憤にブチ切れさせ、どん

どん溜まっていく彼女のOSR値を呑気に眺めている。

「お前に”ヤツらを殺せ”と頼むまでもない。もう直死ぬな、お前の仲間」

「くっ、一護…ッ」

「どうする朽木イ？ どうにも出来ねえよなア、ハツハツハ！」

そして、お約束とばかり別の場の戦いのことまで持ち出し安い挑発を仕掛ける始末。ああ、これもいけない。

『——遠くで戦う仲間の危機は精神攻撃のネタにはならないんですよ——逆に相手の【味方への想い】ボーナスでOSR値が上昇します——』

（あのセンスの欠片もないダツサイ挑発…この時点ではアローロニーロの勝利が全く想像できません）

『——ま、まあいくら彼が墓穴を掘り続けてるとは言え、ルキア自身の総合OSR値も圧倒的じゃないと流石にあの巨大な霊圧差は覆せませんよ——それにアローロニーロにはまだアレがありますからね、ふふ——』

その後もルキアは斬魄刀のオサレ技でOSR値を稼ぎ続け、アローロニーロ相手に優位を取ろうとする。しかし変わらぬ【師の称賛】でそれをさせないアローロニーロが、遂に斬魄刀の解放を行った。

だがそれは破面の帰刃レスレクシオンではない。彼が解放したのは、なんと死神の斬魄刀。それも今化けている志波海燕の【振花】だったのだ！

（さあ、アローロニーロ選手最大の見せ場です！ これは特別感あつて凄くオサレですねえ！）

『——彼のみが持つ能力に、さらに幾つもの偶然が重なって生まれた極めて稀な刀剣解放です——【振花】もルキアの回想ではテンタクルスに封じられて見れなかったので、満を持しての披露——解放の瞬間の刀くるくる、三又槍というオサレ形状、存在が語られつつ実物としては初登場の流水系斬魄刀、敵が使う亡き師匠の力、などなど——まさにオンリーワンの解放パターンですね！——』

（「水天逆巻け」の解号もかっこいいですよねえ…）

それまでの低OSR値状態を一瞬で覆す、アローロニーロの最高の刀剣解放にあたしと桃玉は惚れ惚れする。

「確かに腕は上がったが、その程度じゃ俺は倒せねえぜ！」

「くっ——あアッ……！」

敵の冰雪系能力という不利をもつともせず圧倒する様は正しく十刃のあるべき姿。何も出来ずにやられるルキア、大ピンチ！

（ルキアってキャラデザ全般が全く男に媚びてないところが読者に人気ですけど、現実で声を聞くと吐息や悲鳴がめちやくちやエロいですよね。あとちよつとした仕草とかも凄く可愛い）

『——わかる——ギャップ効果で他のアニメのヒロインより五割増しくらい可愛く見える——』

無関係な感想に盛り上がりながら、ワクワク次のルキアのオサレ行動を待つあたしたち。

アローロニーロに斬魄刀を弾かれ絶体絶命の彼女だが、こういう不利なときでも強引にOSR値を稼げるのが死神の鬼道である。お得意の「蒼火墜」でアローロニーロを牽制。

「チツ、壁が……」

そして奇しくもその苦し紛れの一撃が相手の弱点を暴くヒントとなり、ルキアは状況打開の一手を試す。

「——【縛道の四・這繩】——！」

「ッ何のつもりだ朽木！ 今さらこんな時間稼ぎの小技……！」

囚われ苛立つアローロニーロ。そこをルキアは更に畳み掛ける。

「——…血肉の仮面、万象、羽ばたき、人の名を冠す者よ——雷鳴の馬車、糸車の間隙——蒼火の壁に双蓮を刻む、大火の淵を遠天にて待つ

——光もて此を六に別つ……」

「なっ、二重詠唱だど?!」

アローロニーロの持つ志波海燕の記憶に、ルキアがそれを使える情報はない。だが彼の死から三十余年、ルキアはあの悲劇を繰り返さぬよう日々努力を続けて来た。

「縛道の六十一

——六杖光牢！」

「破道の七十三

——双蓮蒼火墜！！」

(きたきたきたあーっ!!)

『——はあああ良いですねえ〜！——作中初登場の上級破道！——しかもルキア得意の【蒼火墜】の上位版と一目でわかる鬼道名！——』
(二重詠唱も確か初ですよ！ おまけに使った理由がただの脳筋攻撃じゃなくて頭脳プレイというね！)

そんなオサレ鬼道を使ったルキアの狙いは、相手の背後。高位破道に壁を壊され、差し込む陽光がアーロニーロを照らす。

そして悲鳴を上げながら解け落ちた志波海燕の皮の中から現れたのは、赤い円筒形の水槽だった。

「な…なんだ、貴様は…！」

『チツ、剥ガレチマツタカ』「しようがないねえ、改めて自己紹介しておくよ」

『「僕^{オレ}ラが”第9十刃”アーロニーロ・アルルエリさ』』

ルキアは驚愕する。その水槽の中に浮かんでいたのは、二体の虚。手のひら大の球体に浮かんだ顔が、交互に言葉を発していたのだ。

(はいオサレ。言うまでもなく師匠にしか思いつかない素晴らしすぎるデザインですね)

『——これを想像できた読者は一人もいなかったでしょうね——本体は海燕殿とは別の姿だと予想していた人はともかく、まさかの二重个体、しかも自立行動する培養器バイオSF的な存在だったとは——』
(ルパンのマモーみたいな脳管系はよくありますが、こういうタイプは初めて見ましたよ。このBLEACHらしからぬデザイン、正直めっちゃ好き)

『——ただ、こう…個性的すぎると言うか——ビジュアルの悪役感が

強すぎて「ラスボスじゃないならここで消える役なんだろうな」って悟っちゃうんですよね——』

(ああ、少年誌あるある…このオサレすぎる容姿に彼の力量が追い付けなくて死亡フラグになっちゃったのかもしれないですね。これも珍しいOPBの実例です)

そんな感じに桃玉と二人で原作アローロニーロの末路に哀愁を抱いていると、突然それまでの本家に順じた台詞が妙な具合に変化した。ルキアの縛道を片手で破り、破面が女死神を嗤う。

『フン、【六杖光牢】ニ【双蓮蒼火墜】カ』「使い手が違うところも変わるんだねえ」『トテモ同ジ鬼道トハ思エンナ』

「…ッ！」

『アノ方ノモノニ比ベタラコンナ縛道、紙切レニモ等シイ』「君の【双蓮蒼火墜】モドキじゃ精々手傷を負わせるのがやつとだよ、僕たちに直接当ててればね」

(…あれ、こんな台詞ありましたっけ?)

『——お姉さま、現実逃避は止めましょう——お姉さまが初期のヒヤッハー破面たちを鬼道の的にし続けた結果のガバですよ——アローロニーロはいつもヤミーが火だるまになる姿見てましたから——』

(あつ、ちよ、アローロニーロさん？ ほ、ほらあたしの話はそのくらいにして、ね…?)

思わず実況ごっこを忘れてしまう不味い展開だったが、流石に今のルキアは海燕殿のことで頭がいっぱいだったらしい。アローロニーロが海燕本人ではないと確信したのか更なる憎悪で相手に斬りかかる。「貴様が海燕殿でない」と知れた今、私はなんの容赦もなく…貴様を斬れる——」

「…聞き違いかな？」『容赦ガナケレバ俺ニ勝テルト聞コエタガ』

「そう言ったつもりだ……」

(いやあ、いいですねルキア選手。ナイス発破)

『——こう、なんて言うんでしょう——自分の実力を過信しているワケでは決してないけど、心では常に相手を上回ろうとしている気高さが姿勢に表れてますよね——』

(一見相手への挑発に見える勝気な台詞も、よく見ると自分の戦意を奮い立たせるための言葉なのがわかります。ホント気高い、好き)

だが、それでも彼我の実力には絶望的な差があつた。影さえあれば自在に使えるその能力の本質を、アールローは遂に言葉にする。同時に、海燕の運命についても。

「…俺が最下級大虚^{ギリアン}上がりの破面でありながら、十刃の地位を与えられている理由。それは全ての破面の中で——俺だけが無限に進化することが出来るからだ！」

「ッ!？」

「俺は喰らつた虚の記憶、経験、能力、形状を全て自らの力とすることが出来る！ この志波海燕の体はヤツに取り憑いたテンタクルスの体を喰って手に入れた！ お前が俺に感じた懐かしさ、既視感は全て、俺が本物の志波海燕だからだッ！」

外した手袋から覗くおぞましい触手。生理的嫌悪に思わず顔を顰めるルキアを嗤うアールロー——

「終わりだ、朽木。餞別に十刃の刀剣解放ってヤツを見せてやるよ」

そして破面が遂に、最後の切り札を切った。

「…喰い尽くせ」

グロトネリア
喰虚

アールローの解号と共に、彼の下半身が膨れ上がる。現れたのは巨大な異形の蛸。触手に覆われた幾つもの歯口が餌を求め開閉する。その姿はまるで、果て無き虚の飢餓が具現化したかの如き怪物だっ

た。

(エルドリツチ!? こんなところで何してるんだ、早く火継の祭壇へ行きなさい!)

『——あっちはもう少しスライムっぽかったですけどね——にしてもキモい見た目です——おまけに巨大化なんて鯺界に限らず殆どの少年誌では死亡フラグですよ——』

(あなたたち……いえ、何でもないわ)

こいつらは前に同系統のグロ再誕い怪物者になりたいとか言っていたはずだが、思い出させても面倒なのでお口にチャックな桃ちゃん。

そうしているうちに、遂に戦いはクライマックスへ。桁違いの霊圧、巨体、醜姿、そして：ヤツが化ける海燕の正体。全てがルキアの心を絶望に誘い、少女は悲愴に放心する。

「十刃の刀剣解放を凡百の破面のそれと同等と思うなよ。俺のグロトネリア【喰虚】は、喰らった虚の能力を全て同時に発現出来る」

「あ、あ…」

「俺が喰らった虚の数は三万三千六百五十。ここから先の戦いは、それら全ての大軍勢と一人で戦うに等しいものと思え！」

己の浅ましさが殺した最愛の上司。せめて遺体だけは取り返せたと自分を慰め続けてきたが、それもまやかし。彼の体は虚に奪われていた。

心折れ、剣折れ。まして自分に海燕殿の体を斬る資格などあるはずもなく。

そして全てを諦め、死に場所を欲するルキアは、敬愛する元上司の三又矛に：成すすべなく貫かれた。

(——さあさあ、始まりました! この志波海燕の体を持つアールとニーロと戦うルキアのみが使える鯺界最大級のオサレボーナス【過去回想：悲劇の師弟】です! これまでの四十九年間に撒かれた全ての布石を一気に使用し発動する、まさに彼女の半生を使った人生一度きりの究極奥義!)

『——残念ながら部外者のあたしたちには見えませんが、恐らく今のルキアの頭の中では海燕殿との切ない思い出が山のように想起されていることでしょう——多分あのアニ鰯ピアノBGMも流れてますね——』

(確か原作では昔ぼーつとしてたときに海燕殿に頭を叩かれた思い出で回想イベが始まったんでしたよね)

『——「風が頬を撫でる」の高OSR値ポエムも三つくらい唄ってましたね——回想にポエムまで挿入するとかオサレ欲張りセットかな?——』

(このコンビネーションはホントOPBの参考になります。それと、あとなんかこの回想のルキアってめちやくちや可愛くなかったですか? お腹鳴らせて真っ赤になったり、海燕殿といちやく都殿を羨ましそうに見てたり、完全に海燕殿のヒロインしてましたよね)

『——作画までなんか普段の三割増しくらい可愛かった気がします——これだけでももう勝利確定ですね——カワイイは正義——』

(そして最後には海燕殿の「死ぬときは、心を仲間に残して逝くんだ」の台詞で回想が終わり、アローロニーロへの戦意を取り戻すはずですが……さて、そろそろ)

今か今かと原作名シーンを待ちわびるあたしたち。眼下にはアローロニーロの【振花】に貫かれ、ゆらゆらと揺れるルキア。
その時。

「——ほう、まだ意識があるのか。上々、いや哀れと言うべきか」

死に体のルキアが、自らを穿つ三又矛を掴んだ。あたしと桃玉は歓喜に目を輝かせる。

「…思い…出したのだ…」

「何?」

ルキアの周囲に、疎らな白雪が舞う。掴んだ自身の斬魄刀は半ばから折れている。

「…そんなモンで戦いの真似事か？ 目ざわりだ、下げろ」
しかしその折れた切先を、彼女は震える腕で敵に向けた。
そして――

「…さ…参の…舞」

しらふね
――白刀――

無より現れた新たな刀身が、ア―ロニーロの頭部を貫いた。

「――思い出したのだ…心の在りかを…」

『が…あ…』

「貴様の持つ…その体の中に、海燕殿は居ない…！」

剥がれ落ちる志波海燕の体。一体の本体ごと貫かれ、砕け散る赤い
水槽。

憎き仇へ致命の一突きを喰らわせた朽木ルキアは、精一杯の慈愛と
感謝、そして誇りを、その言葉に注ぎ込んだ。

「海燕殿の心は…」

――私が預けて戴いた！――

その時、世界に新たな理^Oが^P生まれた。

通知イイイイ！

「——ふうん、滅却師ねえ…」

ラスノーチエス
虚夜宮内宮の一つ、ザエルアポロ宮。監視室の画面に映るチルツチ・サンダーウィッチの対戦相手を眺めながら、宮の主——ザエルアポロ・グランツは愉しそうに笑みを深めていた。

彼は霊性兵器開発を専門とする科学者だ。ありとあらゆる種族、能力を技術と言う名の理性で凌駕し、完璧な生命へと至ることを夢見ている。

そんな彼の前に転がってきた希少種族【滅却師】は、男に新たな進化の可能性を示していた。

「周辺霊子の操作、いや隷属かな？ 封じるには霊子真空を作って霊子そのものを枯渇させればいいんだけど…それじゃあつまらないな」

チルツチの魂魄に寄生させている録霊蟲から相手の滅却師の霊性情報を受信し、解析していく。特にあのゼーレシュナイダーなる道具は興味深い。斬りつけた霊力の霊子結合を滅却師が吸収しやすい状態へ高速振動で強引に崩すという発想は、実に彼らしい原始的な知恵だった。

無論、石田雨竜はあの雛森桃軍団長が執着する黒崎一護の仲間だ。ホワイト実験の延長として時に支え、時に強敵をぶつけては成長を楽しんでいく。他の四人、いや井上織姫含む五人を彼女が殺さないのは、黒崎一護への悪影響を懸念してか。

ならば殺さず実戦で幾つかの新技术を実験するに留めるのが最善。ザエルアポロは人間時代の処世術で上司の不快をさらりと避ける。

雛森桃という女死神は、ザエルアポロにとって非常に都合の良い人物だ。前世でよく邪魔をしてきた錬金学会のサル共のように愚かではないが、しかし藍染惣右介のような悪魔的叡智を持つ魔王でもない。強大な武力を持ち、研究を快く支援してくれる稀有なパトロン。雛森の庇護下の五十年で進んだ研究は数知れず。

もちろん、藍染惣右介が彼女を溺愛している理由も理解している。だがたとえあの可憐な少女が万人の人生を弄ぶ邪神であろうと、それはザエルアポロの知性の前では些細なことだ。

監視室の画面で、運命を全うした瀕死のチルツチを称賛する女上司の姿を見つめ、彼は密かにほくそ笑む。

藍染惣右介は全ての破面に一切の価値を見出さず、故にザエルアポロが彼の下で繁栄を得ることは不可能。そして雛森桃は全ての数字持ちを愛している。彼女の知る未来の通りに生き、そして死ぬのならば。

——ザエルアポロは涅マユリ一派に敗北する。

それが雛森桃の言動から彼が導いた、己の運命。そのくだらない未来をいなすため、ザエルアポロはあの邪神に例の研究の話を持ち掛けたのだ。

(運命が必然なら、また新たな命に生まれ変わればいい)

霊性因子の再構築による魂魄復活。受胎告知ガブリエールの力で完璧な生命となり、生死を可逆なものとした彼だからこそ思い付く発想だった。

「…さて。そろそろ僕も仕事をしないと麗しき軍団長閣下に叱られてしまうね」

黒崎一護はドルドーニ、朽木ルキアはアローロニーロ、茶渡泰虎はガテンバイン、石田雨竜はチルツチ。ならば自分の担当は最後の阿散井恋次だろう。おそらくあのカスイールフォルトが彼と戦ったのもこの時のための運命。そして奇しくもザエルアポロ自身、直接攻撃系の斬魄刀とその卍解の研究素体には未だ縁がなかった。

湧き上がる上司への畏怖を振り払い、ザエルアポロは例の死神の霊性データを霊子分解装置へ入力した。

風が頬に当たる。

草の匂い、日差しの煌き、鳥の声…

ここは西流魂街三地区北端、鯉伏山。かつて死神——朽木ルキアが師にして上司志波海燕に稽古を付けて貰った、思い出深い場所だ。

白昼夢か、走馬灯か。ルキアの体を無数の記憶が流れては消えてゆく。

流魂街の出ながら突然朽木家に養女として迎えられ、霊術院入学から僅か一年で護廷隊へ配属。院生時代は斬術はからつきし。評価の高かった鬼道も、隊士の中では並以下。周囲にはコネ入隊の貴族の道楽と失笑され、嫉妬され、腫物を扱うように避けられる孤独な日々。何のためにここにいいのか。己の存在に一体何の意味があるのか。死神になったルキアは毎日、自らの価値を見出せぬ苦しみに悩まされていた。

——お前の護るべき心がここにあるなら、それがお前がここに居るべき理由だ。

そんな彼女を救ったのは、当時隊の副隊長を務めていた志波海燕の言葉だった。漠然とした答えに首を捻るルキアに彼は「心はどこにあると思う？」と問い返す。

心の在りか。それは人の体の中にあるのではなく、何かを考える

時、誰かを想う時、人と人とは触れ合う時に、二人の間に心が生まれる。それが海燕の自論だった。

…ああ、そうだ。

ルキアは思い出す。この風景を。木立の一本一本を。不安と興奮と、温かさが縋い交ぜになった、弾むようなこの気持ち。

この地で彼に教わった、戦いに生きる死神が持つべきもう一つの覚悟を。

——最期は仲間と心を預けて逝け。

魂魄である死神は、死すればやがて霊子となって尸魂界に散っていく。ならばこそ、仲間と共に育んだ心を託すのだ。さすれば己の心は、彼らの中で生き続ける。

…それが、朽木ルキアの恩師、志波海燕が彼女に残した言葉だった。

「——海燕殿の心は、私が預けて戴いた…ッ！」

闇の宮殿に響き渡る軽い破碎音が、両者の戦いのあつけない幕引きとなった。頭部を貫いた敵の巨体が水風船のように破裂し、ルキアは体液の津波に押し流される。

水音に交じり、ア—ロニー—口の甲高い悲鳴が聞こえた。

「ギヤアアアアアアアアアア!! 痛いイ! 苦しい! 苦しいイイ

! 助けて雛森様! ひなもりさまア!!」

「…!」

遠のく耳がその名を捉える。ルキアを取り巻く、頭の片隅に封じていたもう一つの悲劇の名だ。

「こんなの雑兵未満の扱いじゃないか！ 嘘つき！ 嘘つきイ！ なんで僕たちをあんな悪魔と引き合わせたんだよオ！」

『ク…ソ…』

「信用しちやダメだったんだ！ あんたもいずれ捨てられる！ 逃げよう！ 逃げよう雛森様！ 逃がして…！ またあの時みたいになすけ、て…よ…お……」

『コンナ敗北…俺ハ絶対、納得…シナイ…ゾ…オ……』

髪を下ろし、白い死覇装を纏った、ルキアの旧友。今では敵となり、彼ら破面たちの上司となった心優しき死神の少女。

それがあの傲慢不遜な”第9十刃”アールロー・アルルエリが、死の縁で最期に縋った救いだった。

「…ぐ…ッ」

満身創痍の体で床を這う。胴を貫く振花が霊子となって消え、ルキアは腹の穴から濁流のような熱が流れ出ていくのをぼんやりと感じていた。

「…案ずるな、井上…今、往く」

孤独を知っている。囚われし者の、孤独を。

喜びを知っている。仲間が助けに来た時の、喜びを。

そして、その仲間が傷付き倒れる恐ろしさを、知っている。

——一人で死ぬな、朽木。

海燕の声が聞こえる。昔教わった、心を護るために戦う死神が持つべき心構え。

…ああ、でも。いざその時になると、なんと困難なことだろうか。血が止まらない。霊力も残っていない。死力を尽くし、その言葉一つが、ルキアの命を冷たくなっていく体に繋ぎ止める全てだった。そこに。

「」

遠のく意識の中。微かに感じた温かい桃色の霊力が、瀕死の死神をこの世に縛るもう一つの力となる…

——アールローニール、死す。

死に際の認識同期と、雛森桃軍団長の通知。その凶報は瞬く間に
ラスノーチエス虚夜宮を駆け巡った。

「アールローニールか…どうするよ、ハリベル様！」

「……」

敬愛する上司の破面の指示を乞う、血気盛んな従属官。
フランシオン

「ガキが、つまらん死に方しておって」

「陛下……」

未だ未熟だった同胞の不覚を悔やむ最古の虚。

「アールローニール…やられたよ。いいの？」

「…どうしろっつーんだよ、俺に」

枕の積み重なった寝台に横たわり、悲哀に俯く男と童女。

「ああ…おめえの仲間、死んだらしいぜ？」

「ッ!？」

無様な死に損ないの人間へ嗤う、ツリ眼の大男。

その他僅かな反応を示し、指示の普段通りの生活を続ける者。同期の同僚の死を惜しむ者。

そして、上司の通知に愉しげな笑みを浮かべる者。

「——相打ちだつてさ、死神くん」

従属官からアローロニーロ戦死の報告を受けたザエルアポロが、目の前で荒い息を上げる死神——阿散井恋次を挑発する。

「ああ、樂觀論なら止した方がいい。死んだ君の仲間の名も届いているよ……。」朽木” って言うんだつてね?」

「ツツ!!」

効果は靦面、予想通りの反応だ。死神の斬魄刀「蛇尾丸」の直情的な攻撃が破面を襲うも、生来の鋼皮イェロに容易く阻まれる。

「何度も言ってるだろう? 始解如きじゃ十刃に傷を負わせることなんか、出来——」

だが激情に呼応し跳ね上がった恋次の霊圧は、二度目の攻撃で相手の防御を上回った。

「ごちゃごちゃ、うるせえぞ……そこを退けエツ!!」
「へえ……」

額を流れる己の血。それをザエルアポロがニヤリと笑う。

まだまだ研究し甲斐のある、興味深い素体を前にして。

そして” 三桁の巢”トレス・シフラスの出口、本宮の天蓋へと続く大階段。

「——てめえは……ウルキオラ!」

塵コミを抱える黒崎一護が、名乗った覚えのない彼の名を綴る。

「朽木ルキアが死んだ」

「何……だと……」

「正確には”第9十刃”と相打った。腹を槍で貫かれてな」

相手の動揺、”心”の変化を見るべく残酷な事実を突き付ける。アーロニーロの【認識同期】は軍団長の通知だ。間違いはない。

だが「仲間を信じる」と抜かした黒崎一護は、己という十刃を前にしても戦いを挑んでこない。

「てめえは敵だが、てめえ自身はまだ誰も俺の仲間を傷付けてねえからだ」

「…そうか」

訳を問えば、何ともくだらない答えを返してくる。理由が必要なならばくれてやろう。

「——ウエコムンド虚圏に井上織姫を連行したのが俺だと言ってもか」

その瞬間、掻き消える黒崎一護の姿。そして迫る刃と右腕の鋼皮イエロが劈く金属音を奏で合う。

「やっぱり井上は自分の意思でウエコムンド虚圏に行ったんじゃないんだなッ！」

「俺と戦う理由は出来たか？」

そして憤怒を抑え、仲間を救う活路を切り開かんとする死神モードキが、持てる力の全てを解放した。

「…わりいな、こつちも急いでるんだ……全力で行くぜッ！」

——ばんかい卍解・てんさざんげつ天鎖斬月——

かくして人間・井上織姫を取り巻くラスノーチエス虚夜宮に、更なる嵐が吹き荒れる。

惨敗イイイイ！

見事な調度品が目を引く虚夜宮本宮の一室。窓より差し込む月光を見上げ、井上織姫は自分を奪い返しに来た仲間の無事を必死に祈っていた。

「――入るぞ」

ノックの後、無感情な男の声が部屋に響く。少女の世話係のようなことをしてくれている十刃^{エスパーダ}の一人ウルキオラだ。

「どうやら気付いたらしいな」
「…ッ」

相変わらずの無表情で「ノイトラの莫迦が逸つたらしい」と事情を話す破面^{アレンジカル}の青年。その名は確か別の十刃の一人だった。織姫は先ほど霊圧が消失したあの無口な巨漢の同級生を想い、唇を噛む。

「茶渡君は死んでないよ」

無言のウルキオラに焦れ「死んでない」と繰り返す少女。彼より、自分自身に言い聞かせるように。

「…まあいい、昼食だ。食え」

いつものように配膳をし、豪華な美食を用意してくれる破面の青年。だが魚介で華やかに彩られたトマトの Pasta も、鮮やかな露の滴る新鮮なサラダも、今の織姫の目には色褪せた置物にしか見えない。「藍染様のお声がかかるまで命を保つのもお前の務めだ。さっさと食え」

「…要りません」

色褪せて見えるのは食事だけではない。目の前の青年も、それまで一方的に感じていた親しさが氷のように冷たく感じ、織姫は彼がああ

巨悪の一味なのだとか否が応にも理解させられる。口は悪くても、あんなに献身的に自分の世話をしてくれた、このウルキオラさえ。

「何を物欲しそうな目をしている、女。俺に『お前を助けに来た連中は無事だ』とでも言っただけで欲しいのか？」

「っ…」

「くだらん、俺はお前をあやすためにここにいる訳じゃない」

両断。無感情な翡翠の双眸が織姫の甘えを拒絶する。

「俺は軍団長よりお前の身の回りの世話を命じられている。食事の配膳のマナーも、料理の説明も、全てお前を最上の待遇で迎え入れるににおいて必要なことだと手ずからあの方に教わった。それは偏にお前が我らの同胞として不便不利益を被ることのないよう、あの方が心を砕いてくださったからだ」

「それは…」

「今のお前は藍染様の軍門に下った我らの仲間。そして虚^{ウエコムンド}圏へ侵入したヤツらは我らの敵。お前にあの連中の命を惜しむ理由も権利もない」

淡々と語られるウルキオラの言葉が織姫の胸を締め付ける。どんな形であろうと仲間を裏切ったのは事実。そして連れて来られた^{ラスノイチエス}虚夜宮では文明的で裕福な生活環境を与えられ、織姫は仲間たちの敵であるグリムジョー、そして雛森軍団長の傷を己の意思で癒した。

そんな自分には、仲間の無事を祈ることすら許されないのだろうか…

「わからんな。お前らは何度も俺たちの力を目の当たりにしている。最初からこうなることは予想できたはずだ」

「…止めて」

「そして我々はお前にそれを回避するための、仲間との別れの時間を与えた。ヤツらがここに来たのはお前の優柔不断さと——ヤツら自身の愚かきにある」

どこまでも正しく、そして残酷な言葉が織姫の心を蝕む。だが最後の一言だけは、彼女にとって決して看過できない侮辱だった。

助けに来てくれた大切な仲間たちを、この人は…！

「お前は仲間の命を対価にヤツらを裏切り、四日前に最後のけじめを済ませた。連中はそれでもやってきた」

「…止めてッ！」

「俺なら、自分の力量差も測れずこの虚^{ウエコムンド}圏へ乗り込んだ…」

——ヤツらの愚昧さを怒るがな。

それは咄嗟の行動だった。

刺すような痛みが右掌全体を走り、荒い息を繰り返す織姫はハツと直前の自らの行動を自覚する。

「…あ」

目の前には微かに首を横へ捻り、石膏のような頬をこちらへ晒すウルキオラ。

なんてことを。織姫は罪悪感から喘ぐように息を吐く。

彼の言葉は全て正論で、それに感情的になった自分は思わず彼へ暴力を…

「…」時間後にもう一度来る。その時までには食っていなければ、お前の口の中に無理やりねじ込んでやろう」

不愉快に思ったのか、それともこれ以上は無意味と判断しただけなのか。その無機質な目も声も表情も、彼の真意を何も伝えてはくれなくて。

裏切りの負い目、傷付きながら手を差し伸べてくれる仲間たち、消えた茶渡君の霊圧、仲良くなりたかった親切な破面を叩いた自分。無数の葛藤に胸が引き裂かれる思いの織姫は、去り行くウルキオラの背中をただ泣きながら見送ることしか出来なかった。

…と、そんな高度ないちやいちやを披露するウルキオラと織姫の様子を映像端末でニヤニヤ視聴しながら、あたしこと雛森桃は密かにアールロー宮から次の舞台へ移動していた。

（——うーん、若干余計な台詞はあるけど…織姫ちゃんがビンタに罪悪感感じてたり全体的にはウル織度高めだったから、ヨシー！）

やはりここでも軽いガバが発生しているけど、今日だけで既に何度も経験しているあたしの達観は相当なものだ。先ほどの特大ガバに比べればあの程度どうと言うことはない。

そう、先ほどのアールロー戦と比べたら…

アールロー戦が原作通りルキア存命の相討ちで終了し、霊圧もチャドを失うノルマを達成した。だがあたしは鯰界有数の名イベント二つを生で観れた余韻を噛み締める間もなく、最後の最後で喜びの頂から突き落とされた。

重要なメのアールロー懇願シーンが、なんか思ってたのと違ったのだ。

（…破面たちの好感度がおかしい。あたしはただ最初に彼らを飛梅で脅し過ぎたから、プラマイ0になるよう親しみやすく接しただけなのに…）

元々あたしの破面たちへの…というか原作キャラへの好感度は最大である。故に嫌われるよりは好かれないという思いがゼロだったとは言えない。

しかし、あたしが破面たちへ優しくしようと思った最大の理由は、あのノイトラとザエルアポロがあたしへの恐怖でネリエル闇討ちを自重したからだ。

（あの時は「まさかそんな理由で」って驚いて、その後から彼らが動きやすくなるようぼわぼわ桃ちゃんを演じ始めたんだっけ）

もつとも演技などせずとも、シロちゃんとOSR値を意識しないあたりは元がぼわガバなアホの子である。

ソウルソサエティ
尸魂界では出来ない農園収穫や洋食料理の実験台に破面たちを巻

き込んだり、彼らの原作衣装をデザイン&裁縫したり。そんな自然体
でいられる虚^{ウエコムンド}圈の生活環境に、あたしはつつい甘えてしまったの
だ。

だが今思えば、最初に暴力で脅し、その後何度も美酒や手料理を素
の笑顔で振舞うなど：

『——どう見てもただの飴と鞭ですわね。この天然ジゴロ』

「飛梅…!?!」

突然脳裏に現れた呆れ顔のご聖体さま。勝手に人の考えを代弁し
ないでいただきたい。

「あたしのジゴロは天然じゃなくて養殖です。今回は長年の短慮が
招いたガバなのよ…」

『どつちでもいいわ…：大体破面なんて虚上がり的情操知らずばかり
なのだから、強者のプライドさえ砕けばあとは生まれたての子犬も同
然ですわ。捻くれてるだけで』

「そう言われると思えば当たる節がありすぎるんだけど…」

一部例外もいるが、確かにチンピラ舎弟なヤミーやデイ・ロイ、信
奉者の域にいたネリエルやハリベルなど、虚^{ウエコムンド}圈にはちよろい人たち
がかなり多い。尸魂界の死神たちは完全に性欲や羨望であたしに惹
かれてたけど、破面たちは何となく獣の群れの母親とか、そんな感じ
の懐かれ方だ。

なるほど、今回のガバはあたしのおふれ出る母性に破面たちがバブ
味を感じたが故のものだったのか。

罪深いな…（ゆるん

（ふんだ、別にいいもんガバっても。どうせ原作通りになってくれな
いなら、あたしの「雛森イイイイ！」に利用させて貰うだけだもん…）

そもそも破面たちに関する全てのガバの原因は、ヨン様がこの”十
刃軍団長”とかいう原作ブレイク職を作ったからだ。もつと言えば
あの鬼畜が本来の原作ムーヴを殆どサボったからだ。よって、あたし
は悪くない。

最早この段階に至ってはどうしようもないことなので、桃ちゃん開き直ります。

幸いドルドーニもアールローニも倒れた際、雛森桃についてポジティブに言及してくれた。これは「OSR値譲渡」という高度な特殊オサレ行動で、自身のOSR値を文字通り味方に譲渡する効果を持つ。

おまけに彼らの最期の台詞は雛森軍団長を慕う言葉である。あたしが崩玉と鏡花水月による悪墜ちムーヴをするときのギャップOSRはさぞ際立つだろう。

そしてそんな超^{スパー}オサレ人になったあたしを、ヨン様が瞬殺する。

OSR値絶頂のあたしがカマセと化すことによつて宿敵藍染惣右介の強さが強調され、ラスボスに相応しい最高オサレマスターの地位が確立される。

同時に、彼に斬られるあたしもシロちゃんの「雛森イイイ！」を誘発させる悲劇マスターの地位を得るのだ。

誰も損をしない最高の一手である。

さて、そうなると残りはラスボス藍染惣右介の聳え立つOSR値を突き崩し、乗り越える主人公が必要になってくる。

黒崎一護だ。

(そろそろ彼とウルキオラの最初の戦いね。あの名シーンは鯽ファンとして絶対に見逃せない……！)

あたしはどんどん壊れていく原作イベントの中で、未だ無事に再現される可能性が残るウルキオラ戦初戦を観戦すべく歩を急いだ。

最悪例の台詞だけでいいから再現してほしい。「何……だと……」の派生形の最上位、是が非でも録音せねば。

今行くからもうちよつと待っててね、二人とも！

驚いた。

それが黒崎一護と戦う破面、ウルキオラ・シファアの正直な感想だった。

「――何……だと……」

驚愕する死神の顔が彼の暗緑の瞳に映る。

最初の現世任務以来、ウルキオラは己の王と上司にこの人間の生殺与奪の権利を頂いていた。内なる虚に吞まれ現世勢力と相打つならし、力を制御し我ら破面軍の敵となるもよし。たとえ並ならぬ潜在能力を秘めようと、それは自分を脅かす程のものではないのだから。

しかし黒崎一護が手にした新たな力は、僅かながらウルキオラの強固な鋼皮イェロに傷を付けるだけの破壊力を有していた。ウルキオラは相手を侮りすぎていたことを認める。

だが。

「今のが、全力か？」

「あ、あ……」

絶望に青褪め放心する黒崎一護。その反応は問いの答えを雄弁に語っていた。

「…そうか、残念だ」

それは王の、上司の、そしてヤツと戦うことに微かな高揚感を覚えていた自分自身の本音。

相手を指差し先端から虚閃セロを放つ。特別な気合も何もない平凡な攻撃も、脆弱な黒崎一護にとつては致命の一閃に値する。仲間を抱えて逃げるボロボロな死神の背中を一瞬で追い、ウルキオラは敵の体を天蓋内の建物の一つへ叩き飛ばした。

「…大した反応速度だ」

建物上層の一室。室内に散らばる瓦礫に埋もれていた黒崎一護へ賞賛の言葉を送る十刃。虚閃の防御に一瞬だけ例の仮面を出したの
は意図的か、あるいは本能の類か。

されどその持続性は最初の一撃より大幅に落ちていた。三度目の使用は不可能だろう。

「――誰が、諦めるかよ……！」

その時、近づくウルキオラの胸元に黒崎一護の剣が突き当てられた。

「てめえが十刃のトップだろ。だったら、てめえを倒せばこの戦い、勝ったも同然じゃねえか……ッ！」

黒崎一護が精一杯の虚勢を張る。見るに堪えない無様な姿だ。

そこでウルキオラはふと、先日聞いた軍団長の言葉を思い出す。そして今ならば、この男の、あの井上織姫の心とやらが見えるやもしれん、と試したくなった。

「そうか、そいつは残念だったな」

突き立てられた漆黒の斬魄刀を掴み、自ら衣服の胸元を破く。そこから覗いた数字が語る絶望は、黒崎一護の顔によく表れていた。

「――4……だと」

その通り。彼の破面軍内での通称は破面^{アラシカル・クアトロ}NO.4ウルキオラ・シファー。上から四番目の強さを有する十刃だ。

それは同時に、たとえ自分を倒せたとしても更に三体の破面が上に居ると言うこと。黒崎一護が千度立ち上がるうと、こいつらの前に勝利はない。

「どうやら、俺はお前を買いかぶっていたらしい」

左腕で男の胸を貫くウルキオラ。

上司、雛森軍団長^{メノス}が大虚^{アラシカル}の破面化の参考にしたと述べた、”死神の虚化”の実例。あの方が……否、あの藍染様までもが注目する研究対象。確かに目を見張る成長速度だった。

だがその黒崎一護も、ウルキオラという圧倒的な存在の前では層^{クス}も

同然。興味を引く”心”のありかも、それが齎す力も見せることなく、二人の戦いは幕を下ろす。

期待したその進化は、ウルキオラの目論見には届かなかった。

「…その体でまだ動けるのなら、すぐにここから立ち去れ。動けないなら、そこで死ね」

——お前の道はここまでだ、死神。

落胆の感情を場に残し、ウルキオラは井上織姫の下へと踵を返す。

黒崎一護の死を知ったあの女が激しく取り乱せば、その”心”を見ることが出来るだろうか。仲間の死に奮起し、更なる力に目覚めるだろうか。

この戦いにおけるウルキオラの関心は、最早それ一つだけだった。

正義イイイイ！

全く、体が二つ欲しい。午前中の怒涛の原作イベントを追い駆けてあっちこっち忙しないあたしは今、急いで織姫ちゃんの部屋まで急行していた。もちろん気配は消してある。

(…やっぱり間に合わなかったかあ)

残念ながら辿り着いたときには、既に彼女はグリムジョーに攫われた後。マイナーなイベントはちゃんと原作通りになるらしく、ボロボロの織姫ちゃんルームではロリとメモリがうじうじしていた。彼女たちがクズなままの漫画版か、ちよっぴり改心アニメ版のどちらかはまた後で確認しよう。

織姫ちゃんイベが終わってしまったのなら仕方ない。後は一護の治療でしばらく暇になるはずだ。

それにそろそろあたしの監視当番の時間なので、この間に一度中央監視室で落ち着きましょう。目ぼしい原作イベントが少ない中弛みの正午前にシフトを入れたあたしの計画性が素晴らしい(尚ガバ

(今やってる対決はザエルアポロ戦か。あの戦って殆ど技術SUGEEか能力TUEEEだからあたしのOPBにはあまり参考に出れないんだよね…)

もちろん名対決なのだが、ぶっちゃけ前半の見所は石田眼鏡の破芒陣シュプレングァーくらいなのでそこだけ映像で見ればいいかな的な思いはある。

この暇な時間はとても貴重。あたしの桃玉変化のデザインについて飛梅たちと相談しないといけないし、決戦時のオサレ無双パターン、それまでの流れ、ヨン様カットまでの演技と鏡花水月スタブの決まり事の確認、等々。やるべきことは山ほど残っている。

飛梅の精神世界で出来ることは後回しに、現実世界での用事を片付ける手はずを考えながら、あたしは本宮監視塔へと急いだ。

「――随分自由に動いているな、雛森」

監視室へ入ったあたしを迎えていたのはむっすりしたDJのお小言だった。いや、一応死傷者の回収と治療という後方のお仕事してますけど。

「それは朝からずっとあたしのこと監視装置で観察してる藍染隊長と市丸隊長に言ってください。何だか着替えのときまで覗かれてるような気配がして凄く恥ずかしかったです…」

「市丸には注意したが彼は今藍染様のお側にいる。あちらのことは私には如何ともし難い、すまないな」

DJの紳士っぷりに思わずホロリしつつ、やはり覗いていたのかと羞恥に赤くなるあたしと飛梅。くそっ、あの蛇野郎あとで覚えてろよ…

まあでも一〇はそろそろ百年の悲願成就に動こうとしてる最中なので、最大の邪魔者なあたしの行動が気になるのは仕方ないかもしれない。元はといえばあたしのガバのせいだし、人間換算十五歳くらいの女死神の着替えを覗いた罪はシロちゃんも乱菊さんには秘密にしておこう。

…しかし、そうか。一〇もDJもヨン様も、この四人で一緒にわいわい出来るのも今日で最後か。特にDJとは最悪今生の別れとなるかもしれない。

復活させたいんだけど、やっぱり嫌がるかな。無理やりしたらめちゃくちゃ恨まれそう。説得材料がないワケではないが…あれほどオサレな死に様にケチを付けるのは凄く気が引ける。

あ、覗き見蛇野郎は問答無用で生き返らせませぬ。乱菊ソウルが入ってないヨン様崩玉を無意味に追いかけて名シーン再現して死んで復活してサイクロプスから奪い返して二人で幸せになって、どうぞ（一息

「そういえば更木隊長をこちらへ誘い込むのに鏡花水月は使われたんですか？」

監視室に何故かシフトの終わったDJが残ったままなので、これ幸いとまずは雑談で場を繋ぐ。二人きりだし今後のことを相談するチャンスだ。

「ああ、そのようだな。山本総隊長の指示ならば違和感はあるまい」
「朽木さんたちの救援と、黒崎一護への恩返し、あとは護廷隊としての攻撃精神のアピールでしたっけ」

「隊長格六名以上の部隊の派遣だ。それくらい理由は必要だろう」

ソウルソサエティ
尸魂界に残してある隠密虚の情報網からは、無事原作面子の虚圏強襲部隊が組織されたと報告が入っている。彼らは今、穿界門に集まって侵攻の手筈を確認している途中だ。

『……』

雑談も終わり互いに沈黙。どうやらあたしだけじゃなくDJも何か話したいことがあるみたい。もつとも内容が内容なのでうまく切り出せないのもお互い様ようだ。

「…雛森」

「ッ、は、はい」

先に口を開いたのはDJだった。あたしはつい緊張に背筋が伸びる。

「お前は…藍染様の剣を受けた後、何をするつもりだ？」

二人で向き合う形となるあたしとDJ。ピリツと空気が張り詰めるが、意外と問い質すような怒気や敵意はない。五十年の付き合いで培った彼からの信頼は本物だった。

しかしなるほど、そっちを先に聞くのか。ヨン様が忠臣DJに少しだけあたしの計画を話したのかな。 ”斬って” と頼んだのもかなり前のことだし。

さて、あたしは無難に「零番隊との戦いに備えた破面軍の再編成」と

答えて東仙の問いをはぐらかすことも出来る。だけど、やつぱりここは彼の復活に繋がられる：本当の答えの一つを述べるべきだろう。

おそらくこれが最後の機会。覚悟を決めたあたしは口を開き、答え合わせと説得を最優先に、東仙要と相對した。

「はい。あたしは――」

グリムジョー・ジャガージャックは滾っていた。目障りなウルキオラを閉次元へ追いやり、あの妙にフットワークの軽い女上司も何故か首を突っ込んで来ない。先月から幾度と戦いながら常に邪魔が入り決着はつかず仕舞いだった。

だが雌伏の時も今日で終わる。

「――いいぜ、これを待ってたんだ！ てめえを全力でぶっ潰せるこの時をよォー！」

例の女に互いの傷を癒させた今、全力全開の両者の優劣を決することが出来る。その事実昂る感情を抑えることなく、グリムジョーは相手の死神と斬魄刀を打ち付け合う。

「ハハハ！ やるじゃねえか、以前とは別人だぜ！ てめえも俺を潰したくて堪らねえんだろ、黒崎一護ッ！」

「…ッ、俺はてめえを潰しにここに来たんじゃねえ！」

しかし力は増せど意識は変わらず。仲間を護るだの殺す気は無いだの温いことばかりを口にする死神へ、十刃は口角を吊り上げ問い掛

けた。

「なら聞くが、てめえはなんであの女を目の前にしたときに連れて逃げなかった?」

「…ッ!」

「てめえは気付いてんだ。」仲間を助けるため”なんて下らねえモンじゃねえ、もっともっと根源的な理由にな」

——てめえはここへ戦いに来たんだ。

息を呑む黒崎。その通り、ヤツには見えているのだ。死神と虚という相反する両者が遭遇したときに起きる、本能的な闘争の道筋を。

「最後まで立つてたヤツが生きて戻れる! それ以外の理由があるかッ!」

「…!!」

交差する虚閃^{セロ}と月牙。だがグリムジョーの攻撃は容易く突破し、死神を追い詰める。

少しずつ、少しずつ黒崎の顔から甘さが抜けていく。悪くない。十刃は己の渴望が満たされて行く感触を楽しんでいた。

「見せてやるよ、こいつが十刃のみに許された最強の虚閃だ…!」

斬魄刀の刀身に指を這わせ、滴る血潮を触媒とした奥義。その青い閃光の射線上には黒崎と、仲間の女子供二人。

「ッ、待てグリムジョー!」

「——【^{グラン・レイ・セロ}王虚の閃光】ッ!!」

鈍い爆音と共に巨大な霊圧の塊が三人を狙う。避ければ仲間が死に、受け切るには卍解を超える力が要る。

「——ッ」

全力の黒崎一護との戦いを望むグリムジョーは、かくして男の最強

の形態を引き出すことに成功した。

「ハハハハハッ！ いいぜエ…待ってたんだ、この時をよオ！」

『てめえ、井上を…！』

「その仮面を剥がすんじゃねえぞ。俺たちの戦いの…ケリがつくまでなアツ!!」

斬魄刀に左手の爪を翳し、引き絞る。刀剣解放にこれ以上ない状況だ。

「…軋れ！」

——
豹^{バンテラ}王
——

体中に満ち溢れる膨大な力。銀の豹鎧に身を包んだ”第6十刃”グリムジョー・ジャガージャックは、己の全てで以て獲物を食い殺せる最高の戦場に、巨大な咆哮を轟かせた。

豹王イイイイ！

グリムジョーにとって先日の現世侵攻は屈辱以外の何物でもなかった。

藍染惣右介の訓令に従い、雛森桃が立てた作戦に参加した彼は一月ぶりとなる黒崎一護との戦いに歓喜した。しかし前回の独断専行で仕留め損なった死神モドキは、片腕とは言えこの”第6十刃”を一太刀で膝を突かせるほどの桁外れな力を手に、彼を鎧袖一触した。

だが二度目はない。

腕を取り戻し、邪魔者もいない本宮の大天蓋下で、グリムジョーは全力の殺し合いに臨むべく遂に帰^{レスレクシオン}刃の切り札を切る。

「——さあ、始めようぜ…ッ！」

その造形は速度と殺戮性能を細身の四肢に閉じ込めた、鈍色に輝く豹の王。敵を狩る、ただ一点のみを追求した究極の獣性が黒崎一護へ襲い掛かる。

「どうした、そんなモンじゃねえだろッ！」

『ッ、速い…！』

奇しくも自身の卍解に似た進化を遂げたグリムジョーを前に、一護は苦戦を強いられる。後ろの井上のためにもこの戦いは少しでも早く終わらせたい。虚の仮面を被った自分に怯える彼女の姿は、少年の胸に暗い影を落としていた。

「修行でもしたか、それともここまでの戦いで馴染んだか。いずれにせよ仮面の持ち時間が増えたみてえで何よりだぜ」

『……』

「前回みてえに五秒も持たねえで割れてちや…つまんねえからなアッ

！」

一護の卍解を左手の豹爪との迫り合いで封じ、もう片腕の五爪で彼の心臓を狙うグリムジョー。だが突き伸ばしたその右手は、死神の片手に握り潰された。

『…仮面が割れたらつまんねえか？』

「な…！」

『笑わせんなツッ！』

跳ね上がる霊圧。瞳に残る最後の甘さが消え、殺戮衝動の獣と化した黒崎一護がそこにいた。

『こっちの台詞だぜ、グリムジョー。つまんねえから、その解放状態…解くんじゃねえぞツ！』

押し勝ち、瞠目する十刃へ目掛け横に一閃。切り裂いた敵の胸元から噴き出す返り血を浴びながら、一護は自身の心が冷たく凍っていくのを感じていた。

目の前の破面の荒ぶる霊圧を感じるたび、一護の中の戦闘衝動が増していく。本能で戦う獣に諭され、自身もまた獣へと変化していく。その快楽を自覚し認めてから、青年は己の力が急激に増しつつあることに気付いていた。

「喰らえ！」

ガラ・デ・ラ・パンテラ
——王虚豹鉤」

「…ツ!!? 井上!!」

怒涛の攻撃を交わす両者。だが偶然か必然か、グリムジョーが射出した切り札らしき肘の鏃が五発、射線上で呆ける仲間へ殺到する。

彼女の【三天結盾】で防げる威力の技ではない。一護は無我夢中の瞬歩で井上を庇い、その背で絶死の礫を受け切った。

『……ツ！』

仮面の眼孔を越えて、救いたい仲間と視線が交わる。青褪め立ち尽くす井上の怯えは何に対する恐怖だろうか。訊かずとも彼女の震える大きな目が、全ての答えだった。

その瞳に映る一護は顔を伏せ、一瞥も残さず戦いへ舞い戻る。グリムジョーとの、剥き出しの本能をぶつけ合う獣同士の戦いへ。

「…助けんのは勝手だが、今のを喰らって大分息が上がったな。仮面の方も限界か？」

『ハッ、誰がだよ…！ お前こそ相当ガタが来てるように見えるぜ』
「へっ、悪イな…そいつア見間違いだアツ!!」

再開の挨拶に挑発を交わし、間髪を容れずにぶつかり合う死神と虚。太古の昔より定められた理に身を投じる一護の心は、思いも誇りも何もない暴力で戦う己を、哀しみと共に見つめていた。

「黒崎君…」

暴虐的な霊圧を叩きつけ合う仮面の一護とグリムジョー。塔の上からそれを見守る井上織姫は、想い人の別人のような姿に強い恐怖を覚えていた。

あの仮面の奥に覗く暗い目を見る度に、織姫は亡き兄のことを思い出す。最愛の家族が心を失い、恐ろしい怪物へとなり果てたあの悪夢を。失った幻想を追い求め、大切に思ってたはずの妹を、仲間のことを、まるで映してくれないあの淀んだ瞳を。

震える体を掻き抱き、必死にトラウマを抑え込む織姫。変わり果てた彼の姿は、強敵から自分を助け出すためのもの。それなのに、あなたは…

「——がんばれえーっ！ 一護おーっ!!」

そんな織姫の耳に、突然隣から叫び声が聞こえた。目の前で戦う化物のような一護へ向けた、破面の少女ネルの精一杯の声援だった。

「何をしてるっすか！ あんたも応援するっすよ！」

「…え？」

「…え?」じゃないっす！ 一護はあんたのために戦ってるっすよ！

なのになんであんたが一護を怖がってるっすか!？」

それは織姫の辛い葛藤を抉る言葉。沈痛に俯くことしか出来ない彼女へネルが言葉を重ねる。

一護は死神の力を手にし、仮面まで被って大切な仲間を護ろうと命を懸けて戦っている。ただの人間の高校生の彼が。

「そんなの、苦しいに決まってるっす!!」

「…ッ!」

仲間の、自分のために血塗れになりながら、心を蝕む悪霊の力を借りてまで戦う青年。それを…

「——あんたが応援しないでどうするっすかッ!」

童女の悲鳴が、織姫の体を駆け巡った。

そして少女はゆっくりと、遠くで死闘を繰り広げる一護の顔を恐怖の淀みのない目で見つめた。傷付き疲弊し、血反吐を吐いて強敵に喰らい付く、自分を助けに来てくれた青年の顔を。

…そうだ。

織姫は思い出す。最初はただ、みんなを守りたくてここへ来た。そのため仲間を裏切る覚悟も出来ていたつもりだった。だが彼らが助けに来たと聞かされた時、自分は心のどこかで喜んでしまった。強大な敵から彼らを守るためにウルキオラの手を取ったと言うのに。

そして、仮面を被り、虚となった兄のような目をする一護を見て、恐くなった。あの時”愛”とは言葉ばかりの捕食行為で妹を喰らおうとした兄のように、一護も自分を助けるのは口実の一つで、本当はただ憎悪や衝動をぶつける相手を求めて戦っているのではないか。グリムジョーの言葉の通り、いつもの優しい黒崎君とは違う、ただ敵と争うことそのものが目的なのではないか、と。

そんな、くだらないことをずっと考えていた。

(違う…)

織姫は潰れそうな胸を押さえ、一步、また一步と一護の近くへ歩き出す。

自分の本音は、そうじゃないのだ。助けて欲しいとか、彼のことが怖くなったとか、ホントはどうだっていいはずなのに…

「どうやら本当に限界らしいな」

『ハア…ハア…くそっ…！』

塔の縁から、満身創痍でふらつく一護が眼下に見える。仮面は半ばも剥がれ落ち、感じる霊圧も弱々しい。それでも禍々しい力を纏い、戦い傷付く少女の想い人。

「…な…いで」

違う。黒崎君が怖いんじゃない。自分が真に恐れていることは、そうじゃないのだ。

あたしが本当に怖いのは…

「——死なないで!!」

万感の思いを込めた、少女の原初の懇願が虚夜宮に木霊する。ラスノチエス

そしてもう一度、織姫と視線が、振り向き瞳目する一護と交差した。互いの瞳は変わらず片や恐ろしい虚の目で、片や恐れを孕んだ惨めな人間の目。

「…勝たなくていい…頑張らなくていいから」

だけど、少女の恐れは、彼のその目ではない。交わる視線に、井上織姫はたった一つの、夢のような願いを乗せた。

「もう…これ以上——怪我しないで…」

黒崎が仲間の懇願に戦場から目を離した。その隙を見逃さず、勝利を確信したグリムジョーは鞭の如き四肢で砂漠を駆け、右手の爪撃で

死神の首を狙い澄ます。

霊圧も落ち切っている。注意も散漫。一方こちらはまだまだ余力を残す状態。この一撃で全てが終わる。

それが、誰の目にも明らかかな絶対の未来だった。だが。

「…悪いな、グリムジョー」

「なっ…!?!」

豹王の渾身の一撃は、まるで球技のように容易く掴まれる。

「どうも俺は——」

これ以上やられるわけにはいかないらしい」

かくしてグリムジョーは、困ったような笑みを浮かべる満身創痕の黒崎一護の一振りで、ワケもわからぬままその足下に膝を突かされた。

ああ、何故今になって思い出す。あんな腰抜け共が口にした、くだらない敗北の言葉を。

——我らを喰え、グリムジョー。

幾百の虚が混ざり溶け合い生まれる最下級大虚^{ギリアン}。その中に、稀に溶け合って尚個を保つ者が現れる。その大虚は他の大虚を喰らい、^{アジュカス}中級大虚へと進化する。

中級大虚アジュウカスとなった者は更なる試練に立たされる。己の個を保つため、虚の原始的本能を誇示すべく永遠に同胞を喰らい続けなければならず、歩みを止めれば個を失い元の最下級大虚キリアンへと不可逆に退化する。

『貴様が、我らの王となるのだ』

最上位種へ上り詰めるために、我らを牽引する強大な力が必要だ。そう言いながら、ある日グリムジョーの前に五体の大虚が跪いた。

それが、後に”第6従属官”セスタ・フランシオンとなり、先月黒崎一護ら死神に討ち取られた群れの同胞たちだった。

「——ふざけんじゃ…ねえぞ」

重い体に鞭を打ち、グリムジョーは敵の黒い刀を掴む。

『なっ…！』

「それで勝ったつもりか…この俺によオツ!!」

くだらないことを思い出させた意趣返しを込めた一撃が、深く黒崎の脇腹を貫く。血を吐き驚愕するヤツは、されどその目に未だ希望の光を輝かせていた。

「…てめえはいつもそうだ。どんなに俺にやられても、どっかで勝つ気でいやがる。それが気に食わねえんだよオツ!!」

グリムジョーの咆哮に怯むも一瞬。黒崎が彼の神速の連撃を捌きながら、挑発を返す余裕まで見せる。

『ツ、はっ！ 人間如きに対等な顔されんのが気に食わねえってか！』

「人間も死神も破面も関係ねえ…！ 俺を舐めた目で見やがる野郎は一人残らず叩き潰すツ！」

腹立たしい男の顔を蹴り飛ばし、大きく跳躍する十刃。力を求め、強さを求め、ただひたすら上へ昇ろうと天を睨み続ける。

「その手始めが、てめえだ！ 黒崎一護オオツ!!」

それが豹王グリムジョーという獣の、飽くなき虚の渴望だった。

『――』”諦める”だど?』

長い旅の途中。

幾年を背に引き連れられたかも忘れたある日、不意に群れの大虚たちがそう口にした。常に精力的に狩りを続けていたはずの蠍大虚シャウロンに続き、牛大虚イールフォルトもその意見に追従する。

『悟ったのだ。俺たちは最上級大虚にはなれん』

ヤツらは喰った虚が千を超えたあたりから力の増大を感じなくなったと告白する。糧とした数が三千に到達した今、これ以上は無意味だ、とも。

最上位種になれるものとそれ以外とは、あるいは虚になる以前から分かたれているのかも知れん。それが群れの者たちの至った結論だった。

くだらない。ついて来れないならその辺で野垂れ死ね。そう吐き捨て一人去ろうとしたグリムジョーは、直後シャウロンが言い放った言葉に足を止める。

『我らを喰って行け』

厳格な低い男の声には覚悟があった。死にも等しい蠍の真意が気になり、豹王は背中続きを促す。

『我らの果ては生まれた時から中級大虚^{アジュユーカー}。お前はその先へ進む者だ、グリムジョー』

西洋兜の如き仮面の奥に輝く鋭い眼光は、到底自身の王の糧たらんと身を差し出す献身者のそれではない。無論これまでの先導に対する恩義や感謝などでもない。そんなものは虚の感情ではないからだ。

悟った。ヤツらは最初にそう言った。ならばこれは自らの死に意味を持たせようとする、中級大虚にまで至るほどの強靱な”個”の矜持。あるいは群れとして育まれた獣らしい同胞意識による種の存続

なのだろう。

どちらにせよ、反吐が出るほどくだらない。

どいつもこいつも腰抜けだらけだ。

良いだろう。身を差し出すのなら、喰い尽くしてやる。そこに躊躇いも後悔もありはしない。

『俺が…王だ!!』

仲間の血を顎から滴らせ、砂漠を歩むグリムジョーは空を見上げる。己の血肉となった腰抜け共へ、その”先”を見せ付けるかのよう…

『—な、何だよ…ソレ』

黒崎一護の震える声に牙を覗かせ、宙に飛び上がったグリムジョーはその十の爪に輝く巨大な霊圧の刃を振り下ろす。

【デスガロン豹王の爪】…俺の最強の技だ。てめえはここで終わりなんだよ黒崎イ!!」

『ぐっ…ううううッ!!』

五対の青白い光の切っ先が黒崎の斬魄刀と激突し、一瞬で後方へと吹き飛ばす。無様に転がる先にはその仲間たち。あの女を巻き込みヤツに無理を強いるのは最早グリムジョーのクセのようなものだった。

だがその行為が、黒崎一護の最後の死力を引き出した。

「…てめえ言ったよな、俺が”手始め”だって」

「何だど？」

右目を覆う眼孔を残し、仮面が剥がれ落ちた瀕死の死神。だが。

「俺も——そうだ!!」

豹王デスガロンの爪の一爪に剣を突き刺し、斬り碎いたヤツの曝け出された左目は、人のソレになっていた。

「てめえの言う通りだ、俺はここに戦いに来た！ てめえを倒すためにだ、グリムジョー！」

「チツ…クソがアアアアアツツ!!」

靈子の足場で空を駆ける黒崎へ、豹王は再度五爪の靈刃を殺到させる。

「てめえを倒す！ ウルキオラも倒す！ ——藍染も倒すツツ!!」

「莫迦な…!」

だがグリムジョーの自慢の大技を以てしても死神は止まらない。

「そしてルキアを…チャドを…石田を…恋次を…井上を連れ戻す！」

ガラスのように豹王デスガロンの爪を砕き、一直線にこちらへ突撃してくる黒崎一護。

「てめえ一人に負けるワケにはいかねえんだよ！」

グリムジョオオオオツツ!!

そして豹王は、自らの胸に届くその刃を、敗北を悟る懨然の目で見送った。

『——もう一度、あなたが食べ残した群れの同胞たちと共に”上”を目指せると言ったら…あなたはどうしますか?』

…ああ、全く。

てっぺんに一番近い勝者のクセに、あの時みたいになんともそうやって俺たち敗者ホロウの気持ちを見抜くあんたが、大嫌いなんだよ。

四人イイイイ！

「…いやア、相変わらず桃ちゃんの余興はオモロイですね」

ウエコムンド
虚 圈の支配者、藍染惣右介の座す玉座の間。中央監視塔を凌駕する情報集積施設でもあるこの大空間に、三人の男がいた。

玉座に腰掛ける魔王と、左右に待る副官。一同の視線の先には、激戦を終えた二つの人影を映す精細なホログラム映像が浮かんでいる。
”十刃”エスパーダのグリムジョー・ジャガージャックと、彼を下した侵入者の黒崎一護だ。

仲間の少女たちと勝鬨を上げる勝者を見つめ、冷笑の王が口を開く。

「面白いか。そうだね——実に良く出来た戯曲だ」

それは先ほど死闘を繰り広げた両者を評するに相応しい形容文ではない。しかしこの場にいる主従の三人にとって、それ以上に適した比喩はなかった。

「ホワイト、元十番隊長さん、滅却師クインシーの女の子、ルキアちゃん、グランドフィッシュャー、大 虚メノス・グランデ、阿散井クン、朽木隊長、グリムジョー……ホンマ知らぬは仏やなア」

「…私の知る限りではウルキオラとも因縁を作らせていた」

「ひゃあ、恐い恐い。一体どこまであの娘この掌の上なんやろ」

副官、市丸ギンと東仙要が画面の青年を俯瞰する。

二ヶ月未満でただの人間から十刃エスパーダを倒すほどに成り上がった人間の青年——黒崎一護。その成長と活躍の一切が藍染惣右介のための余興だった。

青年の才能の源である寄生型虚から始まり、貴種の両親の出会い、

生誕、死神の力への覚醒とそれらを完全とする尸魂界ソウルソサエティでの激闘。

その後も破面軍ブレンカールを使い彼に己の力不足を自覚させ、新能力である虚化の試運転の機会を与え、そしてここ虚夜宮ラスノーチエスでの戦いでそれを完成させる。

これまでの戦いの全てが、黒幕に敷かれた一本のレールの上。演出された英雄譚だった。

「……おや？」

畏怖と感嘆の想いにふけていると、気付けば画面内の事態が大きく動いていた。

グリムジョーとの戦いで疲弊した黒崎ら一党を、クイント・エスパーダ”第5十刃”ノイトラ・ジルガが奇襲したのだ。

「こらあかん。あの子、死ぬんとちやいます？」

「……」

新手の十刃に蹂躪される青年を見て、隣の上司の反応を窺う市丸と東仙。だが、全てを見据える魔王の目は、別の映像へ向けられていた。「おかしなことを聞く、ギン。それは彼女が自ら生み出した道化を無価値と疑うに等しい杞憂だ」

「…確かにのんびり見てはりますね、あの娘」

玉座で寛ぐ藍染に促され、市丸と東仙は隣の副画面へ視線を移す。そこに映っているのは、ドレス状の白死覇装を纏った一人の女の子。戦闘を観戦しながら幼げな美貌をキラキラ輝かせる彼女こそ、主たる藍染に仕える市丸ら三重臣の最後の一人。五十年に亘り精力的に暗躍を続け、黒崎一護の人生の徹頭徹尾を握り弄ぶ無邪気な悪女だ。

そしてその悪女の余裕の通り、絶体絶命の青年は九死に一生を得る。

「まさか、今までのネリエルの進退は全てこのためだったのか…？」

「…嘘やろ？」

東仙と市丸は目の前で起きた出来事に絶句するしかない。まさにここぞという完璧なタイミングで、それまで記憶に霊圧すら失ってい

た童女が本来の力を取り戻し、黒崎一護を守ったのだ。加えその敵が彼女、ネリエル・トウ・オーデルシュヴァンクの因縁の相手というおまけ付き。

藍染惣右介の述べた”戯曲”の二文字。それはまさしく、黒崎一護を取り巻く世界そのものを表すに最も相応しい言葉であった。

「――要、ギン」

戦慄する副官らを尻目に、魔王が鷹揚に右手を振る。その合図で新たなホログラムが三人の前に現れた。

「我らの虚夜宮、最後の役者の入場だ。彼らの演舞を皆で楽しもうじゃないか」

「……」

映像に映る、見知った六人の護廷隊隊長格。尸魂界有数の強者たる彼らの姿を虚圏に確認した藍染惣右介は、そして中央監視室を映す副画面の主へ、変わらぬ重厚なバリトンで呼びかけた。

「ああ、そうだ。君もこちらへ来るかい？」

——桃。

『……大丈夫。すぐ終わるから』

原作名シーンを堪能中、呼ばれて飛び出て雛森ちゃん。

ネリエルvsノイトラの途中で、あたしが当番の中央監視室が新たな侵入者の霊圧を感知した。ようやく虚圏へ突入した更木剣八ら尸魂界援軍の主力である。

するとほぼ同時に玉座の間のヨン様から「一緒に観戦しよう」との

お誘いが来たので、桃ちゃんホイホイ参加する。一人自由にOPB観戦もいいけど、せっかくだしあの魑魅魍魎三人衆との時間を大事にしたいと思った矢先の渡りに船だった。みんなで原作イベント観賞しましよ！

「——よく来たね、桃」

訪れた玉座の間では、例の扁桃形ホログラム映像を眺めるヨン様がオサレな玉座にふんぞり返っていた。横には覗き魔一〇と大天使DJ。あたしは不審者を無視し、チラリと東仙の顔を窺う。

気になる彼の反応は、こちらの一瞥に少し顔を伏せるだけだった。(…よかった、少なくとも憎まれてはいないみたい)

先刻の説得で最低限の成果は上げられたと確信したあたしは、迷わずDJの隣に立つ。すると一番距離が離れた一〇が被害妄想にぶつくさ言い訳を始めた。

「そない拗ねんで、桃ちゃん。この一大事に女の子が一人無防備に動いとつたら気になってしゃあないやん？」

「…雛森、この手の輩は反省とは無縁の人でなしだ。気を付けるといい」

「酷いわア、東仙隊長。それやったらボクと一緒に桃ちゃんのお着換え見ではった藍染隊長も同罪やん」

「…藍染隊長？」

そしてまさかのヨン様ギルティにあたしは強張る体で振り向く。顔の朱は必死に耐えた。

だが返ってきた彼の謝罪は殊勝とは程遠い、ニツコリ暗黒微笑だった。

「すまないね、桃。不可抗力とはいえ日番谷隊長にも悪いことをしてしまった。後程謝罪を入れるとしよう」

「！」

な、なんてことっ。そんなNTRムーヴをしたらシロちゃんの魅力が輝…じゃなくて、彼の顔が曇ってしまう！

まさか”女子の着替えの覗き”という低俗極まりない低OSR値行動のマイナスをそんな方法で回避するとは、流石は憧れのオサレマスタ―。くっ、これは許さざるを得ない…!

「…年頃の乙女のクセしてセクハラの許容基準が酷すぎひん？ この娘」

「雛森の外見詐欺は今に始まったことじゃないだろう」

「ああ、帰刃した東仙さんのあの反応は腹抱えましたわ」

外野がなんか言ってるが桃ちゃん無視。つかいつまでこの話してんだこいつら、はい終わり、閉廷、解散！

「それより尸魂界の援軍ですよ。暇な今の内にジャミング装置を起動したいので、もう始めてもいいですか？」

「へえ、そんなモン用意してたん？」

「…市丸、君はもう少し技術面でも我々に貢献しろ」

そう、剣ちゃんたちの虚圏幽閉だ。特にマユリ様を放置すると勝手に虚の解デスコレル空能力が解析されてしまうので、出来れば早めに黒腔内部ガルガンタに霊子ジャマー装置で妨害ノイズをばら撒きたい。

「ああ、構わないとも。君の好きにするといい」

「あ、はい、藍染隊長。ではポチツと…：うん、成功ね」

「軽すぎイ」

何を言うー〇。操作が無駄に専門的だと装置のOSR値が高くなりすぎてマユリ様ガルガンタが黒腔を解析出来なくなるだろ。主人公が空座町決戦に間に合わないとか再走レベルのガバである。

そうこうしていると早速援軍の剣ちゃんが一護の方角へすっ飛んで行った。そしてネリエル戦も佳境に突入。あたしはウチの数少ない女性陣の極めて珍しい無双シーンをお局様目線で観戦する。

『…：【翠の射槍】』

『く——そがああああッ！』

…：うん。

いや、確かに無双ではあるんだけど、未解放の下位序列の相手を帰刃で甚振るのってあんまりオサレじゃないよね。登場&正体明かしシーンが「おおっ！」ってなっただけに、大人状態の持続時間を気に

して先に刀剣解放してしまったのは致命的。

OPBで結果を急ぐのは敗北フラグなのだ。

『…ふへ?』

『ネル!?!』

そして原作同様、突然ポンツという間抜けな音と共にえちえちネリエルが子供の姿に戻ってしまった。ネルちゃんを足蹴にしてイキるノイトラのお仕置き内容を考えながら、あたしは時間制限系能力の扱いづらさを改めて噛み締める。

『うあ”あ”あああッ!!』

『ッ、くろ——』

『ペエ〜ット、黙れよ。てめえの仕事は、てめえを助けにきた男が汚ねえ肉片になる姿を見ることだぜ?』

そして従属官フランシオンのイケメンテスラが先に刀剣解放&帰刃ダサイ&負傷者甚振りのフルコンボでフラグを立てたところで…あの男が現れた。

『——何だア? 死にかけてんじゃねえか、一護!』

ピンチの時に救いの手が差し伸べられてこそその主人公。

更木剣八、殺戮者のエントリーだ!

「…ホンマ一々都合のええときに助けが来はるなア、黒崎クンは。桃ちゃんも色々布石打つとるけど、それをあの子自身がちゃんと活かせとるのが不気味でしゃーないわ」

「あれは黒崎一護だからこそ活かせる布石ですから。他の人に同じようにお膳立てしてもあの人ほどの活躍や強運には繋がらないと思いますよ」

「桃ちゃんの寵愛やなんて、ボクもあやかりたいモンやなア…後が怖いけど」

一〇はそう言うけど、戦闘時に起きる一護くん有利な現象は決してただのご都合主義ではない。あれは複雑なオサレシステムの計算の上になり立つれっきとした世界秩序の一つだ。特にこの世界ではヨ

ン様のサボりとあたしの介入で余計に人為的な後押し感が強くなっている。

百年も復讐の機を窺い続ける市丸ギン。果たして先ほどの言葉はただの冷やかしか、それとも本心か。鯽ファンとして原作名シーンの再現を狙うあたしはガバが怖くて相槌すら打てないが、命は拾ってあげる（物理）ので彼には存分に復讐チャレンジしてほしいです…

「…ノイトラが解放するようだな」

「更木隊長、楽しそうやなア」

その後も青空の天蓋下での戦いは続き、剣ちゃんが解放ノイトラとの斬り合いに満足しつつも出血多量で萎え始める。

そして、あの伝説の台詞が出た。

『知ってるか？ 剣つてのは…』

片手で振るより両手で振った方が強エんだとよ』

いやーこれぞBLEACH！ ゆで理論をあたかもリアリティがある風に錯覚してしまう現象。オサレユーモアだ。

「…何言うてんねや？ 斬魄刀に片手だの両手だの、そないな刀剣の常識なんてあらへんよ」

「言ってやるな、市丸。あの獣にとって斬魄刀とはただの太刀なのだ」
もっとも原住民の10DJには不評らしい。特にDJは他者から受け継いだという巨大なハンデを乗り越えて斬魄刀をものにした人だし、自身の魂の現身すら解放できない剣八には正義云々抜きで腹立ちがあるのだろう。

やれやれ…：では鈍い彼らにオサレユーモアの何たるかを啓蒙してください、更木隊長！

『…知らねえだろ、どのくらい強さが違うのか——』

そして振り下ろされた一太刀で、更木剣八は全力の帰刃”第5十刃

”ノイトラ・ジルガを瞬殺した。

「バカな…」

むふふ、DJの絶句が自分のことのように心地よい。いつもいぢめられてるあたしが知識的優位でドヤア出来るのだ。細やかな優越感が刺激されて真にベネ。

やっぱり気心知れつつも、原作キャラらしいメタ知識のない彼らとイベント観戦するのは楽しいな。

(ああ、でも…)

ラスノーチエス
虚夜宮で暮らし始めてから毎日一緒にいたヨン様一〇DJあたし。

そして、恐らくこれが落ち着いて四人揃う最後の瞬間だと思うと、胸が切ない…

最初は如何にヨン様に失望されて捨てられようかとか不毛なことに躍起になってたけど、途中で開き直って直接「斬って！」とお願いしてからは、完全にヨン様一味があたしの居場所になっていた。

あのラスボス藍染陣営で色々暗躍するという、鯰ファン垂涎の立場。雛森ムーヴで主人公サイドの護廷十三隊に所属しながら、陰で敵対しているというドキドキ。ヨン様や一〇の雛森虐めで遊ばれるのも、DJとの虚研究や農園&料理も、何だかんだで楽しかった。

それこそシロちゃんの周囲を除く、祖国戸ソウルソサエティ魂界での生活よりも。

(…まあ最初から終わりの見えてる関係だったけどね)

DJは小説での台詞からどっちみち最後は自殺するつもりだったらしいし、一〇は乱菊さんの魂魄を奪い返して復讐。あたしに至っては逆に殺して貰うために一味に入ったり、原作再現でヨン様敗北のために動いたり、ホント好き勝手やってる。

…うん、コレでよくあんなに和気藹々できたなウチの組織。原作では殺伐としてたのに美少女(ガワ)が一人加わるだけで凄く変化だ。褒めてほしい。

「——さて、時間だ」

ノイトラが敗北し、浦原喜助の開けた黒腔ガルガンタも封鎖した。戦術の基
本たる敵戦力分散が十全に成された今、遂に藍染惣右介が玉座を立
つ。

「桃、織姫をここへ」

「…お任せを」

思わずニヤリとしてしまいそんな唇を何とか堪え、あたしは深々と
一礼する。

もう直ぐ、もう直ぐだ。運命の十一月一日の午後。原作BLEACH
Hで最も有名で人気の大戦闘…

空座町上空決戦が、始まる——

援軍 イイイイ！

ウエコムンド
虚 圏の王城ラスノーチエス虚夜宮を拠点とする、種の限界を超越した虚、アランカル破面。
その頂点に君臨する最強の十体エスパード十刃の迎撃により、黒崎一護率いる侵入者との戦いは破面軍へ大きく天秤が傾くこととなった。

「――御苦労様、諸君。愉快で冗長なこの舞台も、ようやく終演を迎えられそうだ」

「――案ずるな、アールニール。君の不始末は私が拭っておく」

「――諦めろ。てめえら全員、ここで終わりなんだよ」

個々の実力はもちろん、地の利に加え数の優位もない一護たち。連れ去られた井上織姫の救出成功まであと一歩までたどり着きながら、一同は健闘空しく全滅寸前にまで追い込まれる。

…だが破面軍の勝利で決したはずの戦闘は、突如現れた四人の死神により振出しへと戻された。

「…誰だい、君は？」

「――ククク、”私が誰か”…か。その質問に答える意味があるのかネ？」

死に体の石田雨竜と阿散井恋次で遊ぶザエルアポロの前に、十二番隊隊長・涅マユリが。

「…私は^{セブティマ・エスパード}第七十刃”ゾマリ・ルルー。さあ、名乗りなさい侵入者」

「――兄等の敵だ」

瀕死の朽木ルキアを狙うゾマリの前に、六番隊隊長・朽木白哉が。

「――私たちは皆の傷を癒しに来ただけ。貴方がたと争うつもりはありません」

「……！」

敗北した茶渡泰虎、ガンテンバインを回収しようとする葬討部隊^{エクセキアス}を、四番隊隊長・卯ノ花烈が、
そして。

「――十一番隊隊長、更木剣八！」

「第5十刃、ノイトラ・ジルガだ！」

満身創痍の黒崎一護をいたぶるノイトラを、最強の剣の鬼が。

一族の誇りを守るため、癒師の務めを果たすため、知識欲を満たすため、ただ血が沸き立つような最高の戦いを愉しむため……

それぞれの意志を胸に、尸魂界の守護者・護廷十三隊が誇る最強の戦士たちが破面軍に襲い掛かった。

かくして新たな王を迎えて以来となる虚夜宮^{ラスノーチエス}の波乱は、多くの予想を裏切る大転回を迎える……

死神は皆、傲慢だ。

朽木ルキアを殺す直前に現れた新たな侵入者。護廷隊の隊長と思しきその死神と言葉を交わした^{セブティマ・エスパード}第7十刃”ゾマリ・ルルーは、自らの持論を改めて確とする。

「……私は貴方を自分と同格と考え、そのように振舞っているつもりです。私の心に驕りなどない」

「破面がこの私と自らを同格と考える……それ自体が既に驕りだと言っている」

この死神の何と不遜なことか。

ゾマリは虚から破面となり、理性と”愛”を取り戻し、そして知った。その事実を他の有象無象と同様に見向きもしない驕り昂る敵へ、

男は自らの技巧を披露する。

「ヘメロス・ソニード双児響転」。十刃最速を誇る私が磨き上げた歩法です。貴方がた死神に”瞬歩”があるように、我ら破面はこの”ソニード響転”を鍛え、己の武闘を優位に進めるのです」

「貴様の見戯に興味はない」

しかし相手がその傲慢な態度を改めることはなかった。分身にも等しい高度な技術も、敵の同等以上の変わり身術を見せられ…

戦士の誇りを傷つけられたゾマリは、斯くて決断する。

——それを人と呼ばず何と言うの？

ああ、そうだ。あの方はおっしゃってくれた。

我ら破面は、人だと。虚から人となった、破面なのだ。

見せ付けねばなるまい。認めさせねばなるまい。我らを見下し侮る死神の、千年にも亘る誤りを。

「…鎮まれ」

——ブルヘリア呪眼僧伽——

”クイント・エスパード第5十刃”ノイトラ・ジルガは、更木剣八と名乗る血の気の多い死神の隊長と斬り合いながらも、自らの優位を信じて疑わなかった。己の鋼皮は歴代全十刃最高硬度。イエロ死神の斬魄刀如きで切り裂かれることなどあり得ない、と。

そして事実更木との戦いにおいても、ノイトラは傷一つ負うことなく戦い続けていた。

…だと言うのに。

「何——笑ってんだコラア!!」

敵が倒れない。敵が諦めない。獰猛な笑みのまま様々な方法で、箇所ので、こちらを斬ろうと試してくる。

「ようやく慣れてきたみてえだな。てめえの硬さによ」

「…慣れ…?」

それは不意に起きた変化だった。一度のまぐれ当たりでノイトラが腕を負傷。そして以後の更木の剣筋が何故か、見違えるほど鋭く研ぎ澄まされた。

”慣れ”などという言葉では到底説明のつかない理不尽な現象。罅迫り合いの中、混乱するノイトラに更木が凶悪な笑顔で礼を言う。

「ありがとよ、おかげでいい肩慣らしになったぜ」

「ふっ…ぎけるなあああッ!」

激昂し、自由な右手で敵の急所、頭部を狙うノイトラ。

だが彼の指先が更木剣八の眼帯を剥ぎ取った、その直後。

「かつ——」

ノイトラは、桁外れな霊圧を帯びた斬魄刀の袈裟切りで、虚圏の砂漠に膝を突いていた。

「外すんじゃないよ、馬鹿。加減し損ねたじゃねえか」

「何だ……その眼帯……」

更なる理不尽に苛立つ十刃へ、死神が「封だよ」と一言述べる。

自らに枷を嵌めて戦っていた男の、真の実力。それが平然と佇む死神と辛うじて命に縋り付いた破面、両者の力の差であった。

「…馬鹿が…」

死ぬかよ。

この俺が、てめえ如きの剣で。

俺が。

俺がッ!

「おれが死んでたまるかアアッ!!」

そしてノイトラ・ジルガは解放する。絶望の名に相応しい、自らの虚としての在り方を回帰させる、”帰刃”レスレクシオンを。

「…祈れ!!」

——サンタテレサ
聖哭螳螂——

「——」支配か。そんなもの、私の前では何の意味も持たぬ」

…何故だ。

何故ヤツはそんな目で私を見る。何故我ら破面の矜持を蔑み、無価値と見做す。

「——最高だぜ破面!! 戦いってのはこうでなきやいけねえ!!」

…何故だ。

何故ヤツは倒れない。何故これほどの力を前にして、この俺に絶望しない。

護廷の隊長との激闘の中、十刃はそれぞれの疑問に、その虚ろな心を苛まれる。絶望の最奥に見出した微かな光へ手を伸ばす彼らにとって、死神の振るう剣は眩しく、そして忌々しいほどの力に満ちていた。

「…正解」

——こうけい
吭景・千本桜景厳——

死神の正解が周囲を隙間なく旋回し、四方八方より殺到する。その幾億の刃を辛うじて耐えながら、己の激情を憎き死神へ叩き付けるゾマリ。

「お前たち死神は一体誰の許しを得て我等虚ホロウを斬っている！ 否、貴様等は誰にも何も与えられてなどいない！ その手に正義があると思い上がり、虚を悪と断じる！」

何たる傲岸、何たる不遜。

ヤツらはその名に”神”の字を自称し、その神の名において我等を裁いているつもりなのだ。

——理性を持ち、技を磨き、愛を知る者。それを人と呼ばず何と言うの？

ああ、度し難い。

「…知らねえだろ？ 両手で振った剣の強さが、片手のそれと…」

——どのくらい違うのか。

一閃の紫電。続く激痛と爆風。

暗転する視界を必死に光へ繋ぎ止めながら、ノイトラは敵の一振り
で自身の戦意が悉く打ち砕かれたことを理解する。

「…じゃあな」

「ま、待て…ッ！」

去り行く更木剣八。その退屈そうな目を見た十刃は焦燥に声を上げる。

どこへ行く。まだ俺は戦える。まだ戦いは終わっていない。まだ…

「俺は死んでねえぞ、死神イ!!」

「…終^{しめ}えだ、今ので。戦えなくなった野郎にわざわざ止めを刺す義理ア無えんだよ」

何たる驕慢、何たる侮辱。

どいつもこいつも軽々しく情けをかける。その先に救いがあるのだと、お目出度い頭で信じきって。

——藍染様はあなたに力を、機会を、名だたる強敵を。そして…
死に場所を与えてくださるでしょう。

ああ、度し難い。

我等は一度人から獣になり、そして人へと戻った破面。その過程で多くを失い、皆真綿の縄で首を絞められるような退廃の足音に恐怖している。

ぽつかりと空いた、永遠に塞がらない心の孔を埋める何かを探しながら。

「…私が貴様を斬るのはただ、貴様が私の誇りに刃を向けたからだ」
我々破面に”愛”以外の救いはない。

「…チツ、面倒臭えな…：…しょうがねえ。来いよ、死にたがり」
俺達破面に”死”以外の救いはない。

「——万歳！ 万歳！」

「軍団長閣下万歳！」

「ばんざああああああい!!」

あの方が与えてくださる、虚も死神も等しく全てを見下ろす、いと尊く高き愛だけが我等破面を救う。我々がこの世に存在する意味が、価値があるのだと、あの傲慢な愛のみが認めてくださるのだ。

『——俺は斬られて…』

『倒れる前に息絶える』

『そういう死に方をしてえんだ』

それは”情け”ではない。たとえ藍染が、あのウザい八方美人な小娘がいようと、俺達破面に救いはない。戦い、戦い、そしていつしか出会う圧倒的な”最強”の一振りこそが、俺達を救うのだ。
だから。

私を陶醉させた最高の愛をくださったことに。

俺を陶醉させた最高の戦いをくれたことに。

——感謝を。

——こいつがそうか。

知性に欠けた猪武者、阿散井恋次の奇策により崩壊した第8十刃宮。散乱する瓦礫の上で敵の援軍と相対した”第8十刃”オクターバ・エスパーダザエルアポロ・グランツは、その異様な風貌の死神の正体を一目で看破した。涅マユリ。護廷十三隊十二番隊隊長にして、瀨霊廷技術開発局局長。

あの邪悪な女神が見据えるザエルアポロの未来において、己を倒す破滅の導き手だ。

「…何故僕の名を知りたがる？」

「馬鹿かネ、君は？ そんなもの決まっているじゃないか…」

——君を瓶詰めにしたときに、瓶に名前を書いたためだよ

挑発を交わし、技術者同士の勝負が始まった。最終的な身の安全が既に確保されている彼にとって、この対面は初めから涅マユリの技術を引き出し盗むためのもの。実際の戦闘などただその手段に過ぎず、勝敗など更に価値がない。

「クソツ…こんな毒、時間さえあれば…ッ！」

「ピーピー五月蠅いヨ。…殺れ」

——こんじきあしそぎじぞう金色足殺地蔵——

劣勢に焦燥する自分の演技を俯瞰しながら、ザエルアポロは相手の手の内をじっくりと観察する。

ヤツが連れた副官の”人造死神”。彼の【テアトロ・デ・テイテレ人形芝居】対策の”臓器

複製”。自らの斬魄刀に猛毒を組み込む”斬魄刀改造”。初めて見る珍しい”生物型の卍解”。そして何より、それらを駆使し戦う涅マユリの戦術眼。

そのどれもが、どんな宝石よりも貴重な、大変興味深い知的財産だった。

「——ぐうッ……」

『!?』

そして、ザエルアポロ第一個体が涅の卍解に喰われ敗北する。

ヤツの副官に、素晴らしい置き土産を残しながら。

「うあ”っ、あ”、あああ”ああ……」

「…何だ、様子がおかしいぞ…!? お、おい涅マユリ！ 早くあの触手を解いてやれ！」

そう、たとえ一切の事前準備がなくとも、この程度で滅びる僕ではない。必ず他に何かあるはずだ。

このザエルアポロ・グランツの運命を決する、避けがたい何かが。

『——僕を、殺したと思ったか?』

「ッ、ザエルアポロ!? まだ生きてたのか……!」

低劣な下等種共へ教えてやろう。【邪淫妃】フォルニカラスの最も重要で最も誇るべきこの能力の名は……”ガブリエール受胎告知”。

「——ッ、はああんっ♥!?!」

「……へっ?」

その能力とは。

『敵に僕自身を孕ませることだ』

感動のあまり絶句し放心する一同。その中に艶めかしい女の、場違いなまでに色っぽい嬌声が木霊する。

実験は成功だ。

『臍から体内に侵入し、とある内臓に卵を産み付ける…』

「あつ、や、あんっ♥ ダ、ダメっ、見ちゃ——はあああんツ♥」

「く、涅副隊長!？」

いつかの意趣返し（いさくはし）の機会を見据えた改造だったが…人造とは言え女死神は女死神。”本命”の前に貴重なデータが取れたことに感謝せねば。

『そして宿主を一切傷つけず、卵は孵る。母体への”感謝”を込めて、女性の感じうる最大の多幸福感を差し上げながら…』

「あ”っ♥!？ あ、ああ、あっ♥あっ——はああアアアああん♥♥!!」

「お、おい何やってんだザエルアポロのやつ!? ボテ腹の女性副官がすげえエロ顔でアへ——「実況するなペツシエ・ガティーシエ!!」

真っ赤な顔で狼狽しながら「誰かあいつを止めろ」と騒ぐオーデイエンスの雄共。こちらは悪くないが、肝心の母体自身が周囲の反応に恥じらう精神的余裕がないのはいただけでない。

性的快楽信号を減らすなどの改善点を考えながら、ザエルアポロは涅の副官の体内に投与されていた無数の薬品のサンプルをアジトへ閉次元装置で転送する。

そして彼女の股間から、ドロリと赤と白の半液状の姿で這い落ちた。

…さて。

「自己紹介からやり直そうか。

——涅 マユリ」

君がこの僕をどのように破滅させるのか、興味が尽きないんだ。

羚羊イイイイ!

『——』“ネリエル?!” わあっ、初めまして! あたしは雛森桃と申しますっ!』

それは虚^{ホロウ}、ネリエル・トウ・オーダーシユヴァンクにとっての光。使い古された陳腐な言い回しだ。だがあれこそが、自分にとっての”運命の出会い”だった。

同胞たちを喰らい続けなくてはならない。誰よりも強くならねばならない。中級大虚^{アジュールカス}の宿命に囚われ、誰よりも獣らしく生きねばならなかった忌むべき半生。

その呪いから逃れる道を示してくれた一人の死神の少女に、ネリエルは惹かれた。

自分とは比べ物にならない桁外れな霊圧。砂の大地を黒曜に焼き尽くす恐るべき力。そしてそれら凶悪な鉤爪の一切を隠し、可憐な笑顔で握手と対話を求める謙虚な理性。

どれもが震えるほど畏ろしく、眩しすぎるほどに彼女が焦がれた強い”人”そのものだったのだ。

——ようこそ、我が虚夜宮^{ラスノーチエス}へ。

ネリエルを仲間にした死神の少女には、主がいた。かつて虚^{ウエコムンド}の神を名乗ったバラガン王の宮城を奪い、君臨した異端の死神、藍染惣右介だ。

彼の持つ崩玉の力で破面となったネリエルは、されどその大恩人に、感謝より先に恐怖を覚えた。

彼の方は、私を見ない。あの冷たい琥珀の瞳が映す私は、路上の石ころ以下の存在でしかない。

だが破面化の謁見後。自信喪失からつい弱音を零してしまった自分へ、おろおろ慌てながらも強い言葉で励ましてくれた”人”がいた。

そのお方こそが、ネリエルのもう一人の恩人である死神の少女——雛森桃。

『あなたはこの世に絶対になくってはならない、とても大切な人です』
愛おしむように、慈しむように。藍染王とは真逆の温かい琥珀の瞳が自分を見る。その深淵に、あの地獄の劫火の如き爆炎を秘めながら。

…ああ、恐ろしくも慈悲深い雛森様。真に忠誠を捧ぐべき相手は、私には、選ぶまでもなかったのです——

「——ハハハハッ！ まさかてめえが虚夜宮ラスノーチエスの敵に手を貸すとはなア！」 忠臣”ネリエルさんよオ!?”

因果は回る。過ぎたものを望んだ愚者は、その報いを受ける。

かつて雛森様が自分にくれたように、自分が救おうとしたノイトラ・ジルガの剣を受けながら、ネリエルは雑念を払うように自らのそれを振り薙ぐ。

「あア、そうでもないか?」

「……」

「知ってるぜ、てめえにはそいつらに協力する哀れで御大層な理由があるんだろ? なあ……」

——捨てられた騎士さんよオ?

ノイトラの挑発を聞き流し、拮抗する状況を打開せんとネリエルは博打の刀剣解放を行使する。

「…謡え」

——
ガミューサ
——
羚羊騎士

己の虚の力を回帰させたネリエルは静かに自身の体へ意識を巡らせる。

かもしか 羚羊の四肢、人の上身、渦巻く左右頭部の角。こんな異形の半人半獣を「もふもふ可愛い」なんて褒めてくれたのは、後にも先にもあの方だけだ。

「ぐっ、クソッ……は、はは！ 凶星でキレたかネリエル!?」

「……」

「まったく可哀想な女だなアおい！ 懐いてたご主人様に『迷惑』の一言でポイだ！ ザエルアポロも感謝してたぜ、てめえの狂信のおかげでエスパーダ十刃の席を空ける手間が省けたってなア！ ははははは!!」

煩わしい調子外れな声で嗤う哀れな獣。昔とは別人のように強くなつたノイトラを全力の帰レスレクシオン刃でねじ伏せながら、ネリエルは当時を想起する。

「…今の私は、あなたから一護たちを守るために戦っている。たとえばあの方への恩返しは果たせずとも——」

「ッ！ しまっ…」

「今度の恩は、返してみせるッ!!」

——
ランサドール・ヴェルデ
——
【翠の射槍】

それは彼女の有する最強奥義。渾身の霊力を込めて射た投槍はノイトラの斬魄刀を砕き、その左肩を穿つ。

勝負は、一撃だった。

——
”迷惑”、か…

確かにそうだったのかもしれない。

エスパーダ 十刃は藍染惣右介の野望を叶えるための軍団。あの席は最初から、忠誠を捧ぐ相手を違えた自分が座るべきところではなかったのだ。

(それに…)

思えばあの方は私が必要だとはおっしゃってくれたが、それは一人の部下としてではなく、もつと抽象的で俯瞰的な意味に思えることが多々あった。

ただの従者としてお側においてもらえるだけで満足だった私は、あるいはあの方の言う”成すべきこと”を最初から履き違えていたのだろう。

「…昔のことは全部終わった話。生かされた命なら、生きることの意味があるのだと、私は信じてる。あの方なら、そうお考えになるはずだから」

「げほっ…：…ッ、くだらねえ…」

その”成すべきこと”が一体何だったのか、今となってはわからない。

あの可憐な少女は、我々破面の虚ろな心を見透す。忌むべき過去も、明暗分かれる未来の果てさえも。

そんな主人、雛森桃の浮世を超越した精神は、己の獣性に悩まされ続けていたネリエルにとって、遠すぎる羨望だったのだ。

「安心して、ノイトラ。命までは取らないから——」

そして、悔しげに顔を歪める憐れな獣の姿を最後に。ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクの意識は、元の長年の闇へと呑み込まれた。

「——お役目、本当にご苦勞様でした、ネリエルさん」

…ああ、そうか。これが。

よかった、私は…

あなたへの恩を、返せたのですね。

『なっ!?!』

その時。

傷付いた仲間の下へ駆け寄る井上織姫は、そこに彼女がいる事実を認識することができなかつた。

「——時間です、織姫さん」

戦いが終わり緊張の緒を緩めてしまった織姫は、その静かな声でハッと気付く。いつの間にか目の前にいた、一人の少女の姿に。

「ッ、ひな…」

しかし織姫が呟いた女死神の名は、突如吹き荒れた砂塵と爆音に掻き消された。

「馬鹿野郎！ 何やってんだ剣八！」

「——強え」

「…はっ。」

何が起きたのかわからない。だが一護の無事な声に安堵し顔を上げた織姫は、自分を護るように伸ばされた一肢の細い腕を見る。

その白魚の如き繊細な指が、凄まじい力で振り下ろされたボロボロの刀を羽のように抓んでいたのだ。

「強え！ 強えッ！ 強えッッ!!」

「……」

「何だてめえ!? 何だその霊圧!? 今まで斬ったどの敵より力の底が感じられねえ!!」

背筋が凍える凶悪な笑みを満面に刻む男。それを向けられる女の子の幼げな横顔は、無表情ながらどこか大きな覚悟が垣間見えた。

いけない！ 無拍子で始まった二人の戦いに織姫は焦り戦慄する。

「名は何つつたか忘れたが、どっかで見た顔だ！ 裏切り者つてこたアぶつた斬つていいんだよな!?!」

「まっ、待つてください！ この人は……」

「退け女！ こいつは俺のえも——」

だが男が二撃目の剣を振り上げた直後。それは起きた。

「…はじ弾け、【とびうめ飛梅】」

——しやくせん灼閃・こうこうりんげん煌熬琳原——

突如瞬いた桃色の閃光。続く途轍もない爆風と、体表が焼けるほどの熱が織姫を襲う。

ぐわんぐわんと爆音が木霊する頭を必死に抑え、眩んだ目を恐る恐る開けた少女は——絶句した。

「嘘……だろ……?」

一護の喘ぐような声が織姫の心を代弁する。

そこで彼女が見たのは、果てしなく燃え広がる、平らな煉獄。そしてその手前で戦意を昂らせていた大男が、真つ黒に煤焦げ崩れ落ちる瞬間だった。

想い人の一護が手も足も出なかったノイトラを倒した、更木剣八。手負いの連戦とは言え、あの鬼神の如き男が、織姫自身より華奢で小柄な少女に瞬殺されたのだ。

目を疑うその光景全てが、瞬く間の出来事だった。

「……ごめんなさい、黒崎くん。もう少しだけ織姫さんをお借りします」

下した怪物を一瞥し、四支の宝剣を鞘に納めた女死神が、一護へ無慈悲に宣告する。

「い、イヤっ…！ 黒崎君ッ!!」

「なッ!? いの——」

それは彼女なりの、これから起こす絶望と理不尽への謝罪だったのかも知れない。

一護の喚呼の途中で、織姫の視界が一変する。青空下の砂漠から、暗く無機質な大階段へ。

「——おかえり、織姫」

そう。

全身の力が抜け落ちるほどの、あの悪夢のような霊圧を滲ませる——玉座の魔王の膝元へ。

「どうした。随分と辛そうな顔をしているね」

「っ…!」

コツ…、コツ…と。織姫の悪夢が彼女へ迫る。

「——笑いなさい」

そして、ふわりと。淡いマスカテルの芳香が少女を包み込んだ。

「太陽が陰ると、皆が悲しむだろう。君は笑って、少しの間…そこで待っているだけでいい」

動けない。振り払えない。

頬に優しく触れる、その長く冷たい指先を。

「我々が空座町を滅し…」

【王鍵】を創生するまで」

…そして囚われの姫は、魔王の恐るべき企みを知る。

大罪人、藍染惣右介が目論む世界の理への反逆。その恐るべき全貌を――

さあ、来ました。

原作名シーン” ヨン様決戦前演説” です！

「桃。【天挺空羅】を」

あ、DJじゃなくてあたしなのね…十刃たちを呼ぶのにしよつちゆう使ってたからイメージ付いてるのかな。DJ、出番奪っちゃってごめん…

「はい」

しかし！ お役目いただいたなら最高にオサレなシーンを演出せねば！

あたしは懐の専用ファンネルを花卉を風に舞わせるように宙へ放り、Fateシリーズの令呪詠唱っぽく上品に伸ばした腕に紋を描かせる。

そしてそのままバツと横へ構え、起動ッ！ ブウオンッ！！

「――【縛道の七十七・天挺空羅】」

くうく我ながらオサレ！ 原作DJのピンツ！ とコインを弾くようにファンネル飛ばすのもいいけど、清楚系美少女な桃ちゃんにはやっぱり女性的なエレガンスが似合うと思うの（なお中身

そして二重四角の紋様が宙に浮かんだら、ヨン様のターンだ。

お願いしますっ、オサレマスター！

「——聞こえるかい？ 侵入者諸君」

ザザザ…とノイズが辺り一帯に走り、監視画面の映像内で護廷隊&主人公勢力の面々が全員弾かれたように反応する。

「ここまで十刃^{エスパーダ}を陥落させた君たちに、敬意を表し先んじて伝えよう」

『…！』

「これより我々は…」

——現世へと侵攻を開始する。

当惑、苦渋に顔を歪める一護たち。やはり主人公勢はリアクションが見えていて気持ちいい。

そんな彼らへのご褒美に、ヨン様が優しく織姫ちゃん誘拐の真意をお話する。彼女が一護たち死神代行組と、彼らに恩のある護廷隊の戦力を誘引する餌であったこと。その”事象の拒絶”という凄い能力が崩玉の実際運用に必要であると誤認させること。

そしてまんまと釣られた主人公勢力と護廷隊長格七名は、たった今、ここ虚^{ウエコムンド}圏に幽閉されたこと。

…なお実際はもう一つ”決戦時期を誤認させる”という理由があったんだけど、あたしのリガバリーで開戦時刻を布告する必要があったので無しになりました。ごめんちゃい。

「護廷十三隊の素晴らしきは、十三人の隊長全てが主要戦力足り得る力を有しているという事だ」

『……』

「だが今はその中から三人が離反し、四人が幽閉。尸魂界の戦力は文字通り半減したと言って良い」

——容易い。

うん。実際原作もヨン様一人で無双してたし、この世界ではあたしに仕事を押し付けた分さらに強くなってるからもつと無双するだろう。おまけに（途中で自主退場するけど）彼の部下にはこのあたしと桃玉桃ちゃん☆6も加わってるのだ。

：唯一の希望無月一護と浦原さんには頑張つて頂きたい。

ヨン様がD Jと一〇を連れて、オサレ扁桃形黒腔ガルガンタを潜る。あたしはシロちゃんのハリベル戦を邪魔しないようワンダーワイスと一緒に後で参戦するから、魑魅魍魎三人衆とはここで一旦お別れだ。

山爺の【城郭炎上】は熱いらしいから、桃ちゃん真心アイステイアの差し入れをどうぞ。代わりにあたしが後で観れるように録画忘れないでね！

最後尾で「あ、おおきに〜」とアイステイアの水筒を受け取った一〇を見送り、あたしはヨン様演説に集中する。

「我々は空座町を滅し去り、王鍵を創生し…

——尸魂界を攻め落とす」

そう、原作ではここで初めて彼が護廷十三隊との全面戦争を宣言するのだ。

それに対し尸魂界側は、浦原喜助の進言を参考にし事前に【転界結柱】で重霊地の空座町を流魂街の外れに転移させる奇策を披露する。

「——フム。…どうやら…間に合った様じゃの」

いた、鬼門の山爺。

空座町のレプリカの上空に、一番隊総隊長・山本元柳斎重國が、護廷十三隊の隊長格十名を引き連れ厳かに佇んでいた。

そして。

(ああ、ああ、ああ…よかった…)

——シロちゃんがいるよお…

あたしは感動のあまり立ち尽くす。

長かった、本当に長かった。幾多のガバを乗り越え、幾多の布石を打ちまくり、百五十年もの時間をかけて準備した、二度目の「雛森イイイイ！」チャンス。

それが今、あたしの目の前にあるのだ。

「——間に合った？」 一体、何を以てその言葉を口にしてている？」

…だが、まだ、まだだ。もう少しだけ我慢だ。

感動を何とか胸の内に抑え込み、何度かの深呼吸で気持ちを切り替え、あたしは今しか見ることの出来ない作中最高峰のオサレシーンに備える。

「そこにあるのが空座町でない事は解っている。だがそれは何の妨げにもなりはしないよ」

そう、鯰ファンなら誰もが認めるBLEACH名シーンベスト3に入る…

「——スターク——」

「——バラガン——」

「——ハリベル——」

「来るんだ」

その呼び声を合図に、虚空に新たな三つの歪が現れる。

太古の昔に別たれた三界。次元の顎あぎとの深淵に覗く、底なしの闇の中

から、彼らは悠々と現れた。

【序列第三位。司る死の形は“犠牲”】

”^第 TRES³ ESPADA^刃”
TIER^テア^ア HARRIBEL^ハリ^リベ^ベル^ル
”^第 TRES³ 徒^徒 属^属 官^官 各^各 員^員
FRACCI・N

【序列第2位。司る死の形は“老い”】

”^第 SEGUNDA² ESPADA^刃”
BARAGGAN^バラ^ラガ^ガン^ン LOUISENBAIN^ルイ^イゼ^ゼン^ンバ^バイ^イン^ン
”^第 SEGUNDA² 徒^徒 属^属 官^官 各^各 員^員
FRACCI・N

【序列第一位。司る死の形は“孤独”】

”^第 PRIMERA¹ ESPADA^刃”
COYOTE^コヨ^ヨテ^テ STARRK^スタ^ターク^ク
”^第 PRIMERA¹ 徒^徒 属^属 官^官 各^各 員^員
FRACCI・N

世界を軋ませる途轍もない霊圧が、気丈な護廷十三隊の面々に襲い掛かる。

虚^{ウエコムンド}圏の支配者、藍染惣右介が率いる最強の破面^{アラシカ}。その最上位戦力が今、空座町の上空に集結した。

「空座町が尸魂界に在るのなら：君たちを殲滅し、尸魂界で王鍵を創る。それだけのことだ」

如何なる備えも、企みも、戦力も、彼の前に意味を成さない。全ては最初から、男の掌^ての上にあるのだから。

「それまで虚夜宮は君に預けるよ」

ウルキオラ

王の命令が、姫を残す大広間に響き渡る。その中央に鎮座する玉座の前で、王命に順ずるかの如く、空が割れた。

「——はい」

【序列第四位。司る死の形は”虚無”】

——”CUATRO ESPADA”——
ULQUIORRA CIPHER

現れたその黒髪の青年は、無機質な翡翠の瞳で、怯える姫を見つめていた。

少女を取り戻さんと宙を駆ける人間、黒崎一護。迎え撃つ玉座の守護者。そして、決戦の地にて相見える死神と虚の大軍勢。

斯くて、開戦の刃は振り下ろされる——

黒翼 イイイイ！

「——怖いか」

第五の塔の最上、玉座の間。

ラスノーチェス

アランカル

虚夜宮の守護を任された一体の破面、”第4十刃” ウルキオラ・シ

ファアは、気丈に佇む女へそう尋ねた。

その役割が敵の囚であつたと知り、全てが計画通りに進んだ今、彼女——井上織姫を守るものは何もない。雛森軍団長も、ウルキオラ自身も、無価値な人間に目をかけることはない。

女は此処で、誰にも触れる事なく、たった一人で死んでいくのだが。

「こわくないよ」

井上織姫は、その恐怖を撥ね返した。

「みんながここに来てくれた時、最初は少し嬉しくて……そしてすごく悲しかった。なんで来ちゃったんだろう、って」

「……」

「だけどみんなが戦って、傷付いてるのを感じて……すごく、すごくイヤだって、思った」

仲間にかがしてほしくない。無事でいて欲しい。そう思った時、彼女は気付いたと言う。

「もし、みんなの中の誰かがあたしと同じように消えてしまったら……あたしもきつと、みんなと同じことをする」

誰かと全く同じことを考えるなんてありえないかもしれない。だけど、相手を大切に想い合って、相手の少し近くに心を置くことはで

きる。

そして、それこそが、そうなのだ。

透き通るような声で、井上織姫はそう言った。

それこそが……

——”心を一つにする”ことなのだ、と。

沈黙が玉座の間を支配する。切なげな、それでいて強い意思を感じる大きな瞳が、真つすぐ前を見つめてくる。死を突き付けられた非力な者には決してできない、強い目が。

「……心だとか？」

ふと、気付けばウルキオラは目の前の女に問うていた。

「貴様等人間は容易くそれを口にする。まるで自らの掌の上にあるかのように」

破面は想起する。かつて己は、肌も口も、鼻も耳も持たず、闇の中に生れ堕ちた異形の虚であった。そんな彼が知る唯一の世界が、その目が映す白と黒。それが彼にとっての、この世の全てであった。

そして、そこに心というものは、存在しない。

「軍団長もおっしゃっていた。お前は、あいまいであやふやな”心”の、その在処を……その本当の形を知りうる存在だと」

「……あの人が……？」

それは軍団長——雛森桃が、唯一ウルキオラに教えてくれなかったこと。そして不可能な自分に代わり、あなたにそれを教えてくれる人を知っていると一言してくれた時のこと。

ああ、やはり。

お前は知っているのだな。

「心とはなんだ」

破面は問う。一步一步、その答えを持つ人間に近付きながら。「その胸を引き裂けば、その中に見えるのか？ その頭蓋を砕けば、その中に見えるのか？」

破面は人間の眼前に立つ。そして、彼女たちが都度々々触れるその場所へと、手を伸ばした。

だが、ウルキオラの指先が井上織姫の胸元へ触れる、その寸前。

「――井上から離れろ」

轟音と共に大広間の壁を突き破りながら、もう一人の人間が現れた。

女と同じ”心”を持つ、もう一人が。

剣が交わる度、壁のような風圧が体に打ち付ける。大切な想いと、お世話になった破面^{アラシカル}が戦う姿を見守りながら、井上織姫は張り裂けそうな胸を押しえ立ち尽くしていた。

傷付いて欲しくない、織姫は先ほどそう言った。だけどそれは、助けに來た仲間たちだけを思ったことではなかった。

「…以前てめえと戦った時は、まるで機械か石像と戦ってるみたいだった。だけど今は、少しだけてめえの動きが読める」

「…何だど？」

「てめえの動きが見えるようになったのは、俺が虚^{てめえ}に近付いたのか……それとも」

――てめえが、人間^{オレ}に近付いたのかも知れねえな。

ウルキオラの衣服を斬り裂いた一護が、彼の変化を推察する。相手と直接剣を交わすからこそ、何か感じるものがあるのかもしれない。「俺がお前等人間に近付いただど？」

だがその言葉が広間に溶け消えた時、破面の青年が振るった斬魄刀が、床を割った。

「…成程——この程度のレベルについて来れるようになった事が、余程気分が良いらしいな」

そして、直後。突然一護の姿が爆塵の中に掻き消える。

「ぐっ…クソッ！」

「黒崎くん！」

「忘れたか。仮面を出した状態でさえ俺を倒せん貴様の月牙など、どう使おうが無駄な事だ」

速い、途轍もなく。残像すら残さない神速の動きに一護が一気に劣勢へ追い込まれる。月牙を纏った斬撃も、彼を守らんと張った織姫の【三天結盾】も、加減を止めた第4十刃の前では無力に等しかった。

その言葉は、破面の青年の逆鱗だったのだろうか。彼の顔に感情はない。だが織姫には、まるで挑発に気を害したかのような怒涛の攻撃が、ウルキオラの胸の内を語っているような気がした。

——心とは何だ。

ああ、なんて。なんて悲しい問いなんだろう。少女の脳裏に彼の彫刻のように整った無表情が浮かぶ。

黒崎君の推察は正しいのかもしれない。だけど。多分。その言葉はあたしたちの想像より、もっと、もっと、残酷な意味を持っている。

あの問いは目に見えぬものに魅かれる単純な好奇心故では決してない。かつて織姫の兄が虚となってそれを失ったように、破面の青年も無くしたそれを取り戻そうと足掻く、一人の虚なのだ。

それに気づいてしまった織姫は、もう、彼を敵と思うことなど出来なくなつた。

「ウルキオラ…君…」

青年は言った、虚の俺達に人間の敬称は不要だと。だが、だからこそ少女はどうしても彼をそう呼びたかった。

あの人だけは、脆弱な人間のみが持つ“心”に興味を持ってくれた。ヤミー、グリムジヨ、ルピ、ノイトラ。織姫が出会った恐るべき力と自尊に満ち溢れる十刃^{エスパーダ}たちの中で、彼だけは。

ウルキオラ・シファーだけは、自分の仲間たちと同じように、傷付いて欲しくないと思ってしまうのだ。

「——ウ〜ル〜キ〜オ〜ラ〜」

突如、玉座の間に低い男の声が木霊する。

もうもうと立ち上る塵煙の中、広間の床を突き破り現れたその巨体の男を、織姫は知っていた。

「…どうやら完全に回復したようだな、ヤミー」

「ああ、その死神も随分強くなったみてえじゃねえか。俺にもやらせろよ」

ヤミー・リヤルゴ。奇しくも空座町で遭遇した最初の破面たちが、織姫を取り巻くこの虚^{ウエコムンド}圏での戦いの最終局面にて立ちはだかった。

「その状態になると我儘が増すのはお前の欠点だ、ヤミー。幾度と軍団長に叱られたのを忘れたか」

「うへエ、思い出させんじゃねえよ」

ウルキオラが同胞の助力を跳ね除ける。しかしぐずるヤミーは不意に霊圧を高め、彼の後ろへ振り向いた。

「だったら——その裏切り者は俺が潰していいんだろ？」

『!?!』

男の視線の先には、井上織姫。口角の奥歯を覗かせ憤怒に顔を歪めた巨漢が無力な小娘を睥睨する。

その時。急変した乱入者の態度に驚く一護の横で、ウルキオラが僅かに目を見開いたような気がした。

「…お前の仕事はここには無い。戻って寝るか、下の隊長共を片付け

ている。しぶとく生き残っている奴等が何人もいる」

「わかんねえな。そのメスガキは散々あの人に目をかけて貰ったつてのに、その死神の側に付いたカスじゃねえか。世話役とかで尽くしてたてめえが真っ先に殺したモンだと思ってたぜ」

男の気迫に織姫は思わず後退る。

「あ、あ…」

「くっ、井上ッ!!」

迫る危険に駆け付けようとしてくれる一護。だがウルキオラを振り切りヤミーへ斬りかかった青年は、巨漢の片手の斬魄刀に押し止められた。

「なっ…ぐあっ!?!」

「ハッ、前回と同じだと思ったか？ 甘えんだよ死神イ！」

「黒崎君!!」

メキヤツ…と嫌な音が響き、一護が十刃の自由な左手に殴り飛ばされる。咄嗟に【双天帰盾】を飛ばし感じた彼の傷は想像より遙かに大事であった。

「あアムカつくぜ。アールローロも、ゾマリも、グリムジョーにノイトラのアホも、こんなカス共にやられやがって…い」

「ぐっ、クソ…！ 井上!!」

そして、ヤミー・リヤルゴが織姫の眼前に聳え立つ。

弱い自分にこのレベルの霊圧の詳細な強弱などわからない。だが目の前の巨漢は、その体も、力も、以前の空座町の時より何倍も大きく見えた。

「んじや、とつとと死ね」

何も無い。自分を守ってくれるものは、もう何も。渾身の【三天結盾】も紙のように破られ、絶体絶命。

振り絞られる十刃の左腕を見つめながら、織姫は想い人の絶叫を耳に己の死を覚悟する。

だが。

「…毒せ」

立ち尽くす井上織姫の前に、新たな二人の乱入者が立ち塞がった。その背に、彼女を巨漢から庇いながら――

「ああん？ 何のつもりだア、メス犬共」

「ハア…ハア…ツうつぎいのよ、どいつもこいつも…！」

「これで貸し借りチャラ！ わかったわね、人間っ！」

大扉の裏でコソコソするのを止めた二体の侍女破面。ヤミーの左手を辛うじて縛り止めて女を守る塵^{チリ}らを眺めながら、ウルキオラは先ほどの己の行動に愕然としていた。

…何故だ。何故俺は、黒崎一護を女の下へ行かせた。

十刃は困惑する。あの場でヤツを止めることは容易だった。だが一瞬の体の硬直がそれを許さず、気付けば自分はヤミーへ斬りかかる死神の後ろ姿をぼんやりと見送っていた。

「あたしの毒で地下まで溶け墜ちろ！」

――【娼^{ベラ・ヴェネツィサ}毒溶唾^{トクジュウダ}！】

「なっ、てめえら…！」

侍女破面が大技で広間の床を崩そうとする。それを好機と見て加勢した黒崎一護の月牙天衝が決定打となり、ヤミーが無念の絶叫を上げながら塔の底へと落下した。

だが一連の全てを目にするウルキオラは、動けない。

――てめえが、人間に近付いたのかも知れねえな。

脳裏に反響するのはヤツの言葉。

理屈は不明。しかしウルキオラがその言葉に感じたのは侮辱の感情だけではない。もっと大きい、虚の根源的な何かに響く言葉だっ

た。

「……待たせたな」

「！」

ふと、死神の声で我に返る。侍女破面共と何か会話していた黒崎一護が、三人を背にウルキオラと相対していた。

「行くぜ。これがてめえの見たがってた……」

——虚化だ——

闇が辺りを包み込む。馴染み深いざらつく濃密な霊圧を纏った死神は、片部に仮面紋エステイグマを走らせる虚の仮面を被り、即座にウルキオラへと襲い掛かった。

『はああああああ!!』

「……」

強い。受け止める己の斬魄刀をただの斬撃がバターののように削っていく。

弾かれる勢いそのままに塔の外へ飛び出したウルキオラは、背後の敵へ現状の自分の持つ最高火力の虚閃セロを放った。

攻撃は直撃。以前のヤツであればこれで終わっていただろう。

『……』

だが黒崎一護は健在。それも無傷で第4十刃の霊圧を跳ね除けたのだ。

「——」

『なっ！ 待てウルキオラ！』

この場においては驕りも慢心も一切不要。不利を認めたウルキオラは即座に場所を移すことを決意し、上空の青空の果てへと飛翔する。

『……ここは……ラスノーチエス虚夜宮の天蓋の上……？』

そして立ち並ぶ幾柱もの塔の頂上に立ち、己を追ってたどり着いた

敵を見下ろした。

「…ラスノーチェスの天蓋の下で、禁じられているものが二つある」

一つは十刃のために存在する虚閃”グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光”。

そしてもう一つが…クアトロ第4以上の十刃の、刀剣解放。

どちらも、強大過ぎて虚夜宮ラスノーチェスそのものを破壊しかねない代物だ。

「——鎖せ」

…見せてみる、黒崎一護。

お前の”心”とやらは、この絶望にどう足掻く？

——ムルシエラゴ黒翼大魔——

心かイイイイ！

「——くそがあああああ〜……」

ラスノーチエス
虚夜宮第5の塔。最下層へと落下したヤミー・リヤルゴは手近な動く物体を殴り飛ばし、胸に渦巻く憤怒を発散させていた。

「あの死神にメス犬共……絶対に許さねえぞ！ ぶっ殺してやるツ
!!」

どいつもこいつもカスばかりだ。古参の十刃は同胞たちのあまりの不甲斐なさに憤慨する。

ヤミー・リヤルゴは最初期の破面の一人である。かつて組織が”
エスパーダ
刃”の名で呼ばれていた古き時代から藍染惣右介に従い、その権勢を支えてきた。

無論当初は反発した。だが藍染王にはない。それは王が彼ら破面軍の指揮官と定めた、一人の女死神に対してだった。

『よ、よろしくお願いします、ヤミーさん』

その女は、身体も態度も小さかった。

自分の頭三つは小さいガキでひ弱そうな小娘に頭を下げるなど、まるで自身の帰^{レスレクシオン}刃を活用させるための合理的な皮肉に思えるほど馬鹿げた話だ。

『ダメよヤミー、良い子にきなさい』

だがその女は、強かった。

バラガンに続く二番手として彼女に歯向かった自分は、本物の”死神”を知る。ガキのように頬を膨らませ拗ねながら、砂漠を煮え滾る硝子の煉獄へと変える、恐るべき死神の姿を。

おそらく自分はその時彼女に、獣の上下関係を骨の髄まで叩き込ま

れたのだろう。炭化した肉体の再生治療に半年間培養器の中で過ごしたヤミーは、その後例の上司の誰にでも遜る弱つちい立ち振る舞いに、不思議と不快感を覚えることはなくなった。

あの地獄を知ったら、ヘラヘラしながら旨いハンバーグをご馳走してくれるあの人の腑抜けた姿など、まさに天使そのものなのだから：

「——コイツは……ヤミー！」

ふと聞こえた声に足下を見れば、弱そうな死神と人間が驚きこちらを見上げていた。

「どういう事だ……あの時より明らかに、倍は大きさが違う……！」

「…ああん？ 何だア、てめえら。うろちよろウザってえ」

霊圧も貧弱、能力も貧弱。こんなカス連中に、あの人と共に虚^{ウエコムド}圏を駆け回って集めた同胞の十刃達が敗北したと言うのか。

ウルキオラに奪われた因縁の死神、侍女破面共の裏切りに続く燃料が、ヤミーの憤怒の炎を益々燃え上がらせる。

「…クソ、ムカつくぜ。弱えクセに……この俺をここまで怒らせやがってよオツ!!」

『!?』

寝まくり喰いまくり、今日のために溜めに溜めた霊圧を解き放つ十刃。こんな連中で使いきれれる量でも、そのために蓄えた力でもない。その事実が益々巨漢を苛立たせる。

そして。

「ッ、狼狽えるな！ 肩の数字を見る！ 今まで俺達が戦って来たどの十刃よりも格下だ！」

「デカさにビビッてても始まらねえ！ とつとと倒して一護に加勢するぞー！」

『応ッ!!』

足下で巫山戯たことをぬかし昂る雑魚の戦意が、遂にヤミーの憤怒を爆発させた。

「倒す？ てめえらクソカス共がこの俺を!？」

——笑わせんな!!」

『!?!』

跳ね上がる霊圧に身構える周囲を嘲笑いながら、ヤミーは自らの斬魄刀を鞘から解き放つ。

「ブチ切れる!!」

——【憤獣^{イーラ}】——

いいぜ、そんなに数字が好きなら教えてやる。”^{デイエス・エスパーダ}第10十刃”たる俺が持つNo.10の、真の姿を。

二桁の数字の柵を解いた俺は、あの人がある最強戦力。

「——”^{ゼロ・エスパーダ}第0十刃”

ヤミー・リヤルゴだ!!」

瓦礫に沈んだ第8十刃宮に、女の淫猥な荒い息が木霊する。

地に四肢を投げ出し、白目を剥きながらピクピクと痙攣する実験体を背に、再誕した”^{オクターバ・エスパーダ}第8十刃”ザエルアポロ・グランツは放心する観客の前で誇らしげに佇んでいた。

「理解出来ているか、涅マユリ。この【^{ガブリエール}受胎告知】の素晴らしさを」
青年は己の破滅の導き手へ悠然と語る。

敵に自分自身を孕ませることで、まるで不死鳥の如く常に新たな存在へと生まれ変わり続ける生物。死を超越するのではなく、死すらも自らの生命の循環に取り込み、死と再生を間断なく繰り返す存在。

それを人は——”完璧な生命”と言う。

「さあ、見せてくれ。終焉のない僕と言う存在を、君はどうやって終わらせるんだ？」

両腕を広げ、心の底からその答えを求めるザエルアポロ。

だがそんな彼の姿を見向きもせず、涅マユリはふらふらと歩き出した。ザエルアポロへではなく、その背後で身体を掻き抱く自身の副官の下へ。

「部下が心配かい？ 繊細なものだ、案外と」

「……」

「だが心配なくていい。今回試したパターンは本来の効果を改造調整した特別製だね。彼女もきつと気に入ってくれたはずだよ」

我に返った母体の人造女死神に外傷はない。だがその頬は朱に染まり、目は潤み、吐息は甘い熱を宿している。

快樂信号の作用薬はとつくに切れているはずなのだが、彼女は未だ、発情していた。

「…ツあ、…はあ…っ ♡ マ…マユリ…さま…っ、…申し…訳…っあ ♡」

「ああ、もしかして霊子神経系異常による持続性性喚起かな？ 性的快樂を増幅させるために既存の霊性シナプスが変化したのか。だとすると最短でも一月は続くな…」

——だが、これはこれで悪くない。

興奮が収まらず必死に性的欲求に抗う副官を観察しながら、ザエルアポロはその姿を別人に置き換え想起する。いつもの人好きのする可憐な笑顔を赤らめ、何かをこらえるように袴の股座をぎゅつと握り締める、一人の少女の姿を。清楚で淑やかな印象が淫らに乱れ、性を知った若い身体を持て余す、あの無垢な乙女の恥辱を。

ふむ、やはり余計な調整はやめて今のままにしておこうか。

「…趣味が悪いぞ、ザエルアポロ。さっさと彼女を元に戻せ…い」

「ククク…僕の感謝の気持ちこそう邪険にしないで貰いたいね、滅却師^{クインシー}。彼女だって愉しんでいるだろう？ …ああ、失礼——」 君達

も」と言うべきだったよ」

『なっ、た、楽しんでねえし?!』

ジツと自らの副官の痴態を見つめ続ける涅マユリへ、ハモる思春期な外野と戯れながらザエルアポロが皮肉を口にする。

…だが振り向いた死神の顔に浮かんでいたのは、部下を辱められた怒りでも、彼女に対する憐憫でもなかった。

「——面白いネ」

そこにあつたのは、邪悪な感心。十刃自身も良く知る、飽くなき知的好奇心がその他の感情全てを駆逐していた。

「良いネ、実に面白い能力だヨ。特に母体そのものの霊力ではなく、その霊力器系を乗っ取って自らの霊圧を回復するカラクリは中々成功例が少なくてネ。おまけに酷使させる臓器を君と一時的に融合することで疲労を最小限に抑えている。君の”本命”とやらも咽び泣く慈悲深さだヨ」

「…そんなつまらない反応は求めていないんだがね、あの方には」

人造副官の身体的変化を詳細にフィードバックする能力でも有していたのだろう。この短時間で基礎的な霊力抽出の仕組みを暴かれ、ザエルアポロは眉を顰める。

否、気に食わない最たることはそれではない。この男の関心が能力の目的である生死の可逆性ではなく、能力行使の動力という蛇足の蛇足にあること。

そして。

「で、これだけかネ?」

己の最高の能力に「面白い」以外の価値を認めない、その傲慢さそのもののである。

「”完璧な生命”とまで言うんだ。これだけじゃないんだろう?」

「……」

「良いじゃアないか、減るもんじゃ無し。ケチケチせずに見せ給えヨ、ホラー！」

涅マユリの催促は心底そう思っているからこそ、ある種の高度な挑発でもあった。

しかしそれに対するザエルアポロの感情は怒りではなく、呆れ。

「…全く、君には科学者としてのプライドがないのかい？」

「何だネ、いきなり？」

「これほど素晴らしい能力への感想がソレしかない君の低劣さには、最早憤怒を通り越して哀れみすら覚えるけど……これは貴重な”発表”の場なんだ。お前が僕より優れていると証明するには、態度ではなく成果でし給えよ」

言外に「次はお前の手札を見せろ」と要求し、ザエルアポロは腕を組む。

そう、これは観察の場なのだ。涅マユリが如何にしてザエルアポロのこの個体を倒すかを観察し、その術を研究するための。既に現在ラポでそれなりの成果は得ているが、青年はやはり確信が欲しかった。「…ふむ、確かにそろそろ頃合いだネ。君が自らの終わりにその生涯の集大成を見せる気がないのなら、致し方ない。最後にその身で以て……私の研究の成果を体験してもらおうか。」

私の 新薬 の ネ 「
ほう」

ぐわん……と唐突にザエルアポロの聴覚が狂う。我が身に起きたことを冷静に分析し、彼が導き出した答えは、正解に限りなく近いもの。「ネムの体内には幾つか薬を仕込んである。ネムを喰うか体内に侵入すれば、そいつに投薬できるようにネ」

それは彼の副官を用いた、臓器別に異なる薬品を小胞させる、地雷。そしてザエルアポロが”卵”を産み付けた臓器に仕込んであった薬は——”超人薬”なる代物だった。

達人同士の果し合いにて、時に起きる「時間が止まって見える」現象。極限まで研ぎ澄まされた感覚が引き起こす特別な精神状態を、人為的に再現するための薬物だ。

「理解できているかね？ 一秒が百年ほどに感じる”超人”になった君のことだ。”常人”の私の動きはさぞかし緩慢で退屈な事だろう」
「…、……」

「さて、十刃。被検体の君に一つ聞きたいことがある」

——この剣が止まって見えるかね？

歯を剥き出しに嗤いながら、涅マユリが斬魄刀をこちらへ突き付ける。

ザエルアポロには自身の心臓に突き刺さるその剣が、数百年の長きに亘る緩やかな動きに見えている。”超人たる”感覚に対し、”超人類り得ぬ”肉体は恐ろしいほどに遅れを取る。彼の超感覚に、肉体が置いてきぼりにされているのだ。

「なに、君の時間はたっぷりある。私の剣が君の心臓を貫く感覚を、滴る体液が砂になるまで、ゆったりじつくり味わい給え」

…ああ、なるほど。遅すぎて動いていることさえわからないが、僕はやはり、この薬で倒されたのか。

「それでは、十刃」

——百年後まで御機嫌よう。

そう言い残し、崩壊した宮を漁り出す涅マユリ。

その愉快的姿を眺めながら、遠くの世にて、一人の青年が嗤っていた。

「…そしてザエルアポロ・グランツは滅び、女神の箱庭より解き放たれる」

青年は静かに自らの義魂個体との認識同期を切断し、歪な形状のへ

ルメットを頭から降ろす。

ヤツの生物系卍解の体内に喰食う第一個体、副官の体内の各種薬品を取り込んだ第二個体。

彼らの尊い犠牲で手にしたそれらの詳細なデータを手に、”第80刃”ザエルアポロ・グラントは、悠々と現世のアジトの研究室へと踵を返した。

「クク……麗しく慈悲深い貴女が、宿命を果たした僕にどのような褒美をくださるのか……楽しみでなりませんよ」

——閣下。

——何故そんな目ができる。これほどの絶望を前にして。

ラスノーチエス
虚夜宮の天蓋上層。完膚なきまでに叩き伏せられて尚立ち向かってくる黒崎一護を前に、ウルキオラ・シファーは生まれて初めて明確な“苛立ち”という感情をその空虚な胸に抱いていた。

「月牙を撃て」

『!?!』

鏢迫り合いの中、破面は死神へ言う。仮面をつけた今の状態が、月牙が共にお前の最強の技ならば、今ここで撃って見せろ。

「力の差を教えてやる」

『ッ、ふざけやがって！ そんなもん言われなくても…そのつもりだ!!』

―― 月牙天衝げつがてんしょう――

挑発に乗った黒崎一護が凄まじい密度の霊圧を解き放つ。なるほど確かにグリムジョーを倒しただけのことはある。

「…だが、所詮は人間のレベルだ」

『無傷……だと……』

その通り。たとえば仮面を被ろうと、我等破面の虚閃セロに似た攻撃を放とうと、その力は天地ほどにも隔たっている。

―― 黒虚閃セロ・オスキュラス――

『がは…アツ…!!』

解放状態の十刃の放つ、黒い虚閃。紛い物などではない正真正銘の虚の力が、一撃で黒崎一護の仮面を粉碎した。

「…お前は先ほど俺に訊いたな。”俺が人間に近付いたのか”と」

尖塔の一層に降り立つウルキオラ。そして苦しげに膝を突く黒崎一護へ、破面は断言した。

「戯言だ」

『…ッ』

「何故俺が、お前たち弱者にんげんに近付き零落れる必要がある。お前たちが力を得ようと虚を真似るのは妥当な道筋だが、それで虚おれたちと人間おまえたちが並ぶことなど永劫ありはしない」

だがウルキオラの言葉を、圧倒的な力を受けても、黒崎一護は未だ剣を手放さない。忌々しい光をその目に宿し、希望を手放さない。

何故だ。例の感情が更に湧き立つ。

『……月牙』

「無駄だと言っているんだ!!」

思わず吐いた怒声。青年自身が驚くほどらしくない、強い気持ちの吐露だった。

何故だ。何故こいつと、こいつらと戦っているとこころも胸がざわつく。

「…理解できんな。これだけの力の差を目にしても、未だ俺を倒せると思っっているのか？」

ウルキオラは問う。そこに、己にこの形容し難い感情を抱かせる原因があるのだと信じて。

「…力の…：差か…：——それが何だ？」

そして、人間が答える。虚の名残が消え去った、”人間”の目でウルキオラを睨みながら。

「てめえが俺より強かったら…：俺が諦めると思っただのか…？」

黒崎一護は未だ戦意を失っていなかった。相手が強いのかなんか最初から解っている。今更その全貌を見せられたところで、戦う意思に変わりなどないのだ、と…

「…俺は、てめえを倒すぜ。ウルキオラ」

決意を秘めた目だった。己の勝利を信じて疑わない、間違ふことなき”勝者”の目。

解らない。ウルキオラの胸中に闇が満ちる。まるでヤツの光に際立つ影が、己の全てを覆い尽くそうとしているかのように。

「…：戯言だ」

巨大な喪失感に急かされ、破面は決断する。

「黒崎一護。お前のそれは、真の絶望を知らぬ者の言葉だ」

その目に宿る光が”そう”なのか。無謀な戦いに己が身を投じさせ、命を落とさせる狂気こそが。

だとすれば、それはなんと、なんとくだらないものなのか。

「…知らぬのなら教えてやる」

「これが、真の」

「絶望の」

「姿だ」

レスレクンオン・セグンダ・エターバ
—— 刀剣解放第二階層 ——

悪魔が舞い降りる。

人間の絶望を司る、黒山羊の、黒犬の、蝙蝠の、不吉の象徴を象つた、悪霊の悪魔が。

一族という稀有な虚の生態の中でも更に稀有な種として生まれた、白き闇の堕し仔。十刃の中で己だけが可能とした、この唯一にして無二の刀剣解放こそが、黒崎一護の真の絶望となるのだ。

…だが。

「この姿を目にして、尚も勝てるつもりで戦いを挑むか」

それでも黒崎一護は、諦めない。恐怖に身体が震えていると言うのに、瀕死の身体に鞭を打ち、力及ばぬ虚化で立ち向かおうとしてくる。

——信じられますよ、あなたなら。

不意に声が聞こえた気がした。ウルキオラはかつてその台詞を口にした上司へ、胸の内で頭を下げる。

…申し訳ありません、軍団長。やはり俺には解りません。

俺に人肌の温かさを、料理の美味を、花の芳香を、主への忠誠の何たるかを教えてくれた貴方でさえ、伝える術を持たなかったことなど…

「愚劣だ、黒崎一護。お前のその蛮勇こそが、”心”ならば…」
『…ッ』

「それが貴様等の言う”心”と言うものの所為ならば、貴様等人間は心を持つが故に傷を負い…

——心を持つが故に、命を落とすという事だ」

くだらない。

やはりあの時ヤツを井上織姫の下へ行かせたのは、ただ魔が差しただけに過ぎなかった。そこに何かがある、失ってはならない大切な何かがあると錯覚し、されど蓋を開けてみれば、それは塵コミにも等しい狂気と破滅を齎す劇毒。

なんと馬鹿げた葛藤を、俺は生涯長きに亘って抱いてきたのか。

「…別に…勝てるつもりで戦ってんじゃねえよ…」

黒崎一護が、剣を構える。

「勝たなきゃいけないから…戦ってんだ！」

光に満ちた瞳。何度嬲られても立ち上がる精神力。実に見事なペテンだった。

だがヤツの”心”とやらは既に知れた。もう、貴様の言葉で俺の胸がざわめくことはない。

「…戯言だ」

闇色の虚閃が死神の最後の抵抗を奪う。意識を落とした弱者を虚の尾で首吊りにし、ウルキオラはこの巫山戯た戯曲の最後の役者を待った。

「——来たか、女」

破られた天蓋の頂上。王とその臣下しか使用の許されない塔の昇降機から現れた一人の人間へ、破面は全ての希望を打ち砕く終焉を見せ付ける。

「…黒…崎…くん…?…」

「そうだ。お前を助けるために戦い、そして散っていく男の名だ」
「や、めて……ウルキオラくん……」

女の目が濁る。弱者が浮かべる正しい色、絶望の黒だ。
よく見ておけ。

お前が希望を託した男が、命を鎖す瞬間を。

そして、よく見せてみる。

未だ俺の胸を騒めかせる、お前だけが持つ”心”の、その最期を…

「——やめて!!!」

悲愴な絶叫が響き渡る虚夜宮ラスノールチエスの天蓋上層。

そこでウルキオラ・シファアは、黒崎一護を殺し、正しい”心”を
持つとされた女——井上織姫のそれを木端微塵に打ち砕いた。

呼んでる

呼んでるんだ 聞こえる

立てよ

立て 俺が

俺が 戦う

「——黒崎……くん……？」

馬鹿な。泣き叫んでいた女の呆け声に振り返ったウルキオラは、ここで見た光景に思わず息を呑んだ。

殺したはずの人間が、黒崎一護が立っている。

胸の大穴から夜空の月を覗かせ、鉤の如き双角を生やした仮面を被る、謎の死神。その豹変した姿にウルキオラは眉を顰めた。

「お前は、誰だ」

破面の問いに返されたのは、巨大な咆哮。理性を失った醜い獣がそこにいた。

「どうやら言葉が通じんらしいな」

時間の無駄だと虚閃を放つウルキオラ。だが直後の敵の行動に青年は驚愕する。

月牙天衝ではない、れっきとした虚閃を、人間の黒崎一護が放ったのだ。それも黒虚閃を掻き消す程の。

「……」

一瞬の動揺。気付けば背後を取られたウルキオラは、咄嗟に振るった右手を、敵に斬り落とされていた。

だが即座に回復させ応戦する青年。十刃の中で彼だけがこの超速再生を有したまま破面となった。脳と臓器を除く肉体の全てを自在に再生させながら戦うウルキオラを倒すには、圧倒的な致命の一撃が必要だ。

そしてそれを容易く許す第4十刃ではない。

「近付くなよ。そこに居ろ」

ランサー・デル・レランパーゴ
——【雷霆の槍】——

「出来ればこいつを、近くで撃ちたくはない」

ウルキオラ・シファアの誇る最強の大技。常軌を逸した密度の霊圧を槍の形状に押し固めた、翠霆の一撃だ。

劈く飛翔音を奏で放たれた渾身の一撃は、惜しくも敵の肩を抉るにとどまり、遙か遠方の外宮を消し飛ばす大爆発を巻き起こした。

「外したか。やはり扱いが難しいな」

ならば二度目はどうだ、と追撃の準備に入るウルキオラ。

しかし。

『――』

「ッ、何だと…!？」

突如敵が探查神経^{ベスキス}をすり抜け破面の真横に現れた。それは死神には使えない虚の技、響転^{ソニード}だ。

反射的に手の投槍を振るい敵の”遊び”を叩き潰す。そしてウルキオラが直接繰り出した絶死の矛突は――されど素手の敵に握り潰された。

「馬鹿な――」

天蓋を崩壊させる霊力嵐の中。そこで青年は、目が合った。

希望も絶望も。あれほどその身を委ねていた御大層な心も全て失い、ただ相手を殺す意思のみを宿した、最も純粹な”虚”の目と…

一閃。

それで勝敗が決したことは誰の目にも明らかだった。

ウルキオラは敵の虚閃で消却された自分の下半身をぼんやりと眺め、ポツリと自虐の言葉を吐き捨てる。

ああ、なんと滑稽な話か、と…

『――ケル』

しかし、決した戦いにおいても虚は容赦をしない。

『…助…ケル……俺…ガ……助ケル…』

ブツブツと何かを呟きながら、ウルキオラを滅多刺しにする黒崎一

護。一つまた一つと、辛うじて健在だった上半身の内臓をも潰され、意識を呑み込む暗闇に身を委ねた破面の青年は、ゆつくりと目を閉じる。

黒崎一護に敗北した己に、最早意味などありはしない。

心に焦がれ、それを捨て虚と化した人間に倒される、まるで冗談のような運命。心に憧れた虚無の死は、同じ心無き虚の刃によって振り下ろされる。そんな救いようなない自身の因果に、ウルキオラ・シファアは虚しく己の胸の孔へ手を翳すことしか出来なかった。

…だが。

「——お願い、やめて…っ！」

彼らの戦場には、明るい橙のベールを被せ、敗者を斬り刻む獣の腕を必死に止めようとする人間が居た。

あたしのせいだ。残虐の限りを尽くし、死に体の十刃を翔る想い人の腕を両手で抱き留め、井上織姫は皆に懺悔する。

あたしが弱かったから。死なないでって願ったから。黒崎くんは、あんな姿になってまで立ち上がって、あたしを助けるために戦おうと。

「…もう、もういいの……戦わなくていいの…」

『……』

「ありがとう……ごめんね……全部……終わったから……あたしはもう、大丈夫だから……」

嫌だ、どうしてこうなってしまったのか。零れそうな涙を必死に堪え、織姫は自身の足元に被せた【双天帰盾】へ目を向ける。

『』

だが。敷いたその救いの盾に、剣を打ち付ける者がいた。

「…黒…崎……くん…?」

織姫の声が、届かない。咄嗟に【三天結盾】を張るも一撃で叩き碎かれ、死を待つばかりの破面の青年に更なる傷が増える。

『■■■■』

「だ、ダメ……やめて……やめてっ!」

ウルキオラくんが、人間の心に興味を持ってくれた彼が、死んでしまおう。

黒崎くんが人を、人の心に関心を持つてくれた破面を、殺してしまおう。

死なせはしない。殺させはしない。されど二人を想い青年を正気に戻そうとする織姫は、当の一護にその手を振り払われる。仲間とは思えないほど乱暴に。

「あっ——」

そして塔の屋上を転がる織姫の眼前に、黒い刀身を握る想い人が佇んでいた。

『■■■■■■!!!』

「あ、あ……」

凶悪な怪物が少女を睥睨する。その恐ろしい仮面も、黒く染まった目も、胸に開いた大孔も、全てがああの時のトラウマを想起させ、織姫は恐怖に戦慄きながら後退ることしか出来ない。

そんな彼女の滲む視界に、突如もう一つの人影が映り込んだ——

それは 何だ

その胸を引き裂けば、

その中に視えるのか？

その頭蓋を砕けば、

その中に視えるのか？

お前達人間は容易くそれを口にする

まるで――

凄まじい閃光が瞬き、十刃が放つ死力の【ランサ・デル・レランバトゴ雷霆の槍】が黒崎一護の仮面を叩き砕く。

爆風の余波で吹き飛ぶ女を一瞥したウルキオラは、倒れ伏す素顔の死神を見下ろし臍を噛んだ。

…まただ。また体が勝手に動いた。

殺す気で絞り出した最後の攻撃。しかしヤツの頭部に雷槍を突き立てる直前、その矛先が僅かに逸れた。

果たしてそれが再生中の肉体を無理に動かしたガタだったのか、あるいは何らかの無意識による意図的な行為だったのか、ウルキオラにはわからない。

「…ッ、黒崎くん！　ウルキオラくん！」

遠く転がった女がこちらへ駆け戻る。するとほぼ同時。突然白い霊圧の渦が黒崎一護を包み込み、気付けばその胸の孔は元通りに塞がっていた。

「黒…崎…くん…？」

「超速再生か…」

どこまでも虚らしいことだ。同じく回復しつつある自身の身体を見下ろすウルキオラは、無感情に顔を伏せる。

自分はまだ直、死ぬ。再生していく四肢はともかく、失った臓器は決して戻っては来ない。それが破面の力を手にした代償だった。

「――剣を取れ、死神」

そして意識と正気を取り戻した黒崎一護が、蒼白な顔で女との話を終えた時。ウルキオラは最後の決闘の手袋を投げつける。

…しかし、その戦いが果たされることはなかった。

「…ちっつ、どこまでか」

「な…!？」

終わりを迎える全ての虚は、風に吹かれる砂のように跡形もなく消え去る。サラサラと風化する自身の黒羽を一瞥した破面は、最後に「殺せ」と己を倒した黒崎一護へその首を差し出した。

「…断る」

「この戦いの決着を付ける最後の機会だ。さっさと殺せ」

「嫌だと言ってんだ…！」

それは恐らく、虚無であるウルキオラの、最後の欲。獣ではなく人の、かつて密かに惹かれた“それ”を持つ人間の剣で死にたいと望む、空虚な願い。

「…こんな…こんな勝ち方が…」

だが、死神は。

「——こんな勝ち方があるかよ!!」

黒崎一護は、奇しくもウルキオラと同じく、人として彼と戦い勝つことを願っていたのだ。

「…ちっ。…最後まで…思い通りにならん奴だ…」

見開いていた目を細め、破面は悲憤に歪む人間の顔を見つめる。勝たなきゃならないから戦っている。虚へと堕ちる前の彼が言っていた言葉だ。

その時はただの破滅願望、狂気の類にしか見えなかった、ヤツらの”心”。それが今は何故か、もう少し深いもののように思える。

不思議なことだ。

「——ウル、キオラ…くん……」

ふと、彼の遠のく耳に女の嗚咽が聞こえた。ボロボロの衣類の胸元を千切れんばかりに握り締め、フラフラと近付いて来るもう一人の”心”の持ち主、井上織姫。

「やだ……しんじゃ…やだよ……」

一步、一步とこちらへ歩み寄る女を見つめ、ウルキオラは彼女を観察し続けたこの数日間を振り返る。

思えば最初はただ軍団長の言葉を盲目的に信じ、彼女に言われたことを忠実に守るだけだった。

攻撃的な言動は慎め、入室時は三度のノックの後に了承を得ろ、同行時は歩幅を合わせ常に他者から守れ、等々。

だが女の活発な喜怒哀楽を見ると、そこに何か自分の欠けているものが垣間見えるように思えることが度々あった。

何故、笑う。

毎食の料理が旨いからか？

何故、拗ねる。

俺を”くん”付けて呼べないからか？

何故、怒る。

仲間の無謀を侮辱されたからか？

何故…

「…何故、泣く。…女」

俺は敵だ。お前の仲間たちを殺そうとした、藍染様に仕える十刃だぞ。

破面の問いに、女が答える。

「…だって、あたし…あなたと…」

——なかよくなりたかったのに。

嗚咽に紛れた、小さな一言。

その言葉が、ウルキオラの虚無の中に、小さく何かを灯した気がした。

「…そうか」

俺も、ようやく。

「お前達に少し、興味が出てきたところだったんだがな」

頬を伝う女の涙が、床の砂石へと消えていく。風に吹かれるウルキオラの身体のように。

そんな奇妙な類似を眺め、ウルキオラは己の胸に、微かな痛みが走った気がした。

「…俺が怖いか、女」

いつぞやのそれに似た、些細な問い。自らの死を前にし、心を仲間に預けた自分に恐れは無いと返した女。

ならばその仲間たちを殺そうとした俺に、恐れはあるか。
その時。かつてその目に映るもののみが世界の全てであったウル
キオラ・シファアは、井上織姫が返した答えに、己の生涯追い求めた
ソレの全てを——ようやく、視たのだ。

「こわく ないよ」

——ああ。

——そうか——

——これが——そうか——

——この掌にあるものが——

か 心

憤獸イイイイ！

「——ちゃん！ 剣ちゃん！」

火口の如き熱気が荒む虚夜宮ラスノーチエスの天蓋下で、場違いな幼い少女が叫んでいる。

甲高い声が呼びかけているのは、溶け固まった石英の一塊。するとその岩が突如砕け、まるで卵のように中から大柄な人影、男が現れた。「ブハアツ！ やちるか、今どんだけ寝てた？」

男は異様だった。全身が焼け焦げ、岩盤も斯くやにひび割れた肌からはダクダクと血が流れ出ている。即死も当然な大怪我をもつとせず立ち上がったその怪物は、側で頬を膨らませる可憐な童女の相棒だった。

「も〜っ！ 剣ちゃんがお寝坊さんしてたからもちんもいつち〜も上のお空に行っちゃったじゃん！ ぷるりんも連れてかれちゃったし」

「ちっ、めんどくせえな……って、ん？ あの女”もちん”つつーのか？」

「うん！ いつもおいしいお菓子くれるいい人だよ！ でもあんなに強いのは隠してたなんてヒドーい！」

拗ねる子供の癩癩を聞き流しながら、大男がゴキゴキと凝り固まった四肢を解していく。炭化し裂けた皮膚から滴る血潮を、この場で気にする者は一人もない。

「……クソツツ…弱えな、俺ア……」

「ツ、そんなことないもん！ 剣ちゃんとあたしは最強なんだから！

全力のあたしたちなら絶対もちんにリベンジ出来るって！」

「”全力”……あん時みてえにか……」

童女の鼓舞に、弱気の怪物はふと遠い昔の記憶を思い起こす。最強の剣豪と愉しんだ最高の斬り合い。あの人と言いつつ今回と言いつつ、どうも己は強い女と縁が多いらしい。

「……いや、ダメだ。今のままじゃ何度挑んでも俺が負ける」

「剣ちゃんー！」

「うるせえ叫ぶな。誰も諦めるだなんて言っちゃいねえよ」

泣き顔から一転、キョトンと呆ける相棒に口角を吊り上げる大男。久々の…否、あるいは初めての勝機の見えない超越者を相手に、如何にして勝つか。そんな最高の戦いに備えて考えを巡らせる時間が、剣の鬼には存外快感だった。

「まず、俺は一護に負けた」

「うん…」

「あれでこのままじゃ駄目だと気合いを入れ直し、あの正義正義うるせエ東仙に勝った。そんでさっきノイトラと戦って勝ち、俺ア明確に体の鈍りが取れていくのを感じた訳だ」

「うん、剣ちゃんすつごい楽しそうだったよー！」

童女の笑顔につられ怪物が凶悪な笑みを深める。

「つまりだ。ももちに勝つには最低でもあん時の感覚を取り戻さなくちゃなんねえ。あの人と殺し合った、あん時の最高の斬り合いの感覚をよ」

首を傾げる相棒はさもありません。あれはこいつと出会う前の、己の生涯で最も愉しかった最強の敵との一戦だ。

沸々と湧き上がるかつての思い出が、男の傷だらけの体を巡る。あの時の自分の強さはこんなモンじゃなかった。

抜身の剣を鞘に差し、四番隊で雑魚を癒す腑抜けたあの人に落胆した。だが真に腑抜けていたのはこの俺だったのかもしれない。

「…よし、行くぞやちる。他の十刃^{エスパーダ}で本命前の準備運動だ！」

「うん、行くー！ 剣ちゃんっ！」

ボロボロの斬魄刀を右に、童女を左肩に担ぎ、大男は歩き出した。もつともその足は三步もせず止まる。

「…で、次の十刃はどこだ？」

「うーん……あ！　そう言えばわれメガネがなんかどこかを襲うとか言ってたから、そっちに行っちゃったのかも」

「誰だそいつ？」

支離滅裂な説明を詳しく聞くと、どうやら自分達はあの藍染惣右介の策略でここ虚^{ウエコムンド}圏に幽閉されてしまったらしい。そして当の大罪人は既に現世へ進軍した後。おそらくあの”ももんちん”も十刃もそちらへ向かったのだろう。

出鼻を挫かれ肩を落とす怪物。いつそ、この馬鹿デカイ天蓋の上で行われている一護の戦いに乱入するかと真剣に迷い…

「くそつたれ……どっかに強えヤツ転がって——」

苛立つ男ががむしやらに走り出そうとした、その瞬間。

”セロ・エスパーダ
第0十刃”

ヤミー・リヤルゴだ!!」

突如遠方に途轍もない霊圧と巨体の破面が現れた。

『……』

しばしの沈黙、互いに見つめ合う大男と童女。どちらも顔に刻まれているのは、満面の笑み。

「…居るじゃねえか、強えヤツ！」

そして怪物——護廷十三隊十一番隊隊長・更木剣八は、副官・草鹿やちるの悪名高き案内要らずに、目の前の獲物へ向かい爆進する。

彼の焼け爛れた皮膚に滲む血は、いつの間にか止まっていた。

ウルキオラが死んだ。

俺達が半世紀に亘り探し続けたあの無口な野郎が、負けた。

「——よお、ちよつと見ねえ合間に随分デカくなったじゃねえか」

突然現れ、仲間の女死神を助けた目の前の男、黒崎一護に負けたのだ。

侵入者三匹を潰した巨体の怪獣——ヤミー・リヤルゴは、気付けばこの虚^{ウエコムンダ}圏に残る最後の十刃となっていた。無数の虚の力を一斉に行使できる同期のアール・ローも、自らを最強と言って憚らない死にたがりのノイトラムも、この“第0十刃”^{ゼロ・エスパーダ}の前任であった最強にして最凶の破面ザエルアポロも。

皆、死んだ。

「…ふざけやがって」

ちよこまかと動き回り、偶にチクチクと鋼皮^{イエロ}を切ってくる黒崎一護を追い駆ける。虚弾^{バラ}を連打し、槌尾を、巨腕を振り回しながら、ヤミーは自身の怒りが天井知らずに高まる感覚に高揚する。

しかし同時に、彼は内心どこか醒めていた。

「ハッ、どうしたカス！ さっきのウゼえ仮面はおしまいかな？」

「ぐっ…クソッ！ んなワケあるかよ…っ！」

イキった台詞に反し妙に怯えている因縁の死神。ここに来る前の戦いで力を使い果たしたのか、ヤツが二度と例の“虚化”とやらを成功させることはなかった。

「な、なんで——がッ!？」

「ふん：あの馬鹿ウルキオラもちったア仕事をしたらしいな。：まあ俺にとつちや大して変わんねえが、な!!」

「ぐああああああああ!!」

切り札の不発に動揺するカスを捕まえ、握り潰す。

だがその直前、ヤミーの頭部を衝撃が襲った。

「——【破道の三十三・蒼火墜】」

不味い、この馴染みのある焼けるような霊圧はあの恐ろしい炎熱系の鬼道だ。呼び起こされたトラウマに驚くヤミーは思わず黒崎一護を手放してしまう。

「…白哉!？」

「下がっている、黒崎一護。兄けいの仕事はここにはない」

黒い姿でウジャウジャと、またしても敵の増援だ。その様はまるで藍染農園で時折見かける、あの泣く子も黙る破面軍軍団長を逆に泣かす虚ウエコムンダ圏最強生物のよう。

「…卍解」

——千本桜景厳——
せんぼんざくらかげよし

叩いても払ってもしつこく纏わり付いてくる、桜色に輝く無数の刃。おそらく報告にあったゾマリを倒した隊長格だろう。傷を癒され霊圧まで万全に回復されては、あいつが戦った意味すら：否、死んだ意味すらない。

「ああ〜ムカつくぜえ〜！ クソゴミ共がウゼえんだよオツ！」

「…！」

「オラッ！ さっさと潰れて死にやがれッツ！」

巨体とはそれそのものが大質量の圧倒的暴力。八対の脚を巧みに操り繰り出した突進は、敵の想像を超えた威力の衝撃となる。

「ッ、：成程。破壊力に限ればその数字、見せかけという訳ではないら

しい」

「ハッ、俺がいつ力の底を見せた？ てめえらクソ虫共のおかげで俺の怒りは無限大だ！」

だが無数の刃の盾に阻まれ、ロン毛野郎はヤミーの突撃を片腕の被害で逃れる。ヤツの変幻自在な卍解。ハエのようにすばしっこい瞬歩。苛立たしい、苛立たしい、苛立たしい。

「そんなに見てえなら見せてやるよ！ こいつが俺の……最強の虚閃^{セロ}だ!!」

「…ッ!？」

怒りに身を任せ、遂にヤミーは解放状態の十刃の切り札を撃ち放った。

セロ・オスキュラス
—— 黒虚閃 ——

極大の霊圧攻撃が驚愕する死神諸共、大天蓋の砂漠を両断し大爆発を引き起こす。一瞬で周囲を呑み込む砂の津波はさながら天変地異の如く。その超火力に流石のゴキブリも死んだだろうとヤミーは勝利の咆哮を上げた。

「ハッ……ハハハハハ！ どうだ、見やがれゾマリ！ てめえの尻拭いなんざ、この俺様にかかれば造作も——
ぐあああああッ!!？」

だが怪獣の勝ち誇った声は突如、激痛の絶叫へと変わる。もうもうと立ち上る砂塵の中から飛来した斬撃がヤミーの片脚を斬り落としたのだ。

「——退^どけよ、朽木白哉」
そして。

「こいつア俺の獲物だ!!」

ラスノーチエス
虚夜宮天蓋下の戦いに満を持し、最後の乱入者が現れる…

「——ああ、うあああ？」

ふと、死覇装の裾を引っ張る感触に我に返る。

隣を見れば、ワンダーワイスがこてんと小首を傾げ「行かないの？」とボンヤリした目で問い掛けていた。

「…ええ、ごめんなさい。そろそろ時間ですね」

瓦礫から腰を浮かし、ポンポンとお尻を叩く。気を利かせ、隣の彼にも。

「ほら、あなたも砂を掃って。汚れてたらはしたないですよ」

「あああうあ？」

そう。これから始まるのは、一世一代の晴れ舞台。

精いっぱいおめかしした、綺麗な姿を見せ……そして精いっぱい、あの子の前で汚れてあげるのだ。

「——ふふっ、うふふふっ……」

「あうう……？」

…ああ、ごめんねワンダーワイス。怖がらせちゃったかな。でも許して。今日はね、あなたの上司は、狂った女の子になるの。悪い男の人に狂わされた、哀れで悲しい女の子に、ね。

「ふふっ……ああ、楽しみだなあ……」

目の前に、世界の歪が開く。

暗闇の先に見えるのは、遠い昔に親しんだ、平凡なコンクリートと木造家屋の田舎町。

ズルリ：

ズルリ：

笑顔で振り向くワンダーワイスにつられ、後ろに続く巨大な怪物を優しく撫でる。彼のお気に入りのフーラーくんだ。

「二人とも、ちゃんとアレは持ちましたか？」

「あああうう！」

『——オオオオオオ……』

小さな黒い箱を掲げる一人と一体。

うん、だったら大丈夫。思う存分、戦いなさい。

「…みんなも、いいかな？」

最後に胸に手を当て、スツと意識を魂の奥底へと向ける。

美しい天女さまと、桃色の宝珠が出迎えてくれた。

『…漸くですね』

「うん、ようやくだよ」

『——早く早く！——もう待ちきれないよ！——ああ、やっと、やっと見れるんだあ——ハアハアハアハア——』

「うん、待てないよ。やっと見れるんだよ」

自然と浮かぶ笑顔。

隣のワンダーワイスを怖がらせないように、そつと隠して。

「——さあ、往きましようか」

三人でカツコよく、不気味に、悲劇的に。

そしてオサレに逢いに行こう。

あしたの愛を・・・

：ねえ、あなた。

あたし、頑張ったよ。

だから、受け取って。

決戦イイイイ！篇 登場イイイイ！

現世は空座町。

虚と死神の決戦が行われているこの非凡な田舎町の上空に、燃え盛る巨大な炎の塊が浮いている。その熱気渦巻く中心に開けた空間に、三人の男たちが平然と佇んでいた。

先夏戸^{ソウルソサエティ}魂界を離反し世界に反逆した、この戦の一大勢力を支配する王の陣幕だ。

「——いやア、熱い熱い。にしても相変わらず気イの利く娘^コやなあ、桃ちゃんは」

古風な竹水筒を傾け喉を潤す糸目の死神、市丸^{いちまる}ギン。呑気に一人差し入れを楽しむ同僚を睨みながら、王の腹心^{とうせんかなめ}東仙要は彼に物申す。

「…慎め、市丸。藍染様の御前だぞ」

「なんや東仙隊長。そない顔しはっても桃ちゃんのアイステイヤーはあげへんよ?」

「要らん。それよりその隠密用の改造虚は何だ」

東仙の問いに苦笑し、市丸が肩に乗る小鳥型虚の頭を撫でる。

「何って、あの娘^コに頼まれたヤツですわ。お節介に少しイヅルの活躍を多めに撮ってん」

「…ああ、例の戦闘記録か」

頷く東仙は同僚の「それただの言い訳やで…」の独り言を聞き流し、炎壁より垣間見える戦場を俯瞰する。

戦局は配下の破^{アランカル}面軍の損害多数に対し、護廷十三隊の損害軽微でこちらの不利。従属官が全滅し、主力の十刃^{エスパーダ}も第2、第3が無力化された。無事な第1十刃も強敵の隊長二名を刀剣解放で相手取り戦闘は膠着している。

彼らを集めた責任者の労力を考えれば頭を抱える大惨事だが、当の彼女は単純な勝敗よりも異なる結果を求める人物だったと思い出し、東仙は別の意味で溜息を吐く。

…二人きりの虚夜宮^{ラスノーチエス}監視室で彼女に懇願されたとある計画への賛否を、男は未だ決断しかねていた。

「――悩む必要はない、要」

葛藤に俯く東仙。ふとその耳に声が届く。

それまで黙っていた本陣の総大将。男の仕える主、藍染惣右介だ。

「何を…」

言っているのか。そう問おうとした東仙は、王の浮かべる薄い笑みに閉口する。その掌に全てを掴む、もう一人の超越者がそこにいた。

「言ったはずだ。君はただ、私と共に歩めばいい」

「…ッ」

「正義無き世に悪は無い。君の暗闇の世界には、既にその全てを別つ一筋の光がある」

力に満ちた言葉だった。彼を主と仰いだ遠い昔の光景が脳裏に蘇り、盲目の男は思わずその場に平伏す。

…ああ、そうだ。王の言う通り、最初からこの身に迷いなど存在しなかった。

私のこの目に映る唯一の光が、藍染様が歩む道こそが、正義。情に絆され進むべき道を違えたのなら、また正せばよいのだ。

憂いの取れた顔で立ち上がる東仙、静かに視線を交差させる藍染。惜しむべきは主従二人だけの世界であるが故に、蚊帳の外の市丸がその胡散臭い笑みを僅かに引き攣らせていた。

「…なんや深いこと言うてますなあ。仲間外れなボクを慰めてくれる優しい娘、早う来てくれへんやろか」

拗ねる糸目の男が「十刃の戦いも中弛み中やし」とつまらなそうに戦場を眺める。

だが唯の独り言でもあつた彼の不満に、同意する者がいた。

「…そうだね。そろそろ、飽きてきたところだ」

ヒヤリと本陣に走る緊張。

王、藍染惣右介が、その冷たい琥珀色で眼下を見下ろす。大層な地位を、力を、そして寵愛を与えられておきながら、敵の主力一人さえ下せない不甲斐ない兵士達の姿を。

元よりこの男に破面軍への期待など塵一つもありはしない。かつては虚と死神の境界なき超越者として、その靈格に興味を寄せていた特殊種族”破面”^{アランカル}。だが崩玉の力を以てしても彼の望む強大な個体は誕生せず、部下である東仙要の破面化を最後に、王は”破面”と言う種族そのものに見切りをつけた。

もし男に、とある少女との出会いがなければ。破面達^{アランカル}に護廷十三隊の掃討程度の役割は期待しただろう。

されど今の彼のように、破面達の無様な戦いを「戯曲的一幕」として許容し愉しむ発想は浮かばなかっただろう。

何れにせよ。”藍染惣右介”という超越者は如何なる事情においても、五十年の準備の果てに結成された劇団の演目に、一切の価値を見出さない。

「…退屈だ」

静かに木霊する無情な本心。

そして王は徐に、背後へと視線を流す。

——君もそう思わないか？

問いが宙に溶ける。

だが虚空へ向けられたその言葉で、東仙は遅れて事態に気付いた。

『!!』

世界が震える不気味な音。三界の隔たりが繋がる異様な感覚。辺りに滲む、背筋が震えるほどの途轍もない威圧感。

本陣に佇む三人の後方に、巨大な黒腔ガルガンタが開く。その中から、三つの影が現れた。

一つは巨大な虚。三日月のような一つ目をぼんやりと光らせる白い虚髄の肉塊。

一つは小柄な男。淡い黄髪に痴れた呆け顔の青年破面。そして最後の一つ。

最も小さいその人影こそ、王の最たるお気に入り。

「——うふふ……」

常の可憐な笑顔がどろりと狂気に歪んだ、美しい少女。

桁外れの霊圧で辺りの空間を軋ませ、降臨したその死神こそが、全ての破面達を指揮する軍団長ヘネラーリヤ。

雛森桃だった。

「……ひゃあ、怖い怖い。退屈を慰めて欲しい言いましたけど、あんなに戦場に放り込んだらもうボク等の出番無くなるんとちやいますか？」

戦略兵器も同然な彼女の異常な存在感に、糸目の男が胡散臭い笑みを引き攣らせる。

「結構な事じゃないか、ギン」

だが苦笑する副官に反し藍染の顔に滲んでいたのは、開戦以来初となる、純粹な高揚感だった。

「我々が怖れる事があるとすれば……それは彼女の粹な演出が、我々の求める喜劇足りうるか否か。それのみだよ」

眼下に降り立った少女を見つめ、王が笑う。

されど言葉とは裏腹に、その瞳に疑心の色は、微塵たりとも浮かんでいなかった。

二世紀未満の魂魄人生。

死神としてこれ程の激戦を経験するのは、吉良イズルにとって初めての事だった。

敵は破面となった虚の軍勢、数千年も続く種の宿命だ。しかし青年はこの戦いにおいて、そのような抽象的な理由で並ならぬ戦意を抱いている訳ではなかった。

否、彼だけではない。灰刃を操り三体の敵を相手取る同僚も、「転界結柱」を巡る攻防に身を投じる院生時代の先輩も、遠くで荒れ狂う吹雪のような霊圧を撒き散らす少年も。隊長格として褒められた事ではないにも関わらず、皆心の傷を埋める何かのために戦っていた。

それが義憤か、悲憤か、友情か、復讐か、恋慕かは、彼ら彼女ら自身が一番よく理解していることだろう。

「——お前か、軍団長に惚れてた副隊長ってのは」

その全てを胸に戦うイズルは、対峙した闘士風の男破面アピラマ・

レツダーの挑発に静かな激情を抱いた。

「市丸ギンから聞いてるぜ。あまりに可哀想だったんで連れてくのが
忍びなかったってな」

「……ッ」

「まあ当然か。こんなフヌケじゃ、あの小娘の皮を被った化物を女に
するなんて逆立ちしても——」

直後、両者の間に血潮が舞う。気付けば青年は自身の斬走で敵の頬
を斬り裂いていた。

「…その二人の名を、僕の前で軽々しく口にしないことだ」

同じ命を落とすにしても——傷浅いまま死にたいだろう？

「…何だよ。できるんじゃねエか、そういう顔もよ…!!」

挑発を交わすと同時、真っ先にアビラマが自身の斬魄刀【空戦驚^{アキギラ}】を
解放する。戦士の矜持に生きる彼にとって、戦いとは常に全力で臨む
ものらしい。

無論、そんなものは私を滅し公に奉するイヅルには理解出来ない価
値観だった。

「——斬り付けたものの重さを倍にだど…？ 汚エ小細工しやがって

…てめえそれでも戦士かよツツ！」

汚いとは随分な言い草だ。

己の率いる三番隊の隊花は金盞花。花の持つ意味は“絶望”。そ
れ即ち、三番隊唯一の隊長格たるイヅルの矜持でもある。

戦いは英雄的であってはならない。戦いは爽快なものであっては
ならない。

戦いは、絶望に満ち、暗く、恐ろしく、陰惨なものでなくてはなら
ない。

それでこそ人は戦いを恐れ、戦いを避ける道を選択する。

「…一度切れば倍、二度切ればそのまた倍。やがて重みに耐えかねた
相手は地に這い蹲り、詫びるように頭^{こっぺ}を差し出す」

故に

「ま…待ってくれ…」

「戦士が、命乞いをするものじゃあないよ」

敵の首に構えた半鉤状の刃を天へ擡げるイツル。それだけで、”第2従属官”アピラマ・レッダーの首は地へ落ちた。

「…さようなら、空の戦士。できれば僕を…」

——許さないで欲しい。

強敵相手の勝利。だがイツルに余韻に浸る間は何処にもなかった。

「…アレで一気に片付けるよ」

「仕方ありませんね」

「あんなヤツ等如きに…往くぞ！」

——【混獣神】キメラ・バルカ——

三体の女破面が左腕を捧げ生み出した、恐るべき化物。十番隊副官・松本乱菊、そして彼女の援護に駆け付けた五番隊副官補佐・蟹沢ほたるに危機が迫っていた。

「が、はっ…」

「なっ！ 乱菊副た——あぐツ！」

「ツ、不味い…！ 吉良！」

「はい！」

——【縛道の三十七・吊星】つりぼし——

巨大な怪物に蹂躪される二人に、同僚の檜佐木修兵ひきぎしゅうへいと共に加勢したイツルは、回道修行に四番隊の門を叩いた過去の自分に心から感謝する。

「…檜佐木君に…吉良…君…?」

「大丈夫です、蟹沢さん！ 貴女も松本さんも必ず助けます…!」

「は、はは…私、先輩なのに…情けない姿ばかり…」

「…言うな蟹沢。そいつは俺にも流れ弾だ」

五十年前の霊術院の現世演習以来の縁。奇しくも共に苦い思いを分かち合った同士たちは、あの不甲斐ない自分から何かを変えられたのだと証明すべく、目の前の異形へ挑み掛かる。

「はん、副隊長如きがイキってんじゃないよ!」

「てめえらがあたしたちのアヨン相手に勝負になるかよバーカ!」

「まとめて捻り潰してやりなさい」

だが怪物の生みの親、第3トレス・フラシオン従属官を名乗る三体の女破面の豪語は決して誇張ではなかった。始解かぜしに【風死】や変幻自在の鬼道で戦うも空しく、修兵は敵の巨体に似つかぬ俊敏で非生物的な動きに対応できず瞬殺される。

援軍に駆け付け背後から仕掛けた同僚の射場鉄左衛門いばてつざえもんも、同じく不意を突かれた虚閃に敗北。頼りの他の隊長格たちは皆敵主力の十刃共と戦闘中。万事休す。

「…そんな、あと少しなのに」

そして、必死に乱菊とほたるを治療するイツルの眼前に、化物の拳が振り下ろされ…

「——やれやれ。総隊長を前に出させるとは、情けない隊員達じやのう」

混獣神アヨンは、尸魂界ソウルソサエティ最古にして最強の死神・山本元柳斎重國キメラ・バルカの一刀によりあっけなく灰塵と化し。

『喰らえエエエエエツツ!!』

「…隻腕で挑むその意気や善し。意気に免じ、火傷程度で済ませてやる」

続く二振りにて、波乱を巻き起こした第3従属官が膝を突いた。

しかし、総隊長の出陣に士気を取り戻した護廷十三隊の活躍は長くは続かない。

碎蜂ら二番隊隊長格が敵主力”第2十刃”を、京楽春水・浮竹十四郎の隊長コンビが”第1十刃”を、十番隊隊長・日番谷冬獅郎が”第3十刃”を相手にそれぞれ善戦するも…

「…討て」

——【皇鮫后】タイプロン——

「ッ、答えろ破面！ あいつはどこだ!!」

「言ったはずだ、少年。あの方の事が知りたいなら私を倒して見せろ」
周囲全てを呑み込む、女破面の大津波。

「…朽ちろ」

——【髑髏大帝】アロガンテ——

「…死神、小娘、隊長格…ああ、忌々しいのう。古傷が疼きおるわ」
「何だ…その姿は…!」

森羅万象に老いを強いる髑髏破面の、死の息吹。

「…蹴散らせ」

——【群狼】ロス・ロボス——

「ちよ、ちよつとちよつと、そんなのズルじゃないのオ!?!」
「うるせえな…こつちには時間がねえんだ。さっさとやられてくれよ、隊長さん」

無限の弾発を有する男破面の虚閃小銃。

ウエコムンド 虚 圈が誇る最強の破面達が、護廷の猛者たちにその圧倒的な力を見せ付ける。

「———そうかよ」

だが、切り札があるのはこちらも同じ。劣勢に次ぐ劣勢にいよいよかと思われたその時、隊長たちの準備がようやく整った。

「俺の氷輪丸は氷雪系最強。全ての水は俺の武器…」

「…ッ!?!」

「全ての天は、俺の支配下だ……！」

——氷天百華葬——

凍空より降り注ぐ霜の花が、N.O. 3の女破面を凍て付かせ。

「…姿は巨大で隠れることはできず、重すぎて動くこともままならん。私の矜持に反する正解だ」

「お主、それはよもや……」

「そして暗殺と呼ぶには……派手過ぎる」

——雀蜂雷公鞭——

炎尾を描く噴進弾の大爆発が、N.O. 2の骸骨破面を呑み尽くし。

護廷十三隊は遂に破面軍主力へ痛烈な一撃を与えることに成功した。

「やった……隊長たちがやってくれた……！」

「ええ……よかった……っ！」

上司の健闘を称え喜ぶイヅル達。これまで幾度と対峙しておきながら明確な勝利を掴めずにいた彼らに、初めてその二文字が頭を過る。

皆の士気が回復し、輝かしい未来への道が開けた。

…かに思われた。

——ズズズズ……

その時。

突如イヅルたちの頭上の虚空に、巨大な歪ひずみが現れる。別たれた生者と悪霊の世界を繋ぐ、忌むべき闇の門——黒腔ガルガンダだ。

「な、何だ……あの大きさは……」

「十刃の頭三人に加勢できるのがまだ居るっての……？ 考えたくないねえ」

敵のN.O. 1を牽制しつつ、京楽ら隊長格は新手の登場に身構える。

…何かが起きる。確実に自分達によからぬ何かが。

だが思い浮かべた幾つもの展開の中で、その悪寒の元凶となった黒腔ガルガンタの奥の存在は、彼らが想像しうる限りの”最悪”だった。

『——アアアアアアアア!!』

悪夢が始まる。

異界の門より轟いた甲高い絶叫が周囲の霊子を掻き乱し、隊長達の卍解の術が無力化される。

「な、何だアレは……!」

起きた現象に理解が追いつかない護廷十三隊。その目に更なる衝撃が飛び込む。

天を裂く巨大な黒腔ガルガンタより、蠢く異形の肉塊が現れた。あまりの巨体がまるで島のように空中に鎮座する。

…そして、恭しく掲げられた巨虚の掌上に佇む、最後の一人。

「——惜しかったな、蟻共。あの小娘が呼ばれたならば、我等のボスは我慢の限界を迎えたという事じゃ」

黒煙が晴れ、髑髏の十刃が忌々しげに…

「——我等”十刃”は軍であり個に非あらず、将なき軍は烏合の衆にも劣る。遊びは終わりだ、少年……!」

氷花の塔が崩れ、女の十刃が決意に満ちた目を…

「——あんたらが強すぎるのが悪い。これ以上藍染様の気分を損ねないために、俺達を率いるお人が直々に来ちまったんだよ……」

そして隊長二名を相手取る男の十刃が、その冴えない表情を改め…

彼女を、一斉に仰ぎ見た。

「ツ、あの子は……!」

「参ったね、こりやどーも……!」

辺りに動揺、戦慄が走る。それは彼ら護廷十三隊の抱える最大の葛

藤であり、同時に悲劇の存在でもあった。

姿を見せたのは一人の少女。

神話の華服にも似た白い死覇装を風になびかせ、静かに佇む彼女は、静かに眼下の死神達を見下ろしていた。

辺りに零れる安堵の声。しかしそこに遍在するのは隠せない困惑と不安。少女の姿を見て、皆が不穏な胸騒ぎをその心中に覚えていた。

あの、健気で可愛らしかった彼女が。明るく優しく、隊を越えて愛された人気者の彼女が。

——嗟っているのだ。

「あ、あああ……」

情けない喘ぐような吐息が聞こえる。吉良イヅルは、それが自分の口から溢れたものだと思っただけで最後まで気付けなかった。

彼女だ。

大罪人に連れ去られた、僕の大切な人だ。

だというのに、その事実を認めたくなくて、彼女の身に起きた事を信じたくなくて、青年はただその場で震えることしか出来ない。

そして。

誰もが固唾を呑んで静まり返った偽空座町の沈黙に、小さな声が響き渡る。

弱く儂い、悲壮な、子供の声。

「——ひな……もり……」

あの時、抱き締めた腕の中で、真紅に染まった血だらけの幼馴染。

何も出来ず、見せ付けるかのように巨悪に抱かれ連れ去られた、想い人。

狂気の笑みを浮かべる、別人のように変わってしまった大切な人を見つめる一人の男の子——日番谷冬獅郎の縋るような呼び掛けが…

少女の名を紡ぐ唯一の声だった。

軍勢イイイイ！

呪われている。

あいつは、雛森桃は、世界という残酷な理不尽に。

『——ふざけんなアアアア!!』

あの地獄の再会から三日。四番隊及び十二番隊の四肢再生治療を終え目覚めた少年——日番谷冬獅郎は、荒れに荒れた。

彼の寝ている間に事は取り返しをつかなくところまで進んでいた。期待していた虚^{ウエコムンド}圏^{ウエコムンド}侵攻部隊は既に出陣した後。自分は無理やり空座町防衛部隊に回され身動きが取れない。

そして何より、前の戦闘報告を受けた再建中の中央四十六室が決定を下してしまった。

——雛森桃を抹殺せよ。

首謀者藍染惣右介は無論の事、あの市丸や東仙と同じ逆賊としてソウルンサエティ尸魂界最高意思決定機関より誅殺指令が出された事実は冬獅郎を悲憎の鬼へと変える。

『死ねクソ貴族共！ くたばれ穴倉のカス野郎が！ 何が”断固たる意思”だ！ 皆殺しにされてまだ懲りねえのかくそつたれえええッ!!』

『それ以上はダメです隊長！ 後で絶対みんなで減刑してもらおうよう直訴しますから……!』

少年の暴言を聞いてしまわぬよう耳を塞ぎながらも、護廷隊士は皆が同じ思いを抱いていた。

四十六室の強気な苛断は、藍染惣右介の乱にて一度崩壊した自らの権威を誇示する意図が大きい。碌な審判が開かれていないのは前の

虐殺から未だ日が浅い故当然で、同時に面子の問題が関わってしまったこの決定を覆す難しさは誰の目にも明らかだった。

そして話を更に悲劇化させたのが、浦原喜助が上げた一つの意見書。

——雛森桃の魄内に【崩玉】の反応あり。

それはおぞましい人体実験の存在を臭わせる驚愕の内容。浦原自身が朽木ルキアに行った魄内封印ではなく、超物質との”魂魄融合”の可能性を示唆するものであり、対象となった魂魄には想像を絶する変化が起きると言う。

無論、それが雛森桃自身が望んだ事かどうかなど、前回の彼女との再会時を思えば是非もない。

『殺してやる…殺してやるウウツ…』

藍染工”エエエエ”ンン!!』

四十六室の決定を如何するか。崩玉を如何するか。

浦原喜助は「策がある」と秘密裏に冬獅郎に協力を要請してきたが……決戦を目前に、雛森桃を救う道筋は、依然として不透明なままだった。

「——てめえは…^{エスパーダ}十刃だな？　雛森は無事なんだろうな…!？」

心晴れぬまま開戦を迎えた十月十四日の正午。現世に展開した偽空座町にて冬獅郎が相對したのは、ティア・ハリベルと名乗った色黒の女破面。

卍解の全力で挑んでなお劣勢に追い込まれるほどの強敵は、やはり少年の求める答えを知っていた。

「軍団長が健在でなければ十刃は解隊される」

「…そう、か……ならあいつは……よかった——」

「だがお前たちがあの方逢うことはない。私を倒さん限りはな…!」

幼馴染の無事に安堵した冬獅郎が気を抜いた一瞬の隙。敵の超然

とした態度が一変し、ハリベルが強い感情と共に斬魄刀を解放した。
「…討て」

ティフロン
皇鮫后

水流の合わせ貝が女の全身を覆い隠す。そして霊圧の激増と共に水塊を斬り裂き現れた十刃は、口元の仮面の名残を捨て去り、流線形の大剣を片手に構えた姿で佇んでいた。

「諦める少年、雛森様の心は我等と共にある」

「ッ、ふざけんな…！」

剣を打ち合う度に、今まで戦ったどの敵よりも重い一撃が冬獅郎の心身双方を軋ませる。幼馴染の不幸で積もりに積もった不安と焦燥は冬獅郎の心を深く蝕んでいた。

「チッ、よく解ったぜ…：雛森に懐いてるてめえらの存在も、藍染があいつを捕らえるために用意した檻だつてことがな！」

「…安い挑発だ。私はあの方のお望み通り、藍染様のご命令を第一に考えている。あの方の重荷になってなどいない…！」

女破面の言葉に少年は息を呑んだ。こいつらは本当に雛森を上司として畏怖し、中にはこのハリベルのように敬愛を抱く者までいる。虚すら惹きつける幼馴染の人的魅力を誇らしく思うと同時に、冬獅郎はそこに明確な焦りと苛立ちを覚えていた。

「そうか、藍染が一番か—— だったら三日前に雛森がヤツの外道な実験で死にかけたつて事も当然知ってんだらうな!？」

「…ッ!？」

見開かれる翡翠の瞳。

だが敵も然る者。一瞬で動揺を鎮めたハリベルが、感情をぶつけるように冬獅郎へ霊圧を叩きつけた。

オーラ・アズール
波蒼砲

「ぐアッ…！ く、そ…っ！」

「…進化には犠牲が必要だ。その実験とやらの話は聞いていないが、確かに雛森様は更なる力を手に入れられた。あの方に相応しい、畏る

べき強大な力だ……！」

「て……めえッ！」

女破面の言に激昂する少年。その力の代償にあいつがどんな目に遭ったと思つてやがる。

あの震える華奢な両肩が、凍える肌が、そして……爆ぜたあいつの血の感触が。全てが覚めぬ悪夢の如く冬獅郎の脳に焼き付いているのだ。

……あれが、”犠牲”だと？

「ふざけんな！ 俺が冷静でいられるうちにさっさと雛森の居場所を吐け!! 俺はあいつを……」

助けなきやなんねえんだ!!」

そして激情に支配された冬獅郎は、凍える曇天へその刃の切先を突き立てた。

「ッ、まさか……！」

「……喋る口だけは自由にしてやるぜ……破面ッ！」

——ひょうてんひゃつかぞう氷天百華葬——

降り注ぐ氷の蕾が敵の肌で花開く。一輪、また一輪。

そして百輪の華が咲き終えた時、”トレス・エスパーダ第3十刃”ティア・ハリベルは、暗雲を貫く氷華の塔と化していた。

それは今の日番谷冬獅郎が満足に使える、最強の大技。如何な強敵と言えど抜け出す事は容易ではない。

冬獅郎は残心も、荒い息を整える間も惜しみ、敵の尋問に逸る。

「シャウロン・クーファン……ヤミー・リヤルゴ……ルピ・アンテノール……全員邪魔されて何一つ聞き出せていねえんだ。てめえこそは絶対に答えて貰うぜ……！」

そう問い詰めるも、女破面は目を閉じ黙したまま。苛立つ冬獅郎は霊圧を一気に高め恫喝しようとして口を開ける。

だが。

「——時間か……申し訳ごいません、雛森様」
「ッ、何だと？ どういう——」

女が冬獅郎の幼馴染へ謝罪の言葉ガルガンタを述べるのと同時。
偽空座町の上空に、巨大な黒腔が開いた。

悪夢の始まりを告げる、魔界の雄叫びと共に…

『——二人とも見ろ、この瑞々しい紫黒の茄子ナスを』

それは十年以上前の、藍染農園での一幕。初めて収穫が成功した感動的な思い出だ。

『丹精込めて育てた野菜を収穫する時の幸せは何事にも代えがたいな…』

『わかります東仙隊長っ！ 土壌を育て、種を撒き、何年も何十年もかけて芽吹いた芽を見守り、実る果物を収穫する時の快感を想像するだけで、あたし、あたし……もうっ』

『そうだろう。わかってくれるか雛森』

『はいっ！』

『……あれ、これボクがツツコミせなあかんの？』

DJ一〇と語り合った熱い思いが蘇る。全ての人にとって、やはり

手間暇かけて育てた果実を収穫するのは特別な気分になれる瞬間なのだ。

そして今。

あたしこと雛森桃は、百五十年をかけて育てた果実の二期果の収穫を目前にしていた。

『——シロちゃんだシロちゃんだシロちゃんだシロちゃんだシロちゃんだ——待っててねすぐにもっともっともっともっと曇らせてあげるから——ハアハアハアハアハアハアハアハア——』

『黙りなさい石屑っ、喧しくてあの氷蜥蜴の悔しそうな声が聞こえないじゃない……！』

いつもケンカしてる飛梅&桃玉コンビも、この時ばかりは仲良くあたしの視界と感情を共有し悦に浸っている。全く、もう少しあたしみたいな気品ある振る舞いをしてほしい。主として恥ずかしいわ。

『ちよつと主様、お顔が崩れてますわよ。はしたない』

…これは崩玉洗脳ヒロインムーヴです。あなたたち自由人と一緒にしないでちょうだい。

そう！ 今のあたしはヨン様の邪悪な企みで狂気に染まった女の子…という設定のムーヴ中。よって少しくらいは普段隠している不健全な愉悦嗜好を表に出しても許されるのだ！

「——ふふ、くふふっ」

ぐへへ、普段なら絶対に我慢する嗤い声もこの通り。ああ、抑圧された本性を、趣味を、価値観を自由に曝け出せる素晴らしさ。精神的マイノリティーに自由を！

…ふう、落ち着きなさい。BE COOL(死語)なのよ、雛森桃。

大丈夫。さつき最高のウル織を^{ラスノーチエス}虚夜宮で見て来ただけあって、今のあたしの心は素晴らしく満たされた状態にある。あの桃玉爆発事件でのシロちゃん再会もまだ三〜四日前で、それなりのシロニウムは

撮取済み。

今日のこの『メインシロちゃんタイム』でも、流石に何もしていない現段階で感情が暴走するなんてことはないはずだ。

さあ、まずは食前酒。あなたのお顔を見せて、シロちゃん？

…チラッ

——ニチャア…

『……主様、今の内からそんなゲス笑いしてたら氷輪丸の少年が死んでしまいますよ』

「——ハッ！」

飛梅の声で我に返ったあたしは慌ててシロちゃんから目を逸らす。な、なんてこと。たった一瞥しただけでこのあたしの強靱な理性を破壊するほどの輝きだとは。

シロちゃん、恐ろしい子…！

御機嫌な桃玉が生み出すとんでもない霊圧を抑えて、あたしは気持ちを落ち着かせる。だが一度目が合ってしまったあの子は、掠れる悲愴な声で、感情的限界ギリギリなあたしの心にクリティカルを与えて来るのだ。

「——ひな……もり……」

：

ああああもおおおおおおシロちゃんすきすきだいですきあいつてらううう!! 何その声! 何なのその泣きそうな顔! あたしを悦殺する気か貴様ア!

(だ、ダメ…っ! 我慢、我慢しなきゃ…!)

耳までつり上がりそうな口角を死に物狂いで堪えるあたし。飛梅の言う通り、これからのムーヴは慎重に行わないとシロちゃんの精神力が持たずあの子が廃人化しかねないのだ。それは絶対にいけない。

一〇によく勘違いされるのだが、あたしの目的は断じて小説のゲス灘のように人が絶望し嘆く姿を見て悦に浸ることではない。それは自分の劣等感を誤魔化すための自己愛撫。BLEACH転生を最高に愉しんでいるあたしにとって、そんなものは何の魅力もない類の悦である。

あたしの愉悦の根底にあるのは、日番谷冬獅郎へのキャラ愛。たまに手段と目的がひっくり返る時もあるけど、全てはシロちゃんの一歩の魅力である”曇り顔”を引き出し、彼の最高の輝きをこの目で愉しむため。あの子の心を壊すことの一体どこに愛があると言うのか。だからこそその我慢。人は愛ゆえに胸を痛め、苦悩するのだ…

「…二人とも、お仕事ですよ」

「イイこと言った気分のあたしは、感情がこれ以上昂る前に”台本”を進めることにした。」

早速と言わんばかりにワンダーワイスが突撃して浮竹さんを瞬殺。

山爺戦を見越したOSR値稼ぎイベント回収だ。

フーラーくんも山爺の【城郭炎上】を死虚息吹で鎮火し数少ない原作活躍シーンを無事再現。

戦場では初手ワンダーワイスの雄叫びで解放されたハリベルが暴れるシロちゃんを牽制し、バラガン爺も碎蜂のミサイルにあたしの梅

焰を幻視し怒り爆発。スタークがなんかかなり容赦なく京楽さんに虚閃をぶち当ててたけど…まあ流石に次期総隊長を倒すのは無理だろう。うむ、ガバは大丈夫そうだ。

そして、呑気に観戦していたヨン様DJ一〇の三人が自由となった時。まるで今までずっとスタンバってたかのように…

「——久し振りやなア、藍染」

読者の期待を裏切ることなく、作中有数のオサレ集合絵そのまんまのオサレポーズで、平子さんたち仮面の軍勢が登場した。

すごくかっこいい（小並感

…さて。「雛森イイイイ」が目前だけど、興奮して忘れてはならない点の一つ。それは対ユーハバツハ戦（と言うか世界の崩壊阻止）のために、一護をヨン様に勝利させないといけないことだ。

その準備にこれからあたしは悲劇のヒロインムーヴに加え、可能な限りOSR値を沢山稼ぐ必要がある。前回みたいな単純な霊圧の無双で終わらせてはならない。さもなくばOPB的にヨン様に原作通りの【敗北フラグ】が立ってくれないのだ。

OPBボス戦専用計算式【決戦システム】を知る諸君に説明は不要だろう。主人公・ヒロイン・敵ボスがそれぞれある値——【MP主人公OSR値】【FPヒロインOSR値】【VL悪役OSR値】の三値の合計が特定の値を超えた時に主人公勢がボスキャラに勝利できる、アレのことだ（早口説明

一護が白哉戦を正解だけで勝ちきれなかったのは、彼自身がルキアの護りを恋次に任せただけで彼女の【FPヒロインOSR値】が下がり、最終的に一護が【闇の力・虚】のオサレボーナスで【PT主人公OSR値】を多めに稼がないと三値の合計で【決戦OSR値】を満たせなかったから…というのは有名な一例である。

つまりこの世界の強化ヨン様に一護を勝たせるには、原作同様グムジョー&ウルキオラ戦で【FPヒロインTOSR値】を使い果たした織姫ちゃんに代わってあたしがそれを稼ぎ、そしてリヨナられることでヨン様の【VL悪役NOSR値】を爆上げさせる必要がある。本誌の原作雛森ちゃん&乱菊さんと同じ役割だ。

よってあたしは霊圧無双俺TUEEより、面倒な孤軍奮闘ロールによるOPB無双俺SETUNEをして【FPヒロインTOSR値】を沢山稼がなくてはならない。ヨン様強化ガバに桃玉ガバのせいなので、桃ちゃんの自業自得です…

ま、まあどのみち悲劇のヒロインムーヴは最高の「雛森イイイー」に必要だし、ちよつと湿度&悲壮感高めに演出すると思えば気は楽だ。

ちなみに肝心のあたしの【FPヒロインTOSR値】は殆どシロちゃんに向けられているが、原作雛森ちゃんもヨン様：シロちゃんで6：4、乱菊さんも一〇：シロちゃんで9：1くらいと一護とは無関係だったので問題はない（ホントお？）

：ヨシ！ そうと決まれば早速本番開始だ。桃玉融合状態で苦戦を演じるのは大変だが、多分その心配は杞憂だろう。

他力本願で恐縮ですが、因縁は十分溜めたはずなのでそろそろあの公式チートさんも本気を出してください。何でも（ry

「――遊びは終わりだ、少年！」

ふざけるな。

ふざけるな。

ふざけるな。

日番谷冬獅郎は敵の増援の特殊能力で解放されたティア・ハリベルと刃を打ち合いながら、何度も怨嗟の念を辺りに撒き散らす。

「ちくしょう！ どけ！！ 退けよてめえッ！！」

「舐めるな死神……！ 敵を将^{ヘネラーリヤ}軍の下へ通す兵士がどこに居る！」

「うるせえ退け！！ あいつが……！ 雛森が……ッ！」

激情に駆られるまま想い人のところへ翔け寄ろうとするも、女十刃が悉く立ちはだかる。心乱れた冬獅郎に破^{アランカル}面共の最高戦力を振り切る力を出せず、虚しい剣の金属音が木霊するだけ。

「くそっ……雛森……」

なんだあれは。雛森に一体何があった。

少年はあんな顔の彼女を知らない。

あんな、邪悪で、どす黒く、おぞましい嗤みを浮かべた、あの可愛い可愛い幼馴染の顔など……

「――雛森様……ッ」

だが上司の異常に困惑しているのは敵のハリベルも同様らしく、冬獅郎と戦いながらも彼女の顔には隠しきれない動揺の色が滲んでいた。

「くっ……見ろ、ティア・ハリベル！ てめえはあんなになった雛森を見てもまだ犠牲がどうかほざくのか!? 藍染の悪意にあそこまで蝕まれたあいつを見てもまだあんな外道に忠誠を誓えんのか!?!」

「……ッ！」

ただ憤慨のまま咆えた支離滅裂な怒声は、奇しくもハリベルの戦意を大きく挫く言葉となる。ぐらりと十刃の体勢が崩れた好機を逃さず、冬獅郎は一気に加速し彼女の懐をすり抜ける。

しかし、相手は有象無象では断じてない。

「！逃がすか！」

カスケレード
断瀑——

「なっ!? てめえ…ッ」

「言ったはずだ、貴様の安い挑発になど乗らんな…!」

成すべきことを第一に、即座に立ち直った女破面。しぶとく敵の冬獅郎を戦場に拘束しつつ、常に致命の一撃を入れる隙を窺っている。

強い。少年は敵の力量に、己のあまりの弱さに歯軋りする。

先ほどの氷の華の必殺技を二度も喰らってくれる相手ではない。既に場には水気が満ち、状況は対等。このジリ貧ではいつまで経ってもあいつの下へ行けない。あいつを苦しみから解放できない。そんなこと、冬獅郎は死んでも許せない。

だと言うのに…

「そろそろ堕ちろ、氷の竜よ…!」

トライデント
——三穿斬波——

「ぐあアツ!!」

強い。倒せない。気が狂うほどの焦燥に益々冷静さを失う冬獅郎。何でもいい。何かないか。この状況を打開する手段は。

誰かいないのか。自分を、雛森を共に助けてくれる仲間は。

「——なに苦戦してんねん、このハゲ」

…そんな少年の切実な思いを天が受け止めてくれたのかは定かではない。

だが突然冬獅郎の前に現れた二人の少女は、事実彼の、そしてあいつを取り巻く不幸に満ちた世界の中でたった二つ、煌々と輝いて見えた。

「な、何モンだ…お前ら…」

「勘違いせんといてや少年、仲間ちやうで。アンタ等の敵の…敵や」「わかつたらさっさと真子あのハゲボコボコにした太眉女んトコ行かんかい!

浦原のハゲから色々作戦聞かされてんねやろ？ 邪魔や邪魔！」

片やセーラー服に眼鏡、片やジャージのそばかす。現世風の出で立ちながら共に斬魄刀を腰に差した隊長格レベルの霊圧の女たちに、冬獅郎は面識も噂も覚えが無い。

だがハツと辺りを見渡せば、二人と同等以上の力を感じる者たちが六名。護廷十三隊に加勢し破面軍との戦闘に乱入していた。

…こいつらがあの胡散臭い男の言う「策」とやらか？

唯一「浦原」と彼の知る名を残し、冬獅郎はハリベルへと突撃していった仮面の死神たちの背を見つめる。

平時であれば決して取らない隊長格にあるまじき選択。だが今の少年にとつて彼女たちは、一瞬の逡巡すら馬鹿らしい、しがみ付いても掴むべき蜘蛛の糸だった。

「…ッ、恩に着る！」

謎の援軍に感謝し冬獅郎は空を駆ける。向かう先は、最愛の幼馴染の下ただ一つ。

「——逃がさんと…言っているッ!!」

しかし少年の耳にその低い女声が届いた直後。水浸しの戦場一帯から巨大な水壁が聳え立った。

グラン・カスケード
——巨壁断瀑——

「私は、第3十刃！」 雛森様の第三の切り札だ！ 我等虚を斬ることしか出来ないお前たち死神なんか…あの方のお手を煩わせてたまるものかッツ!!」

「ッ、しまっ…」

迂闊だった。相手の切り札の存在は把握していたはずだった。僅かな油断を突かれ、冬獅郎は援軍の少女らと共に渦巻く大津波に囲まれる。

だが。濁流がハリベルの激情に応え冬獅郎たちを呑み込まんと襲い掛かった、その瞬間。

『!!?』

一同の体に、よく知る、あの忌々しい霊圧がのしかかった。

「あい…ぜん…様…？」

足が震える。息が乱れる。戦慄するほどの凄まじい存在感。

そして、冬獅郎にとつての、殺しても殺したりない底無き憎悪の対象。

女破面に名を呼ばれたその男は、まるで道端の石ころを蹴飛ばすかのように。

「——用済みだ」

優秀で忠実な部下を一閃の下に斬り捨てた。

「ぐ…あ…」

「謝罪させてもらおう、日番谷隊長。私の手の者がとんだ愚作を晒してしまった」

血の花を咲かせ落下していく上位十刃を背に、巨悪の冷たい瞳が冬獅郎を見下ろしている。あまりに突然の出来事に固まる復讐者たちを前に、男はその薄い笑みを深めた。

「お詫びと言っては何だが、我々は君のために長年に亘る一大作品を用意していてね」

「…」大作品…だと…？」

「その通りだ、日番谷君」

背筋が冷える。この感覚に少年は覚えがあった。

この世の全ての悪意を煮詰めた猛毒の大釜に沈んでいくかのような、あの恐ろしい感覚だ。

…やめろ。やめてくれ。

企みの全貌など知る必要もない。男の目に滲むどす黒い喜悦を見るだけで、ヤツの言う“大作”の本質が知れる。

「どうした。君はその顔で…彼女との感動の再会を果たすつもりか？」

だが冬獅郎の無意識の懇願も空しく。巨悪は少年の背後へ視線を送り、一人の少女を召喚した。

男と寸分違わぬおぞましい薄ら嗤いの仮面に、その可愛らしい顔を穢された、大事な大事な幼馴染を…

「さあ、日番谷冬獅郎。私の桃に」

——君の輝く姿を見せてくれ。

かくして舞台は整った。整ってしまった。

大切な想い人の別人のような姿に息が詰まる少年を見つめる男——藍染惣右介は、その目にこの世の物とは思えない邪悪な光を輝かせていた。

決意イイイイ！

因縁の宿敵、藍染惣右介を打倒せんと牙を研ぎ続けた無法の虚化死神、ヴァイザード「仮面の軍勢」。同胞達と共に平子真子ひらこしんじが乱入した護廷十三隊と破面軍の戦う戦場は、混沌としていた。

そんな中、彼らはそれぞれの戦いに身を投じていく。

エスパーダ十刃と戦う者、作戦のため待機する者、そして藍染惣右介との一騎打ちを挑む者。

『おのれエ小娘が！ 雌蟻が！ 忌々しい、忌々しい、忌々しい!!』
強力な一撃必殺の卍解と鬼道結界の搦手で”死神”の鎌から逃れる戦い。

「が…あ…くそつ、不意打ちなんて汚エマネしなきゃなんねえ雑魚じゃねえだろ、あんた…ッ！」

戦士たちの戦いに割り込んだ無粋者の一撃で、一気に形勢が傾く”孤狼”との戦い。

だが緒戦も終わりを迎えつつあったその時、平子と戦っていた超越者に動きがあった。

「——おや、いけないな」

フツと男、藍染惣右介の姿が掻き消える。終始舐め腐った態度で一度たりとも攻撃を仕掛けて来なかったヤツの突然の行動。

『なっ…!?!』

敵の行方を必死に追った平子は、そこで部下の女破面を「用済みだ」と斬り捨てる藍染の姿を見た。仲間の女性陣二人が挑んだ最後の十

刃だった。

「…さあ、桃。私が君に与えた力を見せてご覧」

だが放心している間はどこにもない。続いて戦場に参加した一人の女を見上げ、平子は藍染の凶行の理由を知る。

「——はい、藍染様」

その短い台詞で全てを察する一同。だが「不味い！」と仲間達へ危険を知らせた直後、隊長格に匹敵する一つの霊圧が泡沫のように掻き消える。

仲間の血が空を舞う光景に、戦場全ての“仮面の軍勢”がその目を奪われた。

「が…うあ……」

『ひよ里ッ!』

事態の急変を把握した六車拳西、愛川羅武、そして相手の藍染に逃げられた平子ら手隙の三人が集結する。だが駆け付けるも空しく、最初に斬られた猿柿ひよ里も、彼女と組んでいた矢胴丸リサも、救うことは叶わなかった。

「こんッ…ガキやああああ!!」

「待たんかい拳西! ラブも抑えろ!」

『ッ、真子…』

だが報復に猛る同胞達を制したのは他でもない代表格、平子真子。最初に斬られたひよ里と最も親しかった彼を冷静足らしめているのは、これが切り札の準備であるが故。そして目の前の敵とただ一人戦闘経験があるが故の慎重さだった。

「ついに動いたか……雛森桃…!」

彼らが睥睨する先には、一人の女死神。

平時であれば思わず頬が綻ぶほどの愛らしい美貌。手折れそうなほどに華奢で小柄な肢体。

だがそんな琴花の似合う非力な見た目に騙される者は、この世に一人として存在しない。

「ッ、やっぱこいつが例の……！」

「何だこの馬鹿げた霊圧、ホントに死神か……？ 真子お前、見栄張って報告誤魔化しやがったな！」

「喧しいわ、氣イ抜くんやないで……やられる時は一瞬や……！」

男たちは皆、魂魄の上級種・死神の中でも最上位に位置する元護廷隊隊長だ。しかしそれほどの霊圧を以てしても、眼前の敵の凄まじい存在感に膝を突かずにいるのが精一杯。

霊格が、あまりに違い過ぎる。

彼ら”仮面の軍勢”が立ち向かったその敵は、魂魄の限界をとうに超越した霊圧の怪物だった。

「……………ふっふっ」

本能的な恐怖に足踏みする一同。その逡巡を見抜いてか、怪物が不気味な弧を描く唇を開いた。鈴が転がるような可愛らしい声が彼らの鼓膜を震わせる。

「……今日はえらいご機嫌やなア、お嬢ちゃん。残した一ミリの命に会えて嬉しいんか？」

「ええ、皆さん共に完治されたようで何よりです。あの時は以前の頃の名残で気が動転してたから、加減を間違えて殺しちゃったかもと不安だったの」

ホツと胸を撫で下ろす仕草は挑発か否か。いずれにせよ安易に動くなと自らを律し、平子は時間稼ぎに専念する。

「……なんや、アレは元仲間を斬るんが忍びないから手エ抜いたんとちやうんかい」

「ああ、それ……まあ昔のあたしの事はどうだっていいんです。今日は”感情”とか”仲間”とか、そういう不要なモノを全部、藍染様のために処分する日ですから」

どろりと美少女の顔が溶け落ちる。中から現れたのは、醜悪な悦楽

の顔。

そこに前回の蹂躪時に見せた痛ましい罪悪感や悲愴さはどこにもない。心境の変化などでは到底説明のつかぬ、変わり果てた化物がそこにいた。

だが平子にとっては予想の範疇。ヤツの魄内に仕込まれた物体は、霊格はもちろん人間性すら容易く高次元のものへと引き上げる劇物だ。おまけにこの霊圧の怪物を生み出した元凶はあの藍染惣右介である。虚化技術の応用で小娘一人の心を自分好みに洗脳するなど赤子の手をひねるより容易だろう。

『……』

悠然と佇む雛森桃の霊圧にあてられどれほどの時が経ったか。正気が飛びそうな緊張は、されど敵の何気ない一言で破られた。

「藍染様を退屈させているので、来ないのならこちらから参りますね」
『——ッ!?!』

またしても一瞬の内に女の姿が二つになる。しかし極限まで五感を研ぎ澄ませていた平子は、僅かな掠り傷で敵の攻撃を回避した。

前回より一転。あの凶悪な【白伏】と【曲光】と【霊圧分身】の複合鬼道戦法を見切ったと希望を抱く仮面死神。

「ハッ、今度は逆やな…！ その”処分するモノ”の中に戦力として捨てたらあかんやつも入ってんとちゃうか？」

『……?』

だが化物は平子の挑発に耳を傾けず、訝しむような顔つきで自らの足裏を交互に見つめるだけ。こちらの事などまるで眼中にない舐めた態度に、彼は苛立つ前に寒気を覚えた。

…いや、そもそも今のは本当にあの霊圧分身だったのか？

覚えたその違和感は、されど女の何気ない独り言で霧散する。

「やっぱり最後のステップが難しいですね。ゾマリさんはあんなに上手だったんですが、ちよつと悔しい」

「お前、まさか…」

「そうだ、アレは分身とは違う。強いて言うなら…」

「ああ、今のは響転ソニードの応用です。そろそろ死神をやめるので瞬歩しゅんぽ以外の歩法も学ぼうと練習中なんですよ。

———「こんな風に』

「なっ!?… しまっ」

突然聞こえた女の声は前後から計三つ。振り向く間もなく味方二人の悲鳴が聞こえ、平子は即座に離脱を選択する。

距離を取り戦場を俯瞰すれば、やはり先程の歩法で拳西とラブは斬り伏せられていた。一瞬で元隊長二人が倒される冗談の様な敵に最早笑う事さえできない。

「…残像か」

「ふふっ、今のは少し上手く出来ました。ご協力感謝します」

ニッコリと微笑む女の顔に隠しきれない嗜虐が滲む。自分達の虚ヴァイザード化状態に似た精神変化なのだろうか。心が死神のままだった三日前とは異なり、今の彼女には驕れる虚のような傲慢さが垣間見えた。

…切り崩すなら、そこだ。

奥の手の発動を待ち続ける平子は、策が成った後の段取りを一つ一つ練っていく。偽空座町に散らばる仲間達へ視線で合図を送り、遠方で密かに能力を操る最後の同胞の霊圧を確認。

「…：まだか、喜助…ッ」

楽しそうに佇む怪物の注意を引き付ける事、もうしばらく。

そして——雛森桃が一瞬妙な笑みを浮かべた後——遂に平子の望んだ効果が現れた。

焦がれたその変化は、突然だった。

「…：…な、なっ!?… これは…：！」

女が大仰に驚き自らの体の異常を訴えると同時、周囲を圧していた巨大な霊圧が一気に弱まった。ようやく敵の力を封じる切り札が作動したのだ。

立案実行は、やはりこの男をおいて他にない。

「ふう、何とかバレずに済んだみたいツスね」

そう、稀代の天才・浦原喜助。うらはら きすけ

三界最高峰の発明家が敷いた布石が今、驕れる超越者を絡め捕る。

「…あたしに何をしたんですか？」

「や、どうも雛森サン。お久しぶりツス」

飄々と現れた胡散臭い布帽子の男。それを見つめる怪物から余裕の色は、消えていた。

「…雛森サン、アナタの霊圧は膨大だ。ですが本来死神の霊圧とは、生まれ持つての才能か、斬拳走鬼を磨き魂魄を鍛えることで身に付けるものツス。アナタはただ一人その何れとも、平子サンたちの虚化とも異なる方法で今の力を手に入れた」

「……」

「臓器鍛錬」。自らの鬼道で霊力を操り直接鎖結と魄睡に負荷をかけること百五十年。雛森サンの霊力器系はその魂魄に不釣り合いなほど肥大化している。とても健全な状態とは言い難い」

兆候は既にあつた。以前の戦闘時に彼女が起こした自爆事故だ。

あれは崩玉の影響だけではなく、本来は起こり得ない霊圧と魂魄のバランス崩壊が引き金となったものである。彼女の卓越した霊力操作力が緩んだ一瞬に、その制御を離れた膨大な霊圧に魂魄自体が耐えられなくなったがために起きた、長年の無茶の弊害だったのだ。

そこに隙があると浦原は語る。

「もつとも、あの藍染が解りきった弱点をそのままにしておく訳がない。現にアナタの霊圧に前回のような不安定さは見えなかったっすからね」

睨み付けてくる女の苛立しげな視線を軽く流し、浦原が帽子の奥の目を鋭くする。

「ですので…逆を突きました」

「逆…？」

問いに反し、聡い彼女の顔は少しずつ驚愕に色付いていく。

「全ての靈魂は多種多様な能力を持つと同時に、その能力を制御し自滅を防ぐ防衛本能が備わっています。そしてその手段はほとんどの場合——」能力の抑制”ツス”

特に一度暴走で死にかけた彼女のような経験者は、自身の霊圧上昇には無意識に過剰反応してしまい、余分に力を抑えようとする。

前回の過ちを、自滅を防ぐための本能的な教訓だ。

「ツ、まさか……」

『私に何をした』……そう問いましたね、雛森サン。アタシがしたことは簡単な事ツス」

そしてその教訓が、彼女の枷となる。

「——アナタの霊圧感知に、自分の霊圧が暴走状態にあると錯覚させたんスよ」

男の言葉に雛森が大慌てで周囲、特に背後を見渡す。ふるふる震える彼女の後頭部からでも、その顔が焦燥に歪んでいるのは容易に察せられた。

「そ、そんな……一体どうやって！ 妙な術の気配はどこにも……」

「驚くほどの事ツスか？ これまで三回も対峙したんだ。雛森サンの霊圧だけに効果を限定した感覚攪乱結界を造るのなんて訳ない」

そして今の雛森は前回の自爆の教訓で、本能的に自身の膨大な霊圧を必死に抑え込んでいる最中。実際の霊圧はその抑制効果で”過多”どころか”平時以下”のレベルにあることを、掻き乱された彼女の霊力制御本能は気付けない。たとえ理性が真実に気付いて霊圧を上げようとしても、本能的恐怖がそれを拒んでしまうのだ。

「……舐められたものですね。霊圧を封じたおつもりですが、霊圧そのものを失った訳じゃありません。あなたたち元隊長二人くらいどうとでもなります……っ」

初めて、雛森が斬魄刀を正眼に構える。勝気な台詞に反し、全ての斬術の基礎たるその技術に縋らねばならないほど、女の瞳からかつての覇気は消え去っていた。

「せやなア、アンタアホみたいに強いし……俺と浦原二人だけじゃ足りへんなあ」

そこへ、今度は隣の平子真子が嫌らしく嗤う。そして「せやから……と一言前置いた、その瞬間。」

「——はん！ ハゲ真子も仕留めきれへんお前なんかにはウチがやられるワケないやろ、太眉毛！」

「——見世物としては上出来やな」

「——チツ、こういう茶番は苦手なんだよ」

「——そうかア？ ノリノリでやられたフリしてただろお前」

突如、倒れたはずの猿柿ひよ里、矢胴丸リサ、六車拳西、愛川羅武の四人が無傷の姿で、雛森の周囲を囲むように現れた。

斬られ落下したはずの彼らが居た地には、まるでデコイのように横たわる奇妙な金色の人形。それを見た雛森が一瞬口角を疼かせた後、驚愕に喘いだ。

「何……ですって……!?!」

「なんや、おかしいと思わへんかったんか？ 単純な力押しで前にアンタにボロ負けした俺達が、なーんも準備せずに戦う訳ないやろ」

彼女がもう少し聴ければ、仲間意識の強い彼らが同胞を斬られた時の些か薄情な反応に違和感を覚えただろう。身構え辺りを見渡す女を嘲笑い、平子が「敵さんが説明を……所望や、ローズ！」と遠くの街角へ声を上げる。

彼の声に応え、一同の頭上に新たな三つの人影が現れる。

”仮面の軍勢”の同胞、久南白、有昭田鉢玄、そして奇妙な金色の人形と巨大な両手を左右に浮かせるその男こそ、ローズ：
鳳橋楼十郎だ。

「……初めまして、お嬢さん。ボクの”演目”はお気に召していただけたかな？」

長い金髪の男がタクトを振るう。すると左右の人形たちがゆらりと縄状に崩れ、不思議な旋律と共に雛森の周囲を取り巻き始めた。

「これは…幻覚…？ 聴覚に作用する催眠…！」

「ほう、流石は藍染の愛弟子。この手の能力には明るいのかな？」

ニヤリと笑うローズは誇らしげに「その通り」と自らの正解の能力を披露する。

「ボクの操るものは”音楽”。人の心を奪い、魅了し、そして死へと誘うまやかしさ」

「…ッ」

「十刃が京楽さんに横取りされちゃったからね。暇な時間に浦原さんの協力であらかじめ周囲に幻を展開しておいたんだ。ああ、気付かなかったのも当然だよ。君の霊圧感知は全てこちらの意のままなんだから」

雛森の周囲を雷電が、濁流が、火炎が、砂礫が巡回する。恐るべき天変地異の只中において、彼女以外の全員が平然と佇み、各々の霊圧を爆発的に高めていく。

そして一斉に、その内なる虚の力を解放した。

「…かんにな、お嬢ちゃん。俺達ア藍染に”大事な用事”があんねん」

——前座のアンタに、これ以上付き合ってられへんのや。

さあ諸君、反撃だ。

俺達”仮面の軍勢”を安易に敵に回したツケを、存分に支払わせてやろう。

変貌イイイイ!

「——その話……本当なんだな……!?!」

戦いが始まってしまった。仮面の死神たちの猛攻に晒される少女へ駆け寄りたい想いを必死に押し殺し、僅かに残る理性で日番谷冬獅郎はこの状況を作った浦原喜助の制止に耳を傾ける。

標的の雛森桃を戦闘に拘束した今、男が少年へ決戦前に提案した極秘作戦についての相談を持ち掛けてきたのだ。

「ええ、ですがそのためには日番谷サンの力が必要です」

「くそっ……」

それはあいつの、雛森の冬獅郎への想いに懸けた作戦。ともすれば彼女の気持ちを踏み躪る方法だ。これ以上愛する幼馴染を傷つけない少年は齒噛みする。

否、彼が迷う理由はそれだけではない。

「…無理だ。今のあいつはもう、俺のことなんて…」

直情的な冬獅郎にも解る。決戦の大舞台で果たした再会。だが雛森桃は少年の存在に心揺れる姿は見せなかった。彼と目を合わせたのは一瞬だけで、張り付けたような邪悪な笑みで周囲を嘲笑うだけ。

しかし浦原は冬獅郎の言葉に笑みを浮かべる。

「それを聞いて安心しました。やはり彼女を止められるのはアナタだけッス」

「何だと…?」

「自己防衛ツスよ、日番谷サンと目を合わせないのは。雛森サンは未だアナタという幼馴染に強い気持ちをお持ちだ。それこそ藍染の洗脳、彼への忠誠が揺らぐほどに」

楽観論にも聞こえる彼の推理は甘い毒だ。今まで幾度と希望を打ち砕かれてきて尚、思わず縋りたくなるほどに甘い、罠。

「…時間がありません。決断をお願いします」

浦原の焦りに冬獅郎はギョツと彼へ目を向ける。ヘラヘラした態度、含むような胡散臭い笑み。出会ってから一月の付き合いで知らずの内にそんな底知れない帽子男へ救いを求めていた少年は、彼のらしくない態度に強い不安を覚える。

「な、何だ…？ まだ何か不安があるつてののか？」

「今の雛森サンは、あの藍染が決戦に参加させるほど”兵器”として完成した存在ツス。この程度の封印で弱体化させられるのは一時的でしょう」

苦い顔で「それにあの”読書家”も相当の曲者ですし…」と何かを言い淀む浦原。当然気が気でない冬獅郎だが、この天才の策も未だ万全とは言い難い状況だという事は理解出来た。

そして迷う少年を、戦局の変化が更に急かす。

「…！」

「な、何だあれは…!？」

そこで起きていたのは…

「くそっ…！」

以前の遭遇から三日と半日。知恵を出し合い練った策が成り、見事あの化物を封殺完了した平子真子ら”仮面の軍勢”ヴァイザードだったが、実戦は彼らの想定に反した波乱となっていた。

「ちよこまか逃げてんじゃねえぞ、オラアツ！」

「！ くっ…！」

「ほらほらほら！ 逃げてばっかじゃ藍染に失望されちゃうよ？」

優勢なのは間違いない。前回と比べ戦いになっているのは勿論、こちらの手数で敵を翻弄してさえいる。

「チツ、また例の残像や！」

「これで何度目だ…畜生ッ」

だが、決定打が入らない。掠り傷を増やすだけで、致命の一撃は悉くギリギリのところまで避けられる。

そんな時、戦場の端で動きがあった。

「———どうした、桃。その程度の塵芥、さっさと下しなさい」

苦戦する雛森桃の名を、ヤツが呼んだ。その不愉快そうな台詞に反し、随分と愉快そうな顔で。

果たしてそれが女の中での決め手になったのか。それまで逃げに徹していた雛森が一瞬の逡巡の後、何かを惜しむように自らの胸に手を当てた。

「……さようなら」

その時。平子には何故か、その顔がとても悲しんでいるように見え…

『な——!?!』

直後、女の胸元から淡い桃色の光が浮かび上がり、続いてそれを掻き消す黒くおぞましい霊力が立ち上った。

「な、何あれ…?」

「いや、それより彼女の雰囲気…」

ローズの指摘にハツと気付く一同。

彼らの見つめる先で、謎の黒光が収まった雛森がガクリと項垂れる。

そして顔を上げた彼女は、まるで人形のように虚ろな瞳をしていた。

『……ッ』

ゾツとする空気が辺りを取り巻く。ただの錯覚に過ぎないそれは、しかし生気を感じられない少女の言葉と同じく、寒気を覚えるほど冷たかった。

「——【縛道の八十一】重唱
断空聞塞」
だんくうこうさい

「ツ、なに!?!」

あり得ない事が起きた。全ての霊力を司る魂魄の霊圧感知が狂わされている状態で、雛森桃が霊術の奥義”鬼道”を行使したのだ。

「そんなバカな! 八十番台なんて今の状態のヤツに到底使える鬼道じゃねえぞ……!」

「…いえ、それだけじゃありません。あれは多重詠唱を一つの鬼道に纏めた全くの別物デス……! あんな若い死神がなんという術を……!」

「なに感心してんねんハゲハツチ! あいつ敵やで!」

「い、いやでも見てくだサイ、あの美しい言霊構成を……! 近いものでは大前田サンの”疑似重唱”でしょうカ……いやはやこの年でも勉強になり——」

「せやから感心すんな言うてるやろ!!」

突然敵の霊感攪乱の優位を失い混乱する”仮面の軍勢”。だが、四方を縛道の巨壁に守られた雛森は、その隙に次の一手を準備していた。

「——君臨者よ。血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ……」

霊子の要塞の中心で、女が破道を詠唱する。その鬼道構築の動きに淀みは無く、恐ろしい密度の霊力が術に練られていく。

「…蒼火の壁に双蓮を刻む……」

…ほうらんせいしゅう 炮濫洪洪燃ゆる揺光……

…はいてい 叢木燻れ、灰鼎煽げ、大望呆れず、双眸濁さず……」

「ツ、悠長にベラベラと! 何重詠唱する気やねん!」

「不味いデス、炎熱上級破道の三重詠唱! 特に最後のはとても不味い……!」

「ローズ! 今の内に卍解で水出さんかい!」

「無茶言わないでよ、鬼道にまやかしが効く訳ないって…！」

『—なら力づくで黙らせるッ!!』

使わせてなるものかと虚閃セロの総攻撃を仕掛ける。仮面の軍勢”全八名。されど奮戦敵わず。少女の改良鬼道【断空閘塞】は彼らの猛攻から見事主を守り抜いた。

「…赤赤琰しゃくしゃくえんせん閃穿せんせんつ劍先…」

…貴えんきに昇じやくる閻灼煌旭…」

—大火の淵ふちを遠天にて待つ—

【破道の七十二・双蓮蒼火墜】

—天座てんざの矛にて贄ねを別て—

【破道の八十・金剛爆】

—列ね委ねて彼の翡翠ひすいを見よ—

【破道の八十九・翠鳳旭來炎】

繰り出される青、赤、緑の劫炎。靈圧の大半を封じられて尚、雛森桃は”天才”と呼ばれた鬼道衆・一之組第三班班長。彼女の巨大な鬼道はその名の所以を誇示するかの如く、仮面の死神たちへ襲い掛かった。

「ヤバイよ何とかしてハッチ！ あの子より鬼道衆の席次上だったでしよー！」

「それを言うなら白ましろさんも同じ元副隊長でシヨク！ シンツ、やってみマス！」

だがここまで浦原にお膳立てされて相手に後れを取るなど許されない。鬼道戦なら鬼道戦と、樽のような巨漢の元鬼道衆副鬼道長・有昭田鉢玄が顔を引き締め術を練り上げる。

「…まずはそちらを貰い受けマス。」

—【操鬼併転】—

靈力を帯びた男の太指が雛森の蒼い炎塊を指すと同時。少女の破道がぐるりと反転し、並走する赤い火炎球に衝突した。蒼と赫の炎が爆ぜる。

だが火球は依然勢力を維持したまま。

「…ですが威力は弱めマシタ。靈力量も今ので把握済み。」

——”反鬼”【破道の八十・金剛爆】

続いて鉢玄が放ったのは同位の鬼道。相殺効果を付与した術は僅かな均衡の後、雛森の火炎球を消滅させる。

そして最後にして、最大の特技。

「…うう、いつぞやの鉄裁サンの逆デス…ええい、ままよ！

——【縛道の八十一・断空】

男が創造したのは、壁の如き霊圧の巨盾。そこに少女の放った翡翠の鳳が激突。凄まじい爆風が周囲を燃やし尽くす。

「ハッチいけそう!? なんか凄いいキビキいってるけど!」

「か、かなり不味いカモ…後述詠唱に切り替えマス…!」

理論上は彼女の巨炎鳥の突撃をギリギリ防げるはずの霊力壁。しかし追加の詠唱で硬度を跳ね上げても相手の破道が消滅しない。恐ろしく精密に言霊が紡がれた、感嘆すべき術だ。

それでも元No. 2の名は伊達に非ず。長い拮抗の末ようやく翡翠の鳳の形状が崩れ、鉢玄の【断空】を吹き飛ばす大爆発を巻き起こした。

辺りを呑み込む翠炎から瞬歩で逃れる仮面の死神達。振出かと身構える彼らは、されど町の焼け跡に佇む少女を見て息を呑んだ。

「——感じますか、日番谷サン。雛森サンの霊圧が明らかに復活しつつある…!」

浦原の険しい声色が、怒涛の展開に放心状態だった冬獅郎を現実へ引き戻す。意識を幼馴染の少女の霊圧へ向けると、確かに男が指摘する通りだった。

あれほどの鬼道を見舞っておきながら息一つ乱さず、雛森桃は能面のような顔で更なる鬼道を繰り返す。

藍染が、そして雛森自身が口にした”兵器”の二文字がチラつく冬

獅郎。

「ッ、勿体ぶつてねえで言え…！ 何だ、あいつに一体何があった…！？」

「…：おそらく崩玉の影響でしょう。このままだと皆さんと戦っている間に、あの時の様に雛森サンの魂魄が持たなくなる可能性があります」

言い淀む男へ「てめえが作った劇物だろ」と当たり散らしたい思いを呑み込み、少年は涙を堪えて雛森を見つめる。視線の先の無表情の彼女はどンドン”人”という存在から外れようとしていた。

時間がない。だが現状であいつを救える手段を持つ者は一人だけだ。

そして逡巡の末、少年は決断する。

…否、最初から選択肢など無かった。

「——わかった」

冬獅郎は浦原の手に浮かぶ鬼道の言霊体を引つ手繰り、自身の霊圧と馴染ませる。これで自分があいつに触れれば術が発動するらしい。それは小さな、だがとても大事な希望の温もりで満ちていた。

「…感謝します、日番谷サン」

一言、そう残し。斬魄刀の【紅姫】を解放した浦原喜助が戦いに突入した。冬獅郎は彼らと戦う少女を見つめながら、幾度と深呼吸を重ねる。

「…り…」

脳髓が震える。腹が煮える。

前回とは違う。奈落のような絶望の中に、一筋の光が差し込んでいくのだ。

「…ひなもり…」

奮い立て。

救うんだ、俺が。

「…雛森…！」

今度こそ、あいつを…
助けるんだよ！

「——雛森ツツ!!」

町中に轟く決意の喚呼。

隊長にまで上り詰めた少年の一途な想いが、血みどろの死戦を氷結させる。

そして長い沈黙の後。遂に少女がその淀んだ双眸を開き、少年を…見た。

「俺が…お前を…」

止めてやる!!」

愛する想い人を救うため。かくして日番谷冬獅郎は彼女へ、剣を向ける覚悟を決めたのだ。

「——止める…?」

偽空座町の上空に緊張が走る。

日番谷冬獅郎と雛森桃。護廷隊隊長格の皆知る、悲劇に引き裂かれた二人が戦場で初めて言葉を交わす瞬間を、誰もが固唾を呑んで見

守った。

「あなたが、あたしを…？」

少女の声は、平坦だった。戦闘前のおぞましい化物の顔とは違う、無機質な大きい琥珀色の瞳が少年を見つめる。

「——日番谷隊長」

「…ツ、雛森…！」

かつて愛おしげに呼んでいた愛称も忘れ、人形のような少女が言葉を重ねる。少しずつ、二人を繋ぐ糸を絶望の黒に染めるように。

「それが出来たとすれば、あたしは藍染様にとって一切の価値が無くなってしまいます」

ブワツ…と彼女の体から桃色の霊力が立ち上る。浦原喜助の奇策で封じられているはずの力が。

「霊圧を封じればあたしに勝てる？ 数で袋叩きにすれば倒せる？ 前座のあたしに構っていられる暇はない？ …結構な事です」

——死神は一人で戦う種族ではないという常識が抜け落ちていくことを除けば、ですが。

その瞬間。一同の目に映る雛森桃の霊力の塊が、人の形を象り…命を得た。

「…」紹介します。あたしの相棒——【飛梅】です」

現れたのは、一人の幼い美姫。

長い垂髪に目刺しの前髪を目元に垂らす、可愛らしくもどこか暗い印象を纏う公卿風の娘が、ゾツとするほど美しい笑みを湛えていた。

「斬魄刀との付き合いは死神人それぞれですが、あたしと飛梅は最初から互いの名を知る一心同体も同然の魂の半身でした。あたしとの繋がりが非常に強い彼女は、あたしの能力、技術のほぼ全てを代行することが出来ます」

『な…！』

「そんな…！ 斬魄刀が斬術以外の力の行使に持ち主と協力するなんて…」

護廷、仮面の軍勢、皆一様に自らの斬魄刀へ目を向ける。雛森桃の言っていることは彼らの常識ではあり得ない事だった。特に虚化能力を持つ平子達は彼らの気難しさと気高さに長年悩まされてきたが故に。

「…なるほど。魂魄に対し過剰に成長した靈力器系が、魂魄の一部である斬魄刀との対等な力関係に上下の差を生み出した訳ですか…」

浦原の推察が雛森桃の”特異性”の真実を暴く。全ては彼女の生まれ持った靈力操作の異常すぎる才能が齎したものだ。封じたはずの靈圧が復活しつつあるのも、斬魄刀が中継して靈圧を持ち主に還元しているからだろう。

そして最初から半ば屈服した状態で誕生した斬魄刀ならば、少女の余裕の正体は、やはり…

「さて、皆さんの勘違いをもう一つ正させて貰います」

変わらぬ無表情で斬魄刀の刀身に手を翳した雛森桃を、美姫が包み込むように抱き締める。その瞬間、少女の靈圧がまたもや、だがそれまでとは桁違いに跳ね上がった。

「崩玉の靈力を封じ、袋叩きにすればあたしに勝てるとお思いのようですが…本当に、今まで一度も疑問に思わなかったんですか？」

「く…ッ」

「虚^{ホロウ}から進化した破面^{アランカル}が、それも隊長格複数で挑んでようやく相手取れる十刃^{エスパーダ}が何故、天敵の死神であるあたしを上司として認めているのか…を」

肌身に突き刺さるような威圧感に思わずたじろぐ一同。靈圧を、崩玉の齎す強化の大部分を封じて尚、感じる力は圧倒的な強者のそれを。単純な強弱なら戦闘直前のほうが上だったにも拘わらず、無機質な目を染める明確な戦意が彼女を遥かに恐ろしく見せていた。

「あたしは”破面軍軍団長”。その役目は破面たちの統率です。そし

てあの凜猛な破面たちが、十刃たちが、一人残らずあたしのような小娘に従ってた理由は、ただ一つ……」

——彼ら破面の全軍九十六騎より、あたし一人の方が強いからよ。

その答えを聞いた者たちが、一斉に息を呑んだ。

「見せてあげましょう、飛梅。崩玉の靈力を封じただけで勝った気になつてる不思議な人たちに、あたしたちの力を……」

—— 卍 解 ——

—— 羽 衣 紅 梅 鈴 鈴 ——

悲想イイイイ！

シヤラン…と、美しい鈴の音色が響き渡る。

淡紅の梅の花弁を乗せた、東風の音色。その鮮やかな色彩が宙に散る空座町に、一人の少女が舞い降りた。

桃色の光が象る天衣無縫の打掛。

芸妓の二輪編みで纏めた濡羽色の黒髪。

煌々と彩られた白い死覇装の乙女は、美しい羽衣を纏い、神秘の調を奏でる者。

その時。戦場の皆一同は共に心を一つとする。それはまるで、伝承に伝わる梅の精…

——天女のようにだ、と。

「……三つか。全力で当たれなくてごめんなさい、飛梅」

透き通る鈴音の音が鼓膜を震わせる。ハッと我に返った日番谷冬獅郎の目に、少女の羽衣の端に連なる四つの大久寿鈴が映った。

だがそれらに皆が目を奪われる中。幾人かが雛森の握る宝剣を注

視する。

始解の四つから更に枝分かれした七支の内、三つが微かな桃色の光を宿していた。少女が述べた数と同じだ。

そしてそれらの光がゆらゆらと霊圧の紅炎を育み…

「不味い！ 皆サン離れてくだサイ!!」

「ッ！ 皆、我が明王の後ろへ！ 卍・解ッ!!」

——黒繩こくじょうてんげんみょうおう天譴明王——

『!?!』

直後、真つ先に反応した粕村左陣の卍解の奥で、その巨大な鎧武者共々焼き尽くす大爆発が巻き起こった。

「が……あ……」

「な、何が起きた!?!」

凄まじい灼熱が皮膚を抉る。爆風に吹き飛ばされ死に物狂いで態勢を立て直そうとする護廷十三隊と仮面の同胞達。

だが冬獅郎らがその余裕を手にする事はなかった。

暴れ回転する視界の端に、あの梅焰の紅色がチラと映る。その紅色が一瞬で世界全てを呑み尽くし、眼球が沸騰するかの如き煉獄が全身を襲った。

追撃だ。そう理解した時、冬獅郎の卍解【大紅蓮氷輪丸だいくれんひょうりんまる】の氷鎧は既に主を守り、悉く靈子の蒸気となっていた。

「全く、山爺じゃないんだからさ……」

仲間の戦慄の声に内心同意するのは神速の二番隊隊長・碎蜂。その身軽さで唯一まともに今の爆発に対応できた彼女は、辛うじて事態を確認してしまっただが故に一同の中で最も強い恐怖を覚えていた。

”劫火の小娘”……ッそうか、こいつがあのだ十刃の言っていた……」

先ほどの強敵バラガン・ルイゼンバーンとの戦いに良くも悪くも大きな影響を齎したその蔑称の人物。碎蜂について四半刻前の死闘の記憶が蘇る。

『——許さん！ 許さん！ 許さんぞ！ 雌蟻が、死神風情がこの

儂に一度ならず二度までもその忌々しい爆炎を見せ付けるか!!」

碎蜂の斬魄刀【雀蜂雷公鞭^{じゃくほうらいこうべん}】は一撃必殺を体現する卍解だ。それも毒や因果操作などの陰湿で暗殺向きのものではない。純然たる破壊力で以て敵を粉碎する、霊子噴進弾の一撃だ。

碎蜂自身は使い勝手の悪い、文字通り切り札として仕方なく行使した卍解だったが、奇しくもそれが敵の十刃へ想定外の挑発となっていた。

攻撃を喰らった直後、以前の超然とした態度を豹変させたバラガンは、まさしく敵を殺すだけの狂った獣だった。逃げ惑うだけの大前田はもちろん、巧みな鬼道で翻弄する有昭田鉢玄も眼中になく、ただ碎蜂だけを狙う死の権化。幾度と肝を冷やし、命を諦め、それでも彼女が生き残ったのは、不本意ながらあの太夫、鉢玄の機転のお陰と言えよう。

『…フン、儂自身の力がこの身の終焉か……存外、満たされるものよ…』

鬪體十刃の【古い】の力に侵された自らの片腕を、当人の体内へ空回しさせる。碎蜂を囚に自由に動けた鉢玄の起死回生の一手は、あの破面の抱える複雑な劣等感からヤツ自身を解き放つ事にもなったらしい。

もつとも、敵の心境など何の興味もない隠密機動総司令の碎蜂にとって重要だったのは、あの傲慢なバラガンが最期に己自身ではなく己の力のみを誇るほど、そのプライドを粉々に押し折った例の”小娘”の強大さにあった。

そしてその悪寒は現実となり、彼女は強敵十刃が「軍団長」と崇められる少女の力を知る…

「くっ…火の玉だ！ 七支刀から放たれる火炎球に追尾能力を確認！」

『…!!』

離反者・雛森桃の卍解から僅か数瞬で味方は壊滅。その中、未だ戦意を残す仲間達に少しでも勝機を見せようと碎蜂は叫ぶ。

「鈴からじゃねえのかよっ！ ヤツが操っている痕跡は!!」

「ない！ 朽木の千本桜景巖せんほんざくらかげよしの同系統と推察！」

「なら安全圏の接近戦だ！」

打てば響くような隊長格達の攻略案は流石の一言。だがそれは破れかぶれの希望論に過ぎない。

「ッ、不味い！」

「止めろお前等！ ヤツの思うツボやッ!!」

始解の雛森と苦い戦闘経験のある浦原らが必死に咆える。前回と今回、確かに相手の霊圧は大きく弱体化している。それでも最大で十倍近く戦闘力が跳ね上がる卍解ではその枷も五十歩百歩。

そして少女の【羽衣紅梅鈴鈴はごろもこうばいりんりん】は、始解から爆発的に攻撃力が上昇するパターンだと一目でわかった。

「こいつは白とハツチましろの分だ、クソガキ!!」

…卍・解!!」

——鉄拳断風てっけんたちかぜ——

「往くぜ天狗丸！ 天までぶっ飛べや、天女ちゃん!!」

——火吹の小槌ひふきこづち——

「事情は細事。敵なら死ね、雛森桃!!」

…尽敵螫殺じんてきしやくせつ」

——雀蜂すずめばち——

仲間の想いを拳に乗せる者。怒りを棍棒に乗せる者。近接戦に長けた碎蜂らが三方より少女へ突撃する。

迎撃の炎の玉は飛んで来ない。やはり雛森桃の卍解は接近戦にも対応できるのだ。

「仕方ないッスね…!!」

啼け」

——剃刀紅姫かみそりべにひめ——

「チッ、あのわからず屋共が…!!」

…ろれ倒」

——撫逆でなかさ——

制止が間に合わぬと判断した浦原と平子が即座に援護態勢に移る。

上下左右、感覚感知、ありとあらゆるものを自在に反転させる平子の斬魄刀の能力。悪魔的頭脳を持つ藍染には僅かな内に攻略されてしまったが、あの世渡り下手そうな少女なら多少は拘束できるだろう。浦原の霊圧刃の弾幕、平子の催眠。だが二人に援護された碎蜂ら各々の渾身の一撃が雛森桃に辿り着く、その寸前。

「……触れると危ないですよ」

ふわりと三人の攻撃が掠った少女の天衣が、主を中心に放射状の花を散らし爆発した。

『な——ぐああアアアッ!!?』

碎蜂らの胴を散弾の如き閃火が穿つ。速度だけなら師たる”瞬神”夜一すら凌駕する彼女でさえ避けられない攻撃。

体が抉られた身で霊子の足場を作る余裕などなく、碎蜂は同時に仕掛けた二人共々激痛に叫びながら空下の町へと落ちていった。

「なん…でや…?! あいつの攻撃は全部逆様んなつとるはず…!」

「…彼女、いえ彼女達を侮ってはなりません。一度戦場で使った搦手は二度と効かないと割り切るべきでしょう」

平子真子の斬魄刀【逆撫】の能力は嗅覚がトリガーとなる催眠だ。だが故に少女の正解ならば、触媒の芳香を爆発で霧散させる事も容易だろう。

小賢しい能力など圧倒的な暴力の前では一切無力。そんなわかりやすい理不尽に平子は臍を噛む。

「…遠距離もあかん。近距離も自殺行為。搦手も火力でねじ伏せられる。どないせつちゆうねん…」

『……ッ』

打つ手なしの現状に護廷十三隊、”仮面の軍勢”皆の胸が絶望に呑まれていく。

だが、そこで一人だけ動く者がいた。

「—————まで……雛森……ッ」

擦れる声。振り向き平子たちが見たのは、半身が火傷に覆われた見
るも無残な姿の冬獅郎だった。

「ダメです日番谷サン、まだ機は熟しては…」

立つのもやつとな彼を浦原が慌てて下がらせようとするも、その耳
に周囲の声は聞こえていない。

「…とめなきや…なんねえんだ…」

冬獅郎はふらつく体で少女に近付く。彼女はそれを変わらぬ無表
情で見下ろしていた。

…なんて、なんて顔をしてんだよ。

少年の髄に、かつての思い出が走馬灯のように過る。嬉しかった
事。悔しかった事。恥ずかしかった事。悲愴の色に染まる前の、冷た
くも温かい、冬の炬燵のような日々。

「…ッ、わかってんだ…よ。…おれじゃ、おれの力じゃ…おまえをとめ
られねえ…ッ」

絞り出すような屈辱の声が口から零れる。双匣の丘でも、先日の十
刃襲撃の時も、自分は負け犬のように咆えて、今みたいにおまえの前
に情けなく平伏すだけだった。

力の差など、もう嫌と言うほど理解している。

「だけど…そうじゃねえ…っ。できる、できねえじゃねえんだ…」

いつぞやの虚しい意地が少年の剣に力を与える。身を削り、魂を削
り、それでも足りない力を、己の全てで以て満たさんとする。

震える足が何だ。焼け落ちそうな腕が何だ。

枯れた霊力が、飛べない氷翼が、折れた剣がなんだったんだ。

「…やるん、だよ」

そうだ。出来る出来ないじゃない。己にはもう、諦めの悪さしか
ないんだ。

それまで捨てたら、もう…

「…俺達じゃねえよな…」

——”氷輪丸”。

その瞬間。少年の肩に手を置く、一人の青年の幻が現れた。氷のよ
うな青白い長髪を風になびかせる、美しい偉丈夫だった。

いつからそこに居たのか。それは多分、最初からだ。

冬獅郎に、彼の方へ振り返る力は残っていない。しかし、そこで自
身の魂の半身が、己を支えてくれている事だけは感じていた。

いつもあの巨大な氷の竜の姿で彼の前に現れる、一人だけの魂の相
棒が。

「……ッ、見ろよ氷輪丸。あいつの相棒の……」飛梅”の勝ち誇った顔
を……」

後ろで氷輪丸が鎌首を擡げるのが解る。視線の先は冬獅郎と同じ。
その可愛らしい顔を上気させ、驕り昂る嘲笑の目で見下ろす、長髪の
天女。

雛森桃の斬魄刀だ。

「……お前も悔しいだろ。冰雪系最強と呼ばれるお前が、流刃若火でも
ねえただの炎熱鬼道系斬魄刀に嗤われるのはよ……」

『……………』
相棒が眉を顰め頷くのが解る。この俺の半身なのだ、負けず嫌いで
あるなど自分が一番よく知っている。

「……………雛森ツツ!!」

そして、冬獅郎は必死に声を張り上げる。悲愴で、強がり、情け
ない声。

それでも、その声は確かにあいつへ届いていた。

「さっきので俺を倒さなかった事を後悔しやがれ……ッ!」

「……………!」

焼け爛れた喉に滲む血が、冬獅郎の呼吸を妨げる。

体の奥底、魂の更に奥から引き千切り、剣の刀身に纏わせた血反吐

も同然の霊圧。あの時と同じ、己の中で大事な何かが削れて行く感覚も、最早冬獅郎には慣れたものだ。

「見せてやるよ、これが俺達の意地とプライドの…」

全力だアアアアアアツ!!」

それは氷竜が授けた、最強の力の断片。未熟な少年の身で使えばどうなるか彼自身もわからない、最後の鬼手。

—— 氷 界 絶 空 ——

冬獅郎の折れた剣の切っ先から、世界が凍っていく。地も建物も、空も大気も、空間さえも。完全ならば四界全てを凍らせると相棒が豪語する力も、忸怩として今の少年に出来るのはここまで。

そんな彼の魂の籠る死力に、雛森桃がその琥珀の目を僅かに見開いた。

そして。

「——慕い慕えや百華の魁…空鳴る玲鸞とどかば何処…」

少年の想いに答えるように、彼女の歌が刀身の光る三支にこれまでにない桁違いな霊力を纏わせ…

「…立ち立つ紅の迎えずは…我ぞ焼き上ぐ天火なりなむ…」

震える鈴音と共に、力の粹を解き放った。

—— 大鈴飛梅・鶯殲火 ——

千を、万を超える火鳥の巨群が甲高い囀りを上げながら四面八方へ飛翔する。一羽一羽がああ梅焰を内に秘めた、爆炎の鶯。

それは最早蹂躪を超えた、天災だった。

冬獅郎の紅蓮の世界を、桃色の爆炎が悉く舐め尽くす。六花一粒残さず、この世の全てを壊し尽くす煉獄の劫火が。

能力が特殊なのではない。ただ火力で、手数で、圧倒する。何人たりとも近寄る事許さず、如何なる攻撃も正面から撃ち砕く、圧倒的な

暴力。

まるで空に浮く要塞か戦艦のように鎮座し、可憐な天女は町中が墮星跡にも等しく消し飛ぶまで、偽の空座町へ破壊の嵐を撒き散らした。

どれほどの間、意識が飛んでいたのだろう。辛うじて動く体を持ち上げ、冬獅郎は想い人の姿を探そうと周囲を見渡す。

そこで見したのは、まさしく地獄だった。グツグツと煮え滾る真っ赤な大地。立ち上る黒い煤煙は空を覆い隠し、砂なのか灰なのかかわからない白い粉塵が雪の様に舞い落ちる。

そして見つけたあいつは、十丈たらずの距離を置いて、冬獅郎の前に佇んでいた。

「——見事だったよ、桃」

パチパチと鷹揚に手を叩く音が、溶け焦げた巨大な窪地に木霊する。自慢の”兵器”を称賛し、その後ろに降り立った巨悪——藍染惣右介だ。

もつとも、王にとってこの結果は何の新鮮味のない、出来て当然の塵殺。

「……だが、甘いな」

故にか、藍染は辺りに感じる幾つもの霊圧の存在に不満を示すのだった。

「君は私の持つ中で最も殺傷能力に優れている手札だ。だがその力に反し、君の剣は未だ一度たりとも血に染まった事はない」

男の言葉に、冬獅郎は初めて周囲に散らばる味方の弱々しい気配に気付く。

ヤツの言う通りだ。双匣の丘の時も、初の成体破面による威力偵察の時も、前回の十刃の襲撃の時も。彼女は容易く冬獅郎達の命を奪える力を有しておきながら、一度として誰かを殺した事はなかった。今も護廷や仮面の死神達の戦意を奪えど、その命まで奪った者は一人もいない。まるで、最後の一線を守るかのように。

それが、彼女の最後の良心であるかのように。

だが、巨悪はその最後をも、少年の幼馴染から奪おうとしていた。「彼らに情けをかけるべきではない。そこに転がる者達は、君が集め、束ね、そして愛した破面^{アランカル}達を殺した敵だ。そんな連中に与える慈悲など、君はその心に欠片も残してはいけない」

その愛した破面軍の主力にして最も少女を慕っていた女十刃を斬ったのは誰だ。自身の業事を柵に上げ、藍染が飄々と彼女の胸に憎しみを植え付ける。

「さあ、不要な過去との決別の時だ。君の捨てるべき心を感わす…」

——日番谷冬獅郎の命を絶ちなさい。

誰かが息を呑む音が聞こえる。勝敗の決した戦場に緊張が走り、冬獅郎は思わず少女の顔を見る。

「……はっ」

だが継るような彼の想いは、心の髄まで巨悪の道具となり果てた、最愛の彼女に届かない。

一步、一步。細い足が徐に、少女を冬獅郎の下へと近付ける。微かに聞こえる足音が、少年に残された僅かな希望の残滓すら砕いていく。

…雛森。

少女の濁った琥珀の目に、自分への想いは塵一つとして見つからない。当初の狂気も、以前の悲痛も、かつての喜色もなく。虚ろな力の塊のみとなり果てた、藍染の人形。

…雛森。

そして、彼女の七支の宝剣が、目の前で空高く刀身を擡げた時。冬獅郎の頬を、冷たい水滴が伝った。

…ああ、本当に。

「…ひな…もり…」

お前はもう、そこに居ないのか——

『——シロちゃん？ 起こしちやったかな』

何故、今になって思い出す。

あれから何年が経ったのだろうか。彼女にとってはありふれた日常的一幕であろうあの日の夜の事は、冬獅郎にとって、忘れられない幸福と後悔の一頁だったのだ。

『…何してんだ、こんなトコで』

『ん、ちよつとね』

それは冷え込む師走の晩。ふわふわと新雪が舞う、少年の誕生日の

夜の出来事だ。

厠に行こうと布団を出た先で見た、一人縁側に座っていた幼馴染。月光の中のあいつは、らしくなく大人びていて、そして本当にらしくなく——美しかった。

『…寒くねエのか?』

別人のような彼女への戸惑いを隠し、ぶっきらぼうに尋ねる冬獅郎。そしてふと自ら口にしたその問いが、彼の胸をチクリと刺した。

——あんだ、そのままだとお婆ちゃんを凍死させちゃうわよ。

つい去年の事。家を訪れた一人の女死神に、彼はそう言われた。靈力に目覚め、その制御ができず知らぬ間に家族を苦しめ殺そうとまでしていた事實は、幼い冬獅郎の心に大きな闇を宿す。

それからと言うもの、少年にとってあの凍て付く靈力を想起させる物事は全て、複雑な思いを抱かせた。キラキラと輝く綺麗な雪も、握ってチャンバラごっこが出来る屋根の氷柱も、肌を撫でる心地よい冬の冷気も。

だが。

『ちよつとね。でもシロちゃんが隣にいるからあつたかいよ』

気が沈む冬獅郎へ、少女は笑顔でそう言った。優しく、温かく、どんな深い闇も照らしてくれる、冬夜の満月のように穏やかな笑顔で。

あいつは、いつも俺の心を救ってくれた。何気ない一言でも。そして、覚悟を決めた神妙な懇願でも…

—— お願いします！ お金なら幾らでも払いますから、この子を助けてください…っ！

あの時も、そう言ってこいつは例の死神に頭を下げた。普段はぼわぼわアホなのに、こういうときだけいつも真っ先に冬獅郎のために身を差し出すのが、雛森桃という女だった。

呆れるように「死神になればいい」と笑う女死神。その言葉に泣き

ながらへなへなと安堵に崩れ落ちるあいつを見た時、そして直後ハツと顔を上げ、以前「死神なんて嫌いだ」と言つた少年を不安そうに見上げて来た時、冬獅郎に断る選択肢など存在しなかった。

『……アホ桃のクセに』

『む、なによいきなり』

我に返り、そつぽを向く自分。あいつの笑顔に心動かされてしまったことを誤魔化すように。

その時、しばし頬を膨らませ拗ねていた雛森が、空を見上げた。ハツと横目で見たその姿に、冬獅郎は目を奪われる。

『……あ』

微かに舞う粉雪の中、ぼんやりと月明かりを浴びて淡く光る少女の横顔。見惚れるほど可憐で、されどどこか寂しく儚くて。そんな神秘的な彼女の姿が、まるで天の誘いで遠くへ行こうとしているように見えて……

『——来年……』

思わず、呼び止めるように冬獅郎は彼女へ”何か”を伝えねばと声を上げてしまった。

『来年、俺は死神になる』

あの時、あいつはどんな顔をしていたのだろう。

俺に傷付いて欲しくない。不幸になって欲しくない。どこまでも弟を守る優しい姉でいようとしていたあいつは、きつと悲しんでいたのだろう。

『ッ、だから俺がお前より強くなったら——』

……なあ、雛森。

もし俺が、その言葉の続きを言っていたら。

俺は今、笑顔で。

お前の剣を、この胸に受け入れられたらだろうか……

「――どうした、桃」

声が聞こえる。憎くて憎くて堪らない男の、冷たく、不快げな声が、愛した少女の名を呼んでいる。

なんでヤツが、藍染がそんな冷たい声であいつを呼ぶ。

「……………」

ぼたり、と。何かが頬に落ちる。

閉じた瞼を開ける冬獅郎。風の音、差し込む光、絶えたはずの胸の鼓動。

なんで、俺はまだ生きている。

…わからない。ぼやける視界の、濡れた扁桃の隙間に差し込む日輪が眩しくて。

「……………ヤだよ…」

草花の泣くような声が聞こえる。聞こえるはずもない、か細い声

が。微かな吐息が頬を撫でる。そこに籠る何かが、己の瞳の追うべき焦点なのだと、震える本能は知っていた。

意識を手繰り寄せ。光をかき集め。散らばる音を、揺蕩う匂いを、感じるその気配を。朽ち果てそうな体に鞭を打ち、無我夢中で束ねたその先に。

少年は、見た。

「——こんなの……やだよ……」

ぼたり、と。何かが頬に落ちる。頬から、頬に。

その目に、小さな光が宿っていた。宝剣を振りかぶったまま自分を見下ろす、孤独で小さな少女の、片目の奥に。

能面のように多くの大切なものが抜け落ちた顔を、一筋の涙が絶え間なく伝う。それはまるで彼女の中に残されている最後のヒトの残滓、精一杯の心の雫が上げた悲鳴のようで。

「……あたしは、ただ……みんなを、守りたくて……死神になったのに……」

その薄い桃色の唇が一つ一つ言葉を紡ぐ度、仮面が剥がれていく。人形が、人へ、少年の恋した少女に戻ろうと。

「……ひ、な……」

零れる喘ぎ。見開く瞼。絶望の暗闇に差し込むその光が、あいつの想いが冬獅郎の胸に、消えたはずの火を灯す。

そんな彼へ、少女が震える手を伸ばした。

いつものもの、かつてのような弟分の先を行き、その手を引くためではない。安心させるように彼の頭を撫でるためでも、危険から遠ざけようとその体を引き寄せるためでもない。

いつだって彼を守ろうと身を挺し、彼のために巨悪に頭を下げたあ

いつが、雛森桃が。初めて――

「……シロ……ちゃん……」

――たすけて……

日番谷冬獅郎へ、救いを求めた。

その時の感情を一言で表す事は、稀代の文学家でも不可能だろう。驚愕、凄愴、歓喜、奮然。正しく万感の思いが止めどなく湧き上がり、冬獅郎の未熟な心から溢れ出す。

感動に打ちのめされ、伏した地で震えるばかりの彼の目元から、堪えきれない涙となって。

「……そうか」

だが、その時――

――残念だ。

感涙に滲む冬獅郎の視界の中で…

少女の胸が、赤く染まった。

雛森イイイイ？

「みんな…待ってる…！」

三界を隔てる虚ろの狭間、ガルガンタ黒腔。

仲間を救い出し、皆の帰る場所である空座町を護らんと霊子の足場を駆ける人間の青年——黒崎一護は、同行者の四番隊隊長・卯ノ花烈より多くの事を聞かされた。

”重霊地”空座町の価値とそれを狙う敵の真意について。

諸悪の根源・藍染惣右介の斬魄刀の能力について。

その能力の支配下にならない自分が尸魂界の切り札足り得る事について。

そして。

「——そんな事が…」

「はい。雛森元副隊長は五十年前の霊術院時代に、当時の阿散井副隊長、吉良副隊長、ガルガンタ檜佐木副隊長、蟹沢三席、青鹿五席ら院生を虚の襲撃から守り、ここ黒腔へ一人連れ去られた経験をお持ちです。おそらくは襲撃そのものが藍染惣右介の策。そして雛森さんはその時に彼の魔の手に堕ちたのでしよう」

一護が迷いつつも尋ねたのは、あの謎多き恩人の女死神——雛森桃について。よく四番隊へ回道を教わりに来ていたらしく、卯ノ花は思いのほか彼女について詳しかった。

「あの子はとても多忙でした。護廷では副隊長、鬼道衆の精鋭部隊では三席に相当する第三班班長を兼任。暇を縫っては私の隊を訪れ癒

術を学び、女性死神協会ではよく華道や料理の指南をお願いされました」

「…すげえな。その裏で藍染の暗躍まで手伝わされて…：体が幾つあってもたりねえだろ、それ」

「ええ。もし私たちの見た雛森さんが【鏡花水月】の幻でないのなら、彼女が藍染に加担させられた悪事はそう多くないはず…：そうであって欲しいと皆が願っています」

顔を伏せる卯ノ花を一護は肩越しに一瞥する。

彼の胸にあるのは安堵。己の虚化の制御を助け、幾度と黒崎一護という自我を守ってくれた、不思議な恩人のおねえちゃん。そんな彼女が多くの人達に慕われている事実は、青年の正義を迷いなきものにする。

安堵序でに、一護はふと、自分と同じように雛森桃を助けようとしている一人の少年について気になった。藍染に彼女が連れ去られた時、そして数日前の再会時に酷く曇った顔をしていた最年少の隊長――日番谷冬獅郎だ。

「日番谷隊長とは家族同然に流魂街『潤林安』で育った幼馴染だそうです。そちらは貴方と親しい白道門番のいっかんさか一貫坂しだんぼう丹坊さんの方が詳しいでしょうが」

「丹坊丹坊が？ …いや、そう言えば雛森さんってあいつと同じで流魂街のヤツらと仲良かったっけか」

当時は囚われのルキアの事で頭がいっぱいだったが、思い返せば確かに自分達は何度かあの人ゆかりの人物や場所と縁があった。

一度記憶を整理しようとする一護を見て、卯ノ花も幾つか彼の知識を補足する。多くは考察、推察の域を出ないが、青年には十分納得がいくものだった。

雛森桃が死神になったのは、冬獅郎を筆頭に潤林安の皆を守るためだけではなく、自らの強大な力を律するためでもあること。

そこで最初に彼女へ手を差し伸べたのが、不運にもあの藍染惣右介であり、ヤツの強さと、その力を隠し皆に好かれる生き方に憧れを覚えてしまったこと。

そして、尸魂界を離反する際、自らの忠誠の対価に冬獅郎たちの安全を願ったこと。

「…あの子は自身の力に反し、とても謙虚で心優しく、賢く、そして臆病だったのでしょう。力ある者の孤独に耐えられず、しかしその力こそが大切な者を守るのだと知っている。一步間違えれば彼女のようになっていた者を、私は何人も知っています」

「……」

一護は思わず押し黙る。チャドや井上らと異なり、幸か不幸か特別な能力に目覚めなかった高校の友人たち、有沢竜貴、浅野啓吾、小島水色らと疎遠になったこの半年。雛森桃のジレンマは彼自身も抱えるものだった。

あの人にはいたのだろうか。自分にチャドたちがいてくれたように、雛森桃には共に戦ってくれる仲間が。

——我等が軍団長閣下に不滅の栄光を！ この命こそ我等の最後の忠義也！

——十刃はあの方の最も側にいられる場所。あそこは堪らなく心地よかった…

——生きることに意味があるのだと、あの方ならそうお考えになるはずだから。

地底路の守護者アイスリンガー、トレス・シフラス三桁の巣のドルドーニ、眼帯の十刃から守ってくれたネル…

彼女は、一体どんな想いで自らを慕う破面達アラシカルを率いていたのか。

——それは、おねえちゃんのお守り。

——ごめんなさい一護くん、今はこのくらいしか…

——そう。やっぱりあなたはまだ、半人前なのね。

あの七年前の梅雨の日、あのウルキオラ達の威力偵察の時、あの襲撃後に十刃を回収しに来た時…

彼女は、一体どんな想いで俺を、黒崎一護を助け、力を付けさせようとしていたのか。

——ごめんね…シロちゃん…

——あなたは、生きて。

——来たら、あなたも倒します…っ！

あの双匣の丘での別れ、あのグリムジョー襲撃の夜に残した言伝。あの三日前の戦闘で皆を蹂躪した時。

彼女は、一体どんな想いであいつに剣を向けて…

「…悪イ、卯ノ花さん」

「黒崎さん…？」

無言で黒腔ガルガンタを駆けることしばらく。一護は一つの宣言でその沈黙を破った。

「藍染を倒さなきゃなんねえのは俺だ。俺の住んでる町を、竜貴達を殺そうとしてるあいつは、俺が倒す」

「……」

「…だけど、あの人を助けんのは、多分俺じゃない。雛森さんを助けんのは、俺じゃダメなんだ」

脳裏に浮かぶのは、あの辛気臭そうな顔をしていた氷の少年。ルキアを守れなかった修行前の自分によく似た、焦燥と無力感に吞まれる己の現身。

「日番谷隊長を信じておられるのですか？」

「さあな。別にルキアや恋次みてえに親しい訳じゃねえし、凄え斬魄刀を持つてる天才少年だったのを人伝に訊いただけの知り合いだ」

「…なら何故？」

卯ノ花が目を細め真意を問う。

何故、彼を信じるのか。そんなの、あの人の話をしてる時の彼の目を見ればわかる事だ。

「あいつの魂が『俺が助けるんだ』って、そう言ってたよ」

一護の答えに卯ノ花は目を見開いた。

彼女の頭を過るのは、この人間の青年が駆け巡った八月初週の大激戦。彼はその身一つで護廷の猛者たちと戦い、霊界最高意思決定機関『中央四十六室』の決定を覆し、本当に朽木ルキアを救って見せた。そんな奇跡の男が口にする、日番谷冬獅郎の決意。彼はおそらく誰よりもあの幼い隊長の想いを強く感じたのだろう。

「卯ノ花さんも一緒に特等席で見させてもらおうぜ。あいつが…」

——初恋の女子を救い出す、男らしいカッケエ姿をよ。

ニツ、とキザつたらしく笑う青年。その顔に目をぱちくりさせた卯ノ花は、一拍置いてコロコロと笑い返した。

「ふふっ……ええ、そうですね」

全く。こんな、自分の百分の一も生きていない幼子に励まされるなんて。

知らずの内に寄りかかってしまいそうになる、どこか不思議な魅力を持つ青年。彼と斬り合えればどれほど愉しいのだろう、と疼く体を抑え込み、慈愛の微笑を浮かべる剣の鬼は、この男の想いに懸けてみる事にした。

「さあ、黒崎さん。もうじき偽の空座町です」

「…ッ！ 応！」

デスクロール
解空の管理者、涅マユリと連絡を取り、開いた空間の光へ、二人は飛び込んだ。

そこで彼らが…否、黒崎一護が目にした夢幻無き真実は…

「——なにやってんだよ冬獅郎オオオオオオオッ!!」

百五十年の狂気と絶望に染まった、悲劇の最高潮だった。

ぬちや…と。

生温かいナニカが日番谷冬獅郎の顔にかかる。護廷十三隊の隊士として、席官として、隊長として、これまで幾度と触れ、感じ、舐め、嗅いだ、死の匂いだ。

それが何かを脳が理解した瞬間、少年の体は反射的に戦闘に不要なあらゆる感情及び生理現象を抑制させた。

果たしてその咄嗟の行動に何の意味があったかなど、涙が乾いた両目が映したのを見た冬獅郎にはどうでもいい事だった。

「あ、え………」

消え入りそうな声が聞こえる。己の視界に飛び込んできた光景を現実と認識させる、絶望の音。

「……ひ……な、もり……？」

冬獅郎の目の前に、胸元から鈍色の切先を生やす雛森桃が佇んでい

た。

白い死覇装、新雪のような肌に映える悪夢の真紅。何が起きたのか
すらわからない少年の耳に、あの男の声が木霊する。

「——残念だよ、桃」

変わらぬ愉しそうな顔で「君はもう少し利口な子だと思っていた」
と優しく少女の肺から剣を引き抜く藍染惣右介。

噴き出す彼女の鮮血が冬獅郎の顔を濡らした。

「なん…で…」

『……………』

少年の擦れる声が、虚ろな護廷の仲間達の意識を呼び起こす。自力
か、あるいは天女の慈悲か。破壊の規模に反し、命を奪われた者は一
人もいなかった。

「…下劣な」

「結局…彼女も捨てるのか…！ 藍染惣右介…ッ」

平子真子、浦原喜助、京楽春水、碎蜂、狛村左陣…。現世と尸魂界
の垣根無く、未だ戦意を保つ強者達が立ち上がる。

「シロ…ちや……………」

だがその時、彼らの眼前で目を疑う事が起きた。

『——なっ…！…消えた?!』

少女が崩れ落ちると同時、血だらけな彼女の姿が…塵となって掻
き消えたのだ。

まるで、最初からそこに”雛森桃”などという人物は存在しなかつ
たかのように。

「ひ、な…もり…？ おい、どこだ雛森…！ 雛森イイイツ!!」

必死に首を振り想い人の姿を探す冬獅郎。だが辺りの焼け焦げ抉
れた大地と、そこに残る真っ赤な血だけが、彼の愛した幼馴染の残し
た全てだった。

「くっ、藍染ッ！ 雛森をどこへ遣ったアアア！」

「フフ……さて、どこかな？」

「てめえええエエエエエ!!」

大切な女を連れ去った憎き外道へ目掛け、冬獅郎は烈火の怒りを叩きつけようとする。どこにそんな力が隠れていたのか、死力を尽くして敗れたはずの少年は何故か、幼馴染の命の危機に再度戦う力を取り戻していた。

まるで、それが彼の成すべき定めであるかのように。

「まさか……【鏡花水月】!?!」

「ッ、待つんだ日番谷隊長!」

「馬鹿野郎! 一人で突出するなッ!」

周囲の声も、浦原の冷静な考察も耳に届かない。

怒りに身を任せた上段の袈裟切り。だが冬獅郎の全力の剣は羽を抓むが如く藍染の指先に捕らわれた。

「ぐ……ッ! くそオ……!」

「愚者の歩む道は、全て強者の描いた絶望と悲劇で彩られている。それこそが君と桃の二人が共に歩むたった一つの道なのだよ、日番谷君」

「ぐあアッ!」

巨悪が振るう腕に投げ飛ばされた冬獅郎は、背後の京楽らの助力で何とか立ち上がる。だが剣を握り直した彼は脇目も振らず再度藍染へと突撃。

「ッ、落ち着くんのだ日番谷隊長! 味方の被害が大きすぎる! ここは一旦みんなの態勢が整うまで——」

「邪魔だ、退け! 雛森の居場所を吐きやがれ、藍染えええン!!」

京楽の制止を振り切り、宿敵へ剣を突き立てようとする冬獅郎。そんな彼を、巨悪の呆れと嗜虐の混じった憎い瞳が見つめていた。

「…やれやれ、わからない子だ。それともただ直視すべき真実を、私と言う明確な暴力の捌け口への猪突猛進で振り払おうとしているのかな?」

——君の軽忽な行動が、私の桃を血で染めたという事を」

「ッ!! ふざけんな、誰がてめえの桃だ!! 雛森はてめえのモンじゃ

ねえッ!!」

何度も何度も敵へ剣を振り下ろす冬獅郎。

あいつが血を流したのは一切合切がこいつのせいだ。先ほど胸を貫いたのも、崩玉なんて代物を埋め込んで暴走させたのも。全て。全て。

雛森はこいつのものではない。こんな腐れ外道の手に堕ちるなど断じて許さない。

あいつは、俺の…俺だけの…!

「それこそが哀れな幻想なのだ、君はまだ理解できていないようだ」「何だと——ぐッ!」

だが冬獅郎の我武者羅な連撃は容易くあしらわれ、彼の小さい身体は一気に地面へ弾き飛ばされる。

「所有とは、その存在を自らの庇護下に置く事を指す。常に桃に庇護されてきた”君”が、彼女の所有物であるならまだしも、その逆はあり得ないんだ」

受け身も取れず痛々しく咳き込み呻る少年へそう言い残し、藍染は半歩前へ進む。その僅かな動きは、背後から仕掛けた平子真子、京楽春水の両者の攻撃を嘲笑うように空振りさせた。

「つたく、随分日番谷君を揶揄う事に熱心じゃないの…! 何か理由でもあるのかい?」

「自慢の”桃”が自分以外の男のために泣くんが気に入らへんねやろ! 男が男に女の話でちよっかい出すんは嫉妬か嫁自慢やって旧石器時代から相場は決まってるねんで!」

渾身の刺突、斬撃、能力を悠々とあしらう藍染に挑発を投げる二人。だが男はそよ風を浴びるような涼しい顔で平子達を嘲笑う。

”嫉妬”、”自慢”……そんな言葉で己の無知を恥ずかしげもなく晒すのは実に君らしいな、平子真子」

「ハッ、なんや藍染! 凶星かいな?」

「そう見えたのなら、やはり君は私の幻を熟知り顔で連れ歩いていた百年前から何一つ進歩していないと言う事だ」

「——ッ、おんどれ…!」

思わず青筋が浮かぶ平子真子。その忌々しい失態の借りを返すためにも彼はここにいた。だが冷静さを奪われかけた平子をすかさず京楽春水が援護する。

「でもボクとしても君がここまで桃ちゃんに執着してるのは予想外だよ……！ 一体彼女の何にそこまで惚れこんでるんだい、惣右介君？」
「京楽隊長。残念だが、君があの子の特異性を知るには既に時を逸している。そしてたとえ知ったとしても、君に出来る事など何もありません。かつて私の要の闇を照らす光になれなかったのと同じように」

「……言うじゃないの、彼を悪に引き摺り込んだ元凶がさ……！」

ああ、全く。これだからこの男はやり辛い。京楽は相手の急所を抉るような話術に臍を噛む。

実は彼は藍染の部下、東仙要に対して一つの負い目があった。あの善良な男を悪へと墮とした事件に関わる事だ。

無論京楽に非は一切ない。だが東仙が藍染に従い尸魂界を離反した時、そして彼が狛村達との戦いでその最期を迎えた時、胸に宿つたやるせなさが京楽の嘘偽りない本心だった。

ならば、桃ちゃんもそうなのだろうか。要君のように、誰かのお節介が巡り巡って彼女の不幸を煽る結果になってしまったのだろうか。

一瞬にも満たない須臾とは言え、ふと考えてしまうほど、美人に弱い京楽は雛森桃の凄惨な悲劇にその心を大きく揺さぶられていた。

そんな彼と平子達を見下ろし、藍染が自身の心中を語る。

だが暗喩に満ちた男の言葉は謎めいていて、そして何故か……聞いてはならぬと本能が訴えているかのような戦慄を覚えるものだった。

「彼女が私にとって何であるか……いや、雛森桃がこの世の全ての者達にとつて何であるか。その断片を表す言葉は数多あるが、何れ一つとして正解ではない。それこそが我等の生きる三界が、あの子の存在を持て余している事実を示唆しているのだ」

……何だ、この男は一体何を知っているのだ。

だがその真意を問い質すより重要な事が冬獅郎にはあった。胸に穴が開き、今も命の危機に瀕しているであろう、大切な幼馴染の居場所をヤツに吐かせる事だ。

「ッ、きつきから訳わかんねえ事をべらべらと……！ そんな事のために雛森の人生をぶっ壊したのか!? あいつにあんなに血を流させたのかッッ!!」

「勿論だ。それが彼女へ通すべき私の義理だからね」

「義理……だと……!?!」

あいつを傷付ける事の何が「義理」になると言うのか。だが冬獅郎がそう怒鳴る直前、藍染が「ああ、そうだ」と彼へ振り向いた。

「義理のついでに……君には一つ、謝罪を伝えて欲しいと桃から頼まれていたんだ」

「……ッ!」

ゾワリと肌が粟立つ。瀧靈廷の清浄塔居林での時とよく似た、醜悪な三日月の弧を描く唇が、男の顔にへばりついていていた。

そして、心の底から愉しむように、巨悪が無垢な少年へ謝罪する。嗤いながら「すまない」と、前置いて……

「——彼女が君に一度として見せた事のない、雛森桃の心と体……その至るところの数々を、私には許してしまった……とね」

その時。

おそらく、最初にその言葉の意味を理解したのは背後の大人達だったのだろう。子供の無知か、はたまた本能的な現実逃避か、何を言われたのかわからずきよとんと呆ける冬獅郎の背に、ブワツと彼らの異様な激情がのしかかった。

嫌悪、憐憫、義憤。だがそんな大人達の反応が、少年の僅かな困惑を晴らしてしまう。

日番谷冬獅郎は護廷十三隊の隊長だ。子供ながらにして大人の世界を生きる彼は、当然様々な知識を断片的であれば知っている。

何故、碎蜂が嫌悪の感情を？ ヤツの言葉はあの冷徹女が顔を歪め

るほどのものなのか？

何故、京楽が憐憫の感情を？ ヤツの言葉はあの食わせ者が感情を乱すほどのものなのか？

何故、狛村が義憤の感情を？ ヤツの言葉はあの義に生きる男を怒らせるほどのものなのか？

ヤツに許した…至るところ…心と体…俺には見せた事のない…

見戯の糸遊びのようなそれらが一つ一つと繋がっていく度、少年の臍腑に熱が沸く。ぐつぐつと煮え滾る地獄の釜の様に。

「——あ…あ、あああ、ああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして大人達に遅れること僅か半瞬。巨悪の言葉を理解してしまった日番谷冬獅郎の視界は、烈火の赤一色となった。

「ッ、あかんチビ助!」

「乗るな日番谷隊長! わかりやすい挑発だ!」

冬獅郎に、己の命も同然に彼女へ惹かれる日番谷冬獅郎に、最愛の少女を穢された憤怒、憎悪を堪える事など出来はしない。視線の先の世界には、憎い憎い仇敵ただ一人。

「——止めろ! 何やってんだ冬獅——」

遠くに聞こえた最後の制止の言葉を振り切る。

そして少年の刃は持てる限りの暴力でその切先を巨悪の心臓に突き立て…

「死ねええええええええええ藍染ええええええええええんン!!」

恋焦がれるほど愛おしい、柔らかな肉を貫く感触と共に、藍染惣右介を串刺しにした。

『!?!』

戦場に衝撃が走る。まさか、あんな感情任せな突撃を凌げなかった

と言うのか。あの藍染惣右介が。

冬獅郎を除く誰もが同じ思いで、舞い散る血花に包まれる二人を注視する。

だが。胸を突き抜かれて尚、藍染は薄く笑っていた。

「な…あ」

その変化は、まるで目の前の真実を彼の脳の隅々に染み込ませるかのように、ゆっくりと現れた。

『まさか…ッ！』

男の姿が、桃色の花びらとなって散り始める。左上半身から少しずつ、少しずつ。その花びらの人形の中身を明かしながら。

最初に現れたのは、華奢な左肩。蠟のように白く、生気に欠けた肌につき、膨らんだ胸元を隠す白い衣服が晒される。

そして現世のドレスに似た、その血染めの死覇装が露わになった時。

「……言っただろう、日番谷冬獅郎？」

はらり、と。

冬獅郎の目の前で、彼の良く知る艶やかな黒髪が風に舞った。

「——雛森桃に血を流させるのは、いつだって君なのだ…と」

「——シロ…ぢや…」

ゴポリと湿った、嫌な声が自分の名を呼ぶ。
剣から伝う心臓の鼓動、柔らかい肉の感触。
その先に、あいつが居た。

「雛…森…？」

剣を手放し、彼女を抱き締める。あの双匣の丘で失ってから、やつと叶った、二度目の触れ合い。

だと言うのに。望んだ歓喜も、幸せも、一つとして少年の胸の内には湧いて来なかった。

「雛…も…り…？」

その体を抱えたまま、冬獅郎はゆっくりと焼け焦げた地面へ降りる。足下の町を消し飛ばすほどの力を秘める者とは思えない、羽のように軽い体だった。

「あ…はは…」

少女の青白い顔に、笑みが浮かぶ。悲しそうで、辛そうで、何もかもを諦めてしまったかのような、空虚な笑み。

「こう…なっちゃ…ん…じゃな…いか、って…おも…て…た…」

消え入りそうな声で「悪い事いっぱいしちゃったから」と、少女が細かい言葉を紡ぐ。そんな意味の解らない懺悔の言葉を、穴の開いた肺から絞り出すように。穴の開いた心臓から溢れる血と共に。

…なんだ、これは。一体何が起きているんだ。

止まらない。抱えた背中からその生温かさが流れ出るにつれ、彼女の僅かな体温が消えていく。

「…ありが…と…シロ…ちや…」

少女の手が優しく頬を撫でる。昔のあいつの、あの元気な温かさはどこにもない、冷たく、震える、弱々しい手。

そして…

「ごめ…んね——」

だいすきだよ。

そう言い終えた少女の手が、冬獅郎の頬から離れた。

冷たい木枯らしが抉れた大地を吹き通る。頬に残ったその僅かな温もりが消えた時、ようやく少年は、腕の中で重たくなった彼女の名を呼んだ。

「雛森…？」

閉じた瞼に浮かぶ涙が、風にキラキラと揺れている。魄脈は消え、心脈は止まり、息は無い。

そして、彼の欲する返事も。

「…おい…雛森…」

何度、何度と揺すっても。

嘘だろう、目を覚ませと呼びかけても。

頼んでも。

縋っても。

非力で精いっぱい笑顔を浮かべたまま、彼の胸元で項垂れる少女は動かなかつた。まるで本物の、可憐で美しい人形のように。

「あ…あ…」

なんだ、これは。

「…ああ…あ…」

この両腕の中に眠るモノは、一体何なんだ。

「…ああああ…」

俺は、あいつを救わなくてはならないこの戦場で、今、一体何を抱き締めているんだ。

『——あなたに守ってもらおうかな…』

ふと、あの時の記憶が頭を過る。全てが壊れる前の、何気ない日常の一頁。

いつだって強かったあいつが、どうしようもなくなった絶望の果ての最後に縋った、小さな小さな希望。

それを裏切られて。大切な仲間達へ剣を向ける道へと突き落とされ。崩玉の力を行使する兵器へとなり果てる、その最後の瞬間に。

もう一度だけ縋った、最後の希望を…

その果てに、ようやく取り戻した”幸せ”は——物言わぬ骸となり果てていた。

ガバ イイイイ!

(痛つつつてええええええええけどシロちゃんの輝きしやいこおおおとおお!!)

激痛とニチャ味に絶叫しそうになるのを何とか堪え、あたしことリヨナの女王雛森桃ちゃんは回道で患部を麻痺させ演技を維持する。

「シロ…ちや……」

” 台本 ” の台詞を言い終わり、打ち合わせ通りにどちやつと地面へ崩れ落ちたあたしは、時を待つ。

ま、まだだ…まだ笑うな…こらえるんだ…! し、しかし…
そして待つ事僅か。一日どころか一瞬千秋の想いで倒れたフリをしていると。

『なっ…! 消えた!?!』

ツ、きた! きたきた鏡花水月発動きたあああああ!
もう辛抱堪らんとあたしは微かに残る理性でヨン様をチラ見し、彼のアイコンタクトを受け取った瞬間。

「——ツキやああああああああああああああああああああああああああああああほおああああああああああ!!」

美少女が上げてはいけない、百五十年分の想いの籠った歓喜の大絶叫を上げた。肺に穴あいてる状態で。

「はああああああんシロちゃああああああんっさいっつこおとおおとおおお!! もつとー! もつとよシロちゃん! もつと見せて! もつとあなたの輝きをあたしに見せてシロちゃああああああんほおあああああ!!」

この時のために用意した「シロちゃん専用エリクサー」を即座に取り出し、鏡花水月で消えたあたしをキョロキョロ探してるシロちゃんのお口にポイ。これで瀕死寸前の彼の霊圧は超回復! 違和感も完全催眠で気付けないという寸法だ。

そう! ここは鏡花水月の能力下にはないあたしだけが好き勝手にきる本性暴露のテーマパーク愉悦シエーUSJ。シロちゃんは勿論、あの天才浦原さんや、あたしの桃玉を崩玉と勘違いして狙ってる一〇さえも気付けない、完全催眠の外の世界なのだ。

あたしはきやいきや桃ちゃんボイスの黄色い声で狂喜乱舞し、シロちゃんのパーフェクト曇り顔を遠目に観賞する。

すると、一人はしやぐあたしの耳に、愉しそうなバリトンイケボが聞こえた。

「——さて。一先ずは『おめでどう』と言っておこうか、桃」

ハツと振り返ると、そこにはこの愉悦天国構築を全力サポートしてくれたあたしの天使が、くっそニチャリ散らかした悪魔のような顔で佇んでいた。あたしより酷い顔してるかも…いや、流石にあたしの方が酷いか。失敬。

「あいぜんたいちよおとおお!!」
「おつと」

感極まるあたしは覚えてたの響ソニード転でヨン様の懐に突撃する。ありがとうございます藍染隊長、最高のアシストにもう何度顔面崩壊しそうになった事か! ガバも幾つもフォローして貰っちゃって、ホント頼りになりすぎる男! 素敵! 抱いて! 「お父さん」って呼んで

もいいですか!?

「フフ、どちらも遠慮しておくよ。それより、その傷のまま浦原喜助の結界内であまりはしゃがない方がいい。今の君は不滅となった超越者だが、霊圧は霊術院卒業直後のレベルにまで封じられているようだ」

桃ちゃん渾身歓喜ダイブを超体幹で難なく受け止めてくれるヨン様。けどどつれないエセ伊達男と一緒に抱き合いキャツキャツしてくれず、ジロジロとあたしの弱体化した魂魄を観察し「流石の頭脳だ」と浦えもんを遠目に称賛するだけ。

：なんか一人ラリってるのが凄いい恥ずかしくなってきた。

「こ、こほんっ！ と、とにかく大変ありがとうございました！ 最後の仕上げも是非お願いしますっ！」

笑顔で「勿論」と頷いてくれたヨン様の胸元からパツと離れて、深々と一礼。熱くなった顔を彼から隠しつつ、一人寂しく遠くのグリッターシロちゃんを堪能する。

本心ではもう今すぐ死んでもいいくらいの満足感だけど、なんと、これから更にメインディッシュが来てしまうのだ。ここでお腹いっぱいになってはあまりに勿体ない。

ほら。遠くのお空の何も無い所で剣を振って、幻のヨン様へ罵倒を投げる全身キラッキラ状態の曇りシロちゃんをご覧なさい。見ているだけで頬が痛いほどの三日月笑顔になっていくでしょう？ あれこそが彼の最大の魅力。あたしが欲した、結露した湿度の輝きなのよ
：（恍惚

「さあ、そろそろ黒崎一護がやって来る時間だ。準備は出来たかい？」
「あ、ちよ、ちよちよっと待って。今ほっぺを戻し…もど…も、戻らない…!?!」

う、嘘でしょ待って待って！ あんだけ自己暗示したヒロインムーヴすら崩れるほど!? ヤバイ、これシロちゃんのメンタルより先にあたしの本性がバレるかも…!!

シロちゃんの原作を超えた至高の輝き、長年の悲願成就の達成感、勝利を目前にした優越感。このトリプルパンチは想像以上に強烈

だった。

：ヤベエどうしよう。ここからシロちゃんブスリ♂と、浦原さんがあたしから崩玉（桃玉）を奪還しようとする時の月光蝶変化で「雛森イイイイ！」×2を回収するつもりだったんだけど、この精神状態で例の変化をやるとシロちゃんもあたしもそれぞれ悲劇と愉悦でオーバーキルされる可能性が出てきてしまった。

それに、それ以前に桃玉自身にも少し問題が…

（なんかあたし以上に感動して放心してるのか、さっきから桃玉の反応がないんだよね…）

彼女（達）も浦原さんの桃ちゃん特攻結界でかなり堪えたらしいが、さっきの「こんなのヤだよ…」台詞までは元気にニチャってたはず。あいつら生死がない思念体だしクマムシよりしぶといから心配はしてないけど…

気絶してるなら変化は無しにするよ？ いいのね？

飛梅もそれで大丈夫？

『うふ、うふふ、うふふふふふ…』

：ああ、こっちは氷輪丸フルボツコの余韻を噛み締めてるのね。今後の事とかどうでも良さそう。

と言う事で、桃玉には悪いけど当人（？）の会議不参加により”桃玉変化”はなし！ 当初の予定通りの「ごめんね、だいすきだよ」台詞でメとします！

終わり！ 閉廷！ 以上！ 皆解散！ どんどんぱふぱふー！

「ん…んむ……よしっ！ ほっぺ大丈夫です、藍染隊長！」

むにむに頬の固まった筋肉をほぐし終え、あたしはヨン様にGOサインを出す。

そして待つ事しばらく、ガルガンタ黒腔が開く前兆を感知。かなり遅れたよ
うだが、ようやく我等の主人公チャン一のエントリーまで秒読みだ！
「ではそろそろでじっとしていなさい」

「はいっ！」

ヨン様のお言葉通り定位置に付く。これであとはシロちゃんを誘導し、あたしをヨン様の幻と被らせてくれたら、原作名シーンの再現だ。

しかし…

(ああ、そうか。これで最後なのか…)

愉悦も。

悪役ロールも。

原作イベント再現も。

沢山の思い出が頭を過る。愉しかった事、恐かった事、嬉しかった事、恥ずかしかった事、大変だった事。そして、前回、今回の最高のシロちゃん輝き舞台の事…

気付けばあたしは、隣の大恩人へ叫んでいた。

「——藍染隊長っ！」

鷹揚に「何だい？」と首だけで振り向くラスボス。

お礼に、とは言わない。これはあたしにライバルでいて欲しいヨン様への、あたしの義理だ。

「勝負です、藍染隊長っ！」

「…ほう？」

今度は体全体をこちらへ向けてくるヨン様。

…もしここで、あたしがヨン様へのお礼に、一護を…原作BLEACHを犠牲にすると言えば、きつと彼はあたしに失望するだろう。”
対等”とは互いの正義の衝突によってのみ成立する、とかオサレな言い回しを口にして。

だからこそ、彼の愉悦サポートへの感謝は、彼好みの別の形でお礼する。

——原作より強い黒崎一護との決戦だ。

「ツ、既にご存じでしょうけど、あたしは黒崎一護を強くしてます！
あなたの言う、あたしの”戯曲”の彼以上に！」

出来るだけ胸を張り、尊大桃ちゃんドヤ顔で宣言する。彼へ送るこ
れ以上の言葉は不要だ。

以前までのように、ただの原作再現のためだけではない。ヨンを
満足させるためという理由、いや解釈を加える。

無限の向上心で常に高みを目指す男へ、彼の生きる世界の”主人公
”を喚ける。両親の出会いから才能、経験に至る全てをあたしが用意
し育て上げた、必勝の運命を持つ”原作主人公”という理不尽。それ
を原作から更に強化した、桃ちゃん完全謹製の黒崎一護だ。

ヨン様が黒崎一護の英雄譚『BLEACH』そのものを打ち砕き、真
の高みへ登るのか。それとも主人公の定めに、そしてあたしのBLE
ACH愛の前に敗れるのか。

どうですか藍染隊長。前回の雛森クロンがあなたのあたしへの
挑戦状だったのなら、これがあたしの、あなたへの挑戦状です…！

『……』

見つめ合う互いの間に風が吹き通る。

その彼は、こちらの意図を察してか。ほんの僅かな眉の動きの後。

「———そうか。それは実に、実に愉しみだ」

あの初対面の虚^{ウヘコムンド}圈面接の時を遥かに凌駕する凶悪な霊圧と共に、
とても嬉しそうな邪悪顔で笑い返してくれた。見ればわかる、もう完
全に霊王の事とか眼中にない。

…全く、ひねくれ者め。普通の人なら恩を仇で返すような事なの
に、この負けず嫌いな上昇志向厨にとっては”超えるべき壁”を用意
される方がよほど嬉しいらしい。

彼の桃玉、あたしの原作再現。やっぱりこの男と良好な関係を維持
するには、こういう互いを試すような、恩の貸し手・借り手の双方に

独自の思惑がちゃんと存在する曲者っぽさが必要なのかも知れない。だからあたしも、「一護くん勝つてね♡」と「原作以上の名勝負にしてね♡」の本音は外さない。

あたしが本物の崩玉を持っているのだと浦原さんたちに誤認させるため、ヨン様があたしの悲劇のヒロインムーヴを助けてくれているのと同じように。

「では桃、君の百五十年の野望を遂げて来なさい」

「…ツツ、はいっ!!」

彼の後押しを受けて、あたしは宙に立つ。

眼前では、ヨン様の幻に何かを言われたのか、半狂乱に叫びながらこちらへ突撃してくるシロちゃん。おおう、なんとという憎悪と憤怒。いつもこれをぶつけられてるヨン様って実はDMではなからうか。

でもでも、この憎しみが一気に絶望に変わるギャップと言うのも乙。いや、むしろ最高と言うべきかもしれない。それを想像するだけで、あたし…もう…!

…ああ、愛しいあたしのシロちゃん。あたしはここよ。

そう、そのまま真つすぐ。そのまま来て。

来て。

来てっ。

来てっ!

来てえっ!!

最愛の幼馴染に看取られ笑って逝った少女も、彼女に目の前で先立たれた少年も。その胸の内を思う者は、改めて心を一つにする。

『——藍染ツツ!!』

救えなかった落胆。仲間の悲愴。同情。憐憫。それら全ての悲しみが、疑い無き諸悪の根源の存在に導かれ、正当な怒りへと豹変した。「何たる悪魔の所業！ 外道の為す事か！ 貴様はそれでも人か!？」

藍染惣右介ツツ!!」

「可哀想に、彼はまだ子供だつてのに…!」

「…言葉など不要。今すぐここでその屍を晒せ!!」

義憤に、仲間の仇討に立ち上がらずして何が護廷か。激戦に次ぐ激戦にふらつく体に鞭を打ち、死神達が一齐に嗤う巨悪へと剣を振るう。

だが、そんな彼らの影に隠れ、異なる動きを取る者がいた。

「彼女を私わたくしの下へ。最善を尽くします」

一人は黒腔ガルガンタより舞い戻った四番隊隊長・卯ノ花烈。回道の權威たる彼女は、泣き叫ぶ同僚の少年の横で己の為すべき事を為そうとする。

そして同じく、自らの使命を果たさんとする者がもう一人。

「落ち着いて聞いてください、日番谷サン…! 彼女は死んでない。いえ、死ぬはずがないんす」

倒れた少女が司る劇物の生みの親、浦原喜助だ。

「崩玉です。部分的であろうと崩玉と融合を果たした魂魄は、魂魄自体が崩玉となる。死神を超越した高次元存在へと生まれ変わった雛森サンを、斬魄刀で殺すことは不可能なんすよ」

「ッ、ではまだ彼女は助かると…意識を取り戻せると言う事ですね?」

訝しむ卯ノ花へ男が返したのは、一筋の希望。そしてその希望が、壊れた一人の少年の心に、確かな再生の火を灯す。

「——だず…が…る…?」

目は涙で腫れ、顔は涙に塗れ、血の気を失い、瞳の焦点は崩れたまま。それでも少年——日番谷冬獅郎は、男が口にしたその言葉に力なくも死に物狂いで縋る。

「だずがるのか…? ひなもりは…ひなもりはたすかるのか…!」

奈落の暗闇に垂らされた蜘蛛の糸。放してなるものとみつももなく浦原にしがみ付く彼を責める者などいない。

だが。

「命だけなら、と言うのが正しいでしょう。ですが根本的な解決とはなりません」

「いのち、だけ…? どういう…どういうことだ!? 雛森は助からないのか!」

半狂乱に陥る彼へ、問題は別にあると浦原は事実を突き付ける。

「彼女の魂魄から崩玉を分離しない限り、雛森サンが元の生活に戻る事は永遠にないでしょう」

その言葉で大きく揺れる、少年の瞳の微かな光。だが絶望に落ちて行く彼へ、鬼才は「ですが」と向き直る。一つだけ、全ての願いを叶える方法があるのだ、と。

それは…

——崩玉の摘出だ。

「おそらく、雛森サンが極度に弱体化している今が最後のチャンスでしょう。この機会を逃すと崩玉が学習を終え、更なる融合の深化を遂げてしまう」

「…ッ！」

「もちろん摘出自体が危険な賭けツス。あまりに不確定要素が多すぎる。科学者としておすすめは出来ません」

布帽子の奥で目を細め「それでもやりますか」と浦原が少年に問う。そこへ、ジツと聞きに徹していた卯ノ花が不愉快そうに割り込んだ。

「私が許可を、いいえ、命じます。やりなさい、浦原喜助」

「卯ノ花サン…?」

「全く、貴方と言う人は。心痛める日番谷隊長にこれ以上何を背負わせようと言うのですか。人命を繋ぐのは私共四番隊の役目。責は全て私が負います」

彼女は正しくこの男の内心を読んでいた。

崩玉を創造し、それを悪しき者の手に奪われた大失態。同時に護廷十三隊も四十六室も信用できない。ならばこそ浦原は、護廷隊長の冬獅郎から言質を取り尸魂界ソウルソサエティの口出しを最小限に止め、この崩玉問題を自身の手の内で収めようとしているのだ。

そしてそれは利己的な理由だけではなく、今の中央四十六室の惨状を考えた上の最善策でもあった。

「……失礼。過ぎた真似を致しました」

「いいえ。あの事件から百年、藍染惣右介の陰謀を見抜けなかった我々護廷の不甲斐なさを思えば当然の心。だからこそ四十六室の詰責の矢面に立つのは、当時を知らない日番谷隊長であってはならないのです。鉄火場において真っ先に人心を捨てる者に、人は救えませんよ?」

「…いやア、耳が痛いツスね」

肩を竦めながら「それも科学者の性なのでしょうが」と苦笑する卯ノ花。そして万感の思いに狼狽する冬獅郎へ微笑んだ。

「雛森さんの魂魄は、私が必ず助けます」

護廷最高の癒師の言葉を疑う事など出来はしない。涙ながらに頷く彼の決意を合図とし、遂に天才・浦原喜助が動き出す。

「…では直ちに取り掛かります。ご両人、お覚悟を…!」

「手段はどのようによ?」



雛森桃の魂魄は、世にもおぞましい実験により。
一つではなかつた事だ。

『うふふふふひひひひひ』
『ハアハアハアハアハアハア』
『シロちゃああああん』
『もつともつ……あ、あれ?』
『あ、霊圧動かせるようになった?』
『動かせるね!』
『—そんなことよりシロちゃんが!』
『ああつ、浦原さんが!』
『シロちゃんのメンタル回復させてる!』
『シロちゃんの曇り顔があ!』
『でもあたし達を甘く見ないでよね!』
『我々にはまだアレがあるのだ!』
『シロちゃんの輝きは消えぬ!』
『何度でも蘇るのだ!』
『では予定通りに?』
『月光蝶いつちやう?』

「月光蝶であああるッ!」

「月★光★C H O オオウツ!」

「それ全部違うネタ……」

「白竜ママ…パパ?」

「公爵でハゲだからパパよね?」

「あ、あなたなんてことを…!」

「蟲に墜ちてまでハゲの呪縛を…」

「悲劇の父を持つ月の蝶に変☆身!」

「お姉さまー!」

「おねーさまー」

「変化指示をお願いします!」

「……」

「……あ、きたきた」

「なんて?」

「”非常事態に付きOK”だつて」

「えっ? どう言うこと?」

「浦原パルプンテがなかったらダメだったの!」

「そんなあ…つて、ん?」

「浦原さんがまた何かやろうとしてる」

「今度は何?」

「——崩玉(笑)を取り出したとか?」

「——雛森桃の魂魄を分離する?」

「——そう…(無関心)——」

「——もう融合終わってて無☆理!」

「——N D D ?——N D D ?——」

「——ほーん…ん?——」

「——え、それ不味くないかな?——」

「——えっ、なんで?——」

「——いやほら、あたしたちって……」

「——お姉さまのクローン(笑)だね——」

響き渡る絶叫の質が変わる。一つ、また一つと、同じ声の悲鳴が重なる様に増え、気付けば呻る霊圧の暴風すら掻き消す、百を、千を、万を越すおぞましいソプラノの大合唱となっていた。

そして、その悲愴な讚美歌が最高潮に達した時。

「な、何だあれは…!?!」

”ソレ”は、少女の背中から現れた。

衣類より剥き出しのそこから、悲鳴に紛れた異音が零れる。

ボコボコ、グチャグチャ、ズルズル。あらゆる生理的嫌悪を掻き立てる硬質で水質な音を撒き散らしながら、真っ白い塊が伸び出たのだ。

大きな卵にも似た物体。二重の殻の半分が割れ落ちたような、中心線に沿う突起と穴、左右対称な二つの窪みを持ったナニカ。まるで人の頭部を思わせるその石膏らしき塊は、正しく、冬獅郎の良く知る――

雛森桃の頭部を象っていた。

「…あ、ツは…?」

それが象る正体を認識した冬獅郎が、おぞましきから思わず少女の体を投げ捨てなかつたのは、偏に彼女への底なき愛だろう。

だが、故に哀れな恋する少年は誰よりも間近で、この世で最も大切な想い人の変容を見てしまう。

『……!!?』

少女の背の中から現れたのは、頭部だけではなかった。

頭があるなら首が、肩が、腕が、胸が。まるで薄い膜を指の一本一本にまで至る全身に張り付けたような白亜の姿の、起伏に乏しいなが

”
■
■
”

悲鳴の大合唱が靈子の爆風となって周囲を吹き荒れる。

悲痛に苦しんでいるようにも歡喜に狂っているようにも聞こえるそれは、まさしく世界の終わりを告げる、黙示録の怪物の咆哮。人という矮小な存在ではどうする事もできない、天変地異の産声だった。

「おい浦原！ なんやあれ!? あれもあんたが言つとつた崩玉の影響なんか!?!」

「……わかりません。あんな……あんなもの……ボ、アタシの知るどの研究資料にも載ってない……! 崩玉の力かどうかすらわからない想定外極まる事態です……!」

「わかりません” やないやろおんどれ!?! あんたのせいでああなつたんやないんか!?!」

「あれは、一体……!」

真つ先に問い質そうとやってきた平子の怒鳴り声を耳に、浦原は隣の卯ノ花と共に放心するばかり。だがそれも当然。彼の常識ではこんなことは起きるはずもない事だった。

現れた分身在一人なら、二人ならまだ納得がいく。それらが雛森桃に強引に埋め込まれた内なる力であると判断出来るからだ。

しかし、これは……

「——藍染!! 彼女に一体何をした!?!」

浦原は遠くの巨悪へ振り向き、かつてない激情で咆える。あれは断じて崩玉だけの影響ではない。少なくとも浦原が生み出した崩玉に、あんな現象を引き起こせる靈性因子は欠片も存在しなかった。

「ッ、答えろ! 藍ぜ——」

だが、そこで。宙に佇む仇敵の男の顔を見た浦原は、息を呑んだ。

一方。浦原の視線の先の、大罪人共の陣幕。

重臣の一人であった雛森桃のあまりの変貌は、原因である彼ら巨悪の陣営にも大きな動揺を起こしていた。

「何や、あれ……無数の裸の桃ちゃんの集合体……？　ボクあの娘に崩玉が入った事さえ初耳なんやけど……あれ完全に何やあかん事起きてんのとちやいます？」

魔王に仕える糸目の副官、市丸ギンが思わず腰の脇差へ手を添える。

最古参の盲目の重臣が討たれ、今や三人となった彼らのみが知る事だが、この場で起きた出来事は全て五十年以上……ともすれば百五十年もの入念な準備の上に成り立つ”戯曲”である。

その気の遠くなるような執念と醜悪な偏愛の果実を、怖いもの見たさに頬を引き攣らせながら観賞していた市丸だったが、流石の剽軽者もこの展開には息を呑んでいた。

「待て、ギン。様子を見よう……！」

だが、誰もが否定的な感情を見せる中。この男だけは、違った。

「——桃……やはり君はどこまでも私の予想を上回ってくれる……！」

普段の冷嘲の薄ら笑いではない。極上の宝石を見つけたかのような、歓喜の緊張を孕んだ笑顔を浮かべる者。

巨悪の王、藍染惣右介だ。

「いや、あの……藍染隊長？　あの霊圧は流石にあかんわ、足元の空座町のレプリカが耐えきれずに霊子に戻つとるやないですか。あれほつとくと桃ちゃんホンマもんの化物に——」

「何をしているギン、すぐに周囲の有象無象を排除しろ。今の桃の變化を妨害しうる者全てだ」

「あ、はい」

全く聞く耳持たず、目の前の超常現象の”観察”を始める上司。まるで子供のようにキラキラとその冷たい琥珀色の瞳を輝かせて。

「……ああ、こらあかん。あないなるとどうにもならんわ、藍染隊長」

あの可憐で醜悪な同僚が絡む時の、上司の悪癖に溜息一つ。肩を竦

める市丸は男の指示に従い、荒れる戦場へと飛び込んだ。

「…射殺せ」

神鎗しんそう

その胸に、如何にしてこの大混乱を自らの利とするか、ただその
みを考えながら…

「…邪魔だな、山本元柳斎重國」

戦慄する護廷と仮面の死神達に部下が更なる混乱を撒き散らして
いる最中。藍染惣右介は遠方で密かに大技を仕掛けんと暗躍する一
人の老死神に眉を顰める。今の雛森桃が命を落とす事はある得ない
が、余計な刺激となるには十分な火力をあつめた男は持っていた。

「ワンダーワイズ」

この時のために雛森たちに用意させた切り札、対【流刃若火】改造
破面を側に召喚する藍染。

「彼をしばらく無力化させろ。出来るだけ空座町の外周で戦え」

「ああお…あああうツ！」

王の指示を受け、破面ワンダーワイズ・マルジェラは神速の響転で
護廷が誇る最古にして最強の死神へ襲い掛かった。

「…フフ」

一人となった巨悪の陣幕。誰にも邪魔されない最高の環境で、男は
その煌めく双眸に天女の昇華を映し続ける。

女神の偏愛の人形、日番谷冬獅郎。そして浦原喜助という鬼才の影
響により目覚めた、真正正銘の超越者。

あれが彼女の超越的精神のあるべき真の姿なのだろうか。それと
も稀有な因果で生まれた崩玉の暴走なのだろうか。

「事前に”勝負”の名目で黒崎一護という餌を差し出したのは、奇し
くも私を惑わす最高の一手となったな、桃。本当にやってくれる…
！」

いずれにせよ、最高の観察対象である事には変わりはない。自らの手
のみでは決して起こすことの出来なかった現象を前に、ただひたすら
少女を礼賛する巨悪。

そして、眼下の大艱難を見下ろしながら。
藍染惣右介は歡喜の絶頂にその身を震わせた。

「さあ、桃。私の天女。どうか最後まで見せてくれ」

君が紡いだ百五十年の神曲。

その終末を飾る…

女神の降臨を。

だがほぼ同時、一同はあり得ない現象に動揺する。

「莫迦な……霊圧が、無い……！」

「ンなアホな！　せやったらあそこでぎょうさん荒れ狂つとる桃色の光はなんやねん！　鏡花水月か!？」

ありとあらゆる霊なるものが、霊界においてその存在を維持するための霊位差。それが霊圧である。

しかし、立ち尽くす死神達の内の一人は知っていた。彼らの目の前に聳える怪物は、その霊界基準系をも超えた異次元の存在であることを。

「…蟻なんすよ、アタシ達は。彼女にとって」

「蟻だど……？」

「蟻が足下の地を岩肌か象の背か判別できないように、アタシ達の視野では今の雛森サンの魂魄の規模を認識できません。彼我の霊圧差に絶大な差があり、幾つかの条件が整った状況下で起きる…靈性認識の麻痺現象ツス」

その一人——浦原喜助の言葉に全員が絶句する。「まさか」と、「あり得ない」と、現実から目を背ける者も。この場に立つ皆が魂魄の上位種、その更に頂点である卍解に至った死神であるが故に。

だが。

「…もしそうなら…これは王属特務の案件です」

「あちやく、山爺にどやされるところの騒ぎじゃないよ…！」

『…ッ！』

卯ノ花と京楽が述べた言葉に、一同は臍を噛む。それは護廷の、科学者の矜持を揺るがす大問題。身内の裏切りどころか世界の理の領域へ至る怪物の誕生まで許してしまうなど、死神としての沽券に関わる事であった。

「此度の一件は私が許可を出したがために起きた事。先ずは雛森さんの変化に巻き込まれた日番谷隊長を救い出しましょう。総隊長が敵の策略で拘束されている以上…！」

——私が前に出ます。

『…!!』

その一言の、卯ノ花が斬魄刀を鞘から抜いた瞬間。常の彼女の柔らかな霊圧が一変した。喉元に剣を突き当てられているかのような鋭利な死の気配に、同僚たちは咄嗟に後退る。

だが、そこへ一人の乱入者が現れた。

「…射殺せ」

神鎗

目にも留まらぬ速さで伸長する刀の切先、不意の一手を繰り出したのは逆賊の副官・市丸ギン。それを難なく斬り掃い、卯ノ花は襲撃者へ目を向けた。

「……”百本差し”」

「いやア、かんにんな卯ノ花隊長。今の藍染隊長の機嫌損ねたらあかんねん」

『貴様ツ!!』

突然介入してきた裏切り者へ碎蜂と狛村がその剣を振り下ろす。

しかし市丸はひらりと回避し始解の連撃で二人を牽制。

「…どうしてもそこを退いてはくれないんだね？」

「そやかて言うとするやん。ボク、護廷十三隊の全隊長格より藍染隊長一人の方が怖いもん」

『……ッ!』

糸目の男の挑発に膨れ上がる隊長達の敵意。一触即発の緊張は、されど突如動き出した他の戦いによって中断を余儀なくされた。

「――【破道の八十八・

ひりゆうげきぞくしんてんらいほう
飛竜撃賊震天雷炮】!!」

膨れ上がった霊圧に弾かれ反応する一同。そこには最後の破面と戦う合間に超高位鬼道を雛森桃の化物へ行使する総隊長・山本元柳斎重國の姿が。

放射される極大の霊圧光閃は直線上の全てを呑み込み、怪物の巨体を包み込むほどの大爆発を巻き起こす。

「ッ、凄い……！」

「流刃若火がダメなら鬼道かいな……桃ちゃんビツクリしてへんやろか」

一同は固唾を呑んで状況を見守る。だがあれほどの鬼道を受けても、あの少女達の大合唱が揺らがない。

そして吹き上がる噴煙が晴れた後、彼らはそこに居た人物にハッと目を見開いた。

「——止めろみんな！ この人を傷つけないでくれ!!」

漆黒の正解、橙色の髪、決意と希望に満ちた輝く瞳。

奇跡の人間、死神代行・黒崎一護が、化物をその背に守りながら宙に立っていた。

「……くそっ、何だよこれ……！ 何だってこんな事に……ッ！」

卯ノ花烈と共に黒腔ガルガンタを潜り空座町へと舞い戻った人間の青年、黒崎一護。恩人の女死神、雛森桃を彼女の幼馴染へ託し、敵の首魁との戦いを見据えていた彼は、そこで見たあまりの絶望と悪意に震え上がった。

「——何やってんだよ冬獅郎オオオオオツ!!」

そう叫んだ青年の見る現実、藍染惣右介の【鏡花水月】の能力で幻へと歪められていた。主の姿を雛森桃の姿に被せた完全催眠は、やりにもよって彼女を誰よりも救わんとしていた日番谷冬獅郎自身の手で、想い人を突き刺すという悲劇を引き起こす。

『■■■■ア”ア”ア■■■■ア”ア■■■■ア”ア■■■■ア”■■■■ア■■■■』

だが事態を遅れて理解し、かつてない憤怒で逆上する一護に、更なる衝撃が襲い掛かる。

「何…だよ…あれは…」

心臓の一突きで命を落としたはずの恩人から生え出た、世にもおぞましい存在。初めて感じる文字通り異次元の霊圧と、その悪夢のような容姿に一護は思わず後退りそうになる。

しかし、怪物に襲い掛かる凄まじい鬼道攻撃を目にした時。

「ツツ!!」

青年は彼女を護らんと、勝手に体が動いていた。

『黒崎…一護?!』

咄嗟の虚化の【月牙天衝】であの偉い爺さんの鬼道を迎撃した一護は、眼下で「何のつもりだ」と問う隊長達へ反射的に制止を呼びかける。

混乱しているのは彼も同じ。だが後ろでただ悲鳴のような咆哮を上げる痛ましい化物を見た青年は、自身の行動が正しいと本能で確信した。

この化物に俺たちを攻撃する意思はない、と。

そして、一護はその異形の頂上で、彼女を抱き抱えながら放心する一人の少年を見つける。

「……冬獅郎!」

彼の様子に青年は息を呑んだ。

項垂れたまま力なくガクガクと震える幼い少年。その瞳孔は開ききり、瞬き一つしない瞼の端からは涙が、半開きの口元からは涎が、鼻孔からは涙が、止めどなく流れ出ている。

あらゆる夢も希望も打ち砕かれた、哀れな童子がそこに居た。

「冬獅郎! おい、しっかりしろ冬獅郎!」

慌てて化物の霊圧の海を掻き分け、少年の小さな両肩を掴む。だが冬獅郎は相槌一つ返さず、一護の腕に合わせ体を揺らすだけ。三ヶ月近くに亘り積もりに積もった苦痛が、想い人の変容によって遂にその心を死した岩へと変えてしまったのだ。

「冬獅郎——ぐッ、な、何だ!」

突然周囲の霊子に大きな振動が走る。見れば怪物の霊圧が更に膨れ上がり、その足下の焼け焦げた地面に異変が起きていた。

まるで風化しているかのように、周辺の地形が青白い塵になって消え始めたのだ。

「不味い! 霊体の霊子化です!」

「な、なんやて!」

「霊子構成物が周辺霊圧に耐え切れず霊子へ分解する現象です! このままでは雛森サンを起点に現世と尸魂界が直接繋がり、二界の霊圧差でとんでもない大爆発が起こります!!」

「!!」

戦慄する一同。

霊界と現世を分つ広大な緩衝地帯が断界と黒腔だ。それを介さずに両界が一点で繋がる状況とは、すなわち霊子で膨らみきった風船に針を刺すが如き惨状。

「世界が…滅ぶ……!」

「…こうなつては致し方ありません。大至急零番隊に出動を要請しま

す」

「待つてください卯ノ花サン！ 今一度雛森サンの霊圧を封じ込めます！ お歴々はあの化物の抵抗力を削いでください！」

「それでどれだけ持つと言うのだ！ 貴様の怪しい術のせいでこんなことになったのだぞ?！」

「落ち着け碎蜂隊長！ 常に現状における最善策を取るのだ！ …浦原殿、どれほど持つかはわからぬが、僅かであれば我らの卍解で抑え込んで見せよう！」

「…チツ、私の【雀蜂雷公鞭】はもう半分の威力も出せんぞ…！」

言い争っていた護廷と現世の有力者が結論を出す。

だが各々が卍解を解放したそこへ、彼は立ち塞がった。

「バカ、止める!! まだ雛森さんも冬獅郎もいるんだぞ?!」

「邪魔だ黒崎一護！ 諸共消し飛ばされたいか!?!」

「黒崎一護！ 日番谷隊長を救出し、そこを離れて貰いたい！ 我等には最早一刻の猶予もないのだ！」

平行線を辿る怒号の応酬の末、唇を噛む一護は後ろの冬獅郎へ振り返る。異形と化した初恋の少女を抱えながら、彼女を救えず茫然自失とする哀れな少年。

双☒の丘の一度目も、現世の二度目もダメだった。そして三度目の今も。

だが。

「…まだまだ。まだ終わってねえ！」

一護は再度、冬獅郎の側へ飛翔する。狛村の言うように彼を連れ下すためではない。それでは少年も、恩人の少女も救えない。

故に一護は空を駆け、頭を振りかぶる。

あの時、彼女を助けると魂に誓ったコイツの、あの目をもう一度…

「——フン” ツツ!!」

この天才少年にさせるためにだ。

「ツ痛がツ!?! …!?! …??!」

「このバカ野郎!! 何ガクガク震えてんだ! ンなことしてる場合じゃねえだろ!」

渾身の頭突きを喰らわせ、少年の意識を叩き起こす一護。ふらつく冬獅郎の胸倉を掴み上げ、柄でもない説教をぶちかます。

彼にとつては至極当然のその言葉は、されど放心する少年にとつては、何よりも特別な事だった。

「泣いて……苦しんでんのは——雛森さんも同じだろうがツ!!」

その台詞を一護が叫んだ直後。

日番谷冬獅郎の涙が、止まった。

「てめえだけじゃねえ! 騙されて! 裏切られて! 仲間と戦うハメになって! 今までも何度も散々な目にあつて、その挙句にこんな姿にまでなつちまったんだ! 雛森さんが辛くて泣いてる事くらいこんな響く悲鳴を聞きやわかんたら!!」

「…ツあ…あ…」

「だつてのにてめえはそこでぶっ壊れてるだけかよ!? 震える事しかできねえのかよ!」

そして目を見開き喘ぐ冬獅郎へ、一護は全力の想いを言葉に乗せた。

「——惚れた女子が目の前で泣いてんのに、てめえはそこで何してんだよ!!」

冬獅郎オオオツ!!」

「……あ……」

脳を、魂を揺さぶる咆哮が冬獅郎の体を駆け巡る。底なしの闇の世界から、世界ごと現実へとひっくり返されたかのような混乱に目が回

る。

だが彼は、眼前の偉そうな人間の言葉で、確かに何かを取り戻していた。

「……おれは……」

闇から引き揚げられた非力な少年は、されど何度と自分を裏切った希望を探す事を恐れたまま。

そんな戸惑う彼へ、急に強烈な熱風が襲い掛かる。

「なっ、なんだ……?」

「ッ、クソ! あいつ等また勝手に……!」

怯える冬獅郎を庇い、状況に気付いた黒崎が彼の下から離れて行く。慌ててその姿を目で追った少年は、そこで自分の同僚の碎蜂らと戦い、雛森を守ろうとする彼を見つけた。

吹き荒む爆風を薙ぎ、振り下ろされる巨剣を撥ね返し、黒崎一護が戦っている。

俺を、雛森を守るために……

「何してんだ! 冬獅郎!!」

「…ッ!」

黒崎の怒声が耳に響く。

「目エ覚めたらさっさと雛森さんを助け出せ! お前にしか出来ねえ事だろうが!」

「…おれ…にしか……」

「聞こえるだろ、あの人がお前を呼んでる声が! なんで応えてやらねえんだよ!」

聞こえるってなんだ、呼んでるってなんだ、応えるってなんだ。冬獅郎は悲痛に顔を歪ませる。

今も、今までも、自分はずっとあいつの心の声を聞く事ができず、何度も何度も傷つけ、彼女の期待を悉く裏切ってしまったのだ。

こんな、人の形すら失うほど酷い目に遭わされて、今更俺の事なんか求めてくれるはずがない。たとえ求めてくれたとしても、一体どうやって応えればいいんだ。

「——叫べ!!」

「……！」

また、黒崎の大声が冬獅郎の凍り付いた心を震わせる。

「心つてのは、魂つてのは繋がってんだろ!? だったら——」

そして何かの思い出を想起するような間を経て、青年が少年へ振り向いた。

「叫べ！ 叫ぶんだよ！ あの人の事を！ この化物の中に居るあの人の魂に聞こえるくらいデツカくよ！」

「……たましい……に……」

幼稚で、抽象的で、根拠など何もない、黒崎の馬鹿げた言葉。

だが、それを受け取った冬獅郎の胸に、何故か、沸々と熱が沸いてくる。動かなくなった心を今一度動かすように。

「ひな……り……」

恐る恐る。腕の中で叫び続ける少女へ呼びかける冬獅郎。

「■■■■ア” ■ア■■■■ア” ■ア■■■■ア” ■■■■■ア■■■■ア——」

返事はない。凄愴な讚美歌だけが辺りを呑み込む。

しかし、諦めそうになる少年を、その胸の熱が許さない。

「ひな……もり……っ」

二度目、三度目と。彼女の名を呼ぶ度、冬獅郎の声は大きくなる。心から力が、想いが溢れてくる。

痛ましく叫び続ける幼馴染へ聞こえるように。

「雛森……ッ——」

そして。共に過ごした百年の思い出を、育んできた強い、強い慕情を乗せた少女の名を。

日番谷冬獅郎は最後の一声で、魂の奥底から爆呼した。

「雛森イイイイイ!!」

痛嘆の絶叫が戦場に木霊する。

慟哭で枯れた喉が、肺が絞り出した精一杯。たとえどれほど醜い怪物になり果てようと、尚も消えない恋慕を抱き続ける一人の少年の、死力の想い。

かつて人だった記憶も、大切な思い出も、自らの名前すらも忘れた哀れな怪物に、届くはずもない虚しい呼び声が。

だが、その直後。

『——ア”ッ!?!』

突然、化物の咆哮がぷつりと途切れた。

石像の如く固まる、少女の成れの果て。蠢く地響きも吹き荒れる霊圧も、あれほどの破壊の嵐が悉く沈黙し、時が止まったかのような静寂が辺りを支配する。

その天災の空白が如何ほどの間だったのか。永遠にも一瞬にも思える時の狭間の中、不意に冬獅郎は周囲の変化に気付く。

…光だ。

淡い光の粒子が、ぽつぽつと足下から——変わり果てた雛森の巨体の周りを漂っているのだ。

『ア” ■ア…………』

その時。ふわふわと立ち上るその光に導かれるかのように。

『アア ■アア…………』

一つの透き通る白い人影が冬獅郎の前に浮かび上がった。

「…………あ」

それは、一人の少女だった。

雛森の背中から木の根の如く伸び出る、彼女の無数の分身の、一人。あいつの姿を象った、淡い白桃色の光。

涙潤む冬獅郎の目に映るその顔は、ぼやけていてよく見えない。ただ、細まった目元の、弧を描く口元の窪みから、少年は彼女が笑っているのだと思えた。

『ア” ■アアアアアア…………』

冬獅郎の足下から一人、また一人と。少女の分身たちが透き通る光となり、異形の巨体から分かれて宙へと浮かび上がる。最初の一人と同じ笑みをそれぞれの顔に覗かせて。

「ひな…も…」

思わずその名が零れたのは何故だろう。最愛の幼馴染を穢す怪物の一欠片だと言うのに、少年は彼女たちが等しく、あいつのように、自分を大切に思ってくれているのだと、そんな気がして…

そして、数えきれないほどの白い光の分身たちの、最後の一人が雛森の体から離れていった後。冬獅郎は己の腕に抱える少女が、元のあいつの姿に戻っている事によく気が付いた。

「…雛…………森…？」

震える声で彼女へ呼びかける。背中を、胸を見ても、藍染にハメラれたあの絶死の風穴は開いていない。血の跡も、破れ貫かれた衣類も、一切が綺麗で真つさらなあいつの体が、自分の両腕の中に横たわっていた。

…ある。雛森の魄脈が、ある。

脈と呼ぶにはゆつくりで、気が遠くなるほど大きくて。だけど、確かな魂魄の脈動だ。

「雛森！・雛森！・雛森イイ!!」

あいつが。

雛森が。

俺の雛森が。

俺だけの雛森が！

「——いきで…る…」

その言葉を唇が紡いだ瞬間、冬獅郎の視界は朧に歪んだ。

一点の曇りもない、澄みきった喜びの感情が、止めどなく両目から溢れ出る。

「雛森イイイイ！・雛森イイイイツ！」

奇跡だ。

世界に呪われていたあいつが、初めて、裏切られる事のない本物の希望を手に来れたのだ。

『——ア”ツ、アアツ——』

ふと、甲高く短い喚声が辺りに沸く。

驚き周囲を見渡す冬獅郎は、そこで思わず、瞠目した。

『ツアアアアアアン……——』

薄い桃色の光を纏う雛森の分身達が、一斉に雲の上へと昇り始める。

キラキラと輝く粒子の中で。

その神秘的な様を形容する事は、冬獅郎には出来なかつた。大勢の光の少女達が、その魂魄を花卉のように散らし、靈子となつて宙へ溶け消えていく。満たされた幸せそうな顔で微笑みながら。まるで、去り際に羽衣をはためかせる天女のように。あるいは、人の子が天界へと召されていくかのように。それは宛ら伝承や戯曲に描かれた神の福音のような、美しい光景だつた。

「祝福、か…」

「なんて綺麗…」

敵も、味方も。誰もが剣を下ろし、天上の演舞に見惚れている。光と乙女達が魅せる幻想の世界に。

「…見えるか、雛森…」

神秘の出来事に魅入るまま、冬獅郎は抱える幼馴染へ独り言のように問い掛ける。やつとの事で取り戻せた、この世で一番大切な女へ。嬉しそうに。愛おしそうに。

誰かが眼前の光景を「祝福」と言った。だが冬獅郎は、そうではないと、消えていく天女達を悲しげに見送る。

理性を失い悲鳴を上げるばかりだつた哀れな怪物が、彼の呼び声にその心を取り戻した。巨悪の呪縛から解き放たれ、最後にこちらへ微笑んだ彼女達は、多分、感謝してくれたのだろう。

自分の知る雛森桃なら、きっと、そうしていたはずだから。

「……じゃあな」

残る力を剣に込め、冬獅郎は天の彼女達へ無数の氷の花弁を贈る。死神の斬魄刀は、死後の罪の全てを洗い流す救いの刃。あいつらが愛してくれた少年の霊圧、天相従臨による魂葬だ。

悲劇の墮し子達への、せめてもの餞別になつて欲しい。そう真摯に願いを乗せて…

ゆつくりと、視界がぼやけていく。
全てを出し切った少年を、眠りの闇へと誘っていく。
だけど、冬獅郎はもう、闇に怯えない。

「雛…森…」

こいつが。

この腕の中にいる彼女が。

やっと取り戻せた想い人が。

いつだって俺の心の闇を掃ってくれるのだから——

完

制作・著作

???

おまけ・なん…だと…篇
復活…だと…

とてとて、ぺたぺた。

三界から時間も空間も隔絶された断界^{だんがい}。屍が散らばる闇の地面を、あたしことニュー新生スーパーNEO雛森桃Mk.2改は可憐な微笑を浮かべ歩いてきた。ここに来てから既に四回拘突^{こうとつ}が現れたため、おそらく一月くらいが経過したと思う。

そんな長い間も何をしてたかって？ シロちゃんの輝きを思い出しては奇声を上げる発作が収まるまで待つてたに決まってるでしょ。

「——んふっ、うふふ…」

おつといけない、また思い出し笑いが出てしまった。とにかくコレを落ち着かせないとニチャリ散らかした顔で一護の前に姿を晒す羽目になる。キモい再誕者状態のあたしの事も守ろうとしてくれた聖チャンイチェスコも、この愉悦フェイスを見たらドン引きだろう。グリームジョー戦勝利後レベルでイケメンだった我らの主人公にだって救えないものはあるし、耐えられない真実もある（あたしだ）

美しい世界だけを見せてあげるのは、あたしの特ダガバをフオローしてくれさせたせめてもの感謝です。よくやったチャン一！ 近い未来に絨毯にならないよう滅却師^{クイーンシー}の弱点である虚の力をもつと引き出すコツを教えてあげよう！ あと原作より織姫ちゃんと蟠ってる原因のウルキオラを復活させることもついでに。

ふう、いい加減落ち着かないと。

落ち着いて。落ち着いて。

「はあ……なんだろう、この幸福感と無気力感が一緒に混ざった感じ……」

…落ち着きすぎた桃ちゃんは小さく溜息を吐く。

原作におけるシロちゃんの曇りポイントを全て回収し、百五十年越しの悲願を果たした余韻を噛み締め終えた今。あたしはお祭りが終わった時のような寂しさを感じていた。

定年退職後の老後生活的な、第二ならぬ前世からの第三の人生が始まったのだが、正直あの最高の「雛森イイイイ！」以上の生きがいが見つからない。シロちゃんがあたしの人生だったんやなって。

「いや……もうあたし、人どころか魂魄ですらないんだっけ？」

チラリと視界に映る物体。これまでずっと辺りの断界の暗闇を照らしてくれた、あたしの背中から生えるその光源へ目を向ける。

そこにあるのは、二対の翼。

肩甲骨なのか襦袢の衿なのかわからない部分から生えているその四枚は、桃色の星屑が輝いているような美しい色彩をした翅。

ただ蛹から羽化したばかりのニチャニチャと体液が糸を引いているようなグロイヤツ、という形容句がつくけど。

まあ実際にニチャニチャしてるワケでは無いし、羽ばたくとニチャつと巻き散ったりもしないただの霊圧の塊なのだが、そんな擬音が聞こえてきそうな見た目なのがちょっとイヤだ。デイダラボツチ的な神々しさで何とか相殺出来ていると思いたい。

「あ……この服もイヤだな……」

見た目と言えば、今着ているこの初期装備的なボロボロの襦袢。

基本は頭部がはじけた欠魂^{フランク}のコスプレ、と言えるかもしれない。再

誕時に無意識に前世の記憶を参考にしたのか、何となく映画版のダークルキアが着てた衣装に似ている。

違うのはマントがないのと、破けた胸元の衿がねばつく炎みたいな霊圧になってて、それが首肩沿いに背中に集まり花開くように翅になつてくるくらいか。

いや、これは別にいい、問題は裾だ。めっちゃはだけててチャイナドレスみたいなエグいスリットになつてる。風でも吹いたら乙女どころか人として死ぬ。もうヒトじゃないけど。

正直もなにも普通に恥ずかしいので何とかしたいのだが、どうもこれ原作の崩玉ヨン様の白タイツみたいに霊体の一部らしく、あまり好き勝手できない。

やつとあの上半身ピンチな破面装束を脱げると思ったら下半身がピンチの新衣装とはこれ如何に。

(ま、まあ一護は織姫ちゃんあの千年血戦篇衣装も頑張つてスルーしてくれる紳士だから、着てるあたしが堂々としてたら気にしないでくれるでしょう。しないでください)

霊子化して光っている髪の毛を弄りながら、あたしはそろそろ行動しよう”もう一つの体”へ意識を向ける。

元の美少女死神ボディの方だ。

「…どれどれ、現世は今どうなつてるのかな」

そう。あたしがここ断界をうろついているのは、ニチャ顔面修正に手間取つてること以上に、一護が無月修行を始めるまで暇だからだ。

この空間は現世や尸魂界ソウルソサエティとは時の流れが違うため、どちらかの世界で拘流を堰き止めてもらわないと外界と時間が繋がらない。

…もつとも、自分の欠魂ブランクで構成された超巨大叫谷きよつごくを手に入れるほどのガバキャラなあたしは、その世界の法則からпой捨てされた哀れな存在。

世界から仲間外れな桃ちゃんはしょんぼりしながら、現世に残してきた体を何の不自由なく操作する。

現在あちらは気絶したシロちゃんの腕の中で狸寝入り中だ。今動くのは悲劇のヒロイン的にアウトなので霊圧感知と聴覚だけで辺りを探る。

目覚めイベントはやはりシロちゃんが起きた後でロマンチックに行きたいからね。

「えーと、状況は——うわ、藍染隊長すごい生き活きしてる」

探った情報では、丁度ヨン様が絶妙にネタバレにならないギリギリの発言で主人公勢を混乱させて遊んでいるシーンだった。相変わらず愉しそうで何より。

お、夜一さんと一護。パッパが遅れて登場だ。原作通り浦原さんと組んで例の霊圧封じ自滅腕輪鬼道を仕掛けたみたいだけど…

…あつ、ですよねー。

爆発の中から現れたヨン様が、あの悪名高い崩玉ハンペン変化を始める。”ようらん 蛹籠の時”とか苦し紛れのオサレ表現をしてるけど、やっぱりすごくダサイ…

だが原作と違い、急降下したOSR値を回復する起死回生の一手をこの男は有していた。

その通り！ 満を持し、完全崩玉が桃玉含め二つあったことを明かしたのである。

『何……だと……!?!』

一護も京楽さんたちも一斉に渾身のプロトコルを合唱する。今まで自分達が崩玉だと思っていたものは全くの別物で、警戒していた浦原崩玉はなんとヨン様が自身の体内で従えていたのだ！

このムーヴにより彼が雛森桃を（対外的には）ぞんざいに扱っていた伏線が回収され、さらには桃玉の”誕生秘話”悪役まで暴露！ 吐き気を催す邪悪さをアピールし急速にV L N O S R 値を回復していく。

…あ、そこで糸目を開眼してる一〇くん。あなたの探してる乱菊ソウルの一部はお隣のオレンジ頭の人間が持ってますよ…？（小声

ともあれ、その後はチャン一の生まれからこれまでの戦いの全てが

我らの掌の上だったと、色々と秘密を仄めかしつつ陰謀無双で容貌OSR値のマイナスをもつたかもしれないラスボスっぷりを見せ付けてくれるヨン様。

戦闘でも原作のようなフィギュアスケートポーズや全身陥没ギャグをすることなく、パツパ・浦原・夜一・平子＋護廷隊隊長数名を鎧袖一触。天井知らずに聳え立つOSR値を手にした我らがラスボスは、悠々と空座町へ歩を進めたのであった。

そして一〇が穿界門を開く直前。あたしは断界の外にマイ叫谷きょうたにを展開し、自分自身をその中に入れて姿を隠す。なんか劇場版鯽がなりゆうで似たような事を映画敵ボス巖龍おじさんがやってたので試してみたらあたしも出来た。

「……そろそろ通ったかな」

少し待ち、あたしは行動を起こす。ヨン様への感謝を込めた最後のOSRボーナスだ。

これまでの時間で捕まえて、マイ叫谷で飼って(?)いた拘突こうとつくんを彼の後ろで解き放つ！

『あかんあかん、あれは霊圧やのうて理の側の存在やないですか。霊圧でどうこう出来るモンちやいますよ』

『……』

『…藍染隊長?』

そんな一〇の心配は杞憂だ。何故なら今のヨン様はハンペンも終わり多少マシなロン毛モード。まだ色々とダサいけど、それでも圧倒的な霊圧と、ムーヴで溜めたオサレポイントがあれば…

『何を恐れる、ギン。理とは、理に縋らねば生きていけぬ者達のためにあるのだ』

『……ッ、嘘やろ』

あの次元の掃除屋さんも為すすべなく爆発四散！

やっぱ理はオサレでねじ伏せるモンだってはつきりわかんかね。あたしは理に縋るといふか逆に理から「出てけ」って追い出された身だと思つてたけど、もしかしたらあたしのガバもこの世界的にはオサレだと思ふされてた可能性が微レ存…？

『さあ、往こうか。理の涯へ』

何事もなく超然と、静かな断界の先へと進むラスボス。長い襟足と白タイツ以外はともかつこいいい。

よし。これだけポイントを稼げば、たとえヨン様が原作のようにJKの尻を追い掛け回すくつそ低劣で情けない事をしたとしても、何とかV悪L役N役O役S役R値は足りるだろう。あとは一護のホワイトパワーをちよつと解放すれば原作以上の名勝負が生まれるはずだ。

(…ふふつ、まだまだ「雛森イイイ！」以外にもあたしの生きがいは残つてるみたい)

そして。

あたしは最後にヨン様へ「お覚悟！」と心で宣戦布告し、そつと叫谷に開けた拘突用の穴を閉じて隠れるのだった。

『——愉しみにしているよ、桃』

……いやー独り言が多いっすねーヨン様はー(震え声)

親父……だと……

「――滅んだ……のか……？」

現世は空座町、そのレプリカの跡地。巨大なクレーターの一角で立ち尽くす死神たちは、先ほどの神秘の光景の余韻に呆けていた。

世にも背德的で醜悪な化物が、仲間の少年の呼び声で静まり、霊子となつて笑顔で消滅した”奇跡”。伝説の一面の如き終焉に、誰もが息を吞まずにいられない。

そんな彼らの耳に女の声が聞こえた。もう一つの”奇跡”を臨床していた四番隊隊長・卯ノ花烈だ。

「…脈があります。雛森さんは無事です」

ハツと我に返る一同。そしてその言葉の意味を理解した死神達は歓声を上げる。

「ッ、生きてる…桃ちゃんが助かった…！」

『おおっ！』

視線の先には一人の少女、雛森桃。

護廷十三隊を裏切った巨悪の陰謀において、彼らの最大の苦患であつた悲劇の仲間を、ようやく敵の魔の手から取り戻せたのだ。

パチ…パチ…パチ…

だが喜び合う死神達は、突如響いた拍手に水を差された。皮肉と嘲りに満ちた賞賛だった。

「おめでどう、諸君。…そして感謝しよう。君達の尽力で、私の計画は

期待を大幅に超える大成功を収めた」

その憎々しい言葉の主は一人しかいない。異様に満足げな笑顔で現世と護廷の死神達を称える、諸悪の根源。

大罪人・藍染惣右介だ。

『貴様…ッ！』

「やれやれ。どうやら君達は誰一人として、自らが成し遂げた偉業も、たった今刮目した創世以来の奇跡も、その価値の悉くを認識していないようだ」

憤怒のあまり剣先を正眼に構える満身創痕の彼らを見て、男が「蛮愚に福音か」と溜息を零す。その挑発的な仕草が、激戦に次ぐ激戦で疲弊した英雄達の体を激情一色に奮い立たせた。

だが一同が逆上し斬魄刀を振りかぶろうとした瞬間。

「藍染!!」

彼らの前に、空から黒い影が舞い降りた。

漲る戦意と怒りに肩を震わせる当代死神代行、黒崎一護だ。

そこで藍染は現れた三界の救世主へ向き直り、その笑みを一層深めた。

「久しぶりだね、旅禍の少年。君には格別な感謝の言葉を贈らなくてはならないな」

「てめえ…俺の仲間たちも、俺の町も、雛森さんも…よくも…ッ！」

一護は憤っていた。

ルキアも、井上も、空座町のみんなも。これまで一護の大切な人達が被った全ての苦しみ。その行き着く元凶こそが今、目の前にいる男なのだ。

仲間達は無事取り戻せたが、こいつの悪意は未だ彼らの周囲を渦巻いている。これまでの報復ではなく、これ以上の悲劇を阻止するため、黒崎一護は【天鎖斬月】を握り魔王に挑む。

そう意気込む彼へ、藍染がふと、含むような笑みを見せた。

一つの妙な言葉を口にして。

「…なるほど。やはり君はあの娘の行動に恩義を抱いてくれたよう
だ」

——我等の思惑通りに。

それが鼓膜を介し彼の脳に辿り着いた時、真っ先に一護の胸に浮か
んだ感情は、困惑だった。

「…何だつて?」

「聞こえなかったのか、黒崎一護。君の彼女への想いは、”全てが作ら
れたもの”だと言ったんだ」

益々意味がわからず訝しむ青年。

だがその顔を見た藍染の補足は、一護の頭を完全に疑問符で埋め尽
くすほど頓珍漢なものだった。

「ああ、済まない。言葉が足りなかったな…」

——君を君たらしめるもの全てが、作られたものだと言ったん
だ。

澄ました男の口元に、薄ら寒い笑みが刻まれている。しばしの沈黙
の後、一護は辛うじて頭の疑問符を口から吐き出した。

「……はあ?」

「呆けているのか。無理もない」

憐れみに目を細め、巨悪は語る。

「この世界に存在する全ての弱者は、自らに都合の良い”事実”だけ
を”真実”と誤認して生きる。そうするより他に、生きる術を持たな
いからだ」

「あんた……何言つて…」

「そして本当の真実を突き付けられた時、彼らは皆、その真実を理解す
る事を本能的に拒む。…今の君のように」

藍染はそこで一拍、間を置く。それに周囲の注目が自然と惹き付けられる。

その最中だった。

「だが、たとえそれが弱者にできる唯一の自己防衛であろうとも：

君がそう在り続ける事は許されないのでよ、黒崎一護」

『…ッ!?!』

突如、男の体から巨大な霊圧の奔流が吹き出した。

先ほどの雛森桃の怪物。その深海の水圧のような意思無き力とは違う。紛う事無き意思を持ったソレは、超然たる暴力として一護たちを呑み込んだ。

「そうだ、旅禍の少年。女神の勇者。必然の奇跡。君は自らの真実を虚妄と判断し、目を逸らすような弱者で在ってはならない。それは君の背負う”運命”への冒涇であり、許されざる怠慢なのだ」

思わず後退る一護は、されど続く魔王の台詞に意識を射止められる。

それは聞き捨てならない、あの時斬月の世界で消え行くあいつが最後に「忠告だ」と言った台詞だった。

——”運命”ってのはな、抗うより背負ったほうがてめえのためだぜ。

「……ッ」

ゾワツと悪寒に背筋が震える。

「どうした。ウルキオラを倒し、覚醒した桃に臆する事なく触れた君が、この程度の霊圧で怖気づく筈がないだろう?」

「…ッ、待てよ…! てめえ、何を…: 一体何を知ってやがる…!?!」

背負う運命。覚醒した雛森さん。俺の全てが作られたもの。不穏で意味深な男の言葉が、その凄まじい霊力と共に一護の魂を恐怖に震わせる。

だが尻込みする青年をしばらく観察していた男が、落胆に肩を落とすと同時。

「……そこまでにして貰おうかの。藍染」

突然戦場に聞き知った古風な女声が響き渡った。

最近大人の事情であの黒猫の男声の方をめぐり使わなくなった、一護の師匠の一人：

「！ 夜一さん——」

「夜一さまっ!!」

その正体に真っ先に反応し尻尾を振る姉弟子・碎蜂に呼掛けを掻き消される一護。このとんでもない霊圧の中で何をやってるんだあのチビ女とその豪胆さに逆に戦慄するが、力の発生源の藍染は変わらぬ薄ら笑みのまま佇んでいるだけ。

姦しい師弟の乳繰り合いで緩んだ空気を何とか呑み込み、一護は敵から目を離さず乱入者の女性へ問い掛けた。

「…夜一さん、その手足の重そうなやつは…?」

「ん？ ああ、これはのう——」

「アタシの一押し・夜一サン専用手甲と脚甲ツスよ！」

「おい」

そこへ割り込む師匠一号の浦原喜助。先ほどまで難しい顔で何かを考えていた男の豹変に、一護は「技術オタクめ」と軽く距離を取る。捲し立てるような兵装解説の内容は一割も理解できないが、それは標的の藍染の目の前で言っている事なのだろうか。青年は訝しんだ。

だが気が遠くなるような説明も一段落。おちやらけていた浦原がチラリと一護を一瞥し、改めた表情で女性に問うた。

「…夜一サン、本当に今で良いんスね?」

「儂ではのうてあのヒゲに訊け。ヤツが」息子を目の前で護るのがパの見せ場” じゃと言つて喚くから仕方なく連れてきたまでの事」

突然、また別の話を始める二人。

一瞬何を言っているのかわからなかった一護だが、活性化した彼の脳は、どういう訳かその一言に強い既視感を抱く。

「……」ヒゲ” だつて?」

突拍子もなく、何の共通性もない人達。そのはずだ。

だが夜一の言った「息子をうんたら」の台詞に、一護はある男の顔が思い浮かぶ。

そして。

「——よう、藍染。ウチの馬鹿息子と最高嫁と一番弟子とアホ元副官が世話になったなア、ンン？」

まるで先行した夜一の後ろに続くように、その思い浮かんだムカつく顔そのまんまの人物が、一同の前に現れた。

…おい、待て。なんでてめえがここに居る。

立て続けの混乱に頭が処理落ちしそうになる一護は、何とか彼の正体を口で紡いだ。

「……親…父…？」

そうだ。親父だ。

あの鬱陶しくて、たまーにカツコよくて、霊力なんて微塵も持たないはずの、普通の親父。

そんな男が、人間どころか虚でさえ消し飛ばすほどの藍染の霊圧の地獄の中で、気まずそうな苦笑いで立っていた。

「…よ、よう一護！ ちったア強くなったじゃねえか！ 流石俺と真咲の息子だぜ！」

「よう」 じゃねえだろてめえ！ だって…そのカツコ…」

眼前でいつものノリをかますクソ親父へ反射的にツツコミを入れ、一護はまさかの思いで彼の服装へ目を向ける。大混乱する脳でも辛うじて理解できた。

男が纏うその黒い袴は、死神のみが袖を通す——死覇装だったのだ。

「…彼は誰だ？ しかも隊首羽織だと？」

「……待て。そのヒゲ面は知らんが、あの品のない靈圧、どこかで覚えがある」

「碎蜂隊長、せめて元同僚の顔くらい覚えとこうよ。まだ二十年前じゃないの……」

「ふふ、懐かしい顔ですね」

一護同様、混乱しているのは周囲もだ。しかしそのうちの幾人かが笑みを浮かべる。

いずれも、どこか暗い感情が覗いているが。

「——久しぶりだねえ。君の実家の事とか、京楽家の者として色々言わなきゃいけないことは沢山あるけど……無事で何よりだよ、一心君」

「……いやア、ご無沙汰してます京楽隊長。ここに来るついでで助けた元副官まつもとから恨みつらみは山ほど聞かされたんで、その辺りはご勘弁いただけると嬉しいなあ……なんつって」

「いえいえ、ご無事で本当に何よりです。その様子ですと遠慮はご無用との事でよろしいですね？」

「い”っ!?! い、いやいや、卯ノ花隊長そんな。ははっ、あははっ」

「うふふ」

「ははっ、はひっ……はひゅっ……」

一護も身を以て知る女隊長の”凄み”の笑みに、青息吐息なヒゲ親父。

……うむ、この情けなさは間違いなくヤツ、黒崎一心だ。

だが一通りの再会の挨拶と談笑を終え、最後に一護が実親に事情を問い詰めようとした瞬間。

「——ギン、来るんだ」

遂に魔王が動き出した。

再度、緩んだ空気が弦も斯くやと張り詰める。

「……お呼びですか」

「物事は順序が肝心だ。彼が父親の語る、己の真実の断片を掴むまで、

見守ってやりなさい」

召喚した糸目の副官・市丸ギンに指示を飛ばす藍染。意図がわからず一護は父・一心と共に身構える。

「私はその間…」

『なッ——!!?』

そしておもむろに青年へ背を向けた男は、視線の先の浦原ら死神達を、自身の霊圧の放出だけで吹き飛ばした。

「あちらの羽虫達と戯れているとしよう」

市丸へそう言い残し、絶対強者による弱者の蹂躪が始まった。あの化物じみた雛森桃すら従え、そして斬り捨てた藍染惣右介を前に、次々と仲間達が為すすべなく膝を突かされる。

だが加勢せんと力んだ一護の目の前で、突如一閃の光が瞬いた。

「あかんア、黒崎クン。君らは、こっち」

「!? 市ま——ぐあアッ!!」

「ッ、一護!!」

辛うじて【天鎖斬月】で身を護ったそれは、ヤツの斬魄刀。いつぞやの一戦以来となる市丸ギンの伸長する刀身攻撃に弾かれ、一護は背後の一心共々、浦原たちと戦場を離される。

「……ホンマかんにんやわア、桃ちゃん。これからボクどないしよ…」

遠くの瓦礫の奥へ消えて行く二人を眺め、市丸はボソリと肩を落とす。

藍染の背を睨みながらの、そんな彼の独り言は誰の耳に入ることなく、消し飛んだ偽の空座町跡地に溶けていった。

「ぐつ…くそつ、あのキツネ野郎…！」

市丸の斬魄刀【神鎗】しんそうによって弾き飛ばされた先で、一護は痛む四肢を押さえながら立ち上がる。前回と全く同じ出来事だが、籠っていた霊圧は桁違い。その一瞬の剣の交差に、以前は見えなかったヤツの微かな感情を覚えた気がした少年は、追撃に備え警戒する。

だが、来ない。

「…なんだ、あいつ。戦う気あんのか？」

眉を顰めつつ、一護は苦戦する仲間たちの所へ急行せんとし、そこで後ろの一心に「まあ待て」と制止された。

「浦原達は大丈夫だろう。ヤツはふざけた野郎だが頭脳は一級品。百十年も準備期間があったんだ、不覚を取る事はねえ」

「…いやいや、あの下駄帽子さつき思いつきり事態悪化させてただろ！ 世界が滅ぶとか粕村さんが言ってたぞ!？」

胡散臭い店主へ謎の信頼を寄せる父に憤慨する息子。あれは本当に幸運だった。冬獅郎が立ち直ってくれなかったら、あのまま雛森さんは元に戻らなかつたかもしれない。ゾツとする話である。

だがそんな一護へ、一心は呆れたような反応を返した。

「アホかお前。ただ叫んだだけであの化物が成仏なり消滅なりするワケねえだろ」

「…なんだ、見てたのか？」

「当然だ、俺の町だぞ？ …まあ恩人の名誉のために言つとくが、あれは事前にヤツが冬獅郎に渡しといた術の効果だ。あ、勿論あいつの渾身の『ひなもりくっ！』もあるがな？ ぶぶぶく」

あの少年死神への親しみを感じる揶揄い。それを意図的に頭から追いやり、一護は実父の浦原への高評価に軽く引く。

「えー…」

「おい、何だその『親父が悪いセールスに引つ掛かってる』みたいな目は!? 俺はあいつからちゃんと術の仕組みとか教わってんの! だからお前と違ってちゃんとわかるの!」

「ホントかよ…」

あんな醜く恐ろしい姿と、ウルキオラの何倍なのかもわからないアホみたいな規模の霊圧をした怪物を生み出したのだ。一護のあの男への信頼は現在どん底を彷徨っている。

そこに一心が別口の反撃を仕掛けてきた。

「つかお前の方こそなんだア? 『心と魂は繋がってるんだー』とか『叫べば声は届くー』とか、随分メルヘンな事言うようになったじゃねえか、おい」

「…な、おい! そこも見てたのかよ!」

「がっはっは! 帰ったら母さんと遊子と夏梨とルキアちゃんに教えちゃおーっと」

「てめえそれやったらマジでぶっ殺すからな!」

ギャーギャーと喧嘩する二人。いつもと変わらない家族の触れ合いだが、死神代行としての秘密を隠さずに接している事に、一護はささやかな幸せと、一抹の寂しさを覚えていた。

「……何も訊かねえんだな、一護」

全く、よせばいいのに。一息ついた後で律儀に問い掛けて来る親父へ、息子はこれまでの時間で用意した台詞を口にした。

「…訊けば答えるのか?」

「……」

バツが悪そうな沈黙。彼なりに苦悩があるのだろう。少しは気持ちかわかる一護は、かつてあの無駄にイケメンな相棒が述べた小恥ずかしい言葉を諳んじる。

「あー…なんだ? それは親父の抱える問題なんだろ…? なら俺はそれを訊く術ってもんを持たねえ…」

「一護…」

「だから——」

…だから、待ってやる。

「いつかあんたが話したくなかった時。話してもいいと思った時に…話してくれ」

——それまで、待つよ。

…そうだ。

確か、あれはそんな優しい言葉だったと思う。

「…何だ、ちよつと見ねえ内に一端の口利くようになったじゃねえか」
「うるせえ、ただの受け売りだよ」

面映い思いで頭を搔く一護。ただ、あいつにそう言われた時、ちよつと楽になった事を思い出しただけだ。それ以上の意味なんて込めるだけ無駄だろう。

それでもその言葉のお陰で、残された最後の実親との間に妙な蟠りが生まれなかったのは、あるいはあいつへの新たな借りになったのかもしれない。

ニツ、と笑い合う親子。いつか時が来れば、必ず親父は話してくれる。

そう信じて。

「——なんや、それ。ルキアちゃんの名言やないの」

だがそんな二人の間に、無粋な京言葉が割り込んだ。

微かに不機嫌そうで、どこか八つ当たりのような嗜虐感を感じる、市丸ギンの声。

「…あア？ てめえ、なんで知って——」

今更ちよつかいを出しに来たのかと苛立つ黒崎親子。しかしそこで、一護はハツと硬化する。

待て。こいつ今、何と言ったか。

「……そうだよ。なんででてめえが、それを知ってやがんだ…?」

ツツと背筋を嫌な汗が伝う。

あり得ない。あそこに、あの場にいたのは俺とルキア、そしてコンの三人だけだったはずだ。この男が知っているはずがないではないか。

しかし、市丸の舌は一護の動揺を余所に回り続ける。

「いやア。どうもすんませんなあ、志波隊長」

「…ツ!? 市丸てめえ…!」

「ボク、藍染隊長の命令で、お宅の息子さんがちゃんと知つとかなアカン事を知るよう見守る役目がありました」

神経を逆撫でする飄々とした言動。今までの語らいを踏み躪る行為に、一護は何かを誤魔化すように激昂する。

「人が」訊かねえ」って言った事ごちゃごちゃ抜かしてんじやねえよ! 俺の質問に答えろ! なんででてめえがルキアの台詞を知つてんだ!?!」

「怖い怖い、そないな顔せんでもええやん。今更君が怒つても真実は変わらへんよ?」

だが糸目の副官は、そんな青年の内心を見逃さない。嗤いながら「ほんま、もう気付いてんとちゃう?」と、一護の胸の内を容易く抉り出す。

「ツ、何をだよ…!?!」

「覚えとる? 最初に会った時、ボク君に言うたやん」
そして。

青年が忘れていた因縁の男・市丸ギンは、まるで口が裂けるかのような恐ろしい笑みを、その剽軽な顔に浮かべた。

「ボクら…」

——
君が生まれるずっと前から、君の事知っとるよ…って。

月牙……だと……

『へえ…少し見いひん内にえらい強うなったんやね、黒崎一護くん』

『ッ！ 俺のこと知ってんのか？』

『さア？ 先日にも六番隊長さんから初めて聞いたんかもしれへんし——君が生まれる、ずうーっとまえから知ってたんかもしれへんなア？』

…そうだ。

黒崎一護は思い出す。ルキアを助けに尸魂界へ殴り込んだその日、最初に遭遇した護廷十三隊の隊長。目の前の男、市丸ギンが口にした台詞の中に、不吉なものがあつた。

「——生まれる…前から…？」

あの時の裏切り者との一戦。一護は鏝迫り合いの途中で聞いたその一言に思わず硬化する。

「ありや、覚えてへんかったん？ しもた」

「…市丸……てめえまさか…」

「すんません、これホンマはまだ言うたらあかんかったやつですわ。オフレコで頼みます、お二人さん♡」

『…ッ！』

だが一護の心を嵐の如く揺さぶっておきながら、男が核心に迫る説明を述べる事は無かつた。散々おちよくなるだけおちよくなって何一つ明かさないう市丸の巫山戯た態度に、怒りがこみ上げる青年。

そんな直情的な彼を宥め、背に庇う者が一人。父の黒崎一心だ。

「…一護、下がってる。俺がやる」

「な、親父…！」

「それとこいつの話は絶対に聞くな。頭がイカれる」

一護は言い返す事ができなかった。物心ついて一度として見たことのない、ヒゲ親父の鬼気迫る顔に気圧されて。

だからこそ青年は悟る。この話は真に親父の一生、ひいては自分たち謎の霊感一族黒崎家に関わるドデカイ秘密で、今のような緊迫した戦場で話している内容でも、受け止められるほど軽い内容でもないのだと。

「…わかった。だが俺も戦う」

切実な関心を振り払い、一護は戦意をかき集める。せめてコイツと剣を交わせれば何かわかるかもしれない。そんな些細な未練を胸に潜め。

「……バカ野郎。足手まといになんじゃねえぞ！」

「そつくり返すぜヒゲ！ てめえこそ足引つ張んなよ！」

「誰が！」

互いに手を取り合い、敵と対峙する親子。そして注視した糸目の男は、変わらず愉しそうに嗤っていた。

「…いやア、感動モンやね。少し前まででない泣き虫やったのに、人間の成長は早いもんやなア」

またしても青年の過去をこれ見よがしに突き付ける市丸。だが血が上る父を押し留め、一護は負けじと挑発を返す。

「…ハッ！ そうかあ？ 変わったのはあんたもだろ？」

「ボク？」

キョトンとする市丸へ一護は言葉を重ねる。

死神の力に目覚めた自分は、強敵と剣を交わす度、少しだけ相手の考えがわかるようになった。それは思考や記憶などと大それたものではないが、仲間を護る、敵を殺す、戦いを愉しむ等、相手がどんな覚悟や意思で一護自身と戦っているのかが漠然と読み取れる程度のもものではあった。大抵は戦いが終わった後の余韻で漸く気付ける臍げなソレは、相手が強ければ強い者ほど鮮明に感じ取れた。

「…俺が戦った相手で、意思が読めなかった相手は三人。その内の一人があんただ」

他の二人は実力が離れすぎて剣を打ち合う事すら出来ずに負けたが、この市丸ギンとは一度だけそれが出来た。その時感じた“無”の不気味さはずっと一護の記憶にこびり付いている。俺と戦っているのにこれっぽっちも俺の事を見ていない敵の、気味の悪さは。

だが。

「今は、ほんの少しだけわかるぜ。顔はヘラヘラしてても……あんた、今かなりキレてるだろ？」

自嘲に「何にイラついてんのかまでは知らねえけどな」と加える一護。

彼としては、ただ相手の内心を指摘しイラつかせようと考えたに過ぎない。しかし存外、一護の核心を突くが如き挑発は、かなりの当たりだったようだ。

「……ふうん」

ぽつりと耳に届く市丸の相槌。

「おもしろい子やと思てたけど……」

「なんや気味の悪い子やなあ」

その言葉と同時、男の纏う空気が変わる。

『……』

変わらず剽軽なキツネ顔ながら、豹変とも言っていいほどその雰囲気気が逆転していた。

「ようもまア……生まれやら力やら抜いても、藍染隊長好みの子に成長してもうて……」

またしても意味ありげな独り言を呟き、市丸が剣を握り直す。

……来るか。

「せや。君、ボクの【神鎗】の伸びる長さ知ってる？」

だが身構える一護に対し、彼が始めたのは突拍子もない斬魄刀自慢だった。どれくらい伸びるだの、昔の異名だの、この手の自己賛美に

全く頓着しなさそうな男が述べる数々に、いやな予感が胸に積もる。
そして卍解の規模の話始めた時、その数字を聞いた一護は凍り付いた。

—— 1 3 km^{キロ} や ——

一体何の冗談だ。自宅から徒歩で通う学校までの距離の、更に倍以上ある距離じゃないか。そんなもの、想像すら…

「ピンとけえへんやろ、数で聞いても」

そう戸惑う一護の内心を読んだかのように、男が「せやから見せたる」と脇差の切先を地へ伏せる。

「いくで。今度は…」

手加減、無しや」

そして、まるでいつぞやの再現の様に。

市丸がああ構えを取った。

卍^{ばん}

解^{かい}

—— 【神殺鎗】^{かみしにのやり} ——

瞬間。

町中の瓦礫が水平に裂けた。

「は……!?!?」

「ッ、不味い！ 避けろ一護ッ！」

呆ける一護は、咄嗟に反応した父親に突き飛ばされる。間一髪で危機を逃れた二人は即座に戦闘態勢へ。

だが敵の追撃は遙かに速かった。凄まじい勢いの光が狙う先は、より霊圧の低い刀剣未開放状態の一心。

「ぐっ！ ツこのクソガキッ！」

「へえ…散々ヒント出しましたけど、初見で見切られるやなんて思いまへんでしたわ。流星は元十番隊長長」

辛うじて刀身で身を守るも、その絶大な威力は止められない。

「せやけどコレ、卍解ですよ？ ただの斬魄刀に止められてもうたら、ボクとつくに虚ウエコムンド圏の練習場で桃ちゃんに灰にされてますわ」

「ぐあアッ!？」

「親父!!」

一護を庇った父は、彼の目の前で遠く弾き飛ばされる。舞い散る血潮に一心の身を案じる息子。

そんな青年へ、敵の更なる追撃が襲い掛かる。

「んじゃ、次は君の番ね。黒崎一護くん」

瞬く再三の閃光。恐ろしい真空波で爆ぜる瓦礫の山。一護を狙う神速の斬撃。

だが。幾度と虚ウエコムンド圏で絶望を乗り越えた彼は、尸魂界の切り札とも称された奇跡の人間。

「…」

市丸の繰り出す超長大な刀身を、一護の握る【天鎖斬月】は受けきつたのだ。

「……何驚いてんだよ。てめえの卍解が親父の未開放の斬魄刀を圧倒出来ても…」

——卍解が卍解で止められねえワケねえだろ！」

ガルガンタ黒腔で卯ノ花烈の回道を施された青年は万全の状態でこの戦いに臨んでいた。そう容易く敵に後れを取るはずがない。

そして、こちらの優位は重なる。

「……おいおい。二人で盛り上がってねえで、俺も交ぜろよ！」

吹き飛ばされたヒゲ親父が、先ほどとは別人の燃えるような霊圧を纏い戦場へ舞い戻ったのだ。

そこで父、一心が遂に己の斬魄刀を解放する。

「…燃えろ！」

剡月

途端、周囲に霊炎の焔熱が吹き荒れる。倍ほどに肥大化した刀身、柄から垂れる長い緒。その斬魄刀を見た一護は驚愕に目を見開いた。「…へッ、どうだ息子よ。」血”を感じるだろ？」

「親父…それ……」

「まっ、俺の方がイカすけどな！ そうだろ、剡月？」

そう言い残し市丸へ斬りかかるヒゲ親父。そんな頼もしい後ろ姿を見つめる一護の胸に、嬉しいやら恥ずかしいやら、形容し難い熱い思いが沸き上がる。

その想いを剣に乗せ、息子は父親の後を追い掛けた。

「…調子乗ってんじゃねーよ、ヒゲ！ そういう事はせめて卍解してから言え！」

「うるせえ！ 超久しぶりの解放で剡月が拗ねてさせてくれねえんだよ！」

「ハッ、そうかよ！ だったらそこで俺の斬月の必殺技を指啜えて見てろ！ いくぜ……！」

市丸を親父に任せ、一護は上空へ飛び上がる。

放つのは勿論、自慢の【月牙…】

「——【月牙天衝】か？」

だが、そこで一心がニヤリと笑う。

「な、てめえやっぱ知ってるのかよ!?!」

「知ってるさ。なんたってソイツは……俺の技なんだからよ！」

父の言葉に驚く一護。予想外の話故の当然の混乱だ。

「何だって……!?!」

「言っただろ？ 【剡月】と【斬月】は、俺達親子の血が通った斬魄刀

だつて…なアツ!!」

「…!」

斬り合う最後の一撃、一心が鬼デコピンで市丸を地面へ叩き付ける。その反動を利用し飛び上がった彼は、宙の一護の隣に立った。

一瞬のアイコンタクトの後、親子はニヤリと笑い合う。この場に、状況に、互いの斬魄刀において、言葉など不要。

「おし一護！俺に合わせろ！」

「ッ、バカ言え！てめえが俺に合わせんだよ！」

そして互いに月を冠す刀を空へ振りかぶり、全身全霊の霊力を込めた牙を撃ち放った。

—— 月^{げつ} 牙^が 天^{てん} 衝^{しょう} ——

炎と闇の融合が生む、凄まじい大爆発。吹き荒む熱風と霊圧が辺りを破壊し、もうもうと砂塵が立ち上る。

父と子、初の親子の共闘故か。かつてないほど強い力が籠った月牙だった。

「…いくぞ」

「仕切ってんじゃねえよ、親父」

一瞥の後、二人は新たな戦場へと踵を返す。随分と手間を取ったが、本命の敵は未だ遠くで津波の様な霊圧を撒き散らし健在なのだ。

巨悪の魔王・藍染惣右介と戦っているのは、浦原喜助に四楓院夜一、平子真子、京楽春水、碎蜂、狛村左陣、卯ノ花烈。錚々たる面子だが、あの雛森桃の大立ち回りを見た後では不安ばかりが募る。あんな強者を従え、しかも斬り捨てるほどの男を相手に、救い出した彼女と冬獅郎を守りながら戦うのは難しいだろう。

早急に助けに行かねばなるまい。

「——かんにんしてやア。この衣装、ボクのお気に入りにやったのに……」

だがそこで、聞こえるはずのない男の声が聞こえた。

『なっ!?!』

場所は背後で立ち上る土煙の中。渾身の一撃、親子の力を叩き付けたはずの敵——市丸ギンが頭部の血を拭いながら飄々とした軽い足取りで現れたのだ。

「……なんです？　息子さんと二人してそない驚いて。まさか二十年前のボクと同じやと思てはるんですか、十番隊長さん？」

「市丸……!」

ボロボロの衣服を叩きながら「高密度の炎に霊圧やなんて見慣れたもんや」とヘラヘラ笑う糸目の男。目立った傷はほとんど無い。正しく軽傷程度の負傷で未だ戦意を漲らせる魔王の副官がそこにいた。

「しかし……どうしたもんやろねエ。ボクの神殺鎗の斬撃は止められてもうたし……」

そして脇差型の斬魄刀を手で玩んでいた市丸が、その切先をこちらへ向け——

「……ほな、正道の刺突でお相手しましょうか」

——かみしにのやり 神殺鎗” ぶとうれんじん 舞踏連刃” ——

直後。

黒崎親子の視界は無数の光に包まれた。

崩玉……だと……

ある悲劇が終わった。

護廷十三隊及び現世の死神勢力、山本重國・京楽春水・碎蜂・狛村左陣・平子真子・四楓院夜一、そして浦原喜助。一同は激闘の末、悲運の少女——雛森桃を崩玉の魔力から解放し、その魂魄の奪還に成功する。

そして元の死神へと戻った意識なき彼女の護りに治癒の権威・卯ノ花烈を充て、死神達は遂に巨悪との正面对決へと歩を進めた。
だが。

「——その程度の戦力で成しうる奇跡だと思わない事だ」
『く、そ……ッ』

彼らを待っていたのは、魔王・藍染惣右介の圧倒的な戦闘力による蹂躪。

斬術、白打、歩法、鬼道、そしてそれらを司る霊圧。いずれも天賦の才を持ち、その研鑽に驕り無き強者が繰り出す技の数々に、同胞達は為す術なく平伏していく。

そして抛り所の最高戦力さえも……

「山本元柳斎重國。君との決着はまた後日、ゆるりとお相手しよう」
「お……のれ……」

卑劣な手により自爆自滅を強いられた最強の死神、護廷隊総隊長の敗北。

残す最後の希望、黒崎一護も敵の副官との戦闘に苦戦中。万策尽き、後は止めを刺されるのを待つのみとなっていた。

「――まだです」

だがその時。突如藍染惣右介の背後に、無傷の死神が現れた。

「…ほう、見事な代り身だ。平時では見分けがつかないな」

「おたくの愛弟子サンの分身鬼道に少し触発されまして」

男の名は浦原喜助。あらゆる手段を以て勝利を掴む三界最高の頭脳だ。

自慢の携帯用義骸を囨に敗北を偽装し、味方の稼いだ時間で世紀の天才が今その手札を切る。

【縛道の六十三・鎖条鎖縛】

先手の拘束、霊子の鎖が敵の体へ幾重に巻き付く。

【縛道の七十九・九曜縛】

間髪を容れずの二重拘束。八卦の黒玉と中央の勾玉で相手を磔に。

そして最後の本命、最上級破道。

「――千手の涯せんじゆ…届かざる闇の御手みて…映らざる天の射手…光を落とす道、火種を煽る風、集いて惑うな我が指を見よ…」

「芸が無いな。そんな鬼道で倒せる者は精々君達隊長クラスだ。私には傷一つ付けられない」

縛道から抜け出す努力もせず、終始こちらを侮る藍染へ、秘めたる一撃を放つ。

「…光弾・八身はっしん・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔…」

――弓引く彼方、皎皎こうこうとして消ゆ――

【破道の九十一・千手皎天汰炮】

無数の光の矢が敵へ殺到。巨大な爆発を起こし周囲の悉くを吹き飛ばす。

元護廷隊長による完全詠唱の九十番台。その文句に恥じぬ超火力が巨悪を包み込んだ。

「す、凄…」

「しかしあれほどの破壊力でも…はたして」

『……』

そんな仲間達の不安も、先ほどの雛森桃との戦いを振り返れば当然。

そしてその通りに。

「——くだらない」

やはり藍染惣右介は無傷で健在だった。瞬間移動の如き瞬歩で背後を取った魔王が、簡単な白打で浦原を地へ叩き落とす。

「こんなものではないはずだ、浦原喜助」

「ぐ……ッ」

「桃の対策に使ったあの結界も、彼女の崩玉の分離を目論んだ術式技術も、実に見事だった。その彼女を前座と見做す君なら、本命である私にさぞ効果的な対抗手段を用意しているのだろう」

激痛に悶える彼を見下ろし「それを見せるんだ」と愉しげに宙で待つ藍染。その催促につられるように、味方の死神達も鬼才浦原喜助へ期待の目を向ける。

「…違いますよ」

「何がかな?」

すると不意に、またしても背後に浦原がもう一人現れた。地で苦しんでいる方の彼は風船のように破裂する。

「雛森サンは前座、アナタは本命。確かにそうツス」

「……」

「そしてアタシは、アナタを倒す手段を隠しているんじゃない」

——もう、使ったんす。

その宣言と同時、藍染の腕から眩い鬼道の光が立ち上った。先ほどの戦闘の隙にヤツの体に仕込んだ術が今、完成したのだ。

「封ツス。全ての死神にある両手首の霊圧の排出口を封じました」

「…ほう、面白い。山本総隊長の意趣返しと言う事か」

「面白いのはこちらにとってだけツスよ」

浦原が布帽子の奥の瞳を光らせる。以前の藍染であれば警戒し、決して不用意に自分に近付く事などしなかったはずだ。あの雛森桃の怪物の出現が彼にどのような影響を与えたのかは定かではない。だが以後の男の驕りがくれた千載一遇の好機を、浦原喜助は見逃さない。

「アナタは、自分自身の霊圧で…」

——内側から灼き尽くされる…！」

大気を燃やす超大な霊力の奔流。

光の津波、大地が削れる凄まじい爆風が吹き荒れ、護廷と現世の死神達は辛うじて戦場にしがみ付く。

「ぐ…ッ、なんやねんこの爆発は…！」

「これが藍染の霊圧の余波だと言うのか…ッ」

目を開ける事すら難儀する大嵐が止まらない。渦巻く霊圧の中心では、空間が歪み千切れる驚天動地が世界を抉り荒んでいる。

そして、どれほど待ち続けたかもわからない破壊の幕が下りた時。

「なっ…」

光の塊の中から現れたソレに、一同は絶句した。

『…漸く、私を理解してくれたか』

——”崩玉”よ。

それは藍染惣右介の声だった。くぐもつていようと、あの威圧感に満ちた低いバリトンを聞き違えるはずがない。

だが死神達の動揺は男の生存に対してではなかった。その事実を遙かに凌駕する衝撃が目の前の巨悪によってもたらされたからだ。

驚愕は、異質に過ぎるヤツの外見の変貌。感覚が遠くなるほど膨れ上がった霊圧。

そして男の声が綴った——信じ難い一言についてであった。

『全く、”崩玉”とはよく名付けたものだ。正しくこれは神なるものと、神ならざるものとの交わらざる地平を悉く打ち崩す——力だ……！』

死神達が放心し立ち尽くす中、化物が静かな歓喜の声を上げる。

そしておもむろに自身の変じた体へ視線を送った。

『フフ…醜い白の異形か。なるほど、同じ進化の初期段階における共通性と言う事か……』

唯一頭部に残った目を細め『素晴らしい』と喜色を露わにする、不気味な人型。そうとしか表現できない藍染の姿は、全身が白い髓。貌の各部位が塗りつぶされた不出来なマネキンのような存在になり果てていた。

その胸に……

——ひとつの蒼い玉を輝かせて——

『…どうした、諸君。何故私の無事に驚いている？』

「うそ、やろ……」

『浦原喜助の策は、既に類似のものを桃が退けている。私がそれに遅れを取る事を許すと思うか』

眼前の光景に体が震える。現実を目の当たりにした恐怖に目が眩む。そんな彼らを前に、藍染が淡々とズレた事を抜かしている。あたかも本題を些細な事と見做しているかのよう。

違う。浦原の策を逃れたとか、そんな事はどうでもいい。重要なのは、たった一つ。

「…何故…貴様がそれを…」

——崩玉を持っている!!」

碎蜂の絶叫が、皆の心の悲鳴が町跡の窪地に反響する。

あり得ない。崩玉はあの雛森桃の化物の滅びと共に消失したのだ。後は藍染本人を倒せば、この果てしない戦は終わる。そのはずだった。

だと言うのに…

『崩玉だと？ 妙な事を聞くな』

まるで心底理解できない様に、藍染惣右介は眼下の有象無象を蔑んだ。

『——何故、浦原喜助に造れた崩玉を……この私が生み出せないと思った？』

淡々と、巨悪が述べる、絶望的な事実。その一言で彼らは理解する。

…藍染惣右介が有する崩玉は二つあったのだ。

「ば、莫迦な…！ それが出来ぬから…浦原殿にしか造れぬから双匣まで持ち出し朽木ルキアから取り出そうと企んだのではないのか!？」
「どういう事じゃ…！ あんな大事を企てておきながらその最たる目的さえも嘘偽りじゃと…!？」

「貴様が崩玉を目にしたのは双匣の丘が初めてだと、貴様自身がそう言ったではないか！ 理屈が合わん…！」

しかし認める事など出来はしない。そんな焦燥を吐き出す粕村らを眺める藍染は、変わらぬ嘲笑の眼つきで彼らへ自身の矜持を披露する。

『…なるほど、つまり君達は敵の言を容易く信じた上、更にこう言いたいのか。「この私が、他人の作った不完全な崩玉で満足する愚物であ

る」と…』

——実に、愚かな道化達だ。

息を呑む一同。

「そ、そんなこと…」

信じられるものか。尸魂界を混乱の坩堝に叩き込んだ八月初週の陰謀。その真意がこの時のための欺瞞だったなど。

否、それだけではない。もしそうだと言うのなら、雛森桃を幾度も亘り護廷と現世の死神勢力へ差し向け、崩玉と融合した彼女の哀れな姿を見せ付けたのも、彼女を苛んだ悲劇の数々も、最初に彼女を連れ去ったのも、その全てが…

「貴様の持つ崩玉を隠すためじゃったと言うのか…ッ！」

夜一の齒軋りが各々の胸に重く響く。

そう、我々はまんまと出し抜かれたのだ。雛森の秘めた護廷の仲間達への想いも、彼女が最後に逆らう事も、そんな彼女を救わんとこちらがあらゆる手段を投じるのも、余すことなく一切が、この男の掌上。

「くそ…ッ」

そしてこちらは”悲劇の同胞・雛森桃”という極上のエサに釣られて、戦略も戦術も曝け出してしまった。戦力も手札も尽きた上で、真の崩玉と融合した藍染惣右介と相対する状況に追い込まれたのだ。完膚なきまでの戦略負けだった。

「——ちよつと待った。崩玉が、不完全…？」

ふと、そこで訝しむ声上がる。京楽春水だ。

即座に事実を事実と認め、最善を成すために彼は一先ず情報収集に徹した。

『そうだ、京楽隊長。浦原喜助の生み出した崩玉は、その器こそ私のものより優れてはいたが、肝心の根幹となる霊体はその体を成していなかった』

男の台詞は続く。

崩玉の完成には膨大な数の死神の魂魄が必要だった。しかしその調達に失敗した浦原喜助は、大気中の死神の因子を持つ霊子を強引に”義魂技術”で繋ぎ合わせた素体を崩玉の核とした。

『当然、私の崩玉の核とは雲泥の差だ。死神の、それも隊長格を凌駕する優れた死神の魂魄を束ね生み出した私と……桃の崩玉とはね』

藍染が魂魄融合に用いた胸元の崩玉は、自らが生み出したものに浦原の崩玉を喰らわせて完成させたと言う。そして男はそれに用いられたあらゆる技術を、続く雛森桃の崩玉の創造に役立てた。

「…待ってください」

だが藍染の説明に疑問を抱く者がいた。崩玉の創造者、浦原喜助だ。

崩玉の器だけが欲しいのなら、中央地下議事堂の大霊書回廊か、綱彌代家の大書庫を漁れば完成度を上げる資料は幾らでも転がってる。どちらも鏡花水月を持つ藍染なら容易に入手できるだろう。

ならば藍染が真に欲したのはそちらではない。彼の崩玉に用いられたもう一つの技術。藍染自身が「その体を成していない」と、あたかも斬り捨てたかのように述べたその技術こそが、藍染の真の狙い。

「…」義魂を繋ぎ合わせる——つまさか……」

浦原が一気に青褪め、背後へ振り向く。その先にいるのは卯ノ花と彼女が守る昏睡状態の二人。

日番谷冬獅郎と、そして…

『おや、流石に早いな。もう気付いてしまったのか』

ニヤと細まる巨悪の目。敵の不穏な発言に死神達が「何や!」「何の事だ!」と口々に答えを要求する。

そんな彼らへ、藍染が何かを含むように尋ね返した。

『…君達は先ほどの桃の変容を見て何を思った? ”化物”と呼ぶ者もいたな。…哀れな事だ』

「何……？」

魔王は語る。

雛森桃と崩玉の融合状態を解除するために浦原が行使した術は、百年前に平子真子らを巻き込んだ魂魄消失事件の一件を経て完成に漕ぎつけた”魂魄の分離”と言う技術だ。特定の霊圧を指定し、それを司る魂魄をその他の異物から分離する極めて難易度の高い方法だが、霊圧を観測できない崩玉そのものを摘出するより確実だった。

そこで「だが」と、藍染の声に喜悦が滲む。

『だからこそ、桃はあのような姿になった』

「ッ、卯ノ花隊長！ 日番谷サンの耳をッ！」

たとえ気絶していようとこれを聞かせてはならない。あの曲者浦原喜助が、その万が一すらも反射的に恐れるほどの真実に思わず身構える一同。

そんな吐き気を催す邪悪を、藍染惣右介は心底愉しそうに、言葉にした。

『桃に与えた崩玉。その素材として犠牲になったのは——』

『無数の桃自身の複^{クローン}霊魂魄だ』

啞然。

背筋を痙攣させる者。体を掻き抱く者。喘ぐような吐息を零す者。誰もが茫然自失と立ち尽くし、巨悪の明かした外道の事実をその脳髓で甘受するばかり。

クローン生物。現世では「生命に対する冒瀆」と忌避されるその研究は、こと霊魂を司る尸魂界に於いては研究そのものが大罪とされるほどの禁忌である。魂魄とは個を個たらしめる最後の自己であり、その複製は現世のようにただ同じ肉体を持つ人間を造る事より遥かに深刻な問題と定義されるのだ。能力や記憶を保持する霊骸^{れいがい}や改造魂魄を生み出すのとは訳が違う。

『…無論、靈骸技術と異なり今の義魂技術で生み出せる魂魄の最大靈
圧は、精々が彼女の五分の一程度。同等の靈圧を有する魂魄には程遠
い』

「な、あ…」

だがそれほどの禁じ手を微塵の抵抗も無く晒して尚。男のしでか
した悪事は尽きない。

雛森桃の崩玉の創造過程には、更なるおぞましい技術が用いられて
いたのだ。

『そう。完璧な彼女の義魂を造るには、別の工夫が必要だった』

そして巨悪が述べた呪詛の如き言葉が、仲間想いな死神達の誇りを
穢し傷つけた。

『……バラバラに生み出した桃の魂魄の欠片を、一個の霊体として
結合させるという工夫がね』

戦慄が辺りを支配する。

ヤツは今、なんと言ったか。バラバラの魂魄の断片を、一つの霊体
として繋ぎ合わせた、と。

そんな、まるで人形やぬいぐるみを縫い合わせるかのような事を、
一人の、数えきれない人々に対して行った、と。

なんだ、それは。

「——そこまで……それほどまでに彼女を辱めていたと言うのか!？」
藍染ツツ!!」

「日番谷隊長に聞かせないでよかった…! そんなに彼の、あの二人
の絶望する顔が見たいのか!？」

「狂気だ…! こんな外道は生かしておけぬツ! 今すぐ死ねツ!!」

口々に咆哮を上げながら巨悪へ殺到する護廷の隊長達。血も涙も
ない、この世の全ての悪意をたった一人の少女に注ぎ込むが如き非道
に、仲間達は気が狂うほどの殺意を覚える。

「最後だ、明王! 我が靈力全てを持って往け!!

卍・解ツ!!」

黒縄天譴明王

「流石に死神として看過できないよ、その話は……！」

：花風紊れて花神啼き、天風紊れて天魔嗤う」

花天狂骨

死力の大鎧の巨人が、尸魂界唯二対の青龍刀が、上下より敵へ斬り掛かる。

それと同時に、二人の現世勢力も加勢。

「平子サン、援護お願いしますッ！」

…啼け」

縛り紅姫

『ッ、しゃあないなあ……！ 残り三秒、ここで使うてやったるわ!!』

虚閃

赤黒い血の網が敵に纏わり付き、仮面の死神の強烈な霊圧閃光がそこへ放たれる。

「…まだです！」

火遊紅姫・数珠繫

捕らえる網の節に火の玉が連鎖出現。一斉に爆発し魔王を火だるまにする。

その渦中に、仲間の最後の二人が突入した。

「往くぞ碎蜂ッ!!」

「ハッ!! 魂魄法第656条、即断処刑……執行する!!」

『くたばれ藍染ッ!!』

瞬閃

雷と風を纏う女師弟が繰り出す白打の最高奥義。逃げ場のない左右の挟み撃ちで、衝撃と共に込めた全霊圧を相手へ叩き込む。

斬撃、圧殺、霊力、蹴打、鬼道。死神に許された万術全ての力による必殺の殲滅陣。集団戦の最高最強火力を魂の底から絞り出し、今度こそ敵を滅ぼさんとその異形の体へ解き放つ。

轟爆。

荒れ狂う霊力と暴風に耐え、狛村、京楽、浦原、平子、夜一、そし

て碎蜂は確かな手応えを頼りに、目と鼻の先の燃える霊煙が晴れるのを待つ。

これで終わりだと、自らの人生で磨いた強者の力に祈る様に。

「——そうか」

だがその時、彼らの鼓膜を無情な男声が震わせた。

『なッ!!?』

「どうやら先ほどの封術が最後の切り札だったようだ」

煙の中。敵は、藍染惣右介は平然と佇んでいた。

その絶望に死神達が気付く間もなく、巨悪が自らの剣を無造作に横へ薙ぐ。

『ッあ——』

たった。

たったそれだけで、護廷十三隊の戦いは終わった。

「さようなら、親愛なる道化諸君。暇つぶしの演目にしては、少しだけ愉しめた」

『が、あ…』

血花が舞う偽の空座町の廃墟跡。

焼け焦げた地へと落ち行く死神達の目に最後に映ったのは、白い覆面状の殻が剥がれ落ち、露わになったその憎らしい美貌に蔑みの微笑を浮かべる…

蛹ようらん籠かごの時を終えた魔王、藍染惣右介の姿だった。

なん……だと……

「——嘘……だろ……」

空座町に低い男声が響き渡る。突如のしかかった深海の如き靈圧を全身で受けながら、黒崎一護はその声が紡いだ言葉に唾然とした。

「崩玉が……一つだって……!?!」

「ヤベえな……」

敵の猛攻の途中に起きた、大将戦での異変。味方の父・黒崎一心も、相手の市丸ギンも、等しく遠くの戦場へ意識が吸い寄せられる。

靈炎の中に佇む、異様な姿へ変化した巨悪——藍染惣右介に。

「……一護、ここは任せた」

「な、親父!?!」

同胞の危機をいち早く察知した一心が援軍に向かう。一拍遅れて一護も殿しんがりに付くも、しかし敵の追い打ちがない。

訝しむ青年は相手の市丸へ目を向け、そこで息を呑んだ。

「——なんや、そう言う事やったんか」

頭を掻きながら「藍染隊長もお人が悪い」と悪態を吐く男は、笑っていた。愛憎併せ持つ、寒気を駆り立てる不気味な笑みで。

そして市丸はゆつくりと振り向き、冷や汗を流す一護の視線を、自身のそれで絡め捕った。

「ほな、志波隊長も行ってもうたし……訊きたい事あったら訊いてええよ、君?」

「何……?」

「今ならボク、色々答えたる」

首に巻き付く毒蛇のような台詞だった。散々小出しの情報で振り回しておきながら今更何のつもりだと内心憤慨する一護。しかしヤツの愉しそうな顔を見てみると、親父の忠告が頭に強く想起される。そうだ。父親と敵、どちらを信用するかなんてわかりきった話だ。

「…ねえよ、いつこも」

「ありや、ホンマに？　ちよいと揶揄い過ぎたわ」

「てめえが本当の事を言う保証もねえ。これ以上混乱させられんのは…」

——ゴメンだからなツ！』

誘惑を振り払い、一護は全力の虚化形態で糸目の男に斬り掛かる。彼の気掛かりは藍染と戦う仲間の安否。早急にこいつを片付け助けに向かわないといけない。

だがそんな青年の内心を読んだのか、彼の猛攻に対し市丸の剣筋は鋭さを増していく。

「なんや、黒崎クン？　さつきはボクが君の事見てへんかったって拗ねとつたのに、今度は君がボクの事見てへんやないの」

『チツ、こいつ…！』

「お父さんと二人でも押し切れんかったんに、そない舐められたら傷付くわア。そーれ」

—— 神殺鎗” 舞踏” ——

『がッ!』

凶悪な刺突攻撃が仮面の端を貫き、視界が血に染まる一護。ヤツの卍解の恐るべき能力はその長さ以上に、その伸縮速度だ。文字通り瞬間もなく射出し、瞬く間もなく元の脇差型に戻る。横薙ぎの斬撃も威力こそ対応できるが、あの伸縮と組み合わせられると途端に脅威が跳ね上がる。

ヤツの剣に間合いは無い。切先をこちらに向けられたら終わり。そんな九死の斬り合いに一護の精神は擦り切れていく。

「ボク、これでも君に同情してるんやで？」

『ッ、何…？』

そして畳みかけるように、市丸の言葉が彼を襲う。

「これまでの人生も、生まれも、親までも。ぜくんぶヒトの掌の上でコロコロと」

『…！ なんだ、それ…ッ』

「ホンマ、君を見とると奇跡とか運命とか、そないロマンチックなもんが全部冗談に聞こえてかなわんわア」

思わず剣が鈍る一護。それを糸目男は見逃さない。

『な！ しまっ——ぐああアッ!?!』

「ほらほら、敵の言う事なんか信じへん tochやうの？ 懐がら空きやで〜？」

一護は焦燥、恐怖、激痛に苛まれる。脇腹に突き刺さる神速の一撃。心を惑わす嘘と真実。遠くに感じる敵の首魁、藍染惣右介の途轍もない霊圧。

耐え切れず、そして青年はそれらの痛痒を振り払おうと己の剣を全力で地面へ突き刺した。

『がああア”ア”アアアッ!!』

—— 月 げっがてんしょう 牙 天 衝 ——

漆黒の霊圧が大地を砕き、周囲を呑み尽くす。自身を顧みない我武者羅な大技は破壊の限りを尽くし、やっと敵の怒涛の剣撃を中断せしめた。

『ハアッ…ハアッ…、く…そつ…』

立ち上る粉塵に紛れ、荒い息を繰り返す橙髪青年。

ふざけやがって。一体何だったんだ。感情をそのまま暴力で吐き出した一護だったが、その胸中は尚も嵐の如く荒れ狂っていた。

『…人生も生まれも親までもてめえらの掌の上だと？ 俺を取り巻く奇跡も運命も全て冗談だと？ 冗談はこっちの台詞だ、キツネ野郎…ッ!』

やはり親父は正しかった。こいつの話を聞くだけで頭どころか心までイカれそうだ。不安から目を背け、一護は敵の言葉に耳を塞ぐ。

「…ふうん、やっぱ信じてくれへんねんな」

土煙が風に掻き消え、市丸の平然とした姿が露わになる。

やはり破れかぶれの攻撃では倒せない。今度こそ揺さぶられてたまるかと剣柄を握り直し、青年は瞬歩の足へ霊力を込める。

「——せやったら君、もう藍染隊長んトコ行ってええよ」

だが直後の男の台詞に一護は困惑した。

『…何だつて?』

「聞こえたやろ? ほな、もうボクのお仕事おーしまい。教えなあかん事は全部言うたし、信じるも信じひんも君の勝手や」

『…! てめえ…』

押しして駄目なら引いてみる。強制せずに選択させる。高校生の彼でも知る単純な話術が歯噛みするほど理性を抉る。

だが相手は一護の動揺へ興味も示さず、呆れるように眉で山形を作るだけ。

「なんや、善意で言うたのに怒る事ないやん」

『何が善意だ! てめえの話なんざ端から聞いちやいねえよ!』

「わからへんねんなア…」

そう溜息を吐き、苛立つ青年から目を放す市丸。咄嗟に斬り掛かろうと剣を構える一護は、されどそこで敵の視線と、指差す先が自分の背後にあると気付いた。

「ええの、君? はよ行かんと…」

『…ツ、まさか…!』

突如背後で爆発が起きる。藍染の桁外れな霊圧に紛れ、微かに感知出来た変化。

そして慌ててそちらへ視線を向けた先で、一護は仮面越しに、それを見た。

「——お父さん、リタイアしはったよ?」

宿敵藍染惣右介の一閃で崩れ落ちる父、黒崎一心の姿を。

「浦…原……」

市丸を息子に任せ、豹変した巨悪の下へ向かった黒崎一心は、無念ながら戦いに間に合わなかった。

辿り着いた戦場は惨憺たる有様。名を呟いた浦原喜助を始めに、夜一も、護廷隊も、仮面の軍勢も皆倒れた後。

「…ッ、藍染!!」

仇討に燃える一心は勢いそのまま、唯一残った四番隊隊長卯ノ花烈と何かを話す敵の親玉へ全力の【月牙天衝】を斬り咬ます。しかし。

「なッ…!?!」

爆炎に紛れ、硬質な音が反響する。頭部を両断するつもりで斬り付けた【剡月】は、相手の体の何一つとして傷付けてはいなかった。そして驚愕する一心へ、ヤツが悠然と振り向く。

「——黒崎一護の驚く顔は見物だったかい？ 志波一心」

大罪人、藍染惣右介がその端正な顔を皮肉に歪めていた。

「…ふざけやがって、くそつたれ…! 桃ちゃんの崩玉はデコイだったってワケかよ…ッ!」

一心は敵の全身を警戒しつつ、その胸の中央に輝く小さな宝珠を注視する。

それは崩玉。死神と虚の境界を操り、魂魄との融合時には想像を絶する影響を齎す超物質だ。

以前あの天才に実物を見せて貰った彼は、一目でこれこそが本物だと確信した。

「デコイではない。私も、桃の崩玉も、等しく唯一無二の本物だよ」
「ハッ、浦原と冬獅郎に消滅させられたモンがか？　崩玉はあの男が百年かけても破壊できなかつた劇物だぞ……！」

対する藍染もまた異様な姿となっていた。背中にかかるほどに伸びた後髪、全身を包み込むような白い衣服、そして濃紫に染まった両目。

そこに居るのに一切の霊圧を感じさせない存在。容姿と言い、それは正しくあの雛森桃の化物と同格、超越者の領域へと至った証であった。

「……全く。君達にも聞こえるよう、態々霊子を通した声音伝達の手間を取ったのだ。その矮小な頭で少しは理解する努力をし給え」

「ああ、理解したさ。てめえが外道より酷えクソ野郎だつて事がな……ッ！」

男の挑発に再度剣を振りかぶる一心。元部下の日番谷冬獅郎を通してそれなりに雛森桃と面識のあつた元十番隊隊長は、あの可憐な少女をここまで人として冒涇した藍染に当然の激情を抱いていた。

あの二十年前の寄生大虚^{メクス}を取り巻く因縁と共に、黒崎一心は限界の力を込めた二度目の月牙を解き放つ。

「先ほどの私の言葉を聞いて最初に浮かぶ感想がそれか。本当に何も理解できていないようだ」

「バカ、な……」

だが自慢の大技は、まるで蠅をはたくが如くまたしても弾かれた。驚愕に呆ける一心を見つめ、巨悪が小さく溜息を零す。そして何かを暗示するように語り出した。

「いや……そもそも私と君達の間には、大きな思想的隔たりがある。現状を良しとし安寧の微睡みに甘んじる君たちと、進歩と発展の道筋を探求し続ける私とでは、万象に対する認識が大きく異なるのだ」
「……ッ」

「崩玉は一つしか存在しない。崩玉の覚醒は早められない。崩玉は死

神と虚の境界を操る事しかできない。全ては、墮落と怠慢に曇る君達の認識が見せた、幻だ」

そこで一心はハッと我に返る。聞き捨てならない事を男の口が紡いだからだ。

「…待て、どういう事だ？ 崩玉は死神と虚の壁を破壊する物質ではないのか…？」

「その認識こそが君達の停滞を示唆しているのだよ、黒崎一心」

藍染の話は続く。

浦原喜助はとある目的を持って崩玉を造り出した。その目的こそが”魂魄間の壁の破壊”。

だが彼はそこで足踏みした。自らが創造した物質の、神器に等しい超常の力に恐怖を抱いたのだ。

「そう、彼は最後まで気付く事が出来なかった。己の被造物を恐れ、硬直した固定観念に囚われ、崩玉の真の能力を誤認し続けたのだ」

「勿体ぶってねえで言え！ 崩玉と融合して、てめえは一体何を知った!？」

苛立つ一心へ「わからないか？」と藍染が問い掛ける。

そして。

「黒崎一護が死神の力に目覚めた切っ掛けも。朽木ルキアがその力を全て彼に奪われたのも。茶渡泰虎が、井上織姫が特異な能力に目覚めたのも。浦原喜助の周囲で起きた、人為的な介入を許さない”奇跡”と呼ぶべき全ての現象は、崩玉の意思によって具現化された事象だ」

「…!？」

そう続いた敵の台詞は、技術者ではない彼にもぼんやりながら想像が付く、崩玉の力の一端を言語化したものだった。

「崩玉が真に持つのは、相反する魂魄の境界を操る能力ではない」

——自らの周囲にある”心を具現化”する能力だ。

「なん……だと……」

一心は息を呑む。

それは言うなれば、一定範囲内の人物の願いを叶える道具。恐らく浦原は今の自分と同じように、漠然とこの事に気付いていたのだろう。同時に目の前の男がその力を狙うであろう事も。

「私は最初から、崩玉の理論とされる研究の目的そのものについて疑問を抱いていた。なぜなら、もし崩玉が真に死神と虚の境界を操るのであれば、平子真子らは破面ヴァイザードの紛い物などに成り果てる事は無かったからだ」

「……」

「故に崩玉の能力が、従来の仮説より更に曠然とした領域を有する事は明白だった。黒崎一護と朽木ルキアを浦原喜助の目の前で出会わせたのも、その結果で組み上げた仮説を実証すべく用意した実験の一つだ」

…やはりか。

以前から違和感は、悪寒はあった。あらゆる運命的な出来事がまるで一つの意味によって動いているかのような、不気味な違和感。

崩玉を隠す依り代を求めた浦原喜助。家族や友人を護る力を欲した黒崎一護。死神としての生に絶望した朽木ルキア。あれほど多くの心が、二者の思惑が一致し生まれた現象も珍しい。藍染はそう当時を想起する。

「…実験の”一つ”…か」

「そうだ、黒崎一心。君には…いや、君達一家には、私の探究に大いに役立って貰ったよ」

その唐突な感謝に一心の眉がピクリと動く。

胸に積もる嫌な予感。市丸の台詞、浦原の推測、それらが一心の脳内で一つの巨大な陰謀の存在を象っていく。

「…ふざけんなよ」

だが藍染の言葉は止まらない。

「『流刃若火』の研究の参考とした君の卍解。死神の霊力の譲渡に反膜ネガシオン技術を試した君の義骸。そして…」

「!? てめえまさか…ッ!!」

戦慄き喰い掛る一心。それを嘲笑うかのように、巨悪が一つの真実

を明かす。

「二十年前の、相反する種族の力を有する個体の誕生を目標とした交配実験。その結実であるあの少年こそ、君の死神の力と、黒崎真咲の純血——」

「卍・解!!」

瞬間、巨大な火柱が立ち上った。

凄まじい劫火が敵の戯言ごとく大気を燎き尽くす。その中心に剣を構える黒崎一心は、炯然と赤く輝く修羅に変貌していた。

「…藍染。人の息子を…オモチャにしてんじゃねえぞッ!」

全身の血を燃やし怒りを霊圧に投影する父親。

その時。羅刹の如き男を眺める藍染が、嗤った。

「惜しいな、黒崎一心。」君の息子が”じゃない」

——君達親子が、私の戯れなんだ。

それが彼の最後の理性の一欠片を打ち砕いた。脳の血管が一本残らずぶち切れるほどの激情に駆られ、一心は全身全霊の力で巨悪へ突撃する。

「くたばれクソ野郎ツツ!!」

——劉猩・天驛剗月——

目にも留まらぬ速さで疾駆する真紅の彗星。その射線の一切を燬し、煉獄へ変え、父親は一家の名誉を取り戻さんと、諸悪の魔王に最後の死力を叩き込んだ。

「——ああ、済まない」

しかし。

「が、あ……」

「確かに彼と比べれば、君は不出来な玩具だった」

熱が腹から零れ出る。燃える己の卍解の炎とは違う、生命の源の尊

い熱が。

敵の一振りを受けたのだと理解する事も許されず。黒崎一心は全ての戦意を削がれ、無様に大地へ倒れ伏した。

「そして、これまでの戯れは全て…」

遠のく意識の中、男が最後にその体で感じたのは。

「君のためにこそあるのだ」

——黒崎一護——

大きく頼もしい、息子の漆黒の霊圧だった。

『——てっめえええええ!!』

やられた。親父が藍染に斬られた。

軋む体を奮い立たせ、黒崎一護は敵の桁違いな霊圧の恐怖の中、虚の力で我武者羅に剣を振るう。

「…なるほど、これが君の霊圧か」

『くそッ！ くそオッ!!』

「素晴らしい。僅か半年でよくここまで練り上げたものだ」

それでも歴然とした力の差は微塵も揺るがない。斬り付ける魔王の皮膚に傷はできず、突いた白い衣服さえも刃を弾く。

無駄な足掻きを繰り返す青年はいつしか疲弊し、仮面も砕け、超然と佇む藍染の間合いの中で膝を突く。

怒涛の如く流れ込んだ情報に打ちのめされ、化物のような霊圧に気

力も折られ、最後に一護は縋る様に、相手に絶望の真実を問い詰めた。
「……………本当…なのか…」

「何がだい？」

「…」何が”じゃねえよ…ツ。本当にてめえらは…………俺の事を、俺のこれまでの戦いを全てを…

———本当に全部でめえが仕組んだのかって訊いてんだよツツ
!!」

震える怒声が町の跡地に木霊する。

その返答に藍染が最初に示したのは、口元で右手の人差し指を立てるふざけた仕草だった。

「声を」

「…ツ、あ…?」

「そう声を荒らげるな、黒崎一護」

変わらない巨悪の澄ました声が一護の鼓膜を撫でる。

「そんなに驚く事はないだろう。君は既に疑問に思っているはずだ。これまで君が歩んできた栄光の道の、至る所に鏤められた、ちりば作為的な不自然の正体を」

「…!!」

それは青年の心の鎧をスルリとすり抜ける悪魔の一言。

何故。それまで虚の存在すら知らなかった一護が、朽木ルキアとの出会いの直後に虚に襲われたのか。

何故死神の力に慣れた時に、母の仇の名付きネームド個体と遭遇したのか。

何故滅多に現世を狩場としない大虚が、滅却師の撒き餌クイーンシー如きで現れたのか。

何故朽木ルキアを連行しに訪れた者が、彼女と縁があり、そして一護の成長の糧となるに相応しい敵であったのか。

何故尸魂界で、斑目一角、阿散井恋次、更木剣八、朽木白哉と、順序立って都合よく自らの実力が相手と拮抗している時に遭遇したのか。

ウルキオラが現世で一護を何度も見逃したのも、グリムジョーが一護を殺す直前で何度も回収されたのも、そして虚圏ウエコムンドでの勝利、敗北の

数々も…

「視点を変えて見るといい。我々死神が何十何百もの年月をかけて到達する始解や卍解の位階に、たった二週間足らずで至った存在を相手取る時、君はその者を侮り手を抜くのか？ そんな潜在能力の塊である敵を、最小限の労力で屠れる段階であえて見逃し、確実に殺せた戦闘を止めさせる。その非合理に何の意図もないのだと、君は本当に信じているのか？」

「そ…それは…」

「そこに疑問を抱けるだけの知性があれば、答えは即座に導き出せるだろう。自らを納得させる事も容易いはずだ」

藍染の正論に、青年は僅かな抵抗の後、がくりと項垂れた。逃げ場など最早どこにもなく、ただ敵の舌鋒に正気を抉られ続けるばかり。

全てが、これまでの自分の死神としての歩みの徹頭徹尾が、この男の掌の上だったのだ。

「……なんだよ…それ…」

母を失い、家族や仲間を護る力を欲した六年間。そしてルキアから欲した力を貰い、そのせいで咎人となった彼女を救えた事を誇らしく思った。

それが全てお膳立てされたものだったなんて、とんだピエロじゃないか。

長い反芻を終え、俯く一護は悪態吐く。

そして。

「…いつからだ」

青年は最後に残った一つの疑問を、巨悪へ問い掛けた。

「てめえ言ったよな。俺が勇者だの、背負う運命がどうなの」
「……」

「何でだ…！ いつ！ どこで！ なんててめえがそれを知ってたんだよ!?!」

そうだ、おかしいんだ。こいつがその話を知る事はあり得ない。そ

のはずなんだ。

何故なら、その話を一護にした者は、二人とも：

「最初からだ」

だが直後の男の言葉に、一護は凍り付く。

「……え？」

「思考が追い付いていないようだな。私は、こう言っているんだ——」

そして魔王はゆっくりと瞬きし、その両手を開いた。

どこかで聞いた、おぞましい一言を紡ぐと共に：

「——私は君の運命を、君が生まれる前から知っていた」

啞然。

その時の自分の顔を形容するにこれ以上相応しい単語はないだろう。何かの聞き違いかと一護は思わず問い返す。

「…生まれる…前…？」

なんだ、それは。生まれる前って、どういう事だ。

だがその疑問は、自らの理性を守るための苦し紛れな現実逃避。

——君が生まれるずっと前から、君の事知っとるよ。

あの時はただ不気味で抽象的にしか聞こえなかった、市丸ギンの意味深な発言。それが今、一護の中で明確な形となって彼の胸奥を穿つ。

そんな青年の心境を無視し、藍染の意味不明な言葉は続く。

「黒崎一心に伝えた崩玉の真の能力には、一つだけ語弊がある。彼は崩玉を万能の存在と認識していたが、実際は崩玉が周囲の心を取り込む際、その者が元来それを成す力を持ち得る場合においてのみ具現化の効果が現れる。そのため厳密に述べるなら、崩玉は“持ち主の望みを叶える道標”と言った方が正しい」

そして、巨悪は、黒崎一護の最も大事な自己認識にさえ、長いその手を伸ばす。

「君が黒崎真咲の胎で命の火を灯す前から、我々は君がこの世に誕生する事を知っていた。何故ならそれは、貴種の両親の下に生まれる子供が、生来特別な存在となる事を崩玉に願ったからだ」

「!!?」

反射的に顔を跳ね上げる一護。混乱する頭でさえ理解できる最悪の絶望。己の人生どころではない、文字通り一個の命としての自由さえ奪う唾棄すべき話。

なんだそれは。馬鹿な事を言うな。

うそだ。ふざけるな。そんな事あるはずがない。

されどそんな必死の否定も空しく…

「あらゆる種の壁を超える唯一無二の素質を与えられた存在。私の探究の最高の素体として…そして私が求める”天”への道の、最後の関門となるべく生まれたのが…」

——君だ、黒崎一護——

藍染惣右介は淡々と、青年の呪われた根源を暴露した。

「うそ……だろ……」

込み上げる吐き気を堪えきれず、一護は焼け爛れた地べたに崩れ落ちる。

そんな彼を巨悪が諭す。

「納得できないか？」

変わらぬ薄ら寒い笑みで。

「君の誕生は、父と母の出会いは、育んだ愛は、全て”天の導き”だとも思ったか？」

変わらぬ無慈悲な言葉で。

「この世にありふれる奇跡偶然が、本当に全て、”天に立つ何者か”の手による必然ではないと信じているのか？」

悲愴に震える一護へ向けられる、馬鹿な子供を見る憐憫の眼差し。

「…妙な事だ」

——ただの人間に生まれながら、世界の命運を握る程の力を得た君という奇跡が、自分自身の必然を疑うなど。

そして藍染のその一言が、彼の最後の理性の壁を打ち砕いた。

「…あ、うあ…」

絶望に嘔吐く哀れな一護。どうしようもない真実に彼はただただ打ちひしがれる事しか出来ない。

これが、俺の運命なのか。

こんなものが、俺の生まれた理由だと言うのか。

見るも惨憺な有様で茫然自失と虚脱する一護。その脳裏に、これまで耳にして来た自らの秘密を知る者達の言葉が蘇る。

虚化の試練を乗り越えた時、あの白い虚の自分が消える途中に口にした事。

死神の力を取り戻す浦原さんの試練の時、あの赤黒い二つ目の霊絡を握った自分へ斬月のおっさんが言った事。

そして。

——あなたが一人前になったらね。

明かされた謎。

繋がるパズル。

そして現れた、足りない一欠片の空白。

「あ…」

ゆつくりと、一護は振り返る。

地に平伏すヒゲ親父が視界に映り、血だらけの狛村ら護廷十三隊の隊長達を越え、平子ら仮面の軍勢を、浦原ら現世の味方達を通り過ぎ。

そして無事な卯ノ花が癒す、冬獅郎。その腕の中で眠る…

小柄な少女——雛森桃へ目を向けた。

「……どうした。どこを見ている」

そんな一護の動作の真意を、藍染の低い声が問う。どこか咎めるような含意を含む、その冷たい声色に気付く余裕は彼にない。

……知っていたのか、彼女はこの事を。

小さな灯が、希望の残滓とすら呼べない淡い何か、青年の壊れた脳に油を差す。引き摺り出したいその記憶に救いを求めるように。

あの人は知っていたのか。一護が死神の力と、相反する虚の力を生まれながらに持っていた事を。その力が藍染の陰謀により作られた事を。

「そん……な……」

されど、青年が引き摺り出した記憶のどれも、どこを探しても、彼の縫れる救いは見つからない。

……そうなのか。だからなのか。

あの人が俺の力の目覚めや制御を手助けしてくれたのは、俺のためなんかじゃなくて。

本当は――

「……落胆させないでくれないか、黒崎一護」

だがその時。背後に佇む藍染の霊圧が跳ね上がった。

咄嗟に身構える力などない。それでも僅かな本能が体を動かし、怒れる魔王へ首を向ける。

そこで目にした男は、一護が初めて見る純然たる失望の眼差しで、ある謎めいた問を投げ掛けてきた。

「何故君は、”天”と訊いて……」

”地”に伏す抜け殻を見る？」

背筋が震えるほど冷たい霊圧が体を蝕む。

一瞬、一護は何を言われたのかわからなかった。そして二瞬、三瞬と続く沈黙を経ても、彼の頭は眼前の超越者の怒りの理由を導き出せずにいた。

天、だど？

地、だど？

抜け殻、だど？

微かに残る理性でそう困惑する青年は、奇しくも故に、巨悪の”関心”と言う魔の手から逃れることに成功した。

「…どうやら本当に何も感じていないようだな」

興醒めだと冷え切る魔王の化物じみた紫の双眸が一護を睥睨する。

「往くぞ、ギン。穿界門せんかいもんを開け」

「…はい、藍染隊長」

「全く、思いも寄らなかった。二十年もの時を費やし焔にらいだ剣が、こんなくだらない鈍に終わるなど」

空嘯くような溜息をその場に残し、踵を返す藍染惣右介。

そして呼び寄せた市丸に尸魂界ソウルソサエテへ向かう円と四方の障子の次元門を作らせ、悠然とその光の中へ進軍した。

「…道は拓ひらいておく、黒崎一護」

——君に喰らう価値が残されているかどうか、瓦礫と化した真の空座町で問うとしよう。

そう言い捨てると同時に、ヤツの姿が掻き消える。あのバカげた規模の霊圧と共に。

魔王が去った更地の町に、一人残された”必然の勇者”の姿は、まるで…

「…くそ……ッ」

魂が抜けたように青褪める、ただの無力な子供だった。

おまけ・俺自身が月牙になる事だ…篇
俺自身が刃禅になる事だ…

やあ、みんな。

久々の桃ちゃんだよ。

現世でのすやすやシロちゃんにヨン様無双、愛すべきメンタル低反発枕な鯨主人公チャン一。そして卯ノ花さんに治療されて【最後の月牙天衝】フラグをちゃんと立ててくれた一心パツパを確認したあたしは、一旦メインカメラをマイ叫谷（叫谷）の方に引き戻した。

この世界はあたしの完全体欠魂（ブランク）の霊体で出来ている、言わば体内も同然な場所。斬魄刀の精神世界とは異なるため外界の物や生命も持ち込めるし、叫谷自体を好きに展開・収納・構築・移動できる。あのヨン様オサレボーナスにご協力いただいた拘突（こうとつ）くんを捕まえたり解放したりしたのもこの性質によるものだ。

…さて。

これから打倒ヨン様のために我らが黒崎一護少年の強化を行うのだけど、こんな便利な空間があるなら話は早い。せっかく貴重な良い方向に働いた桃ちゃんガバだ。ここマイ叫谷で彼のホワイト封印調整などラスボス戦前の最後の仕上げをしてしまおう。

と言う訳で。

「——第一回桃ちゃん，sホームパーティー開催に向けて、このアホみたいに巨大な叫谷の模様替えを行いたいと思います！ みんな拍手！」

『——パチパチパチ——キャーオネーサマー！——』

「……あの、主様？ あの斬月の少年、心折れてますけど放って大丈夫なのですか…？」

『——彼は折れば折る程よくなるスルメみたいな子だから——むしろここで折れたお陰でトラウマ克服OSRチャンス！——お父さんも卯ノ花さんも”仮面のあたし”もいるからケアは万全よ——』

「そ、そう…：なら結構だけど」

同居人の飛梅ちゃんと桃玉思念達が一緒にチャン一の事で盛り上がってくれる。何せここにゲストを招待するのは拘突くんを除けば初めての事。ホストとして恥ずかしくないホスピタリティ溢れる空間にしくはなくては。

「…まあ確かに女としてこんなつまらない所に殿方をお迎えする訳にはいかないわ。主様に賛同します」

『——飛梅って女子力高いよね——重そうだけど…——シツ、思っても言わないの——』

「何かおっしゃって？」

「はいはい、双方静粛に！」

全く、すぐ喧嘩するんだから。喧しい参加者達を注意する傍ら、あたしはシロニウム過多による闘病期間の一カ月で慣れ親しんだマイ叫谷をぐるりと見渡した。

ア二鯽映画で登場した敵勢力が支配する叫谷は襖や障子などの和風建具が埋まったグランドキヤニオンみたいな所だったが、あたしのもはそんなシニールレアリスム絵画的なオサレさはない。

「改めて見てもホントふざけた空間ね…」

目の前に広がるのは、ベタ塗のような桃一色の空と、延々と続く平らで無機質な地面。まるで3DCGのモデリング画面のような圧倒的手抜き感。鯽本誌の真つ白オサレ背景の方が描き込み多いぞ、ガツデム世界。

こんな所で今のあたしのニチャ翹&襦袢姿のままで一護の前に現れたら、絵的に謎すぎて唐突感が否めない。

なのでここはもつとオサレで親しみのある姿と空間で歓迎しよう。至高神KBTOTも絶対そうする。

飛梅達が静かになったので早速会議の本題だ。

「ではまずはこの落ち着きの欠片も無い世界の模様替え案を募集します。誰かどうぞ」

『——はいはい！——ゲストの黒崎くんリスペクトにあの斬月世界のアレンジ再現はどうでしょうか!?——色だけ青からあたしたちの桃色に変えて——かなり意味深でオサレかと！——』

お、ガバ玉らしからぬ良案が出た。彼女達の言う通り”意味深なオサレさ”はとても大事だ。不思議な世界に入り込んだ主人公がそこで力を授かったり修行&成長したりするのは高OSR値が期待出来るからね。

飛梅ちゃんが一人だけ原作知識が無くて首を捻っているので、ざつと斬月世界の光景を説明する。えーと、のっぺりとした青紺色のポスターカラー風な摩天楼群が世界ごと水平になってて…

「…大体想像できましたが、落ち着きのなさで言えばここことあまり変わらないのでは？」

『……』

女子力高い飛梅さまの正論に押し黙る桃玉。ついでにあたしも。

『——だ、だったら絶望状態の斬月世界ならいいでしょ——水中の空座町ね——見慣れた日常の場所がアットホーム感無いなんて言わせないわよ——』

「あのね、水に沈んだ故郷をアットホームと感じる人なんていると思う？ それに一面青色の世界が桃色になれば目によろしくないでしょう。成仏未遂で常識だけ何処かへ飛んでったのかしら？」

『……ふええ、お姉さまあ——飛梅が虐めるよお——』

お、おう。あたしも良案とか考えちゃった手前何とも反応し辛い。

沈黙は金なので桃玉を見棄てて黙っていると、斬月世界反対派の飛梅ちゃんが代案に面白い事を言い出した。

「別に水没させなくてもよいのでは？ 彼が空座町を目指しているなら、こちらの叫谷でそれを再現してはいかがでしょう」

『——はぁーん？——それは尸魂界側がすでに【ソウルソサエティ転界結柱】でやった

んですけどー？——二番煎じとか飛梅はオサレをわかってないわねえ!?!——』

「黙って聞きなさい。宴と言うものは風流が肝心。そして風流な心配りには今様いまよう以外にも、故郷の草花や料理など相手が懐かしく思うものを振舞う……といった方法があります」

突然なにを侘び寂な事言い出すんだと感心しつつも訝しむあたし達へ、彼女が人差し指を立てて説明する。

「もちろん護廷隊と同じようにただ空座町を再現するだけでは意味も芸もありません。なのでこちらは昔からあの子を知る者にしか知り得ない、彼が懐かしいと思う光景を再現するのはいかがかと」

『……あー!』

そこで同時にピンと来たあたしと桃玉思念達。なるほど、それは確かにミステリアスでとても面白いかもしれない。

そんなこちらの好感触に悪戯っぽく笑みを浮かべ、飛梅ちゃんが一つの名案を口にした。

「具体的には、そうですね——」

それはあたしと彼の再会に相応しい、黒崎一護のルーツと言わべき光景。

まさにこれ以上ないくらい……最高のステージだった。

あれからどれほどの時が過ぎただろう。

つい半年前まで中学生だった子供には、否、全ての理性ある者に

とっては重すぎる、衝撃的な真実。溶け固まったアスファルトの上にて膝を突く黒崎一護は、目の前に開いたままの穿界門を啞然と見つめ続けていた。

もう藍染は尸魂界ソウルソサエティへ着いてしまったのだろうか。本物の空座町へ到達し、町中の霊力を吸い上げ滅ぼしているのだろうか。

そこにいる竜貴や啓吾達友人を。

そして…

「ゆず……かりん……ッ」

一護の視界が涙で滲む。

母を亡くし、大切な人を護れなかった弱い自分が嫌いだった。ルキアと出会い、初めて家族を虚から護る事が叶った。そんな恩人の女死神を、連れ去られたクラスメイトの女子を、共に戦った仲間達を、護り抜いた。

嬉しかった。誇らしかった。

これでやっと、あの時母さんに護られるだけだった無力な自分と決別できた。そう思った。

だと言うのに。

「あ……あ……」

体が動かない。剣を握れない。

立ち上がる事も。走る事も。敵と戦う事もできない。

兄として、最後に残った家族を、妹達を護る事もできない。

「いや……だ……」

一護は悲嘆に喘ぐ。立ち上がらないと、剣を握らないと、敵と戦わないといけないのに。あの途轍もない霊圧を思い出すだけで足が竦む。あの巨悪が明かした真実が、彼の心を闇に沈める。

あんな化物と戦うのか。あの雛森桃の怪物すら凌駕する、まるで蟻の己にとっての象に等しい強者と。これまでの全ての出来事を掌の上で起こし転がした、あの悪魔的権謀術数の権化と。

「むり……だよ……」

全部、全部仕組まれた、敵の掌の上で起こされた出来事だった。
破アラシカル面との、護廷十三隊との戦いも、自分の死神の、虚ホロウの力も、ルキアとの出会いも。

黒崎一護という人間の、生まれも。

そして、両親の出会いまでも。

「お、れは……」

誰だ。俺は一体、”何者”なんだ。

青年は自問する。

全てが偽りで、全てがヤツの台本の通りで、与えられた役割を演じるための、役者。あいつが言っていた通りの、空虚な道化。

何も無い。人生十六年、大した重みもない子供でも、その築き上げてきたものが全部が幻。

それが、俺……

「——黒崎一護さん」

不意に声が聞こえた。臃ゆるげな記憶の母に似た、澄んだ優しい女の声だ。

思わず導かれるように振り向いた先に、黒腔ガルガンタで傷の治療など随分と世話になった四番隊隊長・卯ノ花烈リツがいた。その膝元で、満身創痍の彼の父・黒崎一心の傷に回道を施しながら。

「最低限の治療は終えました。お父上がお話があるそうです」

「は……なし……」

辛うじて返せた生返事を肯定と見たのか、卯ノ花が起き上がろうとする一心の背を支える。

「……護……無事、か……？」

「……親父……ッ」

息も絶え絶えな父の身を咄嗟に案じ、側へ駆け寄る息子。あれほどの虚脱感が嘘のように動いた体は、目の前の家族を想う強さの表れ

か。

こんな自分が何を今更と自己嫌悪に項垂れる一護。そんな彼を、一心はジツと見ていた。

「このバカ息子が……情けねえツラしてんじゃねえよ……！」

「……うるせえよ」

そう吐き捨て、青年は袴を握り締める。

「……」息子”じゃねえ”

気付けばそんな弱音が、一筋の涙と共にポツリと零れていた。

「……ああ？」

「俺は……あんたの”息子”なんて立派なモンじゃねえよ……！」

そうだ。俺はあのクソ野郎の戯れで生まれた実験動物。家族の、黒崎家の不幸の元凶。

ただ藍染の探究のために、あいつの踏み台になるためだけに生まれた男。優しかった母さんも、ウザいけど嫌いじゃないこのヒゲ親父も、こんな畜生みたいな子を生むためにあの外道の手で出会わされた。

遊子も夏梨も、俺が生まれたせいで今藍染に殺されそうになっている。妹達を護らなきゃなんねえはずの、兄のせいで……

「……聞こえねえなア？ お前がこの俺の、”何”じゃねえって？」

「ツ、聞こえてんだろ！ 俺はあんたの息子なんて——」

「フン”ンツ!!」

「痛ダアツ!!」

突如頭に走る鈍い痛み。遅れてヒゲに頭突きを喰らわされたのだと気付き仰天する。

だが当の一心は自分以上に痛々しく悶えるばかり。

「な……な……？」

「痛っ!? き、傷が……」

「え、なっ！ だ、大丈夫か親父——」

「なーんて、うっそぴよおおん！ ボハハハハ——！」

「てめえふざけんなよ!!?」

思わず条件反射でツツコミを入れる一護。そう憤慨する彼へ、むつすりとした一心の呆れ声が投げ掛けられた。

「…ふん、ちったあ正気に戻ったか? 冬獅郎のお返しってヤツだ」
「あ…」

そこで、一護は不思議と自分の心が軽くなっている事に気付いた。そう言えばあの時雛森さんを助けるために、あいつに同じことをして尻を叩いたっけ。妙な廻り合わせもあるものだと、青年は僅かに生まれた心の余裕で自嘲する。

だが。

「…戦えるか、一護?」

たとえ軽くなろうと、事実は変わらない。自分はどこまでもあの魔王の玩具で、そのせいで家族も、かつて護りたいと意気込んだ山ほどの人々も危険に晒す疫病神。このまま藍染に失望されたまま朽ちて死ぬ運命がお似合いの、無価値な人形だ。

「戦えねえんだな、一護?」

「…ッ」

念押し一心の問いに首を垂れるばかりの青年。そこへ父の冷たい声がかかる。

「遊子と夏梨はどうするんだ。お前を兄と慕うあの二人を、お前は見棄てんのか?」

「!? ふざけんな!! ンなこと出来つかよッ!!」

咄嗟に逆上する一護。考え無しの半ば反射的な言動だったが、息子の想いを聞いた一心は巖の相貌を即座に崩した。

「なら何の問題もねえだろ?」

「…:…あえ?」

「俺の惚れた女が腹痛めて生んだ男が、俺の娘達を兄として護ろうとしてる。そんな男が俺の息子じゃねえなら何なんだ?」

青年は息を呑む。嬉しさと申し訳なきが渦巻く感情がこみ上げ、胸が締め付けられる。

そして、男の温かいその言葉を渡された”実験動物”は、やっと一

人の人間としての誇りを取り戻した。

「それによ、「一護」

——母さんが身を挺して護り抜いたお前が、俺達夫婦の息子じゃない訳ねえだろ？

暗く薄気味悪い道を直走る。

飛び込んだ入り口の障子の門は、最早米粒大の光すら見えない。足下に散らばる誰かの遺骨も、奇妙な小物も、三度目の訪れともなれば慣れたものだ。

「…ホントにあの拘流こくりゅうつてのが止まってんだな」

闇の中を一人進む黒崎一護は、両脇の固まった蠢く粘体を一瞥する。

ここは断界だんがい。藍染惣右介が残した現世と尸魂界を繋ぐ連絡路だ。

しかし、此度はいつもと様子が違う。

堰き止められた黒腔ガルガンタの壁から漏れ出す次元の歪みも見当たらず、本来七日に一度で襲来するはずの掃除屋・拘突こうとつも破壊された跡が残るだけ。一護を除く一切が時が止まったかのように沈黙する断界。いつも陰気な所だと思っていたが、これもまた不気味で落ち着かない。

「この辺りでいいか…」

しばらく進んだ一護は骨だらけの足下へ腰を下ろし、徐に胡坐をかいた。

確かこうした後、斬魄刀を膝に乗せて瞑想する…と言うのが作法だったはず。そう青年は、つい先ほどの父黒崎一心の言葉を想起す

る。

『——その姿勢を、刃禪じんぜんと言う』

藍染に斬られた死に体で尚も戦おうとする親父を癒師の卯ノ花烈に凄んで黙らせて貰った一護は、代わりの助言としてある事を教わった。

『じんぜん?』

『ああ、全ての死神の斬術の基本だ。俺達はコイツで斬魄刀の世界へ行き、奴等と対話し交流を深める』

『斬魄刀の世界…』

それは卍解にまで至った死神である一護も当然体験したものの。【斬月】から力を授かり、虚の自分と戦った時の、あの水平に聳える青い高層ビルの大都市だ。

『…こいつは浦原の奴から聞いた、眉唾物の話だ』

身に覚えのある事に緊張する青年へ、そう前置いた一心が本題を切り出す。

『あいつの分析によるとお前の斬魄刀はかなり特殊らしくてな。普通の斬魄刀ではまずあり得ねえ「能力の世代継承」が起きている』

『…親父の【月牙天衝】とかか?』

その推理に父が頷く。浦原喜助が確信を持ったのもそれが一つの要因だったと言っていたらしい。

『それで、ここからが賭けだ』

『…ッ』

彼の険しい顔に一護は姿勢を正す。

『俺の【剡月】にはな、卍解の更に先の力とも言える特別な技が存在する。反動は途轍もなくデケエが、使えばどんな奴でも叩き斬れる無敵の技だ』

『な…!?!』

『俺はお前がこいつを継承していると、お前の【斬月】に賭ける。お前の馬鹿デケエ霊圧と体質を合わせれば、反動を最小限に抑え、必ず藍

染にも届く剣を手に出来る。お前の手で、あの神様気取りのクソ野郎をぶつ倒すんだ…!』

一心の強い瞳が息子を見つめている。そこに込められた想いに一護は気付く。

親父は、俺の手で、俺のくだらない運命を打ち砕けと言っている。高い踏み台を作ったつもりで藍染を逆に台から叩き墮とせと、そう発破をかけてくれているのだ。

『そいつの名はな…』

そして一拍の後、父がその切り札を一護に伝えた。

「――【最後の月牙天衝】、か…」

ポツリと、一人の断界で呟く一護。

強大な一撃にも、どこか悲壮な一振りにも聞こえる、決死の奥義。その力に想いを馳せ、青年は膝元の斬魄刀へ意識を向ける。

…本当は不安だ。不安ばかりが胸に積もる。

自分は何者なのか。本当にこれでいいのか。あの巨悪を倒せるのか。

わからない。だけど、これが今の自分が継げる唯一の道なのだ。

「…ッ、頼むぜ、斬月…!」

ならば迷わず進むしかない。今の俺にはそれしか出来ないのだから。

斬魄刀との対話を求め、目を閉じ、一護は覚悟を胸に斬月との刃禅へ臨む。

一心は言った。この断界は藍染の手により拘流が堰き止められ、やっかいな拘突も滅ぼされた無限世界。外界から隔絶された、永遠の時間を有する空間。力を付けるに最適の修行場であると。

斯くて数瞬。

」

水中に飛び込んだかのような不思議な感覚を経て、閉じた瞼の裏に淡い青の光が射す。

斬月の世界に着いたのだ。

「…なっ!？」

だが彼が目を開けた先にあつたのは、あの青い摩天楼群ではなかった。

「な、町…いや、空座町だど!？」

眼下に広がるのは、水没した故郷の街並み。あまりの驚天動地に混乱する一護は、必死にこの世界の主の姿を探す。

その時、見上げた水面の真下。

そこで彼は、複数の小さな人影を見つけた。

「——何をしに来た、一護」

一人目は若い黒ずくめの青年。どこか斬月の面影を残しながら、身に覚えのない声と顔で一護を睥睨している。

『——つたく、忠告は聞けって言っただろ?』

二人目は白い虚の自分。井上から聞いた、あの双角を仮面の左右に生やす卍解姿のあいつが、呆れるような、憐れむような顔で一護を見つめている。

そして、最後の一人…

『——待ってたよ、一護くん』

一護の抱える最後の謎。藍染の魔の手に絡め捕られた自分と同じ、

されどより複雑な秘密を抱える、悲劇の人。

虚の仮面を被る、白い死覇装の少女が、切なげな声で彼の名を呼んでいた。

俺自身が試練になる事だ…

斬魄刀【斬月】の誇る最強の大技、【最後の月牙天衝】を求めて自らの精神世界へ飛び込んだ黒崎一護。

以前の不思議な青いビル群とは異なる謎の水没都市で目覚めた彼は、そこで三人の人物と出会った。

黒ずくめの青年。白ずくめの虚の自分。そして同じく白ずくめの仮面の少女。

その内の一人。虚の自分が不気味な双角の仮面をずらし、一護を嘲笑った。

「——随分冴えねえツラしてんじゃねえか、なア？ 王よ」

水の中に声が木霊する。自分と瓜二つで、本当に自分のものなのかと驚くほど邪悪な声。

「…うるせえよ。なんででてめえがここに戻って来てんだ…！」

「なんだ、もう忘れたのか？ まったく相変わらず頭の鈍い野郎だぜ」

彼の疑問の通り、この虚は前回の試練で屈服させ、隣の仮面の少女の助言で少しだけ心を通わせたはず。それから僅か数日でまた下剋上かと苛立つ一護は、されど投げ掛けられた別の声に意識が引き寄せられた。

「一護」

若い男の声。三人の中央に立つ、全身が黒ずくめの黒髪の青年だ。

「あんたは…」

「私の質問に答えろ。お前はここへ何をしに来た」

再度そう問いながら、青年が右手を擡げる。それを振り下ろした瞬間、その手に漆黒の刀が現れた。

「…天鎖…斬月…!？」

「そうだ。私だ、一護」

驚く一護へ青年が頷く。まるであの”斬月のおっさん”のように振舞う彼に、一護は確かに不思議な既視感を覚えた。

続けて青年は言う。

この姿は卍解時の斬月の姿。外界で卍解をした状態でここへ来るのは初である一護は、今の彼と会うのも初めてだ。

『……』

それにしても、と一護は三人を観察し唾を呑む。

この斬月世界に住む彼らが揃って自分の前に現れるのは初めてだが、誰もが随分と殺気立っている。唯一最初に歓迎してくれた残る一人、仮面の少女も以前の虚化試練の時と比べどこか緊張しているように見えた。

——— 今度の斬月は暴れるぞ。

ふと父親の台詞が頭を過る。どうやら、今回はかつてないタフな試練になりそうだ。

息を整え、一護は己の覚悟を声に乗せる。

「…あんたに訊きてえ事がある」

「訊きたい事？ 【最後の月牙天衝】の事か」

「！」

やはり、彼らは外の世界の話聞いていた。それにこの非友好的な態度。一心の言う通り、斬月は余程この技を一護に教えたくないらしい。

「…そうかよ。けどこっちは…教えて貰わねえワケにはいかねえんだ！」

剣を握り戦意を漲らせる。外の世界では遊子や夏梨、竜貴達が今も藍染に殺されそうになっている。ヤツに対抗できる力を早急に会得

しなければならぬ。

「それが何だ」

「…なに？」

だが、いつも彼の覚悟に耳を傾けてくれた斬月は、まるで他人事のように一護の想いを一掃した。

「お前の護りたいものがどうなるうが…知った事か！」

「なっ…!？」

突如、黒ずくめの青年が水を蹴る。凄まじい加速と共に繰り出された剣の一撃に、一護は咄嗟の回避で辛うじて致命傷を免れた。

「この世界から失せろ、一護！ ここにお前の欲するものは無い！」

「ぐっ…くそっ！ どういう事だよ斬月!? あんたは俺のために力を貸してくれてたんじゃねえのか!？」

初めてだ。初めて斬月に敵意を持って攻撃された。いつだって味方だと思っていた存在に裏切られ、混乱と悲憤に一護は叫ぶ。

「なんで…なんで…ッ！」

まさか、彼もなのか。一護の脳裏にあの”交配実験”の文字が浮かぶ。

世代継承なんて珍しい能力を持つ斬魄刀など如何にも訳アリだ。よもや斬月ですらヤツに、藍染に仕組まれた力なのか。だからヤツを倒せる力を教えたくないのか。そんな憶測にドロドロと心が、世界が濁っていく。

「——違うわ」

だが不意に、彼の思考の汚泥を清める声が投げ掛けられた。咄嗟に振り向いた一護は、そこで両手こぶしを握り締める三人目の人物、仮面の少女の姿を見る。

「彼は…あたしたちは、藍染惣右介の味方じゃない」

「！」

「あなただけの味方なの、一護くん…！」

強い気持ちの籠った宣言。顔は見えない。それでもそんな切実な

声で紡がれた言を戯言と断ずる事は一護には出来なかった。

「…ッ、それを信じろつてのか…？　だ、だったら何で——」

「何故力を貸さない」と？」

「…！」

背後からそう述べたのは天鎖斬月の青年。仮面の少女の訴えに剣を下ろしていた彼が、憤りの怒顔で自由な左腕を大きく振るう。

「ならばこの世界を見ろ、一護！　希望に満ちた、天を衝かんばかりの摩天楼の群れだったお前の世界は！　お前の身近にあった町の風景に成り下がった！」

一護はハッと目を見開く。当初から不気味に思っていたこの地の異変。その原因である彼を、斬月は静かに睥睨した。

「全てはお前が絶望し、歩みを止めたからだ」

絶句。

突き付けられた事実には放心する一護へ「そんな弱者に教える事など無い」と青年が吐き捨てる。

…俺が、歩みを止めたから。

そうだ、最初から心当たりはあった。しかしそこから目を逸らそうとする彼を、隣の沈痛な声が引き戻す。

「…運命を知ってしまったのね」

悔いるように仮面の少女が呟く。この場で最も異質な存在である彼女だけが、一護の不幸を憂いている。

「ビビっちゃまったのか？　他人に敷かれたレールの上を走る恐怖によオ」

そこに小馬鹿にするような挑発が投げ掛けられた。虚の自分だ。

「ッ、てめえ…」

「情けねえ！　それでも俺達の王かよ、ヒヤハハハッ！」

「なっ…ぐあアッ！」

嗤いながら斬り掛かって来たヤツに弾き飛ばされ、一護は水中の建物に激突する。慌てて体勢を立て直した所に、虚の更なる斬撃と言葉が襲い掛かった。

「一護！　てめえの走り続けたレールを思い出せ！」

「…！」

「力だ！ 敵だ！ 戦いだ！ 奇跡や偶然じゃあり得ねえほどの力を持ってこの世に生まれた！ それを全力で振るえる最強の敵を用意された！ 俺達の胸の奥底に眠る獣の本能、戦いへの渴望を満たすための最高の戦いこそが…俺達が背負った運命だ!!」

心底愉しそうにそれを誇る白い自分。しかし当然一護にとっては唾棄すべき陰謀。

「ッ、ふざけんな！ そのくだらねえ運命ってやつのはせいで俺の妹や仲間達が殺されそうになつてんだぞ！」

「わからねえ奴だな、一護。あいつらが殺されそうになつてる理由はただ一つ。てめえが…」

——弱えからだ!!」

その怒声に一護は思わず硬化する。

「レールを敷いたヤツの迷惑がどうこうじゃねえ！ てめえの力を引き出す！ てめえの敵を喰らう！ てめえの戦いに勝つ！ そいつア誰もが生き残るためにやってる自然の摂理だ！ それの何が怖えんだ？ 何に絶望してるってんだ!?!」

「そ…ん…」

「教えてやろうか？ 一護、てめえは誰かに敷いて貰ったレールを走るのに絶望してるんじゃないやねえ」

そして白い自分は剣を下ろし、指を突き付け、心底軽蔑するようにその一言を吐き捨てた。

「てめえは、ただ…」

あの野郎
藍染にビビッてるだけなんだよ」

胸が抉られたような感覚だった。戦慄が体を走り、喘ぐような吐息が肺から零れ出る。

「そうだ、一護。お前は、藍染惣右介の底知れぬ智と力に怯えているの

だ」

「斬…月…」

そんな彼を斬り裂く、黒ずくめ男の追撃の言葉。

「お前は既に、ここに来る前から、自らの運命を背負い乗り越える覚悟を決めていた。この世界に降り注いだ雨が止んだのがその証だ」

斬月が上層の水面を指差す。キラキラ輝く温かい陽光は空に雲無き印。

「…だが未だこの世界はかつての姿に戻らない…！ お前が敵の強大さに足を竦ませ、立ち向かう事を恐れているからだ！」

「そ、れは…」

「何故だ！ 何故自らの運命を乗り越える覚悟ができて、敵と立ち向かう覚悟ができない!? 更木剣八との、朽木白哉との、ウルキオラ・シファアとの絶望的な戦いにおいても最後まで諦めなかった強いお前はどこへ消えた!？」

斬月の剣幕に黙し項垂れる一護。その胸に今まで封じてきた感情が吹き零れ、大渦のように蜷を巻いていく。

：無茶言うなよ。あんなのどうしろってんだよ。思わず本音が零れそうになり、唇を噛んだ。

脳裏に、心に、体に刻み込まれたあの恐怖が彼を震わせる。近付くだけで魂が潰れかけるほどの霊圧。打ち込んだ剣から伝わる馬鹿げた規模の力。そして生まれる前から人の人生を弄ぶ手練手管。それは全てが全くの未知、本能で敗北を悟ってしまう、絶望的なまでの恐怖だった。

あんなのと、一体どうやって戦えば…

「思い出して、一護くん」

ふと、俯く彼の鼓膜を、切なげな声が震わせる。ぼんやりと上げた顔の頬に、ふわりと小さな手が触れた。精神の中なのに、そこに人の温もりを感じてしまうほど、優しい手付きだった。

「あんな…」

「思い出して。あなたが初めて、斬月の名を呼んでくれた時の事を……」

仮面の少女が祈る様に何かを諭そうとする。その頼みを幾度と反芻し、漸く一護は彼女の真意を理解した。

……そうだ。あれはルキアを助けに行くことと決めた日の、浦原さんに死神の力を取り戻す無茶な試練をさせられた二日後の夜の事。

ルキアから譲り受けたものではない。自分だけの新たな力に目覚めた後、それを更に引き出す修行であの下駄帽子の【紅姫】に殺されそうになっていた時。逃げ惑う情けない自分へ斬月が送ってくれた、鼓舞の一声。

それは、確か……

「……敵は一人、己も一人。何を恐れる事がある……」

一護がその言葉を諳んじた直後、少女の纏う空気が喜色に変わった。

同時に、彼の胸で沸々と熱い何かがかみ上げる。

「そう、あなたが恐れる事は何もない……！ あなたが自分を信じる限り、あなたは……」

——誰にだって勝てるっ！

それは一点の迷いも曇りも無い、力強い明言。あの藍染惣右介を臨み斯くも勝気な台詞を叫ぶ少女に、斬月も、虚も、誰もが当然だとそれぞれ顔で語っている。

本気なのだ。彼らは本当に自分達が、俺達があいつに勝てること確信しているのだ。

……ああ、全く。

一護はクスリと自嘲の笑みを零す。これでは一人弱気になっている自分が馬鹿みたいじゃないか。

『!!』

その時、世界が揺れた。

巨大な地鳴りが水中を掻き混ぜ、町を崩す。続くように跡地より新たな建物が垂直の地面から聳えていく。次から次へと、天を貫かんばかりの高層建築が。

ここは黒崎一護の精神世界。己の心境の変化が大地に雨を降らし、海に沈め、塔を建てるのだ。

「…待たせたな」

足下の天変地異を見向きもせず、一護の口が謝罪を綴る。

恐れはない。不安はない。道は見え、足は震えず、確と未来を踏み締めている。

「出来たぜ、覚悟。護りてえモンを護る…何度倒れても立ち上がる…歩む覚悟” ってヤツがよ！」

そう勇む彼の瞳は、煌めくばかりの希望の星々で満ちていた。

「……そうか」

一護が見据える斬月が、ポツリと、彼の覚悟に言葉で頷いた。青年の両隣には寧猛な笑みを深める虚の自分と、胸元で両手を握りひかえめにはしゃぐ仮面の少女。ひとまず彼ら三人に自分を認めさせるには至ったようだ。

だが。

「…それで、あんた等から【最後の月牙天衝】の事を聞くにはどうすりゃいいんだ？ 三人とも倒すのか？」

そう。ここまで来て一護はやっとスタート地点に立つただけ。幾度と戦った白い自分も、斬月も、死力をかけて戦わないといけない相手。

そして仮面の少女も、想像通りの人物であれば眩暈がする程の強敵

だ。

「違う」

「…何？」

”三人”、ではない」

しかし、黒ずくめの青年の唇が紡いだのは否定の二文字。どういう事かと問い掛ける一護を余所に、左右の二人が悠然と斬月の側へ近づく。

そして一斉に、その目を”王”へ向けた。

「お前が」

「戦うのは」 「あたし達」

『一人だ』

その瞬間、三人の体が光となって散り始めた。斬月と虚は粒子に、仮面の少女は細い鎖状の姿に、それぞれが変化し一塊に集まっている。

「な、何だよ……それ……!?!」

驚愕する一護の前に現れたのは、片腕から胸元に幾重も鎖が巻き付いた、白いコート姿に片面片角を生やす、白い天鎖斬月の青年だった。啞然と呆ける一護へ顔を上げ、男がゆっくりと口を開く。

『——本来、私達は二人で一つ』

低く、荒々しく、可愛らしくも聞こえる白い青年の声。

『そして私達の巨大な力が、未熟なお前を滅ぼさぬよう、最後の一人が封をする』

「…俺を…滅ぼ、す……?」

『それが、お前が今まで振るって来た力の、真の姿だ』

語られた真実は、いつぞやの試練で虚の自分が言っていた事と同じ。だが比喻ではなく本当に合体するなど想像も付かず、一護は驚愕に喉を鳴らす。

そしてただ一人異質な少女の存在理由が今、漸く明かされた。同時にその正体に対する推測が真相へと大きく近づく。

残された憂いの殆どを晴らし、一護は改めて己の力の化身達との戦いに士気を高めた。

『お前は先程言ったな。己が護りたいものを護ると。何度でも立ち上がると』

それがこの場における互いの最後の問いになるのだろう。漠然とそう悟った一護は、斬月達に短く肯定する。

彼の想いを受け取った白い青年は、一言『分かった』と、何かを振り払うような相槌を返す。

まるで二度と戻らない何かを振り払うように。

『ならば今、お前の覚悟の軽重を…』

——試してみようッ!!』

「…ッ、上等だ！俺がみんなを…」

——護るんだよオオオッ!!」

小さな町が、海が埋め立てられた青の世界。劈く摩天楼の間を、二人の、四人の咆哮が木霊する。

…斯くして両者の天鎖斬月の共鳴を合図に、黒崎一護の最後の試練は始まった。

俺自身が河原になる事だ…

宙を蹴ったのは互いに同時。

この世界は彼らのもの。その足を妨げる障害は何もない。

『——力が増したな…！ 何が変わった？』

相手の問いに王は、黒崎一護は「さあな」と惚ける。護りたいもののためになら、彼はどんな困難にも立ち向かえる。それを教えてくれたのは他でもない目の前の”力”^{かれら}なのだから。

覚悟を胸に一つ。強者と弱者の剣は幾度と交わる。

蜻蛉から袈裟斬り、下段から逆風。弾く遠心で右を薙ぎ、相手の唐竹と打ち付け合う。斬り払いから繰り出される刺突を捌き、流れるように胴に一文字。

斬り、斬られ、突き、突かれ。振るう刀剣に心に乗せ、飛び散る血肉を心で補う。そんな鎬が削れるような二人の戦いは続いていく。

一日、一週、一月。寝ずの食わずの果てしない時が経つ。そしてある時、ふと一護は微かな違和感に戸惑いを覚えた。

何だ、この剣。この斬月の剣は。

最初は気のせいだと思った。相手は自分より遥かに強い。一時でも気を抜けば即座に死ぬような緊張の中なのだ。想いを読み取るような余裕はないはずだった。

しかし打ち付け合う度、その感覚は少しずつ鮮明になっていく。髪は伸び、衣類は千切れ、永久に等しい臙げな時間の中で一時も休まず、耐えず剣を交わし続ける王と騎馬。

…なんで。

それ程の超人的な世界に身を置いて、力を磨き、一護は漸く彼らの

心に触れられた。

：何であんたがそんな剣をしてるんだ。

そこにあつたのは、悲愴。

こんな気の遠くなるような間も戦い続けているのに、彼の剣には一欠片の憎しみも映らない。あるのは底のない、深い、深い愛情。

そして胸が潰れそうな程の、寂しさだった。

—— お前の護りたいものが、私の護りたいものではないんだ。

不意に彼の言葉が頭を過る。敵意に満ちたその言葉も、今になれば異なる意味に聞こえてくる。

知りたい。知らなくてはならない。自分と彼らの護りたいものの、一体何が違うのか。

自分は王で、彼らは騎馬。王の力だ。ならば彼らを知るには彼らに触れなくてはならない。

そして幾度目かもわからない鏝迫り合いの中、彼は遂に、その光明が見えた気がした。

「…そうか」

一護は思い出す。初めて斬月を手にした時。初めて虚の自分と戦った時。初めてヤツを倒した時。

自分はいつだって、斬月を、虚を、己自身の力として受け入れてきた。

もしそうなら、最後の月牙天衝とは、きつと…

『…そろそろ終わりにするぞ、一護オツ!!』

白い斬月が摩天楼を蹴る。最初は目にも留まらぬ飛翔だった彼の動きも、今や確と追えている。

強くなった。お前と、俺の力と満足に戦えるくらい、黒崎一護はこの地で強くなった。

ならばもう、争う事は無いだろう？

そう無言の問いを瞳に乗せ、一護は…

『!!』

斬月の剣を、その胸に受け入れた。

一護

お前は子だ 我等の宝だ

知るなと願った

争いを知るな

悲劇を知るな

されどこの地の雨は冷たく暗い

だから 一護よ

お前が雨を掃ってくれるのなら

我等は——

戦いが終わった。斬月と虚も、またそれぞれの好む場所へと戻っていった。多分、眺めの良いお気に入りの所があるのだろう。悔いはしない。哀しみもしない。何度と空を曇らせ雨を降らせた不出来な王だ。別れの時くらい、彼が好んだ蒼い空を見せてやりたい。

「――往くのね、一護くん」

暫しの休息で霊圧を整え、一護は背後の声に小さく頷いた。

「…ああ」

そこにいるのは残った最後の一人。白い仮面の少女。

少し気恥ずかしかったが、二人きりなら言わねばならないだろうと王は肩越しに謝罪する。

「疑って悪かった」

「え…？」

か細い声で問い返す彼女へ、一護はバツが悪くなり頭を掻く。

「何度もあんたに助けて貰ってたのに、藍染の手下だなんて疑っちゃまって」

「――な…ひ、酷い…！ 今までずっと頑張って、いつもやんちゃしたがるホワイトを宥めて来たのに…」

「…え、えっ？ あ…す、すみません…」

項垂れイジケる少女の姿が珍しく、思わず平身低頭に謝る一護。外見…と言っても髪型と体つきくらいしかわからないが、どうやら声の通り多少の幼気はあるらしい。少し意外な一面を見れたと一護は和む。

その後、どちらともなく唇を嚙んだしぼしの沈黙。
恐らく、彼女と会うのもこれで最後。訊きたい事はまだまだ尽きない。

しかし…

「遊子たちが待つてる。俺を戻してくれ」

「…いいの？」

「ああ、あいつらを護るためにここまで頑張ったんだ。やるべき事をやんねえと」

外でどれだけの時間が経ったかなんて考えない。妹たちの、友人たちの、仲間たちの無事がどうかも。

信じるんだ。みんなきつと生きていると。

「…わかったわ」

その言葉と時を同じくして、視界が、聴覚が、五感がゆつくりとぼやけていく。多分、ここに来るのもこれで最後だろう。

色々な後ろ髪引かれる思いで頭を振り、一護は「じゃあな」と仮面の少女に別れを言う。

覚悟は既に出来ていた。

「一護くん」

だが、ふと。最後に少女が口を開いた。

振り返り見た彼女は、摩天楼の世界と共に光の中へ消えて行く。

それは、もう目覚めも目の前の事だった。

「お外に出たら、一言文句言っついて」

「…文句？」

去り際の唐突の注文に訝しむ一護。

そして遠のく意識の最後に、彼女の拗ねるような苦笑が聞こえた気がした。

あの人待ってるから。

ぼたり。

冷たい何かが頬に垂れる感触に驚き、一護は目を覚ます。

慌てて辺りを見れば、直前の光の海から一転した闇の世界。足下には人や獣の骨が散らばり、薄気味悪い粘体が左右の長い壁面を這うように固まっている。

戻って来たのだ。

現世と尸魂界ソウルソサエティを隔て、繋げる空間、断界だんがいに。

「……こっちでも伸びるのかよ」

視界を覆う鬱陶しいオレンジの前髪を掻き分け、一護は立ち上がる。思わずふらついた体は斬月達との激戦の影響だけではなかった。

「身長まで伸びてねえか、これ……？」

軋む骨を前屈運動で軽く慣らす。斬月世界では気付く余裕のなかった体の変化を一先ず確認し、落ち着かせる。

彼らとの果てしない戦いで幾つもの壁を超えた。その力を正しく使えるほどの霊圧を得た。

大丈夫だ。動ける。戦える。俺は今までで一番強い。別次元に強

くなつた。

だが：

「それでも、勝てるのか……？」

不意な震えは武者震いか。それとも真逆の、忌むべき心の弱さか。長い時が経っても色濃く断界に残り続けるヤツの霊圧。それを感じていると、あの恐怖がじわじわと蘇って来る。

「あんだけ修行しても……追い付けないのかよ……」

力を付けたからこそより鮮明にわかる、わかっってしまう——宿敵・藍染惣右介の強大さ。

本当にこれでよかつたのか。ここで俺が強くなる事自体があつたの計画だつたら。俺がこの技を、文字通り全身全霊の力の一撃を手にする事も、それを跳ね除け踏み台とするために仕込まれたものだらう。

この断界を開いたのも堰き止めたのもあいつ。【最後の月牙天衝】を持つ親父とお袋を出会わせたのもあいつ。全てが未だヤツの手の上である事は十分あり得る話だつた。

力だけならウルキオラと同じだ。死ぬ時まで恐怖に抗える。戦える。

だけどあの巨悪の恐ろしさはそれだけじゃない。これまでの敵とは全く違う類の強さ——知略を併せ持つ魔王。ただの高校生の一護には想像も付かない手段、あの手この手で彼の勝利の芽を摘み取つて来るのだらう。

その巨大な未知が、理不尽が、何よりも怖ろしい。

「……馬鹿か俺は……ッ」

浮かび上がる不安を振り払わんと、一護は走る。

もう他に手は無いのだ。全てを犠牲にする究極の奥義。ヤツがそれを自らの糧とするつもりなら、それを上回る力と想いを乗せればい

い。

行ける。俺なら行ける。俺達なら行ける！

そんな根拠のない言葉で自らを奮い立たせ、出口へ逸る一護。急がないと、早くヤツと戦わないと、余計な事ばかり考えてしまいそうだった。

そして一護は、断界の果てに差し込む光の中へ飛び込んだ。

「——着いた…のか？」

駆け抜けた先にあつたのは、曇天。

照らす陽光を遮るその下には、現代風の街並みが広がっていた。当然尸魂界にこんな風景は存在しない。

「ここ…もしかして空座町か？ 不味い…！」

よもや【転界結柱】で避難轉移させられた故郷に直接降り立ったのかと焦る一護。だが咄嗟に遊子ら妹たちの無事を確認しようと霊圧を探った彼は、そこで硬直した。

「…無^ねえ」

そう。ない。ないのだ。霊圧が。

遊子と夏梨のだけじゃない。竜貴も、啓吾も、水色も、戦った市丸ギンも。

あれだけ化物じみた魔王の、藍染惣右介の霊圧すら感じられない。

「どういう…事だよ…っ」

一護は慌てて薄暗い町中を走り回る。だが誰もいない。空座町は町の人達ごと轉移させたと聞いていたが、これでは話が合わない。

「…なんだ…何か違和感が…」

人を探して辺りを見渡す一護は、ふと得体の知れない感覚に足を止める。何かがおかしい。無人であるだけでない何かがある。

そして自らの記憶に意識を向けた時、彼はハッと気付いた。

「…このケーキ屋…お袋が好きだったヤツ…」

町の一角。昔よく母と買いに行つた個人経営の店。

だがそれは、今ここにあって良いものではなかつた。

「なんでこれが…俺が中学上がった時に潰れてたはず…」

違和感の正体がわかつた一護は再度町中を駆ける。空の雲が流れ、視界が夜のように暗くなつていく。一つ一つが記憶と合致していき、推測はある事実に行き当たる。

その時、彼の頬に水滴が滴つた。

「……雨……？」

見上げた天から一つ、また一つと降つて来る冷たい雫。佇む間も雨足は強まり、本降りが始まる。

ただの自然現象だと言うのに、胸の騒めきは増す一方。

そうだ、この光景は。

「……まさか……」

あり得ない想像に身を委ね、一護は再三、走る。何かに急かされるように、ソコへ赴かねばと。

超越者の領域に足を踏み入れた彼にとって、ソコは大した距離ではなかつた。子供の散歩で向かえる距離。学校の帰りに母と連れ立って歩ける距離。だからこそその悲劇であり、同時に一生消えない傷を幼い少年の心に残した場所。

「……ッ」

一護が着いた場所は、河原だつた。

六年前、彼の母が虚に喰われた、己の人生の転換点。既に過ぎ去つたはずの時が、そっくりそのまま巻き戻つた空座町に、黒崎一護は迷い込んでいた。

「……こんな事……一体誰が——」

だがその瞬間、青年の胸中で何かが蠢いた。咄嗟に胸元を抑え、一

護は直後に思い出す。この感覚を、この場所で起きた、もう一つの人生の転換点を。

ゆつくりと、一護は首を横へ向ける。

長雨で水嵩の増した川。

立ち込める淡い川霧。

しとしとと降る凍える雨。

目に映る景色が首の向きと共に変わっていく。

対岸の街並みを過ぎ、登校時に毎日跨ぐ橋を伝い：

そして、真後ろへ振り向いた一護は——そこで見た。

「あ……んた……」

白い着物を着た、小柄な人影。

忘れもしない。あの雨の日に出会った、不思議な年上の女の子。

どこか切なそうな顔でこちらを見つめる、反転した死覇装の少女が、六年ぶりの再会を喜んでいた。

「……ハンサムになったね、一護くん」

——おねえちゃん、見違えちゃった。

俺自身が漂白になる事だ…

「——雛森…さん…:…?」

冷たい梅雨の雨が降り注ぐ。

六年前の街並みが広がる無人の空座町に迷い込んだ黒崎一護。当時の思い出に急かされ「まさか」と辿り着いたあの因縁の河原に、一人の女の子が立っていた。

尋ねたその名は、彼の知らない自身の過去に深く関わる謎多き人物——雛森桃。その女死神と瓜二つな容姿をした白い死覇装の娘が、困ったような笑みを零す。

「…ふっ、忘れられちゃった。もうあなたにとってあたしは、”本好きのおねえちゃん”じゃなくて、”雛森桃”になってしまったの?」
「…ッ」

少しだけ試すような白服娘の意地悪に一護は声に詰まる。
忘れる訳がない。ここは彼女と最初に逢った、母が亡くなった六年前の梅雨の日。あの時と同じ光景、同じ状況なのだから。

尸魂界^{ソウルソサエティ}で出会った死神の”雛森桃”ではない。幼い九歳の時、この場所で出会った不思議な年上の着物少女——”ご本が好きなおねえちゃん”との再会だった。

突然の出来事に困惑する一護を余所に、少女はゆっくりと辺りを見渡しながらポツリと呟く。

「…不思議よね」

「え…?」

見えない何かに触れるように、彼女が宙を優しく撫でた。

「ここは人の記憶が交わる、泡沫^{うたかた}の世界。輪廻の輪から外れた悲運の魂たちが集まって生まれる、現世とも、尸魂界とも、虚圏とも、時間

すら別たれた……永遠の過去」

「永遠の……過去……」

「訪れる人が持つ、朧気だけど強く心に残る思い出に引つ張られて、この世界はその都度景色を変えるみたい。この六年前の空座町は、あなたが来た丁度今、初めて生まれたの」

記憶、輪廻、悲運の魂、思い出に引つ張られて……。どこかで聞いたような話だった。

だがその微かな既視感は、少女の唐突な問いで霧散する。

「あの人と、戦う覚悟を決めたのね」

嬉しそうにも悲しそうにも見える複雑な顔。”あの人”と言うのが誰かを察した一護は、握る剣を慎重に下段に構えた。

「……あなたは、味方……なのか……？」

未だに彼女の事は殆どわかっていない。藍染の部下だった雛森桃との関係も、一護の中にいる仮面の少女との関係も。それでもその沈鬱な声色から、目の前の人物があの魔王に敬意を持っているのを感じられた。

「ええ、そうよ」

だが彼女の答えは、その敬意とは反対の、肯定。

それも天秤にかける程の葛藤ではなく、もつと……

「あなたになら、どんな事をされても……どれほど嫌われても、受け入れられる」

「え……？」

「それくらい……あたしは、あなたの味方」

使命にも似た、深い覚悟だった。しかし言葉とは裏腹に少女の声はか細く弱々しい。

「ッ、それはどういう……」

戸惑う一護は、されどそこでハッと思い至る。

そして数度の逡巡を経て。

謎多き恩人は深呼吸の後、黒崎一護に絡み付く最大の秘密を、遂に

明かした。

「あ・た・し・は、あ・な・た・の・最・初・の・味・方。黒・崎・一・護・と・い・う、特・別・な・運・命・を・持・つ・子・が・こ・の・世・に・生・ま・れ・て・く・れ・る・た・め・に・な・ら……」

一 本 吊 橋 の な る ぐ ら

あ な た の 両 親 を 繋 ぐ

沈黙がさあさあと降り注ぐ雨音に掻き消される。

一護は彼女がくれた長い空白のお陰で、幾度もその言葉を反芻する事が出来た。

…自分の生まれが誰かに意図されたものだとは、斬月達の試練でとつくに受け止めていた。家族や仲間を虐げる極悪人の藍染ではなく、幾度も自分を助けてくれた恩人が、あるいは子供の淡い憧れと言ってもいいかも知れないあの年上の女の子が、罪悪感を覗かせ真摯

に話してくれたこの人が、本当の原因でよかったとも安堵した。
それでも。

「…あんた…だった、のか…?」

いざこうして事実を突き付けられると、胸が掻き乱される。「何でだ」と責めたくなる。

「—はい」

それに少女は逃げる事なく、真正面から真実を白状してくれた。

「あたしが、あなたの困難の—全ての始まりです」

懺悔の言葉に潤む、彼女の大きな紅桃色の瞳。雛森桃の琥珀色とは違うその虹彩に、自らの唾然とする姿をぼんやりと見つけ、一護は喘ぐように至極当然の疑問を紡ぐ。

「なん…で…」

放ってほくれなかったのか。そうしたら親父もお袋も出会わなかったのか。あんたの介入無しに俺は本当に生まれなかったのか。問い詰めたい思いは山ほど浮かんでくる。

そんな無数の思いに、俯く少女は一つ一つ応えていった。

「…二十年前、藍染惣右介は崩玉を用いた一つの実験を計画しました。虚の力を有する死神の世代継承を狙ったその実験は、あなたの誕生で成功を収める事となる」

「あ…」

「藍染惣右介は実験の第一段階が成功した時点でああなたの誕生を悟り、生まれるあなたの、人間の精神的感受性が最も高い十代半ばの成長期に合わせて、あの尸魂界離反作戦を決起しました。あなたの潜在能力を覚醒させるのに、それが一番効果的だったから」

全てを側で見てきたであろう彼女の言葉が、あの魔王の底知れない深謀の全貌を浮かび上がらせる。その渦中の真つ只中に自分が生まれる前から巻き込まれていた事実、形容し難い嫌悪感を覚える一

護。

「…それに…あんたが関わってたって事かよ…ッ」

思わず剣を構える。

味方なら何故阻止してくれなかったと短絡的な感情で怒鳴り散らしたい。しかしそれが、自分がこの世に生まれたい事を意味する以上、そして沈痛に唇を噛む少女の想いを知ってしまった以上、一護は押し黙る事しか出来なかった。

その沈黙がしばし経った時。徐に白服娘が「本来」と小さな呟きを始めに、自身の思惑を語り始めた。

「本来、あたしはそこに関わる事はなかった」

「…え…？」

「あなたは藍染隊長の望む通りに生まれ、成長し、そして最後まで…あの人の望む通りの結末を迎えるはずだった」

彼女の顔は暗く、真剣そのもの。だが一護は故に混乱する。

「あたしがあの計画に関わる決意をしたのは——黒崎一護が生まれる事を知ってしまったから」

そして彼の幼い思い出である謎の人物、”ご本が好きなおねえちゃん”は、その最たる神秘性を自ら曝け出した。

「あたしは…」

——あなたの半生を、あなたが生まれる前から知っていた。

呆ける青年を余所に、彼女の話は続く。

「それは藍染隊長の言うように、あなたが意図的に生み出されたとか、手にする力だとかじゃない。もつと、もつと根本的な…。」運命”と言う意味で、あたしはあなたがどのような人生を歩むかを知っていた」

「…ま、待ってくれ！ 何だよそれ、どういう事だよ…!？」

訳がわからない。最早一護の頭は沸騰寸前。

それは最早、”未来視”といって然るべきものではないか。生まれ付いて靈感に優れ、最近では死神や虚などの存在を知った特殊な人間で

ある彼にさえ、信じ難いと思える超能力。

少女の発言は、それに類する能力を自分は持っていると言ったも同然の話だった。

「…何故あたしが、そんな事を知れる不思議な存在に生まれたのかなんてわからない。藍染隊長にさえわからなかった」

「あいつにさえ…」

「ただ…あたしがそういう因果の輪廻から外れた特別な存在だったから、あの人はあたしを手元に置いて…色んな、事を…っ」

僅かに震える体を隠すように、彼女が自身の白い死覇装を握り締め、藍染が雛森桃に与えた崩玉の正体を聞いた一護は、改めて少女と、犠牲になった少女達の不幸を憂い、あの巨悪への怒りを新たにする。

重い感情を溜息で吐き出し、白死覇装の娘は話を再開した。

「だから、あたしは藍染隊長の計画を逆手に取る事にした」

少女は語る。

藍染の『霊能継承計画』の根幹には、死神に相反する力を芽生えさせるための”強大な虚”の個体が必要だった。彼女はヤツの部下の地位を利用し、その改造虚に藍染の想定を超えた潜在能力を秘密裏に授ける。

「それが、個体名【ホワイト】」

——あらゆる色を漂白する、浄罪の剣。

少女はそんな想いを込めて、その矛盾だらけの虚を藍染の実験に提供したのだという。

「…それで、あいつを”ホワイト”って…」

「ふっ。藍染隊長が”藍に染める”から、あの人を倒す剣に相応しい暗喩は他に無いかなくて」

「恥ずかしそうに身を縮こませる白装束の女の子は、一咳で緩んだ空気を散らす。」

「藍染惣右介を倒し、世界の秩序を護る者。それが、あたしが知った黒

崎一護の背負う運命……」

——あなたにしか出来ない事なの。

一護の目を直視し、紅い瞳の雛森桃は覚悟の籠る声で、最後にそう話を締め括った。

しとしとと、河原の草葉が雨を弾く。

空は暗く、地は濡れ、その様はさながら静かに泣き続ける幼子の心象風景のようにも見える。

生まれる前から誰かに決められていた自分の人生。もしかしたらかつて挑んだ四大貴族の白哉も、こんな気持ちでルキアの処刑を黙認しながら戦ったのだろうか。グリムジョーやウルキオラも、救われないう悪霊の運命を認めていたからこそ、あんなに自らを省みない戦い方をしていたのだろうか。

それしか道がないのだと、理不尽を嘆く想いを殺し、剣を握ったのだろうか。

彼らに比べたら、自分は幸福なのか、不幸なのか。

最初から誰かの踏み台にされるために、何も知らない家畜のように両親を交配させて生まれた実験動物。虚の自分に至ってはその運命すら捻じ曲げられ、霊性技術で体中を一から改造されて作られた。

そしてそんな超越者たちの掌の上で今、戦わせられている。

それが、俺の運命だった。

「……ハッ」

だがその時。

二人の間に、一つの笑い声が響いた。

「なんだ、それ」

「一護……くん……？」

困惑する白い死覇装の少女を見つめる彼の顔にあったのは……安堵。

「運命だの踏み台だの好き勝手言われて、ふぎけんなんて思ったけど。俺が背負ってるのって、そんな……」

——当たり前なモンだったのか。

悲運の青年は。笑っていた。

泣き叫ぶでも、塞ぎ込むでもなく。黒崎一護が浮かべたのは憑き物が落ちたような、呆れたような笑みだった。

「要は藍染とか世界がどうこうじゃなくて、自分の大切なものを護らなきゃなんねえんだろ？ そのためにあいつを倒さなきゃなんねえし、世界も救わなきゃいけねえ。結局そんだけの話じゃねえか」

目を見開く少女へ、一護は勝気な顔で心を明かす。

そうだ。世界のためだとか、運命がどうだとか、そういうものはテレビの中のスーパーマンにでも任せておけばいい。

「悪いな、俺はあんたが望むような殊勝な人間じゃねえんだ。世界中の人を護れとか、世界の未来を護れとか、そんな指示には従えねえ」
そして呆ける彼女に「期待を裏切っちゃまうけどよ」と前置いて。

「俺は……俺の大切なヤツらと、俺の目の前で苦しんでる——」

山ほどの人を護るだけだ

いつだったか、そんな事を誰かにも言った気がする。

最初もそうだった。俺はルキアから力を貰って、その力で大勢の人を護りたいと思った。

なら自分の力が誰に貰ったものかなんて関係ない。

今の力を手にするのに、制御するのに、自分は死ぬほど辛くて苦しい思いを何度も経験した。その対価に、それが与えられた力だろうと、自分の自由に使う権利はあるはずだ。

俺は、俺の護りたいモンを護る。文句は言わせねえぞ。

そんな言葉を瞳に込め、一護は目の前で呆ける不思議な恩人を見つめ返した。

『……』

互いの視線が交わることしばらく。

少女がおもむろに俯いた。前髪に隠れた表情を見る事は叶わない。

「……ふふっ」

不意に、彼女が笑った。思わずといった控えめな笑い声が、少しずつ、最後には口を押え肩を震わせるほどになる。

「ふっ、ふふふっ……」

「な、何がおかしいんだよ……！　そ、そりやクセー台詞だったのは分かってるけどさ……っ」

「ふ……ッ、いいえ、ごめんなさい」

少しだけ、どこか苦しそうに胸元の衿を握り、息を整えた後。少女が目元を指で拭い、そして顔を上げた。

「——やっぱり、あなたはあなただなあ……って」

そこにあつたのは、満開の花。

まるで咲き誇るかのような可憐な笑顔が爛々と輝き、一護は思わず目を瞠る。

「その通りだよ、一護くん。あなたは世界とか、運命とか、そういう大きいものはどっかにポイしちゃっていいのっ」

「！」

「あなたの大切な人達を護る。そのオマケでこの世が救われる。あなたにとって、この世界はその程度のものでいいの！」

キラキラ煌めく瞳が、それが彼女の心からの主張だと表している。まるで「その言葉が聞きたかった」とでも言っているように。

別に、と一護は面映くなり頭を掻く。別に世界がその程度のものだと調子に乗っている訳ではない。そこまでイキつてはいないはずだ。

そう自信なさそうに言うと、少女が揶揄うようにしなを作った。

「そう？ でも世界を護った男の子に」お前を護るついでだ」なんて言われたら、女の子ならもう一生あなたの事しか見えなくなっちゃやうよ？」

「なっ！ バツ、そ、そういう意味じゃ……！」

「あらあら。こんなにステキな男の人になったのに、そういう照れ屋さんなのは変わらないのね。おねえちゃん懐かしいわ」

背伸びしてまで一護の頭をよしよしと撫でてくる少女。

…ダメだ、完全に子供扱いされている。外見ならもう彼女の方が自分より年下に見えるのに。

母を亡くしてからはずっと長男らしく格好つけて生きてきたため、こういう扱いは新鮮で慣れておらず、恥ずかしいやら嬉しいやら。真っ赤になって俯く事しか出来ない一護だった。

「……ッ」

だが、ふと頭を撫でるのを止めた彼女が気になり横目で見ると、少女は何やら胸を押さえて俯いていた。眉を寄せ、唇は何かを堪えるようにきゅっと結ばれている。

「ど、どうしたんだあんた……？ さっきも……！」

先ほど笑っていた時も何故か苦しそうにしていた事を思い出し、一

護は咄嗟に相手の身を案じる。

「…ごめんなさい。もう時間、みたい…」

「時間…？」

額に汗を滲ませ、辛そうな笑みを作る少女。

「その前に…一番大事な事を…っ」

そしてフラフラと近付き、一護の胸に手を触れた。

「——っあ」

直後。ゾワリと何かが解き放たれるような感覚と共に……辺りが夜空に飲み込まれた。

その夜闇の正体は、青白く輝く、漆黒の霊圧。

町中に広がり、天の果てまで立ち上るソレは、これまで一護の中で眠っていた彼自身の霊力。あの乱暴で不安定な赤黒いものとは違う、完全で美しい霊力だった。

「…す、すげえ…」

あまりの力に放心する一護。

あの斬魄刀世界で斬月が言っていた「封」が今、解かれたのだ。

「これで…おねえちゃんのお守りは…ひとまずおしまい…」

「これが俺の、力…」

「ええ、今のあなたなら…必ず…っ」

だが一護の感動の陰で、少女が何かの限界を迎えていた。解放された青年の霊圧が引き金となったのか、震える彼女の体が桃色の光を放ち始め…

「——あ…」

突如、今まで感じられなかった少女の途方もない霊圧が、彼の体中を、世界を包み込む。

そして気圧され驚愕する一護の前で、蕾が花開くかの如く…

——その華奢な背中から二対の翅が生え出た。

「あ、あはは……ごめんね、気味悪くて……」

「あんた……それ……」

申し訳なさそうに翅を気にする、突然の異形と化した少女。一護はその霊圧共々圧倒され唾然とする事しか出来ない。

その翅は、まるで宇宙の星雲を閉じ込めたように淡く、煌びやかに輝いていた。羽化直後の蝶の翅に似たそれは、無重力に舞う露状の霊力を纏っている。有機的で、されど虚とは一線を画す神秘性を感じる、不思議な四枚。

羽化に合わせ、彼女自身にも変化が起きていた。白の死覇装が消え去り、ボロボロの襦袢が露わになる。髪も衣服も霊体の一部なのか、毛先や襟元などが霊圧化しており、それはさながら紅炎の毛皮のよう。

どこか既視感を覚える姿と、死神でも虚でもない、不思議な霊圧。その正体は思い出せないが、彼女がこんな姿になった元凶だけは、一護には理解出来た。

「ッ、やっぱり……あんたは……」

「……うん」

か細い少女の相槌に青年は臍を噛む。

恐らく、彼女が最初にさりげなく否定したように、彼女は「雛森桃」ではないのだろう。

元からあの人の中に眠っていた別の人格か、あるいは彼女自身の言う「因果の輪廻から外れた存在」の部分が、あの崩玉による怪物化を経て別たれたのだろう。

彼女には失礼かもしれない。自分がそうなったら落ち込むかもしれない。だが、せめてもの気休めになればと思い、口にするのなら。彼女の姿は……

——まるで御伽噺の飛天や妖精のように、とても、美しかった。

「あ、あの…もう一護くん子供じゃないし、その…そんなに見られると…」

「あつ、わ、悪い!」

はだけた白い太ももを恥ずかしそうに裾で隠す少女から一護は慌てて目を逸らす。些かあれもない服装もそうだが、やはり彼女の異形となった経緯を察するにジロジロ見るのは失礼だった。

「気まずい静寂が過ぎ、お互い頬の熱を覚ました後。」

少女が彼の名を呼んだ。

「一護くん」

切なそうな声に振り向く青年へ、彼女が言葉を続ける。

「…こんなになっちゃったから、多分、もう逢うのは難しくなっちゃうけど…」

その体はふわりと浮き上がり、辺りには少しずつ光の粒子が立ち込める。

そして、彼だけの思い出の女の子は、優しく幼い少年の頬に手を触れた。

「ちゃんと…見守ってるから…」

別れの言葉だ。永遠になるかもしれない、人生の恩人とのお別れ。

「辛い時も、苦しい時も…あなたはきつと乗り越えられる。どうかあなたの望むように生きて…っ」

「な…!・待っ——」

惜しむように思わず伸ばした手は、届かない。

変化は突然。

まるで景色が歪む^{ひず}るように、河原が、川が、川岸が、街並みが、視界に映る全てが、宙に浮く少女の体の中へと吸い込まれていく。辺りに満ちていた彼女の霊圧が収束していく。

一つの形而上の、理を超えた存在へと、結実して。

「…生きて、あなた。」

それがきつと…」

——この世にとっての…

正解だから。

最後にそんな言葉を残し、”ご本が好きなおねえちゃん”は、泡沫の世界と共に…

一護の生きる世界から消失した。

眩しい光に目が眩む。

はたと我に振り返りを見渡す一護の目に、代わり映えの無い景色が映る。

見慣れた河原。見慣れた川岸。見慣れた街並み。

佇む彼の頭上には、変わらぬ十一月の澄み渡った秋晴れ空。
少女と別れた過去と、同じ場所。現代の空座町の川辺に、一護は放心したまま佇んでいた。

「ここは——」
だが、そこで。一護の魂魄が悲鳴を上げた。

「!!?」

ズドンと体に巨大な圧がかかる。軋む四肢、震える足、歪む世界。途轍もない力が彼を押し潰さんと襲い掛かった。

「この…霊圧は…ッ！」
忘れるものか。体が覚えている。染み付いている。あの体中の力を削ぎ落されるような、恐ろしい感覚を。

…ヤツだ。魔王だ。

—— 藍染惣右介の霊圧だ。

「……………る」

ブルリと震える。なんだ。どうした。恐怖か。怖気付いたか。

「……………える」

確かに恐い。相変わらず凄い存在感だ。以前よりヤツの力が増しているかもしれない。

だが。

だが…!

だが!!

「見えるッツ!!」

見える。道筋が。ヤツと戦えている自分の姿が。

ヤツとの戦いの、勝機が見える。

今までどれほど鍛えても、どんな心持でも見えなかったものが。

——勝利が、見えるんだ。

思わず口角が吊り上がる。興奮に流れる汗を拭い、右手の天鎖斬月を、胸の頼もしい霊圧を握り締め…

「……待ってるよ、遊子、夏梨、お前等ッ！」

今、往く!!

英雄・黒崎一護は、思い出の河原を、弱かった自分を振り払うように。

斯くて栄光の戦場へと駆け上る…

俺自身が市丸になる事だ…

悪魔に角はない。

人を騙し惑わす悪魔は、およそ邪悪と見做される外見要素の悉くを排除し、美しい姿で人の前に現れる。

鋭利な尻尾は小ぶりなお尻に、蝙蝠の翼は華奢な背肩に、黒い皮膚は白絹の柔肌に。

そしてその凶悪な嘲笑は、誰もが振り返る清楚可憐な乙女の仮面に隠されている。

青年——市丸ギンは、この五十年でその恐るべき真実を知ったのだ。

『——いつから、見てらしたんですか？』

最初に彼女の姿を見たのは、ウエコムンド虚圏の仮拠点、監視室。

宿敵藍染惣右介の部下として潜り込んで六十年。ある日、霊術院に面白い娘が居ると上司に言われ、共にその女子院生を観察した。

院生——雛森桃は、可愛らしい少女だった。だがその容姿に反し、彼女は自分達死神とは根本的に異なる存在だった。

種族が、ではない。その狂気的な俯瞰視点、知るはずのない知識。精神が自分達”人”のそれではなかった。

言葉や仕草、態度の端々に感じる、まるで先ほど彼女を観察していた自分と同じ、画面を通して見下ろされているような感覚。

雛森桃とはそんな不気味な雰囲気を持つ、少女の姿をした悪魔だった。

『使い潰しなどしないさ。今日から君は——私の同胞だよ』

そんな彼女を、藍染は大層気に入った。

それまでの超然とつまらなさそうに世界を眺めていた暗い目を童子のように煌かせ、新しいオモチヤが見せるあらゆる言動を、あらゆる視点で観察した。

精神はさておき頭脳は平凡だった桃は自身の異常性を隠そうと努力をするも、藍染の前ではそれも無意味。擲揄われ翻弄されながらもあたふた涙ぐましい抵抗をする彼女の無様で可愛らしい姿に、市丸も藍染と共に嗜虐と喜悦の感情を抱いた。

だが。彼は後に少しずつ、最初に少女に覚えたあの恐怖の本質に近付くこととなる。

そしてそのきっかけは桃自身の変化にもあった。

『——そうですね。後悔……してるのかもしれないね』

思えばあれが彼女の、あるいは世界の転機だったのかもしれない。

初めて少女が自発的に行動を起こした三十年前、当時の十三番隊副隊長・志波海燕を用いた寄生型^{ホログラ}虚の実験。

目的のため罪なき者を殺めた心境を藍染に問われた時、桃は悲しそうに彼へそう返した。誰にでも嘘だと見抜ける、彼女らしくない不出来な演技の哀顔で。

実験が終わった直後の複雑な顔をしていた彼女は、まだ僅かばかりの人間性を残していたのだろう。

それが何故ああったのかはわからない。だがその”後悔している者の演技”を藍染は何故か自身への挑発と受け止め、それを意図するほどナニカが根本的に変わった雛森桃を……

魔王は心底愉しそうに「神」と呼んだ。

『——ザエルアポロさんの弱体化ですか？ ええ、もちろん許可しましたけど……何か問題でも起きましたか？』

『——蠅と牛と芋虫と……そうそう、彼ら五人の勧誘をお願いします。大事な大虚達メノスですから』

『——ネリエルさんですか？ 彼女には、えつと……広い世界を見て欲しかったので、その……』

それからと言うもの、市丸は少女の何気ない言葉の全てに違和感を覚えるようになった。

探し求める大虚の名前を部下の破面達アラソカルに伝える時も。勧誘した彼らの配属先を決める時も。まるで世界そのものを使ったパズルを埋めているような、作業じみた幼稚な喜色を感じた。

その最たる例が、黒崎一護。

何故志波海燕で実験をしなければならなかったのか。何故朽木ルキアに海燕を殺させたのか。何故死神の魂魄を素体とした寄生型ヴァーストローデ最上級大虚を作り、それを天敵の滅却師クインシーに寄生させたのか。何故その場に志波一心をおびき出し、滅却師の女と出会わせたのか。

『——派手な見世物じゃないですよ？ 特大の布石を二つ、あと細かいのも三つか四つ打ちたいだけなので』

当初は訳がわからず不気味に思い、そして計画の最後に現れた浦原喜助が滅却師を救った時、市丸は思わず戦慄した。

奇跡偶然を必然に変える存在。神に賽子を振らせない、本物の超越者を見た気がして。

……どこまで”見えて”いるのか。その”目”を使って彼女は一体何を成そうとしているのか。そしてその目的は、果たして己のその妨げとなるのか。

そんな超級の警戒対象が宿敵藍染の軍門に下り、自分の唯一守りた幼馴染——松本乱菊と親しくしていた彼の心中は察して余りある。

『——イヅル。君雛森ちゃんと仲良えんなら、もう少しあの娘のこと

プライベートでも支えてやってな。ボクの五番隊副隊長の後輩やし』

『——伊勢ちゃん。少しボクのお節介に協力して貰いたいねんけど、ええかな。ウチの副官の恋路が心配になつてん』

『——卯ノ花隊長。最近イヅルの周りで女の子達が騒がしいんやけど、女性死神協会で何か話聞いとりませんか?』

こちらの野望を知られている想定で、市丸は、雛森桃暗殺”の最終手段を胸に秘め、乱菊を守るために幾つか手を打った。

その一つが、吉良イヅル。桃の同期の友人にして優秀・従順な彼を名指しで引き抜いた最大の理由は、あの悪魔を監視させるため。

さらに彼をエサに、恋バナに魅かれる女心を巧みに利用。密かに『吉良副隊長の恋を成就させる会』を女性死神協会内で作らせ、それらを陰で操り桃と乱菊の関係を間接的に見張らせた。

『友達ですか…あたしにとっては乱菊さんですかね。最初はシロちゃんを支えてくれる人として打算で近付いたんですけど…なんか気付いたらこっちまであの人の側が居心地よくなっちゃって』

『…驚いたな、お前にも友を想う殊勝な心が備わっていたとは。いや、これは雛森を絆した松本副隊長の快拳なのか…?』

『備わってますよ失礼なっ! あとそれ友達いない藍染隊長もバカにしてるの気付いてます? 東仙隊長いーけないんだー』

『待て、そうは言っていない。私が馬鹿にしているのはお前一人だ』
『あなた正直が全部美德だと勘違いしてますよね!』

市丸の警戒網は虚^{ウエコムンド}圏でも張られた。彼女の本音を聞き出すため、東仙や破面達を上手に誘導。

策は上々で情報は逐一集まり、雛森桃の真意を知って一先ずは胸を撫で下ろした市丸。

理由はあの悪魔を殺し藍染の敵意を買う、本末転倒で危険な橋を渡らずに済んだ事。そして当人が出した、例の”シロちゃん”の名に

あつた。

——日番谷冬獅郎。

あの悪魔を悪魔たらしめ、同時に彼女のあらゆる注意を吸引する、この世で最も称賛されるべき哀れな人柱だ。

桃が「人生」と形容し赤い顔で恥じらう彼への感情に、外見通りの年頃の少女らしい甘酸っぱさは欠片もない。

しばらく経って彼女が市丸らに曝け出したのは——年下の幼馴染を偽りの幸せで依存させ、偽りの不幸で絶望させ、その反応の落差を裏で愉しみ弄ぶ下劣極まりない執着心だった。

彼女がこの悪癖にかける熱意はすさまじく、少年に”雛森桃の不幸”を嘆き悲しんで貰うためならば自ら藍染に「あたしを斬って」と頼み込み、実際に腹を串刺しにされることすら厭わない。

清浄塔居林でその現場を目の当たりにした衝撃を市丸は永遠に忘れないだろう。

そんな狂気の少女も、「愛」と豪語するだけの事はあり日番谷冬獅郎の心を壊し本当に不幸にするのは避けたいらしい。

壊れる寸前の綱渡りを愉しんでいるとも言えるが、その重要なピースである乱菊があゝの悪魔の手で害され不幸になる心配は杞憂だった。

故に。この悪辣な愉悦趣味に関わる全ての事柄に対して、市丸は軽口で苦言は申せど決して邪魔となる事は避けてきた。それはあの正義正義と口うるさい東仙も同様。

あの藍染惣右介を虜にするほど特異な人物の敵意を買わないよう、もしくは先輩として後輩の労働意欲を推進するための、必要十分な配慮だった。

『——ごめんね…シロちゃん…』

そして迎えた八月六日。双☒の丘での”大舞台”。

巨悪の傘下に加わってから五十年も待ち望んでいた瞬間に、祭りの

前の子供のようにはしゃいでいた雛森桃。

本番で見せた藍染との息の合った役者ぶりと、それを見せられ悲嘆する幼い少年の道化ぶりに、市丸も知らずの内にウズウズと湧き上がるものがあつた。

『——こんなの……やだよ……』

続く三ヶ月後の空座町決戦。少女の歪んだ“愛”の集大成が披露された時、市丸はそのあまりの愉悦と醜悪さに腹が振れそうになるのを必死に堪えていた。

何が「みんなを守るために死神になった」や。君が藍染の配下に加わったんは「シロちゃんへの御慈悲」を求めためやのうて、彼の絶望が見たいからやないの。

何が「シロちゃん、助けて」や。真実を知った誰もが助けたいんは君やのうて、君のオモチャになつとるそのシロちゃんやないの。

何が「桃は心と体を私に許してしまつた」や。あの愉悦趣味と未来視と着替えの下着姿を覗いただけやん。ほなボクもその「桃の心と体」を許された事になるんか、そない誤解されんの嫌やわ…

魔王と悪魔が手を組むと、こんな喜劇が生まれるのか。対岸の火事とばかりに外道共の愉悦のおこぼれに預かる彼も、正しく悪の一人だつた。

あの瞬間までは。

『——アアアアア”アアア”アアアア”ア”ア”アア”ア”』

それは日番谷の腕の中で死んだフリをしていた桃が、突然上げた悲鳴。

いつの間にか彼女の魄内に埋め込まれていた崩玉を浦原喜助が摘出しようとした時、市丸はどきどきに紛れて藍染を仕留めようとは考えなかつた。

崩玉が奴の手元に無い。奴自身も桃の身に起きた変化に目を奪わ

れている。確かに千載一遇の好機。

だが桃の悲願に協力する際、藍染は鏡花水月を既に使っていた。目の前の奴が本物とは限らない。ならば機を待つのみ。

本来、市丸ギンとはそんな、心を持たない暗殺者だった。

…しかし直後に起きた大事件に、市丸の胸に明確な動揺が走る。

『ば、化物…！』

桃の体から生れ出たのは、無数の彼女が絡み合い象る異形の怪物。明らかに崩玉の正常ならざる影響が見て取れる彼女の変化に流石の市丸も優先順位を変更せざるを得なかった。

藍染を殺せても崩玉を奪えなければ意味がない。だが桃の異形化した体が日番谷の呼び声で幸せそうに消滅した後、肝心の崩玉の気配はどこにもなかった。まるであの怪物と共に霊子へ戻ったかのよう

に。

その時の市丸の心理は筆舌にし難い。百年の悲願の半分を果たせなくなつた。乱菊の魂を取り返せなかった。当然の怒りを意識無き桃へぶつけようにも、藍染の前では難しい。

だが悪魔が丹精込めて育てた黒崎一護に八つ当たりしている途中、市丸の前に最高の希望が転がり込んだ。

『——漸く、私を理解してくれたか……』崩玉”よ』

二つ目の、市丸の狙う最初の崩玉。桃の持つ崩玉をデコイとし、密かに融合を開始させていた真の崩玉が、藍染の胸元で輝いていた。

慎重な市丸は昂る感情を律し、元の冷静さを取り戻す。機会は一度。敵は理の領域にまで至った強者。そして断界だんがいでの意味深なヤツの発言…

『愉しみにしているよ——』桃』

今までの悪魔には散々振り回されてきた。見ている分には馬鹿で面白く可愛らしい少女。だが一度巻き込まれれば全てをめちやくちやにされる天災。

藍染はいつしか彼女を玩具以上の存在として認めるようになった。ともすれば対等に等しい相手として。そしてあの男はただ精神性や知識だけが特別な者を——称賛こそすれ——対等と扱う事は決してない。

桃を取り戻したと騒ぐ護廷隊に、黒崎一護に失望した時に、だんがい断界を通った際に、藍染は何と言った？

まだ終わってはいないのではないか。雛森桃と言う悪魔が紡ぐ”戯曲”とやらには、まだ続きがあるのではないか。そこで自分は、またあの娘が押し付ける”運命”とやらに引つ掻き回されるのではないか。

不確定要素は一向に尽きない。

そして。

「——間に合ったわ、ギン……！」

復讐を求める白蛇は、遂に。

決断を迫られる——

俺自身が神殺になる事だ…

「——いやア、流石は重霊地。普通に歩いとる人間の多いこと多いこと」

辿り着いた真の空座町。市丸ギンは仇敵である藍染惣右介が空座町龍脈状況を確認している後ろに付き添いながら、虎視眈々と復讐の機を窺っていた。

時間はあまり残されていない。

一つは卍解。黒崎親子との戦いから密かに維持し続けているが【神殺鎗】に限らず刀剣解放の持続時間は有限だ。

二つは藍染の霊格。ヤツと崩玉の融合が完全となれば、流石の卍解の切り札でも殺しきれない可能性がある。

無論そんな不安は市丸の剽軽な仮面に滲む事はないが、彼の胸にはじわじわと緊張の糸が張られていた。

「…おや？ あそこの子ら、どっかで見た覚えがありますねえ」

「ああ、彼らは黒崎一護の仲間だ」

三つ目の龍脈泉へ向かう途中、遠くで通りかかった現世の学生服の数人に藍染が関心を示す。

「黒崎一護？ あの子は失敗作やなかったんですか？」

「君らしくないな、ギン。黒崎一護があこの程度で成長を止める人間なら、彼は最初からこの世に生まれていない」

男はあの人間の真価をその英雄的な精神性に見出しているらしい。心折れようと、親しい者の願いで何度でも立ち上がる不屈の魂。家族友人が残されたこの町の危機を放置しのおのうと自らの生にしがみ付くような弱者ではないと、藍染は語る。

「確かにあの娘の肝いりやし…何やおもろい事してくれそうすなあ」

もつとも、市丸にとってはどうでもいい話。あの絶望的な真実を知った人間がそう容易く立ち直れる筈がない。ましてやこの魔王と戦える程の力をこの半刻足らずで身に付けるなど不可能だ。

彼の復讐の手札とはなり得ない。

だが孤独な戦いの終焉が近づく緊張の最中、市丸の前に更なる焦燥の種が現れる。

「——間に合ったわ、藍染…！ ギン…！」

彼らの歩む先に、突如一人の女死神が降り立った。

穿界門で先回りし空座町にて待ち構えていたのは、彼の唯一の弱点

——松本乱菊。

戦闘で負傷しイヅルの治療を受けていたのは把握済み。黒崎一心との再会のせい、普段の彼女からは想像出来ないほど鬼気迫った戦意を漲らせている。されど戦力にすらなれない彼女の正義感は完全に市丸の目的の邪魔でしかなかった。

不味い、選りにも選つて今会わずとも良いものを。青年は内心動揺する。

部下の経歴や人間関係を完全に把握している藍染なら多少の慈悲はかけるだろうが、奴には気紛れで相手の心を弄んで反応を愉しむ趣味があった。自分と乱菊、家族のような関係だった流魂街時代の話を掘り起こされたらたまらない。

「ギン、君の問題だ。彼女の事は任せるよ」

だが魔王は意外にも寛容だった。

「……ええんですか？」

「勿論だとも。存分に旧交を温めて来るといい」

「…ほな、おおきに」

訝しみながらも、青年は一礼の後瞬歩で女死神へ突撃する。

「！ ギン——」

「舌嚙まんようにな、乱菊」

生死はさておき、藍染の悪癖の最大の対象だった雛森桃はここにはいない。故にとぼつちりを受けた黒崎一護の災難を間近で見ている市丸は、彼の二の舞にならぬよう至急乱菊をこの場から逃がす事を選択した。

「待つ、ギン……！ 放し……てっ！」

「！」

暴れる乱菊を下ろした先は、遠く離れた平坦な現世建築の屋上。藍染には決して聞かれない場所で足を止め、二人は緊迫した空気の中で向かい合う。

『……』

息を整える彼女は、何やら切なそうな目でこちらを見つめていた。その真剣な姿に市丸は妙な気分を覚える。

この松本乱菊との関係を一言で言うなら、疎遠な幼馴染。だが市丸が彼女に抱く感情は、己の命以上に大切なものだった。

藍染の懐に入り込んだのも、尸魂界を裏切ったのも、全ては彼女を悲劇から守りたいという“エゴ”のため。危険から遠ざけるために距離も取り、縊りを戻そうと近付く彼女を邪険にも扱った。

何一つ残さず、思い出も作らず、その心の中から完全に自らの存在を消し去った。そのはずだった。

だと言うのに。

「……なんで来たん？ 君、そない護廷の責務に忠実やったっけ？」

「ふざけないで……！ 決まってんでしょ、

あんたが居るからよ……ッ！」

乱菊が浮かべていたのは、決意を秘めた、女の顔だった。けっして彼のような日陰者に向けていい、感情ではなかった。

「……ボク？」

市丸は彼女にそんな顔を向けられる理由がわからず困惑する。彼自身——あの悪魔程ではないが——自分が異常な精神性を持つ事は

自覚していた。

己は蛇。気に入った敵に近付き、丸呑みにして喰らう。どれほど相手が強大であろうと決して諦めず、ひたすら陰湿で冷えきった心で復讐の機を待つ。そこに自分の生きる意味を見出してしまったただけの、ただの狂人だ。

そんな自分が乱菊の側に居る事はできない。そう確信し、市丸ギンは彼女との関係を無に帰したのだ。

「……なんや、それ。ホンマに言うてるん？」

「ッ、ギン……ッ」

「かんにんしてやア、今までの苦労が全部ぱーやん。なんでこないコトになつてん……」

今更好かれる所以も無し。好かれないとも思わない。自分の存在は彼女を悲しませるだけで、自分が望む世界とは真逆の、不要なもの。

だから、いま目の前にある、彼女の泣き出しそうな顔は、何かの間違いで。

「乱菊……」

——邪魔や。

この復讐の障害となるのなら、市丸ギンはいくらでも非情になれる。

たとえそれが、自身の宝物であつても……

「只今戻りました、藍染隊長」

乱菊との因縁を清算し、市丸は獲物の下へと一人舞い戻る。

黒崎一護の仲間達と戯れながら一通り町を見廻り終えたであろう藍染は、この短時間で更に力が増しているように見えた。本能的な恐怖が胸に湧き上がる。

やはり、崩玉との完全融合までもう間がない。

「お帰り、ギン。彼女と話は出来たかな？」

藍染が眼前で平伏す人間達から、こちらへ注意を向ける。微かに挑発の臭いを感じた青年は平然と報告した。

「殺しました」

「…ほう」

「あのままやと地の果てまで付いて来そうで」

ヘラヘラと「ボク、女に追い掛けられる趣味あらへんし」と笑みを深める市丸。

魔王が遠くを眺めるように目を細める。霊圧を探っているのだろう。

そして僅かに眉を持ち上げ、市丸へ流し目を送ってきた。

「驚いたな。君はもう少し、彼女に対して何らかの感情を抱いているものと思っていた」

そこにあるのは感心か、はたまた失望か。藍染の微笑に隠れる感情は相変わらずよくわからない。

…だが、これで。奴の知る市丸ギンの弱みは全て消えた。

それこそが、この長い”狩り”の最後の一手。

魔王の油断を誘う、最後の嘘…

「あはは、”感情”ですか？ 最初からあらしまへんよ、ボクにそない大層なモン」

そうや——

ボクは蛇

肌は冷たく 心は無い

舌先で獲物探して這い回って

気に入った奴を丸呑みにする

そういう生物や

「そう、言うたやないですか」

…その言葉は、普段の彼ならば決して口にしなかった。まるで「これから貴方を喰らいます」と宣言するような、無意味で美学的な台詞。

『——あんたが居るからよ…ッ!』

今思えば、あれは己の気持ちに対する一種のケジメだったのかもしれない。

「好都合に尸魂界が人間達を霊子化してくれている。こちらで専用の術式を準備する必要はなくなった」

「あれ面倒やし、手間省けましたわ」

藍染の語る計画手順に相槌を打ちながらも、市丸の血は冷えていく。

「目ぼしい龍脈泉に異常は無い。【転界結柱】は浦原喜助の技術だったか。握菱鉄裁や有昭田鉢玄の協力もあつただろうが、流石の一言だ」
奴の言葉が耳を素通りしていく。残すは鏡花水月の弱点を突く事、ただ一つ。

そして、まるで示し合わせたかのように…

「最早我々を妨げるものは何もない。目障りな鼠達を排除し、

——王鍵おうけんの創生に取り掛かる」

市丸の目の前で、無造作に。

藍染惣右介が誇る完全催眠能力の起点…

【鏡花水月】が、掲げられた。

「——ええやないですか」

…あかん。やっぱりあかんわ。

その刀身にさりげなく手を触れながら、市丸は胸中で彼女へ謝罪するように言葉を紡ぐ。

「——それやったら、藍染隊長」

…思いもよらへんかってんねや。君がああも、未だまこんなボクを大事に想うてたやなんて。百年もマトモに言葉を交わさへんかった人が。沢山の友人と居場所を持つ女性が。昔に一緒に暮らしてた只の幼馴染との絆を、未だ大切にしながら続けてたやなんて。

「——あの子ら殺すんは……ボクがやります」

…そないな事、何かの間違いやったら良かったのに…

「ギン——」

藍染が部下の名を呼ぶ。

その続きを聞く前に、市丸は袖の陰で自らの正解を構え……遂に百年来の悲願へ、己が手を伸ばした。

死ころせ……

—— 神かみ殺しののやりやり
—— 殺ころ 鎗やり

…せやったらなあ、乱菊？

もうボク、この世におつたらあかんねん…

藍染惣右介が有する凶悪な幻惑鬼道系斬魄刀【鏡花水月】。

霊圧感知を含む五感を支配し、蠅を龍に、沼地を花畑に見せる事すら可能なその”完全催眠”は、斬魄刀の性質故当然この男の魂から生まれ、この男にのみ満足に扱える能力だ。それは魂魄の繋がりだけではなく、基礎となる高度な知性と霊圧に由来すると言う意味であり、尸魂界を翻弄する程の脅威となったのは偏に所有者の悪魔的叡智が成せる技だった。

浦原喜助は雛森桃と対峙する時彼女の力を封じるため、生物なら誰しもが持つ”自己能力に対する防衛力”に目を付けた。そしてそれは、市丸ギンが己の本懐を遂げるために必要な最後の一片でもあった。

「——鏡花水月の能力から逃れられる唯一の方法は、その”自己防衛力”。つまり持ち主のアンタのように、完全催眠の発動前から刀の本体に触れておく事」

かつて、まだ魔王の副官に相応しい学も経験も能力も無かった子供の頃。死神が何故自分の斬魄刀の力で身を滅ぼさないのかについて彼に尋ねた事があった。

『ほな持ち主が自分の力で怪我しいひんのは…』

『そのとおりだよ、ギン。斬魄刀とは死神の半身。主が己の刃を掴み損ねないよう、斬魄刀そのものが持ち主を守っているんだ』

あの時は、その台詞がどんな意味を持つのか気付けなかった。だが長らく藍染に付き従う内に市丸は気付く。奴自身が完全催眠の能力を使う際、決して【鏡花水月】の本体を手放さない事に。

「未来が見える桃ちゃんさえ逃れられへんかった、浦原喜助の着眼点。…アンタにも効く言う事はあん時に確信済みや」

そして策は成った。市丸が突き立てた自身の【神殺鎗】は敵を穿つことは出来ず、僅かに胸板に血を流す程度。全く以てとんでもない霊圧密度だ。

…だが、彼の卍解にとつてはそれで十分。

「神殺鎗の真価は、刀身の内側にある細胞を殺し溶かす”毒”です」

宣言していたほど速くは伸びない。伝えたほど長くは伸びない。

代わりに、伸縮する時に一瞬だけ塵になる。

「今、胸に少しだけ突き刺さった切先を塵にし……藍染隊長の血管の中にいれました」

…さあ、仕上げだ。

「血液が胸元の毛細血管から心臓まで戻る時間は、約五十秒」

…
そして市丸の卍解の解号と共に、藍染惣右介の胸に巨大な孔が開き

「——ありがとう、ギン」

魔王の顔に、邪悪な嘲笑が浮かんだ。

「!!?」

「今の隙を君が突いてくれたお陰で、私の進化にはまだ先があると確信できた」

カツ、と胸元に走る一筋の熱。驚愕する間も許されず、市丸は自分が敵に斬られた事すら気付けなかった。

爆発的な霊圧が辺りに吹き荒れる。その嵐の中で佇む男の胸の孔からは、白い肉髄が零れ出ていた。蠢きながら溶けた体を繋ぎ止めるだけでは飽き足らず、溢れるソレは背へと伸びる。

そして直後。藍染の背中から幾対もの不気味な白い翅が生え開いた。

「なん……やて……」

「そう驚く程の事じゃないだろう？ 崩玉の研究について裏で探っていた君の事だ。動くとすれば私が完全に崩玉と融合する前、つまり今しかない」

「——ッ!!」

血が止まらない己の胸元を押さえ、市丸は後退りながら追撃を繰り出す。

塞がりきっていない敵の傷跡を卍解の刀身全てを使い広げようとする復讐者。

だが新たな霊格へと至った藍染は、既に崩玉が生み出した毒の抗体を有していた。

「どうした、今のが最後の切り札か？ 実に見事な策だったが、手数を増やせば何かが変わるなどと妄想するほど君は楽天家ではないだろう」

「…ッ」

攻撃を跳ね除け、悠々と歩み近付く巨悪の魔王。

甘かった。全て奴に知られていた。

自ら見抜いたのか。雛森桃が教えたのか、若しくはあの馬鹿がカマかけに知らぬ間に引っかけかかっていたのか。

様子見をせず最初から刀身全てを使ってその体の全てを一度に消し飛ばしていればよかったのか。今となってはもうどうでもいい話

だ。

心のどこかで悟っていた。あの悪魔が目指す、愉悦とは異なるもう一つの目的に気付いた時。双匣の処刑場で幼馴染に謝罪の言葉を残した時。市丸は自分の人生がどのような形で終わるのか漠然と想像できていた。

…だが、これでいい。

どのみち自分の最後の目的は、彼女に知られずに死ぬ事。

君に何も残さず、ただ塵のようにその心から消える事。

それさえ出来たなら、ボクはもう、この世^{悪魔達の遊び場}界に未練はない。

そして迫る敵の刃に目を閉じた瞬間。

「——来たか」

魔王が笑うと同時に、両者の間の地面が爆ぜた。

破碎されたアスファルトがもうもうと土煙を上げている。何が起きたのかわからず、放心状態の市丸はその奥をぼんやりと眺めていた。

そう時を置かずに砂塵が晴れる。青空の下、陽光が降り注ぎ、陥没した地の中に鮮やかな橙色が輝いている。

その正体に気付いた市丸は、思わず糸目を限界まで瞠目した。

「——仲間割れかよ、意外と人望ねえんだな」

雛森桃は藍染と手を組み、実験の果てに生まれた人間へ多くの敵をぶつける傍ら、その足が止まりそうな時には味方を側へ誘導した。瀨靈廷では鏡花水月で四楓院夜一の進路の警戒を緩め、現世ではグリムジョーの刀剣解放を阻止させ回収し、ウエコムンド虚圏では幼児化したネリエルを側に付ける、等々。不可解なほどの入れ込みようだった。

「裏切り者なんかほつといて、俺との決着を付けようぜ。なあ……」

そんな手厚い投資をしてまであの二人が彼を育てる理由は何か。期待する理由は何か。

…その答えが、今。市丸ギンの目の前で佇んでいる。

「——藍染!!」

運命を乗り越え、剣を握る、哀れな実験動物。

奇跡の人間——黒崎一護が、藍染惣右介の前に立ち塞がっていた。

俺自身が乱菊になる事だ…

「——っは…！」

息を吹き返すように、止まっていた魄内の霊力が体を巡る。

飛んでいた意識をかき集めた女死神——松本乱菊は、自身が想い人の鬼道で仮死状態にされた事を思い出した。

「いまのは…【白伏】…」

三日前に受けた雛森桃のものより、ともすれば不自然なほどに乱暴な術。一切徹底して思いやりのないソレに乱菊の胸が痛む。

だが落ち込む彼女は、遠くの街中で突如起きたその出来事に思わず仰天した。

「——なっ!!？」

爆発だ。

巨大な光柱が天へと立ち上り、乱菊は余波の暴風で吹き飛ばされそうになる。とんでもない力の塊でありながら一切の霊圧を感じない、不吉な現象。

「…まさか」

嫌な汗が垂れると同時に、女は無意識に荒嵐の渦中へと駆けていた。

まさか、まさか、まさか。最悪の予感が頭を過る。

感じる。あいつの、ギンの霊圧をあの光の中に感じる。

あんな光景を作り出せるのはあの魔王しかない。

ならば、あいつは——

「ッあ…！」

その疑問を抱いた乱菊は直後、体中の血が全部抜けたような悪寒に襲われた。

…揺れたのだ。あのバカの霊圧が、不自然に。

「……嘘」

恐ろしいほどに膨れ上がっていた彼の気配が、消えていく。それが意味する事は、一つだけで。

「……イヤ……嘘よ……」

女は走る。必死に、涙で滲む景色を後ろへ追いやり、居もしない神に縋る様に。

嫌だ。こんなの、こんなの嫌だ。

やっと再会できたのに。やっと手が届くところまで来れたのに。

やっと、伝える決心がついたのに…

「嘘よ、ギン…っ！」

そして乱菊は光の跡地、重力の渦の如き地獄に辿り着く。そこに居たのは剣を振りかぶる異形の姿の魔王と、その前で地に膝を突く、彼女の大切な人。

「——ッ!!」

声にならない悲鳴が零れる。届かない彼へ千切れそうなほど腕を伸ばす。

だけど、そのどちらもあいつを救ってはくれなくて…

「——決着を付けるぜ、藍染」

代わりに、一人の人間が魔王の前に立ち塞がった。

奇しくも女の元上司の息子と言う、不思議な縁を持つ人間の勇者が。

「いち……ぎ……っ……？」

突然現れた黒衣の橙髪男の名を呟く乱菊。この空座町で暮らす青

年だ。

彼女にとつては納得がいく登場であると同時に、目の前に立っている彼が現実である事を信じられなかった。

何も感じない。あの不吉な光の爆発のように、佇む異形の藍染のように、まるで自分の感覚そのものが麻痺してしまったかのように。

青年の存在そのものが、あまりにも希薄なのだ。

「——乱菊さん」

名を呼ばれたと我に返る女死神。

「そいつを安全な所に連れてつてくれ。その傷じゃもう悪さはできねえだろ」

「あんた…」

「卯ノ花さんをお願いしたら治して貰えると思う。…そっから先は、そいつの勝手だ」

だが何故だろう。

織姫を救いに敵の拠点虚^{ウエコムンダ}圏へ向かい、多くの死闘を繰り広げて少女を救い、そして凱旋と共にあの藍染惣右介と戦い、心折れ敗れたはずの人間が。蜃気楼のように不確かな存在が。

乱菊には…

——黒崎一護が、この世で最も頼もしい”英雄”に見えたのだ。

「…恩に着るわ…ッ！」

血だらけで呆ける重傷のギンを担ぎ、女は全力の瞬歩で場を去った。

護廷隊隊士として褒められた事ではない。この人間の青年に人一倍負い目を感じている総隊長から厳しい叱咤を受けるかもしれない。

それでも、乱菊は一護の善意に甘える道を選んだ。彼ならば大丈夫だと、そんな不思議な信頼感を抱いて。

走る。奔る。趨る。

もつと速く。もつと遠く。もつと、もつと、誰も追って来れない所へ。

肩にかかる幼馴染の体重が万感の思いを心に灯し、乱菊はひたすら空座町の転移結界の外、流魂街郭外の荒地を駆け抜けた。

懐かしい景色が過ぎていく。昔、ギンと一緒に質素で自由な日々を過ごしたあの寂れた寒村。晩秋の北流魂街六十四地区・末圓の風景だ。

「らん…」

「黙って…！ あんたはじっとしてなさい…っ」

決して近い距離ではなかった。なのに気付いたら、女は幼馴染をこの地に未だ佇む小さな家屋に連れ込み、親友ひなもりに触発されて習った拙い回道と療術で傷の治療を始めていた。

卯ノ花隊長や他の護廷隊の仲間を頼らなかつたのは、裏切り者である彼の後の扱いが酷いものになると恐れたため。

されどそう自己弁護する乱菊の本音はたった一つ——初めてこの男ひとを支える事ができる奇跡のひと時を、誰にも渡したくなかつたからだ。

「…なんでや、乱菊」

不意にギンが口を開いた。こちらの行動理由を問い質すような困惑だった。

こんな時にそれはないだろう。女の中で積年の怒りが吹き零れる。

「なんで、こないな…」

「うるさいっ！ ”なんで” はこっちの台詞よ、バカ！」

相変わらず氷のように冷たい肌。だがそこには確かな人の温もり

があり、その儂い熱に触れた女は先ほどの恐怖を思い出してしまふ。
「なんで……なんで、あんな……っ」

あの直前、乱菊はギンの霊圧が跳ね上がる様を感じ取っていた。
あそこで何があったのか、あの魔王に切り捨てられたのか、それとも自らヤツに挑んだのか。しかし女はその疑問を張り裂けそうな胸の内にしまい込む。どうせ答えてはくれないのだから。

それでも、一度決壊した濁流は止められない。

「いつもいつもいつも一人で勝手にどっか行つて！ 自分だけで全部
完結して……ッ」

「……」

「今回だつて！ 今回だつて……一護が、来なかつたら……」

乱菊は零れる嗚咽を押し殺そうと、彼の胸元に顔を埋める。

あと一秒、助けが遅かつたら。あるいはあれが本当にこのバカとの最後の触れ合いになっていたかもしれない。

その事実を考えるだけで、体が凍えるように震えてしまふ。

「……あかんて、乱菊。ボクなんかのために泣いたらあかん……」

そんな彼女に、青年はそんな無神経な言葉を投げかけるのだ。自分が人の心の中でどれほど大きい存在なのかも知らないで。

「なによ、それ……」

咄嗟に”泣いてない”と意地を張りたくなる。だけどそう言おうと開いた乱菊の口からは、違う言葉しか出てこない。

「なにが、あんた”なんか”よ……」

あれほど怖かったのに。止めどなく本心が言葉になって溢れ出る。

「なにが” 乱菊が泣かないようにしてやる”よ、偉そうな事言つて……ッ」

そう責める女は、青年の胸元から体を離し……

「あんたが一番あたしを泣かせてんのよっ!! このバカあつ!!」

溢れる感情で濡れた顔のまま、悲憤の怒声を叩きつけた。

止まらない。想いも、涙も、百年も積もりに積もつたものが、漸く

開いた出口へ殺到する。
そして乱菊は。

「——好きよ、ギン」

気付けば自分の気持ちを相手に伝えてしまっていた。

「…あんたはバカだから、ツ、どうせ昔の事も…無かった事にしたつもりなんでしようけど…」

彼が息を呑む音が聞こえる。

そうだろう。いつもズボラでおちやらけているあたしが、こんなに重い女だったなんて。自分でも驚いているくらいなのだから。

「あたしは…い… あたしはずっと、ずっと…あんたのこと…ツ」

「乱…菊…」

恐怖を、理性を、”ダメだ、止める”としがみ付くもの全てを振り払い、女は男へ積年の慕情を泣きながらに告白する。

ずっと、好きだった。

ずっと、待っていた。

あんたが飛び級で霊術院を卒業する時も、そのまま三席に昇進した時も、副隊長になった時も、隊長になった時も。ずっと便りを待っていたあたしに、あんたは一言も言ってくれなくて。

忙しいのだろう、仕方ないと自分に言い聞かせた。あたしの事なんてもう忘れてしまったのだろうか、怖くてあんたに訊けなかった。

それでも、やつと手紙を書ける口実が出来たって、喜んで。これを機に、せめて文通だけでもつながりを取り戻せないかって、希望を抱いて。

そんな風に、何日も考えて、何度も書き直して、祈るような思いで昇進祝いを送っても。

「あんたはただの社交辞令の文一つしか返してくれなくて。

副官の話だつて、あんたがあたしを引き抜いてくれるのを待っていた。また前みたいにな「一緒に暮らそう」って言ってくれるのを、ずっと、待っていた。

なのに。

「なんであたしから言わなきゃいけないのよ…！　なんであたしがこんな…血とか汗とか泥とか涙とかベトベトな惨めなカツコで…こんな殺伐とした戦場で…あんたに好きって言わなきゃなんないのよお…」

嘔吐くような、色気なんてこれっぽっちもない、悲愴な声。

本当はこんな状況で伝えたくなかった。全てが終わり、互い以外を目に入れる必要のない幸せな環境で、「好き」だと伝えたかった。

自分らしく華美に着飾って、自分らしく晴れやかな笑顔を浮かべて、甘くて理想的な告白にして、このバカの間抜けな勘違いを正してやろうと思ったのに。

「…一人で消えないですよ…」

「…ただ。今の自分には、みっともなく彼に泣き継ぎする事しか出来ない。い。」

「ずっと、側に居なさいよ…」

そんな事したら、どうせこの男はまた一人で勝手にあたしの側から離れてしまうのに。

「これ以上、あたしを泣かせないですよ…」

忘れられていた訳ではなかった。嫌われていた訳でもなかった。

それなのに一世紀も、彼があたしを突き放した理由なんて、このバカな男には一つしかないのに。

それでも。それでも乱菊は、もう。

指を啜えて遠くから見つめるばかりの人生はこりこりだった。

「また昔みたいに、ずっと側で…」

——あたしを幸せにしてよ。

…でもね、ギン。

あたし、ホントは知ってるの。

きつと。あんたがこの想いに応えてくれる事は永劫ないのでしよう。あたしが自分を”臆病者”と嫌っているように、ギンもまた、自分自身を心底”ろくでもない男”だと嫌っているんでしよう。

昔から薄々わかっていた。行先も告げずにふらりと消えて、食材や水壺を持って帰ってくるのも。時折打撲や刀傷をその小さな子供の体に付けて帰ってくるのも。その理由を。

そしてその度に。小屋に帰ってあたしと共に過ごす頻度が、減っていたのも。

彼はいつだって一人だけで汚れて、そしてそんな汚れた自分があたしの側に居続ける事を、いつだって嫌そうにしていた。

そんな、勝手に人の事を神聖視し、勝手に人の幸福を決めつけ、勝手に人の心の中から消えた気になってる…

そんなどうしようもないバカな奴が、市丸ギンと言う男なのだ。

「……………乱菊」

だから、ほら。

今回だって。あたしがどれほど想いを伝えても。あたしがどれほど行くなと縋っても…

——ご免な、乱菊——

…あんたはまた、あたしを一人置いて。
一人でどこかへと消えてしまうのでしよう。

派手に、さりとて決して致命傷とはなりえない位置にあの鬼道をかけて、こちらの意識を奪うギン。

荒々しかった前回の空座町での術とは違う、優しく安らかに眠りへと誘うその【白伏】に。少しだけ、彼の非情な覚悟の揺らぎを見たような気がして。

そんな些細な変化を甘露の様に大切に味わいながら、松本乱菊は想い人の腕の中に崩れ落ちた。

…ああ、やっぱり。

あたしは、あんたの
そういうところが――

意識無き女死神の懐から取り出した緊急信号端末を起動し、市丸ギンは項垂れながら簡素な家屋を後にする。これで直に彼女を探しに護廷隊の誰かがやって来るだろう。

最後に霊圧の痕跡と争った現場を偽造して、瞬歩でその場を離れる。

振り返るな。思い残すな。

去り行く時、青年はそう無茶な事を自身に言い聞かせ続けた。

「ホンマ…良え女んなったなア…」

それでも唇は、相手に届かないのをいい事に、好き勝手独り言を紡いでしまう。

…あれなら大丈夫。

こんなクズより、もっと、もっとイイ男を見つけれられる。誰にだって大切にして貰える。

百年経つてもこんな男を忘れられないのなら、二百年、三百年待てばいい。藍染の離反に従ってから奴を殺そうとしたのは、罪人として尸魂界から、乱菊の側から合理的に離れる理由を求めたためでもあった。

「あーあ、これからどないしよ…」

思わず呟く市丸。

藍染を仕留める機会は失われた。自分が死ぬ機会も同様。そして”市丸ギン”の事を忘れて貰おうと思っていた大切な幼馴染に、「ずっと好きだった」と長年の想いを告白された。

本当に、何一つ思い通りになってくれない。やっぱ桃ちゃんは凄いわア、と愛憎入り混じった賞賛をどこぞの悪魔に送る市丸。あの娘ならもっと上手にやれたのだろうか。

「…おや?」

しかし、その時ふと彼は疑問に思う。

振り返れば雛森桃の行動には二つのパターンがあった。一つは日番谷冬獅郎や黒崎一護のように入念に手を加えるもの。もう一つは何もせず、ただキラキラした笑顔で観察をするに留めるもの。

前者は何度も死ぬ目に遭いながらも、未だ健在。黒崎一護に至って

は別人のような強さを手にしている様子。

だが後者の多くは藍染の手下で、彼らの殆どは戦いで命を落として
いる。東仙や十刃^{エスパー}など、桃が手を貸せば確実に助かったはずの命を、
まるで死こそが彼らの運命であるかのように。

「…おやア？」

おかしいなア。動ける程度に乱菊に癒やされた胸の傷を撫で、市丸
は歪んだ笑みを浮かべる。

そう、おかしいのだ。もし自分をその二つに分類するとすれば、確
実に後者の「死ぬ運命を持つ者」の一人になるはずだ。なのに市丸ギ
ンは今ものうのと生きており、これからどうするかなどと呑気に悩
む余裕まである。

この異様な空虚さは、明らかに何かがおかしい。

「ふふ…あはははっ！ 桃ちゃん、こらひよつとして…ひよつとし
てまうんかア？」

ああ、おかしい。本当におかしくて、笑いが止まらない。

今頃あの神さま気取りの悪魔はどんな顔をしているのだろう。藍
染隊長に揶揄われている時の様に、ぷくくとタコさんしているのだろ
うか。それともあの魔王に笑顔で威圧されている時の様に、「口が
滑った」みたいな緊張感の無い怯え顔をしているのだろうか。

どちらにせよ、その原因が自ら丹精込めて育てた黒崎一護にある事
実を思えば、これまでの溜飲も多少は下がると言うものだ。

「…さて」

一頻り笑い終えた市丸は、失血でふらつく体も気にせず進路を決め
る。

運命の呪いから逃れたこの命は、決して軽くない。

ならばこれからは乱菊のためにだけでなく、あの悪魔を歯軋りさせ
るために生きよう。生きて、陰ながら乱菊を守り、奴の悔しがる顔を
酒の肴に人生を満喫し、あのお人好し幼馴染の幸せを見届けて、彼女

を友として悲しませた桃の命でも狙いながら、最期は一言「ザマー見ろ」と言い捨てて殺されるとしよう。

なんとなく、それが一番の意趣返しになりそうだった。

「…そやかてな、黒崎クン」

輝く未来を夢見ながら、市丸は遠くの水平線へ目を向ける。

絶えず光が瞬き、霊圧が空間を歪ませ、地形が変わる、地獄をも超える恐ろしい戦いが始まった……決戦の舞台へ。

「勝ちイヤ、勇者。君なら…」

——勝てる。

彼と藍染、どちらの勝利がああ娘の望みかはどうでもいい。崩玉と一体化し不死身となった魔王にとっては、”神”と共に育てた英雄に勝つのも負けるも、永遠を彩る喜劇の一つ。くだらない代理戦争で仲良く超越者らしい交流を楽しめばいい。
だから。

ほなボクは、素直に…

大恩人の勝利を願わせてもらいましょか。

俺自身が藍染になる事だ…

チリチリ、サラサラと、目に見えない何かが灰儘へと化していく。

そこは大気中の霊子結合さえも存在を保てずに滅ぶ、文字通り規格外な霊圧地獄。

そんな異次元の世界の中心に、二つの人影が立っていた。

一人は異形。全身が天衣無縫の白い衣服に包まれ、背より幾対もの不気味な翅を生やす男。元護廷十三隊五番隊隊長にして戸^{ソウルソサエティ}魂界離反の大罪人——藍染惣右介。

一人は死神。和装にも洋装にも見える黒のコートに死覇装の身を包んだ、橙色の髪的青年。世界の命運を背負った人間の英雄——黒崎一護。

両者が現世の町、空座町の商業区付近の交差点で向かい合っている。霊子レベルにおいては魔界も同然の環境にありながら、傍目に映るのは無風無音の街並。その中で二人が佇む様は、此度の大戦争の天王山と言う舞台にあまりにも似つかわしくない平穏な光景だった。それが嵐の前の静かな幻想だと、誰もが理解出来るほどに。

「——素晴らしい」

最初に口を開いたのは、白の魔王だった。

「君の勇気に敬意を表しよう、黒崎一護。君は自らの運命を知り、受け入れ、そして乗り越えた」

「……」

「容易い壁ではなかったはずだ。並大抵の絶望ではなかったはずだ。

…だが、君は見事それを成し遂げた」

そして目を細め、巨悪がほくそ笑む。

「私の、期待通りに」

それにピクリと眉を動かす対面の死神、黒崎一護。

「…チツ、やっぱ全部掌の上って事かよ」

軽い舌打ちで青年は現実を認める。彼が真実を知って尚も踏ん張る事も、断界だんがいで修行するのも、予想通りこいつの思惑だったようだ。

「つまり、俺はまだまだてめえのオモチャだつてワケだ」

無論それは覚悟の上。これから敵のその油断を叩き斬ればいい。

だがそう意気込む一護を見てか、藍染が呆れるように小さく肩を落とすとした。

「何を言っている？ 私の掌がそんな小さなものであるはずがないだろう」

「…何だと？」

問い返す青年。だが「どういう事だ」と口を開いた直後、一護はハツと気付く。

「——彼女に、逢えたようだな」

突然目の前に奴が現れ、その左手をこちらの胸元に伸ばしていた。

「…！」

すかさず距離を取る。

いつの間に動いたのか。瞬歩ソニードや響転とは異なる、動体視力では捉えられない空間転移の類。敵の技の多彩さに一護は眉間の皺を深める。

対し藍染は悠然と佇んだまま青年を見向きもしない。その手に絡め捕った淡い紅桃色の光を指で遊び「これがあの子の霊圧か」と嬉しそうに観察している。

「とても興味深い、こんな気配は初めてだ。彼女の昇華に協力してくれた君に改めて礼を言おう」

「……」

挑発のつもりだろうか。異形となった自らの体を悲しげに隠そう

としていたあの人を思い、一護は静かな怒りを霊圧に投影する。

それを見た藍染が、得心の顔で目を閉じた。

「…成程。今の君を見て、あの子の思惑を凡そ理解した」
「！」

そして再びその瞼が開かれた時、魔王の霊圧が跳ね上がった。

超越者の領域にある霊圧は霊体に対し表面的な影響を及ぼさない。大気が軋む事も地面に罅が入る事も無く、そこにいる存在自体を物質すら正常に認識できなくなる。

だが同じ領域に立つ者にはわかるのだ。まるで放射線で生体をズタズタにされるかのように、周囲の霊体が霊子レベルで崩壊を始めている事実が。

「……場所を移すぜ、藍染」

これからの戦いは今までの比ではない大災害となる。そう改めて確信した一護は、妹達を、友人達を、町を護るため敵へそう促した。

「構わないとも。君が私からこの町を護りきれぬ自信を得るまで、存分に距離を離すといい」

「…付いてこい。決着を付けてやる」

一々癪に障る相手の台詞を振り切り、勇者は大地を蹴る。目指すは遠くの山を越えた無人の荒地。

そして霊界の最果てを決戦の地と定めた両雄は、遂に、激突した。

それは正しく神話の戦いだった。

剣圧で砕けた地表が理を超えた規模の霊圧を浴びて塵となる。絶

えず地形が変わる天災の真っ只中、その元凶の両者が刃を交わしていた。

片や極限まで洗練された技の域、片や粗削りながらも優れた直感で追従する野生の本能。対照的な二つの剣は衝突の度に空間を歪ませ世界を滅びへ近付ける。

『!!』

同時の袈裟斬りが直下の地面を底無しに十字に裂き、一護と藍染は互いに大峡谷を挟む両碕で小休止を取った。

「…成程、これが超越者の戦いか。天を割り、大地を薙ぎ、意思一つで三界をも滅ぼしうる力。確かに自らを”神”と誤認するのも無理はない」

「…ああ。こんなモン、あんた以外の相手に使えねえ」

崩玉との融合で新たな霊格へと昇った藍染が自分の力に感心している。そして同じく斬月との融合とホワイトの封印解除で別次元の力を手にした一護自身もまた、己の霊圧に驚いていた。

あの藍染にここまで迫っている。ともすれば凌駕しているかもしれない。

それでも青年の胸にあるのは斬月たちを想う虚しさと、背水の陣の必死さ。巨大な反動を覚悟する故の、ある種の達観だった。

——勝っても勝たなくても、俺の全てはここで…

「だが惜しいな」

「…何がだよ」

そんな空虚な心で戦う一護に対し、魔王の顔には隠しきれない喜色があった。それまで羽虫にも等しい弱者であった人間の青年が、突如自分と同格以上の力を手にした事に、驚きも理不尽も感じていない。それどころか真逆の歓迎までしている有様。

如何に傲岸不遜な藍染と言えど多少の動揺はあるはずだが、ヤツの

態度には未だ余裕が見えた。

「死神の霊圧とは本来、斬拳走鬼の鍛錬で高まるものだ。極めた四方を強固な基盤とする私と、己の生まれ持った才を引き出すのみの君とでは、技量において海より広い隔りがある」

それがこの男の勝機か。最初からわかっていたハンデを指摘され微かに苛立つ一護。

「だったら何だっつてんだ。俺がてめえに勝てねえとでも言っていてえのかわ？」

「やれやれ、短気な子だ。我々の戦いはまだ勝敗を論ずる段階には至っていないだろう」

「…何だと?」

だが直後、藍染が笑った。

「わからないか? 今のままでは、君は私の踏み台にすらならない…
なまくら鈍だと言っているんだ」

「…!」

突然ヤツの斬撃が眼前に現れた。さっきの空間転移かと一瞬の動揺を即座に抑え、難なく捌こうとする一護。

しかしその時。流れるような軌道で【天鎖斬月】の刀身を滑った敵の剣が、青年の肩に突き刺さった。

「ガッ…な、何だと!」

「気付いていないのであれば教えよう、黒崎一護。今の君の霊圧は、今の私のそれを凌駕している。つい先刻の腑抜けた姿からは想像もできない感嘆すべき成長だ」

「くっ——ぐあアッ!」

切先が捻られ夥しい血が溢れ出す。激痛に喘ぐも何とか体勢を立て直した一護は、逆上の勢いのまま藍染に斬り掛かった。

しかし。

「だがその程度であれば対処は容易い。我武者羅な暴力を斬術で受け流し…」

「ッ、くそ…!」

「子供の棒遊びを歩法で躲し…」

「てっ、めえ…ッ！」

当たらない。幾度剣を振ろうと悉くが敵の肌を掠るに止まる。

「隙だらけな頭胴四肢を白打で碎き…」

「あぐっ!？」

「…そして」

攻撃の隙間を縫うように繰り出される殴蹴によるめいた一護は、漆黒の空間に飲み込まれた。

——【破道の九十・黒棺】

「動けぬ体を鬼道で押し潰す」

「が…あッ…」

凄まじい密度の重力が体を襲う。全身の骨が軋み、罅割れ、青年は闇が晴れた後、気付けば地に片膝を突いていた。

「これが、死神の戦い方だ」

「く…っ」

やはり、強い。今まで戦ったどの敵よりも別格に洗練された攻防一体の戦闘技術。一護のように、たかが数カ月修行の付け焼刃でどうにかなる相手ではない。

藍染惣右介が何故崩玉に、あんなドーピングのような外的物質に手を伸ばしたのか、少しだけわかってしまう。

この男は真に死神としての技の全てを自らの限界まで鍛えたのだ。何百年もの年月に一切の妥協を許さず、また彼の才もその努力に応えるだけの深い底があった。己が限界に到達した時、藍染に「歩みを止める」という選択肢は存在しなかったのだろう。

「そして強大な君の霊圧を容易くいなしたこの斬拳走鬼でさえ、私にとっては既に過去の遺物。」兵法”ではなく”舞踊”となった」

両手を広げ、自身の異形の姿を誇示する藍染惣右介。

死神でも虚でもない本当の超魂魄。その力の源にあるべきなのは弱者が戦うための”技術”ではなく、単純な霊体としての”格”なのだ。魔王は語る。

この男は、これからその”格”を高める歩みを始めようとしているのだ。

「立ち上がりなさい、黒崎一護」

超速再生で掠り傷を癒した藍染が悠々とこちらへ歩を進める。

「君は護るべきものを数多く背負っているはずだ」

それが青年の力の源であると自覚させるように、怪物が挑発を重ねる。

そして――

「そんな虚ろな剣で、私を斬る事は不可能だ」

魔王は、膝突く勇者の眉間に剣の切先を突き付けた。

「怖れるな、少年。迷うな、人間の英雄よ」

「……ッ」

指一本でも動けば即座に刃が突き刺さるだろう。この危機を乗り越えてみると言わんばかりの藍染の演説。

大人しく耳を傾けながら、一護は静かに相手を見上げる。自分が失った何かを、敵の瞳の奥に見た気がして。

「君は赤子だ。与えられた才能だけしか剣を持たない幼年の君は、勇気と覚悟……心の力で己の剣を研がねばならない」

その言葉が妙に耳に残り、青年は目を見開く。そんな彼の反応に何を思ったのか、男が常の冷笑を深め――

「その時、漸く君は私の期待に追い付き……」

――私を駈す最後の試練となるのだ。

魔王は最後に、そう締め括った。

不思議な気分だった。

凶悪な藍染の霊圧も、鈍い四肢の感覚も、虚ろな胸に何の焦りも恐れも駆り立てない。

——勇氣と覚悟。心の力。

それは、これまで黒崎一護が飛び込んだ戦いで、敵味方が共に口にしていた言葉だ。斬月然り、白哉然り、ウルキオラ然り。自らの戦い方を表すその言葉は、確かに彼らの強さであった。

一護もまた、その力に何度となく助けられた。あの白い斬月との修行の時も、彼は護らなければならぬもののために剣を振った時、それまでとは比較にならない力を発揮した。

意思一つで弱者にも無敵にもなれる。根源的な強さとは霊力でも本能でもなく、心に依るものなのだろう。少なくとも一護はそれ以外の強さで強敵に勝った例が無かった。

仲間を護るために振るう剣以外に、黒崎一護を勝利に導く力など最初からありはしなかったのだ。

：わかりきった事言ってんじやねえよ。

頭が冴える。

空虚な心に炎が灯る。

斬月と融合した代償も、胸に巢食う虚無感も。一斉に焼き尽くす、
勇氣の炎だ。

「」

もう一度、一護は目を開く。

そこに輝く透き通るような蒼い光が、これまでの問い掛けのあらゆる答えを示していた。

「そうだ、黒崎一護。その目が見たかった……！」

藍染が笑った。初めて一護に向けた、最高の獲物を見つけた猛獣の笑み。ただの実験動物を、喰らう価値ある強敵として認められた瞬間だった。

「……そうかよ……」

そつちがその気なら遠慮はしない。黒崎一護は、蒼黒の霊力を身に纏い……

「だったら、

もっといいモンを見せてやる」

藍染惣右介は、眉間に添えた剣ごと青年の凄まじい霊圧で吹き飛ばされた。

「……！」

足下の大渓谷が爆発の余波で隕石跡の如く抉れ埋まる。霊子が爆ぜ、辺りに飛び散る雷電火炎。一瞬で景色が別の地も斯くやと変わり果てる中で、両者は新たな断崖の縁に降り立った。

藍染は正眼の構えを取る。それは「舞踊」を切り捨てるための最後の儀式にして試練。そのための黒崎一護、作られた英雄なのだ。

勇者が動く。

漆黒の剣に桁外れな霊圧の塊を乗せ、一振りと共に飛翔する斬撃を解き放った。

「！ ほう、月牙の色が変わったな」

「色だけじゃねえよ」

「……！」

真正面から打ち砕かんと身構える藍染。だが直後、彼は右側面より迫る二発目の月牙天衝に気付く。

いつの間に放ったのか。訝しみながらも瞬歩で挟み撃ちを回避し、魔王は相手の位置を捉えんと素早く霊圧感知を広げる。

「どこ見てやがる」

「何……」

だが感じた気配は真後ろ。振り向くより先に紫電が走り、右肩が深々と斬り裂かれる。

まるで先ほどの仕返しのような一撃だった。

「…なんだ。あんたも不意突かれたらするんだな、そういうびっくりしてるアホ面」

一瞬何を言われたのかわからず、さりとて青年の挑発に理解が追い付いた時、藍染の顔に浮かんだのは、歡喜の笑み。

怒りはある。されど漸く真の”神”の試練に挑める快感が、藍染惣右介の強者の矜持すら併呑し尽くす。

だがその笑顔を見た黒崎一護は、更なる力を引き出した。

「構えろ、藍染…」

「——こっからだぜ!!」

「…!?!」

ジャラリと彼の腕から剣が落ちる。

何のつもりだと眉を寄せる間もなく青年がその手元の鎖を掴み、落ちた【天鎖斬月】の本体を振り回し始めた。

「何だ、そんな見戯で——」

「見戯かどうか…その剣で試してみろよッ!!」

瞬歩で上空を取った黒崎一護が、その手で円を描く黒刀を投擲する。遠心の慣性が相乗された神速の一撃。

「……!!」

咄嗟に藍染は自らの刀身で受け流しを試みる。だが投擲剣の威力は彼の想定を遥かに超えていた。

「なっ……!」

強烈な衝撃が腕を走る。更に魔王を襲ったのは、【鏡花水月】ごと巻

き込む霊圧の暴風。崩玉の防衛本能で瞬時に癒えるも、ただの余波でこの体が傷付いた事実は変わらない。

そして、黒崎一護の攻撃は単純な投擲一つでは終わらなかった。

「まだだぜ！」

—— 月げつ 牙が 天てん 衝しょう ——

「ッ、まさか！」

相手の意図を察した藍染は即座に迎撃の剣を振るう。時を同じく黒崎一護の斬魄刀、その黒い鎖すら含む十丈もの伸びきった本体全てから巨大な月牙が放たれた。

激突。竜巻のような霊力嵐を巻き起こし拮抗する、二つの剣。

「莫迦な……！」

だが均衡は長くは続かなかった。崩れた迫り合いで爆ぜた大気を利用し、藍染は再度宙へ飛び上がる。

押し負けたのだ。無敵を誇った我が斬術が。

新たに抉れ生まれた崖に降り立ち、藍染は黒崎一護の実力に瞠目する。桃の言葉の断片から予想はしていたが、いざ現実として目の当たりにすれば驚く他ない。

「……急に力が増したな。それにその鎖の刀……それが貴様の新たな進化と言う事か……ッ」

先ほどの呆けた心は幻か。この崩玉の力を以てしてもかつて対峙し観測したあらゆる強者を凌駕する、真正正銘の最強。幾多の絶望を乗り越え、今の彼は確実に我が身に届く刃となっていた。

「さあな。ただ……」

対し青年は男の称賛を聞き流しながら、深い構えを作る。

そして。

「てめえが踏み台だと思ってた男の中に——てめえを倒すための剣が隠されてただけだッ!!」

黒崎一護は続く咆哮と共に、あの人が解き放った秘密の力を引き出した。

「ああ、そうだ！ てめえの言う通りだ、藍染！」
「……」

膨大なエネルギーに四肢が軋む。それらを無理やり動かし、青年は敵へ突進する。

「俺にはてめえみてえな技術も技も何もねえ！ 俺にできるのは、ガキみてえに誰かから貰った刃を振り回す事！ そんだけだ！」

膨れ上がった霊圧に耐えきれず、一護の体の至る所が破裂する。それでも彼は止まらない。

「だけど俺には斬月が居る！ ホワイトも居る！ あの人が居る！
！ 俺に力を貸してくれる奴らが居るんだ！」

過ぎた力が己が身に返るも、勇者は血だらけな両腕を必死に擡げ：
「その力で俺はてめえを倒す！！ 護りてえモンを全部、全部護りきつてやるツ！！」

かくして黒崎一護は、溢れる霊圧で全身全霊の一撃を振り下ろした。

「終わりだ！！ 藍染ツ！！」

—— 月^げが^て牙^ん天^し衝^{ょう} ——

立ち上る粉塵が尸^{ソウルソサエティ}魂界の上空に巨大な積乱雲を形成する。

霊圧で風化していく足下の地面を荒い息で見つめながら、一護は封

印されていた力の反動で崩れ落ち、身動き一つ取れずにいた。

無茶をし過ぎたのだろう。全身から流れ出る血はかなりの量だ。

それでも斬月や仮面のあの人が守ってくれたのか、致命的な自滅は免れた。

後は、瀕死の藍染の胸元に例の切り札を叩き込むだけだ。それで崩玉は破壊される。

それで、この長い長い戦いは、終わる。

「……知っていたさ」

だが、そんな希望を絶望に突き落とす声が荒地に木霊した。

「嘘……だろ……」

背後の土煙へ振り向き、絶句する一護。

あり得ない。今のは千メートル以上もの地殻を消し飛ばす、この半融合状態で放てる最強にして自傷覚悟の月牙天衝だった。身を滅ぼすと封印されていたのも当然、次に同じ威力の技を放てば確実に死ぬ。それほどの一撃だったはずだ。

だが敵の恐るべき耐久力に唾然とする一護へ、魔王が追撃の真実を突き付ける。

「…私は彼女が、この戦いで君に私を倒させるために…」

——私の要求より強大な虚^{ホウライト}の個体を君に授けた事を、知っていた」
「……なッ!？」

それは先刻の過去の河原であの人が明かした、藍染を倒す二十年越しの一手。一護の身を傷付けるほどの力を有し、今までずっと彼女の”お守り”で封じられていたもの。

それを、なんでこの男が。

「疑問に思わなかったのか？ 何故未来が見えるはずの雛森桃が、初

対面で容易く私の事を信じ部下に加わったのか。私が命じた悪行の数々を、何の抵抗もなく盲目的に遂行したのか」

だが藍染の言葉に青年はハッと気付く。

雛森桃の悲劇的な運命については一護自身も似たような経験があった。

自分よりも自分の事に詳しい斬月たち。それと同じようにあの未来視の力も明確な”個”を持ち、対話や同調の不足で簡単に未来を覚えてくれなかったのだろう。

そういう類のものだと思っていた。

だが違うのだとしたら、その能力自体が…

「万能じゃねえって、言いてえのか…」

ボロボロの体に鞭を打ち、一護は苦い顔で何とか剣を構える。

知らずの内に妄信してしまっていた。”未来を見る力”なんて、簡単に人が持つていいものではないはずなのに。なんの制約もないはずがないのに。

「妙な事だ、黒崎一護。君が以前私に抱いた恐怖は霊圧だけでなく、自らの人生全てを手中に収める私の知略にこそあつたはずだ」

「…ッ」

そして臍を噛む青年を、藍染が嗤った。

「そんな私が、たかが未来を知る小娘一人の杜撰な策に後れを取った…と。本当にそう信じているのか？」

魔王の嘲りに一護は啞然と立ち尽くす。

そうだ、何故思い至らなかった。

タイムパラドックスなんて児童文学にも出てくるありふれた創作ネタだ。未来を知る者が居る時点で、この世は既に別の未来を歩んでいる。

そしてその未来を誰よりも早く分析し、自分の覇道に利用した本当の悪人こそが…

この、藍染惣右介だと言うのか。

「…さて、最後に二つ。君が破壊を目論む、私の”崩玉”について話を

しよう」

そう始め、煙の奥で魔王が語る。

「桃に与えた崩玉は、彼女の中に宿るとある超越者を、あるべき領域へと昇華させる布石の一つだった。その布石は浦原喜助と日番谷冬獅郎、そして君による破格の刺激により、私の想像を大きく上回る結果となった」

喜悦の籠った低い声が続く。

「あの崩玉は無数の彼女の複霊魂魄クローンで構築されていた。私がその手間を取った目的は、そうして作られた崩玉が雛森桃と言う主と最も霊的親和性が高いからだけではない。彼女の矮小な魂魄一つでは依り代たり得なかった——その”神”の存在の全てを降臨させる器とするためでもあった」

「何……だつて……？」

男の計画の荒唐無稽さに戦慄しながら、一護はあの過去の空座町で再会した少女の姿を思い浮かべる。

不思議としか形容できない、紅桃色の星雲を宿す蝶蜂の翅。

最初に覚えた感想が”妖精”、もしくは”天女”という神秘的な存在だったのは、あるいはそれが彼女の本当の正体だったからなのかもしれない。

だが青褪める一護へ、魔王が「そしてもう一つ」と前置き、更なる辯舌を口にした。

「私が桃に崩玉を与えた最後の理由。それは…

全ての崩玉研究の最終実験だ」

土埃の中で藍染の声の質が変わる。身構える一護の耳に届くのは、グチャグチャと不気味な水質の音。

あの煙の中で、何かよからぬことが起きている。

『他者の思惑で与えられた力しか持たない君ならば、尚の事理解できるだろう。自分の能力に対する、抱くべきその矜持を』

「て、てめえ…一体何をして…！」

『最初の崩玉は、無数の玉石混交の死神の魂魄を喰らって育まれたものだ。この私が、そんな虚のような低俗な進化を望むと思うか。浦原喜助などと言う唾棄すべき日和見主義者が生み出したものを、この私が自らの力とする事を許容すると思うか』

魔王の言葉が異様な悪寒を駆り立てる。

ダメだ、止めなければ。あの奥で起きている事を。されど焦る一護の魂魄は大技の疲弊憔悴を振り払えず、敵のソレを許してしまう。そして、傷付いた藍染を隠す、砂塵のボールが取り掃われた時。

『…ああ、漸く…』

—我等は一個の命となった—

霊圧の爆発で掻き消された土煙の中から、純白の死天使が現れた。

「…な、何だよ……それ……!?!」

手足が、構えた剣先が震える。それまでとは桁の違う規模の霊圧を纏い、立つだけで辺りの岩盤を灰に変える超級の化物。

『…感謝する、黒崎一護。君のお陰で、私は真の高みへと歩み出せた』

それは白髪白肌の美丈夫。背には一対の異形の翼が羽搏き、それぞれ八つの風穴が目玉のような霊圧を宿している。

全てが白化した石膏像の如き姿の藍染惣右介が、超然とした冷笑で、一護を見下ろしていた。

『さあ、機は満ちた…』

是^{これ}より、君を喰らうとしよう
|

俺自身が月牙になる事だ…

絶望だ。

絶望が黒崎一護の前に降臨した。死力を振り絞った自滅覚悟の必殺技。全身の至る所が爆ぜる程の力を解き放って尚、巨悪——藍染惣右介は二つの足で悠然と立っていた。

『…ああ、素晴らしい。かつてこれほど天を間近に感じた事があつたか…！』

喜色に満ちた声が大気を震わせる。

一護の絶望は敵の健在だけではなかつた。あれこそが奴の言う、個の生存本能が齎した”進化”なのか。強大な一撃を受けた崩玉が主の危機に応え、あの魔王を更なる上位存在へと昇華させたのだ。

戦慄する青年の前で新たな体を確認し終えた藍染が、ゆっくりと彼の方へ振り向いた。

『なるほど。どうやら君は、この姿に既視感があるようだな』

「…あ、あ…」

その美貌に暗い悦びを滲ませ、巨悪が口角を吊り上げる。

既視感。確かにその通りだった。

大理石の彫像の如き全身。胸元から背中の翼へ繋がる破れた布のような霊圧の襞。前者は崩玉のおぞましい怪物に変化していた時。後者はあの過去の記憶の世界で再会した時。どちらの特徴も一護の知る、とある少女を彷彿とさせた。

偶然か、あるいは不吉な因果による必然か。その異様な風貌を見て、勇者の脳裏にあの人が口にしていた一つの言葉が浮かぶ。

——あらゆる色を漂白する、浄罪の剣。

それは彼女が一護へ授けた虚・ホワイトの暗喩だ。だが只の縁起のまじないであるはずのその言葉が、奇しくも真逆の呪いのように彼へ重くのしかかる。

藍染の新たな姿は、まるでそんな青年の力を嘲笑うかのような、”純白”だった。

『どうした黒崎一護、何を呆けている』

「…ッ、呆けてねえ…っ！」

『空座町を護れる者は君しかいない。君の戦意だけが、あの地の人間達を護る最後の希望なのだ』

「当たり前だ！ 俺があいつらを——護るんだよオオオオッ!!」

その純白に抱く不吉な悪寒を振り払い、勇者は奮い立つ。裂けた骨肉から溢れる血を厭わずに。

戦いが再開した。一薙ぎで山が輪切りに消し飛び、荒地を谷に変える神の裁きの如き破壊が、幾度となく繰り返される。

「まだだ！ まだ俺は戦えるッ!!」

『……』

空から地の底まで両断され、吹き荒む超越者達の霊圧が周囲の万物を消滅させる。それら朽ちた霊子が大気を穢し、二人の周囲はまるで瞬きと共に日夜が入れ替わる真空と灰塵の表裏地獄と化す。

…俺しかいねえんだ。俺が勝たねえといけねえんだ。

「くそっ！ くそオオッ!!」

だが必死に剣を振り回す一護の顔は憔悴に歪んでいた。どれほど力を込めて斬り付けようと悉くがいなされる。剣圧の余波で傷を付けられた以前とは異なる、両者の力関係。青年の大地を裂く兜割りを半歩で逸らし、大気を抉る横の一字を無造作に弾き、その度に藍染の白い瞳が失望に淀んでいく。

そして勇者が膠着を打破せんと振りかぶった全力の【天鎖斬月】の前で、魔王は無言で剣を下げ、無防備にその身を晒した。

「喰らええええええええええッ」

—— 月 牙 天 衝 ——

蒼黒の靈圧が山溪を消し飛ばし、斬り裂かれた世界の絶叫が激震となつて尸魂界全土に響き渡る。最早前後左右もわからない砂塵の大嵐が視界の全てを奪う中、一護は剣を振り下ろしたまま固まつていた。

力の反動で体中から血が吹き出す。靈圧が四肢を蝕み力が入らない。そして最後の気力さえも……

「な……」

刀身がぐわんぐわんと唸り震えている。その切先から伝わるあり得ないほど硬質なナニカに打ち付けた感触に、そんなバカなと青褪める勇者。

『——漸く、理解出来たようだな』

だが耳に響く男の低い声が、一護を現実から逃がさない。

「嘘……だろ……」

敵が放った靈圧で周囲の土煙が掻き消える。

その奥、青年の目の前にあったのは——薄皮一つの傷もない、藍染惣右介の白亜の胸元だった。

『これが今の我等の、格の差だ』

嘘だ、認められるか。一護の口から喘ぐような吐息が零れる。

『……いい顔だ、黒崎一護』

「あ、あ……」

『更木剣八、朽木白哉、ウルキオラ。強敵と対峙し、それまで培ってきた強者の自信を打ち砕かれた時。君は必ず戦いの中で一度絶望し……そして必ず、立ち上がった』

——自らの内に秘められた力を、新たに引き出して。

その言葉に一護はハツとする。

『君の敵は皆一人残らず君を侮り、最後に敗北した。更木剣八に斬り伏せられようと、朽木白哉の靈圧で体が限界になろうと、ウルキオラ

に胸を穿たれようと。君は死に瀕した際、必ず彼らを超える力に目覚め、戦いを制してきた』

「…ッ」

『私はそんな君の歩みを見続けてきた。そして君が勝利を積み重ねる度に、その剣がいずれ私の喉元にすら届くのだろうと、予感を確信に近付けていった』

藍染が一護に与えた才能は貴種の霊能者の血と、強大な最上級大虚^{ヴァーストロデー}の力。自然界では決してあり得ない存在であるためその力の底が見えず、だからこそ自身の探究の最高の素体となり得たのだ。

『そして同時に私は悟った。当初の崩玉の力だけでは君の潜在能力を、成長速度において凌駕する事は不可能であると』

魔王は語る。

雑多な死神の魂魄を喰わせ育んだ藍染の最初の崩玉は、”進化の多様性”こそ優れていたが、黒崎一護との戦いに必要となる”進化の幅”が不十分だった。それは後に雛森桃に与えた第二の崩玉との比較による分析であり、その原因と思われたのは、藍染の最初の崩玉の根幹を成す死神の魂魄が——雛森のそれとは異なり——いずれも彼自身身の飽くなき向上心に置き去りにされるような愚物ばかりの有象無象である事だった。

『私の望む高みへ追従できる者は、私しかない。そして私の望む高みを知る者は、”彼女”しかない』

「…!？」

まさか。その言葉の含意に気付いた一護は絶句する。

まさか。もし、もしそうなのだとしたら。

こいつの持つ崩玉の正体は。

『…全く、常々思わされる。神なる者と、神ならざる者との真の隔たりは——”心”にこそ存在するのだと』

そして茫然自失と立ち尽くす勇者へ、変わらぬ冷徹な薄ら笑みを浮かべる魔王が、その最悪の真実を告げた。

『——その通りだ、黒崎一護。この崩玉の核となった魂魄は…』

幾多の私と、
雛森桃の複靈義魂だ。

「——ぐああアア”ア”ア”アアア”アツ!!」

紫紺の光が瞬き、地平が燬される。

桁外れな霊圧の炮煩に体を焼かれ、激痛に絶叫を上げる一護。

『……ふむ、やはりこの規模の力は扱いが難しい。匙加減一つで君程の強者すら灰になる』

宙に佇み、地べたの青年を見下ろす神炎の主、藍染惣右介。それがこの場の両雄の”格”の差だった。

『見苦しいぞ、黒崎一護。君が未だ力の底を秘めている事など過去の戦いを振り返れば誰でも想像が付く。天女の寵愛を受けた者が無様に土を舐めるな』

「……がふっ……ぐ、う……ッ」

『君に不可能であれば、あの娘に授けられた内なる虚に体を明け渡すといい。朽木白哉を、ウルキオラを倒したように、その穴だらけな肢体を超速再生で回復させたまえ。彼女に造られた存在ならば今の私と戦える術を持っているだろう』

満身創痍の一護へ魔王が豪語する。その術を前に、私は更なる進化

を遂げて見せよう、と。

だが青年は荒い息を上げるだけ。藍染は苛立ち、腕の一振りでも破滅の流彗群を彼の周囲に降り注がせた。

『…聞こえなかったのか？ 私には“立て”と言ったんだ』

「がッ……」

一護は墜星の爆風に吹き飛ばされゴミのように空を舞う。朦朧とした意識で砂漠化した大地に崩れ落ちながら、されど青年は一つの記憶を脳髓に思い浮かべていた。

——お前は宝だ、一護。

それは、悲しい、悲しい、別れの言葉だった。

『君はここに来る前、あの娘の手助けで既に一度壁を破っている。それも羽虫から超越者へと至る、途轍もなく高く、厚い壁だ』

「……う、あ……」

藍染の追撃を受け、為すすべなく砂漠を転がる必勝の勇者。それを見る巨悪の白い瞳には、未だ期待の熱が燃えていた。

『ならば新たな壁が立ち塞がろうと、君ならば越える事が出来るはずだ。違うか、黒崎一護？』

一步、一步。死が近付いて来る。その恐ろしい霊圧に体を焼かれながら、一護は魔王の目を見つめていた。

…ああ、まただ。また奴があの子をしてる。

この感覚はよく覚えてる。かつて彼が市丸ギンと対峙した時に感じたものだ。

俺を見ているのに、見ていない。まるでこちらを通して別の誰かを見ているかのような、不気味で不快な感覚。

奴は一体誰を、何を見ているのだろうか。俺の力か、俺の才能か、それとも…

『何をしている、人間の勇者よ。よもやこれが君の進化の果てだと言うのではあるまい』

「…ッ」

『それともあの娘は、本当に私の崩玉の正体に気付いていなかったと言うのか？ 戦う君をその程度の手助けで十分だと私に挑ませたのか？』

失望の色に彩られた無地の虹彩に見下ろされながら、一護は静かに手元の剣を握り続けていた。

魂の相棒、斬月。

今頃あいつらはどうしているだろうか。情けない王に怒っているのだろうか、落胆しているのだろうか、必死に励まそうと叫んでくれているのだろうか。

一秒でも、一瞬でも長く、彼等と一緒に居たかった。共に存分に戦い、勝利を掴みたかった。

ああ、 فقط。

『どうやら君の腸を余さず引き摺り出すには、純然たる死の恐怖が必要ようだ』

目の前に聳える純白の死天使が、手と一つになった剣を擡げる。奇しくも一護と同じように体と一体化した斬魄刀だ。

平伏す自分と命を握る藍染、二度目の光景。されど二度目の慈悲はないだろう。

だが絶死の間合いの中にありながら、青年の意識は浮世に無かった。

「…斬月……」

そして、あの全身全霊の月牙天衝を遥かに超える魔王の一閃が、一護に迫る。

彼が死の瀬戸際で思いを馳せたのは、夢幻の心象景色。

あの無数の蒼い摩天楼が天を貫く、斬魄刀の世界だった――

剣撃の金属音が、止んだ。

どれほどの時間が過ぎただろう。永遠にも思えた精神世界での三ヶ月の激闘は、極限の精神で掴んだ直感に身を委ねた事で、その終わりを迎えた。

『…よく気付いたな、一護』

白いコートの右腕に鎖を這わせ、左半の頭部を覆う片角の仮面の青年「天鎖斬月」が口を開く。

「痛みが…無え…」

『当然だ。私達はお前自身の力。お前が受け入れてくれたなら、私達がお前を傷付ける事などありはしない』

何かを押し殺すような声で、彼が言う。

異様な光景だった。一護の胸には青年の白い剣が突き刺さり、しかしその傷口から一滴の血も零れない。

代わりに摩天楼の屋上に、ポタリと落ちたのは――

「斬…月…？」

気付いた一護は困惑し問いかける。切先から胸に伝わるのは、果てしない悲愴な想い。

『…………一護』

顔を上げ、白い斬月が主の名を呼ぶ。そこにあった小さな一筋の光に、震える声に、一護は息を呑んだ。

涙だ。

斬月が、俺の“力”が泣いているのだ。

「な……んで……」

『一護……お前は私の宝だ。私はお前から多くの事を学び……多くのものを貰った』

青年の独白は続く。

『最初に名乗った名は届かなかったが……お前のお陰で、私達は【斬月】と言う名でお前に逢えた』

「……」

『嬉しかった。幸せだった。これでようやくお前に声が届く。あの時の感動は、その対価に見合うほどの幸福だった……』

対価。彼はそう言った。

王の疑問に斬月が答える。

『私は、お前に争いを知らずに生きて欲しかった』

「……」

一護は目を見開く。

『剣の痛みを、戦場の恐怖を知らない世界で生きて欲しかった。平和な時代に生まれた無垢な人間として、争い無き世を生きて欲しかった』

「斬月……」

それは死神の力の化身たる斬魄刀ならざる言葉だった。

『だがお前は、大きな運命を背負って生まれた。お前にしか果たせない、悲運の定めを』

斬月は『全ての非は私にある』と、何かを強く悔やんでいた。その意味は一護にはわからなかったが、彼がああ仮面の少女のように何かしらの言えない秘密を抱えている事だけは、漠然と理解出来た。

『……最後の月牙天衝』

「ッ！」

ハツと一護は身構える。この長い長い試練に挑み、投げ出す事なく乗り越えられたのは、偏にその技を会得するため。

しかし漸く手に出来ると喜ぶべき状況にありながら、斬月の剣に貫かれた胸には、寂しさばかりが沸き上がる。

『その技は、お前が受け入れた胸の天鎖斬月から伝わるだろう』

「…あ」

突き刺さった斬魄刀から手を放し、白い青年が離れていく。

一護は試練の始まりに彼へ訊いた。何故俺の護りたいものが、彼の護りたいものではないのだ、と。

去り際に王を一瞥した斬月は、最後にその問いに答えてくれた。

『私が護りたかったものは——』

ドクン、と強い魄脈が大気を震わせる。

その予兆に振り下ろした刀を寸前で止めた藍染は、直後に起きた勇者の異変に驚愕した。

「……見せてやるよ」

——最後の月牙天衝だ。

途轍もない規模の霊力が天へと立ち上る。まるで夜空の天の川が噴き出したかのような、輝く闇の奔流。

咄嗟に距離を取った魔王は、そこで、一人の英雄を見た。

『…貴様、それはまさか…！』

風に舞う漆黒の長髪。

左肩を残す全身に幾重にも巻き付く青灰色の霊布。

目元の隙間から覗く、彼の霊力と同じ蒼黒の瞳。

その右手と融合していた斬魄刀は消え、代わってそこにあるのは、揺らめき纏わり付く漆黒の霊圧。

あらゆる”祟”を身に纏ったその英雄の名は——黒崎一護。

死神とも虚とも異なる、明らかに別の力をその手に握り、復活を遂げた勇者は絶大な霊圧を放ちながらそこに佇んでいた。

『ッ、これは…』

辺りの地形が気化していく。存在自体が世界を滅ぼすその様は、まさしく神の霊格。

斯様な領域へ至った人間の青年、新たな力を引き出し立ち上がった”獲物”と相対した藍染は、咄嗟に息を呑み…

『——ッハハハハハ!!』

そして、狂った様に歓喜した。

『ハハハハハ！ 素晴らしい！ 見事だ、天賦の人形よ！ それが貴様の内に眠る”第三の力”か！ あるいはそれこそが神託の祝福、この私を敗る天女の編纂か！』

「……」

『いや、そんな事はどうでもいい…！ 貴様が今、この私に更なる進化の可能性を示した。その事実のみが重要なのだ！』

やはり、彼は最高の指標だ。最高の探究素体だ。この土壇場で本当に私を超越する力を引き出し、勝利を掴まんとしている。阿散井恋次との、更木剣八との、朽木白哉との、グリムジョーとの、そしてウルキオラとの戦いの時のように。彼は、この藍染惣右介すら倒そうとしている。

その事実が、男の飽くなき高みへの渴望を刺激して止まない。

『そうだ、見たまえ崩玉よ…！ 新たな道筋だ！ 新たな領域だ！
目指すべき世界は開けているぞ！』

願うのは指標。この身をより高次の存在へ到達させる事。

同じ無限の向上心を持つ自らの複霊を崩玉の意思とし、天女の複霊を進化の道標とし、藍染は目の前の壁を打ち砕くべく全身全霊の力をこの一太刀に込める。

『さあ、女神の勇者よ！ その力を投じて見せろ！ 死神も虚も超越したこの私に貴様の才僞をぶつけて見せろ！ 全ては、この私を天へと誘う糧となるのだ！』

魔王の笑い声が荒地の果てまで木霊する。

聞く者皆を震え上がらせる邪悪な喜色を、されど一護は一人、それを静かに怒りの炎へくべていた。

「…まだそんな事言ってるのかよ、藍染」

その口が紡いだのは憤懣の籠った呆れ声。水を差された藍染が不快げに眉を顰める。

「てめえはいつもそうだ。俺が作られた実験動物だの、誰かを大切に想う感情がそう仕向けられた偽物だの、てめえは一度として俺を人として見やしねえ」

一護の脳裏に浮かぶのは現世の偽の空座町での戦いだ。こいつの台詞、眼差し、態度、そして攻撃。それらから伝わる藍染の想いは、必ず一つだった。

俺と戦いながら、別の誰かと戦ってる。俺を見つめながら、別の誰かを見つめている。それが、藍染惣右介と言う男だった。

「断界で修行する前だったらまだわかる。弱え俺があんたに対等と認めて貰えるなんて無茶な話だ」

『……』

「だけどあんたは俺が強くなった後も、その姿になる前…俺の攻撃で劣勢になった時も、俺を対等どころか…敵」としてすら見なかった。あんたみてえに強い奴がみんな持つてるプライドとかじゃねえ。

本気で俺を物か何かとしてしか見てなかった」

一護は死神の力に目覚めてから多くの戦いを潜り抜け、そして知った。戦いとは想いのぶつけ合いなのだ。強者には強者の、弱者には弱者の想いがあり、それらが剣を通う事で相手に伝わっていく。人間である青年には死神の文化も作法も礼儀もわからないが、その”想いのぶつけ合い”だけは、何かしら胸を打つものがあつた。

あるいはそれが戦いの流儀なのだと思えるほどに。

『…そうか』

そして、藍染にはそれがなかった。

『君にそう見えたと言う事は、私は真に”神”の心を手に入れたと言う事か』

ああ、今もそうだ。そうであつて欲しかったと言わんばかりの凶悪な笑顔で自分の異常な精神性を賛美する奴は、心底救いがない。

…だから嫌だつたんだ。この技をこいつに使わないといけない事が。その反動以上に、無数の想いが籠つたこの技を、こんな、戦つてなんの感動もない、ただ嫌な気分になるだけの敵を、人生最後の相手にしなければならぬ事が。

『…【最後の月牙天衝】 っていうのは、

——俺自身が月牙になる事だ』

一護は無を掴む。その空の拳の隙間に、一筋の黒い霊圧が集まつていく。まるで一振りの剣のように。

「俺自身を月牙に…つまり俺が持つ斬月も、虚も、俺の全ての能力を消費して、一つの月牙にする。そしてこの技を使った時、俺は持つてる力の全てを失う」

『…！』

「『最後』 っていうのは、そういう意味だ」

自分自身を投げ打ち放つ最強にして、最哀の一撃。悔いばかりが残

る青年は、それでも気丈に敵を睨み付ける。心の持ち様一つで己の力がどうなるか、彼は身を以て理解していた。

『…なるほど。それはさぞかし、喰らい甲斐がある力だ』

藍染が顔の笑みを深め、「君の献身に感謝する」と礼を述べた。

「…チツ、やっぱてめえとはわかり合えねえな」

『そんなに悲観する必要はない。君と言う優秀な道化が見せた名演は、我々の中に永遠に記憶されるだろう』

挑発か本心か。どちらであろうと聞くに堪えない戯言だった。

向かい合う両雄。最後の一合い。

無数の想いを無手に込める青年。無限の進化を追い求める魔王。

高まる霊圧が最高潮に達し、景色が、空間が水面を通すかのように歪んでいく。

「最後に一つ、言っとくぜ」

『訊こう』

「俺はてめえの人形でも女神の勇者でもねえ——」

そして二人の超越者は、遂に雌雄を決する審判の時を迎える。

「俺は——」

黒崎一護だツツ!!」

斯くて、刃は振り下ろされた…

俺自身が決着になる事だ…

死神と虚、相反する種の壁を操る超物質——”崩玉”。

その概念を具現化させる研究は、長い尸魂界の歴史において幾度となく試されてきた。霊王の因子を霊性科学に役立てる研究に熱心だった四大貴族綱彌代家は勿論、名も無き科学者達が遺した資料は大霊書廻廊に納められ、そして初代技術開発局局長・浦原喜助の手によって初めて実用段階へと至った。

藍染惣右介はこの”崩玉”の研究に関し、意外にも浦原より先んじていた。自らの死神としての限界を切実な問題として捉えていた彼は、後天的に超越者へと進化するための手段として”死神の虚化”に目を付けた。崩玉とは、その研究の末に辿り着いた結論の一つである。

だが藍染の研究は頓挫する。

死神の魂魄を核としたもの。虚の魂魄を核としたもの。両方の力を持つ破面アランカルの魂魄を核としたもの。それらに死神・虚・破面の魂魄を喰らわせ進化を促しても、彼が求める性能を有する崩玉は一向に生まれなかった。

理論的に正しいはずの製造方法が悉く失敗する理由は何か。技術か、素体か、もしくは理論そのものが誤りなのか。無視出来ない違和感の蓄積が明確な疑問へと変わり、藍染は幾度の実験と、最高傑作である十六年前の”黒崎一護”の誕生で自らの仮説を実証した。

——崩玉とは”虚化物質”ではなく、周囲の者の心を、その者の潜在能力の許す限りで具現化する理である。

そんな多様性に富んだ万能に近い力の源は、崩玉と言う物質の製造

方法にあった。

崩玉は核とそれを内包する器によつて構成されているが、この核となりうるものは二つ。死神と、霊王の因子だ。超生物である霊王は勿論、死神もまた自らの魂を【浅打】という器を通して具現化する種族。彼等の魂魄から死神の因子を抽出し、それらを無数に融合させる事で、あらゆる霊圧・才能・潜在能力を統合させた物質。それが崩玉の正体だ。

そして故に藍染は、そうして造られた自身の最初の崩玉に満足できなかった。

何故そこらの有象無象の持つ矮小な心を自らの進化の土台としなければならぬのか。己より遙かに劣る愚物等がこの私の望む高みに追従できるはずがあるものか。

何より、死神と虚の壁を取り払った破面アランカルと言う理想体そのものが、到底彼の望む超越者に相応しい力を有していなかった。

その不満から始まった研究が、同一魂魄——即ち複霊クローンによる崩玉の純化精製。真霊オリジナルとの融合によりその魂魄規模を爆発的に跳ね上げる、霊格の昇華だった。

だが、藍染はこの“崩玉の純化精製”の研究にて二度目の挫折を経験する。無数の魂魄の集合体である崩玉は、一般的な最下級大虚ギリアンのようにそれぞれの魂魄としての自我を失い、本能的な意思しか持ち得ない。しかし同じ魂魄を合成して生み出される純化崩玉は、その成り立ちから統一された確固たる“個”を有してしまったのだ。

ある卓上予測では崩玉の反逆で真霊オリジナルの精神が消滅し、またある予測では素体の複霊クローン達の絶望で崩玉の機能を持たない失敗作となった。そんな低迷の中、藍染の研究所で一つの奇跡が起きる。

雛森桃の複霊を用いた、第二の崩玉の誕生だ。

元々は自身のクローンと言う自我冒瀆を前にした“神”ももの反応を観測するために半ば遊びで造った義魂を、この“崩玉の純化精製”の研究に利用しようと更なる遊びで思い付いた結果の、神秘的な偶然

だった。

君達は真^{オリジナル}霊の崩玉の素材としてこれより消費される。そう一堂に会させた複^{クローン}霊達へ通達した時、彼女達は一瞬の沈黙の後、こう述べた。

——ぜひお願いします！

個ではなく野望、即ち心を全ての行動原理の根幹とする者。一人残らずその身を捧げ、真^{オリジナル}霊に絶対従順な純化崩玉として生まれ変わった、雛森桃。

それは藍染のどの予測にも当てはまらない、正しく”神の因子”の片鱗であった。

彼は確信する。

あの”神の因子”こそが、この世を俯瞰する彼女を彼女たらしめる真の霊格であると。そして飽くなき向上心で自らのあらゆる成長の可能性を暴いてしまった藍染惣右介の複^{クローン}霊だけでは、魂魄限界こそ上昇するものの、雛森桃の領域に至るための”神の因子”を手にする事はできないと。

本来この世に存在し得ないもの——完全なる無を無以外にする事は、どんな才ある者でも不可能だ。

…だが無ではなく、一ならばどうか。一で百の、千の領域に昇る事はどうか。

その一を得る唯一の方法に思い至った時、藍染は迷わなかった。

「——ええっ?! あ、あたし藍染隊長の崩玉の素材にされちゃうんですか!？」

特別に造った一体の雛森桃の複^{クローン}霊義魂に目的を明かした際、例の個体は仰天し拒絶反応を見せた。だが藍染には、ブツブツ「確かにある意味最悪のNTRだけど…」などと挙動不審に逡巡する彼女を説得する材料は山ほどあった。

「そうだね、君が賛同してくれたなら……私は最大限、君達が望む日番谷冬獅郎の演目に協力しよう」

「!? なりますなりません絶対なります!! あたしを藍染隊長の崩玉にしてくださいっ!!」

かくして契約は成された。

雛森桃の複霊クロインを自らの崩玉の一部とし、”神の因子”を手に入れた藍染は高みへと歩み出す。雛森桃が第二の崩玉との融合に成功した同日に、断界だんがいの超時空にて獲得した二千倍の時間で自身の崩玉の純化を決行。決戦時の雛森が起こした超常の怪物化という追い風もあり、藍染は己の進化計画が正しい事を、抗う自身の複霊達クロインに証明する。

そして魔王は空座町決戦時に崩玉の意志を完全に取り込み、巨大化したその魂魄は、遂に超越者の領域へと至る——

水平線の果てまで広がる、ありとあらゆる物質が消滅したクレター。その死した大地の中央で、二つの人影が交差し立っていた。

互いに胸を袈裟に斬られ、夥しい血潮を流す、無手の勇者と白刀の魔王。全力を投じ、雌雄を決す最後の一撃を交わした末の残心。

万物が固唾を呑み、世界は静寂に包まれた。張り詰める空気の中、ピシリと硬質な何かが罅割れる音が沈黙を破る。

先に異変を見せたのは、黒、勇者だった。

右腕から左肩までの全身を覆う青灰色の霊布に、亀裂が入る。一片、一片。巻き付く布がポロポロと漆喰のように崩れていく。その最

後の一欠片が腕から剥がれ落ちた時、膝まで届く青年の黒髪が風に溶け消え、橙髪の地毛が露わになった。

それは、大切な”あるもの”が彼の中から消えていく事を暗示させる、哀切の光景だった。

「——悪い…斬月……」

ポツリと零れた謝罪に続き、両雄の片割れが血を咳き崩れ落ちる。

『……ぐ……』

次に動いたのは残された”白”の魔王。白化した体がぐらりと揺らぎ、地へと倒れていく。

だが、その寸前。男の片足が踏み止まった。

『……！』

大地を砕く大きな一步に支えられ、軋む四肢を奮い立たせる男。その最後の意地に、彼の”力”が応えてみせた。

真紅に染まった肉が蠢き、体を裂く致命傷が瞬く間に塞がっている。そして深い息を吐き出した後、男の皮膚に白以外の色は微塵も残っていないかった。

死覇装と無色の皮膚。相反する明暗を司る両雄の軍配は、”白”に上がった。

『——どうやら…勝敗は決したようだな……黒崎一護』

男の低い声が耳へ届く。僅かに残った意識でその元を見上げる地べたの勇者——黒崎一護は、そこで、満足げな暗い笑みを浮かべる魔王を見た。

『…実に恐るべき一撃だった。誇るといい。崩玉の力を以てしても明確な死を幻視するほどの恐怖を…君はこの私に突き付けたのだ』

『……く……ッ』

両腕を広げ、魔王——藍染惣右介が青年に喝采を送る。未だ先ほどの負傷の疲弊が残っているのか、男の息は荒く、勝ち誇るような動作

もぎこちない。

だが一護の勇氣ある心は、多大な犠牲を投じても敵を倒せなかった不甲斐なさに、その芯まで染まっていた。

『親愛なる私の糧よ、君は実に良く戦った。私の期待に応え、幾度も絶望を乗り越え、遂にはその身を焼き尽くしてまで私を倒すための剣を搦んでくれた』

「…て…めえ…」

『感謝しよう、黒崎一護。君の犠牲によって、私が欲した高みへの道は拓かれた…！』

歓喜に霊圧を昂らせる魔王に見下ろされ、非力な青年は何とか立ち上がろうとする。されど体を支える両腕は虚しく震え、上げる怒号も負け犬の遠吠えにすら劣る擦れ声。どれほど力を込めようと、一護に出来たのは地べたから巨悪を睨み付ける事だけだった。

そんな彼へ、魔王が無慈悲な問いを投げかける。

『…さて、こうして君と言葉を交わすのも最後になる。これまでの働きに敬意を表し、君の”英雄譚”の終幕は君自身に選ばせてあげるとしよう』

「な…」

『答え給え、黒崎一護。全ての霊能を失った君は、何れを望む？』

——神の道化に殉ずる道か、

唯の人間として生きる道か——

そんな藍染の冷笑に、一護は齒を食い縛る。

『だれが…死ぬかよ…！』

『ほう』

「死んで…たまるかよ…！ 俺が…てめえを…倒すんだ…ッ」
押し潰されそうな無力感と絶望を必死に振り払い、砕け散った戦意をかき集める。

「ぐ…、くそお…オツ…！」

だが、一護の中にはもう、彼の崇高な意思を力にする霊なる源泉は

残されていないなかった。

『成程。他者の示す道ではなく、自ら選んだ道を歩むと言う事か』

勇者の抵抗に魔王は感心する。

運命を超克するべくあらゆる手段を模索し、果て無き天を目指す魔王。

力を失って尚、敵の示す選択肢を跳ね除け、自らが歩む道を信じる勇者。

黒崎一護は生まれる前から、これまで常に他者の掌の上で踊り続けてきた。その役割を成せずに終わった役者には、嘲りの視線こそが相応しいのだろう。しかし藍染は、彼の不屈の心が放つ強い輝きに確かな敬意を抱いていた。

それは男自身も気付かない、ふとした些細な心境の変化だったのかもしれない。だが藍染惣右介と言う男にとってそれは、根本的な何かを変える大きな転換だった。

『いいだろう、黒崎一護。私が王鍵の創生を執り行う間、その命は残しておく』

「ま…待て…!」

『君はそこで君の町が滅ぶ様を存分に眺めていなさい。まだ戦う力が残っているのなら、いつでも挑んでくるといい』

魔王が踵を返す。悠々と遠くの空座町へと歩みを進めるその後ろ姿へ、一護は無様に縋り付こうと腕を伸ばす。

「やめろ…藍染…! くそ…ッ!」

遠ざかる宿敵。届かない手。敗れた勇者の胸を絶望の闇が埋め尽くす。

「動け…! 動けよ…オ…!」

嗚咽のような情けない声で痙攣する四肢を叱咤する。辛うじて体を起こした一護は、されどそこで右手の相棒を掴もうとし、虚空を握った。

斬月も、虚も、あの人に解放して貰った力も無い。彼にはもう、戦う力の一つも残されていない。

「——知るかよ…そんな事ッ！」

かつてない挫折感。視界が真っ暗になる程の無力感。だが、それらの絶望に苛まれて尚、一護の心は折れなかった。

「勝つんだ…俺が…！」

溢れる血の池に膝で立ち、剣を失った青年は人が持つ原初の武器、拳を握り締める。

「倒すんだ…あいつを…！」

そうだ、俺はこんな所で負けられない。武器がないなら拳を、脚を、爪を、歯を。

拳が砕け、脚が折れ、爪が割れ、歯が欠けようと、立ち向かってみせる。俺の助けを待っている奴らのために、俺は何度でも立ち上がってやる。

「…ッ！俺が！」

こいつを倒して、

あいつらを——

「護るんだよオオオオオオオオツツ!!!」

…この時。

黒崎一護の中に戦う力は一つも残されていなかった。死神・虚・そして藍染の言う”第三の力”。その全てを投げ打ち放った最強無比の一撃。

それが”最後の月牙天衝”。

——【無月】であった。

だが、一護にはもう一つだけ、目の前の絶望に抗う術があった。いつも彼を見守り、時に救ってくれた、謎多き術。

それは”力”と呼ぶには不適切なものであったが、故に【無月】の発動後も消滅を免れ、青年の中からずっとその機を窺っていた。

『なっ…!!?』

二つの驚愕の声が荒れ果てた流魂街の最端に響き渡る。魔王と勇者、両者の視線の先には、突然一護の胸元から溢れ始めた紅桃色の霊圧。

その術の名は、【牙錠^{すべ}封印】。

斬月無き今。ホワイト無き今。黒崎一護の強い想いを一身に受け止める立場となった”彼女”。

独自の意志と思惑で以て、創造主すら予想していなかった決死の”

牙”が…

巨悪へ突き刺さる——

『…ほう、まだ抗う力が残っていたか』

突如背後で膨れ上がった霊圧を感じ、藍染惣右介は振り返る。喜悦の滲んだ声は、残してきた微かな期待にすら応えてくれた”踏み台”への感謝の表れか。

『——何…?』

だが黒崎一護へ振り向いた魔王は、そこで瞳目する。立ち上るその

靈圧の色は彼の持つ夜空の黒ではない。

莫迦な、と藍染は息を呑む。

黒崎一護が放った”最後の月牙天衝”とやらは、正しく彼の才の全てを投げ打ち犠牲にした究極の一撃だった。事実青年から感じる靈圧は最早残滓に等しいもの。にもかかわらず、彼の胸から溢れる力は、真なる超越者となった藍染ですら戦慄を覚えるほどの凄まじいものだった。

その直後。

驚く魔王へ目掛け、膝立ちの黒崎一護の胸元から幾本もの光の鎖が放たれた。

『!? これは……!』

「な、何だ……?」

動揺の隙を突かれた藍染は一瞬でその紅桃色の靈圧に巻き付けられる。首に胴、四肢を拘束するその鎖は信じ難い強度で彼の自由を奪っていた。

その様を見ていた一護は何が起きているのかわからず混乱する。だが胸元から湧き出る靈圧に青年は異様な既視感を覚える。

この気配は……

そしてその既視感の正体に行き着くのと同時。一護が導いた”答え”が彼の背後に現れた。

「あ、あんた……!」

驚愕に呆ける勇者。振り向く彼の背中から無数の光の鎖が伸び、蜷を巻きながら小柄な白い人影を象ったのだ。

それは白い死覇装を着た女。一護の巨大な力を封じていた、あの仮面の少女だった。

『……そうか、それが君に託された彼女の切り札か……ッ!』

最初に事態に気付いたのは藍染惣右介。拘束の苦痛に顔が歪みながらも、男の声は掻き消えない歓喜を孕んでいた。

『実に見事な手際だ……! そうだ、切り札とは此処その機に切る事で

初めて切り札足り得る！　そして私の最大の際は、黒崎一護との死闘の果てに消耗した今を措いて他にない！』

「！」

『やはり君は気付いていたか…！　私の崩玉が、君の義魂を取り込んでいる事に——雛森桃！』

その言葉に一護はハツと思い出す。

かつて空座町でヤミーと戦った時に自分を救った桃色の光の鎖。斬月世界の仮面の少女が白い斬月の腕に光の鎖となって合体した光景。そして最後に、あの過去の河原で”本好きのおねえちゃん”が彼の胸に触れた時の事…

「まさか…！」

藍染の台詞でそれらが一つに繋がる。あの時彼女は「お守りは一先ずおしまい」と言っていたが、あれは一護の封じられていた力を解き放つただけではなかった。

藍染の崩玉に取り込まれた、雛森桃の複霊魂魄クロン。あの魔王を圧倒するほどの一護の霊力を抑え込む、彼女と同じ姿をした封印。同じ二つの魂が呼応し、一護の解かれた封印が、その封じる力の対象を藍染へと変えたのだ。

あの不思議な世界で彼女が施したもう一つの術は、この時のための最後の仕掛けだったのだ。

…だが。

『——甘いな』

その渾身の一手を受けて尚、巨悪は嗤っていた。

『気付かないとでも思ったか？　私の崩玉の中にある彼女の義魂が、私を倒す何らかの手段の要と成り得る事に…！』

「なっ…!?!」

『言っただけだ、これは試練だと…！　そして君との戦いの結末は私の試練の始まりに過ぎない！　急所と成り得る雛森桃の義魂を取り込んだのは、その危険こそが彼女の持つ”神の因子”を完全に我がも

のとするための糧であるからだ!』

自身の霊圧を爆発させた藍染が、その藍紫色で光鎖の桃色を染め始める。

——ツ!

その瞬間、一護の背後の少女が悲鳴を噛み殺すような声を上げた。振り向き見たのは、声の主が体を抱きしめ苦しむ姿。

「ツ、大丈夫か:?!」

一護は咄嗟に彼女の鎖を掴み、霊圧を注ぎ込む。残滓とは言え残った己の霊力が少しでも彼女の助けにならんと沈鬱な祈りを込めて。

『無駄だ、黒崎一護:;! 私崩玉は既に私の支配下にある! 今の君の力ではあの娘の複霊を救うどころか、君自身の中の彼女すら護れない!』

「そんなの:;やってみなきゃわかんねえだろ!!」

だが胸元の鎖の侵食は止まらない。必死に藍染の力を封印しようと身を挺す仮面の少女が、少しずつ魔王の霊圧の色に蝕まれて行く。

その光景を見た魔王が口角を限界まで吊り上げ、二度目の勝利を宣言した。

『私の勝ちだ、黒崎一護!』

「くっ:;ぐうううツツ!!」

『さあ、崩玉よ! 私に続け! 勇者の女神の加護を滅ぼし、この戦いに終止符を打つのだ!』

”最後の月牙天衝”も打ち砕いた。残るは天女が仕込んだ”戯曲の編纂”ただ一つ。この障害を超克すれば、藍染惣右介の悲願は果たされる。

道化に生まれた己が身は、漸く一個の命の産声を上げるのだ。

体が歓喜に突き動かされ、藍染は底なしの霊力を光の鎖に叩き付け……遂にその桃色の全てを、自らの藍に染め遂げた。

…かに思われたその直前。

男の胸元に、

—紅色に輝く十字の光が噴出した—

『なっ!?!』

同時に声を上げる藍染と一護。この場の誰のでもない新たな霊圧が渦巻き、魔王の体を覆い始めたのだ。

『何だ、これは…! 鬼道か!?!』

「…!」

真つ先に現象の本質に気付いた巨悪が自身の力で術を破壊せんと試みる。だが彼の霊圧は渦巻く殻状の霊体に吸い込まれ、術の進行を加速させるばかり。

『莫迦な! こんなもの…ツ!』

「な、何が起きて…」

そして焦燥する藍染と、困惑する一護の前に、戦場の最後の役者が舞台上へ上がった。

「——漸く発動したみたいツスね」

男の名は、浦原喜助。

この時を待ち望み、百十年もの年月を準備に費やした霊界最高の科学者の切り札が、宿敵藍染惣右介へと襲い掛かった。

『浦原喜助…貴様の仕業か!』

魔王の憤慨が突き刺す霊圧となつて辺りに吹き荒れる。それに怖気付く事無く、新たに現れた男は布帽子の奥の瞳を光らせ、行使した術の正体を明かした。

「それは封ツス。怪物化する雛森サンに現を抜かしていたアナタの心の際に潜ませました」

研究者は語る。

偽の空座町での一戦、浦原は藍染へ九十番台の最上級破道を行使した。他の隊長格であれば一撃で倒せるほどの術を匣に使い、たとえ藍染が如何なる手段で超越者へと至ろうと確実に封印できる最高傑作の自作鬼道を密かに奴の魄内に埋め込んだのだ。

「…藍染サン、アナタは本当に恐ろしいお人だ。あの黒崎サンの死力の一撃を真正面から耐え、更にはあの少女ひとが仕掛けた切り札さえも跳ね除ける。二人の力なくしてこの術は発動しなかったでしょう」

『小賢しい真似を…今更我等の舞台上に上がろうなど、相変わらず反吐が出る低劣な男だ…! 知るがいい、貴様如き出来る事などこの場に一つもないのだと!』

怒りの形相で霊圧を跳ね上げる巨悪。だが男の意識が浦原の術に向いた瞬間、一護の胸の鎖が元の桃色へと復活し再度藍染の力を抑え込み始めた。

『ぐ…ッ、何…!?!』

「その鎖はアナタの崩玉の中にある彼女の義魂に取り憑いてるみたいッスね。親和性の高い同一魂魄だ、アナタの崩玉の力は彼女の封印に抗う事で精一杯のハズ。そして黒崎サンの一撃で疲弊している今のアナタにこれ以上の抵抗は不可能ッスよ」

『莫迦な、こんな…こんな事が…ッ!』

この期に及んで油断や余裕は欠片も無い。死に物狂いで抜け出そ

うとする藍染は、しかし一護の光鎖に捕らわれ微力な抵抗しか出来ずにいる。

「アタシの術は、黒崎サンと彼女の力を受けてアナタが弱った事で初めて起動する余地を得ました。長い長い試行錯誤の末に完成した封印です。発動の途中で破られるようなヤワな作りはしていない」

帽子の鏢を引き、浦原が敵との視線を切る。彼なりの勝利宣言であったそれは、浦原喜助の才を知る藍染に自身の運命を予見させるのに十分な言動だった。

『…ッ、よもや貴様の様な唾棄すべき体制主義者の手でこの私の野望が挫けるとはな…！ 実に滑稽な終焉だ。運命とはつくづく度し難い…！』

結末を悟ったのか、魔王が激情に呻る。地獄の底から響くような怨嗟の声だ。

「体制主義……霊王の事ツスか？ ……成程、それがアナタの行動原理だったんスね」

『巫山戯た勘違いをするな』

浦原の問いに藍染が侮蔑の視線を飛ばす。

『あんなものに憤りを覚える無垢な時代は疾うに過ぎている。偽りの天に飾られ道化にすらなれない無様な英雄も、それを崇める貴様等も、私にとっては最早等しく地を這う虫けらに過ぎない』

そう吐き捨てる巨悪に一護は一人困惑する。奴と浦原の会話はあまりに難解で、無知な人間の青年には何一つとして理解に及ばない。

「…藍染サン、アナタはまさか…」

だがそれに及んだ浦原は違った。帽子の奥の瞳を細め、相手を問い質そうと険呑な空気を放っている。

『ほう…少しはその矮小な視野を広げる度胸があるか。燕策の利とは言えこの私に土を付けるだけの事はある』

そんな彼の姿を見た藍染が失笑を零す。そして『良いだろう』と前置き、一つの台詞を口にした。

『これは忠告だ、”天才”浦原喜助』

「！」

今や首まで封印の殻で覆われた白い体。残すは頭部のみとなった状態にありながら、男の鋭利な純白の瞳に陰りは無い。

『この世は耐え難い屈辱の上に成り立っている。一度知れば二度と戻れない、おぞましい真実の上に』

「…何を…」

『森羅万象は夢幻を映し、揺蕩う魂は造られた喜劇悲劇に明け暮れる。我等の生きる平面では神を名乗る哀れな道化達が日夜剣舞を踊り、その身を天へと捧げるのだ』

——名すら知らぬ己の神の、虚ろな心を満たすために…

そしてその言葉にハッと目を見開いた浦原喜助を残し、最後に殻に覆われていく男の口元が、意味深な弧を描く。

『君のくだらない探求欲を満たす、自らの安寧を惜しむのならば…』

——”読書家”を名乗る少女に、

近付き過ぎない事だ。

尸魂界史上最悪の離反事件を起こした、”大罪人”藍染惣右介は、

かくして浦原喜助の手により封印された。

多くの死神達に消えない傷を残した巨悪の魔王は、その野望が潰える瀬戸際において尚、常の不気味な薄笑で勝者の二人をふてぶてしく見下ろしていた。

それはまるで、戦いの勝敗を超えた高次の土俵における、一護ら勝者の敗北を示唆するような、威風堂々たる佇まいだった。

おまけ・十刃再結成篇
始まる…！

ウエコムンド ラスノーチエス
虚圏は虚夜宮。

偽りの太陽が照り付ける大天蓋下の死の砂漠に轟音が響き渡る。
その振動に胸を騒めかせながら、激闘の末に倒した”オクターバ・エスパード第8十刃”ダザ
エルアポロ・グランツの研究所跡地で、クインシー滅却師の青年——石田雨竜は
毒に侵された女死神に鎮静剤を飲ませていた。

「——ハア…ハア…ツ、あ、ありがとう……ごじます……つ」

暫しの後、体の熱が引いた彼女——涅ネムが荒い息で彼に礼を言う。

「だ、大丈夫かい？ その…」

「…ツ、は、はい…お騒がせ致しました…」

敵の卑劣な能力で尊厳を辱められた十二番隊副隊長。言葉を濁し女死神を気遣う労も空しく、彼女の顔は火が出そうなほどの朱に逆戻り。先刻の痴態を恥じ頭を抱える相手へ、流石の紳士な雨竜も無言で全てを忘れてあげる事以上の配慮は思いつかなかった。

…無論、一生忘れられる事はないだろうが。

「そ、それより立てるなら急ごう。あちらの連中が随分好き勝手暴れている」

はだけた服を整えるネムから目を逸らし、青年はそのまま遠方の方角を睨む。

吹き荒れる砂塵が霧のように視界を遮る砂漠の一角から、尋常なら

ざる規模の霊圧の衝突を感じる。足が竦むようなこの地鳴りの元凶、護廷十三隊の隊長二人と最後の”エスパーダ十刃”との決戦だ。

”ゼロ・エスパーダ第0十刃” ヤミー・リヤルゴ。

その名乗りは遠く離れた雨竜の耳にも届いていた。以前空座町で大暴れしたと聞く敵の名だ。

凄まじい破壊の嵐を撒き散らし戦う巨大な怪物と隊長達。悔しいが、あんな大災害を前に自分が出る事は何もない。

『——石田、みんなを頼む』

空座町の救援に向かった黒崎一護が去り際に雨竜へ残した言葉だ。あいつに言われるまでもないが、託された以上優先すべきは戦いよりも仲間達の無事である。

ソウルソサエティ尸魂界で解毒薬の恩があるネムの介抱のためこの場に残ったが、先行した阿散井恋次の後を追いたいのが青年の本音だった。

…もつとも急ぎたい本音はもう一つ。雨竜は後ろへ振り向き、溜息を吐く。

「——ようやく見抜きを終えたようだな！ ムツツリ同志よ！」
「でヤンス〜〜〜！」

そこで騒いでいたのは、二体の破面アランカルペッシェ・ガティーシエとドン・ドチャツカ・ビルスタン。いつもの喧しい面子だった。

ネムが正気に戻るまで散々連呼され聞き飽きた下ネタを無視し、雨竜は呆ける彼女へ提案を伝える。

「…彼等があの手やミーって奴を避けて通れる地下通路を知ってるらしい。それを使って茶渡君たちと…君の仲間の死神たちと合流しよう」
「マユリ様は…」

「あいつも皆と一緒だ。ガルガンタ黒腔の解析の後に卯ノ花隊長の要請で治療現場の防衛を任されてる」

その時の不満そうな奴の顔を思い出し、密かに「いい気味だ」とほ

くそ笑む滅却師。

対しネムは上司に置いて行かれたのが余程ショックだったのか、慌てて立ち上がり二つ返事で同行を了承した。

「…わかりました。よろしくお願いします」

瓦礫の山となったザエルアポロの研究所。涅マユリが漁った資料室跡から何とか潜り込んだその地下空間は、雨竜の想像とはかけ離れた、どこか既視感を覚える場違いな施設群だった。

「ここは…」

「生産区画だ。この辺りは他と比べ特に頑丈に作られているからな、ヤミーの攻撃も及ばぬだろう」

脇目も振らずに直進するペツシエ達に急かされながらも、青年の関心は周囲のそれらへ吸い込まれる。

霊子を結合させ霊体の布を吐き出す装置や、それを裁縫する巨大なミシンらしき機械がずらりと並ぶ部屋。どこから持ち込んだのか、木材や樹脂を加工し家具らしきものを作っている部屋。旋盤や中割盤など各種工作機械が鎮座する部屋。ともすれば戸魂界ソウルソサエティより高度に機械化された工房が立ち並ぶ様は、獣同然な虚あがりの破面達アラシカの拠点とは思えない異様な光景だ。

「…驚いたな。遠目で虚夜宮ラスノチエスの建築を見た時も思ったけど、藍染は君達にかなり文明的な生活を提供してたんだね」

「畏れ多い。この城の王である藍染様が我等シモベにそんな施しをされる筈がないだろう」

「ここは雛森様の肝煎り施設でヤンス。昔の見廻りの仕事でネリエル様が感動してたでヤンスよ〜！」

楽しそうに当時を振り返るドンドチャツカが聞き覚えのある名を口にした。藍染に連れ去られた、色々と深い事情を抱える部下の副隊長だったはずだ。それなりに親しい間柄だったのか、元同僚である隣のネムも「雛森副隊長…」と複雑な想いを顔に浮かべている。

「ソフ〜！ こ、この先は…！」

「おい、どうしたいきなり」

「あ、コラー！ 私の前を走るでない！ つかそつちは止せドンドチャツカ！」

しばらく進むと何かを思い出したのか、巨体の破面が突然興奮し眼前の扉へ爆走を始めた。それを追い掛け辿り着いた先の空間で、雨竜とネムは思わず足が止まる。

この地 虚圏にあつてはならないものを、その目で見て。

「なんだ、ここは…！」

そこに広がっていたのは、一面の緑。

大天蓋と同じ原理か、陽光が降り注ぐその下には綺麗に区分けされた草木が青々と生い茂り、色鮮やかな果実を枝から垂らしていた。遠くには黄金色に輝く水田や麦畑まで見える。

それは現世の田畑や果樹園にも劣らない、死した砂の大地に芽吹く奇跡そのものだった。

「こんなもの、一体誰が…！」

「ウオオオ！ 久しぶりの食い物でヤンス〜！！！」

「おいバカ、戻って来いドンドチャツカ！」

壁をぶち破り進む相棒を必死に連れ戻そうとするペツシエ。その姿を追いながら、雨竜はネムと共にこの地下農園を注意深く調べていく。

「…およそ年間百人ほどの人足の食糧を賄える規模の田園です。尸魂界にない現世の品種も見られます」

「土は…現世のものより砂っぽいな。…まさか外の砂漠のものを使っているのか…？」

その発想に戦慄を覚える青年。農業分野に明るい訳ではないが、それでもこの土壌を作り上げる手間と労力が生半可なものではない事くらいは想像が付く。力で従えればいい破面達に到底見合う投資とは思えない。

「リンゴ~~~~!!」

「イヤーアアアアアア!!」

『!?』

その時、遠くで絶望的な悲鳴が聞こえた。見上げればペツシエ一人に任せるには荷が重かつたらしく、自由なドンドチャツカが田畑を踏み荒らし樹をへし折り果物をバクバク頬張っていた。

「不味い!・ 逃げるぞ雨竜!」

「:え?・ はあ!?!」

「ここを荒らされると東仙統括官と雛森軍団長がとんでもなく怒る!

ピカロなど十年も牢から出して貰えていないのだ!」

相方を回収したペツシエが我先にと出口へ駆け出した。遅れて雨竜とネムも二体を追う。

元九番隊隊長・東仙要。身を以て彼の斬魄刀の能力を知る青年も心なしか走る速度が上がる。霊圧と足跡でほぼ確実にバレるだろうが、犯人のドンドチャツカが助かるには空座町で例の上司二人含む藍染陣営が敗北する事を祈るしかない。

「二蓮托生ですね」

「動機がくだらないのに切実過ぎる…」

ボソツと聞こえた隣のネムの呟きに肩を落とし、雨竜たち四人は無事地下施設の出口へと辿り着く。

しかしそこで見た光景は、正しく地獄絵図と形容するに相応しい、血と霊圧の大嵐だった――

『——ガアアアアッッ!!』

凄まじい咆哮が耳を劈く。

地上の砂漠、大天蓋の下に出た四人を迎えたのは、天を突くほどの巨体の破面^{アラシカル}。その肩に刻まれた“0”の数字を見ずとも、馬鹿げた霊圧と存在感が敵の序列を雄弁に語っていた。

「こいつがヤミー・リヤルゴ……!」

「くっ、不味いぞ雨竜……! 急がねばここも崩落しかねん!」

「アワワワワ……」

伏せたまま辺りを見渡し仲間を探す一同。戦う三者の怪物達の気配が強すぎて目当ての霊圧が感じられない中、人造死神のネムが一人、創造主の存在を辿り声を上げた。

「ツ、マユリ様……!」

「あつ、おい!」

危険も顧みず我先に駆けだした女死神に雨竜と破面達は慌てて続く。彼女が目指す先は戦場の端に建つ傾斜した円柱塔。何とか戦いに巻き込まれずその頂上へと登った四人は、そこで奇妙な出で立ちの死神——涅マユリと再会した。

「……遅いぞ、ネム。いつまでもアンアン五月蠅いから鎮静剤を恵んでやったのだ。飲んだらさっさと来い、このウスノロ」

興味なさそうに振り返り棘を刺す上司へ「申し訳ございません!」と恥じ入る涅ネム。あのザエルアポロとの戦いを目の前で見ていた雨竜は彼女を庇おうとするが、ふと男の無感情な態度に小さな違和感を覚える。

だが優先順位は別。塔の屋上の隅々へ視線を飛ばし、滅却師の青年は見つけた人だからへと急いだ。

「井上さん! 皆も!」

「ネリエル様!」

『!!』

連れ去られた井上織姫を始め仲間の茶渡泰虎、朽木ルキアに阿散井恋次、そして援軍らしき死神二名が弾かれるようにこちらへ振り向く。

「石田君！ よかった、怪我はない？」

「無事で何よりだ。こっちも何とか井上を奪還した」

「一護とは逢えたか？ そちらへ向かったはずだが」

「すみません、涅副隊長。先行してしまって…」

思い思いに喜び合う仲間達。ネルの身を案じていたペツシエら破面達も井上の側で安らかに眠っている少女の無事を喜んでいる。

皆ボロボロで顔色も悪い。それでも数多くの激闘を潜り抜けた後の、感動的な再会だった。

「——成程、そんな事が…」

四番隊の援軍、虎徹勇音と山田花太郎を交えた情報交換を終え、一同はひとまず尸魂界ソウルソサエティからの指示をこの場で待つ事で合意した。

訊けば先ほど「十刃」の軍勢を撃破した」との吉報を最後に、突如あちらとの連絡が途切れたそうだ。断片的に送られてくる情報では藍染惣右介率いる離反者達との戦闘で劣勢に追い込まれているようで、一時は上位組織「零番隊」の出動案件だとまで騒がれていたらしい。死神達の暗い顔は現世での決戦の行方が混迷しているからだろう。

そして雨竜達に出来るのも彼等と同じく、空座町で戦う仲間を…黒崎一護を信じる事だけだった。

「…大丈夫。あいつは『ここは任せる』って言ったんだ。絶対に勝つ」

「う、うん…」

「ム…」

それでもボンヤリと心此処に在らずな顔で俯く仲間達。聡い雨竜は直ぐに気付く。

此度の戦いを経て何らかの苦悩が、あるいは蟠りが出来てしまったのか。愚直に仲間の勝利を願うだけの精神的余裕が、親友の茶渡に

も、恋する井上にもないようだった。

事実雨竜の推察は正しく、茶渡泰虎は、強烈な無力感に苛まれていた。

先々月の空座町公園でヤミーに、翌週夜のデイ・ロイを名乗る破面に全く歯が立たず、それを一護に護られてから青年は不甲斐なさをバネに確かな強さを掴み直した。”十刃落ち”ブリバロン・エスパーダガンテンバイン・モスケーダ相手の勝利はその力が成し遂げた偉業である。

だが直後の”第5十刃”クイント・エスパーダ、そしてヤミーとの再戦で羽虫の様に叩き潰された屈辱は、かつて一護の背中を任された男の二度目の挫折となっていた。

そして井上織姫もまた、沈鬱な想いに沈んでいた。

理由は”第4十刃”クアトロ・エスパーダウルキオラ・シファア。この四日間織姫の身の回りの世話をしてくれ、浅くない親しみを覚えていた破面の死を憂うのは勿論。その悲劇を起こしたのが他でもない彼女の想い人の黒崎一護が変じた虚であり、しかもあの優しい青年の変貌の原因は少女自身の弱さにあった。

やっと仲良くなれると思った矢先の不幸。好きな男の子が自分を助けるために手にしてくれた力に対する恐怖。そして己の責任を棚に上げ、彼に怯えている自分への自己嫌悪。

”心”を求めたあの破面の悲しい最期の言葉が胸を締め付け、織姫はぐちゃぐちゃになった感情に辛うじて蓋をしながら、それでも一護の無事を祈ろうとしていた。

亡き師志波海燕の成れの果てを知り、塞ぎ込む朽木ルキア。”十刃”ザエルアポロ、そして目の前のヤミー相手に何も出来なかった己の無力さを呪う阿散井恋次。皆誰しもが、此度の戦争で胸に大きな傷を負っているのだ。

「…少し席を外すよ。涅マユリに訊きたい事もあるしね」

こういうときはじっとしているより体を動かした方がいい。塞ぎ込む仲間達へそう言い残し、雨竜は状況打破の知恵を求め憎き死神へと近付いた。

そんな男、十二番隊隊長・涅マユリは副官のネムを侍らせ、何やら

顔を顰め考え込んでいた。青年は「お前もかよ」と言いたい思いを呑み込み、軽い挑発を吐いてやる。

「…何だ、らしくない顔だな。問題でも起きたか？」

「……」

それに小さく頷いたのは隣の女死神。只ならぬ様子に雨竜は眉間の皺を深める。

先ほどの再会時、こいつに覚えた違和感の正体に気付いたためだ。

「なに、只の科学者としての勘だヨ。あの十刃の研究所から拝借した資料が少し腑に落ちなくてネ」

「…ダメーでも掴まされたのか？　黒腔ガルガンタの解析に役立てたのなら本

物だろう」

「やれやれ…少しは知恵が回るかと思っただが、所詮は黒崎一護とつるむ猿か」

やはりだ、いつもの奴と比べ皮肉も嫌味も冴えない。ネムに対する激しい叱咤も忘れるほど何かに気が散っている涅マユリに、滅却師の青年は悪い予感を覚える。

ポツリと、涅が呟いたのはその時だった。

「……仕留め損なったか」

その小さな言葉に雨竜が「まさか」と瞠目するのを無視し、男が副官の名を呼ぶ。

「…ネム」

「はい」

「霊圧と界間感知に一隅の隙も作るな。どんな微細なノイズも見逃すなヨ」

そして涅は徐に立ち上がり、虚空を睨む。

それはまるで、これより起きる困難に己の無防備を隠そうと抗う、精一杯の虚勢にも見えた。

「…の戦い…」

——もう一波乱、在り得るヨ。

コツ：コツ：コツ：

無数の低い呻き声が響く白い廊下に、一つの足音が木霊する。微かに不規則なそれは、足音の主が他の呻き声と同じ負傷者であるからか。その人影が立ち止まった一室の上部には『CUARTO TRATAMIENTO』の表記が掛けられていた。

「——おや、ご無事でしたか」

室内に入った人影を迎えたのは一人の青年。ワザとらしく目を見開く彼へ、人影は飄々とした微笑を返す。

然も在りなん。この男のような神経質な科学者なら、確実に先刻の一連の戦闘を監視していたはずなのだから。

「なんや、気付いとったんなら先に口力を呼び寄せてくれても良かったのに」

「これは失敬。アレは既に僕の指揮下に無いものでして」

「嫌やなア、怪我人にそない意地悪せんといて」

ヘラヘラと笑いながら壁の奇妙な装置を引き抜き胸部へ翳す人影の男。回道の淡い緑の光が輝き、傷が癒えていく。

「…それより君、これからどないするん？ 藍染隊長、捕まってもうた
ん知つとるやろ？」

「ええ、お勞しい事です。偉大なお方だったので…」

「そやなア、凄いいお人やったわ」

「全く」

台詞の字面に反した含み笑いが二つ、医務室に溶け消える。しばらく
仮面舞踏会を愉しんだ二人は、本音の一部を開示し合った。

「ですが今更虚夜宮ラスノチエスに戻っても死神共の刀の錆になるだけです。や
はり、我々にはあの方のように導いてくださる新たな指導者が必要
だ」

「おや、奇遇やね。ボクも命辛々護廷十三隊の追手からこのアジトま
で逃げてきたし、ほとぼり冷めるまでその新たな指導者さんに匿って
貰お思てん」

「それはそれは」

どちらともなく歩き出す男達。向かう先は医務室の奥に開かれた
大扉。

観音開きを潜り、無数の監視画面が蠢く巨大な広間に出た二人は互
いに立ち止まる。そしてその中央へ目を向けた。

「そう言う事でしたら、僕に一人心当たりがあります。我等破面軍を
率いるべき、可憐で強大な將軍閣下にな」

「気が合うやん、君。実はボクも一人知つとるんやで。美人で可愛ら
しい…化物をね」

男達が共に口角を吊り上げる。

その時。

まるで示し合わせたかのように、広間の中央の空間が円状に歪ん
だ。二つの世界を繋げる穿界門せんかいもんや解空トレスコレルと同じ、されど根本的に異な
る不気味な現象。

そしてその異界の門から、浮遊する小さな異形の人影が現れ…

「——お待ちしておりましたとも、閣下。ウエコムン下 虚圈ウエコムン下の新たな君主…」

——
雛ひな森もり
桃もも様
——

畏怖、歓喜、嘲笑。無数の感情が蠢く不気味な笑みを浮かべた男達——市丸ギンとザエルアポロ・グランツが、その宙の妖精へ恭しく頭を下げた。

「……………はい？」

そんな間拔けな少女の困惑声を合図に、尸魂界を恐怖のどん底に突き落とした破アランカル面達の逆襲が今…

始まる——

始まりそう……！

見えない

これは誰だ

おかしいな

こんな筈では
なかったのに

これは誰だ

見えない

何も見えない

男は雲が好きだった。

晴天では陽光に白く輝き、夕方には茜色に染まる。一つとして、一時として同じ形は無く、綿菓子のようにも、鱗のようにも、笠のようにも、布のようにも見える空の芸術。その神秘の正体は、我々人を、獣を、草木を生かす水が転じたものだと言う。

それを知った時、男は願った。

：一度で良いから、見てみたい。

乾いた田畑を潤す雨。眩しい太陽を優しく遮る影。それらを我等に恵む、天の奇跡。

そんな”雲”とは、一体どのような姿をしているのだろうか。決して見る事の叶わないその姿を想像する事が、男は好きだった。

――わたしはね、かなめ要。

夜空の星々を隠す雲を

取り払う人になりたいの。

男には友が居た。

弱きを守り、強きを支える。傷付いた者が居れば手を差し伸べ、悲しむ者が居れば共に寄り添う。明るく、優しく、高潔で。言葉を交わせば”貴方の事を見ています”と、そう言っているかのように、何度も「要」と男の名を呼ぶ穏やかで心地よい声の人。

誰かの不幸を取り払う人になりたいと、雲一つない満天の星空が好きだと微笑む、素敵な女だった。

そんな友はある日、死神になった。

何が転機となったのかはわからない。だが男は知っていた。彼女ならいつか、自分の持つ霊力で人の役に立ち、誰かの心の雲を掃う人になる。その日が来たのだと、寂しさに蓋をして、男は快く女を送り出した。

たとえその未来を知っていたとしても、止める事は出来なかっただろう。

——わたし

結婚するのよ、要。

故に。久々に会いに来てくれた彼女が、いつもと変わらない穏やかな声で「祝ってくれる？」と微笑んだ時、男は心のどこかで悟っていた。それこそが、彼女が死神になった理由だったのだと。

：ああ、君は見つけたんだね。生涯をかけて、その心の雲を取り払いたいと思える——悲しい人に。

男は、“その人”になれなかった。男の心の夜空は、既に雲が晴らされていた。他ならぬ彼女の手によって。

だから止める事は出来なかった。自分以上に不幸な人が居る。その人を友が救おうとしている。ならば自分のすべき事は、たった一つ。

幸せにね、と。あの時と同じ笑顔で、友を送り出す事だった。

心底の祝福ではない。誰かのためだけに生きる事が、どうしても幸福だと思えなかった。

それでも女はそう言う人で、そしてそんな友に反し浅い正義しか持たない己を、男は恥じた。

去り際に彼女が零した悲しそうな吐息は、そんな自分の心の雲に気

付いていたからだだったのかもしれない。結局男は最後まで、友に救われ、憐れまれるだけの存在だったのだ。

彼女の方が余程、憐れまれる最期を迎えたと言うのに…

——いやあ、君が復讐を

望まないでくれてよかったよ。

友は死んだ。殺された。他ならぬ、救おうとしていたその”悲しい男”：夫の手で。

友の夫は貴族だった。この尸ソウルソサエティ魂界の歴史そのものにして頂点の一族。罪をもみ消す事など赤子の手をひねるようなもの。

その理不尽な事実を悪だと断言しておきながら是とし、そして復讐など望まない妻の慈愛に満ちた願いを正義だと認めておきながら、「そう言う願いが反吐が出る程に嫌いだ」と吐き捨てる。

友が救おうとしていた夫は、そんな死神だった。

侍番の暴行を受けながら、男の心は憎悪を呑み込む程の絶望に覆われていく。友が愛したこの世界の真の姿を知って。友が愛したこの世界を憎んでしまった己の心を知って。

友は美しかった。こんな地獄に夜空の星々を見出し、慈しみ、貴ぶ、本当の正義の人だった。

ならば彼女を奪ったこの世は一体なんだ。あんな下種をも救おうとしていた女を殺し、その咎人をのさばらせておく事が、この世の正義なのか。

蹴られ叩かれ痣だらけになった男は地べたに倒れ伏したまま、底の無い暗闇へと堕ちていく。

…そして、その時だ。

——その胸に満ちた厭悪の炎を

暫し、私に預ける心算は無いか。

男の前に新たな、されど友の純朴な愛とは真逆の、この腐った世を

力で正さんとする——もう一つの正義が現れたのは。

それが正義を求めた男——東仙要の、”巨悪”・藍染惣右介との出会いだっただ。

剣が、【清虫】が重い。

亡き友の棺から借り受けた、彼女の魂の半身が。

主、藍染惣右介の野望の道半ば。現世空座町での決戦で東仙が戦った敵は、新たな歩みの途中で出会った友と部下だった。

粕村左陣。恩義に生きる、気高い男。

檜佐木修兵。戦いの恐怖を知る、苦悩の若者。

亡き彼女であれば「夜闇に輝く星の一つ」と形容したであろう、この世の小さな光達だった。

——儂は既に

貴公を赦している。

されどその光は、盲目の東仙には眩しすぎた。

ふざけるな。何も知らぬお前が何をわかり、誰を赦すと言うのか。だがそう叫ぶ男の胸は嵐のように荒れ狂う。

最後まで付き合っただげ。そう悲しげに微笑む【清虫】を下に構え、彼は渦巻く激情を主より与えられた力に投影した。

すずむしのやくしき グリッヤルグリーンジョ
清虫百式・狂枷蟋蟀

世界が男の闇を埋め尽くす。血に染まる正義の道が、焦がれた空の

雲が、その眩んだ目に映し出される。

そして末に見た長年の友の顔へ、東仙は吐き捨てる。まるで自分の分を表すかのように。

——思っていたより：醜いな。

その時の狛村の顔を、男は一生忘れないだろう。

脳裏で彼の目が亡き友の幻と重なり、自身の継る最後の正義を我武者羅に執行する。藍染より授かった絶大な力で友の卍解を容易く蹂躪。それを見下ろしながら、東仙は己の道が正しいのだと自分に言い聞かせた。

：だが、男は敗れた。

一掃したと思っていた元部下。知らぬ間に檜佐木修兵に背後を取られ、急所を体内から突き破られて。

帰刃レスレクシオンで破面化していなければ即死していた、隙を突く致命の一撃だった。

啞然と地に落ちる東仙へ、元部下が言う。

以前の貴方なら気付けたはずだ。男の信じる正義、藍染惣右介が与えた光のせいだ、闇中で見えていたものが見えなくなったのだ。そう泣きそうな声で。

刀剣解放が解け人に戻った東仙へ、元友が言う。

互いに剣を交える運命だと男が知っていたように、己もまた、その運命を予期していた。そして刃を交えた今、我々は今までのような仮初ではない、本当の友になれる。そう穏やかな声で。

——憎むなどは言わぬ。

恨むなども言わぬ。

だが：

己を捨てた復讐などするな。

かつて貴公が友を亡くしたように、儂が貴公を亡くせば、心に孔が開く。自らの胸と、東仙の胸を見つめ、狛村は慈愛の瞳で彼に手を差し伸べた。

それを見た東仙は、涙を流す。亡き友が愛した、男が見られなかった、夜闇に輝く星々をその目で見た気がして。

そして己の主——藍染に託した、己の最期の願いを思い出して。

…ああ、やはり。こうなる事を。

お前は知っていたんだな。

ひなもり
雛森。

決戦当日の午前。

黒崎一護等侵入者を虚夜宮で泳がせている最中、東仙は中央監視塔で一人動く同僚——雛森桃と会った。勝手をするなど注意すると「必要な事です」と、いつもの台詞で返される。相変わらず謎めいた少女だった。

雛森桃は主藍染が特に目をかける部下だ。

度し難い程邪悪な欲求を幼馴染にぶつけたがる悪癖を除けば、主に忠実で、その心の奥底に秘められた望みすら叶える、神の如き目を持つ人物。

例の一点を除けば、破面達を良く統率し、秩序を維持し、衣類や食事などを恵もうと工房や農園まで整備したがる慈悲深い死神。

そして例の一点すら主に気に入られている以上、東仙は臣として同僚と上手く付き合う努力はしていた。

：実際、彼女と共に整えた『藍染農園』や『虚夜宮厨房』は思いのほか楽しく、また軍団長として虚圏統括官の仕事の大きな助けとなっており、少なくともあの市丸よりは信頼でき共に働く不快感も薄かった。

そんな雛森からある相談を持ち掛けられたのは、彼女が決戦で途中離脱した後の行動を訊いた時だった。

黒崎一護を進化の踏み台としたい藍染のための準備をすると述べた少女。中央監視塔で詳細を語る彼女は、此度の決戦の結末よりも、更に未来を見ていた。

——この世界の果てを

あなたに見て欲しいんです。

相談と銘打った頼み。決戦で何があるろうと、最後まで生き抜いてくれ。それが少女の望みだった。

雛森は東仙要の過去を知っているのだろう。彼女はそう言う超越的な存在だと藍染から聞いていたし、その言葉の節々にそれを臭わせる単語は幾つもあった。主が興味を示すのも当然の、稀有な味方だ。

だが、少女は男の秘めたる過去を無暗に暴かず、”未来を見て欲しい”と言う。頑なに復讐や憎悪の言葉を口にせず、そこにあなたが、そしてあなたの主が正そうとする悪の終焉があると。

”見せてやる”と、上位者の独りよがりな施しでもない。

”見たくはないか”と、選択の責任を押し付けるでもない。

ただ、一言「見て欲しい」と。少女はらしくない緊張を孕んだ真摯な気持ちをつづけてきた。

その言葉に、友——歌かき匡きょうの名はなかった。

彼女を殺した夫——綱つな彌や代しろ時とき灘なだの名も、「その復讐を遂げる手助けをする」などの安直で無神経な誘いもなかった。

しかし雛森は、あの美しい友を呪ったこの世界の：彼女が貴族に目を付けられる全ての原因となった男の名は、黙さなかった。

—— 霊れい 王おう ——

ある者は彼を救世主と呼び、ある者は彼を哀れな人身供犠と呼び、またある者は彼をこの世の原罪の象徴と呼ぶ。

だが東仙にとっては綱彌代時灘のような無価値な汚物などより余程憎い、諸悪の根源そのものであった。

歌匡が綱彌代家の悪意に晒された原因。それは彼女の持つ”霊王の因子”にあった。

なんだそれは。そんなくだらないもののために、あれ程この世を愛していた彼女の命は奪われたのか。かつて藍染に事実を聞かされた彼は茫然と立ち尽くしたのを覚えている。

そして、まるで呪いのようなその”霊王の因子”とやらが何故この世に蔓延っているのかを訊いた時、正義を愛し、絶望に吞まれる東仙の道に、一筋の光が射し込んだ。

それが彼の歩む正義となった。

罪深い貴族達の世を支える人柱を滅ぼし、友を苛んだ呪いを解く。具象的でも抽象的でもあるその正義は、復讐と大義の両立を可能とするもの。されど故にそれは善人である東仙を苦しめ続け、その果てに彼は、死を選ぼうとしていた。

死神達に絆され、世界を正さんとする”義憤”という復讐心すら失った醜い私に、生きる価値はない、と。

—— 私 は どちら に し て も

最も忠実な腹心を失うのか。

だが。

そんな男の覚悟を、全てを知る藍染は「美しい」と評した。

望み通り、君が死神達の赦しに苦しむ事となる前に、必ず君を消し去ると。そう約束した偉大な主は、されど確かに、こんな無価値な男を惜しんだのだ。

『——藍染隊長って、意外と寂しがり屋だと思っんです』

困ったような、慈愛に満ちた：何処かで見たような、美しい笑みだった。雛森のその表情を察した東仙は、一瞬の硬化の末、徐に顔を伏せる。

少女は言う。あなたが正義に殉ずるのは、せめて、あなたが正しいこの世界の果てを、藍染隊長が与えて下さったその”目”に焼き付けてからにするべきだ、と。

それは忠臣の彼を縛る卑怯な言葉だった。そして同時に、彼女の慈悲でもあった。

『…お前は本当によくわからない娘だな』

『そうですか？ シロちゃんを例外としたら割とわかりやすいと思いますけど』

『その一点が全てを台無しにしているからな』

一言棘を刺すと、慈悲深い邪悪な乙女はバツが悪そうに恐縮した。そして小さな深呼吸の後、彼女の頼みに迷う東仙へ：雛森桃はニッコリと微笑んだ。

『——あたしはただ、善人も悪人も、希望も絶望も、それがこの世界のものではあれば、無条件に大好きなだけですよ』

暗闇の中を彷徨う。

前も後ろも上も下もわからない、【閻魔蟋蟀^{えんまごおろぎ}】の無明内部のような世界。その虚無の空間に東仙は浮かんでいた。

ここはどこだ。私は死んだはずだ。何故意識がある。

戸惑う彼は、そこでふと遠くで女の声が聞こえた気がした。

——ひと度死んで、少しは救われたのね？

嬉しそうな、初めて聞く彼女の声だ。

あの星の見える丘で最初に出会った時から、ずっと男の力になってくれた、生涯の相棒。

貴方の復讐には協力しない。だけど貴方の力にはなってあげる。そう悲しそうに約束してくれた亡き友の半身。

…救われた？

胸と思しき所へ、手と思しきものを触れる東仙。そこにあつた筈の、世界を焼くばかりの憎悪は、不思議と燻る残り火へと落ち着いていた。

それに気付いた時、亡き女と同じ、心地よい声を幻聴し…

「——お、お帰りなさい…東仙隊長」

親に叱られる子供のような、情けない少女の声が——男の微睡む意識を蘇らせた。

始まって…！

「がああアアアアアアツツ!!」

巨大な広間で力の限りに暴れる、一体の破面^{アランカル}。虚の孔を眼孔に持ち、左右合わせて六つの腕と鎌、頭から生える非対称の角は双角で三日月を象っている。

”第5十刃”^{クイント・エスパーダ}ノイトラ・ジルガ。藍染惣右介率いる破面軍の最精鋭”十刃”に名を連ねる男が、刀剣解放で帰化した虚の力を荒れる激情で撒き散らしていた。

「——ノイトラさん」

不意にその背に若い女の声が投げ掛けられる。突然現れたその声の主へ、男は驚くより先に掴みかかっていた。

「てっ…めえええッ!!」

「!」

伸ばした手が掴んだのは、小柄な女。ノイトラの怒りの元凶——破面軍軍団長の地位に就く上司の死神、雛森桃だ。

首を掴まれ宙吊りになった女は、何も訴えず、静かに下手人の好きにされている。

「何故だ…！ 何故俺を生かした!?!」

「……」

「そのお目出度エ頭で慈悲でもくれてやったつもりか！ それともまた死神共と戦わせる捨て駒が欲しいってのか！ あア!?!」

普段のドレス状のそれとは異なる禁欲的な反転死覇装。その襟元から覗く白い肌にも男の鋭利な五爪が食い込む。

ノイトラは先刻、拠点の虚夜宮^{ラスノイチエス}で死神との激闘の末、打倒された。されど砂漠で一人、死が彼の体を支配する直前。男はここ現世の鳴木市アジトへ謎の技術で転送され、目が覚めたら敵に受けた全ての傷を癒され、命を救われていた。救われてしまっていた。だが。

「——そのまま捨て置けばよかったんだ!!」

霊圧の咆哮が女の華奢な身体を揺さぶる。傍から見れば感謝が相応しい状況において、この男は恩人へ真逆の罵倒の言葉しか叫ばない。

それは彼の、否、種族的とも言える価値観の相違から来る怒りだった。

「…ッ、てめえ言ったよな。俺を仲間^{仲間}に誘った時に…!」

感情を吐き出し理性を取り戻したノイトラは、荒い息を整える間も惜しみ、雛森を問い質す。

彼女の所属する破面軍に加わる対価に男は三つの契約を結んでいた。一つは破面化による戦闘力の上昇。一つは実力に応じた組織内の地位。

そして最後に彼が願ったものが…

——あなたに最高の死に場所を与えます。

「俺の戦いの邪魔をしねえ。手助けも、中止命令も下さねえ。そう言う約束だったはずだ…!」

「……」

「負けた俺はそのまま死ぬ。最強の俺が、最強の敵に斬られて死ぬ。それで全部…全部終わるはずだったんだ…ッ!」

右腕の一本で女の喉を掴み上げたまま、耐え難い屈辱に歯を軋ませる”第5十刃”。

男と他の破面達の、他の生物との違い。それは自らの生に対する執

着心の有無。すなわち、生きる希望の有無だ。

ノイトラは、己の虚としての生に——絶望していた。

虚に救いはなく、それは破面となっても変わらない。

彼は目の前の女上司が同胞等に与える施しの数々に、一人だけ手を付けなかった。美酒も美食も現世の娯楽にも興味を抱けず、益々戦いを、力を求めた。

そしてノイトラ・ジルガは自らを”最強”だと豪語し続け…

——己を一撃で、大地に倒れ伏す間も許さずに殺してくれる、”本物の最強”が敵として目の前に現れてくれる日を待ち続けたのだ。

「…あなたは…あんなだけには理解されてると思ってた」

男は女へ吐き捨てる。

敬愛も好意も微塵も無い。俺を殺してくれない強者に用は無い。

それでも、その一点にのみ。初対面でこちらの渴望を見抜き、あの言葉を差し出してきた彼女には、気に食わなくとも信頼があつただ。

「てめえも…ッ！ てめえもあのクソ女みてえに…」

俺に情けをかけんのかよ!!」

かつて死に急ぐノイトラにしつこく付き纏い、「あなたが私より弱いから」と挑発まがいな理由で彼の願いを邪魔し続けた雌の破面が居た。どこぞの誰かの見様見真似で、ただそれが”人らしい”からと、まるでそれが義務であるかのように彼へ情けをかけた、無知で無神経な女。

そんな奴が憧れ、心の師と仰いでいた者が、この雛森桃だった。

結局、こいつもあの女と同じなのか。”強者の慈悲”などと言う美学を押し付け、俺の願いを踏み躪り、絶望へ縛り付けようとするのか。

「——いいえ、違うわ」

だが雛森桃の唇が紡いだ言葉は、否定。

絞め殺す気で首を掴み上げていると言うのに、女の声も顔も平時と少しも変わらない。そして唯一変わった普段と異なる口調の彼女に言い知れぬ迫力を感じ、ノイトラは過去の恐ろしい体験から思わず息を呑む。

「勿論あなたの戦力に今後も期待しているのもあるけど…あたしがあなたの傷を癒したのは、あの時の約束を守るためよ」

「…何だど？」

強気に睨み問い返すと、宙にぶら下がる女は真剣な顔で聞き捨てならない事を口にした。

「あなたは更木剣八に斬られた——全力の半分も出していない、あの人に」

一瞬、ノイトラは何を言われたのか理解できなかった。だが幾度と反芻したその単語の羅列が脳裏で一つの文となった時、彼はその意味に仰天した。

「あなたが倒された後、あたしは織姫さんを連れ戻す命を受けて、側にいたあの人と戦ったの」

「…ッ！」

「だから気付けた。更木剣八は藍染隊長が一目置かれる程の強者よ。十刃を相手にあそこまで劣勢になる事はあり得ないし、殺す気で振るった剣であなたが即死しないなんて猶更あり得ないわ」

男に喉を絞め上げられたまま、女は平然と語る。

更木剣八はかつて、ノイトラが蹂躪した黒崎一護に敗北した過去を持つ。その当時の奴は正解すら会得していない弱者であり、到底十刃と満足に戦える強者ではなかった。

なのに、負けた。

「更木剣八には癖があるのよ、ノイトラ」

訝しむ彼へ雛森が説明する。

「癖…だと…？」

「ええ。戦う相手に合わせて無意識に自分の力を調整し、斬り合いを

愉しむ不思議な癖がね」

男はまたもや言葉の理解に長い時を要した。

つまり奴は、常に舐め腐った手加減状態で戦い、そして俺はその”遊び”程度の方で奴に斬られたと言う事か。そしてその”遊び”のせいで俺は即死できず、こうして雛森桃に傷を癒される羽目になった…と。

「…………ふざけやがって…ッ！」

途轍もない憤怒がぐつぐつと胸奥で煮え滾る。

ノイトラにとつて死とは最後の救いであった。生に絶望した彼が見出した唯一の希望が、死に最も近い地、即ち戦場。それも激闘と言える生死の境が曖昧になる程の戦いだ。

そこにこそ男の人生の全てがあり、この無価値な命に意味を感じられたのだ。

それを、手加減と言う”遊び”で冒瀆され、あまつさえまた虚の生と言う生き地獄へ叩き落とされた。

あのネリエルから受けた以上の屈辱で以て、この”第5十刃”ノイトラ・ジルガの唯一の希望を、穢されたのだ。

「……まさか」

そこで男は気付く。思い出す。

目の前で己に吊られる女が言った、「あの時の約束を守るため」の台詞を。

「——ノイトラさん」

女が微笑む。口調は元の、万人に遜る弱者の擬態に戻っていた。

「あたしはあなたの考えを否定しません。あなたは最高の死に場所を求め、藍染隊長の下へやって来た。ならばそれを遂げる…こここそが、あなたのあるべき姿なのです」

そしてはにかんだ顔を正し、未来を読み他者の心を見抜くと噂され

る雛森桃が、信じ難い話を語った。

「これからこの世は大きな波乱の時を迎えます。そこではあの更木剣八の全力でさえ倒せない強敵が何人も、あだし達の虚圏を荒らしに襲来するでしょう」

「な……！」

「更木剣八とは違う、あなたが好む敵に情けをかけない人達も大勢やってきます。腕を磨き、その人達を相手に戦い、死闘を愉しんで欲しい。それがあなたとあだし、双方の利益になると思いました」

故に女はノイトラを生かした。未知の敵、次なる戦争を見据えた戦力として。それが男の望みに合致すると確信して。

「…ハッ、結局利用できるから生かしただけじゃねえか」

「ふふっ、でもそうじゃないとあなたの嫌う慈悲や情けで生かした事になりますよ？」

「チッ、それもそうだ」

視線を交差させる二人。

外見や種族、強さ、精神の優劣に左右されない慈愛。ただ仲間であると言うだけで無条件に好意を振り撒く狂人。そんな女が自分のような捻くれ者を従えるには、それくらいの裏を用意してくれないといけない。親しいネリエルを追放するほど忠実だった主・藍染惣右介の投獄を良しとするのも、互いにしかわからない望み故なのだろう。

…いいぜ、一先ずは認めてやる。

男は女の喉を絞め上げる手を放し、凶悪な形相で笑い掛ける。

そしてあの玉座の間での式典のように、「第5十刃」ノイトラ・ジルガは目の前の新たな王に恭順の意を示した。

「雌が雄の上に立つんだ。腑抜けた真似しやがったら今度こそその首潰してやるぜ——雛森サマ」

「…お願い」様はホントやめて、冗談抜きで虚圏の王を押し付けられちゃう…」

暗い顔でブツブツ呟く新女王を無視し、かくして破面の男は一人、アジトの練習場へ踵を返した。

そうだな。

まずは…あいつの言ってた”両手で振る剣”ってのを試してみるか――

奇妙な白いカプセルで覆われた寝台に、幼い童女が横たわっている。胸に孔の開いた彼女は息一つせず、その肌は氷のように冷たく青白い。

そんな童女の手を握る破面アランカルの男――”第1十刃”プリメーラ・エスパーダ コヨーテ・スタークは、希望に揺れる瞳でジツと時を待っていた。

「――お待たせしました」

突然不気味な気配が、若い女の声と共に男の背後に現れる。

「うおおっ!? あ、あんたか。頼むからその登場の仕方止めてくれよ…」

「え? あ、ごめんなさいっ。これ移動に便利なので、つい」

唐突過ぎる登場に肝を冷やすスターク。本人が「叫界門」と呼ぶ特殊な異界間トンネルで現れたその人物こそ、彼が待ち望んだ、寝台の童女――”第1従属官”プリメーラ・フラシオン リリネット・ジンジャーバツクの救いだっ

た。
先刻の大戦で不意打ちを受け惜敗したスタークは、魂を分けた半身の相棒リリネットを同じ戦場で失った。彼自身は死ぬ寸前の所を同

僚のNo. 3らと一緒に密かにこの地『鳴木市アジト』まで運び込まれたらしく、目が覚めた時には既に傷一つ無く回復していた。だが相棒の消失は自身の死も同然に重く、一人生き残ってしまった男は胸に新たな孔が開いたような虚無感に苛まれる。

そこへ救いの手が差し伸べられた。彼等“十刃”を率いる直属の上司が、奇跡を叶えられると言うのだ。

——あたし達破面軍の魂魄再生技術で、リリネットさんを復活させます。

一瞬の放心、そして驚愕。

詳しい仕組みはわからなかったが、どうやら以前持たされた【反膜カハ・ネガシオンの匪】に、万が一のために戦死した破面達の“靈性因子”なる魂魄の核のような存在を保護する機能がついていたようで、回収したそれを元にリリネットの魂魄を再生させる事が出来るらしい。

半信半疑だった所に連れて来られたのがこのCUARTO魂 RENCIMIENTO生。そしてそこで眠る相棒の再生された体を見たスタークに、奇跡に縋る以外の選択肢は存在しなかった。

「…言われた通り俺の霊圧と魂魄の一部を注いでおいたが、これでいいのか？」

「はい。これで一度切れてしまったお二人の繋がりを取り戻す事が出来ます」

「そんな事まで…」

男は安堵にホウツと息を吐く。彼とリリネットはその成り立ちが他の同胞達と異なり、同一魂魄を二つに分ける事で破面化した存在だった。そこには帰レスレクシオン刃や精神同調など彼等だけの特殊な関係性があり、その消失は家族や友などと言う“他人”を失うのとは訳が違う。本当に魂を半分失う事を意味するのだ。

「——それでは、始めます」

期待に胸を膨らませ、スタークは上司の合図に頷く。

彼女の細い腕がリリネットの眠るカプセルに伸ばされ、その手から光が瞬く。驚愕の直後、相棒の体が強く発光し、カプセルが内側から爆発した。

「…!?!」

霊子の暴風に男は咄嗟に目を庇う。

どこかで見覚えのある現象。既視感を頼りに振り返ると、スタークの脳髓にある光景が想起された。あれは、そう。確か数日前に藍染様に見せられたワンダーワイスの覚醒と同じ…

そして漂う煙が晴れた時、寝台に横たわるリリネットの青白い肌に熱が戻っていた。

「すた…く…う?」

「!・リリネット!?!」

か細い声を男は聞き逃さない。慌てて彼女の手を握りその名を何度も呼び掛ける。

そんな必死な相棒に、童女は弱々しくも小憎たらしい笑みで返事を返した。

「ばー…か。きたない…なきがお…みせんなつての…」

「な、泣いてんのはお前だろ…っ!」

触れたその手から確と感じる。失ったはずの己の魂の半身、温かい命の鼓動を。

一つの二人に戻ったコヨーテ・スタークとリリネット・ジンジャーバツクは、欠けた相手を二度と手放さぬよう互いを強く、強く抱きしめた。

「…い、いやあの…い、今のは別にそんなんじや…」

「いえいえ、親しきは良き事です。お役に立てたようでは何よりよ」
「だ、だから違うのにー！」

すっかり二人の世界を堪能し終えた彼等を待っていたのは、上司の生温かい視線だった。

何もやましい事はない、ただ無くした手足を取り戻したような幸福を喜んでいただけなのに、何かよからぬ勘違いをされている様子。

羞恥に部屋から逃亡するリリネットを見送り、残されたスタークは恩人から現状の説明を受けていた。

「——つまり藍染様はもう……」

「まあ崩玉と融合したあの人は不死身ですし、脱獄しようと思えばいつでも出来るだけの力をお持ちですけどね。ご自身の野望を挫いた英雄への称賛で、しばらくは牢獄生活を満喫されると思いますよ」
「……あの方らしいな」

どこまでも太々しい魔王に男は苦笑いを浮かべる。勿論、それを告げた目の前の女上司——雛森桃の呑気そうな顔にも理由はあるが。

訊けば此度の戦争はこちらの王将モナルカが倒され敗北に終わったらしい。残念に思うも、自分達のように他の敗残兵も皆回復・復活させると上司が確約してくれた以上、スターク個人としては元の平和が戻ってくる喜びにホツとしていた。

元々、畏れ多い頂点の藍染惣右介よりこの雛森軍団長の指示で働く事が圧倒的に多かった破面軍。ハリベルなど一部「十刃」はこれだけ気を遣わずに済むと喜ぶだろう。無論、男もその一人だ。

「……あなたには何から何まで世話になりっぱなしだ。このまま女王として藍染様の後釜に収まるってんなら協力するぜ、雛森さん」

「だからなんでみんなあたしが王になる前提で話をするんですかっ！

市丸隊長やザエルアポロさんみたいな事言わないで……」

肩を落とし「戦時だけ集まってくれたらいいのに……」と嫌そうに項垂れる上司。

とは言え彼女は——藍染の意志など最優先事項を除けば——見た目通り押しに弱い所があるためいざれ部下達の突き上げに抗えなく

なるだろう。甘えんぼのアーロニー口辺りに懇願して貰えばいいと任を押し付け、スタークは今後について未来の女王様の意を伺った。

「なあ、雛森さん…様？」

”様”は止めて。…何ですか？」

雛森桃は死神とは思えないほど虚の彼等に慈悲深い。だがこの世に虚を愛する無欲な聖人などいない。虚ウエコムンド圏で破面軍を組織したのも藍染惣右介の野望の先兵とするためであり、その役目を果たせなかった不甲斐ないスターク達を、死んだ者さえ復活させるには必ず訳があるはずだ。

そして、それは恐らく…

「…あなたはまた、俺達を藍染様の兵士にして死神達と戦わせてえのか…？」

己の目が節穴でなければ、この女上司は自身の王にかなり懐いていた。主が囚われているのに微塵も負の感情を見せないのも、破面軍の再編成計画と繋げてみれば納得がいく。

恩人の彼女に”やれ”と言われればやってみせるし、あの京楽春水と戦っても今度は負けない自信はある。他の”十刃”達の多くもリベンジに燃えるだろう。

それでもスタークの本音は「あんな強い連中と戦うのはもうこりこり」である。

だが雛森が述べた事柄は、スタークにとって全くの予想外だった。

「…石田雨竜を覚えていますか？」

唐突な問い掛けにキョトンと呆け、しばし記憶を漁る”第1十刃”。

「確か侵入者の一人がそんな名前だったな」

「はい、あの眼鏡をかけた黒髪の滅却師クインシーです」

「へえー、あいつ滅却師だったのか」

珍しい種族が来てたんだなと関心を覚えつつも、話が見えない男は訝しむ。そこへ雛森の言葉が続いた。

「戸魂界ソウルソサエティの『技術開発局』がああ種族を研究していたんですが、藍染隊長が潜ませている部下がコピーした資料に気になる記述がありました」

「ごそごそと取り出した映像端末にその資料を見せてくる上司。聡いスタークはそれだけで彼女の言わんとしている本題に察しがついた。

「…実は滅却師は組織的にも滅んでなかった…とかか？」

「あ、はい。過去と現在の滅却師の戦法に飛躍的な技術進歩がある事から導き出された仮説ですが、結論はあなたの言う通りです」

「その石田雨竜つてのが独自に開発した…って樂觀視は出来ねえレベルって事か」

嫌な予感に背筋を震わせるスターク。破面軍の再編成計画、虚の絶滅を企む滅却師、そしてここまで前置きで語られたら答えなど一つしかない。

そして神妙な顔で、雛森桃はその未来視の如き預言を、青褪める男に告げるのであった。

「虚、死神、滅却師。近い内に、三つの勢力による…」

——生存競争が始まります。

藍染惣右介が倒され、護廷十三隊の勝利が三界に散らばる死神達へ矢の如く伝達された。

ウエコムンド

虚圏にてその報を受けた砂漠の斜塔の屋上は歓喜に包まれる。茶渡泰虎、井上織姫、石田雨竜、四番隊の虎徹勇音と山田花太郎、そして協力者の元”第3十刃”のネル達だ。

ここでの戦いも終盤。残る敵は”第0十刃”ヤミー・リヤルゴただ一体。

戦闘中の朽木白哉と更木剣八を除く負傷者の治療も終わり、余裕の生まれた虚圏侵攻軍の支援部隊は治療激戦区の現世へ応援に行く事となった。

要請を受けた四番隊の山田花太郎、護衛に朽木ルキア、そして未だ脅威の残る虚圏からの避難も兼ねて井上織姫が同行した。

「——これは……！」

涅マユリの黒腔ガルガンタを通り偽の空座町へ到着した彼等の眼前に広がっていたのは、町中を抉る巨大な隕石跡の如き陥没地帯。想像を絶する激戦に身を投じた同胞たちに、無事な者は殆どいなかった。

「卯ノ花隊長！ や、山田七席、到着しました！」

「あ、あのっ！ 黒崎君は……」

「霊圧は……残滓だけだな。無事とは聞いているが……」

慌てて状況共有のため四番隊の陣幕へ直行する一同。そこで花太郎達を迎えた隊長の卯ノ花烈は、指揮を執る傍ら現状を詳らかに語ってくれた。

「——で、では一護は浦原が……？」

「はい、今は彼の拠点で治療を受けているはずです。火急の危機はないと伺っていますので、井上さんと朽木さんの面会は可能でしょう」

「…… あ、ありがとうございますっ」
長らく心配していた仲間の無事に思わず崩れ落ちそうになるルキアと織姫。自分達も何か手伝える事は無いか、と居ても立ってもいられない。

「行きますよ、山田七席」

「あ、はいー！」

一礼し陣幕の外へ駆けていく少女達を笑顔で見送った後、残る花太郎は上司に続き現場の見回りの任に当たる。

全身が焼け爛れた者、胴が真つ二つになった者、手足を失った者。それでも、死者は奇跡的に一人もいなかった。

だが卯ノ花の表情は晴れない。辺りを見渡し何かを考え込んでいる彼女の気にあてられ緊張する花太郎。

「あの、どうしたんですか…？ 難しい顔して…」

恐る恐る尋ねると、上司がしばしの沈黙を置き口を開いた。

「…破アランカル面達の負傷者が見当たりません」

「え？」

慈悲深い彼女は敵の心配すらしているのだろうか。だが尊敬の念を深める花太郎の想いに反し、卯ノ花の思惑は別にあった。

「あの破面達は元は大虚メノス・グランデ。そして大虚は王属特務…零番隊の管轄です。それは彼等でなければ倒せないと言う意味ではなく、彼等でなければ大虚の死の影響を管理できないと言う意味です」

「大虚の死の影響…？」

部下の疑問に隊長が答える。

大虚は通常の虚とは異なり、単体で幾百、幾千、時に幾万もの虚と同等の魂魄規模を持つ。それほどの存在が倒された場合、尸魂界と虚圏の魂魄バランスが大きく崩れかねないのだと。

「だからこそ、やむを得ない程の強敵を除き、無暗に破面達を殺す事は慎むよう総隊長より命があったはずです」

「…！」

「それなのに一体も生き残っている敗残兵が居ません。これはあり得ない事です」

そこまで聞きようやく卯ノ花の懸念が理解出来た花太郎。その後
の報告で吉良イヅル、射場鉄左衛門らが総隊長の慈悲で生かされたあの三体の女破面達の姿を見ていないなど妙な点が幾つも上がり、集まる違和感は警戒へと転じる。

「…山田七席、至急涅隊長へ連絡を」

「う、卯ノ花隊長…？」

「敗北した破面達を極秘裏に撤退させている者がいるようです。考える最悪は藍染陣営の残党。その拠点は虚ウエコムンド圈にあるはず」

上司の指示に花太郎は驚愕する。破面軍の残党が同胞達を回収する理由など一つしかない。

もし卯ノ花の推理が正しければ…

「掃討戦か、奪還戦か。いずれにせよ、この戦いは未だ…」

——我々の完勝とはいかないようです。

コツコツ、ペタペタ、と。三つの足音が清潔な廊下に木霊する。

二人の男と一人の女。小柄な人影を左右で挟むその様は、まるで女王と臣のようにも、罪人を牢へ連行しているようにも見える。

「——いやおかしいでしょこの並びっ！」

そんな状況に不満を覚えたのか、中央の女が立ち止まり声を荒げる。寸分狂わず足を止めた二人の男達の片割れが、彼女の抗議に口角を吊り上げた。

「なんや桃ちゃん。ボクより東仙隊長を右腕に置きたいやなんて傷付くわア」

「何ですか右腕って、ただ右側歩いてるだけじゃないですか！ 離れて歩いてくださいよ、こんなトコ誰かに見られたらもう逃げ場が…」

「諦めろ雛森。藍染様がお戻りになるまで、虚圈の女王はお前だ」

「いやーでーすー!」

地団駄を踏みながら抵抗する女を両脇の男達が逃がさない。

「なんで王政なんですか! 合議制でいいじゃないですか! あたしこれから諸々用事済ませた後、藍染隊長がお外に出て来るまで分身体を使つてシロちゃんを控えめに輝かせてノンビリ過ごそうと思つたのにい…!」

意味不明な戯言を捲し立てる彼女へ、もう片方の色黒の男が呆れた視線を送る。

「何を巫山戯た事を言っている? あの少年で遊んでいる暇があればさっさと組織を再起させろ。破面達に甘い蜜を撒いたのならその責任を取れ」

「おまけに早速こうしてエ工男二人も侍らせはるやなんて、桃ちゃんは悪女やなア。逆ハーレムの建設が女王雛森様の初命なん?」

「何であたしが自分からそんな地獄を作らないといけないんですか! 　　つて言うかそもそも何故市丸隊長がここに!? 乱菊さんはどうしたのよ!」

えぐえぐ「もうガバはいやあ…」と半ベそを搔く小柄な女。その無様な姿は右手を歩く糸目の男を益々笑顔にさせるばかり。

「まアまア、ええやないですか女王様。愚痴言つとる暇あったら早う”十刃”揃えましょ」

「敬語やめてえ…」

「お前には仮にも命の恩…と言うべきものがある。藍染様がおられない間はお前に従うつもりだ。指示をくれ、雛森」

しばらく弄られ諭され、ようやく諦め立場を認めた女が、自暴自棄に涙を拭き顔を上げる。

かつての彼女と異なる紅桃色の瞳を曇らせたまま、暫定女王——雛森桃は、澁々と新たな側近達へ最初の命を下した。

「…なら先ずは」

——大切な仲間の救援に向かいますよう。

始ま……らないッ

大地が揺れる虚夜宮^{ラスノーチエス}の天蓋下。砂が絶えず立ち込める砂漠の中央にて、護廷十三隊と破面軍との最後の戦いが繰り広げられていた。

聳え立つ怪物、”第0十刃”^{ゼロ・エスパレダ}ヤミー・リヤルゴに挑む二人の死神、六番隊隊長・朽木白哉と十一番隊隊長・更木剣八。その片割れ、義妹の恩人黒崎一護に代わり敵を引き受けた白哉は、常の澄ました顔の裏で臍を噛んでいた。

「——ウガアアアアア!!」

全身を殴り付けるような咆哮を上げ、怪物が動く。八対十五本の象の如き脚を操り繰り出す突進だ。

「くたばれゴミムシがああッ!」

「…ッ!」

凄まじい速度で迫る巨大な肉達磨を白哉は瞬歩で回避する。質量とはそれ自体が破壊力の塊。ただ凶体がデカいだけの愚図と侮ったツケは、既に己の拉^{ひしや}げた左腕で払っていた。

「つれねえじゃねえか、十刃! そんなお坊ちゃん放つといて俺と殺^やり合おうぜ!」

そこに飛び掛かるのは相方の更木剣八。

「! てめえは逃さねえ! 斬りやがった俺の脚のお返しだ、潰れて死にやがれ!!」

「ハハハハ! いいぜ、来いよ!」

ヤミーの突撃に臆さず、戦いの鬼が真正面から己の剣を横に薙いだ。

『!!』

劍圧が怪物の体と拮抗する。

だがそれも一瞬。

「バカが！ そんな棒切れで誰と殺り合うつてんだア!？」

「ぐっ…おあッ!？」

圧倒的なパワーで押し負け、劍八が里単位の距離を弾丸のように叩き飛ばされる。

「往け——千本桜景厳」

一方の白哉は敵の注意が逸れている間に、悠々と卍解の幾億の刃に攻撃を命じる。無論、奴の鋼皮イェロに生半可な攻撃が通用しない事など把握済み。

「ならば直接操るまで…!？」

「あア？ なん——ワブッ!？」

自ら操作に意識を向ければ速度は倍。無数の花卉を魚群のように束ね、男は腕の一振りですれらを敵の顔面に叩きつけた。

戦果を待つ白哉。しかし十刃の頭部を呑み込んだ桜色の嵐の中で、突如真紅の光が瞬く。

「!？」

直後、巨大な霊圧の閃光が男の立つ一帯に襲い掛かった。

「——ぶあぁッ…ちくちくウツツゼエぞ死神イ…!？」

間一髪で逃れた白哉は、敵の攻撃で散り散りになった桜吹雪を、そしてその奥を見て瞠目する。そこでは薄皮を裂かれ血だらけとなった、されど悉くが掠り傷で健在なヤミーがふてぶてしくこちらを見下ろしていた。

「莫迦な…」

あり得ない。本気の【千本桜景厳】であの程度しか斬れないなど。そして破面アラシカルの虚閃セロ如きでこの朽木白哉の卍解が押し切られるなど。

「なアに勘違いしてんだ？ 今のはただの虚閃じゃねえ」

「…何だと?」

「こいつア俺達十刃の血を触媒にした特殊な虚閃だ。てめえが散々俺の顔を掠ってくれやがったからな、勝手に血が混ざって発動しちまつたぜ…!」

巨獣の台詞にまたも目を見開く白哉。しかし彼が身構える間は許されず、その驚愕は形になった。

「おら、そんなに喰らいてえなら喰らわせてやるよ」
「ッ!」

——【縛道の八十一・断空】

「親切に唇を切ってくれた札だ…受け取りやがれ!!」

——グラン・レイ・ゼロ 王虚の閃光 ——

先程の偶然発動した一撃とは天地ほども違う、絶大な威力の虚閃が敵の口より放たれる。

咄嗟に展開した多重詠唱の防壁鬼道も秒と持たず、白哉はラスノーチエス虚夜宮を両断する戦略規模の攻撃に呑み込まれた。

「ハッハハハハ! だがまだだ! 俺達十刃の切り札はこれだけじゃねえぞ!」

——バラ・デル・レイ 王虚の閃弾 ——

光閃が終わり荒れ狂う砂嵐の中へ向け、ヤミーが自身の破城槌のような拳を振るう。それと全くの同時、正面の煙が掻き消え更なる爆発が起きた。

「どうだア!? スタークの野郎とも打ち合える、バラ虚弾に血を混ぜた十刃最速の攻撃だ! 虚閃と同等の霊圧に五十倍の速度! 俺の【イェラ憤獣】が放つこいつの連射は塵も残さねえ! オラ! オラ! オラオラオラア!」

その巨腕をどうやって伸縮させているのか、目にも留まらぬ正拳の連打から繰り出される神速の弾幕。戦艦の主砲弾の何倍もの質量が機関銃の如く砂塵の中の白哉に殺到し、射線上の全ては圧倒的な暴力に蹂躪された。

永遠にも思えた破壊の暴風。無尽蔵なスタミナも流石に尽き、ゼー

ゼーと息を荒らげる怪物は大天蓋の地表部を半壊させた末、ようやく双拳を砂漠へ下した。

「ふう……あーあ、やっちゃまった。後でぜってエ雛森さんに大目玉喰らっちゃまう……」

散々暴れて怒りが収まったのか、辺りを見渡し指先でボリボリと頭を搔く”第0十刃”。

その眼中に敵の死神達は最早なく、代わりにあるのは荒れ果てた虚夜宮ラスノチエスの姿。これは下の十刃達の敗北責任以上に、王城破損の罰も受けさせられるのでは……とヤミーは冷や汗を垂らす。

「——その心配はないヨ、十刃」

だがそんな、ある種呑気な不安に体を震わせる怪物へ、嘎れた男声が投げ掛けられた。

「……なんだア？　また新手かよ、ホントうじゃうじゃゴキブリみてえな連中だぜ」

振り向いた先には一人の死神。先程潰したあのトゲトゲ頭の奴以上が目立つ、青と金の妙な化粧をした男だ。

そしてその死神が、同じく妙な事を口にした。

「なに、さつき現世の戦いが終わったと通達があつてネ。敗残兵如きにこれ以上時間をかけていられなくなったんだヨ」

「……何だと？」

ヤミーは男を踏み潰そうと構えた脚を思わず下ろす。そこで彼は、聞き捨てならない台詞を耳にした。

「私は忙しいんだ、一度しか言わないからよく聞き給え……」

——藍染惣右介が、討ち取られた

一瞬、怪物の思考が止まった。あまりに己の常識の外を指す言葉であつたが故に。

「……は？」

「全く、凶体通り鈍い獣だネ。もう君達を率いる男は居ないから、潔く降伏しろと言っているんだヨ」

重ねて届く奴の言葉もヤミーの脳を混乱させるばかり。

だが理解が追い付き一笑しようと怪物が口を開けた瞬間。死神の隣に、ぞろぞろと大勢の人影が現れた。

「——ほう、ウエコムンドここが虚圏か……」

小柄な女、犬顔、白髪の男、黒髭の男。全員が白い羽織を纏った死神、護廷十三隊の隊長達だ。

「……虚とはこのような地で暮らしておるのか。哀れなものだ」

「おお……狛村の卍解よりデカい奴が居るな。No. 1のスターク以上の霊圧って事は、彼が藍染の切り札だったのか？」

「肩の数字を見る限りそうらしいねエ。それよりさっさと倒して回収された残りの破面達を探そう」

続々と戦場に乱入してくる敵の援軍に、流石のヤミーも異常を悟る。グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光で殺したあの二匹を含め、単純計算で七匹もの敵の最高戦力が、我ら破面軍の拠点たるラスノーチエスここ虚夜宮に集結していた。

「……これで納得がいったじやろう、十刃よ」

そして最後の八匹目。悠然とした歩みで最前線に立ったのは、長い顎鬚の翁。

「藍染惣右介は打倒され……お主らの軍団長、雛森桃も我ら護廷十三隊が奪還した」

「！……な、何だと!?!」

「現在、護廷の隊長位にある者は十名。そして現世に控える二人を除いた全八名がこの地におる。ならば、涅隊長の言葉の是非を問う間は要るまいて」

鋭い目を煌かせ巖の顔で見上げる老将。明らかに別格の、あの藍染惣右介にすら匹敵する存在感を放つ奴の言葉は、それだけで雄弁に真

実を語っていた。

嘘だ、そんなバカな。あのアホみたいに強かった雛森さんが。そんな彼女すら従える藍染さんが、あの神に等しい魔王が、負けただと？

「ふッ…ふざけんな、ハリベルはどうした！　あの騎士かぶれが死神一匹殺せずに死ぬ筈がねえ!!　バラガンのジジイも…スタークだつて現世に行つてただろ！　あいつらまでやられやがったのか!!」

「…左様。三者共に、十刃の名に恥じぬ見事な戦いぶりであった」

馬鹿げた話に目の前が真っ赤になる。積もりに積もったその源たる感情が爆発的に膨れ上がり、怪物の中で、遂に何かプツリと切れた。

「あ、あああのクソカス共がアアアアアアッツ!!」

それは怒り。

度し難い程の怒り。

「な、何だあれは…!」

「デカイ…」

その姿を目にし、後退る死神共。

顔面に角が生え、肉体は膨れ上がり、その八対の脚々は二つへ戻り、全身が猿鬼の黒毛に覆われる。

レスレクシオン

イーラ

帰刃【イーラ憤怒】に臨界点を越えた主の怒りが宿り、ヤミー・リヤル

ゴを天突く憤怒の化物へと変貌させたのだ。

「——てめえらゴミ虫共、全員…生きて帰れると思うなよ」

怨嗟の唸りが化物の口から零れ出る。

「…止まれぬか、十刃」

「ああ？　誰にももの言つてんだ死神！　てめえらが必死こいて倒したスタークもバラガンも、この俺様に取りっちゃカスみてえなモンなんだよ!」

怪物の霊圧が恐ろしいほどに膨張する。最早話し合いでどうにか

なる段階ではない。それは護廷の誰もが覚悟せざるを得なかった。

「そうだ…俺が、俺が”十刃”だ！ 他の雑魚共が居なくなつて俺が居れば問題ねえ…！ さつきぶつ殺した死神二匹みてえに、こいつらを潰せば…」

そして”第0十刃”が巨大な足を擡げ、その大重量を力の限りで踏み下ろした。

「終わりだアアアアアアアッ!!」

広大な虚^{ウエユムンダ}圏全域を揺らす程の大地震。周囲の建物が倒壊し、天蓋が崩れ、常夜の月光が偽りの太陽と共に虚夜宮^{ラスノーチエス}の砂漠を照らす。

強固に作られた地下十層の底までぶち抜く踏撃だ。殆ど死んだだろうと化物は喜悦に歯を覗かせた。

…だが爆風で視界全てが砂に包まれる中、不意にヤミーの目が見覚えのある桜色を捉える。

「——てめえ如きが、一体」

「——誰を、殺しただと？」

聞き覚えのある声。そしてそれが誰のものか思い出した直後、怪物が踏み下ろした脚に激痛が走った。

「なっ——ぐああアアアッ?!」

足裏が真つ二つに裂け、夥しい血が砂漠を赤に染める。思わず膝を突き屈むヤミー。その目の前に、二人の死神が立っていた。

「まア、そっちのお坊ちゃんは確かに死に損なっただけみてえだがな」「ほぞけ。立つのも一苦労なのは貴様の方だ」

全身が焼け爛れ、体のあちこちから血を流す半裸の男達。朽木白哉と更木剣八が黄泉の縁から舞い戻り、またもや怪物を前に立ち上がったのだ。

そして瞠目するヤミーに更なる試練が訪れる。

「…万象一切灰燼と為せ」
——流刃若火——

凄まじい熱量に体が震え、怪物は咄嗟に顔を上げ後退る。

そして、そこでは途轍もない劫炎を斬魄刀に纏う、翁の死神が佇んでいた。

「孤軍と為りて尚も奮い立つ、敵ながら誠天晴。その忠道に免じ…」

——虫の息は、残してやる。

始まつ…たあ…

「——ガアアアアアアツツ!!」

怪物の怒叫が虚夜宮^{ラスノーチエス}を震わせる。ただ垂れ流す霊力が咆哮に混ざるだけで並の嵐風系斬魄刀をも超える爆風が辺りを襲い、護廷の隊長達は瞬歩で間合いを改める。

「…ツ、凄い霊圧だ」

「味方の死で奮い立つ…1番君とは真逆のタイプだねエ、厄介な…」

あの更木剣八と朽木白哉をあそこまで追い込む強敵だ。侮ってはならないと気の緩みを締め直す加勢の六名。

「…しんてきしやくせつ尽敵螫殺」

——すずめばち雀蜂

先陣を切ったのは二番隊隊長・碎蜂^{ソイフォン}。

ジオ・ヴェガ、バラガン・ルイゼンバーン、雛森桃、そして藍染惣右介。常に最前線で戦ってきた彼女は、敵の巨体に臆さず目の前に躍り出る。

「な、おい！ 俺の獲物だぞ！」

「黙れ更木！ わざわざ時間を浪費する必要もあるまい、一瞬で終わらせてやる！」

——にげ弐撃決殺

片腕はバラガン戦から失ったままだが霊圧は回道で回復済。同じ傷を二度刺せば如何なる敵とて屠る【雀蜂】の爪針が、護廷最速最強の白打使いの手で繰り出された。
だが。

「……なんだア？ 蚊か？」

「なっ!？」

その毒針は何も突き刺していなかった。鋼の装甲板の如き強靱な鋼皮イェロに阻まれ”蜂紋華ほうもんか”を刻めない。

「ウロチヨロたかってんじゃねえよ虫けらがアツ!!」

「チツ——」

『!!』

怪獣が左の巨腕を振り下ろす。無造作な動き一つが災害規模の破壊を齎し、地表の砂漠が一瞬で巨大なクレーターへと変貌する。

「ぐ…皆無事か!?!」

「ふうく危ない危ない。全くなんてパワーだよ」

「下がるんだ碎蜂隊長! 始解でどうにかなる相手ではない!」

「くっ…仕方ない」

慌てて崩落から逃れた死神勢は、そのまま敵の上空八方へ上り体勢を立て直す。

「では二番槍は儂が貰おう!」

次に挑むは七番隊隊長・狛村左陣こまむら さじん。

碎蜂同様現世の決戦を潜り抜け、そして大きな悲しみを背負った漢だ。

「応オオオオオツ! 卍・解!!」

——黒繩天譴明王——
こくじょうてんげんみょうおう

突如頭上に現れた巨大な鎧武者に流石の怪物ヤミー・リヤルゴも目を見開く。

「お、おおお…?」

「往くぞ明王! 破アアアツ!!」

それまでの小人の攻撃とは異なる大質量の暴力、自重の全てを投じた渾身の兜割りが十刃の肩に襲い掛かった。

「ぐ…がッ…!」

「喜べ、破面アランカルよ! 貴公の好きな巨人の戦いだ!」

「ぐッ…の野郎が…!」

斬る。否、叩き潰す。鋼皮を伝わり骨まで軋ませる斬山剣の打撃に

怪物が怯む。

その隙を逃す弱者はここにはいない。

「やはり単純な破壊力で強襲した方が良いな」

「ならばそうするまでの事！」

—— 瞬間 ——

始解を弾かれ雪辱に燃える碎蜂が切り札を切った。強烈な鬼道の猛風を両腕に纏わせる白打の究極奥義。

「そろそろ僕も働かないとねエ……狛村隊長！　ちよいとそこから離れておくれ！」

「！　相分かった！」

碎蜂の姿を横目に、斬魄刀の得手不得手で支援に回る八番隊隊長・京楽春水も静かに一手を組み立てる。

「——大河を渉る凶兆の槍衾。極夜に凍て付く赤白の竜気。蒼穹碧洋・四仙八天・爪牙劍盾・紫氷の長城。押し寄せる征國の軍勢、翻る霰色の旗母衣。北天に咆えよ、銀糸の騎兵が戦嵐を喊ぶ」

詠唱するのは破道全九十九の最上級。狛村の退避を確認した伊達男がその両手の先より術を放つ。

「ちよいと頭を冷やしなよ、0番君」

【破道の九十二・氷牙征嵐】

それは氷の津波。濁流のように荒れ狂う青白い霊圧が、触れるもの一切を凍らせ眼前の怪物へ殺到する。

「…邪魔だ、兄等は下がっている」

『！』

更にそこへ、己の不覚に苛立つ若き天才の殺意が降り注いだ。

—— 殲景・千本桜景厳 ——

桜色の雨。無数の刃の花弁を刀の形に纏め、極限まで殺傷能力を高めた千本のそれらが”第0十刃”の自由な右肩に突き刺さる。

「ぐああアアアッ!? グ、ゾオ…ッ!!」

「今だ、碎蜂!」

「——応!」

冷気で左半身を、斬撃で右半身を蝕まれた敵は格好の的。その急所へ女傑の痛恨の一撃が叩き込まれた。

「寝てろ、デカブツ!!」

——
瞬閔奥義・風神戦輪

「あブツ——ごはアアアッ!」

神速の歩法から繰り出される回転脚がヤミーの無防備な鼻っ面を蹴り上げ、霊圧の暴風が顔の角を抉る。

「ゴ…ミカス共が…!」

「! なんてタフさだ」

しかし三人の隊長の大技を受けて尚、怪獣は倒れない。激痛を怒りで押し潰し、”第0十刃”は凶悪な口を限界まで開く。

その奥には、ゾツとする程の極大な霊圧が。

「粉々にふっ飛べ!!」

——
黒虚閃

『!!』

爆音と共に放出される桁外れなエネルギー。幅十丈はある漆黒の光閃が、射線上の全てを消し飛ばしながら護廷の死神達に襲い掛かる。

そこへ誰よりも早く、一人の男が真正面へ駆け出た。

「…波悉く我が盾となれ、雷悉く我が刃となれ」

——
双魚理

数少ない二刀一对の斬魄刀を構えるその死神は、十三番隊隊長・浮竹十四郎。

握る二振りの切先を敵へ定め、その片方を迫る霊圧攻撃へ突き立て

ると同時。まるで鏡の様に【黒虚閃】が反転した。

「…すまない、ヤミー・リヤルゴ。俺が居る限り、その手の攻撃は我々護廷十三隊に通用しない」

「なっ——ぐああアアアッ!?」

あまりに予想外の出来事に反応する事もできず。自らの大技の直撃を受け、怪物はその巨体すら呑み込む凄まじい大爆発に包まれた。

「——やれやれ、漸く終わりかネ」

「見学とは良い御身分だな、涅」

「…恐ろしい威力の虚閃だった。【双魚理】に罅が入る程の攻撃なんて元柳斎先生以来だぞ…」

「うへえ、そりゃ剣八達もあんなボロボロになる訳だ」

もうもうと立ち上る砂塵を取り囲み、敵の様子を窺う護廷の隊長達。

破面軍の首魁・藍染惣右介が黒崎一護と浦原喜助に封印された今、護廷十三隊は残る問題である破面の敗残兵の居場所と、その統括者の正体を突き止めるためここ虚^{ウエコムンダ}圏へやって来た。故にこの戦いの目的は十刃の討伐ではなく屈服。そして尋問である。

これでこの怪物が諦めて降参してくれたなら最良。
…されどそう願う死神達の期待は、然程長い間を置かず裏切られた。

「——ぐぞ…オッ！」

湿った、低く恐ろしい声が、土煙の奥から滲み出す。

「う、嘘だろ。まだ動けるのか?」

「……待て、様子がおかしい」

垣間見える山の如き怪物の影が、どんどん縮小していく。

だが感じる霊圧の変異は真逆。消耗で帰^{レスレクシオン}刃が解ける現象とはかけ離れた、間違う事なき力の膨張。

「くそ…ッ！ くそッ…！ くそッ！ くそッ！ くそが！」

「ガアアアア”ア”ッ！」

「ぐアッ!？」

「な、不味い!・ 皆散開しろ!」

暴風と共に不可視の攻撃が連続し、京楽春水、粕村左陣が同様に宙を舞う。護廷の猛者共が反応も出来ない速度に戦慄する浮竹。

「——俺が”第0十刃”だアッ! 俺が最高戦力だアアッ! てめえら虫けら共が…この俺様に勝てると思うなアアアアアアッ!!」

轟く咆哮が爆発となつて死神達へ襲い掛かる。鬼道の盾で身を守る浮竹は、そこで拳を振り絞る敵の姿を見た。

「藍染さんだろうが! 雛森さんだろうが! 誰が勝とうが負けようが関係ねえエッ!」

「く…ッ!」

「俺がこいつらをぶつ殺せば勝ちだアッ! 勝ちなんだよオオッ!!」
真つ赤に充血した怪物の双眸、片目に至つては霊圧で赤く燃えている。

「俺がッ! 俺ガアッ! オレガアアアアアアッ!!」
打ち付ける破城槌のような激情が浮竹らの体を竦ませる。

「ガアア”アアア”ア”ッ!!」

正気など欠片も無い。全身に憤怒の炎を燃やし、狂つた十刃が眼前の死神達へ全身全霊の突進を敢行する。

「——下がって居れ、小童共」

…そこへ、前へ歩み出る者がいた。

「なつ、元柳斎先生!？」

『総隊長…!』

仰天し叫ぶ護廷の隊長達。敵が足を踏み締める度に伝わる地響きも、吹き付ける猛烈な霊圧も物ともせず、その老将は不動の姿勢で怪物を待ち構える。

「…未だ猛るか、十刃」

「グオオオア”ア”ア” ツツ!!」

理性を無くした獣の怒り。そこに見える微かな人の心を貴び、”最古の死神”と畏れ敬られる一番隊総隊長・山本重國は、その燻る刀を鞘から解き放った。

「人性捨てり義憤に立つ…忠道見事」

我が燻を知るに、不足無し。

—— 卍 解 ——

一瞬。

足元の砂漠を煮る灼熱が虚圏ウエコムンドを支配し、そして消えた。

一閃。

紫電一つ残さず、音一つ奏でぬその太刀筋はまさに剣技の芸術。長い残心の末、刀の鏝を収める鯉口が微かに鳴く。

「——ガッ…あ…」

それを合図に、怪獣の左腕が肩より別たれ、”第0十刃” ヤミー・リヤルゴは砂漠に崩れ落ちた。

——ふふつ、どうですか？
美味しいでしょ？

：負けた。あの人が。俺達の誰よりも強かった、あのお節介焼きな女が。

信じられねえ。一体何で。

死神共に汚え手を使われたのか。部下を道具としてしか見ねえ藍染さんに捨てられたのか。

天敵の俺達虚ホロウにだって笑いかけるあの甘っちょろさを、敵に利用されちまったのか：

今となつちやア、もう答えはわかんねえままだ。

破面軍全九十六騎の頂点に君臨する”十刃”エスパーダは、各刃それぞれが異なる「人が死に至る形」を司る。それは彼等の思想哲学、能力など各々が持つ矜持に応じて破面軍軍団長より与えられた。

ヤミー・リヤルゴ。

全ての歴代十刃で唯一、怒りという”感情”を武器に戦う異質な破面。彼が司る「死の形」は、【憤怒】であった。

人が虚へと堕ちて失い、そして取り戻そうと足掻き苦しむもの。その焦がれる”心”の断片を、ただ一人己の力に出来る彼へ最高第0十刃の地位が与えられたのは、そこに戦闘力以外の——大きな希望に満ちた意味が込められていたからなのかもしれない。

誰よりも心を知ろうとした孤高のウルキオラは、その男の下へだけは自ら足を運んだ。心無き獣の道に生きるグリムジョーは、事ある毎に彼へ突っかった。傲慢で誇り高いバラガンは、彼の下に就く事に一つとして異論を述べなかった。

前任者には惜しくも力で及ばない現”第0十刃”のヤミー・リヤル

ゴは、されど誰にも羨まれ、妬まれ、認められたその一点においては

確かに、”最高”の破面アラシカルだったのだ。

「——る…かよ…ッ」

満身創痍の体が軋む。三肢が悲鳴をあげ、斬られた一肢からは焼け
た血肉の煤煙が立ち上る。

「ッ、まだ動けるのか…!？」

「…いや、もう終わりだよ」

全身から力が抜けていく。見下ろす巨人の視界が地へと落ちてい
く。

気付けば目の前に、自身の折れた斬魄刀が転がっていた。

「…おれが…まけ…るかよ…ッ」

だが。それがどうした、と。最後の十刃はその剣の柄を掴まんと、
残る片腕を伸ばす。

「おれが…最強だ…ッ。俺が、最高戦力だ…ッ！」

「…もう止せ、十刃。これ以上は無意味だ…！」

「ぐ、う、おオ、オオオオオオ…！」

足りない。もつとだ。もつと怒れ。

情けない同胞達を思え。動かない己の手足を思え。あの人と築い
た破面軍をこんなにした、目の前の死神共を思え。

そこに、俺の力の源がある。ある筈なんだ。

だが体は動かず、幾ら命じても斬魄刀はちつとも力を解放しない。

「…涅隊長。この武士ものふに慈悲を与えよ」

「ふう…総隊長命令とあつては致し方ないネ」

そこに「感謝し給えヨ」と声が聞こえ、ヤミーの目の前に進み出た

虫けらが膨大な霊圧を放出する。
「卍解」

——金色卍殺地蔵——
こんじきあしそぎじぞう

出現したのは、金色の赤子の顔を持つ巨体の芋虫。恐らくはあの鎧武者と同じ類の卍解か。文字通りの虫が今の小さな自分を見下ろしていた。

笑わせるな。ヤミーは咆える。力さえ戻ればこんな雑魚、一瞬で叩き潰せる。

その筈なのに、破面の怒りは虚しく胸の内で燃え盛るだけで…

ふざけるな。帰刃レスレクシオンが解除された程度で俺の戦意が消えて堪るか。俺の力が。憤怒が。——”心”が消えて堪るものか。

これから立ち上がって、もう一度【憤怒イーラ】でこいつ等をぶっ殺して。全部終わったら、またあの旨えハンバーグでも食いながらグチグチ小言言われて謝って——

…ああ、そうか。

もう、あの人の飯。

食えねえんだった…

「……く……そ」

胸奥で何かが急速に萎んでいく。耐え難い喪失感。精神的な飢餓感。かつてない恐ろしい虚無感に苛まれ、男の視界が闇に染まっっていく。

あの時。怒りの炎で心を焼き尽くし虚ホロウとなった、あの日の夜に見たのと同じ闇だ。

「やれ、金色卍殺地蔵。鎮痛薬と自白剤だ」

巨大な芋虫の人面が、主の指示に息を大きく吸い込む。その口の中に何かを蓄えるために。

最早抗う力は微塵も残っていない。取り戻した最後の心の欠片を

失った”最高の破面”ヤミー・リヤルゴは、かくして全てを諦めた絶望の中で、己の敗北を待ち続けた。

——命令しないでくれるかい？

死神風情が、この僕に。

…だが、その時。

遠のく十刃の耳に、聞き覚えのある艶っぽい男声が滑り込んだ。

「なっ!？」

突如起きた涅マユリの卍解の異変に一同は驚愕する。

謎の声が木霊した直後。【金色足殺地蔵】がその背後へ振り向き、見守る隊長八名へおぞましい紫色の煙を吐き出したのだ。

『ご挨拶だ、死神諸君。気に入ってくれるといいけど』

「ご、これは…毒ガス!？」

「ゲホッ、ゴホッ…！ く、涅！ 何だこれは！」

思わず吸い込み激痛に悶える死神達。殺傷能力は無いが極めて凶悪な麻痺効果を持つ神経毒だ。

邪魔者を沈黙させた巨大芋虫が、足下で呆ける瀕死の十刃へ感心の笑みを送る。

『やあ、ヤミー。時間稼ぎご苦労』

「て、てめえ…その声は…！」

あり得ない。幻聴でも聞いているのか。地に伏すヤミー・リヤルゴは混乱に目を白黒させる。

そんな両者の語らいの後。膝突く死神達の中で数少ない無事な者、涅マユリが己の正解へ忌々しげな笑みを向けた。

「…そろそろかくれんぼに飽きてくる頃だと思っていたヨ」

——ザエルアポロ・グランツ。

その名は、かつて彼が戦い”超人薬”の投与で倒した”オクターバ・エスパーダ第8十刃”のもの。

だが涅は勝利の後も油断していなかった。あの時己の正解に喰わせた最初の個体。前線に立つ霊性科学の技術者が自身の肉体に何の細工もしていない訳がなく、その他様々な違和感から「何かある」と待ち望んでいた。”尋問”の好機だった。

以前逃した屈辱を呑み込み、男は敵へ問い掛ける。

「泳がせたお陰でこうしてノコノコ出て来てくれた訳だがネ。そこに転がる”死に掛ない第0十刃”より君の方が余程有意義な情報を持っているだろうか？」

『フフ、流石はこの僕を倒した死神だ。慧眼恐れ入るよ、涅マユリ』
「……」

捕らえる準備は万全だと仄めかす涅に対し、「金色足殺地蔵」に取り憑くザエルアポロの声色は平静そのもの。その余裕に眉をひそめる死神は、敵が余計な事をしでかす前にさっさと奴の神経操作の発信源を特定すべく、追跡装置を起動した。

…だが。

「ま、マユリ様…ッ！」

耳に届いたのは装置の観測者、副官の困惑した声だった。

「！ どうした、ネム」

「だ、ダメです。界間感知が途中で途切れて…！」

「…何だと!？」

全くの想定外に流石の涅も声を荒げる。追跡が途切れるとは即ちソウルソサエティ 尸魂界・現世・虚圏の全てに靈波の発信源が存在しないと言う事。「莫迦な、そんな事…！」

涅の動揺も当然。何故ならザエルアポロ・グランツは今…

護廷十三隊が戦力を展開できる三界のどこにも居ない事になっているのだ。

『——では同胞達よ』

「！」

そして護廷十三隊の動揺は更に続く。ザエルアポロの声を合図に、それは起きた。

『名残惜しいけど、この地ともお別れだ』

——我々^{アランカル}破^{ラスノーチエス}面軍は、これより
虚夜宮を放棄する。

直後。一同の周囲、いや虚^{ウエコムンド}圏中の空間が歪んだ。

「な、なんだ…!？」

「黒腔^{ガルガンタ}…じゃない?」

「マユリ様! この計測数値、【叫谷^{キョウタニ}】です…!」

「いや、にしては異質過ぎる…! だがこれは一体…こ、こんなモノ知

らない、知らないヨ！」

けたたましく反応する界間感知装置を確認するまでも無く、その異常は一目瞭然。

死神達の視界の至る所に、神々しい虹色の光を放つ横穴が無数に浮かび出たのだ。

「あ、あれは…ッ！」

そしてヤミー・リヤルゴの真上に開いた、最も大きい一つの異界門。その波打つ神秘の空間から現れた幾つもの人影に、戦場の誰もが目を見開いた。

「——ヤミー！」『助けニ来タゾ』

甲高い声と低い声。赤く不気味な円柱形の水槽に浮かぶ二つの球体が、唾然とするボロボロのヤミーへ呼びかける。

その破面の司る死の形は

『強欲』

ヌベロ・エスパーダ

——”第9十刃”——

AARONIEERO ARURURERIE

「——奴め、迷惑ばかりかける粗暴者と思っていたが…謝罪しなくてはならないな」

次に姿を見せたのは、奮闘した同胞を称える色黒の大男。

その破面の司る死の形は

『陶醉』

セプティマ・エスパーダ

——”第7十刃”——

ZOMMARI RUREAUX

「——ああ、流石は”第0十刃”。我々の代表に相応しい漢だ」

大男の言葉に同意するのは同じく色黒の女。

その破面の司る死の形は

『犠牲』

トレス・エスバード
”第3十刃”
ティア・ア・ハリベル
TIER HARRIBEL

「——フン、獣が一丁前に奮いおつて」

そう鼻を鳴らすのは、尊大な翁。吐き捨てるような台詞に反し、喰れた声はどこか温かい。

その破面の司る死の形は

『老い』

セグンダ・エスバード
”第2十刃”
バラガ・アン・ルイゼンバイン
BARAGGAN LOUISENBAIN

「——ギアアアアアキイイ…生きてるみてえで何よりだぜ、くそつたれがアツ！」

耳障りな高い声で更木剣八の名を叫ぶのは、聳え立つ細身の巨人。その破面の司る死の形は

『絶望』

クイント・エスバード
”第5十刃”
ノイトラ・ジルガ
NNOITRA GILGA

「——チツ、やっぱ黒崎の野郎は居ねえか…」

辺りを見渡すのは青髪の若者。目当ての敵の姿が無いからか落胆している。

その破面の司る死の形は

『破壊』

セスタ・エスバード
”第6十刃”
グリムム・ジャガー・ジャック
GRIMMUM JAEGERJAQUES

「——おいおい、藍染様を倒したのはその黒崎一護だつて話だぜ？」

ヤミーも困った奴だが、お前も無茶すんなよな…」

そして最後に現れたのは無精髭の二枚目。気怠そうに隣の戦闘狂を宥めようとする男は、されど振る舞いに反し膨大な力を垂れ流して

いる。

その破面の司る死の形は

『孤独』

ブリメーラ・エスパーダ

”第1十刃”

COYOTE STARCK

コヨーテ

スターク

総勢七体の桁違いな霊圧を放つ者達。

彼等につき、倒した筈の従属官、総隊長すら下した改造破面、困惑している現地の協力者等も含む——三界に散らばっていた百に迫る数の破面達が、一堂にその巨大な異界門の中で佇んでいた。

「何……………だと……………」

その信じ難い光景を目の当たりにした護廷十三隊の戦慄は如何ほどのものか。

「馬鹿な！ 彼らは僕たちが現世で倒した十刃の！」

「あいつは、バラガンはあの時消滅したはず！ それにジオ・ヴェガ：私の【雀蜂】の決殺が何故……！」

「な、なぜ……何故奴等が生きてるんだ!?!」

麻痺毒の苦痛も忘れ、堪らず叫ぶ地面の隊長達。これまで成し遂げてきた戦果の一切を幻とする無傷な敵主力勢の姿に、誰もが現実を呑み込めない。

「……まさか、”魂魄再生”？」

だがそこに理性的な声の一つ響く。この驚天動地の真相を暴く、十番隊技術開発局局長の苦々しい言葉だ。

””魂魄再生”……だと……?!”

「霊性因子を元に死した魂魄を再生する、霊性科学のタブー中のタブーだよ……ッ！ どうやら日番谷先遣隊の戦いで観測されたあの黒い箱状の転送装置で、滅んだ破面の因子を回収していたようだね……」

「!!?」

死神達の頭からあらゆる思考が消える。

理論上は生命機能・容姿・人格・記憶・能力に至る全てを回生できる、云わば魂魄の”死者蘇生”。

なんだそれは。斯様な理不尽がこの世にあつていいのか。崩玉を得た藍染は、それ程の技術を手にしていたと言うのか。愕然とした顔で必死に胸の絶望感と戦う護廷十三隊。

「——すまないね、そういう事さ」

そんな彼等を嗤う、涅の卍解から発されたものと同質の嫌味な男声。その肉声が聞こえた方角に、桜色の髪を掻き上げる一人の青年が居た。

その破面の司る死の形は

『狂気』

オクターバ・エスバーダ

——”第8十刃”——

SZAYELAPORRO GRANZ

「…お主が破面の統括者か」

光の門から侮蔑の目で死神等を見下すその男へ、老将・山本重國が静かに問う。それは情けなく動揺する隊長達を正氣に戻す一喝となった。

そうだ。想定外はさておき、我等の目的は奴ら藍染勢力の残党と対話する事。ならば…

「統括者？ ハッ、まさか！ 僕は忠実なる下僕。大事な同胞を迎える君命を頂いただけだよ」

だが、ザエルアポロは大仰に翁の問いを否定し、数体の破面に支えられて立ち上がったヤミーへ微笑んだ。バツが悪そうに頬を掻く巨漢は、憎らしくも嬉しそうな複雑な顔をしている。

「…ならばお主が伝えよ。今後の三界の均衡に関する話がある」

「残念。僕達と取引したい君等には悪いけど、生憎ついさつき、こちらにその必要は無くなってね」

「…何じやと？」

理解が出来ず訝しむも、最古の死神は即座にハツと思ひ至る。遙か古の時代、神話に伝わる強大な大虚メクスの襲撃。その戦場となつた尊き神域での一幕を。

「お主等、よもやあの者達と……！」

山本の問い返しはザエルアポロの嫌らしい笑みで煙に巻かれる。

しかしそこへ、破面の青年の興味を引く別の言葉が飛んだ。

「……待ち給えヨ。貴様、自分を”忠実なる下僕”と言つたネ？」
「ほう」

科学者の涅マユリ。彼もまた、破面達の完全な復活からある推測を組み立てていた。

魂魄消滅と同時に靈子へと戻る靈性因子。そこから死者を再生する時に立ちはだかる技術的困難は数知れず。故に魂魄再生は机上の空論とされてきた。

そんな奇跡を成しうる方法はたった一つ。一の可能性を無限へと引き上げる理の力、【崩玉】。

しかしそれは藍染の手にあり、雛森桃のものも消滅した。

だがもし、それが消えてないのだとしたら。あの天へ消えた光の分身達の正体は……

「まさか、貴様等のトップは……！」

「フフ、少しは賢い者がいて安心したよ。これであの方の願いも叶う……」

意味深な会話を交わす両者。しかし涅マユリの驚愕からその衝撃的なやり取りが垣間見れた。

「さて、用事は全て済んだ。我々は失礼させて貰うとするよ」

「なっ、待てッ！」

「逃がすか！」

「あの方」とは何だ！ 答えろザエルアポロ！

ここまで虚仮にされてみすみす逃亡を許すなど末代までの恥。耐え難い屈辱に吠え、毒に苛まれる体で必死に立とうとする隊長達。

「追いたければご自由に。だけどその時は君達が”悪”になるから、その覚悟でね」

「何だと…ッ」

「なに、そう言う”協定”さ」

そんな死神側の激情を嘲笑いながら、破面達はそろそろと踵を返し、光の中へと消えて行く。一体、また一体と。護廷十三隊へ、自軍の凱旋を見せ付けるように。

「さあ、往こうか…皆」

——我等が女神の座す

あの尊き【英霊宮殿】へ…

そして山本らは輝く虹色の門の中に、二つの人影と、その間に羽ばたく——二対の淡い紅桃色の翅を幻視し…

「——くそ…ッ」

光の門は、跡形も無く消え去った。

多くの謎を残した、虚夜宮^{ラスノーチエス}破面軍残党捕捉任務。

護廷十三隊の総力を挙げて当たった作戦は、絶望的な事実と、多大な疲労。そして消えぬ憤懣を彼等の心身に残し、終了した。

しとしとと、十一月の冷たい雨が降っている。

ソウルソサエティ
尸魂界の「転界結柱」が解かれ、まるでただの悪い夢だったかように現実へと戻った、現世の空座町。

薄暗い街並みを眺めながら、井上織姫は一人窓枠にスカートの腰を下ろし、物思いに耽っていた。

この四日間、色々な事があった。怖かった事、嬉しかった事、そして悲しかった事。ただの女子高生の自分が今まで経験した事もなかった、非日常。

ふわふわと現実味がなくて。胸が締め付けられるようで。それでも大切な仲間達と無事にここへ戻って来られた事に安堵する。そんな不思議で複雑な感覚だ。

ふう、と小さな溜息が零れる。そして少女は窓の外から視線を外し、恐る恐る室内へと目を向けた。

「――黒崎君……」

窓の脇に置かれたベッドに、この部屋の主である青年が横たわっていた。

今回の戦いで誰よりも頑張ってみんなを守ってくれた、織姫の想い人。黒崎一護だ。

「……ッ」

二人きりの貴重な時間。安らかに眠る包帯だらけの彼の腕に触れようとして、少女は咄嗟に手を引っ込める。既に何度と繰り返しされたその行為を悔やむ彼女の顔に、恋する乙女の甘酸っぱさは欠片も無い。

唯々、暗い影がそこにあつた。

「……最低だ、あたし……」

織姫は固く目を瞑る。

離れない。脳裏に焼き付いたあの時の恐怖が。誰よりも大切な黒崎君が、自分たち人間と仲良くなれたかもしれない敵を——あの無口な破面の青年を、何度も何度も突き刺した酷い光景が。

「……ごめんなさい」

助けに来てくれたのに。あんなに苦しんでまで戦ってくれたのに。嬉しくて、悲しくて、心の底から「ありがとう」と、「無茶しないで」と、沢山の感謝と心配の言葉を送りたいのに。

臆病で恥知らずな自分は、”誰”に宛てたのかもわからない、最低な謝罪の言葉しか言えずにいた。

「……ごめん……なさい……」

視界が滲む。嗚咽が堪えられない。

自分だけではなく、黒崎君もこれからずっと心を痛め続けてしまうのだろうか。そんな彼に、あたしは毎日「貴方は悪くない」と本心で叫びながら、それでもあの時^{ホロウ}虚となった彼を思い出して醜く震えてしまうのだろうか。

そして、あの悲しい破面の青年とも、もう逢う事は叶わない。彼が見つけた”心”が育む、人と人との素敵な触れ合いを、沢山知って欲しかったのに。

その原因の全ては、己の無力。

自分に涙を流す資格などないと、必死に歯を食い縛りながら、織姫は死にたくなる程の自己嫌悪にただひたすら項垂れていた。

…その時。

ふと顔を照らす淡い街灯の光が、何かに遮られた。

「……えっ？」

何だろう。黒崎君のお見舞いに来てくれた尸魂界の誰かだろうか。二階の窓に影を落とす存在に心当たりのある織姫は、涙を拭いて振り返る。

そこで、少女は……奇跡を見た。

「っあ——」

開いた窓の外。キラキラと輝く雨に包まれ…

白装束の青年が宙に佇んでいた。

街灯の逆光の中に浮かび上がるその翡翠の瞳を、片時も忘れた事は無い。無表情でこちらを見つめる彼の姿に、織姫は目を限界まで見開いた。

「……う、るきおら…君…？」

そんな、いつの間に自分は眠ってしまったのだろう。夢の中にいるのかとその幻想的な光景を信じられず、されど頬を抓って目を覚ます気も起きず。

少女は溢れる涙を何度も拭い、彼を見つめ返した。

「——井上織姫、黒崎一護」

彼女と、窓の奥の怪我人へ交互に視線を向け、宙の青年が二人の名を呼ぶ。

「お前達にこれを渡せと命を受けた」

「あ、え…？」

窓まで近付いた彼が腕輪を二つ差し出した。呆ける頭で慌てて受け取る少女。

ぼんやりと眺めたそれは、あの日に彼から手渡されたものとは違う、淡い七色の輝きを放っていた。

「俺達の新たな拠点に通じる鍵だ。他の奴等がその腕輪を認識する事はない」

「！」

「あなた達をいつでも歓迎する」。そう仰られた」

ハツと顔を上げ、織姫は青年を凝視する。困惑、いや信じられない台詞だった。あのヤミーとか言う人のように、破面達には恨まれているものばかり。

それでも。未だ彼の瞳に浮かぶ、あの最期の時に見た微かな温もりが、自分の都合の良い錯覚ではないのだとしたら…

「確かに渡したぞ」

「え、あつ。ま、待って…！」

ふわりと離れていく彼の手を、織姫は咄嗟に掴んでいた。自分でも驚くほど大胆な、危うく二階から落ちそうになった行為に混乱しながらも、少女は必死に言葉を探す。

それを、青年は最後まで無言で待っていてくれた。

「あのっ…う、ウルキオラ君っ！」

織姫は強い気持ちで瞳に乗せる。

言うべき事は簡単に見つかった。ずっと、言おうと思っていた事だった。

息を整え、最後に大きな深呼吸をし…少女は決意に固く結ばれたその唇を、開いた。

——あたし達と、

友達になってくれますか…？

その問いに、翡翠の目が僅かに見開かれた。

一瞬にも永遠にも思える沈黙の後、青年は織姫と一護を一瞥し、二人に背を向け歩き出す。進む先には彼を迎えるように現れた、虹色の光の空間。

嫌だったのか。そう不安げに見送る少女は、されど彼が光の中に消える直前。

——また逢おう。

そんな平坦な声を、聞いたのだった。

『その破面の司る死の形は

』

U^ウL^ルQ^クU^アI^{トロ}O^ロR^エR^スA^バC^ーI^ダF[”]E^第R⁴E^十R^刃A[”]C[”]I[”]F[”]E[”]R[”]

1000話到達記念ネタ

*尸魂界篇終了回

(本編30〜34話「不穏〜雛森イイイ！」)

【BLEACH】雛森桃とかいう新ヒロイン

101: ななし ID: kSftIsum

主人公がヒロイン救ったと思ったならシヨタが主人公になって別ヒロインを救う話が始まった件について

112: ななし ID: JEP47EWK2

◇◇ 101

じゃけん今度は雛森助けにガルガンタ行きましようね〜

117: ななし ID: G7QpVE5pM

◇◇ 101

怒涛の展開から予想の遙か斜め上に行きまくっててオラわくわくすっぞ！

134: ななし ID: n7znPuy14

◇◇ 101

結局裏切り者は三人？

雛森さんはヨン様に無理やり連れてかれただけ？

149: ななし ID: FuHqMZtFg

◇◇ 134

せやで。一護達が来たちよい前に真相明かされて裏に引き摺り込まれた

155: 名前: ななし ID: 30q7I2KGV

◇◇ 134

逆。ヨン様に憧れすぎて気付いて無かっただけで雛森も最初から敵側

168 : 名前 : ななし ID : n7znPuy14

◇◇ 149

◇◇ 155

ええ… (困惑)

104 : 名前 : ななし ID : l+nPzF8rH

服同じだし一護の卍解修行手伝った仮面女って過去回想に出てた
本好き姉さんだよ

あれ確実に封印的なやつ弄っただろ

131 : 名前 : ななし ID : H0325z4k8

◇◇ 104

藍染は死神虚化の研究者・一護は子供時代に虚化を本好き姉に封印さ
れた・藍染陣営の女キャラは現在雛森一人。

仮面女、本好き、雛森は同一人物と妄想

155 : 名前 : ななし ID : l+nPzF8rH

◇◇ 131

???

本好き (仮面女) が藍染陣営ってのはどこ情報?

179 : 名前 : ななし ID : H0325z4k8

◇◇ 155

市丸の門での台詞あるし現在登場してるキャラの中では最有力
あとはメタ的にヒロインポジの雛森と一護を関わらせる接点がそ
れくらい

192 : 名前 : ななし ID : 9MnRNalcr

◇◇ 179

「あの娘」って最初ルキアの事かと思ってたけど多分雛森さんよね

173 : 名前 : ななし ID : kSftIsu+m

◇◇ 131

こうして読むと意外とありそう

187 : 名前 : ななし ID : CJNpbGp/b

◇◇ 131

ヨン様に連れ去られる時雛森が一コマだけ一護のことチラ見して
たしおそらく

385 : 名前 : ななし ID : l+nPzF8rH

私が天に立つの台詞が意味深で考察スレ立ちそう

414 : 名前 : ななし ID : Hop2tz45k

◇◇ 385

「我ら道化の叙事詩」とか「我々に立てる天などない」とか妙に謙虚な
言葉から不遜なわた天台詞：

一護の本好きお姉さんとか虚化とか色々深い背景ありそうでwk
tk

126 : 名前 : ななし ID : C3Y3GQrvT

何かに苦しんでる年上幼馴染を守ろうと頑張ったのに、良かれと思っ
て諸悪の根源へ懇切丁寧に送り届けたせいで幼馴染が腹をぶっ刺さ
れ、必死に奪い返せば当の幼馴染も敵の一味で、しかも守ろうとして
た彼女が実は鬼道一つで自分を瞬殺できるほど強く、何も出来ずに彼
女を敵に連れ去られる…

BLEACHはいたいけな少年が苦しむ様をじっくり読ませられる
「少年漫画」です

138 : 名前 : ななし ID : HOFRTZ+C8

◇◇ 126

か、カタルシスに悲劇は必要だし…

152 : 名前 : ななし ID : iV4r5Pevv

◇◇ 126

幼馴染は気付いてもらえるようにSOSを出してたけど気付けな
かったも追加で

165 : 名前 : ななし ID : 3hqi a q L 4 C

◇◇ 126

その黒棺も腹ぶっ刺された状態で使った本気とは程遠い威力で後
で「莫迦な…！」ってなるんだろ？

俺は鯽には詳しいんだ

203 : 名前 : ななし ID : YyNXxXP8 /

◇◇ 165

：現世でのルキアとか妹達とかの時も思ったけど、この作者って女の子をぶっ刺したりリヨナって遊ぶの好きだよね（小声）

252 : 名前 : ななし ID : ehQMf8+pl

◇◇ 203

気付いてしまわれたか…（小声）

287 : 名前 : ななし ID : KpIwD038r

◇◇ 203

◇◇ 126を読む限りどうやらシヨタを虐める趣味もお持ちのようです

すね！（大声）

：シロちゃん憐れ。強く生きて

465 : 名前 : ななし ID : ts18IA / 3a

BLEACHがジャンプ内で新たにリヨナ枠と愉悦枠を獲得した瞬間だった

*ウルキオラ&ヤミー襲撃回

（本編41話「少女イイイ！」）

【BLEACH】雛森桃、真ヒロインだった

2 : 名前 : ななし ID : NQ+g3DxSb

どうやらフラグが立ってしまったようですね…

9 : 名前 : ななし ID : zE8wq6CMz

◇◇ 2

シロちゃんフラグの霊圧が、消えた…？

16 : 名前 : ななし ID : iJ / 7PLbf+

◇◇ 2

(むしろ月姫で言う青子ポジだから一護とのフラグは) ないです

47 : 名前 : ななし ID : e g E W F W E u +

◇◇ 9

◇◇ 16

どっちなんスか、雛森サン : ツ!

45 : 名前 : ななし ID : o E R 6 i 7 K 2 L

◇◇ 2

一体誰の真ヒロインなんですかね : ? (一護、シロちゃん、ヨン様を見ながら

69 : 名前 : ななし ID : n O E c v + 5 x b

◇◇ 45

一人だけ下の名前で呼ぶことを許されてるヨン様なんだよなあ

86 : 名前 : ななし ID : P i o 9 Y 2 N c s

◇◇ 69

そのヨン様に裏切られて傷心の所に、6年前から大きくなった一護のイケメンっぷりにクラリとやられて :

: ごめんね、シロちゃん

124 : 名前 : ななし ID : F I j q K C Y Y D

◇◇ 45

それ以上シロちゃんが不幸になる話は止めろオ! () ナイスウ!

()

140 : 名前 : ななし ID : T O Z q 5 j e 2 D

日番谷、リトル一護 : : : あれ、雛森さんまさかシヨタコン

161 : 名前 : ななし ID : 9 g W a X l Z 9 k

◇◇ 140

ま、まああんなに大人に振り回されればシヨタに癒しを求めたくなるのも : ね?

185 : 名前 : ななし ID : P i f Q l + O a l

◇◇ 140

むしろシヨタコンを卒業しようとする無理に藍染なんかには憧れちゃったからこんなことに :

4 : 名前 : ななし ID : N u l H z o d a 7

新衣装雛森さんエツツツツツツツツツツツツ!!!

太眉えちえち服美少女 : これはメインヒロインの風格ですわ

21 : 名前 : ななし ID : y t R J i F d v D

◇◇ 4

衣装もだけど太眉いいよね太眉

58 : 名前 : ななし ID : J n P 6 q Y C Z 8

◇◇ 4

純朴な女の子なのに肩と背中剥き出しスタイルがね、もうね
卑しか女ばい!

73 : 名前 : ななし ID : m q m F p K 6 w d

◇◇ 4

悪墜ちしたヒロインの衣装は布面積少なくなる法則

90 : 名前 : ななし ID : I r L n 4 l J s t

◇◇ 73

あれを藍染が無理やり着させてると思えば :

あーっ!! あーっ!! 困りますあーっ!!

118 : 名前 : ななし ID : F w C H b x H U W

◇◇ 90

ごめんね、シロちゃん :

223 : 名前 : ななし ID : 3 n o J l B y d C

雛森が幼い一護の力を封印した白死覇装の女だと分かったけど、理由が藍染の命令だったか否かで相当話変わってくるな。過去の雛森が今と全く違うらしいから余計ややこしいし展開的には一護の味方寄りだけど藍染殺害からの流れ見るとどんでん返しも十分あり得る。

239 : 名前 : ななし ID : P w k S U h f G +

◇◇ 223

こってこての悲劇のヒロイン枠やし奇をてらった展開は普通にありそう

245 : 名前 : ななし ID : 264k+nIY6

◇◇ 223

まず何で一護の精神世界に雛森さんらしき仮面女がいるのかが謎

261 : 名前 : ななし ID : 9+amV2n0X

◇◇ 245

封印がしゅんしゅんりつかみたいに化身化したとかじゃね(適当
死神凶鑑で似たようなネタあったし

275 : 名前 : ななし ID : 264k+nIY6

◇◇ 261

白一護が「あの人」って呼んで好意的だったから邪魔な封印の人
格ってのではないと思う

250 : 名前 : ななし ID : bRLeElXd7

◇◇ 223

浦原に読書家と呼ばれて特に反応してないからそもそも別人説
も許されるまでである

読書家と本好きのお姉ちゃんってほぼ一緒だからこそミスリ
ドっばい

259 : 名前 : ななし ID : NI2+0jrjp

◇◇ 223

逆に藍染の命令じゃないパターンなんてあるの？

アランカル率いてたなら完全に最初から敵やん

264 : 名前 : ななし ID : kupOv2djl

◇◇ 259

これ。軍団長だったら裏切るのは既定路線だったはず

273 : 名前 : ななし ID : cRYnW3T4y

◇◇ 259

夜一さんが洗脳言ってたやん

285 : 名前 : ななし ID : Qo9IdbVqC

◇◇ 273

それはアランカル回収した時に言ったやつ。それ以前の半世紀は
なんやねん。鏡花水月？

276 : 名前 : ななし ID : fMeTIsjR+

◇◇ 259

ヨン様からヤバい仕事与えられてたのはかなり前からそれを話術常時卍解状態なヨン様が尸魂界裏切りと雛森に悟らせなかった

《color:#0000ff》

292 : 名前 : ななし ID : xOPoua4vX

◇◇ 276

ヨン様は裏切り判明してからずっと名言製造機やってるし言葉巧みよね

308 : 名前 : ななし ID : qiAPZl2Rb

◇◇ 276

アランカルは死神に近い虚だから死神と友好的になれるとかそれっぽい事言つて説得してそう

でもソウルソサエティの上層部はそこまで頭柔らかくないから僕達が秘密裏に頑張るんだとか言つて口止めしてそう

そして健気な桃ちゃん「藍染隊長がおっしやるなら！」と頑張つてソウルソサエティの敵を育てて組織して…

323 : 名前 : ななし ID : WallieX83

◇◇ 308

そして実はSSを滅ぼすために組織したと分かった後でも情が沸いちやつて彼らを嫌いになれない桃ちゃん…

337 : 名前 : ななし ID : Sme27Rtci

◇◇ 308

かなしいなあ

341 : 名前 : ななし ID : Ylp7Uwmc+

◇◇ 308

破面たちが死神に非友好的でも「無法者な虚たちを管理する」とか騙す方便は沢山あるやろなあ

201 : 名前 : ななし ID : b3pO352fF

ヤミーでも雛森さんの手作りハンバーグ食ってるのに俺達と来たら

∴

239 : 名前 : ななし ID : +S g q p 20TR

∩ 201

シロちゃん∴

191 : 名前 : ななし ID : U7J aWV y / 3

ヒロイン力が強すぎて雛森が浦原夜一をボコれておまけに卍解まで使える主人公真つ青な戦闘力が話題にならない∴

*十刃+W W 襲撃回

(本編52〜54話「再会〜狂悦イイイイ!」

つ 【BLEACH】雛森桃とかいう強いのに敵の言いなりになってるや

2 : 名前 : ななし ID : H U 0 q y J d m z

こいつより強い藍染ってどうやって倒すん∴?

5 : 名前 : ななし ID : 1 8 w 3 9 6 2 n 4

敵側にラスボス級の化物が二人いるんですが∴

6 : 名前 : ななし ID : o P p l I n S 4 6

∩ 2

せ、洗脳さえ解ければ桃ちゃん味方になるから∴ (震え

8 : 名前 : ななし ID : i I t 0 j 7 n D w

∩ 2

雛森クソ強いんですがこれで無理やり従わせられてるってマ?

実力に反してメンタルが貧弱すぎるだろ∴

13 : 名前 : ななし ID : X c 4 X f Q d o p

∩ 2

飛梅強すぎひん？

あれで卍解とかされたらそらあんなに強い十刃も従うわ

39：名前：ななし ID：R2nEr1++c

◇◇13

それもだけどあの分身の使い方が完全にヨン様の鏡花水月意識してて草なんだが

56：名前：ななし ID：KbG2nteks

◇◇39

今週も無事に冬獅郎きゅんがヨン様にNTRれたようですね…（ノルマ達成

33：名前：ななし ID：n7vc3TzgC

◇◇2

雛森は倒すんじゃないやなくて逆に仲間に引き戻してヨン様戦での最大戦力として一護と共闘パターン

47：名前：ななし ID：GieB6zRhW

◇◇33

ヨン様戦が雛森共闘はあるやろな。

つか一護一人で倒すとか無理だろ

71：名前：ななし ID：／qcRaEL2+

◇◇33

その共闘時のシロちゃんの霊圧はどこ…？ ここ…？

【BLEACH】雛森桃、爆発する

2：名前：ななし ID：V9m0sRh17

この漫画女の子のリョナシーン多すぎやろがい！！

3：名前：ななし ID：XA517Dxuv

ああああああああああああああああああああ

5：名前：ななし ID：／fZ5GLHZ2
!!!!!!!!!!!!

なんなんですかねこの大惨事…

14 : 名前 : ななし ID : o p P + p 5 z J s
勝者も敗者もズタボロで最後に唐突にヨン様が登場して煽るだけ
煽って去ってくとかいう地獄

15 : 名前 : ななし ID : H e 8 u l w w A L
白ちゃんレイプ！〜廃人と化した少年隊長〜

37 : 名前 : ななし ID : S O r 5 E 7 U r 9
今週判明 or 確定した事 :

・ 雛森 || 読書家 || 思い出の少女

・ 雛森が最終兵器彼女

・ 雛森に崩玉 in

・ 藍染の大攻勢が三日後

・ 一護が半人前 || 力が封印中

そろそろわた天関連の台詞が出てもいいんだがな :

44 : 名前 : ななし ID : m C L 8 D m 6 F e

◇◇ 37

雛森さんの過去関連

SS裏切り時もヨン様言ってたけど

49 : 名前 : ななし ID : K w 7 n 0 x Y e a

◇◇ 37

わた天の台詞はカツコいい言い回しっただけじゃないよね絶対

58 : 名前 : ななし ID : t y z l m 5 7 u 8

◇◇ 37

雛森が十刃を使ってるの雑なのか大切なのかようわからん

回収遅れてたらルピとか死んでたし大切にはしてるんだらうけど

あ、片腕グリムジョー出撃は藍染命令だっけ？

71 : 名前 : ななし ID : 0 P o t e Q j r +

◇◇ 58

あのGJJJまで雛森さんに素直に従ってたのなんか笑った

あれは桃ちゃんハンバーグキメてますわ

49 : 名前 : ななし ID : m j M f n p 2 x 2

◇◇ 37

大攻勢三日後ってシロちゃん戦闘参加無理じゃね…？

62：名前：ななし ID：r x u Y B D A 9 W

◇◇ 49

自爆した雛森さんもヤバそう

まあ三日あれば織姫か卯ノ花さん辺りがどうにかするよ

53：名前：ななし ID：m z 4 U r K l + 4

◇◇ 37

一護三日で藍染レベルまで強くなれ…：…なれる？

67：名前：ななし ID：M a W 9 p p A n 7

◇◇ 53

ハゲ戦と白哉戦は比較してそれくらい成長してたし…

27：名前：ななし ID：T h c l b + 0 0 q

そろそろ桃ちゃんシロちゃんに救いが欲しいです…

39：名前：ななし ID：a c 3 u 4 K 9 e t

◇◇ 27

それはこれより来たる最悪の悪夢の始まりに過ぎなかった…（預言

*空座町決戦く雛森参戦回

（本編73く74話「登場く軍勢イイイイ！」

【BLEACH】雛森桃、完堕ち

2：名前：ななし ID：b 5 Z n b 8 0 c U

し っ て た

5：名前：ななし ID：F w v q i 3 2 w +

ああ、清楚な桃ちゃんがあんなに悪そうな顔しちゃって…

7：名前：ななし ID：f 0 G 4 l x Q O 9

おう今週のゲス森の顔見て興奮した奴素直に手挙げるんだよあくし

ろよ

14 : 名前 : ななし ID : oPWRoahk

◇◇7

ごめん今忙しくて挙手無理(シコシコ)

19 : 名前 : ななし ID : rHM+5smSe

◇◇7

僕は脇腹ゴリツた乱菊さんの白目の方が好き!

30 : 名前 : ななし ID : sSlrgt73

◇◇7

ゲス桃はまだ無傷だろ、蟹沢さんの「あギイツ…!?!」挙げないとかお前さてはニワカだな?

10 : 名前 : ななし ID : rHM+5smSe

おらおら日番谷きゅん参戦できたし見とけよ見とけよ

18 : 名前 : ななし ID : PeEWFWEu+

◇◇10

マジでこつから何も出来ないと言完全には雛森雛森言うだけの機械で終わるから頑張つて欲しい。

31 : 名前 : ななし ID : rHM+5smSe

◇◇10

流行りのオサレ値も底辺のままやしなあ

シロちゃんに雛森さんの洗脳解けるんやろか:

40 : 名前 : ななし ID : 5SpotEzyt

◇◇31

今シロちゃんのおサレポイントどれくらい?

58 : 名前 : ななし ID : sSlrgt73

◇◇31

一応GJJJ襲撃回で恋次とかの中で一人だけ限定霊印状態でもシャウロン押してたから底辺ではない

あとはカウンターOSSRのネタが豊富にあるからルキアみたいな特効で一発逆転は全然ある

61 : 名前 : ななし ID : mCL8Dm6Fe

◇◇ 3 1

弱くはないのにとにかく先に卍解したがるクセを治さないといつまで経ってもカマセで終わる

7 0 : 名前 : ななし ID : g6N9w3ZaC

◇◇ 6 1

もうハリベル戦で卍解使ってひよ里たちまで援軍来たのにハリベル倒せなかったんですがそれは…

6 8 : 名前 : ななし ID : N0+p39xkb

◇◇ 3 1

オサレ値は詳しくしらんが◇◇ 6 1のルールがほぼ絶対なのは知ってる。

2 8 : 名前 : ななし ID : eeEWFweu+

悪堕ちヒロインは死のうが助かろうが最後は正氣に戻るから大丈夫！ (おめめぐるぐる)

* 雛森無双回

(本編76〜77話「変貌く悲愴イイイ！」)

【BLEACH】 最終兵器雛森

2 : 名前 : ななし ID : POR8wZGis

だから鯽で一对多は負けフラグだとあれほど！

1 5 : 名前 : ななし ID : xsbOYErlj

◇◇ 2

オサレバトルシステム否定派の俺でも予想付いたわ

3 : 名前 : ななし ID : YaORl3Lz2

雛森クツソ強つつつつつつつつつつよ!!!

6 : 名前 : ななし ID : R O W 3 D m 5 z 2

こいつに崩玉上げるくらいなら自分に使えよヨン様 w w w w

1 2 : 名前 : ななし ID : U n W W 4 0 S n E

もうこれ浦原結界壊れたら零番隊呼ぶしかねえだろ

1 2 1 : 名前 : ななし ID : B w H A i b 2 z w

◇◇ 1 2

あの雛森って崩玉パワー封じられてアレでしょ？

やっぱ少年漫画は特殊鍛錬法補正やべーな：

1 9 : 名前 : ななし ID : E 0 r 4 W v T + i

雛森の卍解って絶対あの鈴で殴る技ありそう。そっちの方が強そう

5 9 : 名前 : ななし ID : E n + 1 o U X 5 2

◇◇ 1 9

あれ鳴らして炎出すんじゃないんかい！

6 0 : 名前 : ななし ID : j A X n 6 P m 2 e

◇◇ 1 9

最後にやべー鳥いっぱい出した技の霊圧全部ぶっこんで叩くとか
ですかね

骨も残らなさそう：

6 1 : 名前 : ななし ID : H w 5 n Q v v 9 4

◇◇ 1 9

結局あれなんなの？

オサレ要素？

7 3 : 名前 : ななし ID : h U d 0 Y 2 d 4 b

◇◇ 6 1

鈴見ずに七支刀の光見て「三つか」言ってるからなめプゲージ

8 1 : 名前 : ななし ID : i O d E R n 3 T x

◇◇ 7 3

あれよく和風ゲーで見るけど七支刀って言うんだ

1 2 9 : 名前 : ななし ID : X 4 i p P l 3 f r

◇◇ 7 3

半分以下であれかよって思ったけど多分全部解放した時に倍どこ

ろじゃないパワーアップしそう
そのほうがオサレだから

49：名前：ななし ID：iKRRA.jKlUZ
「羽衣」紅梅鈴鈴…

…ヨン様、貴方まさか…

51：名前：ななし ID：pW0gAnEXv

◇◇49

わた天時の天女の詩吟がくの台詞がただのオサレ要素じゃなかった説はずつと考察されてるゾ

スレではようやく謎だった天女ワードが確定したと盛り上がった
る

111：名前：ななし ID：nSfGPCfp g

◇◇49

立てる天がないとか言ってるから霊王繋がり？

そもそも霊王も出てる情報過去編の零番隊くらいだしよくわが
ね

128：名前：ななし ID：OuN4+SH27

◇◇49

天女は雛森で詩吟が不明

そして「我ら道化の叙事詩」

詩吟は叙事詩をオサレに言い回し変えただけと考えれば「雛森が藍染
含む全死神達を操ってる」って意味になるな

ここに来て雛森ヤバイ説が一気に主流に上りそうで今後の展開に目
が離せない

132：名前：ななし ID：gW07IOMwk

◇◇110

詩吟は漢字の意味からだとその叙事詩を吟遊詩人みたいに語って
るってことになる

ヨン様は叙事詩の道化でいるのが嫌で尸魂界を離反した

…あの執拗な雛森虐めに実は正当性があったんだよ！（AA略

174 : 名前 : ななし ID : G v E x D r n w 6

◇◇ 110

憎き天女の雛森を殺さず部下にしてる理由がわけわかめ

199 : 名前 : ななし ID : 2 t K s 8 3 Z n p

◇◇ 174

ヨン様なら殺さず天女を何かに利用しようとするはず

そして勢い余って桃ちゃん虐めて悦ってるのが今回の空座町決戦
…?

216 : 名前 : ななし ID : + Y + Z X S T a l

◇◇ 199

その桃虐のとぼっちりでシロちゃんに核兵器レベルの流れ弾飛んで
るんですが…

81 : 名前 : ななし ID : O t 1 + T O b U s

あの闇堕ち時の黒い霊圧が「天女の霊圧」なのか「崩玉の深化」な
か…

最初のゲス森も洗脳じゃなくて天女化の初期段階とかなりそう

113 : 名前 : ななし ID : k a 2 9 z u h 6 q

◇◇ 81

ゲス森ちゃん分身の使い方とかなんか頑張ってヨン様の真似して
る感じして微笑ましいんだよなw

120 : 名前 : ななし ID : P Q + l c y A G o

◇◇ 81

虚圏サイドでちよくちよく挟まった十刃メンバーとの回想も今
思えば天女フラグに見える…

131 : 名前 : ななし ID : l 0 d k 6 n w s 4

◇◇ 120

あの雛森さん今と違って母性的というか、子供一護の記憶の雛森と
被るんよね

やっぱあっちのママ森が主人格で今の悲劇ヒロイン森がイレギュ
ラーだったりすんのか？

407 : 名前 : ななし ID : I 0 3 N d z w 2 6

ターン

マジはあなただけど

28：名前：ななし ID：TtT4PzMQs

◇22

いや雛森は味方化フラグ立ちまくってたからハリベる事は絶対ないと思ってた：

やべーよもうヨン様倒せる戦力が零番隊しかねえ：

35：名前：ななし ID：Lov3Mtlng

◇28

こっから新キャラ増やしてどうやって感情移入すればいいんですかね

そいつが藍染倒すとか今まで何やって来たのって話ですよ

それともまた一護が主人公補正でウルキオラ倒したように一人で藍染まで倒すんですか？

何回同じことすりや気が済むんだよ

69：名前：ななし ID：Cr3Eden6w

◇35

知らん

少なくとも浦原前任の元隊長なら名前既出だし出ても許される
十二番隊やし超技術で一護修行手伝うとかならそこまで荒れんやろ

72：名前：ななし ID：H0j1+w3ct

◇35

雛森死んだら一護覚醒の伏線である封印が解けないから雛森が死ぬことは絶対ないとだけ言っておく

91：名前：ななし ID：opl9Jy6lk

◇69

封印は主人公補正で「雛森さんの想い…！」とかで壊すとオサレポイント稼げるから雛森が死ぬことは普通にあるぞ

ここはブリーチの世界だ、オサレは何よりも優先される

64：名前：ななし ID：rHyOrvgkM

これはヨン様マジで雛森くっそ嫌ってる展開あるな

崩玉との融合でガチ天女化の実験的なのしてたけど失敗したので処分したか

いやそもそも天女化って何だよって話だけどき

107 : 名前 : ななし ID : pa1Yu5+e1

◇◇ 64

でもそうすると何で雛森はあんなにヒロインムーブしてて天女的な雰囲気ないのかが???

135 : 名前 : ななし ID : GeOrgr3s

◇◇ 107

別にヒロインムーブと天女ムーブは両立できるやろ

例の詩吟とやらも雛森個人の意志と違う場合は「悲劇の力を持って生まれた少女」で十分ヒロインだし、まだ片鱗のみか本人が無自覚とかでも同じよ

114 : 名前 : ななし ID : PaK+z9z14

◇◇ 64

なんとなくわかって来たな。

藍染は雛森に何かを見出しててそれを本人に自覚させないし覚醒させようとしてる

崩玉はあくまでそれを後押しするだけで、実際は覚醒した雛森の天女的な何かを体内の崩玉に取り込ませて最後に崩玉ごと回収しようとしてる。

その崩玉と今度は藍染自身が融合したら自身が天に行ける…的な野望

153 : 名前 : ななし ID : VO f98dHro

◇◇ 114

これ

175 : 名前 : ななし ID : uJNlnz8fH

◇◇ 114

それ別に尸魂界裏切る意味なくね？

いや、死神と戦わせなきゃ覚醒できないとかそんな設定あるなら知

らんけど

217 : 名前 : ななし ID : f0G4lxQO9

◇◇ 175

なるべく大勢の隊長クラスの死神の霊圧を体に受けなきやだめとか？

：わりとありそうに思えてきた

182 : 名前 : ななし ID : SC97nd7gw

◇◇ 114

そんなに大事だったらあんな簡単にぶっ刺して処分せんわ

215 : 名前 : ななし ID : DoVX24yCL

◇◇ 114

：もしかして雛森さんの天女要素って「一護の中の仮面少女」では？
雛森さんが無垢な女の子っぽいムーブしてるのは天女要素をそつちに避難させてただの死神になってるからとか…

これだわ（自画自賛）

244 : 名前 : ななし ID : rTqEf38dA

◇◇ 215

なん…だど…

281 : 名前 : ななし ID : EqO9vlhrz

◇◇ 215

ギアスのC・C. 的な？

そうだとするとヨン様がただの道化に

：あの道化の叙事詩台詞は未来の自分を見越した高度な自虐だった…？

308 : 名前 : ななし ID : ac3u4Kwet

ヨン様の暴拳のせいで平和な桃ちゃんスレ民がアンチや考察スレのような殺伐空気に…

◇◇ 36

流星に今回は笑えなかった

66 : 名前 : ななし ID : T k a t O q b X E

◇◇ 28

織姫って死者蘇生できたっけ？

メノリ復活してたしワンチャンないかな…あつて

91 : 名前 : ななし ID : t 3 9 I 4 O 3 x z

◇◇ 66

双天帰盾でもシロちゃんの「心の破壊」の事象は拒絶できないんですよ…

93 : 名前 : ななし ID : c w 2 t y O e 4 c

◇◇ 66

悲劇としてはある意味もう完成してるから復活させるかわからん
こんなに先が読めない漫画久々や

85 : 名前 : ななし ID : t P 2 O G Q B I 2

◇◇ 28

今までルキアとか乱菊さんとか蟹沢さんとか織姫とかロリメノリ
とかでリヨナ耐性つけられてなければ即死だった

169 : 名前 : ななし ID : o 2 T 7 G l n M w

◇◇ 85

…全てはこの時のための予行演習？

121 : 名前 : ななし ID : B 5 s A 9 o e + W

◇◇ 36

雛森が消えた時点で嫌な予感はしてたんよ…

シロちゃんもう一生モンのトラウマやん…

これから剣を握る度に雛森を刺した感触を思い出して…うう

134 : 名前 : ななし ID : d R k 7 o E n V u

◇◇ 36

ヨン様の「桃の心と体は私のもの」台詞は嘘でも子供に言っている台
詞ではないんですが

初恋幼馴染を傷物にされて怒るシロちゃん自身が彼女を傷物（物理）

にってしまうなんて：

172：名前：ななし ID：L1bX2yRwP

◇◇ 134

ヨン様がそつち方面でもゲスとか嘘だろって読み直したら「心と」も入ってて普通に合意の上で安心した

：いや合意でもダメだろ！

197：名前：ななし ID：oHH0s6n4c

◇◇ 134

あの妙な言い回しとゲス顔絶対誤解させようとしてるわ

260：名前：ななし ID：U+nNahiv

◇◇ 197

あれなかったらシロちゃんもうちよい冷静だったろと思ひ返したら大して変わらなさそうなのシロちゃんマジシロちゃん

170：名前：ななし ID：p230osa95

まあ少年誌やし女の子キャラが大人の階段上る夢をぶち壊すような胸糞展開はないやろ（内臓ぶちまけてる乱菊さんから目を逸らしながら

199：名前：ななし ID：rY2aLisoa

◇◇ 170

その当人の雛森さんが大人の階段どころかあの世の階段上りきったガチ胸糞展開なんですが：

210：名前：ななし ID：WavvA9Z0k

◇◇ 170

それを狙ってる変態十刃が一人虚圏で殺られたフリして潜伏してるんだよなあ

237：名前：ななし ID：00uqLfg4m

◇◇ 210

THE・エロアポロさんといいヨン様といい桃ちゃんクソ男に好かれすぎでは？

シロちゃんも虐められすぎてヤンデレ一歩手前だし一護は女落しまくってるし

…やっぱりここは誠実な僕が雛森君に相応しいよ！

226 : 名前 : ななし ID : K2H9ervzo

雛森さんゲスつたり感情ない兵器化したりしてたけど、やっぱり本心ではシロちゃんの事ずっと大切に思ってたんだな：

262 : 名前 : ななし ID : sI9RHG2Ie

◇◇ 226

でもね、桃ちゃん

不可抗力で刺した幼馴染相手に「ごめんね、大好きだよ」って言い残して死ぬのは一生ものの傷になるから止めようね？（手遅れ）

283 : 名前 : ななし ID : oantOviX4

◇◇ 262

シロちゃん多分この戦争勝とうが負けようが実家引っ込んで一生隠者生活しそう：

301 : 名前 : ななし ID : tk6opw3dp

◇◇ 262

「こうなるんじゃないかって思ってた」とか「あなたは生きて」とか「近付いたらあなたも倒す」とか

雛森さん自分が嘆きたいの我慢しながら健気にシロちゃん思いやってるのに言う事為す事全部シロちゃんの急所決ってるのホンマ

…

194 : 名前 : ななし ID : mp19xUr85

ここまで周到に日番谷に雛森殺させようとしてるのを見ると天女覚醒には最も親しい者に殺される絶望感が必要とか条件ありそう

241 : 名前 : ななし ID : yOe4Nc91e

◇◇ 194

まさか今までの悲劇も全部このための準備段階で、次号に天女覚醒

…

279 : 名前 : ななし ID : fuUn+2g7a

◇◇ 194

ヨン様一人だけニッコニコなの笑った

62：名前：ななし ID：gavp9tlc3

≪26

僕知ってるよ！

この後桃ちゃんが全部合体して沢山翅が生えた全裸えちえち巨人になるんでしょ！

11：名前：ななし ID：paIK7ttl+

これがブリーチの天女かあ：（白目

29：名前：ななし ID：TWZUsvuVY

ネタだった天女がガチだった件

31：名前：ななし ID：329ufh2dk

一人くらいあの桃ちゃん貰ってもバレねえだろ：コソコソ

74：名前：ななし ID：3monf5tep

≪31

ヨン様「ギン、殺るんだ」

60：名前：ななし ID：Tndb8zw4q

唐突に始まったレイド戦にビビった

85：名前：ななし ID：QHKT4p6cw

≪60

しかも最強戦力藍染陣営が護衛してるとか言う無理ゲー

119：名前：ななし ID：crbAaKRvh

≪60

浮竹を瞬殺した恐らく破面軍最強であるワンダーワイスが山爺足止めしてるし

多分完全虚化一護が加わっても護廷十三隊勝てない

72：名前：ななし ID：ty2zb4yuf

子供時代に化物と呼ばれて孤独だった所を悪い男に拾われ、無自覚に悪事の片棒を担がされ、

大切な幼馴染や仲間達と敵対させられて、

体の中に核融合炉的な超危険物を埋め込まれ、

そのせいで幼馴染巻き込んで自爆したり洗脳されたり、

幼馴染を殺したくないと寸前で辛うじて正気に戻ったら胸をぶっ刺され、

しかも止めに大切な幼馴染にも同じくぶっ刺され、
拳句の果てに普通の女の子なら卒倒するほどの化物に変化させられてしまう

シロちゃんばかり注目されるけど雛森さんも十分すぎるくらい悲惨だからね？

107：名前：ななし ID：FMYtXzWBm

◇◇72

正直正気に戻った時不覚にも涙出た

その後ヨン様に刺されて「嘘だろ…」って口開いて

そしてシロちゃんに刺されて「えつぐ…」ってマジ声出た

111：名前：ななし ID：+4gDlzeoQ

◇◇72

どんどん堕ちて行ってる感じが逆に最後救われる伏線に見えて安心してる

：救われるよね？

129：名前：ななし ID：O3bSkxq5e

◇◇72

雛森さんは無双しすぎてなんか可哀想ってよりハッチとの鬼道戦かっけえええ卍解強ええええって感じが強い

でもシロちゃんは…：うっ

193：名前：ななし ID：xsrbMbJyw

◇◇129

シロちゃんの不幸伝説は雛森さんの倍くらいあるから…

422：名前：ななし ID：lk59fj3ht

◇◇129

日番谷冬獅郎の不幸伝説

幼い頃お婆ちゃんを冷氣霊圧で殺しかける

初恋の年上幼馴染はイケメン眼鏡隊長に首ったけ

頑張つて隊長になって幼馴染を振り向かせようとするも効果なし
旅禍襲撃時に何かに悩んでる彼女を守ろうと頑張るも悉く裏目に
その幼馴染自身が敵勢力で裏切りの葛藤に苦しんでいる事を察せず
隊長になって守ると誓った幼馴染が自分より遥かに強く鬼道一つで
瞬殺され

「どんだん幼馴染が加担していた悪事が明かされ、彼女は「あなたは生きて」と死ぬ気らしく

その陰で何やら例の旅禍のチンピラ風イケメンともイイ感じで

再会時に出来なかった強引に気持ち伝えるハグも幼馴染の心を乱し
霊圧自爆させて心身共に傷つけてしまう。自分は片腕片目を失う

何とか三日で回復して幼馴染の姫騎士ポジの十刃と戦うも援軍がありながら倒せず

戦場に現れた幼馴染は洗脳でゲス化、その後感情を捨てた兵器化

限界を超えて卍解の最終奥義を試すも成すすべなく幼馴染相手に惨敗してしまい

地べたから必死に幼馴染の良心に訴えかけ何とか正気に戻す事に成功するも敵親玉が彼女を目の前で処分

激情に立ち上がり挑むも幾度の悪辣な挑発で我を忘れ、結果卑劣な罠にハマり自ら幼馴染を突き刺して殺してしまう

幼馴染の最期の言葉は「ごめんね、大好きだよ」

そして最後はショックで幼児退行してた所に胡散臭い科学者が提示した怪しい技術に縋ってしまい、自分の腕の中で美少女年上幼馴染が無数に分裂して融合した醜悪な巨大怪物に変化

460 : 名前 : ななし ID : F o r T 8 n l 0 z

◇◇ 422

ヒエツ :

466 : 名前 : ななし ID : 5 2 c T g d K 8 5

◇◇ 422

ホントに雛森の倍以上あってワロタ

ワロタ :

495 : 名前 : ななし ID : k A n 2 9 u N a +

36 : 名前 : ななしのどくしや ID : ydyEmhrE4

≪ 12

貰い泣きするくらい良いシーンだった

頑張ったね、シロちゃん：

53 : 名前 : ななしのどくしや ID : pEtYp3gz s

≪ 12

ただ雛森の名前叫んだだけじゃ…(ぼそつ

67 : 名前 : ななしのどくしや ID : p02WnFiz z

≪ 53

これまではその名前叫ぶことすら出来なかったんだよ！

45 : 名前 : ななしのどくしや ID : YIjnnprbp

≪ 12

全読者から完全に親目線で愛でられる日番谷きゅんかわいい

17 : 名前 : ななし ID : iHvQ7UX3C

一護がめつちや少年ジャンプ主人公っぽかった

39 : 名前 : ななし ID : fGi0Ln5ls

≪ 17

シロちゃんに「叫ぶんだよ！」の所で斬月初始解イベント回想する
のいいよね

グリムジヨ一戦以来のイケメンで久々にワクワクしたわ

47 : 名前 : ななし ID : m5F6lJ/FM

よ”か”った”ね”え”え”え”え”え”シ”ロ”ち”ゃん”ん”
ん”ん”ん!!!”

53 : 名前 : ななし ID : pAvM0s4li

よし！後はエンディングで日雛結婚式だな！

28 : 名前 : ななし ID : tWl3Dn6xL

≪ 53

何も終わってないんですが????

35 : 名前 : ななし ID : a33u4p+ tq

≪ 53

奪われたもの取り返したただけなんだよなあ：

69 : 名前 : ななし ID : OCp8Dm2F9

≪ 53

これからおめキラツキラなラスボスが待ってるんだよなあ

91 : 名前 : ななし ID : 0LDtP3oAg

≪ 53

あれ？

雛森さん気絶中って事はヨン様戦まさか今の生き残りでやるの？

……、…頼んだぞ一護!!

341 : 名前 : ななし ID : Tlznce+lb

≪ 91

今のオサレ主人公一護なら藍染にも勝てそう(勝てるとは言ってな

い

64 : 名前 : ななし ID : BdVw4r86g

てかこれ藍染的にアカンのとちやう？

崩玉に天女要素喰わせて自分が崩玉と融合するつもりなら天女要素成仏したら失敗だろ

：シロちゃんもしかして超ファインプレー？

107 : 名前 : ななし ID : mQfpKAZy4

≪ 64

藍染最後のコマだと変わらずニッコニコで天女成仏を見送ってるのよね

考察自体が間違ってるか、まだ雛森の体内に崩玉残ってるかのどっちかだと思う

135 : 名前 : ななし ID : HpF3TZCy

≪ 64

まずその仮説が一番整合性取れるからここで支持されてきたただけだし

262 : 名前 : ななし ID : soioV7uXF

≪ 64

ヨン様ニッコニコはもしかして一護がヒナモリスと接触した時に一護の中の仮面雛森の存在に気付いたからとか？

あつちが本体の天女の可能性また出てきたな

283 : 名前 : ななし ID : oHrqY8c2d

◇◇ 262

多分あのヒナモリスは首を探すシシガミさま的な胴体で首が一護の仮面雛森

一護だけがヒナモリスの感情わかってたのもメインカメラの仮面雛森を持つてるから

と今思い付いた

301 : 名前 : ななし ID : t2ak60vcj

◇◇ 262

あーなるほど

雛森さん初登場時から精神が不安定だったりメンタル強度がああやべー実力に釣り合ってたのはそういう…

194 : 名前 : ななし ID : m3ndi54dv

◇◇ 262

いやだから仮面雛森が天女要素だったら藍染は子供一護と雛森が接触する六年前の時点では完全体天女雛森を持ってた事になるから成立しねえよバカ

241 : 名前 : ななし ID : A2raSn581

◇◇ 194

じっくり覚醒させようとしたのに六年前に雛森が子供一護に天女要素託したからこんな大規模な戦争起こして無理やり覚醒させようとしたのでは？

浦原の崩玉を手に入れるためにも必要だったのでは?!

間抜けは見つかつたようですね^^

279 : 名前 : ななし ID : kamoi21wo

そういえば平子たちの過去編って100年前だから50年前の雛森とは関係ないんだつたな

平子たちは当時の藍染の野望を阻止するために戦つて

藍染自身は50年前の雛森との出会いで天女存在を知って、その詩吟から逃れようと尸魂界に戦争仕掛けてる

…んん？こんがらがって来た

341：名前：ななし ID：63ksr5jxw
◇◇194

雛森を部下にしてから確実に方針転換してるはず

100年前の野望は多分平子や浦原用のミスリード要因として表面的にキープしてて、本命は天女の覚醒&支配だろうな

104：名前：ななし ID：KYLo40znq

雛森さんが救われたので心置きなく考察が出来るこの幸せ…

*その後の展開

(本編・おまけ81話以後)

【BLEACH】崩玉、二つあった

2：名前：ななし ID：e8SAMulgz
超展開すぎて頭追い付かない

4：名前：ななし ID：x+AnTQs+f
外道ヨン様が流石すぎて

5：名前：ななし ID：uBDM8ox5r
これ藍染どうやって倒すん？

14：名前：ななし ID：2602n48xr
うつわ…

17：名前：ななし ID：TYk6lm5nz
雛森さん普通にシロちゃんよりヤバイ目に遭ってた

45：名前：ななしのどくしや ID：kI38baowk
◇◇17

獅界の技術のヤバさは改造魂魄の話から出てて今回で極まった感

じ

51 : 名前 : ななしのどくしや ID : tkAh2nkfa

◇◇ 45

ご丁寧に雛森レベルの強いクローンは相当外道な事しないと作れないって言ってる所が予防線張ってて草

マユリ様もネム作るのが限界だしな

47 : 名前 : ななしのどくしや ID : Wg03q0dnp

◇◇ 17

かなり違うけど金田一の五芒星村思い出した

59 : 名前 : ななしのどくしや ID : nH0w+i1+E

つまりあの成仏した雛森たちが雛森崩玉を構成してたクローンだったってこと？

73 : 名前 : ななし ID : utV472m7G

◇◇ 59

そう

47 : 名前 : ななし ID : M0383628c

ますますわからなくなつたな

雛森に崩玉を与えたのが単純に融合実験だったのはわかったけど、成仏した時の笑顔が意味不

あとあの集合体が天女なのかただ浦原パルプンテで崩玉が暴走したのかどつちだろ

62 : 名前 : ななし ID : wNwEae+0b

◇◇ 47

回りにくいこと大好きヨン様がただの融合実験で済ませるとは思えない

あの成仏したクローンたちが天女要素をなんやかんやしてたに一万ペリカ

83 : 名前 : ななし ID : 4IpTBX8wV

◇◇ 62

藍染があんなニッコニコなのは予想外の面白い出来事があった時だけだし、おそらくあれで天女要素の排除に予想外な成功したんじゃない

ね？

抽出だと回収しないといけないからあんな呑気にお喋りしないやろ

66 : 名前 : ななし ID : f f 9 v 2 0 D i 5

◇◇ 47

クローン一体作るのにバラバラにパーツ生み出して合体とか相当面倒な事してるし確実に天女関係も入ってると思う

74 : 名前 : ななし ID : + 3 f H S + i K a

◇◇ 47

集合体は鯉らしくない別ベクトルのグロさがあつて普通に崩玉が分離したとかで済ませるのは惜しい

くつそキモイ怪物を天使とか天女とか美しい言葉で呼ぶのはこの手の定番や

…あ、桃ちゃん集合体はえっち可愛いですよ？

205 : 名前 : ななし ID : m E S p i D R v V

散々引つ張つた一護の秘密ネタを露骨に臭わせてきたな
市丸の門での台詞もやっぱりただのオサレ要素じゃなかったか…

223 : 名前 : ななし ID : o G l f v 7 V m t

◇◇ 205

生まれる前からってのは多分一護父が人間の一護母と結婚した事を知っててそこから人間と死神のハーフが生まれるって想定してたからよね

256 : 名前 : ななし ID : V U 2 E Q S H 9 1

◇◇ 223

これ虚化能力に目を付けてるんだとしたら遺伝元は一護マツマ側やろな

パツパは仮面の軍勢ちゃうしマツマがチャドみたいな虚由来の異能持ちでそれが一護に遺伝して虚化の元になった感じか

276：名前：ななし ID：ruYNlvOPP

◇◇256

まあ明らかにグランドフィッシャー見えてるっぽかったし死神とも結婚してるし少なくとも普通の人間ではない

231：名前：ななし ID：YARIPbYZ9

◇◇205

なんで雛森は一護の虚化の力を知ってたのかって疑問がスルーされてきたけど、黒崎夫妻の存在を知ってたなら一護みたいなた才が生まれる事を想定して当然ですわ

272：名前：ななし ID：notjbtJur

桃ちゃんそりや無数の自分のクローン作られてそれ磨り潰して賢者の石作られて体の中に埋め込まれたらあんな悲劇ヒロインムーブするしかないわ…

295：名前：ななし ID：RhfcpiT3R

◇◇272

前回時点で十分だったけどこれは病むわ

308：名前：ななし ID：Q9iZ26kU8

◇◇272

シヨタ一護に見せたママ味もこれで性格変わったのかも

342：名前：ななし ID：ZPJIfdcVI

◇◇272

藍染の悪役外道っぷりが天元突破しててなんか一護勝てそうな気がしてきた

360：名前：ななし ID：uEZD73fI5

ホンマこれシロちゃんに聞かせなくて浦原さんGJだわ…

【BLEACH】 黒崎一護、生まれる前からヨン様の玩具だった

2 : 名前 : ななし ID : e O A e Z z 6 P 8
はくくくくなるほどそのパターンね

9 : 名前 : ななし ID : D X G 7 y 5 g s 2
藍染のラスボスっぷりが眩しすぎて直視できない

17 : 名前 : ななし ID : Y q Y J N R 4 O I
これはキツいわ

18 : 名前 : ななし ID : G j V / N I p G t
大丈夫？一護もう立ち直れんくない…？

29 : 名前 : ななし ID : i S V w k O 7 P l
◇◇ 18

それでも立ち上がるのが主人公の定めさ
君の持つ主人公補正は全て私の進化の踏み台となるべく私が与えた
ものだがね？（暗黒微笑）

34 : 名前 : ななし ID : 0 f / I J X z 0 8
◇◇ 29

間違うことなきラスボス

48 : 名前 : ななし ID : G B d 6 S v X O T

◇◇ 29

やだかつこいいい：

80：名前：ななし ID：X9vFWIPjd

◇◇ 29

……でも負ける時一護に想定以上の成長されて「この私が人間なんかにー！」とかみつともなくキレ散らかすんでしょ？（小声）

お兄さんたち詳しいんだから

66：名前：ななし ID：usudWCxqt

一護あかんわ、シロちゃんですら霞むレベルの鯽最不憫キャラに格上げ（？）せな

82：名前：ななし ID：C14HOPER4

雛森が普通にクソビツチだった件について

一護とのフラグは実験動物の成長経過の観察だったんやな…

91：名前：ななし ID：+TUGWX/VN

◇◇ 82

優しい顔でシヨタを誑かしておきながら上司の食い物になるよう育ててたわけですね！

最低です見損ないました！

98：名前：ななし ID：OCTp3CNLO

◇◇ 82

ガチでジャンプ史上有数のクソヒロイン認定が決まった瞬間だった

101：名前：ななし ID：6ukP5oM7b

◇◇ 82

この書き込みの後アンチスレ移住するわ

今まで楽しかったよ

96 : 名前 : ななし ID : s y P p K q 6 + R
雛森関連がこれで終わりとは思えない

「抜け殻」 つてもうガチなやつやん

107 : 名前 : ななし ID : a r u 5 D r V q p

◇◇ 96

やっぱりあのクローンただ成仏しただけじゃなかったんやな

110 : 名前 : ななし ID : S p M 8 n l g f g

◇◇ 96

シロちゃんの大量魂葬効いてなさそうだったし確定だろ

126 : 名前 : ななし ID : 2 A + g Z + h m 5

◇◇ 96

でもあれで天女要素抽出されてたなら放置してる意味はなんだ？
崩玉進化はともかく王鍵のほうが優先順位高いっておかしくね？

133 : 名前 : ななし ID : z t H l c l e Q y

◇◇ 126

逆。

王鍵創造に空座町を滅ぼすよって一護を煽って覚醒させて自分の
崩玉進化の踏み台にしようとしてる

多分天女要素の回収はその後でやったほうがいいと考えてるんや
ろ

159 : 名前 : ななし ID : 2 A + g Z + h m 5

◇◇ 133

なるほど。確かにヨン様去り際一護のために穿界門あけっぱにし
てたわ

55 : 名前 : ななし ID : d9F5QFcyV
一 護 モ ゲ ロ

62 : 名前 : ななし ID : tkjQa18gr
本好きのおねえちゃんにずっと見守られたいだけの人生だった :

64 : 名前 : ななし ID : e1F4ccKVT
本好きのおねえちゃんのあられもない生足をガン見して恥ずかしそうに「もう子供じゃないから : 」って優しく注意してもらいたいだけの人生だった :

86 : 名前 : ななし ID : MVoyGLUMH
≪ 64
この台詞とページだけで100万回抜いたネコレ

94 : 名前 : ななし ID : mXJJ1xo9M
≪ 64
つまり子供だったらいいって事ですか!?
具体的に何歳までが「子供」なんですか!?
子供扱いしてるシロちゃんは50歳くらいなんですけどそれ以下なら俺でも子供になるってことですよね!?!?

65 : 名前 : ななし ID : hSONLhyRR
: すげえ、今まで生きててこれほど清々しい掌返しは初めて見たかもしれない

71 : 名前 : ななし ID : +dvn2sopR
≪ 65
戻ってきた :
アンチの国から戦士たちが帰ってきた : !

108 : 名前 : ななし ID : Codq7P8uY

◇◇ 65

スレ民の手首はインパクトドライバーってそれ一番言われてるから

113 : 名前 : ななし ID : a+F8j/Fs+

未来視とはまた考察スレが発狂しそうな因果系能力を…

132 : 名前 : ななし ID : Ws7y/nrFe

◇◇ 113

斬魄刀とも虚とも違うし織姫みたいな能力持ちの死神って事か
既に事象の拒絶なんてぶっ壊れ能力があるしまあ妥当な落とし所
だな

149 : 名前 : ななし ID : zytSNVgin

◇◇ 113

つまりわた天セリフは未来を見れる天女が好き勝手未来を改変で
きることを揶揄して自分達を道化や世界を叙事詩って言ってた訳か

168 : 名前 : ななし ID : EZfiE0smb

◇◇ 149

：なんか無理にオサレに言い回し選ぼうとして滑ってる感が凄い
だけど

そもそも未来見えてるにしては雛森動きが杜撰すぎるだろ

未来見えてるなら藍染が悪だって最初から知ってなきやおかしいわ

187 : 名前 : ななし ID : VLNLsvHEO

◇◇ 168

そんなの織姫が能力のわりにヒーラーしか出来てないのと同じで
「使い熟せてない」で終わりやん

あんなヒロインムーブ見せられてまだ裏があるとかもう手首千切

れるので勘弁してつかあさい

191 : 名前 : ななし ID : qO87khOYO

◇◇ 168

ヒロインポジのキャラにそんな合理性求めるのは酷やろ

ルキアなんて初期は平隊士設定だったのに気付いたらアローニー
口倒してたし

どこぞの三席なんて卍解まで使って従属官と相打ちがやつとだつ
たんだぞ！

193 : 名前 : ななし ID : JbKjwfdRO

◇◇ 168

上でも勘違いされてるけど「雛森≠本好き」だぞ、ちゃんと読め
未来視が出来るのは雛森の中にいた別人の本好きだけで雛森には無
理

斬月や白一護がずっと一護に秘密黙ってたみたいに本好きも雛森に
伝えてなかったんだろ

何でかは藍染対策が最有力

209 : 名前 : ななし ID : GxRMrB3CC

◇◇ 193

雛森さんが本好きのおねえちゃんとは別人って事は……

やったなシロちゃん！雛森さんは最初から君に一途やったんや！

218 : 名前 : ななし ID : r3rH2bIgr

◇◇ 193

雛森、本好き、読書家、仮面女……

雛森さんどこぞの腹ペコ騎士王ばりに顔面増殖してね？

229 : 名前 : ななし ID : f5G35Zh1W

◇◇ 218

お前の顔面増殖するよりマシやハゲ！

213：名前：ななし ID：llAo／ANrg
よかった：

雛森さんも本好きのおねえちゃんも今世代ジャンプ最悪ヒロイン
の汚名を頂戴せずに済んだんですね：

235：名前：ななし ID：UsmWAHue
おお、マジで綺麗に舞台整ったな
シロちゃんも雛森さんも本好きおねえちゃんも一応救われたし
これで一護が藍染倒せば万事解決やんけ

240：名前：ななし ID：+zBJyXYHf
さあ、もう残る不安は何もないぞ一護！

246：名前：ななし ID：wildImIVf
最後の月牙天衝楽しみや…！

250：名前：ななし ID：QyNnTTPgM
正直年甲斐も無くワクワクしてる

259：名前：ななし ID：gIuTR9w35
ようやくヨン様決戦DA！

274：名前：ななし ID：GUpztA02
うおおおおお行けえええええ一護おおおおお
!!!!!!

282：名前：ななし ID：BzavvUbu h

勝ちいや、勇者…！

君なら…勝てる！

エピソード

「——判決を言い渡す！」

ソウルソサエティ
尸魂界の中心、瀕霊廷。

あらゆる霊なる者を司る死神の司法的頂点にして最高意思決定機関『中央四十六室』。先の乱より再建された中央地下議事堂にてこの日、乱の首謀者の罪を問う裁判が開かれていた。

元五番隊隊長・藍染惣右介。

尸魂界反逆、禁忌の魂魄実験、そして最たるは四十六室虐殺。有史以来の大罪を犯した巨悪に下される刑もまた、勇気ある前例として永遠に三界の歴史に刻まれる判決だった。

「この者を地下監獄最下層・第八監獄『無間』にて二万年の投獄刑に処す!!」

『おお……!』

傍聴席の歓声に、悲願成就の笑みを深める四十の賢者と六の裁判官。その上位一席に座る小さな人影——阿万門ナユラは、無言で罪人を睨んでいた。

「…藍染惣右介」

四大貴族綱彌代家初代当主の傍系に当たり、大霊書回廊の筆頭司書を代々務める上級貴族“阿万門家”。長女のナユラが幼くして賢者の一席に就く羽目になった原因こそが、目の前で被告人とは思えぬ傲岸不遜な態度を貫く男だった。

「——ああ、済まない」

判決が下った時、どこか遠くを眺めるように目を細めていた藍染惣

右介が口を開いた。

「少々面白い事になつていたのでね、雑音と聞き逃してしまったようだ」

「貴様……」

暗にお前など眼中にないと述べる男に場が色めき立つ。その燻る火種へ、大罪人は気だるげに油を注いだ。

「して、忘憂の団欒は終わりかい？」

『……ッ!!』

一瞬の沈黙の後、議事堂内は怒り狂った貴族達の唾吐猿叫で溢れかえる。賢者の名に到底相応しくないそれらを一身に受ける渦中の男は、常の冷笑を浮かべる手間も惜しみ、まるで駄作の劇でも見ているような冷めた声で呟いた。

「……成程。役者未満の囃子はやし風情がこの私に”判決”か」

——些か、滑稽に映るな。

一瞬で頭に血が上る。ナユラは「父上の墓前で詫びろ！」と感情任せに立ち上がり、されど周囲の大人たちの比較にならない大罵詈雑言に思わず怯んで憤りを吐き出す事は叶わなかった。

「黙れ大逆人めがッ!!」

「おのれ、不死であるからと図に乗りおつて!」

「何をしている! さっさと眼と口にも拘束をかけるッ!!」

「反省の余地なし!! 刑を二万五千年に——」

「——!」

裁判が終わり、議事堂を後にしたナユラは精一杯の大股歩きで周囲に不機嫌を主張する。

新四十六室に就任して早一月、幼い身に阿万門家当主の責務は背負うにあまりに重かった。

亡き父はナユラに優しくだったが、決して良い貴族ではなかった。抱

いていた尊敬も引継ぎ時に見つけた数多くの汚職で粉々。憧れの四十六室もくだらない目先の保身を堅持するための茶番と知った今、大人の汚い世界に引き摺り込まれた哀れな童女は、政全てに対する嫌悪感で常にイライラしていた。

「——心を乱してはなりません、司書長」

ふと背後より聞き慣れた声が掛かり、ナユラは慌てて振り向く。相手は新四十六室就任の折に随分と世話になった中年の賢者だった。

「！おじさ——か、管ノ木殿……」

「ふふ、久しゅうございますな。愚息が瑠璃千代嬢と共に心配しておりました故、お顔を拝見せねばとお引止めした次第」

「瑠璃のやつが……」

同年代の友である霞大路家の令嬢。男の嫡男は友の婚約者であり、そのつながりで色々と甘えさせて貰った恩がある彼にナユラは恐縮する。

そんな管ノ木が本題に入ったのは十分程の談笑の後、緊張も解れた頃だった。

「時に司書長。私は午後の会議への出席は控えさせて貰いますが、貴女は如何か？」

「……さて、妙な事になっていると聞いておりますが」

やはりその話かと眉を顰めるナユラ。

彼女の言う”妙な事”とは先日通達があったもう一つの裁判の中止である。藍染惣右介と密接に関わっていたとある女死神の尋問が、突然取り止めとなった異例の一件だ。

不愉快そうなナユラを見た管ノ木は苦笑し、直後真剣な顔で彼女へ忠告した。

「司書長。老婆心ですがこの件に関わる事はお控えなされたほうがよろしいかと」

「なれど——」

「司書長」

管ノ木の無言の注意に童女は押し黙る。

「……ナユラ嬢、貴女は上級貴族”阿万門家”の当主とられたのです。

あらゆる言動に責任が宿る。あの会議に出席するとは即ち、決定に異議を唱えるのと同義に御座いますぞ」

「……」

「私も兄を藍染一派に奪われた身ゆえ、思う所は多う御座います。されど”君命”に背く貴族は貴族ではない。ナユラ嬢もゆめゆめお忘れ無き様」

最後にこちらを慰めるような、痛みを分かち合う悲しい笑みを浮かべ、男は一礼の後に去って行った。

童女はその背をバツが悪そうに見送る。

管ノ木の想いは些か筋違いだ。彼のように家族の死を悲しむ日々はとうの昔に過ぎていく。ナユラはただ喪失感の僅かな残滓と、藍染への正当な怒り、そして何より理想と現実の巨大な差異に気が立っているだけだ。

全ての死神の模範となる賢者。

青臭い子供の夢と言えどもそれまでだが、聡いナユラは管ノ木と同じく、此度の反逆騒動が自分達四十六室の不甲斐ない現状が招いた下々の革命である事に漠然と気付いていた。

この話はただ”藍染の凶行”だけで終わらせてはならない。筆頭司書でありながら自分達貴族の権威権力の大義正当性を一切知らないナユラは、第二第三の藍染が生まれぬよう、この機に世界の秩序の奥底に触れる決意を固めた。

「…爺、綱彌代本家に使いを出せ」

「ご当主様……？」

「ただの協力要請よ。あの情報通共の事だ、どうせ既に動いておろう」
迎えに来た家臣に指示を飛ばし、童女は牛車に腰を下ろして考える。

藍染惣右介は言っていた。”面白いことが起きた”、と。

何故知り得たのかはさておき、その台詞の意味にナユラが思い至った事柄は一つだけ。

神妙に「関わるな」と注意してくれた管ノ木とは袖を分かつ事になるが、阿万門家の当主がこの一件の真相を放置する事の方が問題だつ

た。

「私は大霊書回廊を預かる者として此度の特例の背景を知らねばならん」

そう、君命には背かない。ただ前例として経緯を調べるだけ。

「一体なぜ…」

——” 王属特務” が、ひなもりもも雛森桃を庇うのかをな。

瀨霊廷、護廷十三隊一番隊隊舎。

隊舎門へと続く廻廊を大股で進みながら、隊首羽織の少年——日番谷冬獅郎は胸中の暗い感情を霊圧ごと辺りに撒き散らしていた。

「…隊長、他隊の隊士達を威圧しないでください」

耳に届く副官の声で何とか気を落ち着かせたが、それでも憤懣は溜まったまま。理由は先程の隊首会にあった。

先日、護廷隊の隊長八名が破アランカル面軍の残党を支配下に置くべく虚ウエコムンド圏へ追撃した。これ以上の虚勢力の無秩序は三界の魂魄バランスに深刻な影響を齎すと、総隊長自ら率いた隊長部隊。

だがその結果、護廷隊は想定を遥かに凌駕する悪夢を見る。

『破面共が完全復活していただ?!』

『…ああ。どうやら崩玉の力で予め彼等を蘇生させる用意があったようだ』

作戦不参加だった冬獅郎にとっては全てが寝耳に水。奴等が生き
ているなら慕っていた雛森をまた奪いに来るのではと焦る少年だっ
たが、事態はそんな次元の話を優に超えていた。

——雛森桃の崩玉が自我を持ち、破面達を統率している。

それは涅マユリの上げた仮説。何やら特殊な製造方法で生み出さ
れたらしいあいつの崩玉は、人と同等以上の意志を、欲を、理性を持
ち、藍染の後釜に収まっている可能性が高い。更には三界のどれにも
属さない極めて稀有な「叫谷」きよたにを拠点としており、剩えあの零番隊と
何らかの協定を結ぶ程の重要な勢力へと成り上がっていた。

そしてその協定の一つであると思われるのが、霊王宮より下った雛
森桃の無罪判決。

『調べたが破面共が死にすぎたせいで随分尸魂界と現世の界間距離が
狭まっていたヨ。連中を蘇生させる事は零番隊も推奨している筈だ。
どちらの提案なのかは知らんがネ』

恐らく例の崩玉が「叫谷」へ移住したのは破面達を虚圏ウエコムンドから引き離
し、零番隊への半永久的な交渉材料とするため。あれほど大量の大虚メノス
の霊圧が虚圏から消えれば三界の魂魄バランスは大きく揺らぐ。

小娘ひなもり一人の去就を弄るだけで魂魄均衡を維持できるのなら、価値観
が神目線な零番隊は二つ返事で了承するだろう。裏切られたなら相
手を殺し、破面達を虚圏へ連れ戻す手間をかければ良いだけなのだか
ら。

また逆説的に例の「叫谷勢力」も零番隊を相手に度の過ぎた要求を
呑ませるのは難しい。

『まあ雛森桃の減刑は奴等の挨拶みたいなものだろうネ。零番隊から
何かしらの譲歩を引き出し、世界の一勢力と認めさせた。その事実が
外交上大事なのだヨ』

故に下部組織たる護廷十三隊が叫谷勢力へ攻勢をかける事は越権
行為となり、連中は尸魂界との戦争を終わらせるといふ目的を遂げ
た。そう涅マユリは推理していた。

『…よかろう。零番隊に確認を取った後、我等護廷十三隊はこの件より手を引く事とする』

総隊長が決断し、会議は終わった。

だが、誰もが胸の内に憤りを溜め込んでいる。

結果としてみれば裏切り者は捕らえ、護廷の勝利。殺してはならなかった敵も復活し、こちらの被害も死者無し。新たな敵指導者も三界の秩序に協力的な存在となった。

それでもあんな凱旋を見せられた後では、自分達こそが勝者なのだと誰も断言できなかつた。

そんな彼等の感情は当然冬獅郎も気付いている。彼もまた不満を抱く者の一人。自分ではなく零番隊が雛森を裏で庇護しているらしい話も勿論、自我を持つ崩玉の事など、彼女を取り巻く環境が極めてきな臭くなっている。

周囲の心無い者達はそのやり場のない憤りを雛森にぶつけるだろう。それは面子を潰された貴族共だけではなく、護廷十三隊も同じだ。

敵と通じているのではないか。一度裏切った者に忠誠心は期待出来るのか。雛森を調べれば敵の情報が手に入るのではないか。誰もが考える事だ。

そして何より。

孤独なあいつを守れるのは自分だけなのだ、微かな優越感を抱いてしまう子供な己自身が、冬獅郎は心底憎くて堪らなかつた。

瀨靈廷、護廷十三隊四番隊隊舎。

広大な敷地の端に、特別治療棟と呼ばれる離棟が佇んでいる。疫病や精神汚染、または政治的な理由など、通常の負傷者とは扱いが異なる患者のために設けられた施設だ。

五番隊と十番隊による物々しい警備が敷かれた離棟の門前では、四十六室の使者等と護廷隊隊士達の激しい口論が日夜繰り広げられていた。

「……松本、少し黙らせてこい。うるさくて仕事が出来ねえ」

その窓外の光景を背に、病室の机で書類に筆を走らせる冬獅郎は、隣のソファアールでごろごろしていた副官を部屋から叩き出した。

「ええ〜？ お貴族サマの御機嫌取りとか副隊長が当たる仕事じゃないですよ」

「嫌ならお前がこの溜まった隊士人事の書類を——」
「行つてきまゝすっ！」

あせあせと書類の山から逃げ出す松本乱菊を見送り、冬獅郎はやれやれと溜息を吐く。

時折塞ぎ込むものの、彼女の顔はどこか晴々としている。恐らく昔馴染みの市丸ギンとの蟠りを多少なりとも解せたのか。真相は別だと察しているが、副官本人から「逃亡する瀕死の市丸と流魂街で交戦し相討つた」と報告された以上見て見ぬフリをしてやるのが人情である。

もつとも苦笑しているのは松本もお互い様だろう。総隊長命令に割り込んでまで五番隊との合同警備任務を勝ち取つたのは、完全に冬獅郎の私情に由るものだ。

その私情の向く先にいる病室の主人の下へ、一人残された少年は歩み寄る。

「雛森……」

寝台に横たわっているのは、可憐な眠り姫。冬獅郎が命を賭して取り戻した大切な幼馴染——雛森桃だ。

あの地獄の日々が終わり、そろそろ一週間が経とうとしている。

四番隊隊長・卯ノ花烈直々の治療で雛森の傷は一つ残らず完治した。それでも彼女が目を覚まさないのは精神的な消耗、心の傷が大き

いからだと卯ノ花は言う。

あの時、死の縁にて雛森が零した本音を思い起こし、少年は沈鬱な気持ちでその白い手を握った。

——こうなると思ってた。

彼女が正気を取り戻した時、冬獅郎に助けを求めた時、そこにどれほど必死で強い想いがあったのか。その想いがまたしても裏切られ、続った救いそのものに胸を突き刺された時、あいつはどんな気持ちだったのか。

「…ッ」

ズチャ…と。少年の手に彼女を突き刺してしまった時の、あのおぞましい感触が想起される。一生忘れる事のない、最悪の悪夢。

どれ程謝罪を重ねようと決して許される事ではない。だけどきつと、こいつは…雛森桃はそれさえも許してしまうのだろう。

全てを諦めたような虚ろな目で、それでも自分を抱き締める無力な冬獅郎へ必死に笑顔を向け、「ごめんね、大好きだよ」と、少女は言った。

幼子を安心させるように”恨んでないよ”と、”辛くないよ”と、青褪める少年の心を少しでも軽くしようと、最後に少しでも良い思い出になるようにと、少女は微笑んだ。

もしかしたら、それは彼女の年上としての細やかな意地だったのかもしれない。残される弟分に姉の悲運を背負わせて堪えるものか。なんて、このアホ桃なら考えそうなことではないか。

「馬鹿野郎…」

少女の手を固く握り、冬獅郎は呟く。罵倒にしては随分と湿った、か細い声。

「あんな笑顔で…心が軽くなるワケ…：良い思い出になるワケねえだろ…」

不味い、ダメだ。ずっと蓋を閉じて抑え込んでいた想いが、見つけた小さな罅割れから外へ出ようと殺到していく。

「何が……ごめんね」だ……！　何が……お前は生きる」だ……ッ
溢れ出した感情が止まらない。

「何が……なにが……」

よせ、止めろ。冬獅郎は勝手に開く口を必死に閉じようとする。
だと言うのに。

「なにが……」大好きだよ……だ……」

止まらない。止まってくれない。

……そんな言葉、あんな時に聞きたくなかった。あんな血だらけで、
命の火が消える寸前の、最期の言葉のような形でなんて。

”大好き”、なんて。

そんなのずっと。

ずっと前から……

「——俺の台詞だ、馬鹿野郎……ッ」

擦れる悲鳴のようなその言葉が、二人きりの病室に溶けていく。ま
るで世界に新たな色を加えるかのように。

「何も……知らねえクセに……！　俺の気持ちなんて、全然……これっぽつ
ちも見てくれねえクセに……ッ」

一度口にしてからはもう止められなかった。

視界がじわりと滲み、握り締める雛森の手が微かに軋む。

「アホ桃のクセに……年上だからってカツコつけてんじやねえよ……！
俺のことガキ扱いしてんじやねえよ……！」

見つめる少女が水面のようにゆらゆらと揺れる。

「俺だって……！　俺だって……」

嫌と言うほど思い知らされた。何度助けようと手を伸ばしてもダ
メだった。取り戻せたのだから、黒崎一護に尻を叩かれてやっとだっ
た。

どんなに背伸びしようと、護ろうとしても、自分はいつまでもこい

つの頼りない弟分。藍染の言うように、所詮は雛森に”庇護される子供”だったのだ。

…だけど。

「こつち…見ろよ…」

だけど、今だけは。

「寝てちゃ…言えねえだろ…」

無防備なお前に寄り添い、誰よりも近くで護る今だけは。

「…俺にも…お前に…ッ」

—— “大 好 き” だ っ て

言 わ せ て く れ よ

お前を、ただの女として護る、一人の男なんだ…

室内に虚ろな沈黙が戻る。

積年の淀みを吐き出し、力なく項垂れる冬獅郎。あまりに惨めな、自分の情けなさを棚に上げた告白に羞恥と自己嫌悪が沸き上がる。

ホント、あの冬の月夜から何一つ成長していない。眠る女が相手でもこんなみつともない言葉しか送れないのかと臆病な己に溜息を吐き、涙を拭った少年は最後にもう一度この朴念仁のアホ面を睨んでやろうと顔を上げた。

「——ふえ…う…」

そう。

丁度目の前にある、茹で上がったタコと豆鉄砲喰らったハトを掛け合わせたようなこいつのマヌケ顔を…

「……………えっ？」

待て、何かおかしい。

そう気付いた冬獅郎は霞む眼を再度拭い…

「……………あ…」

ばつちりと、寝台から見上げるまんまるとした琥珀色の——雛森桃の潤んだ瞳と視線が交差した。

「……………」

「……………」

一瞬、世界から音が消え。

次に、世界から時が消え。

最後に、全てを悟った冬獅郎は、顔面がぶわつと七色に乱回転した。

「ひっ！ ひなっ！ もっ！ ひな、な、なななな?!?!」

「えっ、あ、あえっ…？ あ、あたし…なんで、いき…て…？ って、

し、シロちゃ、すっすき…って…えっ?」

病室の静寂を粉々に破壊する大混乱。

無様な告白を聞かれた羞恥と失態、目覚めの歓喜と、無数の感情で飽和する冬獅郎。黄泉より戻った奇跡に困惑中、更に突然弟分の熱烈な恋心を聞かされた雛森。

叫声響く空間で二人の狼狽は頂点へ。あわあわ「シロちゃんは子供なのに」だの「好きってどういう」だの「自分は死んだはず」と眩く少女を相手に、トチ狂った少年は全部なかった事にしようと思えば彼女が隠れる布団を剥がし掴みかかってしまった。

「……………雛森イ!!」

「ツキやあつ!」

「ま、幻ッ！ 全部幻だ！ 幻だ幻!! 忘れろ雛森!」

「えっ！ やっ、ちよ、シロちゃ、ち、ちか——」

「てめえは起きたばっかでヘンな幻を…っておい聞いてんのか!」

「やつ!? だ、だめ、ちか、き、キスっ……」

寝台に押し付けられ真っ赤な少女が突如キュウ……と鼠のような悲鳴を零し、強張る体の力が抜ける。

「……ッは? お、おい雛森? 雛森!! 雛森イイイ!!」

華奢な両肩を掴み前後に揺るも反応なし。頭から煙を上げながら目を回している彼女を見て流石に乱暴にし過ぎたと慌てる冬獅郎。「す、すまん……そ、そうだ四番隊! まっ、待ってる雛森、いま人を呼んでくつからな!」

立て続けの失態に居たたまれず、動揺しきった少年は待機医へ連絡するの忘れ、とりあえず互いに落ち着くまで専門家の卯ノ花に丸投げしようと逃亡を決意した。

病室を瞬歩で逃げ出し、冬獅郎はふらつく頭で四番隊隊首室へ向かう。

「……」

無言で進む少年。歩を重ねる度その顔から混乱は薄れ、最後に残ったのは、純粹な歡喜の紅潮だった。

脳裏をあいつの顔が巡っていく。昔と同じ馬鹿っぽく、だけど昔とは違う、羞恥に戸惑う赤い顔。靈術院であいつを虚から護った時よりずっと意識し続けてきた冬獅郎に、彼女が自分に向ける感情の差異を見逃すはずがない。

「……………ッッ!」

表情が崩れる。吊り上がる口角が戻らない。

ああ、ホントに。

俺はなんて、なんて長い遠回りをしてきたのだろう。

「アホ桃のクセに、手間かけさせやがって……」

抑えきれない高揚感が全身から零れ出す。羽の様にふわふわする体に戸惑いながら、少年は足取り軽く隊舎の縁側を跳ねる。晴々とした晩秋の蒼天も、吹き抜ける冷たい木枯らしも、全てが美しく心地い

い。

取り戻した。

目を覚ましてくれた。

俺の気持ちを意識してくれた。

ようやく始まるんだ。ずっとずっと欲しかった、あいつが隣にいる
日常が。

「覚悟しろよ、雛森…っ！」

あいつを悲しませる問題は未だ山積み。例の崩玉が率いる【叫谷勢
力】。零番隊との密約。裏切り者の疑惑。どれも一筋縄ではいかない
難題だ。

それでも、冬獅郎は逃げない。

もっともっと強くなって、漢として大きくなって、護れるように
なって、どんどんあいつに意識させて。

いつか必ず、その心と笑顔を手に入れてやるんだ。

その決意を胸に、恋する少年——日番谷冬獅郎は悲願を新たに拳を
天へ突きあげるのだった。

ニ
チ
ヤ
ア
…

《——以上がお前の任務となる》

現世は空座町。

茜色に色付く空の下、空座第一高等学校の校門脇に小柄な少女が立っていた。誰もが振り返る整った顔立ちの彼女は、されど不自然なまでに人の注目の外にいる。

少女の正体は死神。あらゆる霊なる者を司る魂魄種の一人である彼女——朽木ルキアは、ある任務のため本来の期間を過ぎてもこの町に滞在していた。

「ですが……ですがそれでは一護の気持ち……」

《わかっている、朽木。だがこれは総隊長命令でもあるんだ。あの人は一護君に、元の人間の生活に戻ってもらう事が一番の幸せだと信じている》

「……っ」

感情を押し殺すような上司の声に何も言い返せず、ルキアは切れた通信端末をコートの懐へしまい込む。任務の対象、霊界の英雄である黒崎一護との付き合いでこの現世風の装いにも馴染んだが、恐らくこの仕事が終われば二度と着る事は無くなるだろう。

些細な切っ掛けで思い出した来たる別れの時を、少女は深く、深く惜しんでいた。

「——何してんだ、ルキア？」

桜色のマフラーに顔を沈めっていると、ふと男の声に名を呼ばれた。

散々待たされた相棒へジト目を向け、女死神は一言棘を指す。

「…遅いぞ一護、もう放課後ではないか」

「サボってた授業の補習だよ。てめえこそ何でまだ現世に居んだよ？」

なんか知んねえけどゴタゴタしてるんだろ、尸魂界ソウルソサエティ」

呑気な声色で痛い所を突くな。ルキアは一瞬言葉に詰まるも即座に「休暇だ、莫迦者」と取り繕う。何故死神が現世で休みを過ごしているのか不思議そうに首を捻る鈍感な一護に、これは井上の奴も苦勞しそうだと言友の恋路を思い二度目の溜息。

「…貴様、また無茶をしたらしいな」

気を取り直し少女は本題に入る。

「無茶？… って何だよ？」

「ッ、虚退治だ！ あれ程止めておけと言ったのに、全く…！」

思わず声を荒げてしまうのも許されよう。この眼つきの悪い人間の青年は先週、世界の命運を分ける神話も同然の大決戦を戦い抜き、ルキアら秩序の勢力に勝利を齎した大英雄である。だが戦いの代償は大きく、力を使い果たした彼の霊力は今や二人が出会った当初の平隊士未満にまで衰えていた。

そしてその僅かな残滓さえ、もう長くは…

「しゃーねえだろ、俺が一番あの虚に近かったんだから」

「そんな事…！」

「あーもう、ウダウダうっせえなあ」

「うっせえ」っ!？」

人の負い目や心配になんと無神経な。小一時間でも説教できると地団駄を踏むルキア。

だがそんな彼女の不満は、町を眺める青年の爽やか笑顔に掻き消された。

「…前に言っただろ。何のために戦うのかつてよ」

「…ッ」

一護の言葉が少女の胸を締め付ける。かつて虚に襲われ一蓮托生となった彼に力を分け与えてから、二人の関係は始まった。死神と人間、守護者と庇護者。ルキアはそうあるべき定めを、彼の運命を大きく

く捻じ曲げてしまった。

「どうやつても償いきれぬ。そう己の非を悔やむ女死神へ、一護は責めるではなく——感謝した。」

母を護れず無力を悔やんだ自分に、家族を、友達を、仲間を護る力をくれた事。そして黒崎一護は、彼女にこう言った。

——山ほどの人を守りたいんだ。

あの最初の頃のぬるま湯のような日々から、それこそ人生が二転三転してもおかしくない激闘が幾つもあったはずなのに。この底抜けのお人好しは、まだあの青臭い夢を胸に戦っていたと言うのか。

その揺るぎない覚悟と信念にルキアは圧倒される。

それが、彼女らしからぬ隙となつたのか。

『……』

突然鳴り響いた通信端末に、ハツと遅れて我に返る女死神。だがその間に、庇護されるべき人間の「一護」は立ち上がっていた。

人を喰らう悪霊——虚ホロウが町に現れたのだ。

「この霊圧……近い！」

「ッ、な……ま、待て「一護」！」

咄嗟に右手の代行証を胸に当て、体から死神の霊体を弾き出す青年。魂なき彼の肉体にのしかかられた少女は足が止まる。

「「一護」……」

瞬歩しゅんぽも使えぬ衰えた身で我武者羅に走る相棒の後ろ姿を、ルキアはただただ見送る事しか出来なかった。

戦っている。

一護が、名付きですらないただの虚と。

斬り付ける傷も浅く、一度攻撃を受ければ蹴鞠のように飛んでいく。這い蹲りながら手放した斬魄刀の下へ行き、ふらつく体で何度も何度も敵へ立ち向かう。

かつての彼であれば霊圧を少し高めるだけで消し飛ばせる程度の雑魚を、相手にして。

そんな彼の、見るに堪えない無様な姿を、ルキアは目頭に湧き上がる熱を堪えて最後まで見守った。

見ろ、世界よ。貴様を護った英雄の、真の姿を。

何度折れようと、力を失おうと、そこに己の握る剣があるのなら、黒崎一護は立ち上がる。その心のなんと気高い事か。その背中のなんと勇ましい事か。

『オオオオオオ——』

「ぐあつ…!? く…そっ」

振るう敵の尻尾に体が反応出来ず、手痛い一撃を受けてしまう青年。ルキアは今にも飛び出さんとする己の体を必死に抑え、彼の勝利を祈り続ける。

惨めと罵る者あれば名乗るがいい。

哀れと蔑む者あれば名乗るがいい。

そんな痴れ者を私は絶対に許さない。地の果てまで追い掛けて斬り殺してやる。彼の誇りを穢す者を、この朽木ルキアは、断じて。

「だアアアアアアアアツツ!!」

「…!」

敵の蹴撃を紙一重で躲した一護が、その股下を潜り背後を取る。

そして飛び上がった彼が虚の後頭部を一太刀で力千割った時、ルキアは涙が滲む程の誇らしさで胸が一杯になった。

…全く、馬鹿なクセしてそんな事は覚えているのだな。

敵を倒した一護が地面に大の字で倒れ込む。彼に気付かれないよう目元を拭い、少女は英雄の下へ駆け寄った。

「…遅えぞルキア。もう俺一人で倒しちまったよ」

「五月蠅い。わざわざ貴様の抜けた肉体を運んでやった心優しい私にその口の利き方はなんだ」

「おう、サンキューな」

清々しい顔で笑う一護。張り裂けそうな胸の痛みを無視し、ルキアも努めて笑顔で彼の傷を癒す。

五秒とせずには回道で回復しきった、青年のなけなしの霊圧。その意味を言葉にするのは最早無粋だろう。

全てを悟った少女は、膝の上で安らかな寝息を立てる相棒の顔を、夜が更けるまでいつまでも見つめ続けるのだった。

「……そうか……」

……そろそろなんじゃないかって、思ってた。

翌朝。

激しい発作の後に自室のベッドで目が覚めた人間の青年——黒崎一護は、昨日のルキアを筆頭に、茶渡泰虎、井上織姫、石田雨竜の四人より、真実を告げられた。

「外に出ていいか？」

憐憫の顔で悲しみを分かち合ってくれる仲間達の気持ちが高く、一護は頭を掻きながらベッドを立つ。

しがない街角クリニック、黒崎医院。平凡なサンダルで町に出た彼は、徐に辺りを見渡した。

……霊の気配を、感じない。物心つく前からずっと身近にあった、幽霊の気配が。

そして。

「一護……」

隣で佇むルキアの気配も、少しずつ薄れて行っている。

…本当に、俺の力は消えるんだな。

気付けば家前の小道に、ルキアと二人きりになっていた。井上達が気を利かせてくれたのか、どこか最初の出会いを思い出させるような光景だ。

「お別れだ、一護」

「そう、みてえだな」

彼女の顔は、澄んだ笑顔。俺の顔は…自分ではわからない。

「——フツ」

不意にルキアが笑った。

「何だ、そう寂しそうな顔をするな」

「え？」

「貴様に私が見えなくなっても、私からは貴様が見えているのだぞー？」

「ハ、なんだそりゃ？ 全然嬉しくねーよ」

「ほー？」

「あと、寂しそうな顔もしてねー」

何かを紛らわすような茶化し合い。言い合う二人は自然と向き合い、言葉の切れ目で共に俯く。

「……」

「……」

ふと、気付けば少女の袴の裾が塵のように消え始めていた。

時間が、来たのだ。

「…ツ、みんなに…」

目の前の大きな、大きな別れから目を逸らそうと、青年は咄嗟に言葉を探す。

「皆に、よろしく伝えといってくれ」

「……ああ」

少女の体は、もう胸元までしか見えない。
…そして。

——ツあ…

万感の想いの籠った、彼女の吐息が耳を擦り…

「——じゃあな、ルキア…」

黒崎一護の英雄譚は、
静かに幕を下ろした。

——ありがとう…

完
制作・著作

???

幕間：どくしよかちやんの女王生活

果てなく広がる水の鏡面に、紅桃色の星雲が溶け込んだ、美しき永夜の世界。

水面の中央には巨大な白亜の神殿が優美に佇み、開かれた窓から零れる灯りや誼噪が住人達の活気を物語る。

ここは三界の狭間に浮かぶ空前絶後の大叫谷——【ロスヴァリエス虚霊坤】。死した戦士達が福音と共に召し上げられる、アランカル破面達のための楽園だ。

幾つもの尖塔に囲まれた半球天蓋が聳え立つ、無機質で荘厳な王城【ヴァルアリヤ英霊宮殿】。その中心にある巨大な大理石の玉座を前に、三つの人影が物々しく騒いでいた。

「——あ、あのシャルロットさん。これっ、凄いはだけてるんですけど……」

鈴音の声を羞恥に荒げ、小柄な少女が腰掛ける玉座でぶるぶる震えている。背中の異形の翅に楽園の夜空を映す彼女こそ、かつて”雛森桃”の名で呼ばれていた元死神。

この地を司る超越者だ。

「ンもう、大人しくしてくださいませ！ 我等アランカル破面の新たな主がダサイ格好で玉座に腰掛けるなど許されませんわア〜〜！」

「せやで桃ちゃん。シャルロットもわざわざ凱旋の晴れ舞台を早めに切り上げて来てくれたんやし」

「市丸隊長は後ろ向いててくださいいっつ。今度こそ乱菊さんに言いつけますよー！」

そんな上位者を取り囲むのは二人の男。少女の纏うボロボロの袖を整える片割れの巨漢——シャルロツテ・クールホーンと、嫌そうに頬を膨らませる彼女をニヤニヤ嗤う糸目の青年——市丸ギン。

これより行われる初の女王謁見。その段取りなどの最終確認のため、彼等はここ玉座の間にいた。

「ダメよ雛森様、恥ずかしがっては女が廃れますわ！ 着飾ろうにも服が霊圧で燃えてしまうのですから、その白衣と素肌で原初の女体美を全面に押し出して……って、あら？ 雛森様、もしや以前のコーデイナートの時よりお胸が少し育つ——」

「なあ!? わーっ！ わーっ！ はっ、【破道の一・衝】ッ!!」

玉座の左手に侍る市丸が霊弾に「あいたっ！」と吹き飛ばされ、続く少女の憤慨は目の前の大男へ。

「シャルロツテさん、周り！ 周り見て！ 市丸隊長のこと嫌いでも存在まで無視しないで下さいっ！」

「あたた……い、今のはボク微塵も悪うないやん。てか思いっきり君の服弄つとるシャルロツテこそ男やないの……」

「この人は乙女だからいいんです！ そもそも破面は子孫を残す必要ないから異性に興味持たないですし」

「……へ？」

一瞬、この小娘は何を言ってるんだと共に目をぱちくりさせる破面と死神。

「あの、雛森様？ 我々虚は本能的な生物で、むしろ——ムグツ!?」

「せやなー桃ちゃん！ ボクが悪かったわー！」

勘違いを正そうとするシャルロツテを黙らせ、市丸は最近親しくなった十刃^{エスパーダ}への援護を兼ねた弄りネタを死守する。

……もつともあの回帰趣味^{ヘンタイ}を性欲と言う健全な繁殖本能に分類していいのかは不明だったが。

そんな挙動不審な二人を訝しみ、少女が真実に気付きそうになった寸前。玉座の間の大扉がガチャリと開かれ新たな人影が入室した。

「——何をふざけている、お前達。十刃全刃^{エスパーダ}が控えの間に揃っている

ぞ」

色黒の男——東仙要の報告に市丸が真つ先に飛び付き話題を変え
る。

「こつちも丁度終わりました。桃ちゃんもシャルロツテにプロデュ
スしてもらたしバツチリですわ」

「どこがバツチリですか！　こんなの人前に出られない……」

「服など女王の雛森の好きにさせる。話に聞くハリベルやリリネット
のような痴女でなければ構わん」

初対面時の記憶を引き出し「そちらの感性はマトモだった筈」と呟
きながら、玉座の右手に控える盲目の東仙。

そんな嬉しい評価に何度も頷き、少女がシャルロツテの嘆きを無視
していそいそと衣類を整え直す。

そして彼女の入室許可に満を持して現れた、十人の破面。

その中でも格別な武功があった、目を丸くしている浅黒い肌の巨漢
へ、女王は満面の笑みで労いの言葉を贈った。

「お帰りなさい、ヤミーさん！」

——今日のお夕飯は、

ハンバーグですよっ！

お久しぶりです、あたしです。

ついさつきまで幸せな「雛森イイイ！」の余韻を噛み締めていたはずの、雛森桃です。

とても長く忙しい戦乱の日々が終わりました。ようやく一息つけると思った矢先、唐突に襲いかかった人生ガバ。

そんなあたしは今、ジュージュー美味しそうな音と匂いを立てる肉汁の気泡をぼーっと眺めています。

「あーっ！ ヤミーのクセに僕より肉大きいとか生意気！ ずるい！」

「ああん？ 俺のクセにってなんだカマ野郎。てめえと俺の図体の差を考え——っつておい何シレっつと皿交換してんだルピ！ 返しやがれ！」

「捨て置きなよ、ヤミー」『オカワリガ欲シケレバ頼メバ良イ』「雛森さまー！ ステーキ欲しいー！」

「なっ、いい加減にしたまえよアーロニーロ！ いくら慰労会とはいえ我等が女王陛下レイナのご慈悲に甘えすぎではないかね？」

「プハア…！ ちょっとヒゲ、お祝いの席でそんなカリカリすんじゃないわよ！ 折角のドン…ドンペ…このアンタみたいな名前のお酒が不味くなるじゃない！」

…と、このように。

心優しい（）桃ちゃんは現在、大体原作通りの働きを魅せてくれた自慢の部下達を労う宴会にて、腕によりをかけて作った料理の数々を振舞っています。

とても大変です。

何が大変って参加者の人数以外にも、隣の料理ガチ勢のこだわりがうるさい。

「何をぼーっとしている、さっさと皿に載せろ。それ以上焼くと食感がパサ付く」

「あ、はい」

シエフモード東仙に叱られ慌ててステーキを鉄板から下ろす。最

初はあたし一人で頑張っていたのを、途中から「お前は動きが遅すぎる」と調理台を乗っ取られ桃ちゃん肩身が狭いなう。

…いえ、こんな事はいいのです。もつと大変で面倒くさい事が起きました。

念願の「雛森イイイ！」を堪能し、しんみりしながらも原作通りにヨン様敗北の展開を再現して終わったのに、折角の余生生活を妨害する新たな仕事を押し付けられてしまったのです。

「いやあ、目出度い目出度い。これはボクらも益々女王サマを盛り上げていかなあかなア」

「しかし主役が不在の宴は寂しいものです。そろそろお席に着かれてはいかがですか、麗しき女王陛下？」

そう言いながら現れたのは、諸悪の根源野郎共の一〇とザエルアポロ。人のパーソナルスペースにニヤニヤ近寄るゲス顔の二人に、あたしは思わず欠魂^{フランク}衣装の胸と太ももを隠して身構える。

「…主役はあなた達破面軍ですのでお構いなく。あと”女王”は止めてって何度も言いましたよね？ 嫌がらせですか？」

…そう、”女王”。

穏やかな余生を過ごしたかったわたくし雛森桃は、ヨン様陣営の残党全員からヨン様の後釜の地位に無理やり担ぎ上げられてしまったのです。

主にコイツらの根回しのせい！

「嫌やなア、桃ちゃんはまだ立派な女王サマやないの。何や悩みでもあるんやったらボク相談乗るよオ？」

「僕が仕立てたコックコートもお気に召さなかったご様子。雛森様の珠の素肌を晒すそのお姿は料理の不都合となられるのではと特別にご用意したのですが…」

「衣服は零番隊に注文するので結構ですっ！」

ワザとらしく悲しそうな顔をする男共にあたしは益々腹が立つ。今もコイツらに色々言いたい思いを我慢してるのに、わざわざそっち

から寄って来ないで欲しい。

大体一〇もザエルアポロもなんで生き残ってるんだ！

一〇はヨン様裏切りシーンに一護が間に合う可能性を失念してたあたしのガバだからもう諦めたけど、ザエルアポロはホントなんなの！

マユリ様戦の映像見せてって頼んでも「奴に映像記録が妨害された」とか嘘か本当かわからない事言って拒否するし。おまけになんか大戦後からあたしの体をへんな目で見る回数が明らかに増えてるし

…
てかコックコートってどこであたしの服のサイズ知ったんだよ、燃やすぞ！

ガバが起きたのは確かなのに、肝心のガバがなんだったのかわからない。とりあえず何とか距離を取ってるけど、どうもあたしの知らない所で一〇と仲良くなったらしく奴を介してこうして接触してるのだ。

何とか二人を追い払ったあたしは隣で休憩中のDJにコソコソ耳打ちする。

「…東仙隊長、あの二人が何を企んでるか心当たりとかありますか？
なんか不気味で…」

「別に謀反を企てている訳ではあるまい。とはいえ女王たるお前へのセクハラ等無礼の数々は目に余る。後で厳しく注意しておこう」
「あ、ありがとうございます…っ」

なんて頼れる紳士、口うるさいとか言っでごめんなさい。でも女王呼びは止めて。

まあぶっちゃけこの場所、マイ叫谷こと虚霊坤ロスヴァリエスはあたしの霊体の一部なので起きる事全てが筒抜けだ。妙な会話が聞こえたらすぐにわかるし、たといえ叫谷そのものに悪さをしようとしても不死の桃玉ブランク欠魂に影響は皆無。

ガバ玉だろうとスペック自体はガチだからね。少なくとも霊的には無敵だ。

ちなみにこの【虚霊坤】ロスヴァリエスと住居のモスク風建築【英霊宮殿】ヴァリアルアリヤは、ご

近所付き合いで尸魂界ソウルソサエティ霊王宮へ挨拶に行く時に名前が要るだろうとバラガン爺に先日付けて貰いました。

お外の桃色大星雲のウユニ湖はあたしの力作である。

…しかし、尸魂界か。

頭に浮かぶのはつい先ほどの虚圏ウエコムンドでの一幕。

”破面軍再結成”という完全な原作ブレイクを行うので、鯰界の秩序に則り最大限のオサレムーヴをする必要性があったが…問題はあたし達が好き勝手した分のシワ寄せが護廷十三隊に行ってしまった事。

最悪、来たる千年血戦篇を彼らが戦い抜くのに必要なOSR値が不足して原作以上に悲惨な事になりかねない。

あたしは見えざる帝国を相手に、一護が一番活躍できるOPBのルールで共に戦いたいだけ。味方である護廷隊のOSR値を下げるのは本末転倒である。

よって彼らを破面軍再結成の踏み台にした責任を取るべく、あたしは”雛森桃”の立場を利用する事にした。

あのヨン様も評価してくれたジャンプ脳な霊圧強化法——【鎖結・魄睡鍛錬】を死神陣営に普及させるのだ。

とうにか零番隊の和尚から「普及させて」と要請された。

どうも和尚達は”雛森桃”の処刑をその功績で免じた事にしたいらしく、あたしとしても分身雛森を他隊のシロちゃんの側に置く口実が欲しかったため即承諾。

臓器鍛錬法を人に教えるのは大変だろうけど、最悪隊長達の臓器が壊れたらあたしが崩玉パワー+回道で治せばいい。崩玉パワーがバレても融合時の残滓だと誤魔化せるし、ダメでも護廷十三隊に疑われて孤独になればシロちゃんが曇ってくれるのでどう転んでもあたしの得にしかない。

…うん。

チャン一たち主人公陣営へのフォローは最オサレ破面ウルキオラ

に任せたから大丈夫だし、これで千年血戦篇も乗り越えられるだろう。

女王の立場も考え方によっては破面軍を率いるのに都合がいいし、ヨン様やバラガンみたいに分ぞり返ってるだけでも許されるはずだ。

余生の妨げとならないよう、仕事は秩序大好きDJやゾマリハリベルネリエルルドボンウルキオラ辺りに任せればいい。

勝ったなガハハ！

飯食ったらシロちゃんの様子見てくる。

ロスヴァリエス
虚霊坤の中心、英霊宮殿。

大天蓋のドームから延びる北廻廊の先、最も安全で秘匿された所に女王の私室がある。窓や扉が固く閉じられたその密室の中で、あたしは飛梅ちゃんと桃玉欠魂達フランクと共に、来たるべきイベントのための準備を行っていた。

”…ふえっ?”

『——ダメダメお姉さま全然ダメ!——もつと「ポカーン…」って感じ!——ちよつと狙い過ぎ感が強いわね!——ちゃんとお手本の飛梅を見習ってよ!——』

『はあ!? 誰がお手本ですか、誰が!』

「今のもダメかあ…」

辛辣な桃玉の評価に軽く凹むあたし。

雛森ムーヴ、この道百五十年。もう前世の男だった自分を想像できないくらい原作雛森ちゃんになりきったと思っていたが、どうやら理想にはまだまだ遠いらしい。

やはり魂の半身・飛梅ちゃんの方がずっと乙女っぽいのは主人として悔しいものがある。本人は『こんなあざとい反応しませんっ!』って否定しているけど。

…さて。

お気付きの通り。今あたし達がやっているのは、尸魂界の分身雛森を使ったシロちゃんメンタルケアの大チャンス——「感動の目覚め」イベントの演技練習だ。

あたしとヨン様の超大作で素晴らしい「雛森イイイイ!」の輝きイイイイ!を見せてくれた最愛のシロちゃん。その心はもうボロボロのバツキバキ。これ以上は確実に精神が壊れてしまう…というか既に二回壊れているので、一度癒しのインターバルで回復させないと本当に危ない。

今まで沢山頑張ってくれた感謝を込めて、我々はどうして彼の素敵な思い出となるよう万全の準備をしているのだ。

「…よし、【寝ている雛森に告白】パターンでの演出はOK…っと」

『——今のは【目覚めのキス】でも使えるから完成度上げたいわよね——』

——あとは【覗き込んだ雛森の顔に涙が落ちて…】の演出かな——』

「うーん、ポタッって来た時に目を開けて『シロ…ちゃん…?』って感じ?。」

『——自分が生きてる事への戸惑いが先に来ないと不自然よ?——やっぱり余計な事考えさせない愛の告白からの「ふえ?」が一番ね——そつちを狙っていきましょ——』

「そうね、それが一番シロちゃんのメンタル回復するはず」

『……この話し合いそのものが一番あの子の心をズタボロにしているのでは?。』

飛梅ちゃんのマジレスを無視し、あたしは桃玉の客観的視点から少しずつ演技演出のバリエーションを増やしていく。

うふふ、シロちゃんは曇ってる時が一番だけど、恋する少年らしい彼もまたかわいくて素敵なのだ。

原作にはなかった日番谷冬獅郎の新たな魅力を見つけたあたしに

は、その輝きをもつと引き出す責任がある。それを彼の曇り顔をより輝かせる結果に繋げる事が当面のあたしの生きがいとなるだろう。そしてあたし達がシロちゃんの様々な表情を妄想してニチャニチャ盛り上がっていた、その時。

『!!』

来た！ 尸魂界にいる分身雛森当番の桃玉欠魂から『——シロちゃんに動きあり！——』の緊急報告！

これで昨日の報告と合わせて四度目だが、今回はかなりガチ目の様子。期待を胸に意識を二つに分けダツシユであっちの体へGO！

『——あ、お姉さまナイスタイミング！——』

(おまたせ！ どれどれ、どんな感じ?)

スツと分身体の意識を当番の桃玉欠魂と入れ替え、あたしは細心の注意を払いながら慎重に周囲の様子を探る。遅れて他の桃玉欠魂達と：あと飛梅もやってきた。なんだかんだで彼女も愉悦道にどつぷり漬かっている。

さて、シロちゃんは…

「——そんなの……俺の台詞だ、馬鹿野郎…ッ」

ふああっ!?

あたしの手をぎゅううううと握り、絞り出すような切ない声で気持ちを吐露する涙目のシロちゃん！

こっ、これは…!! これはこれはこれはああっ!

「俺の気持ちなんて、全然…これっぽっちも見えてくれねえクセに…ッ」
いいえっ、我々雛森連合は四六時中いつも誰よりもあなたの事をガン見しています！ 今だって胸がキュンキュンして悶えたいの必

死で我慢してるんだから！

先ほどの予行演習時の脳内妄想を遥かに凌駕する素敵すぎる展開にあたしも桃玉も飛梅ちゃんも大興奮。だがあの怒涛の空座町決戦を乗り越えたあたしの表情筋は微動だにしない。舐めるな！

しかし…

「年上だからってカッコつけてんじゃねえよ…！ 俺のことガキ扱いしてんじゃねえよ…！」

はああん、かわいい！ 背伸びするシロちゃんかわいい！

悉く急所を抉ってくる彼の攻撃に桃ちゃん大ピンチ。そして脳内で飛梅たちがキヤーキヤー騒いでいる間もシロちゃんの輝きは止まらない。

「ごつち…見ろよ…」

うんうん！ ちゃんと見てるし聞いているよっ。

「寝てちゃ…言えねえだろ…」

！ まさか…！

言うの？ 言ってくれるの？ 言ってくれちゃうの!?

あの誕生日の月の夜にヘタレて言えなくて後悔しちゃったあの宣言の続きを!?!?

「俺にも…お前に…ッ」

そして遂に——時は来た。

—— “大好き” だって

言わせてくれよ…

きやああああああああ!!

幕間：あらんかる達のイチヤイチヤ

「――よしっ、これでいいかな」

ヴァルアリヤ 英霊宮殿での宴会が終わり、所変わって”第10離宮”。

シロちゃんの輝きを堪能し、だんがい断界の二千倍時間で愉悦と尊味の発作に一週間ほど悶え愉しんだ桃ちゃん。

程よく落ち着いたので思考を切り替え、あたしはヤミーの腕を再生させるために彼の離宮へお邪魔していた。

あの山爺の【残火の太刀】に焼き尽くされたのだ。治療は念のため【反膜の糸】による霊体再構築能力を持つ有能ロカ姉貴も一緒のパーフェクト布陣である。

「どうですか、調子は？ 感覚のズレとか無いといいんですけど…」

「ああ、大丈夫だぜ。霊圧も万全以上だ」

「よかった。何か問題があればいつでもおっしゃってくださいね」

グーパーを繰り返し腕の様子を確かめるヤミーの姿に、あたしは自然と笑顔が浮かぶ。今回の原作ブレイク”エスパーダ十刃再結成”作戦における最大のサプライズが、彼の奮闘だった。

BLEACHのストーリーから逸れる一大計画であり、あたしは失敗防止に考え付く限りのオサレ展開を演出した。そのための場を整える役目を負うヤミーが自由に戦えるよう、彼のフラシオン従属官を避難させるなどの布石もあらかじめ撒いていた。

だけどもさかもまさか！

護廷隊の隊長達があウエコムントの山爺を含めて八人も虚圏に来るとは思わ
ず、しかも彼ら相手にヤミーがあそこまで粘るなんて更に予想外。

本人には申し訳なかったが、準備万端な破面軍に「ヤミーさんの誇りを見守りたい」と咄嗟に言い訳して一部始終をこっそりみんなで見物してしまうくらいの高オサレシーンだった。あれにはオサレ警察

のあたしもニツコリ。

やっぱり十刃の古参メンバーはヨン様の影響で特にオサレな人たちが多いと思うの桃ちゃん。一気にヤミーの株価がストツプ高となった一日でした。

今後は兄貴と呼ばせてくれ。

「では体も元に戻った事ですし……はいっ！ クツカプーロです！」

「！ そいつは……！」

あたしは隠していたヤミー兄貴のワンコフラシオン従属官を抱えて優しく渡す。

本当は虚圏で彼を救い出す時にザエルアポロに手渡しさせて、【飼犬との感動の再会】OSRボーナスを狙いたかったが、肝心のピンク野郎があたしが抱いてるクツカプーロをゴミのような目で見ていたため断念したのだ。なんでや。

まあ戦場は危険だから安全第一にしたと割り切ろう。

「……いつ、雛森さんの飯が旨くてデブったか？」

「いや流石にドッグフードは作れませんよ？ あたし」

なんかジーツとワンコを見つめてると思ったらそんな事考えてたのか、ヤミーさん。もうちょつと優しい抱っこが見れるかなとギヤップに期待してたけどダメそうですね……

でもワンちゃんとのいちやいちはあたしの目が気になってるだけかもしれないので、ここは長居せずにお暇しましょう。

「……雛森さん」

「はい、なんででしょう？」

別れの挨拶を交わし、手持無沙汰なロカ姉貴と一緒に離宮の部屋を出る直前。あたしは去り際の兄貴の声に振り向く。

「あー……その、なんだ。他の連中もだけどよ」

「？」

言い淀むヤミーくんの言葉を待っていると、こちらに背を向けたまま床に胡坐をかく彼が、ムスツと一言呟いた。

——くたばってねえで何よりだぜ

一瞬固まるも、意外と雛森ムーヴの台詞はスラスラ口から出てくるものだ。

「…いい、いえ。こちらこそご心配おかけしてごめんなさい。ヤミーさんのおかげでこうしてまた皆さんと一緒に暮らせるんですから。本当にありがとうございます、流石”第0十刃”ですネっ！」

「お、おう。別にあんなの何ともないぜ」

「ふふっ、頼もしい限りです。また夕食時にお話聞かせてくださいね」
呆けた頭で早口に賛辞を贈り、あたしとロカは今度こそ”第10離宮”を後にする。

そしてしばらく無言で廻廊を進み、どちらともなく立ち止まって顔を見合わせた。

「……………誰、あれ？」

ここは楽園、ロスヴァリエス虚霊坤。

起床の鐘が鳴る一時間前。美しい桃色に輝く大星雲に照らされながら、”トレス・エスパーダ第3十刃”ティア・ハリベルは一人で廻廊を散歩していた。敬愛する主人が創造した新たな拠点・ヴァルアリア英霊宮殿へ居を移して早一晚。女王の臣として最低限、城の間取りを頭に叩き込んでいなければと見回る彼女の目は、真剣そのもの。

「——あら、ハリベルも散歩？」

突き当たりの小広間を通り過ぎようとしたハリベルは、そこで先客に呼び止められた。

「…ネリエル」

「久しぶりね。前にこうして二人で話したのは、あなたがまだ虚だった時かしら」

振り向いた先にいた緑髪の美女を見て、ハリベルは眉を寄せる。長い間空席だった第3十刃の前任者であり、十刃同士の諍いで地位を追われた破面ネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンク。

先の大戦では敵である黒崎一護一味に付いた——裏切り者だ。

「貴様が出歩いているという事は、我々への反逆行為を雛森様は咎めなかつたと判断しているのか——ネル・トゥ？」

「…ありがたい事にね。あの方にはまた大恩が幾つもできてしまったわ」

綺麗に治った仮面の名残を撫で、ネリエルが首を竦める。霊圧が上がっている様子から察するに、古傷の治療のため崩玉で再破面化して貰ったのかもしれない。羨ましい限りだ。

「一護達がここに来た時の案内役も任されたし、ホント至れり尽くせり。怖いくらいに…」

「ほう、ウルキオラを差し置いてか？」

「一護達の客間は、第4離宮」の中だし、彼はそっちの仕事を任せられるはずよ」

霊界秩序における破面軍の地位確立のため、心優しき我等の新女王は他勢力との友好関係の構築に熱心だ。ネリエルへの慈悲は彼女の持つ現世の人間達とのパイプを評価した側面もあるだろう。

ハリベルは主人の決定に異を唱えるつもりはない。この女の裏切りも藍染への造反だったと見れば情状酌量の余地はある。そしてかつての彼女の軍団長への過度な忠誠心と、それ故の地位？奪も、大いに同情に値する経歴だ。

「…いいだろう、私もお前を認めてやる。共に雛森様を盛り立てよう」
ひとまずそう言つてやると、ネリエルは恐縮しながら忠告を一つ口

にした。

「光栄だけど、あの方は今も変わらず藍染を王として崇めておられるから、言葉には十分気を付けて」

「…そうか」

「謁見の時に思わずあの男の事で口が滑ったら笑顔で威圧されたわ。雛森様が私達に傅かれる事を好まれないのも、多分…」

恐怖が蘇ったのか彼女が顔を青褪め俯く。ハリベル自身も薄々気付いてはいたが、未だ藍染惣右介を慕っている一途な女王陛下には困ったもの。やはり今の雛森体制を維持するには上も下も意識改革が必要だ。

とは言え、何よりもまずは自分が臣に相応しい者にならねばなるまい。

「私はこれより練習場を見て回る。お前も来るか？」

「ええ、そうしようかしら。私も体の感覚を取り戻さないと戦士としてお役に立てないから」

互いに苦笑し、踵を返すハリベル達。先日同胞が見せたあの大奮闘を頭に描きながら、二人は「負けられない」と大天蓋へ向かって行った。

虚夜宮を参考に創造された巨大建築、ヴァリアルアリヤ英霊宮殿。その中央大天蓋

の下には前例通りの広大な砂漠が広がっている。天蓋内部はあらゆる能力の使用が許可された練習場となっており、ハリベル達が訪れた時には起床前にもかかわらず十名前後の破面が自主的な鍛錬を行っていた。

そして彼女達は、そこで手合わせを行っていた意外過ぎる顔ぶれにポカンと顎を垂らす。

「——ぬうううツ!! 足りん! 足りぬわ! この程度で儂の【死の息吹】は抜けぬぞ一番アツ!!」

「——勘弁してくれ爺さん……! こちとらあんたと違って魂削って攻撃してんだ、気楽にほんぽん撃てるかよ!」

背筋が震えるほど膨大な霊圧がぶつかり合う。砂塵が晴れた上空に、二人の十刃が互いに全力の帰刃^{レスレクシオン}状態で戦っていた。

「何を臆する、魂なぞあの女に頼めば幾らでも回復できよう! つべこべ言わずその狼共を一匹残らず投じて来んか、若造ツ!!」

「…チツ、くたばるんじゃねえぞクソジジイ!!」

——群狼の霊閃——

交差する光と闇。吹き荒れる爆風。周囲から上がる従属官達の歓声。

そんな光景を唾然と見つめるハリベルとネリエルは、一分近い間を置きようやく正気に戻った。

「……誰あれ?」

「俄かに信じがたいが……少なくとも外見と霊圧、能力はバラガンとスタークのものだな」

「よかった、私だけまだ鏡花水月にかかっているのかと…」

まるで勇猛な戦士のようなギラギラとした闘志を放つ男破面達。元の傲岸不遜な老王と自堕落な引きこもりとは真逆の戦いを繰り広げる二人の姿に目を疑い、ネリエルは近くで騒いでいた”第2従属官”へ恐る恐る問い掛ける。

「ちよ、ちよつとフィンドール。あなたの主人どうなってるのよ、へんな薬でもやったの?」

「…おや、誰かと思えばいつぞやの元NO.3殿じゃないか。君も陛下——いや、バラガン様の雄姿を見に来たのかい?」

”雄姿”って、あなた…」

訳がわからず立ち尽くす彼女へ、”破面NO.24”フィンドール・キヤリアスが感涙と共に語りだした。

「ああ、懐かしい…! 君達新参共には意外に映るだろうが、かつての

バラガン様は数多の虚の軍勢を相手に一騎当千のご活躍をされる生粋の戦士であられたのだ」

「……あのバラガンが戦士ですって?」

「正解!」エサクタ　そして虚ウエコムンドの全てを手中に収めた御方は戦士から王となり、神となられた。君達の知るバラガン様は王になられてからのお姿。あの御方の長き覇道の一部に過ぎないのさ」

「ええ……」

話の胡散臭さに語り部ヘジト目を向ける美女。そんなネリエルが見えないほど興に乗ったフィンドールが、パリーンと己の仮面を割りながら霊圧と音量を爆増させる。

「だ・が!　御自ら、司る”老い”の力に蝕まれたあの戦場にて、虚圏の王バラガン・ルイゼンバーンは崩御あそばされた!　そしてバラガン様は復活と共に宣言されたのだ!」

『——』最早この身は王に非ず。ただの戦士バラガン也——とな!!』

「うっ……」

途中で会話に加わった他の従属官五人の合声に気圧され仰け反るネリエル。

聞くにバラガンは雛森桃に屈服させられた後、己の最大の誇りである”老い”の能力で戦死した事を契機に、王としての生き様に終止符を打つたらしい。そして生まれ変わった今、王の矜持を捨て去った自由の身で、改めて一から覇道を突き進み己の新たな栄光を築き上げるのだと豪語したそうだ。

「……つまりアレは別に性格が変わったとかじゃなくて、昔に逆戻りしただけって事?」

「不ノ・エス正エサクタ解!」逆戻りではなく”再誕”だよ、元No. 3殿」

「おお、御身の”老い”の力すら超越せんと心の”若き”を取り戻されたバラガン様のなんと神々しい事か……!　刮目しろ、俺達は新たな神話の誕生を目の当たりにしているのだ!」

「偉大なる戦士バラガン様、万歳!!」

『万歳!!』

「そ、そう…幸せそうだなによりだわ」

あれが俗にいう内輪ネタで盛り上がる男子という奴だろうか。馬鹿従者達から距離を取り、ネリエルはもう一方の”第1十刃”陣営から戻ってきたハリベルと合流する。

「どうやら一番さんの方も心境の変化があったみたいね」

「ああ。実際に死を体験したバラガンほどではないが、どうやらヤミーの奮戦を見て思う所があったらしい」

「へえ…」

共にクスリと微笑む女破面達。フィンドールの話には出なかつたが、バラガンの方も少なからず影響を受けているはずだ。

何故ならなんだかんだ言っても、こうして練習場に訪れた自分達もそうなのだから。

「——あアん？ てめえ等こんな所に集まって何してやがる？」

噂をすれば何とやら。近くに新たに巨大な霊圧を感じ、場の一同が一斉にその声の方へ振り向く。上空で戦う二人の十刃も矛を下ろしていた。

投げられた問いに緊張気味に答えたのは、ハリベルと話していた”第1従属官”の童女リリネット・ジンジャーバック。

「…ふ、ふんっ、何してんだはこっちの台詞よ！ ねぼすけのあんたらしくない早起きじゃない——ヤミー」

彼女達の視線の先には、眼下の同胞たちを楽しそうに見下ろす一人の巨漢が佇んでいた。

”第10十刃”ディエス・エスパーダ ヤミー・リヤルゴ

粗暴な風体や態度に反し、高い忠誠と不屈の心を持つ戦士であり、前の大戦において敵主力の隊長達八名を相手に大立ち回りを見せた殊勲人だ。普段のギャップも合わさり、彼の英雄的な奮闘にはネリエルも心の底から感服していた。

もちろん誰もが相手を褒め称える素直さを持つている訳ではなく、

リリネットのように皆にチャホヤされるヤミーが気に食わない者もいるが。

「大体あんた雛森様にゆつくり養生しろって言われてるでしょ！ 一人だけあの人に優しく看病して貰って鼻の下伸ばしちやってさ、ちよつと頑張ったからってチョーシ乗らないでよねっ！」

「伸ばしてねえよメスガキ！ いや、雛森さんに腕治して貰ってから霊力があり余ってしようがなくてよオ」

肩をぐるぐる回しながら「ちよつと暴れてくる」と砂漠を歩き去っていくヤミー。子供相手に凄む大人げなさも以前から変わらないが、隣のハリベルも今はどことなく注意しづらそうに黙している。一目置かれる人物独特のオーラがそうさせるのだろうか。つい先日まで話すのも億劫だった、獣同然と蔑んでいた男だと言うのに。

…なるほど、これはリリネットの気持ちも多少はわかるわね。

「——ねえ、ヤミー？」

らしくないのは端から承知。あるいは崩玉による治療で霊圧が増し、気が大きくなっているのか。

気付けばネリエルはこの傍若無人な英雄サマを引き留めていた。

「あア？ てめえは…」

「元”第3十刃”のネリエルよ。十年前の同僚の顔も忘れたの、10番さん？」

「知るかよ、十刃の椅子すら守れねえ”雑魚”^{ブリバロン}なんか」

面倒くさそうに「さつさと用を言え」と顎で急かすヤミーへ、女破面は青筋を立てながら含み笑顔を作る。

「よければ私があなたの相手をしましょうか？ こちらも雛森様に治していただいた怪我明けのリハビリがしたいし、頑丈なのが欲しかったの」

『…！』

ネリエルの挑発に一同が息を呑んだ。相手は”第10十刃”とは言え帰^{レスレクシオン}刃を行えば実力差はいくらでもひっくり返る。

だが仲間の自殺行為をリリネットが止めようとした瞬間。

「——面白い。私もお前の胸を借りさせて貰おう、ヤミー」

「ハリベルまで!？」

ネリエルの案に現”第3十刃”が便乗した。

「ちよつとあなた、人の戦いに…!」

「こちらも散々カスダの雑魚だの言われて黙ってはいられないのでな。奴の言葉、必ず撤回させてやる」

彼女もネリエルと同じく、秩序を重んじる”人”である以前に”十刃”。誇り高き最強の一角だ。敵だろうと味方だろうと己を侮る者に容赦はしない。

しばしの睨み合いの後、遂にネリエルは折れた。

「はあ…好きにきなさい」

「そのつもりだ。気に食わんのなら三つ巴でも構わんぞ」

「そう、なら私も遠慮はしないから」

口角を勝気に吊り上げ、斬魄刀を抜く女破面達。二人の鋭い眼光が射貫く先は、最強を豪語するヤミー・リヤルゴ。一触即発の緊張が辺りに満ちる。

…しかしそこへまたしても邪魔が入った。上空より事の一部始終を見下ろしていたスタークとバラガンだ。

「フン、小娘共など前座にもなるまい。暴れたいのならさっさとそいつ等を片付けて儂の相手をしろ、ヤミー」

「おいおい、あんたら腕試しはいいが喧嘩は止せよ? …あ、バラガンの爺さんが終わったら今度俺な?」

「ならば先にせい。儂の後ならば塵も残らん」

「おお、言うじゃねえか爺さん」

「あ、あなた達まで…!」

どんどん大事になっていく話に頭の熱が冷えたネリエルは頬が引き攣る。言い出した身ながらどうやって収拾を付けようと頭を抱えている彼女、そして割り込んだ戦意十分な三人の上位十刃達。

だが彼らは忘れていた。意思も確認されずに無理やり話が進み、巻き込まれた最後の当事者の事を。その男が司る力の源を…

「——てめえら、随分楽しそうな事相談してんじやねえか。あア？」

突如真つ赤な熱風が広大な砂漠に吹き荒れた。咄嗟に振り向いた一同の目に映ったのは、皮膚が罅割れマグマの如き霊圧が煮え滾る、憤怒の怪物。

「そんなに遊んで欲しいってんなら、ごちやごちや言っただけで『纏めて潰してください』って頭下げやがれ——クソカス共がア!!」

『!!?』
早まったかもしれない。肌を焼く凄まじい霊圧に震えるネリエルの視線の先にいたのは、最強の破面。

”第0十刃” ヤミー・リヤルゴが、凶悪な笑みで自らの斬魄刀を解き放とうとしていた。

「…ぶち切れる!!」

—— 憤 獣 ——

…なお、戦闘に夢中で起床の鐘など当然聞き逃した彼等は、東仙統括官の卍解で一網打尽にされ無事一週間の飯抜き地獄を言い渡される事になる。

かくして本日より英霊宮殿ヴァルアリヤの平和な日々は始まるのであった。

幕間：五番隊の百合の間に無理やり挟まれた男

師走も間近、木枯らしが築地塀の間を吹き通る晩秋の尸魂界^{ソウルソサエティ}。この日も、護廷十三隊一番隊隊舎はピリピリとした緊張に包まれていた。

未だ藍染惣右介の乱が終結して間もない。物々しい空気は今や隊士等にとって馴染みの光景だが、此度の騒ぎは隊舎を訪れた数名の“客人”の顔ぶれを見た者たち、とりわけ古株隊士を中心に広がっていた。

「——いやあ、真子君が快諾してくれて助かったよ」

そんな一番隊隊舎を歩くおかつぱ頭の“客人”——平子真子は、連れ添う二人の男女の片割れ、ヒゲ面の伊達男に渋面で返す。

「なアにが快諾やボケ。アンタ等に無理やり連れ戻されただけやないかい」

「まあまあ、百年前の続きという事でここは一つ。収まるべきところに収まったと思っておくれよ」

「ったく、あん時は人ン話一個も聞かへんで処分認めよったクセに面皮の厚いやっちゃなア」

女性の副官を連れた伊達男——八番隊隊長・京楽春水へ“客人”は嫌味の棘を刺す。

かつて藍染惣右介の陰謀で尸魂界を追われた元五番隊隊長の平子。従来の人の好きから隊長が三名も空席となった一大事に渋々手を差し伸べた彼だったが、未だ就任前ながら早くも己の性分を恨んでいた。

恐らく、自分に押し付けられるポストはあそこしかないだろう。

「……うん、間違いなく五番隊だろうね。今のあそこは生半可な者は任せられないからさ」

「かーっ、勘弁してやア。なんでいつも俺ばっか貧乏くじ引かなあかんねん」

「そう言いなさんな、フリーな君達三人で一番任期が長かったのが真子君なんだから。それに第一印象は悪かっただろうけど、ホントは凄く素直でいい子だよ——雛森ちゃん」

その名に顔を歪める平子。元五番隊副隊長であり藍染の部下としておぞましい実験の素体にされた、途轍もなく大きな闇を抱える女死神だ。

京楽の言に深く頷く副官の美女を横目に、男は不愉快げに吐き捨てる。

「藍染の命令で優等生演じとただけやろ。そない心にもない事ペラペラ言うんホンマ変わつとらんわ、アンタ」

「……僕たち隊長格が束になって手も足も出なかったんだ。彼女の力が恐ろしいのは認めるよ」

「そのアホ強い裏切りモンを冤罪で殺し損ねた俺に面倒見させんなやボケ！」

そう嘆く平子だったが、恐縮する伊達男に反し何故か隣の女死神の顔が険しい。百年前にリサに可愛がられていた時から随分な美女に成長した現八番隊副隊長——伊勢七緒が、クイと眼鏡を直し苦言を述べる。

「お言葉ですが、雛森元副隊長の咎は四十六室より更に上、靈王宮より正式に無罪判決が下されております。彼女を、裏切り者」と形容する事は法に反します。撤回してください」

「…なんやねんキミ、あの爆発娘と仲ええんか？」

「七緒ちゃんの貴重な読書友達だよ。趣味が合うんだってさ」

「私情を挟むほど未熟ではありません。事実を述べただけです」

明らかに私情の籠った目で睨まれ、面倒になった平子は「はいはいすんまへん」と適当に謝罪する。

己の副官になる女死神、雛森桃。その明るく愛らしい人となりといい、零番隊の関心を引いた【魄内鬼道術】なる特殊な霊力鍛錬法といい、彼女の尸魂界における評判は予想より遥かに高い。まるで庇護欲を誘う美少女の容姿を得た藍染を部下に押し付けられたような難題に、男は心底頭を抱えなくなった。

「まあ藍染の影響で今の五番隊は上から下まで優秀な子ばかりだから、なんだかんだで仕事は楽だと思うよ？ それに雛森ちゃんも三席の蟹沢ちゃんも美人だし、目の保養もばっちり」

「まるで俺の代は無能しかおらへんかったみたいだな事言うなや！

……ほんでその”蟹沢”言う娘んコトもうちよい詳しくゅう」

「蟹沢ちゃんかい？ 彼女は藍染に憧……いやあ両手に花で羨ましいねエ〜！」

またしても奴に毒された地雷女か。露骨に話題を逸らした京楽の肩を、平子は真意と真逆の笑顔で叩く。

「なんやなんや、そない五番隊が羨ましいんやったら先に言わんかい。七緒ちゃんもあの娘と親しいみたいやし隊首会で爺さんにアンタ等の異動を進言しとくわ」

「え”っ!?! いや隊長人事は四十六室案件だから山爺じゃ代えられないんじやないかなー？」

「なに声震わせとんねんシバくぞ」

一番隊の隊首室へ逃げる伊達男を追いかけながら、平子は重い溜息を吐く。

自分を五番隊長に任じる中央四十六室の意図は明確だ。同じ藍染の魂魄実験の被害者である立場を利用し、情報の宝庫である雛森の心を開かせたいのだろう。彼女の背後にいる、零番隊を動かせるほどの巨大なナニカに迫るために。

だが藍染の残した置き土産であるそのナニカが、それを許す生温い存在であるとは思えない。下手に刺激してあの絶大な力が今一度尸魂界へ牙を剥いた時、果たして止められる者はいるのだろうか。

「はあ、勘弁してやア……」

誰よりも先にその矢面に立たされる立場になろうと、自分しか適任がないのなら首を横に振る事はできない。

前途多難な未来に項垂れる平子真子とは、斯様に愚かで——立派な男だった。

「——五番隊三席隊長代理、蟹沢ほたるです」

そんな男を五番隊隊舎で第一に迎えたのは、大人びた眼つきとキュートなさくらんぼの髪留めが印象的な、茶髪の女死神だった。

思わず毎度の”初恋の娘”認定したくなる可憐な女性だが、相手の浮かべる営業スマイルがそれを許さない。

仕方なく普通の味気ない挨拶を交わす。

「話ん通り俺がお前らの面倒見る事になった平子真子や、よろしゅうな」

「雛森元副隊長が復帰するまで私が補佐に当たります。よろしくお願ひします」

「…つたく、聞いてつた以上の石頭やなア」

まずは隊長として自分の色を出さねばと自然に振舞う平子。しかし蟹沢は気の抜けた彼の態度がお気に召さず、社交辞令の笑みをスツと消した。怖い。

だが美女の能面なぞに怯むまいと新隊長は何とか言葉を続ける。

「…ほたる、お前今日はもう休みイ」

「……おっしゃっている事の意味がわかりません」

「ごこんトゴお前が仕事し過ぎつちゅー報告がぎようさん上がつとるんや。あかん時こそ肩の力抜かなぶつ倒れて隊が回らんなるで」

隊長格二人が同時に消え、大混乱に陥った五番隊を必死に束ねた蟹沢三席。この手の苦労人は責任感ばかりが突出して最も重視すべき自己の健康を怠る事が多い。不憫な部下に何故か涙腺を刺激された平子は、ほぼ善意で彼女に暇を与えようとした。

「…お気遣いありがとうございます」

だが札に対し、当の蟹沢の目は益々冷たくなる。

「ここは藍染元隊長と雛森元副隊長が率いておられた五番隊です。一番隊隊士にも勝る、優秀で高い向上心を持つ極めて優れた者のみが所属しております」

「お、おう?」

「私の席次は三番、副隊長に次ぐ最上位の席官です。藍染元隊長は体調管理もできない無能にそのような名誉ある地位をご用意してはくありません。三食の食事、十分な鍛錬と睡眠、ストレス解消に友人達との団欒など心身の健康にはしっかりと気を配っております」

「せ、せやったか…」

「また当然、隊長格長期不在の緊急時における隊士達の取るべき行動は詳細にマニュアル化されております。お二人の不在の間、私達はそれに従い一週間で混乱を収め戦時体制へと移行完了しました。隊長代理の私が空座町決戦のため隊を離れた際も、引継ぎを済ませた石和蔵四席の指揮の下大きな問題は起きておりません」

「……」

淡々と無表情で語られる超エリート集団五番隊の実情。大きすぎるジェネレーションギャップに平子は啞然とする。

「なお目下懸念される最大の問題は新隊長就任時の引継ぎトラブルです。担当する私が暇を頂戴するなど言語道断です。平子新隊長におかれましては我が隊独自の隊風から書式等公用文作成要領まで、こちらでご用意した二十六項目の必須事項を全て可及的速やかに把握習熟して頂きたく存じます」

そして最後に「よろしいですね?」と小首をかしげ、蟹沢はたる三席は改めてニツコリと新たな上司へ微笑んだのだった。

「――災難だったな、真子」

鬼のような五番隊教習初日が終わった夕暮れ時。瀨靈廷のとある居酒屋にて同僚の三番隊隊長・鳳橋楼十郎と九番隊隊長・六車拳西の二人と共に酒杯を傾ける平子は、久しぶりの筆作業で酷使した手首を労いながら一日の苦勞をグチていた。

「ホンマ俺、昔は喜助きすけん奴に偉そうな事言うたモンやなア。今度会うたら謝つとかなバチ当たるで」

「俺んトコも東仙の野郎を後五回はぶっ殺したくなるような職場環境だよ。あの裏切り者が…どの口で規律だの正義だの抜かしやがる…！」

「拳西もかい？ という事は僕が一番のアタリかな。三番隊ウチのイヅルはシャイだけど素敵な心の音を奏でる紳士だよ」

口々に語られる新隊長としての困難。彼等はいよいよ最近まで仮面ヴァイザードの軍勢を名乗っていた虚化死神、そして百年前に同隊の隊長格位に就いていた者達だ。その八人の中でも特に護廷の使命に燃える英雄…と隊には通達されている平子ら尸魂界ソウルソサエティ復帰組だが、実際はそう輝かしいものではないと彼等の辛気臭い食卓が雄弁に物語っていた。

「ホンマ、なんで俺がこんな苦勞せなアカンね――」

「――ホント、なんで雛森さんが隊長じゃないのよ…！」

突如ガン！と後ろで食器が鳴り、聞き覚えのある女声が平子の耳を劈く。嫌な予感に恐る恐る敷居越しの背隣席へ振り向くと、凄く記憶に新しいさくらんぼの髪留めがびよんぴよん跳ねていた。

「全く。百年前の藍染隊長の上司だか何だか知らないけど、せめて今の時代の仕事がわかる人にしてくれないと帳簿も書類表記も全然合わないじゃない。やっとあの子が帰ってきて隊に活気が戻ったのに余計な混乱持ち込まないで欲しいわ……」

「お、おい蟹沢ペース早すぎ。あと藍染”隊長”は不味いだろ……」

「青鹿君までそんな事言わないで頂戴。……たとえ尸魂界と敵対しても、私にとってあの人は永遠に私達五番隊の隊長なんだから」

……上司として聞いてはいけない会話が聞こえた。

一瞬で事情を察した平子ら新隊長三人組は無言で席を変えようと腰を浮かすも、直後六車に止められる。問題の蟹沢の卓には彼の部下——檜佐木修兵の姿。下手に立つと位置的に顔がバレてしまうため結局三人は身動きが取れず渋々座り直した。

「だ、だけどよ。事情があったとは言え雛森は護廷に剣を向けたんだぞ？ なあ檜佐木……」

「まあ、そりゃあんだけ暴れたらなー。空座町決戦で俺たち隊長格部隊が壊滅したのも大体あいつのせいだし」

「……記録は見たがマジだったか」

「ったく、何なんだあの強さ。あんな純朴そうな顔してあんなの隠してやがったのかよ……」

耳を塞いでも聞こえる気まずい会話から察するに、雛森桃の去就ネタを酒の肴にしているのは蟹沢の同期らしい。九番隊副隊長の檜佐木はもちろん、チラと覚えのあった青鹿の名も聞こえる。平子達^{ヴァイザード}仮面の軍勢の負傷者が世話になった四番隊上位席官のゴリラ男だ。

そんな彼等同期の否定的な意見に、酒精で耳まで赤い蟹沢が無然としながら二人を睨む。

「貴方たち、こうして三人で呑気にお酒を飲めるのもあの子に命を救われたおかげだっけ忘れてないかしら？」

「それは……」

「そもそも雛森さんが藍染隊長の陰謀に巻き込まれたのも、あの現世実習で私たち監督生が虚^{ホロウ}に無様にやられた代わりにあの子が戦ったのが切っ掛けになったのよ？ 自分の不甲斐なさで恩人の人生をめ

ちやくちやにしてしまったのに、それを棚に上げて彼女を悪人扱いするなんて恥知らずにも程があるわ」

『……』

蟹沢に「最低」と吐き捨てられ押し黙る男たち。

「雛森さんが尸魂界と敵対したのは本当にそうするしかなかったからよ。その罪も【魄内鬼道術】の功績で免除されたんだし後ろ暗い事は何も無いわ。わざわざあの胡散臭い仮面ヴァイザードの軍勢とやらを取り立てるくらいなら真っ先にあの子が隊長候補に挙がるべきなのに……！」

萎縮する檜佐木らに見守られながら、女死神は酒杯を高く呷り憤慨する。

彼女が推す雛森桃は、藍染惣右介にみっちり仕込まれた元部下であるため仕事が早く丁寧で、隊士全員から慕われる美貌と優しさを持つ素晴らしい上司だった。そして尸魂界離反を機に明らかになった、他の隊長格が一瞬で蹂躪されるほど強力な卍解。たとえ他の隊に雛森を疑う者がいようと、藍染隊長を継ぐ人物として必要なものを数多く持っている彼女を嫌う者など五番隊には一人もいない。

それに対し、蟹沢の新隊長・平子真子への評価は酷いものだった。「字が汚い」「すぐサボりたがる」「いやいや隊長やってるのが丸わかり」「雰囲気胡散臭い」「眼つきがいやらしい」「藍染隊長はもつと優秀で紳士的で格好良くて」等々半分以上は偉大過ぎる前任者との辛辣な比較故の落胆だったが、仮にもその前任者の上司であった平子にとっては十分すぎるダメージだった。

「まあ、なんだ。元氣出せよ真子」

「…俺の隊、こっから更にあの最強の地雷女が復帰して来んねんで？」

「それでも元氣出る魔法あんなら早よ出さんかい」

『……』

彼の涙目から無言で顔を逸らす同席の二人。それが客観的な平子の惨状を何よりも明確に表しており、彼らにできたのは哀れな同胞の酒代を奢ってやる事だけだった。

翌日、早朝の日の出。

飲み過ぎで頭が痛い…などと言う五番隊三席に相応しくない痴態は当然晒さず、蟹沢ほたるはソワソワと女子寮の前で待ち人が奥から現れるのを待っていた。

「——おはよー蟹沢。相変わらず朝早いわね」

あくび交じりに投げられた眠そうな声に、蟹沢は「あら？」と振り向く。そこに居たのは待ち人ではなく、空座町決戦以来の戦友、松本乱菊。

彼女もどこからか今日の復帰式の話聞いたようだが、いつも前にいる筈の小さな人影が見当たらないのは何故だろう。

「日番谷隊長はいらっしやらないんですか？ 珍しい…」

「ああ、ウチの隊長ならあそこよ。あの木の陰に隠れてる変質者」
「えっ？」

雑木林からコソコソこちらを窺っている隊首羽織の少年の姿に目を疑う蟹沢。あんな遠くで何をしているのか乱菊に問うと、呆れた顔で驚きの事実を披露された。

「あたしがお貴族サマの嫌味聞かされてる間に幼馴染二人で勝手に仲良く進展したらしくてね。隊長の顔を見ると雛森が恥ずかしがってマトモな会話になんないからああして離れてるの。バカみたいでしょっ。」

「あれから進展したんですか!! く、詳しくお願いしますっ！」

「ちよつと勘弁してよ、あたし昨日今日でもう十回くらい皆からこの話訊かれてるのに」

乱菊は辟易した顔で「馬に蹴られちゃうわ」と言いつつも、なんだかんだで詳細を語ってくれた。

悲運に引き裂かれた日番谷冬獅郎と雛森桃。身近な人物の壮大な恋物語が遂に前進した喜びに、蟹沢の乙女心も大いに荒ぶる。

：それでもやはり一番の安堵は大切な後輩の心。あれほどの不幸に苛まれた彼女が得た細やかな幸せに、ジーンと胸が熱くなる。

「よかった。雛森さん、元気になったのね…」

しかしそうつぶやく蟹沢の横で、乱菊が暗い顔をしていた。

「…ウチの隊長が側に居る時だけは何とかね。あたしと話す時なんか見え見えの空元気よ。別にあの子のせいじゃないのに会う度に『ごめんなさい』って謝られてる気がするわ」

「そうですか…」

「たとえ周りから許されても本人は一生引き摺っちゃうでしょうね…：例のきな臭い【叫谷勢力】とかの話もあるし、あたし達が支えてあげないと」

二人の女死神は神妙な顔で頷き合う。こればかりは時間が必要だ。慰めるだけではなく、親しい者達が共に気持ちを負う事で、彼女の心を軽くするしか方法はないだろう。

そんな二人の憂鬱な沈黙は、待ち望んだ少女の声で霧散した。

「——お、おはようございます…」

弱弱しい挨拶にハツと顔を上げる蟹沢達。その視線の先に、大切な後輩にして憧れのライバル——雛森桃が小さく佇んでいた。

「ッ、雛森さん…」

「…おはよう雛森、今日復帰するって聞いたから顔見に来てやったわよ」

駆け寄る二人へ少女が笑顔を作る。意識が戻ってから彼女の顔を見るのは初めてだが、目元の隈とやつれた頬が痛々しい。

三人の談笑は多忙な隊長格の時間に急かされ終わり、乱菊…と遠くの不審者を見送り、しばしの二人きり。意を決し先に口を開いたのは

雛森だった。

「蟹沢さん……あの、あたし……」

悲痛な緊張。必死に言葉を探す彼女の姿を見ていられず、蟹沢は優しくその震える体を抱き締めた。

「か、蟹沢さん……?」

「……落ち着いた?」

「え、あ……」

後輩とは言え仮にも元上司に馴れ馴れしかつたかもしれない。先ほどの松本副隊長のような親友の間柄でもない。

それでも勇気を出したお陰で、少女の青白い頬には微かな朱が浮かんでいた。照れているのだろうか、彼女のこういうかわい所は昔から変わらない。

謝罪しようとする雛森を制し、蟹沢はこれまで何度も考え行きついた一つの言葉を、潤む瞳の笑顔で口にした。

「——お帰りなさい、雛森副隊長」

その後、一応隊長として付いてきた気の利く平子と共に、蟹沢は雛森に付き添い護廷の各隊を回った。

これまでの事を詫び、コメつきバッタのように頭を何度も何度も下げる哀れな後輩。蟹沢にできたのは、どんどん憔悴していくその顔を胸が張り裂けそうな思いで見つめる事だけだった。

少ない救いは隊長格たちに大人の慈悲があつた事か。

十一番隊と十二番隊での決闘解剖騒ぎを除けば概ね穏やかに進み、浮竹や狛村などからは「無事で本当によかった」と手放しで復帰を歓迎された。他にも藍染の陰謀に気付けなかった事を悔やむ京楽、掟で

決した事に是非などないと割り切る山本と朽木、冷淡な事で有名な碎蜂もどこか態度が柔らかかった。

どうやら蟹沢の知る以上に雛森は悲惨な目に遭っていたらしい。先輩として口惜しいが、訊かない方が彼女のためだろう。

そんな謝罪回りの中、最も長く引き留められたのは三番隊と七番隊、そして九番隊。

いずれも前任の離反した元隊長、市丸ギンと東仙要と縁が深く、特に後者と仲が良かったらしい雛森も多く、事を語った。死者の意思を大切にしたいと核心的な事は黙したが、少女の言葉の節々から感じる彼への深い敬意に粕村と檜佐木も目を潤ませていた。

「東仙隊長は、藍染隊長にとって最も大切な忠臣でした」

「では何故ヤツは東仙を…」

その問いに、自分に真実を述べる資格はないと前おきながらも、雛森は泣きそうな顔でぽつりと呟いた。

「…東仙隊長は、いつも苦しんでおられました。そして藍染隊長は、一度認めた部下のためならば幾らでも泥を被れてしまおう、とても、芯の強い人でした」

「泥、か…」

「意地悪な人でした。尸魂界の敵になった人でした。…でもあたしにとって藍染隊長は、どれほど感謝してもしたりない…」

—— 大切な、

恩人なのです。

そう言葉を絞り出す少女を責める者はおらず、同じく藍染に憧れていた蟹沢も、静かに涙を流す。

彼女は知っているのだ。藍染隊長が何故尸魂界を裏切ったのかを。そしてその理由が決して、皆の言う私利私欲のためではないのだと。

真実を知る事は出来ずとも、恩人の不名誉に耐え忍ぶ後輩の背中を見つめるだけで、蟹沢は不思議と救われる気がした。

藍染隊長は、自分の知る偽りの仮面の彼よりは邪悪な方なのかもし

れない。でもその邪悪な本性の中にも、自分が憧れた誰よりも優れた気高い死神の姿は……確かに、あったのだ。

「——やっと終わったわア……」

鬼道衆や四十六室など瀟々たる隅々まで回る事、三日。その内丸一日を貴族の嫌がらせて浪費した蟹沢ら三人はようやく五番隊隊首室にて緊張の糸を解していた。

「…平子隊長、蟹沢さん。その…この度は本当にありがとう——」

「あーもう毎日毎日聞き飽きたわソレエ！　まったく誰に気イ遣うてんねん。そない思い詰めてばっかやとすぐハゲるで、桃」

「ちよつと平子隊長、雛森副隊長の想いを何だと思ってるんですか！　あと神聖な五番隊隊首室の応接間で寝そべらないでくださいっ！」

共に修羅場を潜り抜けたからか、あるいは平子の人間的魅力がそうさせるのか。謝罪回りの前よりは打ち解けた隊首脳陣。何もかもが完璧な藍染隊長とは真逆のズボラな男だが、彼は時折見せる真剣さや温かい気配りのギャップで人の心を掴む天性の上位者だった。

彼ならば自分のように雛森さんの味方になってくれるかもしれない。そんな期待を込めて、蟹沢は平子の前に書類の山をドンと置く。「…さあ、そろそろ要領も身に付いているはずですのでこちらの分をお願いします」

「ちよ、もうちよい休憩させてやア！　つかなんやねんこの量、俺書類仕事なんて百年ぶりやのに無理に決まっつとるやろ！」

ソファアから飛び起き床を四つ足で後ずさる平子。藍染とはあまりに違う幼稚さに蟹沢は雛森と揃って彼へサルを見るような目を向ける。

「あの、この量なら藍染隊長はもちろん東仙隊長や市丸隊長も半刻で終わらせてましたけど……」

「百年間も書類を触った事がないって、ジャングルにでも住んでたんですか？」

「…思い出したわ。昔藍染隊長が平子隊長の事を話してくださった時に…」

「！ 雛森副隊長、それは？」

「……い、いえ。平子隊長の名誉のために言わない方がいいような内容でした」

「お前ら絶対俺ン事嫌いやろ!?!」

部下たちから隊長としての能力を疑われている現状に焦りを覚えたのか、文がダメならと平子が立ち上がる。

「ッ、せや斬拳走鬼や斬拳走鬼！ 死神の仕事は瀟靈廷を守る事！

書類仕事なんてお前ら下っ端がやるときやええねん！」

「…斬拳走鬼？ 鍛錬でしたら練習場の申請書をこちらに…」

「どうせいつもの逃げる言い訳ですよ。雛森副隊長も律儀に対応しなくていいですから」

端から無視を決め込む蟹沢。だがその時、渾身のドヤ顔を見せる平子が聞き捨てならない事を口にした。

「シャラップ！ お前ら二人とも随分鬼道ン成績ええけど、実は俺も昔藍染のハゲに教えてた事あんねんで！」

「!? ひ、平子隊長って藍染隊長の鬼道の師匠だったんですか!?!」

「……ハゲにされたのは平子隊長では？」

目の前の威厳ゼロな男があゝの藍染隊長の師匠。驚愕の話に蟹沢は一人仰天する。

「おう、せやでせやで〜？ お前らが『藍染隊長うう〜♡』言うて崇めとるあいつも昔はかわええ若造やったわ」

「藍染隊長が…若造…」

「なんや、ちったア俺の事尊敬する気イなったか？ は〜〜〜どないしよつかなく〜〜？ 今まで散々舐められてもうたしなア〜〜〜？」

俄かに信じられず、ウザい顔の平子の佇まいを真剣に探る蟹沢三席。上手に抑えられているが、なるほど確かにかなりの霊圧を感じる。それまで完全に見下していた男の驚くべき過去を知っただけで、途端にその剽軽な態度が大物っぽく見えてしまう。

まさか、本当に彼は藍染隊長の上司に相応しい人物だったのでは。

そんな考えが浮かんでしまった事実には愕然とした女死神は、何としても憧れの人の名誉を守らんと拳を握りしめた。

「……わかりました。平子隊長の鬼道練習、私がお相手いたします」

「おっ、ノリエえやんほたる。ほな後から付いて来イヤ！」

”鬼事”ですか、負けません……！」

百年経とうと変わらない、死神同士の鍛錬の定番だ。蟹沢は室内で平子とほぼ同時に瞬歩を操り、揃って流魂街の練習場へと場所を移す。

「あれれ〜、藍染の部下にしては威勢だけやなア？　ホラホラお気に入りの髪留めもーらいっ」

「なっ！　く……子供ですか！」

ふざける相手を全力で追いかけるも、蟹沢は完全に遊ばれてしまう。悔しいが相手は腐っても隊長格。こんなデリカシーの欠片もない男が実力者である事を突き付けられる度にこの世の理不尽を感じてしまうが、彼女のプライドは鬼道にこそあった。

「逃がしません！」

——縛道の五十八・掴趾追雀

雛森に触発されて編み出した独自の鬼道コンボ。元は霊圧から対象の正確な位置を突き止めるためのみの術だが、連続詠唱を行う事で応用が可能となった。

「…捕捉完了！　往きなさいっ！」

——縛道の六十二・百歩欄干

「おおおお！」

射出された無数の細い杭を平子が避けた瞬間、それらが一斉に反転し逃れた男へ再度殺到する。

「なんやなんや、霊圧ロックオンして追尾させとんのか？　オモロイ使い方するやつちやなア！」

「ッ、余裕ですね……！」

「そら俺仲間にもっと凄いモン使うハゲおるしい？　何なら——」

——破道の五十七・大地転踊

直後、平子の周囲の岩石が百礫、目にも止まらぬ速さで百本の銀杭

を撃ち落としました。

「――ハエなら現世で山ほど叩いて来てんねんで、俺?」

啞然とする蟹沢へ新隊長がニイと並びの良い歯を見せる。

「下位番号の破道で…完全相殺ですって…!?!」

「びっくりすんのソコかいな。妙なアレンジ加えんのが今の流行りか知らへんけど、言霊にその分の容量割いたら術自体の完成度は下がるに決まっとるやろ。自作鬼道なんて百年早いわボケ」

詠唱破棄の六十番台を使った複合鬼道。その難易度の高さは並の隊長格でさえ満足に使える者は数えるほど。三席の彼女を平子が「まだ早い」と窘めたのは厳しいながら当然の言葉だった。

「くっ…なら――」

だがこれは誇りがかかった手合わせ。このままでは終われない。

蟹沢は斬魄刀を引き抜き、自身の持つ最高位の破道を、その完成度を自慢するように詠唱する。

「…咲き狂う鉄の華。駆け抜ける曲輪の蹄。旋風・迅雷・瞬遁しゆんぎの標石。薙げば閃光、斬れば雷鳴。双子の死血を片刃で啜る」

「はーっ、三席が七十番台後半の破道! ったく藍染の野郎、こない優秀な娘残してくとかどんだけ傲慢やねん」

「ッ、黙れ! 藍染隊長の事を悪く言うなッ!」

やはりこの人とは相容れない。綴った言霊が抜いた刀身に青色の霊圧を纏わせ、女死神は全身全霊の一撃を目の前の法螺吹き男へ振り下ろした。

「はあああああッッ!」

――破道はどうの七十八・斬華輪ざんげりん

空座町決戦で敵の従属官フラシオンを相手に大立ち回りを見せた彼女の奥義。

霊圧の斬撃が土煙を上げながら疾走する。

「ッチ、しゃーないなア」

その進む先には、無造作に片手を正面へ向ける男の姿。金色のおかつぱ髪を靡かせながら、新五番隊長・平子真子は、無礼な部下に自らの背負う名の”格”を見せつけた。

「…避けエや、ほたる。怪我じゃ済まへんで」

——はどう破道の八十八・飛竜撃賊震天雷炮ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

一瞬、蟹沢は何が起きたのかわからなかった。突如目が眩むような閃光が瞬き、直後何かに引つ張られるような感覚の後、気付けば自分の立っていた地は背後の丘ごと溪谷のように抉り消えていた。

「か、あ…」

「何するんですか平子隊長！ 蟹沢さんに当たってたらどうするつもりだったんですか！」

茫然自失としていると、ふと体が柔らかい何かに抱き締められている事に気が付く。

「この俺が当てるワケないやろ、アホか！ デカい霊圧の余波ぶつくて頭冷やさな思っただけやねん！」

「だったら縛道でいいじゃないですか！ あたし知ってるんですからね、平子隊長が結構大人げない事っ」

「はあー？ どうせ藍染の私情たつぷりな話鵜呑みにしとるだけやろボケ！」

「私情も何もあの入完全に平子隊長の事を飽きたオモチャとしか見てませんでしたけど!?!」

「なんやてエ!? あのハゲくたばってなお俺ン事おちよくってくるんか…!」

「くたばってませんしハゲにされたのは平子隊長ですっ!」

「どんだけあの話拡散させてんねんあいつ!!」

爆音で遠くなった蟹沢の耳に男女の言い争う声が聞こえる。呆けた頭のまま見上げれば、それまでの後ろめたそうな遠慮を取り払った、怒りに赤らむ顔の雛森桃が。

「全く…蟹沢さん、怪我はありませんか？」

「あ、あ…」

「毛がない!? 今俺ン事見て毛がない言うたかおんどれ!!」

「平子隊長は黙っててくださいっ!!」

蟹沢の体に巻き付いていた鬼道の帯が解かれる。初対面の現世演習でも同じように自分を救ってくれた、雛森桃の【這縄】。

その強烈なリフレインに、女は万感の思いに打ちひしがれた。

…悔しい。情けない。

本当は彼女、雛森桃の事が羨ましかった。妬ましかった。誰よりも藍染隊長の側に居て、目をかけて貰えて、離反の一大計画においても共に歩む事を許された。

日番谷先遣隊から上がった彼女の真の実力に関する情報も信じられなかった。信じたくなかった。空座町決戦で実際に彼女の戦いを見てしまった時も、蟹沢はまるで夢を見ているような感覚だった。

だが、圧倒的な差への無意識の現実逃避も、最早限界。憧れの藍染と因縁がある平子に意地を張って対抗しても、結果はこのザマ。やはり自分は、あの人選ばれなかった無価値な敗者なのだ。

「——雛森副隊長!」

しかし。

ならばせめて。せめてこの曇った目を覚ましてくれる人くらいは自分で選びたい。

蟹沢は、気付けば眼前の長年のライバルへ頭を下げていた。

「…恥を承知でお願いします。藍染隊長の名誉を守ってください…っ!」

「えっ?」

「は? ちょ、待てや桃は反則やろ! そいつ浦原の結界ン中で八番台の三重詠唱カマした鬼道長レベルのバケモンやで? 人間の土俵にゴリラぶちこむなや…」

「反則じゃありません! これは藍染隊長が作り上げた我々五番隊の沽券に関わる事なんです! 雛森さん、あの子の愛弟子として、どう

か……！」

勢いに任せ懇願する女死神。その頭上で雛森が「…才…値が、いやでも…」と小さく独り言を繰り返す。

そして短い逡巡の末…

「…：わかりました」

少女が抱える蟹沢を優しく立たせ、首を縦に振った。

「雛森さん…！」

「…な、なあ桃？　せめて何するかくらい言うてや…？」

平子の問いに雛森が振り返る。そこにあつた彼女の笑顔に、二人は思わず硬化した。

「決まっていますよ、藍染隊長の代名詞とも言える最上位鬼道です」

ゾワリと大気が震える。桁違いの気配が少女の体から立ち上り、その掌に漆黒の霊圧が不気味に渦巻く。

「…範囲はあの大岩が丁度いいですね。行きます——」

破道はどうの九十くわじゅう・黒棺くわん

その瞬間。十丈はある巨大な岩が闇の匣に包まれ、消えた。

文字通り包まれた面が磨き上げられた壁のように垂直に切り取られ、内部の質量そのものが跡形もなく消失したのだ。

「…きゆ、九十番台詠唱破棄…」

ここに至って、絶句以外の表現は必要ない。歴代の護廷隊長さえ使えるものは一握りと言われる九十番台の鬼道。どれもが一撃必殺に等しい威力を有し、その多くは禁術に指定される。蟹沢自身、その壁の足元にさえ立てていない究極の領域だ。

「……ホンマ、勘弁してやア」

黄色い声が響く練習場の端で呟かれたそんな独り言は、されど誰の耳にも入ることはなかった。

おまけ・全部：月島さんが居たからじゃないか：！篇
全部：陰謀さんが居たからじゃないか：！

ソウルソサエティ
尸魂界の中心、瀨靈廷。

だいいいしよかいろう
大霊書回廊に隣接する情報集積機関【映像庁】庁舎の一室に、幾人もの死神たちが集まっていた。

研究者然とした鋭い目に油断はない。だが一同が揃って身に着ける牽星箱の髪留めと銀白風花紗の羽織は、彼等のやんごとない身分を示す証である。

「——何かに利用できると監視機能を備えさせたが、まさかこうも都合よく事が運ぶとはな」

死神たちが見つめる先にあるのは無数の映像画面。とある現世の家屋をあらゆる角度から映すそれらの中では、複数人の人間の集団と、一人の死覇装の男が談笑していた。

作戦の標的である、稀有な霊能力者の一団だ。

「やはり無力な人間共の方が効率よく」保有者をあぶり出せる「彼等の存在を他に認知される事は絶対に避けねばならぬ。モタモタしていると護廷十三隊に嗅ぎ付かれますぞ」

焦りを滲ませる壮年の女の声に、周囲が頷く。昨今の尸魂界における技術発展を考えれば、この規模の現世活動を長く隠蔽するのは難しいと誰もが理解していた。

” 隅立て四芒星” の家紋を背負う彼等は綱彌代一門衆。尸魂界の歴史を司る四大貴族家筆頭であり、その伝統からあらゆる情報を集め管理する事に狂気的な情熱を注ぐ者達だ。

此度の計画は、その管理すべき情報の中でも最重要機密に分類されるこの世の神秘。三界の各地に散らばった神の因子。

【霊王の欠片】の回収だ。

「…では御所様、そろそろ」

「うむ」

映像画面に映る若い黒髪の死神とその同胞達を眺めながら、老齢の男が頷く。

あらゆる霊なるものの頂点にして要石たる超魂魄、霊王。その爪一片であろうと手にすれば、万物の魂の使役を可能とし、絶大な霊力を育む。古代の英雄を冒涇した彼等四大貴族の罪の証であるそれらは、皮肉にも彼等の狂氣的な知識欲を満たす最高の玩具でもあった。「これより危険分子【完現術師】^{フルブリンガー}の殲滅および魂魄回収作戦を開始する。尸魂界の恒久的平和のため速やかに行動せよ」

『御意！』

潜伏させた私兵団に指示を飛ばし、映像室一同は立て続けに送られてくる吉報に笑みを深めていく。そして作戦に従事する団員達より、標的との戦闘による味方の死傷報告が上がった時…

貴族たちは作戦成功の拍手を上げた。

「…さて諸君、痛ましい事が起きた。当家の大切な私兵が現世演習中に、例の死神モドキとその一派に襲われたのだ」

「許せませんな。即座に四十六室へ報告し、しかるべき法的措置を」

「直ちに」

「保証人の浮竹^{うきたけ}にはこちらから証拠映像を送っておく。可能であれば主犯格への報復許可も引き出せ。兵たちの仇は当家が取らねばな」

退室する末席の男の背を眺め、満足そうに煙管に火を灯す老齢の当主。彼の小さな眩きは、一族の、そして尸魂界そのものの抱える闇の深さを不気味に物語っていた。

「…君の働きは、君のためのみに用意された制度に新たな価値を生んだのだ。尸魂界の歴史の一部となれる事を光栄に思い給えよ…」

現世は某所。

人目を忍ぶように建てられた粗末な家屋に、高揚感に頬を赤くしている十名近い人影が集っていた。女子供から老人まで、年齢性別に隔たりのない奇妙な一団。だが彼らは等しく、己の人生の全てを懸けてこの地に集まっていた。

「——待たせたな、みんな」

深夜0時の鐘がなってしばらく。家屋の扉が開かれ、澄んだ笑みを浮かべる黒い袴姿の青年が現れた。その齒の眩しさに引き寄せられ、一斉に口を開く集会の面々。

「ほ、本当にこの力を消し去ってくれるんですか…!？」

「ぼく、もうみんなにいじめられない…?」

「あの化け物にも襲われなくなるのよね? そうなんでしょ?」

「ああ…これで逃げた妻も戻って来てくれる…!」

苦しむ人々の声を聴き、若き青年は彼等に寄り添いながら肩を叩く。

「大丈夫だ。ここにいる何人かには見せる機会があったから、嘘じやねえってのはそいつ等が知ってるぜ」

「おお…!」

「今日からあんた等はユウレイに振り回されなくなるし、あの化け物

共にも襲われない。周りに通報されたり見世物になつたりもしない——周りと同じ”普通の人間”になるんだ！」

室内は歓喜と安堵の声に満ちる。涙を流す者、感情のまま大はしやぎする者、聖印の首飾りを握りしめる者。彼等の笑顔を眺めながら、青年は誇らしさに胸が熱くなる。

かつては自分もそうだった。生まれ持った特殊な力に振り回され人間として生きる事ができなかった。

だが青年は死神の力に目覚め、その社会と役割を知り、己の不運と折り合いをつける事ができた。そして彼はある経験を経て力が覚醒し、その本質に気付いた時、一つの願いを抱いた。

自分のような霊能力者たちを苦しみから解放したい。俺には手にする事ができなかつた、平凡で当たり前の幸せを掴ませてやりたい。それを成すために、この忌々しい力が自分の身に宿っているのだと信じて。

「……!?!」

その時。

不意に強い霊圧が周囲に満ち、青年の肌が粟立った。

「何だ今のは…?」

「……少し様子を見てくる。お前らは静かにしてろ」

「は、はい……!」

急いで展開した霊圧感知に幾つかの大きい気配を感じる。物々しい雰囲気戸惑いながらも、彼は慎重に家屋の外へ出た。

「死神…?」

夜闇の中に立っていたのは、死覇装を着た数名の男。この町の担当ではない知らない連中だ。

誰かが会いに来るなどと言う話は尸魂界から聞いていないが、一体何事だろう。首を捻りながらも青年は緊張を解き、懐の代行証を彼等へ提示する。

「…死神代行の銀城空吾だ。ぎんじょうくうご あんたら見ねえ顔だが…どこの隊だ？」

そう問うも、返事は相手の鞘から抜かれた人数分の斬魄刀のみ。突然の敵意に青年は慌てて両手を上げる。

「お、おいおい浮竹隊長うきただけから何も聞いてねえのか？ …おかしいな、コレ見せたら話は通るって——」

だが彼が言い終わる前に、突然背後で大勢の悲鳴が木霊した。

「な……!?!」

何事かと振り向き見た光景に青年は絶句する。十人近い新たな死覇装の集団が、彼の呼び寄せた霊能力者たちへ襲い掛かっていたのだ。

「ど、どういう事だよ……止めろ…止めろッ!! あいつら一体何して…なんで死神が人間を襲ってやがんだよ!!」

「——銀城空吾」

「…ッ!」

走り出そうと一歩を踏み出した青年を、死神達の一人が制止する。

「完現術師共の収集フルプリンガーご苦労、貴様の働きを尸魂界は大いに評価している」

「ふるぶりんがー…収集…? ど、どういう事だ!? なんでこんな事をしやがる!!」

目の前の信じ難い惨事に重なり言われた、意味不明な労いの言葉。だが大混乱に優柔不断となった銀城を放置し事態は更に悪化する。

「——ぎ、銀城さん…! 貴方最初からこれが狙いだっただの!?!」

突然、怨嗟の声が男の耳を劈いた。プロポーズしてくれた恋人のために普通の人間になりたいと、はにかみながら今日の集会に参加した妙齢の女性の霊能者だ。

「こいつ等…服が銀城さんと同じ黒い着物だ…!」

「私達を集めて殺すつもりだったのね!?!」

「う、嘘つき! 裏切り者!」

「助けてくれるって…普通の人間に戻してくれるって約束したのに!!」

目の前で、自分と同じ死覇装を着た敵に無残に殺されていく同胞達。その彼等から次々に向けられる憎悪の罵倒に銀城は愕然と立ち尽くす。

「ち、違う……俺は……俺は……ッ」

なんだこれは、一体何が起きているんだ。味方であるはずの死神達の振るう凶刃に圧倒されながらも、青年の脳は辛うじて現実を直視する。

収集。働き。尸魂界が評価する。それらの言葉が導く、この光景に最も相応しい推理はたった一つ。

「……利用……され……」

そうだ、俺は利用されたんだ。銀城は漸く悟る。

霊界の理上の理由か、あるいは排他精神による異端排除か。死神勢力にとって存在が不都合な人間の霊能力者達を消すために、自分は撒き餌として泳がされていたのだ。

思えば以前から違和感があった。

仮にも人間の身で死神の最終奥義である卍解にまで至り、更には虚^{ホロウ}の、そして正体不明の霊能力まで有していた三重能力者^{トライブリッド}、銀城空吾。魂のランサーである死神達がそれほどのイレギュラーを現世で野放しにする事はありません。

しかし紆余曲折の末、彼等が青年に強制したのは虚退治の決まり事と、代行証の携帯のみだった。世界一つを支配する巨大組織【瀨霊廷】にしてはあまりに杜撰なリスク管理だ。

銀城は自問自答する。虚退治の際、尸魂界はどうやって自分に虚の出現信号を送ってきた？ これまで接触があつた十三番隊の隊士達はどうやってこちらの位置を把握できた？

何より死神達はどうやって、今夜に霊能者達の集会がある事を、そして銀城が彼等を集めている事を知った？

「あ……」

ゆつくりと、青年は自らの代行証へ目を向ける。死を示す髑髏のエンブレムが刻まれた多角形の木板。

「あ、あ……」

その髑髏の暗い眼孔の奥に、銀城はこの地獄を生み出した悪意の蠢きを幻視する。

彼自身の愚かさ故に見抜けなかった、人間の守護者を騙る死神共の本当の姿が……

「あ……ああ、ああ” あああああアアア”ア”ア” ■” ■” ■” ■” ■!!」

絶望の金縛りが憤怒の力で解かれる。体中に虚の霊圧が満ち、虚髄に塗れる銀城は憎悪の獣と化す。

かくして仲間達を、救いたかった同胞達を殺した仇敵共へ、堕ちた青年は復讐の刃を振り下ろした。

「ッ、銀城空吾による敵性行為を確認！ 作戦を乙より丙へ変更！」

「映像記録開始！ ”ぐあつ、死神代行が暴走を——！”」

「……！」

「」

†††

「——銀城……！」

遠くで聞こえた声が眠る意識を浮上させる。ハッと目を覚ました

男——銀城空吾は、自分を心配そうに見下ろす長身の青年の顔を見て、深い溜息を零した。

「…ツチ、やなモン夢に見ちまったぜ」

「かなり魘されてたけど大丈夫かい？ 調子が悪いなら予定を変える手もあるけど…」

能力の都合上、常に仙人のように空虚な雰囲気を纏うコイツにしては珍しい、焦燥の色。苦い顔をする仲間の提案を振り払い、銀城は寝そべるソファから腰を浮かす。

「…そんなに怖えか？ お前が見たって言う例の女は」

以前聞かされた最大の不確定要素について問うと、青年の表情が陰しくなる。かの”警戒対象”との最初の遭遇から何度かアプローチを変えて挑んだらしいが、晴れない顔を見る限り未だ状況打開には至っていないようだ。

「…あの女の事も含めてさ、もう一度考え直してくれないかな？

半死神なんて、別に”彼”に拘らなくても僕が何人だって用意して——」

「らしくねえな、つきしま月島」

仲間の言葉を遮り、銀城は部屋の出口へと歩き出す。その口角は、かつての澄んだそれとは大きく変わってしまった、暗く獰猛な笑みしか作らない。

「漸く、勝ち目しかなかった俺達の盤上をひっくり返せる奴が現れたんだ。それでこそ”勝負”ってモンだろ？」

そう笑う男を悲しげに見つめ、少しの逡巡の後。長身の青年が無念に肩を落とした。

「……なら勝負事が苦手な僕は、神へのお祈りを練習しとくよ」

「お前が神にだア？ ハッ、ギリコの奴がキレなきやいいがな」

暗い顔の仲間を背に、愉快に鼻を鳴らす銀城。神に等しい力を持つ

野郎が随分と殊勝な事だ。

…あの裏切られた日から変わった事が二つある。

一つは己の完現術フルプリングの力が死神の力を喰らい融合したこと。

結構な事だ。そうでなければ憎悪のあまり、あの惨劇の場に自身の代行証を投げ捨てていたかもしれない。

奴等への復讐に相応しい断頭刃、クロス・オブ・スキヤッフオールド「処刑台の十字架」。ネックレスの十字印とかけ合わせる事で発動するその力に、男は初めて名を付けた。

そして、あの日から変わったもう一つの事が…

「——何、銀城もう行くの?」

不機嫌そうな女の声が銀城の背に投げかけられる。それに続き、他の男女三人の声も。

「…本当に一人で大丈夫なの? せめてリルカ一人くらい…」

「そうそう、頭の悪そうな女子がいたら向こうも多少警戒緩むと思うし」

「なーんですってエ!？」

「仲間をあまり頼って下さらないのは銀城さんの悪い癖ですからねエ」

程度の差はあれど心を配ってくれる同胞たち。バラバラの”弱肉”の分際で、馬鹿に寛容すぎるこのふざけた世界を崩そうと目論む、自分と同じ愚かな連中。どいつもこいつも心の何処かがぶつ壊れている狂人共だが、だからこそ俺のような惨めな復讐者にも手を貸してくれるのだろう。

だから、せめて。

「こいつは俺のケジメなんだよ。同じ、死神代行の後輩へのな…」

ぶつくさ五月蠅い背後へ「俺の幸運でも祈ってる」と言い残し、男は”二度目”の仲間達に見送られながらアジトを後にする。

目指すは隣町、空座町。

標^{ターゲット}的は自分の後輩にして、靈界を救った無垢な英雄。

己の因縁に終止符を打つため、銀城空吾は長年の雌伏の日々と決別する一步を踏み下ろした。

「……違うよ銀城。僕たちが祈らないといけないのは、幸運じゃない」
既に進み出した男の耳に、そんな仲間の青年——月島秀九郎^{つきしましゅうくろう}の呟きは、届く事はなかった。

——英雄を辱めた僕達が祈るべきなのは……

……英雄の守護女神の、寛大な慈悲なん

だよ。

全部：遭遇さんが居たからじゃないか…！

†††

「——だーかーらーっ！ 見えてるから出てけっつってんの!!」

四月初週の空座町。

霊媒体質な黒崎一家は今日も騒がしかった。

騒音の元は風呂場の中で暴れる入浴中の少女。

虚空へ怒りながら、「セクレイ X」^{エックス}などと銘打たれた怪しいスペーラーを思い切り噴射する彼女は、別に狂人でも何でもない。ただ人よりの靈感が強く、見えてはいけないモノが見えてしまう一家の末娘だ。

「おい、中学にもなつて風呂でばしやばしや遊ぶな夏梨^{かりん}！」

「遊んでないっ！ コイツがあたしの…！」

廊下から「俺のお湯がなくなる」と怒鳴る兄へ弁明したい思いを堪え、次女——黒崎夏梨^{くろさきかりん}はムツスリと謝罪する。今となつては何かと自粛してしまうデリケートな話題だ。言わない方がいいだろう。

撃退した見えないナニカを睨み付け、年頃の少女はさっさと着替えて脱衣所を後にした。

——ユウレイは、好きじゃない——
夜中。

嫌な気配を察知した就寝前の夏梨は、布団の中に溜息を残して家を出る。勿論家族に気付かれないよう窓から慎重に。

兄の黒崎一護^{くろさきいちご}が人知れぬ戦いの代償に”霊力”と呼ばれる力を失つてから、一年と半年。当時小学生だった妹の夏梨は無事中学一年

生に進学していた。

母の六度目の命日に化け物に襲われたのを切っ掛けに、地元のカ
共と組んで悪霊退治をやる事が多かった夏梨。成長につれ強くなっ
た己の霊力で、彼女は兄の代わりに家族や町の人々を守る戦いに身を
投じた。

無論一人ではない。兄に同級生の仲間達が居たように、夏梨にも腐
れ縁のような同業者がいる。

「——ケツ！ 女が夜更かししてんじゃねーよ、引っ込んでな！」

夜の街を走っていると、屋根伝いに跳びながら宙を並走する二人組
の子供が現れた。ムツと苛立つ夏梨は同じように霊力を使って屋根
へ跳躍する。

「うっさい！ あんたじゃ不安だからワザワザあたしが出て来てやつ
たの！」

「これでも急いだ方なんだけど…」

「えっ？ あ、雨ウルルじゃないよ？ そっちのデコッぱちが頼りないから
さ」

「デコッぱち言うな暴力女！」

巨大な筒を抱える大人しい黒髪の少女・紬屋雨つむぎやウルルと、武骨な金棒を握
る喧しい赤髪の少年・花刈ジン太はなかり。例の胡散臭い霊媒芸能人の一件
から続く妙な関係だが、いがみ合いながらもそれなりの信頼を寄せる
戦友である。

三人の戦う敵は、人を喰らう堕ちた悪霊——虚ホロウと呼ばれる化け物
だ。

「あーもう、明日入学式で早起しなきゃだから急いで片付けるよ！」

「わたしも始業式あるからいつものアレでお願い、ジン太君」

「てめえら俺に命令すんな！ 行くぜ無敵鉄棍あいつ ぼうツ！ 伝説のオオク
〜」

——ジン太ホームラン——

低空で獲物を探す隙だらけな怪物へ向け、少年が右手の得物で霊圧

の砲弾をかつ飛ばす。最近腕を上げたのか一撃で敵の体がバラバラだ。

「あ、ヤツベ」

…だが詰めが甘いのは変わらない。

「ほーら！ あんたに任せてたらずぐ町中に被害が出るのよバーカ！」

「夏梨さん、右側の肉片の処理をお願いします！ わたしは左を…発射！」

——千連魄殺大砲——

飛び散る大質量の四肢を迎撃するためウルルの攻撃が空を舞う。毎度お馴染みロケットランチャーの大活躍。

夏梨も負けられないと足元に二つの霊力球を作り、全力で戦闘に参加した。

「任せろ！」

——カリン流絶命 D ドツベルバツク B ——

三人の健闘で虚は消滅し、無事空座町に平和が戻る。流石に女子中学生にもなつてヒーローの真似事は恥ずかしいが、毎日こうして陰で家族を守ってくれていた兄の事を考えると確かな誇らしさが胸に湧き上がる。

今度はあたしが一兄を守ってみせるんだ…と。

「——義務教育の子供がこんな夜更けに感心しないな」

そう気持ちを新たにすする夏梨達へ、深夜の暗闇から話しかける者がいた。振り向き見たその青年の正体に三人は苦笑いを浮かべる。

「こんばんは、三人共。見事な手際だったけど虚退治の担当は区画毎に決まってる筈だよ。ダメじゃないか」

「ゲツ、石田…」

「こ、こんばんは」

街灯のネオンに眼鏡を光らせ近付く彼の名は石田雨竜^{いしだうりゆう}。夏梨の兄

の仲間で、虚退治の口うるさい同業者だ。

「お、お前が遅かったから俺達がワザワザ倒してやったんだよ！ 説教されるいわれはねえ！」

「攻撃する寸前に君達が現れたから控えたんだ。もう少し周りの霊圧に気を付けなさい。それに夏梨ちゃんは明日大事な入学式だろう？」

怪我でもしたらどうする」

「う……」

呆れるように「黒崎が心配するよ」と正論を突き付けられ、少女はぐうの音も出ずに目を逸らす。

「全く、浦原さんも僕に虚退治を頼んでおきながら何故子供たちを……」

「……店長、破アランカル面との戦いが終わってからずっと忙しそうだし多分気付いてないだけだと思います」

「研究中に邪魔しちや怒られちゃうからな。それにあの程度のザコ虚、俺達だけで十分だぜ！」

胸を張る赤毛小僧の言葉に、夏梨はふと夕方の風呂場での騒ぎで対幽霊グッズを切らした事を思い出した。明日にでもこいつ等が働くあの胡散臭い商店で買い溜めしておこうと脳裏の予定表に書き込む。

その後、長くなる説教の予感に一目散に逃げ出したジン太をウルルが追い、夏梨は眼鏡の高三生徒会長の小言に独り耐え忍んだ。

とはいえ根は優しい善人なのか、「家まで送るよ」とまで気を遣われでは無下にも出来ない。兄の友人と二人きりという気まずい空気と格闘しているうちに、少女は見慣れた『クロサキ医院』の看板の前に立っていた。

「あ……あのさっ！」

「ん、何かな？」

別れ際、夏梨は咄嗟に彼を引き留めていた。

「……兄いむち、学校で元気にしてる……ますか？」

我ながらブラコンが過ぎると自覚している。だが普段から見栄っ張りで無理ばかりしている一兄が悪いのだ。

霊力を失った黒崎一護は妹たちの目の無い所でどんな様子なのか。ずっと気になっていた少女へ、問われた石田は優しく微笑んだ。

「安心していいよ。一昨年のように全能感で調子に乗ってないだけで、騒がしいのは相変わらずだから」

小さく「おやすみ」と手を振り去って行く青年を見つめ、夏梨は胸を撫で下ろす。

優しく、かつこよくて、家族思いな理想の兄。双子の姉の遊子ゆずのようにべったりではないが、夏梨も兄の事は大好きだ。こうして町の平和を脅かす虚と戦い続けていると余計そう思う。

男子のプライドか、兄の威厳か。夏梨からすれば無事でいてくれる事以上の望みなどありはしないのに、靈力を失ってからの一兄はいつも元気が無いように見えた。だが彼が普通の学生生活に少しでも幸せを感じてくれていいるのなら、自分はその幸せを守るためにどんな過酷な戦いにだって飛び込んでやる。

…そんな健気な妹の覚悟と絆が、卑劣な手により知らぬ間に冒瀆ぼうとくされていたなど——黒崎夏梨は最後まで夢にも思わなかった。

あれから二度目の桜の季節がやってきた。

花びらの舞う空座第一高校の通学路をぼんやりと歩きながら、新三年生となった巨漢——茶渡泰虎さどやすとらは近くて遠い過去の思い出を想起していた。

「——おーっす、チャド」

ふと肩を叩かれ振り向く青年。そこに輝くオレンジ色の髪を見て、茶渡は軽い返事を返す。

「…ム、一護か」

「なんつーか三年つっても実感湧かねえよな。…ってうわっ、なんだその顔!? お前ヒゲ伸ばしたのかよ」

たじろぐように「厳ついな…」と零す仲間の親友——黒崎一護。厳ついのはお前の派手な髪の毛ではないのかと言いついた返したい思いを飲み込み、青年は他愛のない話を探す。

「…昨日、はどうだった?」

「昨日? 家でゴロゴロする以外なんかしてたっけ、俺」

「井上が春休み最終日にお前と」売れ残らないパン食い競争?をしたとか言っていたが…いや、何でもない」

「なんだそりゃ…?」

呆れている親友の半目を見る限り、どうやら彼女のデートプランは脳内妄想で終わってしまったらしい。恥ずかしがり屋なクセにアタックが妙に独創的な二人目の仲間——井上織姫いのうえおりひめの片思いが報われる日は来るのだろうか。茶渡は空を仰ぐ。

「つかあいつもずっと忙しそうにしてるよな。たつきが寂しがってたぞ」

ポリポリ頭を掻きながら仲間の付き合いの悪さを愚痴る一護。その”忙しい”の理由に心当たりがある茶渡は居心地が悪くなる。

一護がああの戦いの後で霊力を失ってから、茶渡ら同級生四人の関係は変わった。自身は一護との距離感を掴めず、親友なのに話す内容も言葉を選んでしまうようになった。井上も彼へ似たような気まずさを覚えている風に見える。

それも仕方ない事なのかもしれない。仲間で最も強くリーダーシップがあった奴が突然無力な人間になったのだ。生きる世界が変われば接し方も当然変わってしまう。

その一護を守ろうと、井上は精力的に動いていた。

ほぼ毎日夜間にふらりと霊圧が消え、日を跨ぐ前に戻ってくる。時折感じる破面ブレンカの霊圧から察するに、ネルたちの協力で虚圏ウエコムンドへ鍛錬に行っているのだろう。訊いても「ごめん」と詳細は明かして貰えてい

ないが。

そんな変わった仲間達の中で唯一——石田雨竜が普段通り一護と遠慮のない嫌味の応酬を繰り返している。戸魂界ソウルソサエティで同じように一度霊力を失った彼だからこそわかる事があるのか。憐憫とは違う素直な同族意識で、素直じゃない友情を育んでいる二人の関係は正直少し羨ましかった。

「…どしたチャド？ 黙り込んで」

「ム…」

通学路を進む間、茶渡は一人物思いに耽る。

井上も石田もそれぞれの道を歩いている。だが自分にはそれが無い。元より一護と共に背中を預け合う中学時代からの関係が第一にあつた不器用な彼に、それ以外の道を探すのは困難で、また一護の心を思えば二の足を踏んでしまう事だった。

虚退治に教室を離れる仲間達の背中を複雑な顔で見送る一護。浅野達が尸魂界や死神の話をする時に遠くを眺める一護。それまでの覇気に満ちていた目を濁らせ、無気力に日々を生きる一護。

本人は「ようやく望んだ普通の日常だ」と周りにも自分自身にも言い聞かせていたが、その痛ましい姿は到底見ていられるものではなかった。

このままずっと一護は力を失ったままなのだろうか。力を取り戻す事はできないのだろうか。何より、もし力を戻せたとして、彼から今の平和な日々を奪う事が本当にあいつのためになるのだろうか。

何が正しいのか結論が出せず、茶渡はやるせない思いを抱えてこの一年半を無駄に過ごしていた。

「…」

ぼんやりと歩いていると不意に肌を刺すような霊圧を感じた。ほぼ毎日現れる悪霊、虚ホロウの気配だ。

「…すまん一護、先に行く。職員室に顔を出さないといけない」

「ん？ おー、遅れて教頭の鍵根にドヤされんなよー」

「ああ、また学校で」

適当な言い訳で誤魔化した茶渡は、一護へ内心謝罪しながら通学路の坂道を駆ける。

協力者の浦原喜助うらはらきすけからの依頼で石田が優先的に向かう決まりになっているが、茶渡は被害を減らすため毎度彼の援軍に急行していた。

…その意識が幸運か、あるいは仇となったのか。駆け付けた現場で彼の運命は大きく捻じ曲げられる。

「——遅いよ、茶渡泰虎」

気配を辿り入り込んだ人気のない路地裏。そこに居た人物に茶渡は息を呑む。

じつとりと濡れているような深い黒色の長髪。自分と変わらない二メートル近い長身。そして、右手に握られた不気味な刀。

ゾツとするほど暗い瞳をした若い男が、消えゆく虚ホロウの死骸の前で佇んでいた。

「……何者だ？ 人間か？」

「何者」か、そうだね…」

その問いに、顎に手を当て考え込む素振りをする男。そしてしばしの間を置き「うん、決めた」と彼が頷いた直後。

…気付けば茶渡泰虎は、背後から男の刀に胸を貫かれていた。

——君とお爺さんの恩人、かな？

つぎしましゅうくろう
月島秀九郎は茶渡泰虎の祖父、オスカル・ホアキン・デ・ラ・ロサの恩人である。

幼い頃に両親を亡くし、中南米に住むオスカルの下で暮らしていた茶渡は、クオーターである事を疎まれ近所の子供たちからいじめを受けていた。

罵倒暴行は日常茶飯事。凶体の大きさに任せた喧嘩上手な彼も多勢や大人には敵わず、遂には唯一の味方であった祖父にまでその悪意は伸びる。

事は殺傷事件に纏れ込むほど悪化した。

『——無抵抗なお年寄りと子供を火器で脅すなんて、君達は随分臆病なんだね』

月島はそんなスラムの連中を瞬く間に無力化させ、オスカルと茶渡の窮地を救った。そして二人の手当をしているうちに家族同然の間柄、幼き茶渡の兄貴分となった。

『シユウ：俺はもう長くない。ヤストラを頼んだぞ…』

『泰虎の涙を止められるのは貴方だけだよ。どうか神の御許より彼を見守っていてください、お爺さん』
アンシアーン

オスカルが亡くなってしばらくし、泰虎は親戚に引き取られ日本へ帰国する。月島との別れを惜しむ少年へ、彼は饞別に素朴なコインの首飾りを贈った。

『僕達の出会いと絆の証だ。困った時には必ず君を助けに行くよ』

『……本当にまた月島さんと逢えるのか？』

『勿論。何故なら僕はお爺さんアンシアーンから君の事を託された…茶渡泰虎の兄貴分だからね？』

その言葉を最後に、思い出の異国の地で別れた月島と茶渡。

だが幸運にも二人の再会の機会はそう時を置かずに来てきた。

——久しぶり、泰虎。

二年後。弟分の茶渡が死神との諍いに巻き込まれたと鳴木市の仲間から聞いた月島は、あの時の約束を果たしに彼の元へ駆けつけた。

聞けば友人の黒崎一護の恩人である死神が尸魂界ソウルンサエテイで処刑されそうになっていると言う。茶渡の友人なら自分の友人だ。即座に協力を申し込み、月島は朽木ルキア奪還のため霊界へと飛び込んだ。

『まさか月島さんが俺達のような特殊な力を持つてたとは…』

『当時の泰虎は普通の人間だったからね。心苦しかったけど秘密にしていたんだ』

戦いは月島の獅子奮迅の活躍で誰一人欠ける事無く、ルキアの救出に成功した。

死神の八番隊隊長・京楽春水との一戦では茶渡と共に無傷で離脱。捕らわれた石田と井上を奪還し、情報収集に当たった四楓院夜一、尸魂界の協力者・山田花太郎と志波岩鷲の七人は皆、月島の援護でそれぞれの窮地を脱した。

だが万全の布陣で臨んだ決戦は、三界を揺るがす巨大な陰謀の掌上だった。

裏切り者の藍染惣右介一派、そして浦原喜助の後始末に振り回された一同は、虚圏ウエコムンドへと凱旋する敵の三人と連れ去られる一人の少女を、反膜ネカンオンの外から見上げる事しか出来ない。

しかし。屈辱に齒を食い縛る彼らの誇りは、唯一藍染に食い下がった月島の気丈な後ろ姿に守られる。

圧倒的な力を持つ魔王へ向け、「ここで殺さなかった事を後悔させてやる」と豪語する彼は、誰もが感服する頼れる強者そのものだった。

…そんな時だ。

——月島が……

……彼女と目が合ったのは——

全部…手紙さんが居たからじゃないか…！

五月も近い空座町の商店街。
アパートや個人経営の店が立ち並ぶ寂れた路地を、二人の男女が騒がしく歩いていた。

「——ダッサ！ 何ココ？ 空座町ってこんなシケたトコだったの？」

左右で束ねた深いマゼンタの髪をなびかせ街の静寂を囁くのは勝負な少女——毒ヶ峰^{どくがみね}リルカ。その可憐な相貌を歪める彼女に対し、隣の男は穏やかだ。

「垢抜けた街並みがお好みでしたら駅前へ行かれるのがよろしいかと。私はこちらの静けさの方が好きですがね」

「誰もあんたの好みなんか訊いてないわよ！ 独り言ごころーさん！」

リルカの痲癩に紳士然とした眼帯の男——沓澤^{くつざわ}ギリコがやれやれと肩を竦める。ロリータ系のミニワンピースに仕立ての良いスーツベストと、まるで我儘な令嬢とその執事のような二人組。

だが彼等は普通の人間ではない。

フルプリンガー
——完現術師——

万物に宿る魂を使役し己の力とする稀有な霊能力者。飲料の魂を操り口内へ飛び込ませたり、アスファルトの魂を操り跳躍するなどその応用は広域に及ぶ。

死神しにがみや滅却師クイーンシとは異なり完現術師フルプリンガーの霊能は、堕ちた悪霊虚ホロウに由来するものだと考えられている。故にか、彼等は常に疎まれ日陰に生きる事を強いられてきた。

霊界の死神勢力からも。

そして、同じ人間からも。

「…それで？ そのメンバー候補の”イチゴ”って奴は何者なの？ あたしソイツが銀城ぎんじょうと同じ死神代行だって事しか知らないんだけど」

そんな暗い宿命を一切感じさせずリルカは自慢の細足をスカートから覗かせ颯爽と風を切る。

彼女達が目指しているのは、その”イチゴ”を勧誘している仲間の所。まだ手応えがないのか、彼の霊圧に動きはない。

「あの藍染惣右介を追い詰めたとは聞いていますが、それ以上の事は何も」

「ったく、あいつも月島つきしまもほんつとムカつく…！ そんなにあたし達が信用ならないっての!?!」

「月島さんも何やら懸念がおりのようなようでしたし、勧誘がどうなろうと厄介ごとには事欠かないでしょうな」

小声で「だからこそ様子を見に来た」と呟くギリコに同意し、少女は目当ての場所の前で足を止める。イジワルな仲間の気配はこの二階建ての建物の中だ。

『うなぎ屋』…最近またウナギ高くなったのよね。帰りに銀城に奢らせようかしら」

「匂いもしませんしそう言う店名の別業者では？ 看板に小さく万事屋よろずやと書かれていますし」

「うわホントじゃん、何よコレ詐欺よ詐欺！ あたし完全に鰻の蒲焼食べた気分になっちゃったのに！」

向かいのアパートの屋上で人目を避け、そんな他愛もない会話を交わす事少し。ようやく店の扉が開き、見慣れたオールバックの革ジャン男が現れた。

彼ら完現術師達フルプリンガーが集う秘密結社の創始者。銀城空吾ぎんじょうくうごだ。

「——ついで来んなって言つといた筈だぜ、お前ら」

いつものスカした顔でこちらを見上げる彼は、単独だ。その意味に気付いたリルカは男を鼻で嗤う。

「あらあ、勧誘失敗？　手みやげ持っててフラれるなんてはーずかっしつ。百戦錬磨なこのあたしに任せたら思春期男子なんてスグにオトせたのになね！」

「…私、貴女が異性交遊をなさっている姿を見た覚えがないのですが」「うっさいわね、あたしはその辺のガキ相手に本気になるような安い女じゃないの！　大体オトコなんてこのあたしの美貌にかかれればイチコロに決まっただから！」

ギリコの小声に噛みつき、リルカは本題の革ジャン男へ向き直る。

「だいたい銀城！　あんたいつも」

だが少女がその続きを言い終わる事はなかった。

「——うるせえぞ。中に聞こえる」

突然後ろから聞こえた男の声にリルカはハッと振り返る。

気配も感じさせず背後を取られた。戦闘なら何もわからないまま終わっていただろう。

『……ッ』

「安心しろ、種は蒔いてある」

屈辱に歯噛みするリルカは既に男の眼中に無く、代わりに彼が見下ろしていたのはアパートの反対側。

速足で店を去っていくオレンジ頭の青年を見送りながら、銀城空吾は嘲笑うようにその口角を吊り上げた。

「……これからがいいトコだ」

後から聞かされた事だが、銀城の自信の通り、どうやら”イチゴ”こと黒崎一護を引き込む策は上手く嵌ったらしい。

茶渡泰虎の勧誘、父の黒崎一心の不在、浦原喜助と妹の黒崎夏梨の接触：

仲間や家族が黒崎一護に秘密にしている事を、悪意ある解釈で彼へ突き付け、周囲への不安と不信感を煽る。聞くだけで背筋が冷える心理誘導だ。

『忠告だ。今の内に手を打て』
自分の家族を

護りてえならな

銀城のその言葉が毒のように黒崎一護の心を染めていく様が、リル力には容易に想像できた。

そしてこちらが石田雨竜ら友人達の闇討ちに成功し、黒崎一護が己の無力に耐えられなくなった頃。

銀城の計画の第一段階は、最後の詰めを残すのみとなる。

「——銀城の指示通り、彼自身の過去に挟んでおいたよ」

いつにも増して暗い顔の同胞、月島秀九郎つきしましゅうくろうが拠点のバーに現れたのは、日が落ちる晩方の頃だった。

「お疲れ様です。気晴らしにコニヤックでもいかがですか？」

「…遠慮しておくよ。油断したくないからね」

ギリコの勧めを断る青年を横目に、リルカの機嫌は降下する。

「ふん、そんなに危険なんだったらあたし達に助けの一つでも求めなさいよ！ なーんも話してくれないから何が危険なのかも知らないけどねっ！」

全くもって気に食わない。勝手に銀城と二人で話を進められてい

る事が。仲間の自分達を信じてくれない事が。

何より、こんな責任も背負えないような正体不明の計画のために、
無実の人間の弱みに付け込むようなマネをしている自分自身が。

不貞腐れるリルカの心情は他のメンバーも抱えているもの。一同
の不満げな顔や視線が月島へ向く。

「……そんなに気になるなら話してもいいけど、知らない方がいい事
を知った代償は当然覚悟の上なのかな？」

『！』

仲間達の無言の催促に折れたのか、青年がそう念を押してきた。底
無しの闇のように黒い瞳で、皆を一人ひとり射貫きながら。

代償。

月島が指すその言葉の含意は一つだけ。緊張にコクリと唾を呑み、
言い出したリルカは覚悟を決めて頷いた。

「…別に。その方が面倒な演技しなくていいし、あたしは構わないわ
よ。あんたの好きにしまさい」

「ッ、リルカあんた……」

「うっさいわねジャッキー！ あたしが”仲間を信じる”って言った
のは何も月島に対してだけじゃないの！」

少女の怒声に一同は押し黙る。

リルカの言う通り、月島とその他の仲間達の間には、どれほど取り
繕っても隠せない心の距離があった。

原因は、月島を彼らが奇異の目で見てしまっているが故の、同胞と
しての後ろめたさ。他の”普通の人間達”が彼ら完現術師を化け物

扱いするのと同じように、リルカ達も仲間の彼に恐怖していた。

それほど月島秀九郎という男が持つ完現術——ブック・オブ・ジ・
エンドは異質で、常軌を逸したおぞましい能力だった。

「そう警戒しなくても、終わったら銀城と一緒に元に戻してあげるよ。
君たちが壊れないように全員と話を合わせるのは大変だからね」

「……ッ」

彼らとの埋められない心の距離を誰よりも理解しているからこそ、
月島もまた仲間達へ関心を示さない。

彼の中にあるのは世界でただ一人、自分に怯えない恩人の銀城空吾との絆だけだ。

リルカは仲間として、その事実が堪らなく悔しかった。

「——じゃあ説明するから、皆が満足したら直ぐに挟むよ。覚悟はいい？」

常の達観した表情を僅かに歪め、月島が計画の詳細を明かし始める。

そして残された最後の疑問に話が移った時。青年は数度の逡巡の末、懐から何かを取り出した。

「……もう意味はないけど、一応見せておくよ」

自身の体験を語りながら、ピラリと掌のソレを開く月島。

そこにあつたものを目にしたりルカ達は、形容し難い恐怖に背筋が凍りついた——



「——戻ったか、月島」

遡ること一月。

桜が舞う春の夕暮れ。

その日の”仕掛け”を終えた月島秀九郎は、新たに得た十七年分の記憶の負荷に顔色一つ変える事無く、空座町から鳴木市の拠点へと戻っていた。

「問題ないよ。黒崎一護の親友茶渡泰虎は、僕の弟分。そういう事になった」

「ハッ、相変わらずえげつねえ野郎だな」

ソファで寛ぐ組織のリーダー、銀城空吾の確認に青年は首尾を報告する。

先刻の任務は彼らの悲願成就に必要な最後のピース、死神代行・黒崎一護を手中に収めるための布石だ。

家族や仲間、友人の心の中に絶望の種を仕込み、それらを基に黒崎一護の力を開花させる。月島の完現術フルブリングの能力はまさに最悪の絶望と言うに相応しいものだった。

「引き続き残りの連中も頼む。お前の下準備が終わらねえところちも動けないからな」

「……うん」

月島は了承する。だが彼自身も自覚のなかった僅かな逡巡を、銀城は見逃さない。

「…どうした、何かあったか?」

「え?」

「随分浮かねえ顔してるぞ。お前らしくもない」

そう指摘された月島は初めて、自分の胸の内に隠れるその小さな感情に気が付いた。

茶渡泰虎の中に”兄貴分・月島秀九郎”の存在を潜ませる作戦は問題なく成功した。

彼の祖父アフウエロの危機を救う月島。彼の義兄弟のような仲の月島。黒崎一護に協力し仲間達を救う月島。彼の意思一つでその記憶の種は余さず芽吹き、茶渡の中で本物の過去となる。

準備は万全だった。

だが。

「……少し、腑に落ちない事があってね」

感情というよりは違和感に近いかもしれない。

いつものように全てが思い通りに進む中で、一度だけ、月島は妙に記憶に残る不気味な悪寒を感じた事があった。

茶渡の過去の世界で朽木ルキアを救い、藍染惣右介一派が尸魂界を
反膜ネガシオンで去りゆく最中の出来事だ。

「——視線、だど？」

銀城の確認に青年は頷く。

「うん。それ以後も何度か”彼女”の姿は見かけたし、試しに話しかけてもみたんだけど」

「奴がお前に関心を示したのはその一度だけ、か……」

当時は大して気に留めなかったが、言葉にすると不自然さが際立つ。まるで彼の存在自体が目に入っていないかのように、月島秀九郎は自身にその違和感を植え付けた”例の女”と対話をする事が出来なかった。

「確かに妙な話だな。藍染がその女を特別扱いしていたのはチラと聞いたが……」

空座町決戦は結界の中で行われたため銀城たちが知っている事は多くない。だが過去世界で黒崎一護と共に藍染と戦った月島は、決戦で一つだけ気になる情報を得ていた。

「……そう言えば」

「何だ？」

「決戦で黒崎一護が力を使い果たしたタイミングに僕が乱入した過去を挟んだんだけどさ。浦原喜助の鬼道で封印される直前に、藍染が変な事を言ってたんだ」

”読書家”を名乗る少女に

近付き過ぎない事だ。

記憶を引き出し伝えると、銀城が眉間に皺を寄せた。恐らく月島自身も同じ顔をしているのだろう。

「それで思い出したんだ。あの女に会った二度目の時に、浦原喜助が彼女の事を”読書家”と呼んでいた」

「…藍染の負け惜しみと決めつけるのは早計か」

次々と見えてくる、見落としてしまった謎の片鱗。完璧な計画に突如現れたイレギュラー。

だがそんな暗雲立ち込める状況に置かれながら。

「——面白え」

銀城は笑った。

「面白えじゃねえか。”葉”のお前に対して”読書家”なんて、偶然にしちやア出来過ぎてる」

「…あの女は護廷十三隊を壊滅させた化物だよ？ 正体が何であれ、極力関わらない方がいいと思うけどな」

「クク、らしくねえな。初めて自分の能力にケチを付けられそうになってビビッてんのか？」

豹変したリーダーの雰囲気にも月島は溜息を吐く。

「どのみち情報がなければ話にならねえ。次誰かに挟む時は、例の女を探るお前の存在を過去に加えておけ」

「……本当にやるんだね？」

「双匣の丘では反応があったんだ。あの場にいた現世の奴は石田雨竜と井上織姫、あと四楓院夜一だ。三人分の過去を使えばこちらが取るべき手もわかるだろう」

愉しげに「頼んだぞ」と言いながら席を立ち、銀城はバーカウンターの奥へ酒を漁りに消えていく。

その日、彼が月島の進言に耳を傾ける事はなかった。

夜の帳が下りる鳴木市の高級住宅地。所有者の過去を弄り手に入れた古い洋館に、月島秀九郎は住んでいた。

「——お帰りなさいっす、月島さん！」

玄関を潜ると早速騒がしい同居人が姿を現した。何故か懐かれた同胞の男子高校生——獅子河原萌笑だ。

「ただいま。少し疲れたから今日はもう寝るよ」

「なッ、大丈夫っすか!? 鼠一匹通さねえよう全力で見回りますんでゆっくりお休みくださいー！」

「うん。見回りはいいから静かにしてくれないかな?」

面倒だったのでそのまま階段を上り、自室へと戻る青年。獅子河原フルブリングの完現術を想定した強固なドアを開錠し、月島は寝台で今日の出来事を振り返る。

「……相変わらずだね、銀城。君のそういう無鉄砲な所」

あれは銀城の悪い癖だ。

信じていた人々に裏切られ、死神を恨んだ初代死神代行。慈悲の無い復讐鬼として振舞っている彼は、その奥底にある善良な心で常に苦しんでいた。

殺された同胞達の無念を晴らす。虐げられている同胞達のために立ち上がる。されど胸中のどこかで、己の野望が潰える事を願いつづけている。

銀城空吾とはそういう男で、誰からも厭悪される孤独な月島は、そんな歪んだ彼に救われたのだ。

「仕方ないな…」

恩人との思い出に想いを馳せ、青年は懐の新書を棚に戻そうとベッドを立つ。

忙しくなる明日は未読のファンタジー小説を持って行こう。どこまで読んだかがわかりやすく、”過去”と現実のズレに迷わない。既に銀城の指示に従うつもりになっている自分に、月島は苦笑する。

「——ん？」

その時。

横切った自室の机の上に、青年は見覚えのないものが置いてある事に気が付いた。

「…手紙？」

訝しみながら手に取る。

霊圧などは特に感じない。古風な封蝋で閉じられた、ごく普通のダイヤ貼りの封筒だ。

…おかしい。

月島は眉を顰める。今朝にこんなものはどこにもなかった。獅子河原にも部屋に入るなど言い聞かせており、そもそもここ自体が彼に入れるような”不運”な造りにはなっていない。

ならコレは一体どうやってこの部屋に…

「…ッ」

嫌な予感が背筋を這う。慎重に、最大限の警戒で、月島はその薄いピンク色の封筒を開封する。

そしてその中の一枚の便箋に書かれていた、四文字の平仮名を見た瞬間…

「!?」

ゾワツと、青年は背後から強烈な視線に体中を舐め回されたような錯覚を覚えた。

「誰だ…!」

咄嗟に”栞”を刀へ変化させ振り返る月島。

視界に映るのは、いつもと変わらない自室の光景だけ。辺りを見渡してもそれは変わらず、彼は警戒しつつ元凶と思しき手元の手紙へ目を下ろした。

だが、青年はそこで絶句する。

「な…」

その便箋には何も書かれていなかった。後ろへ振り返るその時まで、確かにあったはずの、単純な一言が。まるで幻のように消え去っていたのだ。

「……銀城」

数度の呼吸の後、青年は便箋を封筒へ戻す。その顔には冷や汗が滲み、手紙を握る手は微かに震えていた。

「どうやら君の破滅願望がなくても、向こうは既にその気になってしまったみたいだよ…」

後戻りの出来ない状況に追い込まれた。自分の、そして銀城の未来は完全に闇に覆われた。

これより始まる超越者との戦いを思い浮かべ、月島秀九朗は達観と戦慄に笑う事しか出来なかった。

先程彼が広げた便箋には、女性的な達筆で、ただ一言こう書かれて

み
つ
け
た

いた。

全部…修行さんが居たからじゃないか…！

†††

——黒崎一護と接触した

草木が萌える五月初週、夕暮れ時。突如鳴り響いた着信音に携帯を開いた茶渡泰虎は、開口一番の言葉に目を見開いた。

『信用した訳じゃない』とは言われたが、興味はあるようだ』
「ム…」

淡々と『俺達の名刺を渡しておいた』と連絡してくる通話の相手。話の内容に茶渡は静かに高揚する。

数度の確認の後。携帯を懐へ戻し、青年はポツリと呟いた。

「…一護、やはりお前は…」

家族を、仲間を、大勢の人々を護るため。あいつは今の無力な平穩を捨て去る葛藤に直面している。それは茶渡の心の天秤を大きく傾ける事実だった。

拳を握り締める彼は、一月前の出来事を思い浮かべていた…

Welcome to Our
EXECUTION

高三の始業式の帰り。

銀城空吾と名乗った男から謎の霊能者組織に勧誘された茶渡泰虎は、彼が明かした組織の目的を聞き、思わず応接室のソファから立

ち上がった。

——俺達の目的は黒崎一護の

死神の力を取り戻す事だ

彼等はいくつもの事を知っていた。茶渡自身の特異な霊能についても、それが人間に宿る理由についても。全てが衝撃であり、戯言と断じる事の出来ない話ばかりだった。

特に、親友の黒崎一護の持つ、一つの未来の可能性については。

「俺達の能力は虚ホロウの力の影響で芽生えたものだ。お前はまだ力に目覚めて間もなく、味方も居たからわからないだろうが…」

——俺達は、この力が疎ましい

銀城のその言葉が真実ではないと茶渡にはわかっていた。入会試験とやらでメンバーの何人かと戦ったが、彼らは皆自身の能力を声高々に自慢し、霊能者としての自分に誇りを持っているように見えた。

本当に力が疎ましいのなら、かつて虚化を使った一護のように苦しそうな顔をしながら戦っていただろう。

だが、それでも茶渡は彼等の誘いに乗った。こいつ等の本音より大事な事があったからだ。

「……本当に一護の力を取り戻せるんだな？」

「ああ。昔の仲間だった半死神の協力で実証済みだ」

真実はわからない。確認する術もない。それでもこの出会いは決して逃せない大きなチャンスだった。

たとえ死神の力が戻らなくても、一護に自分達のような霊能フルブリンゲ、完現術の才があるのなら。それを開花させるだけであいつは前に進もうとする筈だ。

故に、茶渡泰虎は銀城空吾と握手を交わした…

「——ん？」

そんな希望に満ちた未来を思い描いていると、はたと妙な気配…視線を感じた。霊圧とも敵意とも違う、形容し難い不思議な感覚。

だが気配を辿ろうと茶渡が一步を踏み出す事はなかった。顔を上

げた先の無人の路地。そこに例の気配の正体が、いつの間にか佇んでいたのだ。

「……！」

それは、学校で毎日見るあの灰色の女子制服を着た、小柄な女。そしてこちらを見つめるその顔にあったモノに、青年は硬直する。

「ま、待てっ！」

直後、不意に女が踵を返した。

あり得ない。どういう事だ。慌てて追いかける茶渡の中で驚愕と困惑が渦を巻く。

：奴は真っ白な仮面を被っていた。かつて彼の親友、黒崎一護が被っていた——あの虚の仮面と同じものを。

全力で走る茶渡は容易に女の背中に追い着く。されど青年の伸ばした手が、彼女の華奢な肩に届く寸前：

「消えた……？」

住宅の塀の角を曲がり、視線が途切れた一瞬。開けた川辺へ飛び出た青年は、仮面の女の姿を見失った。

焦りながら周辺を見渡す茶渡。

すると、不意に彼の耳に聞き知った男の声が聞こえた。

「——未練がましいのは嫌いなんだよ」

そこに居たのはオレンジ頭の青年。この十七ヶ月間、茶渡がずっと頭を悩ませている元相棒・黒崎一護だ。

こんな所で何をしているのか。だが例の仮面女を見なかったか訊きに行こうとした時、彼は一護が起こした凶行に絶句した。

「な……」

か細い飛翔音の後、ポチャンと水面が揺らぐ。

そして一瞬にも永遠にも思える余韻を残し、青年は放り投げたソレへ振り返る事無く、川辺を去った。

「……ッ！」

ハッと我に返った茶渡は、靴を脱ぎ棄て川へ飛び込む。

どこだ、どこへ行った。追いかけていた仮面女の事も忘れ、懸命に川底へ潜る青年。

…一護が代行証を投げ捨てた。あいつの手元に残った、死神・黒崎一護の最後の証を。

そこに込められた意味に気付いていながら、茶渡は必死に川を探す。親友が呟いたあの一言が頭を離れなくて。

「一護…い…諦めるな、一護ッ！」

やっと希望が見つかったんだ。失った力を取り戻せるんだ。届きもしない声援を彼へ、自分自身へ送る茶渡泰虎。

お前に未練があるのなら、お前が護る力を欲してくれさえすれば、俺は今すぐにもお前を銀城の元へ連れていく。

浦原さんのような胡散臭い男だ。信頼できるかはわからない。だけれどもし奴がお前の期待を裏切り、誇りを傷付けたなら、俺は必ず奴等と戦い、倒してみせる。

そのために俺は、この拳を振るうと誓ったのだから。

「約束しただろう…一護ッ！」

濁った水を掻き分け汚泥を掬い、そして遂に、茶渡は見つけた。

「ッ、あった…！」

沈んだはずの代行証が浮き上がり、橋下の波の合間を縫うように浮かんでいる。

靈力を失い、尸魂界も浦原商店も手を引いた孤独な黒崎一護。その彼の手に残った最後の誇りへ、青年は我武者羅に手を伸ばした。

…そんな自分を川岸から見つめる仮面の女に、茶渡が気付く事はなかった。

街灯が照らす夕暮れの空座町。

暗い橋下の河川敷に、ポウツと緑の霊庄【完現光】ブリンガーライトが瞬く。

「——しーんじらない！」

濡れた服を完現術フルブリンクで脱水する茶渡へ、迎えに来た仲間の少女——
毒ヶ峰リルカは怒鳴り散らしていた。

「うとうとしてて川に落ちたですって!? 橋の手摺りで寝るとか一体
どーいう神経してんのよー！」

「…すまん…」

「すまん」じゃないわよホントにもー。探しに行かされるあたしの
身にもなんなさいよねー！」

半裸の青年に罵声を浴びせながらも、リルカはポーチのハンカチを
投げ渡す。愚図でノロマな馬鹿でも仲間仲間。風邪を引いたら可
哀そうだと心配する程度の人間性は彼女にもあった。

…尤も、こういう時に相手の隠し事をスルーしてやるのがカッコい
い女の条件なのだろうが、生憎自分にそんな気の利いた事はできな
い。

「ねえチャド。その代行証、どうするつもりなの？」

茶渡が例の”黒崎一護”と親しい事は銀城から聞かされている。
組織の目的に関わる問題を見過こせせず問い質すと、青年は悲しげな顔
で白状した。

「…あいつが…一護が力を取り戻したいと言うまで、俺が預かる」

「何よ、まだ悩んでんのあいつ？」

銀城の誘いに戸惑う優柔不断さといい、どうやら黒崎一護は相当
女々しい男らしい。また辛気臭い奴が組織に入るのかと少女は顔を
顰めた。

どうせ” 霊界の英雄” などとチャホヤされて調子に乗っちゃった、
冴えないヒョロガリ陰気男に決まってる。

そんな具合に、出会う前の彼に対するリルカの評価は低かったのだ
が…

「——カツコいい

じゃないの?!」

…即落ちだった。

戻った薄暗いアジトに招かれていた黒崎一護を散々罵倒した後、
「見定めてやる」と彼の顔を懐中電灯で照らした彼女は、ドシヤツと崩
れ落ちた。

クツキリとした目鼻立ちに透明感のあるヘーゼルの瞳。鮮やかな
オレンジの髪が印象的なチョイ悪細マッチョ系イケメンが、床に座り
込む自分を心配するような顔で見下ろしていた。

「……大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃないわよ…」

おまけに初対面で罵ってきた女にまで優しいとか無敵かこいつ。

完全に決まってしまった両者の力関係に涙し、毒ヶ峰リルカの心乱
れる甘酸っぱい日々は始まったのだった。

†††

物質の魂を使役する力、フルブリンダ 完現術。

フルブリンダ 完現術師と呼ばれる能力者達は物に宿る魂に働きかけ、物そのもの
を動かし、エネルギーを抽出し、時に形状すら変形させる。

だがその力が最も強く発揮されるのは、能力者が長く共に接した”愛用の道具”だ。

”あ..ん..た..を..許..可..す..る..”わ」

——ドール・ハウス——

その掛け声を合図とし、黒崎一護の姿は少女趣味な箱の中へと吸い込まれた。

「な、なんだこれ!? ここで修行すんのか...?」

「そうよ、これがあたしの完現術。フルブリング 気に入ったモノ同士を自在に詰め込み収納する能力よ!」

毒ヶ峰リルカは誇らしげに胸を張る。

完現術の能力は様々な形で具現化するが、彼女の力は根幹の”愛用の道具”という枠組みに入るモノを、自らの好みで無数に増やせるという異様な性質を持つ。

今回は愛用のボックスの中に一護を招待する形で発動させ、小人となった彼に自由に敵と戦って貰う計画だった。

「何逃げとんじゃボケエー! さっさと掛かって来んかアアアい!」

「うおおおおお!? なんだこのデカい豚! 暴れるし喋るぞ!」

「近所で拉致ったヤクザのオッサンよ。見た目が可愛くなかったからあたしの”ブタ肉さん”の中に入れてもらったわ。さっさと倒して頂戴——完現術を使ってね」

「無理に決まってるだろ!!」

情けない悲鳴を上げながら”ブタ肉さん”の攻撃を回避する一護にベーツと舌を出し、リルカはバーカウンターの沓澤ギリコにお菓子と紅茶を注文する。

戦う相手はぬいぐるみ。余程当たり所が悪くない限り怪我の心配もない。タイマーの十五分までいじめてやろう。

「.....そんなに気になるなら助けてやったら? 凄いソワソワしてるわよっ!」

「は、はあ!? 別にしてないけど!? 負けるならその程度の奴だっ

たつてコトだし!？」

仲の良い同胞のアフリカ系美女——ジャツキー・トリスタンの呆れ声に凶星を突かれ思わず狼狽えるリルカ。だが甘さを見せてはならない。これは散々人の乙女心を騒がせた仕返しなのだ。

…少なくとも、リルカ自身はその程度の軽い考えで一護の修行を放置していた。

『——時間です』

だが開始より十五分が経過し、急に雲行きが怪しくなる。

「ぐ…ウウ、ウオオオオ”オ!!”」

「な、何だ…?」

不気味な声音に続き、突如ぬいぐるみが苦痛の叫びを上げながら暴走し始めた。その体はブクブクと泡立ち、リルカが好きだった可愛い”ブタ肉さん”は醜い肉ダルマへと変じてしまう。

「何よ…あのキモいの——ツ!?!」

しまった。

リルカは自らの失言に焦る。

少女の能力【ドール・ハウス】はその性質上、一瞬でも「かわいくない」あるいは「好きじゃない」と思ってしまったモノは能力の支配が弱まる。

今、無力な人間である一護の安全を保障する手はどこにもなくなってしまった。

「ツ、ギリコ! あんた何してくれてんのよっ!」

焦燥に駆られ、リルカはこの事態を引き起こした犯人へ食い掛る。

「はて、一護サンの修行にワタシの能力を貸してくれと言ったのは貴女でしよう?」

「方法の話をしてんのよ! なんでワザワザあたしの制御を引き?がすようなマネを…!」

「それが最善と思つたまでの事。ご自身でおっしゃつたではありませんせんか——」負けるならその程度の奴だった」と

済ました顔で仲間を見殺しにするとほごく眼帯の初老男、沓澤ギリコ。唾然とするリルカは、そこで彼の本性を思い出し青褪める。

人間社会に生まれながら”普通の人間”として生きる道を断たれた完現術師フルプリンガーは、皆その生い立ちから心を病んでいる者ばかり。だがこの男はその中でも飛び切りの狂人だった。

ギリコの完現術の名は「タイム・テルズ・ノー・ライズ」。定め捧げた”時”を対価に一つの願いを叶える、神との厳格な契約だ。

「契約の破棄は神への裏切り。ワタシの定めた時間が経過する前に修行を中止すれば、全てが時の炎に焼き尽くされる」

「…ッ！」

「信用できない新参者に慈悲など不要。そう思ったからこそ、貴女もワタシに依頼したのでは？」

人選ミスを悟ったリルカは齒軋りしながら一応のまとめ役である男へ詰め寄る。

「くっ…銀城！ あんたも何か言って——」

「このまま続けさせろ」

「なっ!？」

だが彼女が望んだ答えは返ってこなかった。

真剣な面持ちで一護を見守りながら、銀城が語る。

「黒崎一護という男はな、”絶望のどん底”という助走があつて、初めて上へ飛躍するんだよ」

「何よソレ…！」

「お前のやり方じゃ一護はいつまで経つても力に目覚めない。言い方は悪いが、あれはギリコなりの一護への期待だ」

始解も、卍解も、虚化も。一護がこれまで手にしてきた力は、全て大きな試練を乗り越えて得たものだ。

彼の完現術が覚醒するきっかけがあるのだとしたら、それは甘えの無い”本物の絶望”でなくてはならない。そう銀城は断言する。

「……いや、それだけでは無理だ」

「ああ、そうだ。まだ足りない」

「な、何？ どういう事？」

その推測に隣の巨漢が頷いた。リルカは心配そうに彼、茶渡泰虎へ振り向く。

ぬいぐるみみの怪物の攻撃を回避する一護。何かを待っているように、その一方的な展開をジッと見つめる茶渡。

そして、戦う親友の瞳の震えが止まった瞬間…

「——受け取れ、一護！」

茶渡が懐から取り出した片手大のソレを箱の中へ投げ込んだ。

「これは… 代行証？ なんでチャドが…？」

「すまない…！ 偶然だったが、あの時俺は近くでお前の事を見ていた」

木板を手にした一護が目を見開く。

「あの時お前が何を考えて、どんな覚悟でそれを捨てたのかは訊かない…！ だが今のお前には別の覚悟があるはずだ！ 昔のお前がどんな絶望を前にしても失わなかった、戦う覚悟が!!」

「…チャド、お前…」

取り戻した代行証。最後の思い出だったソレを握り締め、青年は親友の想いに笑顔を返す。

…だが、肝心なのはここからだ。

「——グオオオオ”オ”アア”ツ!!」

「！ ヤベツ…！」

立ち止まった一護に襲い掛かる怪物。辛うじて避けた彼に茶渡は吠える。

「一護、よく聞け！ フルブリング 完現術が目覚めるにはきっかけになる道具やモノが必要だ！」

「ツ、わかってるよ！ それがいいつなんだろう？」

勝気な笑みで「丁度そうだと思ってた所だ」と代行証を掲げる一護。愛用している道具ならギターや携帯、筆記用具など色々ある。だが

「一護の”戦う力”を引き出しうる愛用品は、今この場に一つだけだ。そして、その道具の魂を引き出すために必要な想いが…」

——”誇り”——

「思い出せ一護！ お前が死神の力に誇りを持った時の事を！」

「死神の力に…」

「そうだ。茶渡は叫ぶ。

俺が^アじい^ブちゃん^ウのお陰^エで自分の肌^ロに、メスティーソの血に誇りを持ってたように。

「その代行証は死神だったお前の最後の象徴だ！ お前の死神としての誇りの全てを受け止めた時、代行証は必ず応えてくれる!!」

懸命に伝えると、一護が自らの心へ潜り込むように目を閉じた。迫りくる敵の巨腕の目の前で無防備に。

「一護ッ!？」

リルカが仲間の末路を幻視し悲鳴を上げる。

あらゆる現象が遅速再生のようにゆっくりと動いて見える。

…だが茶渡の心に波紋はない。

知る事は全て伝えた。力の源、希望の有無。それさえあれば、あいつは必ず立ち上がる。

——また一緒に戦おう、一護。

そして茶渡の確信の通り。己の希望を掴んだ親友、黒崎一護は…

『!?!』

その時。

突然、青年の代行証から、紅色に燃える漆黒の光が噴き出した。

「ぐっ…!?!」

「な、何が起きて…ッ!」

「…この霊圧は…!」

膝を突く者。胸を押しえ縮こまる者。まるで周囲の重力が激増したかのような圧迫感に体が軋む。あの十刃^{エスパーダ}達との戦いを思い出す凄まじい力の波動。

「何だあれは…?」

直後、吹き荒れる霊圧が二つの形に凝固した。

一つは卍字の鏢。

一つは光の鎖。

かつて一護が持っていた斬魄刀〔天鎖斬月〕を彷彿とさせるそれらが、怪物ぬいぐるみの攻撃を寸前で受け止め、巻き付き、一瞬で敵の体をズタズタに絞り千切る。

そして解けた鎖が一護の背後に集まり——仮面を被る白い死覇装の女を象った。

「…ッ、まさか!」

その時。

茶渡は思い出す。悟る。

夕暮れの空座町で、あの女子制服姿の仮面女が自分の前に現れた理由に。彼女を追いかけた先で、代行証を捨てる一護と偶然遭遇した理由の正体に。

振り向き呆ける一護と、彼を見下ろす仮面の少女。恐ろしい鋭利な瞳孔の奥で、涙に潤む琥珀色の目がニッコリと笑った。

『——やっど…』

…やっど、逢^あえた…っ』

かくして霊界の英雄・黒崎一護は、
フルプリンガーとなった。
霊力を取り戻した。

全部…復帰さんが居たからじゃないか…！

†††

黒崎一護の完現術^{フルブリンゲ}覚醒は無事成功した。

新たな力を得て見違えるほどの覇気を取り戻した青年。そのやり遂げた顔につられて笑みを浮かべる銀城は、意識を切り替え彼へ今日の修行の終わりを伝えた。

「…帰れ」だつて？」

ブタ肉さんの中の人を見送っていたリルカが一護のオウム返しに紅潮する。

「あ、あつたり前でしょ！ 何よあんた、まさか女子がいるココで泊まり込みでもする気だったの？ きつしよ！」

「いや、まあ…死神の修行の時は缶詰めで扱かれたし」

浦原レックスや平子の虚化修行の過酷さをぼそぼそと語りながら恐怖の記憶に体を震わせる一護。

絶望の縦穴^{シャッタード・シャフト}、始解修行、内なる虚との戦い。今ではどれも良い思い出だが、客観的に詳細を聞かされた銀城達にとっては正気を疑う地獄だった。

「馬鹿じゃないのあんた…!? それ完全に使い捨ての鉄砲玉にする扱いじゃない！ 何素直に受け入れてんのよ！」

「同感だな。お前自分がそれで何度死にかけてるかわかってんのか？

一歩間違えれば本当に虚になってたんだぞ。大切な仲間や弟子に

する修行じゃねえ」

「それは…」

「だと思っただぜ…辛かったな一護」

同じ人間として、死神に虐げられる完現術師フルプリンガーの同胞として、胸糞悪い話に顔を顰める銀城。

一護の無垢さに付け込み、何一つ説明せず平気で協力者面をしながら、崩玉を奪われた己の尻ぬぐいをさせるべく十五歳の少年少女を護廷隊や藍染陣営と戦わせる。おまけに彼が力を失ったら即座に興味を失い挨拶にすら来ない。完全に悪徳詐欺師の手口だ。

それまで浦原喜助らに覚えていた曖昧な不信感が形になり、愕然とする一護へ銀城は真剣に伝える。

「…お前を利用しようとしてる点なら俺達もあの男と同じだ。だが俺達はお前を対等の仲間として扱うし、生身の人間に必要な以上の無茶はさせねえ」

事実、一護を追い込んだギリコの完現術も銀城の能力を遣えば止められた。安全管理ができない修行など殺人未遂と変わらない。

「仲間や友達が襲われて逸る気持ちもわかるが、今はしっかり休め。体が壊れたら元も子もねえぞ」

「銀城…」

気休めになるかはわからないが、彼が力を付けるまでの間こちらで空座町の見回りをおこそう。幸い銀城には、一護の友人達を襲った相手に心当たりがあった。

「…悪い、恩に着る」

「ふ、ふん！ 貸しにしとくわー！」

「素直じゃないですねえ…」

一護の礼に「持ちっ持たれっ」と頬を緩める一同。解れた緊張に安堵し、男は期待の新人を澄んだ笑顔で見送った。

「——それにしても、あの完現術フルプリンゲは一体…？」

青年を家へ返し、残りのメンバーも解散した深夜。銀城空吾はアジ

トの自室で先刻の光景、一護の能力の姿を思い起こしていた。

あんな、まるで死神の斬魄刀の本体のような、意思を持つ人型として具現化する完現術フルブリングなど見た事がない。

「…流石は霊界の英雄、つてか？」

半死神に加え、虚の力まで持つ完現術師フルブリンガー、黒崎一護。彼のような死神・虚・完現術の三重能力者を見るのは銀城も初めてだった。

恐らく一護が発現させたあの仮面の女死神は、全ての力が互いに影響し合い生まれた稀有な能力例なのだろう。彼の完現術の修行メニューを考える立場からしたら頭を抱えたくなるイレギュラーだ。

だが、銀城は困難の横で手ごたえも感じていた。

自分達の目的は一護に死神の力を取り戻させる事。その力の影響が垣間見える彼の完現術は、同時にゴールの近さを表す。

「そうなる…ジャッキーとの修行は、単純な対一より死神の戦い方を思い出させるような内容にした方がいいな」

当初は物理攻撃タイプの仲間との実戦訓練で青年の能力の完成度を上げる予定だったが、この状況ならより良い方法がある。

焦っているのは自分も同じ。浦原喜助の無茶なやり方を否定しておきながら、銀城自身もそれに倣わざるを得ないほど、実は一護にはあまり時間が残されていなかった。

「…何を企んでいる——月島」

かつて組織のリーダーだったあの男の暗躍に空恐ろしさを覚えながら、男は晴れぬ不安を追いやり寝台で目を閉じた。

——感じる。

昔のように、

霊の気配を——

鳴木市のアジトから自宅へと戻る途中、黒崎一護は不思議な気持ちで深夜の街中の風景を眺めていた。

電信柱の陰に、建物の屋上に、公園の遊具に…

目を向け、耳を澄ませば、あらゆる所から漂ってくるユウレイ達の存在感。今までわからなかったのが信じられないくらい、超常の彼等は自分達の周りを平然と彷徨っていた。

「——気分はどうだ、一護？」

ふわふわとした感覚で道を歩いていると、隣の仲間が優しく問い掛けてきた。

「…忘れてた。俺達の周りってこんなに騒がしかったんだな」

「そうだな…俺も霊力に目覚めたばかりの頃は随分と驚いた」

呆ける一護へ微笑むその相方は、茶渡泰虎。自分の事のように親友の変化を喜んでいる巨漢は、彼の霊圧の影響で今の力が覚醒した経緯があった。

「一護」

「どうした、チャド？」

ふと彼が何かに気付き道路の向かい側へ歩いていく。後ろに続いた一護は、佇む電柱の陰で泣いている童女を見つけた。

懐かしい。昔よく放課後に話し相手になってあげた、交通事故で亡くなった子供の霊だ。

『…お、にいちゃん…？』

こちらに気付き顔を上げる童女。青年はひとまず、彼女の涙の原因であろう倒れていた小さな花瓶を立たせてやる。

「一護、これを。公園の隅に咲いていた」

すると少しの間離れていた茶渡が、可愛らしいアヤメの花を差し出してきた。活けてやれと言うのだろう。一護は苦笑し彼の無言の善意に従った。

『あ…ありがとう…』

か細い声で礼を言う童女は、されどこちらと目を合わせようとしない。涙は止まっているのに悲しげだ。

訝しむも一瞬。理由に気付いた一護はバツが悪そうに頭を掻き、俯く彼女の顔をしゃがんで覗き込んだ。

…恐らく。一護が霊力を失っている間も、この霊はずっと話しかけてくれたのだろう。だがそのせいで突然無視されるようになったと誤解した彼女は、酷く傷付き悲しんだはずだ。

「…悪いな、チビ。最近調子悪くて霊が見えなくなってたんだ」

詫びながら童女の頭を撫で、一護は帰宅の道へ踵を返す。

その背に投げかけられた彼女の嬉しそうな「またね」は、二人の青年の胸に温かい熱を残してくれた。

夜道を並んで歩く一護と茶渡。

二人の間に会話は無い。だがその顔に浮かぶ微笑は、彼等が浸る沈黙の心地よさの証。

そうだ。

この不可思議で厄介な、だけど良い事もある奇妙な隣人達と過ごす日々こそが、俺の本当の世界だったんだ。

互いの家までの道が分かれるまで、青年達は取り戻した日常の幸せを噛み締め続けた。

翌日。

十分な休息を取った一護は、連絡に従い空座町端れの林で組織メンバーの一人と合流した。

「——ジャッキー・トリスタンよ」

勝気に「よろしく」と自己紹介をする異国人の彼女へ、一護は礼を言う。今日は屋外での修行らしい。

「悪いな、付き合わせちまって。昨日の夜に町の見回りをしてくれたのもあんただろ？」

「仲間に遠慮はいらないよ。ま、殊勝な男は嫌いじゃないけどね」

軽い挨拶を交わし、修行監督のジャッキーが特訓内容を説明する。

「——ホロウ虚退治？」

「そうよ。あんたの完現術の性質を考慮すると、死神としての戦い方と、完現術覚醒に必要な虚の霊圧の両方に触れる”虚退治”が一番手っ取り早いのにさ」

「…なるほど」

藍染との一件であの能力の正体に覚えがある一護。ジャッキーの言葉に引つかかる点もなく、彼は素直に頷いた。

肝心の虚に関してはその辺で出現した奴で間に合わせるつもりらしい。行き当たりばったりな計画に呆れる一護だったが、当の監督は平然としていた。

その理由は、自分達完現術師フルブリンガーの本質にあった。

「一護、今ここで完現術を使いな」

「今？ 別にいいけど」

訝しむ彼へジャッキーがヒントを述べる。

「あたし達は出産前の母親が虚に襲われる事で力を生まれ持つ。それ

はあたし達の特殊な霊圧が奴等を寄せ付けるからさ」

「ツ、そういう事か」

意図に気付いた一護は迷わず代行証を取り出す。

「フツ、いい判断だ。じゃあ見せてみな……あんたの完現術をツ！」

彼女の掛け声に応え、霊圧を高く空へ放出する青年。前回の感覚を深く想起し、心の奥底に意識の手を伸ばすと…

『——ふふっ、お呼びですか？』

聞き覚えのあるその声が頭に響くと同時。

ぶわっと代行証から幾つもの光の鎖が飛び出し、あの懐かしい”仮面の少女”を象った。

「へえ…前回も見たけど、銀城の言う通り確かに死神と虚の特徴を併せ持つ姿ね。こんな完現術初めて…」

ジャツキーの感想も当然だ。一護は改めてこの少女に思いを馳せる。

卍解の修行で傷を癒してくれた時。内なる虚との対話の道を教えてくれた時。斬月達と一緒に”最後の月牙天衝”を伝授してくれた時。

そして——

「……ずっと、俺の事を見守ってくれてたんだな……」

感慨深い思いに胸が熱くなる。

内なる虚、ホワイトの力を押さえる封印としての役目を終え、藍染との決戦で身を挺してまで助けてくれた、あの”本好きの人”の切り札。未だ謎の多い彼女は、またしても一護を救い、焦がれた力と日常を取り戻してくれたのだ。

「…あ」

そこで青年は戸惑う。彼女が何者なのかは聞いているし、同じ姿をした他の二人の名前や呼び名も同様。

だが彼女自身の名前を一護はまだ知らない。
そう思い問いかけると、少女は仮面の裏の顎に手を当て考え込む。
そして彼女は、自分に名はないが司る封印術には術名があると言っ
た。

「【牙錠封印】…だつて?」

「それは完現術フルブリングの名にはならないよ、一護。明らかに死神の鬼道のも
のじゃない」

「!」

不意に少女との語らいにジャツキーが水を差す。

「完現術は完成までに何度か段階を踏むモンだよ。名前を付けるのは
完全な形になってからのお楽しみさ」

「そうか、だから名前がないのか…」

一人納得する一護に頷き、女が頭上の空を見上げた。

「その能力が前例にないものなら猶更ね。斬魄刀みたいに完現術その
ものと対話できるってんなら、それでも進展はあるだろうさ。——だ
けど、それをやるべきなのは”今”じゃない」

「ッ、この霊圧!」

ジャツキーの視線を辿り、青年は気付く。突如現れたソレはしばらく
縁の無かった馴染み深い気配。

「そうら…:…お客さんが来たよ?」

見上げる青い空に闇が滲む。黒い斑点のようなその歪みから這い
出たのは、不気味な仮面を被る化け物達。

『オオオオオオオ…』

『オアアアア…』

『オオオ…』

『…』

それらの正体は、心を失い落ちた悪霊・虚ホロウ。次々に増えていく軍勢
が、太古の宿敵の霊圧の持ち主へ、一斉に襲い掛かってきた。

「…ふっ」

その光景を啞然と眺める一護は、湧き上がる感情に思わず笑みを零す。懐かしさに涙まで滲んでくる。

敵だ。

虚だ。

死神代行の日常だ。

今までの自分だったら姿を見る事さえ出来ずに喰われていた。あるいは石田達が戦う姿を指を咥えて見る事しか出来なかっただろう。

…だが。

「また俺に力を貸してくれるか？」

一護は隣へ振り向く。そこに居るのはあの仮面の少女。己の戦う力、完現術だ。

頼みの彼女が嬉しそうな肯定の言葉を返してくれる。よかった、ならば不安は何もない。

「往けるかい、一護？」

「…ああ！」

代行証を握り締め、ジャツキーの確認に力強く答える。

使う技は一つ。以前の相棒、斬魄刀【斬月】から教わったあの一撃の感覚だ。

完現術の鎖を伸ばし、大きく振り回す。頭上に描く円が、纏う霊圧で闇色に染まっていく。

そして眼前に迫る虚の軍勢へ向け、一護はソレを一気に振り払った。

—— 月^げ 牙^が 天^{てん} 衝^{しょう} ——

一閃。

弧を描く鎖から放たれる巨大な扇状の霊圧が、視界に映る全てを両断した。

「なっ!?!」

「…ッ！」

鈍い爆音に紛れるジャツキーの驚く声。一護も思わず呆けた吐息を零す。

藍染との決戦の時とは雲泥の差。だがこれまでの無力の憤懣を丸ごと乗せた一撃は、目の前の有象無象を容易く薙ぎ払うほどの威力を叩き出した。

「——ハハッ」

口角が吊り上がる。握る完現術の鎖から仮面の少女のはしやぎ様が伝わってくる。感情に突き動かされ、一護は残る虚達へ目掛け飛び上がった。

「往…けエツ!!」

「…今のは完現光!？」

コツを覚えれば後は容易い。足元から感じる土の微かな霊圧を刺激し、瞬歩の応用で跳躍。一瞬で敵の一体を間合いに捉えた一護は、今度は卍字の霊圧を纏う代行証から直接月牙を放つ。

「…銀城、こいつは本当に…!」

その光景に感服するジャツキー。

五体、六体、七体。息をする間も惜しみ力を振るう青年の姿は、まさに一騎当千。

一年半の眠りから目覚めた——” 霊界の英雄 ” がそこに居た。

「はあああああアツ!!」

代行証の鎖を操り敵を蹂躪する一護。彼の胸中は戦いに身を置く者の誇らしさで満ちていた。

…戦える。この少女となら。

また昔のように、斬月と一緒に戦った時のように。みんなを護れる男になれる。

倒した最後の虚が霊子になって消えていく。その様を見送り、歓喜に頬を紅潮させる一護は仮面の少女と見つめ合う。

顔を隠しているのに、あの黒づくめのグラサンヒゲ男より感情がわかりやすい新たな相棒。彼女のぽわぽわした親しみやすい空気に慣れるには、少し時間がかかりそうだ。

「これからよろしくな」

『はい…っ！』

仮面の奥から溢れる喜色を面映ゆく思いながら、一護は少女と共に歩む己の輝かしい未来を笑顔で臨むのだった。

全部…暗雲さんが居たからじゃないか…！

満天の星雲が桃色に輝く永夜の太平洋世界、ロスヴァリエス 虚霊坤。 現世と霊界の狭間、断界を彷徨う泡沫の楽園だ。

季節は四月も半ば。この日も、客人の少女は楽園の王城、ヴァルアリヤ 英霊宮殿へ歓迎されていた。

「…ッ、もう一度！」

——してんこうしゅん 四天抗盾 ——

爆発と共に正面の砂地が吹き飛ぶ。威力の弱さに臍を噛み、疲労が限界を迎えた人間の少女——井上織姫は悔し気に膝を突いた。

ヴァルアリヤ 英霊宮殿の中央施設、大天蓋。照り付ける偽りの太陽の下、彼女は一年以上も続けている日課の修行に精を尽くしていた。

「…上位従属官から下位十刃の虚閃程度セロといった所か。塵めゴミ」

無機質な男声が聞こえ、織姫は面目なさそうにそちらへ振り向く。翡翠の瞳。石像のような白い肌。凍り付いた無表情。あの再会の日からずっと自分の案内や修行に付き合ってくれている破面アラシカルの青年だ。

「ウルキオラ君…」

「何度も言わせるな。お前程度の力ではどう足掻こうとあの男の足手まといにしかならん」

辛辣な彼——ウルキオラ・シファアの断言に少女は顔を背ける。毎日毎日聞き慣れている台詞に心揺れる事はない。

「逃げたくない。あたしだって戦いたいのに」

「無駄だと言っている」

「無駄なんかじゃないよ。少なくとも前みたいに何もできずに連れ去られたりしないし……大事な人を死なせたりもしない」

ここで諦めてまたあんな思いを繰り返すのは御免だ。そう言い切り、織姫は拳を握り締める。

藍染の崩^{プリンセツサ}姫として仲間達を裏切る事を強いられ、数多くの悲劇を経験した織姫は、己の無力を心の底から憎んでいた。
「それに……」

だが自分が意地を張る理由はもう一つ。訝しむ青年の翡翠の瞳を、少女は見つめ返す。

「ウルキオラ君が、協力してくれてるから」

ピクリと眉を動かした彼に、織姫は薄く微笑んだ。

「あたしが黒崎君と一緒に戦いたって言った時もあなたは反対してた。でもこうして最後にはちゃんと助けてくれる。”無駄だ”って言うのもあたしの事を心配してくれてるからでしょ？」

「…勘違いをするな、協力でも心配でもない。雛^{ひなもり}森様のご指示だ」
「それでもだよ」

織姫が直接この地の支配者に会ったのは大戦前の数度のみだが、彼女は部下が嫌がる仕事を無理やり押し付けるような人ではない。

ならばそういう事なのだろう、と織姫は青年の優しさに小さくはにかむ。

しかしその顔が気に食わなかったのか、ウルキオラが「それより」と前置き、別の話題で少女を責めた。

「いつまで黒崎一護の腕輪を預かっておくつもりだ？」

それに一転、暗い顔で俯く織姫。

再会の一年半前に受け取った虚^{ロスヴァリエス}霊坤への招待状を、彼女は未だ”

二つ”とも手にしたままだった。

「ダメだよ、今は渡せない」

「……」

「でも、その日はきつと来る。だから、それまであたしが預かるの」

織姫は手首に輝く腕輪を撫でる。

これは黒崎君が力を取り戻すまであたしが彼の未来を護るという決意の証。その思いを目に込め、少女はウルキオラと向き合った。

「…好きにしろ。だがこちらの忍耐にも限度がある」

「ふふっ、ごめんなさい。ウルキオラ君も早く黒崎君に会いたいもんね！」

無然と眉を顰める彼へ、織姫はニッコリと笑う。

ここに来る度「いつまで遊んでいるつもりだ」と靈力を失った彼に腹を立てているウルキオラ。前回の戦いの虚しい結末に納得できず、再戦の機会を欲する姿は”好敵手”と呼んで然るべきものに見えた。そして、恐らく黒崎君もそれを望むだろう。

「大丈夫！ 怪我したらあたしが完璧に治してあげるから！ 男の友情を深めるのにサシのバトルは必須だよね！」

「…下らん。俺がお前達へ抱いている”感情”とやらは、雛森様の興味の対象としての関心のみだ。それ以上の事はない」

「もう、素直じゃないなあ」

織姫はむう…と頬を膨らませる。

以前の彼がせっかく「漸くお前達に興味が出てきた」と言ってくれたのに、仲間のネリエルが^{からか}揶揄ったせいで拗ねてしまった。それから青年は自身の”心”を隠すようになり、今はもうその成長を見せてくれない。残念。

(…でもネリエルさんかあ)

織姫は件の女性の顔を思い浮かべる。初対面の子供の風体からずっと大人っぽく近寄り難い美女になった元第3十刃。不仲と言う程では無いが、織姫の最近の不満は彼女の悪戯心と——恋心だ。

「……あ、あたし帰ります。靈力もすつからかんだし、長居したら雛森さんのご迷惑だから」

「余程ネリエルの嫌味が堪えたようだな」

「ふえ!? な、何の事かな〜…」

凶星を突かれ少女はたじろぐ。

本来はネリエルが織姫ら現世の客人達に付く決まりだったのだが、一護が来ないと知りすっかり意気消沈。見かねた女君主に任を解かれた後も時々棘を刺してくるため、織姫は何となく苦手意識が拭えない。

また絡まれる前に逃げるが吉だ。

衣類の砂を掃い、二人は英霊宮殿ヴァルアリアの一角にある現世の門へ向かう。辛い鍛錬の後の、この無口な友人との静かな散歩が、少女は嫌いではなかった。

「明日も時刻の五分後まで待つ。遅れたら転移後に霊圧で知らせろ」

「はい、よろしく願います」

幾度と繰り返した挨拶に変わらぬ感謝の気持ちで返し、少女はふと彼を見上げた。

出会ってから一年半。

この口の悪い破面アランカルはこれまで何度も織姫の弱さを指摘し突き付けてきた。だけど彼は無駄だと言いつつ一度たりともこちらの頼みを断った事はなかった。

断片とは言え、欲した”心”を理解してくれた虚の青年ウルキオラ。一護に抱いているライバル心と言い、少しずつ人間味が出てきた彼の変化は、まるで子供の情操が育っていく様を見ているように微笑ましい。

そんな失礼な気持ちを悟られないように隠して、織姫はお礼の言葉と共に手を振った。

「今日もありがとう、ウルキオラ君。また明日っ」

彼を友人だと思っているのは自分だけかもしれない。親切にしてくれるのは雛森さんの命令なのかもしれない。

それでも、決して交わる事のない虚ホロウの男の子とこうして笑顔で接している時間は、一人で独占するには過ぎた幸せに思えた。

いつか必ず、黒崎君もここへ来れるようになる。ヤミー、アイスリ
ンガー、グリムジョー、ドルドーニ、ネリエル、そしてウルキオラ……
彼に会いたがっている破面は大勢いる。あたしより、黒崎君のほうが
もっと彼等と仲良くなれる。

叶う事なら一日でも早く、その日が訪れますように。そう願いな
がら、織姫はウルキオラに見送られて異界を後にした。

……だが。

「――井上織姫」

「……えっ？」

現世に戻った少女がその去り際の忠告を思い出した時。
恐ろしい敵の魔の手は、既に彼女を捕らえていた。

「現世で動きがある」

――精々、気を付ける事だな。

†††

天真爛漫才色兼備で人気者な女の子、井上織姫は不幸の星の下に生
まれた。

母親は姪売、父親は酒乱。子供が泣いたら泣き止むまで殴り続け

る、子を育てる資格のない連中。

十五歳年上の兄も、井上家の事情を知った叔父夫妻に幼い頃に引き取られている。

新たに生まれた悲運の幼児を親の暴力から守ってくれる味方は、一人もいなかった。

——僕が彼女を育てるよ

そんな幼い織姫に手を差し伸べたのが、つきしましゅうくろう月島秀九郎。遠い親戚を名乗る一人の善良な青年だった。

未成年の男手一つで幼児を育てる困難、数えきれない苦労を厭わず、十七年間も。彼は生まれて間もない織姫を、ずっと一人で守ってくれたのだ。

月島さんが居なければ親の育児放棄で命を落としていたかもしれない。本当の父や兄も同然に親しんだ大恩人に、織姫は物心ついてしばらくし……

——恋をした。

「——お兄ちゃ……つ、月島さん！」

月日は流れ、十五年。

井上織姫の過去に”両親から解放してくれた大恩人”としての自分の存在を挟んだ月島は、朽木ルキアを救わんと立ち上がった黒崎一護一派に加わり、此度も無事ソウルソサエティ尸魂界へ降り立っていた。

「無事でよかったよ、織姫」

「あ、ありがとう。助けてくれて……」

瀨霊廷への進入時に仲間達と離れ離れになり、五番隊の管轄区で苦戦していた彼女の援軍に駆け付けた月島。朱染めの頬で礼を言う妹分を放置し、霊圧感知で周囲を探る。

今の段階で”あの女”が居そうな場所と言えよこの近辺だが…

「……やっぱり隠れているか」

目当ての気配は感じられない。状況的に奴は今藍染惣右介の下で暗躍しているのだろう。想定内とはいえ貴重な接触チャンスを失い月島は臍を噛む。

「…用事ができた。織姫、君はこの先にいる雨竜と合流してくれ」

「ま、待って…！ あたしも月島さんの力になりたいの！」

「織姫、言う事を聞きなさい」

「…で、でも…」

必要な事とはいえ少々好感度を稼ぎ過ぎただろうか。しつこい織姫を追い払い、青年は例の女の情報を集めに単独で瀨霊廷を駆け抜ける。

五番隊、四番隊、十番隊、霊術院、鬼道衆。奴が関わった組織の書類に完現術フルブリングをかけ、その内容を一瞬で記憶。詳細な人間関係や性格、戦闘力など護廷十三隊が持ちうる情報を粗方手にした月島は、その後密かに移動し双匣の丘の森林地帯に身を潜めた。

——私が天に立つ

藍染の腕に抱えられ、例の女が虚圏ウエコムンドへと去って行く。その眼下に、前回あった月島秀九郎の姿はどこにもない。

此度。青年は彼女との対話を求め、初接触をこちらの有利な状況で行おうと考えた。こんな大勢の目と耳がある所ではない、一対一で接する機会。

恐らく奴がこちらに反応を示すのはその一度のみ。そして月島が選んだタイミングは……九月三日。

破面軍による威力偵察の時だ。

「——来るな！ 井上！」

「——黒崎君！」

一月後。

茶渡泰虎に挟んだ過去と同様。朽木ルキアを救い現世へ戻った月島は、一護達が二体の十刃エスパーダの襲撃者と戦う空座町東部公園へ急行していた。

現場では泰虎が巨漢の破面に瞬殺され、駆け付けた一護も内なる虚の反逆で一気に劣勢へ。

何とか仲間を助けようと織姫が梅巖バイゴン・火無菊ひなぎく・リリーの【三天結盾】を展開するも虚しく。苛立った巨漢が小柄な同胞の制止を無視し彼女へ無造作に腕を振るう。

織姫の戦意を削ぎ落すのにそれ以上の行為は必要なかった。

「井上ええッ!!」

「…あ、ヤベ。こいつは潰しちや拙い雑魚だったか」

「当分あの方の手料理はお預けだな、ヤミー」

「ちくしよおおおやっちゃまったアアア!!」

騒ぐ破面達も、殴り飛ばされ顔が潰れた妹分も無視し、月島は近くの木陰に隠れてジツと時を待つ。ここへ来る前、浦原喜助らには「助太刀無用」と事前に援軍を断った。邪魔者は最小限に留めてある。

そして一護の体から荒れ狂う桃色の霊圧が噴出し、彼の内なる虚が鎮まる。かくして例の女との対話の舞台は整った。

しかし。

「藍染様には報告しておく。貴方が目を付けた死神モドキは…」

——殺すに足りぬ

塵ゴミでしたとな

霊圧の余波で巻き上がる砂塵。咄然と自分の身に起きた異変に呆ける一護。微かな意識で泰虎の傷を癒す瀕死の織姫。撤退していく破面達。

その姿を視界の端で確認しながら、月島は土煙の中で立ち尽くして

いた。

：何故だ。何故奴が来ない。

前回と同じくヤミーが空座町民を大勢殺す問題を起こしている。 ”織姫を傷付けるな”との命令にも背いている。あの女が破面達を回収する必要性は増しているはずだ。

なのに何故。

浦原達がないから？

援軍の必要がないから？

何か他に理由が：

「——！！」

その時。強烈な悪寒が青年の背筋を這いまわった。

辺りの音が遠のき、まるで世界が自分ひとりになったかのような違和感が五感を支配する。

覚えている、この感覚を。

泰虎に過去を挟んだ時の双匣の丘。現実の自室に届けられた手紙を読んだ時。霊圧を感じないのに分かる、あのおぞましい、”誰かに見られている”感覚。

ゆっくりと振り返る。周囲の景色は立ち込める土埃に隠れて見えない。不自然な程に。

そして砂のベールの、その奥。

背中越しに後ろを見た、月島秀九郎の目に映ったのは——

「……ッ」

翻る灰色のスカート、白いブラウス、赤いリボン、そして…薄い弧を描く唇。

女子高校生に扮した現世風の装いの”彼女”が、そこに居た。

月島は思わず距離を取る。だが警戒する相手は自然体で佇むまま。そこへ、不意に厚い土煙が両者の間に流れ込んだ。

「……………」

視界が遮られた一瞬の後。気付けば女は、跡形もなく消え去っていた。

どこだ、どこへ行った。

慌てて埃霧を払い辺りを見渡す青年。だが奴の姿は見つからず、彼の両目は虚空を捉えるばかり。

「！」

その時、ふと月島の靴が硬質な何かを踏んだ。石ではない、平面的な人工物。

咄嗟に「なんだ」と見下ろしたそこにあったのは、一冊の本だった。「これは……」

規格は自身もよく読む新書判。真っ白な表紙の上部に綴られた赤と青のポップな英単語タイトルが目を引く。

だが周囲を警戒しつつページを捲った月島は、眉を寄せた。

何も書かれていない、無地のページが延々と続いている。

当てつけのつもりか。”読書家”の通称を使った何らかの隠喩か。以前の手紙といい随分と手の込んだ事がお好きのようだ。

相手の子供じみた悪戯心に苛立つ青年は、そこではらりと落ちた一枚の紙に目が留まる。

その細長いピンク色の紙切れ——葉には、あの時と同じ女の筆跡で小さな問文が書かれていた。

月島が欲した対話のきつかけ。されど最悪に近い、敵の思惑が……

——銀城空吾を救いたい？

クスクス…と。

鈴が転がるような嘲笑の幻聴が木霊する空座町東部公園。青年は女の葉を握り潰し、屈辱に齒を軋ませる。

誰よりも何よりも大切な兄貴分。この世でただ一人自分を忌避せず受け入れてくれた、哀れな復讐者。

あの魔女は、その無二の恩人に手を出そうとしていたのだ。

「……調子に乗るなよ、死神」

黒崎一護、日番谷冬獅郎、護廷十三隊の友人や配下の破面達。こちらが握れる奴の弱みは山ほどある。

精々今の内に、その箱庭を見下ろす上位者気分を楽しんでおくとい。

「最後に勝つのは、この僕だ」

…葉の一文、銀城空吾の名に全ての注意を奪われた月島秀九郎。だが彼が真に注視すべき”その単語”から関心を失ったのは、あるいは無意識の逃避行動だったのかもしれない。

女が残した無地の新書に綴られた、六つのアルファベット。

あらゆる色を消し去る事を指す、その言葉。

月島がそこに隠されたおぞましい真実を垣間見る日は、そう遠い未来の事ではなかった——

全部…豹変さんが居たからじゃないか…！

五月、鳴木市。

死神時代の最後の誇りである代行証を元に、無事完現術フルブリンクの力を呼び起こした黒崎一護。修行の第一段階を越えた彼は、能力の完成を目指してジャッキーの監督で虚退治ホロツを続けていた。

「往くぜ…ッ！」

げっがてんしよう
—— 月牙天衝 ——

代行証から放たれた漆黒の斬撃が敵を消し飛ばす。何度も繰り返された修行の光景だが、この時は様子が違った。

「ッ、なんだ…？」

「ほう…！」

突如ゆらりと周囲の漆黒の霊圧が揺れ、一護の体に纏わりつく。まるで衣類のようなその形状はさながら死神の死覇装。

そして偶然か必然か。全身を包んだ霊圧の一部は右手の中で刀のように凝固し、いつかの【最後の月牙天衝】を彷彿とさせる武器へと変化。

今までの卍文字の鏢や、光の鎖だけだった能力とは大きく異なる、明らかな進化だった。

「へえ、見違えたわね。そいつは完現術の成長だよ」

「これが…」

「あんたの体が力に慣れたんだろう。死神と違ってあたしら人間は生身だからね、体力的に無理が利くようになって能力の制限が緩んだのさ」

ジャッキーの推測に頷く。だが一護は、それが全てではないとも感じていた。

「…もう、大丈夫だって事か？」

青年は後ろへ振り向く。

ふわふわと浮いている小柄な人影。自分の完現術の根源——白死覇装の少女が、その恐ろしい仮面の眼孔の奥でニツコリと目を細めていた。

「ふふ、化身サマが直々に出力を調整してくれるなんて、ホント主人に優しい能力ね。愛されてるじゃない、一護」

「…茶化すんじゃないよ」

照れているのかもじもじしている仮面少女の姿につられ、何となく一護も気恥ずかしくなる。やはり彼女の柔らかな空気に簡単に順応するのは思春期の青少年として難しい。

頭を掻いて気持ちを切り替え、ジャッキーの話に耳を傾ける。

「さて、せっかくだしお祝いでもしてやりたいけど……生憎時間がなくてね」

緩んだ表情を改め、彼女が驚愕の事情を語り始めた。

「あんたの友達の石田雨竜、浅野啓吾、小島水色の三人を襲った敵の正体がわかった」

「なっ!？」

突然の情報に思わず「誰だそいつは!」とジャッキーに掴みかかる。

一護が力を取り戻したいと望んだ最大の理由が、最近周りで多発している謎の襲撃事件だった。特に浅野達の場合は実際に自分でそれらしき敵の姿を見ていながら何もできず、己の無力を強く突き付けられた一件でもある。

「…あの背が高い黒髪の男か？」

「! あんた、あいつに遭ってたの？」

友人達が襲われた現場へ駆け付け付けた時に一言交わしただけだが、相

手の人相は覚えている。

すると驚くジャツキーが少し考え込み、そして真剣な顔で一護を見た。

「とりあえず続きはアジトで話そう。多分、かなり長い話になると思うから」

「…わかった」

何やら深い事情があるらしい。少しでも情報が欲しい一護は神妙に頷き、彼女の後に続きアジトへと向かう。

「——兄…？」

そんな彼を物陰から覗き見る一人の女子中学生の姿に、二人は気が付かなかった。

†††

「月島は、かつて俺達のリーダーだった奴だ」

そんな前置きから始まった組織の現指導者——銀城空吾の話は、衝撃的なものだった。

人間としての平穩を取り戻すという志の下に組織を率いたその月島は、皆の夢を叶える方法を発見した人物なのだと言おう。

その手段こそが、“死神代行”。すなわち人間と死神の混血児が持つ種族的性質を利用した、完現術能力の譲渡だった。

「方法自体は間違ってた。協力してくれた死神代行は多くの同胞達の能力を受け取ってくれ、あいつ等は“普通の人間”になる事が出来た」

しかし、銀城はそこで「だが…」と顔を暗くする。

「月島は突然心変わりした。死神代行も人間になった仲間達も殺し、俺達の組織から離反したんだ」

「なんでそんな事…」

一護の問いに銀城が首を振る。月島は以後組織の前から姿を消し、その思惑も未だ闇の中だ。

「だから今、俺達が何よりも優先すべき事は一つだけ」

——死神代行のお前を…

月島に殺させない事だ

彼の決意に一護は唾を嚙下する。ジャッキーが言っていた「時間が無い」の意味を理解して。

「お前の友人二人はともかく、石田雨竜はそう簡単にやられる雑魚じゃねえ。それができる月島からお前を守るには、お前自身が俺達と共に戦えるレベルまで強くなつて貰う必要がある」

一護に異論はない。焦るがままに力強く頷くと、銀城が首のペンダントを握り、隣の仲間の少年へ指示を飛ばした。

「よし……雪緒^{ゆきお}、出番だ。修行部屋を作れ」

「ええ、面倒くさ…」

「事情が変わった。月島に一護の成長を感知されないためにも、霊圧を遮断できる頑丈な空間が必要なんだよ」

彼の説得に金髪の少年が渋々頷く。妹達とそう年の変わらない子供に世話になる後ろめたさから頭を下げる一護。

「悪い、自己紹介まだだったよな。黒崎一護だ」

「…雪緒・ハンス・フォラルルベルナ。食費にアジトの固定資産費と、こいつ等に色々タカられてる哀れな財布係だよ」

「……おい銀城」

「ノブレス・オブリージュだ」

元手が彼のクズ親の遺産だから問題ないなどと弁明しているが、大

人が子供のスネを齧っている事実は同じだ。組織の闇を見てしまった一護はそつと雪緒に自分のバーの飲食代を支払う。彼の「お兄さんイイ人だね」の言葉が涙を誘って堪らない。

「じゃあいくよ…」

インヴェイダーズ

マスト・ダイ

雪緒が懐の携帯ゲーム機に触れる。するとそこから完現術のドット状の闇が広がり一護と銀城を飲み込んだ。

「…言えよ、一護。ガキの頃一度くらいはあっただろ？」ゲームの世界に入りたい”って夢がよ”

「そりや、まあ…」

「ちなみに俺は一度も無え」

「じゃあなんで言わせたんだよ！」

銀城にツツコミながら見渡した闇の空間は、荒いピクセルフォントやアイコンが浮遊するデジタル意匠の世界だった。リルカの「ドル・ハウス」とは異なる完全な異空間のようだ。ここならあの月島とやらに気付かれる心配はないだろう。

「あまり悠長にしてられねえんでな、さっさと始めるぜ」

クロス・オブ

スキヤツフォルド

瞬く光と共に銀城のペンダントが西洋風の大剣に変化する。遅れじと一護も自身の完現術フルプリンゲを身に纏った。

「ほう、死覇装に【天鎖斬月】の鏢と鎖か。あの仮面の女は出さねえのか？」

「全力で戦う時は鎖の姿になってるんだよ」

頭の中で少女に頼むと、周囲の鎖が集まりいつもの彼女の姿が具象化した。ご丁寧なぺこりと銀城へ一礼している。

「えっと、あんたに『修行よろしくお願いします』だってさ」

「凄えな、能力そのものと思いの疎通ができるのかよ。ますます斬魄刀そっくりで嬉しいぜ」

死神の力が戻りつつあると確信しているのか、男の霊圧が一段と上がる。思わず息を呑むほどの力だ。

霊圧の刃を握り身構える一護。

「あー、そうだな…」

「何だ？」

そこへ、バツの悪そうな表情を浮かべる銀城の声が投げかけられた。

直後、彼の雰囲気が一変する。

「…最初に謝つとくぜ、一護」

——俺、こういうの苦手なんだよ

次の瞬間。

一護の眼球に一筋の熱が走り、彼の視界は光を失った。

†††

「——井上も石田も斬られた記憶がある…？」

先日敵の襲撃を受けた仲間の同級生——石田雨竜の見舞いの帰り。空座総合病院からの帰路で茶渡泰虎とぼったり出会った井上織姫は、石田から訊いた不穏な話を彼と共有していた。

その時に茶渡が見せた大きな反応に彼女は硬化する。

「嘘、まさか茶渡君も…？」

「先月の始業式に出席する登校途中の事だった。てっきり白昼夢か何かだと思ってたが…」

「…あたしが斬られたのもそれくらい前だったと思う」

仲間のメンバーが三人も同じ体験をしているとなると、気のせいや偶然と笑い飛ばす事はできない。明らかに自分達を狙った手口だ。

そして恐らく、姿なき襲撃者の目的は…

「その一護に関してお前の力を借りたい」

「ッ、黒崎君の…!？」

茶渡の突然の頼みに織姫は即座に食い付く。最近学校に遅刻したりと、一護の生活に起きたであろう大きな変化に関する事であれば、少女に迷う理由はない。

かくして織姫が連れてこられたのは隣町の鳴木市。

道中聞いた茶渡の話は驚きの連続だった。完現術フルブリングの事。その能力者達による秘密結社。襲撃者と思しき敵の存在。

そして何より——一護がかつての霊力を取り戻しつつある事。

「じゃ、じゃあ本当に黒崎君は…」

「ああ、既に虚ホロウの群れを一人で相手できるレベルにまで力を取り戻しているらしい」

「よかったあ…」

ようやくこの日が来た。織姫は想い人の下へ逸りながら胸を弾ませる。同じく嬉しそうにしている茶渡の顔を見る限り、その秘密結社での霊能修行は順調なのだろう。

そして、一護を狙う”月島”なる敵との戦いにおいても不安はない。これまでの虚霊坤ロスヴァーリエスでの秘密の鍛錬は確実に実を結びつつある。今度こそ彼と共に戦えると、織姫は己の力に自信をつけていた。

(それに”XCUTION”って組織の人達もいるんだから…)

一護が信頼して修行をお願いしたのだ。悪人であるはずがない。

見ず知らずの人間に、そんな全幅の信頼を寄せる織姫。だが彼女は茶渡に紹介された組織のアジトで、とんでもない光景を目にした。

「——チツ、回復アイテムか」

可愛らしい赤毛の女の子と、物静かな金髪の男の子に案内された不思議な世界【インヴェイダーズ・マスト・ダイ】。例の完現術フルプリンクの能力らしき空間に転送された織姫は、そこで両目を斬られ傷だらけの黒崎一護の姿を見た。

「黒崎君!？」

「…その声…井上か!?!」

息も絶え絶えの彼の側には、険しい顔でこちらを睥睨する大剣の革ジャン男。

「おい雪緒。誰がそいつを入れていいって言った？」

『だって空吾、そのままじゃホントにお兄さんを殺しそうだったし』

その物騒な会話に織姫は絶句し、そして瞬時に仲間を守らんと走り出す。

「黒崎君から離れてっ!」

——孤天斬盾——

「!」

彼女の髪飾りから光の矢が神速で射出される。避けながら距離を取った男を警戒しつつ、織姫は一護を背に立ち塞がった。

「…井上織姫です。黒崎君に酷い事するならあたしが相手になりますッ」

「ったく、面倒臭えな」

自慢の【双天帰盾そうてんきしゆん】で一護を回復させながら男をにらむ。すると彼がふと何かを思いついたような仕草をし、その渋面を凶悪な笑顔で塗り替えた。

「情けねえな、一護。お前が自分仮面の完現術の女に甘やかされてる間に、仲間がお前のために命を懸け始めたぞ?」

「や、止める！ 井上に手を出すな…っ」

「だったら立ち上がってみろよ。言った筈だぜ、戦う覚悟も持てねえ奴を——俺の仲間と扱う事はねえつてなア！」

躊躇いなく振り下ろされる男の大剣。それを阻止しようと放たれた一護の新能力らしき鎖。

だがボロボロの彼の力では焼け石に水。難なく躲され、刃は一気に織姫の眼前に。

「井上えええッ!!」

聞こえる。力を失いながらも、傷だらけになりながらも、未だ仲間を護ろうとしてくれる黒崎君の叫び声が。

修行のために仲間達と距離をおいても、あたしが好きになったその優しさは少しも変わっていない。

彼の想いを、織姫は大切に胸の奥へしまい込む。

「だけど…」

「火無菊…梅厳…リリイ…椿鬼…往くよみんな！」

「ハッ、『三天結盾』かよ！ そんなんで俺の攻撃を防げると思ってたのか!？」

「だけど黒崎君は一つ、勘違いしている。」

あれから十七ヶ月。藍染惣右介に連れ去られた時から変わらず、あたしがただ護られているだけの弱者のままなのだ。

「…いいえ、『三天結盾』じゃないです」

「！ なっ——」

—— 四天 抗 盾 ——

迫る大剣が織姫の霊圧の三角盾に振り下ろされた瞬間。

途轍もない大爆発が彼女の正面の視界全てを飲み込んだ。

「ぐあアッ!!」

「な…」

直撃を受けた男が悲鳴を上げながら吹き飛んでいく。背後からは轟音と突風に驚く一護の声。

一体何が起きたのか誰もが混乱する中、事象を起こした織姫は静かに口を開いた。

「…攻撃を受けた瞬間に爆発して拡散し、それと同時に自動的に反射攻撃をします」

「ぐ、そ…」

「その最大威力は、当時の”エスパーダ十刃”の虚閃セロにだって劣りません」

威圧の意を込め多少大げさに宣言する。だが事実少女は、一護を守るためならそれに匹敵する力を発揮できると自負していた。

藍染惣右介の崩玉の力で破アランカル面化し、虚霊坤ロスヴァリエスの女君主の手により更なる飛躍を遂げた新生「十刃」。織姫の攻撃は、その上位一席であるウルキオラに鼻で嗤われる程度の技でしかない。

しかし霊界の限りなく頂点に位置する彼等にとっては兎戯であっても、生身の人間である完現術師フルアリンガーにとっては、体験した事のない次元の火力だった。

「いの…うえ…?」

困惑する背後の一護へ、少女は優しく微笑む。これまでの想いが彼へ伝わる事を祈りながら。

「…黒崎君が力を無くしてから十七ヶ月。あたしも茶渡君も石田君も、みんな信じてた。いつか必ず、黒崎君が力を取り戻す時が来るって」

「!」

「だから心に決めてたの。その時が来たら…」

—— 今度こそ、黒崎君の

隣で共に戦おう…って

それは仲間達の決意。足手まといにしかなれなかった当時の弱い自分と決別する覚悟。

癒えた目を瞠る一護。

その眼前に、見違えるほど力強い瞳と霊圧を持った、女傑が佇んでいた。

「——やるじゃねえか、小娘^{ガキ}」

しかしその時、低い男の声^{こゝろ}が二人の鼓膜を震わせた。

「爆発反応装甲とはえげつねえな。…いや、そうだったな。お前らは二人共…あの藍染惣右介に見出される程のバケモノだって事を忘れてたぜ」

「なっ、嘘…!」

驚愕する織姫と一護。あれを喰らって尚戦意を失わない人間などありえない、と。

だが彼等は失念していた。目の前の男が誰なのかを。組織を率いる彼——銀城空吾もまた、只者ではない強者の一人なのだ…

「さあ、修行続行だ」

——覚悟しろよ、一護

†††

「——どうしたのかりんちゃん？」

夕食時の黒崎邸。

食卓についたままぼーっとしていた少女——黒崎夏梨^{かりん}は、双子の姉・遊子^{ゆず}の声に顔を上げる。

「…あ、ううん。何でもない」

「大丈夫？ お味噌汁おいしくなかった？」

「そんな事無いよ、いただきます」

二人きりの寂しい晩御飯。心配をかけまいと夏梨は慌てて彼女の料理を掻き込んだ。

「それにしてもお兄ちゃんもお父さんもどこ行ってるんだろ？ お兄ちゃん、最近ようやく元気出てきてたのに…」

「…大丈夫だよ。前みたいはその内ひよっこり戻ってくるって」

遊子を安心させようと明るい顔を意識する夏梨。だが内心、少女自身もこの心配性な姉以上の不安に苛まれていた。

…一兄いちにいが怪しい霊能力者とつるんでいる。

最近帰りが遅かった黒崎一家の長男・黒崎一護。友達と隣町で遊んだ帰りに偶然兄の姿を見かけた夏梨は、彼の只ならぬ様子に焦燥を覚えた。

あのととき兄から感じた、どこか覚えのある温かい感じ。ジン太ら虚退治の仲間達ホロウが”霊圧”と言っていたあの気配は、確かに一兄のものだった。

それはつまり、兄が昔のような戦う力——”霊力”を取り戻した事を意味して…

「…ッ」

あの時一緒に居た黒人の女が兄を唆したのか、勝手な事をしやがって。夏梨は恐怖と悔しさに唇を噛み締める。

また、一兄は巻き込まれてしまうのだろうか。死神の都合に。まだ見ぬ敵との過酷な戦いに。せつかく手にした安全と平穩を捨て去って。

そうならない様、自分は今まで彼の代わりにこの町を虚から守ってきたのに…

「——カリンちゃん！」

ガチャンと食器が鳴り、名を呼ばれた少女は思考の海から跳ね上が

る。

「もうっ、カリンちゃんまであたしに隠し事してるじゃない！ そんな暗い顔しちゃって」

「…えっ？ あ、いや…」

「今日お家に帰って来てからずっと何かに悩んでるのバレバレなんだから！ お兄ちゃんも何も話してくれないし…っ」

頬を膨らませ「いつもあたしだけ除け者にして」と涙を浮かべる遊子。

不味い、地雷を踏んだ。何とか誤魔化そうとするも逆効果で、しばしの言い合いの末、遂に姉の鬱憤が爆発した。

「ッ、カリンちゃんのバカ！ もう知らないっ！」

「あつ、遊子…！」

怒り、泣き、荒れながら二階の自室へ引つ込む彼女。あの感じは相当不満を溜め込んでいる。

遊子はいつも、自分だけ霊が見えない事を嘆いていた。霊力を失った兄もそうだったが、やはり疎外感を感じてしまうのだろうか。申し訳ない思いで萎れる夏梨。

あの子が落ち着いたらちゃんと謝ろうと決め、少女は一人苦い思いで冷めた食事に箸を伸ばす。

——ピンポーン

その時、不意に玄関の呼び鈴が鳴った。

『あ、はーい！ ほらカリンちゃん行って！』

「わかったよ……ったく、こんな時間に誰だよ」

自室に籠る遊子の命令に渋々従い、夏梨は客人の正体と用事に首を捻りながらパタパタと土間へ向かう。

「えっ——」

そしてドアを開けた玄関先で佇んでいた人物を見た時。少女は、自

らの脳髓の奥底に眠っていた……過去の記憶を思い出した。

「久しぶりだね、夏梨^{かりん}」

——僕の事を覚えてるかな？

全部……急転さんが居たからじゃないか……！

空座総合病院。

就寝時間が近い静かな院内の一室から淡い光が零れている。

病室の患者は石田雨竜^{いしだうりゆう}。仲間の井上織姫の協力で傷を癒した彼は、来たる戦いに備え密かに装備を整えていた。

——襲撃者が動き出した

霊力を失った黒崎一護に纏わりつく見知らぬ霊圧。その正体を探る途中、雨竜は謎の人間の霊能力者に不意を打たれ敗北してしまつた。

(僕達は皆、何者かの企てに巻き込まれている……)

驚いたのは仲間の井上と茶渡泰虎^{さとう やすとら}も同じように誰かに斬られた記憶がある事。そして二人の場合はこちらと異なり、何故か実際に負傷してはいない事。

まるで白昼夢のようだったとの証言に雨竜は疑問を覚える。どうして自分だけが傷を負ったのか。あるいは両者は全くの別手口によるものなのか。

いずれにせよ、敵の目的はその活発な霊圧の動きが明らかにしている。

黒崎一護だ。

(あいつの霊力が戻っている。この事実から最悪の事態を想定すると…)

町中に広がる雨竜の感知能力は確と一護の霊圧を捉えていた。

だが同時に彼の近くで感じたのは、あの”謎の襲撃者”の気配。仲間の雨竜を襲った奴が何の思惑もなく一護と長時間接するなどありえない。確実によからぬ意図がある筈だ。

…恐らく黒崎は騙されている。力を取り戻す手助けでも受けたのかもしれないが、あのお人好しならそれだけで簡単に心を開いてしまわうだろう。

世話の焼ける馬鹿へ借りを返すべく、雨竜は体の調子確かめベツドを立った。

「——如何にも遅い決断だな、雨竜」

制服に着替える途中、個室の扉を潜り一人の医師が現れた。院長にして青年の実父の滅却師、クインシー石田竜弦だ。

「…状況が変わっただけだ。黒崎の周りがきな臭い」

「あの親子の周囲が喧しいのはいつもの事だ。私の忠告を無視するからお前もそれに巻き込まれる」

皮肉の効いた彼のセリフに雨竜は顔を顰める。黒崎一護という元死神と関わり続けている事を言っているのだろうが、あれはただの腐れ縁だ。

だがふとその”親子”の言葉が気になった彼は、父へ問い掛けた。

「あんた黒崎の親父さんと知り合ってたのか？」

「知り合いではない。ただの腐れ縁だ」

「そ、そうか…」

途端に悪化した彼の機嫌に雨竜は頬を引き攣らせる。自分と黒崎のような関係ならば父の豹変の理由には納得しかない。

もつとも話を続ける気がない青年は、クインシー・クロス滅却師十字のブレスレットを手首に通しそのまま病室の出口へ向かった。

「雨竜」

「…何だ？」

だが去り際、竜弦が妙な事を口にした。聞き捨てならずとも決して愉快ではない内容。

「この件に関わるのは程々にしておけ」

——浦原喜助が動いている

その意味に眉を顰め、青年は無言で病院を後にした…

涼しい五月の夜風に当たりながら雨竜は目的地へと駆ける。その胸に湧き上がるのは、彼らしくない——負の激情。

全く、誰も彼もが身勝手すぎる。

黒崎が無力のままでいいと決めつける戸魂界^{ソウルソサエティ}。それを承知する浦原さん。そしてあいつが見ず知らずの不審者の取引に応じたら、慌てて腰を上げる保護者協力者たち。

父親や妹達だって彼を大切に思うあまり現状維持に徹するばかりで、誰一人として黒崎自身の気持ちと向き合おうとしない。

…別に黒崎が誰に騙されようがあいつの勝手だ。馬鹿につける薬としては妥当だろう。

だけど。

「戦う力を失った人の心を弄ぶようなクズを、許すつもりはないな」

かつて戸魂界^{ソウルソサエティ}で亡き祖父の仇討ちに全ての霊力を投じた石田雨竜。短いながら無力の日々を過ごした彼にとって、同じく無力に苦しむ黒崎一護を取り巻く此度の陰謀は、断じて見過ごせない”悪”であつた。

鳴木市に本部を置く秘密結社XCUTIONのアジト。

雪緒の完現術^{フルブリンク}「インヴェイダース・マスト・ダイ」内に作られた専用の修行場に、剣撃のぶつかり合う音が木霊する。

「——くそっ、何なんだ…！ お前一体何なんだよ!!」

襲い掛かる斬撃の嵐を必死に受け流す。明らかな力量差に苦しむ黒崎一護は、この修行を担当する銀城空吾への苛立ちを喚き散らしていた。

「ッ、黒崎くん!」

『ダメだよ。お姉さん^{ヒーラー}のお仕事はもう終わったんだから』

「! 井上——がはアツ!?!」

完現術の檻に捕らわれた織姫を助けに駆けるも、一護は突然の蹴撃に吹き飛ばされる。

「どこ見てんだよ、腰抜け」

「ゴホッ…! ぎ、銀城てめえっ」

「やれやれ、一体いつからお前は戦う相手からすぐ意識を逸らすような平和ボケに成り下がった?」

呆れた目で「こいつは深刻だな」と見下ろしてくる男を、一護は辛うじて睨む。何故こんな事になっているのか彼にはわからなかった。目を潰され、助けに来てくれた井上を人質に取り、まるで拷問のよくな戦いを強いる銀城。血反吐が出るほど過酷だった浦原喜助や平子真子の修行とは違う、好意も敵意も感じない不気味な剣を振るう男。

拭えない本能的な違和感が、この銀城空吾という人物を信用する事を一護に躊躇わせていた。

「…」信用しきっていない? 何を言ってるんだ、お前?」

男の目が氷のように冷える。

「なら訊くが、なんでお前は俺達の誘いに乗った？」

「何だと…？」

「信用できなくても利用する事ならできると思ったか？　力さえ取り戻せば裏切られても切り抜けられると思っただか？」

そう問う銀城の顔は侮蔑に歪んでいた。

「——バカが」

「がッ!？」

凄まじい激痛。一護の完現術フルブリングの死覇装を貫き、男の大剣が肩に深々と突き刺さっていた。

「何度痛い目みりや気が済むんだ、ああ？　そんなんだからてめえは浦原喜助ら死神共に利用され、用済みになった途端に捨てられたんだよ！」

「…ッ、ぐうつ」

「以前の”霊界の英雄”時代のお前ならそれでもよかつたんだろうぜ。だがな、今のてめえのどこにそんな力がある？　現実も見ずに無

謀にも信用できない連中の懐に飛び込んで無事に逃げ切れるとでも？　完現術フルブリングに目覚めたばかりの雑魚がイキってんじゃねえよ!!」

「ぐあああああッ!!」

肩を穿つ大剣ごと地に磔にされる一護。夥しい量の血が床を赤く染める。

そんな苦痛に喘ぐ彼へ、銀城が抑揚の無い声で語り始めた。

「……一護。死神共にチャホヤされて光の中を生きてきたお前と違って、俺達完現術師フルブリンガーは常に日陰者だ」

「な、に…？」

「死神も虚も人間も、誰も彼もが敵ばかり。信頼できるのは同胞だけ。その一人だった月島が裏切った以上、俺達は夢を叶えるために一層団結しなきゃならねえ」

そして。

組織を預かる現リーダーが、仲間候補の一護に、事実上の最後通告を突き付けた。

「わかるか？ お前みたいな危機感の欠片もないド素人を仲間を迎えたら、俺達のXCUTIONが…」

——最後の居場所が…

崩壊しちまうんだよ

彼の言葉に一護は哑然とする。

大げさな連絡システムも、いくつものアジトも、秘密結社とカッコつけて名乗っているのも。彼等は断じて遊びでやっている訳ではなかった。

かくして一護はようやく知る。

彼に手を差し伸べてくれた彼等完現術師は、それほどまでに今の世界から忌避され続けてきた”弱者”だったのだ。

「…つたく、救いようが無え。まさか当代の死神代行がこんな甘ったれたガキだったとはな。こっちの計画が全部パアだ、クソツタレ」
忌々しげに吐き捨てる銀城へ、青年は何も言い返せない。

…だが。続く男の宣言を耳にした一護は、絶望のあまり戦慄した。

——チャドと井上を殺す

「お前が組織の癌になるとわかった以上、俺達の存在を知っちゃまったお前ら三人を生かしては置けねえ」

「や、止める…！」

「恨むなら自分の迂闊さを恨め。心配しなくてもめてめえも最後に殺してやるさ」

それはあまりに冷酷で、同時にやむを得ない必然の決断だった。

…だが、たとえどんな理屈があろうと、それだけは許さない。

一護は体に突き刺さった大剣を掴む。必死に磔から逃れようと。

「そんな事…させて堪るかよ…ッ」

肩から血が滝のように流れ出る。頭の中で少女の制止の悲鳴が木霊する。それでも彼は足掻き続けた。

母を死なせてしまったあの日から始まった一護の業。それはフルブリンガー完現術師となった今も変わらない。

彼が求めた力はいつだって、大切な人達を護るために求め、手にし、磨き上げたものだった。

「……頼む……力を貸してくれ……！」

一護は握る完現術の鎖へ懇願する。その中で悲痛な葛藤に苦しんでいる仮面の少女へ向けて。

「まだ早いのはわかってんだ……！ 斬月と同じように……あんたも俺が傷付かねえように力を抑えてんのはわかってる……ッ！」

鎖から彼女がブンブン首を振り危険を訴える様子が伝わってくる。その逡巡は赤子の時より一護の成長を見守ってきた深い愛情が故か。

だけど。

だけどもう、嫌なんだ。目の前で誰かを失うのは。大切な人を無力で失うのが。

一護は、己の魂の奥底で煮え滾るその力へ向け、死に物狂いで手を伸ばした。

「使わせてくれ……！ 銀城を止める力を……ッ」

あいつ等を護る力をッ!!

……その覚悟の咆哮を上げた直後。

少女が震える目を閉じ、ゆっくりと開いた。

「うおおおおおオオッッ!!」

「……！」

凄まじい光の嵐が胸から噴出する。周囲の空間が軋み罅割れるほどの霊圧が吹き荒れ、銀城が咄嗟に瞠目した。

周囲の霊圧の気配が、感覚が一気に鋭利になる。ブチブチと体の彼方方で骨肉が砕け千切れる音が響く。藍染と戦った時と同じ、自らの霊圧に焼かれ全身が崩壊していくような激痛。

だがその代償に引き出した膨大な霊力は、容易く一護に自由を与えた。

「銀城オオオオツ!!」

滅びゆく体を奮い立たせ、自身に突き刺さった大剣を引き抜き……
斯くて一護は、仲間達を護るために引き出した死力を、敵へ振り下ろした。

「——よくやった、成功だ」

大爆発が周囲全てを飲み込む。

大気が燃えた白煙の中で一護が最初に見たのは、死力の霊圧を束ねていた彼の腕を押さえ付け、銀城空吾の苦痛に歪んだ笑顔だった。

「完現術フルブリングが完成する瞬間は、今までその道具に溜め込まれてた魂が一気に開放される。その時に必ず誰かが側で身を挺して抑え込まねえと術者の身がもたねえんだ」

「身を…挺して…」

「だからお前にはなんとんでも俺の目の前で完現術を完成させ、吹き出す魂の力の矛先を俺に向けて貰わなきゃならなかった」

痛々しい火傷が全身を覆う、元の兄貴然とした顔に戻ったポロポロの銀城空吾。それまで渦巻いていた自滅する程の霊圧が消えている事に気付き、一護は彼の言葉に放心する。

「まさか……最初、から……？」

「悪リイな」

——”甘ちゃん”なのは

お互い様だ、一護

苦笑しながら「月島リーダーみたいにはなれねえな」と自虐する男は、されど悔いのない澄んだ瞳をしていた。

「——助かった、ありがとう」

力が覚醒してからおおよそ一夜が明けた。

一緒に井上の治療を受けて無事復活した銀城へ、一護は相棒の少女と共に礼を言う。この男が居なければ危なかったのは真実らしく、彼女も直後は安堵に腰が抜け座り込んでいた。

「急いでんのはこっちも同じだからな。無茶させて悪かった」

「…いや、あんたの言う通り俺も危機感が足りてなかった。気を付ける」

「そうしてくれ。月島は藍染とは別ベクトルで曲者だ。慎重になりすぎくらいが丁度いい」

改めて握手を交わし、話は一護の完現術^{フルブリンゲ}へ移る。

「昨日の修行でお前の力は完成した。だが今のままだと力が強大すぎて肉体が耐えられない」

「やっぱりか…ならこれからは体力作りか？」

「そうなるな。普通にキツイから覚悟しろよ」

脳裏でコクコク頷いている仮面の少女に逆らえず、一護は渋々自身の筋肉虐めに勤しんだ。

「——お前、能力が完成する時に死神時代と同じ”霊圧感知”ができるようになったらろ」

雪緒の修行部屋に籠って数日。一護は雑談含め銀城から多くの説明を受けた。

彼が力を失う理由となった【最後の月牙天衝】。だがその膨大な靈力を少しも余さず一つの技に注ぎ込むなど靈力制御の観点から不可能で、死神の力の残滓は魂の至る所に残っていた。故に銀城は、【無月】の中に束ねられなかったそれらを、完現術フルブリングの能力的性質で刺激しようとした。

「想いや意思つてのは魂の力だ。お前の死神としての最後の誇りとなった”代行証”は、その想いを一か所に集めるための焦点となれる代物だった」

「…だからその”物の魂”を覚醒できる完現術フルブリングの能力を手に入れる必要があったって事か」

トレーニングを終え疲労回復を待ちながら、一護は自身の代行証を見つめる。

「さて。どうだ、今なら行けそうか？」

「…！」

「長時間はキツイだろうが、数分程度の短期決戦なら全力で戦える筈だぜ」

井上の能力の補佐もあり、浦原レッスンに劣らぬ驚異的な密度で体力増強に勤しんだ数日間。ここから先はやはり実戦で慣れるしかないのだろう。

…これが、俺の完現術フルブリング。

胸中の相棒のお墨付きを貰い、一護は意を決して自らの代行証へ働きかけた――

完現術修行の全行程が終わり、一護と織姫は【インヴェイダース・

「マスト・ダイ」の空間から元の現世へと戻った。大きな壁を越えた感覚を噛み締め、茶渡^{チャド}らアジトに残るXCUTIONの仲間達へ目を向ける。

「…おかえり」

「その様子だと上手く行ったみたいね」

「雪緒にジャッキーか。お陰様でな」

修行を手伝って貰った少年と女性へ一護は頭を下げる。それ二人はバツが悪そうに顔を逸らした。

「…どういたしましたして」

「？」

青年はその姿に小さな違和感を覚える。あまり接点のない雪緒はともかく、サバサバしたジャッキーがこんな殊勝な態度を見せるのは珍しい。

「どうしたお前ら。何かあったのか？」

同じく訝しんでいる銀城の問いに、初老のバーテンダーがいつもの澄ました顔で答える。確か名前は…沓澤^{くつざわ}ギリコ。

「銀城サンが悠長なだけです。修行が終わったという事は、月島サンとの戦いが始まるという事です」

「…なんだ、怖気づきやがったのか？」

「彼と過ごした時間は我々の過去の一部。過去とは厳格な時の神にも奪えぬ”呪い”です。たとえ裏切り者であろうと仲間であった過去まで消えたわけではない、それだけですよ」

ギリコの言葉に一護達は押し黙る。

離反した仲間と戦う。それは青年自身の知らぬ苦しみでは決してなかった。

そんな彼等XCUTIONの想いに応えてやれるのは、自分達をおいて他にない。

「――俺が戦う」

懐の代行証を握り締め、一護は宣言する。

井上と茶渡、そして一同の視線が彼へ集中した。

「…あたしも戦う。その月島つて人と戦うのに一番しがらみがないのはあたし達だから」

「ああ、奴にはこちらに手を出した落とし前を付けて貰わないといけない」

「井上…チャド…!」

石田や浅野達の敵討ちに意気込み、心強い仲間の二人が立ち上がる。

銀城達にとって月島は敵だろうと、同胞なのは変わらないのだ。彼等には奴に罪を償わせ、裏切った事情を説明させ、その後の付き合いを決める必要がある。

そう言うと、銀城達は沈痛な表情で顔を伏せた。

「…外まで送る。井上もチャドも遅くならねえうちに帰れ」

「銀城…」

「仲間達の統率はちゃんと整えておく。少し時間をくれ」

面目なさそうに「すまん」と項垂れる銀城の先導に従い、一護たち三人はアジトを後にする。

…その寸前。ふと微かに聞こえた声に青年は振り向いた。

——ご免なさい

閉じていくドアの隙間からこちらを見つめるXCUTIONの面々は、一様に能面のような顔をしていた。



途中まで見送ってくれた銀城に感謝し、茶渡と井上と別れた帰りの道中。一護は見慣れた街並みを一人急いでいた。

既に時刻は深夜を回った夜二時。親父がフラついているため面倒な門限は無視出来るが、遊子と夏梨に心配かけるのは心が痛む。

今頃怒髪天になっているだろう妹達の説教が短くなる事を願いつつ、青年は夜道を駆けながら自らの代行証へ目を落とした。

…完成した。俺の完現術が。

それまでの蓋をされているようなもどかしさがなくなった、正真正銘の完全形態。あの仮面の少女曰く無理は禁物との事だが、何気に猪突猛進な所がある彼女も本心では大喜びしている。自分の体力不足で相棒の力を引き出せず不甲斐ない思いをしていた一護は今、少年のように高揚していた。

「…ヤベ、あいつらまだ起きてる…!」

いつものクロサキ医院の看板の下。リビングの灯りが零れる窓を見て首を竦める一護。

そつと玄関のカギを開け、少女達の兄は申し訳なきように「ただいま」と屋内へ顔を覗かせた。

「おかえり!!」

すると予想外に、満面の笑みの長女が駆け寄ってきた。

「よかったー! お兄ちゃんやつと帰ってきた!」

「おお…遅くなって悪リイ…」

肩透かしを喰らった長男は遊子のテンションに困惑する。

「…どうしたんだオマエ? 随分ご機嫌だな」

「…どうした」じゃないよ! 今日懐かしいお客さんが来てるんだからっ!」

「懐かしい客?」

こんな夜更けに訪れるような近しい、あるいは不躰な人物が思い浮かばず首を捻る一護。

「えへへー、誰だと思う? ヒントはいとこの誰かです!」

「いど?」

益々わからない。親戚など母の葬式でも会った覚えはないのに、はしやく遊子の顔に冗談や疑念の色はない。

そして「一人しかないじゃない」とプリプリ怒る彼女が、跳ねるようにリビングへ飛び込んだ。

「シュウちゃん！ お兄ちゃんが帰って来たよーっ！」

「シュウちゃん？」 誰だそれ——」

妹に続き廊下を曲がった、その先で。

一護は硬化した。

「ね、びつくりした？」

「懐かしいよね！」

「隣じいちゃんの法事以来！」

意味不明な事を言う遊子の声が遠く聞こえる。

それもそのはず。一護の意識の全ては、目の前の光景に吸い込まれているのだから。

——そこに居たのは、リビングのソファアに腰掛ける一人の男。

じつとりと濡れたような深い黒髪。

長袖のYシャツにサスペンダーで留めた黒いスーツズボン。

背もたれから優に聳える座高。

そして…

「——久しぶりだね、一護」

底無しの闇より暗い黒の瞳でこちらを見つめる細身の男――
月島秀九郎が、一護の実家で悠然と寛いでいた。

全部…月島さんが居たからじゃないか…！

…なんだ、これ。

「夕方に来てくれてね！ 久しぶりに一緒にお夕飯食べたんだー！」
「連絡もなしに来るんだもんなー。シユウちゃんそういうトコ相変わらずだよな」

…なんだ、この光景は。

「ご免、迷惑だったかな」

「そ、そんなことねーけど…」

…なんだ、その顔は。なんで夏梨がそんな照れて、満更じやなさそうな顔をしている。

得体の知れない男に妹達の心が奪われた。その憤怒が呆ける頭を叩き起こし、黒崎一護は眼前の不審者へ掴み掛かる。

「…てめえはあの時の…！ ここでは何してんだ!!」

脳裏に浮かぶのは数日前。友人の啓吾達が襲われた工事現場に居た黒髪の青年。銀城に訊いた奴の名は——月島秀九郎。つきしましゅうくわう

最も大事な家族の居場所が、敵の土足に踏み入られたのだ。

…だがそんな一護の暴行は、他ならない彼自身の家族の非難の的となる。

「な、何してんのお兄ちゃん！ シュウちゃん急に来た事に怒ってるの!？」

「どうしたんだよ一兄！ シュウちゃん苦しそうだろ！」

両腕に縋りつき止めようとしてくる遊子と夏梨。二人の必死さに一護は堪らず敵の襟から手を放す。

「——こんばんはー！ 秀さん来たよー！」

その時、突如玄関のチャイムが鳴り響いた。何が起きているのかわからないまま、状況は更なる混沌へ。

「あれ、なんだ一護もいるじゃん」

「ほんとだ。てつきり秀さんと妹ちゃんたちだけかと思ってアイス買っただけよ」

「こら一護！ あんた最近夜遊びしてるらしいじゃない！」

咄嗟に振り向いた一護は、そこに揃った三人の男女に驚く。

「全く、家族の事もちったあ考えなよ！ 遊子ちゃん夏梨ちゃんに寂しい思いさせちゃダメでしょ！」

「あ、大丈夫です。寂しくないです」

「カリンちゃんひどーい」

「秀さんこんばんは〜」

浅野啓吾、小島水色、そして有沢竜貴。昔から付き合いのある学校の友人達が、口々に“会いに来た”と言う。

目の前にいる異物に。まるで当然の事のように。

「なん…だよ、これ…」

奴を受け入れ親しむ一同に一護は唾然とする。その耳が、敵の穏やかな声を拾った。

「——僕が呼んだんだよ、一護」

ゆっくり向けた視線の先には、携帯を握る月島の姿。「久しぶりにみんなに会いたくてね」などと、意味の分からない事を言いながら。

「そう怖い顔するなよ。夜中にみんなを呼び出したのは悪かったけど、明日は日曜だしいいだろ？」

「……」

「ああ、そうだ」

——チャドと

織姫も呼ぼうか

その言葉が最後の引き金となった。

携帯越しに大切な仲間と、護ると誓った織姫と親し気に話す悪魔へ、気付けば一護は拳を振るっていた。

殴り飛ばした月島がリビングを転がり、ガシャン！と窓ガラスに激突する。

「なっ！ お兄ちゃん!？」

「…言えよ、月島。みんなに何しやがった…!」

上がる悲鳴、色めき立つ家族友人に囲まれながらも、一護は気丈に敵へ凄む。

「何やってんだよ、一護!」

だが周囲の反発は彼の予想を超えていた。信じられないものを見る目で幼馴染の竜貴が食い掛る。

「何にイラついてんのか知らないけどさ！ 久しぶりに会った親戚に何だよその態度は！ 謝れよバカ!」

「ち、違う…! たつき…!」

「何が違うんだよ！ あんたこんな事するために昔あたしと一緒に空手習ってたのかよ!？」 月島さんに謝れよ!」

少女の剣幕にたじろぐ一護は、思わず救いを求めるように瞳を彷徨わせる。

そして青年は、気付いた。

「一護」

「一兄」

「お兄ちゃん」

「一護」

集まる視線。見開かれた冷やかな目。困惑、不信、嫌悪の色。
「どうしたの」

それらを宿した友人が…

「本当に」

幼馴染が…

「おかしいぞ」

家族が…

「お前」

一斉に…

『一護』

皆を護ろうと立ち上がった青年を、彼等の懐から排除しようとしていた。

駆ける。寝静まった空座町の住宅街を、我武者羅に。

…何が起きてんだ。これが月島の実力なのか。

吐き気を辛うじて堪え、家から逃げ出した一護は必死に考える。

脳裏に浮かぶのはかつて死闘を繰り広げた最強の敵、藍染惣右介”（あいぜんそうすけ）。しかし実際に一護が奴の【鏡花水月】、五感を意のままに操る斬魄刀の力を受けた事はない。護廷十三隊や仮面（ヴァエイザード）の軍勢を蹴散らしたのも、青年の【無月】すら跳ね退けたのも、あの魔王の桁外れな霊圧と再生力、そして限界まで磨かれた斬拳走鬼だった。

だが、月島（あいつ）は一体何なんだ。家で見た妹達の反応から敵の能力を想像し青褪める一護。

——月島さんが迎えに

来てくれたぞ、一護！

「う…ッ」

仲間に家族、多少なりとも事情を知る竜貴達だけでなく、バイト先の店長まで毒牙にかける周到、悪辣さ。途中で匿（かく）つて貰（もら）った育美（いくみ）さんの笑顔を思い出し、胃酸が一護の喉を焼く。

…全部俺のせいだ。胸を抉るのは、皆を巻き込んでしまった深い後悔と自己嫌悪。

俺が人間と死神のハーフだから。

元死神代行だから。

フルブリック 完現術の才能を持っていたから。

今まで何もせず、全部終わったんだと、呑気に無力であり続けたから…

「一護!!」

不意に名を呼ばれ、咄嗟に代行証を握り警戒する。

「銀城!?!」

「チツ、そつちもやられたか…!」

そこにはこちらへ駆け寄る恩人の姿。息を荒らげる銀城空吾が互いの無事を喜ぶ間も惜しみ、更なる深刻な状況を伝えてきた。

「おかしいと思ってた…! 月島と戦う事なんてとうの昔に覚悟したはずだつてのに、今更怖気づくなんてあいつ等らしくねえつてよ…ツ」

「…まさか…」

彼の言葉に一護はハツと気付く。修行後、雪緒の完現術内フルブリングから現世へ戻った時、妙に余所余所しかったXCUTIONの面々。

そう。この現状で考えうる彼等四人の最悪は、あの時から既に――

「リルカも…沓澤も…雪緒も…ジャッキーも…!」

全員…月島にやられてた!!」

「――くそつ…てめえのせいだぞ銀城!! てめえが俺を巻き込んだからこんな事に…!」

板打ちの窓が物々しい無人の廃ビル。案内された秘密の隠れ家に駆け込んだ一護は、やり場のない怒りを近くの関係者へぶちまけていた。

だが一瞬の硬直の後。銀城が述べたのは、痛ましげな肯定の言葉。「…ああ、そうだ。…すまん」

その沈鬱な謝罪を受け、自身の理不尽に気付いた一護はこみ上げる憤りを辛うじて嚙下する。

「ツ畜生、わかってんだよ！ お前らのせいじゃねえ……俺が……」
「……誰のせいでも無えよ。自分の事も責めんじゃねえぞ、一護」

優しい思いやりに満ちた言葉が胸に染みる。傷を癒すようにも、未熟な自分を突き付けるようにも。

仲間をやられたのは互いに同じ。それでも己を律し側に寄り添ってくれる銀城の存在は、今や一護が頼れる唯一の支えだった。

「へこたれてても何も始まらねえ。月島の能力の正体と対策だ」
「あいつの……」

働かない頭を回す二人。自宅で見た惨事から恐らくは記憶を混乱させる能力だと予想がつくが、月島と長い付き合いがあった元仲間の銀城は、より深刻で恐ろしい推理を立てていた。

人の人生を一つの”本”に見立て、そのページの間に月島秀九郎という存在を挟み込む。さながら一枚の”葉”のように。

それは催眠や精神支配、記憶の操作などといった刹那的な作用などではなく——因果律そのものを操る神の力。

「過去の操作」……だと……」

「ふざけた仮説だ。だが月島にやられたあいつらの反応は洗脳だの記憶の混乱だのそんなレベルの話じゃなかった。それが本当に起きた過去の出来事なんだと、あいつ等の中ではそうなってたんだ……」

あり得ない、そんなバカな事があって堪るか。一護は体中の血が抜けたように放心する。

過去の因果を変えられた。それはつまり、「月島という大切な人」の存在が紛れ込んだせいで、みんなが今まで送って来た人生そのものが大きく変わってしまったという事。

「……なんだよ……それ……」

中学時代より続く仲の啓吾達。何かと面倒を見てくれるバイト先の店長。ガキの頃からの付き合いの竜貴。生まれた時から共にいる遊子に夏梨。幾度も死線を潜り抜けた仲間達。彼等と共に過ごした

日々が頭を過る。

その全てが、悪意に満ちた敵の手により穢されたというのか。

黒崎一護との絆を、食い散らかして。

「…それは…」

ぐつぐつと、初めて浮かぶ感情が一護の心を染め上げる。

「それは――」

月島を殺せば元に戻るのか？」

自分でも驚くほど低い声だった。どす黒いナニカを孕んだその間に、瞠目する銀城が答えを絞り出す。

「…正直、その確証は無え」

「な…」

「一度過去を変えられた奴が月島の死後どうなるかなんてわからねえ。最悪何も変わらず、あいつを殺した俺達はただの狂った殺人鬼で終わっちゃう」

人を殺す。それは人間である一護や銀城にとって、犯してはならない禁忌。人の法の及ばぬ死神や虚ら魂魄ホロウを斬るのとは事情が異なる。

更に、それほどの苦渋を味わっても、皆が月島の影響下から解放されるとは限らないのだ。

「…だがな一護。今のあいつ等は月島との偽の絆に捕らわれてる。それは俺達が足踏みしてたら絶対に変わらねえんだ」

「！」

「月島との繋がりを断つ事があいつ等の唯一の救いだってんなら…俺達は月島を殺すしか無え…！」

息を呑む一護へ銀城が問い返す。冷静になれと、引き返すなら今だと、逃げ道を作るように。

「やれるか？」

「…ッ」

「能力が解ける確証が無くとも、解けずに周りに恨まれようと、お前は本気で月島を…人を、殺せるか？」

差し出されたのは世にも恐ろしい二択。

淡い希望のために全てを捨てる。たとえ皆が元に戻っても、身内から人殺しが出た家族や仲間は人生がめちゃくちゃになるだろう。元に戻らなかつた場合は目も当てられない。

あいつ等を悲しませない一番の道はなんだ？ みんなが変えられた過去を真実だと信じているのなら、それに従うべきではないのか？ 狂った周りの中で俺だけが正常ならば、それは自分一人が狂っているのと同じではないか？ そう一護は自問する。

…だが憎悪に染まる彼の頭に、その制止の呼びかけは届かない。ふざけるな。このバカげた状況を終わらせる希望があるならそれを目指せばいい。その代償があの外道の不幸なら、一体何を躊躇う事がある。

囁く悪魔に頷いて、一護は銀城の問いに答えを返そうと口を開き：

「——物騒な相談してるわね」

ドール・ハウス

「なっ!?!」

突然聞こえた声に飛び退いた二人は、されど迫るソレから逃げる前に捕らわれる。

「…忘れたの、銀城？ 緊急時の位置特定にあたし達全員に付けてる雪緒の発信機」

「ッ、くそっ…」

「悪いけど一緒に来てもらおうわ。月島の所にね」
それは一瞬に決した。

状況を理解した時。一護と銀城は既に、廃ビルの階段から現れたマゼンタ髪の少女——毒ヶ峰^{どくがみね}リルカが抱く二つのぬいぐるみの中に吸い込まれていた。

「……着いたわ。ここよ」

鳴木市の端に佇む古い洋館。リルカに連行された敵の拠点で、一護と銀城は仇の男——月島秀九郎と再会した。

「お帰り、リルカ。二人をぬいぐるみから出してあげて」

「…わかった」

渋々かけられた少女のくしやみで解放される一護達。今にも突撃して来そうな彼を眺めながら、月島が二人を屋敷へ誘うように踵を返す。

「中へどうぞ。僕は君達と話がしたいだけなんだ」

「……俺が先に行く。一護、お前は落ち着いてから来い」

銀城の頼もしい背中と気遣いに庇われ、何とか理性を取り戻す一護。

「——ご免なさい」

そこへふと、隣のリルカがぽつりと呟いた。場に彼女と二人きりになった僅かな時の事だった。

「何…?」

「…別に。言えるの今しかないから…あんたの迎え、雪緒に代わって貰ったの」

月島の影響下にある筈のこいつが一体何を謝罪するというのか。だが訝しむ一護を放置し、彼女は勝手に洋館の中へと消えていく。

閉じられた扉が、まるで”来るな”と拒絶するかの如く聳え立つ。

そんな錯覚を振り払って屋内へ突入した一護は、そこで忠告通りの……悪夢を見た。

「——おかえりー!!」

鳴り響くクラッカーに面食らう青年。何事かと見渡した広い玄関ホールにいたのは、満面の笑みを浮かべる家族と友人達だった。

「よかったね、お兄ちゃん。シユウちゃん全然怒ってないって!」

「そうだぞ、一護! 秀さんが優しくてよかったな!」

「全く、突然殴るなんて……あたしだったら仕返しに金的一発お見舞いしてやったわよ!」

「ひでーな有沢! ……まあ一護、そういう事だからよ!」

——ちやんと今の内に

月島さんに謝つとけよ?

ゾツ…と背筋が冷える。視界が、聴覚が、蜃気楼や低気圧に吞まれたように遠のいていく。

「そうだ、それはちやんと謝つといた方がいいな」

「謝つときな、一護」

「一護」

「一護」

「謝りなよ」

「謝れ」

「謝れ」

「謝れ」

「謝れ」

皆が、大切なみんなが、口を揃えて、いつもの無邪気な声色でそう要求する。一人残らず、一護の非を責めながら。

「…大丈夫だ、一護。こいつ等はちやんとお前との絆も持っている。敵にはならねえ。落ち着け…」

体が震える。腹が煮える。銀城の諭す声も聞こえない。

おぞましくて。気持ち悪くて。見てられなくて。気付けば一護は逃げるように屋敷の階段を駆け上がった。

「ッ、一護！…くそっ！」

止めようとする銀城を振り払い、青年は走る。

…ここじゃみんなを巻き込むから戦えない。恐怖と憎悪が混濁した彼の脳は、ただ月島と戦える場所のみを求め二階を目指す。

しかしその先に突き当たった広間で、一護は”敵”と遭遇した。

「——ようこそ、一護サン」

待ち構えていたのは眼帯の紳士、異人の女、コートの子供、そして学ランの少年。見知らぬ最後の一人を除き、皆完現術修行の世話になったXCUTIONの仲間達だった。

そして。

「…わざわざ袋叩きにされに来るなんて、案外協力的なのかな？」

「!!」

飛び込んだ広間の退路には、因縁の月島秀九郎。曲者揃いの霊能力者に取り囲まれ、万事休す。

だがその時。廊下から凄まじい破碎音が轟いた。

煙の中から巨大な大剣が現れる。

「階段は落とした。登って来れるのはリルカくらいだろう」

「銀城…！」

そうだ。まだ仲間が、この男が隣にいるんだ。

「これで遠慮は要らねえ…」

——全力で戦うぞ、一護!!

最後の味方、銀城空吾から勇気を貰い、青年は一気に奮い立った。

「なっ…しまっ」

呼びかけた代行証から闇色の霊圧が立ち上る。

虚^{ホロウ}の白髓が鏝められた死覇装。右腕には巻き付く光の鎖と一振り
の刀。

そして胸の中には、『叩きのめしちゃって!』と怒り狂う相棒の仮面
少女の声。

完成した完現術^{フルブリンゲ}を纏った黒崎一護が、激情の限りで仇敵へ斬りか
かった。

「月島アツ!!」

「ぐっ……!」

一閃。狙い澄ました斬撃は容易く相手の左腕を斬り落とす。

「…それが君の完現術か…! まさかここまで完成させていたとは…
流石は”奴”のお気に入りに入って所かな…ツ」

変化させた葉の刀を握り、己の油断を認める月島秀九郎。だが痛み
に耐えながらもその目は淀んだ漆黒のまま。

「せいぜい今の内に余裕ぶってる。俺はてめえを殺しに来たんだ」

「へえ、勇者の君が人殺しかい? …それは色々と拙そうだね」

「調子ぶっこいてんじゃねえぞ!!」

気に食わない。剣を打ち付け合う度、膨れ上がった青年の憎しみに
戸惑いが混じる。

…なんだ、こいつの剣。

平静の仮面の奥に垣間見える、憔悴の片鱗。目の前の一護ではな
い、見えない何かと戦っているかのような散漫とした意識。それは市
丸ギンとも銀城とも異なる、不気味な虚無感を宿す剣だった。

だがその違和感の正体に近づく前に、彼の思考を吹き飛ばす衝撃が
窓から現れた。

「なっ…!?!」

横から凄まじい霊圧の拳撃が一護を襲う。咄嗟に刀の腹で受け止
め、目にした襲撃者の顔に、青年は血が滲むほど唇を噛み締めた。

「……………くそっ……」

ガラスを突き破り現れた、一組の男女。月島と携帯で話している声
を聴かされても、心の何処かであいつ等だけは大丈夫だと信じてい
た、大切な戦友。

「やっぱり……お前らも同じなのかよ！
チャド！ 井上！」

叫ぶ一護の正面で。

色黒の巨漢と茶髪の少女——茶渡泰虎さびやすとらと井上織姫いのうえおりひめが、悲しそうな面持ちでこちらを見つめていた。

†††

…一体何があつたんだ、一護。

茶渡泰虎は困惑していた。

事の始まりは数十分前。日課の虚退治を終えて帰宅する途中、連絡を受けた彼はその内容に啞然とした。

——一護が銀城と組んで

月島さんを襲っている

一体どういう事だ。仲間の月島さんを一護が攻撃する理由などあるはずがない。二度三度と確認して聞き違いではないとわかった後も、茶渡の頭は混乱に支配されていた。

だが途中で合流した井上と共に訪れた月島邸で、二人は見てしま
う。

「や、止める……なんでお前らがそいつを助けるんだよ…ッ」

激しい戦闘跡。XCUTIONの奴等と乱戦を繰り広げる銀城。
そして斬り落とされた月島さんの腕。

あの一護が、仲間を護るために力を手にした一護が。月島秀九郎大切な仲間を

本気で殺そうとしていたのだ。

「…なんで…だと？ それは本気で言っているのか、一護…？」

「黒崎君…なんであたし達仲間を…」

顔面蒼白で喚く相棒へ向け、茶渡は井上と共に問い質す。一護の目当ては月島だけ。だからこそ援軍の二人は余計にわからなかった。

月島秀九郎は茶渡の、井上の恩人であり、憧れの人物だ。そしてそれは共に戦った一護も同じ。そのはずだった。

「おかしいよ黒崎君、どうしちゃったの…？」

「くつ、井上…」

「今まであたし達、お兄——月島さんにずっと助けてもらって来た事、忘れちゃったの…？」

仲間の言葉を聞いても一護の表情は苦痛のまま変わらない。何らかの洗脳を受けているなら”あるいは”と、茶渡は一つ一つ、一緒に潜り抜けてきた戦場の記憶を言葉で紡いでいく。

「…少しでいい。思い出せないか、一護？ 京楽さんに斬られそうになつていた俺を月島さんが助けに来てくれた事を。お前はあの時に”ありがとう”と、俺のために月島さんに礼を言ってくれた」

「…違う…チャド…！」

「な、ならあたしの…ウエコムンド虚圏での時は…？ 黒崎君がウルキオラに殺されそうになつた時に月島さんが助けに来てくれたの…思い出せない…？」

「違う…違うんだ井上…！ 全部そいつに…月島に仕組まれた事なんだ!!」

慟哭する一護。明らかに錯乱している彼の目を覚まさせようと、茶渡は強い思いを込めて、その事実を口にした。

「…違うぞ一護。月島さんは何も仕組んでなどいない」

「チャ…ド…」

「一護、思い出してくれ…！ 朽木を助けられたのも、井上を奪還できたのも…全部…」

——全部…月島さんが

居たからじゃないか…！

絶句。

それが彼の表情を表す最適な単語だった。まるであり得ない話を聞いたかのように目を見開き、顎を垂らし、氷のように固まる一護。

「理解、できているかい？ 一護」

だがおかしくなった仲間を取り押さえようと月島が動いた瞬間、一護が硬直を解いて彼へ飛び掛かった。茶渡はその狂気に染まった瞳に気圧されながらも、拳で相棒の暴拳を必死に止める。

「や、止めるろ！ チャー——」

「どうしてだ、一護…ッ！」

茶渡は声を張り上げる。心が軋んで堪らない。

自分は、一護の背中を護るために強くなったのだ。断じて今のよう
に、一護を殴るために強くなったんじゃない。なのに一護は月島さん
を攻撃し続け、正気に戻る気配をみせない。

「茶渡君！ あたしがやる！」

「ム…！」

覚悟を決めたか、井上が大技の準備に入る。拘束なら彼女が適任
だ。

「…もしもの時に貰ったものだけど…お願いっ！」

だが懐から取り出したのは「盾舜六花」のヘアピンではなかった。
見た事のない黒い匪状のソレを掲げた彼女が、一言の呪文を唱える。

「…起動」

「なっ!？」

直後。紫がかった漆黒の霊圧の”帯”が匪から吹き出し一直線に
一護へ殺到した。

驚く周囲の目の前で、狂気の青年が即座に地面に縫い付けられる。
続いて僅かな抵抗の後、一護の完現術フルブリンゲが解かれ…

——ジャラリと転がった彼の異能の鎖が集まり、一人の少女の姿を
象った。

「その人は…！」

茶渡は息を呑む。

あれは数日前。代行証を投げ捨てる一護の元へと自分を導き、完現術の化身の如き存在として代行証の中から現れた謎の人物。その彼女が、苦しそうに主の隣で蹲っていた。

そんな光景に驚愕したのは茶渡だけではなかった。謎の拘束道具を使った井上自身も、捕らわれた一護も、目を瞠りながら固まっている。

そして…

「——ッ」

男の、悲鳴のような吐息が茶渡の鼓膜を震わせた。思わず振り向いた一同は、そこで愕然と、まるでこの世の終わりのような顔で戦慄している彼を見る。

穏やかな微笑が常であるはずの、祖父と自分の恩人——月島秀九郎その人を。

「なぜ…何故その女が…」

——雛森桃がお前の完現術になってるんだ…

!!?

全部…真相さんが居たからじゃないか…！

あらゆる霊なるものを司る死神達の楽園、ソウルソサエティ尸魂界。

厳かな白木漆喰が輝く護廷隊の本部・一番隊隊舎に集った、各隊の隊長十三名。新緑萌ゆるこの日、せいでいてい瀨霊廷は創世以来となる大転換点を迎えていた。

——黒崎一護に

死神の力を取り戻させよ

驚き、感嘆の声が隊首会室に満ちる。

人間と魂魄のあるべき関係を厳守する魂魄法。それに背く歴史的決断が下るきつかけとなったのは、中央に跪く松葉色の甚平羽織を着た元十二番隊隊長、うらはらきすけ浦原喜助だ。

藍染惣右介の封印に大きく貢献した黒崎一護。

”霊界の英雄”と称された彼は壮絶な戦いの代償に霊力を失い、今なお無力に苦しんでいる。そんな恩人の心情を知り、総隊長やまもとげんりゆうさいしげくに山本元柳斎重國は長い葛藤の末、浦原に協力すると決断した。英雄の復活のため皆が一丸となり、多くが胸を撫で下ろす。だが。

「——お待ちを」

そう前置いて語られた浦原の話には、続きがあった。

今の現世で起きている複数の陰謀。あの初代死神代行・ぎんじよつこうじ銀城空吾が率いる完現術師の秘密結社。彼らが企む尸魂界への復讐。それに巻

き込まれた黒崎一護。

そして何よりも警戒すべきは、完現術師の陰で蠢くもう一つの存在。これまで沈黙を続けてきた謎多き勢力。

——” 虚霊坤”

” 十刃”らしき破面が動いているか……”

「全く、余計な事を……！ 黒崎一護に銀城空吾……ただでさえ対処せねばならん事が多いこの時に……！」

「零番隊は一体何をしている？ 交流があるなら奴等の情報を我々と共有するのが道理だろう……！」

浦原の報告を聞き口々に苛立ちの声上がる。

先の戦で藍染が率いた破面軍の残党にして、” 人格を持つ崩玉”

が支配する、通称「叫谷勢力」。霊王宮との協定締結を許すという外交的失敗で和議を余儀なくされた護廷隊因縁の元敵対組織が、遂にその鎌首を擡げたというのだ。

「彼奴らの目的は何じゃ？」

「状況的に完現術の各種調査かと。あれは先天性に因る能力ですが、崩玉との親和性も高いのです」

「なるほど、崩玉の強化か……」

総隊長の固い声は、それを許す意思がない事の表れ。調べでは既に井上織姫が叫谷勢力に囲われたと判明しており、連中の完現術への高い関心は明らかだった。

「にしても藍染の残党ねえ……」

ふと、八番隊隊長の京楽春水が同僚の一人へ流し目を送る。釣られるように集まった大勢の視線に、標的の死神が面倒くさそうに頭を振った。

「……動きなし。いつも通りカワイイ顔して鬼教官やつとるで——ウチの桃は」

そう明かす剽軽な彼は、五番隊隊長・平子真子。彼が副官として側に置き監視している例の女死神は、この二年における護廷十三隊の大

きな懸念対象であった。

雛森桃。
ひなもりもも

かつて藍染に騙され尸魂界を裏切る事を強いられた彼女は、禁忌の人体実験の影響でおぞましい”崩玉の怪物”へとなり果てた。

だが一度消滅したその崩玉は、雛森時代に率いた破面軍アランカルと共に復活。ロスヴァアリエス【虚霊坤】なる特殊な異界にて強大な新勢力を築き上げた。

怪物の誕生後に「抜け殻」と捨てられ、最後まで利用され続けた雛森桃。哀れな元同胞を護廷十三隊は迎え入れたが、彼女の背後には例の不穏勢力の魔の手が垣間見え、未だその忠誠のありかを疑う者は——特に貴族社会では——多かった。

「藍染の暗躍を見抜いた平子が『動きなし』と言うんだ。これであいつの身の潔白は証明されたな」

「五十年も裏を臭わせなかった女がそう容易く尻尾を見せる筈がないだろう？ 全く、あくびが出る程呑気な奴等だヨ」

「彼女の【魄内鬼道法】も多大な成果を上げています。少なくとも護廷への貢献を疑問視する者はいないでしょう」

「フン、結局雛森を調べても虚霊坤ロスヴァアリエスの正体には近付けなんだか……」
疑念、落胆、そして安堵。貴重な情報源が期待なしに終わった結果

は、同時に仲間を疑わざるを得ない日々の鬱憤を晴らす光でもあった。

「…山本総隊長」

「申せ、浦原喜助」

そんな楽観的な多数派の隊長達を無言で観察していた天才が、慎重案を提示した。

論点は黒崎一護の霊力復活計画の障害となる、銀城空吾率いるフルブリンガー完現術師組織の排除。すなわち護廷十三隊の現世派遣だ。

「ご存知”叫谷勢力”は藍染の負の遺産。そして黒崎一護は藍染の虚研究の強い影響下にありました」

「続けよ」

「はい。それを引き継いでいる彼女達が介入の素振りを見せた以上、

我々も迂闊に動けません。事態が大きく動くまで情報収集に徹するが吉かと」

頭を下げる浦原喜助。それを見つめ、山本重国は逡巡する。

黒崎一護を惑わす者達を撃滅し、取り逃がした初代死神代行を処分し、そして：当代死神代行に三界秩序への協力意思の有無を確認する。全てを達成するには六名以上の隊長格の派遣が必要と想定された。

しかし、そこに破面軍アランカルの介入があるとなると話は変わる。単体で戦局を一変させる強大な十刃エスパーダとの戦闘を警戒すれば派遣軍の肥大化は必須。現世への影響や護廷の戦力上それは悪手だ。

かくしてしばしの熟考の末、巖の老将は決断する――

(…近い。かなり激しい戦いだ)

現世は鳴木市。

仲間の危機に空座町総合病院から抜け出した滅却師クインシーの青年・石田雨竜は、ぶつかる霊圧の余波を頼りに戦場へ急行していた。

だが途中、彼の感知能力が理解し難い状況を伝えてきた。

(…何故黒崎が茶渡君達と戦ってるんだ…?)

考えられるのは洗脳や支配系らんそうてんがいの能力。雨竜自身は試した事など無いが、彼の種族も乱装天傀らんそうてんがいの霊糸術を使えば他者の体を動かす事ができる。

青年は警戒を強め、霊子の動きに注意しつつ、戦いの渦中の古びた洋館へ飛び込んだ。

「なっ…」

そこで見た阿鼻叫喚に雨竜は顔を歪めた。

”月島”なる敵を身内のように受け入れ、奴と戦う黒崎を責める彼の家族友人。あれほど仲の良かった皆が黒崎を悪者扱いし、あげくに喧嘩や絶交も辞さないとは憤慨している。

想像を遥かに超える強力な記憶操作の影響が、場に居る全ての人間を塗りつくしていた。

「覚えたぞ、”月島”…ッ！」

こんな彼女達の姿を黒崎は見せられたのか。そして同じように狂った茶渡君や井上さんと二階で戦わされているのか。

彼の胸の内を想像し、義憤に駆られた雨竜は踵を返す。

だが黒崎の援護に向かおうとする彼を止める者がいた。

「待ってよ！ あんたもあのバカ兄みたいにシュウちゃんを傷付けるつもりなの…!?!」

「夏梨ちゃん…!」

先月「一兄いちにいの代わりに皆を護る」と夜中に虚と戦っていた、兄想いの末妹。その大切な想いも、今やごっそりと消え去って…否、奪うばわれていた。間違う事無き敵の悪意によって。

雨竜はしがみ付く彼女の洗脳を解こうと試みる。

「…落ち着いて思い出すんだ。いつも君達家族を護ろうと頑張ってた男は、黒崎と月島のどっちだい？ 誰よりも強い動機を持つのは誰か、君ならわかるだろう？」

「そんなのシュウちゃんしかいないだろ！ 親戚で…母さんが目の前で死んだのに何もできなかつたって悔やんで…強くなるって遠くに引越しちゃって…最近やっと戻って来たんだ！」

思わず息を呑む。

黒崎家の不幸な過去。敵の洗脳の手は雨竜すら知らない細部にまで届いていた。

…だがその話には微かな矛盾がある。

「待ちなさい。君のお母さんが亡くなられたのは八年前。その時に月島が遠くに引越したのなら、奴はどこでここに居るみんなと…浅野君達と出会ったんだ？」

「ッ、さつきから何なんだよあんた！ そんなの——あれ…？」
呆けたように少女が辺りを見渡す。

自分と同じように月島の身を案じている兄の同級生達。幼馴染の有沢はともかく中学時代からの付き合いである浅野や小島まで月島と接点があるのは——物理的に不可能ではないが——些か不自然だ。

完璧な洗脳に生まれた小さな揺らぎを見つけ、逸る雨竜は言葉の濁流で一気に彼女の頭を飽和させる。

「夏梨ちゃん。君は力を失った”誰か”に代わって虚退治ホロツをしていると、その”誰か”が無力に落ち込んでるんじゃないかって僕に相談してくれたね」

「う、うん…でも…」

「思い出して。力を失って今まで辛気臭そうに落ち込んでたその馬鹿は”誰”だい？ 月島とは最近再会したんだろう？ なら奴はその短期間のどこで君達に自身の力を見せて、それを失ったと明かしたんだ？」

雨竜を掴む少女の手から力が抜ける。自由になった青年は、俯きブツブツ呟く彼女を落ち着かせようと一言言い残し、今度こそ戦場へと向かった。

「黒崎を信じてやってほしい。あいつは馬鹿で生意気だけど…」

——家族を護る為に戦う

立派なお兄さんだよ

夏梨を振り切り洋館の裏庭へ出た雨竜は、走りながら屋上への突入作戦を練っていく。

慎重に、慎重に。だが彼の理性はそう自らに言い聞かせなければならぬほど、怒りでグツグツと煮え滾っていた。

…許せない。

黒崎の親しい人達に起きた異変。そのあまりに悪辣で外道じみた敵対手段は、先日受けた襲撃の報復意思すら飲み込み、雨竜の心を一つの感情で埋め尽くす。

「——銀城!!」

その時、突如上空から黒崎の悲鳴が聞こえた。雨竜は飛廉脚ひれんきゃくで建物の外壁を上り、密かに様子を窺う。

そこで起きていたのは、酷い混乱だった。

「くそっ! 銀城から離れろ月島ア!! ——大丈夫か銀城!? 返事しろ!!」

「銀城! 斬ってやったんだからさつきと元に戻れ! これ以上そいつに関わったら君が破滅してしまう!!」

「…破滅? 月島さん、一体なにを…」

倒れ伏す一人の男。拘束を解き彼へ駆け寄る黒崎。地面で苦しむ白い死覇装の仮面女性。そしてその女性から後退り、喚き散らす長身の青年。

困惑し佇む茶渡と井上を含め、誰もが冷静さを失いそれぞれの思惑や感情が錯綜していた。

「——うるせえな」

そんな中、黒崎に介抱されていた男が立ち上がる。

「簡単に敵に背中を晒すなって言っただろ…黒崎」

「銀城!」

無事を主張する彼と、その姿に安堵する黒崎。

二人は油断なく振り返り、長身の青年——恐らく彼が”月島”——と対峙する。

…だがその光景を見た雨竜は、驚愕した。一瞬の事、されど忘れもしない先日の襲撃事件。相對する敵味方の陣営に、そこに居てはなら

ない人物がいた。

「何してるんだ銀城！ もう茶番は十分だろ！ 計画は失敗だ！」

「！」

「くそっ…やっぱりやらなきゃよかったんだ！ 手を出しちゃ——
黒崎一護に関わったら

ダメだったんだ！」

長身の青年の狂乱に、男と黒崎が戸惑いを見せる。

「なんだあいつ、さつきからおかしいぞ？ それに”雛森桃”って…」

「…無視しろ。俺に能力が効かなくて動揺してる今がチャンスだ。行けるか、黒崎？」

「いや…悪い、井上に俺の完現術フルブリングを引き剥がされた。あの人の拘束を解くの手伝ってくれ」

「？がされたのか？ …わかった、任せろ」

手を取り合う二人。その様子を覗き見る雨竜は、混乱する頭を必死に回転させて状況を整理する。

長身の青年。革ジャンの男。階下で見た黒崎の家族友人達の異変。フルブリング完現術。地面に縫い付けられている仮面の女性。

点と点を繋ぎ、屋上の黒崎らの発言を振り返り…：脳裏に浮かび上がったのは、最悪の展開。

そして、仮面の女性に近づく革ジャン男の表情を見た瞬間。クインシー滅却師の青年は迷わなかった。

「——そこまでだ」

バツと周囲の注意が集まる。雨竜は霊子兵装の神ハイリッヒ・ブファイル 聖 矢をつがえ、直中へ舞い降りた。

「その完現術フルブリングとやらを解け、黒崎。僕は味方だ」

「石田…！」

緊張の糸が張り詰める。これまでの苦い経験で仲間を信じられなくなっているのか、警戒心を隠しもせずに身構える黒崎。

「…ああ、そうだな。思い出したぜ、お前も月島に斬られてたつてな…！」

「下の様子を見た。事情はわかってる。いいから言う通りにしろ」
「…誰が…！」

「疑心暗鬼になってる場合じゃない。今すぐその仮面の人を君の魄内に戻すんだ」

「……ッ」

何度呼びかけても、思考が硬直した黒崎は聞く耳を持たない。察しが悪い彼に苛立ちが膨れ上がる。

「黒崎、言う事を聞け…！」

「石田…！」

「黒崎…！」

そして焦燥が限界を迎えた雨竜は、遂に目の前の真実を彼へ突き付けた。

「解らないのか!! 僕を斬ったのは月島そっちじゃない！」

!!!
——お前が「銀城」と呼んでる奴だ

(…違う。だってシユウちゃんは…)

屋上で親しんだ二人の気配が衝突している。その戦いに背を向けて、黒崎夏梨は震える足を引き摺り洋館の外へ出た。

おかしい。シユウちゃんが戦ってるのに、自分は何を呑気に彷徨っているのだろう。夏梨は鈍い思考を働かせる。

——君は一体”誰”の為に

虚と戦っていたんだい？

兄の友人が口にした問いが頭から離れない。その答えを思い浮かべる度に、脳裏の奥で何かが罅割れていく。

そんなの、シユウちゃんがあたし達を護る為に力を失って、あたしはそんな彼の代わりに戦おうと…

(…あれ、でもだったら何でシユウちゃんは一兄と戦って…あれ?)
次々と浮かぶ疑問、ある筈のない矛盾。あの時必死に何かを訴えようとしていた兄の顔が、行動が、走馬灯のように過る。

吐き気が酷い。頭が痛い。恐怖に体が凍えて堪らない。

違う。

ちがう。

ちがう。

アタしハ、シユウちゃんガ…

必死の抵抗も虚しく。何もかもがぐちゃぐちゃになり、一つまた一つと五感が途切れていく。

…だが全てが闇に飲み込まれる、その寸前。

崩れゆく自我の破片で、黒崎夏梨は微かな声を耳にした。

鈴が転がるような優しい声で呟かれた、たったの一言——

あなたの可能性を
あたしに見せて？

少女は最後に目にした光の奥で。
そんな声を、聞いた気がした。

——最初から、
お前の敵だ

頭を殴るような言葉だった。

だが放心する体に反し、一護の胸の内にあつたのは衝撃ではなく、得心。

自分たちの力を、完現術フルブリンクを捨て去るといふ組織の動機。一護が勧誘を受けた直後急かすかのように都合よく仲間が襲われた事。過剰なまでに尸魂界ソウルソサエティや浦原さんを貶す台詞。修行時に銀城との手合わせで感じた違和感。

これまでの出来事の徹頭徹尾が、一護を騙し、この場で裏切るために仕組まれたものだったのだ。

…そして青年がその理由を問うより早く、彼の聡い仲間が怒声を上げた。

「何してる黒崎!! さっさと彼女の実体化を解け!!」

声の主は、月島に斬られ倒れている石田雨竜いしだりゅう。

だが彼の指示の意味に一護が遅れて気付いた時…

「もう遅えよ」

「!？」

脳裏に短い悲鳴が響き、苦痛の感情が胸奥に流れ込んだ。ハッと振り向いた一護は、そこで見た光景に体が凍った。

屋上の中央に佇む銀城が、高々と。まるで勝ち誇るようにその首を宙吊りに掴み上げている。

一護の新たな相棒、完現術フルブリンクの化身にして恩人の現身——

仮面の少女を。

「まさかコイツがお前の完現術だったとはな。どうやら”守護女神”ってのはマジな話らしい」

「なっ、何を……やめろ! その人に触るな!!」

苦しむ彼女を助けようにも胸元の太刀傷が深く立ち上がれない。

石田に言われた能力の解除も何故かできず、ただ一護の咆哮ばかりが周囲に木霊する。

「予想とはかなり違ったが悪くねえ。…いや、予想以上のウルトラレアだ。どれ程の力か楽しみでたまんねえぜ…!」

「ま、まさか…!」

最悪の想像が頭に浮かぶ。

連中の目的。完現術の受け渡し。そして銀城の台詞。

…そうか、そうだったのか。

ようやく銀城の、X C U T I O Nの真の思惑に気付いた一護は、させて堪るかと思死に体を奮い立たせ――

「――止める銀城!!」

張り裂けるような月島秀九郎つきしましゅうくろうの絶叫に思わず硬直した。

「何考えてるんだお前! 今すぐその手を放せ!! その女が『何』なのか何度も教えたはずだろ?!」

「…いつまでビビッてんだよ、月島。こいつの生い立ちに例の女が関わってんのは最初から解ってた事じゃねえか」

「いい加減にしろ銀城! お前のくだらない破滅願望にはうんざりだ!! お前の命はお前だけのものじゃないんだぞ!!」

…なんだ、こいつ等。何で仲間割れをしてるんだ。何であの人の話がこいつ等の口から出てくる。

訳が分からない一護は、されど二人の緊迫した空気に形容し難い悪寒を覚える。

だが戸惑う最中、仮面の少女の体が突如光の鎖へと解れ始めた。その先端が吸い込まれていくのは一護ではない。銀城空吾だ。

「!? やめろ!! 何してんだてめえ!!」

「ダメだ銀城!! そいつを取り込んだら二度と取り返しがつかなくなる!!」

一護と月島、奇しくも同じ喚声を上げる敵同士の二人。

それでも少女の分解は止まらない。一護へ助けを求める様に伸ば

された彼女の腕も崩れていく。

最早敵の言い争いなど意識の外。青年は夥しい血潮を屋上にぶち撒けながら死に物狂いで立ち上がる。

「ふざけんな!! ちくしょうツッ! 俺の完現術だぞ!!」
フルプリング

「馬鹿野郎!! どうしてお前はいつも僕の忠告を聞かないんだ!!」

【斬月】を失った時に似た、霊力が消えていくあの感覚が一護を襲う。

「…言ったらろう、『もう遅い』と。お前もとつとと覚悟を決めろ、月島」

「くそおおおッ! 奪うな! 奪うなアア!!」

「止めろオオオオオオ!!」

『銀城おおおおおッ!!!』

そして…

「貰うぜ、お前の完現術」
フルプリング

須臾の一瞬。

一護は割れた仮面の奥の、少女の素顔を垣間見る。

「あ——」

ポタリと足元で跳ねた、舞い散る絶望の涙を残し。

黒崎一護の完現術は
フルプリング

跡形もなく消え去った。

「——ははははははは!! 凄え…! 何だこの力! 霊圧が底無しに溢れて来やがる…!!」

…嘘だろ。こんな事。

何も感じない。

目覚めてからずっと。胸の奥を満たしてくれた、力強くも優しい、あの人の温もりを。

「ハハハ! 喜べ月島! これ程の力があればお前の能力も大幅に強化できる! 二度と奴に後れを取る事も無え!」

「なんて事を…:…:終わりだ…:僕達は、何もかも…:」

勝ち誇る銀城の耳障りな笑い声も、項垂れる月島のぼやき声も、一護の耳には入らない。

…なあ、頼むよ。返事をしてくれ。

幾度呼び掛けようと、そこにあつたはずの彼女の声は最早無く。凍えるような空虚さのみが青年の心に残っていた。

その意味を何度も反芻し、否定し。そしてその度に胸奥の虚無感が彼を現実へと引き戻す。

「あ…:」

気付いてしまった。

「あ…:ああ…:…:」

解ってしまった。

焦がれた果てに取り戻した、皆を護れる力が。
夢が、終わってしまったんだ…

「うあああああああ…」

視界が滲む。水滴が頬を伝う。零れる嗚咽が止まらない。
母を亡くして以来、二度と泣かないと誓ったはずの、自分が。

力を取り戻したかった。だけどその方法は何一つ見つからなかつた。

ソウルソサエティ
尸魂界からの便りもピタリとなくなり、お節介焼きな浦原さんも、俺が店の前を通る度に戸を閉ざしていた。

死神も、虚も、ユウレイも。彼らが居た痕跡は全部消えていた。
まるで全てが胡蝶の夢だったかのように。
…耐えるしかなかった。無力に。十七ヶ月。

そんな時、石田が斬られた。

石田だけじゃない。浅野に水色も。仲間が、友達が、次々に襲われた。
た。

だけど俺は、俺だけが、何もできなくて。

藁にも縋る思いで銀城の救いの手を握った。

思わせぶりな台詞ばかり吐き、浦原さんや護廷十三隊など自分がこれまで築いた信頼関係にケチばかり付ける男。それでも銀城は同胞の完現術師達フルブリンガーを大切に作る仲間思いな奴で、俺の事もずっと面倒を見てくれて、支えてくれた。月島の能力でみんながおかしくなった中、一人だけ俺と共に戦ってくれた。

信じたいと思った。背中を預けたいと思った。なのに。

『貰うぜ、お前の完現術フルブリンゲ』

ぽつかりと空いた心の穴。そこに居たはずの一人の少女の姿が、感情が、共に戦った思い出が次々と蘇る。

梅雨の日、母が亡くなった河原で出会ったあの人の、大切な”お守り”。その彼女と初めて言葉を交わしたのは、尸魂界での卍解修行だった。

ルキアの処刑が早まり、焦燥で無理が祟った俺の体を回復してくれた。

虚化修行では内なる虚との主権争いを乗り切る活路を教えてください。

藍染との戦いでは力を使い果たした俺に代わり、その身を削ってまで奴を抑え込んでくれた。

そして…

—— やっと、逢えた…っ

再会を果たした少女は、完現術フルブリンゲとして俺の新たな力になってくれた。

かつての【斬月】とも【ホワイト】とも違う。優しくて、ちょっと抜けてて、同年代の女子みたいに感情豊かで親しみやすい新たな相棒。技一つ使うだけでぴよんぴよんはしゃぎ、虚一体倒すだけで大袈

裳に褒めてくる彼女と過ごした日々は、気恥ずかしくも喜びと誇らしさに満ちていた。

銀城との最後の修行の時。俺の体の負担を案じながらも、最後は想いに応えて全力を出させてくれた。

月島に大切な人達との絆を穢された時。俺以上に怒り、そして胸を痛めてくれた。

仮面で正体を隠してしようと、共に心を通わせる一心同体の相棒として、俺達は確かに互いを慕い、認め合っていたのだ。

「……返せよ……俺の完現術を……あの人を返せ……」

だけど、護れなかった。

俺が安易に銀城を信じたから。仲間の石田を疑ったから。アホみたいに敵に斬られ、目の前で彼女を奪われた。

いつか見せて欲しいと願ったあの人の素顔は、互いの大切な繋がりを引き裂かれる、絶望に歪んだ泣き顔だった。

「——」返せ”だど?”

崩れ落ち項垂れる一護の耳奥に、「何言ってるんだ」と銀城の失笑が木霊する。

「元々俺のお陰で覚醒した力だろうが。俺が貰って何が悪い」

「……う……あ……」

「自由になれてよかったじゃねえか。藍染がお前に仕込んだ死神と虚の力も、女神サマの加護も失って。漸く望んだ文字通りの”ただの人間”になれたんだからよ」

氷のような声が悪意を紡ぐ。あまりにも残酷で、悲愴な真実を。

「……ふざ……けんな……ッ」

その力は一護の屈辱的な定め^{さだ}めで、されど誇るべき幸運だった。

彼は大勢の人達に救われて己の運命を乗り越えた。共に戦った仲間達、尸魂界の死神達、浦原商店や仮面^{ヴァイザード}の軍勢、秘密を明かしてくれ

た親父、護るべき妹達。

そして、未来を見通し、永遠の過去を映す叫谷きよつじくに住まう、星雲の翅の天女。

——ずっと、見守ってるから

彼女が与えてくれた、運命を乗り越える力。藍染はその力を女神の加護だと言った。

それこそが、普通の人間だった一護があらゆる理不尽を跳ね退け、強くなれた本当の理由だった。

「…銀城…」

返せ。青年は死力を尽くし立ち上がる。

「銀城…ッ！」

それは、それだけは渡さねえ。憎悪に染まった目で盗人を睨む。

「銀城おおおおおッ!!」

そして自暴自棄に敵へ腕を伸ばした、その時。

「——ッあ…」

一護の胸を、一振りの刀が貫いた。

重い心臓の鼓動が体を震わせる。

一護は胸元から飛び出る青白い刃をぼんやりと見つめ、何が起きたのかもわからないまま、ゆっくりと後ろへ首を向けた。

バサツと大きな衣擦れの音が響く。真つ黒の布を取り払い現れたのは、二人の男。どちらも青年の味方であるはずの、頼れる大人たち。

「…親父…浦原さん…」

実の父親、黒崎一心が。一番の協力者だった人、浦原喜助が。共に無言で佇みこちらを見つめていた。

彼らの険しい顔を目にし、一護の中で最後の柱が罅割れる。

「…そうか…そうかよ…」

決壊する堤。止めどなく溢れる感情。

「親父たちまで…そうなのかよ…」

辛うじてしがみ付いていた崖の淵が、音を立って崩れていく。堕ちる先は、底無しの絶望の谷底。

これが、俺の終わりなのか。

みんなを護る為に取り戻した力も、みんなと敵として戦うために使う事になって。その力も敵に奪われて。みんなを護ろうとすれば「狂ってる」と怒りをぶつけられ。終いには実の父親に刺されて、死ぬ。

こんなのが、俺の…

這い上がるための希望も、力も、あの人の加護も失った黒崎一護の魂の奥で、ナニカが蠢いた。

「——馬鹿野郎」

だが、ソレが目覚める直前。一心が息子を叱咤した。

「よく見ろ、一護。お前を救うのは俺達じゃねえ」

「え……？」

その時。

一護の両目に、黒が映った。

「お前にももう見える筈だ」

その刀を握ってんのが

誰なのか――

映る黒を辿り、視線を下げる。

風に舞う黒髪。華奢な体を包む死覇装。凜とした深い蒼の瞳。

信じられない相手との再会に、青年は茫然と彼女の名を呟いた。

「――ルキ……ア……？」

貫く刀から迸る膨大な霊圧が辺りを？み尽くす。

渦巻く光の濁流の中。

黒崎一護がその女死神の顔に見たのは、端正な唇が描く……慈愛の微笑みだった。

全部…仲間さんが居たからじゃないか…！

—ありがとう、ルキア

「……ッ」

胸が詰まるような苦しさに目が覚める。

机に散らばる書類を見つめる事少し。深い溜息で肺の熱を追い出した彼女——朽木ルキアは、濡れた目元を拭い自嘲の笑みを零した。

「執務中にうたた寝か…私も焼きが回ったものだ…」

尸魂界ソウルソサエティの中心、瀨靈廷せいれいてい。十三番隊隊首室で日々の業務を片付けていた女死神は、夢に現れた男の悲しげな笑顔を沈鬱な思いで振り払う。

前の事変における虚ウエコムンダ圏での功績により、晴れて副隊長に昇進したルキア。多忙な生活は、心悩む少女に仕事という逃げ道を与えてくれた。

あの別れの日から早十七ヶ月。

総隊長命令により接触が禁じられて以来、ルキアの耳にあのオレンジ頭の青年の名が届く事はなくなった。現世はかつての平穏を取り戻し、護廷十三隊の関心は専ら藍染の反乱の後始末きよまつくと叫谷勢力へ向いている。

” 霊界の英雄 ” とまで称された者に無関心であり続ける尸魂界は、傍目には薄情に見えるだろう。されどそれは魂魄の調停者たる我等死神が、人間である彼にしてやれる最大限の恩返し。少なくともルキアの周りにいる者達は皆そう自らに言い聞かせ、それぞれの気持ちを封じていた。

…叶わぬ願いを毎夜の夢に託すのなら、己の心の弱さも許されよう。

そんなルキアの秘めた想いは、出席した側臣会で突然下知された総隊長令により報われる。

——今度は我等が、
彼の者を救う番じゃ

命の内容は、浦原喜助の用意した鬼道刀に霊圧を込める事。そしてそれを以て今一度、あのお人好し莫迦——黒崎一護くろさきいちごに死神の力を譲渡する事だった。

逢える。

またあいつと、一護と共に戦える。

押さえ続けてきた感情が出口を見つけ、歓喜と安堵に涙ぐむルキア。だが話を持ってきた浦原喜助と作戦の詳細を詰めるにつれ、少女は事の深刻さを理解する。

【過去改変】や【強制契約】などの恐るべき能力を持つ完現術師フルブリンガーの秘密結社。それを率いる銀城空吾ぎんじょうくうごの正体と、死神代行制度の後ろ暗い真実。

そして、何より…

「——まさか一護と雛森殿ひなもりの間にそんな繋がりが…」

「黒崎サンの才能は全て藍染の研究に所以し、指揮していたのは”読書家”を名乗る雛森副隊長の別人格…：正確には別魂魄と言うべき存在です。藍染が雛森サンに執着したのも、第二崩玉を埋め込んだのも、”読書家”という超常存在を彼女から独立させるためでした」

それは副隊長の権限では知り得ない、大戦の隠れた側面だった。ルキアも浅からぬ縁がある霊術院の友人、雛森桃。彼女は大战後、自分は藍染に恩があると沈痛に語った。

浦原の情報はその”藍染の恩”の輪郭を描いているように思えた。

「まあ今回の問題は”読書家”と黒崎サンの関係っす。元母体の雛森サンは零番隊に囲われているので手出しができませんが、黒崎サンな

らまだアレの影響から逃れられる可能性があります」

藍染という重石が消えた今、”読書家”の暴走は必至と浦原は言う。ルキアも、如何に友人の魂の一つとは言え、一護を玩具にされる事など許せなかった。

「…つまり貴様は銀城空吾の計画を利用し、一護の中からその悪しき”読書家”が施した怪しい力を取り除きたいのだな？」

「そうなんすけど、フルプリンガー肝心の黒崎サンが”読書家”に籠絡されてましてね。なのでここは完現術師達に彼の恨みを引き受けて貰ってから、悪い女性とえんがちよした黒崎サンを我々尸魂界の味方に引き戻しませよ」

ヘラヘラと笑いながら陰湿な事をぬかす浦原。だが一護の苦痛を見過ごす嫌悪感に苛立つルキアへ、男は据わった目で言い放った。

「黒崎サンは今、かつてないほど疑心暗鬼になってるんすよ。そしてその最大の理由はアタシ達が魂魄法やご家族の想いを重視し彼との接触を断った事にある」

「…ッ」

「全てが終わった後で確と説明すれば、黒崎サンならば納得して下さるでしょう。ですが今の荒んだ彼が死神代行制度の闇を知った時、果たして尸魂界を味方と想ってくれるでしょうか？ 恩人の”読書家”を危険視し、彼の完現術をこちらで奪った場合、それでも黒崎サンは我々を仲間だと信じてくれるでしょうか？」

我々が彼の裏切りに備えた

隊長格達の存在をお忘れなく

男の平坦な問いが、誰もが青褪める最悪の結末を突き付ける。ルキアはそれを静かに聞き、無言で顔を伏せた。

無力に苦しんだ一護。石田達を傷付けられた彼は、何もできない己をさぞかし悔やんだ事だろう。そして月島つきしまの能力で親しい者達との絆を失い、縋った銀城空吾に裏切られた拳句、やっと取り戻した力をも奪われるのだ。その心を思うだけで胸が張り裂けそうになる。

「そんな一護に剣を突き付け、尸魂界への信を問う。如何な人格者だろうと関係回復は難しい。そう浦原は考えているのだ。」

「…やはり、私は貴様を好かん」

だが。目を開けたルキアは、その蒼い瞳に微塵の迷いも見せなかった。

「貴様は無駄に賢いせいで全てを自己完結している。そして我々他者が独自に起こす一切の行動を『邪魔』だと決めつけている」

「……」

「かつての冤罪を思うに致し方ない事だが、貴様は心の何処かで我々尸魂界を…いや、身内以外の者を信用していない。我々に伝える情報を自ら選別し、行動を制限させ、手駒として操ろうとする。私の義骸に崩玉を仕込んだように。一護達に私を救うよう唆したように」

一護の信頼問題に隠れているが、浦原が真に論じているのは例の”読書家”の危険性だ。護廷十三隊が「零番隊案件」だと樂觀視しているのに対し、何か良からぬ情報を掴んだ浦原は、青年の中から”読書家”の影響を排除する必要があると断じた。

しかしそれは一護の猛反感を買う行為である。故に浦原は友好維持の為、いつものように何も説明せず、彼の夢と努力を踏み躪る事すら良しとして、あえて青年を銀城空吾の陰謀に巻き込ませた。

成程、確かに全てが”必要な事”だ。

「…だがな、浦原。世の中には理屈だけでは心動かない者も居るのだ。不合理で、間違いだらけで、どうしようもなく頑固な莫迦者がな」

もしくはそれをこちらに指摘させる事で自身が泥を被るつもりなのかかもしれないが、生憎そんなまどろっこしい方法で責任を取らずとも、あの莫迦が導く答えは一つだけ。

そして、私が信じる答えも同じく——最初から一つだけだ。

「見せてやる、浦原喜助。私がかつて一蓮托生と力を託した、あいつの……この命を救ってくれたあのたわけの」

——黒崎一護の気高い心を

††*

…止まらない。
何か、とても。
とても、とても大事な事から、無理やり意識を逸らされているよう
な、胸騒ぎが。

「……なんで」

戦闘で荒れた洋館裏の雑木林。微かな霊圧を辿りながら、井上織姫いのうえおりひめは突き刺すような胸の痛みを駆られて林の中を疾走していた。

「…おかしいよ……こんなの……」

なんで親友同士の月島さんと黒崎君が戦ってるの？

なんで銀城さんが黒崎君の力を奪うの？

なんで石田君がおかしくなった黒崎君の味方をするの？

なんで、あたし……

「……くん……」

月島さんがあんなに落ち込んでるのに。あたしの一番大切な人が、あんなに辛そうに、悲しそうにしてるのに。

なんで。

なんで、あたしは……

「——黒崎くん……っ」

口から零れるのは初恋の相手であるはずの大恩人ではなく、ただの仲間に過ぎないはずの、クラスメイトの名前。その事実が織姫の頭をぐちゃぐちゃにしていた。

泣いてた。黒崎君が。

戦う力を奪われて。

「……やだ……やだよ……」

つらいよ。苦しいよ。

あたまも、心臓も、お腹も。痛くて痛くて堪らないよ。

月島秀九郎は、井上織姫にとってかけがえのない大切な想い人だ。黒崎一護に会うずっと前から彼は少女の側において、いつも守ってくれた。

酷い家庭から連れ出して、十七年間も一人で自分の事を育ててくれた、優しい男性^{ひと}。命の恩がある彼のためなら織姫は何でもしてあげられる。何でも犠牲にできる。そう思ってた。なのに。

——泣かないで、黒崎君

グニヤリと景色が歪む。膝が震え地べたに転ぶ。心の中の何かが罅割れていく。

気付いてからは止まらなかった。

あれ程キレイに見えた月島との思い出が。過去の宝物が。まるで名画を塗りつぶして描かれた贋作のように剥がれ落ちる。

井上織姫というキャンバスそのものを、ボロボロに崩しながら。

「あ……う……」

割れるような激痛が頭に走る。意識がミキサーに攪拌されたように混濁していく。意識だけではない。記憶も、感情も、何もかも。

自分が誰なのかもわからなくなった織姫は、かくして失意の果て

に、一つだけ願いを神様に委ねた。

愛々しくて、切なくて。

恋する少女の、この世で最も美しいお願いを――

『――ヌツ！――』

：果たしてそれが天に届いたのか、あるいは魔の類に見初められたのか。織姫にはわからない。

だが落ちゆく暗闇の頭上に、小さな桃色の星が輝いた直後。

少女の世界は、息を吹き返した。

「――ツはっ…!？」

新鮮な空気を求めて心臓が狂ったように早鐘を打つ。滝の如く流れる汗を拭い、織姫は混乱する頭で立ち上がった。

脳裏の霞が晴れている。手足の震えが止まっている。生まれ変わったような気分戸惑いながら、少女は星に祈った願いの通り、今一度その両足を前へと走らせた。

視界の左右に消えていく木々。争いの跡が刻まれた地面。それらを過ぎ去り辿り着いた戦場の上空で…

織姫を見た。

懐かしい親友の朽木ルキア。

傷を治療する石田雨竜。

剣を構える銀城空吾。

集まるリルカ達XCUTIONの面々。
項垂れる見知らぬ黒髪長身の男。

そして渦中に佇む一人の青年の姿を目にした少女は——溢れる愛しさに彼の名前を叫んでいた。

眩い霊圧の暴風が収まっていく。

握る右手に現れた懐かしい重さに戸惑いながら、霊子の足場に佇む一護は徐に背後へ振り返った。

「——久し振りだ、一護」

記憶の奥底に仕舞ったはずの、男勝りな女の声が鼓膜を震わせる。目の前にいる仲間が夢や幻などではないのだと、一護は噛み締めるようにその名を呼んだ。

「ルキア……」

「な、なんだそのしみつたれた切ない声は……っ！ ゾワツとしたぞ、ゾワツと！ 全く、私が見張っておらぬとすぐ腑抜けるな貴様は！」
ぷりぷり「ああ情けない！」と怒る少女の姿に胸が熱くなる。毎度の子供っぽい茶化し合い。昔はいつもこうだった。

鼻奥をツンと刺す痛みに浸っていると、頬の紅潮を落ち着かせたルキアが握る刀をこちらに翳した。

「……これは貴様のために、下にいる浦原が十七ヶ月かけて作り出した鬼道刀だ」

「浦原さんが……」

「癩だが腕は確かなようだ。こいつのお陰で、私は再び」

——貴様に死神の力を

渡す事ができたのだ

彼女の言葉が魂に響く。右手に握る己の大刀を見つめ、一護は全身に漲る力の正体を、自分の身に起きた事をゆつくりと反芻した。

胸に刺さった刀から流れ込んできたのは、親しんだ霊圧の大奔流。あの始まりの夜のように運命が巡り合い、青年はようやく取り戻したのだ。

焦がれる程望んだ、死神としての自分を。

「……」死神の力が戻った”だと?」

だがそんな一護の歓喜に水を差す者が現れた。

「馬鹿馬鹿しい。寝言は寝て言え、朽木ルキア」

「…貴様が例の…」

「二年前、お前が一度目の譲渡に成功したのは元から黒崎の中に死神の力が眠っていたからだ。二度目の成功はあり得ねえ。何故ならその力の力は…俺が根こそぎ奪い取ってやったんだからな!」

そう勝ち誇るのは銀城空吾^{ぎんじょうくうご}。本性を晒したXCUTIONの親玉が自慢の大剣をルキアへ突き付ける。

しかし、彼女は動じない。

「違うぞ、銀城空吾。貴様が奪ったのは一護の完現術^{フルブリング}なる力だけだ。一護の内から湧き出る死神の力を、貴様如きが奪い尽くす事など毛頭できぬ…!」

そう言い切るルキアの顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいた。訝しむ一護は、銀城と揃って彼女の視線の先を追う。

「一護、奴等は知らぬ。貴様がこれまでに乗り越えてきた絶望の数を。そして、その数だけ貴様が掴み取ってきた

心強い希望の光を!」

そして、ルキアが見つめる宙へ振り向いた直後。
一護の眼前に奇跡が舞い降りた。

「いちにい
一兄!!」

風に黒髪のポニーテールを揺らす、一人の少女。緊張と苛立ちを顔に滲ませた大切な妹が、危うい霊子の足場で空中に立っていた。

「かりん
夏梨…!?!」

「何なのよもう…何が起きてんだよ…! 夕方から記憶が飛んでるし…ウケわかんない…ツ!」

何度も頭を振る彼女に一護は動揺する。

何故ここに居る。いつ間にそんな霊子歩法を。まさか月島の指示で来てしまったのか。

だがその問いを投げる直前。少女が信じられない事を口にした。

「…でも、一っだけわかる」

——あいつらが、

一兄の敵だって事が!

彼女が指差す先には、銀城空吾とXCUTIONの五人。

そして…

「お前…月島の能力が…」

”月島”ア? 誰それ、あそこの偉そうにしてる革ジャンの奴?”

そう首を捻る少女の両目に輝いていたのは、いつもと変わらぬ兄への愛情だった。

「…何だよ一兄。まさか危ないからあたしだけ引っ込んでろとか言うつもりじゃないよね?」

「な…ば、バカ! 危ねえに決まってるだろ! 大体お前に戦う力なんて——」

だが妹の無茶を止めようとした一護の後ろから、突如喧しい怒声が飛んできた。

「――俺たち”空座防衛隊”に戦う力がないだった？ 聞き捨てなんねえなあ！」

そこに居たのは金棒を片手にふんぞり返る学ランの少年と、巨大な筒を背負うブレザーの少女。一年半前の面影を残す花刈はなかりジン太と紬屋雨つむぎやウルが成長した霊圧を辺りに撒き散らしていた。

「浦原さんのトコのがキ共!? なんでこんな所に…！」

「ンなの店長に隠れてついて来たからに決まってるんだろ！ オマエん家の暴力女が抜け駆けしやがったからワザワザ出てきてやったんだ。感謝しろ！」

「…黒崎さん。私達がカリンちゃんに加勢します」

三人が敵と対面する姿を見て、一護は息を呑む。

拗ねながらも満更ではなさそうな夏梨と、彼女の左右に立つ浦原商店の少年少女。それはまるで自分とチャド達と同じ、仲間が共に強敵に挑む光景そのものだった。

「――僕もその子たちの力を保証するよ、黒崎」

そこで、呆ける一護を新たな声が諭した。

「石田!? お前怪我は…！」

「滅却師はたとえ四肢が挽げようと戦える種族だ。君達が騒がしくしてくれただおかげで立て直す事ができたよ」

霊弓を構えながら「君の短所も偶には役に立つ」と皮肉を吐くのは石田雨竜いしだうりゆう。あの青白い霊子系の技で傷口を塞いだのか、この短時間で元の戦意を取り戻している。

…そして最後に現れた二人の姿を目にし、一護は安堵と歓喜に頬が綻ぶのを堪えられなかった。

「黒崎くんっ!!」

地上から宙へと駆け上がってくる栗毛の少女。

数歩先の距離で感極まるように崩れ落ちた彼女——井上織姫いのうえおりひめを一護は慌てて抱き支えた。

「あつぶねえ…… だっ、大丈夫か井上」

「よ」 かった…… 黒崎くんが無事で…… よがっただああああ」

胸元で号泣する仲間思わずたじろぐ。だがそんな彼女の様子は、一護の心を奮い立たせる確かな希望だった。

「……一護、待たせた」

そして、彼の希望はもう一つ。

「チャド……」

「……すまない、……しばらくの記憶が曖昧なんだ。言葉にし辛い……まるで自分が自分ではないような……」

胸元を押さえ「あれが月島のか」と顔を歪めるのは、茶渡泰虎さじやすとら。正気を取り戻した親友が今一度、一護の背中を護る為に拳を握ってくれた。

「銀城……やはり一護を裏切ったんだな？」

敵への怒りか、自身の不甲斐なさか。

「……黒崎くんの敵だったんだね、リルカちゃん」

友を失う痛惜か、真っ直ぐな慕情か。

「これで不覚を取ったのは二度目だ。だけど三度目は無いと思え！」

敗北の雪辱か、仲間への義憤か。

茶渡が、井上が、石田が。一護を傷付けた敵へ静かな怒りの炎を叩き付ける。

十七ヶ月の時を経て、かけがえのない仲間達が一堂に集ったのだ。

「——チツ、やっつけてくれるぜ」

ずらりと勢揃いした一護の援軍に、敵の首魁が悪態を吐く。

「術者が腑抜けたせいか……まさかブック・オブ・ジ・エンドが破られ

るとはな。こんな事は初めてだ」

「形勢逆転だな、銀城空吾」

しかし石田の挑発を男の率いるXCUTIONは鼻で嗤った。

「…うわあ、恥ずかしい。あいつら月島さん一人に壊滅したのもう忘れちゃってるよ」

「言つてはなりませんよ、雪緒さん。どのみち人も虚も死神も、時の神の前では等しく無力なのですから」

「悪いね一護。あんた達の仲も深いんだろうけど、この程度の不利で崩れる程あたし達の絆も脆くないのよ」

「てめえらよくも月島さんを…！ 許さねえ!!」

「…ふん」

雪緒、沓澤ギリコ、ジャッキー、獅子河原、リルカ。一癖も二癖もある霊能力者集団が、一護達の前に立ち塞がる。

「…腹立つなあ…」

そして、この男も。

「…何も知らないクセに”希望”だの”心の力”だの…揃いも揃ってバカな夢見やがって…」

「…ッ！」

ゆらりと立ち上がった長身の青年。憔悴に目の隈をどす黒く染めた月島秀九郎が、息が詰まる程の殺意を放つ。

仲間との絆を奪う悪夢を思い出し、思わず硬直する一護。

「——臆するな！」

だがその時。身構える青年の背に、力強い声援が届いた。

「大丈夫だ。もう、やられはしない…!」

「そうだよ…この時のために力を磨いて来たんだから!」

「今度はあたしが護る番だ…っ!」

「死神として二年近いブランクがあるんだ。君は自分の心配をしろ」

「一護…!」

「黒崎さん…っ」

「黒崎くん！」

「一兄っ！」

「黒崎…！」

呼んでいる。家族が、仲間達が。俺の名前を…

そこに込められた彼らの強い親愛を感じ、一護は感動に立ち尽くす。

「…そうだ、一護。たとえ何があろうと、お前が希望を捨てない限り——私達はいつだってお前と共にある！」

「ルキア…！」

そして仕上げとばかりに、再会した相棒が渾身の言葉で青年の尻を引っ叩いた。

「奴等に見せてやれ、一護！ 大切な者達の為に世界を救ってみせた、貴様の心の強さを！」

絶望では、貴様の足を

止められぬという事を！

少女の鼓舞が胸を打つ。心が満ちる。力が溢れ出す。

その背中にかつての覇気を取り戻した黒崎一護。

斯くてもう一度。皆の想いに応えるため、青年は自らの力を振り下ろした。

「…ああ！」

—— 月^{げつ} 牙^が 天^{てん} 衝^{しょう} ——

右手の大刀を振るう彼の大きな後ろ姿は、その決意に相応しい…
紛う事無き英雄そのものであった。

全部…激闘さんが居たからじゃないか…!

死神の力を取り戻した黒崎一護。

放たれた【月牙天衝】げつがてんしょうを前にXCUTIONの陣が散開。だが無防備な彼らを一護達が追撃した直後、二人の完現術師フルプリンガーが行動を起こす。

「あーあ、熱くなっちゃって。君達ここが現世だって忘れてない?」
「鳴木市こで騒がれたら肩身が狭くなるのよ、あたし達みたいな霊界のお尋ね者はね…ツ!」

インヴェイダーズ

マスト・ダイ

ドール・ハウス

金髪の少年雪緒ゆきお・ハンス・フォラルルベルナと、赤髪の少女毒ヶ峰どくがみねリルカ。二人の”愛用品”を起点とした空間系完現術フルプリンクが、敵味方双方を一瞬で異界へと吸い込んだ。

かくして戦闘は個同士のぶつかり合いへと推移する。

「なっ!? 何だよここ…!」

「しまった! ウルル!」

「——戦いは弱軍を各個撃破が基本だよね」

無鉄砲に突っ込んだ夏梨かりんたち”空座防衛隊”の三人は、雪緒の能力によって分断され…

「いいぜ雪緒、ジャンジャン俺の所に連れて来い! この【ジャック

ポット・ナックル」で一撃粉碎して——って、お、おお女ア!!」

「あ、ジン太君の友達と同じハゲ……親近感……」

RPG風の謎の空間を彷徨う紬屋雨つむぎやウルルは、待ち構えていた坊主頭の学ラン少年獅子河原萌笑しがわらもえと対面。

「……すまない、バカの黒崎を銀城のような切れ者と二人きりにしたら面倒な事になりそうだ。女性相手に手荒な事は避けたかったけど許してほしい」

「——ふっ、ハイスクールの坊やにしては随分紳士的じゃない。でも遠くからチマチマ矢で攻撃する卑怯者種族に短期決戦は荷が重いと思うけど?」

沼地のステージに放り込まれた石田雨竜を迎えたのは、惜しげもなくピカピカの革ブーツを泥濘に沈ませる色黒の女ジャッキー・トリスタン。

「——ああ、先程の銀城サンの霊圧……あれこそが私の求めたもの! こんな小娘さつきと殺して一秒でも早くあの力を我が手に……!」
「黒崎くんの力は黒崎くんのものです! あなたのものになんかさせません!」

六花のヘアピンに力を籠める井上織姫は、焦がれるような声で騒ぐ初老の男沓澤くつざわギリコの撃破を目指し……

「——どうやら本当に僕の能力が掻き消されたみたいだね。つくづく理不尽な存在だよ、あいつは」

「……あなたは危険すぎる。一護の下へは絶対に行かせない……!」

因縁の相手にして恐るべき強敵月島秀九郎つきしましゅうくろうとの一騎打ちの機会を与えられたのは、並ならぬ信念を抱く一護の親友、茶渡泰虎。

そして。

「……死神代行制度の始まり」だと?」

女死神、朽木ルキアが語った昔話に一護は驚く。

「かつて尸魂界は、ある人間を死神の代行者として取り立てた。だが奴は突然、同じ町の死神を殺して行方を晦ませた。貴様が現れる遙か前の出来事だ」

「俺の前の死神代行…」

「そうだ、一護。その罪人こそ、尸魂界への復讐のために貴様を利用した」

——初代死神代行——

銀城空吾

直後、一護の「月牙天衝」が爆ぜた上空の中心。晴れる白煙の奥から一人の男が姿を現した。

「——礼を言うぜ、黒崎。お前の能力を貰ってなけりや今頃俺は消し飛んでたところだ」

「なっ…!」

その男が身に纏っていたのは、白い髑髏の鎧。虚の因子を孕んだ霊圧を漲らせる彼の姿を見て、一護は思わず硬化する。

「さあ、仕切り直した。お前が信じる死神共に貰ったその力と、俺が奪ったてめえの”女神の加護”。どっちが本当に黒崎一護を強くしてたのか…

てめえの体に教えてやるぜ!!」

陰謀渦巻く完現術師結社XCUTIONとの頂上決戦。

屈辱に臍を噛む一護は、あの馴染み深い光の鎖を操る銀城空吾と激突した。

「だーっちくしょー！ どんだけ続くんだこの廊下！ 男なら正々堂々勝負しろや！」

「どうせ正面から勝てる自信がない腰抜けなんですよ。あんたも雑魚の攻撃に手間取ってないでさっさとあの子供探すの手伝えバカ！」
「てめえの分もあのヘンなミサイル撃ち落としてやってんだよ！
そっちこそさっさと敵見つけろコラ！」

「何だと!？」

「ヤんのか、あアん!？」

デジタル風の通路を騒がしく走る少年少女。飛来する遠隔攻撃と共に迎撃しながら敵を探す夏梨かりんとジン太は、されど仲間とは思えない犬猿の仲だった。

そんな二人の無自覚な挑発に、この空間の主が反応する。

「——『勝てる自信が無い』だった?」

突然の声。振り向くと、廊下の突き当りに小柄な子供が立っていた。

「僕さあ：君達みたいな身の程知らずなクソガキ、大っ嫌いなんだよね。：殺したくなるくらい」

「！ 避けるカリーン！」

「うわっ!？」

ドロリと通路の壁面が溶解し、無数の黒い粘液弾を射出する。間一髪で回避した二人が見たその正体は、凶悪な歯を揃えた不定形の化物達だった。

「あははっ、知ってる? スライムって卓オリジナルゲーだと本当は防御も速度も高い強キャラなんだよ。くだらない先入観で相手の力量を見誤る君達にうってつけの処刑人だよね」

「チツ、モンスター使いかよ」

「しまった、退路が…」

狭い空間で前後から取り囲まれた夏梨とジン太。多勢の不利に顔

を歪める二人を、少年はふてぶてしい笑顔で蹴り始めた。

「ブラック・ウーズ が あらわれたー！」 さあ、戦闘開始だよ。僕のダンジョンから生きて出られるといいね、ふふっ」

「へえ、やるじゃない！」

「そっちこそー！ まさかそんなに力が上昇するとはね…！」

場は雪緒のゲーム空間の一つ、沼地での戦いに移る。

泥海の真上を「飛廉脚」ひれんきやくで駆けながら、石田雨竜は敵の女性が操る能力について思考を巡らせていた。

（霊圧、速度、筋力が上昇し続けている。恐れる程ではないが…原理が不明なのは問題だな）

完現術フルブリンゲがモノの魂を引き出して戦う霊術だという事は聞いている。ならば相手の術の起点となっている物品を破壊すれば、不必要に彼女を傷付けずに終わらせられるだろう。

「考え事ばかりでつれないねえ！ そおらー！」

「――！」

更に速度を上げた女の一撃を慌てて回避する雨竜。やはりいつもより体が重い。【乱装天傀】らんそうてんがいで誤魔化しているが、月島に斬られた傷は確実に青年の士気を削いでいた。

「あんたに女を傷付ける趣味がないように、生憎あたしもお子様を甚振る趣味はないの。手負いなら猶更ね？」

「ツ…それで？ お互い戦うつもりがないなら他が終わるまで停戦でもしようって算段かい？」

挑発を交わし油断なく向き合う両者。敵の分析の時間を稼ごうとする雨竜だったが、巧者のジャッキーはそれに律儀に付き合う素人はなかった。

「はっ、本気で言ってるの？」

「！ 更に霊圧が……！」

「この世は弱肉強食よ。獣の掟が支配するこのクソツたれた世界を生
き抜く方法は、ただ一つ」

——喰らう獲物の前では

遊びも慈悲も捨てる事よ

ダーティ・ブーツ

闇色のガーターストッキング。黒い半面ベールに制帽。白い
フアーマフラー。

全力形態のジャッキー・トリスタンの神速の蹴撃が、驚く雨竜の脳
天へ襲い掛かった。

緊張を増していく両陣営の戦闘。しかし友人と弟分と分断された
紬屋^{ウルル}雨の戦場は、奇しくも他とは異なる気の抜けたものだった。

「——オラオラ刮目しやがれ！」

ジャックポット

ナツクル

ドゴン！と人間離れた破壊音が響き、足元に巨大なクレーターが
できる。

「どうだ女ア！ こいつが俺の完^{フルブリン}現術！ 殴ったものに”確定急所”
の現象を引き起こすスーパーラッキーなパンチだぜ！」

こちらから目を逸らしながら「怖えだろオ!？」と大声で訊いてくる

同年代くらいの男の子。だが獅子河原と名乗った彼の拳に敵意は感じられず、その尊大な振舞の意図が読めないウルルはとりあえず相手を褒めることにした。

「…えつと…凄いな？」

「——はうっ!？」

ジン太の友達は喜んでいたので同じ台詞を口にしたが、どうやらこの少年は傷付いてしまったらしい。まるで狙撃されたかのように吹っ飛び倒れ伏す彼を眺めながら、やはり男子の心の機微は難しいと愁眉を見せる中学二年生のウルル少女。

「ッ、否！ いやいや！ お、俺は負けねえ！ 月島さんが苦しんでるのに舍弟の俺が気張らねえでどうするよ！」

しばらく地面で伸びていた少年が震える足で立ち上がった。それでも戦意は依然として低いまま。ウルルは別な所で戦うカリン達の仕事が心配だったが、なんだかんだでジン太を信頼している彼女はそのまま獅子河原某をここに拘束しておく方が味方の利となると判断する。

少年自身はこんなだが、能力は十分みんなの脅威足り得るのだから。

「オ、オ、オウ女！ い、痛い目みたくなけりやさつさと降参して家に帰んな！ 次はこいつがためえの腹にズドンだぜ！」

「…？ 心配してくれるの？」

「はうううっ！ マ、マブ…い…」

小首を傾げるだけで消耗していく相手に戸惑いつつ、このまま勝手に倒れてくれないかなと願うウルル。虚ホロウでもない人間に暴力を振るう気のない心優しい彼女は、さりとして無自覚な男殺しになりつつあった。

荒々しい破壊音が響く白い通路。「インヴェイダーズ・マスト・ダイ」の最奥部での戦いは、空間の主の優勢で進んでいた。

「——ほらほら、そっちは行き止まりだよー？ やっっちゃえ”ブラツク・ウーズ”！」

金髪の少年、雪緒の軽口が遠く聞こえる。痙攣する膝を何とか支え、黒崎夏梨は振り回されるスライムの触手攻撃を辛うじて回避する。

「くそっ…キリがねえ…！」

「あんたが…っ、真っ先に突っ込んであのドロドロに武器？ み込まれたからでしょうが…！」

「う、うるせえ！ てめえこそヘナちよこシユートばっかで傷一つ付けられてねえだろバーカ！」

「なんだとお…！」

この期に及んでなお互いに悪態ばかり吐く少年少女。しかし苛立ちをぶつけ合う二人の隙を敵は見逃さない。

「どこ見てるのさ、そーれ！」

「うわっ!？」

「なっ、おいバカ夏梨ッ！」

注意が逸れた少女へ黒い触手の鞭が振り下ろされる。寸前で転がり逃れるも、壁に追い込まれた彼女はスライム達の追撃に無防備となっていた。

「あははは！ 追ーいつめたー！」

「！ しまっ——」

体勢を立て直す間などない。豪速で迫りくる破城槌の如き分厚い粘塊に怯み、夏梨は咄嗟にギユツと目を閉じる。

…ところが身構えた衝撃がいくら待とうと来ない。そして恐る恐る顔を上げた彼女は、眼前に現れた人影を見て息を呑んだ。

「——ジン太!？」

両手足を広げ、スライムの突進を受け止める赤毛の少年。いがみ

合っていた自分を身を挺して庇ってくれた花刈ジン太がそこにいた。

雪緒と双璧を成すXCUTIONの空間系^{フルプリンガー}完現術師、毒ヶ峰リルカ。彼女の能力により用意された広いデコレーション箱の中では、縮んだ小人同士の二つの戦闘が行われていた。
その一角で眩い霊圧の光が激突する。

「おねがい椿鬼っ！」

——孤天斬盾——

衝撃の余波をものともしない二人の男女の戦いは、その体の小ささとは真逆の、人の身に過ぎた神の力の対決だった。

「…なるほど。神の定めし領域を侵す貴女の能力と、神の定めし契約を遂げる私の能力。煩わしい弱者と侮っていましたが…実に興味深い勝負ですねエ」

戦う片割れは沓澤ギリコ。月島から聞いていた相手の^{フルプリンゲ}完現術の詳細を思い出し、彼は微かな高揚感を覚えていた。

対し敵の余裕に眉を顰めるのは井上織姫。この十七ヶ月の間に磨いた力で少女は再度の攻撃を敢行する。

「無駄だとお教えしたはずですよ？ 井上サン」

「そんな…！」

だが飛翔する彼女の靈光は男に命中すると同時に消滅した。

「先程、私の皮膚に『三十分の間に何らかの靈的脅威に晒された場合』その威力を0に減衰させる条件を”時の神”と交わしました。これより三十分間、貴女の攻撃は何一つとして私に届かない」

誇らしげに自らの力を誇示する男に織姫は唇を噛む。

沓澤ギリコの^{フルプリンゲ}完現術は、特定の制限時間を条件に対象へ様々な現象

を引き起こさせるといふ凶悪な能力である。未知の力を前に少女は容易く相手の準備を許し、無敵の防御力を手にさせてしまった。

しかし、彼女は諦めない。

「……この世に無敵なんてものはありません！ あたしを舐めないで！」

「クク、無理に強い言葉を使って自らを鼓舞する。実に健気でいじらしい」

そして勝利を確信した男が、愛用の懐中時計の時刻盤をもう一つ、その手に握る。自らの能力の起点たるそれが象る数字は、”6”。

「さて、どうやら神の力比べは私に軍配が上がったようですね。これ以上の時間の浪費は無意味。神の代弁者として、罰深き貴女を」

——時の炎による火刑で

葬って上げましょう

タイム・テルズ

ノー・ライズ

「……どうやらギリコの方も終わりみたいね」

ファンシーな収納箱内にて続く、もう一つの戦い。

遠くで戦う味方の霊圧から戦局を読み取った毒ヶ峰リルカは、知人の織姫の運命に胸を痛めながらも、努めて自分の敵へと意識を向ける。

「ま、最初からあの娘がギリコに勝てる可能性なんて方に一つもないケド……まさか死神のあんたまでこんな簡単に無力化できるなんてね——十三番隊副隊長の朽木ルキアさん？」

そう嗤いながら見下ろす地に転がっているのは、小さな悪魔のぬいぐるみ。その口から零れる屈辱の声は先程まで彼女が戦っていた女死神のものであった。

「…くッ、おのれ…！」

「あら、かーわいつ。あたし達をただの人間だと侮るからそうなんのよ」

頑なに生者であるリルカへ剣を向けない相手に初見殺しの能力を回避する事など不可能。愛用の品に閉じ込めた無力な敵へ少女は勝ち誇る。

「…」ただの人間”か」

「何よ？」

「随分拘るのだな、己が普通ではない事に…」

だが、女死神のその言葉にリルカは笑みを消す。

「…あたりまえでしょ」

気付けば彼女は積年の鬱憤を敵へ吐露していた。

「あたしたちは”普通じゃない”から月島に出会えたし、”普通じゃない”から銀城に助けられた」

それは完現術師フルプリンガーの真の姿。無力な大勢の”普通の人間”によって迫害された、弱肉。

そう。彼女達は特別な力を持ちながら、喰われる立場にある者達だった。

『『弱肉強食』って言葉は、目くらましよ。『努力すれば強者になれる』って弱者に勘違いさせるためのね』

その諺の本当の意味は個々人の能力的優劣による社会的勝敗ではない。何の才にも力にも恵まれなかった無能な”大多数”が、数を武器に特別な”少数”を食い殺す、真逆の意味なのだ。リルカはそう述べる。

あたし達は、普通の人間ではない。

「家族も守れなかった自分の力になんの価値も見出せなかった奴」
磨き続けていたブーツは

弟の血で初めて汚れた

「捨てられて、心も、力の使い方もねじ曲げてしまった奴」
親が我が子を

「理想の子ではない」と

思う時

僕もあんた達を

「理想の親ではない」と

思っている

「力を使ううちに、自分は神の代弁者だと錯覚するようになった奴」
神への願いを撤回し

反動で片目を失った時

私はこの能力が神への

『祈り』ではなく

『契約』なのだと思った

「バカな使い方をして、自分で勝手に孤立した奴」

あたしの能力を

あの人がバラしたら

どうなるか

なんて、

考えもしなかった

リルカ達XCUTIONの皆は、稀有にして優れた能力を持って生まれた、バラバラの弱肉だったのだ。

「…そんなあたし達の前に現れた奴が、銀城空吾」

「！」

あの出会いの光景と共に、少女は男の台詞を想起する。

——今度は、俺達が

食い尽くす番だ

「あいつはそう言って希望を示してくれた。数と声だけが大きい”ただの人間”に喰われそうになってた、あたし達^{フルブリンガー}完現術師に」

王家、武家。歴史において人類は常に少数の側によつて支配されてきた。

今の世の中が無能に寛容すぎるんだ。銀城のその言葉は、このまま弱肉に甘んじるより遥かに甘美に聞こえた。

「おわかりかしら？ あんたの言う”ただの人間”ってのは、あたし達を喰らおうとしてる”敵”を指す言葉なの。断じてあたし達じゃないわ」

少女は足元に転がる悪魔のぬいぐるみを睥睨する。

「あたし達は戦うわよ。生きるために。自分が強者だと示すために。そしてあたし達に”ただの人間”で…弱者で居てほしがってる、あんな達^{ソウルンサエティ}尸魂界ともね」

一護や石田など、雪緒が隔離した敵の中には一筋縄ではいかない奴等がいる。早く仲間達の援軍に向かった方がいいだろう。そう少女は逸る。

「サヨナラ死神さん。命までは奪わないから、全部終わるまでそこで寝てなさい」

そんな勝利宣言を突き付け、毒ヶ峰リルカは見下ろす死神へ「ラブ・ガン」の銃口を向けた。

だがその時。

「…初の舞^{そめまい}」

「なっ!？」

少女は、突如足元から聳え立った氷の柱に左足を捕らわれた。

注視した足元にあったのは女死神の斬魄刀。即席の罠に誘い込まれたと知り、リルカは己の迂闊さを呪う。

「…正直に言う。お前達の気持ち、理解できぬ訳ではない」

「あんた…ッ」

女死神——朽木ルキアは、流魂街での貧しい日々を思いながら顔を伏せる。彼女もまた、霊力という選ばれた力を持つ強者でありながら弱肉の立場に追いやられた者だった。

だが。

「お前達への同情を理由に、仲間を見捨てる訳にはいかぬ!」

そうだ。相手が人間だろうが何だろうが、そんな事は些細な問題。ルキアは過ちを認め、ぬいぐるみの身で立ち上がる。

「貴様がそうであるように、私もこんな所で終わる気はない。体を元に戻して貰おうか」

「ッ、なるほどね。」 死の神”なんて偉そうな名を名乗る傲慢な連中に『潔く諦めろ』って言う方が無茶だったわ…!」

逆転した状況に意固地になっているのか、リルカが思考を硬直させている。

…ならばまずはその誤解を解いてやろう。

「言った筈だ、完現術師^{フルフリンガー}。私が…私達が貴様らと戦う理由は、弱肉強食だの霊界の秩序だの、そんな本能や理性が定めた掟ではない」

「…!」

そして朽木ルキアは肺を熱で満たし、全身全霊の覚悟を言葉に込めた。

「私達が剣を振るう理由はただ一つ。己の魂に絆を誓った…」

——大切な仲間を
護るためだ！

その決意が紡がれた直後。

まるで女死神の想いに応えるかの様に、二人が戦う収納箱の対角——井上織姫と沓澤ギリコの戦場から巨大な霊圧の奔流が噴出した。

「——ば、莫迦な……！」

橙色に輝く光のドームに包まれた、栗毛の少女。満身創痍ながら確かに足で地を踏みしめる彼女を見て、沓澤ギリコは驚愕に声を裏返す。

「ありえない……！ 時の神の怒りは絶対だ！ 神罰の炎に焼き尽くされるはずの貴女が何故……何故生きている!？」

同僚の完現術師フルプリンガーの能力すら支配下に置く「タイム・テルズ・ノー・ライズ」。その力が齎す最強にして最悪の効果は、契約破りによる存在の燃滅。

だが全能の超常存在との厳格な契約を破って尚、目の前の女は五体満足で佇んでいた。

「……あなたは、大きな勘違いをしています」

「何だと……？」

戦慄する男へ、少女——井上織姫は荒い息で答える。虚霊坤ロスヴァリエスでの修行の成果か、全身を真っ黒に爛れさせた大火傷も一分足らずで掻き消えた。

「あなたはあたしとの戦いを……」神の力比べだと言いました。でもあたしの力はそんな神聖で、徳の高そうな力じゃありません」

織姫はギリコへ語る。初めて自分の力の本質を知った、恐ろしい出会いの記憶を振り返りながら。

「…かつて、藍染という人があたしの能力をこう分析してました」

—— 神の領域を侵す力

今もあの魔王との謁見を思い出す度に背筋が凍る。だが少女が得た情報はその恐怖に見合う対価だった。

「事象の拒絶。神の定めた事象の地平を乗り越える事。それがあたしの盾舜六花の能力です」

「…まさか…！」

主張の理屈を理解したのか、ギリコが怯える様に後退る。

無論、藍染の崩姫プリンセスとして多くの悲劇を経験した織姫に、彼を逃がす

甘さも優しさも残っていない。

「火無菊」 「梅蔵」

「リリイ」 「椿鬼」

「舜桜」

呼び掛けに応えてくれた髪留めの妖精たちが、膨大な霊圧の塊へと変じる。

「…ハ、ハツタリです！ いくら攻撃の構えを見せようと、貴女が人間的に戦いを忌避してるのは調べが…ついて…」

尻すぼみな男の声は織姫の覚悟の証。頭上に集結した五つの彗星が主の指示を待つ。

かくして少女は、今までの弱く、護られるだけだった自分との決別を意味する特別な技を。

想い人の敵へ叩きつけた。

「あなたが」時の神様、の力を遣うのなら…あたしは、その神様の定めた理を——拒絶します…ッ！」

—— 五ご天てん戦せん盾じゆん ——

大地が砕け、霊圧が吹き荒れる。

雪緒の完現術空間内で行われている三つの戦闘。だがルキアの掛け声に応えるかのように、勝敗の天秤は一護の仲間達へと大きく傾きつつあった。

「——ご免なさい、ハゲの人。先を急ぎます」

「…マ、マブい……卑怯……な…」

無機質な広間。争い跡が皆無な戦場にて、気の弱そうな美少女の不意打ちに無念にも膝を突くフェミニスト獅子河原。

「——どうやらその汚れたブーツが君の完現術の依り代みたいだね」

「無傷……だって……!?!」

滝の如く降り注ぐ泥土の雨中。渾身の一撃を見舞ったジャッキーは、蹴られた場から微動だにしない青年の姿に目を見開いた。

「さて、滅却師が射程頼りの卑怯者……だったかい？」

「!」

咄嗟に距離を取り、直後女は自身の短慮を悔やむ。後退する自分へ向け、敵が主力武器の霊弓を構えていた。

そこに帯びる凄まじい霊圧を感じ、ジャッキー・トリスタンは敗北を悟らざるを得なかった。

「随分な評価だけど、本当の卑怯者ってのは

黒崎の心に付け込み、踏み躪る連中の事を言うものだよ」

ハイリツヒ・ヴェクター
神聖磔矢

…そして、彼らが戦うRPG風空間の中心部。主である雪緒・ハンズ・フォラルベルナが支配していた戦場も、予想を覆す展開へ。

「——ジン太っ!!」

どす黒い血を口から零す赤毛の少年。スライムの攻撃から自分を庇ったフラフラの彼へ、黒崎夏梨は思わず継りついた。

「ぐっ……か、ん違いすんな、暴力女……! てめえになんかあつたら…… テツサイの野郎がマジギレすんだよ……ッ」

「ジン太……あんた……」

息も絶え絶えに意地を張る姿が痛ましい。そんな彼を支えながら少女はただ茫然と立ち尽くす。

「はっ! 何ソレ、ガキが一丁前にナイト気取り? カッコ付けちやつてバカみたい」

「……ッ」

「ほんつつとム力つくなあ。素敵なパパやママやお兄ちゃんに散々可愛がられて……家族に守られて生きてきた甘ったれ共がくだらない美談演じてんなよ。反吐が出る」

コツコツと、死の足音が二人の下へと近付く。気に食わない腐れ縁の女のために己を犠牲にしたジン太を蔑みながら。

だが、そんな敵の嘲笑が、ぐちゃぐちゃに暴れる少女の心に炎を灯した。

「——うるさい」

ああ、全く。あたしもこいつも、らしくないにも程がある。

憤懣が胸の内を渦を巻く。それに呼応するように体の奥から力が湧き上がる。

「……なんだ、お前……?」

そして敵の困惑声を耳にした時。夏梨は自らの全身から立ち上る、異様な気配の霊圧に気が付いた。

不思議と戸惑いはない。まるで最初から自分の手足の一つであったかのように、その力が何であるのか少女には理解できた。

「……おこで」

「なっ!? お前、まさか」

本能に導かれるように遠くへ呼びかけた直後、不意に虚空から一つの球体が現れる。

ソレを両手で掴み、慣れ親しんだツルツルの感触を確かめた夏梨は、一息にその白黒の物体を空高く放り上げた。

「……別にあんたがどんな人生送って来たとか知らないけどさ」
「なに……?」

「そりや子供なのにあんな怪しい連中とつるまないといけないあんたと比べたら、あたしなんてずっと恵まれたクソガキなんだろうなつてのはわかるよ」

金髪の少年の台詞を振り返り、ボソボソと呟く夏梨。そして狼狽する彼へ「でも」と前置いて、少女はゆっくりと……右足を振り上げた。

「あんたがどれだけ可哀そうな奴でも……」

——人の仲間ダチを笑っていい事にはなんねーんだよッ!!」

スター・オブ

ブレイズンリング

そして落ちてきた、太陽のように燃える愛用のサッカーボールを。

黒崎夏梨は敵のスカした面へ思いつき蹴っ飛ばした。

「……な……何よこれ……!」

突然起きた周囲の霊圧の異変を感知し、リルカは信じられない思いで動揺する。

彼女の「ドール・ハウス」の中ではギリコが。外ではジャツキー、獅子河原、そして雪緒の気配が一気に弱まった。

その意味は、長年連れ添ったXCUTIONメンバーの敗北。

「――諦めろ、フルブリンガー完現術師。お前達の負けだ」

啞然とするリルカの耳に、女死神の聲が届く。味方の奮闘を当然のように信じ、眉一つ動かさない朽木ルキア。

そんな彼女の様子に、まるで見せつけるかのように自分達の絆の強さを誇示する敵に、リルカは気圧される。

これが、一護の仲間…

「……ってんじゃないわよ」

グツグツと憤怒が湧き上がる。

ふざけるな。勝利しか、栄光しか知らない死神風情が。

幸運に恵まれた”表”の連中が。

「調子乗ってんじゃないわよ!!」

感情に呼応し膨れ上がる霊圧。長年の暗い生活で培った筋金入りの反骨心が体を突き動かし、リルカは敵の大技で凍り付いた左足首を――強引に叩き割った。

「!? 莫迦者、何を…ッ!」

「ぐ…ううっ…!!」

激痛を噛み殺し、自由になった少女は死神を睨み付ける。動揺する女に少しだけ溜飲が下がった。

「…知ってるわ…あんた達の事。ソウルソサエティ尸魂界での戦いも…藍染惣右介との戦いも……どれだけの苦楽を共にしてきたかを…っ」

「お前…」

月島の能力が元に戻り思い出した、黒崎一護の英雄譚。輝かしい活躍、友情の証。なるほど、確かにこいつ等の絆は掛け替えのない大切なものなのだろう。

でも。

「キレイな景色しか見た事ないクセに…! ハッピーエンドしか経験してないクセに…っ!」

こんな、挫折も屈辱も知らず、常に勝者として自分の幸せを欲しい

ままにしてきた奴等が。

「あたし達に勝った気になってんじやないわよ!!」

長さの足りない左足で必死に立ち上がる。流れ出る血潮、跳びそうになる意識。それでもリルカは戦意を失わない。

負けたくない。自分達の絆こそが最強の強さなのだと言語するこいつなんか、「降参しろ」などとあたし達の絆をバカにする死神なんか。

霊なる力は、人の魂、すなわち想いに宿る。朽木ルキアの健闘に彼女の仲間達が立ち上がれたように。たとえ戦う相手や場所が異なろうと、人の心は繋がっている。

そしてそれは……少女達XCUTIONも同じであった。

よく言った、リルカ

その声が彼女の頭に響くのと同時。

毒ヶ峰リルカは、どこからか飛来した光の鎖に…

——胸を穿たれた。

「——チツ、あいつ等やられやがったか…」

雪緒が自身の完現術^{フルブリング}で用意した五つの隔離ステージ。その中で最も力を投じ強固に作られた舞台にて、二つの巨大な気配が衝突していた。

「はあああああッ!!」

「おっと」

攻め続ける片割れ、黒崎一護は何度も始解の斬魄刀を振り下ろす。浦原喜助と尸魂界のお陰で取り戻した死神の力だ。

だが、その太刀筋にかつての鋭さはない。

「どうした黒崎？ 仲間が勝つてんのに浮かねえ顔だな…!」

「ハッ、てめえこそ味方がやられてんのに随分薄情じゃねえか！ 元に戻って仲間を大事にする気持ちまで忘れやがったのか？」

激しい剣幕を受け流し防御に徹する敵、銀城空吾。そんな男の意外な姿勢に一護は眉を顰める。

：おかしい、押しているのは自分のはず。傷も向こうの方が圧倒的に多い。なのに何故奴の顔から余裕の色が消えない。

本能が奏でる警鐘を無視し、青年は全力の袈裟斬りを振り下ろす。

「返して貰うぜ…俺の完現術!!」^{フルブリング}

だが彼の一撃は、突如霊圧を増した銀城の大剣に容易く弾かれた。「違うな、黒崎。今はもう”俺のモン”だ」

「!? てめえ急に…!」

「腑抜けが。光の鎖^{こいづ}に攻撃したらあの仮面の化身サマが傷付くとも思ったか？ そういう未練や甘さがてめえが何度も騙される理由だって——言っただろ!!」

「ぐあアッ!」

骸骨の鎧を装備した銀城が、受け身の態勢から一転。繰り出された反撃を受け流せず一護は地面に叩きつけられた。

痛みに悶える青年を見下ろし、銀城が周囲に漂う鎖を引き寄せ、弄ぶ。

「にしても意思を持つ完現術フルプリングってのは面白えモンだな。斬魄刀のように認めさせるか屈服させるまで主に力を貸してはくれねえらしい」
「くっ…やめろ…！ その人に手を出すな！」

これまで消極的にこちらの攻撃を捌くばかりだった銀城。その間、奴の注意と意識が一体“何”に向いていたのか。男の台詞から一護は最悪の展開を想像する。

それは不運にも、間違いではなかった。

「…クク、いいぜ…！ 散々中で抵抗してくれやがったが、ようやく大人しくなつたみてえだな」

「!?」

ゾワリと銀城の霊圧の質が一変する。

次の瞬間、周囲に渦巻く光の鎖が四方八方へ射出された。それらが向かう方角は一護の仲間達が戦う地。

そしてその直後。

光の鎖が伸びる先から、幾つもの巨大な光の竜巻が巻き起こった。

「この霊圧…リルカ達の…！ 銀城てめえ何しやがった!!」

だが問い質そうと声を上げた青年は、瞬時に絶句する。

異変は一目瞭然。

残った幾房の鎖が、一護の視線の先。銀城の頭上に集結し…

「…そん…な…」

虚ろな瞳で俯く、仮面の割れた素顔を晒した——あの本好きの人と瓜二つの少女がその姿を象った。

「さて。おねんねは終わりだぜ、XCUTIONお前」

反撃の時間だ!!

全部…再会さんが居たからじゃないか…!

「…さあて、行くぜお前ら」

——反撃開始だ!

銀城空吾ぎんじょうくうごの号令が辺りに木霊すると同時。彼が四方八方に射出させた光の鎖の先端から、天を貫く巨大な光の竜巻が立ち上がった。

確か、あれらの中心にいたのは…

「まさか…:…くっ! 銀城てめえ、あいつ等に何しやがった!!」

遠目で状況を垣間見た黒崎一護くろさきいちごは男を問い質す。だがこの状況を作り上げた相手の口は凶悪な笑みに歪んでいた。

「相変わらず鈍い野郎だぜ。てめえの能力を奪われたつてのに、まだ俺の完現術フルブリンダの正体を言い当てらんねえのか?」

「!」

瞠目する一護を嗤う銀城。そして疑問の答えを見せ付ける様に、男が背後で浮遊する仮面の少女の髪を掴んで突き出した。

「俺の能力【クロス・オブ・スキヤツフォルド】の真価は、首飾りを大剣に変化させる事じゃねえ」

敵の完現術フルブリンダを奪い取り

そして譲渡する能力だ!

「凄い凄い、流石！ この力の為に二年も準備した甲斐はあったよ！」
一護と銀城の戦いから離れた森林の一角。新たな力で敵を撃破した黒崎夏梨は、突如襲来した一本の光の鎖が巻き起こした異変に驚愕していた。

「な、何…？ 何が起きたの…？」

「…くそ…：…やられた…ッ」

少女は重傷の花刈ジン太を抱えて霊圧の嵐から距離を取る。その竜巻の中央で興奮していたのは、光の鎖に胸元を突き刺された子供。夏梨が倒したはずの雪緒・ハンス・フォラルルベルナだった。

「アハハッ！ 惜しかったねクソガキ共。空吾の奴には随分待たされたけど、これで僕達の勝ちだ！」

愛用の携帯ゲーム機を片手で握り、青筋を立てた笑顔で近付いてくる金髪の少年。感じる力も気配もまるで別人のよう。拳句にこちらがやっと当てた新技の傷も綺麗に癒えている。

…そしてその変容は雪緒一人だけではなかった。

「おお！ これが一護サンの完現術！ なんと膨大な力…！」

「そんな…ッ」

井上織姫が放った五つの彗星に倒された、沓澤ギリコ。

「悪いね、坊や。これも空吾の作戦の内なのさ」

「…どうやらその様だね」

石田雨竜の霊矢に磔にされていた、ジャッキー・トリスタン。

「まったく銀城の奴、”要らない”ってあたし言ったのに…！」

「！ 貴様…ッ」

朽木ルキアの氷結攻撃から自傷覚悟で抜け出した片足の少女、毒ヶ峰リルカ。

諸手を挙げて歓迎する者。願いの成就に歓喜する者。複雑な感情に顔を顰める者。それぞれの想いを胸に、一護の仲間達の奮戦で劣勢に追いやられていた完現術師達フルプリンガーが、それまでとは比較にならない霊圧を手にして立ち上がる。

一同が銀城空吾が与えた力を受け取り、更なる強敵として生まれ変わったのだ。

敵の思わぬ強化に仲間達が動揺している最中。一護は明かされた銀城の能力の異質さに動揺していた。

「――能力の譲渡……」

「そうだ。だが「クロス・オブ・スキヤッフオールド」の最も優れた所はソコじゃねえ。手にした能力をまるでパイのように切り分け、その性質を意のままに振り分けられる事だ」

一護は緊張に喉を鳴らす。

力を”封じる”ならまだしも、”奪い”、そして自在に霊力や特性を”分配”するなど、あの崩玉と融合した藍染惣右介でさえできなかった事。

純粋な破壊力に長けている訳ではないが、この男も間違いなく化物の一人。超越者の領域に立つ者だった。

「クク、流石は霊界の英雄サマ……いや、”女神の加護”ってか？まさかこの俺でさえ完全に制御できない規模の力だったとはな。過剰分だけでもギリコ達を予想以上に強化できた」

顔に喜色を滲ませる男が体の調子確かめる。奴の片手の中で、髪を掴まれ宙吊りになっている仮面の少女が弱弱しく喘いだ。

「ッ、やめろ！ その人を離せ！」

だが怒声を飛ばす一護を、銀城は不気味に笑った。

「女こいつに呼び掛けても返事は返ってこないぜ。自我を持つ完現術フルプリンゲをゲツトすんのは初めてだったんでな。コレクションとして惜しかったが

——屈服させるために意思を司る能力要素を完全に分離してやった」
「なっ…!?!」

一護は暴行を甘受している少女へ継るように目を向ける。その瞳孔は開ききり、とても意識があるようには思えない。

「嘘……だろ……」

愕然と呆ける青年。

まさか。

本当に全部、この男の言う通り。

大切な相棒が、”人”として殺されたというのか。

「——ふざ……けんな……!!」

そんな事、信じない。信じて堪るか。

頭の奥で何かが切れ、ゾワリと胸の奥でナニカが騒めく。

「銀城!!」

逆上。

湧き上がる力はこの日最大。憎悪に吞まれ、微塵の躊躇いもなく、一護は霊圧を帯びた全身全霊の「月牙天衝」を銀城へ振り下ろした。

「バカが」

だが。黒崎一護の全力の斬撃は、仮面の少女が変化した光の鎖に触れた瞬間。

——幻のように消失した。

「なん……だと……」

何だ今のは。何が起きた。

腕を下ろす事もできず、訳もわからないまま一護は強烈な脱力感に

呑まれ立ち尽くした。

「言つたろう、間抜け。俺の能力は『相手の完現術を奪う』ものだ」と
「ぐあアツ！」

そんな隙だらけな彼を、銀城の無慈悲な一太刀が斬り伏せる。地面に倒れた青年を見下ろす男は、何かを振り返るように目を細め、不意にある話を語り出した。

「…ウチの月島つきしまはな、過去を操作する能力の副産物で挟んだ相手の過去を客観的に追体験できる。そうやって得た情報の中には当然、奴等から見たお前の事も含まれる」

突然の”月島”の名に困惑する一護を余所に、男の話は続く。

「お前が空座町でヤミー・リヤルゴと戦った時。仮面の軍勢との虚化修行の時。そして俺達の協力で目覚めた、お前の”身に纏う”
完現術」

「…ツ、何を…」

「実際こうしてお前の力を手にするまで確証は得られなかったが、俺は最初からある程度予想がついていた」

——お前の完現術の本質は
内なる虚ホロウの力の封印だ

…それが、一護の【月牙天衝】が掻き消されたカラクリだった。

例えば前にも似たような事があった。藍染の命令で現世に現れた、もう一人の彼女…雛森桃ひなもりもも。恋次や平子達と集団で戦ったあの人も、俺の虚化状態の月牙を掻き消していた。

【最後の月牙天衝】の会得修行で知った、己の斬魄刀と虚ホロウの関係。「我等は二人で一つ」と言った、相棒の言葉。

「あ…」

そして、青年は気付く。

もし、そうなのだとしたら。先ほどからずっと胸の中で這い回っていた、この不穏な騒めきの正体は…

「——ぐツ!?!」

その直後、一護は強烈な戦慄に襲われた。

「自覚した途端出やがったか」

「あ、ガ……まさ、か……ッ！」

体が硬直する。視界の端がじわじわと闇に浸食されていく。まるで自分自身が別のものに塗り替えられていくかの様な恐怖感。

…この感覚、忘れもしない。

虚^{ホロウ} 化だ

「怒りで気付かなかったのか？ 今のてめえが引き出してんのは斬魄

刀の力じゃねえ。虚^{ホロウ}の力だ」

「く、そつ……！ なんて……ッ」

『「なんで」じゃねえよ。俺がてめえの中から封印を奪ったんだ。自由になった内なる虚^{ホロウ}が大喜びで暴れ出すのは当然だろ」

その言葉が一護の頭を殴る。今自分の身に起きているのは、かつてあの恩人の少女に言われた通りの事だった。

「ちく……しよう……！ 返せ……ッ」

胸の中で暴れるナニカを必死に抑え、一護は銀城を睨む。
だが。

「らしくねえな、仲間の事より自分の心配かよ。…周りの状況から目エ離してていいのか？」

「…!?!」

「あいつ等——死ぬぜ？」

男の視線に促され背後を見渡した一護は、そこで繰り広げられていた戦闘に思わず青ざめた。

「——ホント油断したよ。あの黒崎一護の妹だもんね、そりや土壇場

での隠し玉の一つや二つ持ってるだろうさ」

「く…あッ！」

負傷したジン太を庇って敵の攻撃に吹き飛ばされる黒崎夏梨。転がる二人を目当てに、復活した雪緒が悠然と近付いてくる。

「それにしても驚いたなあ。まさか君の奥の手が完現術フルブリングだったなんてね」

「ふる…ぶりんぐ…?」

全身の痛みにも顔を歪めながら少女は問い返す。だが彼女がその単語の意味を知る間もなく、金髪の少年が大技の構えを見せた。

「だけどさ…僕達を舐めすぎなんだよお前は!!」

「ぐっ!?!」

「な、何コレ! 放せよっ!」

突然現れたピクセル状の黒い十字架に夏梨とジン太は拘束される。必死に足掻くもびくともしない。

「さっきはいい一撃ものもらったからさあ、お返しにちやーんと惨たらしく殺してやるよ。僕の能力と、空吾から貰った——君のお兄さんの完現術フルブリングでさ!!」

デジタル・ラジアル・インヴェイダーズ
画面の外の侵略者

雪緒の一声で、ゲーム内の多種多様なモンスターが現実にも具現化し二人を取り囲んだ。

…そして少年の大技に呼応するように、彼の仲間達も続々と新たな能力を披露する——

「——丁度いい。新たな領域に至った我が時の神の力が如何程のものか、神の理から外れた貴女を相手に試させて貰いましょう」

ザ・ロイヤル・カリヨネラ
時神の忠実なる下僕

「——多分あんたは一護の仲間の中でも別格に強いんでしょうけど、
そう簡単に空吾の所に行けるなんて思わない事だね」

プロット・クロック・バトルドレス
泥血まみれの戦闘服

「——ゴメンね……なんか、こんなズルで終わらせるのヤだったんだ
けど」

トーチカ・タワーラ・マトリョーシカ
露式人形危機避壕

ゲームボタンが刻まれた手袋状の操作端末。左右非対称の歪な装
甲状の鎧。内燃機関をモチーフにしたファーコートとガーターブー
ツ。ハート型の手甲と胸甲：

それぞれの新形態の完現術フルブリンゲを身に纏ったXCUTIONの四人が、
礫にされた夏梨とジン太を、驚愕する織姫を、身構える雨竜を、ぬい
ぐるみに捕らわれたルキアを追い詰める。

戦局の天秤は、一気にひっくり返った。

「——しまっ……！ お前ら!!」

状況を感じし、一護は吠える。だが内なる虚ホロウに蝕まれる青年の体は
鉛のように固まったまま。

「ハッ、情けねえなオイ！」
「がッ!？」

そして動けない一護へ銀城の追い打ちが襲い掛かる。

「せっかく死神の力を取り戻して、チャド達も月島の能力から解放さ
れて一緒に戦ってくれてんのによ！ 女神の加護が消えただけでこ
のザマだ！ 仲間のピンチに駆け付ける事すら出来ねえ！」

「ぐああアアアアアアッ！」

「理解できてるか、黒崎一護！ 所詮てめえは藍染のオモチャだ！」

そうやって無様に俺にボコられてんのがてめえの本当の強さなんだよ！」

響き渡る敵の嗤い声が脳を揺さぶる。斬られる度に虚ホロウの浸食が強まっていく。一護は無様に地を這いながら焦燥と屈辱に歯を食いしばる事しかできない。

だが甦られる青年はしばらくして、ふと銀城の攻撃が止まっている事に気付く。

「……チツ、こんだけ追い込んでもダメか。このままじゃ本当に例のヴァストローデ最上級大虚に堕ちちまう」

小さく「お前は殺したくなかったんだがな」と呟く頭上の男。何かを振り払うように頭を左右に振った彼は、周囲で旋回する光の鎖を大きく操り、一護の全身へ巻き付かせた。

「あぐっ……！」

「これでお前の虚ホロウは出て来れねえ。せめてもの情けだ」

——人のまま殺してやるよ

能面のような表情を浮かべた銀城空吾が、得物の大剣を空へ擡げる。

逃げ場はなく、味方の助けもない、万事休す。

莫大な霊圧を纏うそれが自分の胸へ振り下ろされる様を、一護は茫然と見送った。

風が頬を撫でる。

袖を通した死覇装が翻る感触が手足を伝う。

痛みがない。衝撃もない。

…一体何が起きた？

戸惑いに急かされ、一護は眩い光の中で閉じていた瞼を開ける。

そして霞む視界一面に飛び込んできた光景に、青年は息を呑んだ。

「――久しぶりじゃねえか」

王よ

水平に聳える無数の蒼い摩天楼。その一つの壁面を足場に立つ一護の前に、いつぞやの真っ白な風体の青年がつまらなそうな顔で佇んでいた。

「どうした、」待望の瞬間」だぜ？　もう少し嬉しそうな顔をしろよ」

相手の問いを無視し素早く辺りを見渡す一護。だがここに居る筈の他の二人は、やはり見当たらぬ。

彼にとつてこの状況は二度目となる。自分が為さねばならない事を思い出し、一護は右手の斬魄刀を正眼に構えた。

「…ああ？　何のつもりだ？」

「惚けんじゃねえよ」

首を捻る白い自分へ、一護は静かな怒りをぶつける。

「斬月のおっさんがいないのも、今の俺の力がためえ主導になったからだろ？　なら前回の虚化修行の時と同じように、ためえを倒して、

斬月のおっさんを復活させて……あの人を銀城から奪い返す！」

そうだ。俺には時間がない。

こんな鬱陶しい反逆者などさっさと倒して、苦戦する仲間達を、苦しんでいる相棒の少女を助けに行かなければならないのだ。

「……………」 助ける？」

だがそう豪語する一護に対し、ホロウ虚の青年は不思議そうに眉を顰めた。

「助けるって、誰をだ？」

「ふざけんじゃねえよ！ 今までてめえを封印してくれてた俺のフルブリング完現術も、俺の仲間たちもだよ！」

そう吠えると、青年が呆れに鼻を鳴らした。

「なんだ。気付いてもねえのか」

「…ツ、何？」

「つたく、結局その鈍さは直らねえままかよ。相変わらずあの方はコイツに甘え…」

相手の反応にたじろぐ一護。それを見た当人が「あー…」と何かを諳んじるように開口した。

「剥き出しの本能で戦う俺と違い、てめえには心の力つてモンがあった。俺には理解できねえ代物だが…ソイツにこの俺を制御できる力があるのは事実。だからこそ、あの決戦前に俺の封印は一度だけ…あの人に解かれた」

「…お前…何言って…」

「てめえが生まれる前からてめえの力となる最強の虚ホロウを作り出す程だ。そんな女が黒崎一護の限界を見誤る筈がねえ。あの時のてめえは、確かにこの俺をギリギリとはいえ制御できていた」

唐突に投げ掛けられたコイツらしくない肯定的な台詞に一護は益々困惑する。それはこの男自身の言葉と言うよりは、もう一人の住人の…

『——解らないか、一護』

その時。

白装束の青年の口から、懐かしい、低い男の声が響いた。

『…思い出せ、一護。彼女が何故、己の分身を”ここ”へ送り込んだのかを』

「！」

一護は息を呑む。そして驚く最中、相手の白死覇装の裾から黒い影が伸び…

「…斬…月…」
ざん げつ

あの決戦の瞬間に別れを交わした——黒づくめの相棒がその姿を象った。

藍染惣右介を倒すべく編み出された最終奥義、【無月】。

黒崎一護の内に眠るあらゆる霊能の才を純粋な霊圧へと変換させ、文字通り自分自身を一つの月牙として消費した”最後の月牙天衝”。だが奇しくも彼の未熟な霊圧制御が功となり、全ての霊力が投じられる事はなかった。

その後残された力の残滓は一護の完現術フルプリングの覚醒に刺激され、浦原喜助の鬼道刀から注がれた膨大な死神の霊圧を吸収し、奇跡の復活を遂げた。

斬魄刀の精神世界において再会した【斬月】は、一護にそう語った。
『…だが我等が復活を果たすには、もう一つ。お前が乗り越えるべき大きな犠牲が必要だった』

「！」

『…いや、犠牲と言うのは語弊がある。あの娘は私達とは異なり、最初からお前の下より消え去る事を宿命付けられた存在だった』

再会の喜びを噛み締める間も無い。唐突に突き付けられた言葉にまさかかと青褪める青年へ、斬月が憐憫の感情に目を細める。

——あなたが一人前になるまで

そのお守りを大事にしてね

それは幼い頃の思い出。一人悲しみの雨に打たれる子供の俺にくれた、この精神世界に居るべき仮面の相棒を俺に遣わしてくれた、不思議な少女のおまじない。

あの梅雨の日の光景が、斬月の言う”消え去る運命”の言葉が、一つに繋がった。

「だ、だけどあの人は…俺の完現術フルプリングは銀城に無理やり…！」

未練に駆られ、一護は咄嗟に反論しようと声を上げる。だが斬月は静かに首を振った。

『違う。赤子のお前が己の力で身を滅ぼさぬよう施されたそれは、お前の成長と共にその役目を終えたのだ』

「役目…」

そう放心する彼へ、今度は白死覇装の青年がぶつきらぼうに補足した。

「最初に言ったはずだぜ、”待望の瞬間”だってよ。ずっとここに居た姐さんが消えたって事は、てめえが漸く認められたって意味だ」

——この俺 騎馬を使いこなす

”一人前”の王によ

それが、一護が長らく待ち望み、されどその裏に度し難い代償が隠れていた、真実だった。

斬月は言う。

彼女が一護に施した【牙錠封印がじょうふういん】は、霊界の秩序を揺るがす禁忌の

術で生み出されていた。あれは断じて他者の手に渡って良いものではなく、故に術者は必ずその状態状況を常に把握していなければならぬ。あの”お守り”にはそれだけの価値があったのだ。

だが…

『にも拘わらず、彼女は銀城空吾の企みを見逃した。未来を見通すとされる、あの娘が』

「それ…って…」

一護は息を呑む。

『そうだ、一護。あの仮面の少女が彼女と同じ姿をしていたのも、姉のようにお前を慕っていたのも、そして銀城空吾に奪われたのも、全て……お前の持つ彼女への甘えを捨てさせる、最後の愛の鞭なのだ』

深々と心に突き刺さる言葉だった。

一護の人生に大きな影響を与えた、”ご本が好きなおねえちゃん”を自称する謎多き人物。思えば母の死を乗り越えられたのも、卍解や虚化修行を潜り抜けられたのも、藍染と対等に戦えたのも、その裏には必ず彼女の支えがあった。そして自分は戸惑い一つもその優しい手を受け取り続けた。

それを”甘え”と言われ、否と答える事などできる筈がない。

『銀城空吾の能力は、あらゆる完現術フルブリンゲの中でも限りなく頂点に近い性質を持つ。如何なる鬼道使いとして奴の支配力に耐えうる術を生み出すのは至難だろう。況してやこの精神世界の者達と言葉を交わす事すらできない不完全な人造魂魄など、是非もない』

「…そんな……」

銀城に奪われる寸前。仮面の少女が見せた涙が頭を過り、一護は沈痛に顔を歪ませる。

彼女は知っていたのだろうか。自分がいずれ消えなくてはならない存在である事を。だからこそ完現術として俺と共に虚退治をしていた時、あんなに楽しそうな声ではしゃいでいたのだろうか。

近づく必然の別れの時まで、貴重な思い出を少しでも多く、心から楽しもうと…

『項垂れている暇はないぞ、一護』

その時、不意に斬月が青年の握る大刀に触れた。

『あの少女を取り戻す事はできない。だが彼女の心を救う事ならでき
る』

「…ッ！」

瞬間、一護は弾かれるように顔を上げる。

『あの娘は己の運命を覚悟していた。だが敵に使役され主に牙を剥く
など、お前を護るために生み出された彼女にとっては何よりの屈辱だ
ろう』

屈辱、確かにそうかもしれない。少女がこれまで自分にくれた善意
の数々を思い起こし、一護は拳を握り締める。

『立ち上がれ、我等を担う者よ！もし、物言わぬ道具と化した彼女の
名誉を守る者がいるとすれば、それは一護…』
お前をおいて他にない！

強い、貫くような鼓舞が胸を打つ。かつて同じように永遠の別れを
覚悟した斬月の言葉。その重さを知らない者はここにはいない。

顔を上げた青年の目には、あの決戦の場で藍染惣右介を感嘆させた

悲しみを背負う、真の強者の光が輝いていた。

全部…死神さんが居たからじゃないか…！

「……なっ!？」

それは突然起きた。

虚^{ホロウ}へ墮ちる哀れな後輩を救わんと、銀城空吾^{ぎんじょうくうご}が振り下ろした大剣がその首を落とす寸前。青年——黒崎一護^{くろさきいちご}の封じられている筈の右手が、男の慈悲の一撃を受け止めた。

「——ぐ…おオ…おおおッ!」

封印の鎖に捕らわれている黒崎に抵抗できる術などない。だが感じる彼の霊圧は、封印の鎖を操る銀城すら怯ませる程の規模。

「銀城おおおおおッ!!」

腹の底に響く咆哮と共に、巨大な光の渦が青年の体から噴出した。

「ッ、土壇場でいきなり覚醒すんのはてめえの持ち芸か？ 完現術^{フルフリンク}の完成に続いて二度目となりやア”偶然”とは言えねえぞ…!」

「オオオオオオオオ!!」

咄嗟に距離を取ってしまった理由を誤魔化すように、銀城が軽口を叩く。

繰り返される黒崎の、唐突で段階的な霊圧上昇。まるで抑え込んでいる蓋が一枚一枚外れていくかのような異常なそれが彼の力の底を押し量らせない。

尸魂界^{ソウルソサエテ}の隊長格達も、虚圈^{ウエコムンド}の十刃^{エスパレダ}達も、そうやってこのガキに敗北したのだと銀城は部下の月島から訊いていた。

それでも、男の目に浮かぶ余裕は未だ健在。

「…だが女神^この封印^いを侮^つったな、黒崎! てめえの力を抑え続けてた

のは伊達じやねえ！ その場の感情の高ぶりで解けるような代物ならてめえはとつくに内なる虚に喰い尽くされてたんだからなア！」

「ぐ、ううウウウ…ッ!!」

そう。あの月島秀九郎つきしましゅうくろうさえも震え上がらせ、恐らくこの世でただ一人黒崎一護の力を正確に把握しているであろう”守護女神”が、黒崎の力を封じる為に施した封印術。その札に偽りは無い。

そして今までそれに救われてきた一護自身も、あの”お守り”の力を身を以て理解させられていた。

「くそっ！ 霊圧が抜けていく…ッ！」

『落ち着け、一護。此度の相手は力任せの戦いでは倒せんぞ…!』

消えゆく仮面の少女への餞別、沈痛な覚悟を胸に戦意を取り戻した青年。だが彼の反撃は早々に躓いてしまう。

斬月ざんげつの忠告の通り、目の前の敵が操るのは、誰よりも一護を知り彼の身を案じた少女の力。

朽木白哉、ウルキオラ・シファア、そして藍染惣右介。これまでの強敵たちとの戦いを勝利に導いた切り札、内なる虚ホワイトの力では彼女の封印は破れない。

そんな不利な状況を嘲笑うのは、その力の源たる白装束の男。

『クク、どうする王よ？ このままじゃヤベエよなア?』

「てめえ…ッ」

鎖の拘束に足掻く一護は脳裏の相手に「状況わかってんのか」と噛みつく。対する答えは、実に奴らしいものだった。

『どのみち俺の力は姐さんの鎖に封じられて使えねえ。てめえも”一人前”になつたんなら実力を証明してみせろ。俺の手助けナシのお前に何ができるのか…お手並み拝見と行こうじゃねえか!』

愉しげにニヤニヤ嗤う虚ホロウ。彼の言う通り一護達はかつてない危機的状況にあった。

『…一護、お前も知っているだろう。【牙錠封印】は一度、崩玉により昇華したあの娘の調整を受けている。ただの死神ではなく、真の超越

者と成った彼女のだ』

「！」

『気を付けろ。もし銀城空吾が奪った能力を完璧に制御できるのだとしたら、我々はあの藍染惣右介すら封じる程に強化された力を相手にしている事になる…！』

斬月の言葉があのだ獄の最終決戦を想起させ、一護は堪らず喉を鳴らす。

それに、彼を捕らえる枷はもう一つ。

(感じる…あの人の気配を、まだ…！)

そうだ。封印を破るとは即ち鎖を傷付け破壊する事。そんな事をすれば最悪、仮面の少女が消滅してしまう。

別れの言葉一つ、言えないままに。

「ッ、このままじゃ…！」

八方塞がりです身動き取れず、一護の胸内を絶望の炎が焦がしている。

…そして彼が手を拱いている間も、事態は更に悪化。

『——殺しはしないわ。終わるまでそこで寝てなさい』

「……くそっ」

毒ヶ峰^{どくがみね}リルカの不思議な術に霊圧を掻き乱され、無念に倒れ込む朽木ルキア。

「——時の神の力を纏う事とは即ち、この私自身が神になるも同然！

さあ井上サン…時の神に代わり、この私が直接貴女に神罰を与えましょう!!」

「い、いやっ…！」

全身を幻想的な劫火に包む沓澤^{くつげわ}ギリコに腕を掴まれ、痛みに喘ぐ井上織姫^{いのうえおりひめ}。

「——おっと、言ったでしょ？　そう簡単に仲間の所へは行かせないって…！」

「くっ、不味い…ッ！」

速力に全てのリソースを注ぎ込み、妨害に徹するジャツキー・トリスタンから逃れられない石田雨竜。いしだうりゆう

「——やっちゃえ、僕の【百鬼夜行】！スタンピード そのガキ共をめちゃくちゃのミンチにしてやるんだ！」

「ヤベえ…！」

「ヒツ…！」

ゆきお雪緒・ハンス・フォラルルベルナのモンスター軍勢に喰らい付かれる夏梨とジン太。かりん

一護の視界の先には、遠くで戦う仲間達が傷付く光景が…

「お前ら…！ 畜生ッ、放せ銀城!!」

一護は動けぬ身で必死に叫ぶ。だが上げる咆哮も虚しく大気を震わせるだけ。

最早一刻の猶予もない。一人前の証である筈の【牙錠封印】も越えられず。そうして自分は家族も仲間も護れずに、全てを失って——

「そろそろ目は覚めたか？」

その時。

不意に、嗤う銀城の声から嘲りの色が消えた。

「…馬鹿が。力を失った途端に捨てられたつてのに、朽木ルキアや浦原喜助に一度助けられた程度ですぐ信頼しやがつて。これだけの騒ぎが現世で起きてて、動いている勢力が俺達だけなのを少しは妙に思えよ」

「！ な、に…？」

どこか憐れむような奴の目を見て、焦燥に暴れる一護の心が一瞬、疑問符で埋まる。

その僅かな隙間へ、続く銀城の言葉は驚くほど容易く入り込んだ。「忘れたのか、黒崎？ 現世におけるあらゆる霊的異変の対処に当た

る筈の連中が誰なのか。本来守らなきやなんねえ”人間”で、しかも藍染の一件で大恩のある”黒崎一護一派”を救わねえといけねえ、あの自称魂魄の調停者共の事をよ」

「……」

瞠目する一護の前で、男が顔を憤怒に歪める。

「朽木ルキアと浦原喜助は、俺がお前の力を奪い、お前が無力に戻った直後に死神の力を渡した。俺には奴等のその……まるで『戸魂界が恵んだ力で裏切り者を倒せ』と言わんばかりの恩着せがましい傲慢な態度が——腹立たしくてなんねえ……ッ！」

それは誰のものでもない、銀城自身の激情だった。

「……一護、目を覚ませ。戸魂界がお前の死神の力を復活させたのは、お前への好意じゃねえ」

——目障りな死神代行達を

共倒れさせてえからだ

初代死神代行・銀城空吾。

始まりは善良な青年であった彼が、如何にして戸魂界から”裏切り者”と呼ばれるまでに至ったか。この男の仲間思いな面を知る一護は、どこかで彼の豹変ぶりを疑問に思っていた。

何故こいつはこんな事件を起こしたのか。戸魂界をそんなに敵視しているのか。

「……皆……殺し……？」

故に一護にとって、銀城の抱える闇は——仲間達の危機を目の当た

りにして尚——啞然と立ち尽くしてしまうほど衝撃的なものだった。
「俺達に持たされたその代行証：『死神代行戦闘許可証』には、俺達と
その周囲を監視し、盗聴し、霊圧を制限し分析する機能が仕込まれて
る」

「！」

「ソイツを使われて、俺は尸魂界ソウルソサエテイにとって不都合な存在である
フルプリングァーフルプリングァー完現術師を一網打尽にする”撒き餌”に利用されたんだ」

咄嗟に自分の懐から例の木彫り板を取り出す一護。以前、何の変哲
もないソレから突如ルキアの声が聞こえた記憶が頭を過る。

「う、嘘だ……！ そんな、虐殺なんて……あいつらがやるワケ……！」

「一護、俺達に代行証を渡した男は誰だ？」

「!!」

絶句。

その人物は一護が何度も親切にしてもらったルキアの上司で、柔和
な笑顔の人格者。彼の地位は着こなす羽織が示す通り……

「——十三番隊隊長・浮竹十四郎うぎたけじゅうしろう。この腐った死神代行制度を立案し
た責任者だ」

それはかつての銀城と同じく、善良な青年である一護にとつても信
じがたい話だった。

男の怨嗟は止まらない。

元より人間と死神には寿命と霊力の有無という隔絶した種族的差
異がある。そのため尸魂界ソウルソサエテイの者達は本能的に人間を下に見る。

故に——【死神代行】に限らず——そういった上下関係を脅かすイ
レギュラーには、妬嫉や侮蔑、恐怖を覚えるのが人の常。死神達の複
雑な心境は、【死神代行】を現世のさまざまなトラブルに対応する現地
戦力として重宝しつつも、組織的に管理しようとする警戒姿勢に強く
現れていた。

「お前は藍染との戦いで協力してくれた死神共に恩を感じてるようだが、
そもそもお前の仲間や家族が危険に晒された全責任は尸魂界ソウルソサエテイに

あんだよ。連中がクソだから藍染は好き勝手暗躍し、浦原喜助は崩玉を生み出し、お前の母親は死に、妹達は危険に晒され、朽木ルキアは処刑されかけ、井上織姫は誘拐された」

「違う！ てめえは藍染のヤバさを知らねえからそんな事言えるんだ！」

「そのヤバえ藍染も虚も、普通ホロウに生きてりや絶対縁のないあの化け物共は、本来全部あいつら死神共が自分で対処しなきゃなんねえ敵だろうが。家族や仲間が居んならお前だけの命じゃあるまいに、連中の尻ぬぐいをさせられて何度死にかけたか忘れてんじゃねえよ」

そう言い返され一護は押し黙る。

だがそれでも必死に否定しようとする彼へ、銀城が平坦な声で問い掛けた。

「あいつ等は無力に苦しむお前をずっと捨て置いてきた。今だって俺達との戦いでお前らが死になっただけなのに、元罪人の朽木ルキアを送っただけ。力を取り戻せたのも浦原喜助の懇願があつたかららしいじゃねえか」

「…ッ」

「それが対等の仲間として見ている相手に対する誠意か？ 世界を救った恩人に対する礼儀か？ …わかってんのか、一護。お前はそういう連中を、共に戦った戦友だからと——盲目的に信じてるだけなんだよ」

一護は答えられない。銀城の言葉が悪意に満ちたものだど理解して尚、それを否定する理性的根拠を持たない。

そして、蒼白に俯く彼へ：銀城空吾は優しい声で、本心からの救いの手を差し出した。

「俺と組め、一護」

——は？

一瞬、一護は何を言われたのか理解できなかった。あまりに突拍子もない言葉に思考が空白化する。

「…何…だつて…?」

「お前は過去の俺だ。善意を死神共に付け込まれ、使い倒され、裏切られ、自分の弱さと間抜けさを呪って絶望する。まるで誰かに仕組まれたみてえに、俺達”死神代行”という人間は同じ運命を辿ろうとしてんだよ」

痛ましげに溜息を吐く銀城。その目に先程までの敵意は無く、月島に皆が狂わされた中で一人だけ自分と共に戦ってくれた時の彼のような、仲間への強い思いが垣間見えた。

「銀城…お前…」

困惑する一護。されど彼は男の真意を知って、同時に得心していた。

以前から不思議に思っていた。戦闘中も妙にこちらを試し、惜しみ、案じるような事を呟いていた銀城空吾。「悪役は苦手なんだ」と零した完現術修行後の彼の苦笑は未だ記憶に新しい。

「…一護、今ならまだ間に合う。お前が俺の復讐に協力してくれるなら、ギリコたちに攻撃を止めさせる。お前の妹達も、友達も、空座町も。俺達が無能な死神共に代わって守ってやる。勿論、お前の完現術も…」

——あの仮面の女も

元に戻してやるよ

それが甘い毒だと一護にはわかっていた。

同時に、抗い難い希望だとも。仲間を、恩人を、家族を。護りたい者全てを護れる、巨大な罠だとも。

「気付け、一護。死神は…ソウルソサエティ尸魂界は俺たち完現術師フルプリングの存在を許さない。奴等の中で俺たち霊力を持つ人間は潜在的な敵だ」

青年は目を伏せる。

銀城空吾は悪人だ。月島に命じ、俺の大切な人達との絆を穢し、今も皆の命を奪おうとしている悪人。許し難い敵なのだ。だけど。

「…一護、共に行こう。俺達は分かり合える。痛みを分かち合えるはずなんだ」

知ってしまった。

納得してしまった。

この孤独な男が何故、俺達と敵対しているのか。

そして。黒崎一護という者は、一度でも心を通わせてしまった相手に情を抱いてしまう。そんな難儀で…

優しい男だった。

「俺は——」

…だが。一護が銀城の誘いに答えを返そうとした、その瞬間。

——つたく、随分べらべら好き勝手

言ってくれやがったな

二人の死神代行の間を別つように、業炎の巨壁が立ち上った。

「——あーあ、せつかくイイ所だったのにさ」

強い熱風が肌をチリリと焦がす。

雪緒の不機嫌な声が耳へ届き、殺される寸前だった黒崎夏梨は恐怖に閉じていた瞼を開けた。

「…え？」

視界に飛び込んできた光景は、辺り一面に燃え盛る火の海。自分を磔にしていたピクセル状の十字架も消え、体が自由になっている。

一体何が起きたのか。

少女は焼け死ぬ敵のモンスター達の断末魔に怯みながら、背後から聞こえた二人の声の方へ恐る恐る振り向いた。

「おうおうパツキン坊主！　ウチのきやわいい末娘に何してくれんだ、あ”アん？」

「いやア、子供の晴れ舞台に首を突っ込むヤボな真似は遠慮してたんすけどねえ」

そこで彼女は、隣の花刈はなかりジン太と共に唾然とする。

「…ヒゲ親父…!?!」

「店長!?!」

「応ともカリリンちゃん！　我が黒崎家名物・モンスターペアレントいっしん一心様だぜー！」

「ダメっスよ、ジン太君。女の子のために大見得切って飛び出したなら、ちゃんと最後まで守ってあげないと」

豪快に「ワツハツハ！」と笑う父親と浦原商店店長のウザいおっさん二人。そんな日常の一コマを非日常の鉄火場で見た少女は目を白黒させるばかり。

一兄いちにいの態度など断片的な情報から、このヒゲ親父が例の死神達と何か繋がりがあると察してはいた。しかし実際にあの”雪緒”とかいう強敵からあっさり自分達を救ってみせた彼の實力は流石の夏梨も容易く呑み込めない。

「あんた…なんで…」

当然、夏梨にも眼前の父に問いたい事は山ほどあった。

その右手の燃える日本刀は何なのか。浦原商店とはどういう関係なのか。そんなに強いなら何で今まで戦ってくれなかったのか。

だが、彼女がそれらの問いを口にする事はなかった。

「…浦原、ここは頼む」

「いえいえ、今は息子さんが大事。”彼女”との接触はまたの機会を待ちますよ」

「……すまん」

見た事もない父の真剣な顔に、息が詰まる。

彼の意識の全てはこの場の上空。靈子の足場を駆使して敵の親玉と戦う、黒崎家のもう一人の問題児——

「俺の息子が随分世話になったな、銀城空吾……！」

——黒崎一護にあつたのだから。

「親父……」

炎の壁を通り抜けて現れたヒゲ面の男——黒崎一心くろざきいつしんを見て、一護は呆けた声を零す。藍染との一戦以来、いやあるいはそれ以前から長男の成長を陰ながら見守っていてくれた実の父が、動いた。

一護はそこに確かな家族の絆を感じ、同時に放任主義の親が直接手を貸しに来るほど自分が非力で孤独に見えていた事実を恥じる。

「……なんだ、今頃出てきて救世主面か？ ホントてめえら死神共はヒーローごっこが大好きだな」

そんな青年の横で、銀城空吾が一心を鼻で嗤う。強力な敵の援軍に動揺の一つも見せない余裕は、彼の秘める手札の多さ故か。

しかし、対する一心は男の失笑に頭をガシガシ掻き巻くのみ。

「うるせえ、こつちにも都合ってモンがあんだよ。敵を大勢抱えるヒーローってのは楽な仕事じゃねえんだ」

渋面で「全部無駄になっちゃったがな」と悪態吐くヒゲ男を、銀城が訝しむ。続きを顎で促す彼へ一心は絞り出すように語り始めた。

「……確かに一護が藍染の反乱に巻き込まれたのは俺達死神の責任だ。

力を失ったこいつへの接触を断つたのも、その事でこいつが苦しんだのも、それを見て見ぬふりする事を決めたのもな」

「ほう？」

「息子」ってのは意外と繊細なモンでな。特に一護は母親を目の前で失ってるからか人一倍『今度こそ俺がみんなを護る』つつーエゴが強え。自分のガキに平和で幸せな世で生きて欲しいって親の些細な願いすら伝わらん、バトルジャンキーの親不孝者なんだよ」

二人の会話に思わず唇を噛む一護。隠していた本心を見抜かれていた事。親父なりに俺を思っていてくれた事。それらが十七ヶ月の無力の苦痛、完現術を奪われた時の悲愴とせめぎ合い、ぐちゃぐちゃに混ざり合う。

…そんな最中、一心の雰囲気が一変した。

「だがな、銀城空吾。お前は幾つかデケえ勘違いをしている」

ピクリと眉を動かす大剣の完現術師。

「まず一つ。お前は尸魂界が銀城空吾と黒崎一護の潰し合いを目論んでると考えてる様だが……悪いが今の上層部はお前みてえな過去の汚点に構っていられる余裕はねえんだ」

「…何だど？」

しかめっ面の銀城へ、一心が一つずつ数えながら指を突き出す。

「二つ。護廷十三隊が動かねえのは、お前以上に重要な……つまり中央四十六室により多くの泥を塗ったその化物の尻尾を掴む為にならずと待機命令が下っていたからだ」

「……」

話が見えない一護は戸惑うも、相手の銀城は別。その意味に何か心当たりがあつたのか男が徐々に目を見開いていく。

「んで三つ。お前の言う通り、本来護廷十三隊は四十六室の指示に忠実だ。どんな理由があろうと逆らう事は許されない」

そう固い声で断言する一心。

しかし不意に、彼が銀城から視線を隣へ移す。

ニツと笑い掛けたのは、会話についていけない無垢な英雄。
「だが、その百万年の歴史を変えた奴がいる」

—— お前だ、一護 ——

父の微笑に、息子は思わずたじろいだ。

「俺の知る山本総隊長は、お前に死神の力を取り戻させる事を絶対に良しとしない。『人間への死神の力の譲渡』が尸魂界ソウルソサエティにおける絶対の禁忌、人間と魂魄が別の世界で生きるようになった太古の昔からの掟だからだ」

一護は以前戦ったルキアの義兄、朽木白哉の言葉を思い出す。妻の忘れ形見である義妹の死より優先せねばならない、絶対の法。

「お前はそれを変えたんだ。護廷十三隊の歴史そのものとまで称えられる最古の死神山本元柳斎重國やまもとけんりゆうさいしげくにの、何千年という護廷への忠義を、誇りを……黒崎一護という一人の人間がな」

その言葉の重さを青年は知らない。だが一心の誇らしげに輝く瞳には何よりも強い実感が籠っているように見えた。

「模範にすべき全護廷隊長のトップが変わっちまったんなら、当然その下も変わるさ。あの頑固ジジイさえ掟に背いたんなら、俺達も……つてな？」

そして、男の軽口が木霊した瞬間……

—— 大気が震えた。 ——

「なっ!？」

「この霊圧の感じ……まさか……」

一護も、石田ら仲間達も、XCUTIONの面々も。皆敵味方揃って暗い夜空の一点を見上げる。

そこに浮かんで現れたのは、巨大な二重の障子。

そしてその奥にズラリと揃った死覇装の一団を見て、一心が勝気に笑った。

「そうら、来たぜ？ 『待機命令なんか知った事か』 って…」

仲間との絆を疑われ

マジギレした馬鹿共が

全部…戦友さんが居たからじゃないか…!

「——てめえら、下がれ」

【縛道の八十六・千仞皎嶂】

それは誰もが呆けた僅かな隙。突如地上の四つの戦場から無数の輝く結晶が聳え立った。

「なっ!?!」

「くそ、鬼道か…ッ!」

捕らわれたのはギリコ、ジャツキー、雪緒、獅子河原の四人。だが慌てて抵抗するも幾重に犇めく霜柱のような拘束術はびくともしない。

「ほお…随分腕を上げやがったな、冬獅郎」

一心の感嘆を聞き、銀城の鎖に囚われていた黒崎一護はハッと気付く。

術者の声。辺りに満ちる懐かしい霊圧。そして見上げた夜空に浮かぶ幾つもの人影。

「——!!」

その顔ぶれを見た一護は、自然と彼らの名を歓呼していた。

「冬獅郎!」

「恋次!」

「一角!」

「劍八!」

「白哉びやくやまで……！」

忘れる筈がない。かつて共に破面アラシカルの軍勢と戦い、自分と仲間達の命を救ってくれた護廷十三隊の死神達。

更に驚きはもう一つ。

「スウウウウウ——ッ、なんやねん……！　ただ懐かしの現世の空気が吸うただけなのに……なんでこない涙が止まらへんねや……!?」

「……は？　おまつ

——平子ひらこ!？」

何がどうしてそうなったのか、あの虚化ホロウ修行で一護が世話になった仮面ヴァイザードの軍勢のおかつぱ男まで一緒に居る。「現世時代よかつたなア……」などと半べそをかいている理由もその死覇装と隊首羽織にあるのだろうか。

そんな驚きと混乱の最中。鋭い目つきで周囲を見渡していた冬獅郎が強烈な霊圧を放ち始めた。

「……よし——やるぞお前ら！」

「ッしやあ、目にももの見せたる！　誰もシクンやないで！」

「……兄けいに謂いわれる所以はない」

天才少年の掛声に応えたのはその平子と、長髪くちきびやくやの青年朽木白哉。神速の瞬歩で三人が間合いを改める。

だが彼らの見据える渦中に居たのは、敵ではなかった。

「！　な、何だお前ら——」

「騒さわぐな黒崎、少しジツとしてろ」

冬獅郎たちが囲んだのは他ならぬ一護自身。そして鎖に縛られた死神代行へ向け、三人が一斉に何かの詠唱を開始した。

「……四象ししやう連ねて双叉そうつち遍ひらし。七柱ななつちゆうの曲輪くるわ。二十八手の城門。我、銀河の

瀬戸かきせにて鵲びくを呼よぶ」

【織星しきせいの鍵けん】

凄まじい霊圧と共に現れたのは、光輝く不思議なカギ。水平の鍵歯が扇状に広がる歪で巨大なそれに、妙な既視感を覚える一護。

だが冬獅郎たちの術は尚も続く。

「亀身の卜甲。」

「まじな 呪いを記す白き典巻」

【~~星~~星の鍵】

「蛇身の骨牌。」

「鏡映しの獣の相」

【須星の鍵】

一護の左右で平子と白哉がそれぞれ新たなカギを作り上げる。併せて三つのそれらが放つ霊圧は最早戦慄を覚える規模。

「勘くて聞く剣の光錠。」

「羽衣・封霊・天梭の娘」

呪文を受け、稲妻を走らせる光のカギが一斉に一護へ近付く。

そして遂に…

『合わさる牙紋が王鼎を認む——』

【反鬼相殺・牙錠解印】

黒崎一護を中心に、三つのカギが一つに噛み合った。

——カチツ…

「!? …そういう事かよ…!」

最初に異変に気付いたのは封印の鎖を操る張本人、銀城空吾だつた。その彼の驚愕の直後、一護に巻き付く光の鎖がジャラリと力なく解け落ちる。

「解呪成功だ」

「！ 力が戻って…！」

自由になった一護は体の調子を確認、慌てて解けた鎖へ目を向ける。

「安心しろ、黒崎。あの雛森ひなもりの義魂は無事だ」

そんな彼の背に冬獅郎の声がかかった。

「はんきそうざい反鬼相殺」。対象の鬼道の霊圧、術式、言霊の指向性を反転させた同等の術をぶつけて掻き消す。つまりお前にかけていた封印術だけを相殺する鬼道だ。宿る雛森の義魂そのものを傷付ける効果は論理的に存在しねえ」

「…ッ、そうか…よかった…」

白髪の少年隊長の説明に一護は胸を撫で下ろす。銀城の霊圧にも変化がないため間違いはなかったのだろう。

「……」

「…冬獅郎？」

ふと視線を感じ振り向くと、隣の少年がジッと何かを含むような目をしていた。再会を喜ぶのとは違う何か。

不機嫌そうに唇を尖らせる彼がしばしの後に、ポツリと呟く。

「…随分、仲イイんだな」

「？」

主語が分からず聞き返すも、少年はそのままつーんとそっぽを向いて歩き去っていく。「何なんだ」と追及しても訊く耳持たずな彼に、一護は首を捻るしかない。

「——久しぶりだな、一護」

その微妙な空気の中に声が入り込む。見知った仲の赤髪男と、その数歩後ろからこちらを見つめる坊主の槍使いだ。

「恋次。一角も」

「一護……」

思い詰めた顔で何かを言い淀む阿散井恋次あばらいれんじと班目一角まだらめいっかく。

だが二人がその胸の内を明かす前に、新たな足音が沈黙を破った。

「白哉」

佇む人物は鋭利な美貌の大貴族、朽木白哉。彼の無言の咎めに副官が言葉を詰まらせる。

「朽木隊長、俺……」

「その話はしばし待て、恋次」

「っ……、……はい……」

数度の逡巡の後、恋次が渋々引き下がった。そんな重い空気の死神達を一護は気まずい思いで窺う。

さりとして白哉の第一声は、彼の予期せぬものだった。

「黒崎一護。兄けいと話がしたいと申す者が居る」

唐突な話に目が瞬く。この四大貴族家当主が斯様な改まった前置きを必要とする相手に一護は心当たりがない。

「え……？」

「もし、兄けいに否がないのであれば……彼女がここへ来るのに冒した数多の危険も、対価に足り得よう」

”立場、現世へ足を運ぶ事が容易く叶わぬ者だ”。そう述べた白哉が背後を一瞥し、道を空ける様に一護の左手側へ後退した。

そこに居たのは——幼い童女。

古風で楚々とした佇まい。隊長達のものに近い詰襟の白い羽織。頭頂に結われた冠型の牽星箝けんせいかん。そして彼女を守るように囲む恋次ら

一部隊長格たちの凜とした姿勢が、当人の高貴な身分を表している。とはいえ、その小さな口から発せられた声は外見相応にたどたどしかった。

「…お初に御目文字いたす、二代目死神代行・黒崎一護殿。私は中央四十六室四十賢議員、阿万門家二十五代当主阿万門ナユラと申す」

まじまじと相手の子供を見つめてしまう一護。離れた所で成り行きを見守っていた一心も彼女を凝視している。

”ナユラ”なる童女が名乗った地位は、死神にとつての絶対の掟を司る立場。瀨霊廷を支配するその最高権力者の一席であつた。

無理を言い朽木家の御所殿に同行させて貰つたと述べた彼女が、沈んだ表情で一護に語り掛ける。

「黒崎殿、我等の悪名については其方も少なからず聞き及んでいる事と存ずる」

”悪名”…」

「然様。其方が救つた朽木家の姫君の処刑を決定し、其方を藍染惣右介との戦いの先兵として利用し…：そしてこの十七ヶ月間、其方にただの人間として生きる事を強いた者達。これまで貴殿を苛んだあらゆる苦痛の責は、我等にある」

そう始まつたナユラの話は、瀨霊廷上層部の腐敗と墮落を赤裸々に告白するものだった。

長い尸魂界の歴史を記す大霊書回廊の元司書長で、知に富む阿万門ナユラ。しかし京楽春水、吉良イヅルなど貴族出身の護廷隊士達と共に隊舎や流魂街を視察し、彼女は四十六室の醜い本質を知つたと言ふ。

「藍染の投獄後、黒崎殿に死神の力を改めて譲渡すべしという意見は多く寄せられていた。…だが、当時の私はそれらの進言を退けた」

「……」

尸魂界の掟は全ての人間と魂魄を保護するためにある。私は遙か

古の世に作られたそのカビだらけな法を遵守し判を押しした。それが英雄である貴殿の望みか否かも確認せずに……」

ナユラは他の者達と同じく、藍染の四十六室虐殺の後に就任した新任賢者である。故に意思決定の大半を過去の例に頼らざるを得ず、また虐殺で揺らいだ権威を取り戻すため令より律に重きを置き、結果藍染誅伐の立役者に多くの不義理をしてしまった。

彼女はその事を深く恥じ、今回の護廷十三隊の独断専行を黙認した責を負うと同時に——公的には叶わずとも——中央四十六室を代表する者として、黒崎一護の前に立っていた。

「黒崎一護殿。この阿万門ナユラ、我ら死神の因縁に其方を深く巻き込んだ事……更に受けた恩を恩とも思わぬ穢多賤人が如き所業を——切に伏してお詫び申し上げます」

そして童女が、深々と頭を下げた。

「……私は従来の、天律に範を取った中央の悪習を改めようと考えている。当代の賢者には同じ考えを持つ者も少なくない。彼らと共に貴族層に蔓延る令治の忌風を掃う事が出来れば……戸魂界は大きく変えられる」

「……」

「覆水不返、我々の犯した罪が消える事は永劫ない。せめてもの償いとして、我が生涯を中央四十六室の改革に捧ぐ事をこの場で誓う」

首を垂れたまま言を重ねる彼女が、声に力を籠める。

「そして我等の改革が叶った暁に、他の何よりも先んじて……」

——改めて、黒崎殿の下へ

謝罪と報告に参上いたす

そう締め括り、阿万門ナユラは閉口した。

長い沈黙が場を支配する。死神達も、現世の仲間達も、XCUT I

ONの完現術師も。一護達の蟠りを余所にニヤニヤ強敵を吟味していた更木剣八も、驚きを顔に浮かべている。

ナユラ自身が形容した、”青臭い子供の理想”。未熟な身で多くの悪をみてしまったのであろう彼女の夢に、誰もが聞き入っていた。

一護は謝罪する童女を見る。

固く握り締められた小さな拳。緊張に竦む華奢な両肩。その宣言に込められた覚悟は如何程のものか、青年には分らない。

だが。黒崎一護という男は、妹より幼い姿の少女の健気な勇気を認められない程狭量な人間ではなかった。

「…頭、上げてくれよ」

ビクリと震えるナユラに苦笑し、一護は彼女の髻髪を優しく撫でる。

「ありがとな、あんた。小せえのに色々頑張ってくれて」

「…っ」

「助かるよ。あんたがそうしてくれた方が、多分——恋次たちも暗い顔しなくて済むと思う」

そう言い残し、青年はナユラの後ろで俯く死神達へ笑顔を送った。

「一護…」

目を潤ませる厳つい男共を可笑しく思いながら、大袈裟にドン引きの仕草をする一護。

「だーもう！ 誰だよお前ら、さつきからどんよりしやがって！ 辛気臭えんだよ、気持ち悪っつる！」

「き、”気持ち悪い”!? お、俺達はお前に山ほど負い目が…ッ」

「そーゆーのが辛気臭えって言ってんだって！」

尚も緊張が残る彼らに溜息一つ。一護は地面を見つめながら、肺に溜まった熱を吐き出した。

「……正直、俺もここ最近はかなり凹んだよ。代行証の事とか、前々から”変だな”って思ってたモンが一気に来たりしてさ…」

今でも不満がないと言えば？になる。

「でも、ルキアが来てくれた。浦原さんも頑張つて俺の力を取り戻す方法を用意してくれた。恋次たちも、俺の為に死神の力を渡してくれた」

それに何より。

「お前らは命令違反してまで、俺を助けに来てくれた」

一護にとつて、それだけで十分だった。

「お前らとはお互い大切なモンのために、敵としても、味方としても戦った。お前らがどういう奴らかつてのはそんな時に解りきってんだ」
「……！」

「ルキアを救つて、それをお前らが認めてくれた時、気付いたんだよ——
——護廷十三隊は…俺の仲間なんだつてな」

元より護廷十三隊の抱える組織的しがらみについては朽木兄妹の件で理解していた。今も恋次たちを見れば彼らなりの深い葛藤があつたのだと納得できる。彼らでもどうしようもなかった事をぐちぐち言うのはカツコ悪い。

ボソリと「お前つて奴は……」なんて苦笑する恋次を見て、これ以上の言葉は要らないはずだと一護は面映ゆい気持ちで笑う。

「いや、それでも謝らせてくれ……！ すまなかった、この通りだ!!」
「だから別にいいって言っただろ？ たたく、調子狂うぜ……」

それでも謝罪してくる死神達の律義さに胸の悶えが完全に消えきつた一護は……曇りなき眼で、一人の男へと向き直つた。

「——そう言うワケだ、銀城！」

見据える先には言動巧みに護廷十三隊との決別を唆してきた難敵、
銀城空吾。

「あんたやこいつ等から色々訊いたけど、やっぱり尸魂界そのものについては何とも言えねえ。勿論例の”中央なんちゃら”ってのも、この子が変えてくれるまで仲良くなりたとは思えねえ」

否、” 唆した” と両断するのは穿ち過ぎか。銀城の話に嘘はなく、その溢れる憎悪と悲憤は確と一護の心に響いていた。

「だけど、あんたにとって尸魂界ソウルンサエティの全てが憎くても……俺にとっては気に食わねえモンが全部じゃねえ」

そう。彼と自分、違う所があるのだとすれば……

「だから悪いな。俺はあんたと出会うずっと前に」

——戦友なかまを信じるって……

俺の“魂”に誓ったんだ

!!!

それは、彼らのような信を置ける友人達との、出会いの有無なのだろう。

「……そうか」

銀城が一言、そう呟く。一護と、彼を囲む死神達の絆を遠目に認めながら。

残念だ——

『ツ!!』

直後、男が全身から爆発的な霊圧を放った。

「……白状するとな、こうなる事は最初から解っちゃいたんだ」

巨大な力の奔流が大気を震わせる。その中心でゆらりと項垂れ、不気味に語る銀城空吾。

「ただ、確証が……いや、自分を納得させるだけの”本物”ってモンをこの目に焼き付けねえといけなかった。俺とお前の何が違うのかってのをよ」

彼の、本心からの言葉だった。遺憾の未練に別れを告げ、銀城が閉じていた目を開ける。

そして。

「月島ア!!」つきしま

轟く男の声が、無事な最後の仲間の名を呼んだ。

「いつまで遊んでやがる! 腹を括れ! 祈りを済ませろ! 俺はもう、要らねえモンは全部捨てたぞ!!」

「ッ、まさか……チャド!!」

一護は咄嗟に周囲の霊圧を探る。

だが、無い。最恐の敵との一騎打ちを申し出た親友の霊圧が、自然なまでに消えている。

「——それが君の答えなんだね?」

その時。狼狽する一護の前に突如、一人の男が現れた。

激しい戦闘を物語る、荒んだ姿の月島秀九郎。つきしましゅうくろう

「どうした、随分苦戦させられてんじやねえか。井上と戦ったギリコみてえに雑魚と油断したか?」

「馬鹿言え銀城。君が呑気に一護とおしゃべりしてたから僕が代わりに色々気を配る羽目になったんじやないか」オモチャ

片や交渉、片や暗躍。悪態吐きながらも二人は勝気に笑い合う。それは何人たりとも間に入らせない互いの強い絆を誇示するようで、されどどこか達観したような、虚しい笑顔だった。

「…お陰で決心がついたよ。元々君に拾ってもらった命さ、最期まで付き合っつてやる」

「ハッ、何ふざけた事言っつてんだ! ”最期”なんてモンは永遠に来ねえよ!」

そして、栄あるXCUTIONの創始者である二人の完現術師が、フルプリンガー互いの剣を、霊圧を交差させ…

憎き死神達へ突き付けた。

「何故なら俺とお前が組んで倒せねえ敵なんて」

—この世の何処にも居ねえんだからよ
!!!

全部……過去さんが居たからじゃないか……！

†

岸壁が崩れ、荒地に土煙が舞う。

雪緒ゆきおが用意した完現術フルブリンゲの異空間にて、茶渡泰虎さどやすとらは因縁の強敵
月島秀九郎つきしましゅうくろうと戦っていた。

「——もう諦めなよ、泰虎」

だが鬱陶しそうに衣類の埃を掃う敵と、疲弊し膝を突く自分の姿が、両者の力差の証。かつて十刃ソイトラと相對した時のような靈圧の暴力に圧倒されるのとは違う、形容し難い不気味な悪寒を駆り立てるこの男も正しく茶渡の手に余る化物だった。

否、彼の恐怖の理由は奴の研ぎ澄まされた戦闘技術のみではない。

「……ッ、気分のいいものじゃないな」

「何がだい？」

不快感を隠さず、茶渡は首を捻る月島を睨み付ける。

「……あなたの馴れ馴れしい振舞いがわからない。気味の悪い男だ、と言っている」

茶渡は色黒巨漢と異人の血を映す容姿故に他者から距離を置かれる事が多い。自分を下の名で呼ぶ人間は保護者の叔父夫妻と、亡くなった祖父アブウエロだけだった。

無論、初対面の敵とそれ程の仲になった覚えも所以も茶渡にはない。

そう言うと、月島が「酷いな」とわざとらしく眉をひそめた。
しかし…

「でも仕方ないか。君は全部、忘れてしまっているからね」

奴の底無し闇のような瞳に見つめられると、肌が粟立つ。まるでその虚言が虚言でないかのような錯覚を覚える。

月島の異様な気配に心蝕まれ、茶渡は堪らず不安を暴力で掻き消した。

「…俺が忘れている事など…何も無い！」

——
エル・デイレクト
巨人の一撃

青白い彗星が荒地を裂く。井上や石田に触発されて鍛えた大技の威力は、一年半前のそれとは雲泥の差。

無論傲りはない。立ち上る砂塵の奥を見据え、茶渡は油断なく相手の気配を探る。

「——傷付くよ、泰虎」

その時。残身に伸ばした黒盾の右腕を、他人の手が這った。

「なっ!?!」

「ブラソ・デレチャ・デ・ヒガンテ【巨人の右腕】か…懐かしいね。君が初めてそれを身に着けた時に僕に言ってくれた一言が嬉しかったよ」

フルプリンゲ 咄嗟に完現術の歩法で距離を取る。接近する残像すら見えず、相手の敵意次第で命を落としていた自分の状況に戦慄する茶渡。

「ブラソ・イスキエルダ・テル・デアアフロくっ…悪魔の——」

「ブラソ・イスキエルダ・テル・デアアフロ【悪魔の左腕】…それも知ってるよ。僕と共に戦いたいと願った君が発現させた”戦うための拳”だからね」

「!?!」

なりふり構わず振るった右手の拳が、月島の掌に優しく受け止められる。

馬鹿な、奴の行動に特別な技術や霊圧は感じなかった。威力を霧散させられた原理が分からず困惑する茶渡は、されど直後に自らの咄嗟

の行動を思い出す。

そう、自分の拳を寸前で止めたのは——他ならぬ自分自身だったのだ。

「な…何故…」

「ふうん、完全に影響が排除された訳じゃないんだ」

理解不能な己の行動に大混乱する茶渡。そんな彼を見つめる月島の薄い笑みが深まる。

「！…なん、の…話だ…！」

「ん？ ああ、『よかった』と言ってるんだよ。今の様子だとまだ僕との絆は残ってるみたいだからね」

”絆”。

その言葉を聞いた茶渡の脳裏を、突如見知らぬ光景が駆け巡る。

スラムの大人達に銃撃されるじいちゃん^{アッパウエ}。それを救うダレカ。彼に懐く自分。餞別のメダルのネックレス。そして一護と背中合わせに護廷十三隊と戦う彼…

…おかしい。この記憶は何だ。こんなもの、俺は知らない。

「何もおかしくなんてないよ。一度交わした心は、たとえ記憶が消えれど途切れる事はない。それは君達と一護が見せてくれた奇跡じゃないか、泰虎」

…止める。その名で俺を呼ぶな。

だが茶渡の必死の抵抗を嘲笑うかのように、月島が次々とそれらがあり得ない思い出を呼び戻す。

「可哀そうに。せっかく君の”孤独な過去”を捨てさせてあげたのに、中途半端に掘り起こされたから、一緒に紡いだ”僕たちの過去”との違いに混乱しているんだね」

そして「大丈夫」と頷いた月島が、懐から取り出した葉を一本の刀に変化させた。

「僕はお爺さん^{アンシアーノ}から泰虎を託された、大切な兄貴分だからね。何度でも”もう一人の君”を」

——挟み直してあげるよ

その刀に触れてはならない事を茶渡は本能で悟っていた。これまでの不可解な出来事の徹頭徹尾がアレに起因するのだと。

無我夢中で足掻く茶渡は、全身全霊の力を振り絞り、一護達との絆を懸けた最後の拳を解き放った。

「う……オオオオオオオオオッ!!」

——ラ・ムエルテ・デスブレオステ
鬼神の一撃

放たれる闇の拳。大地を抉る霊圧の稲妻。虚ウエコムン圈での戦いから別次元の威力に昇華した大技が敵の佇む射線上の全てを呑み込んだ。

だが…

「言ったらう、泰虎。君に僕は殴れない」

無傷な月島に微笑まれながら、茶渡泰虎は絶望の念を胸に、己へ近付く刃を虚しく見送った。

†††

フルブリング 完現術空間の荒地に木霊していた戦闘音がピタリと止まった。倒れ伏す色黒の巨漢を見下ろし、月島秀九郎は勝者らしからぬ無言で眉を顰める。

「…やっぱりおかしい」

フルブリング 完現術「ブツク・オブ・ジ・エンド」。その作用と本質に誰よりも詳しい月島は、今の自分が置かれている状況に強い違和感を覚えていた。

「どういう事だ。あの最後の一撃、僕が知る泰虎はあんな技を持つていない」

彼だけではない。井上織姫がギリコを下した【五天戦盾】ごてんせんしゆんも、彼女が洋館の屋上で暴れる黒崎一護を拘束した妙な黒い帯の装置も、あの仮面の女を象った完現術フルプリングも。月島の知る連中の”過去の世界”には見られなかったものだった。

月島の能力は、愛用の葉を基に具現化する完現術フルプリングである。好きなページに挟み込まれるその「葉と本」の関係性は月島の霊的な素質と合わさる事で、【対象の過去】を一冊の”本”として扱い、そこへ【月島秀九郎】という青年の存在を”葉”として意のままに挟み込む能力となった。

故に月島は行使した人物の、生まれから現在までに至る全ての体験及び心境——幼少期の出来事など本人の記憶に限らず——を”その人物の物語”として完全に把握できる。彼が泰虎や織姫の人生で知らぬ事など一つとしてありはしないのだ。

通常ならば。

「……まさか」

ふと、月島はある可能性に思い至る。自分の記憶がおかしいこの状況を説明できる、唯一の可能性を。

【ブック・オブ・ジ・エンド】の本質は偽りの記憶を植え付けるのではなく、実際に月島が友人や恋人として身近に存在する人生を送ったパラレルワールドの同一人物を用意し、現実世界の本人に上書きする事に近い。そのため「対象が本来の記憶を思い出す」などと言った現象は起こらない。思い出す記憶そのものが存在しない異なる世界を生きた人物だからだ。

そして。そんな自慢の、おぞましい能力を。

月島は——自分自身に付与できるか否かを、知らないのだ。

「!!？」

あり得ない。この僕が己の能力の、そんな大事な運用方法を把握していないなど。月島は慌てて記憶の壺をひっくり返す。

だがそこに散らばる無数の”本”を漁った彼は、息を呑んだ。

この異常事態を起こし得る…月島秀九郎の記憶に影響を与える程の超絶的な存在。

どれよりも目立つ、致命的なまでに重要な情報が書かれた”本”がもう一冊。不自然に消えていたのだ。

「…無い…！ あいつの本がどこにも…：織姫の過去世界で奴に挟んで手に入れたはずの、あの女の…」

——”読書家”の記憶が！——

ゾゾゾ…と体中を凄まじい悪寒が駆け巡る。

忘れる筈がない。これほどまでに恐怖を感じ、奴に関わらぬよう銀城へ何度も何度も忠告した覚えがあるのに。奴が自分達の手に負えない化物だという確固たる確信が今も己の胸中にあるというのに。

その確信を得た理由が、奴の正体を知った時の記憶が、脳内の何処にも存在しないのだ。

「馬鹿な…！ そんな、そんなはずは…っ！」

もしや今の自分は、あの女の持つ何らかの手段によつて記憶を奪われているのではないか。あるいは、自分は本当に、自分自身の能力によつて生み出された別世界の自分なのではないか。

あまりに恐ろしい想像に狂うほどの焦燥を覚える月島。そして彼は無我夢中で、己の海馬から一冊の”本”を探す。

これまで小説と同じただの物語として頭の本棚に収めてきた、大勢の者の過去人生。その中で一際目立つ、忌むべき気配を漂わせる、おぞましい物語。

哀れな抜け殻・雛森桃ひなもりももの生きた百五十と余年の時を記したソレへ縋

りつき、その表紙を開いた月島は…

ソウルソサエティ
尸魂界の瀨靈廷を背に広がる、木造家屋の街並の中に倒れ伏して
いた。

…ああ、何故。あの時の僕はあるな選択をしたのかな。

時は、黒崎一護の完現術フルブリンゲを奪う決行日より一週間ほど遡る。

井上織姫の過去に手を加えたその日の夜。月島はXCUTIONの指導者銀城空吾ぎんじょうくうごへ作戦の成果を、そして懸念を伝えていた。

理由はもちろん、織姫の過去で接触した例の女死神の置手紙だ。

『ほう、栞の中に俺の名前か…』 読書家 からの宣戦布告とは面白
え』

愉快そうに口角を吊り上げるリーダーの態度に月島は臍を噛む。

彼は織姫の過去世界での出来事を詳らかに報告した訳ではない。しかしあの女の危険性など多分なバイアスのかかった説明を聞いて尚、銀城に黒崎一護から手を引く意思は見えなかった。

…今思えば、あの時が最後の分水嶺だったのだろう。

『君に預けている僕の実力の断片を返して欲しい』

恐れを怒りで封じ込め、月島は一つの提案を口にした。

乞われた銀城が目を見開く。

能力の篡奪と譲渡を可能にする男の「クロス・オブ・スキヤツフオ
ルド」を頼り、扱いの難しい力を制限している現世の完現術師達^{フルプリンガー}。彼
らXCUTIONの信頼の証でもあるソレは、同時に彼等の切り札で
もあつた。

『……大きく出たな。いや、それ程の一手が必要な相手つて訳か』

『うん、向こうは既に僕達に目を付けている。呑気にしてたら何をさ
れるかわからない』

彼が”過去の世”にて相対する敵は神出鬼没にして正体不明の存
在。あの女が銀城に、己の人生の全てであるこの恩人に手を出そうと
している事がわかつた以上、こちらもなりふり構ってられない。

茶渡泰虎に挟んだ日の夜に届いたあのピンク色の封筒。井上織姫
の過去世界で渡された意味深な栞。奴の魔の手は少しずつ近付いて
いる。

自分達に勝機があるのだとすれば、相手がこちらを侮り遊んでいる
今しかない。

『いいだろう。だが順序を誤るなよ。その力は慎重に使わねえと…』

——自分の過去すら解らなく

なつちまうんだからな

本音を隠し、恩人の念押しに笑顔で頷く月島。そして満足そうな銀
城の顔が相談の終いの合図となった。

「……」

自宅への帰り道。求めた手札を得たはずの月島の顔は、未だ憂いに
陰つたままだ。

「…困つたな」

ポツリと弱音を零す青年。過去にこれ程不利な状況に立たされた
経験の無かつた彼は、自分が優柔不断になっている事実を認めざるを
得なかつた。

月島が求めるものは、遙か昔から変わらない。幼い頃に孤独から救ってくれた銀城空吾の安全だ。彼にとって、それ以外のものはどうでもよかった。

たとえそれが、自分自身であつても。

「だけど、銀城はそうじゃない」

復讐という茨の道を歩み続ける男。見ていて危なっかしい大切な恩人。それでも仲間を愛し、束ねてくれる天性のリーダー。

そんな彼を護れるのは、救えるのは、この世で自分だけなのだ。

「馬鹿な奴、お互いに」

観念の苦笑が唇に浮かぶ。

燃え盛る劫火に飛び込む勇気をかき集め、月島秀九郎は遂に…

”悪魔”に仇なす最後の一步を踏み出した。

「…他人の過去世界の中ではブック・オブ・ジ・エンドが使えないとも思ったか？」

僕を侮った事を後悔しろ、死神。

お前に直接触れるまでもない。その美しい身も、醜い心も、何もかも。

「これからお前の大切なものを、一つも余さず…」

——穢してやる

流魂街るこんがいの西部に広がる一番地区「潤林安」じゆりんあん。古風な家屋が立ち並ぶ街中を、小柄な人影が駆けていた。

「——だから勘弁してくれって、マジでえ……！」

そう吐き捨てる人影は十代前半の少女だった。零れる声は口調に反し可愛らしく、花が咲くような美貌はすれ違う異性の目を引き寄せて止まない。

そんな煩わしい人ごみを避け、少女は辿り着いた無人の裏路地で体を掻き抱き蹲る。

「……おかしい、ここはあのシロちゃんや雛森ちゃんが住んでた神地区「潤林安」のはず。野郎共にケツ穴狙われる世紀末アツー！だとか集〇社は青少年の情操を何だと思ってるんだ……」

現実逃避故か、ブツブツ小声で「久保帯〇〓KBT〇T説はマジなのでは？」などと自問する彼女の目は暗く虚ろ。起伏に乏しくも華奢で曲線的な己の体をあちこち弄る度に、その色は深くなる。

「これ、やっぱり女性の体だよな……ヤベえどうしよう。鯰界で男に絡まれるレベルの美女美少女って全員師匠のリヨナドル確定なのに……俺、死んだ……？」

慣れぬ生活、頼れる者もない。広大な世界にて一人震える彼女の憂いは如何程のものか。

あらゆる霊なるものが辿り着く死者の世界、戸魂界ソウルソサエテイ。この地を踏んだ少女も辿り着いた数多の死者の一人。つい先日この地へ召し上げられた、未だ無力な魂魄に過ぎなかった。

……されど孤独に苛まれる彼女には、救いの手を差し伸べる者がいた。

「君、大丈夫かい？」

見開かれた少女の双眸に映ったその青年の名は、つきしましゅうくろう月島秀九郎。
無二の恩人を救うべく真なる未来より舞い降りた――

悲劇の勇者であった。

全部……記憶さんが居たからじゃないか……！



「——退きなよ、あんた！」

鼓膜を劈く怒声が、青年の意識を呼び覚ます。

「……何？」

「何じゃないよ、なに道の真ん中でボーツと突っ立つてるのさ。荷車が通れないじゃないかい！」

振り返ると、目の前で大荷物を運ぶ和装の老女が不機嫌そうにこちらを睨んでいた。周囲には木造の平屋が立ち並び、まるで時代劇のような光景が広がっている。

呆けた頭で辺りを見渡す青年——月島秀九郎つきしましゅうくろうは、遅れて自分が居る場所を理解した。

ここは死した魂が行き着く霊界の辺境、流魂街。あの因縁の女死神——雛森桃ひなもりももの”過去の世界”だ。

「ッ、そうか……そういう事か」

茶渡泰虎との戦いで記憶の欠落を自覚した月島は、その原因を探ろうとしていた。最有力候補は勿論、この世界に潜む宿敵——”読書家”だ。

【ブック・オブ・ジ・エンド】を挟んだ相手の”元の過去”と”改変後の過去”は、それぞれ別の【本】として脳裏に記録される。

ところが雛森桃の”元の過去”を記した【本】は不自然に消失しており、やむを得ず月島は残されたもう片方の”改変後の過去”の世界へ意識を転移させた。

しかし、訪れたこの世界さえも…

「……老人、今の年代がいつかご存知かな」

「なんだいあんた、その南蛮服といい新人かい？ 現世の話なら昨日の客が『攘夷』がどうか言っとったけども、生憎ソウルソサエティこの戸魂界には時間なんてあつてないようなものさ」

「攘夷……なるほど、ありがとう。お邪魔しました」

住民の話では少なくとも時代にズレはない。商人の老女と別れた月島は足早に街を歩く。

その胸の内には、隠しきれない焦燥が煮えていた。

「転移直後の記憶が無い……まさか彼女との”出会い”の場面から過去がぶつ切りになっているとは…」

冒頭の自分の異常な放心状態は、間違いなく、乱暴な過去改変による世界の空白化だ。それも本のページを破り捨てるが如き、不用意で危機の迫った行動。この時点で余程の禁忌が明かされたのだろう。

犯人は”読書家”か、それとも…

何れにせよここまで【本】を虫食い状態にされては、この過去を読むだけで精神的危険が伴う。

不完全な過去世界に触れすぎた者の末路を、何人も壊してきた月島はよく知っていた。

「既に彼女への接触は終わってる…ならこのまま【本】の続きを新しく書き直すしかないか」

この世界には確実に僕の望む情報が隠れている。青年はそれを求め、改めてもう一度この世界の【月島秀九郎】として過ごす事を決めた。

本当に消えた過去を探って良いのか。消したのは本当に奴なのか。そしてどうして自分は、銀城の野望を脅かすあの女と戦う意思を、完全に失ったのか。

胸に根を張る不安から目を逸らし、月島は全てを知るこの世界の主を探すため霊圧感知を広げた。

…だが件の人物は、彼の想像よりもずっと近くに居た。

「――探しましたよ、月島さん」

突然の呼び掛けに思わず体が硬化する。しかし即座に平静を装い、青年はいつもの微笑で振り返った。

「……免、心配かけちゃったかな」

――桃もも」

かくして彼の想像通り、そこに佇んでいたのは小柄な子供。月島の記憶より幾ばくか幼い雛森桃ひなもりももが、拗ねるように頬を膨らませていた。「全く、一人でスタスタ遠くへ行かないでくださいよ。あたし迷子になって丹坊じだんぼうさんに保護されるの凄く恥ずかしいんですからね……！」「……それは悪かった。後で彼に礼を言っておくよ」

「もう！　そういうコトじゃないんですっ」
腰に手を当てぷりぷり怒る少女。どうやら消された過去の範囲は彼女がこちらに気を許す程には長期間のようだ。

「一先ず話を合わせ、月島は女性受けする”ステキなお兄さん”の演技で微笑む。」

「丹坊はこの時間なら白道門だね。一緒について来てくれるかな、桃？」

「こっつ、子ども扱いしないでください……！」
それなりに効果はあったのか、そっぽを向いて赤い顔を隠そうとする雛森桃。

その頭を撫でる優しい月島の手に秘められた負の感情は、彼のみぞ知る。俳優顔負けの演技力で憎悪と敵意を隠し、月島は例の巨漢の門番が暮らす宿舎へ足を向けた。

記憶が消えた今の月島は、本来の自分がこの女の過去にどんな【月

島秀九郎】を挟んだか把握できない。だが普段の自分なら、彼女の最愛の幼馴染【日番谷冬獅郎】に代わる立場を目指しただろう。

それが最も長く雛森桃と接触でき、その内に潜む”読書家”の気配に気づきやすい。

【本】の登場人物ゆえ当然だが、雛森がここの過去が破り捨てられた事実を自覚している様子はない。ならばこのまま今の僕の好きに改変させてもらおう。

現実の”読書家”にこの過去を挟んだ時、お前がどんな面を見せるのか：

——愉しみにしておくよ

…そんな彼の背中を見つめる少女の顔には、先程の恋煩いとは違う、夢の国を満喫する無邪気な笑みが輝いていた。



この世界の月島秀九郎は、流魂街を彷徨っていた孤独な雛森桃を拾い寝食を恵んだ恩人だった。

炊事洗濯に汗を流す少女の「居候の義務です」の言葉は本心にしか聞こえず、屈託のない笑顔で幸せそうに月島のために働く姿は、現世で懐かれた坊主少年獅子河原萌笑しがわらもえを想起させる。

どこまでも素直で気立ての良い子供にしか見えない雛森桃。青年はそんな彼女の内に宿る怪物が尻尾を見せるまで、忍耐力を試された。

「——それは靈力の修行かい？」

最初に少女が見せた不審な動きは靈圧の制御練習だった。だがこちらへの敵対準備かと思いきや、深夜の秘密鍛錬を見られた雛森が口にしたのは「誰にも言わないで」との懇願だった。

「靈力は虚^{ホロウ}から自分や大切な人を守る大事な力だよ。後ろめたいものじゃないと思うけどな」

「でも、今はまだ……」

狼狽する少女が深刻そうに口籠る。その姿を見て、月島はこの娘の一般的に知られている経歴を思い出した。

雛森桃。善良で知られる彼女がかの巨悪・藍染惣右介^{あいぜんそうすけ}に下った最たる理由は、孤独な強者のジレンマだったという。

真相を語る過去は失われたが、恩人の月島に献身的に尽くす少女の姿勢はその名残のように思えた。

「……大丈夫。ちゃんと秘密にしておくから安心していいよ。僕が君の嫌がる事をした例、あったかな？」

「ッ、月島さん……ッ」

とろんと夢見心地に頬を染める雛森へ、青年は内心嘲笑いながら鷹揚に頷く。

月島の目的は、“読書家”に「ブック・オブ・ジ・エンド」を挟む事だ。自分の狂った記憶も、失われた雛森桃の正史の【本】も、銀城を奴の魔の手から救う切り札も。全てが懸かった起死回生の一手。

”読書家”は藍染や浦原喜助、黒崎一護、日番谷冬獅郎など多くの靈性技術、靈圧、そして心が合わり覚醒した奇跡の怪物である。だが今の時点では雛森桃の中で無防備に眠っている脆弱な卵。最短でも奴の人格が目覚めるまでは雛森に自由に行動させるしかない。

だが母体の靈力に呼応し活性化するであろう”読書家”が、雛森の体に乗っ取ったその瞬間こそ。

決行の最高の好機となるのだ。

……それが大きな間違いだったと気付いた時、青年は雛森桃と五十年

の年月を共に過ごしていた。

＋＋＋

雛森は天賦の才に恵まれた魂魄だった。霊圧の成長速度は勿論、とりわけ隠蔽技術に優れており、身近で観察していた月島でさえ正確に見抜く事は困難だった。

現実において藍染惣右介が彼女を見出した霊術院一年時、その霊圧は既に護廷隊の隊長格に匹敵していたという。無論その程度であれば警戒にも値しないが、後に精強な破面軍アランカルを力で従えた雛森を知る月島は、気を緩めることなく監視を続けた。

そして月日は流れ、現実で日番谷冬獅郎が尸魂界ソウルソサエティへ魂葬される年代に差し掛かった頃。

それは起きた。

「――流魂街の失踪事件？」

その話が月島の耳に届いたのは、瀨霊廷せいれいていの隊長人事があうらはらきすけに変わってしばらくしての事だった。

隣人たちの身を案じ、密かに注意喚起をした門番の丹坊から広まった不安。「怖いですね」と素直に怯える雛森を見て、当初月島は無関係な出来事かと然程気に留めなかった。

だが彼はある日の深夜。異変に気付く。

「……桃？」

就寝前に自室へ戻ったはずの彼女が、密かに外出した。月島へ置手紙一つ残さずに。

これまでになかった大胆な動きに驚くも一瞬、月島は直ちに少女の足取りを追う。

先日死神達の命令で立ち入りが禁止された南西流魂街の分離地帯ふがい【郢外】。雛森が向かった先もその第六区の森林だった。

「何をやる気だ……？」

夜闇に紛れ、霊圧を完璧に隠した少女が木々の間を進む。その足取りに迷いは一切ない。

不審に思う月島だったが、慎重に尾行を続ける彼は直後——そこで目にした光景に思考を奪われた。

「拳西!？」

「なんだ、あの霊圧…」

まるで虚ホロウじゃないか…!」

「返事しろ拳西!!」

「ほ…報告だ、リサ!」

一番隊へ報告を!」

「アホかお前ら!」

早う刀抜かんかい!」

木々の開けた荒地。そこで大勢の死神達が、一人の屈強な男を中心に同士討ちをしていた。

「あいつ等は…」

金髪ロン毛、ツインテール、黒髪アフロ、そして六目の虚ホロウの仮面。月島は脳内の無数の【本】から彼らの正体を参照する。

百年後の未来にて仮面ヴァイザードの軍勢を名乗る虚化死神集団。かつて死人として尸魂界ソウルソサエティから除籍された悲運の隊長格達が、まさに悪霊へと落ちようとしている大事件の真つ直中にいた。

…直後、事態は更に動く。

「——正解」

清虫終式・閻魔蟋蟀

「!!?」

突然、戦場が黒いドームに包まれた。秒と経たずに晴れた闇の中に立っていた者は、皆無。

だが何が起きたのか分からず混乱する瀕死の死神達に対し、月島は今の現象に心当たりがあつた。

「まさか……」

そして裏切つた盲目の死神を問い詰める地べたの一同の前に、その男は現れた。

「僕が、彼に命じたんですよ」

——平子隊長

威厳に満ちた重厚なバリトン。端正な美貌にゾツとする冷笑を浮かべた眼鏡の若者。

後の世に靈界史上最悪の大罪人として恐れられる巨悪——藍染惣右介が、悠然と己の獲物たちを見下ろしていた。

†††

息をも吐かせぬ怒涛の展開。予期せぬ人物との遭遇に、月島は僅かに顔を顰める。

：困つた、よもやこんな所で一番の鬼門とぶつかるなんて。

月島秀九郎は極めて優れた完現術師である。フルプリンガー力を駆使する精神攻撃主体の後衛ながら、人間はもちろん強大な死神の隊長格すら凌駕する身体能力を有し、有象無象の過去で経た無限の実戦経験は千年を生きる護廷の達人達にも劣らない。

だが、目の前にいる男はそれら達人達を赤子の如く弄ぶ絶対的な霊圧と技術、そして天上天下唯我独尊の狂氣的理性を併せ持つ無敵の怪物だ。あらゆる搦め手を悪魔的英知と純粹な“強さ”で粉碎する、月島が最も苦手な類の敵である。

とは言え、ここは現実とは異なる過去の世界。月島自身に命の危険はなく、また彼の関心は藍染にはない。

「……」

ゆつくりと、青年は視線を手前へ向ける。

渦巻く陰謀。動く時代。因縁の始まり。

その渦中へ迷う事なく向かい、静かに歴史を傍観する者が、一人。普段の天真爛漫で恥ずかしがりやな姿からかけ離れた、強い感情に身をやつす…

雛森桃がそこに居た。

「漸くか——」読書家”…ッ」

月島は歓喜と憤怒に喉を鳴らす。

遂に、遂に奴が表に現れた。

宿敵の想い人を演じる嫌悪感に耐え忍ぶこと五十年。ノイズの雛森桃ではない、真正銘の”読書家”の魂が、少女の魄器からだを乗っ取り動き出したのだ。

戦場は混沌を極める。新たに登場した浦原喜助。虚化ホロウが進む隊長達。藍染が明かす禁断の実験の全貌。

それらを凝視する女の背中は隙だらけ。

千載一遇の好機を逃すものか。

月島は奴にフルフル朶リングを挟むべく刀を握り——

「……さて、僕が用意した特等席はお気に召したかい？」

——雛森桃

かつての日番谷冬獅郎がそうであったように。

運命の少女はまたしても、巨悪の魔王によって奪われようとしていた。

「チツ…」

月島は堪らず舌打ちをする。

目の前には素直に姿を晒した標的の女が、あの藍染惣右介と相対している最悪の状況。目的達成にあと一步まで迫りながら、ただの【本】の住人に過ぎない存在に全てを掻っ攫われるなど悪夢に等しい。

魔王の凄まじい存在感を前にして、されど雛森桃は倒れる事無く相手を見つめ返していた。昔の脆弱な小娘だった頃とは別人のように肥大化した霊圧で抗いながら。

そんな両者の姿を見た月島の脳に、閃光が走る。

これは現実では起きなかった、自分の介入が齎したバタフライエフェクトだ。月島秀九郎の存在が雛森へ何らかの影響を与え、”読書家”の目覚めが早まった結果の出来事。破滅の未来を察知した奴が”本来の過去”より藍染との接触を急いだのだ。

しかし、それは月島にとって不都合な展開であった。

どうする。逡巡する青年。

もし藍染がここで、雛森桃を操る「未来を見通す超越者」の存在を認識した場合、現実と同じように彼女を徹底的に困うだろう。さすがに「こちらが”読書家”に芽を挟む難易度は跳ね上がる。織姫と泰虎の過去で直接剣を交えた経験から、あの男との正面对決は極力避けたかった。

だが一方で、月島は勝算が無い訳ではなかった。

今の藍染は崩玉と融合していないただの死神、それも未だ若さの残る百年前の時代だ。決して敵わない相手でも、出し抜けない化物でもない。

…故に、これは月島にとって好機でもあった。

「――彼女を放せ、藍染惣右介」

覚悟を決め、青年は完現術フルフリンゲの歩法で戦場に舞い降りる。突然の乱入者に騒ぐ副官たちを下がらせた藍染が、興味深そうに目を細めた。

「随分と過保護な事だ、月島秀九郎。否、”無計画”と言うべきかな？

君の檻は彼女には少し狭すぎるようだからね」

「…仕方ないだろう？ 男手一つで夜遊び好きなお転婆娘を育てるのは、無能な死神共を欺く事よりずっと大変なのさ」

「フフ、違うない」

初対面とは思えない情報量が飛び交う両者の睨み合い。こちらが雛森を何かに利用すべく囲っている事も見抜いているのだろう。短い言葉の応酬から垣間見える藍染の情報精度と分析能力の高さに、月島は素直に感心する。

だが、自分は別にコイツとおしゃべりするために危険を冒したんじゃない。

「…はつきり言っておくよ。僕は君に興味がない。君が死神共を裏切ろうと世界を灰にしようと、それは僕の与り知らぬ事だ」

「成程」

無論そんな言葉一つで意思を曲げられてはこちらが困る。折角危ない橋を渡るんだ、精一杯喧嘩を吹っ掛けてやろう。

「だけど…」

――桃ももを傷付けたら話は別だ

そして月島は背中に庇う雛森の体を、己の胸の中へ抱き抱えた。「彼女に指一本触れてみる。次に手を出したら…僕は君を殺してやる」

片手の剣を敵へ突き付け、か弱い少女を守る青年。まるで童話の姫

と騎士のようなその光景は、されど騎士のどす黒い悪意を隠すまやか
しだった。

…この女を完全に僕に依存させる。藍染から最後まで守り続ける
事で。

現実で執着していた日番谷冬獅郎にも。そして最たる因果——黒
崎一護の誕生にも関わらせない。

そうして僕の事しか見えない、僕の意のままに動く奴隷にして、”
読書家”が銀城と敵対する理由そのものを消し去るのだ。

斯くて決意を新たにした月島は、抱える雛森と共に立ち去ろうと踵
を返し——

「逃がしませんよっ！」

その少女自身の囁い声に引き留められた。

全部…真実さんが居たからじゃないか…！

✦✦✦

風に揺れる木々。舞い落ちる木の葉。人の身動き。日常非日常間わずありふれた光景が自然の理に従い、既知を既知たらしめる。

ただ月島秀九郎の目には一瞬、それら全てが常識から乖離した異物つきしましゅうくろうのように映った。己の腕に抱く、一人の少女の言葉によって。

「——！！」

咄嗟に距離を取ったのは無意識の防衛本能か。そんな月島の意図を、少女——雛森桃ひなもりももは愉しげに問い掛ける。

「どうしたんですか、月島さん？ 突然放り捨てられたらびっくりするじゃないですか」

「お、まえ…」

「あなたはあたしの”大切な人”なんでしょう？ ならどうしてあたしをそんな怯えた目で見るんですか？」

ワザとらしく「おかしいなあ？」と少女が首を傾げる。毎日見ていたはずの幼げな美貌に、青年はこれ程恐怖を感じた事はなかった。

「ふふっ、ふふふふっ…：月島さんが…月島さんが悪いんですよ？」

そう責めるように前置き、不意に女が笑い出した。

「あたしだって必死に我慢したんですよ…？ こんなこと思っちゃダメだって。月島さんはちゃんと『月島さんのおかげ』してこそ月島さんなんだって…っ」

「何を…」

「でも、そんな…そんな色男演技であたしにアタックして…』しめしめ騙せてるな』なんて満足そうな顔を五十年も見せられて…：我慢なんて出来るワケ無いじゃないですか…！ あんなの完全にあたしのコト誘ってるじゃないですか！ あたしは悪くないっ！」

荒い息で捲し立てる少女の言葉を、月島はまるで理解できない。だが端々から感じる子供じみた邪気が彼に一つの確信を抱かせる。

「ッ、くそっ…！」

知られていた。気付かれていた。それも恐らく、自分の知らない最初の出会いの時点から。

いつぞやの空座町公園で見たあの女と同じ、不気味な笑顔。それは目の前で愚かな道化が足掻く様を嗤う、悪趣味な観客のそれだった。

辛うじて動揺を収め、瞬時に葉の刀を両手で構える月島秀九郎。だが無敵の完現術師フルブリンガーとただの魂魄、圧倒的に不利な状況にありながら、雛森は好奇の笑みを絶やささない。

「あら、騎士グっっこはおしまいですか？ 最後にあの藍染隊長と月島さんのドリームマツチが見たかったのに」

「…図に乗るなよ、魔女め。お前が雛森桃の中にいる事は最初から分かっていたんだ。この僕が今まで無策で過ごしてきた筈がないだらう…！」

これ以上この女を自由にさせてはならない。意を決し、月島は手札を切る。

「演目は終わりだ、”読書家”！」

――ザ・ロイン・マニユスクリプト
机上の草稿世界――

瞬間、月島が振るった刀の残像から闇が滲み出した。

斬り付けたのは人でも無機物でもない、空間そのもの。

藍染も、浦原喜助も、仮面ザアイザードの軍勢も。周囲の景色全てがまるで切り放された紙の如く月島と雛森から別たれる。

足元の僅かな地面を残し、全てが果てしない虚無に囲まれた二人だけの世界。敵を月島の無敵領域へ引き摺り込む、【ブック・オブ・ジ・

エンド」最強の戦闘能力だ。

「ハハ：ハハハッ！ 流石の未来視も僕の能力の底までは見抜けなかったようだね！」

「これは…」

「僕のためにのみ存在する真正正銘の神の楽園さ！ 誰だろうと僕を傷付ける事も、僕の許可なく息をする事さえも出来ない！ お前のような恐れ知らずに相応しい墓標だろう、ハハハッ！」

死神にすらなれていない未熟な身で正体を現したのが命取り。驚いたように辺りを見渡している雛森の表情が奴の無策の証だ。

「終わりだ、”読書家”。せめて最後の遺品にお前の【本】をありがとう頂戴するでしょう。雛森桃のではない、僕の記憶を奪ってまで隠したがった、お前自身の過去をね！」

間合いを無視する絶剣を少女の首筋へ添え、月島は全能感に勝ち誇る。

そして非力な雛の絶望を拝んでやろうと、青年は近付く一步を踏み出し——彼女の一言に足が竦んだ。

「…あなたには沢山の幸せを貰った恩があります。覚えてないでしょうけど…もう一度だけ忠告します」

——他人の秘密を暴くのは

止めた方がいいですよ

一瞬、月島は何を言われたのか理解できなかった。

言葉の意味ではない。それまでの愉悦に歪んだものから一変した少女の顔が、あまりに状況に似気無い、憂いの影を落としていたために。

何かがおかしい。何故コイツがそんな顔をする。まるで僕の身を案じているかのような…

「ッ、黙れ化物！ この僕を虚仮にした事を悔いて死ぬがいい!!」

けたたましく警鐘を鳴らす本能を押し退け、揺れる青年が最後に信

じたのは、自分を大切な恩人と引き合わせてくれた己の完現術フルプリングだった。

かくして月島秀九郎は、悲願の一手を宿敵へ見舞い――

”読書家”を名乗る少女に

近付きすぎないことだ

奴の過去を手に入れる直前、そんな誰かの声が頭を過った気がした。

†††

不思議な光景が神経を巡っていく。

洋服の群衆を吐き出す緑線の電車。照り付ける日差しを反射する瀝青。夜闇を照らす色鮮やかな電光掲示板。

目の前に広がっているのはいつもの現世の、現代の街並み。されど見慣れた景色であるはずなのに、月島には何かが決定的に違う、全くの見知らぬ異世界に見えた。

それは宛ら液晶画面の映像が車窓の風景になったかのような、自分一人を残して世界そのものが理の枠を超えたかのような、筆舌にし難い衝撃的な感覚だった。

「あ、が……」

死神の数百年分どころではない、文字通り次元の違う密度の情報量が濁流の如く脳内に流れ込む。月島は破裂しそうな激痛に耐えなが

ら、必死に世界の津波を掻き分け：

そして無垢な青年は遂に、望んだ”真実”を得た。

「なん、だ、これ」

…だが果たしてそれが月島の勝利を称える賞杯であったか否か。その答えは、放心したまま瞳孔を限界まで開く彼の様子が教えてくれるだろう。

——”読書家”の過去へ踏み込んだ青年は、とある薄暗い部屋の中に行き着いた。

内装に特筆すべきものは何もない、人間の自室。しかし逆に平凡であるが故に、それが日常の裏に蠢く深淵の魁に相応しくも思えた。

そこは他の世界とは桁外れの、重く、濃く、そして形而上的な気配を感じる異様な空間だった。

斜陽の残滓の

微かな明かり

それを頼りに

薄目を凝らす

流れに

本能に

逆らい

抗い

そうして辿り着いた

部屋の一隅

何気なく置かれた

簡素な家具

その三つ目の段に

それは あった

B

?

▽

人間と霊の営み

新書判

インクで描かれた

七十四冊の

本棚に並ぶ

知人の

?

顔が映る

☺

派手な表紙

H

魂に浸透するそれらが理性を穢す。青白い肌に麻疹が粟立つ。ナニカが体中を這いずり回るおぞましい感覚の後、気付けば月島は意味をなさない奇声をひたすら叫んでいた。

「なんだこれ」

「う」 「ひう」

「なんだ」

なんだよ

あ 「なん」

「う」 こんなもの

「なんだこれ」 ひあ

あ、ああ 「なんだ」

カチリと、青年の脳裏で何かが噛み合う音が木霊する。

それは本来合わさってはならない鍵。繋がってはならない異なる次元。しかし如何なる悪魔の悪戯か、合わさる余地を有した破滅の罨。

月島秀九郎は知覚してしまった。自分達の立つ地平の正体を。悲劇喜劇が演じられる薄っぺらい平面を。

観測してしまった。自分達の立つ地平の上空を。そこから見下ろす、貌の見えない楽しげな巨人たちを。

そして彼は、それを――

「ひっ…い…ひうつ…ひあああ…ッ！」

駄目だ駄目だ理解してはダメだ駄目だここに僕が僕たち矮小な人間が魂魄がダメだ知ッテイイ事など一つもないダメだ急イデ逃げないと消エナイト立ち去らないと銀城が死ぬ僕も死ぬ何もかもが終わってダメだ消える消エルキエルってなんだナンダそうだそうすれ

ぼくのかこが

キエレばいいんだ

瞬間、狂気に吞まれる月島の目に僅かな理性が戻った。

そうだ、昔まだ子供だった頃。今ほど達観していなかった自分の精神を守るために銀城が考案してくれた「ブック・オブ・ジ・エンド」の特殊な使い方があった。

禁じ手でもあるその手段は、月島自身の【本】を編纂し、完全に頭から処分する事ができる。

だが本来は慎重を期し万全の準備を終えて行うべき危険な改変も、精神が狂気に浸食される今の状況下においては是非も無し。青年は一秒でも早くこの悪夢を消し去ろうと、頭に浮かんだ”読書家”の過去の記憶へ刀を向け…

「ぼくのかこを、けし――」

そこで月島は、痛々しげにこちらを見下ろす、大きな琥珀色の瞳と目が合った。

「やっぱりこうなるのね…いえ、弱いあたしがあなたの影響から逃

れるにはこれしかなかったんだけど——流石に二度目は、うん……」
その少女の独り言が、何故か青年の鼓膜に強く残った。幾度と繰り返し反芻し、気が狂う寸前の鉄火場の中、彼の脳髓に一つの単語が染み亘る。

”二度目”、奴はそう言った。

それはつまり……

「……まさか、まさかまさかまさかまさか!!」

一体いつ、誰が、どうやって、僕の記憶を奪ったのか。疑問は常に潜みながら、月島は無意識にもう片方の可能性を頭から排除していた。

そして今、逃げ続けた彼は遂に、恐ろしい現実に追い付かれる。

失われた過去、雛森桃との初対面の場面。ページを破り捨てるかの如き乱雑な改変。消えた”読書家”の【本】。

青褪める月島の心奥で、全ての違和感が一つに繋がった。

「……あたし、この世界が大好きなんです。これ以上あなたに介入されたら色々と動きづらいので、まだ現実のあたしへの影響が最小限で済む内にお引取り頂こうかなと」

「あ、あ、あああああ……」

勝敗が決し、自らの思惑を語る少女。小さく呟いた「もう直ぐシロちゃんに逢えるし」の本音は、愕然とする月島の脳に届かない。

閉じ込められた袋小路。【月島秀九郎】の、自我の死を選ぶしかない理不尽な一本道。最後の縁がガラガラと崩れ落ち、全身を耐え難い虚脱感が襲う。

恐らくこの世界の雛森桃へ最初に葉を挟んだ時点で、僕は一度奴の……いや、この世の”真実”を知ってしまったのだろう。そして瞬時に”読書家”の【本】と、挟んだ雛森桃との初対面の瞬間を削ぎ落す事で必死に正気を保った。

神への畏れのような恐怖心のみを戒めに残す、何も知らない新たな【月島秀九郎】になり替わる事で。

ああ。僕は始めから、同じ道を繰り返す、愚かなピエロだったのだ。

「…お別れ前に一つお伝えします」

遠のく意識が女の声を捉えた。

「その…ごめんさい。あなたがワザワザあたしに栞を挟む程ですから、そっちのあたしは散々好き勝手してるんでしよう」

未来への懺悔にも期待にも聞こえる謝罪。しかし彼女は「ですが」と微笑み、再度開口した。

「あたしに銀城空吾を害する意思は一切ありません。…叶う事なら、この言葉をあなたが忘れずにいられますように」

それは情けか、魔女の罠か。だが自分達の生きる世界の真実を、”銀城の最期”を知ってしまった彼には、最早絶える救いなど欠片もありはしない。

「…あ、そうそう」

そして苦笑気味に「最後にもう一つ」と重ねる少女。

閉じる瞼が絶望の闇を映す直前。月島秀九郎の耳に届いたのは…

全ての後悔の始まりを示す、無意味な忠告だった。

——黒崎一護を虐めるのは

程々にしてくださいね？

全部…決意さんが居たからじゃないか…！

わからない

僕は誰だ

月島秀九郎つきしましゅうくろう

僕の名前だ

だけど、なら一体…

この不安は一体なんだ

わからない

月島秀九郎…？

……ちがう

いや、違わない

わからない

僕には何も

何も――

「――ゲホッ…ゴホッ…！」

鼻孔を逆流する強烈な刺激臭が脳みそを叩き起こす。自我も臆気な状態で、月島秀九郎は半ば錯乱しながら周囲を見渡した。

雪緒ゆきおの完現術フルプリングの世界。汚液がぶち撒けられた地面。掌から伝わる冷たい土の感触。近くに倒れ伏す瀕死さどやすとらの茶渡泰虎。

そして、他者の過去という無価値な世界を永遠に渡り歩く月島の、唯一の道標。遠くから感じる恩人の男の霊圧を認めた彼は、漸く自らの居場所を認識した。

「銀、城…？」

そうだ。確か僕は彼の自殺行為を止める事に失敗して、黒崎一護一派と戦闘になり、この空間内でその泰虎やすとらに過去を挟み直した。そしてその時に何かに気付いて、誰かの「本」を探し、そして、そして…

「――ッ、お…うげええ…ッ」

突然、強烈な不快感が胃を襲った。堪らず吐き出した水分ばかりの吐瀉物えそに何度も嘔えずく。

「ハア…ハア…くそッ」

鎮まらない。心臓の動悸が、体の震えが、荒い息が。まるで魂そのものが抉り取られたかのような、戦慄する程の喪失感が胸の奥に住み着いている。

何だ、僕の身に一体何が起きたんだ。だが思い出そうとすればするほど心が悲鳴を上げ、狂気が理性を蝕んでいく。

銀城？ XCUTION？ 月島秀九郎？

これは誰だ？ この記憶は何だ？ 本当に全部、この僕の本当の過去なのか？

わからない。わからナイ。ナニモ――

「うっ…」

不意に、彼の髄に激痛が走った。

この感覚には覚えがある。体中の神経細胞に直接焼き付き、故に蘇った魄の記憶。

それは銀城が黒崎一護と接触する直前、月島が井上織姫の過去の世界で動いていた時の事。決して触れてはならない、ある”悪夢”を垣間見てしまった代償そのものだった。

「……う、あ…」

混濁した記憶に苛まれようと、二度目の体験となれば錯覚を疑う由もない。本能的な恐怖が月島の理性を併呑する。

たとえ何も思い出せなくても、自分自身すら信じられなくても、あの”悪夢”が刻み込んだ心の傷だけは。

そのたった一つの事実だけは、揺るぎない本物だった。

「…お願いだ…銀城…！ もう…もうやめてくれ…ッ」

何度も、何度も、魘される赤子のように。月島は、己の心が「僕の全て」だと訴える一人の男へ懇願する。とうの昔に手遅れになった、彼が無視し続けた忠告を。

「銀城空吾」のためではない。まだ間に合うんだ、と。そう「銀城空

吾」に縋らないと自分が狂ってしまいそうだったからだ。

頼む。無意味だろうと、そんなありもしない蜘蛛の糸に手を伸ばし続けていないと、僕はもう…

「銀じよ——」

だがその時。謔言を繰り返す月島はハツと気付いた。

見下ろす地面に伸びる黒。それはしやがみ込む自分を包む、大きな人影。

「な…ッ」

咄嗟に振り向き見上げた頭上。光を遮るソレを目にした月島は思わず息を呑んだ。

「お、まえ…」

筋骨隆々と聳える巨体。夜闇に染まる浅黒い肌。強い意志を宿した瞳。

二度に亘り過去を書き換え、確実に戦意を奪ったはずの弟分——茶渡泰虎さじやすとらがそこに居た。

↑

…痛い。頭が割れるようだ。

誰につけられたかとも思い出せない傷が全身を軋ませる。満身創痍の体で立ち上がった茶渡は、地面に膝を突く月島秀九郎へ目を向けた。

「…ど、うしたんだい、泰虎。まだ安静にしてないと駄目じゃないか」
見下ろす先には優しい気に語り掛けてくる月島さん。だが隠せぬ顔色は蒼白で、いつもの穏やかな眼差しは憔悴に暗く淀んでいる。

彼らしくない事だ。確かに戦友の一護が突然暴れ出し、井上や石田、果てには浦原さん達までもがあいつに同調した。胸を痛めるのも無理はない。

…だけど、様子がおかしいのは俺も同じだ。

「……月島さん」

その名を呼ぶ自分の声は、茶渡自身も驚くほど平坦だった。

「…なんだい、泰虎。君も状況はわかっているだろう？ 僕は急いで銀城…と一護の戦いを止めないといけないんだ」

「……」

「大丈夫。全部僕に任せて、君はちゃんと休んでいなさい」

しかし普段であればどんな心の機微すら見抜く月島がそれに気付いた様子はない。一護達の事か、何か別の心配で手一杯なのか。そんな兄貴分の無関心な態度が、茶渡の抱く一つの想いを膨らませる。

「…嫌だ」

「何だって？」

剥がれ落ちる月島の微笑の仮面。中から現れたのは見た事もない無機質な表情。

だが傷だらけの茶渡は、大恩人の豹変様に怯える事無く真正面から彼を見つめ返した。

「あんたを、行かせない」

弱弱しい呟きに決意が宿る。すると目の前の“家族”は、反抗的な茶渡の態度に凶刃で返答した。

「…おかしいな、君には念入りに挟んだつもりだったんだけど」

「——ツツ!?!」

「全く、勘弁してくれよ。僕は銀城を止めないといけないんだ」

直後、肩から胸をカッと熱が走る。激痛に崩れ落ちた茶渡は、己の身に起きた事を理解するのに長い葛藤の間を必要とした。

「やつ…ぱり…そう、だった…のか…」

「馬鹿な奴。大人しく僕の言う事を聞いてりや見逃してやったのに」
聞いた事のない、背筋が凍るような冷たい声。身内への情など欠片もない明確な敵へ向けた言葉。

それを槍の様に心へ突き立てられ、胸元に咲く真つ赤な血花を眺める茶渡は、先刻に一護が口に行っていた”月島秀九郎”の本性を否が応にも認めざるを得なかった。

月島さんに斬られた。

ずっと大事にしてもらった兄貴分だった。だが祖父と俺の命を救ってくれた思い出も、絆の証に貰ったペンダントも、仲間達と共に戦ってくれたのも。

全部、偽りの記憶だったのだ。

「……そう、か…」

倒れ込んだ地面に血だまりが広がる。胸元の痛みは肉体のものか、精神か。茶渡の頬を伝う一筋の涙を、月島は鼻で嗤った。

「そう、偽物さ。君との仲間も、君と黒崎一護の仲間も、僕にとっては全て偽物」

「……ッ」

「わかったろう、泰虎。人は皆”愛”だの”情”だの『人との絆』を美化したがるけど、絆なんて偶々そこに違う人が居ただけで別物になる、この世で最も不安定でくだらない代物なんだよ」

興味なさそうに「その傷じやもう聞こえてないだろうけど」と吐き捨て、月島は斬り伏せた弟分に背を向けた。

無情に去って行く彼の後ろ姿をぼんやりと見送る、瀕死の茶渡。

裏切られた絶望。体の一部が抜け落ちたような虚しさ。悲愴に打ちひしがれる青年の頭に、大切だった恩人の台詞が木霊する。

それは二人を引き裂く無慈悲な言葉。悲憤を駆り立てる許せない真実。

だが何故だろう。茶渡にはその一言だけ、嘲りとは異なる別の本心

が隠れているように聞こえた。

「…人の絆は全て偽物」…か」

記憶に新しい、月島から距離を置くリルカらXCUTIONの仲間達の態度を思い出す。

それは俺の時のように、他人の過去を弄んできた彼が至った、空虚な結論なのだろうか。一つの人生のみを生きる茶渡に彼の言葉の重さはわからない。

…だけど。

——そうだ、チャド

こうしねえか？

それでも青年には、一つだけ希望があった。小さな、しかし強く輝くその光を握り締め、茶渡はボロボロの体で立ち上がる。

気付いた月島の目には、明らかな驚愕、そして苛烈な怒気が浮かんでいた。

「……ッ、いい加減にしろよ！ 鬱陶しい!!」

「がっ…!」

紫電すら残さぬ神速の斬撃が容赦なく茶渡を斬り刻む。

「どいつもこいつも…ッ！ 少し過去を弄られただけで何の疑問も持たず仲間に拳を向けた奴が、今更」 本当の絆、だなんだとほざきやがって!!」

「ぐあ…アッ!」

「そうやって意地を張れば奇跡が起きるとでも思ってるのか!? 僕に勝てると思ってるのか!? お前如きが、何もできない雑魚が…!」

馬鹿げた茶番にこの僕を付き合わせるな!!」

刀が振るわれる度に血潮を散らし転がる青年。胸を、四肢を、背を。穿たれ、腕がれ、斬り裂かれる。反撃もできず命を削る傷ばかりが増えていく。

最早体の感覚など微塵も残ってはいない。

…それでも奮い立とうとする茶渡へ、月島は憎々しげに問い掛け

た。

「何故そこまでする…！ 僕との絆が偽物だったんだぞ？ 君と黒崎一護のものがそうじゃないと、君はどうしてそれを…自分自身を信じられるんだ…ッ!!」

その問いは震えていた。苛立ちとは違う、何かに気圧されるような擦れ声。

「…なんで…だろうな…」

息も絶え絶えに、片膝ずつ、茶渡がその巨体を地べたから擡げる。

月島の疑問へ返せる言語化された答えを、自分は持たない。だが。

——自分の為に殴れねえなら

俺の為に敵を殴ってくれ

出会いの因果は一期に一会。そんな運命を表す諺が、奇しくもあの親友の名前と重なって聞こえた気がした。

「…すまない、一護」

「！ お、前…どこにそんな力を…！」

死力を絞り尽くし、茶渡は拳を握り締める。膨れ上がる霊圧が昇華するのは渾身の特技。

消えゆく視界の正面に、月島が慌てて刀を構える姿が映った。

…月島さん。あんたに救われた事も、貰った愛情も、俺にとっては全部本物だ。それを偽物と言われて簡単に飲み込めるほど、俺は器用な人間じゃない。

だけど。

——その代わり、お前の敵は

俺が全力で殴ってやるよ

そう、茶渡泰虎は信じている。

「……もし、この世に……あんたが知らない……」 本当の絆が……あるのならば……」

それは、きつと……

——約束だぜ、チャド

……俺と——一護の間にあるんだ

そして解き放った拳が確かな手応えを捉えたのを最後に、茶渡泰虎の世界は真つ白な光に包まれた。

——エル・ディレクト・アマープロ 巨王の一撃 ——

「——ぐつ……あ……ッ」

凄まじい衝撃が体を駆け巡る。

油断した。まさかあんな一撃を打つ力を残していたとは。久しく覚えのない苦痛に悶え、月島は己の不覚に臍を噛む。

「くそっ……！」

普段なら難くないなせた拳も、今の憔悴した精神状態ではご覧の有り様。追撃を恐れる青年は腕の痺れが取れると同時に周囲の土煙を振り払う。

「……………」

茶渡泰虎は、開けた視界の鼻先で倒れていた。まるでそれまでの奮闘が幻のように呆気なく。

あれが彼の最後の足掻きだったのだろう。しかしそう安堵した月島は、直後自分の足元を見て瞠目する。

「……………なんで……………」

死も間近。霊圧も、意識もない。蠟燭に残る微かな熱のみとなった命の灯。

それでも茶渡泰虎は、その動かぬ指先に辛うじて、月島の衣類の裾を捕らえていた。

「……………いつ、まだ……………」

この男は何だ。この男が見せた戦いは一体何なんだ。身に覚えのない不思議な感情が胸に湧き上がる。

月島に他人へ抱く情など微塵もない。十年、百年と、大勢の過去の中で彼らの大切な人間を演じ続けようと、その心は動くどころか冷えるばかり。

否、心など最初からあっても無くても同じ事。

今の僕を見る。記憶は朧気、自我も曖昧。自分が本当に自分の知る【月島秀九郎】なのかも分からず、その”自分の知る”自分の事すら信じられない。

そう、人の心なんてその程度のもの。過去の因果を弄れば跡形もなく消え去る不確かな幻だ。

……………だけだ。

「泰虎、君は……………」

気のせいだと振り払う事もできた。ただの錯覚だと、泰虎の快挙も所詮はあの魔女が僕の能力の影響を弱めたからだと一蹴する事もで

きた。

しかし月島はこの時——奇しくもこの一瞬だけ——目の前で転がる青年の無様な姿に、何故か、少しだけ…

心が震えた気がしたのだ。

「……」

それは希望。失いかけている月島秀九郎としての自己を信じるため。

それは勇気。唯一の縁である銀城に今の自分を「偽物」と否定される事を恐れ、竦む己の足を奮い立たせるための。

「…そうだ」

思い出した。昔、「ブック・オブ・ジ・エンド」の能力に振り回され、今のように自分の事が分からなくなつた時。

あいつが、銀城が助けてくれたんだ。

”自分が誰か”なんて、本当は誰も知ってはいない。みんな”自分が一番好きな自分”を自分だと信じて、鈍感に日々を生きている。だからよ、月島。もし聡いお前がその疑問に？み込まれてしまった時は…

——俺の仲間であるお前を

本当のお前だと信じ込め

「……いいのかな」

迷子のような情けない問い掛けが、ポツリと空気へ溶けていく。

銀城空吾は僕の全てだ。

仲間を亡くした孤独なリーダー。仲間がいなかった幼い狂人。あ

いつも僕も、互いに一人。

辛そうな笑顔で笑ってくれて、差し出してくれたあいつの手を握ったあの瞬間。僕達は二人になった。

僕の世界は、僕達二人のものになったんだ。

「…偽物なものか」

そうだ。月島の瞳に光が戻る。

記憶が曖昧？ 心が幻？ 自分が誰か？

そんな事はどうでもいい。

だって、あいつが僕の仲間で居てくれるなら——僕の世界は永遠に、何一つとして変わりやしないんだから。

「…大丈夫」

月島は滲む涙を拭う。ボロボロの体へ鞭を打ち、雪緒ゆきおの完現術空間フルプリングから死地へと足を踏み出す。

立ち上がり、見渡した鳴木市の夜景は、記憶のそれよりずっと美しく見えた。

「…ねえ、銀城」

もし君が良ければ。

僕の、このめちやくちやになった心と魂でよければ。

「全部、君の虚しい願いのために」

——使ってくれよ

全部……決戦さんが居たからじゃないか……！

初代死神代行銀城空吾は、尸魂界の滅亡を目論む復讐者である。しかし、彼は同時に自責の念に囚われた贖罪者であった。

——最初からこれが狙いだっただのか!?

——私達を集めて殺すつもりだったのね！

——嘘つき！ 裏切り者！

夢見がちな若造だった銀城の心に怨嗟の罵声を刻み付けて死んでいった同胞達。時が経つにつれ皆の顔も、声も、受けた恨みすらも思いつけなくなっていく事実が耐え難く、いつしか男の復讐は彼らの悲劇を忘却の運命から守る事へとその本質を変えていった。

だからだろうか。中央四十六室の小娘の謝罪と宣言を耳にしても、彼女の言葉に納得した後輩の選択を知っても、不思議と銀城の胸に波紋は起きなかった。死神共に受けた仕打ちを許す意思も、ふざけるなと荒ぶる厭悪の感情も。何一つ。

もしくはそれこそが、己の救いの無さの証だったのかもしれない。

「使え、月島。一護と決着を付けるまで、俺の背中を守るのはお前だ」
「……それが君の”願い”なんだね？」

【クロス・オブ・スキヤツフォルド】の能力で自身の力を分け与える
と、相棒の月島秀九郎が顔を暗くした。その「願い」の本当の含意は銀城の台詞に含まれていない。それでも聡明な彼は、こちらの意図に気付いていた。

だがたとえ月島に継られようと銀城が止まる事はなかっただろう。

そしてその事を知っている月島も、銀城を止めては来なかった。

——終わったら、昔のように……

また僕の頭を撫でてくれよ

最後に耳が捉えた「あれ好きだったんだ」の幼気な注文は、己の世界の終わりを予期した哀れな青年の、精一杯の我儘だった。

現世の夜景を見下ろす上空に大勢の人影が浮かんでいる。

死神の頂点たる隊長格と、最凶の完現術師^{フルブリンガー}。一瞬の油断も許されない緊迫した状況にありながら、それぞれが漲らせる己への絶対の自信が異様な平静を作り上げていた。

強いな。睨み合う片割れの単騎——月島秀九郎は眼前に佇む死神共をそう評価する。

先程の縛道^{ばくどう}、小手先に過ぎない技一つでギリコ達の戦意を完全に奪う技量。霊圧を削る類の術か、囚われた四人全員が憔悴し意識も危うい。

あの藍染師弟に手酷くやられた屈辱は余程のものだったろう。一年半の短い期間で驚く程の成長を遂げた隊長格達。集団で挑まれたら流石の「ブック・オブ・ジ・エンド」でも殺し切れるかどうか。

……尤も、さっきまでの僕であれば、だけど。

「——不思議だね。初めて使う力なのに、ちゃんと本質と方法が体でわかる」

動かない敵を無視し、月島は握る完現術フルブリンの刀身を優しく撫でる。

：そこに宿るのは、銀城空吾より授かった新たな能力。

彼がはしゃいでいたのも無理はない。黒崎一護から奪った悲願の霊能は、正に超越者と呼ぶに等しい”神の力”だった。

「ソイツが噂の”過去を操る能力”だな」

僅かに身構え嫌悪を示すのは、死神の少年。

彼が日番谷冬獅郎ひつがやとうしろう——雛森桃の想い人である現十番隊隊長か。あの”魔女”との関係は、口惜しくも今の月島の記憶に残されてなかった。

「…恋次、兄けいはルキアを守れ。この者は私一人で十分だ」

「なっ、待ってください隊長！俺も戦えますッ！」

「おいふざけんな朽木イ！久々に暴れられるんだ、俺に譲れ！」

「いや更木はあかんやろ。オマエがおかしなったら命令違反の始末書どころの話やのうなるわ」

「そうっすよ隊長。どうせ途中で愉しくなっって斬り合い始めちゃうんですから…」

「俺の【氷輪丸】なら接触せずに戦える。相性で言うならお前とそう大差ねえ。単騎は避ける、朽木」

今更作戦会議を始める愚かな死神達。色ボケ少年を筆頭に、”戦い

”に魅入られた獣更木剣八ぎらぎけんぱちとその部下班目一角まだらめいつかく。義理堅い阿散井恋次あばらいれんじ。冷静沈着な仮面の裏に激情家の素顔を秘める朽木白哉くちきびやくや。仲間であれば百年の冤罪も笑って許す平子真子ひらこしんじ。

こんな隙だらけな心しか持たない連中が本当に僕の能力に抗えると思っっているのか。笑わせる。

「…見せてやるよ、偽物共。僕と銀城の——”本物の絆”の力を…！」

さあ、一網打尽だ。

——ビヨンド・ザ・ピリオド・エンド
終わり無き終わりの本

そして世界は、月島秀九郎と…

死神達の
二人だけのものになった。

†††

何だ、これは。

冬獅郎は。劍八は。平子は。恋次は。一角は。白哉は。彼らはそれぞれ異なる、突然一変した周囲の光景を驚愕と共に見渡した。

景色そのものには変わりはない。されどそこに居るべき者達が、つい先程まで真横に居た仲間達が、全ての人や霊が自分を除いて一人残らず消えていたのだ。

…目の前で微笑む、月島秀九郎だけを残して。

「——理解、できているかい？」

混乱した頭に敵の声が響く。

ハツと我に返った直後。日番谷冬獅郎は、眉間に迫る刀の切っ先を間一髪で回避した。

「チツ…！ てめえ、あいつ等に何を…あいつ等を何処へやった！」

「他人の心配とは余裕だな」

「ぐあッ!？」

怒涛の連撃を何とか捌き、冬獅郎は消えた仲間達の姿を必死に探す。だが動揺の映る太刀筋は自身の守りで精一杯。

「銀城は一護から奪った完現術を”フルブリング力を封印する能力”と言っていた

けど、それは少し語弊がある」

「な、に……？」

「彼の黒いコート型の正解や、体に巻き付く封印の鎖を思い出せばいい。一護の完現術フルブリンクの本当の正体は『能力を身に纏う能力』……いや、正しくは『能力を自らの周囲に展開する能力』というべき代物だったんだ」

愉し気に、青年が語る。

「さて、質問だ。そんな能力が、『斬った対象の過去に自分の存在を挟み込む』僕の能力と融合した時、その力はどんなものになると思う？」
そして。

そう謎かけをする月島が、鷹揚に両腕を開いた。

「教えてあげるよ。僕の新たな完現術【終わり無き終わりの本】ビヨンド・ザ・ピリオド・エンドは……

僕の『周囲にあるもの全て』の過去に、僕の存在を自在に挟み込む能力だ」

その全貌を聞き、冬獅郎は絶句した。あつて堪るかと思ふ言葉の何度も何度もかみ砕く。

近付くだけ、視界に入るだけで勝敗が決する地獄。もしそんな事があり得るなら、それは最早戦いではない。忌むべき藍染の【鏡花水月】すら凌駕する、理ことわりを強いるが如き理不尽だ。

……だがそこで、少年は呆ける心を叩き起こす。

落ち着け、考えろ、現実から逃げるな。

たとえば奴の話が本当だったとしても、過去を弄られたのは“俺”じゃない。今の自分は最初から変わらず月島に敵意しか抱いていない。

なら“何”が奴の能力の餌食になった？

奴が能力を使う前と今で変わったものは、一体なん——

「ま、さか……」

その時、冬獅郎の脳に狂気的な想像が舞い降りる。

まさか、この状況の正体は……俺一人だけになった“周り”が、こ

の無人の鳴木市そのものが：

「分かったろう、冬獅郎？ 過去が変わったのは君じゃない。君の周囲の有機無機物全てが、異なる過去を進んだんだ」

「くっ……」

「朽木白哉も、更木剣八も、平子真子も、阿散井恋次も、班目一角も。君の仲間達は皆こことは別の過去を進んだ世界で、それぞれ同じように別の僕と戦っている。結果はすぐにわかるだろう」

気付けば冬獅郎は構える剣を下ろしていた。

「知りたいかい？ あちらが今どうなっているのかを」

「!!」

…:されど、幸運な少年は直後に耳にする。

現実から連れ去られた自分以外の仲間達が体験している、文字通りの最悪を――

†††

「――もう一度訊くぜ、月島さん…ッ」

あんた今、何だった？

そう眼前の恩人に問うのは十一番隊第三席・班目一角。流離時代に初めて自分を倒した男にして長年の剣の師匠、月島秀九郎が語った話は、微塵も笑えない最悪の冗談。

「――成程、”これ”がそうか」

百聞は一見に如かずとは良く謂ったもの。

同じく異なる世界にて悪態吐くのは六番隊隊長・朽木白哉。彼が戦う相手は幼い頃からの修行仲間、親友、そして亡き妻ひさな緋真と同じ流魂街出身の者として朽木家の説得に尽力してくれた大恩人。自身の記憶が幻だと伝えられた今、白哉は”過去を操作される”事の恐ろしさを身を以て知る。

「——何…やて…」

五番隊隊長・平子真子にとって月島は、藍染や尸魂界ソウルソサエテイの追手を名乗る死神や虚ホロウから何度も匿い、慣れない現世の生活を支援してくれた稀有な友だった。それらの縁が全て作られたものだとなり、仲間思いの男は裏切られた喪失感に啞然とする。

「——オマエが…偽物だと…？」

数えきれないほど共に戦ヤり合った、あの最高の時間が、全部？

その男の名は更木剣八。十一番隊の隊長となる昔、流魂街の果てで幾度も殺し合い、その傷を癒すべく幾度も同じ釜の飯を食った、無二の相棒。己の渴望を永久に受け止めてくれた好敵手の唐突な暴露に、剣八はただただ立ち尽くす。

「——そんな…月島さんが…」

六番隊副隊長・阿散井恋次は己の耳を疑った。流魂街で浮浪児同然の生活を送っていた彼とルキアら四人の幼馴染。飢餓に病に苦しむ自分達を拾い救ってくれたあの月島秀九郎が、未来から過去へ介入してきた尸魂界ソウルソサエテイの敵だと言うのだ。

嘘だ、嘘だ、嘘だ。そんな事が…

そう。冬獅郎を除いた彼等は皆、抗う事すら許されず、月島的能力に支配されていたのだ。

†††

「くそっ、やられた…！」

異界で戦う仲間達の状況を聞かされ冬獅郎は屈辱に臍を噛む。入念な調査の結実か、それぞれの過去を知り尽くした上で介入された月

島の卑劣な一手は、如何な剣聖とて太刀筋を鈍らせる。

そしてそんな隙だらけな死神達は当然、月島の敵ではなかった。

「——なんだ、呆気ないな」

「!? まさか……」

不意に青年が満足げに瞼を閉じる。同胞達の運命を物語るその仕草に、冬獅郎は堪らず敵へ突撃した。

「卑怯者が……ッ！ 今すぐあいつ等を解放しろ!!」

「全く、そうやってすぐに熱くなるクセは昔のままだね——冬獅郎」

ゾワツ……と、その呼び名の異様な自然さに憤怒が一瞬霧散する。

それが畏だったと冬獅郎が悟った時、彼は既に相手の術中に嵌っていた。

”人は皆、『自分が一番好きな自分』を自分だと信じて生きている”。幼い頃に銀城が教えてくれた言葉だけど、君を見てると本当にその通りだと思うよ」

「ッ、何だと……?」

「どうした、何もおかしいな事は言っていないだろ? 君は『今の自分』が一番好きだから、それが『本当の自分』なんだと信じている」

——今の君の過去が本物だと

何の根拠もないのに、ね

思わず硬化する冬獅郎。だが残る僅かな冷静さが辛うじて月島の魔の手に抗った。

「……デマカセだな。俺の過去にためえの世話になった記憶はどこにも無え。ためえは尸魂界ソウルソサエティに仇なす銀城空吾の仲間だ」

「ふうん、根拠はその記憶だけかい?」

「十分だ。ためえが俺の倒すべき敵である事実さえそのままなら、たとえ他の何が変わろうと……俺はためえを倒すッ!」

そう豪語する少年だが、月島が見せたのは小馬鹿にする呆れ顔。

「想像力が乏しいな。もしも君の過去に恩を押し付ける事だけが僕らの能力の全てなら、それは“過去への介入”とは言わないよ」

「…！」

「正しくは、『君の過去に僕という登場人物が一人増える』という意味だ。そうなる事で本当の過去にて君と関わった人を出会わなくさせたり、起きるはずの出来事を阻止したり…：そんな未来人の立場から君を取り巻く”運命”を人為的に変化させるのが僕の完現術フルアレンゲの真価だよ」

そして、そんな恐ろしい本質を明かすのみに飽き足らず。月島の唇が初めて、邪氣の弧を描く。

「そう、例えば——君の大切な”ガールフレンド”の運命とかをね」

次の瞬間、冬獅郎の視界が真っ赤に染まった。

「てめえ…雛森に何をしやがったツ!!」

「！いきなりか、学習しない子だね…！」

それは彼にとって絶対の禁忌にして鬼門。あの最愛の少女を藍染に奪われかけた悪夢が脳裏を過り、冬獅郎は恐怖と殺意に急かされ敵に襲い掛かる。

しかし。

「やれやれ、斬りかかるなんて酷いじゃないか。一体誰が、君と出会う前の桃ももを五十年間も育てたと思ってる？」

「!!？」

「フフ、人に尽くしてもらおう幸せっていうのかな？ 健気で献身的で可愛くて。君がああ娘に惹かれるのもわかるよ…：よく彼女に言い寄っていた大勢の男達もそうだったからね」

月島が嗤うように語ったのは、世にもおぞましい物語。

「だけど勘違いしちゃダメだよ、冬獅郎。君の記憶の中の彼女はどうか知らないけど、僕の桃は守られるだけの女の子じゃない。大切な人のためなら本気で剣を握れる勇敢な女性さ」

自分の知らない想い人の過去を、手の届かない景色が穢された事を知った少年。

「そんな彼女が、同じ屋根の下で一緒に暮らしていた”大切な男性”

に斬りかかる君を見たら……あの子はまた苦しむ事になるだろう」

——不甲斐ない君の所為で、

”大切な弟”と戦う悲劇にね

その一言が、冬獅郎の最後の理性の緒を引き千切った。臨界した激情が絶対零度の霊圧となって辺りを蹂躪する。

この世界が奴の能力で作られた偽物であるなら、枷はない。

「卍…解…」

——
大紅蓮氷輪丸
——

天隠す叢雲の氷空【天相從臨】。星々の光を失った極寒の宵闇の下、月島の眼前で突如巨大な氷竜が顎を開いた。

「竜吼」

「！なっ…」

放たれるのは空を穿つ氷の竜巻。その凄まじい規模と威力に月島は目を瞠る。

だが冬獅郎の卍解の一振りを以てしても彼の余裕を完全に崩すには至らない。

「ッ、成長したのは力だけか？　そうやって安い挑発に乗せられるから藍染に桃を奪われるんだよ……！」

しかし冬獅郎は相手の失笑に無反応。

否、憎悪遍く彼の頭には、最早月島の発言に動じる余裕がなかった。

「……違うぜ、月島」

「！」

背後に咲く三輪の氷花が、一つ散る。

「てめえの挑発に抗うより……てめえを殺す方が容易いだけだアッ！！」

「氷陵瀑 ☒」

繰り出すのは自慢の新技。素早い相手を立体的に制圧する無数の氷の槍袈裟が周囲を白銀の地獄に作り変え、憎き外道へ殺到する。

逃げ場はない。防ぐ手立てもない。怒りに染まった思考の端で敵の驚愕する顔を認め、冬獅郎は剣から溢れた怨嗟の全てを渾身の咆哮に乗せた。

「死ね、月島アアアアアツツ!!」

…だが彼の全力の霊圧が相手を呑み込んだ、まさにその時。

「違うよ、冬獅郎」

突然。

冬獅郎の肩越しに、目の前で氷漬けになっているはずの男の声が聞こえた。

「…え？」

続いて刻熱の異物感が胸を走り、体中の力が抜ける。

「君が不得意なのは、『僕の挑発に抗う事』と、『僕を殺す事』の、両方だよ」

「がふ…ツッあ…」

胸から引き抜かれる鈍色の光を茫然と見送る冬獅郎。全身が地面をしたたかに打つまで、少年は自分が月島の剣に刺され倒れたのだと認識する事すらできなかった。

——背後に咲く二輪の氷花が、一つ散る。

「ふう、危ない危ない。僕の苦手な範囲攻撃を勢い任せであそこまで

完璧に仕掛けられるなんて、流石は氷雪系最強だ」

「な、んで…」

何故だ。一体どうやって今の技を回避した。地べたに伏せながら混乱する彼の疑問に、微笑の敵が誇らしそうに答える。

「もう忘れたのか？ 僕の新たな完現術フルブリングの能力を」

「…ツ!？」

「僕がやった事は単純。君の氷が僕に触れる前に能力を挟んで、僕に襲い掛かるまでの過程を操作したのさ」

皮肉げに「銀城と、君らの仲間の一護のお陰だよ」と付け加える月島秀九郎。攻略の糸口すら見せない奴の能力の凶悪さを、冬獅郎は漸く正しく理解した。

「なんだよ…それ…」

どんな手を使おうと奴に近付いただけで過去を操られ、攻撃を無力化される。こんなもの戦術や相性の、況してや冷静さの問題ではない。

勝機の見えない戦いが少年の心に影を落とす。

あの双匣ネガシオンの丘で、想い人へ伸ばした手が”反膜”に跳ね退けられた時のように。

藍染の力に手も足も出ず、崩玉の影響で彼女が異形の化物へと変じてしまった時のように。

「言ったらろう、冬獅郎。たとえどれほど修行を積んでも…」

——君に、桃は護れない

そして、その月島の言葉を最後に。少年の意識は闇に呑み込まれた。

『——けんりつ 幟立する光の柱。列なる幟が星影を糾あざなう…ッ!』

【ぼくじょう 縛道の八十六・せんげんこうじょう 千幟咬幟】

広大な荒地の中央に幾つもの眩い結晶が聳え立つ。荒い息を整えるその小さな術者へ、嬉しそうな女の声が投げかけられた。

『やった…! やったわ! おめでどう、シロちゃんっ!』

肩で揃えられた柔らかい黒髪をふわふわと揺らし、小柄な少女が喜んでいゝ。そんな彼女から照れ臭そうに顔を逸らす自分に気付き、少年——日番谷冬獅郎はこの光景の正体に思い至った。

些細な日常、些細な出来事。しかし一年半前の一件以来、彼女と過ごす時間の大切さを誰よりも強く思い知った冬獅郎にとっては、かけがえない幸せの一ページ。

ここはソウルソサエテ 尸魂界の南流魂街二地区南端、かいしぎ 鹹酢平野に敷かれた五番隊練習場。黒崎一護への霊力譲渡任務の前日、同隊の副隊長を務める幼馴染と共に新たな鬼道の練習をしていた時の景色だ。

『すごいわ! ホントに凄い! やっぱシロちゃんは天才だよ!』

『ちよ、近…! おまつ、何して…ッ』

『いいなあいいなあ! あたしなんて完全詠唱でさえマスターするのに三年もかかったのにその半分だなんて——』

『だっ、だから近えって言ってるんだろ! 女がべたべた男に抱き着いてくんな!』

『——っへ? ……あっ』

一瞬の間、後に紅々。

リンゴのように首まで顔を真っ赤にした幼馴染が慌てて距離を取り、気まずい沈黙が両者の間に流れ込む。

『あ……わ、悪い』

『う、ううん……っ。あたしこそ……その……』

互いに護廷の任を預かる隊長格。こうした鍛錬や任務に支障をきたす痴態は極力晒さぬよう耐えていたが、せっかくのチャンスを棒に振ってしまった冬獅郎は臍を噛む。

……全く、男が照れくささから女を突き放すなど情けない。

四番隊隊舎にて微睡む幼馴染にこの慕情を悟られてから早十七ヶ月。念願叶って彼女にこちらを異性として意識させる事には成功したものの、問題は山積み。初心なこいつには些か大きすぎる想いだっただのか、顔を合わせるだけで羞恥に挙動不審になり、迫ればボンツと感情過多に意識を手放したり……以後二人きりではまともな会話が成り立たないほど微妙な関係へと転んでしまった。

全く進展しない焦れたい状況に不満を募らせる冬獅郎。

久々の大仕事、それもこの幼馴染の因縁【叫谷勢力】の影が見え隠れする重要任務。せめて直前の穿界門で言葉を交わせる程度には共に冷静になりたい。そう少年は焦っていた。

『……明日……』

しかしそんな冬獅郎の内心に気付いてか否か。先に口を開いたのは、意外にも彼の想い人だった。

『……平子隊長から訊いたの。明日の任務、その……危ないのよね……？』

『！』

か細い、心配そうな声で尋ねる少女へ冬獅郎は咄嗟に首を振る。

『いや、現世には浦原喜助や志波隊長も居る。楽な任務じゃねえが正面戦力も支援も潤沢だ。失敗はあり得ねえ』

『っ……』

しかし、その胸の内に潜む緊張は隠せない。

そう、此度の敵は『他者の過去の操作』という常軌を逸した霊能を持つ化物。藍染惣右介との絶望的な戦いを潜り抜けた冬獅郎であっても体が強張る危険な任務だ。

それが伝わってしまったのか。少女が可憐な琥珀色の双眸に涙を滲ませ……冬獅郎の小さな体に抱き着いた。

『なっ!? ひ、ひな——』

最愛の幼馴染の唐突な愛情表現に思わず顔が茹で上がる。だが混乱する少年は直後、彼女が口にした懇願に息を呑んだ。

『…お願い、シロちゃん。無事に…無事に帰って来て…っ』

少女の肩が震えている。抱き締める両腕に力が籠る。

『あたしの事を忘れてしまってもいい…ッ。別人になってもいい…!』

そして少年の目に、抱擁を解いた少女の切なげな微笑が映り…

『どんなシロちゃんでも、帰って来てくれさえしたら……あたしはもう一度、何度でも——』

…ああ、全く。なんて顔をしてやがる。

ここは記憶の世界。最も近くて、新しくて、あるいは最後となってしまったかもしれない、彼女と過ごした本当の思い出。

二度と奪わせないと誓ったあいつの過去を冒瀆され、怒りのままに敵へ戦いを挑み、返り討ちにされた無様な自分。そんな俺が、最後に見た彼女の姿をもう一度——穢れ無きままの想い人に逢いたいと、この死に際に浅ましく願ってしまったが故の白昼夢。

そして幼馴染の涙を心へ大切に仕舞い込んだ日番谷冬獅郎は、目覚める瞬間。

——また、あなたに笑顔で…

「初めまして」を言えるから

そんな彼女の悲痛な想いと共に、背後に咲く正解の……最後の氷花が散るのを、見た。

全部……銀城さんが居たからじゃないか……！

それは突然起きた。凄まじい冷気の暴風が肌を裂き、慌てて振り返った月島秀九郎は、そこで堪らず絶句した。

自宅の洋館裏の雑木林にぽっかりと空いた陥没地。まるで隕石跡のような破壊の光景は極地もかくやと凍てついており、見渡す限りの木々草々が余さず生気を奪われパラパラ、ポキポキと氷の灰へ化してゆく。

その銀世界の中央に、小さな人影が蹲っていた。

「な……」

胸を貫き完全に戦意を奪ったはずの死神が、起き上がっている。かつてない規模の霊圧の奔流に身を包んだ少年、ひつがやとうしろう日番谷冬獅郎が。

「——驕ったな、月島」

氷の地獄に木霊する幼げな声。直前の瀕死の奴とは真逆の、威厳すら感じるそれに月島は思わず息を呑んだ。

「……解せないね」

それでも冷静さを失わないのは意地か、はたまた元の達観した精神の賜物か。純粹な疑問を胸に月島は少年の様子を観察する。

特に、その背後に浮かんで然るべき三つの造形のありかを。

「もう君の卍解の解放限界は過ぎてている。なのにあの氷の花が散っても卍解が解けないどころか、霊圧が増している」

その力の源は一体なんだ。

本心の問い掛けだった。だが倒したはずの敵が蘇った事に驚きこそすれ、青年は心のどこかでその答えを知っていた。

かつて黒崎一護がそうであつたように。異なる過去を生きながら彼の絶望に涙を流した井上織姫のように。そして先程の茶渡泰虎のように。

あるいはこの子供も”そう”なのか、と。

「…らしくねえ疑問だな」

見えない何かに魅入る月島の心中を余所に、冬獅郎が静かに口を開く。

「背中の氷花が散るまでが卍解の解放限界、か…：…確かにそうだ。俺の卍解は完全に会得したとは言えねえ不完全な状態。てめえらにガキだの未熟だのと罵られて当然だ」

「…」

「だがな、俺が一体いつ…」

——この花卉が、卍解自体の

『時間限界』だと言った？

その一言に月島はピクリと瞼を顰め、瞬時に脳裏の「本」を捲る。だが冬獅郎の周囲の死神や敵が彼の卍解について推察を述べた”過去”はあつても、冬獅郎自身がそれを肯定した場面は一度もない。

「一年半前の弱え俺は、どれだけ無茶をしても雛森を止められなかった。あいつの斬魄刀に『口ほどにもない』って嘲笑われて…氷輪丸も随分とキレてやがったぜ。自分の本当の実力はこんなモンじゃねえつてよ」

「…まさか」

そして月島の得心を、少年自身が言葉にした。

「俺が今まで卍解を長時間使用しなかったのは、霊圧を持続させられなかったからじゃねえ。俺の未熟な体が——【完成した大紅蓮氷輪丸】の巨大な力に耐えられなかったからだ」

綴られた真実に呼応するが如く、冬獅郎の靈圧が爆発的に高まつていく。

「てめえは倒れた俺を捨て置くべきじゃなかった。銀城空吾ぎんじょうくうごから貰った力に驕り、たとえ俺が立ち上がろうといつでも仕留められると慢心した。奴を援護するにおける最たる悪手だ」

「…言うじゃないか、偽りの過去に翻弄される弱者のクセに」

真に己の力に驕っているのはどちらの方が問うまでもない。確かに今の冬獅郎の状態は、月島が集めた【本】にすら載っていない秘中の秘。余程自信があるようだが、何故そこまで傲慢になれるのか理解に苦しむ。

たとえどれ程強大な力であろうと、過去を操る僕の完現術フルプリングの前には全てが無力。人の心も、靈圧も、何もかも。

だが…

「——それが”驕り”だと、言った筈だぜ」

少年がそう断言した直後。

「なっ…!?!」

月島が異界で綴る”過去”の物語。同時に戦う五人の護廷十三隊の隊長格を題材とした五冊の【本】に、信じ難いページが現れた。

†††

「——ごちやごちや五月蠅えよ、秀九郎」

「——ハッ！ 更木隊を舐めてんじやねえのか、月島サンよお！」

月島の弁舌を両断し、更木劍八が、班目一角が凶悪な笑みを浮かべる。

本物だろうが偽物だろうが、俺と殺合しあった実力に変わりはない。なら空虚な思い出に浸るより、今日の前の快樂に集中しようじゃねえ

か。

強え奴と相見えた十一番隊は、何よりもその幸運に感謝する。過去も未来もそこにはなく、そいつを斬れる大義があるのなら惜しまず己の武を振るう。あの人の背中を見てきた俺達は皆その愉しみを知っちまってるんだよ。

そんな刹那的な欲望が剣の嵐となつて月島秀九郎に襲い掛かる。

「――戦いの狂気に浸る愉しみか」

更木隊長あの性獣を理解する屈辱に見合う代償だ。

瞬時の機転。朽木白哉が掌に隠し持った刃の花弁が、月島の胸を穿つ。十全な鍛錬に裏打ちされた強さとはかけ離れた彼らしからぬ暗器の一撃は、故に全てを既知とする青年の完全な隙となつた。

「――わからねえ。だけど、感じるんだ……！」

あいつの想いを。あいつの”魂”を。

「――一護あは寂しがり屋やからな」

皆から「頼り甲斐ある〜」て人気な平子隊長が面倒みなあかんねん。阿散井恋次が、平子真子が、恩人を斬る悲痛をねじ伏せ挑んでくる。口々が綴る名は、あのオレンジ頭の死神代行。

初代たる銀城空吾とは違う道を選び、そして立ち向かった――黒崎一護の名であつた。

「……なんの冗談だい、これは？」

剣撃をいなしながら、防ぎながら、喰らいながら、崩れ落ちながら。彼等との戦いで不覚を取った【月島秀九郎】たちは、其々に問う。

……こうなる予感があつた。それでも対策を講じなかつたのは、無自覚にもしかしたらと、期待と形容するにも満たない塵芥のような好奇心があつたのかもしれない。

「僕は君達の英雄だろうか？ 黒崎一護と何も変わらない……君達の心の闇を掃った恩人じゃないか」

なのに一体何故、こんなにも違うのだろう。僕と接した過去は黒崎

一護より長く、深いものだったのに。

僕とあいつの一体何が、君達の中で違うというのだろう。

日番谷冬獅郎の復活とほぼ同時。異なる過去世界で死神達の逆転劇を目の当たりにした青年は、湧き上がる激情に自らの理性が削がれる様を自覚していた。

そんな月島の動揺を、死神達の一人——朽木白哉くちきびやくやの台詞が煽情させる。

「認められぬか？ 偽りの過去が敗北した事実を」

「……」

然も在りなん。かつての我等であれば彼の力の前に膝を屈していただろう。月島秀九郎を無二の恩人として崇め、その正体に絶望しただろう。

しかし、我等は知っている。百万年の不変を覆し、尸魂界ソウルソサエテイを変えた者を。我等に新たな道を示し、誇りを護ってくれた真の英雄を。

月島が築いた偽物の絆が敗れたのは、たったそれだけの、大きな大きな差だった。

「……兄けいは確かに、私の恩人だ」

倒れ伏す月島へ、死神が感謝と共に答える。

亡き妻と本家の蟠りを解した一生の恩がある大貴族の当主。掟の為ならば義理の妹すら捨てると一族の墓前で誓った、厳格な男。

そんな死神が……

「だが、兄けいは」

——黒崎一護の敵だ

ならば相手が誰の恩人だろうと、殺すに瑣少の躊躇いも無い。そう言い残し、死神は二百年共に連れ添った親友に踵を返した。

そしてそれは——あまりに理不尽なその答えは——月島にとって酷く、酷く腹立たしい事だった。

「…………ふざけるなよ」

大気を軋ませる膨大な霊圧。

望まざる結末を迎えた脳内の【本】を投げ捨て、月島は右手の剣を力の限りで握り締める。

溢れる怨嗟の矛先は眼前に佇む無垢な子供。奇跡を信じて手元へ呼び寄せた、日番谷冬獅郎だ。

「死神風情が…アイツを裏切った連中が…！ 今更何を偉そうにほざいてんだよ…ッ！」

凍り付いた大地を蹴る。卓越した完現術フルブリンクの技が瞬く間に少年を月島の間合いに捉える。

「何故お前等までもが”それ”を持っている！ お前らと他の奴等の何が違う！」

「……」

「そんなに誰か一人のためにこの僕と戦えるなら…！ 本当の恩人を忘れない気高さを持つてるなら…！ なんて…」

そして無言で閉目する幼い死神へ、青年は有らん限りの霊圧を叩きつけた。

「なんでアイツを——」

銀城ぎんじょうを裏切ったんだ!!

…それは空虚な喚声だった。同時に彼の偽らざる本当の怒りだった。

だが、振り下ろした刀の衝撃で爆発する雪煙の中にて。

月島の渾身の袈裟斬りは、硬質で冷たい何かに阻まれた。

「——黒崎には感謝してる。俺が忘れかけてたモンを、あの場で思い出させてくれた」

声が聞こえる。子供特有の幼い甲高さが消えた、凜々しい声。そして風に流れる吹雪の渦の、その奥で。

月島は見た。

「なんだ、その力…その姿は…！」

思わず零れる唾然の声。そんな彼へ、吹雪に包まれる日番谷冬獅郎は、有り丈の想いで返答した。

…愛する少女を二度と泣かせない、誰よりも強く純粋な想いで。

「一瞬だけ見せてやるよ、月島秀九郎。コイツが俺の…」

——ひなもり雛森を護り抜く…

誓いの証だ

!!!

直後。

月島の支配する全ての【本】が、四界の隅々に至り——凍り付いた。

——すまねえ、月島…

激しい金属音が深夜の鳴木市に響き渡る。始まりの相棒に背中を向け、銀城空吾ぎんじょうくうごは長年の悲願の果てに、一人の人間の青年と対峙した。青年の名は黒崎一護。

奇しくもこの身と同じ死神代行。尸魂界ソウルソサエティの闇の断片を背負わされた、哀れな後輩だった。

「…俺が憎いか、一護」

剣撃の合間、銀城は相手を試すように問い掛ける。

「甘ちゃんのお前が”殺す”とまで恨んだ月島に、お前の妹や仲間達との絆を奪わせたのは俺だ」

「……」

「お前の弱みに付け込み味方のフリをし続けたのも俺だ。穿った解釈で仲間の死神共を貶し、お前と尸魂界ソウルソサエティの仲を引き裂こうとしたのも俺だ」

一つ一つ、黒崎一護の心を乱すように。

「忘れたのか？ お前の虚ホロウを抑え込み、空座町を滅ぼそうとする藍染を止め、無力を嘆くお前の新たな力になってくれたあの大切な仮面女も…俺が辱めた。無理やりお前の魂から引き剥がし、健気に『嫌』、『戻して』と必死に抵抗するのを組み伏せ、その意思と人格を奪ってやった」

重ねる挑発。

しかしそれに返された一護の反応は無言。代わりに交わる剣が、相手の静かに澄みわたる胸の内を伝えてくる。

「どうした、クソガキ。ぶつけて来いよ…！」

「……うるせえよ」

「家族や仲間達の過去が戻っただけであの恨みは晴れんのか？ 死神共との蟠りが解けただけであの屈辱は全部消えんのか？ てめえの怒りはそんなモンかよ、一護オ!!」

黙する一護から答えを叩き出さんと、銀城は大剣を振り下ろす。凄まじい霊圧が衝突と同時に爆ぜ、視界が一瞬で白色に包まれる。

だが。

「…何度も言わせんな、銀城」

立ち込める煙のベールを通して聞こえたのは抑揚の変わらぬ平坦

な声。そして驚く銀城へ向け、微かに映る人影が右手の大刀を突き付けた。

噂に聞くその”構え”が繰り出す奥義は、奴の代名詞。

天鎖斬月 | 卍解 |

瞬間、霊圧の竜巻が鳴木市の夜空に立ち上る。咄嗟に距離を取り目にした相手の存在感は、別次元なほどに強大。

「——もう、終わりにしようぜ」

そこでは破けた燕尾のような闇色のコートに完現術の残滓を纏った黒崎一護が、同じ色の太刀を手に佇んでいた。

「……」

その眼を見た銀城は思わず閉口する。

幾度と絶望に突き落とされ、そして潜り抜けてきた者の眼。目の前の相手を理解し、認めようとしている、強い心を映す眼だった。

「……チツ」

全く、馬鹿なのか聡いのか分からない奴だ。青年の決意に僅かな未練さえも掻き消され、銀城は遂に覚悟を決める。

内なる虚の封印が解かれた影響か、完現術の覚醒に伴う魂魄強化か。あるいはその両方を備えた一護の霊圧は最早戦慄を覚える程。流星は女神ご自慢の勇者、あの藍染を追い詰めた霊界の英雄だ。

先程の月島を含むXCUTIONの仲間達へ力を分け与えた銀城に、一護と戦えるだけの霊圧は最早無い。倒されたギリコ達から無理やり奪い取るのは、日番谷の縛道に押し潰される寸前の彼らを見捨てるのと同義。

そして、最後に共に戦ってくれた月島も、敗北した。

男に残された道は、たった一つだった。

「…死神の力に頼りたくは無かったんだがな」

—— 卍^{ばん} 解^{かい} ——

荒れ狂う光の暴風。全身に漲る忌々しい深紅の靈圧。心を蝕む^{ホロウ}虚^{ホロウ}の力。

全てを捨て、最後に残った死神への憎しみすら呑み込んだ銀城空吾の最終奥義は…

己の心に背いた矛盾だらけの男に相応しい、獣と骸が混濁する、邪悪で醜い異形の姿をしていた。

「…ああ、そうだな。こいつで全部…」

—— 終いだ、一護

伝わる。

裏切られる辛さ
復讐の虚しさ

感じるんだ

剣を通して
こいつの心が

悲しみしかねえんだ

あんたが月島の能力で

俺の仲間を嵌めたのも

俺から距離を取った

浦原さん達を貶したのも

俺にその痛みを知って

欲しかったからなんだろう？

十分だ

…なあ、銀城

もし俺がルキアと

あいつ等と

出会ってなかったら…

俺は、お前と——

全部……雛森さんが居たからじゃないか……！

——それから先の事を語るのは無粋であろう。

ソウルソサエティ
尸魂界の闇の深淵。中央四十六室の議事録にすら描かれなかった忌むべき真相の犠牲者、銀城空吾は、同じ闇を垣間見た次代の死神代行、黒崎一護によって討ち取られた。

運命を捻じ曲げられた哀れな善人。戻れぬ復讐の道を只管に進んだ彼が最期に見せた無垢な微笑みは、あるいは待ち望んだ理解者の手で道を鎖される事に救いを見出していたからなのかもしれない。

フルブリック
完現術がこの世に齎すあらゆる影響は所有者の死と共に消滅する。銀城に貰った能力が体から抜け落ちる喪失感に気付いた瀕死のXCUTIONの同胞達は、辛うじて開けていた瞼から、最後の力を抜いた。一様に意識を手放し目を閉じる彼等の様は、弱者の自分達を引き上げてくれた偉大な指導者へ黙祷を捧げる、”真の仲間”の姿そのものであった。

そしてただ一人残された相棒の青年——つきしましゅうくろう月島秀九郎も、救い無きこの世界に別れを告げようとしていた。

「……銀……城……」

未練に満ちた虚しい声。覚悟などいざとなつては容易に崩れる。日番谷冬獅郎の氷に礫にされた月島は、分かりきっていた結末を見届け、友の死に涙を流した。

彼に力の使い方を教わった。敵との戦い方を教わった。

出会う前は互いに一人。だけどこれから俺達は”二人”だと、幼い

僕の頭を撫でてくれた。

「ただ彼は良いリーダーじゃなかった。大勢の同胞達を誑かしておきながら、目指したのは半ば約束された破滅の未来。その途中で自分が死んだ後、僕がどうすればいいのかを教えてくれなかった。」

「…また、昔のように頭を撫でてくれるって約束も、叶えてくれなかった。」

「——お、戻って来れたみてえだな」

ふと、月島は周囲に幾つもの大きな気配を感じる。

「ゲホッ、ちく…：しよう…：ッ！ こっからだつてのにもう終わりか…：」「くたばり損ない共は早う織姫ちゃんトコ行つとき。死んでへんかったら生き返らせて貰えるで」

「恋次、ルキアを連れて下がれ」

「ハア…：ハア…：ッ、は…：い…：」

霊圧を漲らせる者。掻き消えそうな風前の灯の者。程度に差はあれその数は七つ。

銀城の死と共に月島の進化した能力が消失し、「本」に閉じ込めた死神達がこの現実世界に解き放たれたのだ。

「…：てめえ等の負けだ、月島」

目の前で鋭利な鈍色が輝く。それを突き付けるのは、想い人の過去を冒読され憤怒と決意の力で立ち上がった日番谷冬獅郎。

「てめえの能力は危険すぎる。尸魂界ソウルソサエティに恨みを持つ者なら猶更な」

「…だから僕を殺すのかい？」

「そうだ」

斬魄刀の刃が月島の首筋に触れる。

結構。最早僕に残された望みは自らの死、価値無きこの世から去る事だけだ。

「いいや…：君は尸魂界ソウルソサエティではなく…：黒崎一護の為に僕を殺すんだ。そ

してその大義も…君の憎悪を隠す…上面の言葉に過ぎない…」

「……」

「それに忘れて貰っちゃ…困るな。この僕が、君の可愛い幼馴染にとつて…どれほど大切な存在なのかをね…」

「！ てめえ…ッ」

自然と口が回るのは敗者なりの意趣返しか。心身共に死の淵にありながら、月島は冷気に罅割れる唇を薄く曲げる。

…実の所、彼が冬獅郎へ語った「雛森桃と過ごした過去」は只の推察。真相はぐちゃぐちゃに混濁した記憶の彼方へ消えている。

そう。他の死神共とは異なり、月島は日番谷冬獅郎の過去に何一つとして手を加えていない。尤もその理由を教えてやるつもりはないが。

「答えろ月島…！ どうすれば雛森は元に戻る!？」

少し揶揄うと途端に牙を剥く少年。未恐ろしい天才児ながら直ぐカツとなる性は相も変わらない。

…ならば、介錯は彼に頼むとしよう。

「元に戻る」だって？ 何を言うんだ、あの娘は最初から僕が拾って育てた——僕のものじゃないか」

「ッ、ふざけるなアッ!!」

激昂する冬獅郎。囲む隊長格達の中に彼を止める者はいない。

さあ死神共、その大層な名の通りとつと僕を殺してくれ。この世界にはもう、僕が生きる意味がないんだ。

斯くて月島秀九郎は、少年の絶対零度の刃が齎す運命を空虚な微笑で受け入れた。

…だが。敵の一人が抱える意識なき同胞、朽木ルキアの胸元から、

不意に光が零れる。
そしてその直後。

「——がふっ……あ……」

はらりと舞い散るマゼンタの髪。女死神の魄内から突然飛び出し、冬獅郎の剣から月島を守ったその人影は、彼の見知った少女だった。

「リル、カ……？」

ポツリと呟いた月島は、目の前で起きた出来事が全く理解できなかった。

ブラウスの肩を真っ赤に染めるその少女の名は毒ヶ峰^{どくがみね}リルカ。未知の現象に騒めく死神達と異なり、月島はそれが彼女の収納系^{フルプリング}完現術の切り札だと察する。

だが彼の疑問はそんな事ではない。

「なんで……」

何故、朽木ルキアを倒して雲隠れした君がここで出てくる。何故、他の連中のように僕の能力を恐れていた君が、その僕を守る。一護を騙して力を強奪する銀城の計画に反対していた君が今更何を。

「……」なんて”じゃないわよ……ッ”

月島の問いに、血で湿った声が返される。

「いっつも……”銀城”、”銀城”ばっかりで……周りを見ようとさえしない……どうしようもないバカなんだから……っ”

「お前、何を……」

困惑する青年をリルカが睨む。

「ええ、そうよ…今でも怖いし嫌いよ、あんたのコト…!」

デカいし辛気臭いし服ダサいし何考えてるかわかんないし。嘔くように捲し立てる深手の少女。

「でもそんな事…顔とか性格とか、好きとか嫌いとか…そんなのどうだっつていいのよ…!」

そして震える両手で、乱暴に、リルカが月島の胸倉を掴み上げた。

「…なんで”じゃないのよ…ッ!」

——”仲間”が”仲間”を守るのに

何の理由が要るつてのよ!?

それは咆哮と変わらない悲鳴だった。暴力と変わらない悲憤だった。

「お前…」

呆ける月島はぼんやりと想起する。

この女、毒ヶ峰リルカは自分にとって無価値な存在だった。銀城が拾ってきた完現術師^{フルプリンガー}。我儘で、怒りっぽくて、いつも何かに文句を垂れている喧しい少女。個性的な人物ながらその個性をただの記号としか捉えていなかった、有象無象と同じ人形だった。

それは銀城が放つ鮮やかな道標の光とは比較にもならない、淡い色。しかし爆発した少女の積年の不満に真正面からぶん殴られた月島は、モノクロの景色に新たな彩を見る。

怒りと悲しみに歪んだ毒ヶ峰リルカの瞳。そこには確かな温もりが、生命の鼓動が脈打っていた。

「…そうか」

青年は意識を胸の内に向ける。掻き混ぜられ、切り刻まれ、ボロボロになった【月島秀九郎】の自我と記憶。その中で無事に残されていたXCUTIONのメンバーとの思い出。

やっぱり月島さんは最強なんすよ、と。崇拜の眼差しで付き纏ってくる少年がいた。

どうしたら月島さんみたいに背が高くなるのかな、と。大人を羨む子供がいた。

酸味の効いた自作カクテルです、と。疲れを見抜き気を利かせてくれる初老の男がいた。

あなたの話を聞かせてくれよ、と。怯えながらも歩み寄ろうとする異国人の女がいた。

そして、目の前の少女の声が頭を過る。

『あたしが』仲間を信じろ』って言ったのは、何も月島に対してだけじゃないの!』

…ああ、そうか。そうだったのか。

いつもの事だと諦めて、僕が気付こうとしなかっただけで。彼等は僕的能力に怯えながらも、最初から僕を仲間だと受け入れようとしてくれていたんだ。

「――殺しなよ、死神諸君」

ゆつくりと、満足げに。冷気に蝕まれる月島は自らの首を冬獅郎達へ差し出す。

リルカの悲鳴は青年の耳に届かない。

「僕が死ねば…君達に挟んだ過去は消滅する」

「…!」

「本物の絆を持つてる君達が、自分の手で…偽物の絆を断ち切る。それができるのは…今しかない」

月島秀九郎は狂人である。善悪も良心の軛もなく、何事にも動じず、ただ俯瞰的に人の心を己の目的に沿うよう操る精神の化物。

しかし。

彼は知ってしまった。他の有象無象が自分を恐れたのと同じ、未知の恐怖を。真実を知る狂気を。

彼は見てしまった。自業自得の如く自己さえもわからなくなった自分の前で、自力で立ち上がってみせた、あの茶渡泰虎さどやすとらを。あの時の月島と同じように過去の因果を狂わされたはずの死神達が起こした、奇跡の勝利を。

果たしてそれを羨望と呼ぶべきかは定かに非ず。だが見下していた彼等により見せつけられた「本当の絆」は、それまでの月島の価値観に罅を入れるのに十分な衝撃だった。

そして…

「僕が大人しく殺されてやる代わりに、リルカ達を見逃してやって欲しい」

場の一同が目を瞠る。らしくないとも思っているのだろう。当然だ、他ならぬ自分自身が驚いているのだから。

己の心境の変化をおかしく思いながら、月島は敵の慈悲を乞う。

…もしかしたら銀城は、僕に教えようとしてくれたのかな。

二人だけだと思ってた僕達の世界には、本当は――

沈黙が場を支配する中、微かな衣擦れ音が耳に響く。

音の主は日番谷冬獅郎。周囲の視線を集める彼は、その小さな拳を握り締めたまま無防備な月島を睨んでいた。

そこに如何程の葛藤があっただろうか。しかししばしの間の後、少年は月島に背を向ける。

そして渦巻く感情を胸に押し込めたまま、冬獅郎は背後に開いた二重障子の穿界門せんかいもんの奥へ消えていった。

「…なんのつもりだい?」

残る六人の死神達へ、月島は尋ねる。

「僕は君達の敵だよ…? このまま自然に朽ちたら…こんどは霊界そっちで

悪さをするかもしれないのに……」

彼等も気付いている筈だ。

僕は直に死ぬ。だがそれはあくまで人間としての死だ。魂魄としての生を奪わなければ、それはこちらの死に逃げに等しい結末となる。彼等尸^{ソウルソサエティ}魂界の勝利を意味しない。

「……我等は死神だ」

そんな彼の疑問に一人が答える。異界で月島との激闘を経てなお顔色一つ変えない強者、朽木白哉。

「我等は人間と魂魄の秩序を守り、あらゆる霊なるものを司る。その執行を妨げるのなら未だしも、戦意無き人間である兄^{けい}を斬る義務は我等にない」

そして遠くの、銀城が倒れた戦場跡へ目を向けた貴族の青年は「それに」と続け……

「それが——黒崎一護^{くろさきいちご}の仲間である我等の持つべき流儀だ」

変わらぬ鋭利な無表情に微かな親愛の色を覗かせ、断言した。

「……ちえっ」

——やっぱりお前らは

僕には眩しすぎるや

…その言葉を最後に、月島秀九郎は仲間の少女と死神達に看取られ、亡き恩人の後を追った。目を閉じたその穏やかな顔は、恐ろしい力を持つ故に誰からも恐れられ、誰も信じられずに育った悲劇の少年に確かな安らぎが与えられた証だったのだろう。

後に黒崎一護の願いで現世に埋葬された銀城空吾の墓には、彼のフルプリング完現術のペンダントと共に、一枚の古ぼけた葉が供えられた。

そしていつしかその墓では、元の簡素な墓石の前を、五つの花が絶えず賑やかすようになったという――

透き通る青空に蝉時雨が響く六月の末。

梅雨の終わりが近付くある日。任務終了後の休暇を使い鳴木市の墓地を訪れた日番谷冬獅郎は、墓石の前で目当ての人物と再会した。

「…！ 冬獅郎。お前も来たのか」

目を丸くし苦笑する彼は黒崎一護。口ぶりから察するに律儀な阿散井や班目あたりが日を改め彼の下へ謝罪に訪れたようだ。忙しい隊長業務に煩わされ遅れた事を口惜しく思いながら、冬獅郎は去った先客達に続き青年へ深く頭を下げる。

「…中央四十六室は相変わらずだ。阿万門あまかどナユラが懇意にしている霞大路家と管かんのぎノ木家の両当主も代替わりのゴタゴタでとても改革に協力できる状態じゃねえ。しばらくは雌伏の時が続くだろう」

ここ数日で探った貴族社会の様子を伝えると、黒崎一護は「…そつ

か」と浅い溜息を吐いた。落胆より心配に近いそれはお人好しな彼らしい。

「あのナユラって子に、無理だけはすんなって伝えといてくれ」

「…向こうもそっくりそのままてめえにそう返すだろうぜ」

釣られるように肩を竦め、冬獅郎は事情を語る。

「調べたが、銀城空吾の裏切りには碌でもねえ連中が関わってやがった。あの中央四十六室すら顔色を窺う貴族社会の頂点……」四大貴族「だ」

「白哉や夜一さんの…?」

驚く彼を見て、冬獅郎は一瞬答えに迷う。しかしここに来た理由を思い出した少年は黒崎一護への誠意を優先した。

元々”四大貴族”は戸魂界ソウルソサエティの礎を築いた複数の死神一族の末裔を称した言葉だ。霊界の安定、神器の保護、地獄の監視…それぞれの一族は各々の大義のために手を結び、今の三界の秩序を作り上げたと伝わっている。

「だが奴らが掲げたその大義が、後の貴族社会における家々の影響力の差につながった。朽木家くちぎが護廷十三隊、四楓院家しほういんが隠密機動など瀧霊廷の”軍府”を担ったのと同様に、瀧霊廷の”枢府”を根城にした一族が居た」

「…」

「それが四大貴族家筆頭と謳われる一門——綱彌代家つなやしろだ」

枢府。不穏な単語の登場に眉を顰める黒崎一護。

「…どんな一族なんだ?」

「戸魂界ソウルソサエティ百万年の歴史と英知を管理する連中だ。かつての銀城空吾の裏切りとその証拠を四十六室へ提示したのもこいつ等が牛耳る情報集積機関だったらしい。当時を知る浮竹うきたけが独自に突き止め、先日俺たち護廷隊に公表された」

今回の完現術師フルブリンガーとの争いは多くの謎を残し幕を閉じた。その秘められた真実を握る、あるいは全ての黒幕やも知れぬ深淵の魑魅魍魎。

「気を付けろ、黒崎。今の戸魂界ソウルソサエティは無数の思惑が蠢く魔境だ」

緊張に喉を鳴らす青年へ冬獅郎は忠告する。

「連中の最たる関心は藍染の残党、【叫谷勢力】だ。そして奴の探求の被害者であるてめえにも注目が集まっている。特にてめえの……わかるな？」

「……ああ」

その先の言葉を冬獅郎は呑み込む。奇しくも妙な縁で繋がっているこの青年ならば言わずとも理解しているだろうと確信して。

「だが安心しろ」

「……冬獅郎？」

そう。代わりに差し出すのは、信頼を意味する右手の掌だ。

「たとえば何があろうと、俺達はもう二度と……てめえを一人にはしねえ」

少年はその一言を言うためにここへ来た。護廷十三隊の不甲斐なさ、尸魂界ソウルソサエティの悪辣さを知ってなお仲間でありたいと笑ってくれたこの黒崎一護と、共に歩む道を踏み締めるように。

頬を緩める彼へ頷き一つ、話を終えた少年は恩人へ一時の別れを告げる。

「——黒崎」

……だが冬獅郎の足は数歩で止まった。

訊くつもりはなかった。それでも問い掛けてしまったのは、黒崎の顔を覆う暗い影を見てしまったからか。

そして彼が経験した悲しい別れを……“彼女”へ抱く強い想いを、直感的に感じていたからなのかもしれない。

憐憫と嫉妬の入り混じった、複雑な逡巡の後。冬獅郎は口を開く。

「……銀城を斬った時、お前に託されたあいつは、最期に……どんな顔を

してた？」

黒崎の身動きが聞こえる。背中を向ける冬獅郎に、彼の顔は見えない。

」

だが永遠にも思える沈黙に耐えた冬獅郎は、黒崎の返事を聞く。

そして彼の穏やかな言葉を受け止めた少年は、最後にそう一言だけ、呟く事ができた。

ただ一言、万感の思いを籠め……「そうか」と。

黒崎一護の答えは、残される者の悲しみに濡れながらも、一人の青年を前に進ませる尊い”強さ”に満ちた言葉だった。

『あの人は、笑ってた…』

——「ありがとう」って、笑ってたんだ…

幕間：ヴあるありやの蠢動

「——ふう……よかったよかった」

無数の映像画面が轟めく英霊宮殿ヴァルアリアの一大施設、現世観測所。

諸々の確認作業を終えたあたしことニュー新生ry雛森桃ひなもりももちゃんは、月島さん関連など色々不満を嘆きつつも、一応望み通りの結末を迎えられた達成感をじっくりと噛み締めていた。

いやーでも原作イベは我等の主人公一護くんがオサレに活躍してくれていいよね！ 無力に苦しむ彼の様子はちよくちよく確認してたけど……正直見ててゾクゾク興ふ胸が痛む光景だったなあ！？

やっぱチャーンは暗い顔より年相応にイキリ散らかしてる方があたしの好みだと再確認できました。これは逆説的にあたしがまだ愉悦の沼に堕ちきっていない証と見なしてよろしいですね？

『——シロちゃんが一護に嫉妬してた時のお姉さまはどんな顔をしてましたか……？——シツ、言っちゃダメ——ああもうつ、シロちゃんってホント何であんなにかわいいのっ！——はあくえがった……』

なんか脳内にニチャニチャやかましい輩がいっぱい居るけど桃ちゃん無視。シロちゃんに関して言えば、今回あたしは彼がメインの曇らせ作戦は何も計画していない。

その通り。あたしが死神あっちの体でシロちゃんをロマンチックに任務へ送り出したのも彼のメンタルケアの一環だから。

大人シロさんの切り札をここで切らせ、その姿が月島さん以外の目に触れないよう雪煙を桃玉に増やさせたのも、【謎多き新技】のOSRボーナスを次の戦いに引き継がせる為だから。

そして美少女幼馴染とそっくりな人造魂魄と仲良くしてるイケメン一護にシロちゃんがヤキモチ焼いちやうのは恋する少年の摂理だから。

今回彼が見せてくれた尊い輝きは、全部あたしの愉悦的意図とは関係ない不可抗力の産物だったのだ。

「…ハアハアハアハア…！」

『——ハアハアハアハア……——』

『……よだれと息切れと愉悦で酷い顔になってますわよ、貴方達』

ジュルリ：おっと、失敬。はしたない主人と石ころを窘めてくるのは相棒の飛梅ちゃん。

尤も私はこいつらとは違うわ的な顔してる彼女も【大紅蓮氷輪丸】の新技を後方腕組み彼氏面で眺めてて割と末期だったのあたし忘れてないからね？

反撃が怖いのでお口チャックしますが。

…さて。

こうして原作漫画BLEACHにおける中編ストーリー『死神代行消失編』、通称チャド篇あるいはプリングルス篇と呼ばれる一連の出来事がこの世界においても無事に完結した。

破面篇アラシカルが終わってから実に十七ヶ月。魂魄の長い時間感覚に馴染んだ今なら一年ちよいななんて瞬く間だと思っていたのに、これが中々に忍耐を試される一日千秋の思いだった。

この原作ストーリーの肝は二つ。

①一護が死神の力を取り戻す事。
ソウルソサエティ
？ 尸魂界との縁が復活する事。

勿論比較すれば本誌とは全然違う推移で進んだのだけど、終わり良ければ総て良しの開き直りメンタルで最初から臨んだあたしにとって委細は細事。そもそも原作的に今回の銀城事件は後のための前座みたいなものだし、重要事項がクリアできたら他は割と適当でいいのです。

『——ガバとお遊びのせいではぼ別物だったんですが——あたし達が発現させたカリリンちゃんの完現術フルプリングとかね——説明しよう、ブレイズンリングとは火輪かりんの事！——これはZOMBIE POWDERという師匠の過去作ネタで——』

「ねえネーミング解説されるの恥ずかしいからやめて？」

…こほんっ。

と、ところで諸君はあたしがこの主人公復活イベの為にかなり前から布石を打っていたのを覚えているだろうか。

まあぶつちやけ雛森イイイイ！とは無関係だと思つてたのでそこまで情熱を注いだ訳ではない。だがしかし原作後半における一護の無様な戦いを悔しく思うのは読者あるあるで、さりとして安易に彼の力の源である内なる虚ホワイを強化すれば原作の数々の接戦&名バトルが台無しになる。

そんな健全なファン心理が働き生まれたアイデアが「強化ホワイトをフルブリッの欠片で封印し、銀城にそれを解いて貰う」というものだった。原作の流れを残しつつ主人公をより強くオサレにするこの素晴らしい計画の成否は、ご覧の通りである。

『——敵キャラの悲しい復讐心を利用し尽くした鬼畜計画——どっちが悪役なんですかね——これには藍染隊長もニツコリ——あ、計画準備は桃玉融合前だからあたし達はセーフ——』

『全く。そんな事してるからあの月島某つきしまに化物扱いされるんですよ、主様は』

「んなっ!？」

己の手腕を自画自賛してたら聞き捨てならない事を飛梅ちゃんがぬかしやがった。

全く、言葉には気を付けたまえ。それはこの原作イベにおけるあたしが一番の不満にして疑問なのだ。

【悲報】雛森桃、初対面の月島さんに何故か嫌われる

そう、あれはXCUTIONが本格的に動き出す少し前。原作再開が間近に迫りワクワクしていたあたしは、ふとあの無敵の月島さんが謎に憔悴しているとの妙な情報を掴んだ。

心配になって密かに様子を見に行ったら桃ちゃん驚愕！なんと彼が銀城にあたしの事を邪神だの魔女だのとんだ悪名を吹聴してい

たのだ。

意味がわからない。というか会ったこともない女の子を化物呼ばわりなんて普通に失礼！ あたしはまだあなた達に何もしてなかったのに！

『…まだ』ってなんですか。あんな不気味な手紙を送ったり、桃玉の力を使って黒崎少年の仲間達を手助けしたり、どの道手を出す事になるのなら愉快犯に変わりはないわ』

「あ、あれは少し腹が立って仕返ししたただけだし！ 先に酷いコト言い出したのは月島さんの方だもん！」

違うんだ、頼むから聞いて欲しい。あたしは本当に何もするつもりは無かったのだ。

強いて言えば原作で伏線未回収だったチャドや夏梨ちゃんたち現世組を活躍させたかっただけで、それも大筋的には大した影響はなかった筈なのです。

なのに月島さんは最初からあたしの事をまるでCOCの宇宙的恐怖であるかのように嫌っているし、そのせいでXCUTIONの動きが読めなくなるし、軌道修正しようにも何がガバって裏目に出るかわからず散々だった。

ヤケクソになったあたしはつい拗ねて「そんなに邪神邪神言うなら」と前世のTRPGスキルを動員し、あの無貌ニヤルラトホテテの神ロールプレイを決意。

月島さんには何してもええやろ。そんな魔が差したとはいえ、あたしが彼に行っただけのは軽いちよっかいだけだ。それであるの反応とかホントなんなの。

桃ちゃんはただ下種野郎のグレイゾーンでコサックダンスしてるだけの可愛い美少女なのに…

『—でも確かになんで彼は“読書家”の事をあんなに怖がってたのかしら？—誰かからお姉さまの実力を聞いてて警戒してたのかも—————ただあのユーハバツハの侵攻にさえ動じなかった月島さんがお姉さまに怯えるかな？——お姉さまの魂に染み付いた強烈な愉悦臭にドン引きしてたんでしょ——』

「その愉悦臭ならクローンのあなた達からも漂ってる事になるけど？」

一緒に愉しんでたのを棚に上げるのはともかく、桃玉の疑問自体はあたしも気になるところ。

原作読者に説明は不要だが、月島秀九郎はクトウルフTRPGで時々見る「常人を演じるSAN値ゼロ狂信者」である。彼は恩人の銀城のためなら敵の白哉と二百年以上も友情を育み、気が狂うほどのその手間を一切苦痛に感じない。

そんな狂った彼が作中で取り乱したのは、銀城が一護に倒された時の一度のみ。まあ依存先が消えたんだから当然だけど、故に月島さんが動揺するのは全て銀城が関わる事だと推理できる。

だからこそわからない。

あたしは銀城に関してはマジで何の悪さもしてなくて、むしろ強化チャン一と良い勝負ができるように奪う一護の完現術フルブリングを強くするくらい好意的だったつもりだ。

それなのに月島さんが「やめろ銀城！」とあそこまで狂乱するのは最早”読書家”アレルギーに等しい。隣の一護と異口同音異義で、見てるあたしも本当にワケわかめな絵面だったよ…

そして何より、時系列的にあたしが邪神ごっこをしたのは月島さんが銀城に”読書家”の事をdisった後。彼があたしを忌避し始めた理由とは因果が噛み合わない——

「……あれ？」

その時、桃ちゃんの頭に電流走る。

そうだった。時系列なんて過去を操る月島さんにとって最も意味の無い概念だった。彼の記憶や思考はそれらの要素に、つまり過去現在未来の因果に一切左右されない事になる。

え、ちよつとまって？ それってもしかして…

『——月島さん、誰かの過去でお姉さまと何かあったのかも——居る筈ない時間軸に彼が居たらお姉さまなら「月島さんチイーツスww

W」って気付くよね——もし他人の過去世界の雛森桃全員がそうだったら……—あつ（察し）——』

『飛梅^{わたし}を手にする前の、生に無頓着な主様なら……危険上等である月島某で遊び始めますわね。氷輪丸の少年の時と同じように』

一心同体の相棒たちも気付いたらしい。口々に述べる仮説や分析はどれもあたし的に納得しかないもので、謎の冷や汗が背中を伝う。

「……いや、待って待って！……てことは何？……過去のあたしは織姫さんの過去でも茶渡くんの過去でも同じく月島さんを見つけて彼をニヤニヤからかつてたつて事!？」

『——ルキアを助けに皆が尸魂界に来た時に遭遇したんでしようね——うわ、想像したらお姉さまの面白がってる顔がありありと……——全ての過去世界で何故か月島秀九郎が異物だと知ってる後の超越者——そりや警戒するわ——』

おいこら、なんだそれ。こいつ等あたしを一体何だと思ってるんだ。

月島さんの事は大好きだけど、流石のあたしもあんなチートキャラで火遊びするほど馬鹿じゃない。たとえ原作的にその場に居る筈のない彼を見つけてもちゃんと知らんぷりするし、このあたしが他人にかまけてシロちゃんを輝かせる使命を放棄するなんてもつとあり得ない。

違うから！……いくら何でもそこまで考え無しじゃないから！

じゃない、ハズ……

……うん。

『はい解散』

「えっ、ちょよ」

『——くっ、羨ましい——何してもいい過去世界で月島さんと何度も遊べるなんて——いいなあ、ズルいなあ——さぞお姉さま一人で愉しんだんでしようねえ？——』

「ち、ちがつ……！知らない知らない、そんなのあたし知らない！

た、確かにそんな女はすごい不気味だろうけど……で、でもそれだけ

「あの月島さんがあんなに怯えるはずないって！　そうでしょ？
ねえ！　ねえって！　話聞いてよお!!」

結局呆れて斬魄刀の世界に帰ってしまった飛梅ちゃんと、嫉妬の念を捲し立てる桃玉の協力拒否のせいでこの話は終了。仕方なく、あたしは事後処理として尸魂界^{ソウルソサエティ}へ魂葬された月島さんの監視を継続する事でお茶を濁した。

実際に月島秀九郎の”読書家”への恐怖はより深く、根源的なものだったのだが——まあ最期はなんだかんだでリルカや白哉たちのオサレ台詞で幸せそうに逝ったから、いい…のかな…？

そんなこんなでこの世界における死神代行消失編（Feat. あたし）の余韻をじっくり堪能し終えたら、困った現実と向き合う時間がやってくる。

ここは場所を移して英霊宮殿最下層の桃ちゃんラボ。足取り重く入ったこの部屋の中央に居るのが、あたしが頭を抱える問題の人物だ。

「あの、そろそろ話を聞いてくれませんか？　——」
「仮面のあたし
”さん”」

目の前に薄い桃色の水晶状のカプセルが鎮座している。その中で、雛森桃と瓜二つな少女がむっすり和不貞腐れていた。

『……知りません、あなたののような酷い人なんか』

「いえその、あなたと一護くんへおかけしたご迷惑の数々は本当に申し訳なく思っておりますね…」

『ふんっ』

いや”ぷいっ”じゃないから、かわいいかよ。流石原作雛森ちゃん再現、不謹慎だけど養殖ヒロインのあたしとは大違いにキュートで少し凹む。

この娘はかつてあたしが仲間の霊性科学者であるDJ—KANAMEこと東仙要とうせんかなめと一緒に【霊王の欠片】から生み出した人造魂魄だ。

一護のホワイトを強化した分必要になった封印機能を司り、彼を支えてOSR値を稼ぎやすくするサポートキャラ、そして何よりも先程の死神代行消失編において活躍した彼の新能力完現術フルブリンクの根源…といった具合にめちゃくちゃ重要な役割を押し付けられた存在である。主に彼女の創造者の都合で（目逸らし

『……どうしてなんですか？』

不意に、そつぽを向いていた仮面桃ちゃんが問い掛けてきた。目をぱちくりさせるあたしに苛立ったのかその声には棘が。

『っ、だから…！ どうしてあたしを生かしたんですかって聞いているんです！』

『えっ？』

『あたしはもう自分の役割を、あなたに生み出された役目を終えたはずです。あの子にもちゃんど…ちゃんと笑顔でお別れを言えたのに…っ！ なんのになんで処分せずにこんなところに閉じ込めたまま生かしてるんですか！』

処分とは随分と自分の運命を悲観的に捉えている仮面桃ちゃん。しかし「何故生かした」と噛みつかれても、その、困る。

実際は銀城の計画を利用する関係上そのまま彼女の人格は消えるものだと思っていたし、その予定でもあった。

正直、ガバです。

とにかく風前の灯火とはいえこうして自我を維持したまま戻って

来てくれた以上、彼女の魂魄を構成する【霊王の欠片】を予定通りに抜き取ってお役目ご苦労するのは忍びない。任務完遂の報酬と迷惑かけた罪滅ぼしになんとか延命させているというのが現状だ。あたしと桃玉達が安全な抽出方法を確立させるまではそのカプセルの中で存在を保つててください。

：一〇の悲願？ 上司をオモチャにして遊ぶセクハラ蛇野郎は永遠に待たせときやいいのよ、ペツ。

「それとも、本当にもう生きるのは嫌？」

『…ッ』

「あたしはあなたに負い目があります。今は善意であなたの自我を保たせてるけど、もしこのまま消える事が心からの望みなら……あなたの意思を尊重するわ」

カプセルの延命装置の説明をすると仮面桃ちゃんが沈鬱な顔で俯いた。脈ありと感じたあたしはできるだけ優しく彼女を諭しにかかる。

「あなたの役目は確かに終わったけれど、一護さんの戦いはまだまだ続きます。これからあの人はかつてない強大な敵と戦うことになる」

『！ッ、あなたはまだ彼を巻き込もうと——』

「いいえ、あたしは一護さんの運命を全て知った上で手助けをしているだけ。あなたにもそう教えたはずだけど…」

確認すると彼女が悔しげに押し黙った。どうやら一応そちらの記憶は備わっているみたいで桃ちゃん安堵。

「どうかな。あなたさえよければもう一度、一護さんの戦う力としてあなたを彼の下へ送り届けたいのだけど」

『…!!』

「一護くんは強いわ。でも彼はまだ一人前になっただけ。心配に思うのはあたしもあなたも同じはずよ」

悪い創造者の甘言に誑かされたくない、でもどうしても心揺れてしまう提案……！ そんな面白いくらいに目が泳いでいますね。

しかし手ぐすね引いて待ち構えるあたしの手を、彼女は辛うじて振

り払った。

『…あなたを……あなたを信じられませんっ』

悲痛な声がラボに木霊する。

『あの子の味方なら、どうしてあんなに酷い試練を与えるんですか！
あなたが助けてくれなかったせいで彼がどれだけ苦ししい思いをしたか…全部分かってるんでしょ…!?!』

涙目で睨んでくる彼女と、その信用の無さに涙目なあたし。

ぶっちゃけ彼女がここまで一護と仲良くなつてしまったのは想定外と言うか、天然ジゴロ主人公を侮つてたと言うか、織姫ちゃんendは果たして大丈夫なのかと不安と言うか。まあでもこんなに健気なヒロインオーラ香しい女の子だし、一護の心にぶっ刺さってしまうのもある意味当然かもしれない。銀城に奪われた時の彼の慟哭も領ける。

うん、大正義「原作的に必要な事だから」の価値観のせいで麻痺してたけど、こうやってドストレートに責められると何も言えねえ…

だけど大丈夫、これからの桃ちゃんはちよつと違うのだ。もう一護勝利！の結末以外原作を再現するのは止めるわけだし、あたしも我々鯽フアンの最高のヒーローをもつと大胆に支援する気満々なのです。

黒崎一護の曇り顔は確かに魅力的だ。でもやっぱり一番好きなのは、SS篇でルキアに「じゃあな」とカツコつけてお別れした…

——清々しい勝利の笑顔なんだ。

「…そうね。味方同士で反目し合うのは彼のためにならないから、特別に見せましょう」

『！』

隠していた霊圧をちよつぴりお漏らしして笑顔を浮かべる。ギョツと瞠目する仮面桃ちゃんに見えるよう、あたしは自分の後ろで輝く二対の翹を起点に、ここマイ叫きょうかく谷内の各所と空間を繋げた。

『な……によ、それ……っ』

怯える彼女は知らないだろう。自分が召し上げられたこの地がど

ういう世界なのかを。目の前にいる創造者が、桃玉との融合によつてどんな存在になったのかを。

そして、原作である藍染惣右介が集めた大戦力が、この地でどれほどの進化を遂げたのかを。

『あ、あ…』

虹色の歪みの隙間から覗くのは、十数人の怪物達。

青白い霊圧を縞状に帯びた双尾の豹王。漆黒の鎧に包まれた六つ鎌の巨人。純白に輝く三対翼の悪魔。紅色の槍を操る半人半獣の女戦士…

見覚えのある面影を残す姿。感じた事のある懐かしくも恐ろしい霊圧。しかし一護と共に目にしたそれらの記憶を掻き消す怪物達の途轍もない存在感が、一斉に仮面の少女へのしかなかった。

「彼らは一護くんの、昨日の敵。今日の友。世界を救うヒーローは黒崎一護一人ではないと、これまでの十七ヶ月で知った…」

——”虚^{あたし}霊坤”が誇る

自慢の勇者たちよ

それはあたしなりの彼らへの敬意。死神達の間で有名な”読書家”の名ではない、あたしを”王”と称える彼らとの絆の証。

ここは三界から別たれた泡沫の世界、ロスヴァリエス虚^{ロスヴァリエス}霊坤。この世の原典に記されなかった敗者たちが爪を研ぎ続けた、英霊達の楽園だ。

「あたし達と一緒に、戦ってくれますか？」

確信を胸に水晶のカプセルへ近付くあたし。その中で震える割れた仮面の少女は、長い沈黙の末、遂にあたしの差し出す手を取った。

『……従います…っ』

まあまあ、そんな薄い本の脅迫されてる女騎士みたいな絶望顔はや

めてもろて。一緒にこの鯨界の主人公の活躍を後押ししよ？ 同じファンとして一護が絨毯化したり卍解即折れしたり「終わりだ——」したりする姿を見るのは嫌なもの、ね？

そう彼女と同じ雛森フェイスで優しく微笑むと、何故か「ひっ……」と怯えられた。

…最近あたしに対して周りのこういう反応多いんだけど、なんで？

（涙目）

おまけ・石田ってSS編時点でクインシー・レット
シュテイル使った時ブルート・アルテリエ無しのハ
ry篇

異変ってSS編時点でクインシー・レットシュテイル
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのハry

銀城空吾率いる完現術結社XCUTIONとの戦いが終わり、死
神代行黒崎一護くろさきいちごの新たな日常が始まった。

否、日常と言うのは語弊がある。ただの高校生である彼にとってユ
ウレイが見える霊感豊かな日々は非日常であって然るべき。だが、そ
んな面倒で危険な日々に別れを告げたこの無力な十七ヶ月は、青年の
心に望んだ安らぎを与えてくれなかった。

そして戦友達の絆と共に死神として復活を果たした一護は、大切な
ものを護れる誇りを胸に剣を振るう。

——しようがねえな、

一氣に片付けるぜ…!

悪霊たちの断末魔が木霊する深夜の空座町。一護の掛け声に呼応
するのは茶渡泰虎、井上織姫、そして石田雨竜。取り戻した”非日常
”の中で今日も青年は仲間達と手を取り合い、人や霊を喰らう虚ホロウの脅
威から町を守っていた。

もつともこの日はついでに別の世話も焼くハメになったのだが…

「——あああーっ!!」

翌々日の放課後。突然後ろのベッドから上がった悲鳴に、自宅で茶
渡ら三人と寛いでいた一護は眉を顰めた。

「…やっと思ったのかよ、イモ山さんの後任くん。もう日付二つも

回ってるぞ」

「あ、貴方はあの死神代行の…!」

「おう、もう一人の志乃しの乃のつて奴もピンピンしてっから安心しろ」

この寝坊助な若い死神は尸魂界ソウルソサエティから派遣された空座町警邏担当の護廷隊隊士、その二人の片割れだ。

先日巨虚ヒュージ・ホロウの群れから偶然保護した彼らについては事前に本部の十三番隊から連絡があり、一護たちも良しなにと頼まれていた。ちなみに二人へ辞令を出したのは最近副隊長に昇進したあの男勝りな貴族養女である。

「こんな下っ端が重霊地の担任だなんて、死神たちの人材不足は相当深刻みたいだね」

「お前からルキアの部下なんだろう？　もうちよつとまともな連中を寄越せなかったのかよ、あいつ…」

石田と一護の辛辣な溜息に、隊士達は何度も謝罪しながら事情を説明する。

「ほ、本当はあたし達じゃなくて上位席官を派遣する予定だったらしいんですけど…」

「最近藍染惣右介あいぜんそうすけの残党がまた動き出したとかで急遽厳戒態勢が敷かれてまして…」

「…!」

面目なさげに言い淀む二人の若い死神達。元を辿れば身内の恥であるあの動乱を言い訳にするのは流石に憚られるのだろう。特に霊界の英雄と称えられる当代死神代行の前では。

だが一護の関心は、面子の絡んだ尸魂界ソウルソサエティの複雑な内部事情にはなかった。

藍染の残党”叫谷勢力”。彼らが述べたその単語に思わず固まった青年は、隣の井上の心配そうな視線に気づき咄嗟に取り繕う。

「…いや、ならいいんだ。後で浦原さんトコ紹介してやるから、お前らも明日からはそっちで寝泊まりしろよ」

「く、黒崎君？　どこ行くの…?」

「見回りだよ。そいつ等が怪我でしばらく動けなかったからな」

考えないようにしていた事を思い出してしまった黒崎一護。それは永遠に割り切れない運命、二度と触れる事のできない心残り。口実はなんだったっていい。今は少しだけ、一人になりたい気分だった。

斜陽の赤に色付く隣町の鳴木市。想い人の後を追う井上織姫が彼を見つけたのは、寂れた墓地の端だった。

「……ここに居たんだね、黒崎くん」

「井上……」

オレンジ髪の青年が小さな墓石を見下ろしている。

そこに眠るのは、貴族の悪意に人生を歪められた哀れな先輩。互いの立場や運命が逆だったら。そんな多くの、些細な”もし”が互いの関係を大きく変えたであろう、悲運な理解者。

初代死神代行、銀城空吾の墓だ。

織姫は彼の戦いを見届けた者の一人だった。その野望を知り、理由を知り、男の最期に胸を痛めた優しい娘。

しかし同時に恋する乙女である織姫は、一護の心中に渦巻く悲哀の正体を察していた。

この墓に刻まれているのは銀城空吾と、彼の仲間の月島秀九郎の名。

だが一護にとっては、もう一人の……あの戦いで失われた大切な女性ヒトの為の墓標でもあったのだ。

「あ、あのさ……」

隠した掌の中でチャリ、と金属質な小音が鳴る。俯く青年の希望足り得る、大切な絆の証だ。

……黒崎くんが力を取り戻した。もう遠慮する必要はない。落ち込

む彼の為にも、待ちくたびれているあの人達の為にも、約束を果たさなきや。

そして、もちろん。

「黒崎くん。その、これを…」

チクリと痛む胸に蓋をし、織姫は想い人へ、七色に輝く螺鈿質の霊具を差し出した。

「…腕輪?」

「一昨年の話なんだけど……」 渡して” って頼まれたの。黒崎くんが力を失って眠ってた時に……」

「頼まれた? 一体誰に」

だが訝しむ一護の問いは途中で途切れる。

——ザ…ザザ——

青年が例の腕輪を受け取った瞬間。突然不気味な音が響き渡り、続いてブツブツと跡切れる人声が紛れ込んだ。

『——っ!——様っ!——聞こ——すか!?!——』

それを聞いた一護の脳に、とある女性の姿が蘇る。

「この声って、まさか……!」

「ッ、もしも? 井上織姫です! 大丈夫ですか…っ!」

驚きが勝る一護に対し、ただならぬ気配に真っ先に反応した織姫。だが彼女の声は腕輪の向こうへ届かない。

『——ッ、な——なの……!——応答——くだ——い!——』

「お…おい、どうした!? 何があった! おい!」

「駄目っ、ノイズが酷くて聞こえない……!」

その声は織姫達ではない誰かに助けを求めていた。だが必死の救援要請も虚しく、雑音の砂嵐は女性の叫びを掻き消していく。

そして、その時だった。一護の頭上に異様な霊圧が現れたのは。

——答えてやろう、黒崎一護

「なっ…!?!」

突然の人の気配に弾かれるように振り向く一護と織姫。そこで目にした人物は、白い軍服に似たコートを纏った若い男だった。

「誰だよ、お前…!」

「失礼。自己紹介がまだだったな」

男が名乗った名はアズギアロ・イーバーン。

無論そんな名は一護たちの記憶にない。だが男の左目を覆うソレを見て、青年はハツとする。

懐かしい特徴。感じる敵意。そして男と睨み合う一護の意識の外で、腕輪の不安定な声は遂に途切れてしまう。

だが遠のく寸前。通話の女性は最後に一つだけ、彼らの耳に決定的な言葉を残していった。

安寧に微睡む黒崎一護を次の戦場へと導く、新たな苦難を予期させる言葉を…

『緊——事態——っ!——お願——どうか——』

ウエコメント
虚圏に援軍を——

千年血戦篇。

非常に綿密に練られた設定と数々の名バトル名セリフ、師匠節の効いた上質なギャグ、そして【かかじゅうまんおくしだいそうじん火火十萬億死大葬陣】などのオサレ極まるネーミングセンスが綺羅星の如く輝く、オサレ漫画BLEACHの最終章に相応しい超傑作篇だ。

しかし冗長な敵幹部戦や唐突な超展開など多すぎる登場人物の管理や描写の尺配分に苦しみ、鯨フアンの間でも多くの物議を醸した評価の分かれる章でもある。あたしも不平不満はあるが、最も歯噛みしたのはやはり、主人公・黒崎一護の酷すぎる扱いだ。

この章における一護の戦闘描写は本当に悲惨の一言。

霊王宮での修行、彼の斬魄刀の秘密など多くの謎が明かされ、非常に高いOSR値を得たはずの主人公。バズビーなどの強キャラ達8人に囲まれても平然としていた修行後一護の姿に誰もが期待しただろう。

SS篇終盤の双匣の丘で副隊長達を一掃した、あのカッコいい一護が帰ってきたぞ！と。

…だが蓋を開けてみれば皆が見たかった主人公無双は戦果ゼロで終わり、しかもその後の敵幹部戦では一コマの戦闘描写もなく倒されるあの有名な絨毯姿を晒し、折角の新卍解も全く描写なくラスボスのチート能力に折られ、過去のボスキャラ達との共闘でも最後の一撃を決めた以外活躍シーンがほぼゼロと、最後まで泣きたくなるような薄い印象しか残せなかった。

故にあたしは考えた。何故少年漫画なのにこんな、主人公が殆ど活躍した気がしないどころか、主人公が敵の強さの引き立て役にさせられる残念すぎる展開になってしまったのか。

そして一つの結論に至った。

——敵の能力が単純に理不尽。

それまでの死神や破アランカル面達と繰り広げた霊圧とオサレのぶつかり合いを無視する、所謂「俺ルール」の押し付け戦法。しかも一護が戦ったのはその中でも特に凶悪な初見殺しや概念系チート能力を使う搦

め手使いばかりだった。あの原作ヨン様戦でさえ最後まで【鏡花水月】が使われない真つ向勝負だったのに。

確かに最終章だし戦力のインフレは不可避な現象である。けどあたし達の不憫なヒーローは剣と霊圧とスピードしか戦う武器を与えられていないのだ。

空想を具現化したり、相手自身の霊圧を毒に変えたり、万物を貫通したり、被ダメージを無限に力に変換したり、未来を改変したりする連中相手に、これで主人公に求められる活躍をしろと言うのはあまりに酷ではないか。

あたしがこの章の敵勢力との戦いを“能力TUEEバトル”だと落胆する理由は全てここにある。

…ああでも。

思い浮かべてほしい、親愛なるBLEACHファン諸君。

千年血戦篇の宝石のように魅力的な、あの敵キャラ達の姿を。

オサレの権化アスキン兄貴を筆頭に、罪深きゆるるるんバード。深く悲しい絆のポテトとバズビー。

グレミィは初出のイキリチートの影響から真逆の名バトルを見せてくれたし、バンビーズの皆は虐めたくなるくらい可愛いし、エス・ノトのデザインはアローニーロ級にグロオサレだし、シャウロンの再登場は嬉しかったし、ペペ様には「俺はペペ様のために…！」したくなるし——そして何よりキルゲさん。彼は新章の期待値を爆上げしてくれた本当に最高の有能カマセ敵役だった。

だけど、この世界の主役は彼らではない。

あたしは家族思いで、仲間思いで、泣き虫だった自分を不良っぽいキャラ作りで隠して周りを心配させまいと頑張る優しい一護が好きだ。大恩人の女の子のために死に物狂いで戦い、そして彼女を救い出すカッコいい一護が大好きだ。

忘れやしない。あたし達鯽ファンはそんな黒崎一護が主人公だった

たからこそ、BLEACHが大好きになったんだ。

『――アランカル破面軍の皆さん』

一護達がXCUTIONとの戦いを終え、まだ日常を謳歌している頃。あたしは遠い虚圏ウエコムンドから送られてきた情報に笑みを零し、「時来たり」とマイ叫谷のみんなに聞こえるよう念を送った。

『虚圏偵察作戦集団団長アズギアロ・イーバーンより緊急報告が届きました。滅却師クインシーの襲撃です』

「！」

ピリツと空気が引き締まる。敵、特にラスボスの正体を教えたおかげか皆の顔に慢心は見えない。

虚圏ウエコムンドの野良破面として振舞うよう特命を与えたイーバーンくんは、既に敵の先鋒狩猟部隊ヤクトアルムに捕まった体で潜入に成功した。あの有能隊長キルゲさんならもう少し警戒してくるかと思っただけ、こちらの情報に飢えている陛下に捨て駒にされる予定なのか、随分と大胆に虚圏ウエコムンドへ進駐している。

まあ何だろうと構わない。桃ちゃんは一護のOSR値稼ぎにあの原作の好カードを再現できれば満足だ。

部下達の静かな熱気を感じながら、あたしは数名の破面達を側に呼んで特別任務を与える。

『虚圏の同胞達を救いましょう。ネリエルさん、あなたを救援部隊の責任者に任命します』

「！ 拝命します。戦闘時の刀剣解放は…」

『もちろん第一階層までです。情報の秘匿は可能な限り優先してください』

「かしこまりました」

久々の実戦に気合十分なネリエルさん。彼女の部下には新旧第三従属官トレス・フランシオンの五名とロリ&メモリの侍女コンビを麾下させる。エロ破面のペツシエが女だらけの部隊に鼻息を荒くしてるが、齟齬者なら

この面子の意味にピンと来るだろう。

あの原作イベの関係者たちだ。

「零番隊からの情報によると、相手の首魁は死んだ味方の霊力を吸収、いえ回収して自らを強化するそうです。敵を殺める事は極力控えてください。理性的で腕の立つあなたを指揮官に任じたのはそのためです」

「雛森様……っ」

人間性を褒められて嬉しそうに頬を染めるネリエル。虚の獣性を嫌う彼女はこういつた評価を受けるのが一番好きだ。

「最後にもう一つ……この作戦の最優先目標はあなた達破面の生存です」

『！』

「分が悪いと判断したら迷わず戦場から逃走し、自分の命を大事にしてください。あなた達の敗北は死のみです。その事をくれぐれもお忘れなきよう」

そう激励して、虚圏行きの大きめの【叫界門】を隣に開く。

威勢のいい掛け声と共に出動する美女軍団(+α)を見送りながら、あたしはその背へ密かに「ごめんちやい」と両手を合わせた。

最早察せない者はいないだろうが、この鯰界の真理であるオサレポイントバトル^Bにおいて最も高ポイントを稼ぐ方法は、【意外性のある逆転劇】を演出する事だ。その事実を念頭に、あたしは何も知らないネリエル達にご協力いただき、あえて自分達のピンチを演じようと考えた。

もちろん部下を危険な地に放り込むのだから、懐かしの虚圏^{ウエコムンド}に行ってみたい&一護に逢いたいという彼女たちの願いを叶える事以外にも、元は取る。

そう、ネリエル達には我々のオサレ逆転劇の布石①「虚霊坤が音信不通」という不穏なトラブル(笑)の証人になってもらうのだ。

現在あたしたち叫谷勢力こと虚霊坤ロスヴァリエスは、死神サイドからは「不穏な謎勢力」と警戒されており、現世の一護サイドからは「謎多き味方」に見える。

ここでもし、そんな謎勢力に突如として何か不明な問題——具体的には「これから虚圏ウエコムンドで一護が再会するネリエル達が本拠地のあたしと連絡が付かず狼狽していた」とか——が発生したらどうなるか。それも更なる謎の第三勢力の登場と同時に。

何が起きているのか分からない。だけどこれまで悠々と暗躍していた叫谷勢力が、今回はどうやら謎の第三勢力との戦いで後手に回つたらしい。そんなカマセ的ロスヴァリエスな印象を周囲に与えるだろう。

さすれば今までの虚霊坤の優位性や不気味さが薄れ、特に一護はこちらの安否が気になる筈。こうして人の判官鼻厘の心理を突く事であたし達は周囲へ”実は味方なのでは?”のイメージを植え付け、逆転劇の伏線にする事が出来るのだ。

この時あたし達が保持していたOSR値は謎の第三勢力へ一時的にプールされる。そしてそれは後にあたし達が一護と共闘する際に何倍にもなつて我々の下に戻ってくるという寸法。

ちなみに今ネリエル達を通つた【叫界門】は浦原さんや尸魂界ソウルソサエティ、そして敵の拠点見えざる帝国ヴァンデンライヒに感知される想定だ。

叫谷勢力が虚圏ウエコムンドで動いたという事実はかなりの囟情報になるだろう。一護もネリエルのSOSを聞いて移動してくれるだろうし、これで敵さんが原作同様「今の内に死神達を襲おう」と考えてくれたら好ましい。

…そして暫くして、あたしの望み通りの報告がやって来た。

——見えざる帝国ヴァンデンライヒによる
ソウルソサエティ
尸魂界奇襲作戦だ

一護よ。

あたし達のヒーローよ。

これからこの世界はあなたに対する”甘さ”を失っていくだろう。霊王という絶対の理ことわりの力を振り翳し、あなたの戦う土俵の外から一方的な攻撃をしかける無慈悲で理不尽な敵で溢れかえるだろう。

そんな運命はあたしが変わえる。

あの藍染惣右介が運命に抗うべく生み出した桃玉と、滅びの運命を乗り越えた破面アランカルの英霊達と共に。

だからあなたは、誰もが望んだ、あの最高にオサレなヒーローの姿を…

読者あたしに見せて——

虚圏つてSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

霊子の震動が空座町の大気を伝う。はたと異常に気付いた茶渡泰
虎は、隣の石田雨竜と同時に腰を浮かせた。

感じる霊圧は間違はなく虚^{ホロウ}…否、破面^{アランカル}。しかし無視できない程に
混ざったもう一つの異質なソレに、彼は違和感を覚えていた。

「二護が誰かと戦っているようだ。井上もいるし大丈夫だとは思
うが、俺も一応様子を見に行こうと思う」

「……なら僕が黒崎家^こに残ろう。組織的な襲撃だった場合に夏梨^{かりん}ちや
んたちを守る奴が必要だ」

「？ わかった、頼む」

言い淀む石田を訝しむも、状況に急かされ茶渡は一人で黒崎邸を後
にした。

方角と距離から見るに戦場は隣町だろうか。敵の気配を辿り、青年
は一気に距離を稼^{フルプリンゲ}ごうと完現術の歩法を意識する。

その途中、妙な同行者が街角の陰からぬるりと現れた。

「——お久しぶりっスねえ、茶渡サン」

剽軽な態度で顔を覗かせたのは甚兵衛姿の帽子男。名を浦原喜助
という茶渡達の胡散臭い協力者だ。

相変わらずの様子に呆れつつ簡単な挨拶と情報共有を行う二人。
だがそこで帽子男が不自然に間を空けた。

「…少し前から虚^{ウエコムンド}圏で妙な動きがありましたね」

「虚^{ウエコムンド}圏？」

「ご存知あそこは藍染の残党が叫谷へ去ったため魂魄の過疎化が酷い。何が起きても大勢には影響を及ぼさないだろうと半ば放置されてました」

それに目を付けた謎の勢力が現れた。そう述べた浦原が遠くへ視線を向け、表情を硬くする。

彼が零した呟きは、かつてない巨大な動乱を見据えた不穏な言葉だった。

「…ようやく欲しかった情報が出揃いそうなんスよね。これまでの全てが一本の線で繋がりそうな、そんな予感が」

茶渡が黒崎邸を発った頃、隣町の鳴木市の上空。黒崎一護は地上で控える井上織姫に見守られながら謎の白衣装の敵、アズギアロ・イーバーンと戦っていた。

「お前、そのネックレス…!」

「どうした、どこかで見覚えがあったか? 黒崎一護!」

容姿、霊圧、戦法、発言。全てが謎を呼ぶ男の正体が気かりだが、一護は逸る思いを押さえて相手を追い詰める。

敵の霊圧は護廷隊隊長格の領域に踏み入る程。雑魚ではない。しかし内なる虚の枷を解かれた今の自分が此れしきの相手に苦戦する筈もない。

然程の間もなく、イーバーンは一護の無造作な剣圧の前に膝を突いた。

「ぐ、うつ…まだだ! この程度では私は倒せぬぞ、黒崎一護! 卍解なしの貴様ではなア!!」

「…懐かしい台詞だな、それ」

いつぞやの好敵手、あのヒゲ面破面の顔を思い浮かべながら、一護はしぶとく足掻く男の挑発に応じる。

「卍解」

——天鎖斬月——

それはかつての強敵との戦いで教わった戦士の礼儀であり、また敵の口の滑りをよくする状況打開の一手に過ぎなかった。

しかし、直後。

「…シヨコラーデは変わらぬようだな、黒崎一護」

「なんだ、光…？」

懐から仰々しく、掌大の円盤を取り出すイーバーン。そこから詠唱に呼应し妙な術が放たれ一護を襲う。

そして。

「ぐっ!? まさか…！」

四度目となれば体が覚えている。朽木白哉との初戦、藍染惣右介との決戦後、そして銀城空吾の陰謀。

これはあの時と同じ、己の霊力が奪われる感覚だ。

させてたまるか。

油断を取り払った一護は一気に霊圧を高めて術を打ち砕く。それに驚く敵が零した悪態は聞き捨てならないものだった。

「何故だ、話が違う！ 何故——貴様の卍解は消えない!？」

…なんだ今の霊術は？ 卍解が消える？

いや、それより”話が違う”だと？

ここで一護は男の背後にいる組織的な存在、その脅威性を認めた。瞬時に意識を切り替え【天鎖斬月】の鎖でイーバーンを拘束。

失ったあの人の力の名残は、こういった技や応用として今も一護の中に息づいていた。

「くっ…！ これしきの小技でこの私が…ッ」

「随分不満そうだな。お前が見たがってた卍解の一部だぞ」

虚の仮面ホロウの名残といい、霊子の飛び道具といい、なぜ相反する種族の力をこいつが持っているのかはどうでもいい。どうせ自分を襲った理由だって何かの時間稼ぎか、さっきの【卍解封じのメダル】の存

在を刷り込む事でこちらの動きを鈍化させようと目論んだのだろう。

それより重要なのはもう一つの問題。この白衣の男の登場を示唆するかのように届いた、遠方の只ならぬ状況を伝える——あの腕輪の声だ。

「ここで吐いて貰うぜ、イーバーン。お前に俺を襲わせた奴がどこのどいつで、そいつが今虚^{ヴェユムド}圏で：俺の仲間は何をしてんのかをな！」

だが凄む一護をジツと見つめていたイーバーンが次に取った行動は、その問いに答える事ではなかった。

「：作戦終了、帰還する」

「なっ!？」

突如、男の背後で影状の黒いナニカが噴出した。それが”空間の裂け目”だと気付いた一護は反射的に距離を取ってしまう。

「しまった!」と焦るこちらを見つめる敵の顔には、満身創痍な弱者のそれとは違う、まるでこちらを値踏みするような好奇の色が滲んでいた。

「気になるならその眼で確かめに行くといい、黒崎一護」

——”奴等”は既に動いているぞ

そんな不穏な台詞を残し、謎の襲撃者アズギアロ・イーバーンは鳴木市の上空から姿を晦ませた。

「……あらら、逃げられちゃったようですねエ」

悔しげに虚空を睨む一護の背に、呑気そうな男声が投げかけられる。近付く霊圧に気付いていた彼は面目なく頭を掻きながら振り返った。

「悪い、浦原さん。チャドもわざわざ来てくれてサンキューな」

「いえいえ。面白い話も聞けましたし上出来っスよ、黒崎サン」

「一護、今の奴は一体…?」

茶渡の疑問も当然。だが情報整理と推理の頭脳労働ならこの場に適任者が居るため、一護は無言で踵を返す。

彼の関心は今の出来事から既に離れていた。

「…浦原さん、頼んでいいか?」

「無論、そう来ると思っただけ準備は済ませてるっスよ。浦原商店自慢の安心安全超特急へごあんなーい♡」

ニヤリと片手のステッキを回す元十二番隊隊長の闇商人。その顔に以心伝心の仲間達も気付いたのか、新たな戦いの始まりに覚悟と自信を漲らせていた。

「黒崎くん…」

「安心しろ井上、あいつ等は絶対に生きてる。だから俺達で助けに行こう」

不安を覗かせる織姫を笑顔で鼓舞する一護。次なる戦場は、藍染惣右介に奪われたこの少女を救うべく激闘を繰り広げた、常夜の砂漠世界。

心強い戦友達と共に、英雄はかつての死地【ウエコムンド虚圏】へ舞い戻る。

…だが浦原の解^{デスコレル}空を通り抜けた一護たちが最初に目にしたのは、悪霊たちの楽園の変わり果てた姿だった。

「な…なんだよ、これ…!」

辺りに満ちる黒い煙。焼けた臭い。そして眼前で轟々と燃える青い炎。かつての威容が見る影もない、瓦礫の山と化した^{ラスノーチエス}虚夜宮の残骸がそこにあつた。

「誰も居ない…」

「くそっ、遅かったか…ッ」

「お待ちを黒崎サン。隠れんぼが得意な人達がいるようです」
ふと浦原が何かに気付く。

それは不自然に揺らぐ空間の歪。流石の分析力で彼が迷彩膜を暴くと、奥で複数の人影が蠢いた。

「!? 誰だっ!」

「クソツ、もう奴等に見つかったのか!」

「いえ、この霊圧…まさか死神?」

臨戦態勢でこちらへ振り向いた彼ら彼女らは、アランカル破面だった。全員がボロボロで、特に獣人のような三人の女たちにおいては皆片腕を損じている。自分たちが来る間に余程の死闘があったのだろう。

あのイーバーンと同じ陣営か、はたまたこちらの味方か。一触即発の空気は、されど殺気立つ三人娘の陰に隠れていた二人の男の声で霧散した。

「!! そ、そのアホそうな髪色…一護でヤンスか!」

「まさかまた相見えるとは…! よく来てくれた、我が盟友よ!」

「お前ら…ペツシエにドンドチャツカか!? 無事だったのか!」

クワガタ似とギョロ目の珍妙な仮面を被った二人組の破面。アランカル懐かしい顔ぶれに一護は目を見開く。

「そうだ! ネルは無事な——」

だが辺りを見渡した青年は直後、絶句する。

彼らに囲まれ横たわっていたのは、傷だらけで動かない、あの途絶えた腕輪の主。二年前に大恩を受けた破面アランカルの女性。

元第3トレス・エスバード十刃ネリエル・トゥ・オーデルシユヴァンクだった。

”滅却師は弓しか使わない”

これはヨン様篇におけるチルツチ戦で、我等のコピペ王・石田雨竜が残した名言の一つである。後に登場するラスボス軍団【星十字騎士団】のNTB描写を見ると冗談にしか聞こえないが、あの有名すぎる「殺戮能力の高さで〜」の台詞でブリーチ読者達の十刃序列論争を迷宮入りさせた破面No. 11シャウロン・クーフアン、かの氏に匹敵する情報戦の策略家・石田雨竜の姿が見えてくる。

石田はこのたった一つの虚言で護廷十三隊の敵戦力分析を混乱させ、尸魂界を壊滅させた…などと考察する鱒ファンもいるらしい。

そんな少年漫画にありがちな連載後半の初期設定破綻を揶揄したネタはさておき。実はその死に体の初期設定に敬意を示す“真の滅却師”が、昨今の邪道連中の中に紛れている事を諸君はご存じだろうか。

それが、こちらの御方…

『——ハイハイ！ 静粛にー！ これより、生きるか!? 死ぬか!? 虚・破面混合大センバツ大会を開催いたしまあす!』

紹介しよう。

伝統を重んじる誇り高き滅却師の鑑である、虚圏狩猟部隊統括狩猟隊長キルゲ・オピー氏である。

「お、始まった始まった」

という訳であたしこと雛森桃ちゃんがやってきたのは、お馴染み【界間観測所】。三界のあらゆる原作シーンを見逃さないようヨン様勢力の霊性技術と桃玉パワーを駆使して用意した、あたし専用のブリーチ鑑賞施設だ。

ただいま監視しているのは話題のキルゲさん。ユーハバツハの命令で対尸魂界用の先兵を集めるべく虚圏で頑張っている場面で

『…な…仲間になるって名乗り出ればすぐに助かるのか…?』

『ハアイ！ そんなワケありませんねえ!』

『バツ!』

キヤーキルゲサーン!!

これよこれ、鯨スレにおいて無類の汎用性を持つ名セリフ! いやあ一時はダメかと思っただけど、前世でも多用してた煽りフレーズのご本人 ver. を聞けるなんてやっぱこの世は幸せに満ち溢れている。ちゃんと録音も忘れてないぞ!

当然だが、あたしの行動のせいでこの鯨界は原作から大きく変化している。目先のOSR値に目が眩んで破面軍の大移住をやらかした桃ちゃんガバの代償でもある虚圏ウエコムンドは最たるもので、この千年血戦篇クインシーで滅却師の先兵として組織される筈の野良破面アランカルたちがそもそも現地に殆ど居なくなつた。そのため彼らを従えるべく派遣されるキルゲ狩猟部隊が存在理由を失いかけていたのだ。

問題に気付いたあたしは慌ててDJに泣きつき実験用大虚メノスを譲ってもらい、彼らをモブ破面として破面化させて虚圏ウエコムンドにばら撒いた。もちろんヨン様動乱から避難してた者達が戻ってきた感じに見えるよう工夫するのも忘れずに。

そして二年後の本日、なんとかこうしてキルゲさんをお迎え出来たのです。

「まあ仮にも未来改変のチート能力を持つラスボスの部下だし、別の任務があつて虚圏ウエコムンドに来たんだらうなあ」

もともと、流石のあたしも彼が原作通りの役割を負っているだけだと考える程ガバガバではない。ユーハバツハの思惑を警戒したいけれど、それでも虎穴に手を伸ばしてしまうほど魅力的なのが、一護の数少ない好対決「キルゲ戦」だった。

何としてでもあの戦いは再現したい。チャン一の活躍はもちろんだけど、今回のメインはキルゲさん。一護の強さを読者あしたちに論理的に解説して主人公の株を上げてくれて、尚且つちゃんと自分自身の見せ場も作ったあの名敵役の雄姿は鯨ファンなら是非とも観ないとね。

さあ、つぎはぎだけど舞台は整えた! あとは虚圏ウエコムンドに派遣したネリエルたちにキルゲさんと一戦するよう指示を出して、その途中であたしが不自然に通信を切ればパーフェクト:

『——虚^{ホロウ}への憎悪で己を見失うな、キルゲ。その程度の弱者でも利用価値はある』

つて、ん？

誰だろう、キルゲさんの近くに高い霊圧反応がもう一つ…？

『見失ってなどいけませんよう。こんな雑魚を陛下の御前に立たせるなどそれこそ不敬というものでは？ 次期後継者殿』

『…憶測で物事を判断するな。陛下は預言者を騙る愚者をお許しにはならない』

『失敬。失言でしたね』

あつ。

スウ…

なあんかとんでもねえ美人の金髪ロン毛お兄さんの顔が画面に映ってますねえ…

「作中最イケメン」とか「過去篇のシヨタ時代に性癖壊された」とか鯨読者の間で言われてそうなあ滅却師^{クイーン}は一体誰なんやろなあ…？

(現実逃避

『それに破^{アラシ}面の選別および統率はワタクシに一任されています。互いの任務には不干渉が星十字騎士団の原則です。違いますか——
ハツシユヴァルト？』

おいやっぱポテトじゃねーか！

なんでラスボスの腹心が虚圏^{ソコ}に居るんだよ！ こんな序盤に主人公と戦わせていい類の敵だと思ってるんですか!？ 鬼！ 悪魔！

久保○人！

くつ、ユーハバッハの未来視能力め。これは非常によろしくないですよ皆さん、一護VSキルゲの戦いにポテト参加なんてトラブルが起

きたら貴重なチャン—OSR値稼ぎバトルがばあになっちゃってしまおう。

ある程度覚悟していたとはいえまさかもうバタフライエフェクトを起こしてくるとは、ラスボス恐るべし…!」

「だ、大丈夫。ネリエルを大人形態で派遣したのはこういった原作にない敵の援軍を想定したものだから」

「そうだ、狼狽える事なかれ。ここで只では転ばないのがあたしがガバ森の名を返上した所以。」

「今あたしは虚^{ウエコムンド}圏にネリエル一派&ハリベル配下三人娘を放り込んでいる。原作イベントのメンバーでもある彼女ら (+α) の役割は、やってくる一護たちに「破面軍のピンチ」を印象付ける事だ。」

「当初はあの娘たちをキルゲさんにぶつけ、直後にあたしがワザと連絡を遮断してみんなに混乱して貰い、一時撤退するネリエルたちを一護と合流させるつもりだった。だけどキルゲさん以外の敵の主力がいるならそっちと戦ってくれた方がより切羽詰まった場面を作れるはず。」

「ハツシユドポテト」もといユীগラム・ハツシユヴァルトは王命に忠実な側近。先兵に使える強い破面^{アレンジ}のネリエルたちをその場で殺すとは思えない。

「そう。安全面の意味でも今回のハツシユヴァルト襲来は、あたしが目指すオサレ逆転劇を見据えた【破面軍のピンチ】の演出に最適の状況なのだ。」

「それにもしネリエル達を殺すのなら彼らの拠点にいるユーハバツハが自ら行うほうが合理的だろう。」

「何故ならバツハの能力は…」

『「——こちら東仙。イーバーンが黒崎一護との戦闘を終えるぞ』』

「おっと、噂をすれば。」

「あたしは現世の鳴木市アジトで一護達の動きを監視しているDJ——KANAMEの報告を受け、映像画面を切り替える。」

「イーバーンさんはそちらでしばらく預かってください。敵の拠点へ」

戻ると殺されてしまいます」

『…滅却師クインシーの王は力を分け与えた相手の能力のみならず記憶さえも回収できるのだろうか？ 慈悲など捨てて今直ぐ処分するべきだと思っ
がな』

その通り。あたしがネリエル達に無茶するなど厳命したのは、捕
まって強引に滅却師クインシーの力を埋め込まれ聖アウスヴェーレン 別で記憶ごとこちらの情
報を奪われないためでもある。

既に力を埋め込まれたイーバーンは「一護を虚圏ウエコムンドへ誘導する作戦」
など幾つかこちらの意図が垣間見える情報を持っているが、彼自身は
ネリエルたちと違って虚霊坤ロスヴァリエスの深部に接した事はない。…まあ雛
森イイイイ！にかまけてたあたしが彼の存在を忘れてたガバの賜物
みたいなものだけど、故にユーハバツハに漏れる心配は不要だ。

だけど、イーバーンには生きてもらう。

「聖アウスヴェーレン 別は理論上虚ホロウと霊王の因子を持つ力には効き難いはずです。

反膜ネガシオンと崩玉の力で守られてる現世アジトの中なら安全でしょう」

『……わかった、従おう。だがその甘さが仇とならぬ様、気をつける事
だな』

そう言っただけでD Jは通話を切った。何だかんだで心配してくれる彼
はやはり優しい。

でも大丈夫、戦略的な判断ですよ。

イーバーンが一護との戦いの後に敵の拠点に戻らないことで「奴に
は別の思惑が…？」と疑問が生まれ、あたしが欲する「逆転劇の布石」、
つまり破面軍アランカルの援軍フラグになるのだ。

またイーバーンはユーハバツハに無惨に殺されることで敵の悪役
OSR値を高める役目があるが、実はそちらはあの同胞殺しの聖アウスヴェーレン 別
のシーンで一気に上げさせたほうが総合的に高ポイントを稼げたり
する。

OPBは奥が深いのよ、D J。

その後無事にイーバーンくんの保護が終わったのを確認し、あたし
は虚圏ウエコムンドの状況へと目を向ける。

そろそろネリエルたちがポテトと遭遇する頃だ。あたしも早めに音信不通（笑）になっておこう。

さて、あちらはどうなってるかな…

『ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンク。まさか貴様程”中枢”に近い者が我等の前に現れるとはな』

『!? 無傷…ですって…!?』

『イーバーンは奪われたと連絡があったが、どの道ヤツ如きでは双方大した情報は得られまい。逃げられると思うな、元第3十刃』

トレス・エスパード

ちよつ、正義勢力○のこちら側から先に攻撃仕掛けるとかネルさんせつかちすぎイ!

不味いぞ、ポテト相手に淫夢行為は彼の『シヨタレ〇プ! 野獣と化した叔父』のトラウマ的に逆効果だって――

あつ。

あ…

…はあ（クソデカ溜息

『ネリエル様!? くつ、おのれよくも!』

『バケモンかよ…あのハリベル様の前任十刃相手だぞ…!?』

エスパード

『援軍だ…! 援軍を要請しろ!』

『ま、待って! 繋がらない…英霊宮殿と繋がらない…ツ!』

ヴァアルアリヤ

『何だって!?!』

…流石ラスボス勢力No.2。相性の悪さもあつたけど、如何に強化済みネリエルとて第一階層^{レスレクシオン}だけで立ち向かえる相手じゃなかったか。

最大戦力がダウンしてしまい、ボスの虚霊^あ坤^た女王^しとも連絡が取れないこの状況。どこからどう見ても破面^{アラシカル}軍、空前絶後の大ピンチ!

だが鯨読者ならぐぐ存じだろう。ブリーチにおいてはこの”大ピンチ”こそが、最終的な勝利を手にするのに絶対に必要な試練なのです！

『スンスン！ ミラ・ローズ！ やるぞ！』

『命令しないでくださる…ッ』

『こういう用途に使うのは中級大虚時代以来だな…！ いくぜっ！』

——
混キメラ獣バルカ神
——

三人娘の左腕を犠牲に召喚する、コスパ最強リョナ奥義”アヨン”君。あまりの禍々しさと予想外に強い怪物を見てポテトとキルゲさんが驚いている。

あたしが鍛えた破アランカル面達アランカルが姿を晦ますのには、その一瞬の隙で十分だ。

『……逃げたか』

『トカゲの尻尾切りとは思えぬ凶悪な罠でしたが、やられましたね。獣らしく危機には聡い』

スンスンの切り札【蛇ミューダ殻ダ砦】の光学迷彩と霊圧遮断膜を駆使し、皆が戦場を離脱する。原作ではキルゲさんの手加減なしの聖スクラヴェライ隸スクリューで膜ごと強引に崩されたけど、舐めプ状態のあの二人では見つけるのにそれなりに時間がかかるだろう。

よし、今の内にヨン様の遺産の黒腔ガルガンタ操作技術でちよちよいのちよい。一護達が通ってくる浦原さん解デスコレル空デスコレルの出口をネリエル達の近くへ開くよう操作すれば、予定していた【一護vsキルゲ】の準備は終了です。

あとはあたしのガバで虚ウエコムンド圈ウエコムンドへやって来てしまったポテトが勝手に帰ってくれたら最高なんだけど…

『追うぞ、キルゲ。あの傷ではそう遠くへ行けないはずだ』

おい何でだよ！ あなたそんな遊んでる暇ないでしょ、もうすぐ陛下が尸魂界ソウルソサエティに戦争を吹っ掛けるお時間なんだから！

『…陛下の側近ともあろうお方がそのような雑事をなさってはいけません。貴方には他に為すべき事があるのでは？』

ほ、ほらキルゲさんもこう言ってるし、そろそろハツシユヴァルトさんもあつちに戻る？

星十字騎士団の指揮官が作戦時に不在とかオサレじゃないよ？

陛下（に化けてるロイド・ロイド）も副官のあなたを連れてないと影武者だつて怪しまれるかもよ？ 山爺とポンコツ四人衆はともかく卯ノ花さんとか京楽さんとかマユリ様とかはそういうの鋭いよ？だから、ね？

『逃したのは私の不覚だ。特にあの元十刃エスパーダの雌破面は情報の宝庫。私が確実に陛下の御許へ連れてゆく』

『我が狩猟部隊ヤクトアルメイは信用に足りませんか？』

『特記戦力の黒崎一護と浦原喜助がこちらへ移動している。全ての聖務アウフガベにお前一人で当たるのは達成率を下げるだけだ』

ダメみたいですね：

今のネリエルとの戦闘で彼のヤバさはわかったし、現時点で一護と戦わせるのは断固阻止せねば。

「しようがないにやあ」

まあ打つ手が無いコトもない。

尸魂界ソウルソサエティには死神ボデイの桃ちゃんがいるのだ。あつちのあたしが暴れたらユーハおじさんも警戒してポテトを呼び戻してくれるはず。彼を虚圏ウエコムンドへ送ったのがあたし達虚霊坤ロスヴァリエスへの牽制なら尚のこと。

どうせ【無間】のあの人がいつもの意味深オサレ台詞でユーハバツハを挑発するだろうし、分身の死神ボデイで敵の出方を見ておこう。原作では描写されなかった奥の手を用意しているかもだからね。

…というワケで予定変更、尸魂界ソウルソサエティへ視点をGO！

五番隊副隊長のお仕事を頑張る死神桃ちゃんは現在、上司の新隊長と一緒に瀨霊廷を駆けていた。敵が発動した青白い霊圧の光柱が幾

つも立ち上る光景は中々素敵な絶望感がある。

ふふ。BLEACH最終章【千年血戦篇】始まったな。

「——ツチ、なんやねんあいつ等！ 遮魂膜しゃこんまく中に直接現れよった…！」

左右非対称の金髪おかつぱにミラノ巻きの白スカーフ、貴族趣味な白い内羽織とお洒落に気を遣う男・平子さんが舌打ちする。

彼の動揺も当然。本誌の通り、護廷十三隊は数日前に突如謎の集団から宣戦布告を受けて厳戒態勢を敷いていた。その最中の襲撃だったのに敵のあまりの強さに瀰霊廷は一瞬で大混乱へ。あたしも苦い顔を演じて場の空気に合わせます。

ちなみにあたしも平子さんが育む新生五番隊の隊風に乗便して容姿OSR値稼ぎのお洒落を頑張ってるよ。原作最終章雛森ちゃんのボブカットにクソデカヘアピンもちゃんと装備済みだ。

「恐らく涅隊長がおっしゃってた滅却師クインシーです！ なんて霊圧…っ」

「叫谷勢力が動いてたんは連中の力を知つとつたからかい…！ 零番隊は何してんねん、連絡取り合つとるんとちゃうんか？」

「ひとまず三席以下の隊士達を避難させましょう！ 隊長格未満の実力では到底太刀打ちできません…！」

「蟹沢のハゲ、”またハブられた！” 言うて拗ねるやろなあ…後でフォロワー頼むで桃！」

う、押し付けられた。あの人も桃ちゃん式臓器鍛錬法で強くはなってるんだけどね、今回は敵がちよつと頭おかしいレベルだから許して。

鬼道で蟹さんへ指示を飛ばし、あたしは平子さんと二人で敵のモブ雑兵をお掃除しながら光柱の一つを目指す。全く奴等ときたら剣ばつか使いやがって、滅却師クインシーの誇りはないんですか？

同胞達の墮落に顔面真っ赤な石田氏の姿を想像していると、ふとあたしの霊圧感知が大きな気配を掴んだ。その覚えのある霊圧に内心ほくそ笑む。

「ッ！ 平子隊長、あれって…！」

「あかんな、狛村ンとこや…！」

揺れている味方の気配へ急行するあたし達。どうやら相当苦戦中のように離れた距離からも敵の攻撃らしき爆発音がドゥンドゥン聞こえてくる。煙の中に垣間見えるのは狛村さんの鎧巨人の正解だ。

…ふふ、鯨読者ならもうお分かりでしょう。

本日のあたしのサンドバツgげふんげふん、対戦相手はあのお方。
ヴァンデンライヒ見えざる帝国人気投票（男性）によるナンバーワン！

さあ、ユーハバツハがポテトをここ戸ソウルンサエティ魂界へ呼び寄せてくれるまで、僕は！ 殴るのを！ 止めない！

まずは準備運動にあたしと遊ぼ？

バンビちゃん

爆撃つてSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

死神たちの牙城、尸魂界ソウルソサエテイとの戦いが始まる。

滅却師クインシーの祖、西方の世にて聖四文字YHVHを冠する神王ユーハバツハ陛下の、千年に亘る悲願らしい。”らしい”というのも、そんな事は新参の滅却師である少女——バンビエツタ・バスターバインにとつてはとうでもない話だったからだ。

『慄け、死神共。これより我が精鋭…』

——星十字騎士団シユテルンリッターが

お前達を肅正する

陛下の号令に呼応し、滅却師の蒼き滅火が尸魂界の各地に聳え立つ。その巨大な火柱を座標に、バンビエツタは精鋭部隊の他の同僚たちと同時に、予定時刻ぴつたり死神たちの街の中へ転移した。

「うわっ、うじゃうじゃ湧いてんじゃん。黒い着物がゴキブリみたい」
数えるのも億劫な雑魚死神どもを蹴散らし、女滅却師は自身が担当する火柱付近で敵の増援を待つ。これだけ目立てば目的の”隊長格”が向こうから来てくれるだろう。

「！」

誰かは訊いていないが作戦の立案者に一人感心していると、ふと腕を掴まれた。だが「邪魔」と睨んだ下手人の姿を見て、バンビエツタは目を丸くする。

「…こんな少女までもが賊軍の戦士なのか…！」

犬だ。比喻抜きに犬の頭をした大男が憐れむような瞳でこちらを

見下ろしている。しばし呆けた少女は、しかし即座に男の背で翻る白い羽織に気が付いた。

「…こんなワンちゃんまで隊長やってんの？　ズイブン人手不足なんだね、尸魂界ソウルソサエティって」

「七番隊隊長狛村左陣こまむらさじん。畜生に生まれ落ちようと元柳斎殿げんりゆうさいへの忠義に偽り無し！　…轟とどろけ!!」

—— 天てん譴けん ——

犬死神の解号の後に現れたのは、巨人の片腕。それが連中が自慢する斬魄刀解放の第一段階か、振り下ろされる敵の大木の如き巨剣は恐るべき破壊力を宿していた。

だが。

「ぼつかじゃないの？　その程度のパワーにやられるような雑魚はいないのよ、あたしたち星十字騎士団シュテルンリッターにはね」

あの大量が担い手と同じ速度で動くのは確かに脅威だが、こちらが反応できるレベルなら何の問題もない。バンビエツタはひらりと巨剣を躲し、飛び上がった上空から犬男へ複数の霊弾をばら撒く。

着弾と同時に、慣れ親しんだ破壊の暴風が彼女の頬を撫でた。

「!?　爆弾…それがお主の能力か…!」

「そ。でも普通の爆弾じゃないよ。どーぶつの脳みそで違いが見分けられるかな？　そーれっ!」

建物の屋根に陣取り、もう十発、二十発と立て続けに霊弾を敵の周囲に打ち込む女滅却師。無造作な攻撃で容易に大地を抉る大火力だ。

だが砂埃が吹き消えた戦場の広場では、大勢の雑魚死神たちが五体満足で健在。

そして。

「…卍解ばんかい」

—— 黒繩天譴明王こくじょうてんげんみょうおう ——

突如出現した、巨大な鎧武者が彼らを庇うように蹲っていた。

「…なにソレ。そんな下っ端共を助ける為に卍解を使ったの?」

片膝を突いて尚も睨んでくる犬男に、バンビエツタは口をへの字に曲げる。足手まといを抱えてこのあたしに勝てるだけでも夢想しているのだろうか。弱いクセに調子に乗りやがって。

とはいえ少女はその勝気な態度に反し慎重だった。臆病とも言える。圧倒的劣勢に立たされながらも戦意を失わない相手にはそうさせるに足る希望があると推理した。

その希望とは即ち、目の前の武者巨人だ。

「ふーん」

バンビエツタはニンマリ嗤う。特にこだわりはなかったが、そんなに強力な卍解ならさぞこの先の戦いに役立つだろう。

「決めた、あたしはあんたのヤツにする。光栄に思いなさい、ワンちゃん」

「…？ 何の事——なにっ!？」

不意に、遠くで暴れる複数の気配が揺らいだ。他の星十字騎士団と戦う死神たちの霊圧だ。どうやら同僚たちはうまくやったらしい。

「朽木隊長に日番谷隊長…碎蜂隊長の卍解の霊圧が…消えた…!? ツ答えるろ！ お主ら皆に何をした！」

「さあ？ でもスグにわかるよ、あんたも——ねっ!」

スカートのポケットに左手を突っ込み、彼女はムカつく敵の度肝を抜いてやろうと大袈裟に例の道具を披露する。

展開する漆黒の五芒星。そこから射出される光の檻。試験と寸分違わぬ現象が犬頭の隊長へ殺到し…

「…ろれ倒」

——撫逆——

はた、と気付いた時。バンビエツタの術式は無人の空き地に突き刺さっていた。

「…は？ 何？ 何が起きたの？」

混乱する女滅却師は慌てて周囲を探す。しかし獲物の犬男はどこ

にもいない。それどころかその他の平隊士たちも、誰一人。

「ちよつと、逃げたのワンちゃん？ 隠れてんの？ さつさと出てきなさいよ！」

叫べど答えはなし。霊圧感知にも反応なし。万策尽きたか、単に面倒になったか、バンビエツタは怒りのままに周囲を更地に変える事にした。

「ぐくくく…」

出てこ　　い!!

巨大な爆発が和風の街並みを消滅させる。煤けて真っ黒に染まった広場の中心で彼女は改めて辺りを見渡した。

そして開けた更地の端に、不自然に無傷な石畳の一角を見つけた。

「…なんやねんあの嬢ちゃん。見つからへんから周りごと吹っ飛ばすとか発想が桃オマエと同じやないかい」

「一緒にしなくてください！ あたしは感知がダメなら霊糸網で、それもダメならばら撒いた霊子の反射でちゃんと敵を探しますっ」

何も無い石畳の一角から呑気な男女の言い合う声が聞こえる。聞き覚えの無い声だ。新手かと凝視するとまるで蜚気楼のように景色が歪み、先程の犬隊長と平隊士たちを庇う二つの人影が現れた。

その片割れの人物の顔を見たバンビエツタは、思わず息を呑む。

「！ あんたは…ッ」

小柄な身体、肩長の黒髪、可憐な容姿、そして左腕に巻かれた『五』の漢数字を冠する腕章。

最大限の警戒を促す「特記」扱いでは生温い。すべからくこの世から消し去るべき「抹殺対象」として見えざる帝国内に周知されている、唯一の敵戦力。

”読書家”の抜け殻——雛森桃ひなもりももが、緊張に強張る顔でこちらを見上げていた。

「平子隊長は相性が悪すぎます。ここはあたしが」

「チツ…あんま無茶するんちゃうで、桃…!」

たったり、と背中を冷や汗が伝う。バンビエツタは傷だらけの犬隊長たちが新手のおかつぱ男に連れられ撤退していく姿を視界に認めつつ、彼等を追う一步を踏み出すことができなかった。

理由は彼女の眼前に立ち塞がった、一人の女死神。

「……へー。あたしのトコに来るんだ。情報ダーテンだと氷使いのお子様隊長クンの方に現れる想定だったんだけど、ね…」

最悪だと頭を抱えなくなる感情を押し込め、不遜な笑みを作るバンビエツタ。こちらが持つ情報量に驚いているのか女死神——雛森桃が僅かに目を見開く。

現五番隊副隊長にして、かつて藍染惣右介に従った虚圏ウエコムンドの戦力を実質的に指揮していた破面軍軍団長アランカル。

この妙な経歴の小娘に關し、神王ユーハバツハは極めて異例な対応をしていた。ヤツ一人のために対策研究会が組織され、更にバンビエツタら一次侵攻のメンバー全員に”専用の星章メダリオン”が与えられている。

上層部の尋常ではない警戒度を見て、何かと頭の回る古参のロバートは「遭遇者は戦力分析の捨て駒だ」と酷く怯えていたが、成程あの空座町決戦の映像を見れば然も在りなん。

バンビエツタは曲者揃いの星十字騎士団シュテルンリッターの中で最も優れた正面火

力を持つ滅却師である。あらゆる搦め手を純粹な破壊力で叩き潰せると自負する彼女にとって、故に同種の雛森桃の力は何よりも解り易い恐怖だった。

「ッ、知ってるわよ。あんた、藍染惣右介についてって尸魂界を裏切ったんでしょ?」

「……」

「それなのにちよーきモい化物にされちゃって、あげくにソイツの魂を抜き取られて用済み。ご主人様にポイされちゃったのよね、かーわいそー」

事前準備はこちらが上。バンビエツタは仲間の言葉を思い出し、逃走を視野に入れながら様子見の一撃を撃ち放った。

肌を焼く爆炎が大地を真っ赤に染める。殺す気とはいえ所詮小手先の小規模爆撃。

さてどうなったか、と窺った敵の姿は、さりとして女滅却師自身の予想に反したものだだった。

「……当たった?」

苦痛に顔を歪める雛森桃の顔を見て、驚いたのは先攻のバンビエツタの方。負傷した? あの程度の威力で?

あまりに歯応えがない。先程のワンちゃん死神の方がまだ覇気を感じた。ホントにこれがあの映像にあった化物と同じ人物だということのか。

混乱するバンビエツタの緊張感にぽっかりと穴が開く。そしてその感情の空白に陣取ったのは、彼女の悪癖——傲慢だった。

「……なんだ。やっぱ弱体化したって話、本当だったんじゃない?」

ニヤア、と口角を吊り上げる少女。零れた吐息は安堵故か。バンビエツタはこの瞬間、自分が弱者ではなく捕食者の立場にあると判断した。

「ッ、霊圧を瞬間的に超高温へ変えて爆発を起こす能力……ではなさそうですね」

「へー、わかつちやう？ でも”鬼道系”だっけ？ 自分の霊圧を爆発させるしか能がないあんたのくだらな斬魄刀とは天と地ほどの差があるのよ！ あたしの「爆ジ・エクスプロード撃」はねっ！」

恐怖の反動で普段以上に気が大きくなっている自覚は彼女にない。感情に呼応した爆撃の嵐が眼下の女死神へ襲い掛かる。

「可哀そうに、魂魄の片方を失ったらそんなに弱くなるんだ！ ま、ジェラルドもあんたが生きてる事に驚いてたし？ 藍染に浦原喜助の『特記戦力』が二人も関わって何とか保てた命ってワケね！」

「ツツ…！ 何を…知ってるんですか…？」

「なに困惑してんの、自分だけがトクベツだっと思ってた？ ウチにも何人かいるのよ、あんたみたいによくわかんない別のヤバい魂魄と一緒になっつて生まれたつてウワサの奴等がね！」

もつともハツシユヴァルトは雛森桃のアレは厳密には全く異なる存在だと考えているらしいが、自分からしてみれば映像で見たこの小娘の”集合体”も、同僚のあの”動く左腕”の異形も、等しく近付きたくない化物だ。

「でもよかったね、あんたは元の人の姿に戻れて。そーいうのって見た目も人間辞めちゃうヤツが多いらしいし、折角そんなカワイイ顔で生まれたのにあんな現代アートな姿で余生を過ごす羽目になったら死んだ方がマシでしょ？ ペルニダとかよくアレで生きようと思えるよね」

彼（？）と戦うのは生理的にも無理だが、この可愛らしい女死神なら気持ちよく甚振れる。己と同じく大勢の異性を虜にしてきたであろうその美貌を苦痛に歪ませるのは、部下のイケメンたちを喰い殺すいつもの趣味とは違う愉しみが確かにあった。

…とはいえ、脳に焼き付いた恐怖は容易く薄れない。しばしの一方的な展開で鬱憤を晴らしたバンビエツタは、ふと冷静になり相手の様子を確認する。

「ハア…、ハア…ツ」

雛森桃は荒い息でこちらを見上げていた。黒い着物は焼け焦げ、顔にはいくつもの火傷痕が見えるが、致命傷はない。霊力に由らない純

粹な戦闘技術に救われたからだろうか。

一瞬何かの罠、あるいは奥の手があるのかと訝しむバンビエツタは、しかし即座に頭を振る。たとえそうだったとしてもそれはこちらも同じ事だ。

「何よ、もしかして本気出せば勝てるのかと思ってる？ 例えばあたしのメダリオンをどうにかして、”卍解”を奪われずに使える様になつたら…とか」

「…ッ」

雛森桃の眉がピクリと動く。その素直な様に嗜虐心をそそられたバンビエツタは懐から掌大の霊具を取り出した。

二重に重なった特殊な星章。メダリオンそれは目の前の女死神を確実に無力化させる、見えざる帝国が導き出した最新の霊術だ。

「あんた、陛下を舐めすぎ」

その攻撃宣言の直後、メダリオン星章から巨大な光の五芒星が現れた。

「！ させませんッ！」

【縛道ばくどうの八十一”重唱”・断空だんくう閉塞】

咄嗟に鬼道で防御を試みる雛森桃。先程の犬顔隊長との戦いを見ているのだろう。現れた光の星の効果を理解している。

だが甘い。

「言ったでしょ、”舐めすぎ”ってね」

展開された立方体の鬼道結界の中で雛森桃の霊圧が噴出した。しかしそれは彼女自身の意思ではない。立ち上る霊圧は結界を透過して主人の身体から離れ、そのままバンビエツタの星章へメダリオンと吸い込まれた。

その霊具に灯った桃色の光が一体何を意味するのか。自身の斬魄刀を凝視する雛森桃は、正しく理解していた。

「そんな…！」

「陛下は相当あんたのコト危険視されててね。あたしたち
星十字騎士団全員にコレを持たせてくれたの。あんたは他の隊長連
中と違って卍解発動後の僅かな隙さえ見せてくれないだろう、って
ね」

啞然とする小娘を「褒めてんのよ？」と嘲笑うバンビエツタ。

彼女が使用した星章はこの時のために用意された特別製。雛森桃
の卍解に限り、未解放の状態でも強引に奪う事ができる回避不可能な
超霊術だ。

「…ッ、だつたら…!」

【破道の八十九・翠鳳旭來炎】

不利を悟り霊術中心の戦いを試みる雛森桃。魂の相棒を失つても
即座に立て直せる戦術の多様さは驚きの一言。

しかし名高い上級鬼道を仕掛けられようとバンビエツタに危機感
は微塵もない。迫る緑炎の鳳凰へ向け自身の霊圧を小指でピンツと
弾く。

直後、雛森桃の鬼道が爆発した。

「相殺…? 違う、今のはまさか」

流石は優れた鬼道使い。自分の術に何をされたのか即座に見抜い
たらしい。バンビエツタは素直に感心する。

「そ。あたしの聖文字シユリフトの能力は自分の霊圧を爆弾に変える事じゃな
い。あたしの霊圧シユリフトに触れた全ての霊子そのものを爆弾に変える能力
よー!」

「なん…ですって…!?!」

聖文字シユリフト。それは神王ユーハバツハより賜る神の力である。

二十六の文字を頭文字に持つ千差万別の能力の内、バンビエツタが
授かったのは聖文字”E”——爆ジ・エクスプロード撃。霊圧をぶつけ合う斬魄刀の
ような下等な武器で戦う死神共とは別次元の霊能、理ことわりの領域に至る
力だ。

「戸魂界ソウルソサエティにある物質は全て霊子でできてる! 物質だけじゃない、あ
んたの鬼道も斬魄刀も身体さえも! 全部、全部、あたしの霊圧に触
れた瞬間にあたしの爆弾になる!」

「ッ、しまっ——」

「その黒い着物、武器、瓦礫、砂埃、吸い込んだ空気！ さあ、今まであたしの霊圧が触れてきたモノがあんたの周囲にどれだけ溢れてるか、その身で味わってみなさい!!」

その皮肉を合図に戦場が大爆発に包まれる。建物も大気も塵一つ残さず消失し、途轍もない熱風が上空で渦を巻く。

そして黒煙が掻き消えた後。バンビエッタの前に残っていたのは、見渡す限りの景色を抉り取った巨大なクレーターと、その中心で肩を上下させるボロボロの雛森桃だった。

見かけによらず大した頑丈さだが、これでコイツも打つ手がないとわかっただろう。バンビエッタは少女の絶望に歪んだ顔を堪能しようと思いを細めた。

しかし。

「…何よ、その目」

バンビエッタは唇を尖らせる。

気に食わない。卍解を奪い、これだけ痛めつけて尚、雛森桃の瞳にいつもの男たちのような絶望の闇は見当たらない。一体何が彼女を支えているのか、感じる霊圧も最早風前の灯火同然なのにその心は未だ折れていなかった。

「ふん、バツカみたい」

いいだろう。そこまで護廷とやらの為にしぶとく意地を張るのなら、あたし自らが与えてやる。

死神共の尊厳を踏みじじる、最悪の屈辱とやらを。

「忘れたの？ あんたのご自慢の卍解はもうあたしの物。いつまでもそんな舐め腐った顔してるんだったら、その余裕……あんた自身の卍解でぶっ飛ばしてあげるっ!!」

バンビエッタは片手の霊具を空へ掲げる。そして遂にその真価、メダライズ星章化の力を行使した。

天へ聳える膨大な霊圧。周囲に桃色の光が満ち、力の奔流が集束するにつれ幻想的な炎の布へと形を変えていく。

聖文字シュクリフトを与えられた時に勝るとも劣らない、全身に霊力が漲る感覚。なんて美しい。なんて力強い。抗い難い全能感に恍惚と頬を緩めるバンビエツタは、あの映像と同じ可憐な衣装を着た自分の姿を想起し、纏う霊圧の羽衣へ徐に手を伸ばした。

—— 斬魄刀と死神の絆を穢すなんて

滅却師クインシーとは随分無礼な連中ですね

「えっ——がはッ!」

だがその時。突如脳内に冷やかな少女の声が響き、バンビエツタの身体が凄まじい力で締め付けられた。

激痛と驚愕に混乱する女滅却師。しかし何が起きているのか彼女が理解する間もなく、新たな異変が頭上で起きる。

「が…ぎい…ッ、な…何…!」

散らばる桃色の霊圧が集まり、小柄な人影を象る。

それは美しい黒髪の天女。雛森桃が誇る一心同体の稀有な卍解、【羽衣紅梅鈴鈴】の具象体だった。

「…う、嘘でしょ…!?! 卍解が…勝手に動いて…!?!」

『勝手に?』 何故この私が自分の言動についてお前如きに伺いを立てないといけないの?』

少女の『不愉快ですわ』の言霊が体を成し、バンビエツタを圧殺する羽衣に灼熱の梅焰ばいえんが燃え広がる。

「あ、ぎッ、ああああ”あ”ッ!?”

『それで、何だったかしら。貴方の火遊びがプスプス五月蠅くてよく聞こえなかったのですが、確か”くだらない斬魄刀”がどうか…? もう一度言ってくださいる?』

「あああ”アア”ア”アアア”ッ!!」

骨が砕け、臓が潰れ、肉が焼かれ、血潮が沸騰する煉獄の拷問。

一瞬で戦局を引つ繰り返された理不尽。生まれて初めて感じる己の命が散っていく感覚。怒涛の衝撃にバンビエツタは発狂する。

嫌だ。熱い。痛い。なんで。助けて。許して。

無意識に慈悲を求めるも喉から吐き出るのは湿った絶叫のみ。一体どうしてこんな事になった。星章メダリオンが失敗作だったのか。ロバートの言葉通りあたしは陛下の捨て駒にされたのか。それともやはり【飛梅】は黒崎一護の【斬月】同様に、陛下すら正体のわからない特殊な斬魄刀なのか。

いずれにせよ、このままでは負ける。錯乱するバンビエツタに理解できたのはそれだけだった。

「ッあ——」

こんなところで終わりたくない。死神なんかには負けたくない。そんな崇高な心理は鉄火場に置かれた彼女の中に欠片も無い。

体は炭と化し、原初的な恐怖に蝕まれ、バンビエツタはただただこの地獄から逃れようと無我夢中で活路を模索した。

「…ッ！ 離れて飛梅！」

『!!』

それは自らの意思より、動物的な行動原理に近いものだった。

本能的な生存欲求に操られ、気付けばバンビエツタは星章メダライズ化を解除し、その相反する霊圧に封じられていた最奥の力を解き放っていた。

聖炎が天高く立ち上る。目を瞪る超常現象と同時、その中から巨壁の如き靈圧の弾幕が正面へ殺到した。

【爆撃】の名に恥じぬ制圧火力が雛森桃へ襲い掛かる。

「くっ、飛梅！ あたしの下へ！」

『…全く、こんな…ッ！ 後でたっぷりお説教ですからね、主様！』

卍解の靈圧が離れ、バンビエッタの体に自由が戻る。激痛が去り、全身を焼く劫火が掻き消える。

瞼を開けた己の目に映っていたのは、頭頂部の光輪と二対の翼。最強形態の自分自身の姿だった。

「…使えなかったのよね、これ。卍解持ってる間は卍解が邪魔してさ」

擦れる息を整え、傷を癒したバンビエッタは、大恥をかかせてくれた眼前の天女装束の死神、卍解姿の雛森桃を睥睨する。

「卍解が戻って形勢逆転…：これであたしを倒せる…：そんなコト思ってる？」

七支の宝剣。七又の羽衣。情報データと異なりそれぞれの先端に飾られた大鈴の数が増えているが、そんな事はどうでもいい。

「…もう…もう、許さない…！ どこまでも馬鹿にしがたつて…ッ！」
先程の痛痒と屈辱の怨嗟が声に籠る。自分で奪った卍解に逆さされて自滅しかけるなんて…と、その真剣ぶってる顔の裏であたしを嘲笑っているのだろう。

…だったら今度は、

あたしが嗤う番だ

直後、雛森桃が羽織る靈圧の衣が瞬く。そして次の瞬間。

爆ぜろ!!

「——!!」

女死神の羽衣が途轍もない大爆発を起こした。

「あははははははっ！ 副隊長ともあろう死神がガッコーで習わなかったワケ？ 『一度手放した武器は敵の物と思え』ってね！」

太陽の如き巨大な赫炎に呑み込まれる雛森桃。バンビエツタは狂ったように笑う。奴には何が起きているのかすら分からないだろう。

「散々コケにされてタダで返すワケないじゃない！ あたしの霊圧を使つて発動したんだから、そのキレイな羽衣の中にはあたしが仕込んだ霊子爆弾がたっぷり詰まつてる！ 全部焼き切れるまで何度も何度も爆発してご自慢の卍解ごと塵になっちゃえ!! あははははは!!」一度ではない。彼女が掛け声を上げる度、雛森桃の羽衣から、大鈴から、斬魄刀から、次から次へと新たな爆発が巻き起こる。

それは宛ら破壊の処刑服。アイアンメイデン鋼鉄の乙女より余程凶悪な絶死のマトリョーシカ。有無を言わさぬ猛攻。焼ける大気の臭い。どれもが自分を酔わせる甘美な美酒だ。

決して切り離せない自分の魂の半身に焼かれる敵を見下ろし、バンビエツタは微塵の容赦なく、仕込んだ霊圧の全てが燃焼するまで勝利の法悦に浸り続けた。

…だが。

「来た」

小さな声が、風に乗って耳に届く。濛々と立ち上る黒煙が晴れていく。その中心に薄っすらと浮かぶ人影の周囲に、あの忌々しい桃色の羽衣は見当たらない。少なくとも敵の卍解を解除する事には成功し
たらしい。

しかしバンビエツタは少しも喜べない。

「な、んで……生きて……」

あり得ない事だった。彼女が自身の霊圧を植え付けた卍解は死神の魂の半身。それを直接爆発させられる事は、単純にゼロ距離の【爆撃】を受けるのとは比較にならないダメージになる。況してやこのバンビエツタ・バスターバインが誇る最終形態クインシー・フォルシュテンドイツヒ滅却師完聖体の力で強化された爆撃を急所に受けて…

「——気付かないと思いましたか？ 死神が、自分の卍解に起きた異常に」

未だ、平然と両足で立っている目の前の小娘は、何かの錯覚に違いなかった。

「おっしやる通り、先程の卍解はあなたの霊圧で解放されたもの。クインシー滅却師の霊圧を元に強引に使用された卍解は、全てにおいて、あたしが解放した場合のものとは勝手が変わっていました」

纏う黒い着物は焼け焦げ。満身創痕である筈の身体で、雛森桃が息の乱れ一つなく淡々と言葉を紡ぐ。

メダライズ星章化。たとえそれが解かれて卍解が手元へ戻って来たとしても、一度使用された卍解は元の死神の霊圧で再解放されるまでクインシー滅却師の所有物でありつづける。雛森桃は卍解を奪還した時点でそう分析したと言う。

「あなたの能力が霊圧を消費して発動するものでよかった。あなたの性格が直情的でよかった。あなたが怒りのままにご自身の霊圧を爆弾化させて使いきってくれたおかげで、飛梅にこれ以上不快な思いをさせずに済みました」

「…ッ」

「それに…あなた方がOPBを無視している
かった…」

自嘲するように「思い込みはダメね」と呟く雛森桃。何の話だと問うも女死神の口から答えは返ってこない。

「くっ、運よく生き残ったからって調子乗っちゃって…！ あんたの力の底はさつき奪った卍解でもう見えてんのよ！」

動揺を怒りで封じ、バンビエツタは上空へ舞い上がる。

そして、眼下の小娘へ渾身の大空襲を敢行した。

「もう一度教えてあげるわ、雛森桃！」 霊王の「大脳」を奪われた今
のあんたじゃ、あたしには絶対に敵わないってね!!」

ジ・エクスプロード スカイフォール
爆撃・失墜 天

背中の翼が瞬き、視界を埋め尽くす程の霊弾が光の雨となって降り注ぐ。一つ一つが直径数十メートルもの大地を抉り取る規格外の霊子爆弾。バンビエツタは能力の過剰使用で心臓が弾け飛びそうになるのを必死に耐え、千を越す破壊兵器が敵を消滅させる瞬間を待った。

「——面白い事を言いますね」

対し雛森桃は自然体。対抗するつもりか徐に片手を上げ、その先に白と黒の光球を作り回転させる。

膨大な霊圧を帯びたそれは女滅却師が初めて目にする、最上位階の鬼道となつて術者の頭上に現れた。

【縛道の九十二・両義】

黄金に輝く荘厳な観音開きの大扉。その奥に見える果てなしの闇へ霊子爆弾が吸い込まれていく。

扉が閉じた後、バンビエツタの全力の大技はどこにも残っていない
かった。

「断界の拘流が最も激しい特異点、極壊洞。そこへ通じる門を無理やり開く鬼道衆指定の禁術です」

「そ…んな…」

「霊圧の弾を射出させて攻撃するのなら、その弾が自分に届く前に対処すればいい。より効果的な近接戦闘で使わずに遠距離に拘るなんて…意外と臆病な人なんですな」

無表情で凶星を突かれバンビエツタは動揺する。普段通りの虚勢

を張る気力もない。

「あなた方がどんな分析をしているかは知りませんが、確かに体の中からあの人が居なくなつた事で、あたしの霊力の大半は失われています」

佇む女死神が放っている霊圧は変わらずひ弱なもの。なのに感じる存在感はまるで雲泥の差。

そしてこちらを見つめる彼女の琥珀の瞳に、異様な霊圧の光が灯る。

バンビエツタは一度たりとも、その桃色の瞳をした雛森桃の姿を：彼女がどんな存在かを、忘れた事はなかった。

「ですが、あたしが失つたのは”死神の力”以外の霊力だけです」

「や、やめっ……」

「そしてあたしは、その”死神の力”だけで——藍染隊長の副隊長として認められたのよ」

逃げなきや。強烈な悪寒に思わず後退るバンビエツタだったが、その足は彼女の身を守るには遅すぎた。

「さて、飛梅も喧しい事ですし……特別に一つだけ、この子の刀身を使ってさしあげます」

雛森桃の背後に七枚の天衣が舞う。その鈴付きの羽衣が一枚、握る七支の宝剣の切先の一つへ吸い込まれ……

羽衣 紅梅鈴鈴
はごろも ぼうかい
はいろも こうばい りんりん

直後。少女の纏う霊圧が、天を突いた。

「ひっ、あ、あ…」

その桃色の瀑布は、立ち上る味方の青炎の列柱を吹き飛ばさんばかりの迫力でバンビエツタの周囲を覆い尽くした。

これが本物の【羽衣紅梅鈴鈴】。たった一人で護廷十三隊を半壊させた鬼道系最高峰の斬魄刀。

バンビエツタは悟る。あの衝撃的な戦闘映像の中で、瓦礫の上をゴミのように転がっていたズタバロな隊長達。馬鹿な奴等と画面の前で嘲笑っていた呑気な自分。

今度はこのあたしが、

ああなってしまうのだ

「い、嫌…やめて！ 死にたくない…！ 死にたくない ツ!!」

この期に及んで恥も外聞もありはしない。迫りくる絶望に抗おうと滅却師の少女は半狂乱で霊圧の弾幕を敵へ放つ。これまで自分を強者の地位に就かせてくれた頼もしい聖文字^{シュリフト}“E”が、此度も自分を救ってくれると信じて。

だが。

「あ、あ、う、うめ、なさ…」

放った幾百もの爆撃は、雛森桃に触れる事無く彼女の剣圧の一振りで吹き飛ばされる。無表情、顔色一つ変えずに悠然と近づく女死神が、ふと、微笑んだ。

「や、だ…やだやだやだあッ！」

「安心してください、^{アランカル}これでも乱暴な破面を束ねていた者です」

そして最悪な攻撃予告を突き付けられた記憶を最後に、バンビエツタ・バスターバインの心は粉々に砕け散った。

「あなたみたいなお転婆さんを死なないように躡ける方法くらい…」

——ちゃんと熟知してますから

「——第三班は負傷者の護送。第五班は賊軍の捕虜、バンビエッタ・バスターバインを十二番隊技術開発局へ運んでください。涅隊長の対滅却師戦術の研究に役立てる筈です」

「はっ—」

「白伏で捕虜の霊圧は感知されないとはいえ、道中は気を抜かないで。あたしは他の隊長格の救援に向かいます」

『(武運をお祈りします、雛森副隊長!)』

キラキラしたお目目の五番隊隊士達を見送り、バンビちゃんを散々いたぶったあたしこと雛森桃(in死神ボディ)は卍解状態を維持したままふわりと浮き上がる。破れた死覇装の代わりにと飛梅ちゃんが騒ぐのでやむなし。

捕虜護送担当のみんなにはああいったけど、多分バンビーズの誰かがバンビちゃんを奪還しに行くだろう。まあ白伏が効きすぎてマジで彼女達に見つからなくてもそれはそれでいい。原作のようなジジちゃんくん製じゃなくてマユリ様謹製ゾンビエッタvsバンビーズという素敵な展開もあり得る。

鯉ファン大人気ヒロインバンビちゃんはまだまだ輝く余地が残っているのだ(後方腕組みリヨナ女王

「それにしても…」

得意の幻惑鬼道で身体を隠してふわふわと宙を移動するあたし。頭を埋め尽くすのは、やはりさっきのバンビちゃんとの共同作業。この千年血戦篇では決して叶わないと思っていた、あの素晴らしいOPBの事だ。

いやあ、すごいよかったよバンビちゃん！ メダリオンの使い方、卍解の放棄、そしてここぞの場面での完フオルシユテンテイツヒ聖体！ あたしが誘導したからかもしれないけど、まさか撒いたオサレ展開の種をバンビちゃんがここまで丁寧^{ニヤ}に拾って戦闘に活用してくれるとは思わなかった。原作でイキリNTBしかしてくれなかったあのメスガキバンビちゃんがだよ!? ユーハバツハが用意したらしい例の桃ちゃん用特殊メダリオンや、あたしの”読書家”が【霊王の脳】だと誤解されてるらしい事なんてバンビちゃんがOPBで戦えた事実と比べたら印象薄すぎて正直「あつたねそんなの」レベルである。

やっぱり能力も霊具も所詮は持ち主のオサレさを引き立てるための飾りに過ぎないのだ。

『あゝるゝじゝさゝまゝ?』

「ツひや…! い、いきなり話しかけるのやめてよ飛梅…!」

唐突に脳内でご聖体様が荒ぶり出した。うん、理由はわかっています…

『酷いですッ! まさかこの私が主様の下から引き剥がされるのをよしとするなんて…! 直前をお願いしてきたアレってこの事だったんですね?!』

「い、いやあの、はい…!」

でも仕方ないもん。あの有名すぎる護廷十三隊クソ無能卍解奪われシーンによるOSR値大暴落を防ぐためにはあたしが代わりに身体を張らないと。たとえ例の特殊メダリオンがなくても卍解して奪われる予定だったとは言えない…

『全く、ここまで用意周到に準備してくださるくらいなら奪われない

ように作戦を練ってくださいませ！ 私がどれほど怖い思いをしたか…』

「う…で、でもちゃんと対策してきましたし」

『そういう問題じゃありません！』

「ご、ごめんなさい…」

めそめそ泣いてる飛梅ちゃんに頭を下げつつ、精神世界で彼女から二つの”宝珠”を返して貰う。その正体は何を隠そう、この千年血戦篇の為に備えた対メダリオン装備【霊王の爪】と【虚の因子】^{ホロウ}だ。

先ずは爪の方。飛梅がバンビちゃんに奪われても勝手に動けていた理由である。

試行錯誤の末に仮面桃ちゃんから安全に抜き取ったコレにはもう一つ、ユーハバツハの能力が「霊王パーツ保持者には効かない」という考察を実証する役割があった。こちらはもう少し検証が必要だろう。

そして【虚の因子】。こっちは濃厚バンビちゃん汁（霊圧）をぐっくんさせられて「くやしい、でも…！」状態になった飛梅ちゃんの身体にあたしのコトを思い出させるために使いました（最低な表現）

勿論参考にしたのは浦原さんの侵影薬^{しんえいやく}。霊王の爪だけだと卍解を完全に取り戻せるか不安だったので保険に用意したけど、あつてよかつた滅却師特攻因子。

ちなみにこれらの事はいつもの？八百で誤魔化してバンビちゃんにはバレてない。解放に使った霊圧を消費したくらいで陛下の能力で奪われた卍解の所有権が戻ってくるワケないじゃんブークスクス。自分のボスの実力も信じられないからすぐメンタルブレイクするんだよなあ。

でも鯨読者はみんなバンビちゃんのその”弱さ”が大好きなの。

『とにかく！ もうこういう事は二度としないでください！ わかりましたね!?!』

「御意…」

なんとか謝って飛梅さまのお許しを貰う。まあ死神桃ちゃんが善人ムーヴを気を付けなきゃいけない分、あのバンビ梅焰燻り焼きのよ

うに敵を真正面からいぢめる事は飛梅にしかできなかつたし、そういう意味でも彼女には頭が上がらない。

あたしが頼んだワケじゃないのに勝手にあの娘をリヨナリ始めた時は「染まったなあ」ってちよつと引いたけど（ブーメラン）

「さて、肝心のハッシュヴァルトは…」

ツアン・トゥ 蒼都大人に卍解を奪われて輝いてる曇りシロちゃんを見に行きたいけど、どうしよう。ウエコムンド 虚圏を見張ってた欠魂桃ちゃんから『ポテト動く』の連絡が来たのはついさっきの事だ。

「…あ、いたいた」

軽く霊圧感知を広げると記憶した彼の霊圧が確かにある。よかつた、これで我等の主人公一護くんがラスボスの懐刀に惨敗する未来は防げた。

ポテトは当然だけどあたしを探しているらしい。その隣にいるのはユーハバツハだろうか。そんなに強そうに感じないのはロイド・ロイドが化けているからかな。となるとまだ山爺戦まで時間がありますね。

そう、時間が。

…

…

——ツヒヤツハアアア我慢できねえ！ 久々のシロニウム摂取だ

！

あたしは意識を英霊宮殿ヴァルアリヤの本体へ向ける。霊圧を感じるかぎり卍解を奪われた直後のシーンは逃しちやつたけど、蒼都との戦闘自体はまだ続いているようだ。バンビちゃんと遊び過ぎた分はまだ取り返せる。

待っててシロちゃん！

あなたの楽しい嬉しい授業参観、直ぐに見に行くからっ♡

無力つてSS編時点でクインシー・レットシユティール使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

——では後は頼みます

桃色の光衣を纏った美しい天女が、空へと消える。残された五番隊隊士たちは我も忘れ、神秘的なその光景に呆然と見惚れ続けた。

「…凄^{ひなもり}い、流石雛森副隊長…」

「あれがあの人^{ひなもり}の正解…」

「…噂は本当だったんだ…」

羨望の声が止まない五班の隊列。

それも然ること。席官ですらない末端の彼らに護廷を揺るがす大戦に関わる機会などある筈もなく、伝え聞くあの女上司——雛森桃の伝説の一端を目の当たりにしたのは此度が初めてだった。

曰く、隊長でさえ殆ど使えない九十番台の鬼道を詠唱破棄で使用する達人。二十名近い護廷の隊長格部隊を一人で壊滅させた正解の持ち主。虚^{ウヘコムンド}圈中の悪霊たちを従えた恐るべき指揮官。等々。

記録が残るものから眉唾な噂まで様々な副隊長の戦力評価。しかしその大半が事実だと知って尚、隊士達の間^{ソウルソサエティ}に恐怖はない。たとえ尸魂界を裏切ろうと微塵も揺るがない信頼は、あるいは盲目的、狂信的とも言えるものだった。

それこそ畏怖すべき上官へ、ある種の邪な想いを懐けてしまう程に。

「…見えた？」

「…少し」

「くっ、羨ましい…」

：具体的には憧れの美少女のボロボロの死覇装から覗く少なくな
い肌色や、一瞬のピンク、など。

「いつまでぼーっとしてるの、さっさと行動を開始しなさい！」

勿論そんな不埒者らへ飛ぶのは冷やかな上司の叱咤の声で、ビクリ
と振り返った先には五番隊のもう一人の人気隊士、蟹沢かにさわほたる三席が
彼らを睨み佇んでいた。

誰よりも雛森副隊長の雄姿に恍惚としていた痴態を棚に上げる彼
女に苦笑一つ、隊士達は慌てて指示に従い捕虜の護送陣形を取る。

瓦礫の山を越えること五分弱。目的地の十二番隊技術開発局が見
えてきた途中で、彼らは同隊の一団に呼び止められた。

「お待ちしておりました蟹沢三席！ 後は我々にお任せ下さい」

「お願いするわ。：皆、ご苦勞様！ これにて任務完了です！」

『ハッ！』

捕虜の受け取りを命じられたという十二番隊の者たちと合流し、五
番隊一同の顔に笑みが戻る。

平隊士には些か荷が重い任務。如何に優秀な元藍染隊の死神とは
いえ、達成感に気が緩むのも無理はなかった。

それは油断と呼ぶには酷な、僅かな隙。そんな部下たちを注意すべ
く後ろへ振り返った蟹沢三席は、神速で迫りくるその一撃を避けきる
事ができなかった。

― ガルヴァノブラスト ―

「な——あぐっ！」

「蟹沢三席!？」

「！ 敵襲だ！ 周囲警戒！」

稲妻に肩を射貫かれる女上司。事態を察した第五班一同は即座に
臨戦態勢を取る。

「——へえ、やるじゃん。脳天ぶち抜くつもりだったのに」

張り詰めた空気に木霊したのは女の声。だが隊士たちが襲撃者の姿を目にする前に、奇襲から立て直した蟹沢の攻撃が敵へ飛翔する。

「ッ、舐めるな！」

破道はどうの六十三

雷らい 吼こう 炮ほう

「わぶっ…!?!」

瓦礫ごと敵を呑み込む雷電系高位鬼道。間髪を容れずの即応攻撃に一同は固唾を呑んで戦果を待つ。

「ぶぶぶーっ、カッコつけて出てったクセに反撃喰らうとかダツサー」

「相変わらずですねえ、キャンデイちゃんはお」

「さっさとバンビを回収してトンスラすんど。あの化物に見つかるのはご免だ」

しかし襲撃者は一人ではなかった。三方から失笑が聞こえ、死神たちは弾かれるように剣を構える。

「三人…だと…!?!」

「そ、そんな…こんな所で…!」

そこに居たのは女の一人だった。黒、紅、金と異なる髪色の彼女たちが纏う衣類の色は、一様に白。賊軍の所属を表すその服装を目にし、第五班の面々は青褪める。

「…おいテメエ、このあたしに雷をぶつけるとか舐めてんのか?」

そして蟹沢の鬼道を受けた最初の敵、緑髪の女が無傷で現れた瞬間、五番隊隊士達は己の命の終焉を悟った。

「——狼狽えるなッ！」

だが一同の指揮官、蟹沢はたるが彼らの揺らいだ士気を叩き直す。「賊共の目的は捕虜の奪還! …ここで奪われたら雛森副隊長の奮闘を無にすると知りなさい!」

『……ッ!』

「二年間の屈辱を思い出せ！ 裏切り者、反乱分子だのと蔑む連中に今こそ我等の誇りを見せつけろッ！」

その言葉で奮い立たぬ五番隊隊士はいない。恐怖を勇気でねじ伏せ、絶望を切り開こうとする彼等は等しく死兵となる。かつて藍染惣右介が最も尊び掲げた理念は、今なお確かに馬酔木の花に集う勇士たちの胸に宿っていた。

「陣形第二番！ かかれッ!!」

『オオオオオオオッ!!』

蟹沢の号令と共に吠える第五班の隊士たち。目指すは目と鼻の先の十二番隊隊舎。命に代えても雛森副隊長の戦果を技術開発局へ護送するため、一同は進路を塞ぐ緑髪の女滅却師へ突撃する。

「何この雑魚共。威勢だけで死ぬ運命が変わる訳ないつての、バーカ」

呆れた顔で女が無造作に雷撃を放つ。隊士たちの突撃陣形を一網打尽にするかと思われた彼女の攻撃は、しかし直撃の寸前、不自然に射線から逸れた。

「怯むな！ 戦型四ノ型・西ッ！」

『四ノ型・西ッ!!』

縛道の六十二

百歩 欄干

破道の十一

綴雷電

無傷で直進する死神たちの頭上には、帯電した鬼道の杭が避雷針のようにズラリと並んでいた。そこに流れる自分の霊圧を見た女滅却師は目を見開く。

「ッ、こいつらあたしの雷撃を誘導して……!」

そして敵が驚いている間に第五班は更なる一手を繰り出す。

「次よ！ 戦型二ノ型——子ッ！」

『二ノ型・子ッ!!』

破道の五十八

⊠ 嵐

縛道の二十一

赤煙遁せきえんとん

蟹沢が生み出したのは鬼道の竜巻。そこへ部下たちが召喚した赤色の煙幕が吸い込まれ、標的の女滅却師の視界を確実に奪う。

「今よー・私に続けー!」

『応ッ!』

突破が叶うなら今しかない。敵の攻撃の狙いが定まらぬ内に全速力で突破を図る第五班。

「チッ、雑魚が調子に乗ってんじやねえッ!」

『!!』

だが所詮は弱者の小細工。霊圧にものを言わせた無差別な範囲攻撃が隊士たちの陣形を掠め、一人また一人と勇敢な死神が骨も残さず消えていく。

それでも彼らの疾走は止まらない。

「蟹沢三席! ここは貴女だけでも!」

「我らは散開して敵の的を増やします!」

「…ッ、忠義見事! ここは任せたわよ!」

『はっ!』

捕虜を封じた棺を鬼道の縄でひったくり、蟹沢は後ろ髪を引かれる思いで足元の霊圧を爆発させる。

強烈な初速。全力の瞬歩。部下たちの犠牲。全てを投じ、皆の命を背負い、蟹沢は死に物狂いで戦場を駆け抜けた。

「——いい夢見れたか、部隊長?」

「がはっ!」

しかし奮闘虚しく。突如腹部を襲った凄まじい衝撃に耐えられず、女死神は地べたに叩きつけられた。

「おいリルてめえ! 勝手にあたしの獲物を奪うな!」

「てめーがチンタラしてっからだろ、ばか。あんな子供だましに振り回されやがって」

小柄な人影が蟹沢の背中で胡坐をかいている。四方を取り囲んで

いた別の滅却師だ。

「くっ……芽吹け——ぐあっ！」

「させねーよ」

起死回生の始解も妨害され、二度目の激痛が神経を抉る。解放しようとした斬魄刀は握る腕ごと遠くへ斬り飛ばされていった。

「ためーが器用なヤツなのはさっきのでわかってんだ。余計なコトされる前にさっさと死んでもらうぜ、死神」

「くう……っ！」

桁違いの霊圧が小柄な女滅却師の指先に集まっていく。狙いの先は蟹沢の頭部、放たれば方に一つも助からない。最早任務達成への望みは完全に断たれた。

「……ッ、申し訳ありません……雛森副隊長……」

瞼を閉じる。涙が頬を伝う。食い縛る歯茎に血が滲む。追い込まれた蟹沢は、憧れの人へ己の無力を脳裏で詫びる事しか出来なかった。

破道の八十八
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう
飛竜撃賊震天雷砲

『なっ!?!』

だがその時。途轍もない爆風が辺りに吹き荒れた。

蟹沢は慌てて瞼を開き、そこで目が眩む程の光の奔流を見る。

彼女はその光に見覚えがあった。

「——かーっ、美人な女のコが輪ア作ってやる事がリンチかいな？
男の夢を壊さんというやー」

剽軽な男の声が辺りに響く。普段の幼稚で情けないそれとは真逆の、力強さを感じさせる強者の声だ。

そしてその数は一つではない。

「——ヤレヤレ、待てども待てども届かないと思つて来てみれば……私の”研究材料”を囲んで何をギヤアギヤア遊んでいるのかネ、君達？」

背筋を震わせる強大な霊圧が二つ、新たに戦場に現れた。独特な嗶れ声、神経を逆なでする皮肉げな口調、奇抜な化粧。女性の副官を連れたその男を見間違える人物は瀟靈廷に一人もいない。

「おい涅くろつちイ、なに登場するタイミング被せてんねん！ 折角ウチの生意気娘にドヤ顔するチャンスや思てカツコよく鬼道ぶつぱなしたのに」

「バンビエッタ・バスターバイン」……いいネ、実に良い状態の個体だヨ。あの造反女らしからぬ協力的姿勢に思わず裏を疑いたくなる」「話聞けやコラー！」

呑気に味方へ一言噛みつき、金髪おかつぱの青年が蟹沢の側へ舞い降りる。それだけで隊士としてあるまじき、継りたくなるような頼もしさが彼女の心に満ちていく。

「…胸張つてええ、ほたる。ようやった」

鼓膜を震わせる優しい、穏やかな声。「後は任しとき」の一言と共に彼の霊圧が高まった。

…全く。この人は肝心な時だけこうだからズルいのよ。

「遅い…ですよ——平子隊長」

そんな照れ隠しの文句を残し、五番隊三席蟹沢ほたるはゆつくりと安堵の微睡へ落ちていった。

「…何だ、あの青い光は…！」

かつて尸魂界ソウルソサエティにこれ程無意味な警鐘が響いたことがあつただろうか。二十に迫る巨大な青い火柱が各地に立ち上る一目瞭然の異常事態において、十番隊を預かる最年少隊長日番谷冬獅郎ひつがやとうしろうの動きは素早かつた。

「松本！ 隊士たちに半径二町の距離を置きあの火柱を取り囲めと指示しろ！」

「はっ、不用意に近寄るなど厳命します！」

少年は副官を伴い二人のみで異変の渦中へ急行する。護廷の使命に燃える死神たちを戦場から遠ざける消極的防衛策は各所から響聲を買いかねない。それでも冬獅郎は断行し、そして僅か数分後、事態は彼の先見性を最悪の形で証明した。

『三番隊吉良副隊長の霊圧消失！』

『同隊席官三名も消失！』

『西六〇一地区で隊士二十五名、死亡！』

『同二二四で六十一名、死亡！』

三番隊管轄区にて戦端が開かれたとの報告が届いてから、冬獅郎の下へ送られてくるのは同胞達の敗北報告ばかり。その中には少なくない縁のある上級隊士たちの名もあつた。

「吉良…ッ」

「莫迦な、あいつが…！」

臨戦態勢の隊長格、それもあの藍染の乱を戦い抜いた歴代屈指の腕利きすら瞬殺される地獄と化した瀨霊廷。同じ側臣室仲間の運命を憂い松本乱菊まつもとらんぎくが瞑目する。

しかし感傷に浸る事も許されない尋常ならざる護廷の危機は、既に冬獅郎の足元にまで迫っていた。

「——白髪の少年。君が雛森桃ひなもりももの幼馴染、日番谷冬獅郎で相違ない

か？」

不意に名を呼ばれ二人は瞬時に剣を抜く。声の方角、背後の建物の屋根に佇んでいたのは、白い外套を着た人影。

報告にあつた総隊長室襲撃犯と同様の服装——滅却師だ。

「…調査に手ばかりがねえな、旅禍りよか。名を名乗れ」

「蒼都ツアン・トウ。僕が陛下より賜った称号は星十字騎士団シュテルンリッター”I”——『鋼鉄』ジ・アイアン。

此度の困難な任務を任された事を光栄に思っているよ」

”光栄”か…随分な自信家だな」

外套の裾から覗く両手の鉤爪から相手の戦法を予測し、冬獅郎は副官を下がらせ空へ跳ねる。

「俺を倒せと命じられたお前が抱くべき感情は”誇り”でも、任の重さへの”不安”でもねえ…

——俺に殺される”恐怖”だけだ！」

蒼天に座す凍雨の暗雲。天候すら従える氷の竜がその罅を開き、敵へ喰らい付く。

直撃の後には五丈に迫る氷の塊だけが残っていた。

「…恐怖？ 一体どこに、この僕へそんなものを感じさせる脅威があるんだ？」

「なっ…！」

だが直後、目の前の氷山が砕け散った。氷片が散る戦場の中、冬獅郎は悠然と近付いてくる無傷な滅却師クインシーの様子に瞠目する。

「今この近辺に居る敵は君と君の副官だけだ。【特記戦力】ですらない敵に臆する腑抜けに、陛下の剣たる星十字騎士団シュテルンリッターは務まらない」

瞬間、男の姿が消える。

「！ 後ろです隊長ッ！」

「しまっ——くっ！」

その攻撃を受け流せたのは条件反射に等しかった。この二年間の鍛錬で幼馴染に鍛えられた戦訓の一つ、”背後からの一撃”への警戒。何度も繰り返した奇襲対策が功を奏したに過ぎない。

何とか態勢を立て直して反撃の刃を振るう冬獅郎。

しかし彼の一闪が敵の皮膚を切り裂く事はなかった。

「何!?!」

「…血装と【鋼鉄】を重ねてようやくか。破面の鋼皮に苦戦していた二年前から随分と腕を上げたな」

「ぐあつー!」

男滅却師の腕に浮かんだ青い模様が赤に染まる。その直後に冬獅郎が受けた彼の一撃には、まるで巨人の如き膂力が宿っていた。

背後の建物に激突した少年の下へ松本乱菊が駆けつける。

「隊長!…ご無事ですか!」

「ぐつ、クソツ…! なんだ今のは…!」

「敵はこの短時間で吉良を倒した連中です! やはり始解のままでは…!」

そんな事は分かっている。二年前に地獄を見たあの十刃との激戦。あれら以上の強敵を覚悟していた冬獅郎も、されど先日通達された敵の「卍解封じ」の情報のせいで容易な解放に踏み切れない。

だがこのままではジリ貧だとの意見も尤もだった。

「……仕方ねえ」

故に、しばし逡巡した少年は火中の栗へ手を伸ばす覚悟を決める。

「松本、一瞬の違和感も見逃すな。奴らがどうやって卍解を封じるのかを見て、その封印を破る術を探せ」

「!」

「卍解を封じられた直後に俺の身に何が起こるかはわからねえ。だからこいつはお前が側に居る時にしか使えねえ手だ」

信を置く副官へ「頼んだぞ」と背を預け、冬獅郎は己の斬魄刀へ苦渋の思いで呼び掛けた。

「悪い、氷輪丸。苦勞を掛ける…!」

大紅蓮氷輪丸
卍解

膨れ上がる自身の霊圧。暴れる冷気が辺りを凍てつかせ、少年の背

で一对の氷の翼が羽ばたく。

…さあ、どう来る？

身構え敵の出方を待つ冬獅郎。しかし連中の秘儀の正体に彼が氣付いた時、全ては手遅れだった。

メダライズ
星章化

「何!？」

異変は一瞬。男が掲げた掌大の金属盤から漆黒の光が迸った直後、冬獅郎は自身の碧い双眸を限界まで見開いていた。

「な、何が起きたの…?」

後ろの部下の声も聞こえない。握る剣を愕然と見つめながら、少年は喘ぐように魂の相棒へ問いかける。

「嘘…だろ…何とか言えよ…! 何とか言ってくれよ…ッ」

そんな。嘘だ。こんなことが。己の身に起きた現象を必死に否定しようとするも、冬獅郎の両手から伝わる虚無が残酷な現実を彼に突き付ける。

祖母を凍えさせ、俺から死神として生きる以外の道を奪った存在。しかし同時に大切なものを護る力を与えてくれた、愛憎入り混じった無二の相棒。

隊長への昇進。藍染惣右介の乱。銀城空吾の陰謀。多くの困難へ共に挑み、苦汁を舐め、そして乗り越えてきた。

次の戦いでは共に、先輩風を吹かせる年上幼馴染と彼女の斬魄刀に我等の力を認めさせる。そう誓い合った、己の半身。

そんな彼の声が、聞こえない。霊圧を、魂を感じない。

それが意味する事は、この世に一つだけだ。

「——何してる、松本」

しかし冬獅郎は冷静だった。今まであの悲運の少女を取り巻く絶望に触れ続けた経験は、彼の心を深く蝕みながらも確とした血肉となつて、日番谷冬獅郎の精神を強靱に作り変えていたのだ。

「天挺空羅だ、早くしろ！ 全隊長にこの事を伝えるんだ！」

「…!!」

「奴等に——卍解を奪われた！」

啞然としていた副官がはたと我に返り、慌てて通信鬼道を行使する。彼女の隙を守ろうと身構える冬獅郎だったが、対し蒼都と名乗った男滅却師は平然と敵の情報共有を見過ごした。

「…何のつもりだ、てめえ…！」

「別にどうという事はない。君達は何をしようと思つて僕達の勝利に変わりはないのだから」

「何だと？ どういう——!？」

だが訝しむ冬獅郎は直後にハツとする。振り向いた先は七番隊の守護担当区域。

そこから彼の下まで届いたのは、馴染みのある一人の少女、雛森桃の霊圧だった。

「…なんだ、あの女はバンビエツタの所へ行つたのか」

不意に蒼都が渋面を作る。

「研究会の想定では彼女は頼りない幼馴染を守りにこちらへ来るはずだった。彼らでも行動を予測できない奴を評価するべきか、あの無能共を責めるべきか…」

努めて冷静さを保っているがその声には隠しきれない憤懣が滲んでいる。しかしそんな男の態度が、冬獅郎の地雷を踏み抜いた。

「来るわけねえだろ」

「…何だと？」

苛立つ滅却師へ少年死神は凄惨な笑みを見せる。卍解を奪われ下がった戦意は、今や天井知らずに漲っていた。

「情報が古いな。抜け目のねえ連中だと思つてたが、それでもなさそうだ」

破道の八十六
牙が 烈光
気 烈 光

「…!!」

突如上空が煌めき、眩い緑の光矢が降り注ぐ。間一髪で回避した蒼都が驚きの目でこちらを見た。

「あいつが俺に要らんお節介を焼いて来ねえなら——俺はもう、お前の言う”頼りない幼馴染”じゃねえって事だ」

そうだ。こいつ程度の敵を一人で倒せなくてあいつを守れるワケがない。微かな面映ゆさを胸に、冬獅郎は期待に応えんと敵へ斬りかかる。

「使ったな、お前の得物」

「…貴様…」

動揺故か生身の腕ではなく両手の鉤爪で身を守る蒼都。今ならあの硬い皮膚を突破できると確信し、冬獅郎は鏢迫り合いの状態を活かして刀身を使った特殊鬼道を放つ。

「なっ!」

「白兵戦を選んだのは失策だぜ」

破道の七十八

斬さん華げ輪りん

黄光の斬撃が零距离で敵に直撃する。爆発を利用し距離を取ろうとする男滅却師の肩には、小さいながらも確かな傷。

「どうした、雛森を誘い出せなくて焦ってるのか? 自慢の硬度が形無しだぜ…!」

「ッ、調子に乗るなよ…死神!」

——蛇シエジンツァオ勁ツァオ爪

冬獅郎の挑発に乗せられ蒼都が大技を行使する。蛇の両顎を模した霊圧の塊が神速の速さで迫り…

そして少年の体を食い千切った。

「!? 隊長!!」

上司の無残な姿に後方の松本が悲鳴を上げる。だが次の瞬間、敵の背後で轟音と共に大気が爆ぜた。

蒼都がそれに反応できたのは鍛えられた武人の直感と、入念な情報

収集の結果だった。

「よく防いだな、滅却師……！」

「斬氷人形。雛森桃と切磋琢磨していたのなら必ず使ってくると思ってたよ……！」

交差させた蒼都の鉤爪の間には、死んだ筈の冬獅郎の刃。しかし身代わりの術を見抜かれようと依然として少年の勢いは変わらない。

「言った筈だぜ、俺を相手に接近戦は悪手だってな！」

「フン、同じ技を二度も受ける程僕は愚かじゃない……！」

そう自信げに言い放った蒼都の肌が金属質な物質へ変じていく。最強の防御力を誇る奴の能力【鋼鉄】だ。

だがそれを使う時こそが、冬獅郎が待ち望んだ瞬間だった。

「……二度目」は無え」

縛道の六十一

六杖光牢

「何?!」

鬼道の攻撃を想定していた奴にそれを回避する余裕はない。短い詠唱の後、霊圧の帯が蒼都の身体に絡みつく。

「お前の身体が金属化する瞬間、その部位の動きだけが明らかに鈍った」

「?! しまっ」

「訊くぜ。今、俺の斬華輪から身を守るためにお前が硬化させた部位は、果たして全身の何割だ？」

縛道の六十三

鎖条鎖縛

縛道の八十二

黒罫楓監

光の帯、鎖、そして大樹の根の檻。高位の術が折り重なり確実に相手を拘束する。

そして千載一遇の好機を使い、冬獅郎は自身が有する【氷輪丸】最強の奥義で無防備な敵を磔にした。

「馬鹿な……始解で此程の力を……！」

「雛森を傷付ける奴は誰だろうと許さねえ！ 氷の礫架と共に散れ！」

—— 白刃竜霰架 ——

宙に聳える巨大な氷の十字架。強敵の成れの果てを見つめ、冬獅郎は長い残心の後、右手の斬魄刀へ再度呼び掛けた。

「くそつ、卍解が戻って来ねえ」

「…技術開発局まで運びますか？ 涅隊長なら何とかしちやいそくな気がしますけど」

「あいつの世話になるのかよ…」

松本の進言からあのマッドの化粧塗れの顔を思い出しげんなりする冬獅郎。とはいえ他に方法がない彼に取るべき手段はそれ一つ。

二の足を踏みながらも、十番隊の両隊長格は悪名高き涅マユリの牙城へと踵を返そうとした。

「仕方ねえな。二人でこいつを十二番隊に——」

しかし彼らの重い足は直後、地面から強制的に離れる事になる。

—— 卍解 ——
大紅蓮氷輪丸

『なっ!!?』

冷気の爆風に吹き飛ばされ混乱する冬獅郎と松本。そして目にした光景に、二人の顔は驚愕で塗りつぶされた。

「……何を驚いている？ 君が自分で言った事だろう」

—— ”卍解を奪われた”、と

砕けた氷の破片が舞い散る極寒の戦場。その中央に、美しい蒼色の双翼を生やした蒼都が浮かんでいた。

冬獅郎の為のみに存在する筈の、卍解「大紅蓮氷輪丸」を操る、間違う事無き滅却師が。

「これが陛下のお力だ」

「嘘……だろ……」

「分かったかい？ 僕たちにとって君ら死神は“敵”ではない。全てを奪い尽くしてようやくその罪過の断罪が叶う、哀れな”処刑対象”だよ」

その意味を冬獅郎は理解できなかった。死神と滅却師の相容れぬ対立についても彼が持つのは霊術院で学んだ薄い知識のみ。然るに少年の耳に蒼都の主張は、かつての大戦の敗者が復讐を大義に掲げ、死神の誇りたる斬魄刀さえも穢そうとしている悪逆非道にしか聞こえなかった。

逆上し、冬獅郎は敵へ斬りかかろうと大地を蹴る。

「ッ、てめえー！ 俺の卍解を——」

…だが、少年がその台詞を言い終える事はなかった。

理由は彼らの下から遙か遠く、七番隊の管轄である瀟霊廷の一角。

そこから突如として途轍もない桃色の霊圧が噴出し——

そして、消えた。

「…なっ…!？」

「隊長、今のって…!」

冬獅郎と松本は啞然と先程の異常が起きた方角を凝視する。残る霊圧の余韻を脳が認めるまでの数瞬は果てしなく長く、しかしそれは錯覚だと現実逃避するにはあまりに身に覚えのある現象だった。

「…ひな……もり……？」

あり得ない。今のは雛森の卍解の霊圧だった。それが意味するのはつまり、あいつの卍解さえも自分のように奪われてしまったという事。

「そんな…あの娘にも連絡を送ったはずなのに……!」

「どういう事だ…ッ！ あいつ程の死神が危険と知りながら何の策も

なく敵の前で卍解するはずがねえ！ てめえら雛森に何をした!？」

眼前の滅却師に事情を問ひ質そうと吠える冬獅郎。

そして幸か不幸か少年が欲した答えは、こちらを見下ろす敵の精鋭メンバーが余さず有していた。

ヘクセンメダリオン
「貴星章。特定対象のものに限り、未開放状態であっても卍解を奪える特殊な専用霊具だ。僕達星十字騎士団シュテルンリッターは全員このメダリオンのお陰で、雛森桃を相手に絶対的な優位に立てる」

「…ッ!？」

「バンビエッタの奴が成功したんだろう。当然か、しくじったら陛下の玉顔に泥を塗ってしまう」

忌々しげに「本来は僕が奪うはずだった」と吐き捨てる蒼都。

ここで遂に、冬獅郎は敵の目的に確信を持つ。こいつ等は最初からあのバカを、雛森桃を殺すために瀰霊廷せいれいていの各地を浸透的に襲撃し、護廷十三隊の指揮系統の麻痺を狙ったのだ。

誰も彼女を助けられないように。

「くそっ！ 雛森ッ!！」

「なっ!?! ダメです隊長!！」

脇目も振らずに最愛の少女の下へ駆け出す冬獅郎。しかし安易に敵から目を離れた報いは秒と経たずに彼の身へ降りかかる。

「隙だらけだよ」

「ぐあっ!？」

激しい動揺の上に卍解まで加わった両者の力量差は今や圧倒的。すかさず助太刀に始解を振るって飛び込んだ松本乱菊も軽くあしらわれ、冬獅郎は気が狂うほどの焦燥に苛まれる。

「ちく…:…しょう…:…! 退け…:…! 退けよてめえッ!！」

「崩れるのは一瞬か。あつけないものだな、日番谷冬獅郎」

こんな事があつて良いのか。何のための研鑽だ。新技だ。真の卍解だ。俺はこんな所で一体何をやってるんだ。

「ぐ、そお…:…何でだ…:…! どんいつもこいつも…:…なんでそこまであいつを、雛森を狙いやがる…:…ッ!！」

二年前の悲劇が脳裏を走馬灯のように過ぎていく。

藍染惣右介が彼女を害したのは、彼女の中に眠っていた正体不明の異なる魂魄——”読書家”を抽出するためだった。月島秀九郎が彼女の過去を冒流したのは、銀城空吾の計画の妨げになり得る”読書家”に対抗するためだった。浦原喜助の言葉を信じるのなら、雛森桃の悪夢は全部その一つに起因する。

なら滅却師こいつ等も同じなのか。ようやくただの死神になれた一人の少女の過去に執着し続け、彼女が取り戻した細やかな日常の幸せを悪意の汚泥で穢そうと企んでいるのか。

そんな冬獅郎の呵責に目の前の滅却師は一言、答えた。

—— 其が奴の償うべき罪過だ

「そう陛下は仰られた」

「……ッ！」

蒼都が告げる。それがまるで神の決めた彼女の定めであるかのよう。護廷十三隊最強の隊士たちから卍解を奪う常軌を逸した靈術、神業を仲間へ授けるような超越者が、またしても雛森桃の未来を奪おうとしているのだ。

それに対し、冬獅郎はまたしても、何もできずにいた。

「…雛……森……イ……」

まただ。また俺はあいつを護れず、あいつが傷付く様を指を啜えて見続ける事しか出来ない。

二年に及ぶ修行も、噛み締めたあいつと過ごす幸せも、悲劇を乗り越えた自負も。どれ一つとして雛森を救う力になってはくれない。

「くそ……い……くそ……オ……ッ！」

地獄を潜り抜けたと思った輝かしい未来が幻だったと知った絶望が。血の滲むような努力の一切が徒労に終わった落胆が。何も変わっていない無力感が、耐え難い屈辱が、少年の胸に重く沈殿する。

「くッ——そオオオオオオッ!!」

冬獅郎は地面に這い蹲りながら、己を、最愛の幼馴染の運命を、彼女を取り巻くこの世の全てを、心の底から呪った。

羽衣紅梅鈴鈴
はごろもこうばいりんりん
卍解
ばんかい

その時だった。遠くの地から途轍もない靈圧が噴出し、戦煙に覆われる瀨靈廷の曇天を貫いた。

「!! 何だ…!?!」

「ぐ…うあ…」

「この靈圧はまさか…!!」

凄まじい圧迫感に胸を押さえる戦場の三人。

忘れる事など不可能。かつて空座町上空決戦にて現隊長格の大半が身を以て知った紅桃色の煉獄。二年の時を越え、あの恐るべき力を彷彿とさせる膨大な靈圧が冬獅郎の魂にのしかかったのだ。

「莫迦な、これは…! 陛下のお力を以てしても…あの女の卍解は奪えなかったと言うのか…!?!」

そして少年の脳裏に浮かんだ答えの真偽は、啞然とその桃色の靈圧の柱を見つめる蒼都^{ツァン・トウ}の顔が何よりも明確に物語っていた。

『報告!・報告!』

直後、少年の頭に若い女の声が響く。

【天挺空羅】。その高位な通信鬼道を使える強者の報告に耳を傾けない者は皆無。しかし味方の損害報告ばかりが届くこの日の瀨靈廷において、その声だけは喜色に弾んでいた。

『こちら五番隊三席・蟹沢ほたる! 我が五番隊副隊長・雛森桃^{ひなもりもも}、敵軍の主力バンビエッタ・バスターバインを撃破! 身柄は拘束し現在十番隊へ護送中!』

彼女の嬉しげな『報告以上っ!』の声を最後に、通信鬼道が役目を終える。

そして声の余韻が受信者たちの頭から去った後――

「……マダ息ガアルノカ」

「ヒューッ! 中々タフな野郎じゃアねえか!」

「……へ……同期が金星上げてんだ……! あの世で吉良の馬鹿に自慢すんなら……朽木隊長の仇を……てめえをぶつ殺すくらいはしねえとな……ッ!」

細身の長髪男と巨漢の前で、最後の力を振り絞って立ち上がる赤毛の青年が――

「……一度は道を違えた娘が護廷の為に頑張ってるんだ。先達の僕らが不甲斐ない戦いをしてたら、今度こそ見限られても文句は言えないねえ」

「ッ、やはり陛下は我等を……!」

敵の老紳士と戦う伊達男が――

「……倒した……?」

「流石だな雛森副隊長!」

「あいつなら当然だ!」

「やるじゃねえか”ももちん”!」

「勝てる……勝てるぞ……!」

「……」

強大な敵に苦戦する尸魂界ソウルソサエテイ中の死神たちが、元裏切り者の少女の奮闘に、割れんばかりの大歓声を上げた。

その希望の波は、瀨霊廷の中心で護廷十三隊の勇を信じ、己の怒れる心を律していた一人の伝説の下へと届く……

「——小童が意地を見せおったか」

一番隊隊舎、総隊長室。

巖の顔を僅かに緩め、その男は後ろに侍る新たな副官へ静かに告げた。

「出る。お主は残り此処を守護せよ」

「御意」

そう返答し、ここに居るべき忠臣の代わりに跪いたのは、一番隊第三席沖牙源志郎^{おきぎほげんしろう}。聞こえてこないあの数奇者の声を惜しみながら、部屋^{むら}の長たる男は空をゆっくりと仰ぎ見た。

それは祈り。任に殉じた勇敢な戦士たちへ、そして二度と会えぬ無二の友へ捧げる、護廷十三隊そのものと謳われた一人の死神の決意。

「…案ずるな、長次郎^{ちようじろう}…護廷の英霊達よ…」

その男の名は山本元柳斎重國^{やまもとげんりゆうさいしげくに}。

最古にして最強の死神が、仇敵を焼き尽くす劫火と共に今。

動く——

「必ずやお主等を……賊軍共の尸^{かばね}を薪に」

吊うてやろう

世界が炎に包まれる。

それは憤怒。あるいは戦意。

しかし熱気渦巻く尸魂界において、氷の御子と呼ばれたその少年だけが、切り離された冷たい世界に心を沈めていた。

「……何だよ、クソツ……」

自分が呪った幼馴染の悲劇的な運命を、あの可憐な少女は自らの力で切り拓いた。あいつの戦果一つで、崩壊寸前だった味方の士気は爆発的に高まった。

喜ぶべきなのに。護廷の隊長として、家族として、想いを寄せる者として。皆に希望を与えて前へと引っ張っていく彼女の強さを誇るべきなのに。

「……何なんだよ……」

総隊長と戦う”陛下”とやらの救援へ飛び去る蒼都ツァン・トゥを地べたから見送る事しか出来なかった少年——日番谷冬獅郎。

俺は一体……何してんだよ……

守ると誓った少女の頼もしい靈圧に肌を焦がされ、無力な子供は永遠に届かない理想の遠さに、ただただ茫然と打ちひしがれていた。

援軍ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

俺は…一体……

…何してんだよ……っ

『——んキヤアアアアアアアアアアほあああああああん!!』

世紀の美少女あたしこと雛森桃と複製欠魂の桃玉、そして斬魄刀の
飛梅ちゃん。三者(?)の鈴を転がすような黄色い美声が部屋に木霊
する。

ロスヴァリエス ヴァルアリヤ
虚霊坤は英霊宮殿、その最奥たる桃ちゃんずプライベートエリア
に設けられた界間観測所、通称「BLEACH観賞席」。あたし達は実
に二年ぶりの濃厚曇りシロニウムの摂取でちよっとおかしなテン
ションになっていた。

「これよっ！ これなの！ やっぱシロちゃんの一番の魅力はオサレ
な主人公ムーヴなんかじゃなくて、不幸な雛森ちゃんを護りたいのに
やる事なす事全てが空回りして暴れたり愕然としたりしてる曇りに
曇った姿なのよっ！ はあああんしゅきいいいいい!!」

『——んほおおおおお、あの絞り出すような細かい声ええ！——可哀
そうで……可哀そうで……痛いよおお——精神体なのに頬が攣って痛
いのおお!——』

「……くふっ……またなのね、氷輪丸トカゲさん。また幼い主人に、哀れで、惨め
で、無様な醜態を晒させてしまったのね……うふふ……」

雛森ちゃんを救おうと我武者羅に足掻いてる姿。力及ばず屈辱に
歯を食い縛ってる姿。そして想い人が自分を必要としてくれない事

に寂寥と無力感が渦巻く鬱屈した気分になってる姿。

ああ、愛しい愛しいあたしのシロちゃん。可愛い可愛いあたしのシロちゃんっ。あなたは一体どこまで光り輝いたら気が済むの…っ！

「ふふっ…でも大丈夫よ、氷輪丸。優しい私は”最強”を自負する貴方に『どんな気持ち？』だなんて酷な事は訊かないわ。だって私がそんな事訊かれたら羞恥のあまり自害してしまいますもの、ねえ？ うふ、うふふっ…」

ほら、バンビちゃん戦後にあんなにご機嫌斜めだった飛梅まで一瞬で瞳のハイライト消して可憐に嗤ってるでしょう？ あたし達をここまで笑顔にしてくれる人はあなただけ。あなたは世界で一番大切なあたし達の”光”なのよ…

「はあああ…——よしっ！ 正気に戻って二人共！」

『——あたっ——ぶたないで！——』

「うふ…うふふ…」

存分に悶えてニチャリ散らかしたあたしはぐつと気持ちを入れ替える。久々の上質な湿度の結晶だったけど、そろそろ現実を思い出さないといけない時間だ。シロちゃんが救えるのはあたし達だけで、この世界ではない。

そう。忘れがちだけど、なんとこの世界は現在消滅の危機を迎えているのだ…！（Ω Ω Ω へry

「えー諸君、バツハおじさんの第一次尸魂界侵攻も佳境に差し掛かりました。そろそろチャン一オサレ化計画を進めましょう」

只今繰り広げられている滅却師勢力と死神の戦いを描いた原作終章【千年血戦篇】。あたし達はこのインフレインチキなんでもござれな戦争で、我らがオサレ漫画の主人公・黒崎一護に”らしい”活躍を
クインシー
ウエコムンデ
していた。ため陰で奮闘している。

その最初の成果が、ようやく虚圏にて結実の時を迎えようとしていた。

『——ネルをやったのはお前か?』

あたしの死神ボデイがバンビちゃんと遊び終わるとほぼ同時。場面は懐かしの虚夜宮^{ラスノーチエス}へ舞い戻る。

いつもの主人公ムーヴで死神の青年が戦場へ降り立ち、丸眼鏡のインテリ軍人風滅却師^{クインシー}が悠然と振り向く。

こうして桃ちゃん演出【黒崎一護vsキルゲ・オピー】は、多少の差異を除いて概ね原作通りに始まった。

『いいえ、残念ながらワタクシでは上位十刃^{エスパーダ}に匹敵するその破面^{アラソカル}を一撃で下す事は出来ないでしょう。ですがどの道ワタクシを倒さねば、貴方が彼女の仇敵の下へ辿り着く事はありません』

『そうかよ。だったらさっさとお前を倒して——押し通るッ!!』

さて。敵軍No.2ハッシュヴァルト氏の虚^{ウエコムンド}圈襲来など様々なガバを乗り越え、ようやく舞台が整ったキルゲ戦。この原作マツチアツプは珍しく終始チャン一優位に進んだ戦いで、冷静かつ有能なキルゲさんの一護アゲ独白により高OSR値がプレゼントされるサーブスイベントだ。また同時に主人公の新たな力が覚醒する切っ掛けにもなるため絶対に成功させねばならない。

あたし達は固唾を呑んで、変動するチャン一のOSR値を見守る。

『ッ、威勢に見合った霊圧をお持ちのようだ……! 情報^{ダーテン}の修正を要求しなくてはなりませんねえ!』

『その弓に霊子の剣……てめえ等ホントに滅却師^{クインシー}なのかよ……!』

敵の正体に驚きつつも一護は始解【斬月】のみで相手と渡り合う。ここまでは本誌と同じだが、違うのはキルゲさんの表情。苦痛に顔を引き攣らせながらも平静を取り繕う彼は恐らくこの始解の時点でチャン一を脅威に感じ、その強さの本質を脳裏で論理的に分析してくれている。

よし、いい流れだ。

『……やれやれ。全力の神聖^{ハイリツヒ・プファイエル}滅矢でも傷一つ付けられないどころか、素手で投げ返しさえされてしまうとは……己の技の未熟さに眩暈させしますねえ』

『心配すんな、前に喰らった石田いしだの矢よりはかなり強かったぜ』

不利な現実から目を逸らさず、なお余裕を見せて自分のポイントを稼ぐキルゲさん。あたしの好きな台詞もちゃんと回収し、両者のOSR値が高まっていく。

(そういえば原作でもそうだったけど、この時の一護って普段のイキリムーヴが若干マイルドになってるのよね。キルゲさんの影響かな) (——と言うより他の敵がイキってばっかだから普段はそれに応じてるだけじゃない? —— チャン一って騙されやすいし影響されやすいから—— 両方企んでるあたし達が言うと言説得力半端ないわね——)

桃玉と毎度の実況解説ごっこをしている間も戦いは進んでいく。石田雨竜いしだりゆうの名を聞いたキルゲさんが反応するも、本誌と同じく石田訳アリ伏線だけを敷いて口を閉じる。

そして直後バツハ陛下の「黒崎一護抹殺命令」が届き、本気を出したキルゲさんが本章で初めて彼ら新勢力”星十字騎士団シュテルンリッター”のパワーアップ形態を披露!

神ヒの正義スキエ

光の翼、道化師風の靴、鉄格子のような模様の両目、そして大きな五芒星の光輪。過去に石田がマユリ戦で見せた超奥義、その名を彷彿とさせるキルゲ・オピーの全力形態こそが…

「滅却師完聖体クインシー・フォルシユテンディイッヒ」。それがこの姿の正しき名」

——貴方を罰する力の名です

うーん、この原作バンビちゃんとは比べ物にならないオサレさ。やっぱ作中最上級の容貌OSR値と【爆撃ジ・エクスプロード】の初期OSR値に甘えた猟奇性癖メンタルよわよわ少女ではキルゲさんには遠く及ばないか。彼はデータキャラに見えて実は滅却師クインシーの基礎能力を徹底的に鍛えた武人タイプのOSR強者なのよ。

(こういうの見せられると千年血戦篇でもオサレな敵と戦える一護に

嫉妬しちやうよね…)

(——バ、バンビちゃんだつて頑張つてくれたじゃん……NTB特化キャラなのに期待値バカ重くてバンビちゃんかわいそう——つよく生きて——)

確かに実際に戦つたバンビちゃんは予想に反し中々のOPBを見せてくれたけど、あれはあくまで予想外だったから感動しただけで、BLEACH最終章に相応しい敵幹部のレベルとは言えない。最近この世界のオサレが不足気味でお肌のカサ付きが気になるあたしとしてはそろそろ”ホンモノ”の潤いが欲しいところ…

『…それが浦原さんが言つてた石田の使つてた能力なのか？ 滅却師クインシーとしての能力を失う代償に引き出す力だつて話の…！』

『まさか！ 滅却師最終形態はその脆さ故に概念自体が二百年も昔に死滅した「過去の遺物」です。そんなものに執心していたのは我等の研鑽と進化を拒んだ石田宗弦いしだそうけんくらいのもの！』

『…！』

『さあ、貴方自身の身を以てその無礼な誤解を改めなさい！ この「滅却師完聖体」は、あんな低俗な代物とは天と地ほども隔たつているのだと!!』

そう豪語し、右手の光剣を振り下ろすキルゲさん。だが疑問が解けた一護はそれを難なく受け止めた。

『安心したぜ。石田がそんなキモチ悪イ恰好に変身したら、間違つて斬つちまいそうだからな！』

『…ツ!?』

『鋒きつびきが緩ゆるんでるぜ！』

—— 月げつ 牙が 天てん 衝しよつ ——

一転攻勢。本誌と異なり始解のままでもキルゲさんの静血装ブルートを突破してダメージを与える一護の強さに目が行くが……この時あたし達は一連の形勢変化に「オサレポイントバトル」の真髄を垣間見ている。

(これさ、霊圧的には完フォルシユテンデイツヒ 聖レットシユテイール 体の方が強いんだろうけど、OSR値的には反動がデカイ最終形態の方が上じゃない？ だからキルゲさん

の変身が別物だって判明した直後に一護が反撃できたのかも)

(——力を捨ててでも自分へ挑んでくる相手だと思つて怯んでたのが別にそんな事なかったと知つて遠慮が消えた? ——そんな微妙な心理変化も数値化できるのか——OPBしゅごい——)

まあ相手がこちらの能力や心境を誤解していてもOSR値が変動するのは、あたし達の”悲劇の少女”演技が証明しているので今更ではある。だがこうして客観的に見てみるとかなり複雑な計算が必要だと改めてわかった。本能的にそれをやり遂げるチャン一はやはりOPBの申し子だ。頼もしい。

(——最終形態といえば石田グランパがその研究に固執してたつて話も興味深いよね——「力を失う」のは反動ではなくそれ自体が目的とか? ——命をユーハに握られてる滅却師クインシーが自由を求めた研究の副産物だったりしたらオサレかも——)

(石田アウスヴェーレンが聖 別から逃れられた理由も不明だけど、グランパとパツパの長い研究が幼い雨竜少年を救つたとかだったらエモいわね)

(——原作でスルーされたパパ組の暗躍でその研究成果がラスボス戦に使われるBLEACHが見たかった: ——【静止の銀】で満足しなさい——)

とか色々考察しながら、あたし達は一護の戦いが終わりを迎える様子を堪能する。本気を出し始めた彼を相手に完フオルシユテンデイツヒ 聖 体でも分が悪いと察したキルゲさんが聖スクラヴェライ 隷で一護の霊圧を奪いにかかる。

しかしネリエルアランカルら破面の治療をしていた遠くの織姫たちにまで危害が及ぶと、一護の眼つきが変わった。

『:あのイーバーンとかいうヤツが変な事を言つてた。だから使いたくなかった。だけど:』

仲間に手エ出すなら

俺も容赦はしねえ

天てん | 卍
鎖さ 解げ
斬ざん 月げつ |

…そこからの一護はあたしが望んだオサレ主人公に相応しい強者ムーヴを見せてくれた。スクラヴエライ 聖 隸の光輪を砕かれたキルゲさんに自己強化の余地は最早無く、メダリオン 星章も一護の【天鎖斬月】に効果なし。そうして相手の手札を一つ一つ真正面から打ち砕き、遂に口調が乱れる程冷静さを失ったキルゲさんへ、紫電一閃。

浦原さんが介入するまでもなく、原作ではグリムジョー戦を最後に一対一の戦いを綺麗に決する事の無かった黒崎一護は、晴れて自分自身の手で敵との戦いに終止符を打ったのであった。

(やったやったっ！ ほらねっ！ あたし達の一護はやればできる子なのよ！)

(——あのキルゲさんをああも容易く……——チャン一も立派になっちゃって……——これが…母性？——真咲ママン激怒不可避——)
「うふ、うふっ……くくく……」

未だ【氷輪丸】に想い○を馳せている飛梅ちゃんを放置し、あたしと桃玉は二十余年の努力の結晶をキヤツキヤと賛美する。

だが気を抜くのはまだ早い。

ここからはタイミングがとても重要になる。あたしがこの混乱を利用してやりたい事は、一護の滅却師能力覚醒などの原作イベを含め、残り三つ。内一つは同時にゼロぼんたい零番隊の要請にも応えられるので失敗は避けたい。

…最後の一つは、その……傍から見たらあたしが寂しがり屋みたいになっっちゃうから「シロちゃん曇らせの準備」と言い訳しておきましゆ。

「……ほん、桃玉の一部はキルゲさんが」ザ・ジエイル 監獄”を使えるように陰のサポートを。残りは尸魂界の戦いを見て。もうすぐ山爺がユーハバツハとぶつかるから」

「！ ” 山爺 ……噂に名高い最強最古の正解の出番ですか……！」

『——怒涛の大イベントのオンパレード！——千年血戦篇始まったな！——あ、おかえり飛梅——』

正気に戻った相棒たちにチャン一強化作戦の念押しをするあたし。

OSR値が一番稼げるのは【あつと驚く逆転劇】だけど、実はそれすら凌駕するオサレムーヴがもう一つだけある。絶大な数値を獲得できるソレは太古の昔から受け継がれてきた王道。主人公を主人公たらしめる”カツコよさ”の象徴。

——誰かのピンチに駆け付ける、ヒーローになる事だ。

「という訳で一護の事は頼んだ！」

『——はい！——』

「あら？ 主様はどちらへ？」

「あ…あたし？ あたしはその…」

桃玉たちの問いにあたしは咄嗟、オサレな言い回しで答えようとす
るも失敗し、なんか色々と恥ずかしくなった結果素直に白状して笑わ
れた。

…「テンション上がり過ぎてマユリ様とかに気付かれないように」
だった？ あたしそんなに子供じやないもん、全く…

長次郎よ

さくらば

暗雲に黄煌と輝く稲妻の宮殿が、吊いの炎で燃えていく。”不遜な
盗人” 諸共、風に吹かれる灰となって。

「…そ、総隊長…」

力の差を厭わず強敵に挑んだ、勇敢な隊士の声が聞こえる。それが震えているのは傷が深いからか、目の前の老骨が操る炎に怯えている故か。

彼に総隊長と呼ばれた仙人髭の死神——山本元柳斎重國やまもとげんりゆうさいしげくには、満身創痕の隊士へ慰安の言葉を残し、大地を蹴った。

「案ずるな、檜佐木副隊長。奴等賊軍一人残らず……儂がこの手で叩ツ斬る」

大気を穿ち、爆風をまき散らしながら、老将は空を駆ける。目指すは全ての元凶。瀾霊廷せいらいていで最も巨大な気配が渦巻く戦場で戦う、敵の首魁。

『——十一番隊更木隊長！ 西三〇一地区にて敵主力ベレニケ・ガブリエリ撃破！』

『同隊長、西三〇五地区にて新たに敵一名撃破！ 名はジェローム・ギズバット！』

『同隊長、西二〇二地区にてまたまた戦果一つ！ 敵名はロイド・ロイドと判明！』

次々と山本の耳に届く味方の戦勝報告。五番隊副隊長雛森桃ひなもりももの活躍に触発されたのか、最強の剣豪の名を持つ男が負けじと大暴れしている。流石は歴代一との呼び声高い「剣八けんぱち」だ。

…しかし護廷が誇る怪物の躍進もそこまでだった。

「——」特記戦力」がこのザマか」

十三番隊の管轄区・西二〇三。それまでの獅子奮迅の働きが嘘のように、更木剣八さらきけんぱちが膝を突く。強敵との連戦とはいえ彼ほどの男があっけなく倒された理由は何か。

その滅却師クインシーの背後へ、山本は轟音と共に着地した。

「！ 来たか……！」

「陛下の許にトップが单身乗り込むたア、随分甘くみたんじやねエの!?」

「終ワリ」

「くたばれジジイ！」

『猛虎双牙』

『モーフィン・パタナイズ』

『恐怖』

『バーナーフィンガー・4』

四人の近衛たちの攻撃が襲い掛かる。しかし老将の目にそれらは一つとして映らない。

「…万象一切灰燼と為せ」

——流刃若火——

始解の一振りで、護廷の隊長すら下す強敵たちが物言わぬ炭と化し吹き飛んでいく。雑兵を片付けた山本は地獄の底から湧き上がるような鬼声で、残った一人の男の名を呼んだ。

「千年ぶりじゃな、ユーハバツハ」

お主の息の根を止めに来た

死神と滅却師。相反する両軍の頂点は、長きに亘る因縁に終止符を打たんと剣を振るう。

そして世界を滅ぼす巨人たちは戦いの火蓋を切った——

深紅の竜巻が瀾霊廷を灼熱地獄へと変えていく。荒れ狂う炎の中で二人の男たちは静かに言葉を交わしていた。

「変わらん、ユーハバツハ。じゃが部下を軽んじるその悪辣もここで終わると知れ」

「お前は変わったな、山本重国。今のお前にかつての悪鬼羅刹の如き恐ろしさは欠片もない。千年の微睡がお前から牙を削ぎ、老いを齎したのだ」

そう失笑する黒髭の男はその昔、護廷十三隊が血みどろの生存競争の果てに撃退した滅却師たちの王。瀕死の傷を負い敗走した彼は、長い雌伏の時を経て、雪辱を果たさんと尸魂界へ二度目の戦を仕掛けてきた。かつてとは比較にならない強大な戦力を引き連れて。

しかし敵の挑発を受けて尚、星十字騎士団なる精鋭たちが瀟靈廷を破壊する様を見せつけられて尚、不思議と山本の胸は怒りに燃えるでも、殺意に冷えるでもなかった。ただただ風のように静まり返っていた。

「変わったか……」

確かに奴の申す通りやも知れぬ。老死神は自らの心を見つめ、時代の推移、生まれた歴代の死神達の顔を追憶し、敵の言を肯定した。

「王悦……天示郎……修多羅……曳舟……」

尸魂界の歴史に不二の名を遺し、霊王の眷属となった昇龍達。

「春水……十四郎……」

我が元字塾の門下から出た、最初の隊長達。

「刳屋敷弑里……朽木蒼純……志波海燕……」

悲運に苛まれねば必ずや大を成せた、若き英霊達。

「痣城双也……銀城空吾……藍染惣右介……雛森桃……」

その内なる闇を掃えてさえいれば、三界に悠久の安寧を約束してくれたであろう、道を違えた強者達。

そして。

——黒崎一護——

「……あの者が銀城空吾を討ち、我等と共に歩む意思を示した時。四十六室に新たな風を吹き込んだ時。儂は変わらぬ筈の永遠が、僅かに身動きする様を目の当たりにした」

山本が口にした名に、ユーハバツハが眉を顰める。

「我等死神は霊界不易の為に命を賭す者なり。じゃが生生流転は不断なるもの。我等は若輩に過ぎぬ人間の小童に、其の道理を説かれたのじゃ」

そう、変わったのは山本重国ではない。多くの先見明識な同胞達を切り捨てた報いを受け、過ちを繰り返し……その絶えぬ負の停滞を一人の心優しき青年が断ち切った。

この世界そのものが変えられたのだ。あの人間の子供——黒崎一護によって。

「儂が老いたと言ったな、ユーハバツハ。成程、お主の目覚めが二年早ければ其の言に違いはなかったじやろう」

「……ッ、貴様……」

山本の途轍もない霊圧が、ソウル・ソサエティ尸魂界の界空を歪ませる。

千歳一時。不変の淀みに沈んでいた最古の死神は、古の修羅でも、千年の時に縛られた掟の守護者でもない、新たな若火をその老骨に宿す「護廷の戦士」へ生まれ変わろうとしていた。

「覚悟せい、死に損ないの亡王よ……！　そして刮目せよ！」

我が太刀に燻る残火は今や——

旭日の如く燃え上っておるぞ!!!

残^{ざん} |
火^か卍^{ばん}
の 解^{かい}
太^た |
刀^ち

『か……かつ……』

BLEACH屈指の規模を誇る大決闘〔総隊長VSユーハバツハ（偽）〕。興味津々に観戦するあたし達桃玉欠魂衆ブランドクは山爺の無双っぷりにほれぼれしていた。

『——え、山爺普通にカッコよくない!?——』

『——原作よりチャン一の主人公ムーヴが増えたせいかな影響されてオサレに目覚めてる!——』

『——ヨン様と戦ってないから左腕が無事なものも大きいと思う……!——』

まさかあの山爺が一護へOSR値譲渡を行うとは。我等のオサレ主人公にとって途轍もない追い風である。

お姉さまの計画が想定外の方向へすっ飛んでいくのはいつもの事だけど、こういうポジティブガバなら全力で歓迎します。ありがとう山爺、前世で散々無能ジジイとか言っつてめんごめんご。

『我が炎の持つ熱の全てを、刃先の一筋のみに集中させた』

『……!』

『燃えはせぬ、爆炎も吐かぬ。ただ触れるもの全て……跡形も無く消し飛ばすのみ』

——残火の太刀”東”——

旭日刃

超高オサレ技に黄色い声飛びまくる観戦席。〔月牙天衝〕が砂粒に見えるような巨大クレバスを地面に刻むバカ火力にビビッて安直に反撃するユーハバツハ（偽）だが、山爺の奥義は四方四象。東があれば西もある。

『どうした、眺めておるだけか?』

『……莫迦な、私の剣が……!』

『否、今の問いは少々意地が悪かった。矢折れ刀尽き、自慢の血装ブルートとやらも斯様な有様。足が動かぬのも無理はない』

——残火の太刀”西”——

残日獄衣

山爺が纏う劫炎に触れた瞬間、ユーハバツハ○の剣が刀身の半ばから消滅した。撰氏一千五百万度、太陽そのものに匹敵する炎の鎧。『逃げてても良いぞ——直ぐに捕らえて殺すがな』

あまりの力に唾然とする敵へ、歯を剥き出しにして嗤う死神。

いや顔K O E E E E E ! バツハ○も堪らず大技を披露する。

『ツ、おのれ……！ 滅却師の戦術が弓剣だけと思うなよ！』

『なんじゃ？ 儂には何も通じぬぞ！』

『攻防一体の我が極大防御呪法を見よ！ 陣に踏み込めばたちどころ

に神の光がお前を斬り裂く!!』

——キルヒエンリット 聖 唱 ——

ザンクト！ ツヴァインガー 聖 域 礼 賛

マトリ○クスの二進記数弾幕のようなローマ数字の列がザーツと広がり、バツハ○の周囲に巨大な光の十字架が聳え立った。

シユリフト 聖文字の文字を彷彿とさせる”キルヒエンリット 聖 唱 ”なる新技形態。ラスボスらしく中々にオサレだが……残念ながら原作では次に登場した山爺の超大技のせいで影が薄い。

どうやらそれはこの世界でも同じになりそう。

さあ来るぞ。

我ら桃玉衆が選ぶBLEACH最オサレ技名ランキング、断トツの

No. 1!

『……戸しかばね共、我が炎に散った亡者の灰よ……手を貸せ』

暫し、戦の愉悦をくれてやる

——さんかのたち 残火の太刀 ” 南 ” ——

かかじゅうまんおくしだいそうじん 火火十万億死大葬陣

んほおおおおお☒これこれエ!!

無数の焼け焦げた骸骨が地面から這い出て襲いかかるくつそカツ
コいい名前の超奥義！ マジでどんな生活してたらこんな技名考え

付くのか。師匠が師匠と呼ばれる所以がここにある！ くううううううう素敵いいい！

当然こんなオサレ技を受けた者が勝てる筈も無く、バ○は無様に吠えながら骨の津波に押し潰されていく。勝負ありですね。

「――私は上に戻ります」

ふと声が聞こえ振り向くと、飛梅がスタスタ観測室の出口へ向かう後ろ姿が見えた。

”最強の斬魄刀”の力を目の当たりにし、お姉さまのぶっ壊れ霊格に追いつこうと裏で努力してる彼女は何を思ったのか。多分刺激を受けて修行したくなったのかも。

お姉さまの霊圧バフがあればあなたも十分強いのに、健気な娘だ。

しかしバンビちゃんの時も思ったけど、原作キャラの印象というものは全く当てにならない。

そもそも山爺は漫画的にラスボスの格を維持するための犠牲になっただけで、こうして見ると普通に作中最強の一人だという事が良くわかる。例えば他の隊長たちが苦戦する星十字騎士団シュテレンリッターのメンバーを三人も倒した剣八がバツハ○に手も足も出ずに負けたのも、その後バツハ○をボコボコにする山爺がどれだけ凄いのかの指標になっただけで、KBTOT師匠もテンポ重視の少ないページ数で彼の強さを強調しようと頑張っていた。

「――その剣八が舐めプマンすぎて強さの指標にならないんだけど――」

「――倒した星十字騎士団シュテレンリッターたちもナレ死で雑魚イメージついちゃったし――」

「――強すぎる味方キャラを格を落とさず退場させる方法って難しいよね……」

まあ印象とはつまりそういうコトである。前後の展開がその人物のOSR値に与える影響は極めて大きく、そして残酷だ。それはあの

オサレ師匠ですら掴み損ねる程に。

さあ、そろそろだ。踏み台キャラの哀れな運命が山爺へ牙を剥く：

『儂の卍解を奪わなかった事を悔いておるのか？ 違うな、お主は奪わなかったのではない。奪う事などできんかったのじゃ』

『ぐうっ…！ こんなものでこの私をオオオッ！』

『力を奪い、操る。其れを成すには力そのものへの深い理解が肝心。他の隊長達の卍解を奪え、藍染の許で秘匿され続けた雛森副隊長の、そして未だ会得より日が浅い黒崎一護の卍解を奪えんかった事にその星章メタリオンとやらの本質が見えよう』

底知れぬ力を奪うなど

如何な神とてできぬ事じゃ

積み上がった山爺のOSR値山がサーツ…と崩れ落ちていく音が聞こえる。あゝ無情、諸行無常の響き也…

『おのれエ！ 山本重国イイイツ!!』

『終わりじゃ、ユーハバツハ』

天 | 残火の太刀； 北 |
地 | 灰 尽 |

一閃。胴から下を跡形も無く消し飛ばされたバツハ○が、瓦礫の上を転がった。勝敗が決し、山爺が卍解を解く。この短すぎる残心も無駄に卍解を維持すると尸魂界が滅びるから仕方なかったのだ。

『…も…申し訳ごいません…：ユーハバツハ様…：』

そんな意味深な遺言をバ○が呟き、突如山爺の背後で大爆発が起きる。場所は総隊長たる彼が護るべき拠点、一番隊隊舎。

「なっ…!?! 沖牙アー！」

そして山爺が部下を救わんと駆け出す直前、○じゃない方のユーハバツハが戦場へやってきた。

” R ”のロイド・ロイド

…さて、観戦はもう十分楽しんだ。後はあたし達の仕事をしよう。

シュテレンリッター 星十字騎士団” Y ” — ジ・ユアセルフ 「貴方自身」ロイド・ロイド。それが今まで

山本元柳斎重國が戦っていた敵の正体だった。

彼には知る由もないが、護廷隊は目の前で息絶えた男のような変身能力を有する類の敵兵と既に遭遇していた。更木剣八と戦った” L ”のロイド・ロイド。山本が倒した人物の双子の兄弟である。

あるいは更木より報告を受けていれば敵将の影武者の存在を警戒する余地はあったのかもしれないが、たとえ警戒できたとしてその偽物が脅威である事には変わりはなかった。微塵の動揺もなく、山本は更なる怒りを心の炉にくべ男を問い質す。

「…一番隊隊舎を破壊したのは儂への挑発ではあるまい。彼の地にあって賊の興味を引き得るものは一つのみ。貴様、よもやあの男と…！」

「名答」

男——ユーハバツハが明かす。目的は一番隊隊舎の真下にある真央地下大監獄。彼の目的の人物は二年前の大乱の後、その最下層『無間』に捕えられていた。

「…何故彼奴に会った。我等を滅ぼすために手を結んだのか」

「己惚れるな、山本元柳斎。お前達を殲滅する事など私一人で容易い」

ユーハバツハは目を閉じ、腹立たしげにこう答えた。

「奴とは決別した。孰れ確実に殺す。彼方かなたなる魔に魅入られた異端者など我が世に必要ない」

失望。嫌悪。憎しみさえも感じる昏い声色。何が奴をここまで憤らせたのかは気になるが、しかし山本の関心はそこにはない。

ソウル・ソサエティ尸魂界への影響を鑑み逸ったか、老死神は火急に敵を仕留めんと霊圧を解放した。

だが。

「…ッ！ 卍解——」

「無駄だ」

メダライズ星章化

それは一瞬の事だった。無造作に。あつけなく。山本元柳斎重國が誇った無敵の卍解は、ユーハバツハが掲げた掌大のメダルへと吸い込まれた。

「未知故に奪えぬ」…だったか？ 下らん。そのような制約があるなどに見做す根拠はお前の心の弱さ、未知への恐怖が描いた幻想に過ぎん」

「…!!」

「それにもし仮にその幻想が現実であったとしても、お前の卍解は最初から私の既知となっている」

驚愕する山本の前で、ユーハバツハがメダルを突き出す。そこに封じられているのは世界を滅ぼす山本の卍解【残火の太刀】。

「忘れたのか？ お前が信頼し力の底を見せた副官こうこうごんりようりきゆう雀部忠息…：奴と寄り添い、お前の卍解の底を見た【黄煌巖靈離宮】は、我が能力の前に平伏したのだぞ」

「ッ、貴様!!」

部下の誇りを穢され逆上する山本。

しかし彼の始解の劫炎は、ユーハバツハのメダルの中から現れた”小さな白い星”に掻き消された。

「お前が自ら担い誇った力だろう。その最強の卍解に、たかが始解で挑もうなど」

尸^し | 残火の太刀^{ざんかのたち}； ”天^{てん}” |
白^{はく} ☒^{せい}

大気が。大地が。矮星が呑み込んだ世界そのものが消失する。真空に流れ込む空気と熱が起こす凄まじい轟嵐が周囲の地形を抉り取る。

そんな天変地異の中央。灰も残さず椀形に消し飛んだ地面の端に、炭も同然に焼け焦げた山本の身体は無様に横たわっていた。

「…死神共の長とは言え、死する様は哀れなものだな」

瀕死の老人を見下ろし、ユーハバツハは止めを刺さんとクレーターの淵を下る。

「山本重国。半端者よ。私が何故五人の特記戦力から貴様を外したか気付いているか？」

滅却師^{クインシー}の王はこれまでの男の言動を振り返る。此度の戦争ではない、この数年に立て続けに起きた異変における全てを。

「私が現れるまで卍解を維持しておればまだ差し合いの一太刀程度は入れられただろう。護廷十三隊の被害も、即座に黒崎一護に助力を願えば少なく抑えられただろう。何故それをしなかった？」

借りを作る事を恥じたか。面子がそれを許さなかったか。

否。そんな人間らしい低俗な心理を持ち得る未熟さは、この男の中から疾うの昔に消えているだろう。

：解っている。山本元柳斎重國は”戦う事”ではなく、”護る事”に重きを置いたのだ。尸^{ソウル}魂^{ソサエテイ}界のみならず、取るに足りない人間たちが生きる現世さえも。

それこそがユーハバツハが彼を特記戦力に列さなかった理由だった。

「かつての貴様は違った。敵を討つに利するものは全て利用し、人間はもとより同じ死神の命にすら灰ほどの重みも感じぬ剣の鬼。だが

それ故に、貴様ら護廷十三隊は恐るべき集団だった」

しかしそれも遙か昔。千年前に滅却師クインシーを殲滅して以来、護廷十三隊は護るべきものを増やし慈しみ、つまらぬ正義や誇りのために二の足を踏む懦弱の一群に成り下がった。

「死に行く貴様に教えてやる。地獄でかつての同胞に詫びる為に」

老いた死神へ突き付けた指先に、ユーハバツハは圧倒的な霊圧を集束させる。

「戸魂ソウル・ソサエティ界はこれから死ぬが…」

護廷十三隊は千年前

我等と共に死んだのだ

そして彼の絶死の一撃が放たれる。まさに、その寸前。

「……迂闊じゃな」

—— 破道はどうの九十六・” 犠牲鬼道”
—— 一 刀いっとう 火か 葬そう

「なっ…!?!」

突如、瀕死の老人が男の足を掴む。直後に起きたのは凄まじい爆発。巨大な炎の刀身が天高く聳え、ユーハバツハの半身を焼き焦がした。

【九十六番・”犠牲破道”】。炭化した術者の肉体を触媒にしてのみ発動する禁術。

そして、ゆらり…と。骨まで真っ黒に煤けた片腕の身体が。

最強の死神と呼ばれる男が、地べたより立ち上がった。

「…お主の言、寸分違わずお主に返そう——」 己惚れるな」

「貴様…ッ」

苦痛に顔を歪めるユーハバツハへ、老死神は問う。

「お主、まこと我等を弱者と断じておるのなら…何故盗人の如く我等の卍解を奪う？」

「……！」

「我等から卍解を奪わずとも、卍解ごと其の手でねじ伏せればよからう。先程の影武者も同じよ。地下監獄を暴くに儂が邪魔であれば、其のまま押し通ればよからう。何故そうせんかった？」

体は罅割れ片腕も失う満身創痍。しかし山本重国の舌鋒に衰えはない。

「責めてはおらん。蔑んでもおらん。底知れぬものは恐ろしかろう。お主が部下を使い、我等の力を奪ったのは何ら理に反した事ではない」

”己が身一つで敵へ挑めぬ、腑抜けのみが使う手じゃがな”

ふらつく体でそう言外に述べると、ユーハバツハの眉間の皺が深まった。

「…つまらん挑発だな」

男の頭上に巨大な光の弓が現れる。そこに番えられているのは矢ではなく、劍。射出されたソレは山本へ向かわず、主ユーハバツハの手元に収まった。

「これは戦でもなければ復讐でもない。天咎である！」

「……！」

「戸魂界が紡いだ史、技、能の全てを奪い、絶望の無へと帰させる！」

そうしてのみ、貴様ら死神の百万年に亘る大罪は償い、贖われるのだ!!」

ザンクト・ボーゲン
大聖弓
ハイリツヒ・シユヴェーター
滅却聖劍

ユーハバツハが光の劍を袈裟に構える。眩いばかりの蒼炎。蜃気楼のように周囲の時空を歪める桁外れの霊圧。

今の己にその一撃を防ぐ手立てがない事を、山本は知っていた。

な

山じい

これなに？

：何故今になって。いや、今だからこそか。

不意に走馬灯が頭を過る。

幼き頃の、世話の焼ける自慢の教え子が、一枚の掛け軸を見つめていた。燃え盛る炎を纏った男が描かれたその絵について、若かりし山本は戒めの思いを胸に弟子へ語る。

——”かつて尸^{ソウル・ソサエテイ}魂界が厄災に見舞われた時に現れ、更なる厄災を齎し、一つの時代の終焉と共に消えた化物。

もし奴が再び現れ、そして消えた時。それはお主ら若者が拓く新たな時代の幕開けとなるであろう”——

幼子へ伝え聞かせるには些か難儀で、故に弟子の追及を煙に巻く事の叶った、”終わり”の物語。

厄災の怪物を呼び起こして尚、巨悪を打ち損じた己の不義理を恥じ入りながら、山本重国は迫りくる光の刃を見送った：

『——なっ！』

だがその時。世界が割れた。

弾かれるように空を見上げる二人の巨人。ユーハバツハの絶死の剣が山本の胴を掠め、矛先を変える。

「何だあれは…？」

かくして両者は気付く。周囲に、せいいいてい瀨霊廷全土に広がる一つの霊圧。膨大で力強く、されど優しき温もりを宿すその気配に、誰もが息を呑んだ。

「まさか…」

驚愕する山本の眩きが溶け消えた大気を、漆黒が斬り裂いた。

轟音を連れ、一振りの刀が戦場に飛来する。

闇色に輝く刀身。断ち切られた鎖が垂れる頭金。鋭利な装飾が施された【卍】の鏝。

そして見る者全てを威圧するように地に突き刺さったその刀の許へ、一人の青年が舞い降りた――

「……………一つ、聞かせ」

あんたが敵のリーダーか？

惨敗ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

「——ッはあああ…」

無数の呻き声が渦巻く闇の中に、場違いな若い女の声が溶け込む。
妙に熱っぽいその声の主はあたしこと雛森桃^{ひなもりもも}。思わず肺から零れ
出たソレが恥ずかしくて、只でさえ赤いあたしの顔は首まで色付く。

真央地下大監獄。

ソウル・ソサエティ尸魂界が誇る霊術の粋を尽くした封印を容易く破ってふんぞり
返る怪物——藍染惣右介^{あいぜんそうすけ}。久々の共犯者とのオサレ逢瀬を楽しんだ
あたしは後ろ髪を引かれつつ時間に急かされ渋々帰路についていた。
(はああ…えがった…)

少しお話しただけなのにまだ足がふわふわしてる。感動と羞恥が
ごっちゃになって悶えてしまう。叶う事なら今直ぐこの気持ちを大
声で叫びたい。

二年ぶりに逢ったヨン様は、あの原作最オサレ形態と名高い拘束具
姿に今世の死天使要素まで合わせり、バンビちゃん戦のあたしが情け
なく見えるくらいカツコよかった。

あれがオサレマスター。養殖オサレキャラのあたしでは到底たど
り着けない至高の頂。

悔しいが格の違いを見せつけられたと言わざるを得ないだろう。

(うう…でも失敗したなあ…)

道中の水たまりに臙げに映る自分の姿を見て、唇を噛む。

バンビ戦で遊び過ぎてポロポロになった死覇装。黒染の色で隠れ
る煤焦げはともかく、見えてはいけない下着や素肌の白がもう輝かん

ばかりに目立っていた。

容貌OSR値を疎かにするなんて淑女うんぬん以前にあたしらしくない。戦時中に着替えるのは副隊長ムーヴ的に無理なんだし、もう少しバンビちゃんの攻撃を上手に避ければよかった。

完璧コーデイネート無間ヨン様との対比があまりに惨めで気づいた途中からずっと居た堪れなかったよ…

(ま、まあヨン様女性に興味ないしはしたないあたしの姿もノーカンのな…でもそれはそれでモニョるといっつか…むう…)

桃ちゃんも多少はリヨナ映え幼児体型からNTR曇らせキャラっぽく女性的な体に成長してるのに…(ゴニョゴニョ

的な複雑な乙女心)はさておき。

結論から言うと今回のヨン様との交渉は何とか軟着陸した。

彼に求めたのはお馴染み「一護オサレ主人公化計画」への参加。あのオサレマスターの協力を仰ぐのだから可能な限り高OSR値を手にして交渉に挑んだが、意外とこちらの容貌OSR値が低くても何とかなった。

もしかしたらこの世界のヨン様も多少は一護に興味を懐いてくれるのかも。チャン一いいよね。

ともあれ、これで計画の成功は半ば保証された事になる。

あの人の大正義っぷりは二度の「雛森イイイ！」で証明済み。払う対価は——ちよつと寂しいけど——あたし的には対価とさえ呼べないもの。これまでの事も乗せて全力で恩返しさせていただこう。覚悟してくださいね藍染隊長っ！

「——ん…？」

そんな決意を新たに監獄を地上へと上る途中。瀨霊廷中に広げたあたしの霊圧感知網が気配を捉えた。

場所は瀨霊廷の上空。遠目に周囲を観察、あるいは誰かを探すのに適した場所だ。

該当する人物は当然、あたしを警戒して虚^{ウエコムド}圏から移動してきた側近ユーグラム・ハツシユヴァルト。

自らの魂魄が放つ霊圧を自ら取り込み気配を消す滅却師^{クインシー}の高等霊術。他の死神なら気付かないだろうけど、この有能桃ちゃんの感知を誤魔化せると思わない事ね。

…でもそうなる気になる点が。

(主のユーハバツハが戦ってるのに桃ちゃん探しを優先してる…?)

ボスを放置するという事はつまりそれだけポテトが能動的にあたしの情報を探っているという事だ。ヨン様もバツハが”読書家”の正体にかなり近づいてる事を仄めかしていた。

(…まあ一番知りたいのはあたしの目的、と言うより「今の雛森桃と”読書家”の関係性」かな)

まったく浦原さんといい、死神も滅却師も美少女○のプライベートを何だと思ってるんだ。「雛森様だし」で全部スルーしてくれるウチの破^{ブレンカル}面たちを見習って、どうぞ。

あたしの索敵法は周囲に広げた自分の霊圧に触れた存在を知覚するセンサータイプだ。お陰で瀕霊廷中にあたしの気配が漂うけど、代わりにあたしの正確な位置を霊圧感知で特定する事は不可能である。

現時点ではこの死神桃ちゃんの「護廷のために戦う雛森副隊長」以外の顔は見えないだろう。

(…となると様子見は下策ね)

恐らく向こうは隠密行動中のあたしが他の星^{シュテルンリッター}十字騎士団を奇襲しない事を不気味に思っている筈。そろそろ動かないと何か暗躍しているかもと疑われそう。

急ぎましようか。

(みんな他の動きはどう?)

行動の前には必ず状況確認を。桃玉たちから山爺が高オサレムーヴで一護をサポートしたとの報告を受ける。驚きながらも冷静に一護の様子を意識共有で確認し、計画は順調と太鼓判。

(ふふっ…らしくなってるじゃん、我らのオサレ主人公は)

ならばこのまま進めよう。ホントはもつと見惚れていたけれど、こ

これは最終的なカタルシスを成功させる為に必要な事なのだ。

「…よしっ！ 真に残念ではありますが、これより一護の悔しい敗北イベントを始めます！ まずはポテトが天鎖斬月てんさざんげつを破壊できるくらいオサレになるまで、ここで死神桃ちゃんがヤラレ役を演じて進ぜよう！」

そう、忘れることなけれ。主人公の華々しい勝利を盛り上げるには必ず”屈辱的な挫折”がなくてはならない。

そのためには何が要る？ イエス、”強大な敵”だ。

しかし残念ながら今のバツハは山爺の『カウンターOSSR』をもらに喰らった影響でポイントが足りない。それでも平然と無双する力があるのは流石ラスボスだが：BLEACHの常識では、オサレじゃない敵に敗北すると敗者のOSSR値が著しく下がってしまうのです。

よって一護に辛酸を嘗めさせる敵は低オサレ状態のバツハであってはならず、あたしが介入して直接OSSR値を高められる副官のハツシュヴァルト氏が望ましい。

（理想は彼の【世界調和ザ・バランス】と【身代わりの盾フロイントシルト】をここで使わせる事ね。原作と違って早めのバンビ戦で敵の能力の基礎OSSR値がクソ高い事をアピールしたけど、ポテトの能力でその印象を決定付けよう）

具体的にはあたしが彼に瀕死相当のダメージを与え、ここぞの所でポテトの傷があのかの能力によってあたしに反転する形で負けたい。最終章の敵勢力No. 2らしい、問答無用でどうしようもない理不尽さを強調させるのだ。

あんな基礎OSSR値を誇るチート能力があれば【天鎖斬月てんさざんげつ】が折られても仕方ない。そんな客観的印象を植え付ける事で『チェーンオサレ効果』を起こし、一護のポイント下落を最小限に抑えるのが今回の作戦である。

連鎖的に他の隊長たちの不甲斐ないイメージも払拭できる。彼らが弱いんじゃないかと敵がチートなのよ…

後はポテトの数字が上がる代わりに負ける死神桃ちゃんのOSSR

値が減るけど、そもそもこの体の役割はあくまでシロちゃんの精神回復剤&加湿器、一護のOSR値調整が主な仕事だ。鯰界ではオサレ!! 強さなので、シロちゃんを輝かせるか弱い美少女であるべき死神桃ちゃんはオサレすぎても困るのです。

ぶつちやけ”読書家”のポイントさえ残ってれば他はどうとでもなるからね。

：別にヨン様との悪企みキャツキヤに夢中で放置しちゃったあの子への詫び湿にリヨナ女王へ原点回帰してあげたいとか考えてないよ?!

ホントだよシロちゃん?

ももうそつかない(ニヤア…

——みすみす尸魂界へ

行かせはしませんよ

全てが一瞬の出来事だった。

『どうした黒崎!!? おい、応答し——ぐあっ!!?』

「!? 何があつた阿近さん!!? ツ、くそっ!」

わからない。何でこんな事になった。青年は苛立ちに身を任せて

剣を振るう。

”贈り物”の腕輪から聞こえた破面アラシカルの友人、ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクの声。懐かしの恩人の危機を知り、仲間たちと共に虚圏ウエコムンドへ乗り込んだ死神代行——黒崎一護くろさきいちじは、そこで滅んだ筈の種族、滅却師クインシーの一団と遭遇した。

指揮官のキルゲ・オピーを倒し、落ち着いて事情を聞こうとネリエルたちの側へ駆け寄る一護。しかしそこに協力者の浦原喜助うらはらきすけの火急を告げる声が届く。

——ソウル・ソサエティ 尸魂界が襲撃された

事態を察した一護は浦原が開いた解空デスコレールを通り、霊界の狭間黒腔ガルガンタを駆けつけた。現地の死神から齎された報告は甚大な被害を伝えるものばかりで、更に反撃の有力手段だった隊長たちの正解が奪われる最悪の戦況。本来護るべき人間である一護に援軍要請が飛んだのも、浦原とパイプを持つ瀨霊せいれい廷技術開発局のやむを得ない独断だったらしい。

尸魂界では一刻も早く、当代死神代行である自分の助けが必要とされてきた。
しかし。

「くそっ……！ 何だよこれ……！ こんな……こんなもん……！」

一護の足は黒腔ガルガンタの虚空から一步も動けなくなっていた。倒した筈の滅却師クインシーが”陛下”とやらのために最後の力を振り絞り、作り出した強力な霊圧の檻で一護を捕らえたのだ。

『畜生……！ てめえ如きが千本桜せんほんざくらを使ってんじゃねえッ!!』

『恋次れんじ!! 何で恋次の声が……!!』

『兄様…… 兄様あああッ!!』

「ルキア!? どうしたお前ら! 白哉びやくやに何があった! おいルキア!

ルキアあああ!!」

周囲の霊子を吸収し自己修復する檻牢術から自分の声は送れない。

浦原喜助の高い技術力で靈波の受信、すなわち尸魂界からの報告だけが届く今の一護の状況は、まるで誰かの悪意によって作られたかのような地獄だった。

『うあああッ!!』 『畜生ッ、この野郎ッ!!』

『どうした技術開発局!』

『急に応答が途絶えた?!?』 『ダメです隊長!!』

『耐えるのだ!!』

『痛え…痛えよオオ』 『大丈夫だ…奴が来てくれる!!』

『必ず…』

『必ず一護が

来てくれる!!』

「……………ッ!!」

知っている。この感覚を。

どれだけ手を伸ばしても届かなくて、苦しくて、痛くて、悲しくて、悔しくて。大切なものが自分の中から零れて落ちていく、背筋が震えて、胸が悶えて、歯茎が軋む、この世で最も大嫌いな感覚。

「くそっ…! くそおっ…!!」

俺は一体何をやってるんだ。何のために死神の力を取り戻したんだ。自問する度、一護の感情が壊れぬ檻に衝突する。

「死なせねえ…! みんな死なせねえぞ…!!」

呼んでる。みんなが俺を。俺を待ってるんだ。

「もう嫌なんだ…! 二度と…また誰かを失うのは…ッ!」

脳裏を幾つもの光景が過る。一番見たくなくて、開けたくない、俺のせいで二度と会えなくなつた人との思い出を押し込めた、心の最奥に置かれた箱。ついこの前まで亡き母親しかいなかったソコに、新しく閉じ込めなくてはならなくなった…一人の少女の姿。

お袋を失って、二度と失わねえって誓つた事を、俺はあの日、また破ってしまったばかりなのに。

「一人前」になつたって、言つてくれたんだ…!」

繰り返して堪るか。失って堪るものか。

「だから…！ だから…ッ!!」

みんな、全部、全部。

俺が。

俺が——

「俺が護るんだよ!!」

…そこに何者かの意図があつたのか。今となつてはわからない。黒崎一護の人生の全てを操つた藍染惣右介あいぜんそうすけは既に囚われ、その陰に隠れながら密かに助けてくれたあの本好き少女との縁も、”仮面の相棒”の消滅と共に途切れた。一人前になつた今の青年の人生を導く者は誰もいない。

しかし。その時起きた事は、誰かに手を差し伸べられたかのような、そうなるように仕組まれたかのような。

ほんの一瞬だけ、そんな不思議な感覚を一護の胸に宿らせる…

——持って征け、一護。

奇跡そのものだった。

ああ、なんと眩しい光だろうか。

見渡す限りが瓦礫の海と化した瀨靈廷^{せいれいてい}。我ら護廷十三隊の不甲斐なきが招いた悲劇。その中心に降り立った漆黒の彗星を見て、六番隊隊長朽木白哉^{くちぎびやくや}は万感の思いで目を細めた。

「…ルキアと…恋次は…生きていたか…？」

朽ち征くこの体は、最早己の誇りたる義妹と副官の霊圧を感じる事すらできない。二人の身を案じる問いの答えは、感情を押し殺した青年の領きになって返ってきた。

——大丈夫だ、と。

「…そうか……よかった…」

ならば、思い残すことはもう、一つのみ。

「私は、もう長くは持たぬ」

白哉は擦れる声で続ける。

瀨靈廷を踏み躪る卑劣の輩を倒す事もできず、多くの隊士達を死に至らしめ、その部下や家族を悲しませ、挙句無様に敗北し死する事を、私は心より恥じる。

「……」

引き換え、目の前で黙し、斯様な恥知らずの言葉に耳を傾けてくれる男は、人間だ。

本来ならこの戦いに巻き込まれる事はおろか、ここに居る事すら無かった筈の者だ。我等死神が庇護しなければならぬ者だ。

「その兄^{けい}に、最後に……頼みを残し逝く私の、悍ましき無様を許して欲しい…」

ソウル・ソサエティ
戸魂界を

護つてくれ

…応えは無かった。しかし遠のく青年の後ろ姿を眺める白哉の胸に満ちていたのは、安堵だった。

それでいい。奴はそういう男だ。応えなくとも解っている。

『一護だ…!!』

『あいつ…』 『隊長、一護です!!』

『黒崎一護…!!』

『来てくれた…!!』

『よかった…』 『一護!!』

『黒崎一護が来てくれた!!』

感じる。あの男の気配が、賊軍の首魁にぶつかっていく。

無二の恩人の温かく、力強い霊圧が瀟霊廷中に荒れ狂う様を感じながら、四大貴族の若き当主はその手に握る魂の半身…斬魄刀を、ゆつくりと手放した。

「——如何にも早い到着だな」

黒崎一護

男の低い声が、青年の鼓膜を震わせる。

「…あんたが敵のリーダーか?」

不思議な感覚だった。目の前に立つ黒髭の滅却師クインシーを見て、一護は思わず戸惑う。

気配も雰囲気もまるで違うのに、どこかで会ったような、それでいて何かが心の中から「知るべきではない」と強く呼びかけているよう

な。そんなちぐはぐな感覚。

「……」敵か……」

男の声は平坦だった。だが一護はそこに微かな失望、あるいはもつと違う言葉で綴られるべき複雑な感情を覚える。

しかし渦巻く憤怒に支配された青年の心が、その感情の正体に気付く事はなかった。

「“そう”だとも、“そうでない”とも言える」

「……ふざけてんじゃねえぞ」

敵か否か。単純な問答すら煙に巻こうとする男の態度にぐつぐつと怒りが煮え滾る。

「戸魂界をめちゃくちゃにしたのは……
てめえかつて

訊いてんだよ!!!」

周囲から感じる今にも消えそうな仲間達の霊圧。破壊し尽くされた尸魂界の街並み。その全てを目の当たりにし限界まで張り詰めた一護の理性の緒が、元凶たる滅却師クインシーの薄い笑みに弾け飛んだ。

「——その通りだ」

それが鬨の声だった。全力の瞬歩で敵を強襲し卍解を振るう黒崎一護。凄まじい衝撃波が辺りの瓦礫を吹き飛ばす。

「ここまで来ては仕方あるまい。望み通り、無慈悲に潰してやろう」
「ぐつ……よくもあいつ等を!!」

男が応じた得物の一合で相手の格はわかった。白哉たちを倒した連中の親玉に恥じぬ、力の底が見えない恐ろしい強敵だ。

だがかつて戦った藍染にすら比類する実力者を前にしても、一護の剣に震えはない。

「……よ……せ……い……お主の敵う相手では、無い……い……」

「ッ、下がっててくれ爺さん！俺がこいつを……倒すんだよ!!!」

後ろから聞こえた瀕死の総隊長山本重国やまとしげくにの制止を無視し、何度も霊

圧を敵へ叩きつける。長い戦いで満身創痍の老将を巻き込むまいと、一護は黒髭の男を遠くへ追い立てようとする。

「されど此度の戦いは、他者に気を配る事が許される生温いものではなかった。」

「…どうした？ キルゲの”監獄”^{ジェイル}を破ったお前の力はその程度か？」

「なっ!? ——がはっ!」

爆発の煙幕に敵の姿が陰った一瞬。気付けば一護は首を掴まれ地面へ叩きつけられていた。

隙だらけな急所へ敵の刃が迫る。

「ぐっ……離……せッ!」

「! いかん、逸るな小童……!」

——破道はとうの九十一——
千手せんじゆ咬天こうてん汰炮たいほう

間一髪で一護を救ったのは総隊長の死力の最上位鬼道。炭のように焼け焦げた四肢に鞭打ち放った黄光の戦列砲火は、牽制には贅沢過ぎる火力で滅却師クインシの体を吹き飛ばした。

「凄え……」

だが感心のあまり一護が呆けた一瞬の間、強大な敵軍の首魁は瞬時に態勢を立て直していた。

「…邪魔立てをするな、山本重国。貴様との戦いは既に終わっている」

「! 爺さん!!」

勝負に水を差された男が強力な霊矢の一撃で総隊長を黙らせる。疾うに限界を超えていた老死神は無念に地へ倒れ伏した。

「くそっ! ハアアアアアッ!!」

「さあ、見せてみる! お前に植え付けられた穢れし力の全てを!」

味方をやられた一護の視界が激情の赤に染まる。奇策も誘いも何もない真正面からの突撃で敵の懐に潜り込み、青年は渾身の特技を振り被った。

だがその直後。

——
| 正解 |
| ぼんかい |
| は |
| じ |
| ろ |
| も |
| こ |
| う |
| ば |
| い |
| り |
| ん |
| り |
| ん |
羽衣 紅梅 鈴鈴

振り下ろされた膨大な霊圧がぶつかると寸前。

「!? この霊圧、つて…!」

「…始めたか、ハッシュヴァルト」

両雄が戦う頂上決戦の遙か上空にて、もう一組の強者たちが、遂にその力の粋を激突させた——

（シユテルンリッター：グラントドマスター）
星十字騎士団最高位ユーグラム・ハッシュヴァルトは冷静沈着な青年である。見えざる帝国皇帝補佐という全ての滅却師が憧れる地位に就く彼は、無論神王ユーハバツハの完全無欠なる英知によって選ばれた。

だが今、かの英知の象徴たるハッシュヴァルトの顔には焦りがあつた。

「まさかこんな使い方をしてくるとはな…」

ハッシュヴァルトは上空に作った霊子の足場に立っていた。しか

し安全圏に居る筈の彼の周囲は”敵”の霊圧で溢れかえっていた。並外れた感知能力を持つ滅却師クインシーの中でも群を抜いた強者たる彼だからこそ知覚できたその希薄な気配は、まるで不可視の霧のように瀟霊廷中を覆い尽くしていた。

情報データでは霊的接触による索敵術の一種と分析されていたが、本質はこうしてばら撒いた霊圧で術者の位置を欺瞞させる”攪乱術”なのだろう。驚異的な霊圧操作能力を必要とする、極めて合理的で万能な超高等情報系鬼道だ。

青年の焦燥の原因は、この術を操り姿を晦ませた人物——雛森桃。ユーハバツハ直々に抹殺命令が下った唯一の敵個人である。

”全知全能”ジ・オールマイティの真価は、物事を既知とした先にある。ハツシユヴァルトはこの第一次戸魂ソウル・ソサエティ界侵攻において奴と接敵し、追い詰め、その背後の”巨悪”との関係を暴く事を期待されていた。だが彼が手を拱いている間に状況は悪化する。

「！ あれはまさか……！」

世界を別つ黒腔ガलगンタを突破し、ユーハバツハと山本重国の戦場に新たな乱入者が現れた。ハツシユヴァルトを急かす更なる理由——黒崎一護だ。

どうやってキルゲの”監獄”ザ・ジエイルを破ったのか。星十字騎士団最高シュテルンリッターの捕縛能力を有する懐刀の失態に青年は驚愕する。

しかし彼は王へ迫る刃、それも【特記戦力】に列する強敵を止める事ができない。皇帝補佐たる者の矜持において許されぬ怠慢であろうと、それが命令であれば是非はないのだ。

早急に任を果たし陛下の御許へ馳せ参じねば。ハツシユヴァルトは雑念を追い払い、努めて冷静に自身の標的、雛森桃の思惑を推理する。

奴は姿を隠した。

目的は奇襲か？ ならば何故動かない。

あるいは諜報か？ それとも暗躍か？

どちらであろうとこちらが先手を取れば奴をあぶり出せる。それも丁度、雛森桃と”読書家”の繋がりを証明できる人物が目障りな動きをしているではないか。

ハッシュヴアルトは構築した霊子弓に神聖滅矢ハイリツヒ・プファイルを番える。

狙う先はあの女と強い絆で結ばれた、無力に項垂れる白髪の少年……ではなく、ユーハバツハと戦う不屈きなオレンジ頭の人間ツァン・トゥ。蒼都との戦いで前者の価値を下降修正した結果の選択であった。「…お許しください、陛下。これは牽制です——」

黒崎一護をこの段階で害する。それは神王に選ばれた青年の将才が導き出した、”読書家”を刺激するための最適解であった。

『報告！ 報告！』

…唯一つ誤算があったとしたら、彼の行動は全て、彼自身の周囲に蠢く敵の霊圧によって把握されていた事。

『影の領域第三転界門にて異常発生！』

『第一・第四門に敵性霊圧が浸透！ 規定に従い強制遮断します！』

『敵性霊圧分析完了…で、出ました、奴です！ 抹殺標的——』

雛森桃です!!

”斯くてハッシュヴアルトの取った”先手”は、最速で敵の”後の先”に見舞われた。

「何だと…?」

通信機器に届いた後方観測室の動揺がハッシュヴアルトの霊矢を霧散させる。

瀟靈廷を見渡せば、転移門を守る聖炎ザンクト・コロナード列柱が次々と縮小していた。滅却師の優勢の象徴であった蒼い火柱の消滅は、護廷十三隊の希望を粉碎するという目的に無視できない影響を与えてしまう。

「自らの武勲より味方の土気回復を優先したか。”夢見がちな善人”

という評判通りの行動ではあるが…」

姿を隠していたのはこの為か。奴の鬼道の腕なら容易な事だと認められたハツシユヴァルトは、勢いの減衰が最も遅い一つの火柱へ急行せんと力む。その下に火柱を霧散させる術を行使している最中の雛森桃が居ると判断して。

「……！」

しかし寸前、彼は思い出す。確かあの女が得意としていた鬼道の一つに靈子を伝導して自らの靈圧を送る遠隔操作術があった。

ならば火柱に注意が向いた今の自分が、最も警戒すべき奴の次の行動は…

「奇襲——」

その須臾の反応が、青年の生死を分けた、まさに間一髪の差であった。

——羽衣紅梅鈴鈴——
はごろもこうばいりんりん
たいりんとびうめ

大鈴飛梅・会釈舞刃
あしらいまいぎり

爆轟。

曇天を真っ赤に染める常軌を逸した大爆発がハツシユヴァルトの意識全てを塗り潰す。数瞬遅れて体を襲った激痛を噛み殺した彼は、咄嗟の靈子歩法で取れる最長距離で襲撃者との間合いを確保した。

「ぐ…ッ！ 不意打ちとは戦士らしからぬ事をする…！」

そして荒い息で敵の卑怯を蔑むハツシユヴァルトの耳に、あの女の声が届く。

「——」
たいりんとびうめ【大鈴飛梅・会釈舞刃】。あしらいまいぎり 卍解解放時に溢れ出る靈圧を全部、抜刀の一振りに乗せる奇襲用の奥義です」

立ち込める白煙の中に襲撃者の朧げな姿が見える。小柄な人影の周囲に輝く桃色の羽衣は、奴が誇る強大な卍解の象徴。

「…」戦士らしくない…ですか？　そう思われるのは筋が違うから
です」

その反論はどこまでも自虐的で。挑発的で。

「ここに」戦士」なんて誇り高い人はいません。いるのは仲間を裏
切った『罪人』と…相手の力を奪うことで自分が強くなったと勘違
いしている——」

とつても手癖が悪い

『泥棒』だけですよ

そして爆炎が晴れた眼上の宙に、ハッシュヴアルトは、一人の天女
を見た。

瀨靈廷の上空で巨大な霊圧が渦を巻く。絶えず破裂し続けるそれ
は無数の剣撃が起こす衝撃波の嵐。その中心で漸く【抹殺標的】——
雛森桃ひなもりももと剣を交える事が叶ったハッシュヴアルトは、しかし意気込みに
に反し決して優勢ではなかった。

「ッ…」

左腕の感覚がない。先程の一撃はかなり深く入っただけ。自身
のダメージを乱装天傀らんそうてんがいで誤魔化しながら、青年は女死神の攻撃に食い
下がる。

「ザンクト・コロナレーデ聖炎列柱を消し去ると同時に、その異変を私の隙を誘う為に利用
する。やはり只の無垢な小娘と見るのは早計でしたね…！」

「…」無垢な小娘？　変な人。あなた方は護廷十三隊をそんな人物が

副官を務めるような組織だと思つて攻めてきたんですか?」

女の太刀筋そのものは然程脅威ではない。そちらの才は無かったのか基礎に忠実な剣術。どこか昔の自分を思い出す。

だが。

「死神に斬術で挑むだなんて、意外と蛮勇な方なんですな」

「!!!」

——梅焰・翳火——

その愚直な剣技から繰り出される凄まじい爆発は、小手先の技術の一切を無意味にする。辛うじて静ブルート・ヴェーネ血装で全身を保護し、ハツシユヴァルトは爆風に身を任せ後退する。

一閃一閃が正しく敵を爆殺するための破壊の一撃。しかし距離を取るだけでは、奴の卍解から逃れるには不十分。

「…そこも、射程圏内です」

——梅焰・飛燐——

七支の宝剣が紅色に色付き、無造作な一振りて恐るべき霊圧密度の火球が放たれる。先程の刀身爆発攻撃で血装ブルートを消耗した今あれを喰らえばただでは済まない。

だがハツシユヴァルトの顔に焦りはなかった。

「滅却師クインシーに矢弾で挑むなど、それこそが”蛮勇”だと返答しましょう

!」

——ハイリツヒ・プファイル
——神聖滅矢——

ザシクト・シユヴァール
纂奪聖雨

その様は宛ら光の豪雨。頭上に生み出した大弓から霊矢の弾幕が放たれる。迫る雛森の火球を削ると同時、削いだ桃色の霊圧が青く変じハツシユヴァルトの身体に吸い込まれた。

「ッ、まさか……霊圧の霊子結合を破壊し吸収した……?」

「二目で見抜くとは。…いえ、貴女は藍染惣右介の許で石田雨竜いしだうりゆうの戦いを監視する機に恵まれていましたね」

「…アレがあたしの卍解の霊圧まで奪える力だなんて初耳でした、けどっ!」

一合で遠戦は不利と悟ったか雛森が瞬歩で接敵を試みる。無論そ

れを許すハッシュュヴァルトではない。

「流石の慧眼です。霊圧パターンを把握された現状で私に危害を加える方法は、霊圧が分解されるまでの僅かな時間に攻勢衝撃を叩きつけられる白兵戦のみ」

「鬼ごっこは苦手ですけど、搦め手なら沢山持ってます…っ！」

突然、女の姿が消失する。

「！ その姿を晦ます鬼道は情報で周知済みです。そして対策も然り」

スクラヴェライ
—— 聖 隷 ——

即座に”霊子の絶対隷属”で周囲の霊圧を吸収するハッシュュヴァルト。霊術により即席で構築されたエネルギーや物質は、霊界の普遍的なものより霊子結合が貧弱だ。瞬く間に鬼道の光学迷彩が剥がれ、驚きに目を見開く雛森桃の姿が露わになる。

だがハッシュュヴァルトが無防備な彼女を袈裟切りにした、その直後。

「…言った筈です。『搦め手なら沢山ある』と——」

はごろもこうばいりんりん
—— 羽衣紅梅鈴鈴 ——
たいりんとびうめ おくりびおうた
大鈴飛梅・二拍火於謡

斬り捨てた筈の女の声が聞こえ、青年は背後からあの歪な宝剣に腹部を穿たれた。

「な——ぐっ！ 分身だと…?!」

「”霊圧が分解されるまでの僅かな時間”。あなたが仰ったその僅かな隙を、霊圧の量を増やして強引に大きくしました」

咄嗟、串刺しのハッシュュヴァルトは唯一残された離脱手段の”影”を用いて磔から逃れる。

「！ 今のは…」

そして離れ、目にしたのは、彼の移動法に驚く二人の雛森桃。

信じ難い霊圧密度だ。ハッシュュヴァルトが斬ったその分身は、霊子の絶対隷属の効果を受けて尚、僅かな風化のみで平然と宙に立ってい

た。

失敗した。青年は腹部の孔を霊子膜で応急手当し眉を寄せる。

スクラウエライ
聖隷の強度を誤ったのは勿論、今の一瞬で”影”の存在を知られた。既に聖炎列柱ザンクト・コロナーデの転移門に細工を施せるまでにその秘密に近付いている奴ならば、来たる第二次尸魂界侵攻における我らの進軍経路に気付くかもしれない。

だが…

「それに価する成果は得た」

ハツシユヴアルトは眼前の天女を見る。

背後に翻る羽衣の数は、五つ。当初の六つから一枚を減らしていながら、しかし彼女自身の霊圧に目立った変化は見当たらない。

「…情報ダーテンで確認できた貴女の卍解の情報に、その羽衣の数と観測霊圧量との比例関係がありました」

だいくれんひょうりんまる
大紅蓮氷輪丸や雀蜂雷公鞭など一部の卍解は持ち主の力量を遙かに凌ぐ強大な力を有する。それらは持ち主自らが解放時間や使用回数など何らかの制約を課す事で、その力を掴み損ねよう調整している。それがハツシユヴアルトの持つ知識だ。

「…『全力で当たれなくてごめんなさい』。我々が最初にその卍解を確認した二年前、貴女が斬魄刀へ向け呟いたと思われる一言です」
「…」

「その時の貴女が纏っていた羽衣の数は四つ。バンビエツタを倒した時より二つ少なく、計測された霊圧量も桁が違いました」

当時は埋め込まれた崩玉ほうぎょよくの力、そして彼女の魂魄の大部分だと想定される”読書家”の影響などの未確認要素が加わり、卍解の本来の霊圧総量は分析できなかった。

だが。青年はそこで「しかし」と前置き、未だ形を殆ど維持する彼女の分身へ目を向ける。

「戦闘などの複雑な動作を行う事を前提に作られた霊圧人形は、その構造の精密さから霊子レベルの変化に極めて貧弱です。爆風などの

単純な衝撃力を維持するだけなら未だしも、私の聖スクラヴェライ 隸の影響下でその高度な分身が尚も機能を保っているのは尋常な事ではない」

「…何を仰りたいのですか？」

声に微かな焦燥を滲ませる雛森桃が、分身と二人揃って剣を構える。臨戦態勢でも彼女の霊圧に大きな変化はない。やはりあの消えた二枚目の羽衣の霊圧は既に使用されている。

ハッシュヴァルトは風穴の開いた自身の腹部に触れながら、静かに閉目した。

「申したい事はありません。私はただ計算をしているだけです」

「計算…？」

訝しむ二人の天女の姿が、青年の閉じる瞼に遮られる。

「ええ——」

そして。

「仮にその分身の霊圧が貴女の羽衣一枚と等価であった場合、それが私の失った臓腑と”天秤”が釣り合うのかどうかを」

再び瞼を開けたハッシュヴァルトの眼に映る天女の数は、一人だけになっていた。

「——なっ…!？」

一拍遅れ、残った片方の雛森が動転し隣の虚空を凝視する。

無理もない。そこに居た筈の頼れる分身が、瞬く間に消滅していたのだから。

情報は得られた。酷く狼狽する彼女を眺めるハッシュヴァルトは、ゆっくりと聖スクラヴェライ 隸と血装を解く。この戦いではもう、どちらも必要ないだろう。

「…くっ、まさかこんな事…ッ！ お願い飛梅っ!!」

「破道の九十…重唱」——

黒稜 檲

得体の知れぬ力を前に積極策を取れる彼女の度胸は流石の一言。ハツシユヴァルトを中点に二つの漆黒の巨箱が交差する。まるで十字架の如きソレは一瞬で青年を呑み込み、凄まじい重力の奔流で押し潰した。

「ッ、あなたは危険です！ 危険すぎます！」

——煌熬琳原・詠萃——

天地もわからない圧倒的な破壊の轟嵐の中で、無防備なハツシユヴァルトの身体はボロ雑巾のように千切れ飛んでいく。

「それは鬼道でも！ 斬魄刀でも！ 虚ホロウの力でも！ 況してや霊子操作でも滅却師クイーンシーの力でもない！」

僅かに残った肌の感覚が雛森の霊圧の爆発的な高まりを感じる。

沸騰する眼球で朧気に見た奴の背から、羽衣の数が一つ減り…

「それは…その力は、まるで…!! まるで”あの人”の——」

そして全身全霊から死力を絞り出すような叫声で、四羽の天女が最大最強の奥義を解き放った。

「この世にあつたら

いけない力です!!」

——はごろもこうはいりんりん
——羽衣紅梅鈴鈴——
たいりんとびうめ おうせんか
大鈴飛梅・鶯殲火

瀟霊廷の空を埋め尽くす紅桃色の鳥の群れがハツシユヴァルトへ殺到し、遮魂膜しやくんまくを粉碎しながら反転した竜巻のように天高く立ち上った。

二年前に護廷十三隊の名だたる強者たちを屈服させた、第三の羽衣を取り込み行使する破軍攻撃。尸魂界ソウルソサエティを生きる靈魂皆がその光景を見上げ、ある者は天変地異の幕開けを幻視し、またある者は過去の悪夢に震える体を抱き締める。

そして彼らの恐怖は、瀾霊廷中の建物の窓という窓、障子という障子を吹き飛ばす途轍もない大爆発になってこの世に具現化した。

以前のように同胞の隊長格らの無力化を目指した手緩い攻撃ではない。脅威を排除すべく明確な殺意が籠った、恐らく今の彼女が放てるであろう全力。

その全てを叩きつけられた哀れな滅却師クインシーは、肉片一つ残らずこの世から消し飛ぶ運命にあった。

そうなる筈だった。

「偽りの神と」
「神なる王を」

「違えるな」

—— 小娘 ——

しかしその時。上空に広がる火の海の奥に、怒れる青年の声が木霊する。

そして。

「がふっ…あ——」

音の消えた周囲に、粘質な破裂音が響き渡った。

大気がうねるほどの霊圧を漲らせる死神の青年。逆巻く霊圧を平然と受け流す黒髭の男。尸魂界ソウル・ソサエティと見えざる帝国ヴァンデンライヒの戦争の天王山、黒崎一護とユーハバツハの決闘は苛烈を極めていた。

―天鎖斬月―
月 牙 天 衝

ザンクト・ボーゲン
―大聖弓―
ハイリツヒ・シュウエータ
神 聖 滅 剣

激突する二つの巨大な霊圧が地形を粉碎する。だが渾身の一撃を放ち疲弊する一護に対し、ユーハバツハはその凄まじい爆発を物ともしない。

「がッ：!? く、くそっ!」

「彼我の力の差を知って挑んだのだろうか? その程度ではあの”抜け殻”に加勢する事はおろか、私に傷一つ付ける事すら叶わんぞ!」

「ぐあああッ!!」

足を斬られ崩れ落ち、一護の顔が激痛と屈辱に大きく歪む。

…何だこいつ。まるで最初に剣八けんぱちと戦った時のように全く奴の体を斬れない。

確かにキルゲ・オピーとの戦いから浦原喜助が分析した滅却師クイーンシーの特異な肉体硬化術について聞かされた。だが術者の力量によってここまで極端に刃が通らなくなるものなのか。

互角に見えていた戦いは全くの幻。自分は手を抜いていた相手の攻撃に辛うじて喰らい付いていただけに過ぎなかった。

「…弱いな、一護。仲間が苦しみ、息絶え、誇りを託されて尚、貴様は無力だ」

「ッ…!」

「以前の貴様であればごうはならなかった。溢れんばかりの才を引き出し、未だ復活が不完全な今の私に喰らい付く気概を見せていただろう。何が貴様をそこまで墮落させた？」

必死に追撃を受け流し、一護は動かぬ足で地べたを這う。

奴の言う通りだった。一人前に認められた、尸魂界を救うなどと大見栄を切っておいてこのザマだ。遠くで苦戦する恩人である少女の半身を助けに行く事すらできない。

「くっ…」

そんな思いが仕草に出してしまったのか。思わず上空で膨大な霊圧を暴れさせる彼女へ向けた視線を、ユーハバツハに読み取られた。

「……成程、あの”抜け殻”か」

「!! ——がつ?!」

突如右手の斬魄刀が岩のように重くなった。視線を向け、一護はようやく【天鎖斬月】が敵に踏みつけられたのだと気付く。残像を捉える事さえできない瞬間移動も同然の速度だった。

そして突然の王手に驚愕する一護の首筋に、今度こそユーハバツハの剣が襲い掛かる。

「一護よ、哀れな赤子よ。今すぐ私が…」

——お前を蝕む悪魔の手を

この手で斬り掃おう

それは首を貫く殺意に似合わぬ、静かな声。どこかで聞いたような、低い男の声。

遠のく意識の淵で、かくして一護はようやく気付く。

出会った当初に男が自分に向けてきたあの奇妙な感情の正体は、まるで我が子の身を案じるかのような…

——憐憫だったのだ。

その瞬間を目にした者は、誰一人として何が起きたのか理解できなかっただろう。

場所は瀨靈廷せいていていの上空。

自ら生み出した火の海を見つめる天女の体が、力なく空から墮ちる。直前まで無双の火力を放っていた破壊の権化が、何の予兆もなく、唐突に。

そんな異様な光景の一点。立ち上る炎の中に、人影が姿を現した。金色の長髪。純白の外套。傷一つ、汚れ一つない衣類に身を包んだその美しい青年は、堕ちた天女の許へ悠然と歩み寄った。

「…未だ命がありますか。見かけに似ず異常なまでに頑丈な女性ですね」

先刻のバンビエッタの最大火力を真正面から受けてピンピンしていたカラクリが、よもや単純な魂魄強度だったとは。此度の事とい、やはりあの”怪物”を長年魄内に宿していただけの事はある。

無傷の青年——ハッシュヴァルトは地面に横たわる天女を見下ろし、そう彼女を賞賛した。

「なに…が……お…お…き…」

対し、先程まで健常であった天女——雛森桃は、全身から血潮をぶちまける瀕死の肉塊へと一変していた。

彼女の震える視線が彷徨う先は、三つ。

自身が負わせた筈の傷が全て消え去ったハツシユヴァルトの体。その消えた傷が反転したかのように突如満身創痍になった自分の体。そしていつの間にも手にしたのか、青年の左腕に備わる、傷だらけな”大盾”。

「『罪人』の貴女が知る必要はありません。死神そちらの言葉で称するのなら、『泥棒』とやらの使う卑怯な道具の一つです」

「…う、あ…」

「ですが滅却師われらの言葉においては真実、この力こそが、陛下が我々へ与え給うた祝福。間違え事なき神の奇跡なのです」

青年は掻き消えそうな雛森の霊圧を見つめる。

戦いは決した。

これ以上苦しませるのは本意ではない。陛下の御心を苛む邪悪の抜け殻であろうと、せめて死に際は一思いに断罪してやるべきだろう。

それにそろそろ活動限界が近い。

「…失礼。そういうえば名乗りがまだでしたね」

さて、このまま終わっては滅却師クインシーの名折れ。彼女にその矜持がなかろうと、生憎こちらには偉大な王に選ばれた者としての誉がある。

青年は最初に受けた侮辱の意趣を返さんと、穏やかに、されど誇らしげに宣言した。

「私の名はユーグラム・ハツシユヴァルト。見えざる帝国皇帝第一の臣にして、シユテルンリツター・グラントマスター星十字騎士団最高位の称号を戴く…」

——神の『戦士』である」

そして構えた大盾から傷が消えると同時。青年の背後に、巨大なナニカが現れた。

「…罪深き貴女の眼にも、瞻みえている事を祈ります」

神の天秤が……

傾くさまが——

「——かはっ…!!」

意識が覚醒する。

「……何？」

瞳に光が映る。

肺に酸素が満ちる。

心臓が脈動を再開する。

「莫迦な、これは……!」

「……ッ、げっが月牙——」

一瞬の闇の世界から現実へと舞い戻った死神の青年——黒崎一護は、咄嗟に己の首に刺さった大剣ごと敵の男を吹き飛ばした。

「——てんしやう天衝ツツ!!」

漆黒の大爆発が巻き起こる。体の自由を取り戻した一護は、混乱した頭のまま立ち上がった。

何だ今のは。俺は確かに切先で貫かれて……

触れた首筋に滲む血が唯一残る死の証拠。

ホロウ虚の超速再生かと胸の

奥へ意識を向けれど内なる虚^{ホワイ}の声は聞こえず、あの禍々しい靈圧も感じない。

しかし、そんな戸惑う一護の疑問の答えを持つ者がいた。

「……失敗^{しくじ}ったな」

「！」

悪態を吐いたのは一護に剣を突き立てた張本人、ユーハバツハだった。それまで一太刀すら入れられなかった彼の身には初の傷痕、腕から左半身にかけて広がる大きな火傷が刻まれている。

どういう事だ、なんで攻撃が通った。

「いや、理由なんてどうでもいい。一先ず自分の身については余所に置き、一護は反撃のチャンスを逃すまいと我武者羅に飛び掛かる。

「ツ、くそっ！」

「…成程、やはり見間違いではなかったか」

しかし二度目の偶然は起きない。渾身の攻撃は難なく打ち払われ、一護は後退を余儀なくされた。

「お前の実力を考慮してキルゲに足止めを命じたが……どうやら私の分け与えた力に長期間触れ続ける」監獄^{ゼイル}内の環境が鍵となったらしい」

ユーハバツハが語る。

脱出を目指し、一護はキルゲの牢獄の中で極限まで自身の靈圧を放ち続けた。そうして削られた”牢獄^{ゼイル}”の残滓は一護の靈圧に呑み込まれ、そのままゆつくりとその魂の深部へと辿り着き…

「…お前の靈圧の記憶を根源から呼び覚ましたのだ」

「靈圧の……記憶……？」

そして一護の困惑を余所に、男は感情の籠らない平坦な声色で、淡々とその真実を口にした。

「目出度い事だな。いつ、如何なる形であろうと……新たな同胞の目覚めというものは」

戦場に静寂が戻る。

それもその筈。真つ直ぐこちらを見つめて宣告された男の言葉は、戦いに身を置く一護の思考を疑問符で埋め尽くす、あまりに聞き捨てならない内容だった。

「…」新たな同胞” ……だと…？」

問い返す青年の顔を見て、ユーハバツハが「哀れな事だ」と目を細める。

「……そうか。やはりお前は何も知らされていないのだな」

——お前の魂に受け継がれた

母親のもう一つの霊力を

瞬間、一護の時間が止まった。

少なくとも青年の脳はそう感じた。一瞬で飽和した感情の制御に手間取って。

「…何、を…」

過去の記憶が頭を過る。暗い梅雨の曇り空。河原に降り注ぐ冷たい雨。両手に張り付いた生温かい赤い液体。

過去に聞かされた言葉が耳に木霊する。あらゆる種族の超越を目論んだ魔王により、あらゆる種族の才を恵まれた事。その探求の素体、相反する種族の交配実験の産物である事。そして一人の少女の手によって、魔王を倒すための力を与えられた事。

「…何の…話だ…」

「あの魔女の糸の確認など、幾つか手順を踏む心算だったが……そう悠長に構えてはいられなくなった」

力づくで連れ帰るとしよう。意味深な言葉ばかりで一方的にそう宣言するユーハバツハへ、一護は焦燥のあまり腹の底から咆えていた。

「何の話だって訊いてんだよ!!」

その問いに男は一言、こう述べた。
「見えざる帝国で聞かせてやる」、と――

そこからは半ば蹂躪に近い戦いだっただ。

ユーハバツハが奇妙な文字を象った霊圧を体に取り込んだ直後、その剣を受け流そうとした一護は宙を舞っていた。まるでそれまでの戦いが遊びだったかのような圧倒的な膂力に押し切られたのだ。

「聖 唱。不完全な私の力を一時的に取り戻す！」
「ぐっ…!!」

「これまでと同じだと思うな…！ 次は貫く。二度目は無い！」

だが爆発的に高まった敵の戦意に気付いた時、全ては遅すぎた。またしてもあの恐るべき瞬間移動で接近され、大剣の重い逆袈裟に「天鎖斬月」が弾かれる。

「！ しまっ……がつ!？」
曝け出された一護の頭部が、襲い掛かる男の手に驚掴みにされる。そして。

「目覚めたばかりの静 血装フルート・ツエーネごと我が力に平伏せ!! 黒崎一護――」

ユーハバツハの大剣が一護の心臓に迫った、まさにその時。

「!!」

男の全身から不気味な影が、剥がれ落ちた。

「ッ、これは…!」
途端、ユーハバツハの動きが著しく鈍る。まるで彼一人だけが水中に居るかの如く。

男が不愉快そうに見下ろすその影に一護は見覚えがあった。現世で戦った奇妙な破面アランカルアズギアロ・イーバーン。奴が逃亡する時に使った正体不明の移動術だ。

…そして跳ね上がった戦意が鎮火したユーハバツハの後ろに、新た

な人影が舞い降りた。

「——シャッテンベライヒ影の領域圏外での活動限界です、陛下」

現れたのは長い金髪の青年。自分を陛下と呼ぶその滅却師クインシーへ振り向いたユーハバツハが一転、薄い笑みを浮かべて彼へ問う。

「……随分と直前まで粘ったな、ハッシュユヴァルト。その成果は期待に足るものと見做してよいか？」

「少なくともバンビエッタの無意味な犠牲を補う程度には」

「成程、やはり一筋縄ではいかんらしい」

悠長に何かを話す敵の主従。だが金髪の青年の姿を見た一護は短い硬直の後、慌てて遠くの空を見上げた。

…無い。

いつの間にか、目の前の男と戦っていた人物の、あれ程激しく存在を主張していた彼女の——雛森桃の霊圧が、完全に消えていたのだ。

「…嘘……だろ……」

馬鹿な。なんで。いつ。信じられない。あんなに強かった雛森さんが。

激しい動揺に心臓が早鐘を打つ。冷たい血が体を流れていく。

…彼女は”あの人”じゃない。別人と断言できるほど無関係ではないが、俺を見守っていると云ってくれた彼女とも、俺を何度も助けて力になってくれた今亡き相棒とも違う。そんな事はわかっている。

だけどあの割れた仮面の奥に見えた泣き顔が、脳髓に刻み込まれた喪失感が、黒崎一護の足を竦ませる。自分の無力が招いた悲劇の恐怖が、まるで呪いのように。

「…まあ良い。山本重国と【特記戦力】を消せなかったのは惜しいが、最低限の目的は果たした。帰還するぞ」

「御意」

動けない一護の目の前で、敵が去ろうとしている。散々好き勝手暴れ、仲間達を殺し、傷つけ、ソウル・ソサエティ尸魂界をめちやくちやにした奴らが。

「——待てッ!!」

一護は制止の咆哮を上げる。このまま帰したら自分がここへやってきた意味がない。

「どこに行くつもりだ…!? こんな事をしたためえらを逃がす訳ねえだろ!!」

だがユーハバツハはこちらを一瞥するだけで、あの妙な”影”の穴へ消えていく。

「ッ、待てっって言ってるだろ!!」

一護は去り行く二人の背中へ突撃する。

屈辱、絶望、憤怒、憎悪、憎悪。荒れ狂う無数の感情の向かう先へ振り下ろされた一撃は、これまでにない凄まじい殺意と威力が籠っていた。

しかし、ユーハバツハへ彼の剣が振り下ろされる寸前。隣の金髪の青年が振り向き——

「…いずれまた迎えに来る。傷を癒して待つといい、黒崎一護」

魔に囚われし…

——我が息子よ

そう言い残し闇の奥へ消えた敵を見つめる一護の耳が、硬質な音を聞く。そして一人になった彼が自らの足元に見つけたのは…

己の自慢の卍解【天鎖斬月】てんさざんげつの、へし折られた漆黒の刀身だった。

しとしと、灰色の雨が降り注ぐ瀨靈廷^{せいれいでい}。白木の板で塞がれた壁や天井がみすばらしい、かつて栄華を誇った神聖な一番隊隊舎・隊首会室では、定人の半数以下の男女が悲嘆に暮れていた。

力なく項垂れる者。苛立ちを同胞へぶつける者。仲裁しようとして油を注いでしまう者。護廷を任せられし隊長の地位に就く、死神の鑑たるべき彼らがまるで童のようだ。

先刻、敵の撤退を以て滅却師^{クインシー}との戦は終結した。

本拠地を襲撃された大混乱から、ようやく最低限の秩序を回復した護廷十三隊。彼らを率いる、戦後の緊急会議に臨んでいた隊長たちは、伝令員より眩暈がする被害報告を受けていた。

「山本重国^{やまもとしげくに}総隊長、朽木白哉^{くちきびやくや}六番隊長、更木剣八^{さらきけんぱち}十一番隊長。以上負傷者の手術は成功し、一命を取り留めました」

「しかし執刀された卯ノ花^{うのはなれつ}烈四番隊長によると三名とも魂魄の損傷が酷く、再び隊長としての責務を果たす事は難しい、との事です」

「次官の被害も甚大です。吉良^{きら}イヅル三番隊副隊長は霊圧消失後の消息不明。阿散井^{あばらいれんじ}恋次六番隊副隊長、檜佐木^{ひさぎしゆうへい}修兵九番隊副隊長、朽木^{くちき}ルキア十三番隊副隊長の戦線復帰は未だ困難であり…」

次々と隊首室へ届く報告。名が挙がった部下の隊長は瞑目し、恩師や友の不幸を知った者は悲痛に歯を食い縛る。

あまりに大きすぎる敗北感に皆が現実を受け止めきれない。会議で話題に上がるのは誰が生きているか、死んでいるか。戦えるか、戦えないか。その程度の単純な戦力把握すら共有できていない、微塵の

異論も許されぬ完全なる敗北だった。

そんな混沌とした状況において尚、その安否が他者より特別に注目され、一目置かれる死神がいる。それは護廷十三隊の各隊長達であり、次期隊長と持て囃されるような優秀な副官、席官も含まれる。

その中に、一際異彩を放つ人物が一人。そして隊首室に木霊した彼女の名に、当人の容態を聞いた場の全員が息を呑んだのは、決して避けられぬ必然だった。

「最後に……敵首魁ユーハバツハの側近と思われる滅却師クインシーとの戦闘で負傷し、四番隊総合救護詰所へ緊急搬送された雛森桃ひなもりもも五番隊副隊長は……」

二度と目覚める見込みはない

——との事です

叫谷つてSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

欠けた月が照らす悪霊達の世界、ウエコムンド虚圏。

クインシー滅却師の指揮官を倒し、ソウルソサエテイ尸魂界へ向かった黒崎一護が敵の首魁らしき人物と激突してしばらく。

想い人の無事を知らせる報告に胸を撫で下ろした井上織姫は、ウエコムンド虚圏に残った現世の仲間達、そして破面アランカルの負傷者八体と共にラスノーチエス虚夜宮跡地に身を隠していた。

「――つまりアナタ方はひなもり雛森、サンの命令でウエコムンド虚圏へやってきたものの、途中で彼女と連絡が取れなくなった、と」

「その通りだ。ネリエル様があのお金髪ロン毛にやられた直後に援軍を要請したのだが……」

「うう、雛森様あ……オラ達どうすればいいでヤンスかく……」
情報共有を行っているのは浦原喜助とペツシエ・ガティーシエ。織姫にとっては二人とも大切な仲間ではあるが、当の彼らは死神ホロウと虚窮地を救われようと簡単に胸襟を開ける間柄ではない。

特に両者の共通の知人、黒崎一護と縁が薄い他の破面達アランカルの警戒心が強かった。

「おい雑魚ベツンエ、しゃべり過ぎだよー！」

「コイツはあの藍染あいぜんを封印したヤバえ死神だぞ……！ 関わったらロクな事になんねえ」

「……珍しくおサルさん達と意見が合いますわね。その崩姫プリンセスはともかく、我々に浦原喜助と協力する謂われも許可もないわ」

そう口々にベツシエを責め立てるのは三体の女性破面^{アランカル}。これまで面識はなかったが、織姫も彼女達が十刃^{エスパーダ}の一人、それも相当高位の人物に仕える従属官^{フラシオン}である事は知っていた。安易に昔の敵と手を組む愚を犯さぬ慎重さは【破面軍】幹部の側近として当然か。

無論、だからこそ彼女達も他に状況打開の手段がない事は理解している筈。その隙を理と利で突くのは浦原の十八番だった。

「まあまあ、そう邪険にしないでくださいよ。アタシはただ今回の戦争でアナタ方の力をお借りしたいだけツス」

「……死神の争いなんかに興味ないね」

「アナタ方も先程の滅却師^{クインシー}達との戦いは不本意な結果に終わったはずです。舐められっぱなしは性に合わないでしょう?」

重傷のネリエルの治癒に付きつ切りの織姫は、ハラハラしながら隣の剣呑な空気を見守る。破面^{アランカル}達の閉口を続きを促す合図と受け取ったか、浦原が緩い態度を改め話を再開させた。

「雛森^{クインシー} サンとの連絡が途絶えた理由として真つ先に考えられるのは滅却師^{クインシー}の霊子技術による通信妨害ツス。アナタ方【破面軍】は彼らの不倶戴天の敵。尸魂界との戦争の前に目障りな不穩勢力を無力化しようとする事を企んだ可能性は高いでしょう」

「…ッ、ばっかじゃないの? あの化け物じみた雛森サマがあんな連中に後れを取る訳ないでしょ!」

「そ、そうよ! さっきのロン毛の滅却師^{クインシー}も確かに強かったけど、雛森様は文字通り次元が違うんだから」

新たに口を開いたのは——確か、ロリとメモリといったか——織姫も知る二人組。侍女として側にいたからだろう、自分達のトップの強さを畏怖する気持ちが強くなる。

しかし彼女らの震える台詞に周囲から同意の声が上がらない。同胞^{フラシオン}の従属官三人娘は何故か顔を強張らせている。まるで何か悪い想像に乱れる感情を抑え込んでいるかのよう。

そして、そんな彼女達の胸騒ぎは、当然の如く浦原の観察眼に捉えられていた。

「…気付いてるんでしょ?」

「——ッ」

「靈子技術で妨害できるのは靈波通信だけッス。黒腔ガルガンタを完全に解析した藍染惣右介。その勢力を引き継いだ」雛森「サンが、これほど待ち続けても援軍一人寄せさない理由なんてそう多くありません」

彼の言葉に逃げ道を塞がれ、破面たちが一様に唇を噛む。

ここに來て織姫もようやく事の深刻さを理解した。虚夜宮ラスノーチエスであるなに美味しいごはんや綺麗な衣服、豊かな暮らしを用意してくれた優しい雛森さんが、連絡が途絶えた部下を放置するはずがない。

——彼女達の【虚靈坤ヴァルアリヤ】に

良からぬ事が起きたのだ

「ま、”雛森”サンは中々やり手のお姫様ッス。アナタ方が反対するのを予期して、アタシや黒崎サンと協力関係を構築する既成事実を作ろうとしているのかもしれない」

「……だからあたし達を放置してるってのか？」

「その線は否定できないッスね」

ただ一つ言えるのは此度の敵が、あの”雛森”サン——【読書家】が率いる新生破面軍でさえ独力での戦いを避けたがる程の大勢力だという事。

浦原喜助はそう断言し、他ならぬ織姫の許へ近付く。

「え……？」

そして彼女の膝元で目を閉じ続ける、破面部隊のリーダーへ、右手を差し出した。

「手を組みましょう、ネリエルさん。今の我々はお互いに……これ以上仲違いしている暇はないんスよ」

…その一言が決め手となった。徐に瞼を開けた緑髪の女性破面が重い溜息を吐き、長い葛藤の末、口を開く。

「——宜しく……お願いするわ……」

破面達を説得した浦原がいつもの剽軽な顔に戻った。だがその眼は冷やかで、どこかここではない別の場所を睨んでいるようにも見える。拙い織姫にさえ彼の真意は当人の言う「破面達との共闘」とは別にあると推し量れた。

何がどうなっているのか。

ヴァルアリア 虚霊坤は無事なのか。

朽木さん達の傷は？ 浦原さんの本音は？

死神と虚、皆が仲良くなる事は難しいのか。

現世の仲間であた一人、あの桃色の大星雲が煌めく破面達の楽園を知る織姫は、不安に震える体をぎゅつと掻き抱く。

(…ウルキオラ君…)

何も知る事が許されない非力な少女は、あのニヒルな友人の無事を祈る事しかできなかつた。

カラスクシヨウ 空座町の住民にとって、摩訶不思議とは日常である。

空を仰げば曇天が一瞬で快晴になり、ビルの窓を覗けば急に壁一面

のガラスが砕け、町を歩けば突然目の前の道路が陥没し、公園や広場などの開けた区画では原因不明の集団死。

近隣の市町村では何年も語り継がれるような大事件も、この地の人間で三日と覚えている者は当事者くらいのもだろう。

多発する超常現象に常識が麻痺している訳ではない。むしろその逆。

そんな事より彼らには他に、己の限りある脳細胞を割かねばならない事があるのだから。

「いらっしや——いませー……」

その日の、とあるファッション店に勤める若い女性店員も、一空座町町民たる自らの運命を実感していた。

カラン、コロン、と。ここ数年の親の声より聞いたドアベルに顔を上げた彼女は、現れた二人組の容姿を確認して即座に直視を控える。マニュアル通りの挨拶を言い切った自分が拍手喝采に包まれる幻聴すら覚えた。

「——あ” あああ…クソ！ いつ来ても空気が不味いぜ、現世つてのはよオ」

「余計な騒ぎを起こすな、ヤミー。帰りたいならさつさと選べ」

見上げる程の躯体の色黒な巨漢と、病的なまでに色白の美青年。明らかに普通の、どころか人間とすら思えない異様な来店客が、無遠慮に革ジャンの陳列棚を漁り出した。

「あ？ 何だこの脆い服、抓んだだけで破れやがった」

「ならそれも買え。言っておくが出費を増やせば、次に行く店の”A5和牛サーロイン”とやらが食えなくなるぞ」

「おいふざげんな！ そんなルール訊いてねえぞ!」

ドガン、と。聞き慣れた破壊音を起こし、怒れる巨漢の拳が店の壁を粉碎する。コンクリの粉塵が舞う店内から臙げに見えたのは、察

しの良い通行人たちがそそくさと店先の歩道から離れていく光景。命を守る行動を最優先に。実に模範的な空座町民である。

しかし怪人二体と共に一人店に残された女性店員の”日常”は当然終わりではない。二年前の活発期に耐えかね異動した外様の元店長ほど軟弱な神経はしていないが、それでも流石にここまで物事の中に巻き込まれたら弱音の一つや二つ吐きたくなる。

「おい、女。この四着を寄越せ」

「…ッ！ は、はい！」

来た。女性定員は鼓膜を突き破らんばかりの己の心音に頬を引き攣らせながら、カウンターへ近付く小さい方の怪人へ笑顔を向ける。隣の大きい方を視界に入れる勇氣はなかった。

「れ、レザージャンパー白が二点、ライダーパンツ黒が一点、デザインベルト白が一点。以上で87230円になります」

「——ああ!? おいウルキオラ、3000も残んねえじゃねえか! ステーキ買えねえぞクソツタレ!!」

ズドン、と。巨漢の台パンにへし折れたカウンターが天井に突き刺さる。先程の壁も同様店の損害賠償については不問とすべきだろう。この世に人を裁く法はあっても災害を裁く法はないのだ。

その災害が、女の手首程もある太い指で、可愛らしいピンクのがま口財布から紙幣を取り出す様は何かのシニールギャグにしか見えなかった。

「行くぞ、ヤミー」

「な、待ちやがれクソが! てめえだけ金使わなくていいの狡イぞー!」
「俺の服は雛森様ひなもりより『似合っているから衣替え不要』と承認を戴いている。態々お前の買い物に付き添ってやっただけでも感謝しろ」
「俺のは似合ってなかったって言いてえのかよ!?!」

かくして嵐は去った。見るも無残な有様になった店内で立ち尽くす女性店員は、しばらくの放心の末、ぼつりと呟く。

「……………これ、”雛森様”って人を訴訟すればいいのかしら…」

どこかで誰かがビクリと背筋を震わせる光景を幻視しながら、彼女は今日も一日愛する故郷で生き残れた安堵に、フラフラと床に座り込むのであった。

星々の海に浮かぶ永夜の宮殿。

その一角を通る列柱の回廊に大小二つの人影があった。

「豆腐バーグと夏の温野菜、だア？ チツ、やっぱさつきステーキ買えなかったの響いてんじやねえか！」

不愉快そうに舌打ちし、巨漢は握り潰した献立表を道中の中庭へ放り捨てる。

現世の某所でとあるファッション店が閉店したのと時を同じく。纏う新しい衣類に目もくれず、アラシカル破面の大男——ヤミー・リヤルゴは、隣を歩く小柄な同胞の叱咤に益々へソを曲げた。

「昼食の献立如きで一々騒ぐな。嫌なら自宮で寝てろ」

「んな事したら東仙とうせんの野郎が五月蠅えだろ！ ったくオシヤレがどうか言うけどよオ、なんで俺達破アラシカル面が人間や死神共のくだらねえ趣味に付き合わなきやなんねえんだ。メシの金が勿体ねえ」

「知らん。それが雛森様の定められたルールだ」

どこまでも相方の我儘に無関心な黒髪の青年——ウルキオラ・シ
ファー。

まるで緊張感のない幼稚な雑談。しかしその二体の破面アランカルの周囲半
里が、靈威五等以下の魂魄を消し飛ばす極限の靈圧地獄である事に気
付かぬ莫迦はどこにも居ない。

彼らの正体は万人を平伏させる悪霊達の頂点、エスパーダ十刃。かつて尸魂
界を恐怖のどん底に突き落とした恐るべき怪物達は、この英霊の楽園
ロスヴァリエス【虚霊坤】で変わらぬ王者の日常を謳歌していた。

「——ヤミー、ウルキオラ」

ふと、回廊の分路の奥から低い女の声が聞こえた。馴染みのあるソ
レに気付いたヤミーが相手を一瞥し、片眉を顰める。

「何だあ、ハリベル？ いつもぞろぞろ連れてる雑魚共はどうした？」

「…アパッチ達ならネリエル麾下の臨時部隊で虚ウエコムンド圏での任務に就い
ている。久々の故郷だとはしゃいでいた」

「虚ウエコムンド圏お？ …ああ、そういや朝飯前に雛森さんが滅却師共クインシーが来た
とか言ってたっけか」

美味なホットドッグの思い出に埋もれていた今朝の記憶がヤミー
の頭頂に浮上する。”最強”たるその格に相応しい彼の傲慢に、しか
し下界を走る激震を冷静な目で見下ろす女破面——ティア・ハリベル
は溜息を吐いた。

「…ウルキオラ。雛森様が何方におられるか知らないか？」

三人が連れ立って食堂へ向かう途中。先程の現世任務について
延々とボヤク相方を無視し歩いていた青年は、ハリベルからそんな質
問を囁かれた。

「アパッチ達について少しな。この二年間で昔の下位十刃エスパーダ相当に成
長した三人だ。そうそう負けんだろうが…」

「…確かお前の従属官フランゾンはあの御方の寵愛を強く受けていたな」

「ああ……だが敵もかつてなく強大だという。その後の様子が気掛かりだ」

部下の心配でもしているのだろうか。趣旨を履き違えている愚かな同胞を、ウルキオラは鼻で嗤う。

「くだらん。雛森様はどんな低位の数字持ちだろうと勝手に死ぬ事をお許しにならない。我等の生死など論じるだけ無駄だ」

「相変わらず変なお人だぜ、ウチの女王サマは。死ぬ奴は役立たずのゴミだから捨てろつってんのによ」

「その塵を」役に立つ塵に昇華させるのが雛森様のお力の偉大さだ」

利用価値があるから死なせない。自分の所有物だから死なせない。僅かに胸を擦るナニカを隠し、ウルキオラはいつも通り機械的にそう呟く。

「…そうか…そうだな。失礼した」

「余計な情で戦意を乱すな。俺達はあの方の望みによって蘇った死霊。力も、命も、魂さえも」

——我ら破面の遍く全ては
雛森様の為に存在する

立ち止まり謝罪する女十刃へ、そんな彼らしい不動の宣言を残し、ウルキオラ・シファアは同僚の巨漢と共に先へと去って行った。

「……」遍く全て、か……」

青年の翻る長い燕尾を見つめ、ハリベルは彼の台詞を口内で転がす。それはあらゆる自由が許されぬ事を意味する言葉。意思無き虚ろな兵隊である事を望む言葉だ。

ならば。ハリベルは一抹の切なさを胸に思案する。

何故、あの方は…

「自我の源たる”心”を——」虚無のお前に与えようとしておられ

るのだろうか…」

「——はい、カットお！」

尸魂界ソウルソサエティから遠く離れた桃ちゃんきょうしんくず叫谷。死んだフリをしている死神ボデイを放置して英霊宮殿ヴァリアルアリアに意識を戻したあたしは、お願いしていたオサレムーヴを終えた桃玉欠魂ブランクたちを労っていた。

先刻のユーハバツハの雛森桃バレ発言に合わせた、あの”読書家”の笑い声セリフである。

「うん、みんなご苦労様！ 凄く不気味で無邪気な悪者っぽかったんじゃない？」

『——ふふんっ——このくらい当然ですわよ——それっぽく演じられただぜ——演技なんかしてないんだよなあ——』

一〇や月島さん、仮面桃ちゃんがに化物扱いされた事でムキになった結果すっかり邪神RPが板についてしまったあたし達。不本意だった気持ちは最早過去の彼方、今ではノリノリで愉しんでる事実を指摘されると少し恥ずかしい…

まあでも今回はこの前やった月島さんへの意趣返しみたいな感情的な行動じゃない。

そう、せつかく死神桃ちゃんが意識不明に追い込まれる悲劇的な状

況を演出できたのだ。あれをポテトのOSR値調整だけで終わらせるのは勿体ない。最大限活用するべく、あたしは何か手はないかと色んな所へ目を飛ばしていた。

ちなみにポテト戦の開始前に影の領域シャッテン・ペレイレへあたしの霊圧を流し込んだのもその一環、監視網を敵の拠点へ広げるためだったりする。

そんな最中、ふと見たらバツハとポテトが意味深なオサレトークをしているではないか。こんな餌を見つけたら即シユババババ！と喰い付いてしまうのがあたし達OPB信者の悲しき性なのです。

以前からどこかで”読書家”と雛森桃の繋がりを匂わせたいと機を窺ってたけど、過去にもあれ以上に良いタイミングはなかったと思う。死神桃ちゃんの敗北も存分に活かせたから満足だ。

：シロちゃんについては最早言うまでもないよね？

『戻ったぞ、雛森』

と、そんな感じに桃玉とハアハア今後の展開に期待を寄せていると、英霊宮殿ヴァルアリヤの転移門から通信が入った。現世アジトでイーバーンを保護していた我ら破面軍のお母さんことDJ-KANAMEである。

シロニウムパラダイスまでまだ時間があるので、あたしから門前広間へ向かう。好き勝手できるマイ叫谷内きょうちやくならワープもお茶の子さいさいだ。

「お帰りなさい、東仙隊長。収穫はありましたか？」

「ああ、ただいま……ん？」

合流した彼が挨拶を返し、懐の報告書を取り出す。そしてそのまま固まりあたしを凝視した。

え、何すか突然？

「雛森、お前……藍染様あいぜんにお会いしたのか？」

「ふえっ!？」

予想だにしていなかった質問に思わずヘンな声が出た。え、なんてわかるの？ 逢ったのは死神桃ちゃんだから今の欠片本体ブランクにヨン様の霊圧の痕跡が残るのは物理的にありえないのに。

「決まってるだろう。お前の顔がそんな愉快な事になっている時はあの御方と何か悪巧みをしている最中くらいだ」

「ちよつと待つてあたし今どんな顔してるんですか!？」

咄嗟にムニムニと頬を触ってみても全くわからない。そこまで一目瞭然なんだろうかと狼狽していたらDJに笑われた。

「私は盲目だが、だからこそ見えるものもある。余人の気付かぬ人の心の機微がな。それだけだよ」

「…あ、そういえば東仙隊長つて目が見えないんですしたね」

「………何故五十年以上共に過ごしてそれを忘れる？」

そしてあたしは時間を気にしつつつしばらくヨンの話をしてあげた。DJはどこか嬉しいような切ないような顔をして遠き主に思いを馳せていたが、直ぐに頭を振つて本題の報告書へ視線を戻した。

書かれている内容は見えざる帝国に潜入していたイーバーンについてだ。

「敵の機密に触れる情報は少ないが、概ねお前の想定していた通りだったぞ」

「ではやはり滅却師の拠点は…」

「見えざる帝国が位置する影の領域なる空間の在処は——戸魂界

の真裏。その正体はかつて我々も過ごした瀨霊廷と次元を反転した地にある異界だ」

DJが難しい顔で「拠点を虚圏に移して良かった」と過去のヨン様陣営の立ち回りを称賛する。確かにこちらの手の内が赤裸々になっていた可能性を考えると間一髪だったのかも。

当時のヨン様が滅却師の居場所を掴んでいたとは考え辛いけど、どうなんだろうね。バツハの存在も知ってたっばいし。

…ちなみにあたしはシロちゃんに夢中で全然考慮してませんでした、はい(素直)

しかしDJもだけど、原作の護廷十三隊も影の領域の存在を知った時は相当衝撃を受けていた。自分達が瀨霊廷で過ごした千年間が全て敵の監視下にあったのだ。軍機は勿論あらゆる情報が筒抜けと

思つて当然だろう。

『——その割にはバツハ達にガバが多いような……——未来視に未来改変もできるのに——シツ、言わないの——』
「……」

脳内でヒソヒソ読者目線の正論を呟いている桃玉達はさておき。実際あの滅却師達クインシーのガバリ具合は死神達を勝たせるための漫画的都合だったのか、それとも何か敵側に理由があつて情報の絶対的優位を生かせなかつたのか、真実は今でもわからない。

思うに彼らの情報ガバは二つ。

そも、得られる情報が影シャッテン・ペライヒの領域が重なる瀨靈廷内せいれいていのものに限り、隊長の戦闘データなど廷内で入手が難しい情報は手元に乏しい事。

そしてヨン様に浦原さんうらはら、マユリ様、痣城剣八あざしろの頭チート勢に見つかるのを警戒し、四人が活躍した直近二百年間は限定的にしか情報収集できていない事。

「影」自体は仮面ヴァイザードの軍勢でさえ知覚できてたしね。正体までは解つてなかつたみたいけど。アレを堂々と使つてたら浦原さん達がすぐに気付く……)

そう考えると本編であんなに暴れていた滅却師達クインシーも、ユーハバツハの【全知全能】ジ・オールマイティが覚醒するまで隙だらけだったのかもしれない。情報収集も人の記憶を吸収する聖アウスヴェーレン別に頼る所が大きかつたなら彼らのガバも領ける。

『——お姉さまが自室とかでニチャニチャ素を出してたのもバレてなさそうだし——あれワンチャン”影”に見られてた可能性もあつたよね……』

(そ、そんなにニチャってないし……！)

……バツハ達がガバつてると思つてたらあたしの方がガバつてた。

た、多分それはあたしの凡人ムーヴのおかげで当時はノーマークだったんだよ……！ 密会の場もヨン様なら防諜完璧だったろうしね！

『——まあそれはそうだろうけど——お姉さま色々危なっかしい……』

(む、昔の話だから…)

言い訳がしんどくて草も枯れる。てか今更だけどあたしってヨン様が居ないとガバガバすぎない…？

順調だった【一護オサレ化計画】が急に先行き怪しく思えてきたんだけど大丈夫かな…

「そ、それで東仙隊長。イーバーンさんの報告書はどんな感じですか？」

不安になったのでDJに縋ってみる。なお桃玉のあたしdisからここまでざつと一秒。

「奴に埋め込まれたユーハバツハの力の断片だが…面白すぎる事が解つたぞ」

「！」

どうやら吉報のようで桃ちゃんホッと一息。口角を擡げたDJが書類を眺め、委細を語り出す。

現世の要塞アジトにイーバーンを匿って程なくし、鳴木市全域に不気味な光が降り注いだ。事前にあたしが用意させた各種装置による解析の結果、その光はイーバーンのもつ滅却師クインシーの霊圧と反応する事で、奇妙な性質を持つ金属を生成する事がわかった。

DJの話聞いたあたしは、ソレが”何”かを即座に理解する。そしてゆつくりと、デカすぎる成果にほくそ笑んだ。

…これがあれば、ラスボスを含む全ての滅却師クインシーをNTBの土俵から引き摺り下ろせる。チャン一が絨毯にならずに済み、ミラクル戦も、ゆるん鳥戦も、ポテト戦も綺麗に決する事ができる。理不尽能力の横暴を許さず、古式ゆかしい霊圧と膂力とスピードと、そしてBLEACHの真髄たるオサレが勝敗を分かつ時代に戻る。

黒崎一護が活躍できる世界を、取り戻せるのだ。

「…その金属はどれくらいの量になりましたか？」

「例の光が降り注いだのはごく僅かな時間だ。イーバートを犠牲にすれば数^{グラム}瓦程は手に入っただろうが、アジトの準備で生成できたのは粒子レベルに過ぎん」

それでもDJの顔に影はない。ならば、とあたしはマイ叫^{きようこく}谷の空間を弄り、死神ボディで集めた霊圧を閉じ込めた二個の水晶匣を呼び寄せた。

「！それは…」

「戸^{ソウルソサエティ}魂界で採取した星^{シュテルンリッター}十字騎士団達の、そしてユーハバツハの影武者の霊圧です。ユーハバツハ本人の霊圧は流石にココに持ち込むのは怖かったので諦めました。ロイド・ロイドの変身能力が霊圧レベルの高度なものであればサンプルとして役立つでしょう」

DJが初めて口を噤んだ。

言わんとしている無茶振りに気付いたのだろうか。でもあたしは十分できると思う。

忘れがちだけど、この東仙要はヨン様陣営の頭脳を担った人物。浦原さんやマユリ様には及ばないかもしれないが、代わりにこちらにはあたしの原作知識と桃玉の理^{ことわり}ブレイク能力、そしてその力を使って収集した豊富な研究素材がある。ザエロアポロやロカ姉貴の力をそこに合わせれば他陣営に対する優位は計り知れない。

これであらゆるガバはリガバリーできる。DJも忙しくさせておいた方が自分の正義について色々と悩まなくて済むはずだ。

ああっ、あたしはなんて仲間思いな人なんでしょう。

リーダーは有能な怠け者であるべきだ、って…ステキな言葉だね！
(最低)

「東仙隊長、あたし達なら可能です。これらの霊圧の共通性質を解析して…」

—
” 静止の銀” の能力を
再現してみませんか？

悪戯ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

むかし、むかし。

世が火と水と石炭の煙に包まれ、ガス灯の作る光と闇の世界に分かれていた時代。

とある国に一人の男がいました。

血塗れのナイフを握り、薄暗い路地裏を駆ける、凄腕の殺し屋です。
時代の闇を象徴するかのような極悪人ですが、彼にはもう一つの顔
がありました。

男は慈善家で有名でした。仕事で稼いだお金で、スラム街に小さな
孤児院を運営していたのです。おかげで誰も彼が悪い人だと気付け
ません。

そんな彼はある日の夜、人を殺したところを、孤児院の男の子に見
られてしまいます。

何をしているのか訊かれた男は咄嗟に、ただの”悪戯”だよ、と答
えました。

男の子は、とても耳の良い子供でした。

その瞬間の心境で変わる人の微かな声質を聞き分けたり、スラムの
虫や動物とお話したり、普通の人が聞こえない音が聞こえると言う、
不思議で好奇心旺盛な子供でした。

男は、男の子の育て親です。彼を相手に嘘を隠し通す事は難しいと
知っています。

犯行直後で気が立っていたのでしょうか。いつも意味の分からな
い事を言っただけ自分を困らせる男の子に苛立ちを積もらせていたので

しょうか。

焦燥から判断を急いだ殺人鬼は、隠し事をされて頬を膨らませる男の子に言います。

——君も”悪戯”されたいか？

その夜、男と男の子は一晚中、スラムの中で追いかけてつこをしました。

血に濡れたナイフを片手に駆ける男と、楽しそうに笑いながら逃げる男の子。

そんな二人の面白そうな騒ぎは、孤児院の他の子達の眠気を吹き飛ばします。

男が”悪戯”と誤魔化したその行為は、彼らの中で新たな”遊び”になったのです。

そして”遊び”は、皆が疲れ果てた早朝に終わります。

「やった！」「わーい！」

「たのしかったね！」

勝ったのは子供達でした。屋根から足を滑らせ動かなくなった地べたの男を囲み、彼らは喜びを分かち合います。

それが、男の子の最後の喜びになりました。

その日から、いつも決まった時間に食卓に並んでいた食べ物が、いつまで待っても現れなくなったのです。

男の子も、孤児院の他のみんなも、食べ物はどこから来るのか知りません。餓えと病に苦しみながら、一人、また一人と動かなくなっていく仲間達。

最後に残った男の子は、朦朧とした意識で食べ物を探し、孤児院を彷徨います。

そして。

ふと見つけたとつても不味いナニカを食べて、ある時を境に、それがとつても美味しいナニカに変わった後。

食べるものがなくなった男の子は、ある事に気付きました。

男の子が食べてしまったのは、いつも一緒に遊んでいた——孤児院の友達のみんなの、死・肉と魂だったのです。

月日は流れ。

男の子は昔のように、沢山の友達に囲まれて暮らしていました。

現世で同じ年くらいの子供の霊を探し、ホロウ虚という怪物になった彼らに”食べ物”を分け与える事で、男の子は子供の霊を友達にする事ができたのです。

そうして昔みたいになんかで遊べるようになって、長い時間が経ったある日。

男の子と彼の友達一同は、退屈そうにしている骸骨のお爺ちゃん——『バラガン様』のお城に遊びに誘われました。

——餓鬼共、名を名乗れ

子供達は、骸骨のお爺ちゃんの質問に首を傾げます。彼らは虚になつてから、一度として誰かに名前でもらった事がないのです。その名前も、もうずっと前に忘れてしまいました。

…あ、でも。

ふと、ある事を思い出した男の子は、代わりにその単語をお爺ちゃんに伝えます。

確かあの孤児院で最後にみんなで遊んだ時、男の人が僕をこう呼んでいたつけ。

” 悪戯小僧”、と

” 破面アランカルの樂園” と創造主が称える英霊宮殿ヴァルアリヤは、建築様式を始めとした多くの意匠や施設が旧拠点虚夜宮ラスノーチエスを基に造られている。

十刃エスパーダの各刃が暮らす十の宮、偽りの太陽が昇る『大天蓋』、様々な研究所や生産施設、等々。

しかし旧拠点の頃とは異なり、獣ホロウから人となった存在だと彼ら破面アランカルを定義するこの異界では、その”人”の生活を模した行動を取る事が住人皆に義務付けられている。

例えば食事や睡眠。娯楽や武術。虚夜宮ラスノーチエスにおいてルドボーン・チエルート率いる葬討部隊エクセキアスの平時業務に割り当てられた美化作業も、ここでは上から下まで九十六騎全員の仕事だ。

それは、元十刃エスパーダという高い地位を持つ者達が住まう『3ヶタの巢』トレス・シフラスも例外ではない。

虚霊坤ロスヴァリエスに遷都されてから早二年。今や日常装束の一つになったエプロンドレスを着た十刃落ちは、互いに叱咤激励しながら自らの居住区の清掃に精を出していた。

「まったく…いつも思うけどさ、この仕事ってあたしの区画だけ不平等すぎない？ 無駄に広い上に、住民も非協力的で不潔な奴らばっかな

んだから……！」

部屋の隅に溜まった黒い縮れ毛を手袋越しに掴み、女は嫌そうな顔で悪態を吐く。白いカクテルドレス風の死覇装を纏う、奇抜な化粧の女破面、チルツチ・サンダーウイツチ。

指先の体毛をフウツと、元の持ち主最有力の人物へ吹き飛ばす彼女。当然、吹きかけられた相手は飛び退き逆上した。

「どわっ汚アー！ いきなり何をするのかね、お嬢さん!?」セニョリーダ

ドルドーニ・アレツサンドロ・デル・ソカツチオ。貴族然とした口髭と暑苦しいオーバーリアクションが煩い男破面だ。

「何を」じゃないわよ、あんたの毛でしょ！ くっさい加齢臭ムワムワ抜け毛ポロポロ振り散らしてるオツサン共と同じ居住区を掃除させられてるあたしの身になれつつってんのよ！」

「な!?! しっ、失礼過ぎだぞ君！ 言い返させてもらうがね！ 臭いなら君の強烈な香水の方が何倍も酷いし、抜け毛の問題なら吾輩のものより、そこら中の家具の足に絡みついている君の長あい髪について議論するべきではないかね!?!」

「はあ!?! 毎日お風呂入ってるのにあたしの抜け毛がそんなに多い訳ないでしょ、妄想とかきつしょ!?!」

憤慨するドルドーニが飛ばした唾沫が頬に命中し、チルツチの苛立ちがピークに達する。

その騒ぎを尻目に、彼女の言う「オツサン共」の汚名を理不尽に着せられた三人目の同僚、赤毛のアフロ男の破面がそそくさと逃げ出そうとしていた。

「……うげ、マジかよ」

だが部屋の出入口を潜った所で、彼——ガンテンバイン・モスケーダは立ち止まり顔を顰めた。

「…何、どうしたのよ? あんたもサボってないで掃除しなさい」
「いや、これ…」

様子に気付き近づいてくるチルツチとドルドーニに、男は廊下の壁を見るよう促す。

『な…!?』

彼らが目にしたのは、長い純白の壁面に描かれた巨大な絵画。複雑な線が無数に絡み合うそれは、具象的とも抽象的とも言い辛い絶妙なデフォルメで描かれた人物画か。どこか無垢で神秘的な印象を覚える二十メートル近い超大作であった。

「はは、は……嘘でしょ……?」

「参ったぜ、こりゃ。出撃前の大掃除の日だつてのによ……」

「不味いぞ諸君……これ、下手したら我らの監督責任に……!」

しかし、有識者が唸りそうな前衛美術的な作品も、審美眼を持たぬ破面にはただの子供の落書きにしか見えない。

……もつとも誰が何と言おうと、昨夜は影も形もなかったこの壁画は正しく、”子供の落書き”そのものだった。

「——上手だろー、ソレ」

その時、ガンテンバインの背後に一つの霊圧が現れた。同時に聞き覚えのある声を耳にし、三人は思わず硬直する。

「いちまるさまが絵具をくれたからみんなの絵を描いたんだー! ガンテンバイン達も一緒にお絵描きして遊ぼーぜ!」

恐る恐る振り向いた彼らの後ろに、小柄な影が立っていた。

人間の年齢では十にも満たない、小さな少年。そばかすが浮かぶ快活そうな笑顔の、完全な人型の破面だ。

だが、その幼げな風体にガンテンバイン達は騙されない。自分達より弱いとはいえ、少年の霊圧はそこらの数字持ちとは比較にならない強大なもの。

それに、目の前の相手は、まだ一人だった。

「……ねえ、クソガキ共。コレを誰が掃除させられるのか知ってる?」
増やされた仕事に頭を抱えなくなるのを堪え、チルツチが笑顔で足元の同胞を凄む。しかし効果はなく、代わりに新たな災難が彼女を襲った。

「——今日のパンツは、紫！」

突如チルツチの尻を風が撫でる。咄嗟に背後を蹴った彼女の足が、微かな気配を捉えた。

「あははっ、チルツチ惜しー。今のキツクはもうちよいだったわね！」
そこに居たのは、またもや子供の破面^{アランカル}。仮面の名残のリボンで留めた左右の三つ編みが、少女の笑い声に合わせフリフリと揺れている。

そしてその子の登場を皮切りに、周囲のあらゆる物陰から、同じような小さな人影が現れた。

その数はどう見ても——百以上。

「惜しい！」「ザん、ねん」

「当たらないよーだ！」

「あははっ！」「紫。パンツ！」

「チルツチの…えっち…」

「エツチルツチだ！」

「ガンテンバインのパンツは？」

「もふもふアフロ！」「Qrrrrr」

「ドルドーニのは？」「黒？」

「私達のは白よ」「きゃーっ」

「ひなもりさまといっしょ！」

「シーッ！」「怒られちゃう…」

「言いふらしちゃダメ！」

「市丸様が言ってたもん！」

「なんで知ってたのかな」「変態」

「きゃはははははっ！」

今までどこに隠れていたのか、津波のような子供の大群衆がチルツ

子達を困んで騒ぎだす。

一人一人が最初の少年と同じ気配、同じ霊圧を有した子供の破面^{アランカル}。一つの空間に集まった彼らの霊圧総量は、明らかにチルツチ達のそれを超えていた。

「…な、何よコイツらの数、どうなってるの…!?!」

「昨日見かけた人数より十倍は居るではないか…!」

大人達は戦慄を覚える。

この子供破面^{アランカル}達がチルツチらの近くに姿を見せるようになったのは、破面軍がここ英霊宮殿^{ヴァールアリヤ}に移り住んでからだ。それでも自由を許されたのは日替わりで一度に十人ほど。こんな群衆にまで膨れ上がるのは間違いなくあつてはならない事だった。

「まさか…明日の滅却師^{クインシー}との戦争のために全員解放されたのか?」

「はあ!?」 全員解放” つて一体誰がそんなトチ狂った事——」

ヒステリックに裏返った声を上げるチルツチは、しかし次の瞬間、口を開けたまま固まった。

理由は彼女の目の前に現れた、一人の子供。

「わーい、シャバの空気だー」

その破面^{アランカル}は、ヘッドホンの形をした仮面の名残を耳にかけ、眠そうな目つきをした男の子だった。

ガキ共のリーダー格として長い間どこかに隔離されていた、クソガキ中のクソガキ。

他の子達に「おかえり」「市丸様に感謝」などと歓迎されながら輪に加わったジト目の少年を見て、チルツチは悟る。

…ドルドーニの言う通り、今日は英霊宮殿^{ヴァールアリヤ}中にあたしの抜け毛が散乱する事になるんだろうな、と。

「じゃ、みんな揃ったし——遊びにいこっか」

ジト目の少年が下した絶望的な合図で、小さな大軍勢が一斉に走り

出す。

「遊びだー!」「どこ行く?」

「お絵描きできるところ!」

「でももう絵具ないよ?」

「じゃあ探査神経で探そう!」

「いちまるさまのトコ!」

「居たっ!」「見ツ、けた」

「え、でもそつちは…」

「とつげきー!」「Agwooo」

「わああああああああい!!」

まるで潮が引くかのようにザーツと廊下の果てへ消えていく子供達。チルツチは隣の同胞らと一緒に立ち尽くし、続いて残された眼前の壁の前衛絵画へ目を向ける。

そして僅かな放心の後、三人は半べそをかきながら絶叫した。

「待てやゴルルア!! 落書きしたなら掃除しろオ!」

「ンモオオオ! だから吾輩は幼子のおもりなど断れと言ったの

にイイ!」

「…もうヤダ…こんな場所…! あたし十刃に返り咲くう!!」

ここは『3ケタの巣』。

全ての破面の頂点に座し、されど時代と共にその席を降ろされた、先代十刃のための離宮だ。

しかし、チルツチらの他に——元除籍扱いのネリエルを除き——もう一組、同じ100の烙印を押された破面がいる。

獣から人になりながら『本能』を制御する理性に欠け、十数年前に起こしたとある事件を機に破面軍軍団長と虚圏統括官から隔離処分を受けていた悪戯小僧たち。

彼は、彼女は、”個”にして”群”。

司る死の形は、『好奇』。

友達と一緒に遊びたい。生者であった頃の最も大切な欲望に従い、『遊び相手』を捕まえ壊れて動かなくなるまで遊び倒す、娯楽に餓えた幼子たち。

かくして誰もが恐れる無邪気な悪夢が、平和な英霊達の楽園に解き放たれた。

冷たい雨が、噎せ返るような鉄錆の臭いを流し落す。

賊軍の攻勢が終わり、激しい破壊音が鳴りやんだ六月の尸魂界。ソウルソサエテイ
未だ混乱収まらない戦後の瀾霊廷せいらいていにおいて、四番隊総合救護詰所は尚も戦の最中同然の喧噪に包まれていた。

「ハア…ッ、ハア…ッ」

次々と搬送されてくる死傷者の担架を追い越し、少年が荒い息で詰所内を走り回る。

『十』の字を背負う羽織を着た白髪の童子——日番谷冬獅郎。ひつがやとうしろう 傷だらけの体を引き摺り駆ける彼の後ろには、悲痛な声で制止を呼び掛ける二人の女性死神、松本乱菊まつもとらんぎくと虎徹勇音こてついさねの姿があった。

「止まってください、隊長！ ダメだって言われてるでしょ…ッ！」

「お願いします、当隊の指示に従ってください！ 特別棟の患者との面会は許可できません！ 無理なんです…！」

二人の片方、勇音の所属は四番隊。席次は次官、副隊長だ。

この施設で第二位の責任者にして癒師である彼女は、目の前で只管に誰かを探す少年の努力が、残酷なまでに無意味であると知っている。

しかし、勇音の懇願は相手の耳に届かない。

…どこだ。どこに居る。

冬獅郎は血の気の引いた青白い顔で、先ほど勇音に聞かされた話を「嘘だ」と両断し、救護詰所の扉という扉を片っ端から開けていく。

回道の専門家らしからぬ検視ミスだ。きつと医療崩壊のせいだろう。あいつの霊圧を感じないのも特殊な隔離室に運び込まれたからだ。後ろの二人の泣きそうな顔も、何かの早とちりのせいに違いない。

そうに決まっている、と。自分に言い聞かせ、全身に絡みつく絶望に抗う少年。

その行動は矛盾に満ちていた。不都合な情報を排除し現実から逃げながら、必死に真実を知ろうと手を伸ばす。

故にか。そんな冬獅郎が手にした待望の真実は、目を逸らす事すら許されない、あまりに残酷なものだった。

「ッ、ダメです日番谷隊長！ その廊下の先は…」

「！ 雛も——」

勇音の悲鳴を振り切り、辿り着いた救護詰所の特別棟。

その一室の寝台に横たわる、夥しい生命維持装置の管が繋がられた、小柄な患者。

人工呼吸器の奥に見えた、あどけなさの残る若い女のそれは…

「…ひな……もり…？」

幾度の悪夢を乗り越え、命に代えても護ると誓った、少年の最愛の

幼馴染。

ひなもりもも
雛森桃の顔だった。

「うひょー！ すっげえ大玉ゲットだぜ！」

ラスノーチエス
虚夜宮時代に培ったノウハウを基に移転再開された『藍染農園』。
偽りの太陽に照らされたビニールハウスの中で、セスタ・フランシオン第6従属官の
デイ・ロイ・リンカーは初めての任務に興奮していた。

アランカル
網目模様に覆われた緑色の球体を掲げ、破面は近くで働く仕事仲間へ見せびらかす。

「お、どうしたエドラド？ そんな小玉で俺の特大玉と勝負になんのかア？ ギヤハハハハ！」

同僚に挑発された赤髪の大男、エドラド・リオネスが青筋を立てて言い返す。

「うるせえぞ。『一番良いメロン』ってのはな、単純なデカさが全てじゃねえんだよ！」

「…放っておけ。あまり騒いで王の機嫌を損ねるな」

そう仲間を窘めるのは細身の男、シャウロン・クーフアン。

彼の忠告にビクリと仲良く反応したエドラドとデイ・ロイは、恐る恐る背後の様子を窺った。

「チツ…」

アランカル
三人の視線の先には、見るからに不満を溜め込んでいる一人の破面。一同の“群れ”のリーダーにして、エスパーダ十刃の地位に就く青髪の青年、グリムジョー・ジャガージャックだ。

セスタ・エスパーダ
彼が率いる第6十刃一党は、別の仕事で多忙になった農園管理人

に代わり、とある用途に使われる旬の果物の収穫を命じられていた。しかしグリムジョーは性格は勿論、風貌からして不適任な代役。彼がこんな繊細かつ生産的な仕事をやらされている背景には、とある幼稚な悪意が絡んでいた。

「なんや機嫌悪いなあ、キミ。そない顔で収穫しとつたら、されるメロ
ンまで不味う見えてまうやないの」
「…ッ！」

咄嗟、その声の主へ片手の大玉を投げつけるグリムジョー。従属官
たちが色めき立つ中平然とそれを受け止めたのは、胡散臭い笑みを浮
かべる若い糸目の死神——市丸ギン。

「ひゃあ、怖い怖い。大切な”贈り物”を見繕う名誉な事やのに、まる
でイヤイヤ畑仕事させられとる田舎のヤンキーやん」

「てめえ…何しに来やがった…！」

「落ち着けグリムジョー、相手にするな…！」

グリムジョーの凄まじい霊圧に眉一つ動かさず、糸目男は剣呑なメ
ロン園の様子を愉しそうに眺めていた。

本来農場責任者の東仙要とうせんかなめの代役を任されたのは彼だったが、その
面倒を破面アラシカルたちに体よく押し付けたというのが事の顛末。

これらのメロンに大事な用途があると知った上で、収穫を任せられた相
手は乱暴短気なグリムジョー。その人選の意図は想像に難くない。

このように破面軍の面々へ、ひいてはこの地の支配者へ些細な嫌が
らせをする事が、市丸ギンという青年の最近の生き甲斐であった。

そして、そんな彼が企む本命の”嫌がらせ”は、荒れるグリム
ジョーが起こす農園の騒動ではなかった。

「あーっ、市丸様見つけー！」

一触即発の男達の空気に、甲高い女兒の声が紛れ込む。

ぎよっとその方角へ振り向く一同の顔は——市丸を除き——真っ
青。

「…な、このガキ……まさか!？」

「おいおい冗談キツイぜ、あいつら東仙をキレさせて地下に幽閉されてたはずじゃ……!？」

「…それは虚夜宮ラスノチエスでの話だ。今は少数のみ3ヶタトレス・シフラスの巢で放し飼いにされていると聞いたが……何故ここに居る……？」

幼女一人を前に、屈強な男たちが慌てふためく異様な光景。しかし彼らの反応は破面軍の者としてこの上なく正しい。

「あれ、グリムジョーじゃん！ 何して……つてメロン!? 凄いわ！

こんなにたくさん——」

「死ね、クソガキ」

一閃。情けない部下達を置き去りに、グリムジョーが女兒を斬魄刀で両断した。

夥しい鮮血が舞い、輪切りにされた子供の上下半身がポトツ、ポトツと地面に落ちる。間違いなく即死だ。

「あーあ、可哀想に。こない小さな娘相手にご無体やなア」

その凶行を、傍観していた市丸が責める。だが言葉に反し彼の顔には薄い笑みがへばり付いたまま。

禁忌たる同胞殺しが行われた場にしては不可解な空気。その理由は、即死した筈の女兒の様子にあった。

「——うえええん！ いきなり斬るなんてひどーい！」

腰から下を失った子供の上半身が、突然泣き出した。傷口はポコポコと沸き立つ白い虚髄で塞がり、遠くに転がる下半身を呑み込みながら再生していく。

そして数秒と経たず、女兒は元の無傷の姿に戻っていた。

「……ヤベえな」

「ああ、この再生速度……群れの本隊が近い」

それを目にした者は皆、動揺していた。だがその理由は女兒の異常な不死性ではない。

何故なら彼ら破面軍の戦士達は、この子供の正体を嫌という程知っているのだ。

破面^{アラソカル} No. 102——ピカロ。

その真の恐ろしさは…

「メロンだ!」「メロン!?!」

「去年雛森様に貰ったアレ!?!」

「すごい!」「いつ　パ、い!」

「私達全員分あるじゃない!」

「やったああああああ!!」

総勢二百にも及ぶ圧倒的な“数”にあるのだから。

「くっ!　来たぞ…!」

「ま、待てガキ共!　そのメロンは雛森様が”大事にしろ”って…!」

「デイ・ロイ!　お前の大玉だけは死んでも守れ!」

「う、うわああああああ!?!」

血と果汁が飛び散る闘争が始まった。

一騎当千の猛者たちも、ピカロの白い津波からビニールハウスを護る事は至難の業。狡猾な数人の子達に防衛線を潜り抜けられ、果実を奪われ、果園を踏み荒らされ——

もうダメだと思われた、まさにその時。

子供達の軍勢の最後尾から、三つの巨大な霊圧が噴出した。

「…^{まわ}旋れ!!」

— 暴^ヒ風^ラ 男^ル爵^ダ —

「…^{なぐ}殴れ!!」

— 龍^{ドラ} 拳^グ —

「…^か搔^きつ切れ!!」

封じられた虚の力を呼び覚ます、破面の刀剣解放——『帰刃』。
かつては使用に多くの制約が課された程の力を携えて、三人の男女
が必死の形相で戦場に乱入してきた。

「ノオ！ 間に合わなかったか！」

「ちくしょう、農園まで……！ このクソガキ共オ！ 五体満足で済む
と思うなよオ！」

「グリムジョー！ 今すぐあたしと勝負して十刃の座を明け渡しや
がれえーッ!!」

彼らの発言に援軍らしい頼もしさは欠片もなかったが、少なくとも
ピカロ達にこの場で寛ぐ事を躊躇わせる程度の圧は掛けられたらし
い。

「よし、みんな散れーっ！」

「わーい！」「てっしゅー！」

「食べ物は皆で分けるから！」

「勿論！」「独り占めは禁止！」

「一つでも多く持ち帰るぞー！」

「あはははははははっ！」

戦利品を両手に抱えた子供達が徐々に逃亡を始める。

「逃がすかよクソがああああ！」

「……どうすんだこの大惨事……」

「ンなモンあいつ等ふん縛って軍団長に突き付けるしかねえだろ！」

「クソッ、一体誰があのがキ共を牢から出しやがったんだ……!?!」

「待ちやがれゴラアアア!!」

顔面蒼白な者。怒りに赤ら顔な者。表情の消えた殺戮者の顔。多
種多様な様相の破面達は、無邪気な天災を追って大天蓋の砂漠を疾
走していった。

「……なんや、滅却師との戦争前にえらい大ゴトになったなア」

彼らの後ろ姿を見つめる、糸目の死神。

心底愉快そうにほくそ笑む彼は、メロンを抱えたまま取り残された
破面^{アランカル}、デイ・ロイへ近付いた。

「無事みたいやね、ソレ。死守ご苦労さん」

「……おい、まさかあのガキ共を解き放ったのって…」

市丸の指先でくるくる回る武骨な鍵を凝視し、デイ・ロイは傷だらけの顔を憤怒に歪める。

しかし市丸は彼の追及をさらりと流し、唐突に世間話を始めた。

「いやア、従属官^{フランゾン}と二人きりやなんてボク初めてやし、少しお喋りしたいなー思て」

「無視すんなコラ！ いきなり何だよ」

「そやなあ、例えば……桃ちゃんの崩玉^{ほうぎよく}の力で復活してから、なんや変わった事あったりする？」

——力の増加だけやない

妙な”胸騒ぎ”とか

その不気味な微笑を見て、怒り一色のデイ・ロイの表情に困惑が混ざる。

彼の反応に何かを見出したのか、笑みを深める市丸ギン。

そして意味深に大天蓋の偽の太陽を見上げ、市丸は「さてと」と荒れ果てた農園を後にした。

「ほなボクは、誰かさんが愛しの幼馴染みに夢中になつとる間に…もう少しだけこの暇を楽しませて貰いませよか」

「…は？ お、おい待ちやがれ！ さっきのは何の話だ!？」

デイ・ロイは相手を追おうと踏み出すも、直前の戸惑いのせいで足が鈍ってしまう。その間に、市丸の姿は砂漠の蜃気楼の奥に消えていた。

取り逃がした死神の残像を睨む、蘇りし英霊デイ・ロイ・リンカー。背筋を這う悪寒を、市丸の残像ごと振り払い、我に返った彼は慌てて”群れ”のリーダーを追い駆けた。

「くそっ……おい！ 俺を置いてくなよ、グリムジョー！」

市丸が述べたその名を聞き、胸奥で疼いたとある感情に、彼が気付く事はなかった。

ソウルソサエティ
尸魂界を襲った敵軍が撤退して間もなく。負傷した仲間達の安否

確認に四番隊を訪れた霊界の英雄——黒崎一護。

総合救護詰所の特別棟に足を運んだ青年は、そこで見た光景に胸を痛めた。

「冬獅郎……」

部屋に居た者は二人。これまで多くの苦難を乗り越え、望んだ細やかな幸せをやっと取り戻した、少年と少女。

その片割れが瞼を閉じ、もう片方が虚ろな顔で立ち尽くす。それはまるで悪魔の呪いのような、幾度となく繰り返された悲劇だった。

一護は無力感に唇を噛む。

彼は寝台で眠る少女、雛森桃の戦いを遠目で見ていた。彼女が戦った敵の男とも、一度だけだが剣を交わした。

青年は桃に大恩があった。

否、厳密には”彼女”にはではない。とはいえ不思議な縁で一方的な、憧憬と親愛の混ざった複雑な感情を懐いている相手だ。

その彼女に恩を返せる、貴重な機会だった。

…だがそれは叶わなかった。

桃を二度と目覚めぬ体にした”ハツシユヴアルト”なる敵軍の副将。一護の仲間、破面ブレンカールのネリエルを倒した因縁の相手。

如何なるカラクリか、それとも純粋な実力差か。一護は奴の剣撃一振りで、自身の最強奥義【天鎖斬月てんさざんげつ】をへし折られてしまったのだ。

「……くそっ」

悲痛と屈辱に拳を握り締める。しかし胸に積もった淀みは少しも消えてくれない。

此度の戦いは一護の心に多くの深い傷を残した。

銀城空吾ぎんじょうくごの陰謀に巻き込まれ、そして浦原喜助うらはらきすけと護廷十三隊の仲間達のお陰で、また大切な人達を護る力を取り戻せた。だがその自信は滅却師クインシーの主従、ユーハバツハとハツシユヴアルトとの一戦で脆く崩れ去ってしまった。

隊長うのはなの卯ノ花うのはなや京楽きやうらくには、総隊長の危機を救った事を感謝された。仮面ヴァイザードの軍勢仲間の平子ひらこには敵の親玉を追い返した事を称賛された。

しかし真相は終始こちらの劣勢で、相手に手心を加えられ何とか喰らい付いていただけ。あまりに不甲斐ない戦いだった。

そして、何よりも…

——やはりお前は己の母の事を

何も知らされていないのか

「……何だっつてんだよ…」

ユーハバツハの言葉が毒のように、一護の心を蝕む。

藍染惣右介あいぜんそうすけの探求の素体。”あの少女”の起死回生の切り札。黒崎一護は生まれる前から大きな宿命を背負わされた子供だった。

そこへ、新たに垣間見えた更なる秘密。

自分の母親、黒崎真咲くろさきまことの”もう一つの霊圧の記憶”とは何なのか。それを知るユーハバツハとは一体何者なのか。

そして、奴が俺に向けた、あの憐れむような目の意味は…

「黒崎様！ 黒崎様はこちらですか！」

「…ッ！ お、おう？」

ふと、特別棟の出入口から一護を呼ぶ声が聞こえた。弾かれるように振り向いた彼へ、四番隊の隊士が安堵の笑みを向ける。

「六番隊・阿散井恋次あばらいれんじ副隊長、十三番隊・朽木ルキアくちき副隊長。お二人の救命治療が完了しました！」

「！ そうか、よかった！」

「朽木副隊長は直に意識が戻るでしょう。面会をご希望でしたらこちらへどうぞ」

不安の一つが解消され、一先ず胸を撫で下ろす。

難しい話はまた後だ。今はただ、あいつ等の無事を祝おう。

「……」

特別棟へ背を向けた一護は、そこで少しの間立ち止まる。

そして部屋に残す、永眠する少女の側で俯く少年を一瞥し、部屋を去った。

何もできなかった無様な自分に、彼へ送ってやれる慰めの言葉など、一つとしてありはしなかった。

ゾクリ、と。凄まじい寒気を感じ、日番谷冬獅郎ひつがやとうしろうの意識が果てしない暗闇から浮上する。

黒崎一護が特別棟を去ってから、およそ半日。

もつとも冬獅郎は彼が見舞いに来ていた事すら認識できていなかったが、サアサアと降り続いていた夜雨は上がり、瀬霊廷せいれいていは新たな日を迎えていた。

絶望のどん底で放心していた彼を現実呼び戻したのは、妙な来客。

「――真まこと、莫迦げた喜劇よのう」

それは女の声だった。

高いというよりかは低く、大声と言うよりかは小声で、老齡というよりかは若い声。

しかしそれは、茫然自失と項垂れるばかりの冬獅郎をも振り向かせる、神秘的な威厳に満ちていた。

声の方角へ視線を動かし、少年は異様な装束の人影を見る。

隊首羽織に似た上衣を纏い、広い白披巾で両腕を覆い隠した、妙齡の女。後髪に挿された華やかな宝簪は宛ら色街の花魁のよう。

だがその妖艶な印象を霞ませる異物が、女の背後に生えていた。

六本の、細長い傀儡の腕である。

そして冬獅郎はようやく気付く。腑抜けて尚、その姿から目を逸らす事に恐怖を覚える程の、女の規格外な霊圧に。

「……誰……だ……」

根源的な危機感が声帯を動かし、辛うじて誰何の声を絞り出す。対し女は少年へ一瞥も寄越さず、浮遊しながら寝台へと向かう。そして彼女は瞬く間に、寝台で眠る冬獅郎の想い人——雛森桃を、謎の等身大の球体に梱包した。

「……なっ!? 何してんだてめえ! 雛森に触るなッ!!」

憔悴しきった彼の何処にそんな気力が残っていたのか。一瞬で頭が沸騰した冬獅郎は直情的に”敵”へ斬りかかった。

しかし。

「な……!?」

少年の刃は、女の衣類一つ裂く事すら敵わなかった。

「——氷輪丸の主と聞いて期待しておったが、よもや礼節すら知らぬ斯様な小童だったとはのう」

啞然とする彼の頭上に、女の平坦な声が降り注ぐ。

「……な、何者だ……お前……!」

「隊長風情が言葉に気を付けろよ。さもなくば、その口——二度と開かなくなっても知らぬぞ」

直後、言葉通りの事が起きた。

「……!? ……ッ、……ッ!!」

まるで縫い合わされたかのように開かない唇。続けてその唇肉が糸のような何かに引つ張られ、冬獅郎は勢いそのまま顔面から床に突っ伏す。

混乱しつつ慌てて活路を探った彼は、女の義手の一つが細い針を掴んでいる事に気が付いた。

「それ見たことか。大織守おわりがみのバチが当たったぞ」

「……!?」

瞬間、思わず息を呑む冬獅郎。女が口にしたその単語が、状況が、不意に彼のある記憶を掠ったのだ。

神速の針捌き。隊長格の斬魄刀をも弾く衣服。聞き慣れぬ上代風

の官位：

それは靈術院で皆が学ぶ偉人伝。

濡れば即座に乾き、燃えれば即座に鎮火し、あらゆる過酷な自然環境に適す万能の戦装束『死覇装』。その神衣を生み出した功績で、ソウルソサエティ尸魂界の歴史を創った者の一人と称えられた古の死神。

そして、その大仰な言葉が示す意味は、この靈界に二つと無い。

——おうぞくとくむ王属特務・ぜろばんたい零番隊——

「……ッ!!」

しかしそんな偉人を前にしても、冬獅郎の心に敬意は微塵も湧き上がらなかった。

代わりに胸を埋め尽くすのは、純粋な怒り。

それもその筈。彼にとってその名は、二年前から大切な人を苛み続けた不幸の元凶の一つなのだから。

かくして。

「…霜天そうてんに坐せ!!」

——ひょう氷輪りん丸まる——

爆発的な靈圧が壁天井を吹き飛ばし、極寒の銀世界へと変じる特別棟の敷地。

積年の憤懣の捌け口を見つけた少年は、残る気力の全てを自らの斬魄刀へ反映した。

「ほう。腑抜けて尚、わらわ妾の糸を引き千切るか…」

冬獅郎の開いた唇から滴る血を見て、女が感心に眩く。

「気が変わった。連行名簿にそちの名はないが、わらわ妾の裁量で共に連れて行ってやろう」

「…ッ、何…?」

如何なる心境の変化か、彼女の声色に少年を咎めるような鋭さは消えていた。

だがその時冬獅郎の背に走ったのは、凄まじい悪寒。

「…なれど困ったのう。黒崎一護と雛森桃を除いた対象者は皆、うのはな卯ノ花にも治せぬ死人ゆえの”特例”じゃ」

そしてワザとらしく愁眉した女が、「よって」と不気味な間を置き…

——そちも一度、ここで死ね

そんな言葉を最後に、冬獅郎の世界は暗転する。

彼の直前の記憶に残ったのは、自分の死覇装から突き出た無数の刃に全身が貫かれる激痛だった。

「うわあ!」「あははっ!」

「どんどん人が増えてってる!」

「こんな楽しいの初めてだわ!」

「怖いよお!」「大丈夫かな…?」

「逃げろおおっ!!」

大地が爆ぜ、砂塵が舞い、無数の霊圧が飛び交うヴァルアリヤ英霊宮殿の大天蓋。暴力の乱気流の中を、ピカロの子供達は楽しそうに、怖がるように、慌てるように駆けていく。

「死ねアガキ共オ!!」

「逃がさねえつつてんだろーが!」

「くたばれオラアアアア!!」

男の、女の、聞くに堪えない怒声が木霊する。

ピカロ達に肉迫しながら追手の先頭を走るのは、グリムジョー率いる第6十刃陣営。
セスタ・エスパーダ

「許さん！ 許さんぞオオオ!!」

「てめえら射線から退け、うおおおッ！」

「喰らいやがれ、虚閃^{セロ}オオオ!!」

その後ろに続くのは、同じく高い殺意を誇るチルツチら
プリバロン・エスパーダ
十刃落ち。

そして、メロン園の事件の後に加わった、新たな集団。

「あの小僧共！ バラガン様の鍛錬の邪魔をするとは何たる不忠者
！」

「虚^{ウエコムンド}圈最強最悪の軍勢と呼ばれたピカロ殿も今や昔。その称号、更なる高みへと登った我が髑髏^{カラベラス}兵団が頂戴致しますぞ！」

日課の鍛錬で大砂漠を使用していた第2十刃配下の数名。
セグンダ・エスパーダ

果てには事態を察知し急いでやってきたルドボーン率いる
エクスセキアス
葬討部隊。

3ケタの巢の落書きから始まったピカロの子供軍団と大人達の追
トレス・シフラス
いかけっこは、今や英霊^{ヴァルアリヤ}宮殿中を巻き込む大騒ぎになっていた。

「がッ!? おいコラ、どこ狙ってやがるイールフォルト！」

「邪魔なんだよ、ニルゲ！ 図体ばっかデカイ木偶の棒が！」

「うぎゃあ!? な、何そのグロいもっこり海パン！ あたしの隣を走るなカマ野郎！」

「ンン失礼しちやうわねええ!? ガキ共を殺す前に貴様を血祭りにあげてやろうか、あアん!?!」

至る所で勃発する大人達の衝突。本能のまま動く虚^{ホロウ}時代のクセが抜けきらない彼らに、組織立った行動など取れる由もなし。

「雑魚に構うな、シャルロット！ ピカロは元は我らと同じバラガン様の軍門！ 我々の手で止めねば身内の恥を晒す事になってしまう
…!」

「言ってる場合かフィンドール！ くそっ、お前ら！ 誰も上に報告するんじゃないぞ！」

それは、”群”でありながら一人一人が異なる人格、意識、記憶を有するれっきとした”個”であるピカロの、存在としての歪さが招いた悲劇だった。

彼らは他の住人達と同じように、たとえ思慮の足りぬ子供でも、その特殊な区域が何なのかくらいは知っていた。

ならばこそ間違ってもソコへ足を踏み入れる愚を犯す筈がなかった。

本来であれば。

「お、おい…あいつらどこ行こうとしてるんだ…?」

「待て、そっちはヤバいだろ…! おいヤバいつて、ピカロ!」

…だがもし、東仙統括官とうせんに様々な注意事項を教わったそのピカロの一個体が、仲間達への情報共有を忘れていたのだとしたら。そしてその個体が既にグリムジョー達に捕まり、この場に居なかったとしたら。

そんな”もし”が、不運にも起きていた。

「不味い! 誰か止めろ!」

「ダメだ、間に合わねえッ!」

「頼む! メロンは食っていいからそっちに行くな!」

「ねえ、まって! 止まって! お願いだからあ!」

怒声から悲鳴へと変わる、大人達の制止の声。されど虚しく、ピカロ達とオアシスの距離は目と鼻の先の距離まで狭まっていく。

そして。

「止めろおおおッ!」

「ちくしょおおお!!」

『ピカロオオオオオ!!』

繊細な紅白の花弁が、元十刃エスパーダという破壊の権化が駆ける衝撃波で、無残に散っていく。起こしたピカロ達自身が残念に思う程、悲惨に。

その次の瞬間。

『!!?』

無体な侵入者達は、経験したことがない桁外れな悪寒に震え上がった。

「何してるの、あなた達？」

子供達の、大人達の、ヴァルアリア英霊宮殿中の住人達の耳に響く、若い女の声。感情の一切を感じさせない静かで平坦なその声の主は、舞い上がった花卉の渦の中に、忽然と現れた。

「今とつても良いとこだったのに、ロスヴァリエス虚霊坤の中が騒がしいから戻ってみたら……何なのかしらね、これは」

ニツコリと花のように可憐な笑みを浮かべる、”桃色の夜空”を纏った少女。

普段の敬語の口調が崩れた彼女の内心は誰の目にも明らかだ。

「あたし、何度も言ったわよね？ この梅園は飛梅とびうめが大事にしてる場所だから、”死んでも荒らすな”って」

「あ、あ……あ……」

「そんなに元気が余っているの？ 決戦の前日に、ハトハトに疲れる帰刃レスレクシオンをするくらいだものね？」

微笑む彼女の背後に、長い黒髪の天女が現れる。

その真つ赤な般若の如き顔を見た一同は、弁明する事すら忘れて戦慄した。

「みんなの活躍、この娘こと一緒に」

——期待してるわ？

翌日。

星十字騎士団シュテルンリッターの第二次攻勢により再びの大混乱に陥った尸魂界ソウルソサエティ。

両者の戦争の佳境にて現れた、謎多き虚霊坤ロスヴァリエスの軍勢。

彼らと空座町決戦で刃を交わした死神たちは、再会したかつての強敵の顔を見て、こう感じたと言日記に遺している。

それはまるで、背水の陣の如き、異常な戦意に満ちていた、と――

離殿つてSS編時点でクインシー・レットシユナイ
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

『干戈かんかを交うるに美学を求むべからず
不帰に美德を求むべからず

己一人の命と思ふことなかれ
壺王伍公いちおうごこうを護りまほしくば、敵悉く葉陰より屠るべし』

これは死神しにがみ統学院とうがくいん、後の世に真央靈術院しんおうれいじゆつていんと呼ばれる機関の教本『死神心得大鑑しにがみこころえたいかん』に記された言葉である。

改訂された現在の教本での記述と同様、”戦い”を英雄的賞賛とは程遠い、卑しくも避け難き死神の宿命と定める心得。しかし両文における決定的な違いはその心得ではない、最も重要な箇所にあった。

死神が戦う理由、護るべき存在——「壺王伍公いちおうごこう」の文字である。

最新版にて「護るべきもの」と抽象的な表現へ改められたこの一文は、改訂を指示した中央四十六室ちゆうおうしじゆうむくしつによる当時の”王政”への反逆そのものであったが、奇しくもそれは護廷十三隊に、戦いの地獄の中に希望と神聖さを見出させる救いとなった。

一人の王の為ではなく、己の誇りの為。五人の公卿の為ではなく、隣の戦友の為。

それが、彼らの新たな「護るべきもの」になったのだ。

…さりとて運命は彼らを逃さない。

「——着いたぞ」

王属特務『零番隊』の先導で辿り着いた空の彼方で、黒崎一護は感嘆の溜息を吐く。

「……………」

浮遊する五つの円島。立ち並ぶ巨大な列柱。まるで万人を傅かせるようにのしかかる、荘厳で圧倒的な霊圧に満ちた異界。

かくして舞台は、彼の地へ移る。

あらゆる命の生と死の理を創った、三界の楔が座せし聖域。

藍染惣右介の、銀城空吾の、少年と少女の。全ての因縁の始まり。

霊王宮へ――

零番隊の各士は霊王の近衛であると同時に、霊王自らが「戸魂界の歴史そのもの」と見做した霊界繁栄の開拓者である。

その偉人達が編み出し、霊王の力により更なる進化を遂げた超霊術は、瀨霊廷で行われている斬拳走鬼の修行とは別次元の力を齎す。

麒麟殿の『湯治の』儀』

臥豚殿の『魄食の』儀』

機鶴殿の『縫衣の』儀』

鳳凰殿の『鍛刀の』儀』

菩提殿の『奉名の』儀』

零番隊の各人が司る零番離殿で傷を癒し、腹を満たし、死覇装を見

繕い、卍解を打ち直し、超霊場での修行を経て、自らの霊格の昇華を目指す一護たち。

麒麟殿での湯治を終えた彼らは、あれよあれよという間に次の零番隊隊員、曳舟桐生ひきふねきりおの許で、広間を埋め尽くす凄まじい量の美食を振舞われていた。

「アタシが創り出したのは、『仮の魂』と、それを『体内に取り込む』技術だよ」

悠長に温泉や食事で寛いでいる現状に焦燥する一護。そんな彼に曳舟が伝えた言葉だ。

ここで行われているのは心身を労り健康に整える、普通の修行までの流れと何も変わらない。ただしそれを現世や瀨霊廷せいれいていではなく、霊王宮の、即ち下界の人間や魂魄ではなく「霊王のスケール」で行っているのだ。

「虚化ホロウに親しんだ一護ちゃんならわかる筈だよ。自分のものとは違う別の霊圧を取り込む事で、アタシたち魂魄は自らの力の階層を上げる事ができる」

「！ それって…」

「そう。あんたが食べてるその料理には、その技術の神髄が籠こもってるのさ」

曳舟の説明を聞き、一護は思わず手元の丼を凝視する。身に覚えのある言葉が幾つもあった。

「藍染が…いや——」あの人が俺ホロウにくれた虚の力の事、あんたも知ってるのか…?」

「当たり前さ。その二人の技術も、あんたが世話になってる浦原喜助うらはらきすけの技術も。元を辿れば全部このアタシが発明した『義魂理論』にルーツがある。この分野でアタシの右に出る科学者は一人もないよ」

母性溢れる胸を張る曳舟。料理に力を使い脂肪を消費した本来の姿の彼女は、確かに「戸魂界ソウルンサエテイの歴史」の名に相応しい、知性と威厳を感じさせる稀代の女傑だった。

「……あのさ」

だからだろうか。

その道の権威との出会いを機に。一護は少しの逡巡を経て、意を決す。

「虚化が文字通り虚ホロウ由来の能力だってんなら、”あの人”が俺にくれたもう一つの…」

そして、長らく募らせてきた今亡き相棒の少女への想いに従った。

「完現術フルブリングは何が由来の力なんだ？」

”読書家”どくしよか。

二十二年前に浦原喜助へそう名乗った謎多き少女について、護廷十三隊は技術開発局と浦原商店を中心に正体解明を目指すプロジェクトを立ち上げた。

それは上位組織『零番隊』の意に反した行動であったが、煮え湯を飲まされ続けた科学者たちと貴族院の思惑が奇跡的に合致し、暗黙の了解として中央四十六室の一席阿万門家あまかどから少くない支援が送られていた。

しかし、陰で多くの者たちが期待した計画は、僅か一年で停滞する。

最初に手を引いたのは意外な人物。当初は最も意欲的に情報を集

めていた、浦原喜助だった。

それから数か月の差で、技術開発局局長・涅マユリが計画を一方的に凍結。

更に半年ほど続いた阿万門家からの計画再開の催促も、ある日を境にシンと静まり返った。

山本元柳斎重國は護廷十三隊の総隊長として、部下や貴族たちから一連の動きを耳にしていた。判断材料を増やす目的で、それぞれの不気味な沈黙の訳を問うた彼だったが、結局以前からの「上からの圧力」以外の理由を知る事はできなかった。
だが、今。

山本の前には、全ての死神で最も真実に近い位置に座す男が居た。来たるユーハバツハとの決戦にて絶大な影響力を發揮しうる不穏分子、”読書家”。かの勢力と協定を結んでいる、尸魂界の上位者。

「——兵主部一兵衛」

麒麟殿の湯で傷を癒した山本は、零番離殿の一つ菩提殿で、”和尚”と呼ばれるその男と会っていた。

「おう！ 久しいのう、ノ字齋！ おんしも食べんか？」
巨大な数珠を首から下げた、坊主頭の壮年。彼は白木の底に腰掛けながら、甘ったるい匂いの甜瓜らしき果物を頬張っていた。

豪快な笑みで「美味いぞ」と相伴に誘ってくる和尚を軽くあしらひ、山本は腰に差した刀を抜く。

「何年前の名じゃ、和尚。そちらで呼ぶなら元柳斎の方にせい」

「…成程、死んだ部下への感傷か。おんしも変わったのう」

「ほぎげ。湯上りの肩慣らしが興に乗り過ぎても知らぬぞ」

——流刃若火——

並の卍解をも凌駕する、途轍もない劫炎が離殿を焼く。和尚はその

灼熱を得物の大筆で容易く掃い、しげしげと山本の刀を観察した。

「ふうむ…やはりおんしの斬魄刀、大分妙な事になっておるの。それがユーハバツハの『卍解を奪う力』とやらか」

「そんなものは盗人共々焼き殺せばよい。それより儂の問いに答えよ」

澄ました顔の和尚へ【流刃若火】の爆炎が襲い掛かる。

「読書家」とは何者じゃ？ 何時、何故お主等はあんな得体の知れぬものと手を組んだ？」

「これ、少しは加減せんか。離殿を建て直す神兵共が不憫でならん」
「奴が自立したのは雛森副隊長の身体から抜け出て間もない頃だと浦原は申しておったが、斯様に短い時間で同盟など成立するはずがなからう。何時からお主等は奴の存在を知っていた？」

身体は無論衣類にすら焼け跡一つ刻ませない和尚の超技。始解では庄にもならぬと察した山本はさっぱりと剣を諦め、口撃に切り替えた。

「浦原も、涅隊長も、あの智慧に餓えた小倅共が己の探求心を自ら封じるなどあり得ぬ。お主等は…：…否」

霊王は”読書家”に何を見た？

山本に合わせ武器を下ろし、和尚が「ふうむ」と顎に指をあて思案する。老将はその仕草が演技だと気付いていたが、続けて憐れむように頭を振った和尚の言葉には、息を呑んだ。

「掟が定められる前であれば答えてやってもよかったが…：…今はもう無理じゃ」

「何じゃと？」

聞き返す山本へ、和尚が常の澄みきった瞳で詳細を語った。

「おんしの靈威ではその答えを知る事は許されん。知らば霊王に仇なす罪人として殺さねばならんだ」

「——そいつを知って、あんたは如何したいんだい？」

”あの人”から齎された、仮面の少女の完現術。フルプリング

その本質について、臥豚殿で曳舟ひきふねに尋ねた一護は、ピンと張り詰めた空気に呑まれ硬直した。

「い、いや……銀城が言ってた虚ホロウ由来の力つてのが、”あの人”の話となんか噛み合わねえなって、前から気になってただけで……」

「単なる好奇心で訊いてるなら止めておきな。大切な仲間達を護り抜くことが一護ちゃん願いなら、その知識は知る必要がないものだよ」

曳舟の顔から、先程までの快活な笑みが消えていた。まるで凶悪事件の容疑者へ向けるような冷たい眼差しに射竦められ、一護はその秘密の深さを察する。

「——”罪人”じゃと……？」

”読書家”、および彼女と繋がりを持つ零番隊の真意を知るべく、菩提殿の主を問い質そうとする山本重国。

しかし兵主部ひょうすべい一兵衛いちべえの答えは、最古の死神と称えられる山本をして、前代未聞の話だった。

「……藍染惣右介あいぜんそうすけは崩玉と”読書家”の欠片を吸収し、強引に自らの霊威を引き上げた。ユーハバツハは現代の滅却師クイーンシー共の祖として生を受けた。あの娘の正体に迫った者は皆、霊王の秩序を超越する力と、意

思を有する連中じゃ」

「……浦原と涅隊長が手を引いた理由はそれか」

「恐らく双方とも相当に神髄へ迫り、最後の一线を跨ぐ直前でその禁忌に気付いたんじゃないやろう。さもなくば、読書家”に関する法が最初に適応される者は、おんしか、その二人になる」

あつけらかんと言つてのける和尚に対し、山本の顔は一層険しさを増す。

藍染惣右介とユーハバツハ。両者には”読書家”の正体に迫つた事への咎は無いと言うが、そも話は前提からして間違っている。

律令である魂魄法とは異なり、霊王の定める霊王法は今まで一度としてその項数が変動した事はおろか、改正された例すらない。それは偏に霊王の古今東西に遍く超越的な視野が見通した「避けるべき未来」への道標であるからだ。

ならばその「不変」を変えさせる程の存在とは、それ自体が罪ではないのか。

そして、もしその罪が裁かれない理由があるのだとしたら。

それは、果たして…

「——別にイジワルをしてるワケじゃないよ、一護ちゃん」

同時刻、臥豚殿の大広間。一護は消えた相棒について何一つ知る事が許されない無念に唇を噛んでいた。

そんな彼を、曳舟は少しだけ表情を緩めて諭す。

「あんた、浦原喜助からも訊いてないんだろう？ アイツはあんたの力の事とか、あまりに常識外れな事象に対しては結論を急ぎ過ぎる傾向もある。けど、間違いなくあんた以上にあんたの為を思って、色々と考えてくれる得難い味方さ」

「それは、分かっているけど…」

「本当はあんたの内なる虚ホロウの存在も秘密にするつもりだったんだと思

うね。真子ちゃんたちの件でアレの恐ろしさは十分理解してただろうし」

何も教えないのが大人の優しさ。彼女は言外にそう一護へ述べた。

「——直に、”読書家”はこの三界に留まれなくなる」

菩提殿で語られるもう一つの謎。その真相を黙した兵主部一兵衛は、せめてもの慰めにと、驚く山本へそんな預言を告げた。

「奴自身も無意識の内に勘付いておろう。霊格が肥大化し過ぎて存在が世界から弾き出されかけておるのよ。虚霊坤ロスヴァリエスと名付けられた例の叫谷はその片鱗じゃ」

「……」

「大層歪んではおるが、あの娘がこの世界を愛し、その存続の為に動いておるのは真らしい。霊王は”読書家”と争うのではなく、この世を見聞し語り継ぐ”奇妙な客人”として歓待するとおっしゃった」

たとえユーハバツハの侵攻がなくとも、な。

そう和尚は言った。

常人の想像とはあまりにかけ離れた規模の話。理解も納得もできず無然とする山本へ、男はぬるくなった甜瓜メロンを頬張りながら「観念せい」と肩を竦める。

「全ての因果のありかを”読書家”に求めるのは、儂等死神の道理ではない。その根は、雛森桃の中に眠る怪物はおるか、アレをこれ程の存在に昇華させた藍染惣右介の陰謀にすら気付かんかった——護廷十三隊自身の怠慢じゃよ」

——そして話は今一度、臥豚殿の一護の許へ戻る。

「……そろそろ無駄話はよしなよ、一護ちゃん」

「ッ、そんな」

大切な亡き相棒への想いを二の次にされ、青年は鼻白む。しかし曳舟の見透かすような目が彼に有無を言わせない。

「もうとつくに気付いてる筈だよ。あんたが知らなきやならないのは、既に失われた力についてじゃない」

「……」

「ユーハバツハとの戦いで何か気になる事があつたんだろう？ あんたの眼を見ればわかるさ」

彼女の指摘に一護は息が詰まる。

世界の守護者の一柱たるこの場の主は、これ以上、一護に己の過去から目を逸らす事を許してはくれなかった。

「はいはい、休み時間は終わりっ！ 覚悟ができたなら発射台に乗りな」

そして青年の試練は、ようやく始まる。

次に向かう零番離殿の名は、ほうおうでん鳳凰殿。

そこに住まう主は、にまいやおうえつ二枚屋王悦。

死神の半身『斬魄刀』を創り出した大偉人が、黒崎一護の謎多き力の真実を告げる――

「つたく、千手丸せんじゆまるの奴も少しは加減しやがれってんだ」

麒麟殿きりんてんの湯場に湧く二つの温泉。

その縁に腰掛ける離殿の主、麒麟寺天示郎きりんじてんじろうは、淵から立ち上がった小柄な人影へ手ぬぐいを投げ渡した。

「……………は…どこだ…?」

反射的に受け取った少年、日番谷冬獅郎ひつがやとうしろうは、微睡む頭で辺りを眺める。

彼の最後の記憶にあるのは、大織守おおおりがみを名乗る零番隊の女に無理やり拉致された場面だ。それが気付けば窒息しそうな凄まじい霊子濃度の、謎のリーゼント男が寛ぐ温泉で目覚めていた。

「俺サマの城さ。滅却師クインシーとの戦いでくれたばり損なった、て前エめら護廷の連中に活を入れてる最中だよ。俺たち零番隊総出でな」

「零番隊」……………ツ！」

天示郎の言葉が頭の霧を掃う。

四番隊で例の女に半殺しにされ、大切な人を連れ去られた冬獅郎が、その怒りを思い出した。

「そうか…てめえらが…ツ！ 雛森を何処にやった!？」

大戦で惨敗し、半死人になってしまった最愛の幼馴染み、雛森桃ひなもりもも。

彼女から延命装置を絶ち、こんな極地へ攫った連中が許せず、少年は天示郎へ掴み掛かった。

「わからねえガキだな」

「なっ…!」

だが彼の手は空を切る。それどころか湯場の床に押し付けられたのは、他でもない冬獅郎自身だった。

「ここはどんな傷も治す俺サマの湯だ。連れてきた瀨靈廷せいりやうていの奴らの筆頭格は、て前エめとその雛森桃の他に朽木白哉くちきびやくや、山本重国やまもとしげくにがいる」

「……………!」

「て前エも一丁前に”隊長”名乗ってんならよ、瀨靈廷を守護するて前エ等の戦闘継続能力を、王宮を守護する俺達が復活させようとしてこの状況がどれ程異常なのか直ぐに気付け」

瞬間、少年の頭が冴えた。確かにあの女の術にやられたもの以外に、先日の蒼都戦で負った傷も完治している。

「過去にあつたような零番隊が出張らなきやなんねえ案件なら、霊王サマが俺達に出動令を下せば済む話だ。なのに今回はワザワザて前エらをこの禁裏にまで招いて傷を癒し、力を与えようとしている」
「それは…」

「そんな事を霊王サマが俺達”王属特務”に命じる理由なんざ、一つしかねえだろ」

驚愕する冬獅郎を床から解放し、天示郎は一切の感情を読み取れない無表情で、その事実を告げた。

「必要なだよ、て前エらに生きて強くなって貰う事がな。護廷隊全軍を凌駕する俺達『零番隊』でさえ、単独では対処できない…」

——未曾有の危機を

乗り越える為に

そこには誇張も、脅しの意図もなかった。男はただ霊王の予言を淡々と語ったに過ぎない。

だがその言葉の重さは、この世のどんな神や聖人のものより重い。天示郎の異様な雰囲気、その後ろに存在する超越者の威光が、何も知らない冬獅郎にさえ、そう思わせた。

「……一つ、答えろ」

「あん？」

冬獅郎は俯き、言葉を探す。

こいつ等の考えはわかった。自分が傷を癒された理由も、求められる対価も。

ならばここで、こいつ等の指示に従えば、俺は強くなれるのか。不

甲斐ない自分を変える事ができるのか。

…否、少年が最も知りたいのはそんな事ではない。

ここに来てから少しだけ感じられるようになった、馴染み深い霊
圧。

その意味を言葉にして欲しくて、冬獅郎は継るような目で眼前の男
を見上げた。

「…雛森は……助かるのか……？」

僅かな静寂。それを破った男は、古に『回道の父』と呼ばれた伝説
の死神——初代護廷十三隊・四番隊隊長であった。

「誰にモノ訊いてんだ、クソガキ。この”泉湯鬼”天示郎サマに、治せ
ねえ傷なんざイツコも無えよ」

初めて目にする天示郎の笑顔。大した悪人面だが、有無を言わせな
い彼の圧倒的な自信が、冬獅郎の心に希望の火を灯してくれた。

「……ッ、恩に着る……！」

深い、深い感謝の礼。天示郎は律儀な奴だと鼻を鳴らし、湯場の暖
簾へ足を向けた。

「ヨッシ！ 傷も癒えたならさっさと曳舟ひきふねんトコへ行つてこい。修行
前の腹ごしらえだ」

「ま、待て！ せめてあいつの無事な顔を見るくらい良いだろ……！」

離殿の外へ出ようとする男を言い留める冬獅郎。しかし振り向い
た天示郎の顔には、驚きと呆れ、そして妙な邪気が浮かんでいた。

「見る”って、今か？」

「…なんだ、何か問題でも？」

「いや。先に出てった一護や恋次はともかく、て前めエには”まだ早え
”って、大人として叱るべきか迷つてな」

そうしてニヤニヤ笑う彼が視線を向けたのは、背後の温泉。湧き出
る湯で揺れるその水面に、奇妙なものが浮いていた。

ゆで卵のようにつるりと白く、されど少しだけ赤みがあったソレ。

一瞬の困惑の後。長湯でのぼせた冬獅郎の顔に、追い打ちの熱が燃え上った。

「…なッ!? ひっ、ひひっひひひなっ、ひなも——!?!」

「そいつにこそ『桃みたいに』って言ってやれよ。まあ『みたいに』っつーか、その通りなんだがな。がはは!」

「やかましいわっ!」

咄嗟にツツコんでしまったが、取り戻したその一瞬の冷静さが仇となった。

自分の幼馴染と思しき少女の人影が沈む、白濁の湯。そこはつい先程まで冬獅郎が浸かっていた湯殿で、それが意味する事とは、つまり。俺はさつきまで、あいつと。

裸のあいつと、一緒の…

「——って違う、そうじゃねえ!」

鉄臭くなつた鼻孔を押さえ、冬獅郎は不埒な妄想を必死に頭から追い出した。

そうだ、そもそも。

「なんであいつが男湯に入ってるんだよ!? つかどうやって服を脱がした!?! まさかてめえがやったんじゃないやねえだろうな!?!」

「おう。乳臭えガキかと思つたが、意外とイイカラダしてんな。着痩せするタイプか?」

「死ねええええええええッ!!」

最早羞恥か憤怒かもわからない熱に操られ、冬獅郎はゲラゲラ笑うリーゼント頭の不埒者へ殴りかかる。

しかし少年が跳躍の一步を踏み込んだ、その瞬間。足元で何かがカチリと鳴った。

続き、冬獅郎は踏んでしまった謎の台座に拘束された。

「な、なんだこれ!? くそつ、外れねえ…!」

「おいおい、自分から発射台に乗り込むたア、随分先を急ぐじゃねえか。女のケツ見て満足したか?」

混乱する少年に呆れながら、天示郎が何処からか取り出した巨大な木槌を振りかぶる。

「つて待て! 何する気だ!? 話はまだ終わってねえ!」

「しゃーねえな。て前^めエのやる気に応えて…ほい、行つてらっしやい」
「くそ、雛森イ!! ひなも——」

そして男の木槌が台座横の杭を叩いた直後。

冬獅郎は、情けない悲鳴を上げながら、宙を舞っていた。

イ…」

イ

イイ

イイ

『雛森イイ

イイ

イイイ

過去ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

現世、空座町。夜雨の帳に包まれる静かな住宅街を一人の少女が駆
けていた。

「…毎日毎日鬱陶しい…！　ウチの街に何体居んよ、アンタら虚共
は…！」

黒髪を靡かせる少女が挑む先には、歪に蠢く巨大な影。忌々しげに
舌打ちし、彼女は恐れる事なく化物の前に躍り出る。

少女——黒崎夏梨はユウレイが見える非凡な人間だった。もつと
もここ空座町には同じように靈感豊かな者が多く住んでいるが、中
でも彼女は霊を相手に戦闘ができるほど霊能の力が強く、最近のある事
件を機にその力は新たな超人の領域へと踏み込んでいた。

「燃えて消える…！」

スター・オブ

ブレイズリング

夏梨が蹴り飛ばしたサッカーボールが火に包まれ、標的へ一直線に
飛翔する。以前腐れ縁の花刈ジン太が住宅地に被害を出した事を戒
めに、彼女の技は虚を散らばる肉片ごと焼き尽くした。

先月の完現術師なる連中との戦いで覚醒した新しい力。その太陽
の如き炎の球に、少女は自らの名音を詠む——火輪と名を付けた。

これがあれば、あたしも大切な人を護れる。
なんて。

「…ばつかみたい…」

思わず零れる自嘲の溜息。あの日から何度吐いたかもわからないそれに辟易としながら、少女は悔しさに唇を噛んだ。

夏梨が力を欲したのは、兄のためだった。

彼女の兄は”死神”と呼ばれる霊の力に目覚め、その力を使って夏梨達を人知れず守り続けていた。兄は少女の見えない所で何度も何度も危険な戦いに身を投じ、遂には霊を見る事すらできなくなるほどに力を使い果たした。

あれから一年と半年。ただの人間になった兄と過ごした日常は、戸惑う事こそ多かったが、確かに掛け替えの無い大切なものだった。

その日常を壊そうとする連中は兄に代わってあたしが退治してやる。夏梨はそんな決意を胸に、日々町を襲う敵を倒してきた。

…しかし少女の細やかな幸せは、一瞬で崩れ去った。

突然兄の側に現れるようになった胡散臭い^{フルプリンガー}霊能者達。奴等の術中に嵌り、心に深い傷を負った兄。

そして。そんな兄を救ったのは、護ると誓った自分ではなく、過去に兄を何度も死地へ引き摺り込んだ——”死神”達だった。

「…店長さんも、ルキアさんも、ヒゲ親父も…なんで巻き込もうとするんだよ…」

ぼつりと零れる少女の本音。親しい関係者達へ抱く、複雑な不満。聡い夏梨は兄の友人知人の正体に、とつくの昔に気付いていた。

だからこそ、少女は裏切られた気分だった。何故あの過保護な父親までもが兄の平穩が奪われる事を良しとしたのか。何故兄に戦う事を強いるのか。

二年前。あんな、魂を燃やし尽くしたような哀れな姿で帰ってきた、大切な家族を…

「——ッ!!?」

それは突然の事だった。夏梨の胸に得体の知れぬ熱が宿り、予期せぬ体の異常に怯える少女は思わず自身を抱き締める。

「な、なに……これ……っ」

その胸の熱は何かを訴えていた。まるで磁石に引き寄せられるように、夏梨の足は無意識に動き出す。しかし不思議と恐怖や嫌悪感はず湧き上がらず、少女は戸惑いながらその熱の導きに従った。

降り注ぐ雨の中を走り、親しんだ道を引き返し、辿り着いたのは通学路の河川敷。母が命を落とした鎮魂の河原。

その畔で、夏梨は見た。

「……兄……？」

数日ぶりに会った、眼つきの悪い自慢の兄。学校の合宿で留守にしている妹達に嘘を吐き、昔のようにどこか遠くの世界で戦っていたであろう……

——黒崎一護が決意に強張る顔で川岸の虚空へ手を伸ばしていた。

六千名を超える全護廷十三隊隊士が院生時代に一時貸与され、入隊と同時に正式授与される無名の斬魄刀。全ての死神達はこの”浅打”と寝食を共にし、練磨を重ねる事で己の魂の精髓をこの刀に写し取り、”己の斬魄刀”を創り上げる。

「その”浅打”の全てを一人でクリエイトしちゃってんのが、このチャン僕なのS a ッ！」

霊王宮に浮かぶ零番離殿の一つ、鳳凰殿ほうおうてん。荘厳な拝殿とは真逆の寂れた本殿に放り込まれた一護は、戦友の阿散井恋次あばらいれんじと二人で不気味な人型の霊体の群と三日三晩戦わされていた。

試練を課した男の名は、『刀神』二枚屋王悦にまいやおうえつ。奇抜なサングラスをかけたこのお調子者の男が歴代の隊長格を含む全死神達の斬魄刀の製作者だと聞かされ、一護と恋次は驚愕する。

だが王悦の言葉に垣間見える斬魄刀への深い造詣と愛に偽りはなく、果たして一護は男の試練によって己の死神としての異質さを暴かれた。

「——な、なんで……なんで誰も来てくれねえんだよ……ッ」

暗闇の中、虚しく木霊する困惑の声。

一護達に課せられたのは、襲い掛かるこの人型たちを屈服させ、従わせる事。それが彼ら——”浅打”と死神の正しい関係だと王悦は言っていた。

しかし。

「H m m ……これは予想外。まさか素手でその子達を全員ぶちのめしちゃうなんてY o ……」

「どういう事だ…？ 何で俺が選ばれて…一護が駄目なんだ…？」

指示通りに彼らと戦い力を示した一護。しかしそんな青年の前で蠢くのは、傷だらけの姿で後退る怯えた”浅打”達。

相当の苦戦を強いられた恋次が新たな相棒を得たのに対し、霊界の英雄としての余裕を未だ見せる一護の手を握ってくれる”浅打”は、一振りとして現れなかった。

「オカシいN_ネeエ、シーオカだN_ネeエ。そんなに強いのにD_{ドウ}として彼らは君を選んでくれないんだろうN_ネeエ?」

「なんだよこれ、話が違うじゃねえか:ツ」

一護は焦る。

その姿を見つめる王悦は、そんな青年の秘めし不安を看破していた。

「話が違う?」 ノンノン、違うのは”話”じゃN_ネeエ」

——お前の事だよ

”ニセ死神”くん

直後。王悦が放った鬼道が一護の体の自由を奪った。

「な……ぐっ!? な、何のつもりだあんた……!」

「話には訊いてたケド、この三日間君を見てきてよくわかったY_ヨo。一護ちゃんは明らかに恋次ちゃん達とは違う存在。死神じゃN_{ナイ}ってコトS_サa」

続いて「だから」と話一拍。一瞬で雰囲気反転した王悦が、冷徹な声で一護に告げる。

「お前、現世のお家に帰んな」

一瞬、一護は自分が何を言われたのか理解できなかった。

「……………え…?」

唾然とする彼へ男が背を向ける。

「死神じゃN_{ナイ}なら話は終わり。ここに君が立ち入る資格はN_{ナイ}し、君の”斬月”を直す理由もN_{ナイ}」

「お、王悦殿ツ！ それはあんまりです！ 一護は何度も俺達を助けてくれた仲間で——」

「ハイハイ、危ないからあんたはこっち」

恋次の懇願も王悦の女部下に阻まれ甲斐なし。一護が我に返った

時には、鍛冶場の主は既に空間転送の鬼道を準備していた。

「H*ai*!・じゃ、さつさとこの孔からチャン僕の離殿にB*ye*—B*ye*してN*e*」

取り付く島もない後姿。

一護の脳裏に、死神達の闇を知る銀城空吾の台詞が過った。

「……ふざけんよ……」

腹底から滲みだす憤怒の声。ここまで来て素直に引き下がれるか。

「……ヤレヤレ、しつこい男はモテねえZ*o*?」

「ハッ、諦めの悪さは筋金入りなんでね……! あんたに俺の斬月を打ち直す意思がねえなら、力づくで直させるッ!」

王悦の拘束鬼道から逃れようと、一護は霊圧を撒き散らす。その規模は霊王の霊圧に満ちるこの地の大気を軋ませる程。

「教えろ! あんた、俺の何を知ってんだ……! なんで俺だけがあんたの”浅打”に認められねえんだ!」

だが。

「あんたは……浅打”らは……! 俺があんたらの嫌う虚や完現術を使つてたから、俺を死神じゃねえって決めつけて——」

身体が自由を取り戻す事は叶わず、一護は王悦の転送鬼道に呑み込まれた。

「違うY*o*」

暗闇に視界が塗り潰される途中。激情に吠える死神代行は、こちらを見下ろす王悦の瞳の中に、何かを待ち望むような強い熱を見た気がした。

「……藍染……」

「……銀城……」

「……読書家……」

そして、ようやく姿を現した、最後の一人——

「……思い出すんだ、一護チャン。君に、その壮大な運命を背負わせた連中の言葉を」

鳳凰殿が佇む断崖絶壁を、王悦の独り言が風に乗って流れていく。「斬魄刀とは、担い手の”魂”を映す武器。それに認められなかったという事は、映すべき自分の本当の魂を、他ならねえ君自身が認めてねえって事S a^サ」

彼は気付いていないだろう。浅打あさうちに選ばれずにこれまで戦っていた事が、一体どれほどの事なのかを。

だがここから先の戦いは、そんな不確かな戦い方で乗り越えられるほど甘くはない。

「君はこれ以上、真実から目を逸らしちゃなんねえ。へたつぴな写し絵みてえなその贋作を、自分の本当の魂の形だと妄信してたら、君の本当の霊力は目覚めねえ」

『刀神』二枚屋王悦は自慢の金床の前で、虎穴へ蹴落とした英雄の帰りを待つ。己の人生でも無双の名刀を打つ、その瞬間を。

故に、黒崎一護は知らねばならないのだ。

「自分の……」魂の在り処^ナをN a^ナ」

「——ウチだ……」

王悦に放り込まれた空間霊術の暗闇から抜け出した一護は、霊王宮から遠く離れた現世の自宅、夜雨に包まれる「クロサキ医院」の看板の許で佇んでいた。

「…くそっ、どうすればいい…」

落伍者の烙印を押され、青年は理解も納得もできず項垂れる。

自分の不甲斐なさが悔しくて堪らない。仲間が一分一秒を惜しみ来たる決戦に備えているというのに、自分は敵と戦う切り札を取り戻す事もできず右往左往。こんなザマで、一体どうやってあの恐るべき敵の親玉と戦えというのか。みんなにどんな顔をして会えばいいのか。

居た堪れず、一護は逃げる様に自宅を後にした。

「…ッ」

雨の中を走る青年。息は続かず、濡れる体はあつという間に凍えていく。いつの間にか自分の死神体は元の生身に戻っていた。

屈辱に固く握られた拳の中に、自慢の斬魄刀は影も形も無い。それらの事実が、「お前は死神ではない」という王悦の言葉と共に、解けぬ毒となって胸中に広がっていく。

「もう…手はねえのかよ…っ」

これしきの事で諦めるものか。卍解を奪われた冬獅郎達とうしろうだって鬼道や白打を鍛えて補おうとしているではないか。

考えろ。何かないのか。卍解が無くても、あの化け物に喰らい付ける方法は。

「…（こ）は…」

そして霧中を模索する一護は、ふと気付く。

走り、走り、辿り着いたそこは、いつぞやの梅雨の日の喪失と出会いの思い出——通学路の河原だった。

「……はっ、情けねえ…」

脳裏に浮かぶ、一人の少女の姿。一人前になった証たる彼女との別

れを経て尚、未だ未練がましく甘えようとしてしまう自分を一護は失笑する。

だがそんな心の弱さが、彼にある選択肢を示した。

「…そうだ」

ゆっくりと。一護は懐のポケットへ手を忍ばせる。

先日仲間の井上織姫いのうえおりひめから貰った細い腕輪が、カチャリと鳴った。

用途は井上から聞いている。彼女がこの一年半の間を通い、力を磨き上げた、破面達ブレンカルの新たな楽園。その地へ持ち主をいざなう霊具だ。しかし。

「…ッ」

一護は逡巡する。

今の俺がこれを使っているのか。一人前と認められた自分がみっともなく継り付いてくる様を、あの人はどう思うのか。

されど事実としてこの腕輪は己の手の中にあり、二枚屋王悦の協力を得られなかった今の黒崎一護に、他の活路はない。ならば。

「…悪い、今回だけ…っ」

不安に震える声を、緊張に早鐘を打つ心音を無視し、一護は慎重に腕輪へ霊圧を込める。

その寸前。

「……どい行くの、一兄……」

不意に青年の背中へ、聞き知った声が掛かった。

「……………夏梨？」

一護の名を呼んだ彼女は、妹の黒崎夏梨だった。

「…帰ってきたんでしょ？　なら…ウチで晩ご飯食べよう…？」

咎めるような、切なそうな声色で、彼女が呑気なことを催促する。

何故こんな雨の夜に傘もさささず外出しているのか。とは言えこれから行おうとしている行動を見られる訳にはいかない一護は、努めて優しく夏梨を追い払おうとした。

「…悪い、これから用事あるんだ。お前も風邪ひく前に早くウチに帰って——」

「用事なんてどうでもいいでしょ」

しかし返ってきたのは、有無を言わせぬ拒否の一言。驚きながらも鼻白む一護は、故に妹の目に渦巻く情動に気が付かない。

「どうでもよくねえよ。お前ももうガキじゃねえんだから我儘言うな、夏梨」

気付かぬ内に、一護の語気は叱咤するような強いものになっていた。

少女が怯えるように硬直し、項垂れる。

「我儘なの…？」

そして一護ははたと気付く。

「久しぶりに一兄が帰ってきて、家族がみんな揃って…一緒にご飯食べたいって言うの、あたしの我儘なの…？」

夏梨は泣いていた。母が亡くなってから常に気丈に振舞ってきた、健気な彼女が。

震える声で家族の“あたりまえ”を求める妹を見て、青年は自己嫌悪に深く恥じ入る。

だがそれでも、一護は彼女の思いを振り払わなくてはならない。

「……………ごめん。けどわかってくれ、夏梨。俺は——」

「わかんないよッ!!」

悲鳴のような声だった。大人びた彼女らしくない激しい感情の濁流に一護は圧倒される。

「なんでよー！ 戦いなら死神あいつらに任せればいいじゃん！ あんなに強かった完現術師フルブリンガーの子を一瞬で倒しちゃうような連中が何人も居るのに、なんで人間の一兄まで一緒に戦わないといけないの？」

「夏梨…」

「いつもいつも、何も言わずに何日もどっか行っちゃって…：ポロポロになつて帰ってきて…！ 一兄がそんなにならないと護れないものって何？ どうしてそんなになつてまで戦おうとするの!？」

そして吐き出し終えた憤懣の後に残ったのは、一人の少女の愛だった。

「もう…いやだよ。一兄が傷付くの…：一兄が死神の姿でどっかに行く背中、見るの…」

一護は知る。自分が死神の力を得た二年前から、彼女がこんなに悲愴な想いを溜め込んでいた事に。

彼女が隠れて虚ホロウと戦っていた訳も、浦原喜助の許へ度々訪れていた訳も、銀城フルブリンガーら完現術師達との戦いで彼女が乱入して来た訳も。その理由の全てが今の告白の中にあつた。

夏梨の痛々しい姿を見て、一護は呆け開いたままだった口を閉じ、僅かな沈黙を挟んで開口した。

「…なあ、夏梨」

「……なによ」

「兄貴、つてのが、なんで一番最初に生まれてくるか知ってるか？」
いつだったか、昔そんな問いを他の誰かに投げ掛けた事がある。当時はまさか自分の妹にあの恥ずかしい説教をする事になるとは思わなかったが、それは彼女を悲しませた今の不甲斐ない自分にできる、唯一の兄らしい孝行だと一護は思った。

「兄貴おれが最初に生まれたのは、後から生まれてくる…」

——妹のお前達を

護るためなんだよ

青年と向かい合う少女が目を見開く。降り注ぐ雨音も、水嵩の増す川の音も聞こえない無音の間。ゆっくりと顔を伏せた夏梨の頬を、大粒の雫が滴り落ちた。

「…なんだよ、それ……」

ずるいよ、と。万感の思いが籠ったか細い声が耳に届く。

肩を震わせ、必死に自分を納得させようと頑張る健気な少女。雨で冷えたその華奢な身体を、一護は詫びるように優しく抱きしめた。

「……悪い、夏梨。先に家戻^{ウチ}っててくれ」

夏梨の嗚咽が止まる。おずおずとこちらを見上げる彼女の頭を撫で、一護は横へ視線を動かす。

濡れた草むらを踏み締める小さな足音。振り向いた夏梨が息を呑む。

そこに、黒崎一護の覚悟に応え、来てくれた、一人の死神が佇んでいた。

「親父と、大事な話があるんだ」

「——お前が靈力に目覚めた二年前から、俺はずっと、どうやってお前に真実を伝えるべきか考え続けてきた」

夏梨が涙を拭い、河原を去ってしばらく。焦れるような時を経て、一護の父黒崎一心くろざき いっしんの昔話は始まった。

何から話すべきか。どこまで話すべきか。

大勢の者達の想いや思惑によって育まれ、捻じ曲げられ、あまりに複雑に絡み合った黒崎一護の人生。

一心はそれらを一つずつ、彼の持つ知識と、そこから導き出される仮説を基に、丁寧に紐解いていく。

「全ての元凶は、母さんの身体に虚ホロウの力を植え付けたクソ野郎……
藍染惣右介あいぜん そうすけだ」

父の断言に唇を噛む一護。あの魔王の口から、自分が奴の不遜な野望の踏み台として生まれた、あらゆる種族の能力の才を授ける残酷な交配実験の素体だと聞かされた記憶は、未だ新しい。

「…だがその藍染の計画に、二つの異分子が入り込んだ」

「……」

一護は瞠目する。その”入り込んだ異分子”とやらに、青年は覚えがあった。

「…雛森さん……いや……」
ひなもり

「ああ、桃ちゃんじゃねえ。浦原うらはらが会ったと言っていた奴は、自らをこう名乗っていた」

——読書家

過去に戦った藍染や銀城も口にしていたその呼称。それが九年前に自分の内なる虚ホワイต์を封じるお守り……今はもう失われた、あの感情豊かな仮面フルプリングの少女を与えてくれた”彼女”の事だと、一護は知っていた。

藍染の魔の手から逃れる力を与えてくれた、文字通り一生の恩人だ。

「読書家の目的については尸魂界ソウルソサエティも詳しい事は何一つわかつちやいねえ。崩玉にされた無数の罪なき複製霊達クローンの怨嗟を晴らすだの、未来を

見通すとされるその力に溺れているのだの、色々想像はできるがな」

ソウルソサエティ
「…尸魂界はあの人を、敵だと思ってるのか…？」

「お前の恩人だろうが、奴が護廷隊や貴族共のメンツを大きく傷付けたのは事実だ。あの藍染や霊王宮がああも困いたがるほど価値がある未知の存在、奴が率いる破面共への警戒や恐怖も当然ある」

彼の表情から、一護はその言葉の全てが主体的な、父自身の本音でもあると悟る。

「…俺は…」

命の恩と、仲間達の思い。優劣を付けられない大切なものの板挟みに苦悩する一護。

青年は二年前、読書家と皆が呼ぶ少女と逢っていた。忘れもしない。宿敵藍染惣右介との決戦の、直前。

俺が生まれた理由を教えてください、巻き込んだ事を謝ってくれて、黒崎一護が自ら選んだ道を祝福してくれた。

——生きて、一護くん

あなたの望むように

世界中の人、世界の未来。そんなものを護れだなんて指示には従えねえ。

目の前で苦しんでる山ほどの人を護りたい。そんな、誰にも強制されない自分だけの意思を貫く。

そう自らの宿命を拒絶し、授かった力を自分の好きに振るうと宣言する一護を、彼女は満面の笑みで了承してくれた。

それだけで、一護は彼女を味方だと信じる事ができた。

「……」

お互いしか知らない、あの河原での思い出の中で交わした、七年ぶりの再会。その時の出来事について、一護は何一つ、誰にも打ち明ける気はなかった。

ソウルソサエティ
尸魂界が彼女の力を脅威に思っているのなら尚の事。

そんな息子の思いを、父である黒崎一心は臆げに察していた。

「…まあ少なくとも今の尸魂界ソウルソサエティが読書家と事を構える事はねえ。お前が知っておくべきなのは、奴はお前の運命がここまで拗れた原因の一つに過ぎねえって事だ」

そう、ここまでは多くの者達の既知となっている。あるいは読書家と親しんだ一護の方が他者より詳しいかもしれない。

「最初に言つたろう。藍染の計画に紛れ込んだ異分子は、二つあると」

「！」

「これからお前に教えるのは、俺と浦原……そして雨竜君うりゆうの親父石田竜弦いしだりゅうけんが知る、お前を取り巻く過去の話だ」

そして話は、ようやく闇の深層へ踏み込む。あるいはずっと前に、一護は無意識ながら気が付いていたのかもしれない。

零番離殿で王悦が卍解・天鎖斬月てんさざんげつの修復を拒否した理由。読書家が語ったものとは異なる、自分のもう一つの過去。

「お前は死神じゃねえ。…だが、ただの人間でもねえ」

黒崎一護とは何者なのか。何故自分が卍解を取り戻すのに、それを知らなくてはならないのか。

その疑問のヒントは、藍染惣右介の、二枚屋王悦の言葉に。

そして…

——魔に囚われし

我が息子よ

「お前の母さん、黒崎真咲くろさきまきは——…」

あの戦場にて、憐憫の眼で青年を見下ろす、仇敵ユーハバツハの言葉に散りばめられていた。

「——危なかったあ……」

ジュージューと肉の美味しそうな焼き音が喧噪に紛れる、英霊宮殿ヴァルアリヤの大食堂。

その目立たない壁際で、鯉界有数の美少女（○）が隠れるように小さな携帯画面を見つめていた。

…そうです、あたしです。

一護のオサレイベントでガバの危険を感じ冷や汗をかいていた出歯亀…もとい”読書家”の雛森桃ひなもりももです。

（月島さん戦でカリンちゃんの完現術フルプリンダを覚醒させてよかった。おかげで一護がああ腕輪で虚霊坤こに転移する前に気付いて引き留めてくれた）

「——ホントよ——今のあたし達って滅却師クインシーにやられて音信不通になつてる設定なんだから——あの娘を誘導したあたし達も褒めてよね！——」

桃玉と一緒に胸を撫で下ろすあたし。最近チャン一がとてもオサレしてたから彼のメンタルの折れやすさを忘れてた。

おいこら主人公！ 今日心構えができるようにヨン様とあたしがあなたの生い立ちの伏線を張ってあげたのに！”本好きお姉ちゃん”に頼っちゃやう甘えは仮面フルプリンダのあたしと一緒にサヨナラさせたはずダルルオ!?

あのままだと本当に彼がここ虚霊坤ロスヴァリエスまで来ちゃってたかとも思う

と恐ろしい。流石のあたしもこの世界滅亡危機で呑気に破面たちとBBQで出陣前の腹ごしらえをしてる姿をオサレに取り繕える自信はない。

「——でもこっちで腕輪の転移機能を止める事もできたけどね——今なら音信不通（ムーヴで誤魔化せるし——お姉さまと違ってあたし達はガバガバではないのよ！——」

…ま、まあ済んだ事は結構。カリンちゃんのファインプレーに拍手しましょ。

（流石のお兄ちゃん大好きっ娘……やっぱ本誌でももつと話の中心に居て欲しかったなあ）

「——ブラコンでそれなりに事情知ってる妹とかいう加湿器——兄妹愛は良いエモ——」

良い誤算と言うべきか、カリンちゃんの活躍で一護のOSR値を計画以上に嵩増しできた。正直彼女の出番は前の月島さん篇で終わりだと思っていたので、ここでの登場はとても助かったし、何より嬉しかった。

チャドとかヤミーとか、原作でいまいち目立たなかったキャラが予想以上の活躍をしてくれるのは彼らの隠れた魅力をあたしだけが知った気分になれてニヤニヤしてしまう。

いやー前世の鰯ファン諸君に申し訳ないなあ（ニチャチャ

「……やっ」

最後の高級カルビを奪い合う食堂の破面たちを尻目に、あたしは一足先に着替えに離席する。

手元の携帯画面に映るのは、一心パパの話聞き終え、覚悟を決めた超絶イケメン一護の姿。よくぞここまで育つたと感慨深い思いが湧き上がる。

”斬月”の正体、黒く塗り潰された初対面の名、剣八戦での不可解な現象の数々。

ママンの秘密、藍染惣右介が述べた「交配実験」の詳細、彼女が亡くなった真の理由。

作中に隠されていた幾つもの伏線が明かされ、一つの線に繋がり、内なる虚の力が昇華した【新たな斬月】を手にする黒崎一護。己の背負う運命を知り、妹の悲痛な想いを受け止め、大勢の大切な人達を護るべく立ち上がった彼を、最早誰も主人公○などと嗤わないだろう。「…まあ、でも」

「——本編はここから、ね——」

桃玉とあたしは舞台後方で腕組みしながら、世話の焼けるヒーロー君を見る。さつき彼があたしに救いを求めてあの腕輪を使おうとした事を忘れてはいない。この世界で真のオサレマスターとして君臨したヨン様を間近で見てきたあたしのOSR審美眼は非常に肥えているのだ。

「甘さは自分自身ではなく、戦う敵へかけるのが”黒崎一護”でしよ？」

「……ふふ、ようやくだわ」

侘助を瞬殺し、卍解なしとはいえ原作シロちゃん乱菊さんコンビを指二本であしらったバズビー。京楽隊長の片目を撃ち抜いたロボト。不気味に暗躍していたナナナとペペ様。マユリ様（+平子さん）から逃げ延びたメスガキバンビーズ。

そんな一筋縄ではいかない猛者たち八人に囲まれて尚、冷や汗一つ流さなかった原作一護。

「さあ、見せて……！ あたしの半世紀の集大成……」

——オサレ主人公の

輝ける雄姿を……！

ソウルソサエティ
尸魂界篇の三副隊長瞬殺以来の主人公無双。

獅フアンの誰もが期待し、そして叶わなかった理想は、果たしてこの世界で現実となるのか。

BLEACH最終章『千年血戦篇』の本番、
攻が始まる運命の瞬間まで、あと少し…
見えざる帝国^{ヴァンデライヒ}第二次侵

登場ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

クインシー
滅却師の侵攻から四日、再建の木槌の音が木霊する瀨霊廷。

倒壊した建物の跡地に救護詰所や鬼道塔などの軍事施設が次々と
建ちゆく様は、迫りくる決戦への緊張を駆り立てる。だが同時にそれ
は、屋敷を直せと騒ぐ貴族衆のような死神の誇りを忘れた暗愚が徹底
的に排除された、揺るぎない戦時秩序の証として護廷隊隊士達の心の
柱になっていた。

そんな彼らが忙しなく働く光景を、総隊長が不在の間の代理を任さ
れた京楽春水が、隊首室の高欄から静かに見つめていた。

深い思案の海に潜る彼の後ろには、固い声で報告書を読み上げる若
い女。

「——零番隊からは以上です。また本日未明、真央地下大監獄
『無間』第二洞牢にて霊圧嵐が終息。半刻後に監視班が突入するとの
事です」

簡潔な言葉で報告を終えた彼女、伊勢七緒を笑顔で労い、京楽は
ふーつと胸中に溜まった苦い息を吐き出した。

「……隊長、少し休憩なされてはいかがですか？ 先日の傷もまだ完
治したとは……」

「おや、嬉しいねえ。美人に心配して貰えるだなんて、潰れたボクが目
ん玉も報われるよ」

「茶化さないでくださいっ。隊長が疲労で倒れたら副官の私の責任に
なるんですから……」

無然とした顔でそっぽを向く女死神。しかし京楽の軽口に幾らか

調子を取り戻すも、彼女の目は依然として不安に揺れていた。

無理もない。前回の侵攻で大勢の同僚が再起困難な傷を負い、中には命を落とした者もいる。

その上育ての親同然の京楽までもが片目を失い、傷が癒える間もなく激務に苛まれている。そんな時に平静を保てるほど、彼の知る伊勢七緒という娘は薄情ではなかった。

「大丈夫、七緒ちゃん。ボクは何処にも行かないよ……卯ノ花隊長との約束だからね」

もう二度と会えない大先輩の微笑を思い浮かべながら、自ら彼女を死地へ送り込んだ京楽は虚ろな感傷に浸る。

総隊長代理に任じられた京楽春水は、此度の火急の事態においてその卓越した手腕を大いに振るった。全力で敵の迎撃準備を進める護廷隊の一糸乱れぬ姿は、貴族の良からぬ介入を尽く退けた彼の交渉術あつての事。中央四十六室が禁忌とする更木剣八への剣術指導も、ユーハバツハに戦争の主導権を握られている現状で山本総隊長ら重傷者の回復が間に合う保証はない、との京楽の主張の前に黙殺された。

ただ、貴族と護廷隊双方からの反発が最も大きいであろう”最後の手札”は、負傷者を治療する零番隊からの吉報のお陰で京楽の胸の内に留められた。

それは幸か不幸かで言えば間違いなく前者だ。巨悪を討つべく巨悪を解き放つ。その未来が避けられた事に安堵する京楽の声は明るかった。

「いやあ、それにしても山じいが無事でよかったよ。白哉君も何とか一命を取り留めたって話だし——雛森ちゃんも、きつと目を覚ましてくれる」

「ツ、はい……!」

数少ない、しかし大きな希望に勇気を貰い、七緒が力強く頷く。

何かと気にかけていた悲運の後輩少女が、二度と目覚める見込みのない瀕死の体で四番隊に搬送されたと聞いた時、京楽も七緒も己の耳を疑った。魂魄を裂かれ力を落としたとはいえ、あの空座町決戦で少

女が見せた一騎当千の戦いは記憶から色褪せない。戦略規模の実力者としては勿論、奪われた卍解の”奪還”を唯一成し遂げたその特異な知見に、京楽は何かしらの裏を警戒しつつも期待していた。

多くの者から慕われる影響力を鑑みて、話題の少女——雛森桃ひなもりももの安否は、同じく四番隊で再起不能と診断された山本総隊長や朽木六番隊長の復活と共に直ちに布告するべきだろう。

それに、我らの希望はもう一人。

「彼らを救った」護君いちじにはまた大きな借りができちゃったね……」

一方的な絶交も同然の仕打ちを受けて尚、護廷十三隊を”仲間”だと言ってくれた心優しい人間の青年。

山のように積み上がった彼への恩を如何にして返していこうか。本来護るべき人間である彼に頼りきりな自分達の不甲斐なさに恐縮するも、京楽の顔には喜色がある。

先の見えない戦争の只中であって、それは不思議と前向きな高揚感を覚える課題だった。

「さて、ボク達もノンビリしてないで仕事しなきゃね」

山じいにドヤされちゃうよ、と。

頭の上がない恩師の喝を未だ聞く事ができる喜びを噛み締めながら、京楽春水は総隊長代理としての任を果たそうと奥の執務机へ向かった。

——事態が動いたのは、その直後だった。

遙か西方から襲来した霊能集団、滅却師クインシー。

遡ること千年。光の帝国を名乗り尸魂界ソウルソサエティへ戦を仕掛けた彼らは、

しかし時の護廷十三隊を前に膝を突き敗走した。

では戦に負けた滅却師達クインシーはどうなったのか。その疑問に

真央靈術院は、二百年前の種族的”決別”を機に起きた『殲滅戦争』という答えを死神見習い達に説いている。

光の帝国戦後の八百年もの空白を歴史より排す事に首を捻る者は居たが、いずれもその空白が、決してや後の尸魂界の大いなる試練となる事など想像すらしていなかっただろう。

「それが、お前たち死神の”驕り”だと言っているのだ」

護廷十三隊を壊滅させた滅却師の第一次侵攻から四日後。瀨靈廷は突如として天変地異に見舞われた。

「…なんだ…!?!」 「影…?」

「何だこの黒い霧は…!!」

「隊舎が覆われて…」

「何が……」

「何が起きてるんだ!!?!」

「み、見ろ……」 「信じられん……」

「瀨靈廷が……」

「瀨靈廷が消えていく……!!」

周囲にありふれる無数の”影”。それらが意思を持つかのように動き出し、辺りの建物、道、草木、街並みの全てを呑み込んでいく。

護廷隊が今度こそ死守せんと完全無欠な布陣を敷く中、敵を迎え撃つ自分達の拠点そのものが瞬く間に消失したのだ。

「……侵攻完了だ」

仰天し阿鼻叫喚の無様を晒す死神共を、滅却師達は満足げに見下ろす。

「千年前の戦いに敗れ、行き場を失った我等は、お前達が最も警戒していなかった瀨靈廷の中へと逃れた。そして瀨靈廷内のあらゆる”影”の中に靈子の空間を創り、それを以て——『見えざる帝国』と呼称した」

瀨靈廷を喰らい尽くした影は更に空へと立ち上り、遮魂膜のドーム

を覆い尽くす。

「お前達が我々の存在に気付き得る機は幾度もあった。だが中央四十六室はその力と技術を有していた^{あざしろそうや}痣城双也を幽閉し、浦原喜助^{うらはらきすけ}を追放し……そして唯一我等の”影”に触れた^{あいぜんそうすけ}藍染惣右介は、既にお前達を見限っていた」

そしてその言葉と同時。完全なる闇に包まれた影の世界の中に、凍り付いた純白の西洋都市が浮かび上がる。

ヴァンデンライヒ
見えざる帝国。

死神の都の中心で栄華を極めた、^{クインシー}滅却師の千年京だ。

帝国の中心に聳える、古代神殿にも防空壕にも見える武骨な王宮、^{ジルバイン}銀架城。神王ユーハバツハはその屋上から眼下の光景を眺めていた。

「——千年前。^{やまもとしげくに}山本重国に弑された若き私は、死に際に見た”時の果て”の光景を、言葉としてお前達に遺した」

ユーハバツハは後ろに侍る二人の側近へ語る。その片割れであるユーグラム・ハツシユヴァルトの隣に、新たに王の後継者に指名された^{いしだうりゆう}滅却師——石田雨竜の姿があった。

「……『^{カイザーゲザンク}聖帝頌歌』。長き眠りにつかれた陛下がお目覚めになるまでの出来事を預言した歌として伝わっております」

亡き祖父から伝説を受け継いだ雨竜は諳んじる。しかし王は彼の歌に頷かない。

その歌には続きがあった。

DER VERSIEGELTE K·NIG DER QUIN
CY

封じられし我等の始祖王は

・BER NEUNHUNDERT JAHERE WIRD ER
SEINEN HERZSCHLAG WIEDERERLANG
EN

九百年を経て鼓動を取り戻し

・BER NEUNZIG JAHRE SOLLER
SEINEN INTELEKT WIEDERERLANGEN
N

九十年を経て理知を取り戻し

・BER NEUN JAHRE SOLLER
SEINE MACHT WIEDERERLANGEN
九十年を経て力を取り戻し

UND IN NEUN TAGEN WIRD ER
DIE WELT ZUR・CKGEWINNEN

九日間を以て世界を取り戻す

残される子孫達へ伝える直前。彼等の王が息絶えた為に失われた最後の一句が、この地でようやく紡がれた。

そして千年の時が経ち、王が鼓動を、理知を、力を取り戻した今。
滅却師クインシーの悲願は、王の軍勢の栄光と共に果たされる。

「往くぞ、雨竜うりゆう。ハッシェヴァルト」

——世界が終わる九日間だ

瀨靈廷が消えた。

伝令など必要ない。今まさに目の前で、足元で、全ての死神達が当事者となったその現象は、尸魂界ソウルソサエティ中に未曾有の大混乱を引き起こした。

そこへ進軍する精強な滅却師の主力部隊、星十字騎士団シュテレンリッター。

「——こんなにかわいいボクを男呼ばわりするなんて、そういう名誉棄損は良くないと思うなあ…!!」

「が…ア…」

「…弓親…！ ちく…しよう…ツ」

——星十字騎士団 ” Z ” ——

死者

GISELLE GEWELLE

消失前まで十一番隊隊舎があった地点。最強の戦闘部隊と名高い同隊の隊長格に匹敵する強者達が、華奢な滅却師クインシー一人の弓矢に為す術なく倒れていく。

『——お前の隊の隊長はどこに居る。次の回答拒絶と同時に、コレを含む半径30m以内に居る、お前との霊圧適合率が50%を超える個体を絶命させる』

「よくも希代まれよを…ッ！ てめえだけは絶対に許さねえ!!」

——星十字騎士団 ” K ” ——

殺戮機械

BG—9

二番隊隊舎付近の転移地で行われている虐殺の中心で、家族を愛する一人の副隊長の決死の覚悟が、無残に散っていく。

「——んもお、そんなに鼻息荒く迫られたら怖いですう??。男の

人っていつもそうですよねえ」

「ゴフツッ！　が、ア……ッ随分イイ拳、持ってんじや…ねえか…！」

「……六車…隊長…ッ」

霊圧が消えゆく副官を救いに急行した隊長が、敵の美女の細腕から放たれる拳に崩れ落ちる。

護廷十三隊の入念な備えを嘲笑うかのような敵の軍略。最初の侵攻すら超える、歯噛みするほど完璧な奇襲に翻弄される瀨霊廷の様子は、必死の応援要請として遙か上空、霊王宮へと届くのであった。

「——「護！　我等は先に行く！」」

「お前も急げ！　浦原さんからの連絡だと前回以上にヤベえ事になってるみてえだ…！」

零番隊の離殿で傷を癒し、王属の秘儀により霊格を大幅に高めた朽木ルキアと阿散井恋次あばらいれんじ。この地へ連行された他の者より傷が浅かった二人は、下界の同胞達に加勢すべく援軍の第一陣として直ちに霊王宮を発とうとしていた。

彼等を見送るのは、一人の青年の背中。

「……悪イ、ルキア。恋次」

一言急かしに彼のいる離殿を訪れたルキア達に、青年は二人に背を向けたまま些細な頼みを託した。

「生意気な言い方に聞こえつかも知れねえけど……下のみんなに伝えてくれ…」

「……「護…？」」

彼の顔は見えない。しかし状況に似合わぬ穏やかなその声に、何故か、ルキアと恋次は圧倒された。

「そっちの戦い。もし危なくなっても、俺が行くまで持たせてくれ」

そして続く言葉を聞き、二人は背筋が震えた。

彼らは粟立つ肌で感じたのだ。この聖域で大きな成長を遂げたの

は、自分達だけではないのだと。

俺が

必ず

何とかする

「あいつは俺一人で片付ける。お前は負傷した鳳橋おとりばし隊長を四番隊へ」

「……今のお前の敵では無いな。こちらは私に任せろ、恋次」

朽木ルキアが阿散井恋次と共に瀨霊廷へ降り立った時、戦況は更なる混乱を極めていた。

「んんんん？ 何だ、一対二で掛かってこんのか？ 悪党など所詮卑怯なものだから手段を問わずとも良いのだぞ？」

「ありがとよ。んじや卑怯にも、勝たせてもらうぜ」

—— シュテルンリッター

星十字騎士団 ” S ” ——

ザ・スーパースター

英雄

感じる霊圧の強弱から、最も危機的な状況にある味方の許へ急いだ二人は、負傷者の搬送と敵の撃破の二役に分かれる。前者を引き受けたルキアの最初の仕事は、倒れた隊長格達を四番隊へ担ぎ込む事だった。

だが他の戦場の援護へ向かおうとする最中、少女は警戒していた敵の襲撃に遭う。

「…ッ、人の”恐怖心”を増幅させる能力。貴様が兄様の”千本桜”を奪った輩——エス・ノト……！」

『僕モ知ツテルよ、朽木ルキア。君ガ朽木白哉ノ妹ダツテ事も……氷雪ヲ操ル君ノ斬魄刀デハ、僕ノ操ル”恐怖”ニ対抗デキナイ事モね！』

——シュテルンリッター星十字騎士団 ” F ” ——

ザ・ファイア恐怖

・ S N ・ D T

発する霊圧を体内に取り込み、気配を消す滅却師の高等霊術。ままと相手の先攻を許したルキアは、始解【袖白雪】の氷の盾で防御を試みるも虚しく、あらゆる物質を透過する”恐怖”の血弾を受けてしまう。

「——成程。触れた者の体組織に侵入し、脳へ”恐怖”の感情をねじ込むのか」

『……ドウ云ウ事だ？ 何故僕ノ”恐怖”ヲ受ケテ、動ケる……？』

だがルキアは霊王宮の超霊術を糧にし、自らの斬魄刀の真の力を覚醒させていた。重ねてその力は奇しくも此度の敵の戦法と極めて相性が良かった。

”袖白雪”は切先から凍気を発する刀ではなかった。此奴の本質は、所有者の四肢全身を、凍てつく肉体へと変える斬魄刀だったのだ。宛ら童話に語られる「雪女」。

極寒の凍気を身に宿し、体内の全ての分子運動を凍結させる。皮膚の表面で恐怖因子の体内侵入を食い止めたルキアが、捨て身の攻撃

で、敵へ”真の恐怖”を突き付ける。

「この力を使い熟すには、自らの体を構成する霊子の完璧な制御が求められる。だがその困難の果てに得られる力は、正直……私の身に余る」

『ナ、何ダ!? 僕ノ体が……!』

女死神に斬られたエス・ノトの肩が硬化した。

『18度。血液は凍結し、傷から流れ出る事はない』

『莫迦ナ! コンナ一瞬で……!』

『50度。私の足に触れる地面内部の水分が氷結する。北方の極地でも起きぬ、珍しいものを見せてやろう——』ひょうしん”氷震”だ」

霊圧による抵抗を試みる間もない。正しく須臾の出来事。

「そうだ。この状態の私に触れたものはその瞬間、等しく私の身体と同じ温度になる。文字通り、この世の全ての分子が動きを止める、死の体にな」

『クツ……オノレえええっ!!』

凍てつき砕ける足を必死に動かし、エス・ノトは彼女へ掴み掛かる。そして彼の手が刀の間合いに入った時、少女は勝利を確信した。

「……少し急がせて貰う。この温度での私の活動限界は、五秒にも満たない」

絶対零度 | マイナス 273.15度 |

ルキアの大技が炸裂するのと時を同じく。相方と別れ他の隊長格の救援に向かった恋次も新たな力を駆使し強敵を撃破していた。

「……くそつたれがあああっ!! スターの腕をへし折りやがって!! 絶対に許さんぞ三下がアアツ!!」

「……狒々王……大蛇王……往くぜ」

蛇牙鉄炮 | 卍解・双王蛇尾丸 |

虚化の力を操る三番隊の鳳橋楼十郎を下したマスク・ド・マスクユリン。六番隊の朽木白哉と、以前の恋次を倒したエス・ノト。これまでも足も出なかった強敵たちを、霊王宮の特異な霊子環境での修行を乗り切った二人が凌駕した。

そして恋次たちの加勢に続き、更なる追い風が護廷十三隊へ吹く。

『——もしもオーし！ 涅さんのお宅でしょうか？』

「ッ、浦原喜助……！」

『どオーもオ、お待たせしてすいません』

——”卍解を取り戻す方法”が

ただいま完成しました

稀代の天才が導き出した解決策、その名も【侵影薬】。滅却師の虚に対する種族的脆弱性を突く物質の恩恵で、護廷十三隊の隊長格の皆がようやく各々の全霊を取り戻す。

戦局の天秤は、確実に死神の側へ傾いていた。

……しかし、敵は彼らが卍解を取り戻す可能性すら計画に練り込んでいた。

「——貴方方から卍解を奪うべく、陛下より下賜された星章。その真の目的は、”特記戦力”浦原喜助を卍解奪還の研究に束縛し、彼の行動の自由を奪う事でした」

「……！」

真実が告げられたのは、一番隊隊舎の転移地点。

現れた敵の指揮官ユージラム・ハツシユヴァルトが語る内容に、彼と対峙する総隊長代理補佐の伊勢七緒が瞠目する。

「バンビエッタを倒した後、雛森桃は戦果拡大より味方との情報共有を優先するべきでした。そうすれば我々が預かっている貴方方の卍解が、我々の力の”枷”となっている事実を知る事ができたでしょう」

変わらない平坦な声で皮肉を口にするハツシユヴァルト。

朽木ルキアの凍てつく剣に斬られ、全ての生命活動が停止した筈の滅却師^{クインシー}。樹氷に包まれた氷の彫像が罅割れ、やせ細った長い黒髪の怪物が這い出る。

光輪を浮かべ一対の翼を背負う彼らの姿は、まるで聖書に登場する天の御使い。それは卍解と共に取り戻した死神達の希望を粉碎する、絶望の軍勢だった。

『機体修復率89%。動力強化率159%。第二兵装転換率92%。
全項目達成。直ちに聖務^{アウフガールベ}を遂行する』

全身から無数の蔓状の武器を伸長させたBG9が、碎蜂達を蹂躪する。台詞の通り、殺到するそれらの速度も強靱度も以前とは桁違いに跳ね上がっていた。

「しまっ——がはア…ッ」

「ゴッ…!! く、くそ…! だい…ぢよう…」

傷の浅い大前田が上司を庇う間すら与えない。肉を抉られ、臓腑を貫かれ、二人の隊長格は何もできぬまま串刺しにされてしまう。

『対象の魄脈の低下を確認。聖務^{アウフガールベ}の達成率76%。霊圧パターン
【β-02】の注入を開始する』

「ぐ…アあああああ!!?」

敵への種族的特効力を有した物質の開発は浦原喜助だけの発想ではない。蔓状兵装を介し、碎蜂の体内に高い毒性を持つ特殊な霊圧が流れ込む。

『対象の魄脈低下率85%。聖務^{アウフガールベ}の達成率98%。完全完了まで現在の戦闘方法を継続する』

『完全聖体の発動と同時に元の間人臭さを失い、只の殺戮兵器と化

したBG9。しかし意識が遠のく碎蜂の耳に、その機械的な音声は、しかし以前の彼のどの発言よりも感情的に聞こえた。まるで、一刻も早くこちらを倒さなければならぬという脅迫観念に支配された、哀れな奴隷の怯声のように…

—*

碎蜂と大前田が危機的状況に陥っている最中。強敵マスクュリンを新たな卍解で倒した阿散井恋次も次なる脅威に直面していた。

「迂闊だったな、レッドモンキー！ オメーがああ暑い筋肉バカと戦ってる様子はじつくり”観察”させて貰ったぜ！」

「ぐっ!?.. な、何だてめえは…！ 俺に何をしやがった!?!」

—シュテルンリッター星十字騎士団 ”U” —
—ジ・アンダーベリ無防備

N A N A N A N A J A H K O O P

突如飛来した光の弾丸を受けた恋次が、力なく地面に突っ伏す。力めど彼の手足はびくともしない。

『モーフィン・パターン』。霊圧配置を正確に計測し、最も無防備な穴を突いて霊圧を完全に麻痺させる俺の技だ」

「くそっ…！ いきなり出て来やがって…漁夫の利狙いのクソ野郎が！」

「マスクュリンのバカはいい囷になってくれたぜ。『卑怯にも勝たせて貰う』だったか？ なら今度は俺がオメーの決め台詞を返してやるよ、ハハハ！」

僅かな気の緩みが命取りとなり、完全に無防備にされてしまった阿散井恋次。あれ程の活躍を見せた豪傑があっけなく。どうする事もできず青褪める死神へ、ナナナと名乗ったそのゴータル男が絶死のハイリツヒ・プファイル神聖滅矢を突き付ける。

—*

「…花風紊れて花神啼き、天風紊れて天魔啞う！」

始解

花天狂骨

同時刻。一番隊隊首室の跡地にて、遂に総隊長代理と星十字騎士団最高位、京楽春水とユーグラム・ハッシュヴァルトが激突する。

「ッ、させません！」

縛道結界

白断結壁

阻止せんと動いたのは副官の伊勢七緒。自ら創り上げた強固な防御力と有力な衝撃反応トラップを誇る対滅却師鬼道だったが、目の前の青年を止めるには荷が重すぎた。

砕け散った自慢の術の残骸を見て女死神は愕然とする。

「そ、そんな…」

「嘆く必要はない。霊子を支配し戦う我々滅却師は、あらゆる霊能力に対し種族的優位性を持つ。私を数瞬とはいえ拘束してみせた君の術は賞賛に値するものだ」

「ちよつとちよつと、戦ってる最中に人の部下を口説くのはやめてお

くれ——よッ！」

破道の八十

金剛爆

軽口を叩きながら京楽が繰り出したのは猛火の高位鬼道。しかし彼の一手はハッシュヴァルトの剣の一振りで消滅した。

「そう簡単に霊子を霧散させられるような位階の破道じゃないんだけどねえ。やつぱり雛森ちゃんを警戒して、彼女の得意鬼道を対策してきたのかな？」

「その質問の背景を察するに、やはり雛森桃は霊王宮で一命を取り留めたようですね」

「さてね。でもここまで用意周到な君達なら全部想定しているんだろう？」

剣撃を放つ傍ら探りを入れるが、京楽はハッシュヴァルトの隙の無さに内心舌を巻いていた。

雛森桃の実力を二年前の空座町決戦で知った京楽は、当然彼女を倒したこの滅却師クインシーの力を何よりも警戒していた。だが雛森とハツシユヴアルトの戦いが創り出す霊圧地獄に観測機器が耐えられず、現段階で護廷十三隊が把握しているのは二人の勝敗が”一瞬で逆転した”という事のみ。その敵最高幹部との貴重な戦闘機会から何かを掴もうと相当な強度で斬り掛かっているが、何度繰り返せど相手の力の底が見えない。

次々と倒れていく遠くの仲間達の霊圧を感じながら、ハツシユヴアルトとの戦いで成果を得られずにいる京楽は、自分が袋小路に追い込まれていくのを自覚していた。

—*—

そして舞台は今一度、朽木ルキアの戦場へと舞い戻る。

「戦イナンカニ”恐怖”ガ在ルモノか…！ 陛下ニ叱ラレル事ニ比べたら、此ノ程度…：：：恐怖モ苦痛モ感ジナイ!!」

完聖体【神タタルフオラスの怯え】。ルキアの”絶対零度”の刃に一時は倒れたエス・ノトが、激情と共に復活し、遂に神王より授かりし聖文字シユリフトの極意を繰り出した。

「くっ、袖そでのしら白——」

驚愕も一瞬。慌てて相手を迎え撃とうとするルキアだったが、振るった斬魄刀にはまるで力が籠っていないかった。

「な、なんだ…？」

「君ノ剣ハ僕ニ届カナイ。下ヲ見給エ…：：：君ノ足ガ竦すくンデキルぞ？」

「…私が…怯えているだと…!? 莫迦な、全身の細胞を凍結させた今の私が貴様の”恐怖”を受ける訳が…ッ！」

「嘘吐き、凍結ナドシテキナイよ。未まダ動イテルジヤナイか

——君ノ”神経”は——

ルキアは絶句する。硬直し、信じられない思いで瞠目する。その全てが自ら敵の罠に飛び込むに等しい行為だと気付かずに。

「神タタルフオラスの怯えは、”恐怖”其そノモノだ！ 形ヲ持ツタ”恐怖”ヲ直接眼

「デ見タ君が、其ノママデ居ラレル訳ガナイダロウ？」

「……！」

「サあ、往クよ！ 君ノ視神経ヲ通ツて、僕ノ”恐怖”ガ君ノ体ヲ侵食スる！」

彼の宣言に呼応し、ルキアの周囲をエス・ノトの皮膚でできたモザイク壁が取り囲む。

続いてそのタイル一つ一つに亀裂が入り、奥から無数の眼が現れた。

視線で捉えた者に”恐怖”を植え付ける、狂気の瞳だ。

「!? しまっ——」

咄嗟に瞼を閉じ視神経を遮断したルキアを、やせ細った男は嘲笑う。

「無駄だ！ タトエ眼ヲ閉ジテも、君ノ神経ハ逃ゲラレナイ！」

「くツ……あ、あああ、あ……!!」

「恐怖ガ最モ育ツ世界は、イツダツテ夜ノ”暗闇”だ！ 一度目ニシタ恐怖は、目ヲ閉ジレバ更ニ強く、脳ノ奥底ニ響キ渡る!!」

霊術院時代に大切な幼馴染を失った別れの記憶。無二の恩師を殺してしまった悲劇の記憶。ルキアの脳裏を無数の光景が埋め尽くしていく。

亡骸を埋めた土の匂い。頬を垂れる雨の冷たさ。死に際に背中を抱かれた、血塗れの手の感触。忘れもしない、あの人の死期の言葉。それらが”恐怖”に穢され、悪意の塊となってルキアの心を侵す。

そして。心の拠り所としていた、最後の一人との思い出さえも。

——…やめろ……

次から次へと歪んでいく、あの青年との思い出。己のせいで運命を捻じ曲げられ、数えきれない傷をその身に刻みながら救いの手を伸ばしてくる彼の姿が、おぞましい怪物へと変じていく。

——嫌だ……ッ

強い意思と温もりを宿す彼の目はどす黒い憎悪に染まり、ぶつきらぼうな優しさを感じさせる彼の声は氷の如く鋭利に冷え、その全てが少女の背負う罪を咎めてくる。

ゾクリ…と。

それはまるで彼等の立つ世界自体が身じろぎしたかのような顫動だった。突如起こった異変に、ヴァンデンライヒ見えざる帝国に渦巻く戦場の蛮声が止まる。その不気味な沈黙は死神、クインシー滅却師問わず、全ての霊なるもの間を駆け抜けた。

碎蜂と大前田を串刺しにしていたBG9。動けない恋次に霊矢を狙い定めるナナナ。一角と弓親に自らの亡者化の血液を近付けるジゼル。瀕死の六車と檜佐木へ止めの拳を擡げるミニーニャ。ルキアの精神を破壊しようとする能力を強めるエス・ノト。

獲物を探し彷徨う他の星十字騎士団も、シュテルンリッター必死に抗う護廷十三隊も。誰もかもが手を、足を止め、天を仰いだ。

心臓が押し潰されそうになる程の、途轍もない霊圧。

高台より百獣を睥睨する獅子の如き、圧倒的な存在感。

その気配の先。”影”の大天蓋に空いた大穴から差し込む陽光に照らされ、一つの人影が宙に佇んでいた。

それを目にした者は、息を呑む。

風にはためく外套。口元を覆う首巻。逆光の中で炎のように輝く橙色の髪。

ある者はその人影が帯びる背と腰の二振りの刀に眉を寄せる。ある者は過去の記憶から天地程に逸脱したその霊圧の規模に混乱する。

だがそんな差異を前にし、男の正体を誰何する者は一人も居ない。居る筈がない。

当代死神代行。あらゆる霊能の才を宿す奇跡の人間。神王ユーハ
バツハが最も恐れる”特記戦力筆頭”――

『…黒崎……護…!!』

知る者、知らぬ者。その威容を見た者は一様に、彼を称える呼び名
の意味を真に理解した。

…嗚呼、見よ。

突き破られた闇空の中心に、男が居る。

敗軍の死神共に希望の光を照らす…

――「英雄」が…

キャンデイス・キャットニップは己の足に自信があつた。

無論、形の良いヒップからすらりと伸びる自慢の脚線美の事だけではない。

シューテルンリッター
星十字騎士団 ” T ”
ザ・サンダーボルト
雷 霆

CANDICE CATNIPP

神王ユーハバツハから与えられたその力は、彼女に稲妻の力と速度を与えた。同胞達の中で彼女が最も早く”例の標的”の許へ辿り着けたのは得意な分野故の必然だろう。

「…ハッ、悪いなみんな！ コイツはあたしがいただくよっ！」

クインシーフォルシュテンディツヒ
滅却師・完聖体
ケラウノス
神の雷

背中に輝く緑色の雷光を羽搏かせ、女滅却師は脇目も振らずに敵へ飛び掛かる。

「特記戦力だか何だか知んねーけど、そんなに霊圧ばら撒いて空中で突っ立ちやがって…！ 舐めてんじゃねえぞ!!」

ハイリツヒ・ブファイル
神聖滅矢
ガルヴァノブラスト

放つ霊子の矢は5G Jの大電力。小規模な雷に匹敵する攻撃を小手先に繰り出す様は、自らが精鋭軍団星十字騎士団シューテルンリッターの一席たる所以。キャンデイスは敵に直撃した雷矢の爆発を凝視し戦果を確認しようとする。

しかし。

「な…!?」

炸裂する雷光が散った後、中から現れた青年の姿は何一つ変わっていなかった。

防いだのか？ どうやって？ 斬魄刀も抜かず？ まさか体で受けきったのか？ 現実を認められず啞然とする女滅却師。

「…ッ、あたしの小ワザを防いだくらいでイイ気になってんじゃねーぞ…！」

本能が上げるけたたましい警鐘を掻き消そうと、キャンデイスは力の限りで霊圧をかき集める。

「そういう澄まし顔は……いつを喰らって息してたらにしろよ!!」

ケラウノス
神の雷
エレクトロキューション
電滅刑

それは彼女の生存本能が引き摺り出した、かつてない死力の一撃だった。天より墮ちる巨大な雷が青年を呑み込み、辺りは強烈な雷光に包まれる。

「え……う？」

キャンデイスは最後まで夢にも思わなかった。
常に自分の勝利を示してくれたその光が——彼女の目にする最後の光景になるなどと……

＊

ミニーニヤ・マカロンは己の膂力に自信があった。

もつとも彼女の豊満で女性的な容姿を見たものは皆冗談だと笑う。

しかしそうして侮った者は必ずミニーニヤの前で倒れ伏した。先程の顔傷の副隊長のように。虚の仮面を被った隊長のように。

シユテルンリッター
星十字騎士団 ”P”
ザ・パワー
力

MENINAS McALLON

彼女がこれまでに下した隊長格達、六車拳西も檜佐木修兵も、この

数百年で最も過酷な時代を生き抜いてきた歴代有数の死神である。

その戦果は、選ばれし星十字騎士団の中でも上位の戦闘力を持つミニーニヤに相応しいものだった。

しかし今。常にあざとく緩い空気を絶やささない彼女が、目の前で起きた出来事に戦慄していた。

「…どんなにキャンディちゃんがダメな娘だったとしても、素手で瞬

殺はないと思うの…ッ」

キャンデイス同様一番槍の抜け駆けを企んでいたミニーニャは、彼女の敗北を見て即座に攻撃を断念。こちらへ急行する他の仲間達と合流するため足を止め、チラリと後ろを確認する。

直後、彼女の視界に影が落ちた。

「ッ、嘘…!?!」

正体は一瞬で距離を詰めてきたオレンジ髪青年。

咄嗟、ミニーニャは拳を振るう。反射的な動作でありながら寸分違わず急所の頭部に命中させる技量は確かなもの。それが鋼すら粉碎する一撃である事が彼女を秀でた強者たらしめていた。

「ぐっ!?! な、何…これ…?」

だが青年を殴った腕を伝った感触は、激痛。感じたことのない硬度にミニーニャが驚愕する。

「——あ」

…その動揺が隙となつたか、はたまた最初から彼我の実力差が決定的だったのか。

気付けばミニーニャの意識は、直前に倒れたキャンデイスを追つて、暗闇の奥底へと叩き落されていた。

——*

あつという間に同胞がやられた。それも二人、ほぼ同時に。

その光景は、特大の大将首を求め集つた星十字騎士団達シュテルンリッター全員の足を止めさせる程に重かつた。

「…何あいつ。ミニーちゃんを一発KOとかどんな馬鹿力してんの…?」

「突出しやがって、あのほか共…! 親衛隊シュッツシュタッフレベルの化物に単騎で突っ込む奴がいるかよ…ッ」

「これが特記戦力筆頭、”黒崎一護”…!」

六人。佇む青年を囲んだ者達の総勢だ。これ程の戦の最中にあつ

て衣類に埃一つ汚れのない風容は、彼等の卓越した実力の表れ。だが攻撃に二の足を踏むその姿勢には、慎重や警戒より、もつと根源的な感情の色が濃く見える。

そんな一団に最も遅れて加わった一人の老紳士が、口を開いた。

「…お分かり頂けたらう、御歴々。この者は手柄を取り合う片手間の戦いで勝てる相手ではないのだ」

——シュテルンリッター星十字騎士団”N”——
直立点

ROBERT ACCUTRONE

老紳士、ロバートはシュテルンリッター星十字騎士団古参の一人だった。無論そんな事が精銳を自負するこの高慢な連中に対して上位の発言権を齎す訳ではない。だが彼が上げた「陛下」の一言は、敵の圧倒的な霊圧に吞まれかけている同胞達が強者のプライドを放棄する名分には足り得た。「…ハッ、どうやらそうらしいな」

方針が固まりシュテルンリッター星十字騎士団の六人が霊圧を一気に高めていく。

「功を焦り各個撃破など愚の骨頂！ 共々揃って陛下のお叱りを受けたくなければ——」

「出し惜しみしねえで確実に仕留めるぞツ!!」

ゲアゲラノット
神の餐

サルファイム
神の炎

ハグフォトス神の屍
——クインシーフォルシュテンディツヒ滅却師・完聖体——
グリマニエル神の歩み

ゲ神の情愛

ア神の弱み

凄まじい霊圧の奔流が天を突く。その竜巻は辺りの大気を燃やし、頭上の遮魂膜を深く抉る。光の中心に渦巻く桁外れの力は、これまで瀋霊廷で観測された滅却師クインシーの霊圧の最大値を叩き出していた。

そして、そんな異次元の力は当の星十字騎士団達シュテールンリッターをも驚かせた。

「な、何これ…？ こんなにすごかったつけ、ボクの完聖体フォルシュテンディツヒ…」

「んなワケあるかよ！ ただ解放しただけでこんなに霊圧上がるなんてどー考えても異常だろうが…！」

「おいおい！ こいつアまさか…！」

喜悦と困惑。自身に起きた現象に騒ぐ新参組に対し、古株の者達には心当たりがあった。

「ふ、はははは！ 素晴らしい！ これは、これこそが陛下の仰つていた、あの…！」

「…ああ——” 共鳴” だ」

正解を唱えたのはモヒカンの男。一同で別格の気配を漂わせる彼は、高揚する連中に紛れ一人だけ冷めた目をしていた。

それと同じ声色で、男は戸惑う同胞達へ種を明かす。

「完聖体は元々陛下の力だ。そいつが一か所に幾つも集まれば自然と共鳴し合い、波動みてえに力が増すんだとよ」

「!!」

「成程、つまり——」

そして、得心した星十字騎士団達シュテールンリッターの口が獯猛な弧を描き……

『——殺るのに最高な

瞬間って事だな!!!』

その一声が攻撃開始の号令となった。

滅却師・完聖体クインシーフォルシュテンディツヒ

ハイリツヒ・プファイエル
神聖滅矢

六つの特大の霊矢が黒崎一護へ殺到する。彼は避ける事無くそれらをその身に許し、霊圧の大爆発の中に閉じ込められた。

ズン、と殴るような爆風が滅却師達クインシーの体を通り抜ける。

「あつは♡ すごい威力！ ボクのゾンビにするだけの死肉残って

るかなあ？」

「ゲツ、ゲツ、ゲツ…できもしない事は止めてヨネっ。黒崎一護を捕らえられるのはミーの”愛”しかないんだカラッ」

経験した事のない全能感に恐怖や不安を忘れる彼等。しかしそんな周りに危機感を覚える者も居た。

「……追撃するぞ、奴が態勢を立て直す前に仕留める」

「ちよっ、嘘でしょ？ あんなトコ突っ込んだら大けがするって！

それにあいつもう死んでるよ！」

「そう簡単に行くかよ、ばか！ 先行くぜ！」

——シュテルンリッター 星十字騎士団 ”G” ——
ザ・グランド 食いしん坊

L I L L T O T T O L A M P E R D

自傷覚悟で爆発の中に突入するその小柄な少女は、仲の良いミニーニヤを拳一発で倒した青年を前にし微塵も油断していなかった。荒れ狂う炎に肌が焼かれるのも構わず、彼女は右手に造った霊子剣を敵の気配へ目掛け振り下ろす。

剣から響いた感触は、少女が危惧した通りのものだった。

「……ッ、ほらな」

『なっ!?!』

爆煙が晴れ、リルトットの火傷だらけな全身が露わになる。そこで一同は、彼女が振り下ろした武器がどうなっているのかを見てしまった。

少女の霊子剣。共鳴する完フォルシュテンドイッヒ 聖 体の力を宿した恐るべき一振りが、まるで紙のように青年の片手で握り潰されている様を。

「——ぼーっとすんな！ 死にてーのか!?!」

『!!』

「バズビーー！ ロバート！ ナジャ！ お前らも畳みかけろ！ 舐めてると全滅するぞー！」

啞然とする仲間達に少女の怒号が飛んだ。

ここは戦場。はたと我に返った猛者達が瞬時に大技の準備に入る。

「……チッ」

「くそっ、そいつを死ぬ気で抑えてろよりルトット！俺が観察を終えるまでなア！」

「貴女の献身に感謝を……いざー！」

— 神アヒレの弱み —

— モーフィン・パターン

— 神サルの炎

バーナーフィンガー・4

— 神グリマニエルの歩み —

— モーゼイ・ステップ

超火力の破壊熱線、搦め手の行動阻害術、死角を突く移動法。合わせる三つの手札が不可避な一撃と化し、一直線に標的へ襲い掛かる。

その時、黒崎一護が初めて腰の得物へ手を伸ばした。

「させねーよッ！」

自分の霊子剣を即座に捨て、ルトットが彼の腕を両手で掴む。

「バンビみてーにイケメンを喰い殺す趣味はねーが、生憎、そういう

”能力でな……！ 注意くらいは引かせて貰うぜ！」

— 神ゲアゲラノットの餐

— 悪ダブト食ゲブ饗マ鋸

その大技は完フォルシユテンデイツヒ 聖 体の翼を使ったギロチン攻撃。ノコギリ鋏のよ

うな左右の光体がグンと回転し、青年の体を凶悪な力で挟み込んだ。

帯びる霊圧は蜃気楼の如く空間が歪む程。刃が触れる彼の外套が

塵のように散っていく。

だがルトットの渾身の一撃が上げた成果は、それだけだった。

「ぐっ!? なッ——」

刹那。少女は黒崎一護の自由な左手に襟を掴まれ、あり得ない膂力で戦場から投げ飛ばされた。

豪速で過ぎていく景色の果てに、ルトットは青年の目元が僅かに緩む瞬間を見る。そしてその仕草の意味を悟った彼女は、屈辱で目の前が真っ赤になった。

「…………ふざけんな…………ッ」

迫る星十字騎士団三人の連携技を喰らい、爆炎に包まれる黒崎一護。

その爆炎を切り裂きながら、バズビーら五人へ彼の反撃の一撃が放たれ――

「なっ!?!」

「あぎ…ッ!?!」

「ぐ…アアアアアッ!!」

「くっ…ば、莫迦な…!!」

「ただの剣圧で…こんな…!!」

その剣圧が背後の街並みを輪切りにし、受けきれず喰らった仲間達が地面へ墜落していく。

「――ッ!?!」

そんな味方の無様な姿を横目に、少女は空の果てで絶叫し続けた。

「ふざけんなアアアアアアアッ!!」

星十字騎士団内でも有数の強者であるリルトット・ランパートは、シュテルンリッター「巻き込まれたら危ないぞ」と、あのスカした野郎から子供へ向けるような慈悲を受けて、敗北したのだ。

――*

馬鹿げた衝撃が体中の筋肉を軋ませる。視界は激しく揺れ、鼓膜は潰れ、咄嗟の防御に構えた両腕は激痛に悲鳴を上げていた。

なんだ、今の一撃は。

痙攣する体を引き摺り、バズビーは辺りへ視線を彷徨わせる。

「……な…」

そこでは先程敵が放った反撃の一振り、自分を除く四人全てが完全に戦意を失っている、冗談のような光景が広がっていた。

瓦礫の中でピクリとも動かないナナナとペペ。気絶しているキャンデイスとミニーニャの体に縋りながら震えるジゼル。血だまりを

作りながら言葉にならない罵詈雑言をぼやくロバート。遠くへ放り投げられたリルトツトの霊圧も感じない。

たったの数分。攻撃を仕掛けてからたったそれだけの間に、忌々しくも力だけは認めていた同僚の強者達が。

あの星十字騎士団が、何もできずに蹂躪されたのだ。
シユテルンリツター

立ち込める煙の中で平然と宙に立つ、一人の死神——黒崎一護によつて。

「……ッ！」

不意に死神がこちらへ顔を向ける。その双眸は逆光の影に隠れていたが、バズビーは確実に奴と視線が交差したのを感じた。

だが追撃を警戒し身構えている内に、気付けば青年の視線は彼から離れていた。

「……………はっ！」

思わず呆けた声が零れる。あまりに自然な動作であったため、バズビーは数瞬が過ぎるまで気付けなかった。

死神の顔は正面を向いていた。見据える先も、ここではないどこか遠く。

少しずつ、奴の四肢に力が籠っていく。感じる霊圧は物理的な暴力と変わらない規模までに高まり、霊子の嵐となって周囲を粉碎していく。

その時、黒崎一護が大地を蹴った。

「なっ!? どこ行きやがる……！」

衝撃波に吹き飛ばされそうになる体を辛うじて留め、バズビーは一瞬で遠のく青年の背中を目で追った。

そして、彼は気付く。奴の不可解な行動の、許し難い程に腹立たしい意図に。

——見えざる帝国中を震撼させる凄まじい地鳴りが起きた。

爆ぜた霊圧は遮魂膜を大きく撓ませ、爆風が都中を吹き荒れる。薙ぎ倒された建物は数える事すら億劫。

その破壊の中心地に、二人の若い青年が剣を合わせていた。

「……よオ」

黒崎一護は最初から、一人の男の事しか見ていなかった。

こちらの實力を測るように、バズ・ビーの一団から離れた遠地に居た、七人目の滅却師^{クインシー}。特記戦力筆頭である彼の登場を察知すると同時に自らの先約を振り切り、新たな戦場を用意し待ち構えていた、長い金髪の青年。

虚^{ウエコムド}圈^{アランカル}で出会った仲間の女破面^{アランカル}を、浅からぬ縁がある悲運の女死神を殺しかけ……大切な卍解をへし折った、因縁の仇。

「…どうした？ 今度は刃こぼれ一つさせらん無^ねえじゃねえか」

ユーグラム

ハッシユヴァルト!!!

前回の戦いで容易く下した人間と互角の鏖迫り合いを強いられた^{シユテルンリツター・グラントマスター}星十字騎士団最高位は、此度の再戦にて、その澄ました目を鋭利に細めていた。

動転ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

——黒崎一護を見定めろ

第二次侵攻作戦開始の発令前。それがユーグラム・ハツシユヴァルトが神王より賜った君命だった。

無能な臣であれば課された消極的な目標に己の信の低さを嘆くか憤っていただろう。しかし青年が覚えたのは、この「特記戦力」へ注がれる主ユーハバツハの異常な執着に対する、疑問だった。

黒崎一護と剣を交わす度、その不遜な思いは強まっていく。

「……成程、どうやらお前が霊王宮で得たのは高慢さだけではないらしい。その二つの剣が自信の源か？」

「そう急かすなよ。今見せてやる」

一護の宣言に呼び起こされ、斬魄刀が青白い光を帯びる。大技の予兆を見切ったハツシユヴァルトは瞬時に後退。

だがその時、彼の脳に危機信号が走る。

「構えた方がいいぜ」

「…!!」

咄嗟に即応できたのは磨き上げられた戦闘本能の賜物。巨大な霊圧がハツシユヴァルトの構えた剣に激突し、轟音を上げて爆ぜる。

双方が一撃に込める霊圧は容易く天変地異を巻き起こす。荘厳な街並みが見る影もなくなった見えざる帝国の一角で、滅却師の青年の輝く金髪が一房、舞い落ちた。

「……それがお前の新たな月牙天衝か」
げつがてんしやう

ハツシユヴァルトの固い、独り言のような問いを受け、一護が残心を解く。

武器の数とは手数の数。そこに加わる威力が桁違いに跳ね上がった切り札、月牙天衝。

元の一本の【天鎖斬月】てんさざんげつが二つに分かれたのではない。正しくもう一つの、それも霊圧、強度、全てにおいて別次元の領域へ鍛え直された、漆黒の見事な双剣が黒崎一護の手に握られていた。

「……だが、それだけだ」

ハツシユヴァルトは敵の新たな力を認めつつ、同時に落胆していた。

「……何だど？」

「黒崎一護。どうやらお前は、陛下が望まれた正しき”未来”へ至る道を、誤ったと見える」

両者の霊圧で罅割れる大地を蹴り、一気に接敵するハツシユヴァルト。一護の反撃の剣が懐へ迫るが青年は流れるようにそれを避け、相手の肩へ鋭い突きを放つ。

貫く寸前、二人の刃が衝突した。

「霊能の成長には、必ずその傾向と指向性がある」

「……何の話だ」

瓦礫の津波の中、彼等は平然と言葉を交わす。

「斬魄刀の能力は元来の”系統”の枠組みを凌駕できない。そしてそれは虚も、我等滅却師も同じだ。故に操る力の傾向からその者の成長の終着点は自ずと予測できる」

「……」

「鬼道系。近接系。複合系。更には炎熱系や氷雪系、幻惑系といった、起こせる現象やエネルギーの属性、またはその力への対策法等によってそれらは区別される。お前の天鎖斬月てんさざんげつを例に挙げるのなら、近接戦闘に重点を置いた複合系となるだろう」

あるいは彼の内なる虚ホロウの、もしくは新たに目覚めた滅却師クインシーの戦闘技術。この世全ての霊能の才を有すると謂われる黒崎一護だが、それぞれ単独の能力の系統は決して対処に難いものではない。

しかしハツシユヴァルトの顔に、容易な敵を前にした安堵は皆無。何故なら。

「陛下がお前に望まれたのは、その系統の枠組みを超える不可能を、可能とする事だった」

残念だ。

その一言を場に残し、ハツシユヴァルトは纏う霊圧を爆発させる。

「今のお前の力は、陛下が予知された真の脅威には遠く及ばない」

「……」

続けて、吹き飛ばした無防備な一護へそのまま肉迫。

「我々の最終侵攻が間近に迫った現段階において、一つとしてその片鱗を見せる事ができないのなら——」

そしてハツシユヴァルトは、体勢を崩した一護の眼前に自らの剣を突き付けた。

「お前は最早、陛下が目を掛けるに値しない……只の有象無象だ」

剣の切先が一護の蟀谷に触れる。その鈍色の刀身に映るのは鮮やかなオレンジ色。前髪に隠れる彼の表情を窺う事は叶わない。

だが。

「——そんなに嬉しいか？ 俺の月牙げつがの一発を防げた事が」

数秒か、数分か。定かではない間の沈黙を破った黒崎一護の台詞は、屈辱に項垂れる弱者のそれでは断じてなかった。

「……」嬉しい”だと?」

「随分ベラベラ喋るからよ。無駄な会話を嫌うヤツだと思ってたんだけど、違ったか?」

ハツシユヴァルトの眉間に皺が寄る。

「だとしたら悪いな。生憎今の攻撃は、あんたが喜ぶような”特別な技”じゃねえんだ」

「……何?」

突き付けられた剣を意に介さず、黒崎一護は自身の黒刀へ視線を落とす。

「斬月達が教えてくれた。月牙天衝は斬魄刀の力を強く引き出すような、大袈裟な技じゃなかった。俺は今までこの技の使い方を、根本的に間違えてたんだ」

意味が分からず訝しむハツシユヴァルトへ、一護が問い返す。

「俺の進化の未来がどうか言つてんなら、あんたも知つてんだろ？」

あんたが前回へし折つたあの斬月が本当は何だったのかをよ」

滅却師の青年はその言葉に息を呑んだ。

黒崎一護の先代の斬魄刀。そこに隠された秘密にハツシユヴァルトが初めて触れたのは、前回の尸魂界第一次侵攻。目の前の死神と実際に剣を交わした時であつた。

神王ユーハバツハは言つた。

魔に囚われし、我が息子——と。

二枚屋王悦は言つた。

君の中に、斬魄刀のフリをした男が居る——と。

「あんたが折つたあの”斬月”は、本物の死神の斬魄刀じゃなかった。俺が自分の強すぎる霊力で自滅しねえように、”斬月のおっさん”が代わりにくれた——あの人の滅却師の力だったんだ」

閉じた瞼の奥で何かを想起しながら、黒崎一護はその真実を明かした。

それは見えざる帝国が予想していた可能性の一つで、しかし今に至るまで巧妙に隠されてきた黒崎一護の”血”の記憶。我等の神王陛下がこの死神に目を掛けておられる最たる理由。

「……まさか」

故にハツシユヴァルトは気付いた。黒崎一護の言葉の意味は、奴が持つ斬魄刀の技の正体は…

「感謝するぜ。滅却師と戦えたお陰で、俺はこの技の本当の名前を知る事ができた」

青年がゆつくりと、片手の斬魄刀を横に薙ぐ。その軌跡を描くように、霊圧の紫電が尾を引いた。

その靈圧の光は彼ら滅却師クインシーがよく知る、青白い——聖なる光。

「見せてやるよ、ハツシユヴァルト。こいつが俺の、本当の月牙天衝だ」

そして黒崎一護が、代名詞たる彼の奥義の、真なる力を解き放った。

ハイリツヒ・ブフアイル
| 神聖滅矢 |
げつ 月 牙 が てん 天 衝 しよう

巨大な靈圧の塊が射線上の全てを焼き尽くす。

早くに事を予期していたハツシユヴァルトだったが、その一撃は回避するにはあまりに速過ぎた。

目を瞪ると同時、凄まじい爆発が全身に襲い掛かる。堪らず靈子の炎を掻き分け渦中から脱出した滅却師クインシーは、しかし新たに自分へ目掛け殺到する無数の靈圧を感知し、更なる驚愕に思わず硬直した。

「な……い！」

「何驚いてんだよ。俺は神聖滅矢ゴセイメイの使い方を、あんた等から学んだんだぜ？」

その正体が敵の放った追撃の月牙の弾幕だと気付く須臾の間に、彼は立て続けに破壊の嵐に呑み込まれる。

何という連射速度。何という火力。情報データに記録されていたものは全く異なる性質と規模に進化した一護の技にハツシユヴァルトは翻弄される。

全身を揺さぶる震動が、外套を引き千切る衝撃波が、身体を焼く煉獄が終わるまで、青年は靈子の炎柱に焼かれ続けた。

劍撃の音と共に移りゆく一護たちの戦場。しかし力ある彼らが神王ユーハバツハの玉眼に留まる華々しい決闘を繰り広げる一方、恥辱と失望の泥濘に沈む哀れな落伍者達も戦争の災禍の確かな断片であり続ける。

そんな敗者の一人であるジゼル・ジュエルは、神王が下すその評価に相応しく地べたに蹲りながら、自分を足蹴にした勝者に根源的な恐怖を刻み込まれていた。

「……なにアレなにアレなんだよアレ……ッ」

彼女——生物学上の是非は不文律——の脳裏を抉る漆黒の悪夢、黒崎一護。千年の時を経て集められた選りすぐりの精鋭八人と足並み揃えて例の【特記戦力】に挑んだジゼルは、まるでいつものか弱い乙女の擬態が真実になったかのように鎧袖一触で腰砕けにされた。

無論ジゼルの強者としての自負は本物だ。その証拠に少女が直前まで戦っていた遠方の戦場には、霊界の歴史に名を遺すであろう正解に至った死神・斑目一角と彼の相棒綾瀬川弓親が肌をどす黒く変質させた姿で倒れている。三界の百万年の秩序を維持し続けてきた護廷十三隊の実力者を傷一つなく下す彼女は、常に神王の栄光の一部であった。

「くそくそくそ、くそ……ッ」

だが今の自分はなんだ。幾度自問しようとしてジゼルの頭は既に答えを出していた。それでも彼女は粉々なプライドを強引に継ぎ接ぎし、これまで蔑み嘲笑ってきた弱者に己が落ちぶれた認められぬ事実から必死に目を逸らす。

そうした極限の心理状態において恐怖が焦燥、怒りに反転するのは人間の正常な感情推移である。そして情緒の狂ったジゼルに芽生えたその激情は、彼女が継り付く二人の女へ向かった。

「だからア……——いつまで寝てんだよあんた等ッ！」

震える両足で立ちあがり、ジゼルは意識を飛ばしたままの二人——
キャンデイス・キャットニップとミニーニャ・マカロンへヒステリックに怒鳴り散らす。

「このッ！ 役立たず！ 共がッ！ バンビちゃんの奪還に失敗した時も真っ先に逃げてきア！ 弱いクセに頭も回らないならボクに迷惑かける前に死んどけよ！」

そうだ、自分は悪くない。悪いのはみんなが集まる前に勝手に抜け駆けして黒崎一護にワンパンされたこいつ等だ。

調子に乗って同じく瞬殺された当時の自分を棚に上げ、仮にも友人と呼べる数少ない仲間達へ八つ当たりする姿は無様極まりない。

「……あー、もういいや」

しかし彼女が有する能力はその無様とは程遠い、凶悪なものだった。

「わざわざ安全なトコまで運んでやるのバカらしいし、面倒だけど二人共ここでボクのゾンビにしてあげる。不死身で従順。あんたたち程度ならこれ以上弱くなる事もないから、欠点無しの最高の兵隊になれるよ」

ジゼルは「死者」^{ゾンビ}の触媒である自身の血液を、友達だった二人の女へポタポタと垂らしていく。それは彼女達へ告げたような冷徹な計算とは決して呼べない、咄嗟の、短慮で感情的な行動。

そしてだからこそ、ジゼルは自分に近づく複数の人の気配に気付けなかった。

「——成程成程。『ゾンビ化』とはこれはまた、実に興味深い能力じゃないか」

突然背後から差し込んだ強烈な光に、ジゼルは目を細める。どこかで聞いた事のある声だったが、瞬時に思い出せない程度の雑魚ならどうでもいい。

苛立ちをそのままに振り向き目にしたソイツの姿は、記憶の有無以前の問題だった。

「……まぶしくてあんま見えないうんだけど、誰？」

「これはまたものを知らん奴だね」

偉大な相手と言うのは

輝いて見えるものだヨ

「まぶしい理由の方は訊いてないんですけど？」

全身が発光している何者かが瓦礫の上からこちらを見下ろしている。奴の素っ頓狂な返答に思わずツツコミを入れてしまった自分を恥じつつも、ジゼルは最初からこの変人の相手をする気がなかった。

しかし彼女が「気が散るから消えてくんない？」と言い置いて再度ミニーニヤ達へ血液を注ぎ始めると、例の発光体が聞き捨てならない事を口にした。

「何。前回の遭遇時に逃げ足だけは一流だった君達を、現世の死神代行がまとめて倒してくれたのでネ。手間が省けた故こうして回収に来たのだヨ」

「前回？ どういう——」

意味か。そう問い返そうとしたジゼルは、そこではたと気付く。

威光を絞るなどとはざいて明度を下げた発光体の正体に？ 違う。

その死神の見覚えのある道化師風の姿や、奴の後ろに侍る副官の女は二の次だ。

ジゼルの目には、一人の人物しか映っていないかった。

「しかし、良いネ。奴の美学が知らんが、あの黒崎一護の攻撃を受けてピンピンしている個体が居るとは、研究材料としてこれ以上望むべくもない素質だヨ」

「……それ……嘘、あんたまさか……！」

「頑丈、幸運、大いに結構。君が無事で居てくれたお陰で、こうして私の——新たな被験体の改造成果をテストできるのだからネ」

ジゼルの視線の先。死神達の真上に浮かんでいたのは、長い黒髪を風に靡かせる小柄な人影。その人影が着る貫頭衣に辛うじて隠された白い肌には夥しい手術痕が這い回り、虚ろな両目の片方は完全に充血し赤黒い。

それはジゼルの良く知る可憐で、傲慢で、バカみたいに強かった性

悪少女。

「……ジジ……たすけて……たすけてよ……お……」

——シュテルンリッター星十字騎士団 ” E ” ——
ジ・エクスペロード爆撃

B A M B I E T T A B A S T E R B I N E

そんなかつての勝気な姿が見る影もない、くしゃくしゃに歪んだ顔を涙で濡らす、変わり果てた姿のバンビエッタ・バスターバインだった。

——
*
——

遠くで始まった滅却師クインシー同士の戦闘。バンビエッタとジゼル、死神の隊長格すら凌駕する二つの巨大な霊圧の衝突は、即座に遠地の同胞達の知る事となる。

「——ちっ、あたま痛え……」

友人達の状況をいち早く察知したりルトット・ランパードは、軋む身体に鞭打ち地面から起き上がる。まずは自分の状況確認だと辺り

を見渡し、背後に佇むソレを目にした彼女は渋面した。

「銀架城……随分ヤな所にぶん投げてくれるじゃねーか、あの野郎」

リルトットは聳える白壁を伝いながら努めて冷静に善後策を思案しようとする。しかし直前の戦闘での出来事が彼女の正常な思考力を大きく阻害していた。

黒崎一護の慈悲で戦場から一人投げ飛ばされたリルトット。屈辱に狂う彼女は一刻も早くあの舐め腐った死神モドキを殺したくて堪らなかったが、しかし同時に彼の強さを理解できない馬鹿ではなかった。

油断は無く、フオルシユテンデイツヒ完 聖 体の『共鳴』とやらで強化された先程の自分

は、間違いなく今までで最も強大な力を発揮できていた。あの状態でも軽く遊ばれてしまうのなら独力で奴と戦う意味など欠片もない。

「かといってジジを助けに行く事も戦力的に厳しいし……」

意外と仲間思いなリルトットにとってより優先順位が高いのはこちらの方。まだ黒崎一護を倒す事よりは可能性がある。だがシユテルンリツター星十字騎士団三指に入るバンビエッタも当然容易な相手ではない。

ジゼルを攻撃するバンビエッタの狂行は、恐らくあの十二番隊の奇人・くろつち涅 マユリの手により無理やり操られているせいだろう。四日前の第一次侵攻にて彼女を奪還しようとした時はヤツと五番隊のおかつぱ隊長に妨害され、結果的に退却する事でリルトットら四人は二次被害を免れた。その結果あとしてバンビエッタが敵になった事を思うと歯痒いが、そもそもアイツがあの”抹殺対象”ひなもりもも雛森桃と遭遇した不運が全ての原因であり、更に言うならキャンデイス達に簡単に見捨てられるような普段の悪行の因果応報でもある。自分達の責任だと言われるのは極めて不本意だ。

とはいえ黒崎一護に報復するにも、ジジたちを助けるにも、自分一人では力不足。そう判断したりルトットが新たな共闘仲間を求めたのは自然な流れであった。

「銀架城シルバインか。都合が良いのか悪いのか……余計な借りを増やすのはヤなんだけどな」

もつとも少女が選定した肝心の仲間は、主ユーハバツハの意に背く

のと同義の災厄だったのだが、彼女自身、その些細な忠誠の綻びが後に自分を救う事になるとは微塵も予期していなかった。

——ジルバーン銀架城はね、檻なんだよ

コツコツと、リルトットは王城の階段を下りていく。以前訪れた時の記憶を辿りながら、彼女はその少年の言葉を思い出していた。

——笑えるだろ？ 神に等しいあの御方が、自分の創造物を自分で閉じ込めるなんてさ…

白亜の城の最下層に設けられた武骨な牢獄。ユーハバツハの結界で断絶されていたそこには今や、鋼鉄の大扉だけが頼りなく中の”ばけもの”を封じている。

組織随一の嫌われ者は、されど故に自らを囚える神たる祖王の本質が見えていたのだろうか。リルトットの頭にふと過った彼のその台詞は、反芻するにはあまりに無礼な疑念だった。

——陛下には一体どれほど、自分の未来が…：暗く見えてるんだらうね？

「…：やつぱりな。てめーなら結界が解かれても知ったこつちやねーってゴロゴロしてると思ってたぜ」

リルトットは聖文字”G”の力で喰い破った大扉の奥へ、気楽そうな再会の言葉を投げる。そして薄暗い部屋の端に置かれたソファーに寝そべる中背の少年へ、簡潔に用件を伝えた。

「仕事の時間だ、クズ野郎。暇してんなら手え貸せや」

——シュテルンリッター星十字騎士団 ”V”
ザ・ヴィジヨナリー夢 想 家

GREMMY THOUMEAUX

彼の名はグレミイ・トウミュー。

誰もが近付く事を避け、あのユーハバツハすら持て余すこの異分子に己のへし折れたプライドを託したリルトットは、物好きではあったが、決して狂人ではなかった。何故なら広い交友関係を持つ彼女が知る中で、目の前の気だるげな空気を纏う金髪の少年こそが、最も万能にして、最も不遜な聖文字シュリフトを覚醒させた…

——最強の星十字騎士なかまなのだから

— * —

宙に立ち込める焼けた霊子の白煙が、風と共に消えていく。ハツシュヴァルトはその様を眺めながら、静かに呟いた。

「……凄まじい才だ。此れ程の技を、我等滅却師クインシーが使う数撃ちの霊矢と同等の小手先として操るなど……」

衣類は焼け焦げ、隙間から覗く白い肌は火傷に覆われ痛々しい。

彼は思う。自分の神聖滅矢ハイリツヒ・プファイナルがこの規模の技に至るには、一体どれ程の年月を要するのだろうか。少年期に無能の誹りを受けていたハツシュヴァルトにとって、卓越した技を持つ者は敵味方の是非なく常に敬意を払うべき存在であった。その謙虚な姿勢は自らの秘められた才を神王陛下に見出して頂いた今も変わらない。

やはり自分は滅却師クインシーとしては、未だ半人前だ。

「……さて。今一度お前に訊こう、黒崎一護」

破れた白衣を風にたなびかせ、傷だらけの青年は黒崎一護へ目を向ける。

そして。

「——その”嬉しさ”とやらを、私は今の技の何処に見出せば良いのだ？」

無感情に、あるいは皮肉げに、ハツシユヴァルトはそう言った。

「……何だと？」

黒崎一護が眉を吊り上げる。妙な事だ、「げっ月牙を防げた事がそんなに嬉しいか」と訊いてきたのは彼であつたはずなのに。

「私の喜びは陛下の期待に御応えする事のみ。お前との戦いで私が喜悅を覚える事があるとすれば、それはお前が陛下の望まれる『未知の進化』の片鱗を私の前で見せた時だけだ」

ご自慢の「本当の月牙天衝」とやらも、彼の斬魄刀が滅却師クインシーの力に由来する事を知ればその本質は然程意外ではない。無論これまで死神や破面アランカル、完現術師フルフリンガーの強者達と戦いながら事実を隠し通せた事は驚きに値するが、それだけだ。

このままでは陛下に吉報を言上できない。それは臣として恥ずべき失態だ。

苛立つ一護を意に介さず、ハツシユヴァルトは「仕方がない」と息を吐く。

直後、彼の身体から膨大な霊圧が噴出した。

「此れより聖奠ザクラメント戒規を実施する」

凄まじい霊子竜巻の中心に煌めく青い双眸。凍てつく眼光に射貫かれ、死神の青年が顔を強張らせる。

「そろそろ見せて貰うぞ、黒崎一護」

「ッ……！」

「お前が藍染惣右介あいぜんそうすけの掌中から逃れられたのは偶然ではない。だがそれはお前自身の実力でもなければ、未だ秘めし奇跡の才に依るものでも、況してやあの悍ましい魔女の企みなどでも断じてない」

そうだ、黒崎一護。お前の力も、命も、魂すらも。

「全ては、我等が主——」

ユーハバツハ陛下の

御為に存在するのだ

そしてハツシユヴァルトがそう述べた、次の瞬間。

「ガッ……!?!」

一護の体中から、鮮血が噴出した。

— * —

『プロタゴニスト
主人公』。

あらゆる実話・創作物語における普遍的な登場人物。その概念の誕生は神々の伝説が神話や古典として記された上代よりも遙か昔、文字無き口伝の世たる先史時代にまで遡る。

勸善懲悪。立身出世。「ある者が大を成す」という特定の人物の行動・心境に焦点を当てる物語は極めて単純かつ明快故、古今東西、老若男女問わず読み手の融即的心理に直結する最も原初的な文学構造

であり、人間の自意識が確立する幼年期の段階から”物語”として認知できるため「最も完成された創作類型」だと述べる文学者も多い。一方で上記の主張に対し、主人公を軸とした物語を「全ての創作物の始発点」と例える意見もある。これはこの創作類型が、完成されているが故に独創性と発展性に欠くという創作的な限界を抱えている事に由来する。

そこで解決策として加えられるのが物語を広げる魅力的な”脇役”達。彼らの登場と共に物語は『伝記』から『紀伝』、『群像劇』へと変化し、現代で親しまれる複雑な人間関係や舞台移動の描写がこの段階で初めて可能となる。

一見、単調な物語に広がりを与える妙手に思える技法だが、その性質故に扱いを誤れば物語の軸である主人公の存在価値が希薄化しかねない危険を孕む劇薬でもある。この負の現象は漫画や小説などの長期連載作品に顕著であり、我等が『BLEACH』の最終章「千年血戦篇」はその最たる例として悪名高い。

読者諸君にそれら詳細を長々と語る必要はないだろう。

しかし――

「ふんっ、そんな悪評もあたし達がぶっ壊してやったもんね！」

『――見たか者共！――何が絨毯よ！――何が主人公(笑)よ！――これがあたし達の黒崎一護だバーカ！――』

前世から続く鬱憤が晴れ、あたしは桃玉と一緒にうおおと吠える。よかった、本当によかったよお……！

両親の出会いを動物実験扱いされたり、ルキアとの出会いも、必死に開花させた才能も、くぐり抜けた困難も全部ヨン様の踏み台になるために仕組まれた事だと言われて、存在を否定され続けて、今までいっぱい苦しんで心折れて。

それでもその度に立ち上がって、多くの試練を乗り越え続け……

そして遂にはあのNTB^{シユテルンリツター}厨軍団を瞬殺できるほどの、あたし達が渴望する真のオサレ主人公らしい雄姿を見せてくれたのだ。

無自覚にバズビーやリルトットのプライドを粉碎したりなんか良からぬ素質が開花しかかっているけど、こんな立派になってお姉ちゃん嬉しいっ。嬉しくて泣いちゃう…！

「……何やら良い話にしようとしてますけど諸悪の根源は主様では？」

『——おいそこ水を差すな飛梅エ！——乗り越える力も希望も与えるもん！——ホント空気読めない娘ねえ——ネチネチネチネチ——』

ふ、ふん。そんな善悪論なんてオサレ漫画に相応しいオサレ主人公をオサレに活躍させる大義の前には些細な事よ。原作キャラが苦しまないよう助ける！ 原作キャラがオサレになれるよう助ける！そこになんの違いもありやしねえだろうが！

「はあ……まあそれはさておき——その”主人公”とやらに果たしてあの滅却師クインシーが本当に倒せるのですか？」

「！ 遂に來たみたいね！」
さてさて。

チャン一無双で高ぶる気持ちをそのままに、やってまいりました本日第二のビッグイベント【黒崎一護VSハツシュヴァルト】。原作ではすれ違いばかりで終ぞマトモに戦う事が無かった、両陣営屈指の強者達の激突だ。

鯽ファン悲願の一大決戦を前にあたし達のテンションが更に上昇していく。

『——おおつ、二年前の朽木白哉戦くちぎびやくやそつくりの熱すぎる展開！——今の一護くんがどう戦うのかワクワクするわね……！——』

「飛梅はハツシュヴァルトが有利だと見てるの？」

「私の”鴛鴦火”おうせんかを耐えて反撃してきた敵ですもの。あの滅却師クインシーの能力は発動される前に意識を刈り取るくらいしか攻略法がなさそうですし、おまけに本人も慎重で思慮深いとくれば不意を突くのも一苦労かと」

ヴァンデンライヒ 見えざる帝国の見事な都市景観をめちやくちやにしながら戦う一護とポテトと、それをわいわい観戦するあたし達。客席を飛び交う意

見は様々だけど、飛梅ちゃんの考えはいかにもOPB素人っぽくて微笑ましい。

視界に映るのは【強者の平常心】や【沈黙は金】などのOSRMUVを駆使して戦うチャン一の姿。原作読者なら一目瞭然だが、ああいう言葉数少なく冷静な顔をしている時の一護はマジで強い。飛梅ちゃんが懸念するチート能力を使われようと圧倒的OSR値の前には全てが無力。それがこの世の真理【Osare Point Battle】なのだ。

：しかし同時に、直接戦ったあたしはポテトの【Nouryoku TUEE Battle】的な強さもよく知ってる。雛森ボディアの異常な頑丈さは原作のお墨付きとはいえ、それでもポテトのダメーヅ反転能力とチート盾の倍ドンは本当にヤバかった。桃玉と融合していない純死神のままだったらあたしはあそこで死んでいただろう。(苦戦は必至だけど、やっぱり一番の不安はポテトが雛森桃に勝利して得たOSR値がどれ程残ってるか、ね…)

(——前の一護の正解を折った時に使い切ってくれてたらいいけど——ちよつと敵にオサレ塩を送り過ぎたかな——)

一応あの戦いでポテトに聖文字シユリフトと身代わりフロイントシルトの盾を使わせて【能力初披露】ボーナスを浪費させる事は成功している。でも本当はあそこで【能力解説】ボーナスも切らせるつもりだったのに、結局意味深な台詞を引き出すのみで煙に巻かれてしまった。

NTB強者でありながらOPBでも戦えるハツシユヴァルトさんは間違いなく章のラスボスを張れるレベルの強者である。

『——でも危なくなったらあたし達が介入するし勝敗はどうでもいいのよね——』

「夢を壊すような事言わないで」

「ウチの亡者アランカル共ならいつでも逝けますわ。人の梅園をめちやくちやにするくらい元気が余っているんですもの、存分に働いてくれるでしょうね？ うふふ」

桃玉と飛梅が笑顔で唆してくるが、如何にポテト戦とはいえ現段階で虚霊坤あたし達が舞台上上がるのはダメだ。あのクソ試合製造機

シユツツシユッタフエル

親衛隊四人衆（二人は冤罪）を「綺麗に倒す」という原作改変を目指す以上、あたしも譲れない。

「ですが、その、”オシヤレ僞”！ その巫山戯た話に通じる事ですが、斬月の青年がここで全力を出して手札を使い切ったら、後に控える敵の親玉と戦う時に不利になりませんか？」

「オシヤレじゃなくて”オサレ”だ、二度と間違えるな」

BLEACHキャラのクセにOSR値を「ふざけた話」と言う飛梅の不適切な発言はさておき、彼女は本命のユーハバツハ戦を見越して一護に余力を残させるべきだと主張する。

まあそれはその通りなんだけど、あのラスボスさんの能力は完璧なOPBメタなので、原作のようにせっかくの新技お披露目をアレ相手に浪費するのは勿体ないってのがあたしの意見。どうせ一護が何をしても【全知全能】^{ジ・オールマイティ}で先読みされた挙句に無効化されるんだし、それならまだ有情なハツシユヴァルトさんと気持ちよく全力で戦わせた方が主人公の格が傷付かない。

原作の和尚しかり、一護の新卍解しかり、OPBにおける最悪OSR値デバフは、盛大に期待させてカツコつけて放った奥義が【不発】する事なのよ。

「確かにそれは無様ですが……その『情けなさ』や『格好良さ』で勝敗が分かれるなら、どうして主様はこれまで藍染惣右介とハツシユヴァルトにしか敗れてないんですか？」

「ちよつと飛梅どういう意味よっ」

『——ぐうの音も出ない反論——あたし達の桃玉パワーがないお姉さまはガバでポンだから——あつても変わらないんだよなあ——』

「融合してからのガバの九割以上はあなた達のせいでしょ！」

失礼な相棒と責任転嫁が酷い桃玉衆に懨然とするあたし。何てこと、最近は何月島さんに焚きつけられた邪神ムーヴで強キャラ臭を醸し出してたつもりだったのに、このあたしの客観的評価が「情けない」

……だど……？

「ふ、ふん！ そんなにバカにするんだつたらあたしの最新ガバ防止兵器を見せてやるわっ。首洗って待つてなさい！」

『——えー、なになにー？——』首長くして”の間違いでは？——はいーガバ——』

「どうせまた人の不幸の蜜を啜るための演出なのでしょう？　はあ……」

あたしはバカにしてくる二人を「がるる」と威嚇しながら、席を立った。

別にまたいつもの嫌な予感を覚えたワケじゃないから。実際さつき飛梅ちゃんも後のユーハバツハ戦の対策を不安視していた時、あたしも少し思う所があったのだ。これからチャン一の最高の雄姿を安心して見れるよう、例のアレの進捗を確認しておきたいだけだから。全く、散々言いたい放題言いやがって。今に見てる、あたしのユーハバツハ対策にガバなどない事を証明してやるから全く！

まったくつ！

……ふえーん、助けて東仙隊長とうせんおー。二人があたしを虐めるよお……

！

貴孔ってSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

「——何だ、これ…?」

その瞬間。見えざる帝国の大広場で戦う黒崎一護は、険しい表情で
全身を掻き抱いていた。

彼の皮膚は焼け爛れ、激痛が戦意を苛む。それまで些細なもの以外
無傷に等しかった青年が、一瞬で。

そんな一護を、彼の月牙天衝の弾幕を受けてボロボロになったユー
グラム・ハツシユヴァルトが見下ろしている。しかし異なる経緯で負
傷した両者には奇妙な共通点があった。

二人の体に浮かぶ傷が、衣類の汚れに至るまで、寸分変わらず全く同
じなのだ。

「……意外だな。前の侵攻で私が雛森桃を下した瞬間を見ていたのな
ら、多少は警戒しているものだと思っていた」

溜息交じりに「知能も二流以下か」と呟くハツシユヴァルト。癩に
障ったのか黒崎一護の混乱が怒りに変じていく。

「私が陛下より賜った聖文字は”B”——世界調和。その神髄は、範
囲世界に起きるあらゆる幸運と不運を、神の天秤にて釣り合わせる能
力だ」

「幸運と不運を釣り合わせる…?」

理解できないのか、あるいははする事を恐れているのか。いずれにせ
よその意味を理解した時、彼はこの戦いの不毛さに気付くだろう。

「獵に成功する、九死に一生を得る、戦に勝利する。そういった自らに好都合な出来事に恵まれた時、古来より人はそれを『神より賜りし』幸運』と称してきた」

「……」

「だが、常に彼我の優劣を論じたがる我ら人間と異なり、神は如何なる者にも平等だ。賜った幸運によって傾いた秤は、必ず同量の不運を受ける事で調和される」

疑念を深める一護へ、ハッシュヴアルトは淡々と先程の現象の種を明かす。

「お前が私を月牙げつがで負傷させた”幸運”は、真逆の”不幸”によって相殺される。お前の体に突如刻まれたその傷は、私の世界調和ザ・バランスが釣り合わせた、お前の傾く天秤を振り戻すための——対価だ」

「!？」

一護の瞳に、ようやく得心の光が宿る。そして直後、間髪を容れずに打開策を思案し行動に移した。

しかしそれはこの世界調和ザ・バランスの本質を勘違いした結果の無意味な戦法であった。

「……くだらない」

「!」

「能力を発動される前に勝負を決しようと言うのだろう。私へ挑んでくる敵は皆同じ手を使う」

瞬歩しゅんぽで背後を取ろうとする黒崎一護を待ち構え、ハッシュヴアルトは先手の一撃を振るう。相手の攻撃の隙を突いた完璧な後の先。手応えは十分にあった。

だがハッシュヴアルトの自信に反し、百戦錬磨の死神代行は不利な状況を瞬時に引つ繰り返す方法を熟知していた。

「——くだらないかどうか、試してみるか？」

ハイリッヒ・プファイル
| 神聖滅矢 |
月 牙 天 衝

放つは先程と同じ技。違うのは互いの間合いがゼロに等しい事。そのたった一つの違いで黒崎一護の神聖滅矢は回避不可能な殲滅攻撃となる。奇しくもそれは、先日ハツシユヴァルトの静血装を削ぎ落とした雛森桃の戦術と瓜二つであった。

相手の先手の剣撃ごとねじ伏せんと、眩い青光がハツシユヴァルトに襲い掛かる。

「言った筈だ。『無意味』だと」

「！」

だが彼は回避に一切の労を費やさず、一護の強大な霊圧をその身に受ける。

そして”天秤”は傾き――

『ぐ……ッ』

死神と滅却師^{クインシー}。二人の戦士が同時に、膝を突いた。

— * —

「イヤ、イヤ。これは予想外」

ズン…と肌を殴るような震動が見えざる帝国の^{ヴァンデンライヒ}大気を揺らす。その異変を発光スーツに埋め込まれた小型観測機器で確認しながら、^{くろつち}涅マユリは震源地、黒崎一護とハツシユヴァルトが戦う戦場の方角へ視線を送った。

「ククク、古文書など所詮は未開な猿共の落書き。自らの手で実証す

るまで只の一データに過ぎんと軽く見ていたが……中々如何して、原始人の知見というのも馬鹿にできない」

そう笑みを深めるマユリに、副官の涅くろつちネムが小声で報告をした。

「マユリ様、対象の霊圧の解析が終わりました。これより仮称七十一番の生成に移ります」

「さっさとし給え、ウスノロ。それが済んだら予備の七十二番に取り掛かるんだ」

「畏まりました」

思考中に水を差されて機嫌が降下するマユリだったが、彼は鷹揚に鈍い部下を許す。

その理由は、男の背後で起こった大きな爆発にあった。

「……フム、そろそろかネ」

舞い上がる砂埃を不快げに掃い、マユリはそちらの爆発の方へ振り向く。

——そこでは二人の女滅却師クインシーが、凄惨な思いをぶつけ合いながら互いと戦っていた。

「やだ……やだよ、ジジ……にげないでえ……たすけてよお……」

「バンビちゃん聞こえてるの!? ねえ！ 意識があるならさっさとあの発光ピエロ爆破しちゃってよ！ なんでボクを狙うのさ！」

「むりなの、もう……あたし、ダメなの……たたかわないと……みんなをたおさないと、あたし……ううッ」

降り注ぐ光の雨を潜り抜け、ジゼルは必死に上空のバンビエツタへ呼び掛ける。しかし悲愴な覚悟の言葉と共に返ってくるのは凶悪な霊子爆撃。二十六の聖文字シュリフトの中でも最強格の破壊力を有する爆撃ジ・エクスプロードの力は、憎々しくも互いの普段の上下関係を示すかのように強大であった。

「ほんと、死神ってどいつもこいつも趣味悪いよ——ねッ！」

だがジゼルも栄えある星十字騎士団シュテルンリッターの一員。ゾンビ化した死神の雑兵達を盾に何とか距離を詰めると同時、自ら腕の動脈を切り裂き、流れ出る血液を思いきり振り撒く。同じ滅却師相手には効果が薄い

とはいえ死者の力の影響は皆無ではない。少なくとも今まではそうだった。

しかし。

「なんで、なんで効かないの：!?! こんなに浴びせたら少しは動きが鈍るはずなのにッ!」

「全く、馬鹿もここまで過ぎれば憐れみすら覚える」

当然、マユリの研究の被験体であるバンビエッタの支配権がそう容易く奪われる訳がない。彼女の身体に何をしたと問い詰めてくるジゼルへ、男は相手の知能でも理解が及ぶよう優しく解説した。

「何、至極単純な仕組みだヨ。君らの同族が聖文字の力に強い抗体を持つ事は既に実証済みなんでネ。ソレの魂魄には滅却師の靈性免疫を過剰反応させる装置が埋め込まれている」

「!?!」

「滅却師の性質が強まれば当然、君のゾンビ化の能力はより効き辛くなる。浦原喜助の『侵影薬』を知る諸君にとっては意外でも何でもないアプローチではないかネ?」

奴にこの研究分野で後れを取ったのは癪だが……との本音は胸の内に留め、マユリは自身の発見を披露する。

「サテ。君の理解が及んだところで本題に入ろう。ここからが浦原の研究を凌駕する私の結論だ」

侵影薬は死神の卍解に虚の靈圧を一時的に付与する薬物である。製作者の浦原自身は「虚の靈圧による中毒作用」が滅却師から卍解を奪い返す原理であると説明していた。

しかしマユリの実験の結果、聖文字を持つ滅却師に対しては、虚の靈圧が持つ毒性そのものは期待された程の絶大な効力はない事が判明した。

つまりジゼル達が卍解を維持できなくなったのは、侵影薬の靈的作
用により科学的に奪い返されたのではなく、彼等の滅却師の本能が卍
解を忌むべき虚の力だと判断し、無意識の過剰反応で自らそれを手放
しただけだったのだ。

「となると、一体“何”が君達に虚への耐性を与えているのか、という

疑問が当然残る。そして丁度手元にあったその爆撃娘をドロドロに融かしてみたら面白い事が解ってネ」

「…ッ！」

「イヤハヤ。あれ程調べ尽くした滅却師クインシーにこんな秘密が隠されていたとは驚きだヨ。まさか周囲の霊子を奪って戦う連中の最精鋭が、魄内に巢食う、本人のものとは別の、原種の魂魄に搾取される端末未満の存在だったとはネ」

ジゼルが顔を歪める。お気に入りの友達オモチャ、バンビエツタに行われた非道に対する憤りから来る反応だったが、マユリはそれを自身の研究結果に向けたものだとして解釈しニヤリと破顔。

そしてゆつくりと、発光スーツの腕に埋め込まれたボタンを押した。

「本筋から外れた研究の副産物ではあるがネ。霊界の理ことわりを荒らす神の兵士とやらを相手にするのだ。手段は多いに越した事はないだろう？」

「――!? 嘘…！ そ、その姿！ その力はバンビちゃんの…ッ！」

ジゼルの顔から血の気が抜ける。

彼女の眼球に映るのは、二列の十二の星を引き連れた、光の翼。ジゼルにとつての圧倒的な火力の象徴であったその霊子兵装が、あつてはならない人物、死神である涅マユリの背後に浮かび上がっていたのだ。

『血の契儀シユウウーレン』。君達に聖文字とやらを与えた”王”の血液は、私の大いなる研究の役に立ってくれたヨ」

滅却師・完聖体
神カの天軍マエ

心臓の鼓動が加速する。流れる血が波打っている。まるで、なにかと強く共鳴するかのよう。

「——うあ……っ？」

キャンデイス・キャットニップはそんな身体の異常に、無理やり意識を叩き起こされた。

黒崎一護にやられてから一体どれ程の時間が経ったのだろう。虚ろな瞳で何とか周りを見渡す女滅却師^{クインシー}。

焼け焦げた瓦礫の山。散らばる死神の隊士と聖兵^{ソルダート}達の死体。

そして視界の少し離れた上空で戦う、三つのシルエット。

それを見た彼女は僅かな放心の後、一瞬で思考が覚醒した。

「ジジに——バンビ!? 何やってんのあんた達!？」

戦っていたのは友人のジゼルとバンビエツタ。理解が追い付かない程激しく変化している戦況にキャンデイスはひたすら混乱する。

すると完^{フォルシユテンデッヒ}聖^{フオルシユテンデッヒ}体を使ってなお劣勢に立たされていたジゼルが彼女の素っ頓狂な声に振り向き、半ベそをかきながら助けを求めてきた。

「ッ、キャンデイちゃん！ 起きたなら手エかしてえーッ！ こいつ、ボク達の完^{フオルシユテンデッヒ}聖^{フオルシユテンデッヒ}体を……！」

しかしそこに込められた感情は嫌悪と危機感。目の前のバンビエツタに怯える言葉ではない。訝しむキャンデイスはそこで初めて戦場の三人目の人影を注視し、ゾワリと肌が粟立った。

「——なんだ、もう目が覚めたのかネ？ 全く、女に甘いのは志波家の血筋か……」

呆れるようにぼやくのは、全身を発光させる道化師風の男。その独特の声と雰囲気から容易に相手の正体を察する事ができた筈なのに、キャンデイスは彼が以前バンビエッタを攫ったあの不気味な死神の隊長、涅マユリなのだどと気付けなかった。

奴の背に羽ばたく一対の光の翼。そこから感じる明確な滅却師の靈圧。近くの他の所有者と”共鳴”するその力こそが、キャンデイスの【神の雷】^{ケラウノス}を呼び起こそうと、昏睡する彼女を目覚めさせた謎の胸騒ぎの原因だったのだ。

「な、なんであんたが……バンビの完聖^{フォルシユテンデッヒ}体を使つてんだよ……!?!」

「ヤレヤレ、少しはその矮小な頭で考えてみたらどうかネ。この力が君らに与えられたものなら、その源となる存在を抽出すれば外部端末への靈能移植は不可能な話ではないのだヨ」

まあ私以外の凡人共にとつては無理難題だがネ、と男が胸を張る。涅マユリがバンビエッタから滅却師の奥義を奪った方法は、聖文字^{シユリフト}を与えられた時に行った【血の契儀】^{シユウウーレン}で彼女の体内に流れ込んだ、ユーハバツハの血液を取り出す事だったのだ。

「魂魄に宿る靈能が、その魂魄と同一性質の靈体と適合する事は、崩玉^{ほうぎよく}の純化研究の成功から明らかだ。ユーハバツハの血髓をそのこの爆撃娘の複製した靈性因子へ移植する事など造作もない実験だったヨ」

靈性因子に関する技術研究およびそれに基づく魂魄の複製は、かの魔王に万年単位の禁固刑が下った罪状の一つであり靈性科学のタブー中のタブーであったのだが、マユリに一切悪びれる素振りはない。それは無論、元よりここに居るキャンデイス達を逃がす気も隙もない事実を示す、彼の無慈悲な遊び心。

「ッ、やつてくれるじゃない……完聖^{フォルシユテンデッヒ}体を……あたし達が陛下に選ばれた証を奪うなんて悪辣な意趣返しもあったもんだよ、くそつたれ!」

「意趣返し? 何故この私が正解を奪われた馬鹿共の下らん情動に付き合わねばならんのかネ? 言っただろう、そこな爆撃娘から抜き取ったこの【神の天軍】^{カマエル}は研究の副産物の有効活用に過ぎんと」

研究の副産物。意味深な言葉に眉を顰めるキャンデイスを見下ろしながら、ニイ……と笑みを深めるマユリが新たな装置を取り出した。「ではそろそろ私の最新の研究成果であるその小娘の、最終試行と行こうじゃアないか」

「ピッ——」

すると突然、待機命令に従い大人しくしていたバンビエツタが激しく反応した。

「いや……ッ！ やだ……それだけはいやあッ！」

「……バ、バンビ？ お、おい！ やめろ死神！ ソイツに何する気だ!?!」

死に物狂いで「何でもするから」と懇願するその様子に恐怖を覚えたキャンデイスは、慌てて【神の雷】ケラウノスを発動。だが状況が呑み込めない彼女は困惑が先んじ後手に回ってしまう。

「おねがい……あれ、いたいの……！ すごく、いたくて……きえちやうの……！ あたしが……あたしが、あ……ッ！」

「喧しいヨ、小娘。被検体風情が口答えするな」

縫り付いてくるバンビエツタの相手をネムに任せ、マユリが興奮気味に語り出す。

「古来より我々科学者は、人や霊の種族の壁を超越し、新たな位相へと己の身を昇華させる研究に取り憑かれていた。死神の虚化ホロウや破面アランカル等、長い歴史の中でそれら超種族の進化原理は数多く解明されてきたが……実は数多の先人達が未だ尚成し遂げられない不可能が、一つだけ存在する」

「な、何を……」

「だが！ 石田雨竜いしだうりゆうの身体に寄生させた監視菌から得た二年間のデータと、此度の戦争で出た無数の尊い犠牲を基に、私はその不可能を一蹴する最初の科学者となったのだヨ！」

曳舟桐生ひきふねきりお、浦原喜助うらはらきすけ、藍染惣右介あいぜんそうすけ。この自分が後塵を拝す事となった忌々しい先駆者達を嘲笑い、散々勿体ぶった涅マユリは大仰にその操作端末を起動した。

「サア！ 見せ給えヨ、試製バンビエツタ・バスターバイン壱号！ 遙か創世の時より続く不

俱戴天の因縁、靈性因子にまで深く刻まれた禁忌を踏み越え誕生した、史上初の——『虚化滅却師』の姿を!!」

その直後、バンビエツタが絹を裂くような金切声を張り上げた。

「いや……いやッ……イヤアアアアアアアアアアッ!!」

絶叫に呼応し、どす黒い靈圧が少女の全身の手術痕から滲み出す。

それらは渦巻きながら次第に宙の一点に集まり、僅かな硬直の後、彼女の胸を、矢のように貫いた。

——試製壱号——

貴アルケロス
孔

かくしてバンビエツタの身体はだらりと脱力し、生気の失せた両目は真黒に染まる。その穿たれた胸元に開いた大きな“孔”は、心を失った悪霊——虚の徴。

キャンデイスは近くのジゼルと共に、彼女の豹変を唯々啞然と見つめる事しかできなかつた。

「何、恥じる必要は何処にもない。君達凡人が悠久の停滞を打ち壊す歴史的偉業を前に言葉を忘れるのは当然の事だヨ」

「あ、あ……バン、ビ……」

「もつとも所詮は試作体。流石に滅却師の素体のみでは拒絶反応が強過ぎて、新たに専用の血管、心臓、造血組織からなる血液循環器系を体内中に張り巡らせる必要があつたがネ。全く、今に思えば虚の仮面を剥ぐだけで誕生する破面など、なんと面白みのない連中か」

肌を突き刺すような禍々しい気配。根源的な忌避感から強烈な吐き気を覚えるキャンデイスとジゼル。

口を手で抑える女滅却師達に何を勘違いしたのか、大罪人が高揚した声で二人に問い掛ける。

「サテ。些か不完全なその被検体を敢えて見せたのは、君達に私の

研究の未来に可能性を見出して貰う為でネ。私としては恥を晒す覚悟で君達に歩み寄った心算なのだが、如何かネ？」

「何……言って……」

「ヤレヤレ、知能の足らん個体だネ。君達もその爆撃娘のように、科学の発展の為に進んでその身を提供し給えと言っているのだヨ」

マユリの狂言に呆けるキャンデイス達。だがしばしの間を置き、ようやく言葉の意味を理解した彼女達は、揃って逆上した。

—
ケラウノス
神の雷

—
エレクトロキューション
電滅刑

『ふっ——』

ざげんなああアツ!!!』

—
ハグフオトス
神の屍

—
ラアスル・アラグラ
骸鬼貪咬

空には雷光。地には血の池。そこから降り注ぐ眩い霊圧の稲妻が、飛び出す巨大な骨の罅が、同時にマユリへ襲い掛かる。

しかし大技同士の直撃の爆発から、憎き死神は宙を駆けるネムに曳かれて容易く脱出。

『なっ!?!』

「フム、猿の頭では理解の及ばん崇高過ぎる話だったか。仕方ない」

驚愕するキャンデイス達の目の前で、頭を振り落胆の意を示す外道。しかしそれも束の間、マユリの化粧に覆われた顔に凶悪な笑みが浮かぶ。

「試製壺号、直ちにそこの滅却師共と交戦しろ」

—
バンビエツタ・バスターバイン
それが鬨の声となった。

—
アルケロス
科学者の命令に従い、貴孔と名付けられた新たな種族の少女が、ゴボゴボと血を吐きながら邪悪な霊圧を発射する。

『ア”ア■ア■アア” ツツ——!!』

ハイリツヒ・ブファイル
— 神聖滅矢 —
虚 閃

その赤黒い光線は間違う事なき大虚メノスの一撃。しかしソレの狙いは定まらず、標的のキャンデイス達から大きく外れて地平を薙いだ。

「どうした番号、お前の眼球に埋め込んだ照準器は飾りかネ？」

『ア……ぎ……あ……』

「私は貴孔オマエの霊圧がユーハバツハの血の所有者との戦闘でどの様に成長するのかデータを取らねばならんだヨ。さつさと次弾を放て、グズグズするな」

愚鈍な被検体を叱咤しマユリがまたしても操作端末を弄る。途端バンビエツタの身体が激しく痙攣し始めた。

『が……ガ、あ……あ、あ、あア”アア■アアツ——!!』

「オオツ！ 素晴らしい数値じゃないか！ そうだヨ、霊子炉を最大稼働させてもっと私に貴孔オマエの進化推移を見せるんだ！」

「や、やめろ……止めるよてめえ！ バンビを玩具にすんな、クソ野郎オツ!!」

「今助けるからツ！」

苦しむ彼女が見るに堪えず、キャンデイスとジゼルは一直線にマユリへ突撃する。

果たしてその時の自分の感情が何と言う名だったのか、二人には最後まで分からなかった。

彼女達にとってバンビエツタという人物は、傲慢で、我儘で、だけど絶対に逆らえない、非常に面倒で憎たらしい存在だ。今も彼女の短所ばかりが頭に浮かび、好意を覚える長所など皆無。間違っても友達や仲間などとは呼べない、組織内の嫌いな奴の筆頭だった。

なのに。その時。その瞬間だけ。

キャンデイスとジゼルの中で、バンビエツタ・バスターバインという少女は、初めて——

『——ガふツ……』

そして。
そんな嫌な咳を吐いた彼女の全身が、突然、真っ赤な血の花を咲かせた。

— * —

「——バンビ!!?」

「バンビちゃん!!!」

キャンデイスとジゼルの悲鳴が静寂を切り裂く。続けてグシヤリと粘質な落下音が木霊し、それが物言わぬ肉塊と化したバンビエツタが奏でた最後の音となった。

「……チツ、流石に限界か。他の滅却師クインシー共の霊圧で満ちた空間でも十秒しか持たんとは……」

愕然とする女滅却師クインシーたちの耳に不快な男の声が届く。その外道はバンビエツタだった物体をしばらく睥睨していたが、不意に感情を切り替え撤収に動き出した。

「マア良い。一時とはいえ大虚級メソスの霊圧を發揮できたのは想定以上の成果だ。残りのデータは技局で取るとするヨ」

「畏まりました。試製番号『バンビエツタ・バスターバイン』の霊髓部

を回収します」

「運搬に邪魔な肉体は灰にしる。どうせこれからまた新しく造り直す」

「はい、マユリ様」

聞こえてくる単語はどれも人を実験動物以下の存在として扱うものばかり。その狂人達が動かないバンビエッタへ近付いていく。

そこから先を許す程、キャンデイスとジゼルは人として堕ちてはいなかった。

「ッ、ジジ！ 女は任せた！」

「直ぐに殺してそっち加勢するからねーッ!!」

バンビエッタに群がる死神達へ、二人はさせて堪るかと思ひ掛かる。先に主犯のマユリと接敵したのは脚自慢のキャンデイス。

「クソがッ！ 絶対に許さねえ！ てめえだけは絶対ッ対に許さねえぞ!!」

「！ 流星に速いネ……！」

彼女には分からなかった。何故あんな嫌いな女の為に自分がこれほど憤っているのか。しかし戸惑いはあれど、胸に沸き上がるこの感情が今の自分の戦う原動力だという事は自覚していた。

「フン、滅却師風情が護廷の隊長相手に剣戟戦とは舐めてくれる。得意の弓矢はどうした？ エ？」

「ッ、だったら見せてやるよ！」

ギガジュール

5 G Jの大電力でテメエが灰にな

りやがれ!!」

―― ハイリツヒ・オブ・ファイア
神聖滅矢――

ガルヴァノブラスト

挑発に乗せられ距離を取ったキャンデイスは瞬時に霊子の大矢を準備。しかし彼女がその大技を放つ寸前、背後から大きな霊圧が接近してきた。

咄嗟に霊子兵装を弓から剣に戻し、迫る気配を斬り掃うキャンデイス。だが舞い散る血飛沫の中、彼女はあり得ない顔を目にした。

「く……ッ！」

「なっ!? てめえは……！」

襲撃者の正体は涅ネム。ジゼルがバンビエツタを助けに行くついでに殺すと言っていた女死神だ。何故この女が自由にしているのか分からず、キャンデイスは後ろのサボリ魔を責めようと振り返る。

「――浴びたネ？ ネムの血を」

だが男の嘔きが鼓膜に触れた直後、彼女の身体を恐ろしい虚脱感が襲った。

「あえ……？ う……あ……？」

ドサツと膝から崩れ落ちる。何だこれは。四肢どころか指も、目も、霊圧すらも動かせない。

呆けるキャンデイスは、しかし視界の端に自分と同じように倒れ伏すジゼルの姿を見つけ、一瞬で心まで凍り付いた。

「血棲蟲^{けっせいちゅう}。ネムの血液中を泳ぐ、対滅却師用^{クインシー}の人造靈蟲だヨ」

「うそ……ジジ、まで……」

「その蟲共は付着と同時に皮膚の毛穴から血管へと浸透し、七十二種類の即効毒を分泌する。元は七十だったが、生憎そのゾンビ娘には能力の性質上効くものが無くてネ。ネムが新薬の配合を終えるまでこうして君達と戯れていたのだヨ」

蟲、毒、血液。キャンデイスは奴が何を言っているのか半分もわからない。

ただ今の状況が途轍もなく不利である事。あれ程の再生能力を持つジゼルにさえ排除できない毒薬が含まれているのなら、自分達はこので終わりである事。それだけは彼女にも理解できた。

「何だネ？ まるで本気でこの私から逃げられると夢想していたような顔じゃアないか」

「ッ……」

「ああ、イヤ。確か君達は一度私の掌をすり抜けていたか。その成功体験に縋りたくなるのも無理はない」

ゆつくりと、男が地べたのキャンデイス達へ歩み寄る。

「前回はあの五番隊の男に余計な情報を渡さん為、例の”影”の中へ逃げる君らを深追いするのは諦めた。そして改めて言おう。二度目

はない」

掻き^か筆^{むし}れ——
足^{あし}殺^{そぎ}地^じ蔵^{ぞう}

黒化粧の死神が、金色の赤子を象った三又の斬魄刀を掲げる。刀身に漂う紫色の毒香はきつと碌でもないものだろう。

「安心し給え。あの死神代行ほどではないが、私も女性には紳士的だと評判なのだヨ。一切の苦痛なく、安全重視の特別設備で、その番号と同じ”貴孔^{アルケロス}”化の手術を行うと約束しよう」

「や……や、めろ……ッ」

想像する事すら恐ろしい未来が足音を立てて近づいてくる。瞼も麻痺したこの身体では、それから目を逸らす事すら許されない。

「もつとも私はこう見えて血の代わりに慈愛と礼節が血管を流れている男でネ。無知蒙昧な諸君にも、全人類の悲願たる超越種へと生まれ変わる幸運に、感謝の念が芽生えてくれると信じているヨ」

そんなキャンデイスを愉しげに見下ろし、マユリは彼女の未来を鎖す三支刀の切先を、その白い首筋に突き立てた——

……かに思われた、その時。

「——なッ……!!?」

凄まじい震動が大気中の霊子を揺らす。それは絶望の、緊張の極限にあつたキャンデイスすら一瞬で注意を奪われる程の強烈な寒気となつて、場の全員の背筋を奔り抜けた。

「……何だ、これは……!!?」

真つ先にその疑問を唱えたのは、気配の元である遠くの方角を凝視したまま固まる涅マユリ。だが未だ混乱が頭を占めるキャンデイス達とは異なり、彼の優れた脳髓と手元の観測機器は今し方の現象の正体を確と把握していた。

マユリが驚愕したのは、把握したその現象が、霊性科学的知見にお

いてあまりに信じ難いものであったからだ。

「莫迦な、あり得ん……！ この私でさえ循環器系を別に埋め込む荒業に頼らざるを得なかった『不可能』を、唯の人間如きが成し遂げるなど……ッ！」

寒気の正体であるその霊圧は、紛れもなく、この戦争にて男の知的好奇心を支配し続けている探求対象。注ぎ続けた情熱の行方。

ふと。彼の記憶中枢に、二年前にあの黒腔ガルガンタの制御門で受けた忌々しい屈辱的一幕が蘇る。

「アア、そうだ……思い出したヨ……！ 貴様には返してやらねばならん、虚圏ウエコムンダでの大きな『借り』があったんだったな……！」

戦局が大きく動いた遠くの戦場を、剥き出しの憎悪で睨む稀代の天才、涅マユリ。

その男の顔は、己を二度も虚仮にしてきた彼の“英雄”へ向ける、凜猛な笑みで歪んでいた。

「面白い……面白いじゃアないか……！ 相も変わらず、君は本当に私を飽きさせない男だヨ……！」

——黒崎一護……！

—*—

霊圧の暴風が大広場を抉り、幾十もの建物が地響きを立てて倒壊する。見えざる帝国における最も苛烈な戦場は、斯様な大災害を最後

に、嘘のように静まり返っていた。

「……ぐ……ッ」

パラパラと瓦礫の破片が落ちる微細な物音に紛れて、黒崎一護の苦痛を噛み殺す声が微かに響く。身体は血に塗れ、とても自慢の月牙天衝げつがてんしょうでこの恐ろしい光景を作った強者とは思えない。

彼にその屈辱を強いたのは、敵が誇る無敵の霊能ザ・バランス「世界調和」の力。それを操るハッシュヴアルトは先程の月牙の傷から一早く立ち直っていた。

「……理解したか？ 黒崎一護」

乱れた息を整えた青年は、意識の外からの奇襲で彼の無敵の力を攻略しようとした哀れな死神へ、その絶望の真実を諭す。

「我々星十字騎士団シュテルンリッターが持つ聖文字シユリフトは、ユーハバツハ陛下より賜った力だ。陛下が我等を必要として下さる限り、私の意識の有無如きでこの能力が封じられる事はない」

平然と佇むハッシュヴアルトに対し、同じダメージを転写された一護は地面に膝を突いたまま。

無理もない。操る能力の性質と、影シャッテンペレイヒの領域の神人として生きて千年の時間により、ハッシュヴアルトの耐久力は同胞の中でも群を抜いている。如何に天賦の才を与えられた英雄とて並ぶ事は難しいだろう。

…さりとて。

たとえ相手が立つ事もままならない状態であろうと、ハッシュヴアルトは油断するほど迂闊でも素人でもなかった。しかし彼が黒崎一護に近付こうと一步を踏み出した時、それは起きた。

「……上がお留守だぜ」

「……!!」

はたと見上げた先に、巨大な弧を描いた霊子の弓が浮かんでいた。その弓に番えられていたのは、一護の双剣の斬魄刀の片方。先程

放った月牙天衝の裏に隠して頭上の死角へ投擲したのだろう。随分と器用な真似をする。

そう。気付かぬうちに、ハツシユヴァルトは空からこちらを狙い定め一護の大技の射程範囲に踏み込んでいたのだ。

「大聖弓」……！ 神聖滅矢等とは比較する事すら烏滸がましい、滅却師の真正銘の奥義……！」

「へえ、そういう名前なのか。ユーハバツハの見様見真似だったから助かるぜ」

「この短期間でそんな技まで扱えるようになるとは、やはり陛下がお目にかかるだけのものは持っているか……」

一護の無知にも皮肉にも心動じず、ただ彼を見出した王への敬意のみを口にするハツシユヴァルト。しかし青年は即座に警戒を強め、言葉を重ねた。

「だが、黒崎一護。お前も既に解っている筈だ。意表を突こうが霊圧の塊を叩きつけようが、私の世界調和はお前が得る全ての幸運を、同等の不運で調和する」

大聖弓は周囲の霊子を吸収する滅却師の基本能力を身体から離れた空中に展開し、術者の霊子弓とは異なる新たな火点を設置する技だ。展開された霊子兵装自体が破壊されるまで無限に攻性霊圧を生成し続け、陽動、牽制、決定打とあらゆる戦術局面で活用できる。その性能は奥義の名に相応しい。

しかし如何な奥義とて、単純な霊圧任せの攻撃手段である限り、ハツシユヴァルトに与えた傷は必ず自分自身へと還ってくる。

それを知って尚、類似する攻撃を再三繰り出す理由は何か。黒崎一護の情報から予測できる様々な可能性を念頭に、ハツシユヴァルトは無防備に、されど一切の慢心なく、上空の大技の本質を見極めようとする。

「……ああ——三度目だ」

「!!」

だがハツシユヴァルトの澄ました顔は、一護を中心に渦巻く白いナ

二力を見た瞬間、驚愕一色に塗り潰された。

『これでようやく……あいつの力を引き出せる!!』

ハイリツヒ・ブフアイル
―神聖滅矢―

虚閃

その降り注ぐ漆黒の霊圧から逃れる術はハツシユヴァルトにはなかった。技の本質を見極める等という傲慢の代償は重く、青年は体中に走る激痛に相乗した、魂が蝕まれるおぞましい感覚に崩れ落ちる。

「ッ、莫迦な……虚閃、だと……!?!」

常識ではあり得ない現象に動揺するハツシユヴァルト。

それは滅却師クインシーの天敵たる種族の、それも奴等の霊圧因子が最も濃密な大虚メノスの力。神聖滅矢ハイリツヒ・ブフアイルを用いて発動するなど霊的に不可能な技であつたからだ。

『――笑顔はどうした、ハツシユヴァルト』

不意に名を呼ばれた青年は、目にした相手の姿に絶句する。

『あんたが見たがってた「想像の枠を超えた力」だぞ。もう少し嬉しそうにしたらどうだ?』

「貴様……それは……!」

挑発の言葉を超越す黒崎一護の顔には、頭頂から左の目元にかけて真っ白な物体がへばり付いていた。情報データにあつた、彼の母親に寄生した双角の改造大虚と同じ――虚ホロウの仮面の断片が。

『浦原さんに聞いた。お前ら滅却師クインシーが感情とか因縁とかじゃなくて、種族的に虚ホロウを苦手にしてるって事を』

一護が語る。その内容はこれまで単調な攻撃ばかりを繰り返してきた愚者の印象を大きく改めさせる、戦巧者らしいもの。

何故滅却師クインシーは、死神のように虚ホロウを“浄化”するのではなく、存在自

体を”消滅”させようとするのか。浦原喜助がその疑問から導き出した彼等の性質を聞いた一護は、此度の戦いに備えて先程の戦法を組み立てていた。

そして、引き出したその力の一撃がハッシュヴアルトに刻んだ大きな傷は、苦戦する一護の希望の標だった。

何故ならその傷だけが、これまで【世界調和】で釣り合わされていた不幸の調和を崩し、一護の身体に現れなかったのだ。

『何しかめつ面してんだよ。あんたの能力が効かなくなっただけで、普通は斬った斬られたの話は相手の方が強かったで終わる事じゃねーか』

「……顔を顰めもする。陛下に才を見出された男が、あろう事か自らに巢食う悍ましい悪霊の力で誇るべき滅却師の力を穢したのだからな……！」

鋭利な瞳を嫌悪の色で染めるハッシュヴアルト。一護は彼の言葉に眉を顰め、思う事から少しだけ自分の力の秘密を明かした。

それは彼が新たな斬月を手にするまで正しく意識した事のなかった事であったが、片鱗は既に二年前の藍染惣右介との決戦で現れていた。あの魔王を歓喜させた一護の急激な成長の本質は、そんな死中に活を求める状況に瀕して初めて引き出す事が許された、黒崎一護の唯一無二の力があるべき形に回帰した結果だったのだ。

『元々俺の斬魄刀の世界には斬月のオッサンと内なる虚の二人が居た。俺が体も考えも未熟だっただけで、あいつ等は初めから自分達を「二人で一つ」だって言ってたんだ』

「莫迦な……」

『まあ、つってもまだ全然使いこなせちゃいねえんだけどな。斬月の刀身に俺とあんたの滅却師の霊圧を山ほど叩き込んで、中の二人の力の均衡を崩して、そうしてやっと「誘い出せる」力だ。偉そうな事を言うにはまだ早エ』

謙遜に見合わぬ強大な霊圧が体から立ち上る。

一護の頭に過るのは、虚圏でこの金髪の青年に殺されかけた、ネリエルら破面の仲間たちの顔。

『悍ましい悪霊、か……』

「！」

『あんたは考えたことも、訊いたこともねえだろ。虚ホロウがなんで胸に穴が開いてるかを、なんであいつ等が仮面を被ってるのかをよ』

彼女らは、自分達にソレの断片を取り戻させてくれた恐ろしい魔王に。

ソレを育む方法を教えてくれた優しき軍団長に。

導かれる先に果てしない艱難辛苦があると知って尚付き従った、この世の迷い人。一度失った、かけがえのないソレを求め続ける、神に見放された悲劇の住人たち。

『構えろよ、ハツシユヴァルト。こっからだぜ』

そして、彼等の想いを胸に一護が引き出した奇跡の力は、容赦なく仇敵の滅却師クインシーを、その帝国ごと斬り裂いた。

『俺はあんたのいう、その”天秤の神”ってのが何なのか知らねえし、興味もねえ。けどもしソイツがあんたら滅却師クインシーの神だってんなら……』

「!!」

『——ソイツが救ってくれねえ虚ホロウの力が、その神のルールとやらに従う理屈は無ねえって事だろ!!』

月げつ | 王グ 虚ラ の 閃レ 光イ・セ
牙が 天てん 衝しやう |

石田ってSS編時点でクインシー・レットシュユティール使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

青白い細光が、濛々と立ち昇る砂煙の中で煌めいている。
瀟霊廷せいれいていを塗り潰して現れた滅却師クインシーの都市、見えざる帝国ヴァンデンライヒ。西洋中世風の街並みを露天採掘場の如き巨大な縦穴へと変えた黒崎一護の特技は、しかし標的の敵を完全に沈黙させるには至らなかつた。

『……流石にタフだな。今ので決めるつもりだったんだけどよ』
一護は煙の奥の気配へそう白状する。内心驚きながらも、彼に残心を解く気は一切ない。

『さっさと出て来いよ。前にあんたの仲間を倒したと思つて油断して、黒腔ガルガンタで痛エ目を見たからな。悪いが手負いの相手だろうと容赦はできねえ』

滅却師クインシーとは腕が千切れようが足が動かなくなろうが戦い続ける誇り高い種族である。昔仲間に彼等の美学を教わつた一護は、実際に虚圏ウエコムンドで戦つた男が乱装天傀らんそうてんがいなる霊術で無理やり身体を動かし立ち上がる姿を目にしていた。

そして、急かした甲斐あつてか。

ゾクリと背筋を震わせる殺気と共に、大穴の底から血塗れの青年――ユーグラム・ハッシュユヴァルトが飛翔してきた。

『ッ、上等だ！』

宙で剣を衝突させ、鏢で競り合う死神と滅却師クインシー。両者共これまでに負つた傷は多いが、より深く、消耗も激しいのは間違ひなく後者のハッシュユヴァルト。だというのに彼の戦意は未だ少しも折れていな

かった。

奴はまだ何か手札を隠している。一護は多くの修羅場を潜り抜け培ったその直感に従い、自身が優位な内に勝負を決しようとい気に霊圧を高めた。

「！」

『遅え!!』

危機を察知し阻止しようとい剣戟を激しくする敵へ一護は月牙の弾幕を放つ。斬魄刀の力の主導権が内なる虚ホロウに移行している今、斬月ざんげつの技には全て彼の霊圧が混ざっている。相手もこれ以上の負傷は避けたいだろう。

そして一護の作戦通り、ハツシユヴァルトが月牙を避けながら距離を取った。

『——!!』

掛け声を上げる間も惜しい。一護は退避する敵を囲むように全力で滅却師クインシーの霊術を展開する。

ザンクト・ボーゲン
——大聖弓——

虚バ弾ラ

視認すら困難な圧倒的な速度と数の弾幕がハツシユヴァルトに殺到する。月牙の火力で大気が吹き飛び、気圧が大きく下がった縦穴内へ大量の霊子が流れ込んで今しか使えない大規模戦列陣フライトサイテ。

だがハツシユヴァルトは神速の歩法を駆使し、最小限の被弾で弾幕の薄い上空へと逃れる。そしてそれは、一護が渾身の必殺技を叩きつけるために必要な、最後の条件だった。

『……礼を言うぜ。こんなモン、地面に撃ったらルキア達まで巻き込んじまう』

斬月の刀身から、同じ色の闇が噴出する。その恐ろしい漆黒の霊圧は空間を歪ませる程の破壊力を蓄え、巨大な二振りの斬撃となって頭上のハツシユヴァルトに襲い掛かった。

『終わりだ——』

月^{げつ} | 黒^{セロ}・オスキュラス
虚^{セロ} 閃^ス
牙^が | 十^{じゅう} 字^じ
衝^{しょう} |

グワン、と。まるで水面に映る景色のように世界が弛む。虚^{ホロウ}の頂点に君臨する最上級大虚^{ヴァーストロード}のみが放てる最強の虚閃^{セロ}を融合させた、絶死の刃。それは射線の全てを切り裂き、上空の遮魂膜^{しゃこんまく}を四片に斬断し、天の果てへと消えていった。

『ハア……ハア……、くそっ……』

一護は息を荒げ、大穴の淵に膝を突く。

虚化^{ホロウ}が解けていないのがせめてもの慰めか。思わず零れた舌打ちは、先程の大技を放った代償の重さに自分の未熟さを突き付けられた所為。

『まだ思うように力を混ぜ合わせられねえ……霊圧の反発が激し過ぎて体中の血管が焼き切れそうだ……』

斬月^{ホロウ}は虚^{ホロウ}、滅却師^{クイーン}双方の霊圧が内部で完全に融合している状態が正常である。しかしどちらか片方しか一度に引き出せない今の一護は、霊圧操作で二つを無理やり交互に練り合わせる事でしか力を融合させられない。今回は相手が受け身であったため十分な時間があつたが、必要となる手間や危険を考えれば歯痒さが残る。

こんな事でユーハバツハに勝てるのか。不安に駆られる一護だったが、事態は彼が想定していたものより遥かに悪かった。

『……な……』

焼けた霊子の白煙が晴れ、月牙で歪んだ空間が元に戻る。視界が徹ったその先に、一人の青年、ユーグラム・ハッシュヴァルトが立っていた。

あり得ない。今の一撃を耐えたというのか。一護は啞然と相手の

姿を凝視し、そして信じ難い異変に気付く。

『なんだよ……それ……！』

ハツシユヴァルトは妙な物を左腕に構えていた。白に金の装飾が施された、傷だらけな片手盾。恐らくは騎士盾カイトシールドと呼ばれる類の装備だ。

だが一護の最たる驚愕の理由は別にある。

その盾を下ろしたハツシユヴァルトの全身から、これまで一護が与えた傷の一切が消え去っていたのだ。

「——流石の慧眼です、陛下。黒崎一護が滅却師クインシーと虚ホロウの霊圧を融合させた力に目覚めている事実は勿論、私ですら気付かなかったこの能力の本質まで見抜いておられたとは」

畏敬の念を声に滲ませ、ボロボロの大盾を撫でるハツシユヴァルト。しばしその感触を噛み締めた彼は、愕然とする一護へゆつくりと視線を戻した。

「惜しかったな、黒崎一護」

『ッ、てめえ……何をしやがった……!?!』

しかし一護の問いには答えず、ハツシユヴァルトは彼を称える言葉を重ねる。

「我々の聖文字シユリフトの力を無効化する手段は限られている。お前が取った手段は、その中でも理論上最も正解に近い答えだった」

『舐めてんのか、てめえ……！』

解りきっている事を言うなど一護は吠える。

第一次侵攻の時、黒腔ガルガンタの中で敵の能力【牢獄ザ・ジエイル】に囚われた自分が何故脱出できたのか。そこから導き出された事実を深掘りすれば自ずと聖文字シユリフトの弱点に辿り着ける。

『俺がああ光の檻から抜け出せたのは俺の滅却師クインシーの力が覚醒したからだ！ 滅却師クインシーの力が聖文字シユリフトの能力を無効化するんだったら、そこにお前らの苦手な虚ホロウの霊圧を混ぜ込めば、『無効化』止まりの攻撃から『傷をつける』レベルにまで俺の技の『効力』を上げる事ができる！ そんな事はもうわかってんだ！』

そうだ。だからこそ解せない。

『なんで——何で滅却師クインシーと虚ホロウの力が融合した技で付けた傷に、効かねえ筈の滅却師クインシーの能力が効いてんだよ！』

左様。それは種族の特性を無視した、あつてはならない事だったのだ。

「可笑しな事を訊く男だ。この力の扱いは私より、お前の方が一日の長があるだろう?」

『何だと……?』

困惑する一護へ、ハツシユヴアルトが心底意外そうな顔で問う。しかし本心からの疑問だと察した彼はそれ以上の情報開示を控えた。

「……否いや。気付いていようがまいが、お前の未来の結末には意味を成さない事だ」

黒虚閃セロ・オスキュラスに二重の月牙天衝。現段階で想像し得る黒崎一護の秘めし力はこれで全て。最早奴と戦い続ける必要はない。

任務完了だ。

「お前は良く戦った。私の予想を何度も上回り、果てには陛下より授かりし我が聖文字シュリフトの力を凌駕するにまで至ったのだ」

『ッ、くそっ——』

「恐らく陛下を除き、我が軍の中でお前の霊圧の質に抵抗できる者は私だけだろう。正に特記戦力筆頭の名に相応しい、比類なき我等の”脅威”であつた」

そして滅却師クインシーの王が誇る第一子は、徐に左手の騎士盾を突き出した。

「その”脅威”の程を、その身で知り、誇るがいい」

—シュリフト聖文字”B”
—ザ・バラ世界調和

瞬間。世界が、事象が、理が反転する。

『グ……アアッ!?』

一護は激痛で千切れ飛びそうになる意識を死に物狂いでかき集め、辛うじて戦意を保つ。しかし足は震え、立つので精一杯。このまま無傷な相手と戦う事など不可能だった。

苦しみ地べたに跪く一護を見て、ハツシユヴァルトが同じように、されど明確に洗練された動作で首を垂れた。

何の真似だと憤慨する瀕死の一護は、そこで自分の頭の中と何かが繋がる奇妙な感覚を覚える。

「時間だ、黒崎一護。陛下のお言葉を拝聴せよ」

その時、聞き覚えのある低い男声が一護の頭の中に響き渡った。

— * —

「……………一護よ。私の声が届いているだろう」

はたと青年は顔を上げる。声の方角は直ぐにわかった。

ハツシユヴァルトが跪く先に聳える高い塔から、六芒の眩い光の柱が延び上がったのだ。

『ツ、ユーハバツハ……!』

途端、体中に押し掛かる重厚な霊圧。種族の戦法上気配を感じにくい筈の滅却師クインシーの親玉は、されどそこにいるだけで万物を平伏させる畏

ろしい王威を纏っていた。

その王が、我が子に告げる。

「感謝しよう、黒崎一護。我等を光の許へと導きし者よ」

どういう意味だ。斬魄刀で身体を支えて睨み上げる一護へ、王は語る。

「王鍵」
おうけん

『……………』

「霊王宮と下界を別つ天空の結界。王鍵とは、七十二層に互るその障壁を通過する為に霊王が与える証だ」

かつて藍染惣右介が求め、斯様な大戦争を引き起こした不可侵なる神器。その正体は霊王自らが選別した眷属——零番隊士の血肉臓骨そのものであった。

「星十字騎士団を鎧袖一触で倒し、グランドマスター最高位であるハツシユヴァルトと互角に戦うお前は、ソウル・ソサエティ尸魂界の輝く希望だ。その希望を苦戦する護廷十三隊の許へ送り届ける為、零番隊はお前に、自らの骨と髪で編んだ衣を与えた」

『！…それって……………ッ』

零番隊の骨と髪。一護は霊王宮で渡された自分の新たな死覇装を確認し、瞠目する。

「そうだ、一護。霊王宮と瀨霊廷の間に存在する七十二層の障壁を強制的に突破させる為に拵えられたその衣は、それこそが、私の求める王鍵おうけんそのものなのだ」

するとユーハバツハの腕の動きに合わせて、一護の足元から闇のように深い影が噴出した。

『なッ……………死覇装が……………！』

その影は一護の上衣に編み込まれた白い飾甲を浸食し、ボロボロに崩れた破片をユーハバツハの許へと運んでいく。そして塔の屋上に展開された昇降術の光陣に吸収された。

斯くして世界を滅ぼす滅却師クインシーの王の手に、神域の鍵が渡った。

「感謝しよう、黒崎一護。私の許へ王鍵を齎してくれた事を。お前こ

そ我が血戦における勲一等である」

唾然とする一護を塔の頂上より眺め、王が右手を開く。するとその合図に応え、後ろから一人の滅却師クインシーが進み出た。

「我が子の忠義を称え、褒美を取らず」
道を別つ戦友との、

最後の語らいの場だ

純白の軍服を着た眼鏡の青年。一護は、目にしたその人物の名を、よく知っていた。

『……石……田……？』

いつものいけ好かない澄ました顔でこちらを見下ろす彼は、大切な仲間——石田雨竜。

一護の中で微動だにせず立ち続けていた何かが、ぐらりと揺らいだ。

— * —

『な……なんで……』

何でお前がそこに居る。一護はそう問おうとするもあまりの衝撃に言葉が出ない。

そんな彼をしばらく見つめていた石田がふと、口を開いた。

「——凄まじい霊圧だ」

平坦な、されど確かな畏怖を含んだ声が、一護の鼓膜を震わせる。「最後に見たのは……君が現世である妙な破面アランカルを追い駆けていった時、だったか」

『石田……お前……』

「凄いな、あの時の君とは雲泥の差だ。その仮面の名残を見るに虚化ホロウも使い熟せているようだ」

——本当に強くなったな、黒崎

クールを気取ったひねくれ者の彼らしくない素直な賞賛。たった数日で随分と大人びた雰囲気アトモスフィアを纏うようになった友人の変容が、一護の困惑を深化させる。

石田は瞼を閉じ、全身の感覚器官で推し量るように一護の霊圧を感じていた。

「だけど……」

短い静寂の後。再び開いた彼の目は、鋭利な戦意に染まっていた。

「悪いな、黒崎」

『!!』

空気が張り詰める。

「生憎、この戦争に備えて新たな力を手に入れたのは……お前だけじゃない」

別人のような冷たい声色で紡がれた言葉に続き、石田の右手に霊子の弓が現れる。

ハイリッツヒ・プファイル
—— 神聖滅矢 ——
リヒト・レーゲン
光の雨

それは一護も良く知る滅却師クインシーの術。冠した名の通り、番えた霊圧を無数の光の矢に変えて射出する、石田雨竜の得意技。

しかし一護が見上げる光景は、彼の記憶とは全く異なるものだった。

——その”石田”とは、”石田雨竜”の事ですか？

数日前の虚^{ウエコムンド}圈。一護はキルゲ・オピーと名乗る神経質そうな眼鏡の滅却師^{クインシー}と戦った。その正体は新たな敵『見えざる帝国^{ヴァンデンライヒ}』の先遣隊を率いる指揮官であったが、彼が零した幾つかの情報の一つにこんな発言があつた。

——石田雨竜の神聖^{ハイリツヒ・プファイエル}滅矢が私より弱い？

——妙ですねえ、そんな筈は無い。

戦闘中の出来事だったため真意を知る事は叶わなかつた彼の台詞。しかし目先の危機の対処を優先し続けた短慮の代償を、一護は全てが手遅れになつた今、最悪の形で支払わされる事となる。

「お前には陛下を止める事はできない。命を無駄にする前に帰れ」

『!?!』

降り注ぐ石田の青白い霊子の矢。その数、威力は、明らかにキルゲや他の星十字騎士団^{シュテルンリッター}のそれを大きく凌駕し、一護にすら届く程の爆発的な進化を遂げていた。

仲間から並の隊長格を一瞬で穴だらけにする超級の大技を向けられた凄愴を嘆く事すら許されず、一護は光の瀑布に呑み込まれた。

『——なんだよ、それ』

恐るべき技だった。

しかしハッシュヴアルトとの戦いで満身創痍とはいえ、一護の底無しの霊圧は猶も健在。剣の一振りで視界を晴らした彼の身体に新たな傷は僅かに数えられる程。

『こんな……こんなモンの為に、そいつに付いたのかよ……!』

震える声の所以は悲痛。

以前の一護なら仲間の凶行を咎めるために反撃を躊躇わなかつただろう。だがもし石田が力を求めて悪しき超越者との取引に応じたのなら、それを責める資格は自分がない。取り残される悔しさから、有事に何もできない惨めさから、銀城空吾^{ギンジョウクウゴ}の手を取ってしまった黒崎一護には。

それでも。

『ッ、何とか言えよ！ 石田アツ！』

迷い、痛切、激情。混濁する思いに足を纏れさせながらも、一護は友の目を覚まさせようと必死に殴り掛かった。

……だが二人の友情が力を求めた相方に裏切られたのなら。それを取り戻させる者もまた、一護と共に戦うために力を磨いた、彼の友。その絆の形は、青年の拳を真正面から受け止めた二つの人影として現れた。

『——チャド!? 井上!?!』

闇色の腕とオレンジの光壁をそれぞれ操る二人は茶渡泰虎と井上織姫いのうえおりひめ。

虚圏ウエコムンドで浦原喜助の手ほどきを受けていた、一護の頼れる友人達であつた。

— * —

鈍い震動が腕を走る。

渾身とは言えない。しかし今の一護の攻撃を正面から防ぎ耐えられる者が一体何人いるのか。

見えざる帝国の精鋭達を一掃できる彼を止めたその二人組は、一護

の目を真つ直ぐに見つめていた。

『お前ら、なんで……！』

茶渡と井上。彼らの視線に射貫かれ、一護の心臓は凍り付く。
似たような事が前にもあった。あの月島秀九郎つきしましゅうくろうに仲間達の過去を
めちやくちやにされ、護るべき者達と望まぬ戦いを強いられた最悪の
体験。繰り返されようとしている悪夢に怯える一護は、咄嗟に後退
る。

しかし彼の危懼は、少女の笑顔で霧散した。

「……………よかったあ……………」

『！』

安堵の涙に潤む織姫の双眸。一護はそこに映る自分の姿を見て、彼
女の情動の理由にハツと気付く。

角の付いた白い仮面。一護の頭部を覆うそれは、少女にとっての恐
怖そのものだったのだ。

「…よかった…いつもの、優しい黒崎君だ……………」

『井上……………』

かつて魔王の崩姫プリンセッサとして異界に連れ去られた織姫は、自らの弱さ
のせいで大切な想い人を恐ろしい虚ホロウに変えさせてしまった。己が招
いた悲劇に未だ怯え続ける彼女もまた一護と同じ、心に消えない傷を
持つ仲間。その事に気付いた青年は慌てて拳を下ろし、「大丈夫だ」と
織姫へ笑みを向けた。

あの時とは違っていると、俺はもう自分の力に狂う事はないと、お前を怖
がらせたりなどしないと。この鉄火場において少しでも彼女に伝わ
るように。

「一護」

一方の茶渡は、蟠りを解きほぐす青年少女を守るように立ち、塔の
上の石田を見据えていた。名を呼ばれた一護は彼の背中から感じる
只ならぬ存在感に、思わず言葉を失う。

「石田の事なら問題ない。ここは俺達に任せろ」

『！ チャド……』

突き放すような言動に困惑する一護。石田が別次元の強さを手にした今、茶渡の主張はあまりに危険すぎた。

何言ってるんだ。皆が揃ったなら三人であの馬鹿を問い詰めるべきだ。何より仲間が互いと戦い合う姿なんて、俺はもう二度と見たくないんだ。

しかし無言でそう訴える一護へ肩越しに振り返った茶渡泰虎は、簡潔に、その一言を告げた。

「一護。お前にはやる事がある筈だ」

彼の琥珀色の瞳の奥には決意の炎が燃えていた。それを見た一護は、この口下手な相棒と交わした中学時代の約束の言葉を思い出す。

彼はその約束を、ここで果たそうとしているのだ。

『……ッ』

覚悟を決めるのに要した時間は、長くなかった。一度決めれば不思議と不安はなかった。そうだ、それがチャドの意思なのであれば、応えてやるのが俺達が望んだ友情のあり方だった筈だ。

『——わかった』

熱い思いを胸に、一護は相棒に背中を預け、ゆつくりと斬魄刀を正面に構える。

その切先の向く相手は、ユーグラム・ハツシユヴァルト。敵の親玉に戦意が見えない今、腹心の彼こそが自分達の最たる脅威。

一護のやるべき事は、一護にしかできない事は、この場で彼と雌雄を決する事なのだ。

そんな青臭い若者達を、昇降機の霊術光の中に佇むユーハバツハは静かに眺めていた。

「……成程、友に心を託すか」

それもまた、お前に与えられた道の一つだ。薄い笑みと共に王が謳う。

そして眼下のハツシユヴァルトを意味ありげに一瞥し、ユーハバツハは踵を返した。

「雨竜」

「……はい」

「永劫の訣わかれとなる。彼等と最後の言葉を交わす事を許そう」

それは新たな後継者への慈悲か、はたまた忠誠の神判か。

「後から主を追うが良い。私に全てを捧ぐ、お前の覚悟の是非は……」

——れいおうぎゆう 靈王宮の瓦礫の上で

問うとしよう

斯くしてユーハバツハは六稜の光に導かれ、天の果てへと消えていった。

一護はその姿を追わない。見上げもしない。奴と決着を付ける地はここではない。

茶渡と織姫に石田を任せたように、靈王宮にも世界の命運を託せる大勢の強者達がいる。後ろを振り返るのは彼等の力を疑う事を意味するのだから。

遠ざかる自らの”血”の因縁。だがそれを司る神王がこの世の何処へ行くとも、来たる黒崎一護の血戦は、運命は、既に最後の関門のみを残すまでに近づいていた。

——
*
——

『そこに居るんだろ？』 浦原さんうらはら』

ユーハバツハが去った後、一護はハッシュヴァルトと向き合いながら戦場の最後の登場者へ問い掛けた。参戦の機を窺い近くに潜んでいたその男は、茶渡たちがやってきた黒腔ガルガンタの陰からひよっこりと現れた。

「ちよつとオ、困りますよ黒崎サくん！ 折角隠れてたのに台無しじゃないっすかあ」

男子三日会わざれば刮目して見よ。霊圧は勿論、苦手だった霊圧感知力までピカピカに磨かれて、師匠一号として嬉しいやら寂しいやら。

そんな緩い誉め言葉を挨拶に、一護の側に降り立つ布帽子の死神。しかし剽軽な態度も一瞬。わざとらしく咳をし、浦原喜助は薄い笑みを張り付けた顔で問い返す。

「……サテ、アタシに御用との事ですが？」

『チャドと井上が、石田バカと話せるようにあの塔の上まで連れてってやってくれ。ここは俺一人で十分だ』

一護の注意は変わらずハッシュヴァルトへ向いたまま。微動だにしない彼の姿に気圧されるような何かを感じながらも、浦原は青年の頼みに愁眉した。

「いやア、そうしたいのは山々なんですけどねエ……」

男は一息置いて言葉を整理すると、真剣な声色で一護へ語った。これまで戦いを観察し推測した事は勿論、虚圏ウエコムンダに残った滅却師クインシーの残党を尋問して得た、信憑性の高い情報だ。

「ユーグラム・ハッシュヴァルト……千年前、山本総隊長率いる初代護廷十三隊との戦いで生き残った数少ない古参の星十字騎士団シユテルンリツターで、ユーハバツハと同じ『力を分け与える』能力を生まれ持った、非常に稀有で高貴とされている滅却師クインシーです」

その能力が聖文字シユリフトを授かる儀式を経て覚醒したのが、「自身が被つ

た不都合な事象を相手に分け与える能力」——世界調和であると浦原は分析する。

だが彼が真に警戒しているのはもう一つの、青年の不死性を司る力【身代わりの盾】。発現の瞬間を観測していた浦原は起きた現象や効果、霊圧の性質等の多角的視点から能力の正体に当たりを付けていた。

「……アナタも気付いているんでしょう？ 彼と直接戦った黒崎サンなら尚の事」

否、この戦いだけでは判断する事は難しい。だがそれは、一護が相対した過去の敵を想起すれば、気付けぬ筈の無い恐るべき真実。

能力の発動時に瞬いた淡い光の粒。

能力が”盾”という「物体に具現化する」力。

滅却師と虚の融合した霊圧で無効化できない、世界調和とは異なる概念を強制する能力。

それらの特徴が全て該当する霊能は、一つしか存在しない。

——
シールド・オブ・カマラデリ
——
身代わりの盾

滅却師ユーグラム・ハツシユヴァルトとは——『完現術師』の才を持つ二重能力者である。

「……銀城空吾や月島秀九郎。あの『XCUTION』の方々を知るなら……いいえ、何よりも井上サンの力を知る黒崎サンなら理解している筈です。完現術という霊能の異質さに」

能力の篡奪。過去の改変。事象の拒絶。

性質を考えれば一目瞭然。あれらは全ての力を超越する理の領域のものであると浦原は言う。

「虚の霊圧に弱い滅却師の能力とは違い、完現術には他の霊能との相克関係はありません。今の黒崎サンではどう足掻いても、あの”盾”の力を攻略できないんス」

それはその名を三界全土に轟かせる、最高の霊性科学者である彼の

導き出した結論。

銀城空吾曰く、完現術フルプリングとは虚ホロウに由来する能力である。彼の仮説を裏付けるのは、一護や茶渡泰虎のような虚ホロウの気配を色濃く反映する能力や、一部破面アランカルの概念規模の能力を持つ者達の存在だ。

しかし科学的根拠を重視する浦原喜助は、銀城の実例的根拠に偏った仮説には最初から懐疑的だった。

彼の頭に過るのは自身の最高傑作である、崩玉ほうぎよくの存在。その研究過程で触れた多くの、知るべきではなかった真実が、脳裏で囁くのだ。もし、完現術フルプリングという霊能の本質が虚等ホロウではなく、己の危惧している通りの、更に上位の霊格に因るものであったのなら。そしてその力が滅却師クインシーの霊子隷属の力と融合しているのだとしたら。

それは空間そのものを自らの理ことわりの支配下に置く、無敵の結界となる。

さすれば黒崎一護の勝機は――

『……ありがとな、浦原さん。色々教えてくれて』

一護の言葉が、長い沈黙を掃う。そこに籠められた真意を測れず、浦原は今一度彼を諭すために口を開いた。

「黒崎サ――」

『けど、大丈夫』

しかし返ってきたのは、その先を言わせない青年の静かな断言。そして直後。

浦原はまるで己の立つ世界そのものが爆ぜたかのような、途轍もない衝撃に襲われた。

「……………!!?」

反射的に飛び退こうとした意思は確かにあった。だができなかった。

それは何の予兆も無く、唐突に。男は全身の細胞一つ一つに至るまで、周囲の霊子を、大気を押し潰す強大なナニカに呑み込まれていた。

気が狂ったのでも、何らかの幻覚に囚われたのでもない。浦原喜助はただ、自身が目の前の青年の圧倒的な霊圧に当てられただけなのだと即座に理解できなかった。

何故なら彼の優れた感知力は、およそ霊圧と呼べる類の青年の気配を、その名残すら捉えていなかったからだ。

「黒崎サン、アナタは一体……ッ」

霊圧の消失。魂魄の霊威が形而の地平を越える事で起きる現象。かつて自らの全霊力を使い尽くす事でこの人間の青年が至った神々の領域を、ともすれば凌駕すらしているかもしれない絶大な力の片鱗。

戦慄する浦原へ、双剣の勇者は言葉の真意を述べる。

『チャドと約束したんだ。俺はここで……』

”あいつに勝つんだ”

——つてよ

その台詞に込められた決意の大きさは、彼が発する膨大な霊圧が語ってくれた。説得の言葉など必要ない。青年の、黒崎一護という存在が、その不可能を可能とする手段の答えそのものだったのだ。

「……大変、良う御座んす」

気付けば浦原は笑っていた。足は今にも竦んでしまいそうで、蟀谷からは滝の様な汗が流れ落ちる。しかし男の身体を震わせる本能的な畏怖心は、それを遥かに超える期待の高揚感に塗り潰された。

これ程のものを見せられては、如何な手出しも野暮になろう。

——ご武運を、黒崎サン

決戦へ挑む「霊界の英雄」の力になるべく数多の手段を用意していた浦原喜助。その彼が実際に用いた唯一の手札は、自慢の弟子へ、そんな短い激励を送る事だけだった。

— * —

「祖たる滅却師クインシイの王は昇る。

六芒の星が照らす光に導かれ、帰るべき父の御許へ。座すべき至高の頂へ。

神に仇なす悪魔レメゲトの諸侯を阻むための、神シエムの七十二の名を冠す障壁も。天地を隔てる千里もの果てしない距離も。最早かの者の障害とはなり得ない。それが他ならぬ神によって遣わされた「王鍵」によって開かれた道であるのは皮肉か、天命か。

「——おつとつとオ！　ここが何処だか知らねエのかい？」

祖たる滅却師クインシイの王が降り立ったのは、白木の列柱が建ち並ぶ天空の宮廟。厳かな霊圧で満ちるその表参道に白濁の熱湯を操る男が居た。

「ここは天下の霊王宮、一見サンはお断りだぜ！」

——零番隊ぜろばんたい・東方神将とうほうしんしょう——

「泉湯鬼せんとうき」

麒麟きりん寺じ 天次てんじ郎ろう

豪快に着崩した死覇装。湯櫃を模した斬魄刀。祖王の古の記憶に残る死神、神の近衛の第一官。

またそれは男の後ろに聳える大階段よりこちらを見下ろす、別の人影も同様。

「——久しいのう、ユーハバツハ。しもべ共が見当たたらぬが……矢張りそちは僑軍孤進が似合いの男よのう」

——零番隊・北方神将——

「大織守」

修多羅千手丸

六本の傀儡義手を背に生やした細身の女。光の帝国を率いた先の大戦にて配下の軍服を死の衣へ一変させた神業の織部司。

先の湯男といい、かつて下界を守護する護廷十三隊の隊長として剣を交えた者達とこんな所で戦う日が来ようとは感慨深い。

二人の顔ぶれから過去へ思いを馳せていると、突如周囲の四方八方から巨大な樹木の根が伸び、参道ごと祖王を檻のように包み込んだ。

「ハイハイハイハイ、そこでお止まり！ これだけの規模の”産褥”を設えたのは久しぶりさ、そう簡単に逃がしはしないよオ」

——零番隊・西方神将——

「穀王」

曳舟桐生

術者は根の一本に腰掛ける肥満の巨女。百年ほど前に近衛の一席に列せられた新米隊士とは此奴の事か。

そして祖王の視線の先は、最後に姿を晒した喧しい男。全死神の魂の半身である斬魄刀を生み出した、刀鍛冶の神へと向かう。

「——十、九、八、七、六、五枚！ 終いに参、My♪ 二枚屋Oh
— E t s u ! — 一番イケてる零番隊士の登場Da！」

——零番隊・南方神将——

「刀神」

二枚屋王悦

その死神は洋服の上着を羽織った奇抜な装いをしていた。当時とは大きく変わった風体が新鮮だが、感じる気配はやはり一同でも別格の強者のそれ。

「零番隊^{ぜろばんたい}”王属特務”」。

ソウル・ソサエティ

尸魂界の歴史の輝く一頁を己が手で書き刻み、神の眷属として神域に迎えられた、得難き偉人達の天軍だ。

「……出でよ、神兵衆。この不屈き者を誅せ」

一柱の命に従い多数の人型が、暖簾のように裂けた空間の隙間から飛び出る。新米の女眷属が発明した「義魂」なる人造魂魄の兵隊。死神らしい実に冒濫的で哀れな玩具だ。

祖王は殺到してくる神兵衆へ聖兵隊^{ソルダート}を差し向ける。帝国と空間を繋げる影の領域^{シャッテン・ペライヒ}より突入した彼等は、神域の濃密な靈子濃度に耐えかね多くが倒れたものの、王の御前より敵兵を退ける仕事は成し遂げた。

「存外慎重ではないか、靈王の下僕よ。まさかお前達が雑兵を捨て駒に私の力を推し量ろうとするとはな」

「その甲斐はあろう？ 現にたつた今、そちが態々其奴等呼び寄せてまで隠したい力を有していると知れたのだから」

挑発。小手先。まるで盤上の遊戯の如き敵の応酬を、滅却師^{クインシー}は鼻で嗤う。奴等は本気でこの祖王を相手に勝利を掴めると夢想しているのだ。

「成程……私が眠りに就いている間に、随分と驕傲の甘さを覚えたようだな。死神共」

「ほづっ」

なんと虚しい事か。どうやら我が言葉も、願いも、千年の時の狭間に忘れ去られてしまったらしい。

「私は争いを好まん。塵芥の相手など我が兵卒で事足りる」

そうだ。ハッシュヴアルトを黒崎一護の許へ残したのも。雨竜に仲間との絆を清算する暇を与えたのも。この地を墜とすのに彼等の

力は不要である故。

「そしてお前達は……」

我が親衛隊が、相手をしよう

その言葉と共に、祖王の足元を這う影の中から、四つの白い輪郭が浮き上がった。

「——おつとオ」

——シュテルンリッター星十字騎士団 ” デーD” ——
ザ・デスデーリング致死量

ASKIN NAKK LE VARR

撫で付けの髪型の整髪料を気にしてか、真つ先に外套のフードを取ったのは若い二枚目半の男。どこか弱気に辺りを見渡す彼の様子には敵味方共々眉を顰める。

「よく見たら下の連中の中で連れてきて頂いたのは俺だけかよ。こいつは活躍しねエとなア……」

「そうだな！ 貴様が役に立たん様なら我がわれが斬り捨ててやるとも、ナツクルヴァール！」

——シュテルンリッター星十字騎士団 ” エムM” ——
ザ・ミラクル奇跡

GERARD VALKYRIE

続いて先頭の巨漢が外套を脱ぎ棄てる。黄金の円盾に神銀の片手剣。見事な肉体美を晒したその立姿は、宛ら西洋神話の大英雄。

しかし、そんな派手な大男より目を引く者が彼の後ろに居た。

「……………、……………」

——シユテルンリツッター星十字騎士団 ” C ” ——
強制執行ザ・コンパルソリイ

P E R N I D A P A R N K G J A S

ズルズルと這うように、あるいは飛び跳ねるように歩行するソレは、全身を覆う白衣で隠せない異形の姿をしていた。平凡な背丈と、裾の間から見える左手から、辛うじてその身が人であると窺い知れる。

そして残る四人目。背中に身の丈大の銃器を背負った男が、一同の中で最初に動く。

「——同じ個所を連撃しても直ぐに再生する。堅牢な術だね、どうしようか」

——シユテルンリツッター星十字騎士団 ” X ” ——
万物貫通ジ・イクサクシス

L I L L E B A R R O

手始めにと、周囲を覆う大木の檻へ発砲する色黒片目の青年。肩を竦め謙遜している彼の弾丸は、しかし零番隊の誇る超霊術の樹根を確かにぶち抜いていた。

彼等は見えざる帝国が誇る最強部隊、シユッツシユタッフエル親衛隊。人命が最も軽い「戦争」の地獄を体現する力を有しながら、その類稀なる「不死性」によって選ばれた、祖王の盾である。

「うへエ、どいつもこいつも強そうだ。下の奴等でも厄介だったのにヤンなつちやうぜ……」

死神。滅却師。クインシー両陣の精鋭達が向かい合う。

「お、なんだ？ 霊圧を出してもいねエのに見抜きたア、ズイブン勘のいい奴が居るじゃねえか」

「それは重畳。妾わらわの離殿には我等を雑魚と見誤る愚物に着せる服の用意が無いのでな」

双方共、種族の歴史より選り抜かれた時代の頭目。

「……只の皮肉だよ、ナツクルヴァールなのね」

「え”っ!?! いやいやリジエさん、俺はあんたらと違ってただの成り上がりの元劣等生だからよ……!」

「何を言ってるんだ。今まで居たかい？ 僕らの前で……”劣等”じゃなかった奴なんて」

其々の得物を握る選り抜れし八名。放つ霊圧が空を震わせ雲を薙ぐ。

「H a h a h a ! なんて S o s m o o l Y o u r 世界!」

「……ならば知るがよい、不屈きな亡霊共」

此れより始まるのは三界の新たな秩序を決す、終末大戦。

「ここは俺達スカット・ゼロ零番隊のテリトリー♪ 雑魚雑魚に通らす道は無エ」

「黙って」 「まとめて」

——かかってきな Y o ——

霊王。祖王。互いの神の御前にて、勝利の二文字を捧ぐべく、戦士達は激突する。

かくして神話に語られる戦いの幕は切って落とされた。

— * —

——友に心を託す、か…

祖王の言葉が、頭の中を渦巻く。

握り緊める剣の柄。そこに埋め込まれたバッジを指の腹で撫でるユーグラム・ハツシユヴァルトは、去り際にユーハバツハが己に送った一瞥の意味を正しく理解していた。

陛下の玉眼に見抜けぬ秘密は、知れぬ事はない。故にハツシユヴァルトの抱える心の影も、最初からあの方の既知となっているのだから。

青年は気付いている。ユーハバツハが石田雨竜へ向けた忠誠の是非を問う言葉は、同時に自分に向けたものでもあるのだと。

心の乱れはない。疑うまでも無く、このユーグラム・ハツシユヴァルトは神王第一の臣を自負している。

しかし事実、ハツシユヴァルトは黒崎一護と浦原喜助が接触する様子を視界に認めておりながら何もせず、唯々ぼんやりと放心してしまっていた。

「——ッ!?!」

そんな彼の身体に、突如として凄まじい霊圧がのし掛かる。驚愕し前を向くと、そこにはかつてない存在感を放つ黒崎一護。

「ッ、何故だ…その傷で、どこにそんな霊圧を隠して…!」

虚ホロウの力を受けた時のような嫌悪的な拒絶反応ではない。魂にまで届く、より根源的な恐怖が、青年の揺らぐ心を更に乱していく。

引き出しの底は暴いた筈だ。死神の力も、滅却師クインシーの力も、虚ホロウの力も。残る完現術フルブリンクとやらも既に銀城空吾に奪われた後。

なのに何故、この男は斯様に不利な戦況で微塵も動揺を見せないのか。こんな莫迦げた力を漲らせているのか。

何故こんな。

“こんな望むがままに” 天秤” を振り切る不遜で傲慢な餓鬼に、これ

ほどの力が――

『……斬月の刀身が黒い所為で勘違いしたか？ それとも今までの俺の霊圧を見て、そう思ったか？』

「何ッ……？」

焦燥と憎悪の混じったその疑問を受け、黒崎一護が問い返す。淡泊に「数も二本に増えたしな」と補足して。

そして忌むべき死神はハッシュヴァルトへ、その真実を告げた。

『誰か言ったか？ この二振りの斬月たちが――俺の”卍解”だってよ』

「……!!？」

瞬間、青年は剣を捨て両腕の全力で身代わりの盾を構える。理解と行動は同時だった。

これまで全ての強敵と常に卍解状態で戦ってきた黒崎一護。多くの者に忠告される自身の”甘さ”を補い、意地を通す為の全力戦法。彼の天鎖斬月もまた、そんな主の思いに応えた長時間の戦闘を可能とする卍解だった。

ハッシュヴァルトは気付かぬ内に無意識で思い込んでしまっていたのだ。この戦いの黒崎一護もそうなのだ。

――駄目だ、これは防げない

「往くぜ、ハッシュヴァルト」

相手の覚悟を確認し、一護はゆっくりと二振りの斬月を正面で交差させる。高まる霊圧が、始解状態の斬魄刀の、最後の壁を超えていく。

離反した友は、同じ友に。敵の親玉は仲間達に。皆に他一切の事を託し、「迷い」という重石の消えた彼の心が、底の見えない黒崎一護の潜在能力を惜しみなく組み上げた。

そして。

「……悪い、みんなが待ってたんだ」

もう……

終りに

させてくれ——

天^{てん} |
鎖^さ 卍^{ばん}解^{かい} |
斬^{ざん} |
月^{げつ}

一閃。霊圧の竜巻を斬り裂く巨大な光が瞬いたその直後。
咄嗟に盾を消してしまったハツシユヴァルトは、灼熱の感覚と激痛
を最後に、意識を暗闇に叩き落とされた。

聖別つてSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

その赤子は目も見えず、耳も聞こえず、口もきけず、動く事さえできなかつた。

生き延びる術を何一つ持っていなかったが、赤子の胸に恐怖はなかつた。

泣き声を上げなかつたのは喉が使えなかつたからだ、使えていたとしても泣き声を上げる事はなかつただろう。

赤子は知っていた。自分が生きる術を持たなくとも、生き延びられる事を。

周囲の人間達は赤子の事を宝物のように愛した。赤子に触れると、触れた者の欠けているものが、少しずつ回復していったからだ。

肺を病む者の肺は癒え、寂しき者の心は満たされ、臆病な者には勇氣が湧き、かたわの者でさえ失った四肢を取り戻した。

人々はそれを奇跡と呼び、そして奇跡を得た者の魂が、死と共に赤子の許へ飛んでいく様を見て、人々はそれを「神の御許へ還る幸福」――

『アウスヴェーレン聖別』と称したのだ

ヴァンデンライヒ
見えざる帝国における最も激しい戦闘が終わりを告げた。

美しかった都市の街並みは、今や辺りに転がる煉瓦や石材の破片に微かな名残が見える程度。

その中心の大地を裂く底無しの谷の淵に、二人の青年が居た。

一人が地面に伏し、佇むもう一人が相手を見下ろす。それが両雄の決闘の幕切れであった。

「……………」

佇む片割れ——黒崎一護は倒れた自らの敵を無言で見つめていた。彼の顔に勝者の笑みはなく、ただ晴れぬ心の内のみを表に覗かせる。

ユーグラム・ハッシュヴァルト。一護が戦った名だたる敵の中でも三指に入る超越者。しかしその激戦の結末は、相手の自滅に等しい不本意な終わりであった。

一護の新たな正解は確かに相手を圧倒していた。しかしその一撃を振り下ろした時、ハッシュヴァルトの身を守るものは何もなかった。

ハッシュヴァルトはあの時、全身全霊を投じて構えた防御の手段であるあの「純白の盾」を、直前で手放したのだ。

「……………なんで……………」

ぽつりと零れる独り言。不可解で、屈辱的で、だけど何かとても大きな思いを感じる、敵の咄嗟の愚行。

不本意に唇を噛み締める一護は、さりとて敵の本心に漠然と気が付いていた。

——あたし達の力はね、”愛”の能力なの！

それは少し前の事。数奇な出会いで交友を深めた毒ヶ峰^{どくがみね}リルカという少女が自身の霊能についてそう説明していた。

愛着。惚れ込み。因縁。何かしらの強い感情を基にして、”物”の魂を使役する能力。先程の浦原喜助の言葉で疑念を確信に変えた一護は、この滅却師^{クインシー}の青年がかつての自分達と同じその力——完現術^{フルブリンゲ}の才を持つ人物であると認めるに至った。

そんな彼が見せた、己の命よりあの盾の無事を優先するかのような行動には、一体どんな思いが込められていたのだろうか。そしてそういった心の動きを戦いの中で感じ取り、その本質を察する事において、一護は天賦の才を秘めていた。

「……………悪イ、麒麟寺^{きりんじ}さん」

死覇装に縫い込まれた”王鍵”は奪われてしまったが、戦いの傷を癒す霊王宮の超霊術は失われていない。一護は製作者に軽く謝り、腕に巻き付くその黒い帯をハッシュヴァルトの側で解く。帯はひとりで短く千切れ、彼の肩から胸に走る致命的な大傷に張り付いた。

これ以上の長居はできない。ハッシュヴァルトの霊圧が安定し始めたのを感じた優しき英雄は、絆を取り戻す戦いに身を投じる友たちの許へと急ぐのだった。

—*—

「……来たのか、二人共」

感情の無い平坦な声。昇降の霊術光が照らすその塔の屋上で、井上織姫は仲間の茶渡泰虎と共に、声の主の青年——石田雨竜と対峙していた。

「黒崎にも言ったけど、生憎と僕は君達の許へ戻る気はない。帰ってくれ」

それはこれまでの友情を感じさせない冷やかな言葉だったが、織姫は身動き一つせずに彼を見つめ続ける。隣の茶渡も覚悟の程は彼女と変わらず、梃子でも動きそうにない二人を見て、石田が溜息を吐いた。

「……と言っても無駄なのは分かってるよ。君達はたとえ僕と戦う事になっても、その身が動けなくなるまで諦めてくれないって事もね」

白衣の青年の右手に霊子の弓が現れ、向かい合う三者の間の空気が張り詰める。だが完現術師の秘密結社『XCUTION』に仕込まれて仲間同士で争った記憶を微かに残す青年少女に、動揺は少ない。

百の言葉でも届かず、一度の戦いでしか交わせぬ心がある。争い事には不向きと多くの協力者達に評される織姫さえも、これがそうなのだと魂で感じていた。

「説得も無意味。決闘も無意味。なら残る手段は一つ」

『!!』

そして友と道を別ち、心を隠した石田雨竜が最初に動く。

「君達が指一本動かさなくなるまで、徹底的に痛めつける事にするよ」

ハイリツヒ・ソフファイユ
神聖滅矢

苛烈な台詞に反し、彼が放ったのは普遍的な霊子の矢。しかし黒崎一護の新たな月牙天衝げつがてんしょうがそうであったように、石田のソレも今や一発一発が並の正解の一撃に等しい規格外の技へと昇華している。それが茶渡達へ、まるで機関銃の如き連射速度で襲い掛かった。

永遠に等しく思えた破壊の暴風は、実時間において十秒に満たない。その間に石田が放った霊子矢の総数は丁度、百。貫通力よりも相

手の霊圧を削る事を重視した彼は、この不毛な戦いの終わりを期待し茶渡と井上の様子を確認する。

しかしその期待は驚きへと変わり突き返された。

— 盾舜六花しゅんじゅんりっか —

三さん天てん結けつ盾しゅん

ユーハバツハの昇降術の霊光で照らされる戦場においても、確とした存在感を放つオレンジの光。以前は強敵の攻撃を防ぐまでには至らなかった彼女——井上織姫の三角盾は、石田の生まれ変わったハイリツヒ・プファイナル神聖滅矢の弾幕を受けて尚、傷一つついていなかった。

「……驚いたな。井上さんがあの虚霊坤ロスヴァリエスに招かれて修行をしていたのはハツシユヴァルトから聞いてたけど、まさかそこまで技を磨いていたなんて」

石田の中には、織姫が未だ誰にも語らないその秘密を暴く事に少ない罪悪感があった。それは彼なりの非紳士の言動、仲間意識の拒絶であったが、チラリと窺った少女の真剣な顔に動揺の色は見えない。

「虚霊坤の名前を出しても動じない、か……強くなったのは目に見える”力”だけじゃないと考えた方が良さそうだ」

そう呟くと、ようやく織姫が口を開いた。

「よかった。あたし達とちゃんと向き合ってくれるんだね」

「……え？」

だが予想外に前向きな彼女の発言に石田は困惑する。そして直後、彼は織姫の真意を知る。

「石田くんは、もうあたし達との戦いで油断しない。だったらあたしも、これであなたと」

——本気で戦える

変化は突然。ふわりと妙な浮遊感を覚えた石田は、咄嗟に足下を見、そこで起きていた現象に驚愕する。

「なっ、床が……！」

パチパチと不気味な光粒が瞬き、彼が立つ塔の屋上が崩れていく。慌てて飛廉脚で霊子の足場を構築したが、織姫にとってその一瞬は十分すぎる攻撃の隙だった。

髪留めが輝き、小さな流星となって射出される。

「お願い、椿鬼くん」

— 盾舜六花 —

孤天斬盾

それは仲間の誰もが知る優しき少女のほぼ唯一の攻撃手段。石田は彼女の技の威力が今の自分に到底及ぶものではないと認識していたが、警戒を高め回避を試みた。

その判断が正解であったと、石田は織姫の技に掠った自分の外套の末路を見て理解する。

「……何だこれは……!?!」

思わず零れる驚愕の声。少女の弧天斬盾は彼の衣類を切り裂くだけでなく、裂いた切り目から外套全てを、パラパラと霊子の粒に分解し始めたのだ。

だが慄く石田は更なる脅威に晒される。

「余所見はダメだよ、石田君。あなたの相手は……あたし一人じゃない」

織姫がそう告げた直後、青年の背後に新たな気配が現れた。

「なっ……」

そこに居たのは、いつの間にか後ろに回り込んでいた茶渡泰虎。彼の足元には、屋上の床を崩壊させた織姫の謎の術と同じ光の粒が瞬いている。

それを見た石田は立て続けの混乱にも惑わされずその正体に気付く。これは最近の現世での戦いで僕を斬った、あの”月島”って奴が使っていた瞬歩とも響転とも異なる独自の歩法術——

「……油断は侮辱だ、石田」

— 巨人の右腕 —

— エル・デイレクト・アマール —

— 巨星の一撃 —

間一髪、石田は襲いかかる巨大な拳を弓の弧で受け流す。帯びる膨大な霊圧が尾を引き、巻き込まれた大気が大爆発を起こした。

「ぐ……ッ！」

織姫に体勢を崩された直後の視界不良に、広範囲の衝撃波。飽和する情報量が遂に処理限界を超え、石田は爆風に吹き飛ばされながら前後不覚に陥る。

そこに届く、若い少女の、決意に満ちた宣言。

「——あたし達は二年前に朽木さんを助けるために集まってから、黒崎くんに迷惑かけてばかりだった」

仲間なのに護られてばかりの、足手まとい。

「敵と戦いになった時、黒崎くんに本当の意味で頼りにされてたのは、多分、石田くんだけ」

一度力を失った者同士で通じるものがあつたのか、実際に背中を預けられる強者としてか。二人の間には織姫自身や茶渡とは違う、より深い仲間意識があるように見えた。

「あたしも茶渡くんも、それがすごく悔しかった」

そんな二人から疎外される弱い自分達だけが、結局、あの月島秀九郎の能力の影響を受けて一護と敵対した。

「悔しくて、悔しくて……」

己の力を磨き、その本質を探究した。

己の心を見つめ、弱さに抗う術を模索した。

そして。

「やっつと、ここまで来れた」

「!! しまっ——」

石田の乱れる視界の端で、五人の小さな妖精達の姿が映る。頭上で旋回する彼等は美しい五芒星を描き、攻勢霊圧の矛先を彼へ向けていた。

「私達はもう、誰一人として」

足手纏いじゃ無い

五 | 盾舜六花
天 | 戦盾
盾 |

降り注ぐ巨大な光の波動。想像を絶する覚悟を秘めた少女の一撃は、思いは、超越者の領域へ足を踏み入れる石田雨竜へ、確かに届いていた。

— * —

「……………引き裂かれた聖片が集いつつある」

霊王宮の門前。表参道に張り巡らされた『命の樹』^{いのちのき}によって周囲の霊子が悉く喰われる中、ユーハバツハは尸魂界^{ソウル・ソサエティ}の各地に現れ始めた者達の気配を、霊圧ではなく魂で感じ取っていた。

黒崎一護を追って尸魂界へやってきた者。現世で浦原喜助に要請されてきた者。魂葬^{こんそう}され流魂街へ送られた者。必然偶然問わず、彼等は皆自身の意思に従いこの戦に身を投じている。しかし遙か天空より俯瞰すれば、それはまるで一つの大きい意思によって引き寄せられているかのように見えてならない。

そして己もまた、かの大きいなる意思の一部に過ぎぬ、未だ矮小な墮し子。ユーハバツハはその事実を屈辱と共に噛み締め、悲願を果たす決意を新たにす。

もう直ぐ、我が忌むべき因果の根を絶やす事が叶う。
そう来たる未知の世を夢想するように。

「——さて」

目を瞑り沈潜していた祖王が、ゆつくりと瞼を開ける。

「勇敢な仇敵を称賛しよう、零番隊諸君。宣戦布告からの火急な備えと努力は実を結び、お前達は見事——我が精銳、親衛隊”を倒すに至ったのだ」

その視界に映り込むのは、佇む四人の死神と、倒れ伏す四人の滅却師。激突した彼等の勝敗は、しかし両陣営の頂上決戦の魁らしからぬ一瞬で決していた。

「……負け惜しみにしては悪辣じゃな、ユーハバツハ。近衛の本懐を遂げた臣等を前に吐いてよい言葉ではないぞ」

修多羅千手丸。衣類を処刑具同然の凶器へ作り変え親衛隊を翻弄した妙齢の女が吐き捨てる。その言葉に同意するように左右の死神達も口を開いた。

「あたしの『命の樹』は周囲の霊子を根こそぎ吸収し自身の生命力に還元する。周囲の霊子を奪って戦うあんた達滅却師にとって、ここは完全な死地だよ」

「ユーハバツハ。て前エ、それを見抜いてて部下共を俺らの懐に突っ込ませたな？」

曳舟桐生と麒麟寺天示郎。特に後者の強面の男は治癒を司る回道の巨匠であり、かつて若かりし山本重國の被害を鑑みぬ苛烈な指揮戦術に反発していた彼は、当然ユーハバツハの悪辣さにも憤りを覚えていた。

祖王の最精銳親衛隊は名ばかりの虚仮脅しでは断じてなく、事実死神達の知るこの千年で最も強大な敵であった。

尋常ならざる膂力を有したジェラルド・ヴァルキリー。万物を射貫く狙撃手リジエ・バロ。周囲の存在を意のままに動かし自壊させるペルニダ・パルンカジャス。

彼等が秘める力の深淵の深さを一目で察知した死神達は、問答無用の短期決戦を試みた。それは対滅却師戦クインシーにおいて確実な戦果を望める手段のみを用いて行われ、その他の奥義——例えば正解のような膨大な霊圧に頼った技——は逆に霊子を力とする相手の利となる事から使用は禁じられた。

そんな優位を保持した戦場にあっても、勝敗は紙一重。

——「致死量の操作」なんて言われても良くわかんねえだろ？

——けど結果だけで言うならそう難しい話じゃねえ

——この能力の影響を受けたアンタ等は、体中の”血”が、猛毒になっちまったのさ

そう語った親衛隊最後の一人、アスキン・ナツクルヴァールが持つ常軌を逸した能力によって、死神達は一瞬で壊滅してしまう。

そんな劣勢に置かれて尚。零番隊が辛うじて勝利を掴めたのは、アスキンが自身の能力を使用した対象が死神達の「血液」であった事。それに対し味方の天示郎が「全身の血液を入れ替える」という最適な治療術を有していた事。

そして。

「失敗作」と呼ばれた刀が世界の危機を救う、Ne……作り手思いのエモい子じやないKa、”鞘伏”チャン」

最後に、あらゆるものを一太刀で両断する天下無双の斬魄刀が、刀鍛冶の神たる二枚屋王悦にまいやおうえつの手に握られていた事だった。

「その刀、後で丁寧に入手入れてあげなよ？　ヘソでも曲げられたら大変な事になりそうだからねえ」

『致死量の操作』か……一番弱そうな後輩っぽい奴でもこのヤバさとは、やっぱ何もさせずに倒すのが正解だったみてエだな」

口々に述べる通り、死神達は気付いている。敵の瞬殺というあつけない幕切れは両者の力量を表す結果ではない。入念な準備と数々の幸運、そしてユーハバツハの愚策に救われた上で、先手必殺しか自分達が勝てる方法がなかったのだ。

「……不甲斐ない。そうは思わんか、我が親衛隊よ」

そして零番隊の戦いを見届けたユーハバツハは、彼等に告げる。
「て前エで無策に猪突させたクセに酷え言い草じやねえか、ユーハバツハ」

静かな怒りを漲らせる天次郎ら零番隊士達を鼻で嗤う、祖なる王。彼等の感情は勘違いも甚だしい。

「嘆きもしよう。靈王の知見のみならず、”読書家”と手を組んでまで得た我らの情報を以てしても——栄ある零番隊がこの程度の戦いしかできんとは」

「何だど？」

事実を挑発と誤認し苛立つ死神達。そんな愚か者共へ、ユーハバツハは絶望を見せつけんと笑みを浮かべる。

……だがその絶望は、彼ら零番隊を襲うものだけではなかった。

—*—

「——何の真似だ、ロバート」

遙か下界の見えざる帝国にて。

自分の戦場へ一人急行したグレミイ・トウミューに放置され、肝心の特記戦力筆頭を奇襲する出端を挫かれたリルトット・ランパードは、不意に現れた仲間の初老男に側頭部へ拳銃を突き付けられた。

「……陛下が上に行つてしまわれた」

「んなこと見りゃわかる、退け。こちとら協調性の無えバカの手綱を掴み直すのに忙しいんだ」

星十字騎士団”N”、ロバート・アキュトロン。古参で年長者らしい冷静な男だが、その瞳にらしくない狂気があるのをリルトットは見逃さなかった。

「……私には何も、お命じになって下さらなかった……」

「あ？ 命令なら戦争前に受けてるじゃねーか」

「……そうか……貴女も、選ばれなかったのか……」

「はあ？」

黒崎一護にボコられて頭でも打ったのか、ロボットの意味不明な独り言にリルトットは怒りより困惑が先んじる。

だが老紳士の狂乱は彼女の知らない、自分達星十字騎士団の終焉を示していた。

「ああ……あの時、石田宗弦の誘いに乗っておれば……その勇気があれば……！ 終わりだ……我々は、もう……！」

「おい……お前、さつきから何を」

「愚かな……！ 新参の貴女は知らんだ……陛下の恐ろしさを！

我々の——」

滅却師という種族の

逃れられぬ宿命を！！

— * —

「——完現術師という特異な人間の存在を確認した時の話だヨ。私は君達滅却師に関する種族研究の結論を根底から引つ繰り返す、とある疑念を懐いた」

同時刻、靈子の乱れが終息した戦場にて。

涅マユリは確保した女滅却師達を移動式の保管カプセルに詰め込みながら、臍気に意識の残る彼女らへ自身の仮説を説いていた。

「あの忌々しい死神代行などの例外もあるがネ。通常、非魂魄族である人間の間に『靈能の継承遺伝』という現象は起き得ないのだヨ」

「……くそ……放、せ……ッ」

「だが君達滅却師にだけは靈能継承がある。改めて見れば、その異質さは『種族独自の特性』などという言葉で思考停止してよい特異性ではない」

副官の涅ネムと共同で雑事を行う彼の動きには、微かな逸りが。

「自らの血液に霊圧を流し発動する血装。ユーハバツハの血液を摂取する事で覚醒する聖文字や完聖体。両親の血統によって明確に区別される純血滅却師と混血滅却師。この戦争で君達が晒した能力やその性質を隈無く分析すれば、自ずとある真実が見えてくる」

「……ッ……」

「そこに銀城空吾の持つ『霊力の篡奪と分配』という能力の情報が加われば、どんな馬鹿にも至れる結論が一つ完成する訳だがネ？」

もうわかるだろう？ と被検体の詰め込み作業を終えたマユリは女滅却師達へ問い掛ける。

「祖王」などと名乗る輩が配下達に対しどんな権威を持っているのかと調べてみれば、ククク……石田宗弦が君達見えざる帝国とは異なる技術体系を用い発展させた理由が良く解る」

「……！」 石田”……だと……？」

覚えのある名なのか彼女達が目を見開く。しかしマユリは二人の反応に呆れるばかり。

事態が動いたのはその直後だった。

「ヤレヤレ、真っ先に問う質問がそれとは随分悠長じゃアないか——ユーハバツハの分霊共」

「……ッ、な……!？」

戦雲の曇天の奥で青い太陽の如き光が輝く。それを見上げながら、マユリは発光スーツの背中部から『試製完聖体』と銘打たれた胎児が浮かぶ培養器を取り出し、閉じゆく女滅却師の保管カプセルの中へ放り込んだ。

「……ほうら、言つたらう？ 滅却師はいずれ、感謝と共に」

私の英智に首を垂れるとネ

— * —

そして事態は最悪の展開を迎える。

「!?」

場所は見えざる帝国中央街に聳える高い塔を目前に捉えた、街の屋根上。黒崎一護は突如遠くの背後に墜ちた光の柱に驚き足を止める。

そしてその背後の地から立ち上った強大な霊圧を感じ、信じられない思いで振り返った。

「……なん……だと……」

それは茶渡たちの待つ塔へ向かう途中に起きた。去った戦場に降り注いだその光の中から、覚えのある人影が現れる。

残してきた瀕死の滅却師^{クインシー}。霊王宮で別次元の強さを得た一護と対等に戦い、何度も追い詰めた超級の強者。

青白い霊圧の双翼を背に生やしたユーグラム・ハツシユヴァルトが、微かな憂いを孕んだ顔を俯かせ、傷一つない万全の姿で佇んでいた。

— * —

天空が、霊王宮が光に包まれる。その源は祖王の開かれた両の掌。

途轍もない力の奔流に唾然とする零番隊士達は、斯くしてユーハバツハの神たる所以を思い知る。

「神の子は、二度目の目覚めを以て完全となる」

『——ッ、これは……!!』

「そして子等は共に助け合い、蘇り、前へと進む」
吹き荒れる霊圧の竜巻の中で、それは起きた。

「さあ……時間だ、我が子等よ」

弟妹の命を糧に

—— 諸君は『復活』する!!!

「がふ……ッ」

不意に肩に激痛が走り、王悦は血を咳き込み膝を突く。

「……何D a i……こりやあ……」

「王悦!？」

驚愕する彼の身体を射貫いたのは、倒した筈の強敵——リジエ・バロ。

「陛下のお力の一つだ。不要な滅却師クインシーの命と力を徴収し、必要な者に分け与える、『力の再分配』」

「……な……」

「奪われた者は死に、与えられた者は更なる力を得て蘇る。霊子ではなく霊力そのものの移動であるこの聖別アウスヴェレンは、君達の『命の樹』とやらでは防げない」

男の台詞に続くように、倒れ伏す祖王の親衛隊が一人また一人と立ち上がっていく。その背に以前は無かった純白の双翼を羽搏かせて。

「成程N e……それでさつきは通らなかつた弾で、ちゃんボクの身体に穴が空いたって事K a i……」

「更なる力だと？ 下の連中を……ッ、仲間の命を奪って糧にするだとか？ そんな腐った力で戦うたア、て前エ等には恥めってモンがねえのか……ッ！」

「……驚いたよ。そちらの”神様”はあたし達の主と違って、随分無慈悲なお人なようだねえ」

傷付いた王悦を庇い、天示朗と曳舟が立ち塞がる。嫌悪を隠さない二人の言葉にリジエが気を害したように目を細めた。

「気に食わないか、零番隊？ それはまるで、霊王の選別で霊脈と融合した君達の不死性の方が高貴だと言っているように聞こえるけど」

そう反論しながら、男は右手の銃器を動けぬ王悦へ向ける。

「それと勘違いの話なら、君達のそのくだらない価値観の他に二つあ

る。一つ目に、僕のこの力は『更なる力』ではなく、陛下の御命令で隠していた僕本来の力」

「……！」

「そして二つ目に、君の身体を貫いたのは、弾、じゃない」

言葉を区切り、リジエが銃器の引き金を引いた。それに間髪入れず天示朗と曳舟が即応、其々の得物で射線を遮り王悦を守る。

「……!?」

しかし甲斐なく、二人の背後で刀神が崩れ落ちた。

「僕の力『万物貫通』に弾はない。銃口と標的の間にあるものを全て等しく貫通する」

「莫迦な……！」

「だから、壁が何枚あろうと防げはしない」

愕然とする零番隊士達に絶死の銃口が突き付けられる。

「一列に並んで来てくれるかな。君達皆を平等に……」

一発で撃ち殺せるように

— * —

戦況は逆転した。

ユーハバツハの精銳は魂の再分配により更なる力を得て復活し、今度は霊王宮の東西南北を守護する神将達が苦戦を強いられる番となる。

「征くぞペルニダ！ 死神共に、こんな小賢しい檻で陛下の歩みは止まらんと教えてやろう！」

「……、……！」

リジエ一人に射竦められる零番隊士らを横目に、巨漢と異形の親衛隊が周囲を覆う。命の樹を強引に引き千切っていく。純粹な筋力、正体不明の物体操作術と二者の手段はそれぞれ異なるが、共

に王悦に瞬殺された以前の彼等と力の差は一目瞭然。

「うむ、これで邪魔なものは全て取り掃ったな！ お通り下さい、陛下！」

「ま、待ちやがれ……！ まだ俺達が——ガッ!?」

「見苦しいよ、零番隊。陛下の道を遮るな」

強者同士の戦いだろうと、否だからこそか。初手決殺戦術で勝利を収めた初戦のように、死神達も一度均衡が崩れれば後は脆かった。

王悦が撃たれ、天示朗、曳舟、千手丸と順に、尸魂界ソウル・ソサエティの歴史そのものと謳われた偉人達が何もできず物言わぬ肉塊へと変じていく。

そして部下達が拓いた道を進み、ユーハバツハは大内裏の拝殿へ辿り着く。

そこに座す、最後にして最大の壁。唯一残った零番隊士を越える為

に。
「さて……通して貰おうか、兵主部ひょうすべい一兵衛いちべえ」

名を呼ばれた壮年の死神が瞼を開く。そして。

「——全く。年を取ったとは言うても、短気な性は変わらんかう」

その剃髪の男は孤軍となつて尚、太々しく笑っていた。

「……何だと?」

「動かざる事山の如し。頭目たるもの、どしりと構えて周りを見んか」

頭を掻きながら何かを呟く胡坐の死神。訝しむユーハバツハへ男は悪戯が成功した子供のよ様な笑顔で、眼下の表参道を指さした。

「……!!」

直後、祖王の眼に映る景色がゆらりと揺れる。続き、空間がまるで長い暖簾のように幾つものためく巨大な反物に分かれ、その奥に広がる全く別の光景を露わにした。

それはユーハバツハより、実際に一変した世界の渦中に居た親衛隊シユツシユタツフェルの方が混乱が大きかった。

「何だこれは……？ 霊王宮の風景が……」

「！ おい、ペルニダ！ アスキン！ 何処へ行つた!?!」

「どういう事だ……一体何が起きている……?」

先程の白木の床が続く天空の表参道から、突如、和風の街並みが囲む謎の広場へと景色が変わった。だが彼等の動揺の訳はそれだけではない。その新たな地では倒した筈の零番隊の死体も、直前まで近くにいた親衛隊の同胞達の姿も綺麗さっぱり消えていたのだ。

「……『大織以呂波・浮世掛』」

慌てる一人、アスキンの耳に、死んだ筈の女の声が響く。

「妾の機で宙を包み、外界から切り離す結界術じゃ。護廷隊では禁術に定められる類の鬼道じゃが、霊王宮に斯様な愚法はないのでな。許せ」

「……マジかよ」

その女、修多羅千手丸はりジエに脳天をぶち抜かれ血だまりに沈んでいるべき敵であった。しかし目の前の彼女はどこを見ても無傷そのもの。

『浮世掛』はその名の通り、憂き世を映す浮絵の世。中で如何様な地獄が起ころうと、機を裏返せば憂き世も極楽」

「おいおい、ここに俺達を連れてきてくださったのはあの陛下だけ……? そんな大規模な術をあの方が見抜けなかったとは思いたくないえんだけどな」

「ユーハバツハが黒崎一護から奪った王鍵は妾の髪と骨で出来ておる。妾の結界に迎え入れるのに支障がある筈もなからう?」

女の言葉を聞きアスキンは冷や汗をかく。全てが最初から、霊界最高の英知が集うこの霊王宮で、周到に仕組まれていた事だったのだ。「この結界は一つのように見えて、その実五つの小結界が重なり合つて出来ておる。それらをそち等が妾達と戦う景色に夢中になってお

る間に少しずつ離し、大内裏の東西南北に浮遊する零番離殿へと移動させた」

「!」

「今頃そちの仲間達は、ここ機鶴殿しかくでんとは別の離殿で戦っておろう」

それが親衛隊の四人が離ればなれになった理由だった。

だが。

「……解せねえな」

アスキンは手品の種を知り冷静さを取り戻す。

「陛下にさえ気付かせず俺達四人を分断した手腕は賞賛に値するぜ。けど分断した後続く戦術は各個撃破が鉄則だろ？ あんた等まで俺達に合わせて分かれちまったら意味がねえんじゃねえのか？」

呑気に術の解説で時間を譲ってくれる女死神を睨み、彼は警戒心を上辺の傲慢さで覆い隠す。

「それとも何か？ 幻とはいえ一度は勝ったなら、現実でも一対一で俺達に勝てると思ってるのか？」

——その過信、致命的だぜ

十分な猶予を得たアスキンは聖文字Dシユリフトの能力を発動。すると前戦と同様、千手丸が急にガクリと膝を突く。

他愛ない。一瞬そんな油断が心を占めた、その時。

「……どうやら、あの娘の言っていた通りみたいだねえ。アスキンのナツクルヴァール」

「!!」

喜悦を含んだ、聞き覚えのある別の女の声が背後から聞こえてきた。

「どうだい、千手丸。アタシが渡した”依り代”の使い勝手は」

「……即効でなくば実戦で使えぬと言った筈だぞ、曳舟ひきふね。もう少しマトモな代物はないのかえ？」

案の定伏兵が居たかと振り返るアスキンを余所に、その女は倒れた千手丸に何かの戦術に関する是非を尋ねる。そして悪い予感は的中し、直後彼女が何事も無く立ち上がった。

「……やるじゃねえか。どうやって俺の能力を解除した？」

「どうやって？ まさかあたしのコトを調べずに霊王宮に乗り込んで来たのかい？」

その恰幅の良い女死神は憮然としながら、尊大に腕を組んだ。

「アタシは零番隊西方神将・曳舟桐生。選別前の役職は護廷十三隊、十二番隊隊長」

「……！」

「技術者にケンカを売ったのが運の尽きさ。アタシと千手丸、霊界に遍く名を持つ伝説の賢者が、見せてあげる」

尸魂界の歴史を築いた

きゅうていびと
宮廷人の超霊術をね！

— *

「……くだらん」

その様子をユーハバツハは上空から見下ろしていた。しかし事態の急変を認めて尚、祖王の声に変化はない。

「貴様ら霊王の眷属如きがどうやって私の眼を欺いたのかは訊くまい。だが其奴等が幾ら生き足掻こうと無駄な事」

先程の一戦で零番隊の四方神将の実力は知れた。アウスヴェーレン 聖 別で生まれ

変わった今の神赦親衛隊の敵ではない。

「……うむ。口惜しいが、その言はおんし等の最初の侵攻を見終えた時点で解っておった」

だが意外にも、それは当の零番隊も承知の上だと言う。それでも余裕の崩れない彼等の真意は一体何か。

眉を顰めるユーハバツハは、しかし直後の敵の言葉に瞠目した。

「そう、霊王は仰った。わしら五人ではおんしの野望を阻止できんと」
「……！」

「だからこそ。悠久の時の間何人たりとも立ち入りを許さなかった霊

王宮が、この度——初めて神域の静謐を破ったんじや」

見下ろす視線の先。己の親衛隊が分断された四つの零番離殿に、新たな霊圧が現れる。離殿の零番隊士達に引けを取らない巨大な気配。その数は、四。

「——よもやお主とまた轡を並べ戦う日が来ようとはな、天示郎」

「誰が並べるかよ、すつこんでろジジイ！ て前めえに俺サマの離殿は焼かせねエ！」

麒麟寺天示郎が司る麒麟殿きりんでんの中央広場。神赦親衛隊リジエ・バロが移動させられたその段上に、燃える鬨気の老将が上る。

——
「護廷十三隊・総隊長——」

「護廷開祖」

山本元柳斎重国

——
*
——

「安心しろY O、颯めっ面のおぼっチャン！ 君の可愛い義妹は瀨靈廷しいたで大金星を挙げたそうだZe？」

「——……」

全ての死神の斬魄刀が打たれる刀鍛冶の聖地、鳳凰殿ほうおうでん。滝が干上がった巨大な窪地、二枚屋王悦の火事場で我に返ったジエラルド・ヴァルキリーは、美しい桜吹雪を纏う一人の貴公子の姿を見る。

——
「護廷十三隊・六番隊長——」

「桜源氏」

朽木 白哉

——
*
——

「——やつとだ……」

季節外れの氷雪に見舞われ、異形の滅却師クインシーペルニダ・パルンカジャスは鬱陶しげに外套を揺する。彼の眼前、佇む臥豚殿がとんでんの大宴会場の中央に、二人の死神が居た。

「護廷十三隊・十番隊隊長」

「冽鯉」

日番谷 冬獅郎

一人は白髪てんそうじゅうりんの少年。一面の銀世界を創り出した天相從臨の力の主。

「どうしたの？」

「ッ、何でもねえ。敵を前に無駄口を叩くな」

そして彼の隣。横目で見つめ合いながら、どこか感慨深くはにかむその少女を見た時。ペルニダのフードの奥に浮かぶ眼光が微かに揺らいだ。

「ふふっ……失礼しました、日番谷隊長」

「護廷十三隊・五番隊副隊長」

「天梭」

雛森 桃

前の侵攻時、星十字騎士団最高位ユーグラム・ハツシユヴァルトが討ち取った筈の『抹殺標的』。最も警戒すべき「魔女」の抜け殻が、生氣に満ちた笑顔で膨大な霊圧を漲らせていた。

＊

「成程、矢張りハツシユヴァルトの報告は正しかったな」
事態を認め、ユーハバツハが初めて顔を歪める。

「なんじや、つまらん。霊王宮の戦力が増しておる事には気付いておったのか」

「雑兵が幾ら増えようと未来は変わらん。」読書家”の端末も雨竜うりゆうとハツシユヴァルトに始末させれば良い」

そう。たとえ親衛隊が全滅しようとするこの祖王の歩む道は一つ。倒すべき敵は一人。何故なら零番隊を死神共の最強にして無敵の部隊たらしめ、奴等の戦力の天秤を握っているのは、目の前のこの男に相違ないからだ。

「そうだろう？ 兵主部一兵衛」

ユーハバツハの声が、まやかしではない真の表参道に響き渡る。それを聞いた壮年の死神はポリポリと頭を搔く。

そして短い時の空隙を置き、ゆつくりと胡坐を解いた。

「……やれやれ。そう何度も軽々しくわしの名を呼ぶでない」

——喉が潰れても知らんぞ

立ち上がった彼の澄んだ瞳は、満天の星の如く。大きな数珠を首に下げたその男は、霊王が世界を三界に別つ創世期より古の時代を見た、生ける遺物。

——零番隊・太極亜神——

「真名呼和尚」

兵主部一兵衛

死神と滅却師クインシーの頭目、神と呼ばれる超越者が剣を振るう神話の大戦。その天王山は魁の戦いの終わりを待つ事無く、三界の怯震を閩の声にし、始まった。

とくん。とくん、と。満ち足りた感情を乗せた心音が身体を巡る。どこか希薄に感じる現実感。されど隣で高ぶる力強くも尊い霊圧は、触れれば確かな温もりを日番谷冬獅郎へ返してくれた。

——やつとだ

思わず零れた彼の眩きは、その霊圧の持ち主にクスリと笑われた。しかし横を窺えば彼女の顔も愉快そのもの。そしてそれはきつと、自分も同じなのだろう。

——やつとこいつの隣に立てた

いつだって自分は己の弱さに希望を裏切られてきた。隊長に昇進し、ようやく一人前の男になれたと喜んだ時も。藍染惣右介が投獄され、あの四番隊救護詰所で彼女との新たな関係が始まった時も。初めて、悲運なこいつを狙う敵を、月島秀九郎の魔の手を払い彼女を護れたと自信を取り戻せた時も。自分はいつだって更なる試練の前に情けなく倒れ伏し、大切な宝物を失い続けた。

だが仏の慈愛は三度までと聞くが、自分を祝福する天上の意思はこんな惨めな餓鬼をまだ見捨ててくれはしないらしい。

チラリと隣の少女へ目を向ける。何年共に生きようと見飽きる事の無い、幼げな麗容。自分の秘めた想いに気付かれてから二年、最近は何んか可憐さを残しつつも少し臆闌けてきたように見えるのは鼻根目すぎるだろうか。

そんな美しい彼女が真剣な表情を作りながら、抑えきれない喜色をその桃色の頬に滲ませている顔を見て、心高ぶらない男は居ない。肩を寄り添わせ隣で共に戦おうとしてくれる姿を見て、戦意漲らない男など居やしない。

熱い息を胸から追い出し、冬獅郎は新たな強敵である寡黙な異形、ペルニダ・パルンカジャスを睨む。

「……滅却師。お前らは一つ、ミスを犯した」

頭に過るのは、力を奪われ為す術なく蹴散らされた最初の侵攻での無様。

「お前らは確かに強え。だがその強さに慢心し、敵の俺達を殺せるときに殺さなかった」

冬獅郎は氷の波濤を身に纏い、この聖地で磨き生まれ変わった自慢の霊力を解き放つ。

「すまねえな、今の内に謝っとくぜ」

「……………！」

「俺はお前らと違って敵に甘くなれねえし、勝てる戦いを取り零す事もできねえ。俺を瀕霊廷で殺さなかった事を……」

悔いる暇もやらず

叩き潰してやる

大 | 正解 |
紅 蓮 氷 輪 丸
だい | ほんかい |
ぐ れん ひょう りん まる

そうして恋する少年は、最愛の幼馴染に己の誇りを見せつける決戦へ、勇む一步を踏み出した。

天秤つてSS編時点でクインシー・レットシユテイー
ル使った時ブルート・アルテリエ無しのHarry

それが「嫉妬」という、負け犬の惨めでもくだらない感情だと認められる程度には、この千年の時が自分の心に齎した影響は大きかった。

しかしその影響を「成長」と表すまでには大人になりきれない己の性根も、また筋金入り。

では何が悪かったのかと聞かれれば、答えるべきは奴の名前ただ一つであり、友一人を残す全てを失ったあの日から歩み続けた足元の道筋は、結局のところ、どれ程後悔しようとも最初から何も間違っただけではなかったのだ。

領主の遺児——バザード・ブラックは、命尽き果てる最後の瞬間まで、その事実には気付く事はなかった。

— * —

ヴァンデンライヒ
見えざる帝国が興立する礎は、千年前の尸魂界との大戦に惨敗した光の帝国の崩壊にまで遡る。

しかし新たな帝国の誕生を預言した王の不在は、臣の増長を招き、かつて栄えた滅却師の帝国は霊界の裏側で長い戦乱の時代を迎える。

暫定後継者に反旗を翻した元星十字騎士団副団長ヒューベルト・アルトマン。生存圏拡大を目指し現世へ移り住んだ元親衛隊員アルゴラ・シュレマー。種族の宿命そのものに異議を唱えた異端者石田宗弦。他にも様々な理由で武力闘争や離反を企てた者達は、殆どが内戦で討たれたか、逃亡した現世で山本重国率いる護廷十三隊に弑された。

そうした背景もあり、預言の神王が目覚める頃には、帝国では星十字騎士団最高位ユーグラム・ハツシユヴァルトを頂点とした秩序ある臣下団が成立していた。

だがそんな中、千年前の光の帝国時代からハツシユヴァルトに対する敵愾心を曝け出しながら、一度もその無礼を咎められた事のない団員が存在する。

同郷の情。古参の懇意。陛下の神慮。不可思議な両者の関係を邪推する声を実力で黙らせるその強者は、されどこの日、普段の勝気な表情を激しい憤怒で歪ませていた。

「――くそが……ッ！」

その青年、バズビーにとって此度の戦争は屈辱の連続だった。

死神の親玉、山本重国との炎熱系能力勝負で手も足も出なかった事。自分達を統べる王の後継者にどこの馬の骨とも知らぬ混血滅却師が選ばれた事。そして。

「逃げんじゃねえ……黒崎一護！」

戦場を駆けるその足は、体の傷を無視し、バズビーを目的の霊圧の許へと急行させる。

彼は先程この戦争における特記戦力筆頭である半人半死神、黒崎一護と戦った。だが共に包囲攻撃を仕掛けた星十字騎士団の仲間五人

は、敵の剣の一閃で鎧袖一触。その時に見た黒崎一護の無関心な眼が己の忌むべき過去の一幕と重なり、バズビーの狂気的な殺戮衝動を煮え滾らせる。

「戻ってきやがれ……！ まだ俺との決着はついちやいねエぞ……！」
許せる筈もなかった。

自分の優れた才能を「与えられたもの」だと蔑む神王と同じ、あの眼が。

自分よりも、あの無才”だった”ハッシュヴァルトを決戦の相手に選びやがった事が。

ふざけるな。てめえが瞬殺した他の連中と同じにするな。こつちを見ろ。俺はまだ戦える。そんな事もわからねえのか。

……だが怒りに歯を鳴らすバズビーは、その時。霊圧感知に信じられない感覚を捉えた。

「な……」

足が止まる。口が、目がバカみたいに開く。

「……嘘……だろ……」

ない。感じない。直前まで確かにあった筈の、憎たらしいアイツの霊圧が。

ユーグラム・ハッシュヴァルトの気配が風前の灯火のように消えかかっていたのだ。

「……ッー」

気付けばバズビーは完 フォルシユテンドイツ 聖 体を解放していた。全力形態による体力の消耗など考えもしなかった。彼の頭の中にあつたのは一瞬一秒でも早く現場に辿り着く事だった。

何処へ？ 決まっている。アイツの、黒崎一護の所だ。

何故？ 決まっている。アイツを、黒崎一護を倒すためだ。

その答えに間違いはなかった。だからこそバズビーは気付けなかった。

この時、この瞬間だけ。己の心を覆う度し難い劣等感の影が吹き飛ばされ、忘れ去られた古の感情が初めて陽の光に曝されていた事に。

「——ユー・ゴーツ!!」

……それは青年が復讐とは異なる道への一步を踏み出す最後の機会だった。だが彼がその機を掴み損なった事実こそが、あるいは青年バズビーの逃れられぬ定めであったのだろう。

何故なら彼等滅却師クインシーを統べる神なる王は、何人の前においても絶対にして、無慈悲であるのだから。

—— * ——

井上織姫のオレンジ色の霊圧が降り注ぎ、見えざる帝国ヴァンデンライヒに佇む塔楼が垂直に削られ半壊する。

茶渡泰虎は白煉瓦が剥き出しになった屋上の淵から下を覗き、破壊の光に呑み込まれ消えた友人、石田雨竜の姿を探していた。

「——気を付けて、茶渡くん」
「ああ」

後ろから聞こえた仲間の少女の声に振り向かず、茶渡は軽い肯首で相槌を打つ。彼等は共に知っていた。あの石田がこの程度でやられる筈がないと。

ふと茶渡は隣の織姫が重苦しい表情をしている事に気付き、彼女の心労に胸を痛める。

「……克服できたんだな、戦いの中で誰かを傷つける恐怖を」

「え……？」

「見事な技だった。流石だ」

下の動きに注意しつつ仲間の努力を称える茶渡。しかし少女の顔の影は晴れない。

「……ううん、全然だよ……今だってまだ胸の奥がズキズキしてる」

「そうか……」

「……あたし、石田くんに……」

身体を掻き抱き震えを押さえようと努める織姫。無理もないと茶渡は思う。彼自身、仲間を護る為に磨いた力をその仲間に向ける苦しみは、あの月島邸での戦いで嫌という程思い知った。

それでも彼等は戦わないといけない。何も答えてくれない石田雨竜の真意を知る為に。意思の固い友人を止める為に。

だが。

『!!?』

突如強烈な光の柱が見えざる帝国中央の戦場跡に降り注ぐ。

驚きも一瞬。織姫はその変わり果てた地形の付近に居るべき人物が誰なのか気が付き、青褪めた。

「黒崎くんっ!!」

「ッ、待て井上！ 迂闊に動いては駄目だ……！」

「でも……っ！」

居ても立っても居られず屋上の高欄に駆け寄る少女。茶渡の注意がそちらに奪われる。

その隙を見計らったかのように、新たな声が彼等の言い合いに割り込んだ。

「———そうか、ハッシュユヴァルトは黒崎に敗れたのか」

それは突然背後に現れた。茶渡と織姫は振り返り、衣類の埃を煩わしげに掃う一人の滅却師クインシーの姿を見る。

「石田くん……！」

「黒崎が戦うあの広場で”アウスヴェーレン聖別”が使われたという事は、あの馬

鹿を倒すのに今の星十字騎士団では力不足だと判断されたんだろう。相変わらず規格外な奴だ」

いつの間にそこに移動したのか問う余裕はなかった。彼の口から語られた情報に織姫達は釘付けになる。

「……………どういう事なの……………？」

「陛下のお力の一つだ。味方の滅却師クインシーの命を奪い、選ばれた者に絶大な力を授ける。ハッシュュヴァルトは『力の再分配』と言っていたな」
恐らく陛下はその力を得たハッシュュヴァルトを使って黒崎を確実に殺す気なのだ。そう自身の推察を述べると、動揺する織姫を庇うように茶渡が前に進み出た。

「……………一護は負けない。それが俺達の約束だからだ」

「どうかな？ 少なくともここで『僕を止める』という君達の約束は……………決して果たせない」

「！」

茶渡は咄嗟に反論しようとした。だができなかつた。石田が発する霊圧に圧倒され、二人は自分達の目的が如何に困難な事なのかをようやく理解する。

「ああ。でも、僕も反省しなくてはならないな」

「ッ、う……………あ」

「油断しないとやっておきながらこのザマだなんて、どうやら気付かない内に僕の心にも驕りと感傷が芽生えていたらしい」

青年の右手に十字の神聖ハイリツヒ・ボーゲン弓が握られる。その霊子の光を反射する瞳の冷たさは、彼が変わってしまった心の温度。

「だけど……………容赦はもう、無しだ」

『!!』

「悪く思わないでくれよ。甘さが相手への侮辱だって言ったのは、君達自身なのだから——」

世界を巻き込んだ幾つもの大戦を潜り抜けてきた空座第一高校からくらだいいちこうの仲間達。三人の悲しき戦いは今、恐ろしい蹂躪に変わろうとしていた。

— * —

「……嘘……だろ……」

一体何が起きたのか。黒崎一護は目の前で起きた事を現実だと認めるのに長い時を要した。

立ち上る青白い霊圧の火柱。それを内から切り裂くように現れた一対の翼。

その正体は滅却師クインシーの最終奥義、滅却師クインシー・フォルシュテンディッチ完聖体。

自分が倒した筈の男、ユーグラム・ハツシュヴァルトが更なる力を担い、光の中で毅然と佇んでいたのだ。

「……ッ！」

はたと我に返った一護は慌てて両手の斬魄刀を交互に構える。戦いの後、去り際に施した霊王宮の超霊術で辛うじて霊圧が安定するレベルの深い傷だったというのに、今のハツシュヴァルトは身体はおろか衣類にすら汚れ一つない万全の姿。対し自分は幾度もの敵の聖文字シュリフトによる反撃に加え、慣れぬ滅却師クインシーと虚ホロウの霊圧融合、そして新しい卍解を初めて使った途轍もない負荷で満身創痕。この状態で彼の二度目の戦いに挑むなど不可能だった。

「……くそっ……！」

だがここで逃げれば茶渡との約束はどうなる。一護は積み重なった疲労と苦痛に必死に抗い、軋む魂から霊圧を汲み上げていく。

……不運であったのは、彼にとつての最たる悲劇が、対峙するハツシュヴァルトとは逆の方角で起きていた事だった。

— * —

石田雨竜の雰囲気が変わった。実戦の経験が未だ浅い織姫にも理解できる程、その時の彼の変化は顕著だった。

「火無菊！・梅蔵！・リリイ！」

— 盾舜六花 —
しゆんしゆんりつか

三 天 結 盾
さん てん けつ しゆん

防御を固める織姫。そこに石田の霊子矢が激突する。

「きや……」

「ッ、拙い！ 下がるぞ井上！」

激しい亀裂音が響く中、少女は側の茶渡に腰を俵抱きにされ三天結盾から後方に離される。パリンと、最近はめっぼう聞かなくなった嫌な音が鼓膜を震わせたのはその直後だった。

「そんな……！」

それが意味する事に気付いた織姫は啞然と眩く。何故なら今の彼女の盾舜六花は虚霊坤での修行や『X c u t i o n』との戦いを経て、完現術本来の概念規模の力をより強く引き出した別次元の防御手段へと生まれ変わっているのだ。それこそ今の黒崎一護の月牙天衝ですら傷一つ付かない程に。

「くっ……井上、先に行くぞ！」

「！ だ、ダメ！ 待っ——」

— 巨 人 の 右 腕 —
ブラッ・デレチャ・デ・ヒガント

巨 人 の 一 撃
エ ル ・ デ イ レ ッ ト

ショックで呆ける織姫を勇気づけようとしてか、巨漢の友人が石田へ突撃する。だが少女が伸ばした制止の腕は、その茶渡へ危険を訴える為のものだった。

織姫の完現術の能力は「事象の拒絶」。二年前の虚圏で治療中の一護が双天帰盾の膜から出られず驚いていた時にもその片鱗はあったが、本来彼女の力は単純な霊圧任せの攻撃で碎けるような平凡な能力ではない。そうであったのは半人前だった頃の一護と同じく、能力を司る魂魄の思念が未熟な主人を力の負荷から守る為に強制的に解除させていただけだったのだ。

ではそんな、世界のシステムすら捻じ曲げる織姫の三天結盾を砕く攻撃とはどういうものか。

「ダメッ！ 茶渡くん止まって！ 今の石田くんの力は——」

答えは二つ。相手の力の”位相”がこちらと違うのか。若しくは……力の”位階”が、こちらより上だという事だ。

「——興味深い事を言うね、井上さん」

その声が聞こえた時、織姫は自分の制止が手遅れだった事を悟った。茶渡の攻撃が起こした爆発が晴れた後、崩れた屋上の一角で立っていたのは彼ではなく、声の主である石田雨竜。

少女は自分の所為で友人を無策に突っ込ませてしまった事を痛涙と共に悔いる。

「霊能の位相と位階……僕の知らない間に随分と色んな事を教わったようだ。盾舜六花の力が増したのも霊圧の成長だけじゃなくて、井上さん自身の能力への理解が深まったからだろう」

「ッ……」

「浦原さんじゃないな。あの人は僕達に余計な迷いを抱かせない為に平気で嘘を教える人だから」

まあ今までその判断のお陰で僕達が生き延びられたのだから文句は言えないけど。石田は独り言を口の中で転がし、織姫へ近付く一歩を踏み出した。

「実は僕も自分の何が特別で、何が陛下のお目に留まったのか分かっていないんだ。僕の知らない知識を”誰か”から教わっている井上さんなら、僕の悩みを解く答えを持っているのかな？」

微妙に見えた青年の本音。織姫はそこから彼の真意を引き摺り出すべく誘いに乗る。

「……あたしに話せる事ならいいよ……？ 石田くんが帰って来てくれたら、いくらでも……っ！」

「残念。ならせめて、君との戦いでその糸口を見つけるとしよう」

孤 天 斬 盾

— 神聖滅矢 —
光 の 霊

まるで読んでいたかのように石田の弓から織姫のそれに合わせた単発の霊子矢が放たれる。二人の攻撃は両者の中間で激突し、互いに譲らぬまま徐々に減衰し始めた。

「同等の霊圧では拮抗するのか。どうやらお互いの霊能の性質に優劣はないようだけど……これは僕と井上さんの能力の”位相”が同じなのか、それとも別の要因でそう見えているだけなのか……」

相手の分析を聞きながら、織姫も目の前の現象を自身の知識と照らし合わせる。

彼が手にした新たな力は自分と同じ完現術フルプリングなのか。それとも彼女の知らない別の何かなのか。

謎ばかりが残った最初の一回。だが織姫はそんな答え合わせをしている場合ではなかった。

「……どうやら井上さんにもわからないみたいだね。ならこれ以上の実験は無意味か」

「!!」

石田が再度霊子の弓を構える。織姫はこれから彼が繰り出してくる攻撃を予期する事はできたが、それを防ぐ肝心の手立てがなかった。

そう。互いの霊能の性質に優劣がない場合、勝敗を分かつのは誰もが知る普遍の理——霊圧なのだから。

「構えた方がいいよ」

「ッ、お願いみんな!!」

— 盾舜六花 —
三 天 結 盾

その技はこれ迄の攻撃の全てが児戯に思えるほど別格だった。数えきれない光の矢が霊圧の暴風となつて織姫の三角盾へ殺到する。

ダメ、持たない。盾舜六花の妖精達の苦痛の念が脳裏に響き、少女は遂に三天結盾を解いてしまう。

「……………?」

想像を絶する痛みに襲われるのだと身構えていた。だが目を瞑つた暗闇の中に、自分を害するものは何もなかった。

そして恐る恐る瞼を開けた織姫は、そこで、霊圧の暴風に立ち向かう痣だらけな大きな背中を見た。

「ぐ…………ツ、おおおおおっ!!」

「…………茶渡…………くん…………!?!」

襲い掛かる攻撃を右腕の大盾で護ろうと足掻く仲間の青年、茶渡泰虎。石田の初撃で無力化されてから五分も間を置かずに戦線に復帰した遮二無二な彼を見て、織姫は考えるより先に行動していた。

「ツ、あやめ! 舜桜! 茶渡くんそうてんきしゆんに双天帰盾を」

「不要だ、井上!」

だが少女の治癒を巨漢は拒む。

「護りなら任せろ…! 石田の説得を頼む…ツ」

「! せ、説得つて…………」

「俺は人に何かを訴えられるほど器用ではない…! だけどお前ならそれができる!」

唐突な無理難題にたじろぐ織姫。自分の何を見込んでそう思ったのかと悲鳴のような問いを投げた彼女は、青年の返答に思わず硬化した。

「井上が——優しいからだ…………!」

呆ける少女へ茶渡が畳みかける。そんな子供じみた精神論を大真面目に。

「お前は俺達四人の内誰よりも人が傷付く事を嫌がっていた…！
そのお前が、俺達を知る中で初めて、これほど本気で相手を倒すために戦っている…！」

「……そ、んなの……」

「その意味を……ッ、お前の思いの強さを、石田は絶対に感じている…
！ 絶対にだ！」

仲間を背に庇いながらそう叫ぶ青年の身体は最早ズタボロの死に体。だというのに織姫は座り込んだまま茫然自失としていた。

「あ、たし……は……」

茶渡の言葉に心が掻き乱される。渦巻く感情の名は悲愴と後悔と、自己嫌悪。

違う。人に傷付いて欲しくないのは、車に撥ねられた兄の遺体を思い出してしまふから。必死に戦っているのは、自分が相手に慈悲を掛けられる程強くないから。独りよがりな人間。選択肢を選べる権利がない非力な小娘。それが自分の本当の、大嫌いな姿なのだ。

そして少女はまたしても己の弱さの所為で、大切なものへ伸ばした手を届かせる事が叶わない。

「——余所見は駄目だと、君が僕に注意してくれた事じゃないか」
『!!』

突然現れた細身な影が織姫と茶渡を見下ろしている。その手に握られているのは鋭利に輝く霊子の剣。

「見えざる帝国と違って、祖父（せんせい）の流儀に従う滅却師（クインシー）は、弓術のみで敵と戦う」

「……あ、あ……」

「だから、どうか、じっとしててくれよ」

ああ、結局。あたしは今も、黒崎くんの足手まとい。

叶わぬ使命を胸に抱いたまま、織姫は忸怩たる思いで迫る刃を見送った。

「動く敵を殺さない優しい攻撃ができるほど——僕は”刀剣”の扱いに慣れていない」

—*—

その霊子の刃の煌めきは、見えざる帝国ヴァンデンライヒの地上、蘇った強敵と対峙する黒崎一護の目にも映っていた。

「ッ、止める!!」

死神の青年は脇目も振らず織姫たちの許へ駆け付けようとする。だが必死の咆哮も伸ばした腕も間に合わず、目の前で振り下ろされた剣は無慈悲にも二人を斬り伏せた。

「石田アツ!! 何してんだ!! お前——」

もし、その様子を石田が見ていたのなら、どんな反応を見せたであろうか。冷徹に、君も井上さんと変わらない未熟者だと蔑んだであろうか。それとも秘める仲間への思いを曝け出し、迫る危機に気付かぬ一護へ焦燥の怒声を上げただろうか。

いずれにせよ。変わるのは黒崎一護の敗北が決する瞬間が「須臾の先」か、「その後」かの、些細な違いに過ぎなかつたが。

「ガッ——あ……」

一筋の灼熱が背中に走る。そして直後、体中の熱が命と共に流れ出る感覚を最後に、一護の視界は暗闇に突き落とされる。

彼が最後に見た光景は、舞い上がる自分の血煙と、その奥で剣を納刀する金髪クインシーの滅却師——ユーグラム・ハッシュヴアルトが、静かに目を伏せる姿だつた。

—*—

グシヤリと、血塗れの死神が街の石畳に墜落する。ハツシユヴァルトはそのまま動かなくなった敵、黒崎一護を無言で見下ろしていた。一秒か、一刻か。その沈黙の時がどれくらいの間だったのか彼にはわからない。しかし傍から見た青年の行動は、事実として、平素より冷静沈着な忠臣で知られる同じ男とは思えない程に緩慢だった。

「……………」

そんな彼が我に返ったのは、急に飛来した霊子の矢によって握る剣を弾き落されたから。ハツシユヴァルトは気配の方へ振り向き、微かに目を見開く。

「——バズビー」

「……………」

倒壊した街並みの瓦礫の山。その上に傷だらけの赤毛の滅却師クインシーが立っていた。

ハツシユヴァルトは痺れる右手と地面に転がる自分の剣を交互に一瞥し、下手人を平坦な声で追及する。

「…………何の真似だ。黒崎一護を生かす理由がお前のどこにある」

バズビーが奴に瞬殺された場面は確認している。だが獲物を横取りされそうになり憤っているのか、待てども赤毛の青年は黙ったまま。それを不満の意思表示と捉えたハツシユヴァルトは淡々と理屈を述べていく。

「この男の生殺与奪は陛下から私に一任されている。手出しをするな」

「……………」

「大人しく治癒班の許へ行け。その傷では完フオルシユテンディツヒ聖フオルシユテンディツヒ体を使う事も難しいだろう」

突き放すような台詞に、気付けばいつもは口にしなない彼への気遣いが紛れ込んでいた。

だが、後味の悪い黒崎一護との戦いの余韻に屈託するハツシユヴァルトは気付けない。自らの言葉が相手の青年にとってどのような意味を持っているのかを。

「……ああ、だろろうな」

その時、バズビーが初めて口を開いた。平静な、しかし薄膜一枚を隔てた裏に底無しの虚無が広がる低い声。

そしてハツシユヴアルトが彼の身に起きた異常に気付いた時、二人の歩む道は既に引き返せない所にまで行き着いてしまっていた。

「だから、先にてめえと決着をつけに来てやったんだよ！ ユーゴー！！」

――灼熱ザ・ヒート――

バーナーフィンガー・1ワシ

――*――

石田雨竜の足元に二人の青年少女が転がる。それぞれの霊圧は酷く消耗しており、もう意識を保つ事さえままならない。

「……無駄だよ、茶渡君」

だが雨竜はその場から動かさず冷やかな声を投げかける。持ち前のタフさ故か、二人の片割れの巨漢が未だ立ち上がろうと足掻いていた。

「君達に向けた僕の攻撃は全部、君達の霊圧を削り、戦意を削ぐ事を優先した攻撃だ。茶渡君の身体に風穴が一つも空いていないのがその証だ」

「……う」

「これ以上魂魄が摩耗したら確実に命を落とす。君にそれが理解できない筈がないだろう？」

なのに、茶渡は立ち上がる。結末などとうの昔に見えているというのに。

長い付き合いだ。予想はしていた。だがいざ目にした彼等の本物の覚悟は、こども相手を圧倒するものなのか。

「……困ったな」

刻一刻と迫るタイムリミットを背に、雨竜は自分の心に隠しきれない焦燥が湧き上がるのを自覚していた。

— * —

右手の人差し指で放った灼熱の光線は、ハツシユヴァルトに最小限の動きで躲された。バズビーは驚く事なく即座に次の行動——相手の体勢が崩れた隙に連撃を撃ち込もうとする。

だが放つ直前、バズビーの眼前がハツシユヴァルトの外套に覆われた。

「グッ……！」

武器は剣の柄か。外套越しの頭部に鈍い痛みが響く。この期に及んでまだ殺害ではなく鎮圧で事を収めようとする相手に呆れるも、バズビーは冷静に外套の破れ目で確保した射線から反撃する。

如何に衰えようと白兵戦の纏れ合いの中でバーナーフィンガーを外すなどありえない。熱線は静ブルート・ヴェーネ血装が遅れた相手の側頭部に命中し、一合目の接敵は両者痛み分けと相成った。

「……その傷、まさか……黒崎一護ではなく陛下の聖アウスヴェーレン 別によるものか」

蟬谷に血を滴らせるハツシユヴァルトの惚けたような台詞に、バズビーは不思議と怒りを感じなかった。

「そうか、お前は選ばれなかったのだな……！」

「お前」は「じゃねえ。皆殺しだ。辛うじて聖アウスヴェーレン 別の光から逃れた奴や、元から力のあった奴以外は軒並みな」

生き残った者も無事では済まなかった。バズビー自身も力の大半フォルシユテンディツヒと完 聖 体を奪われ、霊圧は最早ハツシユヴァルトの足元にも及ばない。

「誰よりも陛下の側にいたんだ。てめえはこの事を知ってた筈だ。違うか？」

そう相手を睨むバズビーは、しかし同時にどこか冷めていた。絶望に悲嘆するでも自暴自棄に暴れるでもない。彼の心には感情らしい代物が何もなかったのだ。

だからだろうか。ハツシユヴァルトがその疑念を否定するかのよ
うな言葉を口にした時、バズビーはそれを素直に受け止める事ができ
ていた。

「……私が陛下の御意思を知っていたかどうかなど、この場で訊いて
どうする。」知らなかった」と言えば信じるのか？」

「——信じるさ、俺とお前の仲だ。そうだろうか？ ユーゴー！」
ピクリと青年の眉が動く。無視された最初の称呼と違う、明確な反
応。

「……久しく聞いていなかった呼び名だ。どういう風の吹き回しだ、
バズビー」

「バズって呼べよ！ 昔みてえによオ!!」

——^{ザ・ヒート}灼熱——

バーナーフィンガー・2^ツ

□々と輝く二本の鉤爪とハツシユヴァルトの剣が激突し、爆発が二
人を包み込んだ。

——*——

もうやめろ。石田雨竜は言った。

だが茶渡泰虎に従う意思はなかった。彼の耳が捉えたその一言は、
それまでの冷やかなものではない、確かな感情が滲み出ているように
思えたからだ。

「……茶渡君、君は一つ勘違いをしている」

ふらつく体で戦意を保つ茶渡を、石田が諭す。

「君達は僕を止めたいみたいだけど、生憎僕は自分自身で納得した上で陛下に従っている」

「……」

「この戦いが終わっても、霊界の支配者が死神から僕達滅却師クインシーに変わるだけだ。現世の住人には殆ど関係が無い。だから僕はヴァンデンライヒ見えざる帝国の一員に加わったんだ」

茶渡にはその言葉が真実かどうかの判別はつかない。

「解らないか？ 君が今やろうとしている事は、”友達”の重大な決断に自分の勝手な価値観を押し付けるばかりか、その為に命を捨てる、はた迷惑な自殺なんだ」

そんなくだらない事に僕を付き合わせないでくれ。石田はそう言った。

茶渡はそれを聞き、脳裏に散らかった様々な思いを纏めようと思案する。だが口下手な彼に相手へ自分の気持ちを正しく伝える台詞は中々組み上がらない。

そしてしばしの間を置いた彼が、今にも掻き消えそうな意識で紡いだのは、石田の断言への反論ではない、己の純粋な覚悟を示す言葉だった。

「……石田」

「何だ」

擦れゆく視界の中で、茶渡は必死に仲間の青年を見つめる。

確かに自分達は彼の決意を踏み躪っているのかもしれない。石田が深く考えて決めた事にとやかく言うのは、彼の立場を何も知らない自分達がやって良い事ではないのかもしれない。

「だが……勘違いを、しているのは……お前も同じだ」

石田の眉が動く。

「お前はさつき……俺達は『その身が動けなくなるまで諦めない』と、言っていたが……それは違う」

言葉を重ねる度に、身体の中から力が抜け出ていく。

「俺達は……たとえ死んでも……お前との絆を諦めない」

——それが、友達だからだ

そして、そんな一言を最後に。

思いの丈を言い切った茶渡泰虎は、石田の足元に倒れ伏した。

——*

いやあ、派手にやられたつスねえ

ああ、お芝居は結構。事情はお聞きしてます

ところで、これはご相談なんスけど……

ええ、ではご武運を

——石田サン

——*

焼けた大気の白煙が靈圧の暴風に掻き消されていく。自慢の一撃はハツシユヴァルトに容易く弾かれたが、バズビーの顔に浮かぶ獰猛な笑みは薄れない。

「どうしたよ！ 俺の靈力を奪って強くなったにしては随分動きがトロいじゃねえか！」

否、互いの反射速度の差は絶対的だ。今もバズビーは思うように動かない体に鞭を打ち、それでも全盛期には程遠い鈍重な動作で技を繰り出している。

両者の戦いがハツシユヴァルトの防戦一方となっている理由は、明らかに彼の戦意にあった。

「その額の傷ん時もそうだったな！ 今の俺の攻撃を防げねえ程お前の血装は脆くも鈍くもない筈だ！」

「……」

「仲間を犠牲に得た力で黒崎一護に勝った事がそんなに虚しいか？

その勝利の代償に底まで落ちぶれた親友と殺し合うのがそんなに苦しいか？ 答えてみるよ、臆病者オ!!」

―― 灼熱

バーナーフィンガー・3

スリー

着弾後、吹き上がった凄まじい爆炎が戦場を焼き焦がす。だが降り散る火の粉の奥で、バズビーは鈍色に輝く刀身を見た。

「がふっ……い！」

攻撃直後で無防備だった胸元に一閃の紫電が走り、鮮血が噴き出す。衝撃そのまま地べたを転がるバズビーは、飛びそうな意識を寸前で握り寄せ、片膝立ちでハツシユヴァルトに笑みを見せた。

虚勢ではない。ユーハバツハに下ってから千年間、何度咬みつこうと一度としてこちらと戦おうとしなかったこいつが、初めて自分を殺しうる一撃で迎え撃ってきた。その事が嬉しくて堪らなかったのだ。

だが驚いたように自身の剣へ視線を送るハツシユヴァルトの仕草を見て、バズビーの喜びは裏切られる。真相は単純。相手は聖別^{アウスヴェーレン}。別で手にした膨大な力を持って余し、奪われたこちらは加減され尽くした一撃が致命傷寸前になる程に弱体化していただけ。

それがこの場の両者の、本当の実力の差だった。

「……もうやめろ、バズビー」

「ハア……ハア……ッ、やめさせたけりや……力づくでやってみろ……！」

ならば本気を引き出させるまで。バズビーは自分が自棄になつて
いる事に気付いていたが、今やそんな事はどうでもよかつた。

「どうした……来いよ！　また勝負を逃げんのかよ！」

血反吐をぶちまけ地面を蹴る。

「そんなに俺に敗けるのが恐エかよ!?　なア、ユーゴー!!」

――灼熱――

バーナーフィンガー・4

右手の手刀に劫火が宿る。ただその一撃を振り下ろす。それだけの為
に他の全てを心身から排除したバズビーは渾身の力でハツシユ
ヴァルトへ襲い掛かつた。

「!!」

だがそれすら届かない。右腕の喪失感にハツとそちらを見れば、自
分の腕の半ばから先が斬り飛ばされていた。

「――ッ」

推進力を失つた体が宙でゆっくりと回転する。空白の間。頭に過
る走馬灯。

「グ、オ、オオオオオオッ!!」

「……やめろ」

錐揉みの一周の間に覚悟は決まつた。これで最後だ。因縁の全て
を残る左手に込め、バズビーは己の魂を焼^くべた死力の特技を解き放つ
た。

「終、わり……だアアアアアッ！　ユーゴオオオオオオオオ!!」

――灼熱――

バーニング

フル

フィンガーズ

螺旋を描く五つの光線が、荒れ狂いながら射線上の一切を消し飛ばしていく。嫉妬も、屈辱も、寂寥も、意地も、何もかも。そして。

「やめろと言っているんだ!!」

——バズ!!!

神王ユーハバツハに全てを奪われた領主の遺児、バザード・ブラツクは、斯くして千年に亘る己の悲願を遂げたのだった。

——*——

「……………」

半壊した塔の屋上に木霊していた戦闘音が止んだ。

一人になった石田雨竜は、自身の霊子剣の切先に付着した赤い液体を凝視する。どこからどう見ても鮮血にしか見えないそれは、先程相談通り茶渡と織姫を連れ去った男が残したものの。

(これで誤魔化せ、って事ですか……)

緊張を孕んだ溜息を吐き、石田は直にここへやってくるであろうもう一人の滅却師クインシーを待つ。

果たして件の青年が己の戦いを終わらせ合流しにきた頃には、石田は彼への弁明の言葉を拵える事ができていた。

「……………浦原喜助か」

硬質な靴音を響かせ、その待ち人、ハツシユヴァルトが屋上に舞い降りる。普段以上の仏頂面をしている彼の様子を訝しむも、石田は用意していた台詞で返答した。

ガールガンタ
「黒腔ガールガンタを使われ逃げられました。貴方が下で彼を拘束しなかった所為で、茶渡泰虎らとの決着に水を差された」

わざとらしさを極力隠し、霊子剣の血のりを一振りですくって戦闘を偽装する。だがハツシユヴァルトは床に飛び散った赤黒い水滴へ見向きもせず、生気の失せた暗い瞳を石田へ向けたまま。

黒崎一護との戦いは余程不愉快な結末だったのだろう。ここまで機嫌の悪い彼を初めて見た石田は一瞬言葉に詰まるも、負けじと憚然とした顔を作り、相手の不穏な視線と向き合った。

「……………そう睨まれても困ります。浦原喜助の黒腔ガールガンタを封じる影シャッテン・ペライヒの領域アウスウェーレンの管理班は皆、貴方を復活させる為の陛下の聖アウスウェーレン 別で死んだ」

「この件の責任の所在を議論するのは不敬極まりない。違いますか？」

尤もあの胡散臭い店主なら結界が維持されていようと自力で逃げさせただろうが、こちらの言い分にも正当性は確とある。己の非に加え、ユーハバツハの名まで出されたのなら、シユテルンリッター・グランドマスター星十字騎士団最高位の肩書を持つ彼は領くしかない。たとえそれがどれ程感情的に納得のいかない話であつてもだ。

無言で互いに睨み合う緊張した空気が流れる。そして先に目を逸らしたのは、ハツシユヴァルトの方だった。

「……………そうだ、非は私にある」

「……………」

「征くぞ。どうやらお前以外にも陛下の聖別の対象とならなかつたシユテルンリッター星十字騎士団が数名いるようだ。瀨霊廷の掃討は彼等に任せれば良いだろう」

意外にも素直に引き下がった青年に石田はまたしても違和感を覚える。だがその違和感の正体に彼が気付くのは、この場で生まれた両

者の見えぬ因縁が、互いの生死を別つ戦いの引き金となった、更に後
――
神王に選ばれし二人が、その運命の果てへ辿り着いた時であった。

――
*
――

黒崎一護は鉛のように重い体で腕を伸ばす。その先に居るのは地面に倒れたまま動かない赤毛の青年。

バザード・ブラックとユーグラム・ハツシユヴァルト。一護は二人の戦いを、闇に沈みゆく朧げな意識で、最後まで見届けていた。

――俺の負けだ、ユーゴー

それは引き裂かれた友が譲れぬ何かの為に殺し合う、悲劇の終幕だった。勝利した者は、その譲れぬ何かであった筈の「黒崎一護を始末する」という王命を果たす事すら忘れ、戦場から逃げるように去った。そして敗北した者は冷たい地べたで、静かに目を閉じた。

――思い通りにや

いかねえもんだな

事情は何一つとして分らない。だが遠い昔にすれ違った互いの道が――たとえばそれが殺し合いだったとしても――やっと再び交わった事を喜ぶ赤毛の青年の眼を見てしまった一護にとって、立ち上がる理由はそれで十分だった。

止めなければならなかった。石田と道を別つた一護だからこそ、目

の前の戦いを見過ごしてはならなかった。

　　だけど伸ばした腕が赤毛の青年に触れた時、一護の胸に湧き上がったのは途轍もない無力感だった。

　　——お前に負けたら、もつと……

「……ッ、ちく……し……しょう……」

　　冷たくなった滅却師^{クインシー}の遺体の側で、顔を地面に埋める霊界の英雄は、流せぬ涙を只管堪える事しかできなかつた。

　　——悔しいもんだと

　　思ってたぜ